

インフィニット・ストラトスadvanced【Godzilla】新編集版

天津毬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ああ、箒——おまえのために死^{生きてやる}んでやる。」

誰かが言った。

これは破滅だ黙示録だと。

驕り高ぶりすぎた人類に罰が下ったのだと。

誰かが言った。

——それがどうした、と。

異界から流れ落ちた怪獣王ゴジラ（ミレニアム）のG細胞が取り込み、同化、ミレゴジの記憶の引き継ぎを起こした少年・篠ノ之千尋。

——これは彼と彼を助けた少女・篠ノ之箒が過ごした——
人類世界崩壊までの7ヶ月と、崩壊から1ヶ月間。

世界の破滅を乗り切ろうとする者、世界の破滅を加速させようとする者、それすら無視して私欲に走る者、それらの欲望が絡まり合い、世界が壊れていく。

これは、人類が世界を支配していた、最後の1年を必死で足掻いて生きた者たちと、最後まで全てがひとつになれなかった人類が、いかに怪獣と対峙する未来へ突き進んだかという群像劇——。

世界崩壊まで7ヶ月——ヒトは何の為に如何に足掻き、如何に破滅したのか、そして——如何に、生き抜いたのか。

——これは《滅亡の未来》に至る、【過程】の物語。

P i x i vで書いている「インフィニット・ストラトス a d v a n c e d 【G】(絶賛停滞中)」の新編集版です。

◇◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇

【注意!!?】この小説には、以下のような内容があります。

- ・一夏アンチ (後に救済)
- ・鈴不遇 (のちに救済)
- ・モブ生徒は基本オリ主アンチ・一夏大好き
- ・胸糞展開アリ (バッドEDとは言っていない)
- ・原作崩壊 (主に怪獣によって)
- ・ハーレムよりも人類の存亡。
- ・オリジナル設定 (主にゴジラ作品等から)
- ・(時々) ISどこいった!!?
- ・(自粛しますが) マブラヴ成分
- ・原作設定 (ISABの設定) からの差異
- ・イマジユオシリスは居ない
- ・結末確定済み

これらがダメなお方(原作遵守の方とか)はブラウザバックを推奨いたします。

また、自分自身これが初投稿故に駄文&駄内容になっている可能性が酷く高いです。

…それでもよろしいという方はどうぞ、ごゆっくりなさってください。

目次

プロローグ

EP-00 プロローグ | 1

IS学園編

EP-01 最後の春 | 7

設定・キャラ解説 | 16

EP-02 学園生活の始まり | 21

EP-03 呼び出しとそれぞれの前夜 | 31

EP-04 仮想世界での訓練 | 50

EP-05 濁侵スル魔獣（バルゴン）／進展する群像 | 62

EP-06 平和の中の異常 | 89

EP-07 同じ世界、違う人々 | 105

ロリシカ編

EP-08 失墜ノ大地 | 126

EP-09 最前線ノ暇／雪原ノ暴龍（アンギラス） | 158

EP-10 深紅ノ雪作戦I | 173

EP-11 屍体ノ中デ | 200

EP-12 戦火の暇 | 218

EP-13 深紅ノ雪作戦II | 230

EP-14 希望の（無い）明日 | 264

ロリシカ編・まとめ回 | 274

巨獣行軍編I

EP-15 黒兔ト黒ノ宣告 | 283

EP-16 事案、発生 | 310

EP-17 紅蓮ノ翼竜（ラドン） | 336

EP-18 僅かな安息 | 355

EP-19 決断、そして怒気 | 386

EP-20 暗赤ノ巨鋏(スピット・エビラ) (挿絵あり)

403

EP-21 骸ノ鳥達(ギャオス・カダヴァー) | 422

EP-22 ウサギ狩り | 449

EP-23 修練・障害物戦訓練 | 468

EP-24 狂気ノ盾(挿絵付き) | 501

EP-25 共鳴するGたち | 527

EP-26 群像と暇 | 546

茶番1 | 573

タッグトーナメント編

EP-27 タッグトーナメント前日 | 580

EP-28 タッグトーナメント1日目(前) | 594

EP-29 タッグトーナメント1日目(後) | 609

EP-30 幕間の群像(前)・(挿絵有り) | 627

EP-31 幕間の群像(後) | 664

EP-32 タッグトーナメント2日目(前) | 689

EP-33 タッグトーナメント2日目(中) | 733

EP-34 タッグトーナメント2日目(後) | 777

閑話 壊レタ世界ノ聖夜 | 843

閑話 壊レタ世界ノ除夜 | 867

第2次日本本土防衛戦編

EP-35 黒キ荒神(ゴジラ):序 | 887

EP-36 白光、大地ヲ焼ク(挿絵有り) | 906

EP 3 7	混迷ト異形ナル甲殻（クラブロス）	963
EP 3 8	離別と紛イ物タル蜥蜴（マグロ食ってるようなの）	
EP 3 9	変質シ行ク人間	1008
EP 4 0	閉幕ニ至ル学園	1035
EP 4 1	館山市防衛戦／荒神、上陸	1062
EP 4 2	館山市防衛戦／掟ニ縛ラレシ者達	1085
EP 4 3	館山市防衛戦／異形ノ花（ビオランテ）	1128
EP 4 4	束の間の終息	1146
世界情勢 I		
時系列 I		
まとめ回【世界情勢編】		1162
まとめ回【兵器編】		1171
まとめ回【人物編】		1217
柳屋張《イリス》覚醒編		1305
EP 4 5	（崩壊の）日常、再開。	1328
EP 4 6	乱世ニ至ル日常	1348
番外編【怪獣基礎学 I】ゴジラ		1370
EP 4 7	戦闘ト平穏と特使、来日。	1385
EP 4 8	追憶ト仮想ノ中デ	1416
EP 4 9	現状ト進展ト、	1439
EP 5 0	蠢く陰と今人（いまびと）達	1455
EP 5 1	夏、涼と熱に浸る二人	1465
EP 5 2	不穏と日常／序	1480
EP 5 3	不穏と日常／破	1489

EP-54

不穩と日常／間

プロローグ EP-00 プロローグ

2015年・7月7日・午前0時11分・某所。

「むふふーか〜んせ〜い。ワームホール生成装置〜」

どこぞのネコ型ロボットのようになんて言う、不思議の国のアリスのような服装の女、篠ノ之束。

彼女はISの生みの親であり、国際的テロリストでもあり、自分や自分の身内以外はクスだのゴミだのと認識している人格破綻者だ。

そして今彼女が作ったのは、今の世界とは決して交わらない、平行世界に干渉する装置だ。

そんなものを作れるから、天才であることは違いない。違いないのだが……

「よーしこれで異世界に行き放題だし、そこの技術もパクリ放題だね。そしてゆくゆくはそいつらも全部束さんのものに……」

……こんな理由だ。まさに絵に描いたようなクスである。

「よーし、さっそくスイッチ、オン!!」

しかし、この行いが、この世界を激変させ、人類世界を滅亡させ、自分の愛してやまない妹を追い詰めるほどの黙示録をこの世界に具現化することになるとは、この天才もとい天災も知らなかった。

さらに、世界と世界をつなぐとなると、天文学的エネルギーが必要になる。

そしてその余波が影響を及ぼさないわけが、なかった。

「……って、あれ? 嘘!? 制御が……!?!」

同日・午前0時15分・東京・墨田区。

その、とあるマンションの一室。

篠ノ之箒は要人保護プログラムによってそこに住まわされていた。一定の家具はあるものの、家族も誰もいない、盗聴器と監視カメラしかない部屋に。

そして今は、眠れずにいた。

別に監視カメラや盗聴器のせいじゃない。それはもう慣れた。要人保護という名目で実験動物のように四六時中観察される、胸糞悪いこの状況には、もう慣れてしまった。

眠れない原因はほぼ毎晩のように見る、全長3メートルから全長85メートルの二本の突起が後頭部から生えているコウモリのような外見の異形の鳥の群れが人々を食い荒らしていくその凄惨な光景の中で、自身は鏝（やじり）のような突起が先端に付いた触手を持つ黄色い単眼の異形の鳥に取り込まれるという、酷く生々しく、おぞましい悪夢の所為だ。

「なんだというのだ…」

思わず、酷く疲れた表情で、呟いた。

瞬間、轟音と共にすさまじい衝撃波が窓の外から、箒に襲い掛かり、箒は、吹き飛ばされ、意識を失った。

同日・未明。

「う…ぐ、何、が…!？」

数分後、箒が目を覚まし、視界に入ってきたのは…文字通りの地獄だった。

爆風か衝撃波かによって潰れたビル。

墨田区上空に渦巻く、禍々しい、黒い太陽のような、空に開いた、孔。

そしてそこから流れ落ちてくる、赤黒い泥の柱。

その泥はマグマのように人を、車を、建物を、辺りの街を焼き尽くしていく。

「ッ!?」

箒はあまりに現実離れた光景に絶句する。

が、それよりも本能的な身の危険を感じ、すぐに玄関に走っていき、靴を履き、ドアを激しく開けて、家から飛び出した。

地獄と化した、墨田区へ。

未明・墨田区。

泥が街を飲み込んで行く。

人が燃える。

人が死ぬ。

車が燃える。

車が爆発する。

建物が燃える。

建物が崩壊する。

その中を、箒は逃げる群衆にまみれながら墨田区を走って、泥から逃げる。

その後ろで。

1人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

3人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

8人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

それらの人間はすぐに死んだ訳ではない。悲鳴や断末魔を上げて燃えながら死んでいった。

そして、箒はそれを聞いていなかった訳ではない。

けれど、振り返る余裕も無かった。いや、振り返れば次は自分の番なのではないか、という恐怖があったから振り返る事は出来なかった。

ただひたすら逃げて……目の前に見えた歩道橋を駆け上がり、泥をやり過ぎす。

「あ……」

その時にはもう、箒以外に生きた人間はいなかった。

他の人間は皆泥に飲み込まれたか、他の何かで全て死んでしまったから。

瞬間、ドオン、ドオンと遠くから爆発音が轟き、電力の供給が断たれ、墨田区全域から、文明の灯りが消える。

けれど暗くはならない。

この世を焼き尽くくさんとする炎が、人間を焼きながら、夜空を赤く照らしていたから。

そこで、箒はぺたん、と、膝をついて座り込み、愕然と燃える墨田区：否、地獄を見ている事しか出来なかった。

自分にできることは何もない。周りには誰もいない。みんな死んだ。

……こんな時、一夏なら、『何かしろ』と言うんだろうな……だが何をしろというのだ。

そう思いながら箒は周りを見渡す。

タンパク質が炭化する臭いを放ちながら燃えていくヒトだったもの。

煙を大量に吸ったせいで呼吸ができずに窒息して死んだヒトだったもの。

未だに燃え続ける木造建築が一部に使われていた建築物。

焼け落ち、完全に瓦礫と化した建築物。

誰もいない、生きている人間が誰もいない、廃墟と化した街。

「こんな状況で……どうしろというのだ……」

誰もいない恐怖とこの煉獄による絶望の所為でついには泣き出してしまい、歳相応の少女の、か細い声音で泣き出してしまう。

だが、ふと顔を上げた時、瓦礫の中で何かが動いた気がして……それが何か、考えもせずに、反射的に駆け出した。

午前1時54分・墨田区。

痛い……熱い……。

明らかに周りの瓦礫とは違う、どこかケロイドのような外見の全長3メートル近い瓦礫が積み重なる隙間、そこに、緋色の髪に童顔の少年……いや、少年の死体の細胞と同化し、取り込んだ、存在がいた。

そして、ソレはほぼ全身に大火傷を負っていた。

身体の傷：治らな……い……ここで：死んじやうかな……。

そう思いながらソレは、今までであった事を思い返していた。

家族をみんな殺されて……俺と親父だけ生き残って、バケモノにされて……親父は、先に居なくなっちゃまって……ただ、親父を探し

に行っただけなのに……ちっちゃくてへんてこりんな奴らに攻撃されて……それが何千日か続いて……タコみたいな奴がオレの血を飲んでバケモノになって……そいつをぶっ飛ばして……ああ、そうだ、その後……カタギリ？だっけ……そいつが俺の事を『ゴジラ』って呼んだんだっけ……？それで俺は……あ、そっか……殺しちゃったんだ……なんで、だろ……気付いたら殺しちゃったんだ……ちっちゃくてへんてこりんな奴らが作ってた、俺と親父をバケモノに変えた力を殺したみたい……に、何故か……殺しちゃったんだ……

少し、何故か悲しげな、虚しい気持ちになる。

それから、変な虫と戦って……それから……なにか、とてつもなく強い力が俺に向けて放たれて……熱線で対抗して……それから……凄く、へんてこりんで、暗くて、怖い所にいたなあ……

地面も海も空もなく、重力もなく、空気もなく、ただ果てのない黒い、チラチラと赤や青といった色の巨大な渦巻きがあるだけの、空間を思い出す。

何億日……いや……何兆日過ぎたかなあ……あそこで……もう、絶対にあんなところ行きたくないけど……さ。

ああ、でも……その前に、死んじゃうかな……

悲しげな、そんな顔をして、瓦礫の間から覗く、醜い地上を整理然と見下ろす月に目を向け、

「せめて……最後に、親父に会いたかったなあ……」

そう、つぶやく。

と、次の瞬間、瓦礫がどけられる。

すると、身体の所々に火傷をしたり、埃を被つて、服はボロボロで、ポニーテールをした少女がソレの視界に入った。

その少女はソレの手を掴むと涙をボロボロと流しながら、嬉しそうに、安堵したような声で、

「生きてる……生きてる……！！っ！」

そう、言う。

ソレは少し、というか、かなり戸惑う。

今まで、へんてこりんは自分が居なくなる事を望んでいたか

ら。

でも、今日の前にいる少女は、

「良かった……ありがとう……生きていて……1人でも生きていてくれて……1人でも救えて……救われた……」

自分に対して感謝すら覚えるような、そんな、変な奴だった。でも、ソレは多分、きつと一生涯忘れない。

その少女の、その時の顔を、自身を助けてくれた、自身の存在を肯定してくれた、篠ノ之箒という少女を。

そして、天災がこの世界と異界を無理矢理繋げて、その反動で生じたエネルギーの影響で約10万人の人々が死んだ日、箒とソレ……後の篠ノ之千尋は出会った。

カチリ。

そして世界が破滅するまでの秒読みが始まる。

誰かが言った。

これは破滅だ、黙示録だと。

傲慢で驕り高ぶりすぎた人類に罰が下ったのだと。

これは怪獣王と、この世界に元々いた災いの使者に、人類が支配者の玉座から引きずり降ろされるまで、いかに生きたかという物語――。

IS学園編

EP-01 最後の春

【特務自衛隊・八広駐屯地】

墨田区の惨劇、墨田大火災と呼ばれる厄災のせいで焦土と化した北墨田に建てられた、「IS或いはそれに類するものに対処する第4の自衛隊」、日本国防衛省陸上自衛隊隷下・【特務自衛隊】の本部基地であり、墨田大火災後に確認された未知の元素、【G元素】を研究する為の国連管轄研究機関・【モナーク】の研究施設の存在する墨田区八広に置かれた駐屯地。

その、官舎3号棟。

畳が敷き詰められた407号室。

そこには、小柄で華奢な、緋色の髪に童顔の少年が四肢を投げ出し、布団の上でいびきをかいて寝ていた。

そこへ、ドアの向こうからノック音が響き、

「千尋、起きてるか？」

落ち着いた、少女の声が聞こえる。

「むにゃ…………う、ん…あと3年寝かして…すぴー、すぴー……」

しかし少年は起きる気配が無く、寝言を言っつて、そのまま、寝続ける。

すると、ドアを開けて、黒髪にポニーテールをした、凜とした雰囲気の少女——【篠ノ之箒】が入って来る。

「…はあ…………まだ寝てるのか、この馬鹿は……」

呆れた顔で、言う。

「千尋、おい朝だぞ、起きろ。」

箒は、また声をかける。

しかし、やはり起きる気配は全くない。

「…………もう…………しょうがないなあ……」

それを見るなり箒は困ったような、呆れたような、少し、楽しそうな顔をして……

「おつきろおおお!!?」

少年——【篠ノ之千尋】に、飛び掛かる。

「うえ!!?げぶふう!!?」

まず千尋は箒の大声で目を覚まし、次に箒の胸に付いたデカブツの、男なら誰であろうが歓喜するであろう触感が伝わり、次に身長160センチ、体重42キロの箒が自由落下した衝撃が身長155センチ、体重49キロの千尋を襲い、一瞬千尋は呼吸出来なくなる。

そのせいで、千尋は変な声を上げてしまう。

駐屯地に鳴り響く午前5時の起床のラッパだろうが朝早くから寒風摩擦に励む自衛官の掛け声だろうが気にせず眠り続ける千尋には物理的、特に打撃系の目覚ましが無効で、今回箒が使ったのは名付けて「ドーン!!?起こし」というもので、かなり有効だとなるのだが、下手すれば相手の肋骨を折りかねないものだ。

(*うp主は実際に幼稚園のころ、父親に「ドーン!!?起こし」をして、父親の肋骨を折りました。)

「朝っぱらからいきなり何すんだよ箒姐!!?」

思わず、千尋は抗議する。

「何度起こしても起きないお前が悪いのだろう?」

それに箒はケラケラと笑いながら、言う。

「そっか、何か大事なことを忘れてる気が…」

千尋はふと思ひ、

「箒姐、今日は何月何日だ?」

聞く。

「4月1日。IS学園への入学式の日だが?」

瞬間、千尋は固まる。

「……今、なんて?」

「ごめんもう一回。」

「だから今日はIS学園への入学式だ。」

千尋はみるみる内に青ざめる。

そして、チラリと、時計を見る。

午前7時02分。

始業式は午前8時40分から始まる。

まだ、1時間半近くある。

だから、千尋は胸を撫で下ろす。

だが準備は迅速に済まさなくてはならない。

千尋は直ぐさま布団から飛び出し、学園が支給した制服に着替える。

そして、箒と共に官舎内の食堂へ向かう。

食堂。

この3号棟自体あまり人が住んでいない為か、かなり空いていて、第13戦略機小隊の【永井頼人】三尉と【久字舞弥】二曹、そしてヤングエリート集団という、まあ、若いうえにお偉いさんであり、千尋が元来いた世界で殺した片桐光男…の、何故か女になっている、【片桐光】一佐のみだ。

千尋と箒は直ぐに素早く食べれる物を選び、席に着く。

頼人と舞弥の向い側、光のすぐ後ろに。

「そーいや千尋、お前箒と一緒に今日からハーレム生活なんだっけ？」

「んな…!?？」

頼人が、千尋に聞く。

そしてハーレム、という単語が出た為に思わず千尋は赤面してしまう。

「男性が理想郷と考えている環境…確かに、そこに派遣される者、特に男性の気持ちは、気になります。」

舞弥まで、その話題に食い付く。

「どうせロクな所じゃないです。この女尊男卑のご時世の有様を見る限りは」

そんな2人の問い掛けを千尋が動揺している中、隣の箒がバツサリと斬り捨てる。

「うわあ…夢も希望もない……」

頼人が言う。

「ISが普及した世界になってから、目が腐る程そんなモノを見まし

たし、耳が腐る程聞きましたから」

自己嫌悪のような、同族嫌悪のような顔をして、朝食を食べながら言う。

「まあ…分からなくもないですが…でも、今の有様でも日本はマシだと思いますよ…私が拉致された、北朝鮮よりは」

舞弥が、言う。

彼女は北朝鮮の拉致被害者の1人で、7年前に北九州沖で脱北者達と漂流していた所を海上保安庁に保護され、現在は特自に籍を置いている。

今の女尊男卑で腐りに腐った日本がマシだという彼女がどんな地獄にいたかは、想像もつかない。

その隣の頼人だって苦笑いや笑みを浮かべているが、彼も地獄を知っている。

詳しくは話してくれないが、かつて上官を手にかけてなければならぬ状態にまで追い詰められ、誰も救うことができず、ただ絶望しながら生き続けていたそうだ。

何気無く会話を交わすこの2人と墨田大火災で被災した筈とかつてバケモノにされた千尋の2人は地獄を知る者達なのだ。

「ところで2人とも」

千尋と筈の後ろから光が声をかける。

「そろそろマズインじゃないか?」

時計に顎をしゃくりながら、言う。

午前、7時33分。

ヤバイ。

2人はそう思う。

IS学園までは何本か乗り換えが必要なのだ。

このままチンタラして、一本でも電車を逃すとヤバイ。

そう思った2人は直ぐさま朝食を頬張り、

「(一)馳走様でした!!?」

そう言って、食堂を出て行った。

「…んで結局千尋はどう思ってるんだろ…ハーレム」

2人が出て行った場所を見ながら、頼人が言う。

「さあ、な。状況次第では敵意剥き出しになるだろうなあ…」

光が言う。

「心配、なんですか？」

舞弥が頼人に聞く。

「んくまあな。かわいい弟分だし。なんかあつたらなあ…って思っ
て」

少し、何処か懐かしいモノを見るような目で言った。

【ゆりかもめ新臨海線】

東京沿岸部から御台場、そしてI S学園があるバブル時代に埋め立てられて作られた人工島・夢見島を繋ぐモノレール。

その、車内。なんとか間に合った千尋と箒が乗っていた。

千尋はそこで、窓際の座席に座り、ぼんやりと窓の外を見ていた。

窓の外に映るのは出勤する社会人、道を行き来する自動車、高層ビル群。

東京の街並みだった。

かつて自分が破壊した、元の世界とは違う、平和で何処も壊れていない東京。

それを見ながら、この世界に来てから色々あつたなあ…と
思う。

まずは箒から千尋という名前を貰った事。

この世界が自分のいた世界とは違う世界だったり、自分はオリジナルの外皮の破片の細胞が死体と同化した、医学的には生きて
いる死体に過ぎないこと。

自分が殺した奴が光という女になってたり、父親がすでに
死んでいた事を、人類に殺された事を光から聞かされて暴走してし
まったり……

でも一番知ったのは人間について、だ。

今まで人間は自分達の家族を皆殺しにしてを自分や親父

をバケモノにして、唯一の肉親の親父に会うのを邪魔する奴ら、と思っていた。

でも、現実はそのような事はなくて、彼らは確かに欲張りだけでも、詳しく彼らを見ている内に失敗をして他者を大勢巻き込んで犠牲を出す最悪な存在だけど、それだけじゃない。

確かに最悪な人間はいるけど、それだけじゃなくて、根の良い奴とか、自分のような存在と共生を模索する者も、たくさんいるという事を。

そして自分はそれらの人間を見境無く皆殺しにしていた現実を、思い知らされた。

でも、箒や光はそんな自分が存在する事を、生きる事を是としてくれた。

そう言えば光はこんな事を自分に教えていた。

『あと10年…いや、そうだな…せいぜいあと6年か、それぐらいしたら、人類の支配する世界は、終わってしまうらしい』

墨田大火災の起きた年に、2015年に言われた。

そして、今はそれから6年後の2021年。人類世界最後の1年ということになる。

普通の人間なら、誰も信じない。

でも、千尋は信じる信じないよりも、「何故、何が原因で滅ぶのか」が気になった。

当然、それについて聴いた。

けれどそれについてはまだ機密らしく、教えてはくれなかった。

『だがやはり原因は私達人間だ。私はそれを酷く後悔してるし、申し訳なく思っている。そしてその時はお前の力が必要になる。だから教えた』

ただ、そう言った。

そんな事を考えていると、窓の外に世界最強の兵器…なんだがスポーツ扱いされているモノ、インフィニット・ストラトス、略してISの使い方を教える教育機関であり女尊男卑の象徴でありテ

口の格好の的である、IS学園が目に入る。

確か、自分の役割は箒姐のサポートだっけ…それにしても箒姐も不憫なもんだ。

自分の姉のせいで自身の役目と未来を決めつけられてしまつて。それはかなり辛いはずだ。

なのに箒姐は必死で我慢している。周りに迷惑をかけないように必死で我慢している。

…いや、我慢しているのはそれだけだろうか…？

千尋はそう思う。けれど、すぐにその思考は放棄する。今考えたつて、答えなんて出ないから。

閑話休題。

箒のサポート程度なら女性自衛官でもできる。

だが、千尋だつてIS適性ランクD+と、一応適性はあるから、その腕試しと、ISを元に作られたISの上位互換機、【戦略歩行機動兵器】とISのダウングレード版【歩兵強化装甲殻】の新型OS開発用のデータ収集、そして【3式MFS—X機龍】のDNAコンピューターの完成。

それらが目的だった。

「千尋…何を考えているんだ？」

そんな千尋に箒が話しかける。

「ははア…さては女の園に放り込まれるのが嬉しいんだな？」

少し意地悪そうな顔で言う。

瞬間、千尋は顔を真っ赤にする。

「ハア!?？何いってんの!?？」

「隠さなくても良いぞ。いやあ…普通の男の子で安心したよ」

「だから違うつて!!？お、俺は箒姐がいたらべ、別に平気だし…」

箒に言うが、端から見たらシスコンと思われる発言をしたために、耳まで真っ赤になる。

「ふふ…そうか。嬉しいよ」

しかも、箒がそれを受け止めてしまうから尚恥ずかしい。

そうこうしていると、IS学園前にある、夢見島学園前駅

に着く。

「…んじや、箒姐、行こう」

千尋は気を引き締めて、言う。

「ああ。」

そうして2人は、IS学園へと、足を踏み入れた。

【ビキニ環礁・ファントムタスク支部・ブラボーキャツスル】

墨田大火災の起きた年以降、異常気象により霧が濃い海域に、ビキニ環礁の水爆実験の作戦名から付けられたファントム・タスクの支部「だった」基地があつた。

そこにはISや戦闘機の残骸が幾つも転がり、乾いた血の跡が壁や床に付着していた。

その、基盤ブロック。

基盤ブロックの床をブチ抜くように、地下の海底洞窟に通じる竪穴から、黒い、ケロイドのような体表の巨体を持つ、青白い背ビレがいくつも背中に並び、乳白色の、感情を感じさせない目の、文字通りバケモノが上がってくる。

そのバケモノの眼前には倒れたコンクリートに座りこみながら本を読む二十代前半の女性がいた。

「ああ、れい、今日はお早い起床ですね」

女性——朝倉美都は、さして動じる事もなく、家族に接するように、れい、と呼んだバケモノを見上げ、話しかける。
「何か良いことでもあるのですかね……ああそうだ、れい、ご存知ですか？」

美都はれいを見上げて言う。

「日本では、あなたの事を……【ゴジラ】、というそうですよ」

カチリ。

そして世界は破滅へ進む。

誰も望まなかった……いや、誰かは望んだ破滅へ。

カチリ、カチリ。

破滅への秒読みは容赦無く進む。

人類世界最後の春が、始まる——。

設定・キャラ解説

「キャラ解説」

・篠ノ之千尋（しのののちひろ）

本作の主人公。

外見は童顔に緋色の髪に栗色の瞳をした少年で身長155センチ、体重49キロ。

性格はやんちゃで明るい、理性的でもある。

ミレゴジの外皮の一部がデイメンションタイドに吸い込まれ、その外皮の一部がIS世界に流れ込み、その先Ⅱ墨田大火災時の東京・墨田区で死んでいた少年の死体にG細胞が入り込み、細胞レベルで同化したもの。

ミレゴジの記憶も引き継いでいる。（ギリギリ転生では…ないよね？）

過去の人類に対しての行いを人類視点で知った為に完全に同情はしていなくとも自身の行いに自責の念を持つ。

千尋とは箒が付けた名前。

趣味は喧嘩と将棋崩しで、特に喧嘩に至っては中学時代ではそれが原因で毎日打撲、裂傷、骨折を繰り返していた。

G細胞を有しているが故に研究対象にされかねない為、光が特務自衛隊に匿っており、いざという時の為に護身術や銃の撃ち方を習い、光の知り合いの神宮司まりも三佐からは歩兵強化装甲殻と戦略機の操縦方法を習った。

IS適性ランクはD+と低い、戦略機適性はAと、かなり高い。
なお、低身長がコンプレックス。

「俺は馬鹿だけどさ、馬鹿でも、馬鹿なりにやれる事があるだろ」

「箒姐、いつも迷惑かけてゴメン…」

「ん？もっぺん言ってみ？身長が……何だって？」

・篠ノ之箒

本作のヒロイン。外見は原作通り。

性格は、真面目だが意外とお茶目：かな。

剣道を得意としており、千尋の剣術指導係であり義理の姉。

その外見から見た目は強そうに見えるが実は日に日に見続ける異形の鳥の夢を見たり、実の姉がやらかした白騎士事件のせいで墨田大火災前まで陰でイジメを受けたりした過去があり、束関連で精神を少しすり減らしている。

そのせいか、束に対しては排外的。

彼女自身の悩みが有るとしたら、千尋の好き嫌いとは織斑の鈍感、束：そして日頃から見続けている悪夢と並行して、皮膚を侵食するように拡大している胸部の黄色い染み。

実は過去に忌むべきものを移植された身でもある。

光やまりもから千尋同様に訓練を受けた身であり、近接戦、特に刀剣術に長けている。

好きな物は唐揚げ。

千尋は束のせいで家族が離散してしまい、一人でいた筈にとって新しい家族という感情以外に何処か異性として見てしまっているが、自覚はまだ、できていない。

IS適性ランクはCだが戦略機適性はA―。

「私はまだ兵士としても人間としても未熟者ですよ」

「少しばかり、弟に甘えても良かろう?」

・片桐光

特務自衛隊所属の一等特佐。

性格は理知的で厳格だが意外と明るい。

千尋や箒を特務自衛隊に匿い、鍛えたり鍛えさせた人間。

実質は片桐光男の転生＋女体化した姿（ホントはあんま転生ネタは使いたくなかったけど…）。

千尋の意図や考えを知っている人間であるが故に千尋の相談役にもなる。

禁忌に引つかからないやり方で破滅を乗り越えようと模索する。

「多少のリスクは致し方無い。だが私達は理性を保ったまま生き残

る。」

「禁忌に手を出せば、私達は欲望を抑えられないだろう？力を、力を…その果てにあるのは破滅だ」

・アイリスフィール・フォン・アインツベルン
あだ名はアイリ。

特務自衛隊にオブザーバーとして佐官待遇で協力している国連直轄調査組織・モナーク機関の科学者。

おっとりした性格で科学者らしさはないが、発想力は豊かな方。世界破滅の予兆を捉えたのは彼女の師匠。

千尋の思考はモロに彼女の影響を受けている。

なお、Fate／ZEROのアイリとは並行世界の別人。

「それをありえないと一蹴するんじゃないやなくて、まずは仮説を立てて考えてみるの。そうしたら、また何か発見があるわ」

・永井頼人

サイレン2の闇人の世界から東のワームホールでIS世界に飛ばされた。

元の世界にはもう戻れないらしいが、絶望しか無かった世界からまだ希望がある世界に飛ばされただけ救いか……

現在は特務自衛隊所属。

千尋の護身術の教官であり兄貴分。

なお、戦略機乗りでもあるが、永井が実戦で使うと、機体の扱いが荒いせいか機体自体は大破しないものの、精密部分が破損するため、対IS戦時は歩兵強化装甲殻を使う事を義務付けられている。

なお、長い間（約半年）闇人の世界にいたせいかバケモノ染みた身体能力がある。

・久字舞弥

千尋や箒より1つ歳上。

北朝鮮に拉致され、工作員に仕立てられあげられた過去を持つ、元

北朝鮮拉致被害者。

なお両親は拉致拘留中に事故死。

現在は特務自衛隊に籍を置き、光の秘書を担当している。
千尋や箒の監督官の一人としてIS学園に派遣される。

・桑継十蔵

原作通りIS学園理事長。

だが物語開始前に肺ガンにかかり入院。

・桑継誠

特務自衛隊所属の幕僚長。

光と同じ様に破滅を乗り越えようと模索しているが、方法は光より過激で、G元素を用いた大量破壊兵器の計画や人体実験を行って生き残る術を探っている。

・四十院神楽

四十院家の出身。

誠の秘書であり千尋の監督官としてIS学園の千尋と同じクラスに派遣される。

〔用語〕

・戦略機

正式名称、戦略歩行機動兵器。

全長15メートルから18メートル。

元は冷戦時にアメリカで開発された歩行人型兵器。

ISと一部同じ操縦系統である間接思考制御を用いているためIS乗りでも幾つかの手順を覚えれば乗れる。

現在までにアメリカ、ロリシカの「ガンヘッド」、日本の「荒吹（あらぶき）」、「羅刹（らせつ）」・試作型」が存在する。

・歩兵強化装甲殻

ISの量産性と安定性、男女でパイロットを選ぶ問題を解消する為に開発されたISのダウングレード版。

ISコアを用いず、バッテリーを用いているためPICと絶対防衛を喪失しているが、そこはスラスタや全身装甲化で補っている。

戦略機適性の無かった兵士が載せられる。

現在までに日本の「打鉄改（うちがね・かい）」、アメリカの「ハーデイマン」が開発されている。

・特務自衛隊

表立ってはISや、それに類する兵器に対処する第四の自衛隊。

現在ロリシカで起きている厄災と同様の事態に対処する為の機関。

・モナーク

国連直轄の調査組織。

1940年代後半から未現元素・マナの研究を行ってきた調査組織。

〔設定〕

・ミレゴジとギラゴジの関係

今作ではギラゴジの出来事はミレゴジの世界の延長線上にある設定。

つまりミレゴジとギラゴジは同一個体。

EP-02 学園生活の始まり

…暇だ。あと眠い。

千尋は思う。

IS学園講堂。

どこのオペラとかやってる劇場だと聞きたくなるほど豪華な造りのそこには一年生160人、2年生140人、教員20名の計320人が集められ、入学式の集会を行っていた。

ちなみにIS学園自体が新設校のため、まだ2年生までしか生徒がない。

現在は世界最強のIS乗りと言われている織斑千冬が舞台に立ち、演説をしていた。

「諸君らは選ばれた生徒だ。ここに残るものは将来ISと人類の発展に貢献し、輝かしい未来を掴める可能性のある、金の卵だ。そのことを胸に、誇りを持った、楽しい学園生活を…」

うんぬんかんぬん。

聞いてないわけではないが、千尋は酷く眠い。

長つたらしい話を聞いていると、何故か眠くなる。

そういえば、光は『長つたらしい話をする人は例外もあるが、それでしか権力を保持できない存在、あるいは立場に立たされている者だ。』と言っていた。

つまりは織斑千冬もその立場にあるのだろうか？さつきから10分近く話を続けている。

だから千尋は眠い。何度首がカクンツとなったか。

隣の筈も「くああ…」と欠伸をしていた。

…まあ、周りの女子はというと千冬への尊敬というか憧れというか、盲目的崇拜というか…そういうもので睡魔を振り払っていた。

そんな生徒たちを千尋は眠気のせいで半分瞼が閉じかけの目で、見渡す。

こいつらは1万分の1というアホみたいな倍率の試験を受け、クリアした、エリートだ。

だがそれは通常の話。

世界初の男性IS操縦者の織斑一夏、政府の要人保護プログラムによって強制入学を決められていた筈、男性IS操縦者であると同時に筈のオブザーバーとして千尋などと言ったイレギュラーだっている。他にも教員を賄賂で買収したりとか、政治家のコネを使ったとか：まあ、そういう汚い話やズルい話で入学した奴らだっているのだ。男性だからという理由で学園の広告塔や研究対象として使えるから入学試験をパスさせてもらった織斑一夏や千尋、そして多分、光たちではない、何者かのコネによって入学させられた筈も、それに当たる。

：正直、千尋は生徒として入学ではなく警備課に配属される方が良かった。

警備課は学園内の警戒に警視庁警官隊、陸上自衛隊普通科部隊が警戒にあたり、他には海上のIS学園反対デモを行う漁船やボートを警戒して海上保安庁の巡視船や巡視艇、学園への攻撃に対処する為に海上自衛隊のイージス艦や汎用護衛艦、航空自衛隊のレーダー車やペトリオットが展開しており、学園を警備する自衛隊員や海上保安官とはなんとなく反りが合いそうだからだ。

：それに、学園ではイケメンでなければ男性は冷遇されるという、まあなんとも頭がおかしいとしか言いようがない、女尊男卑思想の巢掘だし、千尋はイケメンではないし普通の顔だし、ガキっぽい顔だし、まあ、冷遇の対象だろう。実際朝から何人か：：とかほとんど女の子に蔑みの目で見られてるし。

「はあ…」

それを考えると、うんざりして来て、溜息をつく。

すると、隣から、

「あなた、わたくしの質問に答えて頂ける？」

金髪縦巻きロールに青い瞳のお嬢様らしい雰囲気の、見た目から察するにヨーロッパ系の女子に話しかけられる。

「なんか用か？つか、誰？」

「あら、やはり無礼な上に無知なのですね」

千尋の反応を見るなり女子は蔑みの目で見てくる。

「そりゃ、初対面なんだから知らなくて当たり前だろ」

千尋は呆れながらその女子にいう。

すると女子は少し畏まって、

「あら、それは失礼致しましたわ。…わたくしはセシリア・オルコツト。イギリス代表候補生ですわ」

胸に手を当てながら、自己紹介する。

「…ふーん。代表候補生、ね」

それを聞いて、千尋は眼を細める。

隣の箒も耳に入ったからか、少し警戒しだしたらしく、先程から千尋同様に欠伸や眠気で閉じかけた目が覚めていて、横目で千尋とセシリアを見ていた。

「ええ。褒めてもよろしくくてよ？」

そんな箒に気付かず、セシリアは言う。

だがそれを無視して、

「箒姐、イギリスってどこだっけ？」

と、千尋は箒に聞く。

「は？」

それを見たセシリアは思わず、あんぐりと口を開けて、固まる。

そしてその千尋を見て箒も呆れる。

「千尋、お前…」

「い、いや…あはは…しゃ、社会は苦手だから…」

「はあ…イギリス、または大英帝国。正式名称はグレートブリテン北部アイルランド連合王国。ヨーロッパ地方にあり、ドーバー海峡で隔てられており、フランスが対岸にある島国で、日露戦争時の日英同盟やイギリスの王室と日本の皇室との交流などで日本とも深い関わりがある…中学の時習わなかったか？」

「あ、あ…習った。習ったわ」

「…い、イギリスを…私の国を知らないなんて、日本人は馬鹿ですの？」

セシリアが、言う。

「…こいつがバカなだけだ。日本人全員がそういうわけじゃない」
「うぐ…」

それに箒が呆れながら応じて、千尋が箒の回答を聞いて酷く落ち込む。

まあ、イギリスの位置は普通知ってて当たり前というほどだから、箒の言うことは、あながち間違っていない。

「…はあ…貴方に期待したわたくしが愚かでしたわ」

セシリアが言う。

「勝手に期待されたって困るし。そういうのは織斑にしてろよ」

千尋がセシリアに返す。すると何か嫌なことを思い出したような顔になって、

「もう言いましたわよ…あんな無知で無恥なかたは初めて見ましたわ…」

わなわなと震えながら、言う。

ああ、地雷踏んだな。俺。と千尋は思う。

「信じられますか？代表候補生を知らないだなんて…」

「え…あ、うん。俺のイギリスの位置ってどこ？ってやつと同じくらい知ってなきや恥ずかしい内容だな。それ」

そもそも織斑一夏の姉である織斑千冬は元日本代表だし、入学前に配られた必読、と書かれていたあの参考書に、赤文字で、しかも太字で書かれていたから眼を通せばどんなものかは分かるはずだ。

だいたい、それでなくとも、オリンピックの選手のような感覚で世に広がっている単語だから知らないはずがない。

知らないなら、それはイギリスってどこ？と聞く千尋のようにその科目に鈍いか、真性のバカか、世間知らずか。

「だいたいどうして男が2人もわたくしの教室に…」

そう呟くセシリアに、千尋が遮って、

「安心しろ。俺は短期研修だし、一通りの教養を受けたら警備課配属だ。だから、すぐ消える」

千尋が、そう言い放つ。

実際、そうだった。

ISの基礎動作は歩行とダッシュ、ジャンプくらいはすでに習得済みだ。

それらの動作は歩兵強化装甲殻の基本動作にあたるから。

そして、戦略機の機体制御の難度の方が遥かにISより難しいから、短期で良いだろうと特自が判断したが故に千尋は短期研修の後、学園の警備課に配属予定だった。

「そ、そうですね…なら、もうこの話題は切り上げましょう」

そう、セシリアが言った直後、織斑千冬の演説が終わる。

『続きまして、臨時理事長の紹介に入ります』

IS学園にも理事長はいるが、半年前、肺ガンになったために現在入院中で、臨時の理事長が来ることになっていた。

そしてその臨時理事長は――

「ご紹介に上がりました片桐光です。本日から、本校の臨時理事長に赴任致しました。よろしくようお願い致します」

光、だった。

「ぶっ!?!?」

思わず千尋と箒は吹いてしまう。

光からそんなことは聞かされてなかったから。つい、驚く。

だが、光が、特務自衛隊のヤングエリートと呼ばれる幹部士官が赴任した。

これは、

「…荒れるなあ…これ」

千尋が呟く。

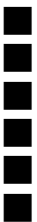
「ああ…この分だとタカ派の奴らも…」

千尋の呟きに応えながら、箒も呟く。

セシリアは少し気になり、二人に耳を傾ける。

「こりゃあ…波乱の学園生活…かなあ」

はあ…とため息を付き、頭を押さええながら、千尋は呟いた。



・ I S 学園生徒宿舎（仮設棟）

I S 学園の軀体である夢見島のバブル時代の開発時に空いたままの縦穴型地下空洞施設、通称・第2シャフト。

そこが千尋らの属する特務自衛隊が戦略機のテストを行う場所であり I S 学園の整備・開発エリアだった。

その、居住スペース。

質素で味気ないうえにボロい見た目だが、5LDKという広さでガスコンロと換気扇、水道、シャワー室完備という、仮設とは思えないほど素晴らしい部屋。

家具はちゃぶ台と布団、テレビ、タンスしかないが、それで十分だ。

ここには千尋が泊まるはず…なのだが、

「なんで箒姐、それに舞弥まで俺と同じ部屋にいんの？」

あぐらをかいた千尋が、目の前で座っているリュックを背負っている箒と舞弥に聞く。

箒は予定通り生徒宿舎本棟の1025室に入り、舞弥は千尋よりひとつ年上だから転校生という扱いだが部屋が空いてないため用務員宿舎の空き部屋に入るはず…なんだが。

「…それは…その、ホラ、千尋が心配だからですよ。どこの馬の骨とも分からない輩にいつ殺られるか分かりませんし…」

舞弥が、言う。

「…同じく……だ」

箒は何故か暗い声音で言う。

…この顔は何かあった時の顔だと千尋は悟る。

だが、千尋にとつて、いや基本同年代の、それも思春期の男女が同室で暮らすということとは、いろいろな気遣いをしなければならなし、ある意味苦痛だ。

「ていうか箒姐も舞弥も男と一緒に暮らすことがどういふことか分かかってる？」

千尋は問う。

だが、

「……覚悟の上だ。……という訳で、泊まるぞ」
箒がそう言い放つ。

「いや待て」

何がという訳で、だ。

「では私も。そういうことで」

舞弥まで、言う。

なんでこうなる…と内心毒突く。

もう、2人とも元の部屋に帰る気はない。特に箒は。

「はあ…」

ため息を付きながら、部屋の片付けは終わっていて、あとは箒の荷物だけだから、

「ちよつと出かけてくる。」

そう言つて、千尋は部屋を後にする。

向かう先は強化装甲殻やISの整備エリアにあたる区画。

特務自衛隊が強化装甲殻を持ち込んだフロアで、さらにその下には戦略機を格納しているフロアがあった。

千尋は、そこに用があるのだ。

その、手前のエレベーターホール。

今いるのは整備フロアより数階上だから、千尋はエレベーターに乗ろうとする。

と、そこに、

「あら、貴方は…」

声の方を見ると、今朝講堂であつた少女、セシリア・オルコットがいた。

「貴方、一体何をしていますの?」

なぜかセシリアは千尋につつかかってくる。

「別に。この先に用があるだけ」

極方面倒くさい事態にならないように、受け流す。

そうしていると、エレベーターが開く。

それに2人は乗り込む。

中には教師がいた。

「あら、オルコットさん。こんばんは。貴女も整備フロアへ向かうのかしら?」

「はい。わたくしの機体の調整に」

「性が出るわね。…でも、貴方は何で来たの? 貴方に関係するものは無いはずよ?」

セシリアに応じて、その次に千尋に言う。

瞬間、千尋は疑念を浮かべる。

何故、この女はエレベーターの最下層…整備フロアのあるB3階のボタンではないボタンまで押しているのか。

今の会話ならB3階のボタン以外押すのはおかしい。

仮に間違いで押したとしても、今度は千尋への発言が引っかかる。

強化装甲殻がISと同じ整備フロアに、さらに下には戦略機が置かれていることを、それに特務自衛隊が関与しており、千尋と特務自衛隊の関係は資料として学園に提出したから、学園の教師は知っているはずだ。

この女が【本当にこの学園の教師なら】

つまり、こいつは――

「敵か」

千尋は、低い、子供とは思えないほど大人びた声音で、呟く。

「え?」

「!? チイツ!!?」

それを耳にした、千尋の隣のセシリアは驚き、その教師に化けた女も一瞬動揺するが、すぐに懐からナイフを出して、振り上げて、千尋に切りかかる。

それをすぐ様千尋は左腕の上腕部――に仕込んだ12式耐刃防御籠手で防ぐ。

ギイン!!? という金属と金属のぶつかる音がエレベーター内に響く。

すると千尋は女のナイフを持っている手の付け根を右手で掴み、自分の側に思いきり、引っ張る。

女も体が千尋に引き寄せられる。

そこに千尋は間暇ついでに女の腹に右足で蹴りを入れ、「あがつり?」

さらに鎧通しを左手で、女のみぞおちに入れる。

それで、女は意識を失って、ナイフを落とす。

その全てがほぼ一瞬で、セシリアも突然すぎて何が起きたか理解できなかった。

「…ったく。どうなつてんだよこの学園の警備体制…ナイフ持った不審者を入れるとか…」

千尋は女の落としたナイフを拾いながら、愚痴る。

IS学園の警備体制は万全——と、警備についている自衛官らを除いて、学園側は発表している。

それでもこんな輩が入り込むということは、穴がある、ということだ。

本当に油断できない場所だ。

一歩間違えば、死ぬ。

やはり常時警戒する必要がある。

「くそ面倒くせえ場所だなあ…」

千尋は、呟いた。



第2シャフト・生徒宿舎（仮設棟）

箒と舞弥は荷解きを終え、部屋でくつろいでいた。

「…箒」

ふと、舞弥が話しかける。

「なんですか」

「やはり、何かあったのですか?」

舞弥が心配そうに、箒に聞く。

すると箒が泣きそうな顔になって、

「また…広がってるんです…シミ…」
と、胸を見せる。

そこには肌を侵蝕するように日に日に広がりつつある黄色いシミがあった。

医者にみてもらったが、『ガンの類ではないけど分からない』と言われただけだった。

しかもシミが拡大するたびに異形の鳥の夢を見るのだ。

「怖いんです…シミが広がるたびに私が私じゃなくなる感じがして…
どうにかなくてしまいそうで…」

怯えるように、言う。次の瞬間。

「うっ…ぐ、ふッ!!？」

「箒!!？」

箒が口を押さえて身を丸める。

そこに、舞弥が駆け寄る。

箒の手には、赤い、紅い鮮血が彩られ、口からまだ少し、それが垂れていた。

吐血したのだ。

明らかに危険だ。

舞弥は携帯を取り出し、千尋に電話をかけようとするが、箒は舞弥の手を強く掴んで、

「お願いです…千尋には…言わないでください…あの子に余計な心配を…掛けたくないから…」

箒はそう言っ、懇願する。

「箒…」

舞弥はただどうしようもないくらい、必死でナニカに足掻こうとする箒を見ながら、それを了承するしかなかった。

カチリ、また、破滅へ進む。

1人の女子――篠ノ之箒もまた、破滅へ巻き込まれて行く。

IS学園1年1組。

千尋と箒が配属されるクラスはそこだった。

そしていまは、ISの基礎動作や運用規制についての授業だった。

「このように、ISの運用には国家や組織の管理下の土地、それ以外の場所では使用許諾が下りなければ無断展開する事は、IS運用を規制するアラスカ条約に反する為、最悪の場合は刑法に掛けられ、懲役10年、または無期懲役の罪が課せられます。なので―――」

教壇の上に眼鏡をかけて、緑髪で童顔の副担任教師の山田真耶という、元日本代表候補生の女性が立って、解説をしていた。

千尋と箒はIS基礎動作は墨田駐屯地にいた時ISと同じ操縦方法の強化装甲殻を用いて学んでいるから、大体知っている。運用規制に関しても同様だ。

けれども、聞く。

一度学んだから今の授業は、復習程度でしかないが、復習は大事な事だし、せっかく教えて頂けるのだから、千尋と箒は有難く聞く。というか、学校で教えて貰う立場にあるから、聞く。

そんな立場にあるのに聞かないのは、無礼極まりないから。

真耶はそんな生徒を見て、少し元気になる。

…が、『そんなの知ってます』と言わんばかりに授業を聞いてない者には、

「あ、ここにテストに出しますね」

そう、言う。

すると面白おかしいくらいガタガタガタン!!?と机が音を立てるくらいにそれらの生徒は急ぎノートにメモを開始する。

けれどもそれでも尚困惑している生徒が1人。

世界最強と謳われる織斑千冬の弟にして世界初の男性IS操縦者、織斑一夏だ。

何故か周りをキョロキョロしながらあたふたしている。

そんな織斑に真耶は気づき、

「織斑くん、分からないことがあつたら何でも聞いて下さいね？私、これでも先生ですから…」

微笑みながら、言う。

「先生!!？」

「はい、なんででしょう?」

「ほとんど全部分かりません!!？」

「…え…ええ?」

織斑の言葉に、思わず真耶は困惑する。

「わ、私の教え方が不味かったかな…うーん、でもあれくらいは普通だし…あ、あの織斑くん以外で分からない人はいますか?」

戸惑いながら、真耶は生徒に聴く。

誰も手をあげない。千尋と箒も含めて。

それに織斑は呆然とする。

だがこれくらいは知つてて当たり前だ。下手をすれば死ぬから。

それは歩兵強化装甲殻という、ISの絶対防御やPICを外し、既存技術で作られたISの簡易化量産型装備で学んできた千尋と箒は痛いほど知っている。

ある時は強化装甲殻で模擬訓練を行った際に近接ブレードを腕に受けた衝撃でフレームが歪み、腕の骨にヒビを入れたり、ある時は破片が体に直撃して出血など、千尋たちは、しょつちゅう体験しているから。

…閑話休題。

織斑は基礎的な知識があれば分かる今の授業が分からない、つまり基礎的な知識すら知らない、あるいは授業を聞いていなかった。ということになる。

「…織斑、参考書は読んだのか?」

教室の後ろにいた千冬が言う。

「参考書ってあの分厚のですか?」

「そうだ」

参考書、ISの予備知識を頭に叩き込む為に入学予定の生徒に配布される本だ。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

瞬間、スパーン!!?という爽快な音が、織斑への出席簿落しと共に響く。

「必読とあったろうが馬鹿者!!?」

出席簿アタックを喰らい、悶絶する一夏に千冬が叫ぶ。

「…アホだろ、コイツ」

思わず、千尋は呟く。

どうとつてもアホにしか見えない。大体古い電話帳というのが分からない。タ○ンページのように黄色ではなく、白い表紙で『必読!!? IS入門書』と赤文字で、デカデカと書かれていたのだから、電話帳と間違う事はまずあり得ない。

「貴様にはもう一冊くれてやる。一週間で覚えろ」

「いや、あの量を一週間はちよつと…」

「やれと言っている」

「…はい」

千冬に威圧され、織斑は縮こまるが、自業自得だ。それに一週間で覚えるのは無理難題だろうが、クラスの授業スピードを落とさない為には妥当な判断だろう。

そんなことをしていると、チャイムが鳴り、授業が終わった。

と、同時に放送が入る。

『1年1組、セシリア・オルコット、篠ノ之千尋、はすぐに学園理事長室に出頭しなさい。繰り返します…』

「…何か、したのか?」

箒が千尋に、心配そうに聴く。

「いや別に。まあ呼ばれる理由は何となく分かるけど」

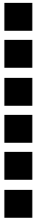
多分、昨日の侵入者に関してだろう、と千尋は思う。

「…一応、ついて行くだけついて行かせてくれ。廊下までで良いから」

箒が、言う。

「別に良いけど…過保護だなあ…ま、行くか」

そう言つて千尋と箒は教室を出て、その2人にセシリアも着いて行った。



IS学園理事長室に続く廊下。

千尋と箒が先頭を行き、セシリアが数歩後ろを歩いている。

「昨日：何かあったのか？」

箒が聴く。

「見知らぬ女に襲われた程度だけど？」

「充分大事ではないか：で、その女は？」

「ぶっ飛ばして、偶然先で居合わせた四十院神楽が身柄引き受けを申し出たからそいつに突き出した」

「ぶっ飛ばしたって…」

箒が一瞬呆れた顔をする。

セシリアも顔を千尋に向ける。

四十院神楽はかの有名な四十院財閥の跡取りの1人として有名だから。

だが、それは表の話。

実際は特務自衛隊のバックボーンである旭日院という組織の幹部家である四十院家の令嬢であり、旭日院のタカ派：要は過激派である桑継家と関係を持ち、ハト派：穏健派の幹部家である片桐家とその隸下にある者たちとは、あまり良くない関係にある家の人間だった。

そんな人間が、ハト派である片桐家の隸下にある千尋に接触した。それだけで驚く。何せ、ハト派とタカ派は同じ旭日院の人間なのに殺し合いまで行かなくとも、対立関係にあり、派閥争いが常態化していたから。

：無論、セシリアはそんな事を知らない。知っているのは四十院の表の顔だけ。旭日院の事は知らない。

旭日院は日本国民にすら知らされていない、非公開組織だから。

千尋が入学式の時に学園生活が荒れるといったのは、そういう事が原因だった。

ハト派とタカ派の派閥争いとして論争や情報戦を繰り広げ、互いに

対抗するために力を…兵器を極秘で作る。禁忌に触れない程度の代物だが。

結果、互いのいがみ合いが旭日院を、特務自衛隊の戦力を、日本の戦力を底上げする。

皮肉なことに、内ゲバする事で総合的に見れば日本の情勢が変わり行き、日本が発展していく。

…まるで世界の縮図だな、と千尋は思う。

旭日院は戦争をすることで科学技術が、国の戦力と情勢が変わっていき、人類が発展してきたこの世界そのままだ。

日本は原爆を2発も落とされ、太平洋戦争に敗北し、水爆の被曝やそのせいで現れた壱号巨大生物による被曝まで受けた世界唯一の核被曝国だから核に敏感で反対的な反戦反核を謳う国家となった。

米ソ冷戦時には大量の核実験が行われ、その度に両国の核兵器の質と発言権…戦力ではないが国際的立場は強くなった。

ベトナム戦争時にはインクでは紙にロクな情報が書けないからボールペンが生まれた。

…そうして見れば、今の世界の人類は常に同じ人類の犠牲の上に生きているのだ。

もちろん、今理事長室に向かっている千尋、箒、セシリアも例外ではない。

「…そっぴや何で親父はアメリカに行かなかったんだろ…」

2人に聞こえないくらいの小声で、千尋は呟く。

自分や自分の父親がバケモノ——ゴジラに変えられたのはアメリカの水爆実験が原因で、日本は別段悪くない。

むしろ、その水爆実験で日本の漁船が被曝し、遅れて親父が日本に攻撃を仕掛けたのだから一番とばかりを受けたのは日本で、本来襲うべきはアメリカなのに——…いや、やめよう。これじゃ親父がみんな悪いみたいじゃないか。

あの時は人間の情勢を知らなかったから仕方なかった、言い訳だろうけど、野生の生き物が人間の情勢を知らないのと同じだ。

…人間側に着くと、ゴジラが、かつての俺や親父はこんな感じに見

えるんだな…。

千尋はそう、思う。

人類に着くことで人類がかつての千尋たちから理不尽な目に遭ったことを知った、でも人類が千尋たちの住処を奪い、千尋たちをゴジラというバケモノに変えた、これも理不尽の他なものでもない。

結果的に人類が悪いが、全ての人類が悪い訳ではない。

それを千尋は光から嫌という程聞いた。人類が全ての元凶という前提で。

そう考えていると、理事長室に着く。

扉の前では先程話していた四十院神楽がいた。

「四十院さん!? 貴女までどうして?」

セシリアが言う。

「え? どうしてって…千尋、説明してないの? 私らのこと」

「する必要ないと思ったから。どうせ今回の呼び出しは、俺らの内情は関係ないだろ?」

「まあ…そうだけどさあ…」

千尋の返答に少し呆れた顔をして言う。

そう話していると、

「皆さん揃いましたか?」

理事長室の扉が開き、中から舞弥が出てくる。

「どうぞ中へ」

そう言われ、千尋、箒、セシリア、そして神楽の4人が部屋に入る。

それほど大きな部屋ではなく、手前に来客用のソファが2脚とテーブル、そして奥に無機質な黒いデスクがあり、そこに光が座っていた。

「来たか、とりあえず座れ。それから話をする」

光が言う。

だから千尋たちはソファに座る。

「舞弥、みんなにお茶を。」

「光も…?」

「ああそうだな。もらうよ」

そう、会話を終えると舞弥は隣の部屋に通ずるドアを開けて、隣の

部屋に消えていく——千尋は、それを見据えて、僅かに見えた隙間から向こうの部屋を覗く。

89式小銃改を装備し、デジタル迷彩の戦闘服に身を包んだ重装備の特務自衛隊員8名程が、見えた。

その自衛官は警護部隊で、ほぼ全員が、かなりの腕前をもつエリートだ。

多分、今の千尋たちをあつきり制圧してしまえる程の腕前があるはずだった。

「…んで、何の用だよ?」

千尋が、光に聴く。

それをセシリアが嗜める。

「ちよ!?? 貴方、もう少し口の利き方というものを…」

が、遮って、

「いや、いいんだよオルコット。私は彼みたいな態度は嫌いじゃないから」

「え…」

光が言う。

「今のご時世、へこへこする男ばかりだからな。少しばかり反抗的な奴がいた方が良い。」

光がそういうと、セシリアは何か思い当たる事があるのか、少し神妙な顔をする。

「…さて、本題に入る…前に、箒、お前は呼んだ覚えは無いが?」

光が箒に問う。

「すみません。私が無理矢理…」

それに箒は申し訳なさそうに言う。

「…まあ、いいか…いや良くないが…後で自習はしろよ?」

呆れながら、言う。

「あ、はい!!?」

すると、千尋たちと光に舞弥が紅茶と書類を何枚か持って来る。

「…さて、昨夜、IS学園・第2シャフト内で侵入者を篠ノ之弟が拘束した」

瞬間、全員が真剣な顔になる。

「四十院と久字が尋問した結果、彼女はバイオメジャーという組織の所属だった」

バイオメジャー、米国大手3社が共同で設立した組織で、遺伝子関連の市場独占の為に各国に諜報員やコマンドを送り込んでいる…という噂だった。

そこで、セシリアが挙手する。

「あの、ですが何故進入出来たんですか？学園の警備体制は万全だと…」

「ま、表立った場所や人目につく場所や地上はな」

光は、言う。

「だが、まあ、IS学園の警備体制は完璧のようで完璧じゃないんだ。…書類の中に地図があるだろう？」

そう言われ、全員がテーブルの上に置かれた地図を手に取る。それはIS学園のある夢見島の地図だ。

だが、IS学園の真下にトンネルが通っている。

「それは学園が非常時に使うライフライントンネルだ。…もつとも、トンネル自体はバブル景気時代に建造途中で放棄されたものを強引に流用したものだ。」

お前らは知らんだろうが、当時東京湾では大規模な都市再開発計画があつてな、地図には書かれてないが海底トンネルや埋め立ての人工島が作られ、バブル崩壊でことごとく途中放棄された。このIS学園がある夢見島もその名残りだ。

…例の女は、そうして放棄されたトンネルから侵入したと思われる」

セシリアの顔が強ばる。

おそらく、今までIS学園は安全だからこんな物騒な話は自分とは無縁だったんだろう。

緊張しているのが、分かる。

「もちろん我々はこんな所から侵入者がくるなんて想定していなかったから、我々にも非がある」

「…では学園側も？」

箒が、聴く。

「ああ。把握してなかった。今までこんな所から侵入なんてされなかったからな。私たちだつてこれらのトンネル群は昨夜、国土交通省に問いかけて知つた。…詰まる所、この学園は完璧な城壁で守られた温室に見えて、穴あきチーズみたいに穴だらけなんだよ」

光が言い放つ。

するとやはり、全員の顔がよく無くなる。

「…あと悪いことに学園側は入学式早々の問題を揉み消すべく、正規の教師部隊を動かしたくないらしい。大事になるからな」

「な!?？」

それに、セシリアが声を上げる。

「な、何故ですか!?? 現に男性とはいえ生徒が襲われたのですよ!?? 生徒を守るのが教師の役目のはずです!!? なのに対策をせずに無かつた事にするなんて!!?」

そして妙なところで正義感を発揮する。…つまり、根は良い奴らしい。

「だからこそだよ。入学式早々に襲撃なんて話が知れたら学園が宣伝していた安全性と信頼性が砂の城の如く崩れ落ちる。それに、男性操縦者が来たから襲撃された——と考える輩まで出てくる可能性だつてある。学園が自身の保身と男子生徒の立場を尊重した結果が、何もせず情報統制を敷いて黙認する…という結論らしい」

光の言葉にセシリアは愕然とし、神楽は、

「まあ、そんなものですよね…所詮は」

と、冷ややかに呟く。

それを見ながら千尋は、

「…学園の事情は分かつたけど、こっちは手を打たないわけじゃないだろ?」

光に言う。

「ああ、夢見島は国連租借地だが仮にも日本国の領土だからな。特務自衛隊の戦略機一個小隊と機械化装甲兵2個小隊、陸上自衛隊の一個

戦車小隊の配備が決まった」

「…で、学園側が動けない穴埋めは？」

見透かしたように千尋が問う。

それに光は、ニコリと笑いながら

「それがお前たちを呼んだ理由だ」

応える。

するとコンコン、とドアをノックする音が鳴り、

「失礼します」

1組の布仏本音と4組の更識簪が入って来る。

それを見計らって、

「来たな。…2人には事前に説明済みだが…単刀直入に言う。貴様ら

は教師部隊の穴埋めの為に部隊を編成してくれ」

光が言い放った。

??????????????

昼休み・IS学園・食堂

「部隊…部隊、ね」

千尋は浮かない顔でテーブルに座り、注文したハンバーグステーキを食べながら、呟く。

光から告げられた内容…臨時部隊結成の話だ。

部隊は【16式戦略機・荒吹（あらぶき）】の他、試験を含めて【20式戦略機・銀龍（ぎんりゆう）】とイギリスから送られてきた【MEF-18・トーンードII】を使うらしい。

今まで戦略機の訓練部隊を編成させられ、訓練にあたったことはある。

だが、戦闘の為に部隊を編成した事は無かった。

しかも、相手は戦略機ではなくISなのだ。

別にISのオーバーテクノロジー云々の問題はどちらでもいい。戦略機の質量や一回一回の攻撃は、あっさりISを捻り潰せるから。

：問題は、戦略機は“人殺しの道具”という事だ。
そう、人殺し。

ISなどと違い、戦略機は本格的に武器として作られた代物：つまり、完全に軍事兵器だった。

それを人間に使うという事は、高い確率で人殺しに直結する。

別に千尋と箒は問題ない。いざという時、殺らなければ

自分たちが殺られるし、人殺しの道具という、“そういうもの”に長く触れてきたから、それに、人が死ぬ光景は6年前の墨田大火災で嫌という程見てきたから、抵抗は、あまりない。

恐らく、旭日院タカ派の四十院神楽も同じだろう。彼女も将来は特務自衛隊の自衛官になる筈だから、そういう訓練は受けている。

だが名門貴族出身とはいえ一般人のセシリアは？

暗部所属とはいえ、実戦経験のないらしい簪と本音は？

戦略機の運用経験がないうえに実際に人殺しをしてそれが彼女らのトラウマにならない保証は？

千尋はそれが心配だった。

どのような形であれ、人を殺すという程、もつとも罪悪感に苛まれるものはないと、少なくとも千尋は思っていた。

片桐光の前世にあたるらしい片桐光男、千尋が——正確には千尋の元来の姿であり、人の身体を得る前の千尋自身の記憶の持ち主である、ゴジラが、彼を殺したのだから、事情が分からなかったと言いついても、殺した事には変わらない。

あの世界の、光の周りの人間の関係を歪めてしまったかもしれない。

光は別に過去の事だから悔やんでも仕方ないというが、千尋にとっては、あれは少し、トラウマらしい。

：それでも殺さなくてはならない時は殺さなくてはならない。

例えば相手が男だろうが女だろうが子供だろうが老人だろうが：殺さなくてはならない。

だから、こう考え、自身に言い聞かせる。

【誰かを守る為に誰かを殺す。誰かを殺さなければ誰も救えない】

これは光の友人であり、千尋の教官だった、神宮司まりも三佐の言葉だが、つまりは、話し合いで解決出来るほど、人間は単純ではない……という事だった。

分かり合えれば人は平和になれる……というのは漫画やアニメの中だけの話。

実際は汚くて複雑で傲慢で理不尽な欲望が人類の活動源……と光は言っていたがまさにそうだろう。

でなければ戦争が大昔から今なお現在進行形で存在せず、大昔に無くなっているし、自分の様な……ゴジラのようなバケモノだって生まれずに済んだ。

「千尋、食べないのか？」

隣に座る箒の一声で、千尋は思考の海から引き上げられ、はっとする。

「え？あ、ごめん。またブーツとしてた？」

「ああ、いつになく」

千尋は考え事をするといつもブーツとするのだが、今回はいつもより酷かったらしい。

……気持ちを切り替える為に千尋は箒に話しかける。

「そーいや、箒姐、あそこには行かねえの？」

「あそこ？」

千尋が顎をしゃくった方向を見る。

そこには織斑目当てで、2組の代表候補生、鳳鈴音とその他複数の女子が集まっていた。

「昔から箒姐、織斑の事好きだったんだろ？」

「……ああ、それか……それなら、もう、良いんだ」

諦めた様な声音で、箒が言う。

「私がいたら、厄介事に巻き込まれるだろう？家族的に」

「……あ、あー。うん、そうだな」

箒の姉はあの悪名高きISの開発者である天災・篠ノ之束。

箒に近づけば奴の陰謀に巻き込まれかねないのだ。

「それにな、私、思うんだ。……他人を好きになって良いのかって」

「……………」

千尋は黙ってしまふ。箒は墨田大火災で生き残った数少ない生存者で、逃げる途中、瓦礫の下敷きになったり煙を吸って動けなくなつた人たちを、その時は自分が助かりたい一心で、見捨ててしまったから。

その奇跡的な生還と他人を見捨てた罪悪感からサバイバース・ギルトを引き起こしてしまった。

墨田大火災後の数ヶ月間は酷く精神が病んでいて、毎晩すすり泣きながら、『ごめんなさい。ごめんなさい』とうわ言で謝まり続けたり、千尋の部屋に入ってきて、千尋に抱きつきながら数時間泣いたり、『あの時助けられたかも知れないのを見捨てた』『でも死にたくなくて、見捨ててしまった』そんな言葉を、まるで自分に呪いをかける様にすすり泣きながら繰り返していたのだ。

千尋にはその時、ただ箒をあやす事ぐらいしかできなかった。

今でこそ精神が安定してきているが、やはりサバイバース・ギルト自体は克服できておらず、自分とはとにかく我慢しようとする性格になつてしまつていた。

だから、自分の昔からの想い人…織斑が女子に囲まれてイチャついていても、他の女子と浮気しても、箒は我慢し続けて、自分にばかり負担を強いてしまふ。

そんな風に、箒はある意味壊れた人間になつてしまつていた。

今の箒には少しでも元に戻す手助けをする為に、人手が必要だ。

特に、よく理解して貰える、同年代くらいの人間が。

千尋がこの学園に派遣された理由の中には、それも含まれていた。今思えば昨日箒が自分の部屋に来たのは舞弥が箒に気を利かせたからだろう。

…道は長いだろうけど、箒姐をサバイバース・ギルトから脱却させてあげる為には、これからも一緒に、手探りでどうにかするしかないんだよな…。

千尋は、そう思う。

「と、とところで千尋」

「うお!?? な、なに?」

急に話しかけられたので、千尋は驚く。

「…御飯、冷めるぞ?」

「え? あ、やっべ」

そう言うと、千尋は残っていた昼食にがつついた。

織斑の席は、相変わらず騒がしい事になっていた。

「それにしても鈴」

「何よ?」

「…育ったな」

織斑が鈴の胸…巨乳を見ていう。

「ちよ!?? アンタどこ見てんのよ!??」

鈴は赤面して恥じらいながら、思わず怒鳴り、

「きゃー織斑くんだったーん」

「もー織斑くんだったらエッチく。」

周りの女子が煽るが、

「ん? 何がだ?」

織斑持ち前の鈍感スキルでそれらを振伏せる。

だから全員がずっこけた。

「…なあ、箒姐」

「なんだ?」

「あれさ、もう病気の域なんじゃ…。」

「…かもな」

食べ終わり、食器をトレイに乗せて、戻しに行く2人は織斑達を尻目に言った。

■■■■

学園・生徒寮・1029号室。

そこが中国代表候補生の鈴の部屋だった。

代表候補生だからか、何故か個室だ。

「つたく…」夏のやつ、本当に相変わらずの鈍感ね…。」

椅子に座りながら、呟く。

中学生時代に両親の離婚で母親に連れられて中国に渡ったから、じ

つに3年ぶりの再会 だった。

それにしても、と思う。

自分の巨乳を見ながら、一夏が育つたと言ったことを思い出す。

中学生時代に貧乳だった鈴にとってはとても、とてもとても嬉しかった。それと同時に――― “強烈な吐き気” と “酷い嫌悪感” を催した。

ピロピロピロ!!?

「!?」

瞬間、鈴の携帯が鳴る。

鈴にとっては見慣れた電話番号が、表示されていた。

そして相手の名前の欄には――― 賀弘文（ホヲ・ホンウエーン）。鈴の上司にして、中国共産党の、高官。

すかさず、出る。

「は、はい、もしもし」

強張った声音で、電話に出る。

『私だ』

「はい」

『織斑一夏を懐柔できたか?』

それを聞いて、さつきまでの再会を喜んでいた、ほのぼのした気持ちが一気に消し飛ばされる。

そう、鈴が学園に来たのは織斑一夏の遺伝子情報と近い内一夏に渡されるという日本の第3世代機のデータの収集。

それを手に入れる為に一夏に “蜜の罠（ハニートラップ）” を掛ける…それが鈴に与えられた目的だった。

『どうなんだ?』

「申し訳ありません。ま、まだ…」

『早くしろ。その為にわざわざ君の貧しい胸にシリコンを打って膨らませてやったんだから。』

それとも何かね?…我々のやり方に嫌気がさしたのかね?』

「ツ!? いえ!!? そんな事は決して!!?」

党のやり方に反発したと思われるなら、この男に寝取られて人質にさ

れてる母さんが殺される…!!?」

中国では、意外と女尊男卑は拡がっていない。だって、その思想は、
“ 党の意向に反するから”。

だから中国国内では民主主義や反体制的思想、女尊男卑主義者を監視する政治指導委員会が監視官や情報提供者をばら撒き、それらの人間を密告して、そして容赦無く殺す。

…もし、電話の先の男が鈴を気に入らないと思えばすぐにでも、人質を、鈴の母親を殺す。

だから、今すぐにでも胃袋の中身を吐き出しそうになる嫌悪感を堪えつつ、この男を素直に肯定し、男の言いなりになる。

『…本当かね? 私の、党のやり方に異論はない、と?』

「はい!!? 疑うまでも無く幸福です!!?。」

鈴は喜びに溢れた声音で、応じる。

—— ああ、吐き気がする。

『ふむ、党のやり方に対し何も考えずにただ従う…我々の中で最も理想的な人民のモデルケースだ』

つまり、あいつらの理想的な人間とは思考を放棄して、ただただ狂信的に党を崇める人間だ。

『なら今後ともよろしく』

そう言つて、賀は電話を切った。

「ツ!!?。」

思わず、鈴は壁に携帯を投げつける。

そして、葛藤する。

もし懐柔して情報を引き出せば一夏に嫌われてしまう。

そんなの嫌だ。

友達だって密告して、反体制思想者も殺して、体だって汚して、あの男に犯されて処女まで奪われてまでして一夏に会いに来たのに。

でも母さんが殺されるのも嫌だ。父さんと離婚してから、私を一人で必死に育ててくれた人だから。

「ツ…あたし…どうしたらいいの…」

鈴は、噁り泣きながら、呟いた。

生徒寮・1020号室

セシリアはベッドに座りながら電話していた。

「ええ。はい。多分危険です」

『でしたら尚のこと…』

電話の相手はセシリアの家のメイド長であるチエルシーだ。

幼いころ両親を列車事故で亡くしたセシリアを1人で育てたのも彼女だ。

…遠からず、セシリアを女尊男卑よりにしてしまった遠因でもあるが。

「ですがブルーティアーズのパイロット候補の座を他人に奪われた汚名返上、そしてオルコット家の今後の発展と安泰の為にも、クラス代表より学園守備隊の方が名誉あるものですわ」

セシリアは強く、そして芯のある声で言う。

セシリアも、次期当主としての自覚と責任は一応、弁えているから。『…分かりました。お嬢様がそうまで仰られるなら…ですが、お氣をつけてください。死んでしまつては…』

「元も子もありませんからね。…わかつていますよ。チエルシー。でも、危険も顧みなければ、オルコット家の当主は、務まりません」

優しく、母性のある声音で言う。するとチエルシーは安心する。

『そうですね、お嬢様はやればできるお方です。頑張つて下さい。あまり無理のなさらぬように…では、失礼します』

そうして、会話を終える。

ふと、セシリアは思い返す。

イギリスの試験でブルーティアーズのパイロット試験でスコアが低く、代表候補生には受かるも、専用機は貰えず、セシリアよりスコアの上だった女性がブルーティアーズを受領した。

最も、その女性はブルーティアーズの根本的欠陥が見つかった為にイギリスに留まることとなったが。

だがセシリアは悔しく、その日はチエルシーに抱きついて子供のように泣いてしまった。

でも、今は泣いてなんかいられない。オルコット家当主として、学園守備隊としての責務と義務が待ち構えているのだから。

(明日から、特務自衛隊幹部・神宮司まりも三佐というお方による訓練指導が始まる…)

「やってやりますわ…絶対に!!?。」

セシリアは、手に力を込めて、決意を決めた。



墨田駐屯地・モナーク日本支部

その施設内の部屋に清潔感のあるデスクに座りながら、パソコンでレポートを書く女性アイリスフィール・アインツベルンがいた。

ふと、電話がかかってくる。

「グーテンターク?。」

『そこは“もしもし”だろうが。アイリ』

「あら光ちゃん、電話くれたのね。お酒のお誘い?。」

明るく、朗らかな雰囲気で聴く。

『残念ながら違う。…箒の件だ』

瞬間、アイリは重い雰囲気が変わる。

昨夜吐血した箒の血液サンプルを、光がアイリに解析を依頼していたのだ。

「ああ…そのこと…結果は、やはり原因不明。でも箒ちゃんの血から、奇妙な遺伝子が見つかったわ」

『奇妙な…遺伝子?』

「ええ。…そしてその遺伝子と76.9パーセント一致する遺伝子が、モナークのデータ内にあったわ。」

『その、遺伝子は?』

「…ある、生物のものよ。その生物の名前は…第4号巨大生物【ギヤオス】」

カチリ、また、破滅の秒針は進む。

誰もが今のままの世界を望んだ。

支配者ズラして何もかもを人類が管理できる世界を。

でも人類は所詮生態系の一部に過ぎず——やはりまた、

世界は破滅に近づいてしまう。

IS学園・第2シャフト・戦略機格納庫。

シミュレーター内の仮想世界に作られた廃墟を、6機の戦術機…3式銀龍ほか、16式荒吹壺型丙、トーンードⅡ、16式荒吹3機が、腰の左右両位置についた跳躍ユニットのメインスラスタを吹かして、短距離跳躍で、ところどころアスファルトにヒビがはいり、場所によつては抉れて、クレーターになっている道路を移動する。

銀龍や荒吹壺型丙、荒吹の機体の右肩には日の丸、トーンードⅡの右肩にはイギリスの国旗のマークが描かれ、全機の左肩には「学守—02—」——『学園守備隊・第2部隊所属』を意味する文字が、明朝体で書かれて、そこに仮想世界の人工太陽の光が反射していた。

『HQ（ヘッドクォーター：本部）より学園守備隊第2部隊【ハウンド】各機に通達。前方に戦術機6、IS4機。これを撃破せよ。』

戦術機の管制ユニット内…ようはコックピットに響き渡る上官、学園守備隊に戦力を割いている、特務自衛隊第1戦術機大隊【サーベラス】大隊長・神宮司まりも三佐の号令。

千尋は前方の情景と戦況ウインドを交互に見分けながら聞いている。

慣れたとはいえ、シミュレーションとはいえ、やはり気は抜けない。実戦と同じ気持ちでなければ本番で、真っ先に死ぬ。

学園に通う前にまりもに鍛えて貰った時、一体シミュレーションだけで何回殺されたか…それを思い出すとゾツとする。

それに、まりも、という可愛らしい…かな？そんな名前なのに率いる部隊名は【サーベラス】…地獄から逃げようとする者を捕らえて貪り食う、三首の魔犬・ケルベロスの英語読みだ。

それと猛将ぶりが理由か、まりもは別名・狂犬神宮司、なんて呼ばれている。

そして千尋たち学園守備隊第2部隊【ハウンド小队】は、その、ま

りもの大隊の傘下に置かれていた。

「了解」「了解」「了解」

全機が応答する。

だが千尋と箒、神楽以外は余裕のない声音で言う。
当然だろう。

戦術機を——人殺しの道具を使ってシミュレーションと
はいえ、人を殺すのは初めてなのだから。

『ハウンド1は4と6を随伴させ、戦略機を排除。ハウンド2は3と
5を率いてISを排除せよ——』

「了解!!？」

千尋——コールサイン・ハウンド1はハウンド4——

——セシリアとハウンド6——本音を率いて、

箒——コールサイン・ハウンド2はハウンド3——

神楽とハウンド5——簪を率いて、

部隊は二手に分かれる。戦術機とISの混成部隊を、挟撃するの
だ。

：普通は戦術機とISで部隊を組むなんて無いらしいが。

千尋は戦況ウインドを見る。

前方、11時の方角から戦略機。数は2機。残り4機はその場で待
機。IS部隊は箒の部隊に食いついていた。

接近中の戦術機の兵装は突撃砲：36ミリ機関砲と120ミリ短
距離滑腔砲の複合ライフルだ。

「俺が突撃する。ハウンド4、6、援護射撃頼めるか？」

千尋が、問いかける。

『え、援護なんてどうしたらいいの〜』

本音が聴く。

「適当に弾をばら撒いてくれりゃ良い。射線に俺が出ても、システム
が正常に作動してれば敵味方識別機能が味方誤射防止の安全装置を
作動させる」

千尋はそういうと——

「…行くぞ」

千尋は低い、それでいてまるで野生の獣が放つような殺気を孕んだ
声音で、言い放つ。

瞬間、跳躍ユニットのロケット／ジェットハイブリットスラスターの
ロケットエンジンを点火。

同時にセシリアのトーネードⅡが127ミリ速射ライフルと、本音
の荒吹が36ミリ機関砲のけたたましい砲声を轟かせながら、マズル
フラッシュを放ちながら、援護射撃を開始する。

その間、千尋は一気に加速し、ジェットエンジンに切り替え、速度
を維持しながら、左手に持つ追加装甲シールドを前方に突き出し、3
6ミリ突撃砲の下部についている複合装備、120ミリ短距離滑腔砲
から、戦術機2機の内、手前の機体に向けて、タングステン合金の徹
甲弾を、穿つ。

砲弾が敵戦術機の、コックピットブロックに命中し、タングステン
合金の砲弾が装甲と相互侵蝕を引き起こし：コックピットブロック
が、爆ぜる。

実戦なら、これで敵戦術機のパイロットは御陀仏になる。つまり、
死んだ。

千尋は、今シミュレーションの中とはいえ、人を殺した。

だが、千尋は止まらない。

そんな今更、人を殺した程度の事”では止まらない。

撃破した敵戦術機の僚機がすぐ反応し、千尋の銀龍に36ミリ突撃
砲を発砲する。

千尋はすぐ様追加装甲シールドで36ミリを防ぎ、メインスラス
ターを吹かし、接近しながら自身の突撃砲を脇の下を通すダウンワー
ド方式の背部兵装担架に格納し、右腕の上腕部に格納されているアー
ムブレードを展開し、敵戦略機の眼前に迫る。

敵戦術機も回避する手段もあったが、腐つてもイギリス代表候補生
で狙撃の腕が高い セシリアと、日本代表候補生で暗部の一員である
本音による射撃が敵戦術機をその場に釘付けにしてしまう。

動けば36ミリや、それに混じって120ミリや127ミリが飛ん
できて、撃墜されてしまうから。

そして今、追い打ちをかけるように千尋の銀龍が接近してきている。

だから、まずはそれを撃破しようと判断し、下腕部のナイフシースから近接自衛短刀を取り出し、構える。

それを千尋は、シールドを左腕マニピュレーターで一度引き、左ストレートの容量で、勢いを付けて、敵戦術機に殴り込む。

ガゴオンという重金属のぶつかり合う音が響き、敵戦術機は体勢がぐらついてしまう。

瞬間、千尋は右腕のアームブレードを、敵戦術機のコックピットブロックに向けて突貫させ――

アームブレードの刀身がコックピットブロックの装甲に突き立てられた一瞬、火花を散らして装甲がアームブレードを防ぐが、千尋は、ひと思いに、力を込めて、アームブレードを突き刺した。

それで、敵戦術機は沈黙する。

…シミュレーター開発者の趣味か、それとも人を殺した実感を持たせる為か、アームブレードを突き刺した衝撃で装甲が裂けたコックピットブロックの隙間から、赤い、紅い鮮血が垂れていた。

…現実ならコックピットブロックの中にいた奴は、突き刺されたアームブレードの刀身に潰されて、ミンチになっている筈で――

――よそう。

千尋は首を振ってその思考を振り払う。

殺らなきゃこっちが殺られる。罪悪感を覚えなと言えば嘘になるが、いちいちそんな事に構っていては、次に自分が死ぬ。

だから、他人に構うのは、特に敵に構うのは、後回しだ。自分が死んだら元も子もない。

千尋は自分に言い聞かせた。

残り4機。

瞬間、ハウンド2――

――箒の戦略機・荒吹壺型丙が敵I

Sを舞うように、叩き落とすのが見えたと同時に、4機の戦術機が箒の部隊に接近するのが、戦況ウィンドに映された。

「オルコット…ハウンド4は箒の部隊に接近する戦術機を狙える位置

に移動！ハウンド6はついて来い!!？」

『…わかりましたわよ』

セシリアは男に命令されるのがまだ不満なのか、少し膨れた声音で応じる。

だが、うまく行けば敵を挟撃できるとわかっているから、従う。

『うん、わかった〜』

本音は本音で気の抜けた返事をするから千尋は、若干困る。

けれどすぐに平静を立て直し、本音の荒吹を引き連れ、箒の部隊への、合流に向かう。



同時刻。

ハウンド5——荒吹に乗りながら、36ミリと、複合されている120ミリで援護射撃を務める簪は前方の光景に啞然としていた。

今、世界で当たり前のように世界最強、といわれているISが、あっさりとして、ハウンド2——箒の戦術機・荒吹壱型丙の振るう、長刀の一振りを機体に受け、絶対防御が発動するも、さらに駄目押し、左脚部の姿勢制御用の補助スラスタとメインスラスタを全力で吹かして速力を付けた左脚部の蹴りによる質量エネルギーと移動エネルギーで、絶対防御は貫かれ、敵IS：モデルは恐らくラファール・リヴァイブは、蹴りの衝撃で仮想世界のビルの壁面に叩きつけられ、砂埃を上げた。

砂埃の晴れた場所には、形容し難い姿になった、“人間だった何かの残骸”が転がっていた。

『簪ちゃん？ボーツとしてないで、援護射撃してよ』

両腕の突撃砲と脇下からダウンワード方式で前面に展開した兵装担架の突撃砲、計4門同時射撃でISを攻撃する神楽が、簪に言う。

それで簪は我に返り、左手のシールドで身を守りながら、突撃砲を構え、ISに向けて、撃つ。

だが、やはり伊達に世界最強と言われているわけではないIS、ちよこまかと回避し、当たっても絶対防御が作動してダメージを防いでしまう。

計6基の36ミリとたまに放たれる120ミリが飛び交うが、今の所、箒が落とした2機を除いても1機しか撃破出来ていない。

元よりその場に釘付けにする為だから落とさなくても良いのだが。…今更だが、戦略機部隊は全員の顔が各機のモニターに映っており、箒は当てるのに必死の顔、神楽は羽虫を前にしたような忌々しげな顔、箒はまるで“機械か兵器のような涼しい顔”をしていた。

敵も当然、50口径アサルトライフルで撃つてくる。けれど荒吹の90式戦車と同じセラミック複合装甲やダイヤモンド合金の追加装甲シールドに、全て弾かれてしまう。

『あゝもう、鬱陶しいったらありやしない。箒ちゃん、やつちやつてよ』

神楽が、酷く鬱陶しげに、言う。

それを聞いていた箒は

「分かった」

背部兵装担架から予備の長刀まで抜き、二刀構えになり、メインスラスタを吹かす。

先程より圧倒的に速い。

ISに迫り、接触する…寸前のところで高度を僅かに上げる。

ISより僅か数メートルといったくらいの高度で両腕部の姿勢制御用補助スラスタを吹かして、二太刀の長刀による斬撃を、加える。

当然ISは対処しようとするが、遅い。

躲す前に落とされる。

だから防御に徹する。シールドエネルギーの大半を使って絶対防御の出力を上げる。

確かにそれで箒には対処できる。

けれど、“敵は、箒だけじゃない”。

瞬間、箒の荒吹壱型丙の眼前にいたISは、“真下”から36ミリと120ミリの4門同時砲火を受ける。

神楽の荒吹壱型丙のものだ。

そのせいで絶対防御の出力が激減してしまう。

そこに、箒が斬撃を加える。

一撃目。

絶対防御はまだ耐え抜く。けれどほぼ防御力はないに等しくなる。

そこへ、もう一太刀が、来て――

僅かとはいえ、物体が自由落下する落下エネルギーと機体の両腕部が加速した時の移動エネルギー、そして長刀の質量エネルギーが加わり、

一閃。

絶対防御が破られ、パイロットの肉体がそれらのエネルギーに耐えられずに、“弾けた”。

瞬間、赤い、紅い、数秒前まで人だったモノの鮮血と臓物の火花が、仮想世界の空に上がる。

箒の荒吹壱型丙が地面に着地すると、同時に箒は表示されている各機のパイロットの顔色を見る。

神楽は、やるじゃん、と言いたげな顔だが、簪は殺人鬼を見るような顔をしていた。

一瞬、いつそ何か言ってやろうかと思うが、辞める。

初めてだし仕方ない。それに当然だろう：あいつは、慣れてないんだから。

と箒が思った瞬間、

・警告：2時方向より敵機接近

そう、モニターに映される。

箒はチツと舌打ちすると、バックブーストで後退し、近接戦でISを撃破する際に地面にスパイク部分を突き刺して置いていたシールドと、その脇に置いていた突撃砲を回収し、予備の長刀を兵装担架に収納し、神楽の隣に立つ。

『ねえ、突撃砲のマガジン交換するから援護頼める？二人とも』

神楽が声をかける。

「分かった」

箒がシールドを構え、突撃砲を構え直し、36ミリの発砲を開始すると、簪も我に返って、

『あ、う、うん!!?』

急ぎ、応答する。

突撃砲はマガジンが尽きたら、予備の突撃砲に切り替えて使うのがセオリーだが、先程神楽は4門同時射撃をしたため全ての突撃砲の残弾が限りなくゼロだった。

さらに戦術機はエレメントを組むのが常識で、1機がマガジン交換中はもう1機がフォローして応戦するのだが、簪が戦術機に不慣れであるが故に、射撃が苦手な箒まで、カバーに入る。

神楽が突撃砲の2丁目のマガジンを交換し終えようとしたその時、敵戦術機部隊の最後尾の戦略機の兵装に目が行く。

肩部装甲にマウントされているミサイルコンテナ、92式16連装多目的自律誘導弾システムに。

しかも、そのミサイルコンテナを積んだ機体に、ロックオンされる。同時に、箒は血の気が引いた声音で、反射的に叫ぶ。

「――ッまずい!!?総員遮蔽物に!!?」

『え?』

二人とも反応が遅い…!!?

今まで自分たちは路上でシールドを遮蔽物にして撃ち合っていたが、あれはシールドでは防げない。

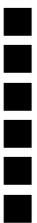
あれは“シールド諸共貫通して目標を破壊できる”、フルメタルミサイルを積んだタイプのミサイルコンテナだ。

しかも、たちの悪いことにあのミサイルは厚さ1メートルのコンクリート10枚を易々と貫通してくる。

市街地でいきなりロックオンされたらやり過ぎせない。

そして、ミサイルが、放たれる。瞬間、

ドオンという砲声と共にミサイルコンテナが貫かれ、ミサイルの弾頭内の推進剤に引火し、爆発した。



仮想世界の市街地にある、一際高いビルの屋上。

「ふう…どうにか間に合いましたわね…」

セシリアの乗る、戦術機・トーネードⅡが屋上に寝そべり、127ミリ速射ライフルを構えていた。

先程のミサイルコンテナを搭載した敵戦術機のミサイルコンテナをそのライフルで狙撃したのだ。

ミサイルコンテナを積んだ機体が見えた時は肝を冷やしましたわ…全く、心臓にも悪いですわ。

セシリアは思う。

敵戦術機部隊は先程のミサイルコンテナが切り札だったのかして、撃破された機体を前に困惑していた。

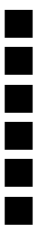
最前衛の1機だけが箒の部隊に対してまともに攻撃できていた。

「ハウンド4…ミサイルコンテナ（障害）はクリアしましたわ、いつでもどうぞ」

セシリアは言い放った。

『サンキュ』

千尋は、無線で礼を言った。



敵戦術機部隊の最後尾。

「行くぞハウンド6 援護を頼む。…突撃開始!!？」

千尋が命じる。

瞬間、敵戦術機部隊最後尾の隣のビルの壁を、千尋の機体がメインスラストアーを吹かしながら、シールドを前に構えながら、突き破る。

すぐ右手にはセシリアが狙撃し爆発、大破させた機体、左手に今の所健在の最後尾がいた。

最後尾の機体は直ぐには反応出来ず、すかさず銀龍の上腕部アームブレードを展開し、千尋は、その機体に斬りかかる。

まず、背後からの敵襲にも対応でき、迎撃も可能な兵装担架を斬撃

で破壊する。

その敵機の背後では中衛の機体が本音の荒吹の援護射撃をシールドで防ぎながら応戦しているが、そこにすかさずセシリアのトーンードIIが放った127ミリ速射ライフルの砲弾が頭部に命中する。

さらにその機体には後方から、箒の部隊のメンバーである神楽が突撃砲の120ミリによる砲撃を加える。

さらに、その手前では、

『頭上が、ガラ空きだぞ!!?』

箒が箒の援護を受けつつ、前衛の敵機を頭上から長刀で斬りかかり、一閃。

そして千尋は、右腕のアームブレードで、自分の攻撃対象の機体を左腰から右肩にかけて斬り裂いた。

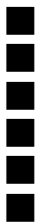
「それで、敵機は全滅した。」

『シミュレーション、トラックナンバー17、ISと戦術機の混成部隊との市街地戦終了。各自、降りていいぞ』

管制室のまりもが告げる。

シミュレーションが、終わり、各機の管制ユニットのカバーがイジェクトされ、管制ユニット内に新鮮な空気が流れてくる。

ふう、と千尋は息を吐いて、機体を動かす為に生体電気を読み取るためのコードを手の甲の装甲部から外し、延髄の装甲部にも刺さっている関節思考制御の為に脳波を読み取る為のケーブルも抜いて、手の甲で汗を拭い、管制ユニットから出た。



IS学園・戦術機格納庫

そこにはシミュレーションを終えた千尋たち学園守備隊第2部隊が神宮司まりも三佐の集合を受けて集まっていた。

「では、総合評価と今後の反省をまとめて行こうと思う」
まりもが言う。

「まず今回の功労者は…オルコットだな」

そういうと、セシリアはわかりやすい程嬉しそうな顔をする。

「敵ミサイルの発射阻止、味方の突撃支援。よくやってくれた」

「まりもが言う。」

「ありがとうございます」

「…次は反省を言っ行って行こう。まず篠ノ之姉弟」

瞬間、千尋と箒がビクリ、とする。

「いちいち何故近接戦に持ち込むんだ？貴様らが突出したばかりにそれを援護するのに 必死の後衛が別部隊に後方からやられたらどうするんだ？」

「うゝ…」

「貴様らが近接戦が得意なのは知っている。だがチームワークが重要な場面では味方を引っ張る足枷になる可能性だつてある。そのクセは治すように。」

「はい…」

「特に箒」

箒がまりもに再び呼ばれ、さらに驚く。

「何故退路を確保しなかった？今回オルコットが狙撃でミサイル発射を阻止したが、もし阻止できなければ貴様の部隊は全滅していた」

さらにマップには戦略機丸々一機通れる地下鉄もあつた。そこから挟撃されたら、終わっていた。

箒がさらに身をちぢこませる。

「仮にも分隊長を…指揮官を務めたんだ。部下は指揮官に命を預けている。指揮官がしっかりしなければ部下は死ぬ。そしてその責任は、貴様が負うことになるんだ」

「…はい」

それは箒が今回のシミュレーションでよく学んだ。

「総合評価としては…新米もいるから、まずまずだな。今回の反省を生かして、次回の訓練で結果を残すように。以上、解散」

まりもが、言う。

「…「ありがとうございます」」

そういうと、各自は散って行く。

「怒られちゃったね〜」

神楽が千尋と箒に寄ってきていう。

「うるっせえなあ…今度から射撃訓練もしねえと…」

千尋は鬱陶しげに神楽に言う。

「時に、オルコット」

今度は箒がセシリアにからむ。

「先程のは助かった」

狙撃によりミサイル発射阻止の事の、礼を言う。

それが意外だったのか嬉しかったのか、セシリアは嬉しそうな顔を
して、

「感謝してますの？…あ、ならもつと敬って頂いてもよろしくてよ!!
？」

…すこし、調子にのる。

「嫌だ」

「んなつり?!？」

箒は酷く面倒くさい顔をする。

「敬いはしない。でも、助けてくれたことには感謝している」

なんて、少し場の雰囲気、和む。

…でも——と、千尋は思う。

いつかは、きつと、今年に世界が壊れるなら、いつから壊れはじめるんだ？

千尋はただ一人、そう思った。

EP—05 濁侵スル魔獣（バルゴン）／進展する群像

東シベリア・ロリシカ共和国。

雪原を一人の少女が、“ISスーツのみ”を纏い、“傷だらけ”で、“ナニカ”から逃げていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ…」

息絶え絶えの状態になりながら、打撲した箇所が内出血をおこし、皮膚が裂け、出血しても、必死で逃げ続ける。

：彼女を追うのは、10メートル〜16メートルの巨体で4足歩行の、錆色の皮膚に白い突起の生えたバケモノ——の、群れ。その数50体近く。

なんでこうなっちゃったんだろ…ロシア軍のIS部隊所属の少女は、思い返す。

ロリシカ——ソ連崩壊後に独立を宣言し、それを許さないロシアと戦争し、アメリカの援助もあったとはいえ、あらうことか勝ってしまった新興国家。

だが未だに内政不安で紛争地帯と化していて、自分たちは昨年からはじまった、そのロリシカへのISを用いた定期偵察にIS2機で向かった…ISが撃墜された事は置いといても、ゲリラ兵に襲われたならまだいい。だが今はバケモノに追われている。

ありえない。

だが実際、あのバケモノに自分の僚機であり指揮官をしていた女性
は自分の目の前で喰い殺された。

最後の、助けを求める断末魔、肉が裂ける音、骨を噛み砕かれる音、
全てが耳にこべりついて離れない。

だが内心、ザマア見ろ。とも思ってしまった。

母と離婚して、自分を男手ひとつで育ててくれた、自分が大好きで敬愛していた軍人の父を訓練中に、…公式では事故とあるが明らかに

故意に殺したのに女尊男卑に物を言わせて助かり、さらに自分をこき使った醜い女には相応しい幕切れだ。

…でも、

「ここで死んじゃうから…どうでもいつか…」

少女は、眩くと、走るのをやめる。

疲労、そして――

「だって、周り全部、あいつらじゃない」

嘆くように、諦めるように、眩く。

…あたりには先程から自分を追ってきていたバケモノと同じか――

――いや、それより大きい、2、30メートルくらいのバケモノ

ノ――数十体が、少女の周りにいた。

――もう、助からない。

少女はそう察したから、無駄な足掻きだろうと思い、大人しく、膝を雪の上に落としてしまう。

「もう、無理なんですよ？…だったら、さっさと食べなさいよ…どうせもう、守るものなんてないんだから…」

自嘲するように、少女は嗤いながら言う。

ズン。

一步。

ズン。

また一步。

バケモノたちは少女との距離を詰めて行く。

それをハイライトの消えた、濁った瞳で見つめる少女の目の前に詰め寄ったバケモノは口を開け、少女を捕食しようとする。

瞬間。

けたたましい銃声と共にジェットエンジンの轟音が、雪原に轟く。

反射的に少女は身を伏せ、恐る恐る目を雪原に向ける。

そこには、上空から機関砲の弾によって撃破されていくバケモノの姿が目に入る。

そして、その機関砲を放たれた元を辿ろうと、見上げた視線の先には――ジェット噴射でホバリングしながら滞空し、まばゆい

サーチライトでこちらを照らす、鋼鉄の騎兵――。

「戦…略、機…：…？」

瞬間、疲労と安堵で、意識を手放した。

…ここ、は？

次に目が覚めた時、一番最初に目に入ったのは、LED照明のついた見知らぬ天井だった。

いつの間にかISスーツからパジャマに着替えさせられていて、暖かい布団に包まれながら、ベッドの上で寝かされていた。

上半身を起こして、周りを見る。

すぐそこにはBDU（戦闘服）を着込んだ、焦茶色の髪に白髪混じりの、けれど顔の見た目からして20代後半といった感じの男性兵士がパイプ椅子に座りながら書類を読んでいた。

「あ、あの…」

少女はその男に声をかける。

するとその男は少女の声に反応して、顔を上げる。

「ん、ああ、気がついたか？」

少女を安心させる為か、微笑みながら、言う。

普通、女尊男卑の浸透しているロシア軍ならあり得ないことだ。

「あ、はい…あの、ここは…？」

その様子に困惑する少女に、男はやはり微笑みながら、

「ロシア軍、マガダン統合基地だよ」

男は応えた。

■■■■■■■■■■

マガダン統合基地

基地周辺には敷地内の地上には自衛隊から提供された90式戦車の技術を基にロシア軍のT―80戦車と組み合わせたT―05戦車、M1A2戦車、シルカ自走対空砲、MLRS、MS―97戦略機・ガンヘッド、MF―14ワイルドキャットIIなどが展開していた。

その、医療棟・4階の廊下。

そこを2人の兵士が歩いていった。

1人は栗色の髪に俗に言うアホ毛の生えた、明るそうな顔つきのロリシカ陸軍第1戦略機中隊”メドヴェーチ”所属で最年少の少年、ユーゲン・ストヴィツキー軍曹。

もう1人は金髪のウェーブがかかったロングヘアの、母性を持って
いるようで何処か厳しそうな顔をしている同じく第1戦略機中隊”
メドヴェーチ”所属で副官であり、ロリシカ自由党隷下の軍人・政務
将校であるイリーナ・チェスコフ中尉。

「…リーナ・ベシカレフ伍長。サンクトペテルブルク出身。歳は18
歳。ロシア空軍第11IS中隊所属。父の捏造された死をきっかけ
に軍に志願。数度の実戦参加経験あり…まったく、キミは面倒なモノ
を拾ってきたなあ…」

少女——リーナ・ベシカレフの経歴を読みながら、呆れた
顔をして、ユーゲンに言う。

「あはは…すみません。とっさで…」

それにユーゲンは笑いを浮かべて応える。

「彼女の行為は明確な領空侵犯だ。あの場で放置しても問題は無かつ
た」

「それは…そうですが…」

そう言っているうちに、リーナを収容している病室の前にたどり着
く。

ユーゲンがノックをして、

「失礼します」

そう言いながら、手動スライド式のドアを開いて、中に入る。

ベッドの上にリーナが上半身を起こした状態で座っていて、その隣
に男性兵士——第1戦略機中隊”メドヴェーチ”隊長、ニコ
ライ・ジノビエフ少佐がいた。

「お体は大丈夫ですか？ベシカレフ伍長？」

ユーゲンが聞く。

「あ、は、はい」

思わずリーナが応える。

「…で？何か聞き出せましたか？同志少佐。」

イリーナはそのやり取りを無視してニコライに聴く。

「今、メドヴェーチ中隊について話してたところだ」

「——!? 何考えてるんですか同志少佐!!? ロシアの人間ですよ!!」

瞬間、イリーナが思わず怒鳴る。

「報道されたり、連中に知られてもいい程度の話だ。」

「はい。ロリシカ陸軍最強の戦術機部隊・メドヴェーチ中隊、ロシア軍でも有名ですから」

リーナが補足する様に言う。

それは事実だった。ロリシカ陸軍の主力戦術機・ガンヘッドは冷戦時代に確立された第1・5世代のもので、カタログスペックでは第2世代ISに敵わない筈なのだが、メドヴェーチ中隊は地形を利用し、さらには光学兵器、レーザーを阻害するチャフを多用し、国境からのロシア軍のISの侵入を阻止した実績がある。

…もつとも今はチュクチ・カムチャツカ方面を守備するパーレーン要塞基地所属の第2戦術機大隊“ジャール”がAH（対人類）戦の任を担っているが故に、メドヴェーチ中隊はAH戦を行っていない。
…今行っているのは、リーナを襲っていた様なバケモノ狩りだ。

「あ、あの…」

リーナが気まずそうに何か言いたげにする。そして

「お願いが、お願いがあります!!? 私を、皆さんの中隊に加えてください!!?」

リーナは言い放つ。が、次の瞬間、

パシイン!!?

イリーナが、ビンタをリーナの頬に叩き込む。

「ちよ、同志中尉…!!? だ、大丈夫ですか!? ベシカレフ伍長?」

ユーゲンが一瞬イリーナに何か言おうとするも、すぐにやめて、リーナに寄る。

「一体何を吹き込んだんですか!? 同志少佐!!?」

イリーナが再び怒鳴る。

「別に何も。後で部屋の盗聴器を確認してみろ」

ニコライはそれを受け流す。

「…ベシカレフ伍長、今の言葉は、大変重い意味を持つものだ。わかっているのか？」

ニコライは冷ややかに、叱責するような、それでいて心配するような声音で、聴く。

リーナが言ったことは簡単に言えば亡命希望だ。

祖国を裏切る、という事だ。

「む…昔から憧れていたんです…もうひとつのロシアは…ロリシカはどんなところだろう、どんな人がいるんだろう、理想である民主主義を樹立したロリシカはどんな場所なんだろうって。…それに、私はロシアで守りたいモノなんてもう無いですし、どうせ、国に帰っても…。」

つまり、そういう事だった。

「…どう思う？同志中尉」

ニコライが聴く。

「政務将校の私が許すとても？」

イリーナは不機嫌そうに言う。

政務将校。共産主義、社会主義思想の監視、国内に滞在する敵国であるロシア人の監視、赤色思想主義者への政治的指導を役割とする。

部隊の思想の監督役として、部隊に1人は配属されている。

部隊の政治的判断はこの、政務将校が行うのだ。

「彼女は、先の戦闘で殉職した者の、穴埋めにはなる」

「だからって…!!？」

「彼女がIS乗りであるから、戦略機適正もあるだろう。なくとも歩兵強化装甲殻の適正は充分ある。」

噛み付くイリーナを、ニコライは受け流しながら、リーナに寄っていたユーゲンを見ながら、聴く。

「それに彼女が単独で生き残っていたのも、また事実だろうか？ストヴィツキー軍曹」

「…はい。ISの機能は喪失したものの、他のIS乗りと比べれば、善戦していました」

子供らしいが、芯のある声音でニコライの問いに応えると同時にリーナにも言うことを含めて、ユーゲンは言い放つ。

それを聞いたリーナは、少し抵抗を感じながらも、

「政務将校の権限を使い、ということね…」

ため息を吐きながら、言う。

「…確認するぞ。ベシカレフ伍長。貴官は我が国に亡命を希望するか？そして新たな祖国と国民と軍に忠誠を誓うか？」

「はい!!？私、リーナ・ベシカレフは、亡命を希望します!!？」

リーナは、力強く言い放った。

「…よろしい。だが、これは特例である。貴官を我々はまだ信用したわけではない。…指導は、ストヴィツキー軍曹から受けろ」

「うえ!!？じ、自分ですか!!？」

「お前が拾ってきた”犬（ロシア人）”だ!!？貴様が面倒を見ろ!!？」

「う…はい。了解しました」

少しへこむユーゲンを尻目にニコライとリーナは部屋から出て行った。

「あ、あのストヴィツキー軍曹？」

「!!？は、はい!!？何でしょうか!!？」

いきなり声をかけられ、ユーゲンは驚く。

「失礼ですが…あの、指導、とは？」

リーナが困惑しながら、聴く。

「ああ、えっと、この国で暮らして行くロシア人の方の心掛けです。

…まず、絶対に自分がロシア人、だなんて口が裂けても言っちゃダメです」

「!!？どうしてですか!!？だってこの国は民主主義国家なんだからそんな些細なこと…」

「最後まで聴いてください」

思わずリーナが叫ぶ、が、ユーゲンが、先程までの子供らしい声音から一転して、酷く厳しい声音で遮る。

「…この国はロシアと戦争をしていたんです。しかもロシアから核攻撃や無差別爆撃を受けた街だってある」

それを聞いた瞬間、リーナは稲妻に打たれた様な衝撃が走る。核攻撃や無差別爆撃をしたなんて、聞いていないし教えられなかったから。

「そんなロシア人と仲良くしてくれる人間なんて、この国にはほとんど居ません。自分や隊長みたいに過去のわだかまりを仕方ないと諦める人間だっています。大抵の人間はロシア人に対して排外的、差別的なんです。…下手すりゃ、リンチだってされかねない」

それを聞いてリーナは愕然とする。まさかここまで自分が——ロシア人が嫌われてるなんて想像できなかったんだろう。

「でも、今は欠員の穴埋めとしてはみんな納得してくれますし、その間に人間関係を築ければ大丈夫です。…ああ、あと、もうひとつ」

まだあるのか、とリーナは反応する。

「トイレは別ですが、風呂場は原則水着着用で混浴ですから」

「…は？」

先程の暗い反応から一転して、リーナは啞然とする。

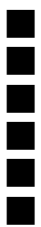
「こ、混浴って…え？え？」

「男女別の浴場なんて贅沢なモノ、作ってる暇も人員も予算もないですから」

リーナは困惑するが、ユーゲンはさも当然だのように応える。

ふと、その時、警報が基地に鳴り響く。

『定点観測にて、バルゴンの接近を確認!!?数300体!!?各戦闘車軸と各駆逐艦は面制圧攻撃の準備を、戦略機部隊は非常事態に備えよ』



理事長室。

光の部屋には、2人の客人が来ていた。

「わざわざ御苦労です。CIAエージェント、スコール・ミューゼル、情報庁諜報員、巻上依子」

光が、言う。

「全くだぜ、フロントムタスクに潜入してたから急な呼び出しに応じ
るの大変だったんだぜ？」

巻上依子：コードネーム・オータムが、言う。

「そうね…中米にあるフロントムタスクのデータを米海兵隊に直に渡
しに行った直後だから、日本に来るのは疲れたわ。…ま、今頃フアン
トムタスク中米支部は全滅してるだろうから、暫くは羽伸ばしできそ
うだけど…」

そのスコールの発言に、オータムが食いつく。

「情報を与えて他人に殺らせんのかよ…相変わらず嫌な奴だな」

「ふふ…私、潔癖性なの」

スコールは、どこか、見てると寒気を覚える笑顔を浮かべて、言う。

「さて、本題に入りましょうか」

スコールが言うのと全員が真面目な顔になる。

「…フロントムタスクはどうでもいいけど、どうやらバイオメジャー、
フランスのデユノア社と共謀して何か始めるつもりらしいわ」

欧州共同の第3世代機開発計画・イグニツションプランから外さ
れ、第3世代機の開発が進まず、経営不振のデユノア社は、なにか事
を起こすだろうとは思っていたがバイオメジャーときた。

「また…面倒な奴らだなあ…」

光が呆れながら言う。

「ええホント…モナークから提供された情報が正しければ今年の11
月か12月には……」

スコールが言おうとするが、辞める。

皆、知っているからだ。

モナークからの情報通りなら、今年の11月から12月にかけての
間に人類世界は終わる。

そして終わった後の世界は、ロリシカが破滅後の世界に近い。

日本もアメリカもイギリスも、ロリシカのデータを分析して国土防
衛の方法を模索している状況だ。

「…オータム、君からの報告は？」

「…大したモンは無かった。…でも、南太平洋で原子力艦船が次から次に消息を絶つてる。」

「原子力艦船が?」

「衛星からじや海中に巨大な影も確認されたらしい」

瞬間、光の脳裏に嫌な予感がよぎる。

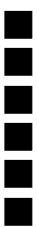
…原子力、巨大な影。

その、巨大な影は多分原子力を狙って…そんな奴は、この世にあいつかいない…!!?

光の顔から一瞬、余裕が消える。

まだ活動は先だと思っていたのに、ソレはもう活動を開始したから。

…少し早過ぎだろう…なあ?…:…:ゴジラ。



ビキニ環礁。

ファントムタスク所有、原子力空母ホーネット。

ファントムタスクが南太平洋の移動式活動拠点としており、ジェツト戦闘機やISが甲板に並んでいた。

艦内・プレイルーム。

2人の女が卓球をしており、1人はソファアに座って本を読んでいた。

「よっ、ほっ、ちよ、ああん!!?…:…:負けたあ…:。」

「よっし勝った!!?ホラジュース買って来てく賭けたんでしょく」

「ううく分かったわよく」

卓球をしていた女たちはジュースを賭けていたらしく、負けた方の女が部屋から出て行く。

「…ところでアンタ何読んでんの?」

卓球で勝った女がソファアに座っている女に聞く。

「昔、日本に巨大生物が来たんだってく」

「へえ…:1954年11月3日?大分昔ねえ…:それにしちやその日に黙祷ってヤツしないのね?」

「あの国は地震に台風と、災害が多いしその度に沢山の被害がでてるだから…いちいちそんなのしてたらキリがないわ。…それに、当時はまだ終戦から10年だし、混乱の最中だったんじゃない？」

「ふーん、まあどっちでもいつかあ。私には、関係ないし——」

ガツゴオオン!!?

「ぎゃあ!!?」

瞬間、空母が揺れる。

「な、なに…地震?」

卓球で勝った女が、怯えた口調で、言う。

「そんなわけないでしょ!!?海の上なのよ——」

ソファに座っていた女が叫ぶ。だが、

ガアアン!!?ギギギギギ…

さらなる衝撃と揺れ、そして船体が軋む音が、それを遮る。

「な、なに…何なのよお!!?」

恐怖のあまり、女は叫ぶ。

瞬間、

バギヤアン!!?

“巨大な爪”のような物体がプレイルームの壁を突き破り、さらに、

ガリガリガリバリリ!!?

その物体が壁を引っ掻く。

その物体に、ソファに座っていた女はソファごと、爪のような物体とプレイルームの壁に挟まれて、潰れる。

「いや…いやあああああ!!?」

卓球で勝った女は悲鳴をあげるくらいしか、出来なかった。

■■■■■■■■■■

空母ホーネット・艦橋

艦橋内は混乱していた。何故なら今、目の前には甲板が腰くらいまである身長、全身ケロイドの様な荒々しく、禍々しい肌を持ち、白骨化したような、不気味な背びれをもつ、乳白色の濁った目のバケモ

ノに襲われていたからだ。

まるで、ハリウツドのB級映画のような展開のうえに、ありえなさ過ぎる現状に唾然とするしか無かった。

そして、艦橋要員が最後に見たのは、強大で神々しい、青白い“核の炎”だった。

東京・特務自衛隊八広駐屯地。

墨田大火災で焼失し、財政的破綻が理由で消滅した墨田区を防衛省が買い取り、特務自衛隊本部が置かれている駐屯地となっており国連調査組織モナーク日本支部も置かれている自衛隊基地だった。

千尋と箒が住んでいた場所でもあるそこに、光は来ていた。

その、地下6階・第4格納庫。

特殊コンクリートの床に、四方を可動式装甲隔壁に閉ざされた部屋の中央に、全長60メートルの、銀色の装甲に身を包み、機械の龍となった、かつての怪獣王の亡骸が鎮座していた。

第4格納庫・予備管制室。

放射能遮断用厚さ2メートルの黄色い特殊ガラスの窓から眼下にその機械の龍を見下ろせる部屋。

この部屋とは別に、正式な管制室があり、そこが健在のために、今のこの部屋は何もない状態だった。

そこで光は、眼下に見える機械の龍を、哀れむような、やるせないような、そんな目で見ていた。

不意に扉が開き、

「またせたな。光」

理知的な、冷めた目をした男——特務自衛隊特将(中将)にして旭日院幹部・タカ派の轡木誠が入ってくる。

「IS学園勤務のお前が戻って来るとは珍しいな。…ホームシックにでもなったか？」

冗談交じりに誠は聴く。

「まさか――。…自分はお尋ねしたいことがあっただけで――」

「ああ、いつも通りの素の状態でもいいぞ。そんな気色の悪い敬語で話されてはこちらがやりにくい。」

誠が言うと、光は、

「…そうか。なら単刀直入に聴くぞ」

気色悪い敬語をやめて、素の言葉遣いで話す。

「あの銀龍とかいう戦略機…アレにどういう小細工をした？」

光は、凶器を突きつけるような目で睨みながら、誠に問う。

しかし誠は全く動じずに受け流す。

「小細工？何のことだ？」

「とぼけるな。銀龍の動力源と思しき部分の他にも多数の部分がブ
ラックボックス化されているうえに、銀龍の付属兵装である460ミ
リ超電磁投射砲…あれは動かすのに少なくとも小型の原子力発電並
の電力が要る。にも関わらずそれらしき発電機も、それに相当する大
容量バッテリーも、設計書の隅から隅まで確認したが確認されなかつ
た。」

おまけに銀龍の設計、開発担当は「貴様ら（タカ派）」と来た。

…詳しく教えて貰えるか？」

「断つたら？」

「喋りたくなるように全身を刺身にしてやる」

「ははは」

「…まあそれは冗談だが、仮にも私は銀龍の配属されている部隊を仕
切る現場指揮官だ。知らなければ不味いことだってあるだろう。」

…それとも、言えないのか？」

光は、やはり威圧するように言う。

…タカ派の連中が絡むとロクな事がないから。

「…そうだな…アレに関する事、だろうか」

第4格納庫の機械の龍に、顎をしゃくりながら誠は応えた。

「アレ？」

「…ふむ。まあ、もつと具体的に言うなら、あの機械の龍と、墨田区で確認された核に変わる可能性のある存在…だな」

瞬間、光は目を見開く。

墨田区で確認された存在…それはつまり、異界から流れ込んだ泥に混じっていた、強大なゴジラの生体エネルギーである、G元素という未現物質だった。

そして機械の龍も異界からこちらに零れ落ちた、異端の存在。だが人には制御出来なかったのだ。

だが“人間でないもの”であれば？

あるいはその、G元素を用いれば？

「お前、まさか…」

嫌な予感が光の胸をよぎる。

つまりこいつらは、眼下に見える龍以外にもG元素を用いた兵器の開発に着手している可能性が、ある。

そしてそれを光が語らずとも察したからか、誠は肯定するように、笑う。

「お前、G元素がどんなに危険なものか分かっているのか？」

G元素を用いれば原子力発電並の電力なんて簡単に手に入る。しかも原子力発電所程の容積を取る必要もなく。

多分、銀龍や460ミリ超電磁投射砲のブラックボックス化されている動力源は、G元素を用いたジェネレーターか何かだ。

だが——それは同時に毒でもある。

G元素に汚染された地域は草木の植生が進みにくくなり、長期的にその地域にいる人間に何かしらの健康被害を、及ぼす。

つまりG元素を含んだ泥に汚染された墨田区は——今ある、特務自衛隊墨田駐屯地は、そのG元素の影響を調べる為の、壮大な“人体実験の舞台”なのだ。

人体実験の被験者は八広駐屯地勤務の自衛官やモナークの職員…その中には当然、光やアイリ、そして誠も被験者に含まれていた。

G元素による、大量殺戮兵器の開発を阻止する為に。

「知っているとも。この、かつてG元素に汚染された墨田区跡地に作

られた八広駐屯地勤務の、お前や俺を含めた人間を人体実験の被験者にして得られたデータから危険性は充分理解している。」

「なら——」

「だがそれは日本が破滅後の世界で生き残り、国際的地位を維持するのに必要な犠牲だ。」

「っ——！！？」

つまりそういう事だった。

G元素を用いた装備も含めた実力で国土の安泰を図り、“ここ（墨田駐屯地）”でしか取れないG元素やその他の資源エネルギーで経済の安定も図る。

…まず、破滅後の世界で予測されるのは、厄災そのものである“奴ら”の襲来と、奴らの中東占拠による資源…すなわち石油などの化石燃料の高騰化や輸入途絶だ。

今の時代、人類の大半が石油に依存しているのに、それは最悪のシナリオだ。

そうなれば世界経済が壊滅的打撃を受けかねない。

だから、G元素や現在開発中の領海内に豊富にあるメタンハイドレートによる発電などによる経済安定を図り、圧倒的経済を用いて、日本が世界を支配する事さえ、アメリカの犬だった日本がアメリカの飼い主になる事すら、破滅後の世界なら容易いはずだった。

そしてそれを、こいつは、誠はやろうとしている。

…だが、

「私たちに、それだけの時間があるとでも？」

眼下にいる龍を直すのにだって3年かかり、兵装開発に2年かかり、G元素の研究は進めていても、G元素のジェネレーターを大量生産する予算も時間もないはずだった。

「…正直に言うと、無いな」

後頭部の髪をガシガシとかきつつ、つまらなさそうに、言う。

嘘偽りの無い顔で。

「時間までは、我々タカ派に味方してくれなかったよ。良かったな。G元素の危険性を国連に訴えられる猶予ができて」

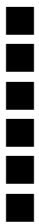
「…ふん」

「ところで、頼みたい事がある。」

誠がそう言った瞬間、光はそちらを見る。

誠が——タカ派の代表がハト派に頼み事とは珍しかったから。

「…来週のロリシカ派兵に、篠ノ之千尋2士と篠ノ之箒1士を加えた
い」



八広駐屯地前

光は誠から一通り聞かされた。

内容は『銀龍の実戦テストと荒吹壱型丙の寒冷地テスト』だった。

危険だが、あちらには、まりもとその部下、そして家城燈一尉が同行するから、おそらく大丈夫だ。…恐らく。

…学園守備隊に穴が開くのはキツイが、さすがに先の侵入者事件からしばらく経つのだ。

いい加減、教師部隊も動くだろうということでした承してしまった。

…本当はロリシカには行かせたく無い。

あそこは今のIS学園が襲撃を受けた時より数万倍危険な場所で、場合によっては精神崩壊しかねるような、血みどろの凄惨で陰鬱な事態に出くわす場合だつてある。

千尋や箒を想えば、そんなモノは却下だ。

だが、しなければ破滅後の世界を生き残ることのできる望みが極めて低くなる。

そうなれば元も子もない。

…だから、引き受けるしかない。

——ああ、胃が酷く痛い。

ふと、目の前を見る。

そこに居たのは——

「なんだ、楯無か」

学園の生徒会長であり、簪の姉であり、暗部の当主である更織楯無

だった。

「なんだとは何ですか？ 迎えに来てあげたのに」

むー、と膨れながら、楯無は抗議する。

「悪かったよ」

「それで、やはり2人を派兵するんですか？」

光と誠の会話を聞いていなかった楯無が言う。

だが、光はすぐに察する。盗聴器を付けたのだ。こいつは。

いつ？

今日、この駐屯地に向かう際に学園内ですれ違ったことだろう。

「どこにつけた？」

「ドイツの太腿あたりに。仕組みは引っ付き虫と同じで……」

楽しそうに楯無が言うが、

「盗聴マニアが。」

くだらなそうに光が言いながら、太腿から盗聴器を外して、指で握り潰す。

「……まあ、途中からしか聞き取れなかったんですけどね……千尋さんと箒さんの派兵案のあたりからしか……」

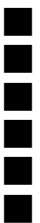
重要機密の会話を盗聴した楯無を、状況によっては光にとっては避けたい催眠暗示で楯無の記憶を消す事も考えたが、どうやら誠側は盗聴器の存在を察知し、ジャミング波を放って盗聴を阻害したらしい。

「……で？ どうするんですか？」

「……上から圧力掛けられたら仕方ないだろ。……行かせたく無いのは、……山々だが」

光はそう言う。

「はあ……情けない。……子供を戦場に送り出す自分が、情けないよ……」
どうしようも無いくらい、嘆くような声音で、光は言った。



千尋は自室の畳の上に転がりながら考え事をしていた。世界の破滅とは、どのようなものなのか。

そして、今はどれくらい破滅が進んでしまっているのか。考えても仕方ないが、どうしても考えてしまう。

今は4月下旬。

今年世界が破滅するとしたら、仮に年末に破滅するとしたら、もう、半年しか猶予はないのだ。

なのに、

「平和すぎる…」

思わず、呟く。

今年世界が破滅する割には、前兆らしい前兆が、千尋の確認できる限りでは全く確認できないのだ。

もしかしたら世界は破滅しないんじゃないか？とすら思えてくる。

でも、なんとなく、予感というかなんというか…本能的な何か、危険が迫っているようなことを、告げる。

「はあ…」

溜息をつきながら、適当に買ったスナック菓子を食べる。

ふと、床——畳に視線を落とす。

そこで、異変に気付く。

…こここの畳だけ…新しい？

基本この仮設生徒宿舎の床は中古の畳なのだが、千尋が座っているところ——ちやぶ台の前の一枚とちやぶ台真下の畳だけが、

新品になっていた。

もちろん、初めて来た時は、全て中古のボロだった。

なのに、

いつからだ——

畳を見つめながら、千尋は思う。

いつから、変わってた？

疑問が浮かぶ。そして、千尋は、畳を捲る。

そこには、コンクリートに染み付いていた、小さな血溜まりがあった。

「何だよ、これ…」

千尋は呻く。

「ただいま帰りました…あれ、千尋？」

そこに、舞弥が帰ってくる。

舞弥は、畳を捲っている千尋を見て、状況を察する。

「…なあ、舞弥、教えてくれ」

千尋が、獣のような、獰猛な唸り声をあげそうな声で、言う。

「こいつは…誰のだ？」

畳の下にある血溜まりの跡を見ながら、横目で舞弥を見て、聴く。

「…お教えできません」

舞弥は顔をしかめながら、困った感じの顔をして、言う。

「…なんでだ？」

「千尋には言わないように、と頼まれています。」

「頼まれている？命じられている、じゃなくて？」

「ッ———！！？」

千尋が聞いた瞬間、舞弥はしまった———という顔をする。

頼まれている。命じられている、ではなく頼まれていると、舞弥は

言った。

基本、光や上官などから物事を言われた場合は、命じられている、と

舞弥は言う癖がある。

けれど今は、頼まれている、と言った。

つまり、光や上官以外に言われた。

そして、多分その相手は、この部屋に關係する人間では、多分——

「…箒姐、か？」

千尋が聴く。

舞弥は、沈黙する。

多分、肯定だ。

「なんで、黙ってたんだよ…」

千尋は、震えながら、聴く。

「…千尋に、心配を掛けなくなかったからだそうです」

舞弥が言う。

そして、これ以上黙っていても無意味と判断したのか、千尋が問い詰める前に、その日あった詳細を、話してくれた。

箒が吐血したこと、箒のシミの状態が悪化しつつあることを。

「また…また、我慢してんのかよ…箒姐は、また自分だけで背負い込んで…それに俺は、また気付かなくて…」

聴き終わった千尋は、拳を震わせて、指を掌に、血が出るほど食い込ませながら、言う。

苛立ちが、千尋の脳内を支配する。

ずっと自分だけで背負い込んでいる箒に、それに気づかなかった自分に、苛立ちを覚える。

「ただいま…え？」

そこに、箒が運悪く、箒が帰ってきてしまう。

舞弥が、

「すみません、箒。その…バレてしまいました…」

申し訳無さそうに、言う。

「箒姐…話がある。…舞弥は外してもらえるか？」

そういうと舞弥は出て行き。箒と千尋はちやぶ台を挟んで対面する形で、座る。

「…大体は、舞弥から聞いた」

「…そうか。」

「箒姐は、俺に心配かけない為に、黙ってたんだよな？」

「…ああ。…余計な手間をかけさせて、悪かった」

ひどく申し訳無さそうに、箒は言う。

「——っつ!!?そうじゃねえだろ!!?」

瞬間、千尋の中でこみ上げてきたモノが、爆発した。

箒は、思わず、呆気に取られる。

「俺が知ったら心配する?当たり前前だろ!!?“箒”は俺の家族だから、何かあったら心配するに決まってるだろ!!?」

思わず、千尋は怒鳴る。

「…それに、なんでいつも自分だけで背負おうとするんだよ?なんで、

俺とかに相談しないんだよ？」

「だ、だって他の人に余計な迷惑をかけると思つて…自分のせいで誰かに迷惑がかかるくらいなら…」

瞬間、箒の脳内にある光景がフラッシュバックする。

大勢の人が死んだ、いや、その内の何人かは箒が見捨てた、墨田大火災の、光景。

自分のせいで誰かが不幸になるなんて、そんなことは許されない。だから私の問題は私で解決しなきゃいけないんだ…例えそれが、他人の助力なくして解決出来ないことなら、自分を犠牲にすることで周りの人間を不幸にならないのなら、それで大丈夫だ。

箒は、そう、思考する。

「それに、私には他人に余計な心配してもらう資格なんてないから…」
「くくくツ!!?もう、ほんつとに頭きた!!?」

箒の発言を受けて、千尋は、さらに怒りのボルテージが上がる。

ちやぶ台に身を乗り出して、箒の顔の目の前に人差し指を突き出して、注意するような姿勢になって、

「自分からいつも焦点をはずし過ぎなんだよ箒姐は!!?」

「え、いやちよ…」

「うるさい口答えするな!!?…なんで箒姐は自己犠牲的なんだよ…!!?」

その理由は、知っている。

墨田大火災の経験によつて患ったサバイバーズギルトが原因だ。

だがそんなこと言つたら箒姐の事を頭がイカれてる奴、なんて言つてるようなもんだし…実際そうなんだろうけど、ストレートに言うのは…どうしたらいいんだよ…。

千尋はそう思う。

実の所、こうして千尋と箒が言い合いをするのはこれが初めてではない。

これまでも2人が、というか千尋が箒を叱責するのは、よくあったのだ。

これほどにまで千尋の怒りが上昇したのは、初めてだが。

「だ、だから」そんな程度の事」で、別に怒らなくても…」
「ああ、もう………はあ…」

そして、沸点をアツサリ超えた千尋がオーバーヒートして疲れて呆れ返る事で、いつも終わるのだ。

「その…すまない」

「…よし、決めた」

「え?」

「明日絶対に『箒』に参ったって言わせてやる!!?」

「え?え?あ、えつと千尋?まさかいつかの続きを?」

「ああそうだよ!!?飛びつきりスペシャルな味あわせてやるから、覚悟しとけ!!?」

そう言つて、千尋はまだ若干、イラつきながら、部屋から出て行つた。

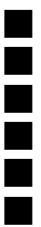
「…すまない………」

千尋が出た後、箒は、ポツリと呟く。

「私、ダメな姉だよな…うん。知ってるよ、千尋…でも、さ…」
ひどく寂しそうに、呟く。

「でも…私自身の幸せなんて、願っちゃ、駄目なんだよ……他人を見殺しにした、私なんかは………駄目なんだよ…」

嗚咽を漏らし、涙を流しながら、箒は誰もいない部屋でただ1人、呟いた。



第2シャフト・廊下

ガンツ!!?

人通りの少ない廊下に、鈍い音が響き渡る。

「はあ…何してんだよ…俺………」

千尋が壁に額を打ち付けている、音だった。

「クソが……」

…箒姐に…怒鳴ったところでどうなるんだよ…なんも変わらないだろうが…むしろ箒姐を追い詰めちゃうだけじゃねえか…何してんだよ…俺は。

千尋は、そう思う。

箒があんな状態じゃ——自分を犠牲にする事すら厭わな
いままじや、いつか死んでしまう。

…自分が守りたい、一緒に居たいと願った、家族なのに…何もして
やれない。箒は自分が負担することしかしなくて…自分はどうすれ
ばいいのか、分からない。

自分なりに頑張ってはいるが、どれが正解なのか…どうするのが正
解なのか…

「クソツ!!?」

ガアンツ!!?

千尋は再び額を壁に叩きつける。

額の皮膚が裂け、鉄味の、生暖かい、血が流れる。

「…:…:…:…:…:…:」

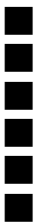
でも多分、箒は、この、何倍もの痛みを抱えているのだ。

今は、自分なりに箒を支えるしか、ない。

世界の破滅も迫っているのに、すっかりしなくてどうすんだよ馬鹿

野郎——!?!?

千尋は、額の血を拭いながら、自問した。



学園・生徒寮

「織斑くんクラス代表おめでとぅ〜」

クラス代表に“多数決”で決まった織斑は、1組の女子たちから、
クラス代表決定の祝杯を挙げられ、絶賛ハーレム状態だった。

その、織斑と織斑を取り巻く女子たちを影から見ている、女子がい
た。

2組クラス代表、鳳鈴音が。

…私は…お呼びじゃないわよね…。

そう内心思いながら、引き返す。

…一夏は、幸せそうだった…:…:…:幸せそうだった…:…:…:本当に、女に囲ま

れて幸せそうだった……。

そうだよね。私みたいな女なんて……私ミタイナ、穢レタ女ナンテ。

瞬間、記憶がフラッシュバックする。

賀に乱暴に犯されて処女を奪われて孕まされて墮胎させられた事、ハニートラップの一環で中年オヤジや歳80の老人や同い年ぐらいの同性に抱かれた事。

唇と唇を合わせられ、舌を差し込まれ、相手と自分の唾液を絡めさせて、理性が、腐っていく感覚が鈴の脳裏に浮かんだ。

「ッ!!??うっ?!!??」

強烈に上がってきた吐き気を堪えながら、鈴は近くのトイレに駆け込み、便器のフタを乱暴に開け、顔を突き出し、

「う、えっ……うおええええ!!??」

胃袋の中身を、便器の中に吐き出す。

そうする事で忘れようとする。

賀にレイプされた過去を、ハニートラップの為に体を汚したことを、反体制派の人間を強制とはいえ殺したことを、胃の中の吐瀉物と共に吐き出し、忘れようとする。

穢れた自分を、洗い流そうとする。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

気がつけば胃袋の中身は空になり、唾液に胃酸が僅かに混じる程度になっていた。

「大丈夫……大、丈夫よ……あたし、は……あたしは、一夏に見てもらえるようになって、母さんも取り、戻して、あの頃の幸せに、戻るん、だから……あふ、ふふふ……ふふ……」

半ば壊れかけた声音で、鈴は呟いた。



ロリシカ軍。

ウエスト・コムソモリスク・ナ・アムーレ統合基地。

食堂。

そこに、ユーゲンとリーナは居た。

「あの…」

リーナがユーゲンに声をかける。

「何ですか？・伍長？」

ユーゲンがメニューのクリームシチューとパンを食べながら、聴く。

「…お昼の、出撃は…？？」

「幸い砲兵や駆逐艦、爆撃機で殲滅できました」

昼間のバルゴン襲撃に少し怯えた様子のリーナに、ユーゲンは安心させる為か、微笑みながら、言う。

実際、バルゴンはアムール川東岸にあるイースト・コムソモリスク・ナ・アムーレ統合基地とウエスト・コムソモリスク・ナ・アムーレ統合基地の戦力で挟撃する形で殲滅できた。

今2人が悠長にクリームシチューやブリヌイを食べていられるのは、そのおかげだった。

「明日はこの基地の見学をします。結構広いですし、寒いですから暖房着は必須ですよ。」

「あ、はい!!？」

なんて、会話を交わす。

「あ、あの…」

「はい、何でしょう？」

少しして、リーナがユーゲンに、
「ストラヴィツキー軍曹は、好きな方とかいらっしやるんですか？」
なんて聴く。

すると、何か言いにくそうな顔をする。

「あ、えくとまた…急にどうして…？」

「いえ、気になったので…」

「……………そうですね…好きな娘は…いたことは、居ました」

どこか、黄昏た様な顔をして言う。

「徴兵された時から同期で…ちよつと勝手だし、お馬鹿だし、人の話は

聞かないし…でも、優しくて、可愛い娘でした」

「…今は…お別れになられたんですか？」

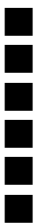
リーナの問いに、ユーゲンは首を横に振り、すこし、悲しそうな笑みを浮かべて、

「2年前のバルゴン侵攻時に脚を潰されて、『私がいたら、足手まといになっちゃうから…貴方は生きて…』…そう言つて、自分の目の前で、彼女は、”自分の頭を自分で撃つて”、自決しました」

その、予想していたものより遥かに凄惨なその、ユーゲンの恋人の最期に、リーナは思わず絶句する。

「…：”そういう事”は、よくあるんです。”ここ”（戦場）”では”やはり、悲しそうな笑みを浮かべながら、言う。

そして、そのユーゲンの恋人の亡骸が転がっているであろう、食堂から見える広大な雪原は、ただただ、静寂に満ちていた。



IS学園・第2シャフト・仮設宿舍

箒は、やはり寝付けないまま、布団の上で体育座りをしていた。

千尋にあれだけ怒鳴られるのは、初めてだったから、すこし驚いてしまった。

その、当の千尋は、気持ちよさそうに布団で寝ているが、時々うわ言として、

「箒姐…ごめんな…怒鳴つてごめんな…」

そんな声が聞こえて来る。

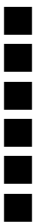
「ごめんね…千尋…」

…情けない。

自分のせいで千尋にまで負担をかけさせてしまっている…そんな自分が情けない。

「私が…すっかり、しないと…」

箒はそう、呟いた。



特務自衛隊・第7研究室

「状況はどうだ？葵」

そこに誠がいた。

葵と呼ばれた、白衣を身にまとった女性技術士官の女性は、畏ま
て、

「は。以前、G元素との調合が難しい為、もう少し時間がかかりそう
です。」

少し、残念そうな顔を葵はする。

「ですが2ヶ月経つまでには完成する見込みです」

「ほう…それは楽しみだ」

それを聞いた誠は満足そうな、狂気を孕んだ顔をしながら、ソレ、を
見る。

奇妙な機械に繋がれた、砲丸ほどの大きさの球体を。

この世界にあってはならない、大量殺戮兵器を。

【酸素破壊剤《オキシジエン・デストロイヤー》を。

IS学園・グラウンド。

そこにはISスーツ：見た目は今風のスク水だが…を着た1組と2組の少女たちと織斑、そして、露出全開のISスーツとは対照的な、航空自衛隊の戦闘機パイロットが着るような、耐G機能を備えたツナギのような外見のフライトスーツに、籠手型やブーツなどに装甲ブロックの着いた、戦略機やISのダウングレード版である強化装甲殻を操縦する際に着る：一応ISの操縦も可能な、09式強化装備服（特務自衛隊仕様）を着込んだ第2学園守備隊の面子：千尋たちが整列していた。

「これより1、2組合同の実習を行う」

織斑千冬が、号令をかける。

「まずはISの飛行訓練を行う…と、同時に特務自衛隊の強化装甲殻・18式打鉄改二の訓練も行う」

続けて言う。

強化装甲殻は間接思考制御やスレイヴ方式で操作する、構造自体はISとそう変わらないため、ISとも訓練はできる。

違いがあるとしたら、それはISコアを使っていないために、PICがなく、燃料増槽内蔵型の跳躍ユニット、さらには予備増槽なしには、飛行が出来ない上に絶対防御が無いため、基本的に90式戦車のセラミック複合装甲で装甲は作られているし、何より装甲が更に追加されている。

元々ISとは違い、“純粋なパワードスーツ”として作られた事、生産コストを安価にする事、管理を厳重化して盗難を防ぐ為に拡張領域も、飛行能力も、量子変換して携帯するという能力も切り離して、作られた代物だった。

もつとも、千尋たちが使う予定の18式打鉄改二は自衛隊の使う、装備であるが故に軍事仕様で、腕には12ミリバルカン砲まで内臓されている他、対IS用に、強化された跳躍ユニットのスラスタを用いた高機動やセンサーの強化が施されたチューン（改造）型だ。

ISより、確かにカタログスペックでは劣るが、ISより安価に生産でき、ISよりパイロット候補は多く補充も効くし、何より性別でパイロットを選ばない。

以上の理由で各自衛隊や各国軍に配備され、ここIS学園の警備課で最も多く使われているのが、ISではなくこの強化装甲殻だった。

：それでもISよりカタログスペックで劣る為に、結局はISに乗りたがる輩が多い…というのが現状だった。

というか女にとってはISより格下の強化装甲殻に乗る奴は落ちこぼれ、と認識される ケースが多かった。

致命的欠陥が多過ぎるISと比べれば、性能は劣るものの、機能は充実し、安定している強化装甲殻の方が、“現実的に見れば”、良いと思うのだが…。

「強化装甲殻操縦者の皆さんは装着準備にかかって下さい!!？」

強化装甲殻の教導担当である、山田真耶が言う。

強化装甲殻はISのように量子変換ができない為に、展開能力の即応性も、ISに劣る。

現に彼方では千冬に指名された織斑が、

「はい。白式」

先日政府から支給された専用機・白式を、2秒足らずで展開する。

一瞬、織斑がドヤ顔をして、女子が黄色い悲鳴を上げるが、

「遅い。熟練のIS乗りなら1秒とかからず展開できる」

千冬がその、少し調子に乗っているような織斑に切り込むように言い、隣の鈴が自身の専用機・甲龍を纏いながら何処か、織斑を射殺するような目線を、向ける。

「な、なんでそんな目で見てるんだよ？鈴?」

射殺するような目線には気づくが、持ち前の鈍感スキルのせいで、何故なのかは、気付かない。

「…知らない」

それに、鈴は膨れる。

「さっさと上がれ、2人とも」

「あ、はい!!？」

織斑の白式と鈴の甲龍が、飛翔をはじめた。

そうしていると千尋とセシリアが打鉄改二を纏う。

：言い忘れていたが訓練用の強化装甲殻は今は2機しかない。

一介の生徒に全員分の訓練機を用意する必要はない。時間配分を考えて使いませばいいだけだから。

「ではまず、短距離跳躍を行って、そのまま滞空して下さい」

真耶が、指示する。

短距離跳躍とは、まあ簡単に言えば、ある程度の高度まで、跳躍ユニットを吹かして一時的に舞い上がる事だ。

もつとも、飛ぶわけじゃないから、これは起伏の多い地形の場所で、激しい段差を乗り越える為の動きだ。

飛行することもできるが、それをすれば機体の推進剤がすぐ無くなってしまう。

千尋とセシリアは真耶の指示された通り、跳躍ユニットを吹かして、ジャンプする。

「オルコットさんスラスターを吹かし過ぎです!!?もつと抑えて!!?」

「は、はい!!?」

スラスターを吹かし過ぎのセシリアに、真耶が怒鳴る。

あまりスラスターの推進剤を使い過ぎてしまつては、後から訓練を行う奴らの分の推進剤も消費してしまうから。

一応、給油車両が待機しているから推進剤はすぐ補給できる。

だが補給するにも時間がかかる。

そうすれば他の者たちの訓練時間を削ってしまう。

1人のミスが全体に影響する。

戦略機のシミュレーター訓練の時と同じだ。

千尋は戦略機で慣れているからスラスターの調節は朝飯前だ。

とは言つても、スラスターの出力調整には神経を集中させられる。バランスを崩せば、重力に引かれて即落下。

運が悪ければ頭から真つ逆さまに落ちて、首の骨を折るか、頭そのものが、潰れる。

さらに運が悪ければ、跳躍ユニットのスラスタアの炎が増槽タンクの推進剤に引火して爆発：そして周りの奴らも巻き添えを食らって、死ぬ。

ISとは違ってPICがない分、かなり、気を配らなくてはならないのだ。

女子がISに乗りたがる理由が、分からない訳でもない。

「…はい、2人とも降りて来て頂いて良いですよ」

真耶が、言う。

千尋もセシリアも、スラスタアの出力を徐々に下げていき、地面に、脚部ユニットの底をつける。

「…ふう…」

「はあ…はあ…」

千尋は溜息をつき、セシリアも緊張で息を止めていたからか、酸素を取り込む。

「…な、なかなか神経をすり減らしますわね…コレ」

セシリアが、息絶え絶えの状態で言う。

体力を使った訳ではないが、呼吸を止めるくらい集中していた為に肺に二酸化炭素が溜まりに溜まっていたのだ。

「そりゃあな…戦略機の操縦とやり方は同じでも、大ききとか装甲の強度とか用途とか、全然違うから、神経すり減らすよ」

千尋がそれに答える。

「オルコットさんは少し推進剤を無駄に吹かし過ぎですね…篠ノ之くんは推進剤には問題はありません。ただ時々バランスを崩しそうになるので、注意が必要です」

真耶が言う。

強化装甲殻は戦略機みたいに機体のバランス制御用の補助スラスタアなんて贅沢なモノはない。

だから、跳躍ユニットのみでバランスを取らねばならないのだ。

千尋は戦略機の補助スラスタアで姿勢制御することに慣れているため、跳躍ユニットのみでバランスを維持するのは、未だに難しかった。

もつとも、ISのように飛行や滞空を目的としないから、今回の訓練内容は不要と言えれば不要だが、知っていて損はない。

いざという時必要になるかもしれないからだ。

「2人の反省点は以上ですね。次回には、克服できるように頑張ってください!!?」

笑みを浮かべながら、言う。

「はい」

「では2人とも強化装甲殻を解除し…!!?」

真耶が言いかけるがそれを遮り、空の方を見上げる。

IS実習の方だ。

「ちよ、どいてくれええええ!!?」

情けない声を出しながら降下…:というか、あろうことか減速せずに加速しながら、白式を纏った織斑が落下してくる。

瞬間、

「皆さん伏せて!!?」

真耶が強化装甲殻の実習組の面子…:第2学園守備隊の生徒に向けて叫ぶ。

神楽は反射的に伏せ、簪は本音が押し倒して覆い被さる形で伏せ、箒は近くにいた真耶が背中を押して、伏せさせた後、真耶が庇うように覆い被さる。

セシリアと千尋は跳躍ユニットで距離を取ろうとする、が、直後、凄まじい爆音と共に織斑は地面に激突し、地面が抉れ、衝撃で地面から幾つかの破片が曲線を描きながら飛んで来る。

しかもその先には、箒と真耶が、いた。

「!!?・クッソ!!?」

瞬間、千尋は強化装甲殻の跳躍ユニットを全力で吹かし、地表高速移動をして地面を滑るように移動して、箒と真耶の前方に立ち、腕をX字に交差させて、破片を防ごうとする。

瞬間、銃弾並みの速度で飛んで来た大きさ2メートル、暑さ30センチの破片が腕に直撃し、装甲を通して、衝撃が浸透し、腕に鋭い痛みが走る。

千尋はそれに顔を顰めるが、直後に飛んできた大きさ20センチ、暑さ6センチの破片が、千尋の頭部に直撃し——強化装甲殻の中でのいちばん装甲が薄い頭部装甲を抉り、千尋の左目の瞼から額にかけて、皮膚を切り裂く——と同時に衝撃が脳を揺らし、皮膚を裂かれる鋭い痛みと脳震盪による鈍い痛みが千尋を襲う。

「ぐっ…」

一瞬、後ろに倒れそうになる。

だが、切り裂かれた額の傷口に涼しい風が当たり、それが脳を刺激した事と、自身の犬歯を唇に食い込ませて出血させた痛みで脳を刺激し、意識を安定させて、耐える。

「ツ……は、あ、くそ……痛っ……てえ……」

千尋が、前のめりになりながら、痛みで顔を歪めて呟く。

…当の織斑はというと、地面に深さ3メートルの大穴を開けながらも、無傷だ。

ISの絶対防御さまさま、といったところか。

対する強化装甲殻はというと、千尋の打鉄改二が腕部被弾及び左腕内出血、頭部装甲破損及び頭部裂傷・出血。

見れば、セシリアの打鉄改二も後方の給油車を守る為に盾となり、左肩部を損傷・左肩脱臼。

という有様だった。

防御装備の追加装甲シールドが有れば、少しはマシな損害だったろうが、まさか入学試験で教官を倒した織斑がこんな事態になるとは予想だにできなかった為に今の打鉄改二には、装備は近接短刀しかなかった。

しかも落下した地点や角度が原因で、破片の大半が強化装甲殻側に飛んできていた。

IS実習組にも破片が落ちてないわけではないが、大半が当たってもほぼ無害なサイズや、千冬が打鉄の刀で撃墜していた。

「織斑くん大丈夫〜?」

女子たちはそんな風に気楽な声で大穴を開けた織斑に話しかける。

「誰が大穴を開けると言った、馬鹿者」

千冬は周りの女子がいるからか抑えているが、顔には明らかな怒気を孕んでいた。

「…つたく、なんでこんなにも分からないのよ…こんな感覚で出来るでしょう?」

鈴が言う。

「いや、あはは…まさかこんなになるとは思わなくて…」

織斑は、ヘラヘラ笑いながら、応じる。

瞬間、真耶がどいた事で起き上がって、IS実習組の一連の会話を見た箒は、寒気を覚えた。

…異常だ。あまりに異常だ。

箒は思う。

今、人が死にかけたのに、実際、大怪我をした人がいるのに、なんだ、彼奴らの態度は——

女にとって落ちこぼれ扱いの強化装甲殻の実習組には目もくれず

——いや、何人かの、「数える程度の女子」はこちらを心配げに見ている。

だが、助けようとはしない。

織斑千冬の授業だから、行きたくても行けないから。

「…狂ってる」

ISの絶対防御やPIC、IS不敗神話や女尊男卑に感化された女子たちを、『兵器を扱っている自覚の無い人間』を見ながら、箒は吐き捨てた。

「2人とも大丈夫ですか?!?」

真耶が千尋とセシリアを交互に見ながら、叫ぶ。

真耶は千尋にかかり、セシリアは後方に待機していた衛生兵がかかっていった。

…もう、訓練どころじゃない——!!?」

真耶は内心叫ぶと、千尋の打鉄改二を、駆け寄ってきた工兵と共に、手慣れた作業で外し始める。

セシリアの打鉄改二も、衛生兵について来ていた工兵が外し始める。

幸い、フレームが歪むほどの損傷は無かったため、あつさり外す事が出来た。

「皆さん、2人を保健室まで運びます!!?篠ノ之さん、四十院さん、手伝って下さい!!?」

「あ、了解!!?」

「了解!!?」

真耶が箒と神楽に言う。

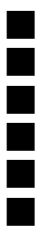
「すみませんが更識さんと布仏さんは整備や工兵の皆さんと強化装甲殻の回収を!!?彼らの指示に従って下さい!!?」

「あ、は、はい!!?」

「り、りよくかい…」

真耶は、キビキビと指示を下す。

そうして千尋を真耶と箒が担ぎ、セシリアを神楽が担ぎながら、保健室に運んでいった。



IS学園・保健室。

今日は学園の保健室にいる教師が急遽都内の病院に行っているため、医師免許を持つている真耶が治療に当たっていた。

「良かった…傷も浅いです。縫う必要は有りませんね。絆創膏をして、その上から包帯を巻いたら大丈夫です」

千尋の傷を手当てしながら、真耶が言う。

消毒する時に千尋は傷口に染みるために涙目になって顔を顰めるが、我慢して下さい、と真耶に言われて、ジツとするしかなくなる。

「…随分慣れた手つきでしたね…」

神楽が真耶に言う。

「ええ。今回みたいなのでは有りませんが、強化装甲殻の訓練中の事故で負傷した人を、フレームを剥がして治療した事は、たくさんありますから。」

真耶が神楽に応える。

「…当然、私の手の中で事切れてしまった人もいます」

真耶は少し哀しそうな顔をして、言う。

「私が手を伸ばすより前に亡くなった人も……います」
泣きそうな顔をして真耶は言う。

「……」

全員が沈黙する。

つまり彼女は、そんな地獄を、本来の兵器の恐ろしさを見てきたのだ。

救った命、救えなかった命、そんな様々な命も、見てきたのだ。

「……今回は、救えて良かったです……」

真耶はホロリと涙を流しながら、言う。

真耶も真耶なりに苦勞しているのだ。

千尋の手当てが終わると、今度は脱臼したセシリアの治療を始めた。

「わたくし……」

セシリアがポツリと言う。

「わたくし……ISがあんな危険なものだと、初めて知りました……」

そう、呟く。

「絶対防御があるから大丈夫だって……事故をしても大丈夫なんだって……でも、違っただんですね……ISを纏った人間は大丈夫でも周りの人たちは……」

先の事故を思い出したのか、セシリアは少し震える。

確かに絶対防御があればISを纏った人間の死亡率は低くなる。

だが周りの、生身の人間には既存兵器同様、被害が出てしまうのだ。

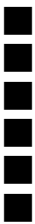
セシリアは、それを今回改めて思い知らされた。

いや、セシリアだけではない。

強化装甲殻の回収を指示された簪や本音、IS実習で数える程度だったが強化装甲殻の実習組を心配げに見ていた女子たちも、改めて知った。

「そうです。みんな、不思議な事に、絶対防御があるからって言うって周りの危険に配慮するという考えが麻痺してしまうんです……何故か……」

真耶は微笑みながらも、何処か憂う様な表情で、呟いた。



ロリシカ軍

マガダン統合基地

リーナ・ベシカレフ伍長は、ユーゲン・ストラヴィツキー軍曹に連れられて、基地内を見学していた。

：こんな小さい子に先導されるとなんか恥ずかしいなあ…。

リーナは、ふと思う。

それもそのはずだろう。

リーナは身長169センチ。対するユーゲンは身長160センチと、9センチも差があるのだ。

そして、今は戦略機ハンガーに、2人はいた。

先ほどは試しにシミュレーターを使わせてもらって戦略機の動きに慣れてから、実戦形式の訓練をしたところ、開始から僅か2分58秒で撃墜された。

思わずリーナは、何が起きたのか理解出来ずに啞然としていた。

原因は“高高度飛行”をしていたところにバルゴンの“大出力生体レーザ”を放たれて撃墜された事だった。

「…さつきはすみませんでした。低空飛行はロリシカの戦略機乗りの間では常識なので…つい、忘れてました」

事前に注意するのを忘れていたユーゲンが、謝る。

「…え？あ、いいんです軍曹。…それにしても、こちらにはISが1機もないんですね…代わりに戦略機や強化装甲殻ばかり…」

基本、ロシア軍の基地では必ず1機はいたから、逆にいない事にリーナは驚きだった。

「この国では、どの基地にもいないと思いますよ。なんせ『女しか乗れない』だの『無駄に高い』だの…それにロリシカにはISを導入して教育するだけの予算とかがありませんし…そもそも、アラスカ条約に署名してないからISを導入できませんし…」

ユーゲンがリーナに言う。

なるほど、それなら無理だ。

とでも言うような顔をしてリーナは納得する。

「…でも、これだけ危機的な状況にあるなら…ロシア軍だって助けてあげたって良いのに…せめて援護射撃に核ミサイルでも…」

リーナは何気ないように言うが、

「同志伍長!!?」

ユーゲンは叱責するような顔をして、叫び、リーナの言葉を遮る。思わず、リーナは黙ってしまふ。

リーナが周りを見ると、全員の視線が自分に向けられていた。

…まるで射殺すような、目で。

不穏な空気が、辺りを包む。

「え…?え、あ、あの…」

「おい貴様——」

困惑したままのリーナに、司令部勤務の士官が声をかける。

瞬間、ユーゲンがリーナの手を掴み、

「す、すみません!!?あの、彼女少し頭が可哀想な人で…」

「え、私頭がおかしくなんて——」

「しつかり指導しますから、ご安心ください!!?」

「お、おい待て!!?」

しかしその士官の制止を無視して、ユーゲンはリーナの手を掴んだまま、全速力で走りながら、ハンガーを後にして、兵舎に駆け込んだ。

同時にユーゲンは荒く息を吐き出し、深呼吸をして息を整える。

今の言動は、たちまち噂として広がってしまう。

池に投げ込んだ小石が、水面に波紋を広げるように。

間違はなく政務将校であるイリーナの耳にも入る。

そうしたらどうなるか——考えただけで頭がいたい。

「…ベシカレフ伍長」

「は、はい。」

「今後はロシア軍に増援を求める、とか核ミサイルを使う、とか言っちゃダメです。絶対に!!?」

ユーゲンは先ほどよりは穏やかだが、半ば脅迫するような声音で言う。

「ど、どうして—— た、確かにロシアは女尊男卑だし、ロリシ

カと仲は悪いですけどあんな怪物の存在を知ったら…それに、あの怪物に抗うにはそれなりの物量が…」

「ロリシカを救済という名目で占領し、併合される——どうせ、そういうオチです。これからは、そういうことを口にしちやダメです。特に人前では」

ユーゲンが言う。

…すると、廊下の向こうで、部屋の入り口で荷物を整理している少女とそれを冷ややかに見ている少女がいた。

ユーゲンは、そちらに向かう。

リーナはそれに疑問を浮かべるが、ユーゲンについて行く。

「一体、何をしているの？貴女は？」

冷ややかに見ている少女が、荷物を整理している少女に、問う。

「見て分かんないの？…あいつの遺物整理よ…手紙を書いて、あいつのご両親に届けるのよ……」

今にも泣きそうな顔で、少女——ヴェロニカ・ジトワ伍長は言う。

「随分と、ご苦労ね」

それに少女——ソフィア・ドモントーヴィツチ伍長が、冷たく言い放つ。

「…あんた、やつぱりおかしいよ…人って普通、死んだら悲しむのが普通でしょ!?!?悔しいと思うのが普通でしょ!?!?けどあんたは——」

ヴェロニカがソフィアに怒鳴る。が、

「悲しんだところでどうなるっていうの？何か変わる?」

ソフィアがやはり冷たい、それでいて侮蔑を含んだ声音で聴く。

「迷惑なのよ。あんなにあっさり死なれちゃ。無駄死にも良いところ」

長い銀髪に囲まれた、まるで氷像のように冷たい顔で、言い放つ。

「なに、いって——そんな訳ない!!?あいつは、ワシーリーは、私を助けて——」

ヴェロニカは声を震わせながら、涙を零しながら叫ぶ。

「だから、無駄死になの。ワシーリーじゃなくて、“あんたが死ねば良かった”のに」

「——ツツ!!?」

しかし、やはりソフィアがヴェロニカに冷たく、現実を言い放つ。「友愛? 仲間意識? お人好し? どうでも良いけど、無意味な死に方されちゃ困るのよ」

「…し、死んだ仲間を侮辱して…それでも同志なの!?!? 吊いの気持ち——」

「——ワシーリーを巻き込む形で殺したのは貴女でしょう? …僚機だった私にも非はあるでしょうけど、大体の原因は貴女じゃない。…責任転嫁するの、やめてくれる?」

掠れ声で言い返したヴェロニカを、ソフィアは無造作に切つて捨てる。

「——この際だからハッキリ言うけど、“戦争神経症”の貴女みたいな”頭の壊れた兵士”は邪魔なのよ。中隊の死傷率を上げるから」

「……あつ……うう……」

ついにはヴェロニカは泣きながら黙り込んでしまう。

「…少しは他の兵士を見習って、感覚を麻痺させて、生き残ることだけを考えなさい。でないとやっていけないわ…まともすぎるから貴女は、おかしくなるのよ」

ソフィアが言い放つ。

それと同時にソフィアがユーゲンとリーナに気付く。

ヴェロニカもソフィアの視線につられてユーゲンとリーナを見る。

ユーゲンはいつもの事だから、もう慣れた顔をしているが、リーナは、突然目の前で起きていた修羅場に呆然としていた。

「その子…補充の……う?」

ヴェロニカが涙を袖で拭いながら、ユーゲンに聴く。

「はい。…その、出身はロシアですが…」

ユーゲンはヴェロニカに答える。

すると、ロシア、という単語に反応したソフィアが射殺するような視

線をリーナに向ける。

それにヴェロニカが反応して、

「あんだ、今度はこの子を盾として使い潰す気じゃ——」

「——その言葉、そっくりそのまま返すわ。」

ソフィアに食って掛かるが、ソフィアはやはり、冷たい顔を一切変えずに冷たく言い放つ。

いつも、こんな光景だ。

ソフィアとヴェロニカは常に犬猿の仲で、メドヴェーチ中隊の隊長であるニコライも手を焼く程だ。

数秒の睨み合いと沈黙の後、ヴェロニカはソフィアを無視して、リーナに近付く。

「ごめんね。恥ずかしい修羅場見せちゃって……」

リーナは怯えながらも、聴く。

「あの、貴女もメドヴェーチ中隊の……?」

「そう、ヴェロニカ・ジトワ伍長。……最近は、お休みしてるけど……」

辛そうな笑みを浮かべて、言う。

すると、視界にBDU姿のリーナと、部隊古参人の1人であるエリザベータ・マツナガ曹長が視界に入った。

「ユージェン君、その子が補充の……?」

エリザベータが聴く。

「はい。マツナガ曹長……あと、自分を君付けで呼ぶのやめて下さい。子供じゃないんですから……」

「え……そんな事言われると、お姉さん寂しいなあ……で、リーナちゃんが良いかしら? 私はエリザベータ・マツナガ曹長。黄色人種だけど、れっきとしたロリシカ人よ。日系人の。名前は長いから、エリザ、で良いわよ。よろしくね。リーナちゃん。」

エリザは微笑みながら、言う。

「あ、は、はい!!?よろしくお願いします!!?」

リーナがエリザに言う。

「……さて、自己紹介は終わったな」

イリーナが言う。

「では本題に入る……貴様よくも我が軍の面子を潰したな!!?」
「がっ!!?」

イリーナはリーナの襟元を掴んで強引に引き寄せる。

「貴様の言動は扇動罪にも等しいぞ!!? 国家の敵とみなされたいのか
!??」

「そ、そんな…わ、私は…」

リーナは呆然としながらイリーナを見つめていた。

「バルゴンを倒すためにロシアの力を借りる? 何故私たちが、核兵器
や毒ガス、無差別爆撃で我が国の国民を大量虐殺するような国と――
―― 赤い帝国（ソヴィエト）の末裔」と手を組まねばならない
!??」

イリーナの激昂を誰も止めない。

普通のロリシカ人なら、これがロシア人に対する普通の反応なの
だ。

「で、でも…核兵器でも使わなきゃ、あんな怪物…」

「核だど!? 貴様あの悪魔の兵器を是とするのか!」

イリーナの怒りがさらに高まる。

「だ、だって、それでも使わなきゃ……それに、ロシア軍の物量があれ
ば……そ、それに自分が正しいと思ったことを主張して何が悪」

瞬間、乾いた音が響いた。

ソフィアが、右手でリーナの左頬を叩いたのだ。

突然の事に、全員が固まってしまう。

「え?…あ、あの、なん…痛ッ!!」

次の瞬間、ソフィアが左手の甲で右頬を殴りつけ、床にリーナは倒
される。

「…ロシアに手助けしてもらえるって…ホントに思ってるの? 貴女
?」

冷たく、見下しながら、聴く。

「そ、そうです!! 隣国の惨状を知れば、きっとロシアだって…がッ!!」
言い終わらないうちに、顔面にソフィアが蹴りを入れる。

「口先だけのガキって、嫌いな。それに、ロシアに従属しようとする

あんたみたいな危険思想の持主、ここで殺すべきかしら？」

「ツ!!同志伍長!!もういいでしょう!?!」

ユーゲンが叫ぶ。

リーナは先の蹴りで意識を失っていた。

「…ふん」

ソフィアはそっぽを向いて立ち去り、

「ちよつとあんた!!」

我に返ったヴェロニカがソフィアの後ろ姿に向けて怒鳴るが、完全に無視される。

「…少し熱くなりすぎたか…」

イリーナが後の祭りとなっている現状に頭を抱える。

どうやら本人はこうまでするつもりはなかったらしい。

「…ストラヴィツキー軍曹」

「……はい。」

「貴様なりでかまわんから、すまんがベシカレフ伍長に政治的指導をしてくれ…」

「……了解」

ユーゲンは応じる。

イリーナが先ほどのように熱くなり過ぎたこと、ソフィアが暴行を加えるまでロシアを嫌悪しているのは、理解はできる。

何故なら、2人ともロリシカの独立戦争時にロシア軍の攻撃で大切なものを無くしているから。

EP-07 同じ世界、違う人々

東京都・渋谷区

「…どうしてこうなった？」

箒は先が思いやられる顔で歩いていった。

そして目の前には楽しそうな千尋。

…千尋が楽しければいいのだが、何故自分たちが閉鎖的なIS学園を飛び出して、ハイカラで若者が跋扈する渋谷に来たかと言うと…話せば長いのやら短いのやら…。

箒は今まであったことを思い出す。

昨日、『織斑墜落事件』の後、理事長室に呼び出され、ロリシカ派兵の話が聴かされたのだ。

唐突だった為に千尋も箒も驚いたが、詳細な計画書を渡され、必要な道具を集める為に、休日を利用して買い物に出てきたのだ。

しかし、ここで以前言っていた、千尋の『飛びつきりスペシャルなの』を箒は食らう羽目になった。

いわゆる、リア充が跋扈する渋谷や表参道などのような賑やかな街に買い物に行く、と言い出したのだ。

箒はサバイバーズギルトのせいかそういう賑やかでハイカラな場所が苦手で、どうするべきかひどく迷ったが、千尋が箒のサバイバーズギルト克服の一環として、『女の子らしい休日』を過ごさせる為に渋谷行きの電車に乗りこまされてしまい、今箒はとてつもなく困惑していた。

「箒姐、ハチ公の陰に隠れてても必要な道具買えないよ。」

千尋が笑いながら、言う。

「ううう…そ、それは分かってる!!け、けど…。」

箒は赤面しながら辺りを見回す。

ハイカラな場所が苦手なのに、周りにはハイカラなものだらけだ。

「はあ…もう、しょうがねえなあ…。」

千尋が箒に近寄って、手を握る。

「ふえっ?。」

千尋に手を握られて、箒は酷くテンパってしまう。

「ささ、行こう行こう。」

千尋に手を繋がれ、引つ張られる形で箒は歩かされる。

この時も、赤面し、相変わらずテンパったままだ。

そして連れてこられた先は、

渋谷区のセンター街のランドマークとも言われるほど有名な、渋谷109デパート。

「こ、ここに入るのか？」

箒が聴く。やはり、困惑し、赤面している。

「うん。」

対する千尋は、さも当然、と言わんばかりに言う。

「か、勘弁してくれ…そ、それに必要な道具ならコンビニでだって…」

箒は言うが、

「水着は？」

ロリシカの基地は男女別の風呂を作れるだけの余裕がなく、水着着用の上で混浴となる。

「あ…ううううう…勘弁してくれ…。」

さつきよりも、赤面し、耳まで赤くしながら、言う。

「大丈夫。俺がついてるし、それにすぐ慣れるって。ほら行くよ。」

「あう。」

身長155センチの千尋に身長162センチの箒は連れられながら、109デパート内に入っていた。

「大丈夫だって、デートだと思えば。」

「余計緊張するわ!!？」

■■■■

水着コーナー。

正確にはスポーツショップだ。

まだ4月なのに水着コーナーがあるはずがないので、スポーツショップに2人は来ていた。

「わ、私はこんなんで良いだろう…」

箒は赤面しながら、スク水タイプの水着を手取るが、

「え〜もうちよつと派手なのにしたら?」

千尋が、自分の水着を手にしながら、言う。

「と、というか千尋もそれは勘弁してくれ! 見てるこっちが恥ずかしいから!!?」

箒が、小声で言う。

まあそれもそうだろう。

千尋が買おうとしていた水着は、緋色の、ビキニパンツ…いわゆる競パンというやつだったから。

今時はく男子はいないし、どことなく、見てると恥ずかしいから、箒は赤面する。

「え〜そうかな…海外じゃ普通って聞いたんだけど…それにぴっちりしてるし履きやすいし泳ぎやすいし。」

千尋は考え込みながら、言う。

「泳ぎやすいって…海水浴に行くんじゃないんだから…」

箒が呆れながら、言う。

だがそれで少し、箒の緊張が和む。

同時に、少しくらいオシャレなものを選んでも良いかな…という、感情が生まれる。

そして目に付いた水着を手に取り、

「こ…これなんて、どう、だ…?」

選んだのは、紅色の生地白いラインの入った、少し、渋めのブラとスカート付きパンツのビキニ。

それを、ハンガーに付けた状態で箒は自分の体の前にまわして、着たようにして、赤面しながら千尋に見せてみる。

「…あ」

瞬間、千尋の顔が赤くなる。

そして沈黙。

「ど…どうだ?」

千尋が黙ったままなので、箒は聴く。

「うん、すつごく可愛い。」

「?…ツ!」

顔を赤面させながらも、千尋は、ドストレートに言い放つ。

箒はさらに顔を赤くして、頭から湯気のような何かが噴き出す。

まるで、ゆでダコだ。

「じゃあ、それ買う？」

(コクコク)

千尋の問いに、箒は嬉しさと羞恥心から言葉が出ずに、ただ、首を縦にふる。

2人はそれらの水着を買いとスポーツショップを出た。

「次どこ行く？」

千尋が無邪気な、子供っぽい顔をして、楽しそうな声音で箒に聴いてくる。

あらかた買うべきものは買ったから、後は帰るだけだ。

だが、千尋はまだ帰るつもりではないらしい。

もう少し見て回るようだ。

「・・・これでは普通にデートではないか。」

苦笑いしながら、箒は呟く。

いつもなら、すぐ帰るところだ。

「デート・・・デート、か。」

楽しそうな千尋を見ながら、箒は、千尋との“デート”に付き合うことにした。



ロリシカ・ギジガ

派遣される自衛隊との合同作戦に備えて、マガダン統合基地からメドヴェーチ中隊はベルホヤンスク山脈の近くにある、ロリシカの第2首都にして、ロシア軍の核攻撃を受けた都市・ギジガの郊外にあるギジガ統合基地に移動していた。

その、市立ギジガ病院。

イリーナに連れられ、リーナは歩いていた。

「あ・・・」

リーナが、イリーナに声をかける。

「ギジガって意外と平和なんですわ・・・ロシアの核攻撃を受けたから

もつと荒廃してるのかと……。」

リーナの言う通り、窓の外から見えるギジガ市の街並みは、所々廃ビルがあり、シグクライミングクレーンが忙しく動き、街を復旧させている区画もあるものの、ほとんどが、整備された清潔感溢れるビルやマンションで構築されていた。

とてもバルゴンとの最前線にひとつとは思えなかった。

とはいえ、未だに残留放射能に汚染されている場所もあるらしい。

「……でも、それ以上に悲惨だったりする。」

イリーナが、言う。

それにキョトンとしているリーナに対して、

「……今日はわざわざ悪かったな。ついて来てもらって。」

イリーナが、苦笑いを浮かべて言う。

「はあ……あの、ここに何が？ 私に見せたいものがある、と聞きましたが……。」

リーナが聴く。

「……妹が居るんだ。24歳になるな。」

「お見舞い……ですか？」

「ああ……。」

イリーナのいつもキツイはずの顔が、母性を孕んだ人間味あるものになる。

イリーナをこんな顔にさせるといふ事はそれだけ大事な存在なんだろう。

どんな人なんだろう……気になるなあ……

リーナはそう思いながら、期待半分、不安半分の状態でイリーナに連れられて、病室に入った。

■■■■■■■■■■

2時間後。

イリーナとリーナは病院を出て、ギジガ統合基地まで歩いて帰っていた。

イリーナもリーナも無言だった。特にリーナに至っては顔面蒼白となっており、それだけの精神的衝撃を病院で受けていた。

「あ、あの、同志中尉・・・」

リーナの声は震えていて、今も思考は混乱していて、言葉を紡ぐのが精一杯だった。

「つまり・・・こういう、ことなんですか？同志中尉の妹さんはロシア軍の核攻撃と残留放射能のせいで、あんな、風に・・・」

「大雑把に言えば、な。」

寂しげにイリーナは呟く。

イリーナの妹と交わした僅かな会話が脳内で再生される。

ありがとう、最近はね、吐き気も脱毛もなくて気分がいいの。・・・イリーナの部隊仲間の人かしら？髪と瞳の色は？お話してくれていると嬉しいな。

私のお友達は、この間いなくなっちゃったから・・・

今の私は、見るに堪えないでしょうね。社会復帰だって難しいかも。

でもね、生きてたら、きっと良いことがあるわよ。

リーナは、彼女のことが眼球と脳に焼き付いていて、忘れることは有りそうにない。

青白い肌に大小の赤紫色の斑点が点在し、片目は生き生きした黄金色だったが色彩を見れるだけの視力はなく、もう片目は失明・白濁化し、その白濁化した目の周りはケロイドとなっていて、

左足は肌がズル剥けになった跡があり、口の端からは、しゃべるたびに涎が垂れていた。

その異様さには寒気すら感じた。

看護婦とイリーナの会話を小耳に挟んだところ、このところ体調は安定しているが、この先、社会復帰できる可能性が低いこと、さらにもっと言えば30歳まで生きられる確率が40パーセントしかないのだ。

看護婦もイリーナもハッキリとは言わなかったが、このまま緩やかな死を迎える可能性が極めて高い――。

さらにもっと驚かされたのは、他の病室や他の病院にも同じような容態の・・・いやそれよりもっと酷い、核攻撃や残留放射能による被曝が原因の患者が大勢いるという事だ。

全部、全部私たちのせい――？

リーナは思う。

イリーナから聞いた話によると日本やアメリカから輸入した先端医療で生きながらえているが、国連から独立自治を保証する代わりにバルゴンの存在を隠蔽するためにその2カ国以外からは援助を受けられず、イリーナの妹のような原爆症の患者がこのギジガに集中し、その患者を治療するために先端医療機関も集中し、最前線でありながら5万人の人間が暮らす都市としてあった。

そしてその市民を守る為に大勢の軍人や徴兵された人々が血を流す。

バルゴンという敵と、ロシアという敵を相手に、在ロリシカ米軍と周期的に派遣される自衛隊を増援に交えて絶望的な戦いを強いられる・・・。

リーナは自分の不甲斐なさに潰されそうになる。

こんな惨状をリーナは知らなかった。

習ってすらいなかった。だがやはり、無知だった自分も罪悪に感じてしまう。

こんな酷いことをしておいて、私はロシアと組もうなんて・・・核兵器を使おうなんて・・・!!?

これだけのことをロシアがすれば自分が、ロシア人の自分が疎まれたり、殴られたり、殺されても当然じゃない――!!?

「別に貴官が責任を感じたり思い悩むことはない。」

「え――？」

弾かれたようにリーナは思わず顔を上げる。

「お前が悔やんだところであいつのような人々が治るわけじゃないだろう？」

「あ……」

「これからは不用意に核だのロシアだのという発言はするなよ。……あと、な、今は私たちに出来るのは彼らをバルゴンから守るくらいだ。だから今は、それに集中しろ。」

イリーナが、リーナに言い放つ。

瞬間、基地の方から警報が鳴り響く。

『サハ共和国領国境よりロシア軍IS部隊の領空侵犯を確認。AH部隊は速やかに撃退に当たれ。繰り返し――』

基地のアナウンスから、そう聞こえた。

「AH部隊……?」

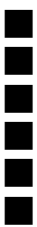
リーナが呟く。

「アンチ・ヒューマン、まあ、対人類用の部隊だ。」

イリーナがリーナに言う。

瞬間、基地の滑走路から白い、雪原迷彩の施された、ガンヘッドとは違う、“人狩り”用戦略機プラティマバスが飛翔していくのが見えた。

「……ほう、どこのAH部隊かと思えば……噂のジャール大隊か。」
イリーナは澄んだ碧眼でその部隊を見上げながら、言った。



コルイマ山脈近郊

そこをIS……ミステリアスレイディの簡略型であるIS、チボラーシエカ4機が隠密性を高めるために速度を落として飛行していた。

「ちよつと何よこれ!? ハイパーセンサーがめちやくちやだわ!!?」
女の1人が叫ぶ。

ハイパーセンサー、レーダーサイトよりは劣るが広大な索敵範囲をもつシステム……とされているそのセンサーは、今はノイズだらけで何も映していなかった。

「故障でもしたんじゃない? だって下等な男が整備したんでしょ?」

もう1人の女がそういう。

だが、その女の機体のハイパーセンサーも調子が悪かった。というより全員のハイパーセンサーが不調を訴えていた。

原因は整備不良——と彼女らはした。

『ロシア軍IS部隊に告ぐ——貴官らは我が国の領土に侵犯している。ただちに退去せよ。繰り返す、ただちに退去せよ。』

瞬間、オープンチャンネルで凜とした女の声が響く。

「隊長!!？」

部下の1人が隊長の女に叫ぶ。

「あわてる事ないわ。訓練通りにやりなさい。どうせ連中の機体じゃチボラーシエカの機動性にはついてこれないわ。」

隊長の女が言う。

確かに、第2、5世代のチボラーシエカなら旧式の戦略機ガンヘッドを圧倒するくらい容易いだろう。

相手が、“ガンヘッド”なら。

『——了解、貴官らは撃墜する。』

瞬間、眼下の針葉樹林から、36ミリの砲声と共に砲弾が飛びかう。

4機のチボラーシエカにそれが命中するが、全て絶対防御で防がれる。

IS乗り達なハイパーセンサーの認識範囲内からいきなり砲弾が来た事で虚をつかれたが、直ぐに立て直す。

「こっちには絶対防御があるわ!!？全機散か——きやあ!!？」

瞬間、今度は反対側から120ミリ滑腔砲の高速徹甲弾が飛んで来る。

それも絶対防御に防がれるが、またしても虚をつかれる。

女の1人が望遠カメラで発射起点を探る。

「せ、戦車!!？あんな旧式兵器に気付かなかったの!!？」

女が叫ぶ。

その間にも絶え間なく36ミリ機関砲の砲撃と120ミリ滑腔砲の砲撃は止まない。

「だ、誰かなんとかしてよおお!!？」

「落ち着きなさいよ!!?絶対防御があるから——」。

瞬間、そう叫んだ女の絶対防御の発動装置がエラーを起こし、飛んで来た高速徹甲弾が最後の最後に発動された薄い、絶対防御を貫通し、その女を、人間だったものの残骸に変えた。

「「え．．．?」」

全員がその光景に啞然とする。

『総員傾注、無礼な蛮人共に、礼儀を教えてやれ。』

チボラーシエカ指揮官機の敵の無線を傍受する情報収集システムが、先程警告を発した女の声拾う。

瞬間、眼下の針葉樹林から、白い、雪原迷彩を施された、戦略機がメインカメラの赤い輝跡を描きながら、飛び出す。

その数6機。

ガンヘッドとは違うまた別の機種。

その機体は2機1チーム、計3チームを組みながら、接近してくる。戦略機のセオリー通り、2機1チーム（分隊）で、攻撃を仕掛けてきたのだ。

「う．．．」

女の1人が呻くように、ガトリングが内蔵されたランスを構え。

「うわああああああ!!?」

次の瞬間には絶叫しながら戦略機に向けてガトリングを斉射する。戦略機はそれを多目的追加装甲シールドで防ぎながら突撃してくる。

「くそ!!?全機、ナノミストの使用を許可!!?」

指揮官機の女が叫ぶ。

「た、隊長それは!!?」

ナノミスト————ミステリアスレイディの水のナノマシン
の元となったナノマシンだ。

あちらは水を使うことで湿度を利用した攻撃ができるが、ナノミストはただの金属片で弾除けにしかない。

おまけに普段は使うことを禁止されていた。秘匿兵器だからだ。だが、部隊全滅の危機になった今、使わない手はない。

「構うな!!?」

「しかしそれは使用許可を政府に取らな——」

瞬間、シールドエネルギーが20パーセントを切っていたその女を、鍔色の日本刀が貫く。

だがその日本刀は人間やISが扱うには大き過ぎる。——戦略機の、長刀だ。

「投擲したのか——!!?くそ!!?ナノミストを使え!!?ジモーネ!!?ナノミストを展開しろ!!?」

たった一人生き残ったIS乗りのパイロットに指揮官機の女が怒鳴る。

「は、はい!!?」

ジモーネも直ぐにナノミストを展開する。

黒い霧がチボラーシエカを包み、戦略機から放たれる36ミリや120ミリ短距離滑腔砲の砲弾を弾く。

(よし、これで絶対防御を節約できる……だがこのまま撤退すればきつと収容所送りだ……せめて戦果のひとつくらい——!!?)

指揮官機の女がそう思った瞬間、けたたましいモーター音が響いた。

瞬間、ナノミストを突き破るようにして、巨大な電動ノコギリのついた剣——チェインソードが女に迫る。

すんでのところで絶対防御が発動され、チェインソードを受け止めるが、ギヤリギヤリと火花を散らして絶対防御を切り刻み、シールドエネルギーの残量が凄まじい勢いで減っていく。

そしてそれをチェインソードの主——

戦略機“プラティマバス”が赤いメインカメラの眼光を光らせながら、見下ろしていた。

「あ、あ……あ——」

指揮官機の女が恐怖で声にならない声を出す。

「た、隊長いま——きやあ!!?」

ジモーネが指揮官機の女を助けようとナノミストを展開しながら近づくと他のプラティマバスが36ミリで集中砲撃し、チェインソ

ドを振り下ろし、ジモーネのチボラーシエカのスラスターに命中し、スラスターは爆発。

PICを喪失し、そのままチエインスwordを絶対防御が受け止めるがジモーネのチボラーシエカは衝撃で地面に叩きつけられ、機能を停止する。

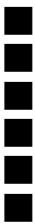
「あ……あ、ああ……」

頼みの綱だったジモーネもやられてしまう。

『分をわきまえろ——ロシア人!!?』

チエインスwordを突き立てているプラティマバスの女が叫ぶ。

瞬間、チボラーシエカの絶対防御をチエインスwordが貫き、指揮官機の女を、切り刻み、肉塊へと変えていった。



渋谷区。

センター街の外れにある、小さなカフェ。

今年で60歳になる老男性とその孫娘でいとなわれている、地元人の集まるカフェ。

木製の床に白の壁紙。そのどれもが汚れたり傷んだりしていて、年代を感じさせるがそれがどこか良さを引き出している、そんな店だった。

そこに千尋と箒はいた。

店内にはスーツ姿のサラリーマン一人、私服姿の男女二人、子連れの親一人と、あまり客はいないが、落ち着いた雰囲気的光景だった。

千尋と箒は隅っこのテーブルに座るとメニュー表を手にして、会話を始める。

「箒姐は何食べる？俺はハンバーグとフライドポテトとサラミピザ。」

「お前……肉や芋ばかりではないか。少しは野菜を食べ。野菜を。」
「えくだって野菜嫌いなんだもん……。」

千尋が口を尖らせながら、子供みたいな事を言う。
それを箒が咎める。

「好き嫌いが許されるのは小学生までだ。」

「はいはい。」

「はい、は一回。」

「はあい。」

まるで、本当に、子供と母親のような構図——に見えなくもない状況だった。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

ウェイトレスが聴く。

「じゃあ俺はハンバーグとフライドポテト、あとサラミピザで。」

「だから野菜を・・・ま、良いか。私は宇治抹茶パフェで。」

「畏まりました。」

そういうとウェイトレスは水をいれたコップを2つ置いて、厨房の方へ、消えていった。

数分後・・・

先の女性ウェイトレスとは違う、男性ウェイターがメニューを持つてくる。

「お待たせ致しました。」

「あ、ありがとうございます、ま・・・」

千尋が固まる。

箒も固まる。

何故なら、相手は、

「頼人（さん）!?？」

特務自衛隊所属であり千尋たちと墨田駐屯地での同居人であり上官である神宮司まりも三佐の部下の永井頼人三尉だったから。

「なんでここに!?？」

千尋が思わず聴く。頼人は今IS学園警備課第1学園守備隊所属だから、こんなところで油を売っている場合ではない。

「丁度暗部の監視官に欠番ができてなあ・・・丁度、千尋たちが行く渋谷だったから、光さんが臨時の監視官に指名して・・・さあ。」

つまりはそういうことだった。

今、暗部——情報庁傘下の部隊が考案と連携してテロ予防のために民間人に扮したコマンド……監視官を首都圏のあちこちに配置して警戒網を構築していたのだ。

今回は1人欠員になったから補充に頼人が派遣された——
—という事だろう。

だが、

「……なあ、情報庁と警視庁のシマに防衛省が介入して良いのか？」
千尋が聴く。

すると頼人はうんざりした顔をして、

「普通に考えてダメだろ。光さんの事だから、なんか工作でもしたんじゃないか？」

頼人は言う。

普通、そういう裏工作も、ダメだ。

けど頼人がいるという事は、多分……交渉したんだろう。光はいざとなると土下座までするからなあ……

千尋は思う。

「まあ、とりあえずご注文の品だぞ。」

そう言いながら千尋と箒にメニューを置く。

「あ、さんきゅ。」

「ありがとうございます。」

「じゃ、ごゆっくり楽しいデートを。」

「ちよっ!??!」

なんて会話を交える。

千尋はとりあえず注文したメニューに食い付く。

「うん、うまうま。」

「おい千尋、食べ物を入力したまま喋るな。あとポロポロこぼすな。」
箒が千尋を注意する。

……でも、たまには、いいか。

箒はそう思うと宇治抹茶パフェをスプーンで掬って口に運んで、食べる。

そうしている内に千尋は頼んだメニューを平らげてしまう。
箸はまだ半分しか食べていない。

そしてそんな箸の宇治抹茶パフェを、ジーツと千尋は見ている。

『ちよつとで良いから分けて欲しいなア・・・』
そう言いたげな顔をしている。

「・・・はあ。」

そんななら、最初からこれも注文してれば良かったのに。・・・
もう、しょうがないなあ。

箸はそう思いながらもスプーンで掬って、千尋に差し出す。

「食べたいんだろう？ホラ、あくんしろ。あくん。」

微笑みながら、箸が言う。

「え？いいの？じゃあ遠慮なく！あく・・・」

千尋は嬉しそうな顔をしてする・・・が、遮って。

「オラア!!？全員動くな!!？」

ドアを蹴破って、武装集団が入り込んでくる。強盗だ。

周りの客はパニックになる。が、強盗が凶器で脅して黙らせる。

千尋と箸はそれを冷静に見続ける。

犯人と“凶器（エモノ）”を、見る。

ナイフを持った男が2人。鉄パイプを持つ男が1人。拳銃を手に
した男が1人。

その誰もが慣れない手つきや構えでいる。全員、素人だ。

このまま犯人が金を盗むまでジツとしていても良い。

だが、せつかく食わしてもらった店にも申し訳ないし、何より今監
視官をしている頼人が黙ってるわけ――

「すみませんがお帰り願いますか？流石に他のお客様のご迷惑です
し。」

案の定、につこり笑いながら頼人が強盗に言う。

「ああ!!？テメなめてんのか!!？」

すると強盗はナイフを突き刺そうとする。

ナイフは――サバイバルナイフの類いだ。防刃ジャケットなし
に食らえば流石にマズイ――!!？

千尋と箒はそう思い、千尋はハンバーグを食べる時に使ったフォークを、箒はスプーンを持って立ち上がるとうとする。

何が出来るわけではないが咄嗟に立ち上がってしまう。だが間に合わない。

ナイフは頼人の胸に一直線で——とても、間に合う距離ではない。

ナイフが頼人に刺さる——瞬間、頼人から殺気が溢れる。

瞬間、左の肘と左の膝間接で、ナイフを挟んで止める。

その光景に全員が啞然とする。

「んなりっくそ!!？」

強盗は頼人からナイフを抜くと同時に、頼人は床を、蹴る。

ナイフを突き刺そうとした強盗を横切り、振り向きざまに、延髄に、拳を打ち込む。

するとその男は延髄に打ち込まれた衝撃で判断が鈍らされてしまいが、ナイフを相変わらず振り回す。

それに連動するように千尋はフォークを、もう1人のナイフを持った強盗の手首に向け投擲する。それと同時に床を蹴る。

千尋の投擲したフォークが手首に刺さった強盗は痛みでナイフを落とす。

それに一瞬遅れて千尋がスライディングで飛び込み、床に落ちたナイフを拾い上げると同時に足を上げて、男の股間を蹴り上げる。

瞬間、その男が股間を押さえて床に転がる。

その千尋に、今度は鉄パイプを持った男が鉄パイプを振り下ろす。

千尋はそれを後転して、回避。すかさず体勢を立て直す。だがそこにさらに鉄パイプを振り下ろす。

それを千尋はナイフで鉄パイプを滑らせながら、受け流す。

そこに椅子の背もたれを持った箒が突撃して来て、椅子を鉄パイプを持った男に振り下ろし、ぶつける。

それで鉄パイプを持った強盗は伸びてしまう。

「おい箒、避ける。」

突如、気の抜けた頼人の声が響く。

「へ？」

箒がそちらを見ると、頼人が相変わらずナイフを振り回す男の顔面を蹴る。

瞬間、男がこちらに蹴り飛ばされてくる。

思わず、少し色っぽい悲鳴を上げながら、頭を押さえて、伏せる。

頼人の蹴り飛ばした男は店の柱に命中し、そのまま伸びてしまう。

「さて、残りはキミかな？」

すると、店主の老人が少し用意をされていて遅れたのか店の奥からでてくる。

手には——金属バット。

「く……くんじゃねえ!!？」

強盗の男はすかさず拳銃を店主に向ける。だが、撃たない。

「撃たないのかい？まあそれもそうか。ソレ、改造モデルガンだからねえ。」

店主がニツコリと笑いながら——目は笑っていない顔で、言う。

すると、店の表に黒塗りのベンツが3台止まる。

そして中から厳つい外見の男性数名と、着物をきた女性が出て来る。

「あの人……」

千尋が思わず呟く。

「知っているのか千尋？」

箒が聴く。

「あの人、光の知り合いの人だ……紺碧組の組長、青野翠さん。」

翠と言った女性が店に入ってくると、千尋と視線が合う。

「あら、千尋くん。お久しぶりね。此処は私達が始末するから、早く行っちゃいなさい。警察沙汰になる前に。」

翠が微笑みながら、言う。

「あ、はい!!？行くよ箒姐!!？」

「え？あ、ああ……」

千尋は会計をして、箒の手を掴みながら、店からズラかる。箒は困

惑しながらも千尋と共に走っていく。

数分後、黒いベンツに連行される武装集団を通行人が見かけたという……。

「はぁ……はぁ……」

しばらく走り続けていた千尋と箒はバテバテだった。

「な、なぁ千尋、あの翠とかいう人、始末するって言っていたが、何する気なんだ？」

箒が千尋に聴く。

「はぁ、はぁ……あの人、さ……旭日院の工作を揉消す為の組織……紺碧組っていう、”ヤのつく仕事”をしてるとこの組長、なん、だよ……光との中学からの悪友らしい。」

千尋が、応える。

紺碧組という名前は箒も聴いたことがあった。

東京の首都圏、渋谷や新宿をシマに持つ、ウワサでは警察に干渉するだけの暴力団、と聴いた事があった。

現物を見たのは、今回が初めてだが。

「ふくさつきはエライ目に遭ったよな。」

千尋が、箒を元氣付けるために明るい声音で、言う。

箒はそれに苦笑いしながら、まったくだ。と応じる。

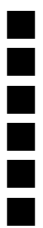
空は夕方の少し前といった感じだ。

箒は空を見上げながらふと思いついたように呟く。

「なぁ、千尋……行きたい場所があるんだが……良いか？」

「ん？いいけど……」

千尋が、また珍しいと思ひ、応じた。



墨田区跡地・墨田慰霊公園

夕方時の、夕日が世界を緋色で染め上げる時間帯。

東京スカイツリー付近にある、公園。

そこが箒の行きたい場所だった。

芝生で整備され、タイルが敷き詰められた道を中心に、左右対称等間隔に10万人近い人たちの名前が彫られた大量の四角柱が並べら

れている。

ここは、墨田大火災の後に建てられた、公園だった。もつとも、公園といっても半ば墓地とかしている。

理由は簡単だ。

遺体が見つかっておらず、旧墨田区の地に埋まったままだから。

千尋も箒も無言だった。

2人にとってここは、ひどく大事なところだから。

千尋という存在が生まれ落ちた場所。

箒が持っていた個性を無くした場所。

そして目の前で大勢の人が死ぬのを目の当たりにした場所。

ありとあらゆる意味で、2人にとって大事な場所だった。

しばらく無言で歩き、公園中央にある、幾重もの鉄の螺旋で形作られたモニュメントの前に、2人はやってくる。

瞬間、2人の鼻腔にあの日の、炎の上がる熱、人が焦げる匂い、助けを求めて呻く人の声———それらが、一瞬鮮明にフラッシュバックする。

やはり、2人とも無言のままだった。

気が付けば既に日は暮れ、月が空から地上を見下ろしていた。綺麗な、満月だった。

「・・・そういや、さ。」

千尋が先に沈黙を破った。

「あの日も・・・墨田大火災の日も・・・綺麗な、満月だったよな。」

「・・・ああ。」

あの日と同じ様に整然と醜い地上を見下ろす満月を見上げながら、千尋は言う。

そしてそれに箒も反応する。

あの日、文明の灯———電気も、原始の灯———炎も消えたあと救助を待つ間、頼りにしたのは今見上げている月の光だった。

そしてあの日、箒は思った。

人間は支配者を気取っているが、結局は自然に抗えない、小っぽけ

な生き物なんだ——小っぽけで弱いからこそ、文明という名の温室でしか生きられない。

「……じゃあ、もしあの日みたいに文明が突然消えてしまったら？」

「なあ、千尋……」

「なに？」

「もし……もしもだぞ？……世界が終わって、文明が消えたら、人はどうなるんだろうな……？」

「!??——ツ……」

箒がそんな事を聴く。

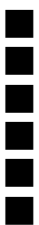
千尋は光から世界が滅ぶ事を聞かされているから、どうとも言い難い顔をする。

だが、覚悟を決めた顔をして、箒に、言う。

「箒姐……」

「なんだ？」

「もし、いや確実に、今年に世界が滅ぶとしたら、箒姐はどうする？」
「え……？」



中央太平洋・篠ノ之束の偽装島

地下・研究所。

「うんうん。ゴーレム4機の調子は万全だね!!?あとはIS学園のクラス別対抗戦に送り込むだけ!!?」

「いつくんのモテモテハーレムのためにも、この子達にがんばって貰わなきゃ!!?」

6年前に、墨田大火災を間接的に引き起こし、10万人を大量虐殺した天才もとい天災篠ノ之束は、まったく懲りる事無く。

『いつくんハーレム計画』なるものに着手していた。

この数年、束は一夏と友人の千冬にゾツコンだった。

というのも、束が愛して止まない箒を、箒の住む墨田区ごと殺しかけた為か、束側から箒への連絡手段が一切絶たれた為である。

「はあくあ、クラス別対抗戦の日に、早くならないかなあ・・・」
東は無邪気で、それでいて悪意が無自覚に混じった笑みを浮かべて
言った。

ロリシカ編

EP-08 失墜ノ大地

つくば市・JAXA宇宙センター。

サイロ型シャトル発進シャフト。

千尋、箒、まりも、まりもの部下である新井信幸曹長と門松洋平一曹、そしてオブザーバーの家城燈一尉と整備要員の山本晃三尉他数名が、そこにいた。

そして彼らの目の前には、

「で、でけく……」

【ゆうなぎ】型再突入装甲駆逐艦という名の、超大型の“宇宙往還機（スペースシャトル）”が鎮座していた。

全長47メートル、総荷重量7千トン。

こんなデカイ機体が一機ならまだいい。一機だけなら。

「早くしろ!!? 戦略機パイロットは1番機に、整備要員は2番機に、予備物資は3番機に載せる!!?」

作業員の男が部下たちに怒鳴る。

そう、この再突入装甲駆逐艦は一機ではなく、三機もあるのだ。

正直、何処でこんな物作ってたんだ、と突っ込みたくなる。

「こいつでロリシカまで……」

千尋が呟く。

この再突入装甲駆逐艦で一度宇宙まで飛び上がり、そして衛星軌道に乗り、ロリシカ国内の基地、ベルホヤンスク統合基地に到着する予定だ。

言うだけなら簡単だ。

言うだけなら。

だがやはり、想像し難いというか、そういう気持ちが多かった。

「大丈夫だよ。篠ノ之2士、再突入装甲駆逐艦は試験航行もしてるし、嚴重に管理されてるから事故を起こす確率は低いよ。」

千尋を安心させるために晃が言う。

「はあ、まあメンテナンスに関しては信用しているのですが、その…実感が無いといえますか…」

「まあ、それもそうか。俺も初めて乗った時はなんか実感湧かなかつたよ。」

笑いながら、晃が応じる。

「あの、いつも再突入装甲駆逐艦を使ってるんですか？」

千尋の隣から箒が尋ねる。

「いやいや、一度飛ばすのもの凄い電圧とか予算が要るんだ。そんな毎回毎回使つてられないよ。」

晃が苦笑いをしながら応じる。

「いつもは海自の輸送艦をつかってるんだけど、それだと時間がかかり過ぎる。特に今回は、時間の余裕がない。」

そう話していると、乗機用のブリッジが降りてきて、今自分たちの立っているデッキと 再突入装甲駆逐艦が接続される。

「予定より12分遅れている。詳しいブリーフィングは現地到着後に行われる。さあ乗った乗った!!?」

まよりもが急かす。

それに各自が反応し、乗機予定の再突入装甲駆逐艦に乗り込んでいく。

…宇宙…宇宙、か…はじめて宇宙行くんだなあ…どんなところなんだろ…期待を少し膨らませながら、千尋は少し浮かれてしまう。

「こーら篠ノ之、初めての宇宙、初めての海外で浮かれるのは良いが、今は時間がない。ホラ、早くしろ!!?」

「あ、ハイ!!?」

まよりもに注意され、千尋は急いで再突入装甲駆逐艦に乗り込んだ。

■■■■■■■■■■

ロリシカ・ギジガ統合基地北西約6キロ。

第4前哨警戒基地・迎撃塹壕。

この日だけで3回もの大規模襲撃を受け、それを退けたロリシカ陸軍第27歩兵連隊第6大隊第2中隊の陣地は、阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

壁面を硬化剤で入念に補強した塹壕には、バルゴンの小型種と兵士たちの遺体が転がっていた。

「怖い…怖いよ…助けて…助けて、父さん、助けて…」

まだ10代半ばの少女がM16A2アサルトライフルを抱えて、塹壕の壁に寄り添いながらうわ言のように呟き続けていた。

彼女の身に纏っていたBDUだけではなく全身が人間やバルゴンの返り血まみれで、とても子供にさせる事とは思えない状況に彼女は立たされていた。

あまりに多過ぎる死を目の当たりにして来て、とうとう精神が壊れ始めたのだ。

彼女は父親に助けを求めるが、当然、父親は来ない。

いや、いることはいるのだ。ここに。

彼女の隣で“バルゴンに踏み潰されて圧死した肉塊”となつて。

「おいしっかりしろ!!?おい死ぬな!!?おいッ!!?」

別のところでは20歳前半の男性が同年代くらいの同僚らしい男性に必死で心臓マツサーズを続けていた。

“腰から下を食い千切られ、既に死んでいる”同僚に。

(もう一度戦えば、全滅する…!!?)

中隊指揮官のツアーリエ・アルフオンスキー中尉は部隊の惨状を見て戦慄する。

昨晩から急激に天候が悪化。

ベルホヤンスク統合基地との有線ケーブルが積雪に巻き込まれ断線した為、統合基地との通信は途絶状態が続いていた。

その最中のバルゴンの大規模襲撃。

今までどうにか耐えているものの、現在は正規の中隊50名の内戦闘可能な人間は——いやギリギリ戦える人間は、26名。まともに戦えるのは、19名。

残弾も枯渇しつつある。

だが大隊司令部が撤退命令を出していない以上、撤退は許されない。

つまり自分たちは、ギジガを守る為の、肉壁だった。

未婚の16歳の男女を徴兵する徴兵制によって徴用されたツアアリエは、半年足らずの速成教育を受けて少尉に任官された彼女には厳しすぎる現実だった。

(援軍は…在ロリシカ米軍は何をしてるの…誰でも良い…はやく、はやく助けて…!!?)

寒さと恐怖に奥歯を震わせながら、援軍が来るのを待つ。

だが、奇跡など、そうやすやすとは訪れてはくれなかった。

「中隊長、来ました!!?バルゴン群、数は500以上!!?」

部下の1人が叫ぶ。

ツアアリエは弾かれるように顔をハツとあげる。

吹雪で霞む雪原の果て————30メートル近い鉛色のバル

ゴン中型種30体と5〜10メートルの錆色のバルゴン小型種500体近くが、こちらに突っ込んで、来る。

「総員射撃準備!!?」

ツアアリエが叫ぶ。

全員がアサルトライフルやRPGを塹壕から出して構える。

(神さま———どうか…)

「撃ち方はじめーッ!!?」

瞬間、嵐のような銃声が雪原に木霊した。

■■■■

11分後・同地上空。

メドヴェーチ中隊の戦略機ガンヘッドは地面から高度3メートルの匍匐飛行で第4前哨警戒基地南方約8・9キロの地点を指していた。

目的は大出力の生体レーザーにより航空戦力を撃墜、無力化してしまふ最大57メートルにも及ぶバルゴンの大型種撃破。

既に第4前哨警戒基地の迎撃塹壕地帯を突破したバルゴンを砲爆撃で殲滅するためにも、生体レーザーを放つバルゴン大型種は潰さなくてはならない。

さらに悪いことに、日本から自衛隊の派遣部隊の一部が再突入装甲駆逐艦で降りて来るといふ知らせが入ったのだ。

このままだとせつかくの貴重な援軍が上空で花火になってしまおう。どうかして避けねばならない。

だから、バルゴン大型種を殲滅して制空権を奪還するレーザーヤークトという戦術を行う。

レーザーヤークトはメドヴェーチ中隊の十八番で、多分レーザーヤークトの成功率は一番メドヴェーチ中隊が高い。

だがしかし、同時にそれはリスクが伴う。

大型種は群れの最奥部にいるため、そこにいくまで地表ギリギリの高度での匍匐飛行で 群れの中を縫うようにして抜けなくてはならない。

少しでも高度を上げればすぐさまレーザーで撃ち抜かれてお陀仏に。

さらに中型種や小型種と近接密集戦になりやすいために、レーザーにやられなくとも撃破される率は高まる。

レーザーヤークトには近接密集戦、超低空匍匐飛行、瞬発回避能力、その全てにおいて最高レベルの部隊が求められる。

跳躍ユニットのジェット・ロケット複合エンジンの爆音が鼓膜を震わせる中、ユーゲンは普段の温和で子供らしい感情を押し殺し、硬い表情を変えることなく、ペダルを踏み込み、MF-4R戦略機ガンヘッドの速度を加速させる。

頭部メインカメラと機体各所のサブカメラから機内モニターに外の風景が映し出される。

灰色の空に白く覆われた大地。

焼けただれた森林に家屋だった何かの廃墟。

雪原に転がるバルゴンの死骸。

振り返ればバルゴンと死闘を繰り広げる味方陣地が見える。

『総員傾注!!?』

モニターに自分と同じ強化装備服を纏った兵士——中隊長ニコライ・ジノビエフ少佐が投影される。

『間も無く敵と接敵する!!?以後、重金属雲下により通信途絶もあり得るが、各機は陣形を維持せよ!!?』

「了解!!？」

他の兵士たちの応答に合わせ、ユーゲンは答える。

第1独立戦略機中隊・メドヴェーチ中隊は補充として編入されたリーナを含めて8機で編成されている。

通常、中隊の装備定数は空軍のそれにならない12機だが、損耗の激しいロリシカ軍では、定数を満たしている部隊の方が珍しい。

特に、陸軍では。

ゆえに中隊は前衛4機を、指揮官機を先頭にアローヘッド型に陣形を展開。

残り4機を後衛に配置していた。

（たった8機でバルゴンの群れに突っ込む……いつも通り」とはいえ、無茶苦茶だよなあ……）

ユーゲンは内心呟く。そして心理的重圧がのしかかる。

瞬間、中隊の上空を空間飛翔体——MLRSが放った重金属誘導弾が通過する。

重金属誘導弾。バルゴンの生体レーザーに撃墜されることで大量の重金属粒子を散布。そしてそれが重金属雲を作り出すことで生体レーザーを減衰させ、突入する戦略機の突入成功率を上げたり支援や砲弾の被撃墜率を下げるという、ありがたい兵器だ。

ただ難点があるとすれば重金属雲下ではデータリンクなどの途絶やレーザーにノイズが走り、現在地をロストする確率が高い。

その効果は、ISのハイパーセンサーを阻害、整備状況が悪ければハイパーセンサーをノイズだらけにする程だ。

だから現在は対バルゴン戦担当の陸軍と対ロシア戦担当の国境警備軍で使用されている。

そしてもうひとつの難点は、重金属誘導弾を使用した地域では深刻な土壌汚染などの公害が発生するということだ。

多分バルゴンを皆殺しにして奴らが支配していた地域を奪還しても、重金属粒子による土壌汚染で20年くらいはまともに人が住めない土地になっている——らしい。

実際にユーゲンは重金属粒子による公害の影響で奇形児となった

子供や痛々しい人達を見た事がある。

ソフィアの弟も、重金属粒子の公害によって内蔵が幾つかやられてしまい、ギジガの病院で寝たきりの療養生活を強いられている。

そういう意味では、重金属誘導弾は正しくないのかもしれない。

だが重金属誘導弾なくしてバルゴンの大型種を撃破できないのも、事実なのだ。

(なんだか、複雑だよな…)

ユーゲンは思う。そして感情が操縦に出たのか、

『——メドヴェーチ03から05。小僧、軸線がぐらついて
いるぞ!!?余計な事を考えるな!!?』

「は、はいッ!!?」

思わず、ユーゲンは自身にモニター通信で厳しい声音で叱責してきた胡麻塩顔の男性兵士に焦りながら応じる。

声の主であるダニイル・ドヴラトフ曹長の年齢は33歳で、17歳のユーゲンより一回りも二回りも年上だ。叩き上げの下士官で、最古参の兵士として、政治的方面のイリーナとは違う方面でニコライの補佐をしており、中隊の指導役でもある。

ユーゲンは入隊時からダニイルに扱かれた為、少しばかりトラウマともなるような事態も有ったが、実際に救われたこともある為、敬愛はしている。

瞬間、救援要請のウィンドが展開。

メドヴェーチ中隊とは別方向からレーザーヤークトを行う為に突入した戦略機部隊が大型種のレーザー照射を受け、地上で身動きが取れなくなったという内容だった。

(このままだと全滅する——)

ユーゲンは思う。待っているのはバルゴンに貪り食われるか、冷凍ガスで氷像にされるかのどちらかだ。

『素人が。部隊間距離を詰め過ぎだ——』

ダニイルが吐き捨てるように言う。

『た、隊長!!?救援を——』

続いてリーナがニコライに通信を掛ける。

重金属雲下ではデータリンクが途絶する為、部隊のローカルデータリンクを常に起動させているため、ユーゲンにもリーナの会話内容は聞こえる。

『…残念だが見捨てるしかあるまい。』

ニコライが言い放つ。当然の選択だろう。……今救援に行けば救出できるかもしれない。

だがレーザーヤークトの失敗する可能性が極めて高くなる。

そうならば次にバルゴンの餌食になるのは自分たちやベルホヤンスクの市民たちだ。

今優先すべき事は——言わずとも、リーナは察した。

瞬間、広域マップに2000体近くのバルゴン群が映る。

『連中のお出ました——総員傾注!!?』

ニコライが言う。

『我々は予定通りレーザーヤークトを敢行する。前衛は俺、チェスコフ中尉、ドヴラートフ曹長、ストラヴィツキー軍曹。後衛はマツナガ曹長、ドモントローヴィツチ伍長、ジトワ伍長、ベシカレフ伍長。前衛は突撃路を開き、後衛は支援攻撃を行う。』

全機複合追加装甲展開!!?バルゴンのクズ共に、タングステン合金の洗礼を喰らわせてやれ!!?』

「「「「了解!!?」「「「「」」」」」

全員が応答し、全機が、突撃に移る。

36ミリ突撃砲を構え、バルゴンの群れに向けて、穿つ。

瞬間、36ミリ徹甲弾が空気を焼きながらバルゴンの群れに吸い込まれていき、表皮を破り、肉をえぐり、赤黒い体液が空中に舞い上がり、白い雪原を赤く染め上げ——突撃路を確保する。

『全機突入!!?』

ニコライが号令を放つと、ガンヘッド各機は突入を開始した。



IS学園・1029号室。

「お、母さん…?が…?」

鈴は、共産党本部の賀から送られてきた手紙を見て啞然としていた。

内容には——母が“自殺”した、と。

そして『実に残念だよ。彼女は抱いていて楽しめた方だったのにと、賀の言葉の中にあつた。』

瞬間、鈴は母が賀に抱かれるストレスに耐えかねて自殺したのだと、悟る。

いや、もしかすると強姦の果てに死んだのかもしれない。

「あ……あ、あ……」

鈴の中で、いままで苦勞して自分を育ててくれた母の姿がフラッシュバックする。

思わず鈴はベッドに倒れ込む。

そして、鈴の中で殺意と憎悪が爆発した。

「あ”あ”あ”あ”ア”!!? 糞が!!? 糞野郎が!!?」

防音措置が部屋に施されているから、思わず、涙を流しながら憎悪でどうしようもなく歪んだ顔で、半狂乱になって叫ぶ。

「うつく…殺して、やる…殺して…やる…絶対…殺してやる…殺して…や…う…くっ…助けてよ、誰か…助けてよ…一夏あ……………」

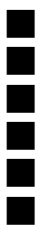
鈴は誰もいない部屋でただただ泣き続けた。

母を少しでも支えるためにISの道に…共産党に支配される道を選んだ自分を怨みながら、一夏に助けを求め。

来るはずがない、一夏の救いを求めた。

それでも一夏を求める。

今まで一夏と母の為に頑張ったのに、母が居なくなつて、そのうえ一夏にも見てもらえなかつたら…私ガ幸セジャ、無クナルカラ。



IS 学園・整備エリア

簪はセシリアと共に打鉄改二の整備をしていた。

『織斑墜落事件』の時に破損した機体だった。

「…ねえ、オルコットさん…」

簪が呟く。

「なんです?…」

「…ISつてき、必要なのかな?…」

簪がふと、呟く。

それにセシリアが一瞬何か言おうとするが、迷いに満ちた感情をसरる。

「どう…なんでしよう…」

セシリアはそう答える。

以前のセシリアなら、真つ向から反論する。

だが、織斑の事故を受けてからは、分からなくなっていた。

周りにいる人間が負傷しても気にする事すらしらない。

周りに気を配る感性が麻痺した人間を生み出す。

…ISの機能は確かに申し分ない。

だが、人類に必要なモノなのか?

そう聴かれれば、答えは出ない。

いや、出そうだが、これまでISに触れてきた自分が足を引っ張つてしまう。

「あれ?おまえら何してんの?…」

そこに、織斑がやって来て、声を掛ける。

それに簪は横目で威嚇して、セシリアはそっぽをむきながら、

「別に?…見ての通り整備中ですが?…」

そう、言う。

「ふくん。てか、なんでそんなトゲトゲしてるんだ?お前自己紹介の時の、未だに根に持ってるのか?…」

「いいえ、あんな些細な事はもう、どちらでもよろしいです。…本当に分からないのですか?何故貴方に対して排外的か?…」

「わからん。なんでだ?…」

セシリアは怒りが込み上げているが、織斑は持ち前の鈍感スキルのせいで分からず、頭に疑問符を浮かべる。

「…貴方に殺されかければ普通、排外的になりますか?…」

セシリアは冷ややかに言う。

「は？殺されかけた？」

「…あの墜落事故でこちら側には負傷者は出ませんでした。こちらには間接的とは言え貴方が飛ばしてきた破片で負傷者が出ました。そして、千尋さんが庇ってなければ山田先生と箒さんは死んでいました。」

淡々とセシリアは告げる。

「な、何言って…脅してるつもりかよ!?!?」

「別に脅してるわけではありません。事実を言っているだけです。」

「俺は誰も殺してないだろ!?!?」

「ええそうですね。死なせてはいません。」

「じゃあ…」

「ですが負傷者は出しました。」

「…ツ!?!?」

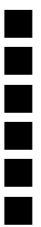
セシリアは冷ややかに、淡々といい伏せていく。

「…今後はあの様な失態をしない事と周囲への配慮をお願いします。」

セシリアはそう言うのと、整備を終えた簪と共に立ち去っていき、織斑だけが残された。

「何でだよ…誰も死んでないなら、それで良いじゃないか……」

織斑は、そう呟いた。



ロリシカ・ギジガ北西8キロ・重金属雲下。

見渡す限り銀世界に満ちた雪原には相変わらず36ミリを撃ち出す火薬の炸裂するけたたましい音が響いていた。

そして相変わらず物量で攻め入るバルゴンの小型種と中型種の溜まり場となっていた。

小型種は歩兵にとっては脅威だが戦略機や戦車の脅威ではない。よって無視する。

だが中型種は小型種同様生体レーザーを放たない代わり、モース硬度10のダイヤモンドより硬い、モース硬度11の鼻先についている

一角やサーベルタイガーのような鋭利な牙があり、それらはあつさり
と戦略機や戦車の装甲を貫くため、脅威だった。

だから中型種から積極的に、殺す。

(それにしても数が多い…!!?)

ユーゲンは36ミリ突撃砲の機関砲を放ちながら、思う。

こいつらは大型種のような特殊能力はない。だから大型種さえ居
なければ烏合の衆だ。

戦艦の超電磁投射砲の超長距離偏差射撃や爆撃機による絨毯爆撃、
ミサイル、ロケット弾の飽和攻撃で、あつさり皆殺しにできる。

だが今回は…いや、今回も、大型種がいて中型種や小型種を空か
らの攻撃から守っている。

まったく厄介なことに。

大型種の生体レーザー照射器官さえ使い物でなくしてしまえば、即
帰投できる。

…できればの話だが。

それまでが大変なのだ。無数の中型種を相手取らねばならない。

でなければ群れの最奥部の大型種にはたどり着けないから。その
ためにも、まずは。

「お前らを、ブツ殺さないとな。」

自分に中型種が角を突き刺そうと、迫ってくる。

ユーゲンはそれを、跳躍ユニットを吹かし、機体をバルゴンの側面
にそらすことで躲し、横腹に36ミリ徹甲弾を叩き込む。すると今度
は別の個体が噛み付こうと口を開けて襲い掛かってくる。

その口に120ミリ短距離滑腔砲で120ミリ炸裂弾を、放つ。

砲弾はバルゴンの口の中に入ると爆発し、バルゴンの頭を吹き飛ば
し、体液と内臓物が飛び散る。

現在の二体を合わせて、少なく見積もっても150体近くを殺して
いた。多く見積もれば300体を超える数を殺したかも知れない。

(いい加減品切れになれてんだ…!!?)

ユーゲンは舌打ちしながら、そう思う。

そこにさらに突進してくる2体の中型種。

突撃砲の銃身を向け、引き金を引く——が、鈍い音を鳴らしただけで、弾は出ない。

「弾詰まり——!? くそっ!!?」

ユーゲンは突撃砲を投棄すると、下腕部にある突起型兵装コンテナ——ナイフシースを展開。

近接短刀を搭載したハンガーが、ナイフシースからマニピュレーターに伸びてきたアームに付いたガイドレールを辿って、手元に運ばれてきて——すかさず逆手で抜刀。

瞬間、ガンヘッドの跳躍ユニットのロケットエンジンを点火し、バルゴン2体に向かって突撃する。

バルゴンまでわずか数メートルというところで跳躍ユニットを吹かし、機体の体勢を右に傾けて、一体目のバルゴンの眉間に短刀を刺し、跳躍ユニットの角度を再度調整し、ロケットエンジンを点火。眉間から脳を斬り裂き、後頭部まで貫通させる。

直後、もう一体のバルゴンが迫るが、ロケットエンジンは点火したまま、追加装甲盾のスパイクをバルゴンの頭部前方に突き出すように構え、直進し——追加装甲盾のスパイクがバルゴンの頭部に命中し、肉を潰し、骨を砕く音が響き、潰れた頭から体液を撒き散らし、バルゴンは絶命する。

が、しかし。バルゴンの死体を死角に利用して接近してきたバルゴンがユーゲンの倒したバルゴンの死体を乗り越え、ユーゲンのガンヘッドに飛びかかる。

だがユーゲンはすぐに反応しない。

いや、攻撃した直後だから、すぐには反応できない。だから、このままならユーゲンはバルゴン中型種に殺される。

“味方が、誰もいないなら”。

瞬間、大気を斬り裂く鋭い音が響くと共にバルゴンの首が宙を舞う。

メドヴェーチ04、エリザヴェータ・マツナガ曹長のガンヘッドが装備している長刀で首を斬り飛ばしたのだ。

『もう、またナイフで近接戦闘して、もう少し腕を鍛えてからやらない

と、殺られちゃうわよ?』

後衛の部隊にベルホヤンスクに向かっていた群れの一部が引き寄せられ、前衛との部隊間距離狭められた為に前衛と合流しに来た後衛指揮官のエリザがユーゲンの援護に現れたのだ。

「すみません、曹長。お手数をお掛けしました。」

『メドヴェーチ01より各機へ。HQより情報が入った。大型種はこの先の丘の向こうにいる。急いで潰すぞ。』

「「「了解!!?」」」」

ニコライの指示に従い、全機が行動を開始する。

ユーゲンは背部兵装担架にある、日本経由でイギリスから納入した対大型種攻撃用の127ミリ速射滑腔砲を展開し、右肩の支援コンテナ搭載用の接続口に滑腔砲の銃床をマウントし、固定。

『さて、ストラヴィツキー軍曹、ベシカレフ伍長、丘を越えれば大型種とご対面だ。ビビって小便を漏らすなよ?』

「んなっ!?」

『ちよ、ちよつと隊長……ツ!!?』

ニコライの言葉に、ユーゲンもリーナも動揺してしまう。

だが、それで緊張が解れてしまうのだ。

恥ずかしいが、ありがたいものだった。

そして丘を越え——赤い瞳に錆色の堅牢な外殻、その各所から白い突起が生え、薄紅色の結晶のような生体レーザー照射器官を背中に持つ、バルゴン大型種が、眼前に映る。

『大型種確認——全機、追加装甲前面展開!!?切り込むぞ、ブチかませ!!?』

ニコライが檄を飛ばし、全機が追加装甲を前に突き出すようにして構えながら、127ミリを背負うユーゲン以外の機体が、36ミリで砲撃を喰らわせながら突撃する。

追加装甲を前面に突き出すように展開しているのは、大型種に、“追加装甲が的だと認識させる”ためだ。

追加装甲と機体の装甲には対レーザー蒸散塗膜が施されており、追加装甲で8秒、機体装甲で6秒防げる。

そして大型種の生体レーザー照射時間は短くて3秒間、長くて7秒間。

つまり最大2発までなら防げる。その間に仕留めれば——
——瞬間、バルゴン大型種の目が妖しく光る。同時にけたたましいレーザー警報音が管制ブロック内に響く。

初期照射——生体レーザーを放つ対象のターゲットイングを行う際の照射を大型種が行ったのだ。

そして対象は——ニコライのガンヘッド——の、追加装甲。

瞬間、レーザーが照射され、空気が膨大な熱によりプラズマ化し、目に見えないほどの速さのエネルギーが光速で襲い掛かり、追加装甲に穴を穿つ。

その間7秒。

ニコライは穴が開いて使い物にならなくなった追加装甲を投棄。

すぐ様ダニールとイリーナがフォローに入る。

大型種はその3人に気を取られる。

その隙に、

「行きます!!? 援護頼みます!!?」

127ミリ速射滑腔砲を持つユーゲンを先導に後衛部隊が突撃する。

大型種はレーザー照射後は照射器官の冷却、そしてエネルギーの充填を行う必要がある。

その隙にをについて127ミリ速射滑腔砲で照射器官のプリズム部を潰すのだ。

『06、07、08は大型種の脚部に砲撃を集中!!? 私は、05と共に照射器官破壊作業を行います!!?』

エリザが後衛班に命ずる。

同時に背部兵装担架から120ミリ短距離滑腔砲の代わりにD—03発射機を搭載した突撃砲を展開する。

ユーゲンの127ミリ速射滑腔砲同様、レーザー照射器官破壊に必須の兵器だった。

掘削弾頭が照射器官本体の中心まで潜航して、爆発したのだ。

それで生体レーザー照射器官は完全に破壊された。

『メドヴェーチ01よりH Q!!?レーザーヤークト成功!!?繰り返し、レーザーヤークト成功!!?』

ニコライがベルホヤンスク統合基地司令部に連絡を入れる。

『H Q了解。直ちに面制圧攻撃を開始する。直ちに退避されたし。』

『了解。総員傾注!!?高度100まで跳躍!!?ズラかるぞ!!?』

ニコライがそう叫ぶと全機が“制空権を奪回した地域の安全高度”まで跳躍し撤退を開始する。

数十秒後、ロケット弾と砲弾の雨が、大型種を含むバルゴンの群れを蹴散らして行った。



ギジガ統合基地・H S S T用滑走路。

ゆうなぎ型再突入装甲駆逐艦3機がそこに着陸してきていた。

「ここが…ロリシカ……」

千尋が呟く。啞然とした声音で。

見渡す限り白銀の雪原——と、鮮血で染め上げられた赤い、紅い雪原とそこに転がる人とバケモノの亡骸。

その景色は、まるで——

「死んでるようなものじゃないか…」ここ（ロリシカ）“…”

「酷い有り様だろう?」

隣からまりもが言ってくる。

「…17年前からこうなんだよ。ロリシカは。」

「17年前から!?!?」

まりもの言葉に驚き。思わず千尋は聴く。

「ああ…17年前からバルゴンと呼ばれる巨大生物とロリシカは戦い続けてるんだ…昔は男が闘っていたが戦死者が増えて行き、女性まで投入するも、さらに戦死していき…今では16歳以上の子供まで戦場に駆り出されるんだ。」

まりもは憂うように言う。

見渡す限り阿鼻叫喚の地獄で自分や箒と同一年の子供がバケモノと殺し合っているのだ。

その、“平和な日本では普通あり得ない異常”に、千尋は戦慄する。
「あ、あのツ…!!??」

ふと、後ろから少年が声を掛けてきた。

ロリシカ軍のBDUに身を包んだ、栗色にアホ毛の生えた少年だ。それに千尋もまりもも振り返る。

「ロリシカ国防陸軍第1独立戦略機中隊所属、ユーゲン・ストラヴィツキー軍曹であります!!?? 神宮司三佐はこちらにおいででしようか!!??」

直立不動の姿勢のまま、ユーゲンは敬礼する。

顔には疲労の色がある。作戦直後なのだろう。

「私が特務自衛隊・ロリシカ派遣隊・戦略機墨田教導隊隊長、神宮司まりも三佐だ。こちらは部下の篠ノ之千尋二士。それで何の用だ？」

「はっ。中隊長より案内役を頼まれましたので、参りました。初参加の方もいると伺いましたので…。」

疲労困憊なのに無理して笑顔を作りながら答える。

「…そうか。では箒を呼んで…」

まりもが言いかけるが、基地に鳴り響いた警報がそれを遮った。

見ると、3機の戦略機が別の滑走路へのアプローチに入ったのだ。どの機体も酷い有り様だった。

1機は左手が肩部からもげていて、もう1機は右腕が肩から千切れ、左手が肘あたりで千切れている。

そして最後の1機は————— 右脚が膝間接の辺りで千切れている————— 瞬間、跳躍ユニットのスラスタ部が爆発する。

「1機ヤバいぞ!!??」

その場にいた誰かが叫んだ。

普通なら、次に取る手段は—————

「緊急脱出（ベイルアウト）…」

千尋が呟く。

だがその機体は“ベイルアウトすることなく”、滑走路に叩きつけ

られ、増槽に引火、爆発する。

「!??しなかつた!??」

思わず千尋は驚いて叫ぶ。

「しなかつたのではなく、出来なかつたんだろう。」

まりもが言う。

「ええ、多分近接密集戦で装甲のフレームが歪んで…よくある話です。」

爆発し、炎を上げている戦略機に消防車が消化活動をしている、普通ならパニックになる状況を、まりもも、ユーゲンも、客観的に見ていた。

千尋はそれに寒気を覚える。

「…千尋、これが戦場の空気というやつだ。覚えておけ。」

戸惑っていた千尋にまりもが言う。

「…察するところ、篠ノ之二士は初めてなんです。ここに来るのは。」

ユーゲンが千尋に言う。

「ようこそ、我がロリシカ共和国へ。【神亡き屍戚の地】へ。」

ギジガ統合基地。

ギジガ郊外にある、アメリカ資本の基地でロリシカ国防陸軍、ロリシカ国防空軍、ロリシカ国境警備軍、在ロリシカ米軍、モナークシベリア支部の軍事施設を集結させ、艦載転用砲やVLS、戦車隊や対艦攻撃部隊などからなる第1から第6要塞陣地や2000メートル級滑走路を6本、戦略機専用カタパルトを36基、補給施設からなる中央司令基地。

そして中央司令基地を囲うように周囲には第1から第14前哨基地が存在し、それら全てをまとめて統合基地としているのだ。

第1首都ヤクーツクにあるヤクーツク統合基地に次ぐ大規模基地…正確には戦略機専用カタパルトの数だけなら国内最大だった。

(何もかもスケールが違い過ぎる———)。

千尋は思わずそう思う。

日本ではこの、牙城と言うに相応しい、ベルホヤンスク統合基地や、それ以上のヤクーツク統合基地に匹敵する規模の自衛隊基地を、千尋は知らないから。

先程は“死んでいるような雪原”に気を取られていたが、改めてこの基地を見ると、圧倒される。

今は箒と共にユーゲンに統合基地内を案内されている所だった。

その間に整備班や輸送班が千尋たちの戦略機をエプロン（機体駐機場）に運んでいた。

「…以上がこのギジガ統合基地の説明になります。何かご質問はありますか？」

ユーゲンが疲労困憊な顔を必死で子どもらしい笑顔を浮かべて誤魔化しながら、聴く。

「じゃあ、私が…」

箒が、手を握りこぶしにしたまま、挙げる。

ちなみに握りこぶしで手を挙げるのは、自衛隊の一般的な拳手の仕方だ。

「あの、立ち入り可能な場所と不可能な場所がありますか？」

歳は同じくらいだろうが、階級が上なので、箒を敬語で話す。

「そうですね…基本ロリシカ国防陸・空軍の基地内は司令部や野戦陣地群を除けば立ち入りはあらかじめ可能だと思います。ただ米軍基地やモナーク機関の敷地内には立ち入りできません。」

「分かりました。」

「他にはありますか？」

「えっと、じゃあ自分が…」

今度は千尋が拳手する。

「…この基地、その…コンビニとかはありますか？」

少したじたじしながら聴く。

「コンビニ…ですか？あー…残念ながら日本の自衛隊基地みたいに“眠らぬ不夜城”たるコンビニはありません。そういうのはギジガ市街に出ないとないかと…何か御買い求めのものでも？」

ユーゲンが応え、純粹無垢な瞳で千尋に聴く。
すると千尋はさらにたじたじして、言うべきか、悩む。

「なんだ？ハッキリ言わねばわからんだらう？」
箒が言う。

「ちよ…あのさ!!?こつちにだつて言える事情と言えない事情があんの!!?そ、その…女の子には言いにくい事情が…」

顔を酷く赤くして、焦りながら応じる。

瞬間、ユーゲンは察した。

「生理用品や売春本ですか？」

「ちよ!!?ちよ!!?軍曹!!?」

「なんだ千尋やっぱりオトコノコだな？」

何気に千尋が恥ずかしくて言えない事をさらりと言うユーゲンに、千尋がさらに顔を赤くして叫ぶ。

それを箒がおちよくる。

「あ、すみません。」

それを笑いながらユーゲンは謝る。

「…生理用品とかは貴重だし、多分ほとんどないかと…それらは大抵が輸入品ですしそれも途絶えつつありますね。みんな食料や弾薬、資材を最優先で輸入してますから…。」

瞬間、上空で爆音をとどろかせながら、在ロリシカ米軍のB-52ストラトフォートレス爆撃機編隊12機がロリシカ空軍のSu-47Rベルクート戦闘機に護衛されながら千尋たちの頭上を通過する。

それを千尋たちは見上げる。

そう、ここは戦場なのだ。それも最前線。

平和な日本みたいに設備や商品が充実してるわけではない。

それもそうだ。戦略機や戦車が常時警戒しているこの中央司令基地から一步外に踏み出せばバルゴンの支配する灰色の世界が広がっているのだ。

さらにコルイマ山脈の向こう、サハ共和国国境からはロシア軍も領空侵犯してくる。

この国はバルゴンとロシア軍によつて板挟みだからこそ、戦力が強

大なのかもしれない。

「…大方、残存バルゴンの掃討に行っただんですね…戦車やMLRSによる砲爆撃や超音速爆撃機による絨毯爆撃でも一度だけでは撃ち漏らしも多いですから…。」

ユーゲンが補足するように言う。

3人の視線は、バルゴンの支配する灰色の世界へと飛び立って行く爆撃機編隊に固定されたまま、それを目で追っていた。

■■■■■■■■■■

ギジガ統合基地・多目的室

そこは半ば会議室となっており、まりもと副官である新井はそこで今後行われる銀龍と荒吹壱型丙（寒冷地仕様）の実戦テストの打ち合わせのために、特自ロリシカ派遣隊代表、および防衛省技術試験小隊長として各部隊代表と会議を行う予定だったが、こちらの状況はそれを許してはくれなかった。

…正確には“実戦テスト”などという“お遊び”を悠長にしている暇が無くなった、というワケだが。

「バルゴンの再攻勢が差し迫っている、だと…？」

震える声が瀟洒な室内に響く。

「そんな…まだ来るの…？」

呻く兵士もいる。

まりもは冷静な顔で壇上の兵士を見ていた。

まりもだけではない。その場にいる現場指揮官——特に、

激戦地に送り込まれる国防陸軍メドヴェーチ中隊指揮官のニコライや、いつ激戦地に送られてもおかしくない国境警備軍ジャール大隊指揮官のフィーツィカ・ラトロワ中佐らも冷静な顔でいた。1000単位のバルゴンの大規模侵攻が来た数日後にまた大規模侵攻が来るなど、ロリシカでは、よくある事だ。

「ほぼ確実です…バルゴン群は旧オムクスチャン付近で梯団を形成。確認できただけでも中型種500体以上。小型種に至っては800体近く…梯団先鋒の前哨基地基地群到達はおそらく4日後かと…。」

壇上のプロテクターを背に参謀の兵士が状況を厳しい顔で伝える。

その報告に誰もが戦慄する。

何故なら今日の午前中に同規模の梯団による襲撃を受けているのだから。

「幸いにも大型種は確認されていません。4割程は砲兵や爆撃機で撃破可能です。」

参謀のその一言で場の空気の緊張が僅かに緩む。

だが完全にな緩まない。何故なら――

「…今朝より数は少ないが――防ぎきれるのか？連日続いた大規模侵攻で戦力は疲弊している。」

第1戦車連隊の指揮官が言う。

それで会議室の空気はまた緊張に満ちる。

何故なら、第1から第14までである前哨基地のうち、すでに第4、第6、第7、第8、第11前哨基地は壊滅寸前。その他の前哨基地も残存戦力はわずか3〜6割。

まともに戦えるのは残存戦力が6割ある第1前哨基地のみだった。

さらに堅牢なベルホヤンスク統合基地もたび重なる大規模侵攻で破損箇所が目立ち、そこから侵入されれば基地を打通して市街地にバルゴンが流れ込み、ギジガ市民5万人が皆殺しにされる――

現存戦力、弾薬の枯渇、兵の疲労…それらの問題を抱えており、今回の大規模侵攻を乗り切られる可能性は――酷く低かった。

「それは――…」

参謀も口が詰まる。

どうしようもないくらい、絶望的なのだ。最悪ギジガ統合基地のみならずギジガ市自体が玉砕しかねない。

「…ひとつ、提案があります。」

まりもが立ち上がって、言う。

「我が防衛省技術試験小隊を、防衛戦力に加えていただきませんか？」
瞬間、周辺がざわつく。

「…神宮司少佐、参加していただく意思があるのは大変嬉しい限りです。…が、今回は貴官らが想定していた数の数倍近くいる。」

基地司令の男が言う。

つまりは足手纏い。なのだろう。ただでさえ試験小隊という部隊で、さらに新米を2人も抱えているから。

「ですが司令、一個小隊とはいえ戦力が増えることで防衛戦力が僅かでも強化できる…という意味では我々を貴軍の司令系統に一時編入するのが適切かと。」

だが、まりもは喰い下がらずに続けて言う。

「しかしそれでもまだ戦力が…」

参謀の兵士が言うが

「…そこは大丈夫だ。我々国境警備軍の我が大隊を加えれば。」

ラトロワが言う。

確かにジャール大隊も加われば戦力に幾らか余裕ができる。

「だがそれでは…」

だが同時にロシアに対する牽制役がいなくなり、ロシアから侵犯される可能性が跳ね上がる。

かといって国境警備軍の戦力なしにバルゴンからギジガを守る事は出来ない。

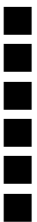
バルゴンを相手取るか、ロシアを相手取るか、どうすべきか分かってきてはいるが、ロシアがバルゴンの存在を知れば核ミサイルの2、3発を撃ち込んで来かねない。

「明後日には先週セベロ・エヴェンスク空港に到着した空自のAn2 27Jアントノフ輸送機から陸揚げされた18式メーサー殺獣光線車部隊がベルホヤンスクに到着します。それらも戦力に加われば、戦略機の穴埋めも出来ますし、国境警備軍全てを導入せねばならない事態は回避できます。」

まりもが、言う。

それなら確かに、ギジガの防衛戦力はまだマシになる。国境警備軍も対ロシア用の戦力を残せる。

それならば――



IS学園・食堂

セシリア、簪、本音、神楽たちは昼食を食べつつ昼のニュースを見ていた。

内容は、ロリシカのギジガ近辺で戦闘が激化している——
というものだった。

セシリアたちはそれを心配そうな目で見るが、周りの女子たちはまるで気に留めない。対岸の火事と思っているのだろう。

…少し前まで、ロリシカが本当に戦っている敵の事を知らされるまでは、セシリアたちも気に留めなかった。

だが、事情が変わった。

光から、“内戦と偽ってまで”隠しているロリシカの本当に戦っている敵を教えられたから。

だから、特自の都合でロリシカに派遣された千尋たちが心配だった。

「千尋…大丈夫かな…？」

簪が呟く。

「きつと大丈夫ですわよ…少ししたらひよっこり帰って来ますわ…」

確証を持ってない声音で、セシリアは呟く。

そんなセシリアたちから離れたテーブルで、織斑と女子たちは昼食の時間を甘く過ごしていた。

「気楽でいいわよね…あちらさんは。」

神楽が言う。

この間の墜落事故の謝罪も織斑からセシリアたちは受けていなかった。

代わりに千冬やクラスの間ともな思考ができる女子たちからは謝罪されたが。

「い、一夏!!?あのさ…あ、あたしとの約束…覚えてる?」

女子たちを差し置いて、鈴が聴く。

「あー確か酢豚をおごってくれるんだろ?」

「違うわよ!!?私が酢豚をご馳走するからそれを食べてって言ったの!!?」

それを遠目に見ていたセシリアが、

「…どういう事ですの?」

神楽たちに聴く。

「日本には味噌汁を飲んでくれる? っていう、女性が使う口説き文句…まあ、プロポーズね。それを酢豚に変えたんでしょね。」

神楽が言う。

「でも、それって昭和のネタだよね。」

本音が言う。

「そうそう。今時その通じる男の子はいないと思うなあ…」
苦笑いしながら神楽が言い、セシリアがそれに納得する。

「だから!!? あたしと付き合ってたって言ってるのよ!!?」

鈴が赤面しながら必死で言う。

「やだ本音ちゃん聴いた?」

ニヤニヤしながら神楽が言う。

「聴いた聴いた。」

本音もニヤニヤしながら言う。

「なんだ。そんななら最初からそう言えよ。」

一夏が爽やかな笑顔で言う。

「い、一夏…」

鈴は嬉し涙を浮かべながら、笑顔を浮かべる。

周りの女子たちもヒューヒューと煽る。

「付き合ってたよ。」

やはり一夏は爽やかな笑顔のまま言う。

「あ、ありが…」

(やっと…やっとだ…やっと、あたしはあの汚れた世界から逃げ出せる——)

酷く嬉しそうな笑顔を浮かべて、賀や、共産党から逃げ出せると、そう安堵した、瞬間。

「別に付き合ってたよさ——買い物くらい」

「はっ。」

一夏が爽やかな笑顔のまま鈍感スキルを発動し、天にも昇る気持ち

だった鈴を再び地獄に叩き落とし、鈴の淡い希望を粉碎した。

周りの女子たちはズツコケ、セシリアたちは唾然とし、鈴は…ハイライトの消えた濁りきった瞳で笑顔を浮かべたまま固まってしまった。

「ん？どうしたんだ？」

そして今の現状にも、一夏は鈍感スキルのせいで気づかない。

「あ、はは…うん、知ってた。こうなるって、なんとなくは…あはは…」
乾いた笑いを浮かべながら、鈴はやはり濁りきった瞳のまま、どうしようもなく怨恨で歪んだ顔をして、食堂から出て行った。

一夏はそれに気づかず、頭に疑問符を浮かべる。

「…行きましよう皆さん、山田先生の講座に遅れます。」

セシリアは冷めた瞳を横目で織斑に向けながら言った。

■■■■

ギジガ統合基地・小多目的室

そこには、2つの机が並べてあり、その机とセットで置かれていたパイプ椅子に千尋と箒が座っており、2人の目の前にはホワイトボードを背に立っている特務自衛隊の制服の上から白衣を身に包んだ女性——家城燈一尉がいた。

家城燈。特務自衛隊墨田駐屯地技術開発・生体研究所勤務で、主に巨大生物の研究をしている女性自衛官だった。

特に彼女が自衛官に研修として行う【怪獣学】は墨田駐屯地では有名な話だった。

…もつとも、自分たちがそれを受けることになるとは、予想外だったが。

今回は対バルゴン戦でバルゴンに対する戦術やバルゴンの特性を学ぶために受講することになっていた。

まあ燈自体はモナークシベリア支部に用があったのだが。

「じゃ、始めるわねくさすがにシミュレーションだけじゃバルゴンの恐ろしさは分かんないし。キツチリ教えるわ!!？」

燈はやる気満々で、言う。

「じゃあまずはバルゴン小型種ね。」

そう言うと、ホワイトボードに小型種のデータを纏めた紙をマグネットで貼る。

見た目はトカゲっぽい、一角の生えた獣が書いてあった。

「全長は5メートルから10メートル。主な攻撃手段は突進に鋭利な牙による噛みつき、そして冷凍ガス。」

戦略機や戦車の脅威じゃないし、RPGロケットでもあればあっさり殺せるわ。」

燈の説明に、安堵を覚える。だが、

「でもね。彼らの最大の脅威は数よ。彼らは常に100単位から1000単位で行動してるの。戦略機や戦車ならいざ知らず、歩兵で小型種と戦うのは地獄よ…距離を2メートルまで詰められたらそこでお終い。次の瞬間には貪り食われるか、踏み潰されるか、冷凍ガスで凍死させられるか…その、どれかよ。」

燈が恐怖混じりの声音で言う。多分、実際に目の当たりにしたのだろう。

そして千尋たちも燈の説明に、血の気が引く。

「あ、あの、では対処法は…?」

箒が、聴く。

「…まず充分に距離を取ることね。強化装甲殻ならいけるだろうけど、生身じゃ距離をとって銃撃しないとアウトだから…：接近されても殺られない場合が極稀にあるんだけどね…：そういう時は、戦斧で叩き斬るしかないわ。拳銃じゃ殺せないしね…：せめてアサルトライフルか軽・重機関銃でもないかと殺せないわ。…これで小型種の解説はお終い。次は中型種ね。」

そう言いながら小型種の紙を外し、今度は中型種の情報を書き込んだ紙を貼る。

今度は小型種の面影を持ちつつも、背中に背骨の上に連なるようにいくつもの突起が生えており、尻尾の先端が薙刀を連想する鋭利な形状をした外見だった。

「これがバルゴン中型種。全長は20メートルから35メートル。だいたい、10単位から100単位で行動しているわ…：主な攻撃手段は

小型種と同じく突進、噛みつき、冷凍ガス。新たに加わった尻尾の先端によるなぎ払い。そして：極たまにだけ頭部の角から生体レーザーを照射する個体がいるわ。」

燈が言う。やはり、千尋や箒からは血の気が引いて行く。

「極たまとは言ったけど生体レーザーを照射する個体は主に地中進行を行う場合のみ確認されているから基本はいないんだけど戦略機や戦車でも、数発食らえば破壊されてしまう：でなくても、サイズが理由で戦略機や戦車の脅威になるわ。戦略機や戦車一番の脅威といつても過言じゃない：実際、戦略機や戦車の被撃破数が最も多いのは、この種類なの。」

：効果的な対処は側面に回り込んで横腹、あるいは頭上に回避して背面、もしくはは頭部に36ミリか120ミリを喰らわせるか、長刀で切断するか：正面からでも良いんだけど、頭部の一角がうまい具合に砲弾を弾く角度になってるから、当てづらいのよ：。正面から攻撃するなら相手が口を開けた瞬間に120ミリを撃ち込むと良いわ。」

すると千尋が質問する。

「あの、生体レーザーを照射する個体への対処はどのようによ？」

それに燈は困った顔をして、

「：実はまだ分かってないのよね：地中進行をしてくるケース自体が少ないし：。」

そう、答える。

「：それに、遭遇した部隊はほぼ全滅しているし。」

「：：え？」

燈のその一言に2人は驚く。

「いきなり地中から出現して至近距離からレーザーを喰らうのよ？：：避けられっこないわ。」

燈がそう言うのと、さらに2人から血の気が引いて行く。

「：次はバルゴン大型種ね。」

そう言いながら中型種の情報を書き込んだ紙を外し、大型種の情報を書き込んだ紙を貼る。

そこには小型種、中型種の原型があるものの、体の各部位に突起が

生えており、背中には見るからに危ない感じの結晶状の突起が生えている。

「これが、航空機を生体レーザーで撃墜することでこのロリシカから人類の制空権を奪った、バルゴン大型種。全長は45メートルから60メートルほど……大型種は高度1万メートルを飛翔する物体をほぼ正確に捕捉し、有効射程距離10キロメートルに侵入した瞬間、航空機くらいならあっさり撃破できる生体レーザーを放つわ。まあ、今の数値は地形が平らだった場合だけど……攻略には戦略機で直接破壊するレーザーヤークト、または超音速爆撃機による飽和攻撃があるけど……前者はリスクが高過ぎるのよ……貴重な戦略機と戦略機パイロットを失いかねないし……超音速爆撃機なら、機体が捕捉される確率も撃墜される確率も低い。でも、投下した爆弾の命中率が悪いうえに被撃墜率が極めて高いの。だから精鋭部隊が駆除にあたるわ。」

重金属弾展開によるレーザーの減衰を引き起こしたりもするけど、大型種は空間飛翔体の撃墜率が最も低くて66%、最悪98%という数値だから……笑えないわよね……。まあ作戦時に遭遇する事はないだろうから安心して。」

千尋と箒はもはや真っ青だった。

こんなバケモノがこの国に跋扈しているのだ。

そしてそのバケモノたちとユーゲンたちは絶望的な闘いを繰り広げているのだ。

(……昔の俺を……ゴジラを人間が見た時もこんな感じだったのかな……)

燈の説明を聞きながら、千尋はふと思う。

「……ま、本当はこれを上回るバルゴン超大型種というのがいるんだけど……」

瞬間、2人は稲妻に打たれたような衝撃を感じるとともに戦慄した。

今言ったようなバケモノを上回るバケモノがまだいるというのだから。

「っ、本当ですか!?？」

千尋が思わず叫ぶ。

「…まあ、その反応が普通よね…：実はね、バルゴン超大型種の詳細なスペック、対策法は確立してないし、遭遇するかすら不明なの。」

「…？…どういう事ですか？」

燈の説明に箒が聴く。

「一切の戦闘記録がない…：というか、”バルゴンとは違う別のモノに殺されたであろう死骸”がひとつ見つかっただけで、まだその死骸も解析中なの…：それに大部分がひどい損傷で…：分かってない事が多いのよ。」

燈が深刻な顔をして言う。

つまり、バルゴン以外に巨大生物が存在する可能性があるというのだ。

「…つと、座学はここまでね。じゃあ、解散!!？」

燈が言う。それに反応して2人は立ち上がり、直立不動となり、

「敬礼!!？」

箒が号令をかけ、千尋も敬礼をして、座学は終わりとなった。



ビキニ環礁・洋上プラント

基盤ブロック。

そこには朝倉がいつも通り瓦礫に腰掛けながら本を読んでいた。

その顔は相変わらず妖艶な笑みを浮かべていて――

そこに、少し大きくなったような黒い巨獣――ゴジラが基

盤ブロックの狭くなっていた縦穴を突き破って上がってくる。

「――あら、おかえりなさい。れい。」

朝倉は、れい――ゴジラにそう名付けた名前を呼ぶ。

そして、ゴジラもそれを嫌がる素振りもせず、朝倉に近寄る。

ゴジラは何の警戒もせずに朝倉に近寄る。

ゴジラに面と向かって話してくれる人間だから、自分と互いに似た者同士だから、近寄る。

自分と同じ『人間の勝手で被爆させられた者』だから、近寄る。

「グルル…」

ゴジラが少し甘えるように、朝倉の近くに寝転ぶ。

「…もう、甘えん坊ですね…ずっと独りだったから、当たり前ですかね…」

朝倉がゴジラの素肌に触れながら呟く。

人間に被爆させられ、人間に絶対抗えない力を無理矢理与えられ、バケモノにされてしまった、哀れな獣をあやすように触れる。

「本当に…私にそっくりですね…」

ふと、朝倉は10年前のあの日思い出す。

突如空気を切り裂きながら飛来したミサイルが自分の住む家と自分の街の原発に直撃した——自身に呪いが降りかかった、日の記憶。

人類全てが、1人の“天災”の傀儡となり、自分を殺そうと牙を剥くキツカケとなった日の記憶を——。

EP-09 最前線ノ暇／雪原ノ暴龍（アンギラス）

ギジガ統合基地・兵舎

その一室。

簡易デスクの上で椅子に座ったまま上半身をうつ伏せにして子供らしい寝顔を浮かべながら眠っているユーゲンがいた。

顔を疼くめている場所には常に持ち歩いている部隊に関する記載をしたノートだ。

ユーゲンはその記録係りで、今回の作戦について記載中に戦闘と千尋たちの案内による疲労で睡魔に勝てず、眠ってしまったらしい。

そこに、リーナが入ってくる。

普通ならリーナが入って来た瞬間に意識を覚醒させ、飛び起きて「寝てなんかいませんでした。」というのだが、今のユーゲンにそれが無理なくらい疲れているらしく、無反応だった。

「あの、同志軍曹…疲労困憊でお休みのところ悪いのですが…」

リーナが声をかける。

「…ふえ？」

すると眠い目を擦りながら少し可愛らしい声をあげる。

いつもより反応が圧倒的に鈍い。

「…ベシカレフ伍長、何か御用でしょうか…」

眠気のせいで重い瞼を指で擦りながら聴く。

それを見て、リーナは、

（…ああ、やっぱり子供なんだな…）

と思う。

ロリシカの兵員補充のために女や16歳の子供まで徴兵される徴兵制の影響で徴兵され、無理な野戦昇格を繰り返され、メドヴェーチ中隊で幾多もの修羅場を乗り越えても、まだ徴兵されてから一年しか経っていないユーゲンは、年頃の子供らしい抜けているところがあるのだ。

「…伍長？」

やっと開きだした瞼で、リーナに聴く。

「…あ、すみません。あの、今日1730時より大会議室で次の作戦の解説があるらしいので、それを伝えに…」

「あ、どうも。助かります。」

「いえ…あの、軍曹。」

「なんですか？」

「寝るなら簡易ベッドの方が良いですよ？こんなところで寝てたら風邪ひいちゃいます。」

リーナが言う。

それにユージェンは顔を顰めて、

「そうしたいのは山々なんです…布団に潜ると完全に熟睡しちゃうので…」

そう、言う。

「あ、じゃあ私が起こしにきます。1650時でよろしいですか？」

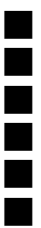
リーナが気を利かせて、言う。

「あ、それくらいで。助かります。」

「いえいえ…ではそれくらいに…失礼しました。」

リーナが、部屋から出て行く。

するとユージェンは、簡易ベッドに潜り——ほんの数秒で眠りに就いた。



ギジガ統合基地・戦略機格納庫

千尋と箒は自機の整備や調整のためにそこに來ていた。

「…ふう」

特自のBDUに身を包み、機械油で所々を汚している千尋が、駆動系部分の整備をしながら、かいた汗を首からかけたタオルで拭う。

「…にしても、なんだこの機体…」

千尋は、怪訝な顔をして、ふと呟く。

関節やセンサーなどは既存技術が使われているが、動力源たる主機が何処か分からない。

跳躍ユニットは既存のロケット・ジェット複合エンジンだが、主機は如何なるものか分かっていない。整備班班長の山本も設計書を隅々まで確認したらしいが、それらしいものは見つからなかったらしい。

そしてこの機体には主機以外にも様々な箇所がブラックボックス化されている。

山本が今整備している155ミリ超電磁投射砲もだ。

「…なんか面倒くさい事に巻き込まれた感じだよなあ…」

思わず千尋は呟く。

銀龍が墨田絡みの代物という時点で嫌な予感はしていたが、搭乗者にすら情報を開示しないのは――

「特自内でのハト派とタカ派の内ゲバが激化してるってか？…はあ…面倒くせえなあ、派閥とか政治とか…」

頭をガシガシとかきながら、うんざりした顔で呟く。

――ほらな？結局彼奴らは自分達しか見てない。巻き込まれる俺達の事を見ていない。そんな奴らに加担するだの、守るだの、する義理なんざないだろう？

何処からともなくもう1人の自分が言ったような気がした。

「…うるせえよ。」

それに、千尋は無意識に呟いてしまう。

言ったところで意味などないのに呟いてしまう。

彼奴らが――人間が身勝手なのは今に始まった話じゃない。そして俺だって人間全てを受け入れた訳じゃない。少なくとも、まだマシな人間を受け入れただけだ。人の基準ではなく俺の基準で。それが傲慢な事くらい分かってる。実際、自分がバケモノになる要因になった核を作った人間、使った人間までも受け入れるつもりなんてこれっぽっちもない。

家族を奪った事を、自分をバケモノに変えた事を根に持ってない訳じゃない。

…だが、それがなければ筈にも会えなかったのも事実で――

「…はあ…頭痛え…」

自分の因縁と小難しい事を考えて、頭痛がしてくる。
自分の誰にも言えない事だから。

箒と同じように自分だけで抱えている事だから。

(こんなんじゃ、箒姐のこと言えねえなあ…お互い様だし。)

千尋は苦笑いしながら、内心思う。

「千尋、整備の調子はどうだ？」

整備班長の山本が聴いてくる。

千尋と箒は苗字で呼ぶと紛らわしいため、下の名前で呼ぶ兵士が多い。山本もその1人だ。

「まあやっつてはいるんですけど…」

千尋は微妙な顔をして、

「主機関連の確認ができないのが…ちよつと。」

そう、言う。

それに山本も苦笑いしながら、

「まあ、銀龍は荒吹壺型丙とは違うからなあ…運用思想とか設計思想とか…」

銀龍は荒吹や荒吹壺型丙より若干スマートで、なおかつブレードを腕に仕込んでいる他にマニピュレーター先端や足先がスパーカーボン製の爪になっているなど、明らかに荒吹より近接密集戦を想定した機体だった。

「でも主機まで秘密なのは変でしょう？…いざ何かしら不調があつて整備したい時もできないし。」

それには山本も同意する。

いくらなんでもそれはおかしい。

主機が見られては困るのか、主機の安全性に絶対的自信があるのか…まあ、間違いなく前者だろう。

銀龍を手掛けたのはタカ派の連中らしいから。ハト派であるこちらに知られては不味い事をやらかしている———と考えるのが普通だ。

「ふ…組織つてなくんでこんなに面倒くさいモンなんですかね？」

千尋がため息をつき、汗を拭いながら、聴く。

「…さあなあ…こればっかりは人間の根底にあるモンが原因なんだろうなあ…欲深い生き物だからな。人間って。」

山本が困ったような、憂うような顔をして言う。

「ま、こいつが量産される事は無いだろうなあ…」

「え!?..どうして…」

山本の言葉に千尋が少し驚く。

それに山本が理由を話す。

「まずひとつ、近接密集戦に特化した銀龍はピーキー過ぎるから汎用性に欠ける。」

ふたつ、高価なパーツが使われてるからコスパ：コストパフォーマンスの面で最悪だし整備性が悪い。

みつつ、たとえ量産されても年間10〜20機程度しか無理だ。おまけに維持費が高い。

…これだけの悪要素が詰まってるりゃ、兵器としては欠陥品も良いとこだぞ?なら、信頼性と安全性、汎用性が確立されている荒吹や既存兵器を生産、強化した方がマシだ。」

「あ、あく…た、確かにそうですね…。」

千尋はこれから乗る機体の悪い点を指摘され、少し複雑な気分になる。

「…あく、ちよつと言い過ぎたな。悪い。」

「あ、いえ!!..?」

「まあ、この機体の悪い点はISにも通ずるんだよなあ…。」

ふと、山本が呟く。

確かによく考えればそうだ。

ISは女性にしか乗れないから汎用性に欠ける。無駄に精密で高価なパーツを使うからコストが高いし整備性も悪いし維持費も高い。さらにせいぜい467機しか作れない。

これだけの要素があればISもこの銀龍と同じく欠陥兵器なのだ。

そして山本をはじめ整備スタッフはISの整備もした事があるらしいが、男女問わず、皆が声を揃えて「最悪。」と評している。

並の駐屯地や基地では整備がまともに出来ず、整備ができるのはI

S 関連の資材の集まっている IS 学園や IS 関連の企業、米軍基地くらい、らしい。

だから自衛隊では IS の導入は打ち切り、現在配備中の 10 機も IS 学園への寄付が予定されていた。

とても手に負えないからだ。

そしてそれに反発している IS 乗りがいるが……まあ、それは IS 学園の教師になればいいだけの話。

正直な話、すでに戦略機を配備している自衛隊からすれば IS は目の上のタンコブに過ぎないのだ。

だから今年度を持って、IS の完全撤廃を決定した。

配備されている IS は来年度に予定通り IS 学園に寄付される。

——来年度があれば、の話だが。

「ツッ!? 敬礼!!?」

瞬間、箒と共に機体の整備をしていた楠本さやか二曹が叫ぶ。

見ると、戦略機ハンガー内にまりもが入ってきたのだ。

千尋も山本もすかさず起立し姿勢を整え、敬礼する。

「楽にしてもらって構わない。本日 1730 時に戦略機パイロット、および整備主任は私と共に大会議室に來い。今回発動予定の作戦会議がある。」

まりもは、そう言い放った。



ギジガ統合基地・廊下。

千尋たちはまりもに連れられ、大会議室に向かっていた。

そして大会議室の手前でメドヴェーチ中隊の面子と出会う。

千尋と箒はその中にユーゲンを見つけて————ユーゲンも

2 人を見つけて——

「あ、先程はありがとうございました。」

千尋と箒が会釈してユーゲンに言う。

「あ、いえいえ。対した事ないです。あれも仕事ですから……。」

ユーゲンが微笑みながら応える。

「…挨拶は済んだか？入るぞ。」

「まりもが少し母性を孕んだ声音で千尋と箒に言う。」

大会議室・17時30分。

そこは大型モニターを3つと雛壇型になっているイスを備えたかなり大きい部屋だった。

そして雛壇型のイスの上には作戦に参加する実働部隊の面子とそれをサポートするCP（コマンドポスト）オペレーター達。

その中には千尋たちが属する防衛省技術試験小隊、ユーゲンの属するメドヴェーチ中隊、ラトロワ中佐率いるジャーナル大隊らも含まれていた。

その眼前の壇上に基地司令の中将が立つ。

「本作戦はロリシカ国防陸・空軍、ロリシカ国境警備軍、在ロリシカ米軍、ロリシカ派遣自衛隊からなる合同軍による大規模作戦である。作戦名は——『クリムゾン・スノー（深紅の雪）』。」

そしてそう言うと、背後のモニターに衛星写真が映る。

そこには、雪原を覆い尽くさんばかりの錆色の群れ——バルゴン群が写っていた。

「これはアメリカ軍が捉えた映像だ。現在、バルゴンの群れ、推定1500体前後がギジガに向けて進行中だ。」

厳しい顔でそう言う。

「先鋒は3日後、ギジガ統合基地・第2前哨基地に到達すると思われる。すなわちここが諸君らの戦場だ。」

戦場、という言葉に千尋と箒は反応する。

今までシミュレーションの戦闘しか体験したことがなかったからだ。

「よって第2前哨基地に陸軍から2個戦略機大隊と1個戦略機中隊、2個戦車大隊と1個自走砲中隊を、国境警備軍から1個戦略機大隊を、在ロリシカ米軍から1個戦略機中隊と1個特射大隊を、ロリシカ派遣自衛隊からは1個戦略機小隊と2個メーサー小隊を移動。そこで部隊を展開し、迎え撃つ。なお、大型種が確認されていないため、司令基地からは空軍のB-52R爆撃機と在ロリシカ米軍のB-2爆

撃機を航空支援に出撃させる。

また万一に備え司令基地に1個戦略機中隊と1個戦車大隊、1個自走砲中隊を展開させる。」

基地司令がやはり厳しい顔で言う。一步間違えれば自分たちの命どころか自分たちの守るべき市民も死ぬのだ。予断は許されないだろう。

次に第2前哨基地の地図が投影される。

ベルホヤンスク統合基地の司令基地からかつては山だったがたび重なるバルゴンの侵攻で削られた丘をひとつ越えた場所にある、ヤナ川東岸、チエルスキー山脈のふもと。

そこが第2前哨基地の所在地だった。

「諸君らも知つての通り、今年度のバルゴンはサハ共和国国境やマガタン、チユクチ・カムチャツカ方面ではなく、ギジガに向けて主にコルイマ山脈を横断するようにに集中的に侵攻して来るため、その眼前にある第2前哨基地はかなりの戦力が集中しているが、同時に被害も甚大だ。よつて工兵部隊や整備部隊も実戦部隊に同行する。」

確かに、基地司令の言う通り、衛星写真から見ただけでもかなり酷い有り様だった。

滑走路には今朝のバルゴン群の死体がまだ片付けられておらず、格納庫には中型種が突っ込んで倒壊しているものもある。そのせいか吹雪にさらされている屋外で戦略機や戦車の整備をしている者も写っていた。

「到着後、整備、工兵部隊は施設復旧を優先。戦略機部隊の展開は以下の通りだ。」

第2前哨基地南部に3軍共同の防衛線を構築しこれを3分割。東部戦域を国境警備軍ジャーラル大隊、西部戦域を在ロリシカ米軍スネーク中隊、そして中央戦域に防衛省技術試験小隊と国防陸軍メドヴェーチ中隊を配置する。」

第2前哨基地の衛星写真の南部に3軍共同防衛線が長方形の黄色いマーカーで示され、青白い点線で東部戦域、西部戦域、中央戦域に分割され、そこに各部隊のエンブレムが配置されていく。

それに千尋と箒は息を飲む。

これから死ぬかもしれない場所に行くのだと、そういう思考が、2人の脳を支配した――。

「千尋、箒。」

ブリーフィングが終わると千尋と箒はまりもに声をかけられた。

「…え？あ、は、はい!!？な、なんでしよう!？」

箒が思わず声を裏返しながら応じる。千尋も声は出さなかったが箒と同じようにビシィツつと、1秒足らずで直立不動の姿勢を取る。

2人共顔には脂汗が浮かんでいた。

初陣の緊張と焦燥感、膨大な情報量のせいでブリーフィングを聞いてはいたものの、内容の3割近くは頭に入っていなかった。

仮に入っていたとしても新兵の2人が作戦内容を聞いて対策を考えるなど無理だ。

だから2人共、『まずい』、と顔に書いてあった。

間違いなく、まりもに叱責されると思っただろう。それが当たり前だと2人共認識しているが、やはりどう切り抜けるか、焦燥感に駆られた脳内で必死に思考する。

「……はあ……」

まりもが2人の意図を察したのか、ため息をつく。2人は叱責される寸前だと思い、全身を強張らせる。

「……これを読んどけ。」

「……へ？（え？）」

2人に差し向けられたのは罵声でも拳骨でもなく、2冊のメモ帳だった。

「お前たちみたいな新米がブリーフィングで緊張して話が聴けない――
――なんてのはロリシカ派兵組ではよくある事だ。」

まりもは怒気を孕んだ声音ではなく、呆れた様な、母性を孕んだ声音で、言う。

「今回はまあ、見逃してやる。その代わりそのメモ帳にどう対策した

ら良いか書いておいたからあとでしつかり読む様に。良いな?」

「は、はいっ!!?お心遣い感謝致します!!?以後は先程の様な失態は…」

箒と千尋が敬礼をして箒が緊張した声音で応じる…が、遮って、

「別にそう畏る必要はない。お前たちみたいな事は誰でも最初にあることなんだ。それに上官が部下を支えてやるのは当たり前前の事だ。怒鳴っていびり散らして暴力を振るうだけでは上官失格だ。お前たちだって愚痴や相談くらい私に言っても良いんだぞ?…そんな事も聞けないようでは、部下を率いる身である私の器が知れてしまう。」

微笑みながら、母性を孕んだ声音で、まりもが言う。

それに千尋と箒は心底安心して、

「はっ!!?有難うございます!!?」

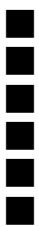
威勢良く返事する。

それにまりもやはり微笑みながら、言う。

「良い返事だ。ああ、ちゃんとメモは読めよ?」

「はい!!?」

そう会話を終えると千尋たちは、まりもに連れられ、大会議室を出た。



IS学園・第2シャフト。

そこでは訓練上がりのセシリアが神楽と本音と共に自機の整備をしていた。

「…もうすぐクラス別トーナメントですわね…。」

セシリアがMF-5トーネードIIの管制ユニット内で呟く。

「そうねえ…簪ちゃん、4組代表だからウチから抜かれちゃったし…。」

神楽が言う。

簪が4組代表である為、学園守備隊から抜かれたという理由だが、他にも学園守備隊以外に正規のIS学園教師部隊が遂に重い腰を上

げて動き出したから、というのもあった。

そして次にやるクラス別トーナメントは1組代表織斑一夏、2組代表鳳鈴音、3組代表イェジー・ロドリゲス、4組代表更識簪の4名がトーナメント制で勝ち上がっていく、というイベントだった。

周りの女子たちはお祭り気分だが――

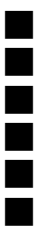
「…何事もなく無事に終わると良いのですが…。」

「それは…ないと思う…多分何か起きちゃうと思うよ…。」

セシリア達には、そういう懸念があった。

織斑千冬の弟であり、世界初のIS操縦者の織斑一夏が参加するのだ。

何かが起きない訳が、無いだろう。



IS学園・生徒会室

そこに簪はいた。

暗部当主にして日本国家代表候補生で学園生徒会である、更識楯無の部屋に。

「か、かんちゃん…その、ご機嫌斜め、かな?」

楯無は部屋のソファに座り、テーブルを挟んで簪と対峙していた。楯無のソファの後ろには従者であり本音の姉である布仏嘘がいる。

「…別に。」

あからさまに不機嫌な声音で応える。

それに楯無は苦笑いしながら、

「し、新型ISの件は…その、ごめんね…。」

簪には専用ISとして白式が送られる予定だったが、それはどういう訳か織斑に渡ってしまった。

だから楯無はそれが原因だと思って謝る。

「そうじゃ、ないよ…。」

ワナワナて震えながら簪が、わずかに怒気を纏った声音で言う。

「どうして、私が4組代表なの?私より優秀な子は、他にもいた。」

「それはお父様が…だ、だってせつかく日本代表候補生の妹なのに…」

楯無は愛想笑いを続ける…が、

「…いつまで私はお父様に——暗部に縛られなきやいけないの?」

静かに、しかし雷鳴のような荒々しさを孕んだ声音で簪は聴く。

それで楯無は黙ってしまふ。

「お父様が私より優秀なお姉ちゃんを暗部の当主に、日本代表候補生にさせた。…で、お姉ちゃんより遥かに劣る、オマケでしかない私にまでお姉ちゃん同様に縛り付けられる未来を求めめるの?何の為に?」
やはり静かに、だが怒りが激しく込み上げてきた状態で簪は言い続ける。

「お父様が、暗部が思い描いた方向を進まなきやいけないの?でなきや落伍者?ふざけないで。」

やはり簪は静かに言い続ける。

「…こんなこと言っても八つ当たりにしかならないことくらい分かってる…お姉ちゃんのおかげで少しでも私は自由を手に入れられたのも分かっている…でも、なんでいつまでも縛られなきやダメなの?私の未来は、なんで私が決められないの?」

それを見た嘘は少し悲しそうな顔をして部屋から出て行き、楯無は悲しそうだが、笑みを浮かべて、

「…そうね…貴女は私より自由だもの…自分のことくらい自分で決めたいよね…」

楯無には暗部の次期当主という、父が敷いたレールの先にある縛られた未来しかない。

だが簪はまだ自由な未来があるのだ。

楯無はそれを少し羨ましく思うのだ。

楯無の内心を察したのか、簪は少し申し訳なさそうな顔をして、

「…ちよつと言ひ過ぎたね…ごめん…」
謝る。

「ううん、良いの。そうよね…敷かれたレールの上しか歩まなかった私とは違って自由があるのに、まだ縛られてちや…鬱憤だつて溜まるわよね…溜め込むとよくないから、お姉ちゃんには、そうやって愚

痴として言えば良いのよ？お父様に言ったりしないし…」
「…うん」



ロリシカ・旧オムクスチャン近郊。

バルゴンの侵攻によりかつて山だった場所はほぼ削られ、今や高地となつているそこに、吹雪により降り積もる雪の上を走る1つの巨大な、体軸があつた。

錆色の体にプリズム状の突起を背中に持つ、バルゴン大型種だ。

だが体は戦略機ではつけられないほど巨大な切り傷や裂傷にまみれた状態だった

そしてその大型種は恐怖し、何かに怯えた様子で走り続ける。

少しでも遠くへ、遠くへと逃げようとする。

ついには息絶え絶えとなり、一度足を止めてしまう。

そして後ろを確認するが、何もいない。

それでバルゴンは安心する。

だが、目の前を仄かに鈍く光を放つ蝶が通り過ぎ、頭上の積乱雲で雷の鳴る音が聞こえたかと思うと、

瞬間、閃光と共にその蝶に落雷が命中する。

至近距離で凄まじい閃光が光つたためにバルゴンは一瞬視界を奪われる。

それと同時に、ズン、という足音と凄まじい殺気が背後から発せられた。

視界を取り戻したバルゴンは、眼前で落雷を受けた蝶が背後に飛んでいくため、それを追って背後を見る。

——そこには、幾千匹もの蝶を身に纏い、稲妻を走らせる黄金色の棘を背中に生やし、体表は僅かに藍色めいた灰色に翡翠色のラインが入り、トリケラトプスのように前に伸びた2本の大きなツノと

幾つもの小さなツノを頭から生やした4足歩行のアルマジロのような暴龍が、いた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!??!!??」

その暴龍が咆哮を上げ、空気を振動させ———衝撃波が発生し、足元の積雪が全て宙に舞い上がり、地面が覗く。

獲物を、見つけたのだ。

「ツ!!??ヴオオオオオ!!??」

バルゴンは怯え、直ぐさま逃げようとする———が、息絶え絶えの上に足を怪我していて動けない、だから、生体レーザーを放とうとする。

暴龍は1、2度前足で地面をグラインドさせ、地面を、蹴る。

瞬間、立っていた地面が衝撃で抉れ、破片の多くが暴龍の後ろに吹き飛ぶ。

暴龍は数秒とかからないうちにバルゴンとの距離を一気に詰めて行き———

バルゴンが生体レーザーを暴龍に放つ。

しかし暴龍は爪先に電磁波を集中させ、レーザーを足場にするようにして、軌道をずらせる。

バルゴンが目を見開いて驚愕する。

しかし暴龍はそれに御構い無しに迫り———暴龍は、強靱な顎でバルゴンの首に歯を食い込ませ、力一杯に噛み付く。

バルゴンは本能的にもがこうとする———だが、しかし、それは遅過ぎた。

何故なら、暴龍に牙を首に食い込まされ、力一杯に噛み付かれた時点で、そのバルゴンの命運は尽きてしまったから。

ブチイン!!?

肉の千切れる、嫌な音が雪原に響く。

音の元には首が無くなり、断面から血を吹き出すバルゴンと、バルゴンの首を啜えた暴龍が居た。

暴龍が、数秒とかからない瞬間にバルゴンの首を、喰い千切ったのだ。

暴龍はその首をポイツと捨てると、勝利の雄叫びを上げ、積乱雲から落ちてきた落雷が背中の棘に命中し、その雷は暴龍のエネルギーに変換される。

暴龍————アンギラスは再び咆哮を轟かせ、新たな獲物を求め、再び動き出した——。

EP-10 深紅ノ雪作戦I

3日後。

ロリシカ。

ギジガ統合基地・第2前哨基地。

その南部の3軍共同防衛線。

東部戦域には国境警備軍ジャール大隊、西部戦域には在ロリシカ米軍スネーク中隊、中央戦域には国防陸軍メドヴェーチ中隊と防衛省技術試験小隊が。そして各戦域に支援用の戦車やMLRS、メーサー車が既に展開していた。

そしてそれに第2前哨基地の戦力である3個戦術機小隊と1個戦車中隊が加わる。

一目見ただけでもかなりの部隊だと分かる。

だが、銀龍の管制ユニットの千尋はやはり、緊張を拭えなかった。まりもから渡されたメモを昨日まで箒と共に見てどう対処すべきか、燈の授業からも応用すべく思考した。

そして具体的な対処法も見出した：が、やはり実戦になると緊張するのだ。

「…ふう」

数秒おきのため息をつき、手の甲で額の脂汗を拭う。

『大丈夫だ千尋。…きつと大丈夫だ。』

部隊間通信ウインドに映る、不安を無理矢理押し殺した箒が千尋に引きつった笑みを浮かべながら、千尋の緊張を和らげようと必死に言う。

だがその声は確証を持ってない声音で弱々しい。

『…埋設型音響探知機に反応!!?バルゴン群、5分後に接敵します!!?』

ロリシカ軍から送られてきた情報を新井が報告する。

それで2人の顔はさらに強張る。

まりも、新井、門松の3名は慣れているのか全く平気そうだが。

そんな2人を気にかけてか、門松が言う。

『隊長、いつちよアレをお願いします。』

『ん？ああ、いいぞ。各員こんな小話を知っているか？』

まりもは、まるで天気の話をするかのように急に笑みを浮かべながら緊張を感じさせない言う。

いきなり始まったそれに千尋と箒は思わず啞然とする。

『海自がアメリカからイージシステムを導入した頃の話だ。イージシステムに各国は高評価を示し、アメリカは鼻が高くなっていった。しかし日本はアメリカの鼻をへし折るようになつた。』
「オートだとイージシステムの反応が遅いから手動で操作出来ませんか？」
と。』

『————ぶっ！！？』

『わはっ！！？』

なんてことは無い、海自に【実際に】伝わる武勇伝を用いた小話だ。だがそれが緊張を和らげてくれるものになったのか、新井が吹き出し、門松も釣られるように笑い——

『ふふっ』

『あはは！！？』

箒も千尋も、笑い出す。

隊の空気が重いときはこうして小話をいれて場の緊張をほぐす。

気休めを言われるより数倍気が楽になる。

『————そういうのなら、こちらにもありますよ。』

部隊間通信のリンクで繋がれているメドヴェーチ中隊のニコライが言ってくる。

『ギジガの子供達が憲兵隊にこんな話をしていた。「バルゴンのお肉は食べられるの？」と、そこで憲兵はこう言いました。「とても不味くて食べられません。君がイギリス人でもない限り。」。』

瞬間、防衛省技術試験小隊とメドヴェーチ中隊から響く大爆笑。

内戦を装いバルゴンとの激戦を繰り返すこの国でもイギリスの飯マズは知れ渡っているらしい。

(セシリアが聞いたら怒りそうだなあ…)

笑顔で笑いながらも千尋は内心思う。

『CP（コマンドポスト）より各部隊へ。バルゴン群接敵まであと3分。警戒せよ!!?』

CPからの通信が先程までの陽気なムードを吹き飛ばす。

だが、まりもとニコライの小話のおかげで緊張がほぐれた為に、少し肩の荷は降りた。

千尋は目の前の、積雪を白煙のように巻き上げながら進軍してくる錆色の群団——バルゴン群に目を移し、睨み付けた。

『こちら第3メーサー隊、三村二佐。予定通り攻撃を開始する。戦術機部隊はメーサーとの射線交錯に注意せよ。』

18式メーサー殺獣光線車6両を率いる三村総一郎二佐がメーサー車1号車の牽引車から防衛省技術試験小隊とメドヴェーチ中隊に通告する。

メーサー車や戦車、MLRSによるバルゴン群の数の削減をしてから戦略機が撃ち漏らした個体を片付けることになっていた。

戦略機の間配置されたメーサー車の砲身が展開し、砲身の先端にあるパラボラアンテナ型の照射機がバルゴン群に向けられる。

『メーサー1号車より各車へ。メーサー照射準備。繰り返し、メーサー照射準備。』

三村が言う。

そして各メーサー車の砲身がバルゴンに、照準固定され——

『メーサー照射!!?』

三村の号令と共にメーサー車のパラボラ型の砲身から、青白い稲妻が空気を焼きながら、バルゴン群に、放たれる。

そしてその稲妻はバルゴンの表皮に当たると同時に瞬時に水分を蒸発させ、破裂させる。

バルゴンの赤黒い体液と肉片が宙を舞い、雪原に降り注ぎ、雪を赤く、紅く染め上げていった。

メーサーとはマイクロ波を用いた兵器で、過大な電子レンジ、といったところだ。

そして今、バルゴンは、電子レンジで卵を爆破させる、というもの

と同じ状態にされていた。

その間にもメーサーは薙ぎ払うようにバルゴン群を爆殺していく。

『す…す…すい…。』

思わずユーゲンが呟く。

『バルゴンが…みるみるうちに爆ぜていく…。』

エリザも呟く。

自分たちがいつも少ない戦術機と物資でバルゴン群に立ち向かっているのに6台のメーサー車で既に300体近いバルゴンが殲滅されていったからだ。

だがまだ5分の1しか撃破できていない。

『バルゴン群、近接迎撃地点に侵入!!?』

CPオペレーターが叫ぶ。

近接迎撃地点

——戦車やメーサー車の迎撃により数を減らした上で尚も接近してきた場合、戦車やメーサー車は後退——

——すなわち戦略機や航空機の出番となる位置だ。

『総員傾注!!?・お待ちかねの狩りの時間だ!!?』

『各員に告ぐ!!?・出来るだけ陣形を維持しろ。分隊(エレメント)を崩

すな!!?』

ニコライがメドヴェーチ中隊の面子にそう言い。まりもが防衛省

技術試験小隊の面子に言う。

そして、全機が突撃に移った。

■■■■■■■■■■

IS学園・第2アリーナ

クラス別トーナメントの行われていたアリーナだ。

そしてそこでは一夏と鈴が戦っていたのだが…現在、アリーナも管制室も混乱していた。

所属不明のISがいきなり襲撃を仕掛けてきたから。

「光さん!!?・状況は!!?」

セシリアが管制室にあった予備のヘッドセットを手に取り、光と通信を繋ぐ。

『…今は一佐と呼べ。…現在、所属不明ISが第2アリーナに侵入。

そして同アリーナにジャミングが行われており、一般生徒の脱出が出来ないどころか織斑と鳳の救援と敵ISの鎮圧に赴けない状態だ。“出来すぎている”ほどのな。」

事実、現在アリーナ内では織斑の白式と鈴の甲龍が全身装甲のISと交戦していた。

セシリアたちは第2シャフトの警備を千冬の命令で配置された教師部隊が引き受けたために、一応、応援役として管制室側で待機していた。そんな中起きた襲撃だった。

『さらに悪い知らせだ。…現在、湾港エリアから歩兵複数、第2シャフト内に例の海底トンネルから無人対人鎮圧兵器・オートマトンがなだれ込んできている。』

「!??な、ちよ、第2シャフトのトンネルは教師部隊が警備してたはずじゃ…」

光からの報告に驚き、セシリアが思わず叫ぶ。

『…とづくに連絡途絶だ。全滅したと判断する。湾港エリアの歩兵は特自陸戦隊、第2シャフトは戦術機MA-10J凄鉄の部隊で制圧する。お前たちは動くな!!?』

「え!??ど、どうして…!」

セシリアが叫ぶ。

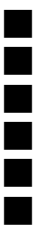
今まで戦術機の訓練を積み重ねてきたのに、いざという状況で動くなどと言われても、納得行かない。

『全滅を防ぐために予備戦力として残すためだ。こちらに余力があるとは言え、全滅する確率がないとは言えない。それに管制室からもそのISのせいで出られないだろう?』

「そ、それは…」

光の言うことは事実だ。だから、セシリアは押し黙ってしまう。

「…分かりました。第2学園守備隊、管制室にて待機します。」
セシリアは仕方なく同意して、応じた。



IS学園・湾港エリア

「…ふう」

光はため息をつきながら、ヘッドセットの通信を切る。足元には肉片になった人間だったものの残骸。

現在、光は第4電子化武器運用隊の面子を率いていた。

「…まったく、メーサーライフルは人間に使うもんじゃないな…。」

そうぼやきながら、光は試製20式メーサー小銃を構える。

湾港エリアの敵歩兵はこちらで制圧することになっていた。

まあ、制圧と言っても——皆殺しだが。

瞬間、コンテナの向こうからMP5サブマシンガンで武装した敵兵が現れる。

光はそれに、一瞬躊躇するが、やらなければ自分がやられる。だから、メーサー小銃の引き金を、敵がサブマシンガンの引き金を引く前に、引く。

瞬間、メーサー車ほどでは無いが、青白い稲妻が銃口から放たれ、敵兵に命中し——命中した箇所を暴力的な熱が焼き、敵兵の体内の水分を蒸発、敵兵は悲鳴を上げながら体を膨張させ、破裂させ——

血飛沫が宙に舞う。

残されたのは敵兵だったモノの残骸。

(これでは…虐殺ではないか…。)

光は腹の虫を堪えながら内心呟く。

そして周りでもコンテナで遮られているからこそ見えないが、メーサーが放たれ、敵兵の体を破裂させる音と断末魔の絶叫が木霊する。そして、肉片や血がコンクリートやコンテナに飛び散り、付着する、不愉快な音。

「…こんな有様は、彼奴らに見せられないからな…汚い世界の上で生かされている現実を知るには、まだ、彼奴らには、早過ぎる。」

光はふと呟く。

「オールハンド、こちら木下。オールクリア。繰り返します、オールクリア。」

光の部下である木下三曹が通信を入れる。

「二佐、敵兵の殲滅、完了しました。」

ふと、近くにいた部下である石塚楓三尉が報告する。

それに、光は少しうんざりしながらも、部下をねぎらうために無理に笑顔を作って、

「ご苦労だった。」

そう、言う。

「…オールハンド、第2シャフトに移動するぞ。まだオートマトンが残ってる。」

光がそう言って、次の行動に移ろうとする。

「アリーナのISはどうします?」

楓が聴く。

「手の出しようがない以上、専用機持ちにどうにかしてもらおうしかない。上級生がクラッキングもしているし、いずれ救援は届く。」

光は淡々と言う。

「…分かりました。…しかし、敵兵やオートマトンはともかく、あのISやペンタゴンクラスのアリーナをハッキングする能力の持ち主は…」

「…冷静に考えれば奴くらいしかないわな。」

世界にISをばら撒いた、天災である篠ノ之束しか。



第2シャフト内部

そこには堅牢な装甲に肩部装甲に20ミリチェーングンを搭載したMA-10J戦術機・凄鉄を舞弥が駆り、片桐のチェーングンがけたたましい砲声を唸らせ、120ミリ長距離滑腔砲が爆音とともに放たれた砲弾でオートマトンを蹴散らしていた。

オートマトンと言っても、所詮は武装は12.7ミリ機関砲のみ。しかも装甲の強度は軽装甲機動車という、大して頑丈ではない装甲。故に、あつさり蜂の巣にできる。

8、12、17、21、24、29……これで、終わりですね…。

舞弥はオートマトンを撃退し、ふう、と一息つく。

『舞弥、状況は?』

光が音声通信で舞弥に呼び掛ける。

「…片付きました。後続は確認できず。」

『そうか…ご苦労だった。アリーナもつい先程片付いたそうだ。』

「うおおー!!?」

「いつけー!!?一夏ー!!?」

織斑が白式の雪片式型の単一能力・零落白夜で敵IS——無人型と発覚——を切断し、撃破する。

そしてアリーナに響く織斑を賞賛する女子たちの歓声。

その中で千冬は、歪な感情を抱いたまま、なんとも言えない顔をして、立っていた。

(今回の件——一夏や私達は踊らされたただけだ。そしてそれができるのは——)

千冬はアリーナに転がる無人型ISの残骸を睨みつけながら、内心呟いた。

■■■■■■■■■■

束専用ラボ。

「うんうん、やったねいっくん!!?モテモテだね〜!!?もう1人の男子とかいう鬱陶しい奴はいないし、大活躍だね〜!!?カツコイイよ〜!!?」

そしてその、織斑を躍らせた張本人は無人型IS・ゴーレムの送ってきたデータを見ながら、キャツキャツと騒ぎながら言う。

「いや〜束さん、やっぱり天才だからなんでも出来ちゃうね!!?いっくんの為にハーレムを作るなんてチョチョイのチョイだね!!?…もしかしたら世界も滅ぼせたりして…なんて訳ないか。流星に世界を滅ぼす訳ないよね!!?ハーレムを作ったくらいで!!?」

だがしかし、その言葉が現実のものになるとは、いや既に現実のものになっているとは、その時の束はまだ知らなかった。

■■■■■■■■■■

ロリシカ・ギジガ統合基地・第2前哨基地。

3軍共同防衛線。

「はあああ!!?」

箒の荒吹壺型丙が右手に長刀を持ち、左手に追加装甲を保持して、バルゴン群に、突っ込む。

中型種が箒に突っ込んでくるが、箒は追加装甲のスパイク先端がわずかに接触するように追加装甲を拡げる。

そしてバルゴンに追加装甲のスパイク先端が衝突し、火花を散らし、箒の荒吹壺型丙が衝撃で左回りに機体が引っ張られる。

それが箒の狙いだった。

「かかったあ!!?」

瞬間、衝撃を利用し、右手の長刀を振り下ろす。そして、バルゴンの首が胴体から斬り飛ばされる。

そこにさらに背後からバルゴンが荒吹壺型丙に襲い掛かるが、背部兵装担架を射撃モードに切り替え、兵装担架にマウントされていた突撃砲の120ミリ短距離滑腔砲をバルゴンの頭に喰らわせ、吹き飛ばす。

爆煙が一瞬、後頭部サブカメラの視界を覆う。

次の瞬間、爆煙を切り裂くように新たなバルゴン中型種2体が突っ込んでくる。

「…!!?…しま…」

思わず箒は血の気が一気に引き、鼓動が高まり——恐怖心が脳を支配する。

死ぬかもしれない、という恐怖心が。

「失せろてめえらあああ!!?」

瞬間、千尋が怒鳴りながら、銀龍がジェット・ロケットエンジンのロケットモーターを点火し、速度を付け、追加装甲の側面についているソーブレードで、移動エネルギーを加えて、バルゴン中型種の頭部を斬り飛ばす。

そして左脚を踵部分から地面に突き立て、跳躍ユニットの角度を調整し、左脚を軸に、右脚で地面の積雪をえぐり、巻き上げるようにして方向転換。

すかさず箒に迫っていたもう一体の横顔に36ミリ徹甲弾をお見

舞いする。

「ぜ、はあつはあつ…ぶ、無事か箒姐!!？」

息絶え絶えの状態の千尋が、箒に聴く。力任せに無茶な軌道を取ったために、Gが体にかかり、体力を酷く損耗したのだ。

『あ、ああ…すまない。』

まだ恐怖を宿した声音で応える。

だが瞬間、倒したバルゴンの死体を乗り越えてさらに新手が2人に襲い掛かる。

7体のバルゴン中型種だ。

「しま…」

千尋が叫びかけるが、

120ミリ短距離滑腔砲の3門の射撃音が重なり、2体の頭が爆散し、1体が転倒させられる。

門松の荒吹壺型丙が120ミリを一門、新井の荒吹壺型丙が120ミリを二門同時射撃を行ったのだ。

そこに、まりもの駆る荒吹壺型丙が追加装甲を転倒した個体目掛けて投擲。そして背部兵装担架から長刀を両手に抜刀。

そのままジェット・ロケットエンジンのジェットモーターを吹き、加速。

バルゴンにギリギリまで間合いを詰め——腕部補助スラストを全開にして、運動エネルギーと質量エネルギーを生かした斬撃で、バルゴンを2体、撃破する。

残る2体がまりもの荒吹壺型丙に襲い掛かる、が、

それにすかさず千尋の銀龍がアームブレードを展開し、バルゴンの脳天に突き刺し、箒がもう一体の横っ腹に120ミリを喰らわせて、倒す。

『あまり深入りし過ぎるな。今のお前らや私みたいに殺されるぞ。』

まりもが、言う。

『もうすぐ砲爆撃が来る。そろそろ退却を——』

まりもがそう言いかけると、上空をロリシカ空軍のB—52R爆撃機8編隊が通過する。

『噂をすれば影って奴だな。サツサとズラかりましょう。隊長。』
新井が言う。

『ああ、そうだな。総員跳躍開始——…』
だが瞬間、まりもが固まる。

そして同時に千尋が違和感を感じる。

「なんだ…この揺れ…」

千尋は思わず呟く。微々たる振動だが、それは刻一刻と大きくなっていて——千尋の、本能的なカンが、脳内に警戒を促す。

そして、その異常に新井や門松、箒も気付く。

『おかしい…音響センサーが振り切れている…?』

メドヴェーチ中隊のリーナも気付く。

『砲撃の振動じゃ…』

新井が言う。

『いや、だとしたらおかしい。揺れが大き過ぎる。』

だがそれを門松が否定する。

『で、でもこの辺りにバルゴンは…』

リーナが言う。

確かにレーダーを見る限り、新たなバルゴンの増援は見られない。現状、バルゴンはジャール大隊の方に集中しているから、こちらがこんな巨大な振動を感知するのはおかしい。

瞬間、千尋は思い出す。

『バルゴンはね、時々だけど、地中侵攻を行う事があるのよ…』

燈の言葉が脳内で再生され、先の警戒はもはやけたたましい警報に変わり——思わず、叫んだ。

「小隊長!!? 神宮司三佐!!? バルゴンの地中侵攻です!!?」

瞬間、全員の顔が青ざめる。

「全機バックブースト!!?」

まりもが直ぐさま叫ぶ。瞬間、防衛省技術試験小隊とメドヴェーチ中隊は、速やかにその場から退避する。

一瞬遅れ、部隊が展開していた地面が激しく宙に舞い上がり、地中

から、体のあちこちに突起を生やし、背中に中型種一体分のサイズの巨大さを持つ刃のようなプリズム器官を2つ持つ、バルゴン大型種より一回り巨大な、バルゴン超大型種が、出現した。

『ち、中隊長!!?アレって——!!?』

ユーゲンが、驚愕に満ちた声で叫ぶ。

無理もない。ユーゲンも、ましてや超大型種と遭遇した人間など、この中に誰もいないのだから。

ふと、バルゴン超大型種は上空の爆撃機編隊に目を向ける。

瞬間、目が妖しく光り、背中のプリズム器官を薄紅色の光が包み、2つのプリズム器官の間に稲妻が激しく走り、エネルギーが圧縮されていき——プリズム器官の間から、大出力の極太の生体レーザーが放たれた。

初期照射の警告が無かった事とバルゴン超大型種に驚愕していたためか、レーザーに反応が遅れてしまう。

『不味い!!?』

イリーナが叫んだ瞬間、B-52R爆撃機の1機を、レーザーが包み——蒸発。

だがそれに留まらず、周りにいた他の機体も、レーザーの熱により、大気がプラズマ化した際に発生した衝撃波で、爆散する。

『全機匍匐飛行!!?この場から離れるぞ!!?』

ニコライが叫ぶ。

『で、でも隊長!!?あいつを野放しにしたら——!!?』

エリザが異を唱える——が、

『奴を撃破できるだけの弾薬も推進剤もない!!?一旦引くぞ!!?』

ニコライがそれを畳み掛ける。

それに千尋たちもメドヴェーチ中隊に追隨する。

だが次の瞬間。再度、超大型種は生体レーザーを放つ。

今度は司令基地からの砲弾目掛けて。

そして全てを、あっさり蒸発させる。——それだけなら、

まだよかった。

突如、レーザーはグンツと弧を描くように、千尋たちの方に飛んで

来る。

「な———!?」

それに反応できた千尋が叫ぶが、遅すぎた。

あたりはしなかったものの、レーザーが地面を抉り、背後からの衝撃波のせいで機体が乱気流に呑まれる。

瞬間、各機から上がる悲鳴。

直ぐさま機体の姿勢補助機能が作動し、機体の安定化を図る。

が、瞬間、背後から突風と共に飛んで来た破片が、箒の荒吹壺型丙とリーナのガンヘッドに直撃する。

瞬間、箒の荒吹壺型丙は機体のバランスを崩して地表に落下。リーナのガンヘッドも跳躍ユニットが火を吹き、地面に叩きつけられる。

「ほ、箒姐!!?」

思わず千尋は振り向いて助けに行こうとする。

『よせ篠ノ之!!?今行っても…!!?』

まりもの苦痛に満ちた悲鳴のような罵声が千尋に飛んでくる。

「で、でも今ならまだ、まだ間に合うかも知れない!!?だから今———」

千尋が助けに行こうとする。

だが、次の瞬間、千尋の機体の操作権を、まりもが指揮官権限で剥奪。操縦系を指揮官機からの二次操作で遠隔操作させる。

「なっ…!??な、なんでですか!!?神宮司三佐!!?」

千尋は泣きそうな顔をして、思わず怒りと困惑に満ちた声音で叫ぶ。

『今助けに行けば助かるはずの———後退中の部隊の命まで殺す事に気付かんのか!??』

まりもが、怒気と悲哀の入り混じった声で、怒りを装っているが、涙を堪えながら怒鳴る。

本当は、まりもだって助けに行きたい。だがその為に今助かる命まで巻き添えにするなど、許されない。

「あ…あ、う…つく…」

千尋はついに泣き出してしまう。自分の無力さに、自分の不甲斐な

やに。

『…司令基地より入電。第2前哨基地ではなく第1前哨基地に後退せよ——と。』

ニコライが言う。

広域マップを見ても、第2前哨基地の防衛線は崩壊している。

第2前哨基地は包囲、殲滅されるのも時間の問題——と司令基地は判断したのだろう。

だがそれでは——

「山本三尉や楠本二曹まで…」

基地施設復旧の為に派遣されていた山本や楠本を思い出す。

多分第1前哨基地に後退できるのはメーサー車や戦車、戦術機部隊のみ——

彼らの脱出は、無理だ。

(ごめん…箒姐、山本三尉、楠本二曹…俺…ごめんな…)

操縦桿を強く握り締め、唇を強く噛む。

自分は彼らを見捨てた——

そんな感情が、千尋を支配した。



第2前哨基地

「う…ん？」

箒は白いシーツの敷かれた簡易ベッドの上で目を覚ました。

隣にはメドヴェーチ中隊の兵士であるリーナが寝かされていた。

「気が付いたか？」

声の方を見ると、血の滲んだ包帯を右目に巻いている男性兵士と目があった。

「あ、は、はい。…あの、ここは…？」

「第2前哨基地。地獄のど真ん中さ。」

男性は自嘲するように、言った。

????????????

第1前哨基地・戦術機格納庫

防衛省技術試験小隊、メドヴェーチ中隊の面子が集まっていた。

「24分前、第2前哨基地から通信が入った。篠ノ之箒一士、リーナ・ベシカレフ伍長の身柄を保護したそうさ。意識を失っていたそうだが、幸いにも五体満足だそうさ。」

ニコライが言う。

全員が胸をなで下ろす。

「——が、それ以来、通信途絶状態だ。」

イリーナが付け足すように言う。

すると、千尋とユーゲン、ヴェロニカが目を見開く。他の面子も厳しい顔をしている。

「バルゴンとの戦闘に入り、通信どころではなくなったか、通信施設が破壊されたか…全滅したか。」

最後のは最も想像したくないケースだ。

千尋から血の気が引いて行く。

「い、今すぐ救出に…!!?」

ヴェロニカが叫ぶ。

千尋も言おうとする——が、この場において私情を挟むな、と理性が感情を拘束する。

だが、その拘束を外そうと感情がもがき、それをまた理性で押さえつけて——頭の中でモヤモヤしたものが荒れ狂う。

「ダメだ。」

さらにヴェロニカや、表情から察したのか千尋にも向けて、ニコライが言う。

「給油と弾薬補給、そして整備が最優先だ。それにまだあの超大型種もまだ残ってる。」

ニコライはやはり、感情を押し殺し、現状を冷静に伝える。

「——ッ!!?同志軍曹、貴方はあの子の指導役ですよね!!?なんとも思わないんですか!!?リーナが…いえ、この子の家族も死ぬかもしれないんですよ!!?この子まで私達と同じ境遇に立たせる事に

なるんですよ!!? なんとも思わないんですか!!? 仲間が死ぬかもしれないんですよ!!?」

ヴェロニカは、リーナだけでなく千尋の事も気にかけて、ヒステリックな声音で、今度はユーゲンに振る。

「——助けに行きたいのは山々です。…でも戦術機も万全じゃないし、防衛線も再構築しなきゃいけない、やらなきゃいけないことは山積みなんです。たった2人の為にベルホヤンスク防衛線を破棄する訳にはいきません!!?」

ユーゲンは感情を殺しつつ、言う。

けれど殺しきれておらず、下唇を強く歯で噛みながら、悔しそうに顔をしかめそうになりながら、言う。

確かにリーナは中隊の貴重な人員で、箒は千尋の家族だ。そして家族や仲間を失った自分たちのような思いを千尋にまでして欲しくないから、助けに行きたい。

けれどそのために崩壊したギジガ防衛線を立て直さずにそのままにして、ギジガに住む5万人もの人々が犠牲になるのは、ならない事だ。

「で、でも——」

「…止めてくれない? そういうの。」

ソフィアが冷ややかな眼差しをヴェロニカに向けながら、見下すように、言う。

「仲間仲間って…貴女、ワシーリーを救えなかった罪滅ぼしをしたいだけでしょ? つまらない馴れ合いに、私を巻き込まないで。」

冷ややかに言うソフィアにヴェロニカは思わず反射的に怒気を孕んだ目で感情的に言おうとするが、凶星を突かれた為に、黙ってしま

う。

「ち、ちよつとソフィア…」

エリザが咎めるように言う。

だが、ソフィアは構うことなく言う。

「それに、行くだけ無駄よ。」

諦めと今まで体験して来た地獄を思い返すような目をして、呟く。

「どうせ、戻ってこれないもの……2人とも。」

第2前哨基地に殺到する、推定800〜1200体のバルゴン群の写された衛星写真を見ながら、言った。



第2前哨基地・医務室

箒、そしてリーナも目を覚ましたため、2人の前に立っている、血の滲んだ包帯を右目に巻き、左手は二の腕から義手の、白髪交じりの髪に無精髭を顎に生やした、40代らしい中年の男性は、自己紹介をする。

「俺は第56歩兵中隊中隊長、アルセン・バシキロフ大尉だ。んで、隣のこいつが――」

アルセンは隣に立つ、箒やリーナより同い年くらいの少女を見て、言う。

「ライサ・セミヨン伍長。」

ライサは負傷したらしい額に包帯を巻いて、少し不機嫌そうに、している。

「助けていただき、ありがとうございます。」

箒が、礼を言う。

それにアルセンは負傷した痛々しい顔で、2人を安心させるために、笑いかけながら、言う。

「別に大した事じゃないし、任務だったからな。戦術機パイロットは一兵卒と違って替えがそう簡単には利かん。それに――篠ノ之一等兵だったか？お前は日本からのお客さんだ。見捨てるわけにはいくまい。」

アルセンがそう言ったため、2人とも緊張が解れる。

「――1個小隊がバルゴンに喰われたけどね。」

ライサが、言う。

瞬間、2人の顔に衝撃が走る。

一個小隊……つまり8名〜12名の兵士が、自分たちの所為で食い殺

された——それは、特に自己犠牲の激しい箒を戦慄させた。
「別に恨んじやいない。…ところで嬢さん方、アサルトライフルは使えるか？」

ふと、アルセンが聴く。

「射撃訓練でなら、89式小銃や64式小銃に触れて射撃した事はあります。」

「あ…えっと、すみません、私は座学でカラシニコフについて習っただけであつたく…」

箒とリーナが答える。

「…ベシカレフ伍長はともかく、篠ノ之一等兵はカラシニコフと同口径の64式を使ったことは有るんだな？」

「は、はい。…ですが、訓練でのみですし、カラシニコフは使ったことも触れたこともありませんが…」

「いや、そいつぁ問題ない。この基地にはロリシカ独立戦争時に日本からアラスカ経由で輸入した中古の64式小銃が60丁ほどある。」

アルセンが言う。

当時、64式小銃などの旧式武器を処分する予算がないために、日本が旧式の武器をロリシカに売って、バブル景気崩壊後の経済立て直しに使っていた——という話を、箒は聞いた事があった。

「あの…どうしてそんな話を…」

リーナが聴く。

瞬間、ズンツ…!!?という鈍く、重い衝撃が基地内に響く。

「バルゴンが基地の周りにいるんだ。いつ侵入されてもおかしくない。だから迎撃準備を整える必要がある。…そして、悪いがお前さんらにも参加してもらおう。」

「…分かりました。では、そちらをお貸し願えますか？」

箒は、アルセンに言う。

「ああ、いいぞ。…さて、ベシカレフ伍長だが…とりあえずベレッタM92Fピストルでも渡しておく。そして衛生兵の手伝いでもしてくれ。」

そういつてピストルを、アルセンはリーナに渡す。

「…言つとくけど、助けたりはしないわよ。いざとなったら、その銃で頭を撃ち抜いて、楽になる事をお勧めするわ。」

ライサが、言う。

無愛想に聞こえるが、心配そうな声音で。

「あと、瀕死の味方を見かけたら、迷わず頭を銃で撃って、慈悲の一撃を…介錯をしてやりなさい。」

「そ、そんな…」

ライサの言葉にリーナが絶句する。だが、ライサはリーナに現実を押し付けるような声音で言う。

「じゃあ、苦しんでのたうち回れって言うの？それこそ地獄よ？死ぬ間際くらい、一瞬で楽になる事を望むわ。それにね、死にかけの人間なんて足手纏いよ。…だったら、自決してもらうか、介錯も兼ねて殺した方が放置されてバルゴンに食われるよりマシだし温情的だわ。」

ライサは続けて言う。

箒とリーナは、ライサの言葉に黙り込んでしまう。世界の闇を知ってしまったような感覚が2人の体と脳を支配する。

(ストラヴィツキー軍曹の恋人だった人も…こんな感じの絶望に立たされたんでしようか…)

リーナはふと、思った。

「…さて、基地内部を案内する。ついて来てくれ。」

アルセンが2人にそう言って、箒、リーナ、ライサを引き連れ、医務室を出た。

第2前哨基地内部の廊下は、何処か迷路のようにすら見えた。コンクリートのトンネルが張り巡らされているのだ。

そしてそのトンネル内には、湿気の充満する匂いが漂っていた。

「…まるで要塞みたい…」

ふと、リーナが呟く。

「この前哨基地は他の前哨基地とは違って司令基地から最も離れている。補給や援軍が途絶え、包囲されて籠城するハメになる――

―なんて当たり前だ。だから堅牢に出来ている。」

正面から状況報告の為に走っていく連絡兵を避けながら、アルセン

が応える。

「さっきの作戦途中までは戦術機も残ってたが…今は全機大破しちまった…おまけに給油や弾薬補充、整備に必要なパーツも尽きて、もう使い物にならない。」

「今じゃT-05などの戦車や備え付けの艦載転用速射砲、に地対艦ミサイルで対抗するしかない。」

アルセンが続けて言い、それを繋ぐようにライサが言う。

「でも防ぎきれぬ確率は低い。だから、そうなったら基地の中にある旧戦術機ハンガーに奴等を誘き寄せて、十字砲火を浴びせるしかない。…まあ、それでも退路を防がれたら最後。死ぬまで戦うしかない。実際この基地、17年間のうち何回も玉砕してるし。」

「そんな——」

「要は私達、この基地とギジガを一分一秒でも延命させる為に置かれた、ただの捨て駒、消耗品というワケ。…ま、軍のお偉いさんの思惑どおり死ぬつもりなんて毛頭ないけど。私にだって、家族がいるし。」

「…家族…」

ふと、箒が呟く。

「今まで誰かが不幸になるくらいなら別に私は死んでも良い…そう、思っていた。」

「だって、墨田大火災で大勢の人の命を踏み台にして生き残ったから。自分は卑怯者だから。そう思っていたから、そう考えることに…自分が犠牲になるという考えに疑問なんてなかった。むしろ、そうならなければならぬと思っていた。」

でも、そしたら家族は？

たった1人の家族である千尋は、どうなる？

…自分が望んでいない、不幸に晒されてしまう。

じゃあ、どうすればいい？

他人を不幸にしちゃいけないから、救える手は全て取って、死ぬか？

いや駄目だ。それでは千尋が不幸になってしまう。

私がいなくなったら、彼奴はひどく悲しむ。

それで、この間、千尋が箒の自己犠牲の姿勢に大激怒した理由を悟る。

(でも…じゃあ、私みたいな奴が幸せになって良いのか？他人を踏み台にして、見捨てて生き残った、私が…)

「…ねえ貴女、何考えてんの？」

「…え？」

ライサが刺々しい口調で、箒に問う。

「あ、す、すみません。…その、家族の事を…。」

申し訳なさそうな顔で、正直に応える。

「…そ。」

ライサはそう、素っ気なく返答する。

すると目の前から、

「大尉!!?大尉!!?」

活気に満ちた、元気そうな顔の少女が駆け込んでくる。見た感じでは箒やリーナ、そしてライサより年下だ。おそらく、12歳くらいだろうか。

「弾薬庫で新しい弾薬を見つけました!!?」

「お、よしよし偉いぞ。クリス二等兵。」

その少女を褒めて、頭を撫でる。

「後でチョコをやる。アメリカ製の美味しいやつな。」

「やった〜!!?最近ご無沙汰だったんですよ!」

きやつきやつと燥ぐ少女が、箒たちに気付くと、明らかに敵視して、

「む、私の大尉を寝取ったら承知しないわよ!?!」

なんて、言う。

それに箒とリーナは啞然とし、アルセンは苦笑いをして、ライサは鬱陶しそうに言う。

「…しないわよ。私はオッサンは対象外だから。」

そう言うのと、その少女は持ち場に戻っていった。

「すまん…新参の女にはいつもああなんだ。悪く思わないでくれ。」

アルセンが苦笑いしながら、箒とリーナに言う。

「あの子、大尉と結婚するのが夢らしいしねえ…なんていうか…」

ライサも微妙な顔をして、言う。



旧戦術機ハンガー

「…ふう。」

山本三尉は、MINIMI軽機関銃を装備して、待機していた。

「…三尉…」

64式小銃を装備する、山本の部下の楠本さやか二曹が不安混じりの声音で声を掛ける。

「…怖くは、ないです、か…?」

震える声音で言う。

「…そりゃあ怖いさ。怖くてチビリそうだよ。」

場を和ませる為か、明るい声音で応じる。実際、山本も先程から脂汗が止まらない。

「…でも、ホラあそこ。」

旧戦術機ハンガーの土囊の近くで64式小銃を構える筈や隣にいるリーナを指差して言う。

「あんな子らやお前みたいなお子どもが戦うのに、大の大人が逃げ出しちゃ、ダメだろ?」

「それは…まあ…。」

だが、やはり、さやかな緊張は解れない。

だから山本は、まよりも直伝のあのネタをすることにした。

「ところでさ、こんな小話を知ってるか?」

まよりも同じように、山本も、天気の話をするように、言う。

「昔、ロッキー山脈で陸自と米陸軍が別々のルートで登山するという合同演習をした。しかしその時は数十年ぶりの大寒波でな。米陸軍には死者まで出る騒ぎだった。陸自を心配して米陸軍が急ぎ合流ポイントに行くところ——そこでは、『米軍の奴ら遅えなあ…雪合戦でもして待つか!!?』と、小学生みたいに雪合戦してはしやく陸自隊員がいたそう。…そして、米軍は思った。『自衛隊タフすぎイ!!?』…と。」

「…ふっ、ふふ…」

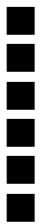
なんてことはない。陸自にまつわる実話だ。

だが、やはり緊張が解れたのか、さやかは失笑してしまう。

「…!!?・来るぞお!!?」

兵士の誰かが、叫ぶ。

それで2人は現実に引き戻され、銃の銃口を、バルゴンが侵入してくる、メインゲートに向け、アイアンサイトを覗き込んだ――



旧戦術機ハンガー。

「各員傾注!!?」

積み上げた土嚢の陣地でRPGロケットランチャーを担ぐアルセ
ンが叫ぶ。

「俺たちの獲物は戦車の死角に回り込む中型種だ!!?土嚢などの遮蔽
物に身を隠しながら脚部にRPGをブチかませ!!?」

メインゲートから中型種、そして小型種が大挙してくる。箒とリー
ナが肉眼で、しかも人の視点でバルゴンを見るのは、これが初めて
だった。

(わ、私…今までこんな怪物と戦ってたの…!!?)

生身で見るバルゴンの巨大さに、リーナは圧倒される。

「各中隊、撃ち方始め――!!?」

大隊司令部の号令。

それと同時にT-05戦車が一齐に砲撃を始める。120ミリ滑
腔砲から放たれた徹甲弾がバルゴン中型種に叩き込まれ、戦果報告を
待たず、間暇いれずに次々に砲撃を叩き込む。

戦術機の120ミリ短距離滑腔砲の砲撃に慣れた箒やリーナでも、
やはり、戦車の砲撃に圧倒される。

急所に叩き込まれたからかあっさりとバルゴンは行動不能になる。
その弾幕を小型種が掻い潜ってくる。

「デカブツどもの足元だ！撃て撃て撃て！！？」

土嚢を積み上げた歩兵陣地からアルセンが叫ぶ。

瞬間、歩兵陣地から重機関銃やアサルトライフル、ロケットランチャーが放たれ、バルゴン小型種を血祭りに上げていく。

「…これなら！！？」

箒が叫ぶ。

箒とリーナに一塁の希望が宿る。

「馬鹿野郎油断するな！！？メインゲートはもうとつくに突破されてんだ！！？次から次へとやって来るぞ！！？」

アルセンが叱責するように叫ぶ。

瞬間、メインゲートの孔を広げるように壁を抉ってバルゴン小型種のさらに侵入してくる。

そしてバルゴン小型種が歩兵陣地に突っ込んでくる。

その前方には——箒が、いた。

回避せねばならない。

頭の中では分かっている。

でも、足が竦んで——

「何してんのアンタは！！？」

叫び声が箒に響き、同時にAKの弾がバルゴン小型種の頭に叩き込まれ、倒される。

「なにやってんの馬鹿！！？死にたいの！！？」

先ほどアルセンと話していた少女、クリス二等兵がAKを担ぎながら箒に怒鳴る。

「す、すまない！！？助かつ…」

が、瞬間、箒の近くに積み上げられていた土嚢が吹き飛ぶ。

「きやあ！！？」

クリス二等兵の声が聞こえ、箒はそちらに顔を向け、

「大丈夫か！！？」

叫んだ。瞬間——生暖かいものが全身に降り注ぎ、その一

部を口に含んでしまったのは、その時だった。

「…え？」

箒は唾然としながら、それを受け止めた掌を見る。口の中には、鉄味の何かが拡がっていた。

両方の掌は真っ赤に染まっっていて、先の作戦でも見たバルゴンの内臓物らしい気持ち悪いものも絡みついていて――

「なん…だ、これは……」

これはバルゴンの体液で、内臓物に違いない――感情がそう訴えるが、理性がそれを、否定する。

バルゴンの体液はこんなに色鮮やかな赤い色じゃなくて、こんなにも仄かに暖かくもなく、内臓物もこんなに小さくなんかない。

「ま、さか…」

目の前を向く――そこには、新たに歩兵陣地に突っ込んだバルゴン小型種がクリス二等兵の上半身と下半身を喰い千切り、上半身を口に咥えながら、噴煙の中に立っていた。

そして、『どちらのクリス二等兵からもソーセイジのような何かが赤い液体を滴らせながら垂れ下がっていた』。

「ひっ！」

箒は声を漏らしてしまう。

「!!?クリス!!?ちくしょおおお!!?」

ライサが引き千切られたクリス二等兵を見て、AKを放つ。瞬間、バルゴンはそちらに反応して、咥えていたクリス二等兵を口から落とす。

地面に落ちたクリス二等兵の上半身がまだ息があるのか、「……殺して…殺して」と弱々しく血の泡を吐きながら口にして、痙攣を繰り返す。

他の場所でもバルゴン小型種に捕まった兵士が下半身を前足で押さえられ、上半身を咥えられて、引きちぎられる。

「そ、んな…これ…」

理解が急速に拡大する。

自分に降りかかったものは。

自分が口にしたものは。

今、目の前に音を立てて落ちたものは。

目の前で起きている惨劇は。

まだ幼い、自分より幼く、将来があつたかもしれない目の前の少女だったもの。数十秒前までこの墓穴のような、地獄のような基地の中で健気に、必死で生きていた彼女を終わらせたのは――。

「あ……あ、ああああ!!??」

箒は悲鳴に近い声で叫び、血がべつとりとこべりついた掌で、同じく血が滴る口を抑える。目の前の狂気と絶望に満ちた惨劇を目の当たりにし、自分が彼女を殺したという現実が嫌でも目を介して脳に刻み込まれ、箒は気が狂いそうになる。

「何やってる!!??」

アルセンが衛生兵とリーナを引き連れて駆け寄って来る。

「ぼ、バシキロフ大尉……わ、私……私は……」

直後、耳元で響く拳銃の銃声。

衛生兵が瀕死のクリス二等兵に慈悲の一撃――――――介錯を行つたのだ。

後数分の命とはいえ一瞬で楽になれるそれは戦場では温情的措置。一瞬だがクリス二等兵は楽になれることを喜んで笑つてすらいた様にも見えた――――しかし箒にも、衛生兵に追隨していたリーナにも、クリス二等兵だつたものの頭蓋が砕け、白くて硬い何かと、灰色の何か飛び散る光景が頭に焼き付けられる。

「……い、や……いやああああ!!??」

アルセンはパニックになり、半狂乱になつて叫ぶ箒をの頬を叩く。

再び口の中に広がる鉄の味。

箒は我にかえるが、先の惨劇が再び思い起こされ、嘔吐感がこみ上げられる。

「だからなんだ!!??お前の仕事は生き残る事だ!!??今はそれをこなせ!!??他人を気にするのはそれをこなしてからだ!!??」

「!!??……」

――――それで半ば正気に戻る。

否、戻らなければならぬという強迫観念が無理矢理箒を正気に引きずり戻す。

箒は、奥歯を震わせ、赤く染まった視界に映るアルセンと今尚続く、
惨劇を見た。

EP11 屍体ノ中デ

ロリシカ、ギジガ統合基地・第2前哨基地。

旧戦術機ハンガー。

そこでは未だにバルゴンとの戦闘が繰り広げられていた。

怒号。

銃声。

爆音。

悲鳴。

断末魔。

血飛沫。

咀嚼音。

それらが狂気に満ちた光景を作り上げ、旧戦術機ハンガーには地獄
絵図が展開されていた。

アルセン達の絶え間無い怒号と銃撃音によって奏でられる戦争音
楽が旧戦術機ハンガーに響く中、リーナは現実を拒絶するように、歩
兵陣地の土嚢に蹲りながら両手で耳を塞ぎ、目を瞑りながら泣いて震
えていた。

「うああああ！足が！俺の足があ！！？」

「起きろ！起きろイワン！おい！！？」

「よせ！そいつはもう死んでる！！？」

「第2分隊は支援射撃を！！？はやく…ひっ！いやあああああああ
！！？」

「畜生！！？来るな化け物オオオオ！！？」

「第3小隊！脚を狙え！！？動きを封じりやただの肉塊だ！！？」

「たす…助け…ぎやああああ！！？」

「痛え、痛えよお…誰か、誰かあ…俺を殺して……」

「駄目だ止めれな…がああああああ！！？やめろ！！？が…あッ！
痛え…！！？」

「第1小隊、第2小隊、撃てえッ！！？」

兵士の怒号が、小銃の銃声が、バルゴンの唸り声が、喰われる兵士

の絶叫や断末魔が、死に損ないの兵士の懇願が、今まで温室に近い場所
所で生きていたリーナの精神を蝕む。

「やめて…もう、やめてえ……。」

ふと、リーナのすぐ足元に何かが落ちて来た。

リーナと同じ年くらいの子供の、千切れた血塗れの腕が。

リーナはそれに「ひっ!!？」と叫ぶと、また現実から逃げるように、
身を丸める。

すぐ近くからは、未だに銃声が絶えない。

銃声を聴くたびに先程の、上半身下半身を切断され、死ぬに死ぬ、
味方に介錯してもらい、安心して死ぬる事を喜ぶような笑顔を力なく
浮かべ、頭蓋を撃ち抜かれて頭蓋骨と脳味噌を地面に散らした少女、
クリス二等兵の死に様がフラッシュバックされる。

その度に精神が音を立てて壊れていく。

「おいあんた!!？」

リーナの隣で銃撃を続けていた男性兵士が小銃の弾倉を交換しな
がら、必死の形相で、怒鳴るように声をかける。

それにリーナも反応して、顔を上げる。

「銃を持つてんならさっさと応戦しろ!!？でないと死ぬぞ!!？」

男性兵士に思わずそう言われ、リーナはピストルホルスターのベ
レッタを抜く。

クリス二等兵を殺したものと、同じ銃を。

瞬間、またクリス二等兵が頭蓋を撃ち抜かれる光景がフラッシュ
バックする。

「…ッ、で…きま、せん…」

思わず、リーナは漏らす。

「なに!!？良く聞こえない!!？」

男性兵士は弾倉を交換し終え、小銃をバルゴンに向けて再度、フル
オートで撃っていて、銃声で聞こえなかったため、再度怒鳴りながら
聴く。

「で…できません…わ…私…鉄砲なんて撃てません!!？」

ホルスターから抜いたベレッタを地面に落としながら、俯いて、呻

くように、悲痛な声音で言う。

「…ツ!!?なら邪魔だ!!?さつさと後方に……」

男性兵士は怒鳴るが、それが途絶える。

瞬間、肉が裂け、骨が砕ける音が響き、暖かい、鉄味の液体をリーナは、俯いていた頭から被り、一部は俯いていた目線の先の床に落ちる。

「…え?」

リーナは恐る恐る、その男性兵士の方を向く。

そこには、バルゴンに頭を啜えられ、痙攣したまま宙吊りになった男性兵士がいた。

「…あ…」

リーナはそれを、絶望に満ちた、濁った虚ろな瞳で見上げる。
ブチツ。

男性兵士の首が食い千切られる音が響く。

そして食い千切られた男性兵士の首から下の体が、重力に引かれて、リーナに倒れかかり——胸に倒れた首の断面部分から体内に残っていた血が静脈血管から噴き出し、リーナの顔面にかかる。

「ひ!!?い、いやああああああ!!?」

リーナは思わず悲鳴を上げる。

「ああああ!!?」

が、しかし瞬間、リーナの悲鳴を遮るように、リーナの背後から半ば悲鳴に近いような雄叫びを上げながら、箒が64式小銃を構えながら、バルゴンに走って突撃する。

そしてバルゴンの眼前まで走って行き、直前で跳躍し——
バルゴンの頭部に飛び乗る。

「死ね…!!?」

そして銃剣を頭部に突き立てる。

バルゴンは痛みに暴れるが、箒は容赦なく、引き金を引く。

瞬間、7・62ミリの銃弾がバルゴンの頭部に撃ち込まれていく。

「死ね…死ね!死ねえ!!?死ねえツ!!?」

恐怖と狂気で満ちた表情で、箒は弾倉の中身が殻になるまで撃ち尽

くす。

そしてバルゴンは脳に無数の7・62ミリ弾を喰らい、絶命する。

「はっ…はっ…はっ…」

肺に酸素を取り込むために荒い息をしながら弾倉を交換し、バルゴンから飛び降りて、蹲るリーナに駆け寄る。

「だ、大、丈夫、ですか？…ベシカレフ伍長。」

恐怖と息が荒いせいにか少し震えた声音で聴く。

「立て、ますか？」

箒は蹲っていたリーナに、手を伸ばす。返り血と臓物の破片が絡みついた、手を。

「ひっ!!？」

瞬間、リーナは箒を見て、恐怖に満ちた声音を上げる。

何故なら、箒は先ほどのクリス二等兵の返り血や臓物の破片、そしてバルゴンや他の兵士の物であろう返り血を全身に満遍なく浴びていて、ここが戦場でなければ殺人鬼と錯覚してしまうほどの有り様だったから。

「…いや…いやあつ…」

リーナはやはり立ち上がれずにそこに蹲る。

「助けて、お父さん…ストラヴィツキー軍曹…助けて…」

泣きじやくりながら、言う。

「…すっかり、してください！まだ…死んで、ないんです…まだみんな…生きようと、してるんです…辛いのは……分かりますよ…でも、みんな、頑張ってるんです!!？」

恐怖と目頭から零れ落ちそうな涙を堪えながら、箒は心に浮かんだ本音をぶつける。

「…なんで…貴女はそんなに戦えるの？さつきあんなのを見たばかりじゃない…」

あんなの——クリス二等兵の返り血を浴びた事、クリス二等兵が慈悲の一撃を喰らい、頭蓋の中身をぶち撒けて死んだ事。

普通ならあのまま錯乱して、今のリーナみたいになってしまうのが普通だ。

瞬間、箒の脳裏に墨田大火災で、自分が生き残るために見捨てて死んでいった人々の光景がフラッシュバックする。

「……あの時は混乱していましたが……死体は、見慣れているんです。」

「……え……？」

箒のその言葉にリーナは呆気に囚われるが、箒はそんなリーナを無視して、土嚢に駆け寄る。

箒は土嚢から身を出して、64式小銃をフルオートで撃ちながら言う。

「私だって……怖いですよ……でも……戦わなきゃ……また他の人が……私のせいで……」

箒が恐怖で震える声音で言う。

その瞳は目頭に涙を堪えていて、確かに恐怖に満ちていて、それでも生き残ろうと必死で、そして “ 何処か、機械的にすら “ 見えた。

が、途中で鈍い金属音を立て、銃弾が詰まる。

「……ッ!!?……弾詰まり!??」

箒は墨田駐屯地で頼人から教わった、弾詰まりの対処法を行って、弾をどうにか出そうとする。

「……あつ、おい！危ないぞッ!!?」

兵士の誰かが箒に向けて叫ぶ。

「え?あ、がッ!!?」

が、しかし、土嚢のバリケードに迫ったバルゴンが箒を跳ね飛ばし、その衝撃で箒は64式小銃を手放し、背中を地面に強く叩きつけられ、息が詰まる。

「かはっ……あゝっ……」

箒は体を弓なりに反りながら、苦悶に顔を歪める。

その箒にバルゴンが前脚で箒の下半身を押さえ付け、口を開き、啞えようとする。

が、瞬間、軽機関銃の銃声が響き、銃弾がバルゴンの頭に撃ち込まれる。

バルゴンはすかさず箒から飛び退く。

箒は首を動かして銃弾が飛んできた方を見る。

「…山本、三尉…?」

そこには整備士のキャップを逆に被り、MINIMI軽機関銃を構える山本の姿があった。

バルゴンは、今度は山本に襲いかかろうと、箒を飛び越えて、山本に迫る。

「――山本三尉！逃げて下さい!!?」

箒は、痛みの走る体に鞭を打ち、上半身を起こして、山本に向けて叫ぶ。

すると山本もバルゴンに向けて走っていき――バルゴンが山本を喰おうと口を開けるが、直前で山本はそれをスライディングで躲し、バルゴンの腹の下を滑りながら、軽機関銃をぶつ放し、バルゴンの腹に軽機関銃の弾丸を撃ち込み、風穴を開けていく。

その風穴を開けた腹から溢れ出たバルゴンの体液に塗れながらも、腹の下を通り過ぎてから、左手を地面につけそれを軸にして腹の下を通り過ぎた時の勢いを活かして方向転換し、素早く片膝立ちに体勢を立て直し、軽機関銃の弾丸を、バルゴンのケツにくれてやる。

それで、バルゴンは沈黙する。

「はあ…はあ…整備士、なめてんじゃねえぞ…クソ化け物が…。」

荒く息をしながら、山本はそう呟いた。

「大丈夫!??篠ノ之さん!!?」

箒の元にさやかか駆付け付ける。

「はい。大丈夫…ツ!!?」

立ち上がるうと、足に力を入れた瞬間、右脚に、激痛が走る。

「足…が…?」

箒は自らの足を見る。

膝のあたりで、普通ならあり得ない方向に曲がった足を。

瞬間、箒は、バルゴンが自分の下半身を踏んだ時、足を骨折したのだと、悟る。

「骨折したの!??早く医療区画に…」

さやかが言う。

「平気、です。これくらい…」

箒が言う。だが、それを遮って。

「馬鹿野郎!!? 篠ノ之てめえ無茶すんな!!? 死にてえのか!?!?」

山本が軽機関銃を放ちながら、怒鳴る。

どう考えても、戦闘を続けければ、俊敏な回避が出来ずに、捕まって喰われる。

そうでないとしても他の兵士の足手まといだ。

「で…でも…」

「でももへツタクレも無え!!? 楠本!!? 篠ノ之とそこの兵士連れて後方に下がれ!!? ここの穴は俺が埋める!!?」

山本は、箒とさやかに怒鳴る。

「りよ、了解!!? ちよつと貴女!!? 行くわよ!!?」

リーナの手を掴み、箒の右肩を持たせる。

「1、2の、3!!?」

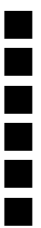
さやかが掛け声を上げ、リーナと2人がかりで箒を担ぎ上げる。

「山本三尉!!? 死なないでくださいよ!!?」

さやか山本に向けて叫ぶ。

「善処するよ!!?」

山本は少し口角を上げて、銃撃を続けながら応えた。



医療区画

そこもやはり、地獄だった。

鼻腔をつく、気化したアルコールの匂い、壁や床にこべりついた血の匂い、肉の腐食する匂い、耳に響く痛みに呻き続ける兵士たちの声、目を背けたくなる程重傷の兵士たちが医務室に入り切らず、廊下で寝かされている。

「ツ!!? また負傷者!?!? 怪我の具合は!?!?」

箒と同じ年くらいの少女が怒鳴りながら聴いてくる。

「右膝を骨折です!!?」

さやかが、その少女——衛生兵に返す。

「骨折?じゃあそこに座って!ギプス付けるから!!?」

血まみれのシートがそのままのベッドを指差して、座るよう、衛生兵の少女は促す。

「え?あ、あの…」

箒は思わず抵抗を感じてしまう。一瞬でもあの戦場から離れたからだろうか。

「はやく!!?こっちはいちいちそんな事に構ってるヒマは無いの!!?」

そんな箒を見て、衛生兵の少女は発破をかけるように怒鳴る。

だからさやかは箒をいそいそと血まみれのベッドに座らせる。

「ちよつと貴女!手伝って下さい!!?」

リーナはいきなり肩を掴まれる。

振り向くと、そこにはお団子結びの、少し年上の女性衛生兵がいた。

「廊下の負傷者を運ぶのを手伝って下さい!!?はやく!!?」

リーナはその衛生兵に殺気すら感じられる声音で発破をかけられ、急いで廊下に放置された負傷者を運び込むために衛生兵についていく。

そして手近な負傷者に気付き——顔色を失う。

射撃の巻き添えを食らったのか、バルゴンにやられたのか、腹を裂かれていて、色鮮やかな鮮血が傷口から溢れ、内蔵が体からはみ出ている。

負傷者は傷の度合いに錯乱しているらしく、絶叫しながら悶えている。

「俺の腹が、腸があ…あつ!痛え!畜生おつ…!!?」

「あ、あの…」

血の気が引き、この世のものではないモノを見るような顔で、リーナが他の負傷者——その兵士は片腕が中程から千切れていて、片脚も膝から下がない——を運ぶ衛生兵を呼び掛ける。

「負傷者はそんなものです!引きずってでも運んで下さい!!?」

衛生兵がリーナに怒鳴る。

「……ッ！ごめんなさい、ごめんなさい……ッ」

だからリーナは、悲痛な声で謝りながら、負傷者の片腕を両手で掴みながら、負傷者を力づくで引きずって運ぶ。

負傷者が痛みで暴れるたびに、鮮血が舞い、顔面にこべりつく。

「畜生痛え！こんなところで死ぬのか、俺はっ、俺はあつ！！？」

「だ、大丈夫です！！？」

リーナは咄嗟に返してしまう。

「絶対助かります！諦めたらそこでみんなお終いです！！？」

「本当か、本当なのか！！？」

負傷者は脂汗を浮かべながら、痛みを堪え、血の混じった唾液を混じらせながら、リーナに助けを求めするように、叫ぶ。

「ほ、本当です！だから、気をしっかりして下さい！！？」

今のリーナには、僅かでも希望を与えるしかない——そう
思つての発言だった。

「……ッ、あ、あのッ！」

医務室にリーナはその負傷者を運び込み、暴れる兵士——
片腕がない——を必死で押さえながら包帯を巻く衛生兵に
声をかける。

リーナが今運んできた負傷者は罵声に変わって苦しげな呻き声を
漏らし始めていた。

「この人の治療を——」

リーナが叫ぶ。

すると、衛生兵が負傷者を見る。

これで、この人は助かる——リーナの中に、先ほど負傷者
に向けて放った希望が実現しようとして——

「……その人は、手当てしません。」

衛生兵の、その一言で、希望が絶望に塗り替えられる。

「手遅れです。数分と持ちません。」

作業を続けながら、淡々と言い放つ。

リーナの中で希望から塗り替えられた絶望が増幅される。

「……どう、して？ま、まだ生きてるんですよ！！？どうして……！」

「分かりきった事を聞かないでください!!?」

「:」

「手遅れの人間より助かる見込みのある人間を助ける必要があるんです!!? 貴女たちだってそうして来たでしょう!!?」

衛生兵の言葉に、昨日のレーザーヤークトの時に見捨てた部隊のことが脳裏に浮かび、リーナは言葉を失う。

「誰かを犠牲にして多くを助ける—— “ ” (ここ(戦場)) “ ”

ではそれが全てなんです!!? なにもかも救おうなんて、出来るはずないんです!!?」

「:で、でも:今、私はこの人に、絶対助かる、って:」

苦しげに足元の、今運んできた負傷者が噎せる。

リーナは、はつとして手の力を強める。

手はまだ暖かい。でも、すでに2つの瞳は何一つ映していなくて——

「う:あつ:あ、ああああああつ:!!?」

リーナは咽び泣きながら、その場に崩れ落ちた。

(誰も彼もを救うことなんて:でき、ない:。)

その隣で箒は衛生兵の少女にギプスを付けてもらいながら、内心思った。

瞬間、墨田大火災の経験がフラッシュバックする。

(:そうだ: “ ” 平和の中(日本)) “ ” でいたから忘れてたけど:

あの状況でどう足掻いても私にできたのは自分を守ることくらいじゃない:。)

箒の中でこびりついていた、『自分はどうなっても誰かを助けなきゃ』という感情が剥がれ落ちていく。

(どんなに助けたいって思っても、結局それに力がなきゃ、何一つ出来ないではないか:。)

箒の生まれ持つて存在していた “ ” 人間面 “ ” が墨田大火災以降、今まで箒自身を殺していた “ ” 機械面 “ ” を侵食して行く。

(:幸か不幸かじゃなくて、まず私自身が生きてなきゃ、何一つ出来ないじゃない:。他人は二の次にしなきゃいけない:でも:。)

箒の中で、生存本能を優先する “ 人間面 “ と自己犠牲を強
いる “ 機械面 “ がぶつかり合い、箒の中でなんとも言えない
感情が嵐のように荒れ狂う。

(千尋：今なら、千尋が私自身を大事にしろと言った理由が：分か
るような気がするよ…)。

内心、ポツリと眩く。

(…でも、最終的に… “ 彼奴 “ に取り込まれるくらいなら、自
分を殺して、私に取り込まれるまでにより多くの人を…)

「はい！出来たわ!!？」

箒にギプスを付けていた衛生兵のその言葉で、箒は思考の海から引
き揚げられる。

そして、ギプスを見る。

鉄パイプを膝の側面に押し付けて、その膝と鉄パイプを固定する為
にロープで硬く巻いただけの、粗末なものを。

「…これが今してあげられる限界なの。」

衛生兵の少女が申し訳なさそうに言う。

「さ、終わったわ。行って!!？」

「え?。」

衛生兵の少女の言葉に、箒とさやかは2人は一瞬固まる。

ふと、次の瞬間、また負傷兵が担ぎ込まれる。

腹に穴が開いた兵士が。

「破片が腹に食い込んでやがる!!？早く取らねえと止血しても内臓が
ダメになっちゃう!!？」

担ぎこんだ中年男性の衛生兵が負傷兵の傷の状況を、負傷兵をベッ
ドに寝かせながら言う。

「麻酔は!!？」

中年男性の衛生兵が怒鳴るように聴く。

「昨日切らしてしまって、もうありません!!？」

中年男性の衛生兵の部下らしい男性衛生兵が怒鳴るように応える。

「クソが!!？麻酔無しで取り出すしかねえ!!？おいお前、手伝ってく
れ!!？」

中年男性の衛生兵が女性衛生兵に怒鳴り、女性衛生兵はうなづく
と、負傷兵の上半身を押さえる。

同時に男性衛生兵は負傷兵の下半身を押さえる。

「行くぞ…1、2の、3!!？」

瞬間、負傷兵の絶叫。

中年男性の衛生兵が、麻酔なしで負傷兵の腹に開いた穴に手を突っ
込んだから。

食い込んだ銃弾を取り出すために、麻酔なしで腸を弄くり回される
のだ。

尋常ではない痛みが負傷兵の全身を巡り、負傷兵は痛みで思わず暴
れ回る。

「暴れないで!!？もつと痛くなるわよ!!？」

負傷兵の上半身を押さえる女性衛生兵が負傷兵に向けて、叫ぶ。

「…これで分かったでしょ？骨折程度の負傷兵なんていちいち丁寧に
見てられないの。…さっさと、持ち場に戻って!!？」

衛生兵の少女が、箒に松葉杖を渡して、怒鳴る。

箒は松葉杖をつきながら、さやか、リーナと共に医療区画を出た。

瞬間、箒の意識だけが途絶えた。

へ貴女、いつまで我慢してるのかしら？

クスクスと笑いながら箒の体内にいるナニカが尋ねる。

へさっきの…クリス二等兵だったけ？彼女が死んだ時は泣き叫んで人間
らしかったのに、今じゃすっかり感情を、自分を殺しちやって…それ
じゃ私みたいな兵器そのものと変わらないわ。せつかく魂があるん
だから、もう少し泣き叫んで、喚いて、足掻けば良いのに。その方が
人間らしいわ。<

少し哀れむように、妖艶な声音で言う。

(…うるさい…)

箒は遮るように呟く。

へ人間らしく振舞った方があの子も…千尋も喜ぶわよ？<

千尋の名を出され、箒は感情が淀む。

へそれに、もう貴女の中で結論は出てるんでしょう？自己犠牲を強い

たところで、誰も救えないって。〈

妖艶な声音は相変わらずだが、今度は純粹に心配するように言う。

〈そんなのは、自己犠牲なんてのは私に取り込まれてからでいいわ。取り込まれてからでは、人間らしくなんて振る舞えないわよ。〉

(……)

〈人間らしくいた方が、私に取り込まれても意識は人らしくいられるかもしれないわよ?……まあ、確証は無いけど———〉

(もういい、黙れ———!!?)

やはり箒は、ナニカを拒絶する。

〈せっかく心配してあげてたのに……〉

(……うるさい。……どうせ、私を取り込むくせに……!)

〈まだ分からないわよ? 貴女が死ぬまで私は活動を開始しないかもしれない———まあ、これ以上長話してちやダメね……それじゃあ、現実と向き合ってらっしゃい。〉

ナニカは憂うように、哀れむように、妖艶な声音で呟き———

箒は、目を開く。

今は、さやかに肩を借りて、松葉杖をつきながら、旧戦術機ハンガーに向かつている途中……”らしい”。

(“ また ” 意識だけ彼奴のところへ飛んで行っていたのか……)

箒は内心毒付く。

そうしている内に、旧戦術機ハンガーに着く。

……どうやら、戦闘はひと段落したらしい。

「……!!? 戻って来たわね。」

ライサが箒、さやか、リーナの3人を見て、呟く。

箒は、ライサを見て、何か違和感を感じたが、疲労のせいで気付かない。

「バシキロフ大尉から3人に命令が下ってます。篠ノ之一等兵は私と生存者の救出。」

射ち殺し、積み上げられたバルゴンの屍の山に目をむけながら言

う。

「楠本軍曹は山本少尉と共に故障した戦車の整備の手伝いを。」

バルゴンの返り血まみれの戦車を指差して、言う。

「ベシカレフ伍長は衛生兵と共に負傷者の搬送を。」

リーナはビクリ、とする。

瞬間、脳裏に浮かぶ、麻酔なしで腹に手を突っ込まれ、絶叫していた負傷兵や血やアルコールの匂いにまみれたベッド。

そして——自分の目の前で事切れた負傷者だった者。

「…で、きません…私は…」

悲痛なくらい泣きそうな声音で言うが、それがライサを刺激したのか、怒りを露わにして、

「いい加減にしろ！ベシカレフ伍長!!?!?!?!」

ライサがリーナの首を締めるように掴み、怒鳴る

「…辛いのは分かってる。だが貴様の駄々を聞いている暇などない！私達は1分1秒でもこの基地を延命させなきゃならないんだ。今旧戦術機ハンガーに敵はいないが、基地外壁付近では未だ戦闘が続いている！泣く暇があれば手足を動かせ!!?!」

そう言っつて、リーナの首からライサは手を離す。

リーナの首には、ねとりとした、生暖かい赤い液体。

そこで箒はライサの違和感に気付く。

「…セミヨン伍長?」

「なんだ?」

箒は震える声音で聴く。

「あの、左手は…どうなさったんですか?」

ライサの片腕が、左腕の二の腕から下が、無い——。

「…見ての通り喰い千切られた。バシキロフ大尉とお揃いになってしまった。」

喰い千切られ、今は包帯を巻いてる左腕を右腕で摩りながら、何処か可笑しいような、それでいて何処か、自嘲するように、寂しげに笑う。

「せつかく五体満足で産んでもらったのにこのザマだ。まったく、親

不孝者だな。私は。」

バルゴンとの戦闘で多用された重金属弾の影響で五体満足な子供が少なかった世代に生まれたライサにとっては、五体満足だけが取り柄だった。

「…さて、無駄話は後だ。篠ノ之一等兵、行くぞ。」

「あ、は、はい！」

そういうと、ピストルを右手に持ちながら、箒を引き連れて、倒されたバルゴンの屍が転がる戦闘跡の旧戦術機ハンガーのメインゲート付近に向けて、歩いて行った。



IS学園

「い、一夏！今日、私と寝てくれない!!?」

鈴が少し、いやかなり恥ずかしげにしながら、織斑に対して、言う。かなり勇気のいる発言だ。

そしてその意味は…言わずとも分かるだろう。 “ 普通の、健全な人間 “ なら。

だが “ 病的鈍感 “ な織斑ならどうなるか。

「はあ？何でだよ、お前自分の部屋のベッド壊れたのか？」

…こうなる。

持ち前の鈍感スキルが発動してしまうのだ。

「そんなわけないでしょ!!?」

「じゃあ何でだよ？」

「それは…ツ!!?言えるわけないでしょう!!?察しなさいよ!!?バカ!!?」

「察しろって何をだよ?つか昨日もそんな風に言っただけか?」

「そ、そうだけど…」

「良い加減やめてくれよ。気持ち悪いし。」

織斑が、持ち前の鈍感スキルで、鈴の気持ちを粉碎するような、そんなことを言う。

瞬間、鈴の中で今まで一夏に対して思ってきた感情が音を立てて崩

れていく。

一夏に捨てられたという感情が脳を支配する。

「じゃあ俺もう行くぜ？千冬姉が呼んでるし。」

「いっつも千冬姉千冬姉ばっかね…」

鈴の脳内で黒い感情が生まれる。

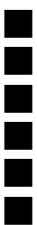
(千冬さんさえいなければ一夏は私を見てくれるのかな…?)

「？そりゃそうだろ。千冬姉は俺の唯一の肉親だし、お前なんかより大事なんだし。」

持ち前の鈍感スキルの所為で、何気なく、悪意なく、そう言う。

「…ッ!!？そう、じゃあもう良いわ」

鈴はそう怒鳴って立ち去って行ったが、一夏は、理解できない、と
いったような顔をして首を傾げた。



第1前哨基地

まだ吹雪が吹く屋上で、千尋は砲声や銃声の轟く方角――

――第2前哨基地の方角を見ていた。

まだ深紅の雪作戦は継続中で、戦術機部隊は第1前哨基地で待機命令を受けていた。

第2前哨基地との連絡は、依然、途絶のままだ――。

「…ッ、箒、姐ッ…」

既に心配の域を超えているその感情は、今すぐにでも箒を――

――仲間を、家族を助けたいという想いが溢れていた。

だが、独断は部隊のみんなに迷惑をかける。

今は、ここで待機するしかない。

「…昔の俺なら…何か、出来たかも知んねえな…。」

千尋は、ふと、思う。

家族を殺され化け物にされた “ 被害者 ” だった頃の自分

なら、理由はどうあれ人間を殺戮した “ 虐殺者 ” だった頃の

自分なら、…… “ ゴジラ ” だったころの、自分、なら…。

何か出来たかも知れない…と。

そう考えると、如何に今の自分がちっぽけで、無力かを嫌でも思い知らされる。

「篠ノ之。」

ふと、後ろから声をかけられる。

振り向くとそこには、まりもがいた。

「神宮司三佐…ッ！」

一瞬遅れて千尋は敬礼をする。

「…敬礼はいい。それよりこんな所にいると風邪をひくぞ。」

「…え？だ、大丈夫ですよ！昔から体は強いし!!？」

千尋は辛そうな感情を覆い隠そうと、必死で空元気に振る舞う。

「…悩みがあるなら言ってみろ。私に批判的な内容でも構わない。…お前が光以外の他人に言えない事でも構わない。私は光からある程度 “ かつてのお前 ” について聴いている。」

まりもが、そう、言う。

瞬間、千尋は衝撃を受ける。

まりもの発言はつまり、自分がゴジラの一部が子供の死体を取り込む事で生まれた、“ ゴジラもどきのリビングデッド(歩く屍体)”

“ だと言う事を知っているというのだ。

「本当の気持ちも、本音を言ってみろ。私は、受け止めてやる。」

まりもは、母性を孕んだ声音で言う。

瞬間、千尋の中に溜め込んできたものが決壊して————同時に、

意を決して、

「お願いがあります。神宮寺三佐。」

「…言ってみろ。」

「明日の作戦で…どうか、篠ノ之一士の救出をお願い致します。」

「……………」

「もう…嫌なんです。昔みたいに…自分が無力な所為で、手の届く場所にいる人が、家族が、殺されて、孤独(一人)だけ生き残るのは…!!」

「……………」

「……勝手なのは分かってます…無理なものも承知です。部隊の皆を危険に晒すのも承知です…けれども、俺は…」

「お前は、どうしたい？」

——その問いに深く息を飲んで。

「俺は……俺は、箒を救いたい…!!？」

強く、小さな身に不相応な声音で決意を露わにする。

「お前は篠ノ之を——箒を救いたいんだな？」

「——はい。」

その瞳には確かな決意を宿しながら、千尋は、言った。

EP-12 戦火の暇

ロリシカ、ギジガ統合基地。

司令基地、

モナーク機関ロリシカ支部棟・617研究室。

燈は、そのパソコンに面と向かって、コンソールを何度も叩きながら、メドヴェーチ中隊のガンヘッドが捉えたバルゴン超大型種の映像を繰り返し見ていた。

注目したのは、湾曲するレーザーを放つ直前の瞬間。

通常、レーザーが進路上に何も無いのに途中で曲がる事などあり得ない。

レーザーを曲げようとするなら……これはイギリスのISに搭載される予定だったが問題が発覚し、現在修正中の【偏光射撃】の理論の場合だが、左右横に並べた2つのレーザー照射機によるエネルギーの干渉でレーザーの進路を変える……例えばレーザーを右に曲げたければ左のレーザー照射機の出力を上げ、左に曲げたければ右側のレーザー照射機の出力を上げるというものだった。

……最も、上下には偏光出来ないし、パイロットへの負担が多すぎる事から、現在修正中だから、理論留まりで、現時点で実現は不可能なのだ。

そして、そんなものを自然界の生物が使えるはずがない。

「でも……そうとしか……考えられないのよね……」

燈は険しい顔で、万年筆を下唇に当てながら、呟く。

あのバルゴン超大型種の湾曲レーザーは間違いなく、イギリスの【偏光射撃】とほぼ同じ理論のモノだろう。

背中に付いていたプリズム状のレーザー照射器官が大型種が1つなのに対して超大型種は2つも持っているのだ。

その、2つのレーザー照射器官の出力を調整して、干渉させ合う事でレーザーの進路を変えて——いや、だとすれば可笑的い。

なぜ【偏光射撃】とは違い、上下にも進路を変えられる？

たった2つでは出来ない。

…では、2つ以上もの照射器官があるのか？

燈は再度コンソールをターン、と叩いて、映像を再生する。

バルゴン超大型種が湾曲レーザーを放つ直前の瞬間を。

バルゴンの照射器官に薄紅色の妖しい光が収束する。次の瞬間、膨大な熱で大気がプラズマ化し、虹色の生体レーザーが放たれ、爆撃機編隊の1機を呑み込み、爆撃機編隊を光が大気がプラズマ化する衝撃で殲滅し——突如、レーザーが湾曲する——直前。

燈は、一時停止ボタンを素早く押し、映像を止める。そして、バルゴン超大型種の部分を拡大し——

「これだ——」

プリズム状のレーザー照射器官を見て、眩く。

そこには、2つのプリズム状のレーザー照射器官の内部には、先端からレーザーを放っている照射部と、その上下にひとつずつ妖しく光る部位——おそらく、

「レーザー出力調整用の、干渉器官——」

燈はそう眩く。

間違っているかも知れない。だが今現在集まっている情報からは、燈にはそうとしか、思えなかった。

…確かに、今現在修正中の【偏光射撃】システムも、バルゴン超大型種のプリズム状のレーザー照射器官のように、銃口の上下に干渉機を取り付ける事で問題を解決仕掛けている——この事から、バルゴン超大型種のレーザー照射器官は、2つの照射器官による左右の進路変更、上下についた干渉器官による上下の進路変更が可能というモノだと言える。

「めちゃくちゃね…現時点で、最も洗練された地对空迎撃システムじゃない——」

自嘲するように、呆れるような声音で、背もたれにもたれ掛かりながら、眩き——

「…地对空迎撃システム？」

ふと、自分の言葉に疑問を浮かべ、先ほどまで気にしていなかった、バルゴンの生物としての側面について、考え初めてしまう。

…まず、バルゴンの生態系は、まだよく分かってはいない。ただ分かってきているのは、炭素系生物という言葉、細胞が水に触れると液状化してしまう事、鉱物資源がエサという事、空間飛翔体に対して生体レーザーを放つ事、そして……” 何故か人間を捕食する ” という事…。

まあ、生体レーザーに関しては…クラゲのネオンや深海生物の放つ光がその一種だから、自然界にも生体レーザーを放つ生物はいる。それらは求愛や身を守る為だ。

だが、バルゴンに関しては違う。確かに身を守る為かも知れない。

だが、何故、空間飛翔体を集中的に狙うのか？という疑問が浮かぶ。そして燈の中で仮説が生まれる。

「…脅威となる生物が ” 空を飛ぶ生物 ” だったから？…いえ、でも…」

しかしその仮説にさらに疑問が浮かぶ。

空を飛ぶ生物だったから…という理由ならあれ程の…湾曲すら可能で高威力の生体レーザーを放つ必要はないはずだ。

「…では、巨大生物級の敵ということ…？いえ、でも…」
燈はさらに仮説を立てるが、さらなる疑問が浮かぶ。

「…何故こんな ” 兵器のような生物が、自然発生する ” の…？」

そしてまた、新たな疑問が生まれる。

「…そして…何故、生物では人間のみを捕食するの…？」

バルゴンの主食は鉱物資源であり、人間は本来捕食する必要は感じられない。

…しかも、捕食した人間は硬化した体液と共に吐き出してしまう事から、捕食する必要は、ないはずだった。

…なら、

「ならば何故…バルゴンは人間を捕食するの…？」

人間を優先的に捕食——殺すのは、何故？

疑問が、尽きない。

（人間を優先的に殺す生き物は、人間くらいしか思い浮かばな——

内心呟く。だが瞬間、遮って、

「まさか——」

燈の脳内で散らばっていた糸が交わり始める。

兵器のような生物。

人間を優先的に殺す。

——燈の脳内で立てられた結論は、

「…生物兵器、とでも言うワケ…？…バルゴンは…。」

そう、呟く。

だが、その結論には無理がある。と脳内で別の思考が異議を唱える。

「…まさか…無理があるわよね…まずあんな生物を作る技術がないわ…。そもそもあれだけの生物兵器を作っても、制御出来なきや意味がないし…。」

実際、バルゴンの遺伝子を作る事も制御する事も、現代科学では不可能だった。

「……はあ……分からない…。」

燈は溜息を吐く。

…とにかく、今は、

「この事をまりもちゃんに伝えるべきよね…。」

そういつて、衛星通信対応型のスマートフォンを取り出して、まりもにメールを送る。

『バルゴン超大型種への対処法…前方からの一斉砲撃が行われている最中、左右真横からメドヴェーチ中隊と防衛省技術試験小隊が挟撃する形によるレーザー照射器官の破壊。但し対象の索敵範囲が不明な為、必ず低空飛行を行う事。』

防衛省技術試験小隊の照射器官破壊用の装備としては、戦術機銀龍と共に試験に持ち込んだ【試製4式超電磁投射砲】を推奨。』

そう、打ち込んだ。



ギジガ統合基地・第2前哨基地

旧戦術機ハンガー

血と肉と屍が埋め尽くす惨劇の残り粕——バルゴンと

兵士の屍が埋め尽くすそこで、箒は松葉杖をつきながら、ライサは不自由な片手で生存者の捜索に当たっていた。

バルゴンの死体の下にまだ負傷兵が埋もれていた、なんて事は、ザラだからだ。

箒やライサ以外にも捜索に当たっている兵士はいるが、やはりそれらの捜索班も、陣地再構築やバルゴンの死体撤去、戦車の整備、負傷兵の治療などに人員を割かれ、2名ずつが限界だった。

そうでなくても第2前哨基地の兵士の数は、箒とリーナがここに来た時の3分の1にまで減っていた。

正直、生存者の捜索に人員を割く余裕すら無いのだ。

だが、貴重な人員を見捨てるワケにもいかない、それ故に無理をさせてでも捜索に当たっていたのだ。

「…うつ…」

“ 機械面 ” を貫くことで惨状に耐えてきたが、 “ 人間面

” がそれを潰してしまい、年頃の少女らしさを取り戻した箒は、その地獄を前にして、何度も嘔吐感がこみ上げてきていた。

そして実際、何度も吐いていた。

今ではもう胃の中身は出し尽くし、唾液混じりの胃液しか出てこない。

ライサは心配げに大丈夫か？と忙しく尋ねるが、箒は大丈夫です、と言って、

「…当分、肉は食べたくも見たくも無いです…。」

ライサを安心させようと、辛そうな笑顔を浮かべながら軽口を、叩く。

「分かるわ。私も最初はそうだったし。今では、『やっぱり無理』——

——と思えなくなってるのがアレよね。頭のネジ外れちゃった

かな？まあ、もう慣れちゃったから。」

ライサも先程より厳しい口調ではなく、女の子らしい声音で、苦笑いしながら言う。

「やっぱり、入隊前の人達はこういうのは……」

「当然知らないわよ。知っちゃったら皆入隊したからなくなるわ……」

“ メシが喉を通らない ” って理由で。」

「あ、はは……違い無いですね。」

本来なら無駄話の程度で、任務中なら罵声のひとつやふたつ飛んできかねないが、ライサは箒の精神を安定させる意味で、雑談を続けていた。

先程のクリス二等兵の凄惨な死、悲惨の一言しか浮かばない医療区画、体を失うという教本となってしまった、左腕を失ったライサ、そして今の屍の山を見て、箒は精神がズタボロのハズだった。

「そう言えば、クリス二等兵の死を目の当たりにされたのに平気なのね？」

「……6年前の墨田大火災で、死体は見慣れてるので……」

「……そう……」

だから今こうして雑談をして、箒の精神を安定させるのだ。

……当然、リーナもそうだから後で対策を取らねばならないが。

するとそこに、衛生兵の女性が駆け寄って来る。

何か言いにくそうな顔をしていた。

それでライサは、察した。

「……貴女には手伝いを頼んだハズだけど？」

ライサは壁のそばで蹲りながら、現実を拒絶しているリーナに話しかける。怒りを孕んだ声音で。

「まだ負傷兵だっているし戦車を修理しなきゃいけないし陣地再構築もしなきゃいけない。メシだって食わなきゃいけない。私達には限られた人員でみんな役割を分担してやれる事をしなきゃいけないの……私達だって暇じゃない。何もする気になれないとか、駄々を捏ねられても困るだけだ。」

リーナは尚も黙り込み、肩を震えさせながら、現実を拒絶する。それが、今まで墓穴のようなこの基地で必死に生きてきたライサの怒りにターボを掛ける。

「甘ったれるのもいい加減にしろ！辛いのは分かる。だがあんたの任務は生き残ることでしょう!?!?」

リーナの胸倉を掴み、強引に立たせる。

「だって…だって…」

ボロボロと涙を流しながら、リーナは言葉を紡ぐ。

「私がいても皆さんの迷惑になるだけです…守ってもらおう価値なんて…!?!?!私には、みんなを救う力も、ない、のに…!?!?!?!?!」

「だったら何だ!?!?自殺でもしたいのか?みんなを救う?甘ったれるな!犠牲を覚悟して初めて戦えるんだ!!?!?誰かを生贄にしなければ勝てないし、生き残れないんだ!!?!?」

「もう…無理です…」

淀んだ瞳からいくつもの涙が、零れ落ちる。

「たすけてお父さん…ストラヴィツキー軍曹…」

瞬間、ライサは喪った左腕で殴りつけることができな代わりに頭突きをかまそうとして——抑える。

今のリーナは無力感と絶望に囚われているだけだ。殴ったり蹴ったり頭突きをかまして、どうにかなるものじゃない。

(戦争神経症の入り口?いえ、自分の無力感と戦場の現実を知ったショックの方が大きい…わね。)

ある程度予想していたとはいえ、やはり罪悪感を感じる。

思えばリーナは戦場の凄惨さを知らない。

箒のように大災害の経験もない。

普通の新任兵士なのだ。

…しかも純粋な性格。

脆くて、当たり前だ。

「…はあ…さつき言った通り、私達は忙しい。…でも、貴女今は暇でしょう?少し付き合って。」

リーナの手を掴むと、篠ノ之一等兵も、と言って箒もついてこさせ

る。



第2前哨基地・管制塔

戦術機などの管制やバルゴン群の監視のために設けられた高さ150メートルもの、塔。

その展望フロアに箒とリーナはライサに連れられて来ていた。

「あの、ここに一体何が…?」

箒が、問う。

その箒に双眼鏡をリーナに渡しながら、ライサが応える。

「私達がこの墓穴で戦っている理由よ。」

窓から見えるのは一面暗黒に包まれた雪原、バルゴン群の屍、活動を休止しているバルゴン超大型種、そして——曇天の雲に反射する、幾つもの煌めく灯り。

「あれ…って…まさか!?」

リーナが双眼鏡を覗きながら、呻いた。

「私達の守るべき街、ギジガの灯りよ。」

「えっ!?」

あまりの戦場との近さに愕然とする。

「みんな今頃暖房の効いた部屋で夕飯を食べてる頃でしょうね…」

「……」

「あんた達にもこの光景がどれだけ異常か分かるでしょう? ギジガ防衛線を突破されたら、間違いなくギジガに住む5万人の市民は皆殺しにされる。…でもバルゴンがギジガに侵攻してくるようになってから今まで、街の灯りは僅かにしか減ってない。」

「ど、どうして——疎開とかは?」

堪えきれない何かを抱えながら箒が聴く。

「それをできるだけの時間も予算もないんでしょうね…それに、5万人の市民のうち2万人は体に障害を持っているし、さらに言えば五千

人近くの人間が病院で寝たきりなのよ。――逃げたくても逃げ出せない。ギジガは医療機関の集中している都市だし、ギジガ防衛線を一気に打通されたら、被害はさらに拡大するわ。」

「そんな…」

リーナは思わず呻いた。

「そんな人達を守るのに私達は必死で戦っている。今日みたいに片手を無くそうが、仲間を失おうが、何も感じなくなるほどに感情を麻痺させて、ただ戦って死ぬ為に。」

ライサは言い放つ。

「…でも私達が彼らを守らなきゃ誰が守るのよ…それにね、可笑しい事にさ、私達は遠からず化け物に食い殺されるのに、みんながみんなして、仲間を犠牲にしても、自分を犠牲にしても、あの街を、あの灯火の中にいる人達を守りたいって思うのよ。」

ライサは少し誇らしげに、そして何処か悲しげに言う。

箒もリーナも、ライサの意図に気づく。

「だから貴女達は自分を責める必要なんてない。…多分、明日にでも私達はバルゴンに殺されるけど、決して犬死なんかじゃない。守りたいモノを守りぬいて死ぬ。この上なく名誉な事よ。このクソツタレな戦場では。」

微笑みながら言うライサに、箒もリーナも視界が霞み、涙が頬を伝って冷たいコンクリートの床に零れ落ちていく。

「…で、でもッ…」

リーナが罪悪感に塗れた声音で言う。

「わ、私は…誰も救えて…いません…誰かを救えるだけの力も…」
が、遮るようにライサが右手で頭を撫でてやる。

「そんなことはない。貴女には戦術機パイロットとして、成せることがあるでしょう?」

優しい声音で言う。

確かに、リーナや箒のような戦術機パイロットにはバルゴンとマトモにやり合える力がある。

ライサには1人1人は弱くとも、ギジガを守るといふ、確固たる意

志を持った同志達の結束という名の力が。

「私達が束にならねば出来ないことを貴女達は少数で私達より多くの事を成せる。…決して無力という訳ではないわ。」

ライサが、言う。

「…ありがとうございます…少し、気持ちの整理が出来ました…」

涙を拭いながら、リーナが応える。

「…あの、ライサ伍長…その…」

箒は言いにくそうにするが、意を決して、

「…さっきのお話…半分は、嘘…ですよね？…まだ、死にたくは、ないんですよね…？」

「…ええ。そうね。死にたくない…死にたくなんかないわ!!？」

ライサは感情のまま叫ぶ。

「市民を守る為に死ねって言われて、はいそうですかかって死ぬるもんですか！誰にも否定出来ない正義とか大義とかを私達だけに押し付けないで欲しいわよ！…こんなところで死んでも戦況は大して変わらない！また彼奴らが攻めてきて私達の仲間を殺して、奪い去って…せめて、希望くらい…持たせてよ…」

ライサの中で心の片隅にしまい込んでいた本音が、放たれる。

「…死んで英雄だのなんだのなんかになるより、生きて、まだ行きたい場所にも行きたい。学校にも行きたい。…また家族に会いたい。…まだ、残っているこの手で、家族の温もりに触れたい…!!？」

語る内に、ライサの目頭からポロポロと溜め込んだ疲れが決壊したダムから溢れ出る水のように、頬を伝う。

箒とリーナの前にいるのは、先ほどいかにも軍人と言った大人びた少女ではなく、それは箒とリーナと同じ年の、まだ幼い少女だった。

それを聴いていて、箒は自らの立ち位置に罪悪感を覚える。

当たり前のように学校に行つて、当たり前のように行きたい場所に行つて、当たり前のように家族と触れ合えて——— ついこの間まで通っていたIS学園や、千尋とデートに行った渋谷。今まで箒にとって当たり前だった世界の価値観が…それが、目の前の少女には出来ない、いや許されないのだ。

いかに自分が恵まれていたかを思い知り、そして自分の自己犠牲が如何に無意味かを、思い知る。

そしてその自己犠牲は、結局自己満足だったのだと思い知る。

…ライサのように、強制されたものではなく、自分がそうしたいと、そうしなくてはならないという強迫観念に突き動かされた結果。

箒は今回の事を機に、その歪だった思考からは抜け出せた、

だが、…ライサは、それすらできないのだ。

自らの命すら、諦めて、目の前の現実に死ぬまで足掻くしか出来ない、そんな絶望的な立ち位置に立たされている。

それがどれだけ辛いか…バルゴンとの戦闘を経験した箒には、分かるような気がした。

「…2人は、私みたいな、諦めてしまった人間には、ならないでね…絶対。」

涙を袖で拭いながら、ライサが言った。

数分後。

箒はまだ管制塔に居た。

ギジガの街の灯りではなく、バルゴンが侵攻してくる、暗黒の雪原の方を、見ながら。

「…私は…私は、何も知らなかった…」

思わず、ポツリと呟く。

箒は、こういう事は墨田大火災で経験したから、知ったつもりでいた。

…でも、根本的に環境が違い過ぎた。

墨田大火災が起きて10万人が死んでも数年、いや、早ければ半年で人々は忘れ去ってしまう。

『自分たちには関係無いから』と言って。

だから箒は忘れないで覚えていたから知ったつもりになっていた。

でも、ロリシカは17年もほとんど孤立無援でバルゴンと戦い続けていたのだ。

平和な日本とは、あまりに真逆の世界だった。

「…私は、どうするべきなんだ…ロリシカを去ってからは…。」

(…答えは出てるでしょうに。)

ふと、箒の悩みにナニカが干渉してくる。

「…分かっている…日本がロリシカみたいになってしまった時…ひとりでも多くの人を救う為に…戦術機乗りとして…腕を磨くこと…。」

(なんだ…分かっているんじゃない…)

「だがそれまで私は保つのか?。」

(…今は、どうとも言えな…)

「どうし…?。」

瞬間、ナニカと感覚を共有していた箒は窓の外——雪原の遥か彼方、人間では視認不可能な距離に居た、それを見る。

瞬間、それは箒と目が合う。

(あらあら…こんな時に私の同胞である、あの子が来ちゃうなんて…) 妖艶な声音だが困ったような感情で、ナニカは言う。

ナニカの視覚を共有して箒が見る先には、青白い稻妻を背中、針山のトゲの間で走らせながら、無数の白い蝶を引き連れ、一步、一步、と第2前哨基地に迫り来る——暴龍・アンギラスの姿が、あった。

EP-13 深紅ノ雪作戦II

ドイツ連邦共和国、フランクフルト県・ドイツ国防陸軍、ベーバーゼー基地。

東西冷戦時代からドイツ民主共和国国家人民軍：東ドイツ軍が使っていたその基地は、東西ドイツ統一と冷戦終結以降、ロシア軍の侵攻を警戒してドイツが改装に改装を重ね、かなりの規模のものとなっていた。

森林に囲まれた、4キロクラスの滑走路を4本、戦術機カタパルトを12基持ち、滑走路の脇には無人偵察機を格納している掩体壕が多数並んでいた。

その、とある戦術機ハンガー。

「黒兎隊の隊長をIS学園に？」

この基地に属する、ドイツ国防陸軍第666独立戦術機中隊〔シユヴァルツエスマーケン（黒の宣告）〕を率いるユリア・ホーゼンフェルト大尉は、自身の乗機であるMEF-2020G戦術機〔タイフーン〕をレンチで装甲を剥がした機体内部の油圧パイプのネジを整備して機械油に塗れたBDU姿で、首から掛けたタオルで額の汗を拭いながら、聴く。

「ええ、そうよ。」

それに応えたのは国防省本部付き将校であり第666独立戦術機中隊所属兵士であるエミリア・カレル中尉。

エミリアはユリアと同期、尚且つ幼馴染だからか、よくタメ口で話す。

「どうしてまた実戦経験皆無の部隊を送るわけ？」

「さあ？ どうせプロパガンダでしょう。 “ ドイツ最強のIS部隊 ” という。」

実際、ユリアの言う通り、ドイツ最強とされる黒兎隊は、実戦経験皆無なのだ。

というのも、理由は幾つかあるが、やはりアラスカ条約における『ISの戦闘地域への介入の禁止』や『ISを使った侵略行為の禁止』が

大きいだろう。

それに、IS部隊は黒兎隊以外、ドイツ国内にはひとつも存在しない。

ただISという世界最強の兵器に乗っているからドイツ最強——
——という訳だ。

そんなドイツが第3世代の試作機を開発し、尚且つ “ ドイツ最強のIS部隊 ” に配備した——ようは『ウチも第3世代機作つたぞ? ドヤ?』と欧州各国、延いては世界に知らしめ、IS委員会からIS研究費を貰う為だろう。 “ ドイツ製のISコアを開発する ” という目的を達成する為に。

エミリアの祖母であるグレーテル・カレル上院議員は東ドイツ時代から東ドイツの問題解決に尽力した功績を買われ、現在はドイツ政府の中でも中枢にいた。現在は統一後の未だに残る東西ドイツの経済格差の解決に取り組んでいる。そして彼女が政界で作り上げたコネクションから仕入れた情報を、これまでもエミリアを介して “ ドイツ最強の戦術機中隊 ” である第666独立戦術機中隊を率いるユリアに伝えていた。

「確かにこれを宣伝して、IS委員会からドイツ製ISコアの開発資金を貰い、それを輸出する事で東西ドイツの経済格差解決に繋がるなら、私も賛成するわ。でも、おばあちゃんの感じからして、それは無いみたい。」

エミリアは残念そうに呟く。

「政府の連中は、ドイツ製ISコアを作って、それで国連でのドイツの発言力を高めたいだけだそうよ。」

「はあ? 何よそれ...。」

ユリアも心底残念そうな溜息を吐く。

旧東ドイツ出身の2人は、生まれ育った東ドイツがどんな経済状況か知っているし、東ドイツの経済問題はドイツ全体の問題なのだ。

今回は、その東西ドイツの経済格差が解決されるかもしれない——

——という期待を抱いていただけに、残念だった。

経済が豊かな西ドイツからしてみれば東ドイツは目の上のたんこ

ぶなんだろう。経済格差解決は最優先なのだが、ISが出回ってからは二の次になってしまっていた。

「これじゃあベルリンの壁崩壊前の東西ドイツ時代が良かった…って
いう人の気持ち、分からなくも無いわね。」

ユリアが言う。

実際、東西ドイツに分裂していた頃が良かった、と言う人は、ドイツ国民の内の17パーセントの人が思っているのだ。

「確かにね…でも、それだといっ核戦争が始まってもおかしくないし、ソ連や国家保安省…シユタージにだって怯えなきゃダメよ?」

エミールリアが言う。

エミールリアはグレーテルから冷戦時代の事…特にシユタージという秘密警察の恐ろしさについてよく聞かされていた。

10人に1人が密告者で、親が子を、子が親を、夫が妻を、妻が夫を密告するという嚴重な監視社会。

エミールリアの祖父であるマルティン・カレルもかつて学生時代に東ドイツで深刻化していた公害問題を暴こうとしてシユタージに捕まった。

何故なら当時の東ドイツで公害問題など存在しない——
そう、東ドイツ社会主義統一党が宣伝していたから。

党が全て正しい、党に隷属する人民だけが良い人間、党の言う事に疑問を持つ人間は国家の敵として反逆罪の濡れ衣を着せられシユタージに逮捕される——そして拷問の果てに死ぬか、彼らに屈服して、反革命因子の人間を密告する情報提供者になるか——

そんな異常な国だったのだ。東ドイツとは。

だがそんな異常な国だった頃が良かった、という人間もいるのだから、それだけ、ドイツの経済問題が深刻なのが伺える。

「それはそうだけどさあ…でも、だからって経済格差問題を棚上げしてまでISに没頭する?普通。」

「欧州連合各国が取り組んでいる第3世代機開発計画『イグニツションプラン』、それに欧州有数の大国であるドイツが参加しないわけに

もいかない。政治的地位を国際社会で誇示する為にも。」

「…はあ…政治って面倒くさいのね、あたしはバカだから分かんないけど、面倒くさいって事はよく分かったわ。」

ユリアが整備で体に溜まった凝りを解そうと伸びをしながら言う。

「まあそうね。私達一介の国民や軍人が思っているように、政治は一筋縄には行かないものよ。」

「大体、軍も軍よ。ISは整備士やけに使わなきゃいけないからこっちに整備士回ってこないから機体の整備まで私達でやんなきゃいけないし…」

ユリアはくたびれた声音で言う。

そしてそれに賛同するようにエミリーリアもまた、溜息を吐いて言う。

「ええ、それに関しては同感ね。日本の自衛隊はISを手放し、戦術機にシフトする事を選んだというのに…でも、イグニツションプランに参加している以上、今更日本みたいな判断は無理ね。」

そして2人の言うように、IS以外の兵科の兵士に掛かる負担を無視しているのも、また事実だった。

だが愚痴を言っても何かが変わるわけではない。

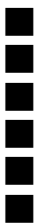
だからIS以外の兵科の兵士はモヤモヤ…つまりストレスが溜まるのだ。

「あーもうやってられるかあー!!?整備終わったんだし、パーツと気晴らしに飲みに行くわよ!!?」

「え!??い、今からか!??」

「そうよ!ファム姉のお店行きましよ!!?」

ユリアはエミリーリアを連れてベトナム人街でユリアの祖母のアンネットの知り合いであるベトナム移民2世のファム・ティ・ランが経営する居酒屋に、向かって行った。



「っ…指令…書？」

鈴は自室のベッドの上で部屋に届けられていた封筒の中身を見て身を強張らせていた。

送り主は中国共産党で鈴の母を間接的に殺したであろう、賀。

内容は、『織斑一夏の専用機並びに本人の回収。』だった。

だが間違いなくその文章内容からして、襲撃を行う気だ。

(そんなことしたら…一夏が…私が一夏と居られなくなる…私が幸せじゃなくなる…)

鈴が内心思う。

一夏の鈍感に翻弄されながらも、鈴はIS学園に来てから一夏との馴れ合いを心地良く感じていた。

なのに、そんな一夏との馴れ合いを、賀は邪魔する気だ。

(賀の部隊を撃退する…？そうだ。襲撃してきたら一夏と一緒にやつつけちゃえば良いんだ。どうせあたしに失うモノはない！大事なものは、守りたいものは、一夏しかないんだから…賀もバカな男…あたしの母さんを殺さなきゃ、まだあたしを利用出来たのに…)

鈴は自分の母を亡くした賀を嘲笑う。

(無視すればいい。襲撃に来たら皆んな殺せば良い。そして3年の間に日本に亡命して、一夏と一緒に居れば…)

だがそこでもうひとつ鈴の中で懸念材料が生まれる。

(一夏が、あたしを見てくれる可能性は…？)

先日の一夏の言葉が脳裏をよぎる。

『お前なんかより千冬姉の方が大事なんだし。』

(千冬さんにはっきりで…きつと私なんて見てくれない。…じゃあ、どうすれば…)

「…ああ、そっか。」

鈴は呟く。

「なんだ…簡単じゃない…！一夏の大事なモノを…千冬さんを壊しちゃえば、良いんだ…したら一夏も私に依存するしなくなっって、私の事を見てくれるじゃない…!!？」

鈴は結論に到り、純粹に恋する乙女のような爛々とした瞳を浮かべな

がら独りごちる。

だがその口は、どうしようも無いくらい、歪んでいた。

IS学園・学園長室。

光と舞弥、楯無、そして山田真耶がそこにいた。

重い空気が、そこを支配していた。

「…つまり、こういう事ですか？この所篠ノ之さん達2人が帰国予定日の昨日を過ぎても欠席しているのは…あちらで孤立したから、と…」

震える声音で聴く。

光から2人が特自上層部の命令でロリシカに派遣された事は知っていた。

だが戦っている相手がバケモノで、箒がバケモノの跋扈する戦場で孤立したというのは、初めて聴いた。

楯無も、重い雰囲気顔で聴いていた。

「…さ、更識さんは…知っていたんですか？」

ロリシカにバケモノがいたのか、という意味を含めて真耶は聴く。

「…はい。防衛省直下の情報庁に携わっていた暗部も、知ってはいました。でも公には出来ない…だから黙っていました。」

楯無が申し訳なさそうな顔で言う。

「当然、織斑先生にはまだ言っていません。」

光が言う。

それで真耶はさらに驚く。

普通の教師なら誰もが織斑先生に一番に伝えるから。

「…ど、どうして…私なんですか？」

真耶は思わず聴く。

「ひとつ、単純に彼女の性格や行動からして信頼性に欠けるから。ふたつ、通信情報を収集した結果不可解な通信履歴が多々見受けられる。みつつ、経歴や当時の生活環境を調べた結果ある人物に繋がって

いた為今回の襲撃事件に関与した疑いがある…それらの要因から彼女には今回の件は伝えていない。」

光の言葉に真耶は驚愕する。

（確かに織斑は多少乱暴なところはある…でも、今回の襲撃に…テロに加担していた!?? いえでもそれ以前に…）

「…通信情報を収集したって…盗聴してたって事ですか…?」

「そうだ。過去に東京大学の核専門の教授が北朝鮮の核開発に関与していた事例から我々はその疑いがある人物やそういった事になりかねない場所…つまりはIS学園に監視を行っている。」

光の言葉に真耶は絶句する。

「近年、私達が都内に監視官を設置したのも同じ理由です。」

楯無が言う。

「でも学園に監視官を設置する事は出来ない。だから日本資本の区画に盗聴器や情報収集機を仕込む事で対処しているんです。」

「といっても学園の日本資本の区画と言えばIS学園の9割6分…ドイツ資本の学園・本土間を結ぶモノレールとアメリカ資本のレーダーサイトを除く、ほぼ全域だ。」

IS学園は『アメリカが日本政府に建造と資金提供を要求して作られた施設』だから。

「仮にもここは日本だから、日本国内の治安維持の為にそうした監視措置もやむを得ない…という訳ですか?」

真耶は、聴く。

「そういう事だ。やはり君は物分りが早いな。」

光は褒める様に言う。だがすぐに感情を押し殺す。

「…話を戻そう。現在神宮司三佐率いる防衛省技術試験小隊が箒の救援に向かっている。成功すれば明日にも帰ってこれる。」

「…失敗したら、どうなるんですか?」

「2人とも死ぬ。」

「!??」

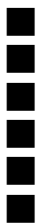
光の言葉に、真耶は最悪の事態を思い浮かべる。

「…ど、どうしたら…?」

泣きそうな顔で、真耶は光にすぎる様に聴く。何か自分にできる事は無いかと探ろうとして。

「どうもこうも無い。ただ…待つしか無い。」

光は苦虫を噛み潰す様な顔で応えた。



ロリシカ、ギジガ統合基地・第2前哨基地

戦況は最悪だった。

未知の巨大生物が出現し、バルゴン超大型種に対して攻撃を開始。

バルゴン小型種は未知の巨大生物を迎撃しているせいか、第2前哨基地には到達していない。

それだけなら喜ばしい状況だ。それだけなら。

未知の巨大生物が人間の被害など御構い無しにバルゴン超大型種と戦うなんて代物ではなく、現在第2前哨基地にもつれ込んでさえ来なければ、喜ばしい状況だったのに。

旧戦術機ハンガー。

地震の様な振動が地下の旧戦術機ハンガーをも激しく揺らす。

「あうっ!!?」

箒は振動で思わず松葉杖のバランスを崩し、倒れてしまう。

「大丈夫か篠ノ之!!?」

軽機関銃を抱えながら、山本が肩を支えて、立たせてやる。

また響く振動。

「ど畜生が…彼奴ら好き勝手に暴れまくりやがつて…」

アルセンが思わず毒付く。

瞬間、旧戦術機ハンガーの天井を突き破るようにして倒れこんで来る肉の塊…否、バルゴン超大型種。

「総員退避!!?」

アルセンがリーナを庇うようにして、すかさず叫ぶが遅かった。バルゴン超大型種が大半の兵士が集中していた場所に倒れこんできて——何十人も兵士を、押し潰す。

「……っ！クソがあツ!!？」

アルセンは思わず怒りを込めた声音で叫ぶ。

だが、バルゴン超大型種が倒れこんできただけでは済まなかった。

天井を支えていた鉄骨まで落ちて来て——さらに兵士を

押し潰し、肉の潰れる音が轟音と埃に掻き消され——煙が

晴れたそこにあつたのは、ついさつきまで生きていた兵士達の屍と瓦礫の山。そしてそこに開けた天井から差し込む絶望的な戦場を写したような灰色の曇天から差し込む僅かな陽の光——。

「そ……んな……」

リーナは絶望を帯びた声音で呟く。

そして立ち上がろうと瓦礫を押しつけて起き上がるバルゴン超大型種。

瞬間、さらに天井を突き破り、暴龍・アングラスが飛び掛る。

さらなる振動。そしてさらに天井から落下してくるコンクリートの破片や鉄骨などの瓦礫。

「きやあああああ!!？」

さやかが悲鳴を上げる。

(こんなの……もう、戦争じゃない……こんなのは……もう……)

箒は思わず、内心呟いた。

「ライサ！無事か!!？おいっ……ツ!!？」

ライサを見つけ、アルセンは思わず青ざめる。そしてライサに見入ってしまう。

「あ……大尉……無事、でしたか……」

鉄骨が両足を下敷きにして、特に左足は潰れ、裂けた皮膚から血が流れ溢れ、中で砕けた骨が皮膚を突き破っている、ライサを。

「ッ！待ってる今退けてやるから……」

アルセンはライサの足を潰した鉄骨を退けようとして、ライサは首を振る。

「片腕の上に両足まで潰れちゃったら…私は、ただの足手まといです…このまま、放って置いて下さい。最後までいい、自分で逝きます。」
ライサは悲しそうな笑顔を浮かべて、何処か決意を決めたような顔をして、ピストルホルスターからベレッタを抜く。

そしてそれをこめかみに当てる。アルセンは止めようとしなない。

それを見たリーナは、ユーゲンの恋人だった少女の話が脳裏を掠め、咄嗟に、

「ま、まっつて下さい!!?」

叫ぶ。そして、鉄骨を退けようとする。

「何してるの…そんなのを退けるなんて無理に決まってる…はやく見捨てなさい!!?」

「い、嫌です!!?」

リーナはライサの言葉に、反発する。

「まだ終わったワケじゃ有りません!!?最後まで諦めないでください!!?」

「貴女…こんな時にまだそんな事を…」

が、遮って、

「こんな時だからですよ!!?」

リーナはライサに向けて叫ぶ。

「昨日貴女は言ったじゃないですか…希望くらい欲しいって…気休めかもしれない。私の自己満足かもしれない。力を持たないただの願いかもしれない。…でも…」

リーナは、必死の表情を浮かべながら、叫ぶ。

「貴女が希望を欲しいというなら私は貴女の希望になりたい!貴女が少しでも生きたいと願える希望になりたい!!?」

嘘偽りない、純粹無垢で———それでいて必死で、強い瞳をしながら、叫ぶ。

ふと、それに箒も加勢する。

「セミヨン伍長、私も———私も…ベシカレフ伍長と同意見です!!?」

鉄骨を持ち上げようと力を込めながら言う。

脳裏に浮かぶのは墨田大火災の時に千尋を救い出そうと無我夢中になつていた自分。

誰か生きていて欲しい、誰も死んで欲しくないと、願つた自分。

まだ瓦礫に埋もれている子————千尋はまだ生きてると信じて、諦めずに、瓦礫を退けていた自分。

「諦めたら、何もかも……そこで終わりなんです！確かに……戦場ではこういうのは非効率かも……知れない！でも……僅かな望みを、あつさり……捨てないで下さい!!？」

箒は涙を目頭から零しながら、息絶え絶えに、叫ぶ。

瞬間、アルセンとアルセンの生き残つた部下数名と山本、さやかが銃撃。

バルゴン小型種が天井に開いた孔から浸透して来たのだ。

さらに振動が響く。

バルゴン超大型種とアンギラスが肉弾戦を繰り広げ、旧戦術機ハンガーを未だに激しく揺らしている。

瞬間、アンギラスがバルゴン超大型種に吹き飛ばされ、箒達のすぐ近くに飛ばされ一層激しい衝撃が箒達を襲う。

だが幸運な事に、ライサの足を潰した鉄骨が外れ、すかさず箒とリーナはライサを引きずり出す。

「……はあつ、はあつ、はあつ……ね？助かった、でしょう？」

リーナがライサに聴く。

「ええ……でも、戦況は最悪よ……。」

ライサが毒付く。

第2前哨基地敷地内でバルゴン超大型種とアンギラスがドンパチを繰り広げ、バルゴン小型種が第2前哨基地にもつれ込んで来ている。

「……どう考えても、終わりだ。」

「ええ。だから、死ぬ時くらい一緒にいきましょう？」

リーナが無邪気に声をかける。

「……つたく、貴女一晩で随分逞しくなつたわねえ……」

リーナの成長っぷりにライサは呆れて言う。

箒も隣で笑っていた。

アルセンと彼の部下も希望の見えない中で、少しでも仲間を前向きにさせる為に。

「大尉！死んだらあの世で一杯やりましょう!!？」

とても死ぬとは思えないほど活気に満ちた声音で彼の部下の1人が叫ぶ。

「了解したぞヴィークマン上等兵！浴びるくらいくれてやる!!？」

アルセンもやはり活気に満ちた声音で、銃撃を続けながら叫ぶ。

：希望は、見えない。

天井から覗く曇天が陽の光を阻害している様に、希望は、見えない。生きて帰れる希望なんて、見えない。

でも死ぬ瞬間まで、僅かな望みも捨てない。

だから、箒もリーナも、ライサを守る為にアサルトライフルで銃撃を繰り広げる。

昨日まで聴く側だったリーナも、戦場音楽を奏でる側に、回る。

崩落する第2前哨基地の管制塔。

箒の放つ64式小銃の7.62ミリ弾の銃声と空気を焼き、バルゴンの肉を抉る音。

さらに天井から降り注ぐ鉄骨やコンクリート片。

アルセンの放つRPGの弾頭が空気を切り裂きながらバルゴンの群れを爆発で吹き飛ばし、肉塊に、変える。

それでも浸透してくるバルゴン小型種。

やはり、希望は見えない。

どう足掻いても絶望しか見えて来ない。

みんな喰われて死ぬ――。

そんな未来だけが箒達の脳に浸透して行く。

でも、箒達はまだ諦めていない。

箒もリーナも、自分と共に過ごした人間の存在を、信じていたから――。

瞬間、それに応えたかの様に第2前哨基地上空に鳴った人工の駆動音――ヘリコプターのローター音と、戦術機の、跳躍ユニット

トのモーター音が、箒達の鼓膜に、響いた。

十数分前、ギジガ統合基地・第1前哨基地

12基の戦術機カタパルトにはメドヴェーチ中隊のガンヘッド7機と防衛省技術試験小隊の荒吹壱型丙3機と銀龍が展開していた。

『総員傾注、我がメドヴェーチ中隊は、ジャール大隊ジャール中隊、防衛省技術試験小隊、在ロリシカ米軍カロン小隊、第3メーサー隊と共に、バルゴン超大型種並びに南方より出現した大型種を含むバルゴン群の殲滅戦を開始する。』

ニコライが言う。

別のカタパルトには在ロリシカ米軍と国境警備軍ジャール大隊の機体が展開していた。

…もつとも、そのバルゴン超大型種は、防衛省技術試験小隊の銀龍に搭載させた、【試製4式超電磁投射砲】で無力化することになったのだが。

『あ、あの…第2前哨基地への、救援は…？』

ヴェロニカがニコライに問う。

『ない。我々の目的はあくまで超大型種や残存小型種、南方より新たに出現した大型種の掃討である。』

ニコライが冷たく言い放つ。

千尋はその会話の一部始終を部隊間ローカルデータリンクの通信システム越しに聞いていた。

やはり、千尋の中でもモヤモヤが生まれる。

まりもと話して少しはマシになったが、やはり頭の中を埋め尽くすモヤモヤは、消えない。

『また先程入った情報によれば、新種の巨大生物がバルゴン超大型種と交戦を開始。現在第2前哨基地に雪崩れ込んでいる。』

「…っ！！？」

千尋もそれについては先程、まりもから聞いた。

思わず、最悪の状況が脳裏に浮かぶ。

『だが第2前哨基地には生存者がいる可能性を考慮して、重金属弾は使用しない。』

重金属弾の重金属粉塵は体内に吸い込めば最悪即死、良くても多臓器不全障害を患い、苦しみもがく事になる。

現地にいる兵士からしたら地獄だ。

だがそれ以上に、戦術機パイロットからしたら重金属弾なしにレーザーヤークトを行うなど、恐怖の他なんでもない。

レーザーが減衰することなくこちらに飛んで来るのだから。

『さらに、昨夜の作戦で使用された重金属弾の重金属雲がバルゴン超大型種の放熱で生じた上昇気流により積乱雲と化している上に大気プラズマ化により作戦域での衛星データリンクの途絶やGPS誘導不可などの状況が懸念される。』

付け足す様にニコライは言う。

重金属雲の展開無し。

突入と同時にデータリンク途絶。

衛星からのGPS誘導不可。

(悪条件に悪条件が重なってんのかよ…)

千尋は、呻く様に内心、呟く。

『だが朗報もある。陸軍第11飛行隊のUH-60R【ブラックホーク】18機から成るヘリコプター部隊が弾薬輸送部隊として、我々に追従してくれるそうだ。期待に添えるよう、我々は我々に今成せる事をせねばならない。』

ニコライが言う。

『こちらCP、メドヴェーチリード、ジャーナルリード、カロンリード、MDTリード、全機発進せよ。繰り返す、全機発進せよ———』

CPからの命令

『メドヴェーチリード了解。』

『ジャーナルリード了解。』

『カロンリード了解。』

『MDTリード了解。』

ニコライ、ラトロワ、在ロリシカ米軍小隊長、まりもが応答する。

『グッドラック（武運を祈る）——』。

管制塔からの命令で、全部隊がカタパルトから射出される。

だが千尋は、不安を拭い去れなかった。

（箒を救うにはどうするべきなんだよ…でも、まずは超大型種をやんねえと——）

瞬間、内心呟いていた千尋に守秘回線でまりもが呼び掛ける。

『心配か？千尋。』

母性を孕んだ声音で、まりもは聴く。

「…そりゃ、心配ですよ…どうやって、箒を助けたらいいか…」

不安を孕んだ声音で千尋はまりもに返す。

だが、まりもはふふつ、と笑い、

『安心しろ。ジノビエフ少佐に口添えはしている。』

まりもは、そう言う。

瞬間、部隊内ローカルデータリンクでニコライがイリーナに話しかける。

『時に同志中尉、重金属雲下、あるいはそれに相当する環境下で部隊のデータリンクが途絶した場合、部隊の指揮系統はどのように定められている？』

ニコライが突然、世間話でもするようにイリーナに問う。

『何ですか？こんな時に…中隊指揮官、あるいは政務士官に一任されるが、 “ 任務さえ達成できれば方法は問わない ” ……まさか!??』

イリーナは全てを察したように顔を蒼白にする。

ニコライはそんなイリーナの顔を見て、不敵な笑みを浮かべて、

『総員傾注！防衛省技術試験小隊もだ!!?』

突然自分達まで呼ばれ、千尋だけでなく新井や門松も驚く。ただ、まりもだけは楽しそうな顔をしていた。

『これより我が中隊は戦力を分割。一個小隊をバルゴン大型種殲滅に、一個分隊を、防衛省技術試験小隊の護衛を兼ねて、第2前哨基地へ派遣する!!? 志願者は名乗り出る!!?』

満を満たした号令——千尋は瞬間、まりもの言っていた口

添えの意味を悟る。

『な、何を考えているんですか!!? 同志少佐!!?』

『我々の命令は大型種の殲滅。だが後方から弾薬輸送部隊がいる上に在ロリシカ米軍の装備している対大型種用装備、フェニックスミサイルMk. 2を搭載しているカロン小隊に我が軍の国境警備軍。彼らがいれば我が隊は一個小隊でも殲滅可能と判断した。それに同志中尉も言っていたではないか。「任務さえ達成できれば、方法は問わない」と。』

通話記録はログとして記録される。

イリーナは言質を取られた事を悟り頭を抱える。

『ユーゲン・ストラヴィツキー軍曹、分隊に志願します!!?』

瞬間、ユーゲンが分隊に名乗り出る。

『エリザヴェータ・マツナガ曹長、分隊に志願します!!?』

さらに、エリザまで志願する。

『支援と救出には、近接戦に長けた私とストラヴィツキー軍曹で行くべきです!』

『ま、待ちなさい同志曹長! 貴女が離れたら誰が後衛指揮を——

——』

『貴様がやるのだ。チエスコフ中尉。』

ニコライがさも当然、と言うようにイリーナに言い放つ。

『貴様にも政治面以外に指揮官としての才能はある。俺は貴様の判断力を買つての事だ。頼むぞ——そしてマツナガ曹長、ストラ

ヴィツキー軍曹、防衛省技術試験小隊の役に立ってこい!!?』

『了解!!?』

そういうと、ガンヘッド2機がメドヴェーチ中隊から離脱し、防衛省技術試験小隊に加わる。

『——MDTリードより各機に通達。』

すると今度はあまりも声がかける。

『知つての通り、我々の元にメドヴェーチ中隊の2機が追随する事となった。任務を再確認するぞ、我々の任務は超大型種の照射器官破壊と、第2前哨基地の生存者救出だ——行くぞ。各員、私の

ケツについて来い!!?』

「了解!!?」

まりもの号令に門松、新井、エリザ、ユーゲンが応じ、それに合わせるように千尋も応答して——まりもを先陣に、防衛省技術試験小隊の全機が、突撃を開始した——。

い?????????
これは夢。

いや、正確にはあの悪夢の日の出来事だ。

クラスでいじめられている子がいて、私は助けなきやいけないと思っ助けた。

でも、いじめていた子は中国共産党の人間で——私は、母さんと一緒に、危険思想保持者として逮捕された。

薄暗い取調室。

「さて、囚人2049号——鳳鈴音、今日の政治思想教育の時間だ。」

鈴の前に座っている、黒い、髪の毛が言う。

「君は何故、党の人間に楯突いた?母親からこの国の実情を聞いていなかったのかね?」

ふざけたような口調で男は言う。

「:知りません。母さんからは聞いてない。私はただ間違ってると思っただから——」

瞬間、鈴の隣に立っていた別の男に顔面を殴りつけられる。

一瞬遅れて、口の中に感じた異物感——歯が、折れたのだ。

(私がいくら正しいと思っても:こいつらは、すぐに暴力でそれを封じて、自分達を正当化するんだ:)

鈴は毒付く。

この国では——中国では自由や民主主義を謳う人間は

“ 危険思想保持者 ” として逮捕され、政治思想教育: : : ようは洗

脳されるか、肅清される。

「よさないか。IS適性が最も高い人間なんだ。」

すると鈴の前に座っている男が部下と思しき男を咎める。

「…とはいえ、その思想は、どうにかしなくてはいけない。君の思想は非常に危険だ。」

鈴に、男が言う。

「教育しなければ。」

男は愉しげに言って、ついて来い、とでも言うように、指を鳴らす。そして、部下の兵士が鈴の両脇を抱えて廊下に連れ出した。

——連れて行かれたのは、薄汚い一つの部屋だった。

中に在ったのは、イカ臭い匂いと、汚れたシーツが敷かれたベッドと——何人もの男たち。

「…な、何を、するつもり——」

鈴は戦慄する。

いや、何をされるかは、なんとなく想像はついている。だが言葉にできない。いや、したくない。

「何をするかってそりゃあ決まっているじゃないか。」

歌うように男が言う。

「政治思想教育だよ。君のような “ 危険思想保持者 ” をこれ

以上出さないためにも、君を “ あらゆる手段をつくして教育する

” ——書類上は、そうなっている。…まあ、すぐには終

わらんだろうが。」

「い、いやあつ!!?」

鈴は反射的に逃げ出そうとして——隣に控えていた兵士に腕を掴まれ、部屋に放り投げられる。

室内の男たちの下卑た笑いを浮かべる。

鈴は震える中、必死に首を振った。

「いや…助けて母さん…」

「助けを呼んでも無駄だよ。君の母親も今頃同じ様な “ 教育 ” を受けている。」

鈴は、その言葉に絶望する。

「ああ、君が党に忠誠を誓ってくれたら話は別だが？」

甘い誘惑——だが鈴は、そんな連中に忠誠を誓うのは、耐えがたい話だった。

（忠誠を誓えば、私も母さんも助かる…でも、でもそんなの…助けて…一夏あ…。）

鈴は藁にもすがる気持ちで一夏の名を呼ぶ。

けれど助けが来るはずなどなくて——
「別に構わないよ。君が自殺しようが、代わりのIS乗りはいくらでもいる。」

鈴はさらに戦慄する。

党の権限さえあれば、こんなことすら黙殺できてしまう——

「ではあとはよろしく。」

「ま、待って…いや、いやあああああ!!?」

次の瞬間、鈴は四肢を男に掴まれ、ベッドに押し倒され——
—犯される。

その男は、鈴が男たちに犯される光景を、何の良心の呵責も感じさせない様に、愉悅に歪んだ顔で視姦していた——。

「ごめんなさい…。」

“ 教育 ” の名を借りた陵辱の後、鈴は薄汚く汚れたベッドの上でただ泣いていた。

本当は一夏に捧げたかった純潔も奪われて、汚された。

「さて、落ち着いたかね？」

先ほどの男が話しかけてくる。

何処が落ち着いただ、と言いたいが、疲労と処女を奪われたショックで口から言葉が出ない。

「まあ、あれくらいで君は堕ちないだろう。——おい。」

男がそういうと、男の部下と思しき女が何枚かの写真をシーツの上にばら撒いた。

「!?…これっ…」

一瞬後、自分の目を疑った。全身に怖気が走った。

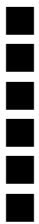
「う、おえええ!!？」

胃から逆流してきた内部のものを、吐き出す。

「は…はあ…はあ…大丈夫…大丈夫…大丈夫よ…鈴。一夏を手に入れたら…だから…大丈夫よ…ふ、ふふ…ふ…」

どうしようもなく歪んだ笑顔で、自分に言い聞かせた。

ふと、寝る前につけばなしかったテレビを見ると、そこではロリシカのニュースをやっていた。



ドイツ連邦共和国、首都ベルリン・リヒテンベルグ

ベーバーゼー基地からエミーリアの車で、ユリアとエミーリアはベトナム人街に足を踏み入れていた。

静けさを感じさせるベルリンの街並みとは一転して、ベトナム人街に踏み込んだ瞬間、ガラリと雰囲気が変わる。

象徴的な赤と黄色の看板。

鼻腔をつく調味料やお香の匂い。

何処からとも無く流れて来る民謡。

路上を行き交う人たちの交える言葉。

祭りのような楽しい喧騒や、活気に満ち溢れた街並みが広がって
いた――。

その、とある居酒屋――。

「どうあからさあ…だからさあ…もつと経済格差に金使えって言うのおく…。」

ユリアがカウンターの机に右頬を押し付けるように寝転び、ぐでんぐでんに酔っ払いながら、羅列の回らない声で言う。

「よしなさいよ、大尉。みつともない。」

エミーリアはその隣でフォーや春巻きを食べながら、エミーリアはユリアを嗜む。

「まあまあ、私もそんなの聞いちやったらユリアちゃんみたいに感じちやうわねえ…。」

カウンター越しに2人に向き合いながら春巻きを作っている、店主

のベトナム移民2世のファム・ティ・ランは少し苦笑いに近い笑みを浮かべて言う。

「…大体、女尊男卑とかバカじゃない？つて話！力仕事には男手がいるつてのに…」

「まあ、確かにね。そこは私も大尉と同感だわ。男性を一掃しようとか女性利権団体は言ってるけど、それでは人間が子孫を残す為に必要不可欠な交配という行為が出来ないわ…それでなくとも、土木関係や工場での生産、機材の整備などには女より男が向いているというのに…私達女に過労死しろと言いたいのかしら？」

ぐいつ、と水を飲み干しながらエミリーアが愚痴るように言う。

「そもそも意味が分からないわ。何故軍はマスケット部隊である黒兎隊を維持する方針なのか。」

さらにエミリーアが箸で春巻きを裂き、裂いた春巻きを摘んで食べながら呟く。

確かに、黒兎隊に一番予算を使うよりも、現用装備の維持に務めるべきなのだが、IS部隊の維持に尽力しているが故に既存部隊の予算が割かれる羽目になるのだ。

はあ、と溜息を吐くエミリーアを見て、ファムは苦笑いしながら、春巻きをユリアの前に置いて、

「そう…そつちも大変なのね…」

少し黄昏たような口調で言う。

「…ふつぶ…そういうや、ファム姉も大変だったのよね…私らと同じ年頃の時は…」

水を飲んで酔いが落ち着いたユリアがファムに聴く。

「そうねえ…私が若かった頃はグークって言われて、差別されていたから。」

グーク——ドイツ人の、ベトナム人に対する差別的な呼び方だ。

今では減った方だが——ファムが20代だったころの1980年——すなわち冷戦当時の東ドイツでのベトナム人の扱いは酷いものだったそうだ。

「経済が悪いのも全部ベトナム人のせい。仕事が上手くいかないのも全部ベトナム人のせい。食物の収穫が良くないのも全部ベトナム人のせい。あれやこれやと色々な事をこじ付けられてね…そして、そういう人間に限って多様な人種の共存を許容する社会主義の掲げる万人の平等を “ 本気で ” 訴えるんだもの。」

公衆の前：つまり表では美辞麗句を並べて、裏では自分の欲求不満を満たす為にベトナム人を痛めつけ、差別する——その構図は、表では男女格差の撤廃を訴えながら、裏では男性を虐げる女性利権団体の姿と何処か重なって見えなくもなかった。

「なんていうか、今じゃあ何言ってるの？ってなるわね。ベトナム人の血を引いてはいるけど、ファミ姉は立派なドイツ人なのにね。」

ユリアは完全に酔いが落ち着いたらしく、落ち着いた声音で言う。「ありがとう、そう言ってくれると嬉しいわ。」

「別にお礼言うほどじゃないわよ。同じドイツ人同士、当然なわけだしね。」

ファミに対してユリアは明るく笑って言う。

『次のニュースです。現在戦闘が激化しつつあるロリシカですが、政府の会見では——』

テレビに映るニュースからは、ロリシカに関する内容が、報じられていた——。



ロリシカ、ギジガ統合基地・第2前哨基地

そこでは、アンギラスとバルゴン超大型種が戦闘を繰り返していった。

アンギラスが地面を——第2前哨基地の滑走路を蹴る。

衝撃でコンクリートが粘土細工のように抉れ、コンクリート片が空高くにいくつも舞い上がる。

だがアンギラスはそんなものには眼もくれずにバルゴン超大型種

の前足に噛み付き、そのままタツクルで、第2前哨基地の敷地外にまで吹き飛ばされる。

「ヴオ〃オ〃オ〃オ〃!!?」

バルゴン超大型種はすかさず足を地面に突き立てて静止を試みるが、止まらず、そのまま雪原の上を転がっていつてしまう。

バルゴン超大型種の足は丸太の断面のような形をした、歩くことにおいては退化したもので、急なブレーキや急激な加速には向いていない足をしていた。

そのバルゴン超大型種に追い打ちをかけるように、アンギラスは脚部の先端にエネルギーを集中させ、前足を数回グラインドする。

「グオオオオオオオオオ!!?」

そして、咆哮を放ち、周辺の積雪や瓦礫、プレハブ小屋、装甲を持たない車軸が、衝撃波で吹き飛ぶ。

加速に適した強靱な脚で、地面を、蹴る。

瞬間、地面が抉れ、クレーターと化す。

一瞬後、凄まじい衝撃波と電磁波、熱が周囲に発生し、駐車していたタンクローリーや燃料タンクが次々に熱で誘爆する。

だが、アンギラスはやはり眼もくれずにバルゴン超大型種に迫る。

600メートル近く離れたバルゴン超大型種に到達したのはたった10秒足らずという、圧倒的な速さで。

さらにアンギラスが駆け抜けた雪原は雪が膨大な熱で一瞬にして水に融解。

だがそれに留まらず、融解して発生した水は一瞬で大規模な水蒸気爆発を引き起こし、アンギラスの駆け抜けた地面から100メートル近い距離の地面が抉れ飛ぶ。

だが2匹はそれに眼もくれずにぶつかり合う。

アンギラスはすかさず首を噛み千切ろうとするが、バルゴン超大型種は尾を鞭のように振るい、それを阻害する。

さらにバルゴン超大型種は、口から冷凍ガスをアンギラスの頭部目掛けて口から放つ。

アンギラスはそれを右側の前足で防ぐが、その脚の表皮にまとわり

ついていた水分が急激に氷結し、アンギラスの前足を氷漬けにする。アンギラスは一瞬驚いたが、直ぐさま後方に飛び退く。

近接戦でアレを喰らえば終わり——氷漬けにされた右足をシベリアの冷たく、硬い地面に叩きつけて、表面の氷を叩き割って、払い落しながら、そう理解したから。

さらに、感覚は麻痺したままだ。どうやら軽い凍傷を負ったらしい——これでは機動力を生かした近接戦に支障が出る。

どの道近接戦は不利なのだ。

だからアンギラスは、少し頭を働かせて、戦い方を、変える。

バルゴンはアンギラスが飛び退いたのを見て、一瞬逃げる為かと思いい、バルゴンは目を妖しく光らせ、背中の生体レーザー照射器官にエネルギーを集中させる。

同時にアンギラスも飛び退いて着地した場所で自身の体に纏わりつくように周りを飛び回るアンギラスと同じ帯電体質のシベリアシロライコウチョウの動きがより一層、活発になる。

シベリアシロライコウチョウがアンギラスの周りで渦を巻くように飛び、まるで遠くからみればそれは竜巻にすら見えるほどで——

瞬間、アンギラスの背中にある無数の棘が次々に膨大な電力が送られ、棘に翡翠色の神経回路を連想する筋が浮かび上がり、棘が次々にスパークし、稲妻が走る。

瞬間、バルゴンがそんなアンギラス目掛けて湾曲レーザーを放つ。

膨大な熱で大気がプラズマ化する——同時に、アンギラスの周りを竜巻のような錯覚を覚えるような光景だったシベリアシロライコウチョウに、アンギラスが電力が最大にまで達した棘から凄まじい超集中電磁波を全周に放つ。

瞬間、それがアンギラスの周りで竜巻を描くように回っていたシベリアシロライコウチョウの全てに感電し、シベリアシロライコウチョウが体内で蓄積していた電力を巻き込む形で、自然界では起こりえない威力の雷の竜巻が大気を焦がし、アンギラスの周りの積雪を、地表を、雷と共に発生した衝撃波が粉碎し、全周囲に積雪と地表の破片が舞い上がり、バルゴン超大型種の湾曲レーザーの威力を減衰させる。

ロリシカ軍の重金属弾に似た戦術——しかもそれだけではなく、先程発生した雷の竜巻はバルゴンの生体レーザーを、アンギラスの雷撃による電磁波の影響で拡散させて、消滅させた——

「グオオオオオオオオ!!?」

アンギラスは、バルゴンに向けて、咆哮を放ちながら、地面を激しく蹴り、舞い上がる雪煙に紛れながら一瞬でバルゴンに迫り、眼前で体当たりを食らわせる——バルゴン超大型種もそのワンパターンは戦い方を嘲笑うように冷凍ガスを放とうとして——

——アンギラスは、感覚のある左脚を地面に突き立て減速。さらに、左前脚と後両脚で地面を蹴り、バルゴンの側面に飛び込む

——バルゴン超大型種は驚愕する。

つまりアンギラスの動きは、フェイントだった。

「——んだよアレ……化け物じゃねえか……」

銀龍の管制ユニットの中、千尋は冷や汗を浮かべながら呟く。

……前の自分なら、 “ゴジラ” だった頃の自分なら、あの怪物——仮称・アンギラスを化け物だなんて思わないだろう。自分と同じような存在だから——。

だが、今の千尋からすれば、人間に限りなく近い千尋からすれば、あの怪物は——アンギラスは、バケモノの他なんでもない。

バルゴンも確かに充分バケモノだ。

だがアンギラスはどうか。

あのバルゴン相手にバルゴン以上の力で対抗している。

これをバケモノと言わずして何というのか。

千尋は銀龍の試製4式超電磁投射砲をバルゴン超大型種に向けて構える。

その周辺ではバルゴン中型種が銀龍に向けて大挙してきていた。

どうやら、試製4式超電磁投射砲を脅威と認識したらしい。

千尋の周りではバルゴン中型種を応戦すべく、まリモ達が奮戦して

いる。

『千尋、射撃タイミングは貴様に任せる。バルゴン超大型種の照射器官を破壊したらすぐ様試製4式超電磁投射砲を投棄。貴様も第2前哨基地生存者の救援に加われ。試製4式超電磁投射砲については、データさえ持ち帰れば、それで良い。』

まりもが、言う。

瞬間、まりもの荒吹壱型内にバルゴン中型種が背後から迫り来る。だが、まりもは焦ることなく背部兵装担架のガンマウントを展開し、36ミリ機関砲を斉射。

さらに跳躍ユニットを機体が回転するように吹かながら、移動エネルギーを掛けたマニピュレーターに持つ長刀で、バルゴン中型種の首を斬り飛ばす。

そのまりもにさらなるバルゴン中型種が2体迫るが、1体はユーゲンのガンヘッドが突撃砲で頭に風穴を穿ち、もう1体はエリザが長刀で首を斬り飛ばす。

「了解です。」

千尋もそれに、応じる。

そして、相変わらずアンギラスに取っ組みられるバルゴン超大型種を見る。

アンギラスはバルゴン超大型種の脊髄を破壊しようとしているのか、背中から押さえつけるようにしている。

（——もう、あいつだけ居たらいいんじゃない……）

ふと千尋は思う——が、次の瞬間、千尋は本能的に危機感に満ちた寒気を全身で感じる。

バルゴン超大型種の生体レーザー照射器官が、妖しく光る。

アンギラスは、首の骨を折ろうと感覚のある左前脚で頭を押さえながら首に噛みつこうとしていて、バルゴンの生体レーザー照射器官の変化に気付いていない——

「バカ野郎……さっさとそこから退け!!？」

千尋は思わず、届くはずがないにも関わらず、反射的に叫んだ。

でもその瞳にはかつての自分と同じ——ゴジラと同じ

程の力が籠っていた。

瞬間、アンギラスが何故か驚くように千尋の銀龍の方を向く。機体のメインカメラ越しに、千尋と視線が合う。

見えるはずがない。

けれどアンギラスは、自分よりも遥かに強い存在を秘めた瞳を見た気がして——そしてその瞳の持ち主が怒鳴る声が聞こえた気がして——弾かれるように背後を見る。

そこには照射直前の生体レーザー照射器官。

瞬間、脊髄反射のようにアンギラスはバルゴン超大型種から飛び退く。

しかし一瞬遅れて、生体レーザーが放たれる。

そして生体レーザーが、アンギラスの腹部を貫く。

そこから赤い紅色鮮やかな血が噴き出す。

「グオオ…!!？」

苦しげに、痛みに呻くように顔を歪めながら、地面に蹲り、雪原を鮮血色に染めながら、吼える。

バルゴン超大型種は、それで調子に乗ったのか、アンギラスの方に体を向けて、生体レーザーの第2射を放とうとする。

だが、アンギラスが間接的とはいえ、作ってくれた隙を、千尋は逃さなかった。

銀龍の背中にある、主機であるG2 (Generator | Generator) 機関に、試製4式超電磁投射砲のエネルギー供給用特殊ケーブルが接続される。

G2機関からG元素が試製4式超電磁投射砲に充填され、発電機も唸りを上げる。

『G2機関との同調完了』

モニターにそう表示される。

千尋は酷く緊張して————けれど何処か懐かしい感覚に僅かに興奮していて————

砲身はバルゴン超大型種の照射器官に向けられたまま————

「はあ…はあ…」

緊張感が高まる。

呼吸が難しい。

肺に二酸化炭素が溜まってくる。

新鮮な酸素を求めて呼吸が荒くなる。

射撃管制は左肩に搭載されている板型レーザー搭載型の試製4式超電磁投射砲専用のG型ユニットが自動で行っている。

だから操縦桿で調整する必要なんてない。

千尋はただ、操縦桿の引き金を引くだけでいい。

でも、操縦桿を思わず力強く握ってしまう。

緊張しているから。

昂りを抑えようとするから。

網膜に投影されているロックオンカーソルは常に揺れ動くバルゴン超大型種の生体レーザー照射器官を追っている。

だがバルゴン超大型種の生体レーザー照射器官からの放熱やレーザーによって大気がプラズマ化している影響で、衛星からのバックアップが取れず、自動照準が定まりにくいのだ。

（いつともう少し近づいて————いや、バルゴンに気付かれる。）

それだけでなくバルゴン超大型種のギリギリ探知圏外なのだ。

もう数メートル進めば、バルゴン超大型種から生体レーザーが飛んで来る————。

瞬間、不意にバルゴン超大型種が千尋を向く。

「……？」

思わず千尋は凍りつくような感覚を覚える。

けれどそれは一瞬、脊髄反射のように、殺気を込めて睨み返し、壮絶な笑みを浮かべる。

——同時に、空気を焼く音が響く。

バルゴン超大型種は、はっと顔を上げる。

空気を焼きながら、音を立てて迫るもの——司令基地の野戦陣地群から放たれた砲弾群だった。

アンギラスの近接攻撃により、対空レーダーの役割を果たす器官が破壊、あるいな損傷を負ったらしく、対空警戒能力が目に見えるほど、低下していた。

一瞬後、バルゴン超大型種は迎撃使用するが、アンギラスが痛みの走る体に鞭を打って、バルゴン超大型種の頭部に尾による打撃を脳に叩き込む。

バルゴン超大型種はそれで脳震盪を起こしたらしく、体が、くらくらりと揺れる。

そこに容赦なく砲弾群が叩き込まれていく。

だがそれと同時に管制ユニット内に鳴り響く警報。

『南東より新たなバルゴン梯団！数150!!?こちらに向かっていきます!!?』

ユーゲンが叫ぶ。

「ツ!!?」

千尋はそれに対処しようとして——

『そのままでいろ！千尋!!?』

まりもの怒鳴る声が鼓膜に響く。

『貴様が今成すべきことは何だ!!?』

バルゴン超大型種の生体レーザー照射器官を、試製4式超電磁投射砲で破壊する——その試製4式超電磁投射砲は、銀龍の特殊な主機に接続しなければ使えない。

だから必然的に千尋がやらねばならない。

そしてそれを千尋は分かっている。

分かっている。

『案ずるな。そう簡単に殺られるタマではない。』

まりもが突撃してくるバルゴン中型種を長刀で上下に切断し、背部兵装担架の突撃砲でバルゴン小型種を蹴散らしながら、言う。

『多少は先輩を頼れよ。』

新井も二門同時斉射をしながら言う。

その隣では門松がシエルツェンの爆発反応装甲でバルゴン中型種の顔を吹き飛ばす。

『そうですよ、篠ノ之二等兵!!?』

さらに、ユーゲンも言う。

『伊達に2年も戦術機でバルゴン群に突っ込んで戦ってるわけじゃないです!ちよつとは信用して下さい!!?』

ユーゲンが、突撃砲で正面のバルゴン群を蜂の巣にして――

――舞い上がり、煙幕となっていた積雪にまみれ、左翼から突っ込んでくるバルゴン中型種の頭にシエルツェンのスパイクを突き刺しながら言う。

『全くよ。∴私たちが守ってあげるわ。背中は、任せなさい。』

エリザも、右手の長刀でバルゴン中型種を薙ぎ払い、さらに左手で背部兵装担架の長刀を引き抜き、抜刀する勢いを利用して、突っ込んでくるバルゴン中型種を両断しながら、言う。

「――了解。頼みます!」

千尋はそう言うのと再度バルゴン中型種に向き直る。

試製4式超電磁投射砲の照準システムはもう少しでバルゴン超大型種の生体レーザー照射器官を捉える――という瞬間、またバルゴン超大型種が動いて、照準がズレる。

「…っ!!?」

千尋は思わず、舌打ちする。

バルゴン超大型種は先程千尋に狙われていることに気づいたこと、また飛んで来る砲弾群を外させようとしているらしく、忙しく動いて照準をずらせようとする。

だが、瞬間、激痛が相変わらず体を駆け巡って、血を吹き出し続けているアンギラスが体に鞭を打ち、飛びかかり、感覚が戻ったらしい右前脚と左前脚でバルゴン超大型種の前脚を斬り裂き、バルゴン超大型種が痛みで体のバランスを崩す。

さらに畳み掛けるようにアンギラスが両前脚でバルゴン超大型種

の頭を押さえ、動きを封じる。

そしてアンギラスが千尋に、瞳を向ける。

初対面なのに、何処か、昔に共に戦った戦友に向けるような、そんな瞳を見て——千尋は、意図を察する。

そして千尋は、笑みを浮かべながら、

「——よくやった、アンギラス。」

不意に意識せずに、大人びた声音で、勝手にそう言ってしまう。

何故かは分からない。

だが何故か、ふと眩いてしまう。

それと同時に、試製4式超電磁投射砲の照準、およびG元素のチャージが終わる。

だが同時に、レーザー警報が鳴り響く。

バルゴン超大型種に初期照射されているのだ。

バルゴン超大型種の生体レーザー照射器官が、再度レーザーを放つ為にエネルギーを充填。

発光を開始する。

おそらく放たれるまで数秒もない。

発射インターバルはとづくに過ぎている。

普通の兵士なら恐怖で凍りつく。

だが、千尋は恐怖を感じるどころか壮絶な笑みを浮かべていた。

久しぶりに、あの、バケモノだった頃の——ゴジラだった頃の自分に戻ったような錯覚が脳を支配する。

決して慢心しているわけではない。

ただ、自信があっただけ——

懐かしい感触が蘇る。

背中に焼けるような幻痛が走る。

放射熱線を放った時の熱を感じた時に似た、痛みが、背骨に走る——

「人間を——」

銀龍の跳躍ユニットを背後に向けて噴射。

バルゴンの照射器官がスパークする。

「なめてんじゃ——」

試製4式超電磁投射砲の最終安全装置が解除される。

バルゴン超大型種の照射器官がレーザーを放つ寸前に達する。

「ねえええええええ——!!?」

熱線を放つように叫ぶ。

同時に操縦桿のトリガーを引く。

瞬間、試製4式超電磁投射砲の砲口から大気をプラズマ化させながら、毎分800発——1秒間に14発ずつ、120ミリ高速徹甲弾が緋色の光芒と化し、大気を裂き、バルゴン超大型種の照射器官に向けて放たれる。

バルゴン超大型種がレーザーを照射する——僅かコンマ数秒前に。

瞬間、バルゴン超大型種の照射器官に弾着し、3秒間——42発の、G元素により極限まで加速させられた120ミリ高速徹甲弾が、照射器官を、粉碎した——。

アンギラスが、両前脚を退けると、バルゴン超大型種が照射器官の弾けた痛みで、思わず悲鳴に近い鳴き声を、空を見上げるように放つ。

瞬間、アンギラスはその、相手を前にして無防備に曝け出した喉元に、喰らい付く。

牙を喉に突き立てられ、バルゴン超大型種はもがく。

だがそれと同時にアンギラスの背中の棘に翡翠色の神経回路に似た外見の筋が入り、そこがスパークする。

電磁波が発生する。

いや、背中の棘だけでは無い。

脚の爪、尾の先端にある突起物、バルゴンに突き立てている牙にも、翡翠色の筋が浮かび上がる。

そして次の瞬間、上空の重金属雲がバルゴン超大型種の放熱で発達した積乱雲から、極太の落雷がいくつも背中に落ちて、アンギラスがその電力を吸収し、翡翠色の筋がより一層まばゆい光を放つ。

瞬間、翡翠色の筋が浮かび上がっていた部分が今までに無いほど発光——そして、全周囲に、凄まじい集中電磁波が、穿たれる。積雪は一瞬で蒸発。水蒸気爆発を引き起こし、周囲に爆風が吹き荒れる。

——衝撃が止んだそこには、先程発光していた部位から放射熱しているアンギラスと——ゼロ距離からの集中電磁波に、首を吹き飛ばされ、肉塊となったバルゴン超大型種だった——。

『H Qより全部隊に通達する。防衛省技術試験小隊、メドヴェーチ、カロン、ジャール全部隊が目標の制圧を確認。これにて【深紅の雪作戦】を終了する——』

EP-14 希望の（無い）明日

ロリシカ共和国・マガタン市・マガタン空港

「…雪？」

箒が目を覚ました時、視界に映ったのは灰色の曇天の雲から降ってくる、白い、白い粉雪だった。

体を動かそうにも、何故か動かせない。そして何故か体を横たわらせている床がわずかに揺れている。

おぼろげな視界をゆっくりと巡らせると、そこは滑走路のようだった。

そして冷たい風が箒の顔に当たり、急速に脳の理解が早まる。

よく見ると、戦術機カーゴを機体上部に搭載したAn-225アントノフ輸送機が4機も止まっており、物資を満載したコンテナを機体底部からバスケットでぶら下げたUH-60Rブラツクホークが忙しく、行ったり来たりを繰り返している。

そして何故か、勝手にそれらのアングルが変わっていく。

箒自身が医療担架で、運ばれているのだ。

「気が付いた？」

箒の体に毛布を抑えてくれている女性衛生兵が箒に尋ねる。

「はい…」

箒は返答しながらも額に違和感を感じ、額に触れる。

そこには、包帯が巻かれていた。

「…あ」

ふと、箒は思い出す。

戦術機の跳躍ユニットが聞こえた後、大規模な大爆発が第2前哨基地で轟き、爆炎とともに爆風が襲い掛かり、旧戦術機ハンガーのコンクリート片がリーナに飛んで行って——それからリーナを庇って破片が頭にぶつかって、それで意識が飛んで——つまり、脳震盪で倒れて、気が付いたらこの空港らしき場所で、担架で運ばれていた——というわけだ。

「…ギジガ、統合基地の…第2、前哨基地、は…？」

箒は弱々しいが、確かに聴こえる声音で聴く。

「…貴女と貴女方の整備士2名、メドヴェーチ中隊の兵士1名と基地の守備歩兵隊の生き残りを救出したらしいわ…貴女と一緒にいたと言う守備歩兵隊の1個小隊もね。…でも基地の兵士の8割近くが、死亡または行方不明…らしいわ。」

重い声音で女は応える。

「…そう、ですか…」

箒は山本、さやか、リーナ、アルセン、ライサが無事だった事を知り、安堵するが、同時に重圧がのしかかる。

第2前哨基地の、8割近くの兵士が亡くなったということが、箒の胸を締め付ける。

(私にもう少し、力があつたら——
あの時あつたなら——)

思わず、涙を流しながら、内心呟く。

へだから駄目よ。人が持ち得る事の出来る以上の力を求めちゃ——

そんな箒に、ナニカが介入して来る。

へ貴女が救えたのは彼らが限界だった。——いえ、1個小隊分の命を、あの絶望的な状況から救ったのよ？貴女には、それだけの命を救ったというのに、何が不満なの？

妖艶な声音は相変わらずだが、何か憂うように、嗜めるように、言う。

へベシカレフ伍長…だっけ？…彼女だって言われていたでしょう？

『誰かを犠牲にして誰かを救う。助かる見込みのある者から救う。見捨てる人間は見捨てなきゃならない。——誰も彼もを救おうなんて、最初から出来るはずがない』…と。

いつもの箒なら、食って掛かって反論する。

でも今はもう心身共に疲れてしまっていて、そんな余裕すらない。

そして何より、ナニカの言う事が、正論だったから。

へそれに、貴女が助けてどうなるの？こんな国に住む彼らは明日、いえ

今にも死ぬかもしれない。そんな相手に貴女が命を賭ける必要は、本当にある？」

(……………)

平和な日本なら、誰かを助けても、それは価値あるものとなる。

だがロリシカでは——世界から黙殺されているバルゴンとの戦争を繰り広げているこの国では、今この瞬間にも兵士が死んでいる。

箒が助けた兵士が、死なない保証なんて、どこにも無い——

そんな兵士を助ける為に命を賭ける意味があるのか——
そんな風にさえ考えさせられる。

「ああ、ここから先バルゴンの話はしないでね。…勿論、日本に帰ってからも。」

衛生兵が言う。

それに箒は雷に打たれたように驚いて、衛生兵の顔を見る。

「…ど、どうして…?」

「マガタン市には国際貿易港や外国人も多くいるわ。私たちロリシカの存在意義は “ 内戦を装ってバルゴンの存在を国際社会に漏らさないよう隠匿すること ” だけ。国連から独立を許されているのも、バルゴンを抑える為の盾になってもらう為。…だから私たちロリシカ人は国際社会にバルゴンの存在を知らせない為に徹底して隠匿しなくてはならない。情報統制はもちろん、軍人や民兵・警察による監視、国民一人一人に義務付けられた緘口令…それこそ、バルゴンに関しては共産主義時代と変わらないような監視体制を取らざるを得ないのよ…。」

衛生兵は、何処か憂うような顔で、言う。

つまりは、国際社会を混乱させない為に、肉壁になって死ねと、そういう事だ。

「そんな、どうして!?」

箒は、体の痛みも無視して上半身を力一杯に起こして衛生兵に食って掛かる。

「私の、私の目の前で死んだ人だっている。それも一人じゃない。何人、何十人、何百人と……！」

「……………」

「それも大人だけじゃない……私と同じ年の子だけでもない……私よりも小さな、まだ未来があつたかもしれない、小さな子供まで……!!?」

箒は悲痛な声音で、感情のままに、叫ぶ。

箒の脳裏に、目の前で散った小さな命——クリス二等兵の死の間際の光景がフラッシュバックする。

衛生兵は箒の心情を察しているのか、何人も同じような人間を見つけたのか、それを受け入れる。

「その死に確かに意味はあつたかも知れない……でも、そんな理由で……こんな戦いを、強いられたら……!!?」

箒はボロボロと涙を流す。

言葉が続けようとするが、うまく言語化出来ない。

それだけ脳が冷静さを失っていた。

「——そうね……」

衛生兵は悲しそうに微笑む。

「バルゴンの大規模侵攻に1年から3年のブランクがあつても、このままなら、遠からずロリシカは滅ぶでしょうね……そしてみんな殺される。命を孕み育める女も、緩やかな死を迎える老人も、これから先の未来を担う子供も……みんな……殺されるわ。」

その声音は、絶望を孕んでいた。

「でも、私たちが死んでも国際社会は気にしない。……私たちに、救いなんて無いし、期待なんて、出来やしない。……私たちに出来るのは、屍の山を築き、血の川を流してでも、1分1秒でもこの国の今を守り、一人でも多くの国民の命を守ること——ただ、それだけ……。なるようにしか、ならないわ……。」

やはり、その衛生兵も、ライサと同じく、諦めた顔をしていた。助けなど来ない。

死ぬまで戦うしか無い。

例え味方がやられようと。

例え自分が死のうとも。

ただ思考を殺して、バルゴンを殺すだけの機械的な存在にならなければ耐えられない。

だから皆が皆進んで機械的な存在になろうとする。

そこに救いがないなら、いつそ全て諦めて、死のうとする。

あらゆる意味で、救いなんて無いから。

今日生き残っても、明日死ぬかもしれない。

生き残る事は、ただその先にある死をほんの少しだけ先延ばしにするだけだから。

第2前哨基地で箒が味わった絶望は、とつくの昔にロリシカ全土に、伝染病の如く蔓延していたのだ。

(こんなんじゃ…救われないじゃない…)

箒は衛生兵から目を背ける。

どうしようもなくやるせない気持ちに襲われて、目頭から涙が零れる。

思わず、瞼を閉じる。

慈悲の一撃を喰らったクリス二等兵。

医療区画で事切れた負傷兵。

次々にバルゴンに殺されたバシキロフ大尉の部下。

共に戦って死んでいった兵士たちの屍が瞼を閉じて、暗転した視界一杯に映し出される。

(私達だけが良ければ良いのか？いやそんなの…そんなのダメに決まってる…このままじゃ…彼らが、報われない…)

ロリシカ兵達の犠牲の上で今までのうとうと生きてきた自分に対する忌々しい憎悪と罪悪感が箒の脳内を支配する。

そして彼らの、血だらけの冷たい腕が、箒の全身を掴む幻覚を感じて――箒は、泥沼に呑み込まれるように眠った。

マガタン港。

海上自衛隊【きい型護衛艦するが】・医務室。

次に箒が目を覚ました時に見たのは白い天井だった。

またベッドの上で寝かされていた。

「ほう…き、姐…」

ふと声が聞こえたのでそちらを向く。

下半身の方だ。

そこには千尋が箒の腹を枕代わりにして、椅子に座ったまま凭れ掛かるように眠っていた。

先程の声は、千尋のうわ言だったようだ。

よく見ると、目の下に大きなクマを作り、涙が通った跡もあって、疲労困憊といった顔をしていた。

「千尋…」

箒は千尋を見た瞬間、酷く安堵する。

自然に涙が溢れ出る。

さっきの暗い気持ちから、引きずり出されるような感じがした。

また千尋に会えたという気持ちだが、箒の中で、暖かな感情が生まれた。

「う…ん……ん……箒、姐？」

千尋が眠気を纏ったまま目を覚ましたが、箒を見て、すぐに意識が完全に覚醒する。

「…ッ…よ…」

瞬間、千尋が箒に抱きつく。

千尋の目からボロボロと大粒の涙がこぼれていく。

「よかった…ほ、本当に…生きてて、よかった…」

ふにや、と泣き笑いを浮かべながら千尋は言う。

「本当に…死んじやったんじや、ないかって、心配、したんだからなあ…ばかあ…！」

涙を流して、箒に抱きつきながら、言う。

それに箒は思わず困惑する。

だが同時に、箒は思い出す。

意識がフェードアウトする寸前に聴いた戦術機の跳躍ユニットの

音を。

そしてその跳躍ユニットは、銀龍の物の音で。

完成ユニットから飛び出して駆け寄ってきた誰かを――。

千尋の暖かい感触が伝わってきて、家族に会えた、そう言う感情が箒を締め付けていた鎖を引き千切る。

「…すまない…心配させて…悪かった。」

箒は赤子をあやすように千尋の頭を撫でてやる。

「…それから…」

一瞬、言い淀む。

けれど、自分の “ 機械面 ” を殺して、心の底から微笑んで、

「…助けてくれて、ありがとう。」

そう、言う。

そして箒は千尋を両手で抱擁する。

暖かい感触に、浸っていたかったから。

それに浸る事で、人間性を取り戻せるような気がしたから。

そして何より―― “ 家族 ” に、触れていたかった

から。

同時に、今まで押さえ込んできた思いが膨れ上がる。

「…千尋…」

箒は、少し震えた声音で言う。

「…なんだよ――…箒。」

千尋は一瞬口籠るが、箒を呼び捨てで、呼んでみる。

それが、箒の感情を縛り付けていた鎖をさらに引きちぎり――

「ッ…」

今まで封じてきた心が決壊して――

「…ッ、千尋っ!!っ?」

思わず、抱きつく。

大粒の涙を零しながら。

「怖かった…怖かった…死んじゃうかもかもしれないって…もう、二度と千尋に会えないかもって思ったら…怖かった、よ………」

子供みたいに泣きながら、言う。

「だから、死にたくなくて…でも、周りでたくさん人が死んでいて…みんな、精一杯生きたがっていたのに…なのに、私は、誰も救えなくて…助けるだけの力も、なくて…自分が生き残ることに、しか…手が、回らなくて…私…私…!!?」

どうにかなつてしまいそうな、悲痛な声。

ベルホヤンスク統合基地・第2前哨基地で箒がどんな凄惨な思いをしたのか、断片的に、思い知らされる。

千尋はそんな箒の背中を軽く叩き、あやす。

「…ごめんね…弟に継るような、馬鹿な姉、で…私なんか…お前の姉で…」

少し落ち着いた箒は、自嘲するように、自責するように呟く。

「…そんな事ない。」

千尋は静かに、けれど、芯のある強い声音で否定する。

「…たしかに箒は、自分が生き残るのに精一杯で周りに気を配れなかったかもしれない。…でも、人間誰しも自分が大事だろ…?…自分が死んじゃったら、何も意味ないんだから…」

そして少し箒から離れて、目線を合わせる。

「…それに、箒が姉だったから後悔したことなんて、一度もないよ。」

千尋が言う。箒は意外そうな顔をする。

それに千尋は無邪気に微笑んで、

「だって、6年前の墨田大火災で箒が助けてくれなきゃ、俺は死んでたじゃんか。」

「…あ。」

箒は虚を突かれたような顔をする。

「だから俺は…」

千尋が箒の両手を優しく握る。

「決して、箒を恨んだりしない。むしろ誇らしいし、感謝すべきだよ。」

元氣一杯に、無邪気に、微笑む。

「だから…」

千尋は、箒の額に自分の額を合わせる。

2人は、額から伝わる互いの熱を感じる。

「たまには、他人に…俺とかを、頼ってくれよ…こつちだつて、すごく心配、したんだから…」

再び千尋の目頭から零れ落ちる涙。

そして、箒は額から、千尋の暖かい体温を感じて、心が溶けていくような感触を覚えて――

「…うん。」

弱い、けれど確かな声で応えた。

「俺らの付け入る隙がねえな…」

「ええ…」

医務室の廊下からは新井と門松が扉の隙間から中を覗きこみながら、そんな会話をしていた。

「それにしても意外だよな…千尋の奴はシスコン、箒の奴はブラコンだったのか…。」

新井が言う。

「いえ違うでしょう。経歴見たんですか？千尋は篠ノ之家の養子ですよ。」

門松が、つつこむ。

「でもさ…姉弟なんだろう？義理とはいえ。」

「そりゃあ…。」

そんな話をしている。

瞬間、

「何をしている？貴様ら。」

背後から聞こえた声。

それに2人は錆びたブリキのように、ギギギ…と振り返る。

そこには――まリモがいた。

「じ、神宮司三佐…」

新井が引きつった顔で呟く。

門松は諦めて、おとなしくしている。

「貴様らには機体の整備班とともに整備を命じたんだがなあ…さて…何故、こんなところにいるのかなあ…?」

眉をピクピクと動かしながら聴く。

「いや、あの…その…」

新井が目を泳がせて、助けを門松に求める。

そして門松は、

「新井曹長が覗いてみよう、と言いだしたからであります。」

あつさりと見限った。

「お、おiiiiiiiiiiii!!?」

それに新井は情けない声で叫ぶ。

「さらに付け加えるなら、上官命令だ、…と。」

「おiiiiiiiiiiii!!?」

門松にチクられ新井は顔面蒼白となる。

「馬鹿者！貴様らがサボってるせいで第2前哨基地から救出した整備班にもさらに負担がかかっているんだ！さっさと持ち場に戻れ！」

「二り、了解!!?」

まりもが怒鳴ると、2人はすぐさま持ち場に戻っていった。

「…はあ…」

まりもはため息をつく。

「…それにな、今は、彼奴らはそつとしておいてやれ…」

まりもは母性を孕んだ声音で、呟いた。

「…あの地獄から、生き延びたんだから…」

窓の外に見えるロリシカ——— “ 神亡き屍戚の大地

” を見つめながら。

ロリシカ編・まとめ回

〈登場人物〉

・ 神宮司まりも三佐

マブラヴオルタネイティブで「元祖マミる」死に方をした事で有名になった神宮司まりも軍曹…の、平行世界の別人。

特務自衛隊・第1戦術機連隊ハバキリ第2戦術機大隊ウオードツグ大隊を率いる。

ロリシカ派兵経験が何度かあり、その猛将ぶりからつけられたあだ名は、狂犬神宮司。

光とは中学生時代からの友人。

なお、本章以降も登場する。

・ 新井曹長

マブラヴ外伝、贖罪で重レーザー級に焼かれたあの人…の、平行世界の別人。

実はセクハラ紛いな事をしたり、部下である門松を巻き込んでどんな騒ぎをしでかす、ある意味問題児。

…まあ、その度に、まりもから制裁が飛んでくるが…。

…なお、本章以降、あんま出番ない。

・ 門松一曹

新井によく巻き込まれる不遇くん。

だがすぐに新井を見限る冷たい子でもある。(本人曰く、「見限った後のあたふたする新井曹長が面白い。」)

…なお、新井曹長と同じく、本章以降の出番は…。

・ 山本晃三尉

アニメ版マブラヴ・トータル・イクリップスの山本伍長…の、平行世界の別人。

本人は整備士なのだが、人手の少ない特自では1人の人間が複数の

スキルを持っている事が多く、なんとレンジャー資格を持っている。

・楠本さやか二曹

マブラヴTDAの楠本さやか軍曹…の、平行世界の別人。

…あまり特筆すべき点は…ないかも。

・ユーゲン・ストラヴィツキー軍曹

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊メドヴェーチの16歳下士官。
子供らしさが残る。

過去に徴兵され、バルゴンとの初陣で恋人を亡くした。

その後徴兵されたメンバーの中で1人生き残った罪悪感から激戦地を求め、メドヴェーチ中隊への配属を希望した。

・リーナ・ベシカレフ伍長

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊メドヴェーチの新任兵士。

ロシアからの亡命者だが、温室に近いロシアで過ごしていた彼女はギジガの原爆症に苦しむ人々や戦場で様々な絶望を味あわされた。

…後にそれが、彼女を成長させる糧となった。

・エリザヴェータ・マツナガ曹長

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊メドヴェーチの中隊次席指揮官。

日系人で、昔は剣道を習っていた。

それ故に長刀の使いに長けている。

・ヴェロニカ・ジトワ伍長

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊メドヴェーチの兵士。

度重なる戦友の戦死が原因で戦争神経症を患っている。ソフィアとは犬猿の仲。

・ソフィア・ドモントーヴィツチ伍長

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊メドヴェーチの兵士。

戦場で様々な地獄を目に焼き付けてきたが故に、精神を擦り減らした為、馴れ合いを嫌う、他者を拒絶する性格をしている。だが一方で、遠回しに気にかかる等、根は良い人間ではある。

・ダニイル・ドヴラートフ曹長

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊メドヴェーチの中隊副官。

ロリシカ独立戦争時からの生き残りで、部隊の最古参。

・イリーナ・チエスコフ中尉

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊メドヴェーチの政務将校。

部隊の政治的指導や政治的推薦は彼女が担当している。

政府高官になるべくメドヴェーチ中隊の政務将校となるが、彼女がそこまで権力を欲するのは、国連から援助を受けられないロリシカの現状を变革する為である。

原爆症を患っている妹がいる。

・ニコライ・ジノビエフ少佐

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊メドヴェーチの中隊指揮官。

これまで数多のレーザーヤークトを敢行し、成功させてきた指揮官。

実はかなりの酒飲み。

：彼を支えるのは、ロリシカ独立戦争時に無差別爆撃により瀕死となり、自らが介錯した妹と約束した、「何があってもこの国を守る」というものが大きい。

・ワシーリー・アルムスハイマー伍長

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊の兵士。作中では既に故人。

ヴェロニカの友人だった兵士であり、彼の死はヴェロニカの戦争神経症をさらに悪化させた。

作中ではヴェロニカが彼の遺品を整理する形で登場。

・ファイカーツィア・ラトロワ中佐

マブラヴ・トータル・イクリップスのファイカーツィア・ラトロワ中佐

…の、平行世界の別人。

ロリシカ国境警備軍第2戦術機大隊ジャールの大隊指揮官。

ロリシカ独立戦争時からの生き残り。

「部下に手を汚させるなら自分がまず率先して手を汚さねばならない。」という信念を持つ。

・アルセン・バシキロフ大尉

ロリシカ陸軍第56歩兵中隊の中隊指揮官。

過去にバルゴンとの戦闘で片腕を無くしている。

・ライサ・セミヨン伍長

ロリシカ陸軍第56歩兵中隊の下士官。

重金属弾の影響で五体満足に子供が産まれない世代で、五体満足に生まれた事が取り柄だったが、バルゴンとの戦闘で片腕を無くし、アングラスとバルゴンとの戦闘の二次災害で両足を潰された。

だが生存し、アルセンらと共にギジガ統合基地に収容された。

・クリス二等兵

アルセンに好意を抱いていた12歳の少女。

バルゴン小型種に上半身下半身を引き裂かれた上で死にきれなかった為に慈悲の一撃によって介錯された。

箒やリーナに対するトラウマメーカー。

・ツアーリエ・アルフォンスキー中尉

ロリシカ陸軍第27歩兵連隊第6大隊第2中隊の中隊指揮官。

第4前哨基地の迎撃塹壕にてバルゴン小型種を迎撃していたが、第4波の襲撃後、消息不明となる。

まあ、迎撃塹壕がバルゴンで溢れていた時点でお察し。

〈設定・用語〉

・ロリシカ共和国

2001年に独立自治を認められたカムチャツカ、東シベリアに位置する民主主義国家。

しかし2004年からバルゴンとの戦争に突入し、国連からバルゴンの存在を隠匿する為の肉壁として扱われる。

さらにバルゴンの存在が漏れないように内戦を装い、バルゴン関連については共産圏時代同様の厳しい監視体制が敷かれている。

直接支援しているのは、アメリカと日本のみ。

・バルゴン

1996年ごろから現れた巨大生物。

ロリシカ軍が膨大な数の犠牲を築きながら隠匿している為、ロリシカ以外の大半の国家では知られていない。

小型種と中型種による数にものを言わせる人海戦術による蹂躪、大型種による航空機の無力化などによりロリシカは危機的状況にある。体組織が水に弱い為、水堀を掘るのが最適だが、それでも体が溶解するまで小型種でも270秒かかる他、口からの冷凍ガスで水面を凍らされてそこを渡って水堀を突破される事がある為、水堀の効果は薄い。

制空権さえ奪回すれば航空機による攻撃、砲爆撃による面制圧で殲滅できる。

推定1万体がロリシカにいとされるが、一度に大量の子を産む為、現在の正確な個体数は不明だが、悲観的に考えれば、5万休はいるとされる。

ごく稀にだが、地中侵攻を行ったり、冷凍ガスで海面を凍らせて渡洋しようとするケースがある。

1年〜3年の周期で大規模移動を行うため、その間に人類側は戦力補充ができるのが、せめてもの救いである。

(外見は漫画版ガメラ対バルゴンのバルゴン。)

小型種

最も個体数が多い個体。全長は3〜5メートル。

戦車や戦術機の敵ではないが、歩兵にとっては脅威となる。

中型種

戦車や戦術機の脅威となる個体。全長は16〜25メートル。

大型種

航空機を背中から放つ生体レーザーで撃墜する事で制空権を人類側から奪い取った個体。全長は45〜51.5メートル。

探知範囲は地形や気候にもよるが最大16キロ。生体レーザーの射程も同じく地形や気候にもよるが最大10キロ。

超大型種

ただでさえ強力な大型種の生体レーザーに偏光能力のついた個体。目撃例が少ない為、詳しくは分かっていない。

現在確認されている最大のサイズは68.7メートル。

探知範囲、射程ともに大型種を上回るらしいが、やはり地形や気候に左右される模様。

そして動きが一番鈍重な個体でもある。

・シン・アングラス

ロリシカでバルゴンとの戦闘の最中に出現した未知の巨大生物。

データが不十分な為、分かっていないことが多いが、現在判明していることは、俊敏な動きと帯電体質であるが故に体内に蓄積されている膨大な電気エネルギーを用いた戦いを行う。

ロリシカにおける重金属弾の重金属粒子がバルゴンのレーザーの放熱で発生した積乱雲からの落雷から電力を吸収できる為、ロリシカは格好のフィールドと言える。

また、シベリアシロライコウチヨウという帯電体質の蝶と共生関係にあること。

バルゴンに対し、積極的に攻撃を行う。

以上が現時点で判明している情報である。

(元ネタは、モンハンのジンオウガとアンギラス(千年竜王)。

：アンギラスがいつも不遇過ぎて可哀想だったからチート化させた。)

・レーザーヤークト

その名の通り、戦術機でバルゴン梯団に突っ込み最奥部にいるバルゴン大型種の生体レーザー照射器官を破壊、あるいは殲滅する戦術。

・重金属弾

重金属粒子をばら撒き、それらが重金属雲となり、大型種の生体レーザーを減衰させる効果がある。

バルゴン大型種の視界を遮れる他、砲弾命中率を向上させる。

だが弊害もあり、重金属雲下ではデータリンクが途絶えやすい。その威力はISのハイパーセンサーを阻害するほど。

また環境破壊兵器でもあり、重金属弾の使用され続けている内地部は重金属粒子の土壤汚染により、20年は人間の住めない土地と化している。

ロケット弾やミサイル、砲弾など様々なタイプがある。

・統合基地

ロリシカ陸・海・空・国境警備軍や在ロリシカ米軍などから成る集合型軍事基地。

上記の集合型軍事基地は司令基地と呼ばれ、その隷下として、前哨基地がある。

マガタン、コリヤーク、アナデイリ、オロイ、ススマン、カムチャツカなどに置かれている。

・ギジガ第2前哨基地

ギジガ統合基地司令基地隷下の軍事基地。

バルゴンの攻勢、さらにシン・アンギラスやバルゴン超大型種との戦闘で壊滅。

生存者を救出したのち、一時的に放棄された。

・衛士強化装備

戦術機の操縦者が身に纏う、所謂パイロットスーツ。

しかしマブラヴ原作とは違い、エロスーツやISスーツのような外見ではなく、空自の戦闘機パイロットが纏うフライトスーツに近い外見をしている。

理由として、パイロットへの心理的効果を期待してのことである。

例えば「絶対防御なし」の状態で銃弾や砲弾の飛び交う戦場に放り込まれるなら、素肌をさらしている通常ISと全身装甲ISのどちらを使うかなら、普通の人間なら、当然全身装甲の方を選ぶ。

パイロットスーツも同じで、サランラップくらい厚みしかないスーツより、耐弾耐刃効果が期待できるフライトスーツの方がパイロットを心理的に安心させられる理由から、これが採用された。

・MF-4Rガンヘッド

ロリシカがアメリカから輸入・ライセンス生産した戦術機。

寒冷地対策や近接戦に適した柔軟な稼働を可能にする改修が施されている。

また、バルゴンの生体レーザー防御措置として、レーザー蒸散塗膜を施した堅牢な複合装甲を機体のフレームに採用している。

外見はシュヴァルツエスマーケンの戦術機「Mig-21バラライカ」。

・ロリシカの戦術機運用思想

ロリシカはバルゴンとの近接密集戦を想定しているが、同時に整備性向上の為に機体のパーツは安易なものを採用している。

またパイロットの心理的効果の考慮やバルゴンの生体レーザーにも耐えられるよう堅牢で分厚い装甲で機体を覆っている。

・国連からのロリシカへの対応

国連は17年間ロリシカにバルゴンを封じ込める肉壁として利用して来たが、IS台頭後はさらにそれがエスカレートしている。

おまけに国連軍すら派遣しない有様である。

ロリシカがアラスカ条約に調印しなかった事も理由のひとつだが、国連上層部が女尊男卑寄りであること、ロリシカにISを派遣してもすぐにやられてしまうため、ISが世界最強の兵器ではなくなる——
—— もっと言えば、彼女らの権力を固めている存在が形骸化しかねないからである。

巨獣行軍編Ⅰ

EP—15 黒兔ト黒ノ宣告

2019年6月8日・ウクライナ東部

ドネツク州・スイエヴェロドネツク

闇の中、市街地の全てが獄炎に包まれていた。

あらゆる場所から火の手が上がり、爆発音が轟き、舞い上がる火の粉と煙と幾多もの屍が街を埋め尽くす。

スイエヴェロドネツクは今まさに、ネクロポリス——死の都と化していた。

その、死の都を駆け抜ける集団が2つ。

ひとつは鏃のような形の頭部を持ち、4足で時速150キロもの猛スピードで放置車両や死体を踏み潰し、道路を、半壊した建物を粉砕しながら、疾走してくる、ギャオス陸棲体、推定150体以上——

もうひとつは特徴的なトサカ型頭部センサーマストと近接戦と空力操作を兼ねたアームブレードを下腕部に持つ、白い機体フレームのEF—2020ヴァイツァヒンメル戦術機、1個中隊。

ドイツ陸軍第66戦術機中隊シユヴァルツェスマーケンが。

ユニコーンの一角を思わせるブレードアンテナが頭部ユニットに付いたヴァイツァヒンメル指揮官機——中隊指揮官のユリア・ホーゼンフェルト大尉が長刀でギャオス陸棲体の首を斬り飛ばす。

その後方に構えている副官エミリア・カレル中尉が突撃砲の二門同時射撃でさらに後方から突進してくるギャオス陸棲体の頭を蜂の巣にして行く。

その隣では中隊の次席指揮官のクラウス・エルツェンガー准尉が、シエルツェンの爆発反応装甲でギャオスの頭部を殴り付け、頭部を吹き飛ばす。

「各機、まだいけるか!? カレル中尉! 状況報告!!?」

ユリアが落ち着いた声音で怒鳴る——即座にエミーリアが応答する。

『全機損傷なし！なれど残弾、推進剤枯渇しつつあり！このままでは…』

焦燥を孕んだ声音で言う。

「——だが、引くことは許されない。背後にはまだ避難を終えていない難民や撤退中のウクライナ軍がいる。」

後方のサブカメラからは、軍の輸送トラックに乗せられて避難を行っている難民と、あるものはトラックや装甲車で、あるものは走って撤退しているウクライナ軍の兵士がいる。

彼らの元にギャオス陸棲体が到達すれば、彼らはなす術なく蹂躪され、皆殺しにされる——。

だから、ここで食い止めなくてはならない。

これ以上欧州各国に難民が流れ込むのを防ぐという政治的な目的のためにも。

『H Qよりドイツ軍第666戦術機中隊へ。貴隊は速やかに退避せよ。米軍が爆撃を敢行する。』

前線司令部からの通達——爆撃を敢行するというのだ。

そしてその爆撃の範囲が幾つものサークルマーカーが広域マップに表示され——そのサークルマーカーのひとつを見て、エミーリアが絶句する。

『待て！H Q！爆撃範囲にはまだ難民がいる！すぐに中止させろ！！？』

エミーリアが脊髄反射で叫ぶ。

『H Qより第666戦術機中隊、戦況悪化を防ぐために中止は認められない。』

確かに大局を見れば、爆撃を行わねばならない。

そしてその結果、数千人の難民を見捨ててはならない。

エミーリアは葛藤する。

「…シユヴァルツ・リードよりH Q、爆撃の遅延は可能か？」

エミーリアの葛藤に歪む顔を通信モニター越しに見て、ユリアが問

う。

『H Qよりシユヴァルツ・リード、それは出来ない。予定通り爆撃は刊行される。』

「…爆撃機の攻撃予定地もか？」

『いや、ギャオスの密集具合が激しい地域に投下が優先される。』

「…なるほど。」

それを聞いたユリアは悪い笑顔を浮かべる。

『ち、中隊長…？』

部隊最年少の隊員が不安げに声をかける。

「…了解した、H Q。だが難民に近い先鋒のギャオスは我々が漸減させる。米軍にはそれ以外の戦域を爆撃させるように伝えろ。」

ひどく楽しそうな声で言う。

『ま、待て！シユヴァルツ・リード！そんな命令…』

「密集具合が激しい地域が最優先で叩かれるんだろう？私たちはギャオスを漸減し、難民が脱出する時間稼ぎをする。米軍はその後の残りカスをやればいい。貴官もそう言ったではないか。」

『そんな屁理屈…！』

H Qのオペレーターが呆れたような声で叫ぶが、

『H Q、止しておけ。ウチの中隊長は言い出したら絶対辞めない頑固娘だ。』

エミーリアが、同情するような声で言う。

『中隊長!!?』

クラウスが叫ぶ。

見ると、ギャオス陸棲体の群れがなだれ込んでくる。

「食い止めるぞ！中隊長全機、突撃にいい、移れええええつ!!?」

ユリアの、裂帛の号令。

瞬間、前方より迫り来る30体以上のギャオス陸棲体に、12機の戦術機タイフーンが、突貫する。

「————あたしのケツを、舐めてみるおおおお!!?」

失せる、の意味を持つ雄叫びをユリアが上げて、鋭角的な軌道を描いて全長30〜40メートルもあるギャオス陸棲体の隊列に突撃。

エミーリアがそれに水平噴射跳躍で続く。

ユリアが装備しているのは残弾が僅かな突撃砲1丁と長刀、エミーリアが装備しているのは突撃砲2丁とシエルツェン。

残弾が少ないが故に、徹底的に無駄弾を排した精密射撃でギヤオス陸棲体の脚部を瞬く間に薙ぎ払いながら、ギヤオス梯団を打通する。

そこにも新たなギヤオス梯団が迫ってきていた。

「先の梯団後方のギヤオスはあたしが！エミーリア、あんたは新手の梯団を!!？」

『了解!!？』

そして脚部を潰され、地面に這いつくばった個体が障害物となり後ろのギヤオスがぶつかり、動きが停滞する。

『中隊後衛全機！120ミリ焼夷榴弾をぶちかませ!!？』

クラウドスが中隊後衛のヴァイツァヒンメルに命じる。

そして梯団に対して120ミリ焼夷榴弾が放たれ、爆発。同時に炎上する。

『後衛各機！突撃開始!!？』

クラウドスが、命じる。

ギヤオス梯団を打通したユリアとエミーリアに合流する為に。

いくら2人が中隊のエースであっても、やられない可能性は無かったから。

『死ねえ！忌まわしい鳥もどきがあ!!？』

エミーリアが叫びながら、突撃砲の36ミリ機関砲を放ち続ける。

何発かは無駄弾になっているが、気にしている暇はない。撃ち続けなければ、ギヤオス陸棲体に張り付かれ、文字通り喰われる。

『はあああー！』

エミーリアが雄叫びを上げて、シエルツェンの大型スパイクをギヤオス陸棲体の喉に突き刺し、力任せに切断する。

それを蹴飛ばし、射撃を再開。

接近しようとするギヤオス陸棲体に弾薬をぶち込む。

ギヤオス陸棲体を3、4体倒したところで、背後の粉塵から先程打通した梯団のギヤオスが襲い掛かる。

『…っ!!?』

「近づくなあっ!!?」

ユリアは長刀でそのギャオスの首を斬り飛ばす。

ギャオスの赤黒い体液がタイフーンの白いボディを汚す。

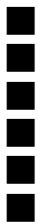
「殺されたい奴からあたし達にかかって来い!!?」

ユリアは、叫んだ。

結論から言えば、作戦は成功した。

難民の避難は無事完了し、米軍による爆撃で、ギャオス陸棲体の殲滅もできた。

——スイエヴェロドネツクは、瓦礫の山と化した。



2021年・宇宙・衛星低軌道上・ウクライナ上空

ドイツ空軍再突入型駆逐艦【ファルケンベルク】

戦術機カーゴ内

「ふう…」

戦術機カーゴに取り付けられた外部カメラが捉えた映像がヴァイツアヒンメル管制ユニットに投影されている中、ウクライナの姿を見たユリアは2年前のウクライナ派兵時の体験を思い出し、ため息を吐く。

『どうしたの?大尉。』

エミールリアが通信モニター越しに、問う。

「ああ、エミールリア…いや、ウクライナは今、どうしているのかなって…思っただけ。」

そう言うと、エミールリアも神妙な顔をする。

「ウクライナってさ……ロリシカと同じく、国連から援助すら受けられずにギャオスの肉壁にされてる国じゃない？……それに、あたし達が他部隊と交代する形でウクライナから撤収した後それっきり、あんまり連絡取れてないし……心配だなあって……」

ユリアの言う通り、ウクライナもまた、5年前から出現したギャオスと対峙し続けている、ロリシカと同様に国連からバケモノの存在を隠匿すべく、国連の援助もなしに、肉壁にされている国家だった。

国連が介入しない理由はやはり、ロリシカと同じく、ISの存在価値が無くなり、自分たちの権力を固める存在が形骸化する事を恐れたから――。

そのためにウクライナ軍や欧州連合各国、米軍が犠牲を払うハメになつていた。

当然、ギャオスとの戦闘もロリシカのバルゴン同様に内戦、と処理されていた。

結果として多くのウクライナ将兵が命を落としている。

「……今も、戦っているわよね……ウクライナ軍の将兵たちは……ギャオスと……」

ユリアが言う。

重い空気が部隊を包む。

『あ、あの……』

すると部隊最年少である少年、ハンス・ブルグスマユラー曹長が声をかける。

「どうした、曹長。」

『こんな状況でなんです……少し、アネクドート（小話）をしませんか？空気が重いままだとアレですし……』

「……ふむ、それもそうだな。……では、カレル中尉から。」

思わず、エミリーリアは驚く。

『なっ!?？なぜ私から……まあ良い……そうだな……』

だが、なんだかんだと言いなながらも、ノリノリでエミリーリアは始める。

『東西冷戦時代――まだベルリンの壁があったころの話だ。』

牛がベルリンの壁を超えて、地雷を踏んで爆死した。それを三人の間が見た。一人目、牛が可哀想。二人目、地雷が勿体無い。三人目、ここに俺しかいないのが残念。』

一人目は純粹に牛に同情。

二人目は地雷の補充をしなきゃいけないから面倒くさい。

三人目は、牛が歩いた場所は地雷が無いわけだから、つまり、その先にある西ドイツに亡命できる――。

そういう意味だった。

「…ぷっ！」

ユリアは吹き出す。

だが、ハンスは微妙は顔。

「…ハンスはウケなかつたかあ…まあ、旧東ドイツ出身にしかウケないネタだしねえ…じゃあ次はあたし。」

今度はユリアが言う。

「さっきと同じように、東西冷戦時代…の宇宙開発黎明期。アメリカとソ連が衛星を打ち上げたわ。両国からの通信が途絶えた後、2つの衛星が出会った時、お互いに口を開いた。『グーテンターク。これでお互い母国語で話せますね。』…と。」

東西冷戦時代の宇宙開発時代、アメリカ、ソ連両国のロケットや衛星が第2次世界大戦のナチス・ドイツの超技術を使っているのは有名な話だった。

『…ぷっ、ふふ…』

今度はハンスはにもウケた。

『…でも、こつちにもネタはありますよ！』

自信たっぷりと言う。

『2年前のウクライナの駐留基地で聴いた話です。イギリス軍の将兵が腹を下したそうです。…そのイギリス兵はギヤオスの肉を食べてみたようですが、腹を下してからこう言いました。「あれはいけない、あれはとても食えたものじゃない…」と。』

イギリス人の舌の味覚崩壊っぷりは有名だが、そのイギリス人すらギヤオスの肉は悶絶させるのだ。

加えて飯マズ大国のイギリスが食べて物を不味いという。
なんとも、皮肉な話だ。

「ぶっは!!?..」

『くっ、くく…』

ユリアは大爆笑し、エミーリアも笑いを堪えるのに必死になっている。
る。

場の空気が先程と打って変わって明るくなる。

『築地宇宙センターからの誘導確認。各艦、ランディングに入れ。』

「ファルケンベルク」の艦長が、中隊の戦術機を載せた他の再突入型駆逐艦「シユルトヴェンベルク」、「アンガームユンデ」と戦術機パイロットに通達する。

「シユヴァルツ・リード、了解。

——さて諸君、仕事の時間だ。

まあ、軽く退屈なバカンスだと思え。…もつとも、我々の専門分野である敵対存在が現れたら、話は別だがな——。」

ユリアは、不敵な笑みを浮かべて、各機に言い放つ。

ドイツ最強の戦術機中隊、ビーストナンバー、死神、選別中隊：様々な別名を持つ、ドイツ国防陸軍第666戦術機中隊、

——【黒の宣告（シユヴァルツェスマーケン）】が、舞い降りた——。



IS学園・第4アリーナ指揮所テント

第4アリーナは現在、特務自衛隊が一時的に使わせてもらっているアリーナだった。

通常のアリーナとは違い、廃棄車両やドラム缶、ベニア板で作ったハリボテの建物などの遮蔽物が置かれていた。

その遮蔽物の中を、這うように移動する影が2つ。

強化装甲殻【打鉄改二】を纏った千尋と箒だった。

2人は打鉄改二のマニピュレーター越しにM2重機関銃を装備して、遮蔽物に身を隠しながら移動して、アリーナ各所に置かれたター

ゲットであるドローンにペイント弾を撃ち込み、撃破する——
——という訓練の最中だった。

「…よく訓練を受けてくれたものだ…」

光が言う。

「ええ、まったくよ…あと2日くらいは、休ませるつもりだったのに…」

まりもが隣から光に言う。

ロリシカ派兵から帰投したばかりの2人には、休養を命じていたのだが、それよりも訓練を申し出てきた。

「…2人とも、動きに無駄がなくなってきたな…。」

光が言う。だが、それに突っ込むように、

「いや、ロリシカ戦線に行ったのだから…当たり前か…」

自答する。

眼下に見える千尋たちは慎重に、そして的確にドローンを潰して行っていた。

まず遮蔽物に身を隠しながら、ターゲットのドローンに銃撃し、大半を制圧。

その後遮蔽物から飛び出し、撃ち漏らした残存ドローンを的確に潰していく。

それも2人同時ではなく、まず千尋が飛び出して道を横切るように移動しながら銃撃し、ドローンの数を減らしながら向かいの遮蔽物に飛び込む。

そしてその後から箒が飛び出して同じく道を横切るように移動して千尋が撃ち漏らした残存ドローンを銃撃し、殲滅する。

2機による多重攻撃——それによって短時間かつ、的確にターゲットドローンを2人は潰していつていた。

そしてターゲットドローンを全て潰し終え——、

「CPよりハウンド1、ハウンド2へ。対象の殲滅を確認。繰り返し、対象の殲滅を確認——市街地想定訓練を終了する——」

CPオペレーターを務めていた男性自衛官が千尋と箒にそう言っ

て――訓練が終わった。

第4アリーナ・格納庫

そこでは、空白の戦闘機パイロットが身に纏うフライトスーツを元に作られた、深緑色のツナギの様な格好の【09式衛士強化装備】を纏った千尋と箒が、まりもから訓練の結果を、聞かされていた。

「2人ともよくやった。戦闘機のみならず、強化装甲殻の扱いにも慣れてきたな。」

まりもが褒めるように、言う。

「ありがとうございます。」

階級上、千尋より上の箒が応じる。

ちなみに2人はロリシカの件で、少し階級が昇進していた。

千尋は二士（二等兵）から二曹（軍曹）に、箒は一士（一等兵）から一曹（曹長）に、昇格していた。

「先の遮蔽物を利用し、尚且つ2機による多重攻撃によるターゲットドローンの殲滅も、実戦で応用すればかなり役に立つ。今後も、精進するように。」

「はっ。」

千尋と箒が敬礼しながら応じた。

「…ところで、」

まりもが、ふと思いついたような顔で言う。

「もうすぐタッグトーナメントだ。よって、今後はそれに訓練を優先するように。」

それを聞くなり、2人はゲンナリして、

「…出なくては駄目でしょうか…？」

千尋が聞く。

正直、くっそ面倒くさい。

箒も同じく、嫌そうな顔をする。

織斑の墜落事故の一件以来、あちら側に関わるのは、酷く抵抗があった。

そしてそれは、他の第2学園守備隊のメンバー…簪やセシリア達も同じだった。

「…気持ちは分かる。ISに不信感を募らせるのも分かる。…だが、一応IS学園の生徒であるが故に、出場しなくてはならない。」
「まりもは、さも申し訳なさそうに言う。
だから、2人は仕方なく出ることにした。」

「とはいえ——」

千尋はISの訓練が行われている第3アリーナに向かっていく途中で呟く。

「どうするよ？強化装甲殻、ISにほぼ近い性能にするつつてたけど…」

「…まあ、強化装甲殻の実戦テストも兼ねて、参加しなきゃいけないんじゃないかなあ…。」

簪は苦笑いをして言う。

「…だが、何処か大人の陰謀も絡んでいる気が、しなくもないな…だって強化装甲殻がISに勝てば…」

「…日本は本格的にISから戦術機や強化装甲殻にシフトする。…いや、日本だけじゃない、日本と関係のある国も——」

千尋が繋ぐように言う。

「そういう政治的目的も絡んでいる——。」

つまりは、

「…まあ、内ゲバってか？…本当、政治家って抗争大好きだなあ…。」
千尋が呆れるように言う。

ふと、目の前に、

「よし」

織斑がやって来た。

何気無く話しかけるが——2人は威嚇するような視線を向ける。

こいつは、織斑は数日前、自分たちを殺しかけたのだから。当たり前

前だろう。

その殺しかけた張本人が、何もなかったように馴れ馴れしく接してきたら、尚の事。

「…何の用だ？」

箒が問う。

「いや、ただ見かけたから。」

やはり、持ち前の鈍感スキルの所為で、箒の威嚇するような顔にすら気付かない。

「そうか、じゃあ。」

箒は千尋の手を引き、そそくさとその場を後にする。後ろから織斑の声が聞こえるが、無視する。

織斑は殺しかけておきながら、謝罪のひとつすらない。

…腹が立つ。

そう思つて千尋の手を引きながら、織斑が視界から消えて、歩いていると、

「おい」

また、声をかけられる。

振り返ると見知らぬ銀髪に眼帯の少女がいた。

だが、素振りや姿勢からして軍人だった。

「…所属と姓名は？」

箒が思わず聴く。

少女は一瞬、箒の聞き方に面食らったようだが、すぐに顔色を取り戻す。

「ドイツ国家代表候補生、ドイツ軍IS部隊黒兎隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ。」

そして、そう言う。

だから千尋も、

「…特務自衛隊、第2学園守備隊所属、篠ノ之千尋二曹。こちらは篠ノ之箒一曹。」

一応、紹介する。

ぱつと見だけで、嫌な感じだったから。

「ふん、天才篠ノ之束の身内か。さぞ良いご身分だろうな。」

瞬間、箒から殺気が溢れる。

箒は、束と一緒にされるのが一番嫌いだから。

「…まあ、所詮は七光りだろうから、実力は知れているがな。」

多分、今の箒をほっておけば、酷くマズイ。一瞬で彼奴の目を潰して、首をへし折って殺せる。それだけの殺意が溢れている。しかも厄介なのが、それら全てが無意識ということ――

しかも軍人であるラウラは全く殺気を感じていない。

すかさず千尋は箒の手首を強く握る。

それで箒は止まる。

「…単に冷やかすだけなら、もう行きますよ。少佐殿。」

千尋は冷ややかに言うと、箒の手を引いて、立ち去った。

「…はあ。」

千尋はため息を吐く。

「相変わらず、マシな奴がいねえなあ…ココ。」

柵にもたれながら、呟く。

「…彼奴は、入学してすぐの時はいなかった…多分、転校生だろう。」

「あんな奴寄越すとか…ドイツは馬鹿か？」

「…かも、な。」

「…黒兎隊って、ドイツ軍最強…って言われてるIS部隊だっけ？」

先ほど買った缶コーヒーを飲みながら、千尋が聴く。

「…確かな。…よく覚えてないが。」

そう話していると、また、誰かがやって来る。

金髪の…男子生徒だ。

「あ、いたいた。」

2人を見つけるなり男子生徒は駆け寄ってくる。

とりあえず2人は、またか、という言葉を飲み込む。

「はじめまして。僕はフランス代表候補生のシャルル・デュノアって言うんだ。…一応、三人目の男性ISパイロットだけど…」

先ほどのラウラとは正反対の、朗らかで、人懐っこそうな感じだっ

た。

そして、男性のISパイロットときた。

「…ああ、うん。よろしく。」

とりあえず千尋は普通に応じる。

するとシャルルは少し意外そうな顔をして、言う。

「あれ、驚かないんだ。」

「ああ、いや、こっちは戦術機乗りだから、普通に野郎とかいるし。」

千尋は笑いながら、言う。

「あ、そうなんだ…」

シャルルも笑いながら言う。

…だからかして、箒も千尋も少し気分が軽くなる。

今までは学園守備隊のメンツとしか話せなかったから、ある意味新鮮だった。

「あ、ねえ、トレーニングするならアリーナにいかない？」

「ん、そうだな…そろそろ搬入してもらってるところだし…。」

「…行くか。」



IS学園・第4アリーナ

そこで打鉄改二を纏った千尋と箒、ラファール・リヴァイヴ・カスタムを纏ったシャルルらが訓練をしていた。

主に、射撃訓練を。

的が展開されると、すかさず両手の12・7ミリ機関砲を構え、背部兵装担架の12・7ミリ機関砲をダウンワーズ方式で前面に展開する。

「へえ、強化装甲殻って背部兵装担架を前面に展開した射撃も可能なんだね。」

シャルルが言う。

「ああ…元々分隊支援火器として作られた戦術機の縮小版だし、純粹

なパワードスーツの強化装甲殻は火力がそんなにない。だから数で補うしかないんだよ。」

箒が補足するように説明する。

千尋は両手に構えた12・7ミリ機関砲と背部兵装担架の12・7ミリ2門の計4門によるペイント弾で次々と的を沈黙させていく。「命中と全てを沈黙させるまでに掛かった時間からして…うん、65点だな。千尋。」

箒が言う。

「うゝ…射撃は苦手なんだよなあ…」

千尋がそれに苦笑いしながら言う。

「でも、織斑くんよりは筋があると思うよ？彼は全然ダメだったから…」

シャルルが励ますようにして言う。

「呼んだか？」

「ひゃあ!?？」

シャルルの背後から、突然、白式を纏った一夏が現れた。

だからそれにシャルルは驚いてしまう。

そして千尋と箒も、ウヘエ、という顔をする。

だがそこで、周りの生徒がざわめく。

理由は、至極単純だ。

ドイツの第3世代IS、シュヴァルツアレーゲンを纏ったラウラがいたから。

確か、 “ ドイツ最強のIS部隊 ” 黒兎隊の新装備…らしい。

「おい。」

ラウラは織斑に視線を向けて声をかける。

「なんだよ。」

「貴様はクラス代表らしいな。丁度いい、私と勝負しろ。」

「嫌だ。俺にはその理由がない。」

「そうか———なら、二度と乗れない体にしてやる。」

そういうと、シュヴァルツアレーゲンの右肩のカノン砲、パン

ツアーカノニアを二斉射、穿つ。

「ツ！」

千尋と箒がそれを防ぐ為に90式戦車の装甲を流用した複合追加装甲を展開し、シャルルがシールドピアスでパンツアーカノニアの砲弾を1発ずつ防ぐ。

「…この程度で怒るなんて、ドイツ人の沸点はビールより低いらしいね。」

シャルルがラウラに言う。

「ふん、未だに第3世代を開発できていないアンティーク風情がよく言う。」

「量産の目処すらたつてない国に言われたくはないね…」

アリーナを微妙な雰囲気包む——がそれはすぐに霧散した。

何故なら、低い、けれども甲高いような、人工の駆動音が響いたから。

「これは…戦術機の、跳躍ユニットの音…?」

箒が呟く。そして箒が空を見上げて、周りがそれにつられる形で、アリーナの上空を見上げた——直後、

666のマーキングが施された白い鋼鉄の騎兵が6機、跳躍ユニットの駆動音を響かせながら、上空を通過したから。

「ヴァイツァヒンメル!?」
箒が驚く。

「それに、今のマーキングは…」
「ドイツ最強の戦術機中隊」

千尋が箒につられて、呟いた。

????????????

S学園・夢見島飛行場

航空自衛隊管轄の、IS学園の敷地の隅に建てられた滑走路に、6機のヴァイツァヒンメルが跳躍ユニットのノズルを真下に向けて垂

直着陸を果たした。

「諸君、ご苦労だった。機体を航空自衛隊から指定された仮設格納庫に移動後、自由解散とする。」

ユリアが中隊から選抜した戦術機パイロット——衛士6名から成る臨時第1小隊の面々に言う。

全機が主脚移動で歩行しながら戦術機格納庫に向かう。

「——時に、ブルグスミューラー曹長。」

ふと、ユリアがハンスに声をかける。

「——先のイギリスの肉マズの話——あれは何処のだ？」

「確か、ドクチャイエウシカに駐留していた部隊の話です。…間違っても、あつちの部隊の方は——ニズネイエ要塞の方は、ネタにできませんよ。」

ハンスが至極真つ当な顔で答える。

ニズネイエ要塞——ウクライナ東部戦線において、ニズネイエに工場と隣接する発電所を改装して作られた、兵士2000人が駐留していた要塞基地だった。

だが、ギャオス陸棲種の猛攻の前に補給路は絶たれ、要塞は包囲された。

兵士たちはニズネイエ要塞に立て籠もり、籠城戦を展開した。

だが元は少し堅牢だった工場を改装しただけであり、本格的な要塞より軟弱だったが故に、大量のギャオスが要塞内部に雪崩れ込み、兵士は各部署で孤立。

最初に2000人いた兵士はその時点で200人程度になっていった。

そんな彼らに容赦なくギャオスは襲いかかり、容赦なく殺されていった。

さらにその当時はマリウポリに侵攻が集中しており、援軍は期待出来なかった。

——そのイギリス兵は、食料が途絶えた為に腹を空かせて

いた。

食わなければ、死ぬ。

何か食べなければ栄養失調で、死ぬ。

だから…

まず、衰弱死した友人の死体を食べたらしい。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」そう、何度も謝罪しながら、屍人（グール）のように、友人の死体の肉を、咀嚼した――。

だがそれで飢えは一時防げても、飢えを満たすことを覚えてしまった腹は、すぐに次の食料を欲しがる。

だがもう、友人の肉は食い尽くした。

もう残っていない。

もう、” 人間 ” の肉は、残っていない。

あるのは、忌むべき敵であるギャオスの肉塊だけ。

それを前にして、腹の飢えを満たしたいという欲望が膨れ上がる。

空腹による渴望を、抑えきれなくて――ギャオスの肉塊に食らいついた。

その兵士が発見されたのはその翌日。

その時に要塞内部で生存が確認されたのは4人だけ。

だが、” 最終的に ” 生存したのは、2人だけ。

1人は傷口から入り込んだ菌による感染症で死んだ。

もう1人は脱水症状による衰弱死で死んだ。

助かったのは、ギャオスの肉を喰った少女と下士官の男性兵士の2人だけ――。

それが、ハンスの口にしていたアネクドット（小話）と同じくらい、いやそれ以上に現地兵士たちからしたら有名な、「ニズネイエ要塞籠城戦の惨劇」だった。

そして、欧州連合軍や、その他軍も、この凄惨な戦闘の件を口にすることはしなかった。

その話は、タブー（禁句）だから。
そんな話をしていると、格納庫に到着した。

—————

千尋たちは、その一連の光景を滑走路外のフェンスの外側から見ていた。

「…ほ、本当に第666戦術機中隊だ…。」

箒が言う。

「そ、そんなに有名なの…?」

シャルが困惑気味に聴く。

「…ああ。…ドイツ最強の戦術機中隊だからな…。しかも、唯一、旧東ドイツ軍から解体もされずにドイツ軍に組み込まれた部隊だし…それだけ練度が高いって事だ…。」

千尋が、歓喜とは言い難いが、それに近い顔で答える。

「…けど、悪い噂もある…デュノア、第666中隊の異名…なんだと思う?」

千尋が聴く。

シャルルは、わからないという顔をする。

「…『死神中隊』に、『選別中隊』」

千尋は、悪い冗談のように言う。だが、それらの異名は事実だった。それにシャルルは少し顔から血の気が引く。

「シュヴァルツエスマーケン…『黒の宣告』にもちやんと意味がある。

…由来は、病院とかで患者の負傷具合を示すトリアージタグの黒――

――『手の施しようがない、助からない。』ってものから。」

さらにシャルルの顔から血の気が引く。

箒も黙り込む。

「そして彼らは常に激戦地に派遣されるし、時と場合によっては味方も見捨てる。ようはさ、『敵に処刑宣告を下す部隊』であると同時に、味方からしても、『こいつらが来たら俺たちはお終いだ。もう助から

ない。』って恐れられる存在でも有るんだよ…。」

「…さらに付け加えるなら、部隊創設者は、実の兄を——家族を密告して国家の英雄となった奴だ。」

千尋の解説に、箒がその説明を付け足した事で、シャルルは今まで以上に血の気が引き、困惑する。

「え？密告って…え？」

「…まあ、部隊創設当時は1970年代後半——東西冷静時代の東ドイツだから、あり得るよ。それくらい。…あそこは、国民の10人に1人が密告者という、ナチスのゲシュタポ、ソ連のKGBより厳重な監視体制下にあったから、密告されて粛清——なんて日常茶飯事だったらしいから。ようは、今の北朝鮮や中国みたいな状態だったんだよ。東ドイツって。」

困惑するシャルルに、千尋は覚めた声音で言う。

だが、無邪気な笑みに表情を変えると、

「ま、それはもう30年以上昔の話だから、今のドイツはそんなことないし、大丈夫。」

シャルルにそう言う。

「…あ、そ、そうだよね。あはは…」

シャルルも安心したように笑う。

——まあ、東ドイツの秘密警察・シュタージが各国要人や反乱分子の名前やプライベートを記して暗号化されたシュタージファイルという代物は、未だに文章総数9億件近くが解読できていないが——という言葉は、飲み込んだ。

「ふん、あんなデカブツを派遣するとはな。」

ふと、後ろから声が聞こえた為に、千尋達は後ろを振り返る。

そこには、忌々しげな顔をしたラウラと、彼女のサポート役らしい、黒兎隊の隊員がいた。

「あんなデカブツなど要らんだろう…国家予算を無駄に食うだけのブリキ風情でしかないのに——」

馬鹿にするように言う。

箒も千尋も内心鬱憤が溜まり、怒りがラウラに向かいそうになる

が、堪える。

仮にも、国家代表候補生だから。

仕方なく、無視しようとした、瞬間。

「あら、それは聞き捨てなりませんね————役立たずの、穀潰し部隊のみなさん。」

ふと、声が出たので、そちらを向く。

そこには、蝶の髪飾りをして、髪を後ろでくくり、ドイツ軍のBDUを纏った、クールビューティーな雰囲気少女が、いた。

小馬鹿にしたような口調だったが、その根底には、純粹な怒りが籠っていた。

「ドイツ陸軍第666戦術機中隊〔シュヴァルツェスマーケン〕第3小队隊長、クリスタ・シュタインホフ中尉です。…そちらの所属と姓名は？」

やはり純粹な怒りを秘めた瞳をラウラに定めたまま、聴く。

「貴様に名乗る必要など…」

ラウラは忌々しげに言おうとはしない。

「…ああ、なるほど貴女達にとって下賤な戦術機乗りになんて名乗りたくない————そう仰いたんですね?…自己紹介してきた相手には自己紹介で返す————軍隊のみならず、一般常識の範疇ですが?」

小馬鹿にしているようで————それでいて噴火直前の火山のような雰囲気纏いながら、淡々と言う。

「…ぐっ…」

凶星を突かれ、尚且つ正論を言われたが故に、ラウラは押し黙る。

「…ドイツ最強のIS部隊…でしたっけ?貴女の部隊は。まあ、どうせプロパガンダなんでしょうけど。」

「貴様我が隊を侮辱しているのか?」

「…先に侮辱したのは、貴女の方ですよ?」

「…っ!!?」

ラウラはクリスタの言ったことに怒りを浮かべたが、あつけなくブーメランを返され、ラウラはまた押し黙る。

「…まあ、そんなことはどうでもいいです。少しお願いがあったから、声をかけただけです。」

醒めた瞳で、ラウラを見つめながらクリスタは言う。

「…お願い…だと?」

やはりラウラは屈辱に満ちた声音で言う。

「ええ。…今すぐ謝罪して頂きますでしょうか?この場で、今すぐ。」

今度こそ、淡々としていながらも、本気で怒気を孕んだ声音でクリスタは言う。

「ふざけるな!一体何を…」

ラウラが怒鳴るが、クリスタは遮って、

『前線に出てもロクに機能しない役立たずで、尚且つ他の兵科に守ってもらっている分際で、無礼な振る舞いをして本当に申し訳ありませんでした。』…とでも。」

「…っ!!?」

口調は最初のような小馬鹿にしたような感じではなく、至極真面目で、怒りを露わにした声音で、クリスタは言う。

実際、ISはアラスカ条約の『ISの紛争地域への投入禁止』により、ギャオスが現出しているにも関わらず、公にしたくない国連が紛争、内戦地域と定めているウクライナにも、ISは派遣できない。

それ故に既存の兵科部隊が犠牲を払ってウクライナと本国を守る為に戦っている。

当然、第666戦術機中隊もだ。

そして、多くの将兵が命を落としていつているウクライナを尻目に黒兎隊は、実戦経験皆無にも関わらず、最強のIS部隊として謳歌している。

そんな連中の為に将兵が命を落としていつているのに、弔うどころか侮辱されては、死んで逝った者達が浮かばれない。

「そ、そんなことを何故私が——…」

「… そんなこと …… ふざけないでください!!?」

ラウラが言いかけた言葉がクリスタの怒りにターボをかけ、遂にクリスタが噴火する。

「貴女達を守るだけなら、まだ納得はします！ですが、守ってもらっておきながらその態度は何ですか！？？貴女だつてウクライナの真実を知らない訳では無いでしょう！？？」

「……」

「今この瞬間にも祖国を——ドイツを守る為に私達の同志達がウクライナで血を流している！！？いえ、ドイツだけじゃない。アメリカやイギリス、フランス、ポーランドなどの欧州各国も血を流しているんです！！？貴女達はその犠牲の上でのうのうと生きているだけでしょう！？？なのは何ですかその態度は！！？」

「そ、れは……」

クリスタは純然な怒りをラウラにぶつける。

ラウラは予想だにできなかったような感じで憤怒したクリスタに気圧されていた。

そして、その言葉はロリシカに派遣された千尋や箒の胸にも深く突き刺さる。

「——その辺にしときなさい。クリスタ。」

ふと、肩まで伸ばした栗色の髪を持つ女性士官がクリスタの肩をつかんで、止める。

「……ユリア隊長……ですが……！」

「ここで口論して、ウクライナの戦況がどうにかなる訳ではないでしょう？そしてI S部隊が “ 内戦状況 ” のウクライナに派遣できるようになる訳でもない。この場で同じドイツ人同士で、厄介事を作るだけよ。」

「……ッ！！？」

女性士官……ユリア・ホーゼンフェルトが、現実をクリスタに言い、クールダウンさせる。

「ですが……こんなんじや、彼奴らが報われません……！！？」

クリスタが呻くように言う。

それをユリアは憂うように見て、それから千尋達に視線を移す。

「私の部下が騒ぎを起こしてすまなかった。今後は自重させるよう指導しておく。」

そしてラウラにも視線を移す。

「同じドイツ人同士、仲良くやりたいものだな。」

ユリアはそうラウラに告げると、クリスタを引き連れて、夢見島飛行場敷地内に戻って行った。



IS学園・第2シャフト内・整備フロア

千尋と箒は夢見島飛行場の騒ぎのあと、シャルルと別れてここに来て、第2学園守備隊の面子と話を、していた。

「第666戦術機中隊シユヴァルツエスマーケン？」

箒が乗機である荒吹壺型丙の整備をしながら、言う。

「座学で山田教官から習いましたわ…ただ、具体的にどのような戦闘をしているのかは…」

セシリアが、言う。

「そっか…」

やはり、バケモノに関しては、触れられていなかった。

つまり、千尋と箒、そしてロリシカ派兵に参加した面子しか知らない――。

それだけ徹底した情報管制がしかれている。

しかもクリスタの言っていたことから、その情報管制は、国連主導の可能性が高かった。

（国連は…何故、隠そうとする…？ロリシカのような国が他にもあるのに…。）

箒は、内心呟く。

《単純な話。認めたくないからよ。》

ふと、ナニカが言う。

《国連のお上って、女尊男卑主義者とかいうキチガイ集団でしょう？》

《そんな彼女らの権力を支えているのは何かしら？》

（IS…。）

《そそ。…で、ISを派遣せずに何故 “内戦” で始末したのかしら？普通なら最低1機くらいは派遣するハズなのに…どうしてかしらね？》

妖艶な笑みを浮かべながら、聴く。

ふと、箒は思い当たる。

(まさか…)

《貴女が今思い当たった通りでしょうね。ISでは勝てないから。戦術機にやらせて、戦術機の方がISより優位という現実とバケモノを封殺するため。そしてIS不敗神話を継続させて、自分達の権力を支えているものが形骸化するのを防いでいる…って言うところかしらね…》

「こんな時にまで、我が身大事だなんて…」

思わず、箒は口にしてしまう。

「箒？」

だから、簪が気にかかる。

「え？あ、なんでもない！気にするな。」

箒は思わず驚いて、そう言う。

「疲れてらっしやるなら、お休みになられた方が…」

セシリアが心配そうに言う。

「あ、ああ。そうだな…少し、休んで来る。」

そう言うと、仮設生徒宿舎のあるフロアまで続くスロープ型のキヤットウオークを登って行った。

「…ちっぴーも行けば？」

簪の手伝いをしていた本音が、千尋に言う。

「え？あ、良いのか？」

「勿論ですわ。…貴方にとって、大事な、家族なんでしょう？」

セシリアが言う。

「だったら行った方が、良いと思う…」

簪が、言う。

「分かった。気利かせてくれてありがとう!!？」

そう言うと、千尋は箒の後を追っていった。

「…相変わらず、千尋はワンコっぽい。」

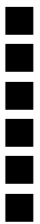
「いや、ちつひーって本当にほっぴーに一途だよね〜」

「純愛ですねえ…ロマンというものを感じます。」

そんな千尋を見ながらそういう会話をしていたそうなの…。

『次のニュースです。1年前から活性化していた西アフリカ、カメルーンのカメルーン火山が、今日、大規模な噴火を引き起こしました。』

ラジオからは、不穏なニュースが流れていた。



大西洋上空・女性利権団体専用ジェット機

これからニューヨークの国際連合本部でスピーチを行うべく、女性利権団体の総帥を乗せたジェット機が飛行していた。

その、機内。

女性利権団体の総帥はファーストクラスと同じ構造のイスがある専用個室の窓辺に座りながら、眼下に見える雲海を眺めていた。

総帥はこうしている時がたまらなく好きだった。

愚かな男共が血を這いずり回っている中、自分はこんなに高い場所について、まるで世界を支配している錯覚すら覚えたから。

「総帥、スピーチの原稿の改正案になります。」

「あら、ありがとう。」

秘書の女が総帥に、スピーチの原稿を渡す。

ふと、窓の外に、影が見えた。

「どうしたの？」

「あれ…なんでしよう…?」

見たところ、鳥のようだ。

いや、だが今は高度1万フィート近く。

鳥が飛ぶような高度ではない——だが、さして気にせず、

2人は事務に戻ろうとした——が、ふと、窓の外をもう一度見た秘書は、体が凍りつく。

先程の鳥が、まだ飛んでいる。

だが、その鳥はジェット機に近づくとつれてどんどん大きくなっていき——いや、それは当たり前なのだ。

だが、

「総帥…あんなに大きな鳥…いましたっ、け…？」

恐怖に歪んだ顔で聴く。

総帥も、凍りつく。

そして最後の瞬間に見たのは、赤く、巨大な鳥がジェット機の横を通り過ぎる光景だった。

直後、——機内にいた者は、何が起きたか理解する前に死んだ。

ジェット機が、巨大な鳥の飛行時に発生する粉碎衝撃波（ソニックブーム）と、瞬間的に、鳥が爆発的な熱量を体内で発した為にジェット機全体の水分が蒸発し、機内の乗客が発火。さらにジェット機の燃料も膨大な熱で発火。一瞬後、爆発。

それで、ジェット機は粉碎された。

「チュルラアアアアアツ！！？」

そして巨大な鳥——否、

紅い翼竜——

「ラドン」は、咆哮を上げながら、ジェット

機が目指すはずだった、北米東海岸最大の都市であるニューヨーク目指して、時速7440キロ——マッハ6.2もの速さに加速して、風を斬り雲を吹き飛ばし、大気を裂きながら、飛翔した——。

EP—16 事案、発生

IS学園・食堂

「あ、あのーこの間は、ごめん!!？」

朝食を食べていた千尋たち第2学園守備隊の面子は、朝っぱらから驚かされていた。

声の主——鷹月静音らから謝罪されてるのだから。

そしてこの間、とは『織斑墜落事件』の時である。

あの時千尋たちを心配気に見てはいたものの、助けようとはしなかった女子たちとは、鷹月とその友人たち——まだ、
“ な女子たちだった。

そして、今はその時の謝罪なのだが、あまりに前触れなく唐突に自分たちが座っていたところに来て謝罪したから、であった。

いきなりだったので、千尋たちは数秒あっけに取られるが、すぐに我に帰ると、

「いいえ、いいですよ。」

セシリアが微笑みながら優しく応えた。

そしてセシリアが隣に座るスペースを空けて、鷹月と彼女の知り合いの鏡リカ、立花葵が座る。

「本当にごめん…あの時は、織斑先生の前だったから、ちよつと怖くて…」

本当に申し訳なさそうな顔をして、鷹月は謝る。

「別にいいわよ。…同じ生徒が負傷したのに、助けに来ないどころか見向きもしない織斑先生の方が、よっぽど問題だから。」

神奈が、冷めた声音で言う。

「うう…ごめん…」

「いや、もういいから…」

「もう謝らなくていいって。もう、充分伝わったから…」

箒が少し、呆れて苦笑いに近い笑みを浮かべて、千尋が無邪気に笑うように、言う。

そういうと、鷹月たちは少し安心したのか、ホツとした顔をする。

そうして、少し話をしている内に、鷹月らと親しくなる。

「え、鷹月と立花の父ちゃんって自衛官なの!?!?」

千尋は思わずそう聴く。

自衛官である光やまりもと長く過ごしている千尋と箒は親近感を感じた。

「そうそう、ゴリゴリの石頭のね。」

立花が楽しそうに笑いながら言う。

同時刻・日本海海上

汎用護衛艦あいづ艦橋

「つぶし!!?!?」

「風邪ですか?立花一佐?」

「…ああ、誰かが噂してるらしいな…」

「ちなみに私の父さんは仲間思いだけど親バカでさ」

鷹月も、笑いながら言う

同時刻・日本海海上

きい型航空戦艦するが

艦載機格納庫

「ぶえつくしよーい!!?!?」

「風邪つすか?鷹月一尉?」

「あー…誰かが噂してるらしいな…」

「最近はやさ、やっぱり部隊に回される予算減って大変らしいよ。」

鷹月が言う。

その理由に、立花が察しがついたらしく、言う。

「多分、モスボール保存されてた大和型戦艦2隻を護衛艦として再就

役させた上に、きい型航空戦艦を4隻も造ったから、そっちに予算振られたんでしようね…。」

「はああ…なあんてそっちが優先されんのよ…普通陸自でしょ…」

鷹月は愚痴るように言う。

だがそれに、千尋は、

「いや、俺が防衛大臣だったら海自の方を優先すつけど。」

鷹月に、言う。

「え〜何でえ…?」

「まず、日本って四方を海に囲まれてるだろ? だったら陸上戦力より海上戦力でシーレーンを守備するのが優先化される。」

千尋が言うと、鷹月は不服ながら、まあ正論だから黙って聴く。

「それに今の御時世は制空権が戦況を左右するから、航空戦力…戦闘機とか、パトリオットみたいな防空戦力が必須だろ?」

実際、お隣の半島の北からは、核と思しき弾道ミサイルが数年周期で飛んで来ているのだ。

それだけでなくとも中国軍やロシア軍の戦闘機やISの領空侵犯に対処する為の邀撃戦闘機がスクランブル発進するケースが年内に軽く500回以上あるのだ。

「海上戦力だとイージス艦、航空戦力だとPAC-3や戦闘機の配備が最優先。そして陸上戦力は、水際での迎撃や、上陸した敵の撃退…つまりは奥の手…だから陸自の予算削減は仕方ないってこと?」

鷹月が千尋の言った事を纏めて、聴く。

「ざっくりと言えばな。」

「…でも、それでも納得行かないわよ。どうして今更戦艦なワケ? しかも北陸地方沖合を中心に——」

鷹月が言った瞬間、思わず千尋と箒は、固まる。

そこは、日本海を隔ててロリシカと接している地域だ。

そしてロリシカを象徴するものと言えば——千尋と箒自信が体験した、凄惨で泥臭く、血みどろの、人類とバルゴンとの戦場

。そして、ロリシカで深紅の雪作戦前に燈から受けたレクチャーを思

い出す。

『——バルゴンは時々ね、海面を冷凍ガスで凍らせて、渡洋しようとするケースがあるのよ——。』

そう、言っていた。

だがバルゴンの体組織は水に浸かると溶解する性質があるから、足場である氷を爆撃すれば、バルゴン群を一掃できる——だが、大型種がいた場合は？

航空戦力は役に立たない。

海上からの面制圧が必要になる。

だが、生半可な数の砲弾やミサイルはバルゴン大型種の生体レーザーで撃墜される。直撃しなくても大気がプラズマ化した時の衝撃波や熱で誘爆してしまう。

それに障害物が無い海上なら、装甲を持たない現代艦艇は格好の的が最良——しかし、威力が低過ぎる。

必要なのはバルゴンの生体レーザーにも耐え得る堅牢な装甲を持ち、火力投射による面制圧に長けた艦艇——つまりは、旧世代の遺物・戦艦だった。

多分、数年前から海上自衛隊が戦艦を配備し始めたのは、バルゴンの渡洋阻止任務のため——。

そして日本にたどり着いていないあたり、渡洋阻止には成功しているらしい——。

だが、もし、バルゴンの阻止に失敗すれば——間違はなく、日本は、ロリシカ同様戦場になる。

今までそんな危険が身に迫っていた事も知らずに何事も無いように、過ごしていた——。

そう思うと、寒気が走る。

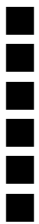
「?..?..どうかなさったんですか?お顔が真っ青ですが…」

セシリアが千尋と等に聴く。

「え、あ、ああ大丈夫大丈夫。」

「だ、大事な。気にすることでは……」

そして同時刻、その、バルゴン渡洋阻止作戦が敢行されていた事を、知るはずも無かった。



同時刻・ロリシカ共和国・樺太

ゴルノザヴオーツク沖合。

そこはかつて、ロリシカ独立戦争後もロシア軍が居座る飛び地であったが、バルゴンの進行により放棄された土地、樺太(サハリン)があった。

その沖合には、幾つもの鋼鉄の牙城————日本国海上自衛隊、戦艦2、護衛艦6。アメリカ海軍、空母1、巡洋艦2、駆逐艦3。ロリシカ海軍、戦艦2、巡洋艦2、駆逐艦4。の3軍から成る、艦隊が展開していた。

海上自衛隊・【きい型航空戦艦するが】

艦載機格納庫

「…相変わらず、死んでるような景色だな……。」

97式戦術機荒吹のコックピットブロックに投影されている、【するが】のカメラが捉えた映像を見ながら、陸上自衛隊第1師団第1戦術機連隊隷下第3戦術機小隊 “ ブレード ” を率いる鷹月仁一尉は、呟く。

広域マップには、沿岸部を目指して進行中の、バルゴンを示すグリップ(光点)が多数————推定900体。

にも関わらず、投影されている景色にあるのは、静寂に満ちた一面の銀世界。

そこに点在する、焼け焦げた樹木や、雪に埋もれた家屋だったらし

い廃墟。

そして、それらを覆う、灰色の、陽の光を通さない、曇天――

とても、生物がいるとは思えない。

『重金属弾、渡洋阻止の度に、しこたま撃ち込んでますからね…樺太はバルゴンを殲滅できても重金属粒子の土壤汚染でこの先20年は人が住めないらしいです。』

仁の部下である、如月スミレが言う。

かつてはIS乗りを目指していたが、ある理由で戦術機パイロット――衛士に転属して来た自衛官だった。

『…この辺の海域も、重金属粒子に汚染されていますから、少なからず樺太に近い北海道や北方領土にも影響が――…』

スミレは最後までは言わなかったが、北海道の、特にオホーツク海方面の漁に深刻な影響を与えているのは事実だ。

それはロシアが不法占拠している北方領土でも同じだった。

重金属粒子で汚染された魚を食べばどうなるか――もう、言わずとも見えている。

1970年代、経済成長期の日本で大流行した、『イタイイタイ病』や『水俣病』などの公害病の再来――。

故に、日本政府は『ロシア海軍の原潜事故による海域汚染』としてオホーツク海方面での漁を規制させていた。

当初のロシア政府はこの見解の訂正を訴えたが、国連が『貴国もバケモノと戦うか?』という一言を発した瞬間、それはピタリと止んだ。

結局、大国であろうが経済が危機的で尚且つ戦力の半分近くをISにシフトしたロシア軍がバルゴンと戦えばどうなるか――目に見えていたから。

だが、それでも、やはりこの光景は――

『何だか、自分の手で自分の首を絞めてる感じがします…。』

スミレが悲しそうに言う。

それに対して仁が、言う。

「だが、彼らにはそれしか方法が無いんだ。その唯一の対抗策を否定

してしまえば、彼らには対抗手段が無くなる。」

『…なんだか、複雑ですね…バルゴンを倒すにはそれを使わざるを得ない。でも取り戻した土地がそのせいで死の大地じゃ…』
やるせ無い顔をしてスマイルは言う。

「そういう土地は地道に元に戻すしかない。…日本だって水俣病流行った時水俣湾はヘドロや廃液まみれで汚かったけど、今は魚が住む、元の姿に戻ったろ?…それと同じように、地道に復元していくしかない。」

『そうですね…急がば回れ——地道にコツコツと、確実に治していくしか、ないですね。』

「そういうことだ——」

直後、通信が入る。

HQ——前線指揮所の置かれている、米海軍の復役艦である【通常動力型空母ジョン・F・ケネディ（JFK）】からの通信だった。

『HQより全艦に通達——矢を放て。繰り返す、矢を放て——』

砲撃開始の合図。

瞬間、仁たちの乗艦している【するが】に衝撃が走った——

同時刻・海上自衛隊

臨時艦隊旗艦【きい型護衛艦きい】

太平洋戦争後に建造され、冷戦終結の1991年まで海上自衛隊で運用され続けたその戦艦は、今回のような形で【きい】は艦橋と前部甲板はその原型を留めつつも、後部甲板は砲塔を撤去。

後部甲板は哨戒ヘリコプターや戦術機用の飛行甲板として、レーダーや通信機器の近代化を施し再度、就役していた——。

艦橋CIC（中央戦闘指揮所）

HQからの砲撃開始命令が下り、海上自衛隊のやまと型戦艦【きい】、きい型戦艦【するが】、ロリシカ海軍のベルホヤンスク級戦艦【チエルスキー】、【コルイマ】は現在は砲弾を装填中だった。

その後方からは、戦艦を盾にしながらVLSからトマホーク巡航ミサイルを放つ米海軍の【タイコンデロガ級巡洋艦】と【アーレイバーク級駆逐艦】、ロリシカ海軍の【アムール級巡洋艦】と【ヤクーツク級駆逐艦】の展開している情報が広域マップに、映し出されていた。

「…いよいよ、ですね。」

艦隊司令部の海将に、【きい】艦長が、楽しそうに言う。

「ああ…楽しそうだな、艦長。」

海将がそれに対して苦笑いをしながら、言う。

「はい。彼奴らめにこの【きい】の砲を食らわせてやりたくて、うずうずしております。」

艦長がひどく楽しそうな顔で笑いながら言い、海将もそれを見て、ひどく楽しそうに笑いながら、言う。

「まあ、気持ちは分からなくもない。」

「装填準備、完了しました!!?」

砲雷長が、報告する。

「レーダー連動射撃用意!!?」

安部が命じる。

同時に、【きい】の前部甲板に搭載された3連装46センチ砲が2基と3連装15.5センチ副砲1基が重い鉄の軋む音を立てながら、砲塔を旋回させ、沿岸部から渡洋を始めたバルゴン群に向けられる。

同時に、左舷の12.7センチ高角砲の代わりに艤装したオートメラーラ速射砲群も、砲塔を旋回させ、バルゴン群に砲口を向ける。

さらに、後部甲板のVLS発射口が、次々に解放される。

そしてレーダー照準により、仰角を、調整し——準備が、整った。

「さて、艦長。」

海将が口を開く。

「奴らに、” 航海には危険が付き物だ ” ——と、教えてやらねばな。」

ニヤリ、と口角を釣り上げて笑いながら、山本が言う。それに艦長は、強く頷く。

「トラックナンバー36、38、撃ち方始めッ!!？」

そして、艦長が命じる。

それに従い、各砲塔の射撃手が、引き金を、引く。

瞬間、火薬が炸裂する爆音と熱と共に46センチの鉄の巨筒から大気を震わせながら穿たれる、鉄火の咆哮。

【きい】の砲撃を皮切りに、【するが】、【チェルスキー】、【コルイマ】から次々と断続的に、鉄火の咆哮を上げていく。

46センチ砲弾と127ミリ砲弾、そして後方の駆逐艦や巡洋艦、護衛艦の放ったトマホーク巡航ミサイルやハーブーン対艦ミサイルから成る鉄の雨が、バルゴン梯団に降り注ぐ。

砲弾やミサイルが、弧を描きながらバルゴン梯団に吸い込まれていき、閃光が次々と炸裂し、バルゴンを潰し、砕き、吹き飛ばす。

それはもはや、” 圧巻 ” の一言しか、浮かばない光景だった。

同時刻・【きい型護衛艦するが】

艦体後部・飛行甲板

飛行甲板の真下にある艦載機格納庫から、艦の側面にある4基の輸送エレベーターで仁の率いるブレード小隊が飛行甲板にリフトアップして、各機が主機を点火。

戦術機のシステムを起動させる。

瞬間、後方で爆発音が響く。

仁が荒吹の後部センサーカメラの映像を新規ウィンドで開くと、先の爆発音の元が映っていた。

【コルイマ】の後部甲板から両舷に伸びる形のV字型カタパルトの左舷——そこから爆炎と黒煙が上がっていた。

『航空戦艦「コルイマ」、左舷に被弾。レーザー照射を受けた模様。』

JFKのオペレーターがご丁寧に説明してくれる。

見れば分かる——仁は言いそうになるが、それを喉元で飲み込む。

『対レーザー防御装甲が無かったら…即死でしたね…。』

震える声音で、スマレが言う。

確かに、対レーザー蒸散塗膜が装甲になされていて、それが緩和材として機能したから「コルイマ」はあの程度で済んでいる。

もし対レーザー蒸散塗膜が無かったら——轟沈は不可避だった。

だが、その安堵した矢先、「コルイマ」の前部甲板第2主砲に、レーザーが穿たれる。

レーザーのプラズマと、火薬の誘爆で主砲は爆散するが、それに留まらず、レーザーは第2主砲を貫通。

そのまま、後方に展開していた「タイコンデロガ級巡洋艦ヨークタウン」の艦橋を、貫き——爆発。

『「コルイマ」、レーザー照射により主砲損傷。「ヨークタウン」、レーザー照射を受け爆沈。』

対レーザー蒸散塗膜の施されていない艦だった。

全ての艦艇にレーザー蒸散塗膜を施すには時間もコストもかかりすぎるが故に、基本、艦隊の盾となる戦艦や司令部が置かれる空母に對レーザー蒸散塗膜は優先して施される。

そのため、対レーザー蒸散塗膜の施されていない艦は、即死となってしまう——。

さらにレーザーの出力自体が強力なために、盾である戦艦も、今のよう貫通される事がある。

後方だから、戦艦という盾があるからといっても、決して安全なわけではない。

『——ッ！』

スマレの焦燥と恐怖を孕んだ息がヘッドセット越しに、仁へと伝わる。

他の部下2名も同じだった。

だから、仁は、場の緊張を紛らわすために、言う。

「各員、こんな話を知っているか？」

仁が言うと、全員が思わず聴き入る。

「海自の潜水艦が米軍との演習で、見つかることなく無音潜航を行い、ピンガーで駆逐艦を撃沈。面子を潰された米軍は舐めプしていたことを後悔すると同時に血眼で探したが発見できず。その次の演習でも本気で探すが無音潜航中の潜水艦を見つけられず。米軍は事故を起こしたのでは、とパニックになっていたところ、なかなか見つけて貰えない海自の潜水艦は “ 米軍艦隊最深部 ” にいた空母の真横に浮上。

『何かトラブルが有ったんですか？』

海自のその言葉に米軍は安堵を覚えると共に、

『演習中に勝手に浮上するな!!?』

と苦し紛れの捨て台詞を吐いたそうなの…。」

やはり、何て事はない。

海自に本当に纏わる武勇伝だ。

だが、こんな時にそう言った小話は本当に助かる。

全員の顔から緊張が消える。

『H Qから全艦載機へ。全戦術機部隊発進せよ！繰り返す、全戦術機部隊発進せよ!!?』

J F Kからの命令——それを聞いて、仁が命じる。

「よし、野郎ども！仕事の時間だ!!?これよりブレード小隊はNOE（匍匐飛行）でバルゴン梯団に突貫。〔チエルスキー〕に陣取っているメドヴェーチ中隊、J F Kのスカル中隊と共に大型種を殲滅する。」

仁が作戦概要を言って——スマイレに視線を向ける。

「初陣だな、しっかりやれよ。」

『は、はいっ!!?』

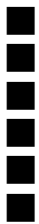
スマイレが少しテンパったように返事する。

「ブレード小隊各機、跳躍開始!!?我に続けえええツ——!!」

仁の裂帛の号令。

それと共に、ブレード小队各機が垂直跳躍。

そして海面スレスレの高度の低空飛行に移り、突撃を開始した――



IS学園・第5アリーナ前

「…はあ…」

千尋は缶コーヒーを飲み干しながら、溜息を吐く。

「…ふう…」

箒もまた、ペットボトルの緑茶を飲み干して、溜息を吐く。

「…バルゴンを食い止めねえと…日本も、戦場に…」

千尋が、呟く。

「…そうだな。」

箒も、言う。

「でも、バケモノはバルゴンだけじゃないんだよな…じゃあ、そいつらの分も対策しねえと…」

千尋がそう言いかけた瞬間、

「あ、いた!!? 箒さん! 千尋くん!」

立花が、アリーナの方から駆け寄って来る。

「2人とも来てー! 今すぐ!!?」

「は?…ちよっ…」

千尋が言いかけるが、千尋と箒も立花に腕を掴まれて、アリーナの方に連れて行かれた。

アリーナ内部

アリーナ内はかなりの騒ぎだった。もちろん、悪い方の意味で。

ラウラがシユヴァルツアレーゲンで鈴の甲龍、鷹月の打鉄を血祭りに上げていたから。

それはもう、試合ではなく、リンチそのもの——A I C（空間停止結界）で鈴と鷹月を固定し、プラズマ手刀で斬りつけている。しかも、鷹月の方はシールドエネルギーが磨り減り、危険値に突入している——。

2人とも、苦悶に顔を歪め、ラウラはそれを見て加虐に顔を歪めていた。

それを見た瞬間、千尋の中で憎悪と憤怒が込み上げる。

——（殺セ）

一瞬、千尋はそう思う——が、平静を取り戻す。

「立花は先生に連絡を！ 箒は俺と強化装甲殻であのバカ女を止めな——

——」

が、遮って、

「うおおおおお！！？」

織斑が白式の単一能力『零落白夜』でアリーナのシールドバリアを破壊した。

——次の瞬間、箒の瞳に映ったのは、自分の方に降り注いで来る幾つものシールドバリア——超電磁フィールドの

張られていた耐爆ガラスの、破片。

避けようにも、間に合わない。

そしてその破片が箒の眼前に迫った——瞬間、

箒は、“人間ではあり得ない力”で後方に吹き飛ばされた。

「あぐっ！！？」

頭からアリーナの地面に打ち付けられ苦悶の表情を浮かべた。

一瞬間閉じてしまった瞼を開いたそこにあったのは——

「え……っ」

千尋だ。

だが、おかしい。

千尋の腹から、鋭利な見た目の透明で硬い物体がいくつも生えていて、そこからおびただしい量の赤い、紅い液体が流れていて——

——その液体は千尋の口からも——。

ロリシカで見慣れた、その液体と同じ色。同じ匂い。

つまりそれは、今、千尋から流れているそれは、千尋から生えているそれは——理解が拡大する。

信じたくない事が、現実となって、頭に叩きつけられる。

「あ…あ、あ…」

理解はしている。

けれど思考が否定する。

否、箒自身が “ それ ” を認めたくない。信じたくない。

「…箒、無事…か？」

痛みを堪えた顔で、聴く。

「あ…ああつ…」

その言葉が、箒に決定打を加える。

目の前の千尋の姿が “ それ ” を “ そう ” だと、認識させる。

——耐爆ガラスの破片が幾つも背中から腹を貫いて、血を

流している千尋が。

「…よかつ、た…」

千尋が力無く、無邪気に笑う。

「ち、ひ…ろ…!!？」

箒は、思わず、叫ぶ。

ふらり、と倒れかけた千尋を箒が抱き抱え、支える。

「千尋ッ！し、しっかり…どうして…！…なんでッ…!!？」

思わず、箒は、取り乱してしまう。

「ちよつと!!？誰か医療班を——」

立花も周りに医療班を要請するように叫んで頼む。

けれど、それはまったく気にかけない、織斑を応援する女子達の声に、掻き消されてしまつて——。

「あんた達…おかしいわよ…!!？」

立花は、言い放った。

そこでは、一夏とラウラの戦闘が繰り広げられていた。

…その、一夏が破ったバリアの真下。

「ほう、き…背中、の…抜いて、くれる、か？」

バリアの破片2つばかりに背中から腹を貫かれて、血を流している千尋と、

「な、何言つて…そんな事したらお前…！」

動揺し、混乱している箒がいた。

立花には、アリーナ医務室の教師を呼んでもらうために、そこからは離れていた。

何故なら、

「織斑くん頑張つてー!!?」

「負けないでー!!?」

などと、2階の観客席から叫ぶ女子がうるさくて、電話をしても内容が伝わらない。

しかもこちらは彼女らからしたら死角になっているから、気づきもしない。

「いい…から、早くー！」

千尋が箒に怒鳴る。

「ツー————くっ!!?」

破片に手をかけ、掴み、力を込め、思い切り、引き抜く——

ブシュ。

肉の裂ける音が響く。

「————ツ!!?」

さらに刺さっていた傷口から、血が噴き出す。

床に鮮血の海が生まれる。

千尋は激痛に襲われ、顔を歪めるが、歯を食いしばり、痛みを必死で、堪える。

けれど僅かに痛みを孕んだ息は、漏れてしまう。
箒はその顔を見てしまい、青ざめる。

「…次も、たの、む。」

千尋はそんな箒を元氣付けようと、ふにや、と力無く、無理に笑う。

「でも…！」

「だいじよ、ぶ…だって…体は、そんな、やわじや、ないから…。」

必死で強張った笑みで、答える。

「だ、だからっ、って…」

やはり動揺した声。

「チクチク、してんの、いてえ、し…体、は…だい、じょうぶ。…だ、から…」

「ッ…ご…ごめん…!!？」

箒はボロボロと涙を零しながら、先程と同じく、破片を掴み、力を込めて——思い切り引き抜く。

「ッ——!!？」

やはり、千尋は歯を食いしばり、悲鳴を上げまいとするが、痛みを孕んだ息は、漏れてしまう。

さらに鮮血の海が広がる。

「ごめん千尋…ごめん…」

泣きじやくるように箒がそう言った瞬間、千尋は痛みに感覚が支配されている中、 “ 本能的 “ に危険を感じて——

「…ッ!? 伏せろッ…箒!!？」

千尋が痛みに襲われる体に鞭打ち、箒の腕を掴み、押し倒し、覆いかぶさるような姿勢を取る。

一瞬後、コンクリートが粉碎される爆音が響いた。

先程織斑が破壊したバリアの穴から、ラウラのパンツァーカノニアのレールガンの流れ弾が1階観客席に弾着。

観客席をいくつも粉碎し、コンクリート片が舞う。

幸い人はいなかった——いや。

今自分達のいる場所から僅か2メートルくらいの場合に、1人、瓦礫と化した観客席付近に倒れている少女がいた。

その少女には、見覚えがあった。

確か、今日、朝食の時に鷹月と一緒にいた――。

「鏡!?」

箒が叫ぶ。

鏡ナギ、だった。

「ほ……うき……さん……?」

ナギは力無く呟く。

そして2人はリカを見て――凍り付く。

ナギは、太腿にコンクリート片が刺さり、左手が可笑しな方向に曲がり、口から血の泡を吹いていたから。

「あ……」

箒の脳裏に、あの光景が、フラッシュバックする。

ベルホヤンスク統合基地第2前哨基地の、箒の目の前で瀕死の重傷を負い、慈悲の一撃を喰らい、頭蓋の中身をぶち撒けながら死んだ、クリス二等兵の、死に際の光景が。

「しっ、かり……しろ……立花が、医者呼びに、行って……!!?」

千尋は声を発するたびに全身を駆け巡る痛みを堪えながら、ナギを激昂するように言う。

だが、次の瞬間。

「ゴフツ――」

吐血。

千尋の口から、赤い、紅い鮮血が溢れる。

破片が内臓を幾つか傷付けたらしい。

いや、下手したら、一つくらい内臓が潰れてるかもしれない。

そして、体を開いた傷口が、熱を孕む。

それで意識が朦朧とし始める。

「ツーち、千尋!!?」

箒が焦燥と混乱に満ちた顔で、思わず支えるように抱き抱える。

「……ッ、は……あ……ど畜生、が……!!?」

腹を破片が貫いたものとはまた違う、痛み――傷口の断面から、新しい肉が形作られ、急速に傷口が塞がる感覚が、伝わる。

それを感じて、顔に、脂汗を溢れさせながら、痛みに歪んだ顔を浮かべる。

(人間の体だと…すっげえ、痛えな…これ…。)

それは初めて味合う痛みでは無かった。

自身を形作るモノ——G細胞の中にある『オルガナイザーG1』という、再生を司る組織細胞による自己再生の際に生じる副作用だった。

かつての自分——ゴジラだった頃の自分なら、蚊に刺される程度の痛みだろう。

だが今の自分——人の体の自分では、体を引き裂かれるような痛みが、新しい部分の肉が形作られる度に、常人なら、発狂してしまいかねないような、いつそ死んだ方がマシに思えるような激痛が、全身を駆け巡る——。

意識はゴジラだったものでも、体が人では話にならないくらい、魂と肉体とが釣り合わない——そういう事だった。

「治んの、は…良いけど…痛い、のは、御免だ…くそつたれ…。」

千尋は、2人に聞こえないような小声で、呟く。

未だに、アリーナの方ではバカ共が戦闘を繰り返している。

まあ、今は、ラウラが織斑をAICで止めているが——瞬間、ラウラはその身動きの取れない織斑にパンツァーカノニアを向ける。

しかも、ゼロ距離だ。

その異常性に、箒や千尋ですら、血の気が引く。

決して織斑に同情している訳ではない。

だが、絶対防御はゼロ距離で荷重攻撃を食らった場合、ほとんど意味をなさない。

ISスーツに守られた部分ならまだゼロ距離でも絶対防御は発動する。

だが絶対防御に守られていない部分は、ゼロ距離ではなんなく貫通、首などには一応、小口径程度なら防げるエネルギーが展開されるが、戦車砲クラスなら、ガラス同然——。

つまり、このままだと、織斑は死ぬ――。

ラウラがパンツァーカノニアを穿つ――瞬間。

「その辺にしておけ。バカ共。」

打鉄の刀でパンツァーカノニアの砲塔を、弾く、千冬。

「千冬姐!?!」

「教官!?!」

2人は同時に驚くが、その光景に、2人はある意味安堵を覚える。

「あーごめん二人共!!?」

その時立花が山田を連れて来る。

「だ、だ、大丈夫ですか!?!?篠ノ之くんっ!?!?」

かなりテンパリながら、山田は聴く。

実際、生徒が血だらけなのだから、それが当たり前の反応だろう。

「…俺は平気です。それより、鏡の方を…」

そう言っつて、千尋は、山田を安心させる為に無邪気に笑ってみせる。

「そ、そうですか…分かりました。…立花さん!鏡さんを運ぶのを手

伝っつて下さい!!?」

「あ、は、はい!!?」

山田がテキパキと指示を飛ばす。

ふと闘技場に視線を向ける。

鷹月と鈴は教師部隊が回収していた。

ラウラと織斑は千冬に何やら説教されているらしい。

千尋は箒に肩を支えてもらいながらアリーナを、出た。

保健室前

結局、千尋は簡易的な治療を受けて、保健室から出ていた。

必要最低限の分の再生をオルガナイザーG1がやったから、というものもあるが、病院と同じ、独特の匂いが苦手だったから。

何より――――墨田大火災直後に搬送された病院での出来事を思い出してしまうから。

全身に火傷を負い、ミイラみたいに包帯でぐるぐる巻きになった

人。

ガラスが大量に肌に突き刺さり、痛みにうめき続ける人。
意識の無い恋人の名前を呼んで、必死に声を掛け続ける男性。
親がたった今事切れて泣き叫ぶ、まだ5歳くらいの子供と、その隣
で何が起きたか理解できずに呆然としている3歳くらいの子供。

——それらがフラッシュバックするから、千尋は保健室や
病院が苦手だった。

そしてそれは、箒も同じだった——。

姉弟揃って、病院恐怖症というヤツだろうか？

…笑えない。

「千尋…怪我は…？」

箒が先程千尋の返り血で血塗れになった制服から特自のBDUに
着替えた姿で、聴く。

「平気だよ。多分、3、4時間もしたら、治ると思う。」

「そうか…」

「…鏡の方は…？」

千尋が、聴く。

すると箒はひどく辛そうな顔をして、言う。

「…左脚の半月骨が3分の1くらい磨り減っていて…IS乗りには、
もう…」

最後まで言わなかったが、千尋はそれで察した。

つまりは、将来的にISパイロットには、もうなれないのだ。

別にISパイロットを羨ましく思っただ事はないし、千尋からしたら
どちらでもよかった。

だが、しかし、ナギにとっての夢であったモノが、いとも容易く、無
残に潰された——それに関しては何も感じないわけではない。
い。

同情——と言えはいささか無礼かもしれない。

でも、それに限りなく近い感情が、2人の中に、渦巻いていた。
鏡ナギの件だけでなく、織斑やラウラの処遇が、あまりに釈然とし

ないものだったから。

—— タツグトーナメント当日まで、アリーナの使用禁止。

たった、それだけだった。

負傷者を4人も出していなからだ。

織斑は千尋と間接的とは言えナギを、ラウラは鷹月と鈴を重傷に追いやっていいる。

あまりに納得できない、そんな処遇だった。

そして納得していないのは、千尋と箒、立花だけではない。

救援に駆けつけた、山田もだった。

『せめて専用機所有権を剥奪すべきです!!?』——そう、あの騒ぎの後に開かれた緊急職員会議でそう言ったらしい。

光も、山田と同じように抗議したらしい。

『人命に関わる大事を起こしておきながら、処遇が軽過ぎるだろう。これでは、奴らは二度同じ事を繰り返すぞ。』——そう、言ったらしい。

だがIS関連の権利は織斑千冬に一任されているらしく、2人の意見は蹴られてしまった。

だから、織斑もラウラも実質無罪放免——。

——ふと、千尋は思う。

そしてそれを、口にす。

「こんなに、連中にばかり都合のいい状況が…普通、出来るものなのかな?」

「…こうなる事を望むくらい、学園側が愚かなのか…もしくは、学園が何者かの傀儡に成り果てているか…その、どちらかだろうな…いずれにせよ、私たちは大きな力の上でバカみたいに踊らされているだけだ。」

箒がやるせなさを含んだ声音で言う。

千尋は、ふと、座っていたベンチから立ち上がる。

「…へこんでたって仕方ないし、散歩でも行こう。」

「…そうだな…。」

千尋が言う。

箒がそれに応えて、千尋と一緒に、歩いて行った。



生徒寮・1025室

「一夏くジュース飲むく」

そこには、少女の格好をしたシャルがいた。

「おくサンキュー。」

1週間前、織斑に女であったことがバレてしまい、シャルは自分の過去について、打ち明けた。

デュノア社の社長の愛人の娘で、機体の開発が遅れており、政府から援助を絶たれるから、社長の命令で第3世代のデータを盗むために学園に寄越された。

従わなければ殺されるから。

織斑と一緒に解決すると約束してくれた。

…でも、あの日からずっと、ただただ学園生活をするだけで――

（分かってた…結局、高校生風情がどうにかできる話じゃ、ないって事くらい。）

シャルが内心呟く。

「ZZZZZZZZ…」

その隣では、今ジュースを飲んだ織斑が眠っていた。

「…睡眠薬が効いた…？」

シャルは呟く。

そして申し訳なさそうな顔をして、

「ごめん一夏…でも、まだ、僕は…死にたく、ない、から…」

シャルは謝罪しながら、言う。

そして待機状態の白式を織斑から外し、端末に有線接続する。

そして、クラッキングを開始した。

ISの訓練で培ったラピッドスイッチの反射神経で、次々に発動す

るファイアーウォールを躲し、I Sコアに辿り着く。

すかさずデータのコピーを開始。

データをコピーするローディングバーが表示され、シャルは息を吐く。

「これで…これで良いんだよね…こうしたら、僕は…生きれるんだよね…?」

罪悪感に涙を流しながらシャルが言う。

だが、瞬間。

部屋の壁からガスが噴出する。

「!?うっ、ケホツ!!?ケホツ!!?」

(これ、催涙ガス!??なんで————…)

それで、シャルの意識は途絶えた。

クロロホルム系の催涙ガスが晴れると、ドアを蹴破って、武装した黒装束の集団が流れ込んできた。

【情報庁】、暗部・実働隊と【特務自衛隊】、特一級機動隊の隊員たちだった。

彼らの手には89式小銃とSIG556アサルトライフルがあり、それらの銃口は催涙ガスで床に横たわっているシャルに向けられていた。

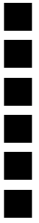
シャルに意識が無いことを確認すると、特一級機動隊の隊長が通信をいれる。

「ウルフ・リーダーよりHQ、対象を無力化。これより回収します。――

――あとは頼みますよ、楯無部長。」

『了解――――お疲れ様でした。権藤一佐。』

通信を終えると、実働隊の隊員2名がシャルを脇下から掴み上げて、他の隊員はシャルの専用機であるラファール・リヴァイヴ・カスタムの待機状態のモノを、I Sコアを外界から遮断する仕様のケースに入れ、1025室を後にした――。



中央太平洋・????
見渡す限り肉色の景色。

ねとねとして獣臭いけれどほのかに温かく、何処か愛おしげな感情すら抱かせる粘液。

緩い放射能まみれの空気。

僅かに起伏を繰り返す床に相当するモノ。

それは心地よくて、優しくて、温かくて———その中に、朝

倉美都は白いワンピースを纏って、いた。

自分と似たモノを纏った者の中にいた。

「…うつかり、寝ちやいそうですね…」

少しだけ———そう思っただけを閉じかけた朝倉は、無造作に

外に、 “ 吐き出される ” 。

「あつ」

間拔けな声を発する。

そして冷たい、塩味の水の中———海中に落ちる。

それと同時に先程体にまとわりついていたモノも洗い流されてしまふ。

僅かな喪失感———少し口惜しく感じながらも、海面に、顔を出す。

そして見上げれば、黒いケロイドの巨体に乳白色の生気を感じさせない目、そして自分が入っていた場所である、不規則にならんだ牙が幾つも乱立する口を持つ、怪物———【ゴジラ】がいた。

普通ならこんな怪物を見たらパニックになって、泳いででも逃げようとする。

けれど朝倉は怯えるどころか、少し膨れて、

「もう少し入れていてくれたって良いじゃないですか…」

抗議する。

それはまるで、『 幼い子供が、父親にものを言うような光景 』
———にも、見えなくはなかった。

そんな朝倉に対しゴジラはプイツとそっぽを向いて別の方向に向かって歩き出す。

「…はあ…ま、仕方ないですね…私は彼に依存している分際ですし…」朝倉はふと呟くと、目の前に見える島に向けて着衣水泳を始める。島までは約1キロ。

朝倉からしたら別に普通に着衣水泳でも泳いで行ける距離だ。

そしてゴジラも朝倉の向かう島に向かう。

…方角は、違うが。

ゴジラは島にある原子力発電所が目当てだ。

朝倉はそこに自分が探していたモノがあったから、乗せてもらっただけだ。

島を見た瞬間、朝倉の中で長年封じ込めてきた感情が殻を破って、現れ始める。

ふと、ゴジラを見る。

背中 of 背ビレだけをこちらに向けて、悠然と、海上を歩いている。もう、ゴジラからしたら足が着くくらいの深度なのだろう。

ふと、ゴジラが足を止めて、こちらに首だけを向けるように振り返る。

それに朝倉は、

「…行つてきます。」

微笑みながら言った。

通じるはずがない。

だって、朝倉は所詮人間で、ゴジラは怪獣だから。

朝倉の言葉なんて、通じるはずがない。

でも確かに、その瞬間。

『死ぬなよ。』

ゴジラがそう言つて、朝倉は、そう聴こえた…気がした。

「はい。」

だから、応じる。

通じるはずがないけれど――。

そして朝倉は島の方を向いて、

「さて——10年前の…白騎士事件の借りを、返しに行きま
すよ——篠ノ之束。」

妖艶に、何処か加虐に満ちた笑みを浮かべながら、言った。

カチリ。

また、世界の破滅が進む。

秒針は2と3の間を刻み、激動の序章が幕をあける。

誰かが言った。

これは破滅だ、黙示録だ。

驕り高ぶり過ぎた人間に罰が下ったのだと。

そしてこれは、その、醜い、矮小で浅ましい人類に、神の代行者た
る、怪獣が、神罰の鉄槌を下す、その、直前の物語——。

EP-17 紅蓮ノ翼竜（ラドン）

アメリカ合衆国

ニューヨーク・マンハッタン島

東20番ストリート

アメリカの経済の中心地にして、犯罪の都市の一角。

そこでは『いつも通り』の光景が繰り広げられていた。

「ちよつとーあんだアタシの車に何してくれてんのよ!!?」

ストリートギャングの女が言う。

警察官が彼女の車————ピンクのフェラーリのタイヤに

『ワツカ』を付けていたから。

「ここは駐車禁止だ。はい、ワツカ付けるからなー。」

警察官は飄々とした男性だ。

「はあ!!? ふざけんじやないわよ今すぐ外しなさいよ!!?」

「はいはいムシヨに入りたくなきや素直にワツカ付けられようなく。」

警察官は喚く女を受け流し、報告書にボールペンで記入しながら言う。

「へえ〜死にたい? 死にたいって言うんならこういうのがあるんだよ
バーカ!!?」

その警察官の態度にイラついたのか、女はリボルバーを抜く。

「おいおいそういうのはしまえよ。」

やはり、呆れるように、警察官は言う。

「もう遅いつてーの!!? このマグナムの弾をアンタのケツにブチ込ん
で、ニュージャージーまで飛ばせてやるわよ!!?」

女が喚く。

「いいぞ〜いいぞ〜もつとやれ〜。」

その、女と警察官のやり取りを見ていた酔っ払ったホームレスが煽
るように言う。

「だあもおうつさい! 黙ってなさいよ!!?」

女がホームレスに向けて叫ぶ。

ふと、ホームレスに視線が向く。

その顔は、驚愕に満ちながら凍り付いた顔をしていた。
顔は東の空を向いている。

「なんだありやあ…」

目の前の警察官もホームレスと同じように驚愕に満ちながら凍り付いた顔をしていた。

「でっかい鳥みたいなんが飛んでくるぞお!!?」

ホームレスが叫ぶ。

「鳥?」

女は怪訝な顔をして眩く。

酔っ払っているにしては純粋な恐怖を孕んだ声——目の前の警察官も叫びこそしないものの、仕草はホームレスのそれと、同じ状況だった。

「お、おい、あんた…逃げた方がいいぞ…!!?」

後退りながら、警察官が言う。

ホームレスは半狂乱になりながら、裏路地の方に走って行っている。

警察官も、とうとう走ってその場から逃げ出す。

「鳥がなんだって——」

女が言って、振り向いて——2人と同じ、驚愕に満ちながら凍り付いた顔をする。

満月をバツクに、確かに鳥が飛んで来ている。

だがおかし。

大きさがおかし。

女が知る限り、一番デカイ鳥は、せいぜい翼長2メートルくらいのタカだ。

だが、その鳥は、目の前の鳥はどうか——パッと見ただけで十数メートル…いや、鳥が近づいてくる度に大きくなって行く——軽く翼長100メートル以上はある、あり得ない大きさの鳥が、飛んで来て——女の真上を通過する。

風圧で、女の被っていたハット帽が、宙に舞う。

瞬間、一泊遅れて比べものにならない風圧が女を襲い、女は吹き飛

ばされた。

「なんなのよこれー!?」

女は叫ぶが、アスファルトに叩きつけられ、頭蓋骨が割れて――

――女は一連の出来事を理解できぬまま死んだ。

翼竜は、それを気にしない。

いや、そこにそんなモノが居たのかすら気付かないまま、大気を切り裂きながら、空を舞う。

そして、空に伸びる塔――エンパイアステートビルを回るように旋回して――付近の手頃なビルに、翼で身を包むように折り畳みながら、舞い降りる。

屋上に脚を着いた瞬間、翼竜の体重で屋上から数階が崩落する。

そして巨大な翼を、マントのように、開く。

「チュラアアアアア!!?」

満月を背景に、翼竜――ラドンは、大気を震わせるように、咆哮を上げる。

ラドンの着地したビルの真下の通りでは、皆が皆、どよめきに満ちた顔でビルの屋上に舞い降りたラドンを見上げている。

恐怖する者。

驚愕する者。

カメラを向ける者。

スマートフォンを向ける者。

ラドンを見て思わず交差点でブレーキをかけて急停車したセダンに、次から次へと別の車が次々に玉突き事故を起こす。

ニューヨーク市営バスがセダンに突っ込み、セダンを吹き飛ばす。セダンが店舗に突っ込み店舗からパニックになった客が逃げ出し――

ラドんに釘付けにされる。

ラドンの眼前にある、5th Aveの群衆は、ラドンに釘付けになる。

ラドンは再び、咆哮を上げる。

そして翼を大きく広げ――飛ぶ為の加速として、屋上か

ら、飛び降りる。

瞬間、ラドンが着地していたビルの窓ガラスが風圧で粉碎され、5th Aveの通行人にガラスの雨が降り注ぎ、通行人が全身をガラスに突き刺され、路上に鮮血の海を広げながら、大半が絶命する。

さらに風圧で砕け散った外壁が群衆に降り注ぐ。

群衆は車や障害物に身を隠して難を逃れる。

だがそれで終わらず、勢いを得たラドンは水平飛行態勢に移り、群衆の真上をマツハ1・8という速度で通過する。

一瞬遅れて、爆音と粉碎衝撃波が先程玉突き事故を起こした車の車列を、逃げようとする群衆を宙に舞い上げ、さらに通りに立ち並ぶビルの窓ガラスが次々に粉碎され、車と人とガラスの嵐が5th Aveを突き進むように巻き上げられる。

だがラドンはそれを気にならず、さらに加速。

マツハ2・1もの速度に、増速する。

5th Aveを一瞬で飛び抜け、強化された粉碎衝撃波により、ガラスどころかビルの外壁すら、粉碎され、ビルが倒壊し、人がそれに巻き込まれて潰され、車が爆発して火の手が上がる。

粉碎衝撃波が大気を引き裂く。

一瞬遅れてビルが崩れる。

瓦礫が舞う。

爆発し、火の手が上がる。

人が瓦礫や風圧で薙ぎ払われる。

その一連の出来事が、悲鳴を上げるヒマなく——否、上げて——
ても一瞬遅れて轟く、空気を切り裂く爆音がそれを掻き消す——

ラドンの通過した場所はソニックブームによってビルは倒壊し、車は炎を纏った鉄の塊と化し、人は場所によってまちまち——
運が良ければ軽傷で済み、マンハッタン島から逃げるべく、ハドソンリバーやイーストリバー、スパニッシュハーレムの方角に走って行くとする。

運が悪ければ——

「…ウソ、だろ…?」

「ああ…神様…」

呻く彼らの視線の先——通りを埋め尽くす、形容し難い肉塊のオブジェとなった、無数の人間だったモノが、何十、何百、何千、何万と転がっていた。

瞬間、遠くで爆発。

ラドンが蹂躪しているのだ。

そして、送電線が焼け落ちたのか、マンハッタン島から、人工の灯

——電気が消える。

代わりに、自然の灯——

——火炎が、夜空を赤く染めていた。

その真下で、ニューヨークの光り輝く摩天楼を赤く紅く、紅蓮の獄炎へと、ラドンは染め上げていった——。

数十分後、アメリカ合衆国は東海岸全域に非常事態宣言を発令した

—————

モナーク機関シアトル北米本部

シアトル市タコマ地区に置かれたモナーク機関の中枢——

——すなわち北米本部は、喧騒に満ちていた。

それもそのはずだ。

アメリカ合衆国本土——それも、世界有数の大都会である

ニューヨークに、怪獣が出現したのだから。

特に中央情報本部——オペレーションセンターは他の部

署より忙殺されていた。

まず、東京、ベルホヤンスク、キエフ、ハンブルクなどの各国支部への通達。

マスコミの情報遮断——しかしそれはもはや意味をなさない。

ゆえに、今は米国国防総省「ペンタゴン」との緊急守秘ライン構築が優先化されていた。

大勢のスタツフがコンソールに向き合い、キーボードを叩き、守秘回線の受話器を手に連絡を行い、大型モニターにラドンの現状が投影されている——その光景をモナーク機関のウィリアム・バーク少将と、シンデイ・サンドラ大佐は見ていた。

「軍の防空体制は？」

シンデイが聴く。

「現在、アーレイバーク級イージス駆逐艦4隻とランブリング級航空巡洋艦がイーストリバーに、支援フリゲート艦1隻とアーレイバーク級駆逐艦1隻、空母エンタープライズがハドソンリバーに展開中です。空軍の邀撃機も上がりましたが……」

オペレーターが言う。

最後まででは言わなかったが邀撃機は撃墜されたことをシンデイは察する。

そして、ハドソンリバーに展開した部隊を見て——思わず舌打ちをする。

「この期に及んでまだIS不敗神話にすがっているのか……」

ハドソンリバーに展開した艦隊は、軍用IS・銀の福音を量産化、配備したIS部隊を艦載した空母にISの支援用フリゲート艦から成る艦隊だった。

「かつてロリシカやウクライナにISを派遣した結果、どうなったか知ってるだろうに……！」

シンデイは吐き棄てる。

ロリシカではバルゴンの生体レーザーで墮とされ、ウクライナではギャオスに喰われた。

その瞬間に、ISは最強の兵器ではなくなった。

だから戦術機や他の兵科がISの価値を守るために、巨大生物の存在を隠匿させられるハメになっていた。

さらに付け加えるなら、ISより戦術機の方が実戦に向いている——

にもかかわらず、ISというお荷物を持ってきた。

「これが彼女たちなりの足掻きという事だろう。」

パークが、言う。

「しかし……その為に空母の乗員まで危険に晒すなど……！」

シンデイが言う。

支援用フリゲート艦は無人艦だが、空母は有人艦だ。

しかも、IS以外に艦載機がないから乗員が削減されているとはいえ、600人近くの将兵が載っているのだ。

しかもその空母は元と言えば通常空母を無理矢理IS艦載艦にしたシロモノ。

乗員だって、好き好んでなった訳じゃない。

彼らの9割9分9厘は女尊男卑を妬み嫌っている者達だ。

：しかも、今回の派遣だって間違いなく、女尊男卑主義者の軍部高官が強引にさせたに違いなかった。

「我々に出来るのはペンタゴンと現地部隊を補佐する事だけだ。：彼らに任せるしか、あるまい……。」

パークが言う。

それは事実だ。

だがシンデイには納得しきれない感情があった。

—————

ニューヨーク・ハドソンリバー

空母エンタープライズから発艦した『世界最強のIS』と目される【銀の福音《シルバリオ・ゴスペル》】8機が、煉獄のマンハッタンに向け低空飛行で向かっていた。

「しっかし、あたし達が真価を發揮する時が来るなんてね！腕が鳴るわ!!？」

「ええホント！男どもは活躍できなくてさぞかし残念でしょうね!!？」

キヤハハ、と福音のパイロット達は笑いながら、コケにするように

好き放題に言う。

今の女尊男卑の象徴——とすら、見て取れる光景だった。

「……そういうの、やめてくれない？ 酷く耳障りだわ。」

ふと妖しく、冷たい声音で隊の女の1人が言う。

「な、何よヘックス……」

浮かれていた他の隊員の女が声の主——アメリカ海軍、

ヘックス・オブライン准尉に困惑気味の声音で言う。

「ISが世界最強の兵器でいられるのは、あくまで人類間の戦い。それも戦術機をバケモノ戦に駆り出して国際社会から存在を薄れさせただけでしょう？ そして戦術機より劣るISでバケモノを相手しろ、ですって？」

ヘックスには呆れと奥底に秘めた憎悪を孕んだ声音で言う。

「——女尊男卑主義とかいうイカれた思想とISとかいうガラクタの為に死ねってことかしら？」

全員が驚愕し、顔が強張る。

堂々と作戦内容を批判し、尚且つ部隊の隊員たちの思想も批判し、ISの存在意義すら批判したから。

「ヘックス・アンター！」

隊員の1人が食ってかかる。

そして、福音の拡散ビーム、シルバーベルの発射態勢に入る。

だがヘックスは臆する事なく、やはり冷たい、見下すような目で通信ウインド越しに見ながら、嘲笑うように言う。

「別に私を撃墜しようとしても構わないわよ？ 軍法会議にかけられても良いなら。」

「ぐっ……！」

それで、隊員は引き下がる。

いくら軍に女尊男卑が浸透していようとも、軍法会議までは免れることは出来なかった。

罪を犯せば従来通りに裁かれる——だから、その女は引き下がった。

「この、臆病者の敗北主義者が……！」

他の隊員が吐き棄てる。

「リアリスト（現実主義者）、と言って欲しいわね。現にウクライナやロリシカではISは役に立たなかった。むしろ、戦術機の方が役に立っていたわ。」

やはり、冷たく妖しい声音で言う。

「ツーだまれ!!？IS乗りの面汚し!!？恥を知りなさい!!？」

「勘違いしないで。」

より一層強く、より一層冷たく、より一層激しい怒りを込めた声音で言う。

「東海岸には戦術機部隊がない。だから私は仕方なく今の部隊にいるだけ。家族や合衆国を守る為にね——この際だからハツキリ言うけど、貴女たちみたいにISの為だの、女尊男卑の為だのとか言う理由で戦われちゃね、迷惑なのよ。こっちとしては。」

今日一番の冷たい瞳をして、自分に食って掛かって来た女だけではなく、部隊の女全員に向けて、言い放った。

マンハッタン南部のソーホー上空に差し掛かった瞬間、ハイパーセインサーに目標が映る。

空の大怪獣——ラドンが。

「来るぞ！全機兵器使用自由!!？奴をフライドチキンにしてやれ!!？」

部隊長が叫ぶ。

「了解!!？」

各機が応答する。

だがヘックスだけは小さく「了解」と応じた。

(フライドチキンになるのは、果たしてどっちかしらね…)

内心には、こんな低威力の火器しか持ち得ないパワードスーツでごときで一体何ができるのか——という疑問しかなかった。

福音各機がラドンに正面からシルバーを斉射。

突然の事に驚いたのか、軌道を変えてビルとビルの合間を縫うように飛行する。

「逃すな!!？追撃するぞ!!？」

部隊長が号令を飛ばし、福音各機がラドンの跡を追ってビルの合間に突入し、飛行するラドンの背後からシルバーベルをさらに斉射。しかし、ラドンは今度は右へ左へ、上へ下へと不規則な軌道を描き、シルバーベルを躲す。

シルバーベルはラドンの代わりに周りのビルを破壊してしまう。

「くそっ！くそっ！なんで当たらないのよ！！？」

「ジツとしてなさいよクソ鳥野郎！！？」

女たちは当たらない事に苛立ちを覚えながら叫ぶ。

「各機！砲撃を継続！！？鳥風情がISに敵わない事を教えてやれ！！？」

なんて言う。

それに思わずヘックスは溜息を吐く。

「部隊長、却って街の被害を拡大させるだけです。砲撃は中断して――」

「黙れ！貴様の意見など聞くつもりはない！！？」

上申するが、すぐに遮られる。

それにヘックスは思わず舌打ちする。

ユニオンスクエア公園前の東14番通りと西ユニオンスクエアの交差点に差し掛かる寸前――ラドンは交差点に隣接する工

事中のビルに腹を見せつけるように飛んだ――瞬間、ソニツ

クブームが耐久力の低かった工事中のビルの鉄筋を粉碎させ――

――金属の軋む音と粉塵を立てて、工事中のビルが倒壊する――

――しかも、その瓦礫が降り注いできた場所には、ラドンを追っていた、部隊長機を含む部隊先鋒の福音2機が、倒壊に巻き込まれる。

「ひ、ぎゃああああ！！？」

「がああああ！！？」

ISの耐荷重量である478キロを軽々と上回る瓦礫が次々と襲い掛かり、2機の福音を押し潰す。

通信マイク越しに、肉が潰れ、骨が碎ける音が、響いた――

「た、隊長！！？」

部隊の誰かがヒステリックな声で叫ぶ。

だがヘックスはそんなことよりラドンの方に視線を向けた――

――だが。

「何処に行った――？」

ラドンが進行方向に、いないのだ。

ふと、ヘックスの思考の中に嫌な予感が、生まれる。

先程工事中のビルを破壊したのは偶然だろうか？

ラドンがマツハ6もの速度が出せることはレーダーで分かっている。なら、振り切れた筈だ。

なぜ、私達をあつさり振り切らなかった？

(つまり、先程から今の動きの全ては――!!?)

考えが纏まり結論に至る。

それと同時に、背後の半壊しかけのビルを突き破り、ラドンが現れる。

つまり、先程から今の動きは、追われるフリをして誘い込み、ニューヨークの摩天楼という入り組んだ複雑過ぎる地形を利用して撒き、背後を取る――という、モノだった。

すかさず福音各機はバックブーストでバック飛行しながら迫り来るラドンにシルバーベルを放つ。

「ひっ、く、来るなあああ!!?」

「死ねっ！死ねえええ!!?」

隊員達は、絶叫しながらラドンにシルバーベルと予備兵装の50口径アサルトライフルを穿つ。

「…くっ!!?」

ヘックスも、30ミリチェーンガンを、穿つ。

しかしそれらの弾丸はラドンの肌を軽く削る程度しかなく、ラドンは全く動じない。

追う者が追われる者に、追われる者が追う者に変わった瞬間だった。

ラドンは加速してさらに距離を縮める。

速度は、マツハ4くらいだろうか。

福音の速度はマッハ4.5である為、ギリギリ速度は上だった。

だが、次の瞬間、羽を折り畳み、空気抵抗の少ない態勢になった瞬間、爆発的に加速し、マッハ6.2に達して、福音の真上を通過する

——直前、ヘックスを含む数人が反射的に高度を下げ、絶対防御の出力を最大に設定——しかし回避に間に合わなかった1機が間近に迫ったラドンのソニックブームと、加速する際に爆発的に上昇した体温によって水分が蒸発し、さらにスラスターの中の推進剤が熱で誘爆し、爆散——。

「し、支援用フリゲートはどうなってるのよ!?!?」

瞬間、ハドソンリバーの方から響く轟音。

支援用フリゲート艦から、シースパロー艦対空ミサイルが放たれる、音だった。

いくつものミサイルが、ラドン目掛けて飛んで行く——。

が、それらはラドンが体温を爆発的に急上昇させて発生した暴力的な熱と、ソニックブームの衝撃により、次々と誤爆する。

「…あ…う、そ…?」

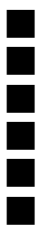
女の1人が呻く。

ラドンはミサイルを放ったフリゲート艦に顔を向け、睨みつける。

そして頭部のトサカ部分が橙色に発光し——口から同じ

橙色の熱線が、膨大な熱を放ちながら、大気を焼きながら、空気を切り裂きながら、穿たれ——支援用フリゲート艦を、貫く。

一瞬遅れて爆発——一撃で、フリゲート艦は轟沈させられた——。



——これは、記憶。あの時の記憶。

ロリシカ・ギジガ統合基地での、記憶。

「あんたが篠ノ之千尋?」

ロリシカ軍が設けた野戦病院で、意識のない箒の看病をしていた自分に、隣のベッドに寝かされた少女が話しかけてきた。

左腕は千切れ、右足はギプスで固定され、左足は切除されたらしく、ひざ関節から下がらない少女が――。

千尋はその少女を見て一瞬呆気に取られ、顔を顰めてしまったが、すぐ平静を装って、

「は、はい。そうですが…。」
応える。

それに少女は苦笑いしながら言う。

「何考えてるか、顔に出過ぎ。」

「は…申し訳ありません。」

千尋は申し訳なさそうに謝る。

「別に良いわ…良かったわね…アンタの家族は無事で…」

千尋はその少女の言葉に答えようとするが、言葉が詰まる。

どう何を応えたら良いか、分からない。

下手に同情するように言えば、彼女を逆撫でしかねない。

だから、黙ってしまおう。

そんな千尋を見て、少女――ライサ・セミヨン伍長は言う。

「アンタは、さ…その家族である箒を守ってあげなさいな…アンタが守ってあげなきや、ダメよ…。」

「…はい。」

「だからさ、アンタが私の事気にかける必要なんて、何処にもないわよ。」

どこか自嘲するように、言う。

「で、でも…」

千尋はそんなライサに何か言いたげな顔を、する。

「何よ、心配そうな顔して…」

ライサは鬱陶しげな顔をして、でも助けを求めるように目頭には涙が溢れて行って――泣きそうな顔で、言う。

「そりゃあね、辛いか否かといえは辛いわよ。あたしは射撃の精度はイマイチだし近接戦は不得意で、持っているのは五体満足の体だけ…そ

れが無くなったら、兵士として何が残るのよ……何もないじゃない……」
そんなことはない——千尋は言いかけるが、理性がそれを止めさせる。

例え今そう言っても、それは気休めにしかならない。

義手や義足で失くした部位は補完できる……だが義手や義足に慣れるのに時間がかかるのはもちろん、体を喪った事で精神的に参ってしまう——イラク戦争からの帰還兵たちに多い話だった。

「バルゴン共を片付けてから、やりたいことだって、たくさん、あった、のに——」

ライサは呻くように、すすり泣くように言う。

……何より、義手義足をつけて多少は自由を得ても、SF映画にあるような人の手足の形そのままの義手義足などなく、かつての手足に比べれば自由は酷く削られてしまう——。

さらにロリシカの情勢を考えれば傷痍軍人に対する精神療養施設や義体技術が充実しているとは、思えない。

それを考えれば、手足喪った瞬間、兵士としても、人間としても終わり——そうなってしまうかねないのだ。

現に今日の前のライサはそれに近い位置にある。

千尋はやはり、黙ってしまふ。

こんな現実には押し潰されそうな少女に何と云えば、いいのか——

——思いつかない。

オルガナイザーG1を持つ自分に罪悪感を感じてしまふ。

「……アンタは……アンタも、箒も、あたしみたいになっちゃ、ダメよ——」。

酷く悲しそうな、けれど他人を気にかけるその少女の顔を、千尋は忘れることは、無かった。

—————

鏡ナギの見舞いに来ていた千尋と箒はちょうどそこから出たところだった。

今のリカ見てしまうと、千尋はどうしても、ロリシカで会った兵士——ライサ・セミヨン伍長を思い出してしまう。

「…2人共、お見舞いに来てくれてありがとう。」

「……そっか…ISには、もう、私乗れないんだ…そっか…っ、せつかく、死に物狂いで、頑張つて、きた、のに…ッ」

保健室で交わした会話が脳内で再生される。

前から目指していた夢が、将来が、潰された——辛くて、当たり前前だ。

千尋と箒は、ナギに何も言えなかった。

下手に何か言っても、ナギを傷付けかねないから。

今は、ナギが立ち直るのを祈るしかない。

瞬間、2人は殺気を孕んだ視線で前を見る。

何故なら、

「よっ。」

千尋に重傷を負わせ、間接的とはいえリカの将来を潰した元凶である、織斑が、 “ いつも通り ” のヘラヘラした顔で、2人の殺気を鈍感スキルで気付かないまま、話しかけて来たから。

「…なんの用だ」

千尋が低く、重い、ドスの効いて、怒りを孕んだ声音で、応じる。

「いや、見かけたから…てか、何でそんなトゲトゲしてんだよ?」

持ち前の鈍感スキルで、そんなことを聴く。

「…殺しかけたその張本人が馴れ馴れしく接して来たら、誰だつてこうなるだろ。」

千尋は溜息を吐いて忌々しげに、言う。

「だいたい、お前、鏡に謝ったのか?」

「え?なんで謝んなきゃダメなんだよ?」

織斑が、持ち前の鈍感スキルでその意味を理解出来ない、というような顔で言う。

それに、千尋は思わず抑えていた感情の抑えが利かなくなり始める。

「お前…鏡に何をしたのか…分かってんのか？」

今すぐにも怒鳴りつけたり、殴りつけたくなる衝動を必死に抑えながら、織斑に聴く。

「え？いや、でも死んでないから良いじゃねえか。手足の1、2本無くなっただって生きてたらそれで——」

持ち前の鈍感スキル云々の問題ではなく、人として正気を疑うレベルの発言——千尋は目を見開く。

それで、千尋の限界は、来てしまった。

「…ぎ、けんな…」

「え？なん——…」

「ふざけんなっつってんだ!!？」

思わず、千尋は織斑の胸倉を掴んで、怒鳴る。

思いもしなかったのか織斑は虚を突かれた顔をする。

「てめえよくそんな口が聞けんな…ああ、確かに鏡の件はてめえからしたら “ 些細な ” 事かも知んねえけどな、失くした奴からしたら “ それが全部 ” なんだよ!!？」

千尋の中で荒れ狂う感情を、織斑にぶつける。

「それなのになんだ？生きてたら問題ない？ふざけんな!!？生きてても、そこに幸せが無かったら、何も意味がないだろうが!!？」

千尋の脳裏に様々な光景がフラッシュバックする。

左腕と左足を失くしたロリシカ軍のライサ。

自分の夢を潰され、失望の渦中にいるナギ。

そして、家族を殺され、バケモノにされた千尋の以前の自分自身で

あるゴジラ――。

それらが千尋の脳裏に浮かぶ。

どれも、望んでなった訳じゃない。

いや寧ろ、なりなくなんて無かったものだ。

そしてそれになった果てに、幸せなんて無かった。ただただ一人に
されて泣いていた。

少なくとも自分はそうだった。

確かに織斑の言うことは一理ある。

生きていたらまだ道はある。

でも今それを言うべきじゃない。しかも、張本人が言うべき言葉
じゃない。

他人がそれを言えば励ましになる。

でも張本人が言えばそれはただ、責任を棚上げして、自分の非を認
めたくないだけ――。

「いや、そんなこと……そ、それに鏡がどうなろうが俺には関係無いだ
ろ!!?」

織斑は、逆ギレする。

しかも、内容は最悪だった。

それで千尋は完全に頭に血が昇る。

破壊衝動が、脳を埋め尽くす。

右の拳を、織斑の顔面に、叩き込もうとして―――
腕を掴んで、止める。――― 箒が千尋

「ッ！箒?!?!」

「よしておけ。千尋。」

冷静な、それでいて怒りを孕んだ声――。

「今こいつを殴っても、お前がまわりに敵視されるだけだ。」

正論を、言われる。

「ッ――」

それで、千尋は歯軋りをして、押し止まる。

「さ、サンキユ箒。」

織斑が言う。

それに箒が鋭い、射殺するような眼で睨み付け、

「勘違いするな。」

冷ややかに、見下すように、言う。

「え？ほ、箒？」

織斑は、箒は味方だと思っていたのか、動揺する。

「私だって千尋と同意見だ。ただ千尋がお前を殴って周りの女子に敵視されるのを防ぐ為に千尋を止めたただけだ——だが、私もこのままだと腹の虫が収まらない。」

「え、あの……」

織斑が動揺したまま言う——次の瞬間。

箒は右の拳を強く握り締め、拳を引き、勢いをつけて——

「へ？」

織斑の顔面を、殴る。

一瞬、織斑の顔面が變形さて——吹き飛ばされる。

そして次の瞬間には、壁に打ち付けられ、白目を剥いて、気絶した。

「……このくらいで、妥協してやる。」

箒は、聞こえてるはずが無い織斑に言う。

「……箒」

「……なんだ？」

「……助かった。」

千尋は、箒に礼を言う。

それに箒は呆れた顔をして、

「ああ全くだ。……次からは、自制を働かせろよ。」

千尋の頭をポンポンと撫でながら、言った。

—————

「織斑先生、何故あのような処遇を？」

光が千冬に聴く。

先のラウラと織斑に対する処遇の件で、光は千冬に聞いているとこ

ろだった。

「何度も言わせないで下さい。2人の将来とISの価値と学園の地位を守る為には、必要な処遇でした。」

千冬は応える。

「…その為に、鏡は切り捨てる、と?」

「学園の維持には、やむを得ない処遇です。」

その応答を聴くなり、光は鼻でそれを笑う。

「学園の維持の為?…正直に言え。女尊男卑——IS委員会からの命令だったのだろうか?あの処遇は。」

「……。」

沈黙という名の肯定。

「…それを聴く限り、もはやこの学園は公正な機関としては機能していないな。」

「なッ!??」

「何故驚く?委員会の都合の良い制度を整え、ISの都合の良い情報しか開示せず、委員会の都合の良いように運営する為に被害者を切り捨てる。それだけでなくISに都合の悪いモノは徹底的に排除する

——それはプロレタリア独裁——共産主義とどう

違う?」

それは果たして、光の言う通りだった。

今の学園は確かに、酷く歪だった——。

「片桐先生!織斑先生!大変です!!?」

ふと、真耶が駆け込んでくる。

「テレビ!テレビ見て下さい!!?」

真耶に促され、教員の1人がテレビを付けた——。

「え?」

そこに映っていたのは、見た事もないバケモノがニューヨークを襲撃し、米海軍の世界最強のIS、銀の福音が迎撃に出るも、撃墜されたという、内容——IS不敗神話の崩壊した瞬間だった——。

EP—18 僅かな安息

IS学園・理事長室・午後10時29分。

「篠ノ之箒一曹、ならびに篠ノ之千尋二曹、ただいま出頭致しました。」
「よろしい、入れ。」

光の落ち着いた声。

箒は千尋を見る。

千尋は箒に対して頷くと、箒はドアノブを掴んだ。

扉の先は身内とはいえ、IS関連以外では学園の支配者、というに相応しい、特務自衛隊・片桐光一佐の居座っている部屋となっている。扉を開けると、そこそこ広いオフィス風の部屋の内装と、机の上で書類に向かって、デスクワークを行っている光が視界のなかに入った。

「楽にしろ。2人とも、夜分遅くに呼び出してしまつてすまなかつたな。」

光は2人に顔を向けて立ち上がった。

そして満足そうに微笑むと、戸棚からティーカップと茶菓子を取り出した。

「コーヒーと紅茶、どちらがいい？」

「あ、そんな仕事は自分たちが……！」

「いいから楽にしてろ。昼間の報道の後から書類整理に加え、デスクワークが増えて体が凝つてるんだ。些細な事でも体を動かしたくないな。だから、こういうのは私にやらせろ。」

「は、はあ……で、では私は紅茶で……」

箒が戸惑いながら応える。

「千尋、貴様は？」

「お、俺はコーヒーで……」

やはり、千尋も戸惑いながら応える。

「わかつた。私と同じブラックでいいな？」

「あ、はい。」

千尋と箒は、私的な場所ならともかく、公的な場所で佐官クラスの士官が下士官に対して給仕染みたことをするということをあまり知ら無いために、少し信じ難いように、眼前の光景を見る。

「そーいや、昨日は災難だったな。…怪我はもう大丈夫か？千尋？」

「ああ。…けど…」

「鏡ナギを再起不能にまで陥れたのにも関わらず、織斑一夏とラウラ・ボーデビツヒの処遇に納得いかない…か？」

見透かすように言う。

「…ああ。彼奴らが謝罪のひとつもなくのうのと過ごしているのが納得いかない。…少しは罰を与えるべきだろう。懲罰房入りとか。」

学園には一応、懲罰房が存在している。

だが、IS委員会が学園において問題は存在しない——としたいが故に、問題はもみ消し、使われた事はない。

「…そうしたいのは山々だがなあ…IS関連での生徒の問題は、織斑先生に一任されている。IS委員会直々にな。」

光は言う。

「そうすれば少なからず、世界最強という立場に祭り上げられ、IS乗りから絶大な支持を集めている彼女の一声で、IS関連の問題は掻き消せる。」

ふと、ため息をついて、一拍開けて続ける。

「だが同時に織斑千冬を “ 世界最強という名の呪縛 ” で縛り付け、委員会の傀儡に仕立て上げることも目的のひとつだろう。IS乗りから絶大な支持を集め、これから育っていくIS乗り見習いからも絶大な支持を集め、彼女はそれらの期待に応える為に、実の弟を女尊男卑から守るために、ISの絶対性と女尊男卑の安寧を維持する為に時として強権に走る…そして彼女を傀儡にしている女尊男卑が肥え太る——…。」

千尋と箒はそれを微妙な感情で、聴く。

「難しい話だ。家族を守るために、IS乗りの期待に応えている織斑千冬が悪い訳でもない、かと言って織斑千冬に期待してしまうIS乗りが悪い訳でもない、委員会が悪いといえれば悪いかも知れないが、現

在の社会で彼女らを否定すれば混沌化する——現に、昼間の報道以降、日本だけで6件もの大規模な暴動が起きている。」

光はコンソールを叩き、モニターに日本地図を投影する。

東京、大阪、名古屋、千葉、札幌、福岡——それらの都市で暴動が起きていることを示す赤いグリップ（光点）が表示される。

「ISが最初から無ければよかった——といえば身も蓋もないが、そう思いたくなるほど、事態は悪化している。」

やるせない顔をしながら光は言い、2人の前にティーカップを置いた。

千尋と箒は、ぎこちない仕草でティーカップを運んで——
一口、含む。

瞬間、口の中に、そこらのインスタントのコーヒーや紅茶とは思えないほどのコクと旨味の効いた味が広がる。

「これは……」

「おいしい、です……」

思わず2人は感嘆の息を吐く。

光の頬が僅かに緩む。

「個人的に、給料で取り寄せた物だ。今のこの状況で贅沢など言ってもらえないが、嗜好品くらいは好みに近付けたい。」

今のこの状況——巨大生物の存在が露見し、世界各国がパニックになっている状況だ。
日本も、例外ではない。

樺太からいつ押し寄せてくるか分からないバルゴンの存在が知れるや否や、北海道では、北部地域から札幌や本州に避難しようとする人達で溢れかえり、道は車による大渋滞で塞がれ、商店にはパニック状態の人々が殺到し、一部地域では暴動まで多発し、警察のみならず、陸上自衛隊第7師団まで治安維持に派遣される騒ぎと化していた。

今テレビを付ければ、どのチャンネルもニュース、ニュース、ニュース、ニュース……どれも、メジャーな有力テレビ局からローカルなB級テレビ局まで——それら報道機関がフル動員されている。

白騎士事件を遙かに上回る騒ぎらしい。

さすがに関東ではそんな大騒ぎは起きていない——訳がなかった。

ネットに上げられるデマ情報への対処に、特務自衛隊・電子戦略隊や情報庁・情報戦術隊は忙殺されていた。

また、これを機に政権転覆を狙う輩がいない訳がなく野党議員やその傘下の組織が与党を引きずり降ろそうと国会前で集会デモを開いている——他にも、女性利権団体の支部にトラックが突っ込んだり、女尊男卑主義で好き放題やっていた女性への暴行が多発している——。

それが現状——昼間から半日で一変した世界だった。

「さて、本題に入るぞ。」

光が2人に向けて、言う。

「まず2人には言わねばならない事がふたつある——ひとつは、シャルル・デュノアの件だ。」

「…デュノアがどうかしたのか？」

千尋が聴く。

「情報庁がスパイ容疑で逮捕した。」

瞬間、2人はハンマーで頭を殴られたような衝撃に襲われた。

「は？え、スパイ容疑…？」

思わず箒が聴く。

一度顔を合わせて、僅かに訓練しただけの仲とはいえ、それは2人にあまりに衝撃を与えるには充分過ぎた。

「デュノア社は第3世代機を開発出来ていない。おまけに欧州総出の第3世代機開発計画、イグニッションプランからもフランスが外されかねなかったからな…フランス政府はデュノア社に圧力をかけた。」

やはり、淡々と言う。

「だからデュノア社は第3世代機のデータを奪うためにIS学園にスパイを寄越した。——シャルル・デュノアという、男性パイロットとして、白式のデータを盗みに…な。」

沈黙。

2人がそうなってしまうのも無理はない。

いつかあるだろうと思っていた事態が、身近に親しくなりかけた者を引き金に起きた――。

2人には、とても実感がもてなかった。

「デュノアが白式のデータを奪った直後に部屋に仕掛けた対人トラップで無力化し、現行犯で逮捕……現在は情報庁・暗部が尋問中だ。こちらでも電子戦略隊が情報を収集中……詳しい事情がわかり次第、彼女に処遇を下す。」

IS学園に在る間は、確かに他国の国家や組織の干渉を生徒は受けない――だが、それはあくまで無所属の人間のみで、国家や組織に帰属している人間は例外だ。

現に千尋や箒も特務自衛隊の都合に従っている。

さらにシャルはスパイ行為という犯罪行為を行った。

犯罪者まで置いておくのはあまりに異常――故に捕縛し尋問されている――。

妥当な処分は退学だろう。

「デュノアに関しては以上だ。……さて、ふたつ目の件だが――」

光は少し、間を置いて言う。

「突然だが貴様らは明日、私と永井と共に東京への出張に同行してもらおう。」

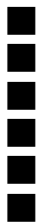
なんて言うものだから千尋も箒もまた驚いてしまう。

普段は秘書係の舞弥か、護衛係の頼人だけが付いていくことで充分だったから。

多分、都内の治安悪化を懸念して、と思ったが、どうも違うような気もする。

だが、間違いなく行き先は――…

「行き先は、我が家である――八広駐屯地だ。」



IS学園・地下フロア

コンクリート造りで、簡素なイスと机が置かれた殺風景な部屋――

――その部屋のイスにシャルル―― 否、シャルロット・デュノアは、座らされていた。

「デュノアさん、そろそろ事実を言っていただけませんか？ 私たちも事は穏便に済ませたいんです。」

情報庁・暗部の更識楯無の従者である布仏虚が机を挟んでシャルルに對して、にんまりと微笑みながら聴く。

尋問しているのだ――。

「だから……何度も言ってるじゃないですか！ 僕は父さんの愛人の娘で、父さんの命令でここに寄越されただけで――……！」

衰弱した顔をして、泣きそうな声音で言う。

既に何本も自白剤を打たれ、意識は朦朧としていた。さらに目の前からは強烈なライトが当てられていて、そのせいで脳の思考能力が低下していく。

先程からシャルルは真実を言っているが、虚はそれを相手にしない。

「……本当に……本当に何も知りません……！ 父さんの所でISの訓練を受けたのだって数ヶ月だけで……！」

「なら何故あそこまで見事なラピットスイッチ（高速切り替え）を？ 例え才能があつてもあそこまで見事な腕になるには数ヶ月では、あり得ません。」

「そんな……本当に……本当に僕は……」

「はあ……。」

虚は溜め息を吐く。

「いい加減、嘘をつくのはやめたらどうですか？」

呆れたような顔で虚は言う。

「う……嘘なんてそんな……どうして……信じて貰えないんですか!?？」
「犯罪行為を行った者の言葉をそう易々とは信じません。……我々としてはいつまでも穏便でやりたかったのですが……残念です。」

虚はそう言うと、部下と思しき黒スーツ姿の2人の男に目配せをする。

するとスーツの内側から棒状のモノを取り出す。

そして棒状のモノの赤いボタンらしきものを押すと、棒状のモノの先端がバチツとスパークした。

——スタンロッドだった。

「ひっ!!?」

シャルは思わず悲鳴を上げる。

「早く自供して下さい。……こちらとしても、肉体破壊的拷問は避けたいのですが。」

気が滅入るような顔をして、虚が言う。

だがシャルはそれどころではない。

スタンロッドは、洒落にならない。

長時間、体に当てられ続ければ内臓破裂、良くてショック死という未来が待っている。

「…私個人としては、こういうのはしたくありません。ですが貴女が日本に害を与えない可能性も否定できない——ですから、洗いざらい吐いてもらいます。」

憂うように、けれど何か堅い決意を宿した顔で、虚は言い放った。

「…や、やめ…」

シャルは怯えて、目頭から生理的な涙を零しながら、椅子から逃れようとする——だが、椅子に縛られているから立ち上がれない——。

「頼みます。」

虚は無慈悲に部下に命じる。

部下の男は頷くとスタンロッドをシャルの胸に押し付けて——

「や…やめ、て…」

「やって下さい。」

虚の命令——部下が、スタンロッドのスイッチを押しそうとする——。

「やめてえええええ!!?」

シャルの、絶叫。

「は〜い、ストップ。虚ちゃん。」

瞬間、気が抜けたような軽い声が、響いた。

虚とその部下、シャルが思わずそちらを、向く。

「お嬢様!!?」

虚はそう少女の事を呼ぶと、頭を下げる。

虚の部下も、同じだ。

「情報庁で洗った限りでは、今と同じ発言をしていたわ。：虚ちゃんはどう思う?」

「自白剤を既に4本投与し、照明を常に目に当てながら、水も与えず尋問しました。勿論尋問の訓練を受けていたとしても限界であるタイミングまで尋問をしましたが、彼女がウソをついているとは思えません。」

「つまり、彼女は嘘偽りなく、アツサリ口を割ったということ?」

「はい。」

虚との一連の会話を終えると、楯無は少し申し訳なさそうな顔をしながら言う。

「じゃあこんな大袈裟な尋問をする必要、無かったわね：虚ちゃん、ご苦労様。」

「はっ」

そしてシャルの方を向き直ると、嘘偽り無い微笑みを浮かべて、言う。

「長い間尋問し続けてごめんね。でも、日仏両国間の重要な外交問題に発展しかねない状況だったから、少しでも正確な情報が欲しかった。――。」

楯無は得意げに言う。

「結果、貴女は酷く可哀想な女の子だと言う事が分かった――
――でも、それだけよ。」

「えっ…?」

シャルは少し驚くように、楯無の顔を見る。

楯無は今度は至極真面目な顔をして言う。

「貴女が可哀想な境遇にいる事は分かった。…でも、貴女がそれよりもっと酷い境遇に陥るか、少しでもマシな道を選ぶかは、貴女次第よ。」

シャルは思わず俯いてしまう。

「…さて、ここで提案。」

楯無が少し悪戯っぽい声で、言う。

「多分このままだと貴女を待っているのは強制送還されて刑務所入り。多分無期懲役というあまりに救われない結末——。」

シャルは黙ったまま俯いている。

それは理解していた。

白式のデータを手に入れたとしても、いずれそうなるという現実も

「…そこで、少しでも行動を起こせば、少しはマシなものになるわ。」

だが、やはりシャルは俯いている。

どうせ、生活機能が充実した収容所に放り込まれる——そんなモノだと思っていたから。

「日本に亡命するのよ。」

だから、楯無のセカンドプランを聴いて、シャルは思わず驚いた。

????????????
翌日

午前11時30分

東京・新墨田区

とうきょうスカイツリー駅・駅前

IS学園のモノレールから、お台場のお台場海浜公園駅でゆりかめに乗換え、そのまま新橋駅に向かい都営浅草線に乗換え、東武特急きぬ131号に乗換え、東京スカイツリーの最寄り駅であり、墨田駐屯地の最寄り駅でもある、とうきょうスカイツリー駅に千尋と等は、光に連れられて来ていた。

目に入るのは東京の名所であり、電波塔としては世界最高の高さを

誇る東京スカイツリー。

そしてその真下である東京スカイツリーの根元——東京ソラマチの前で通りの脇を埋め尽くす、屋台の群れと、それに集りながら、楽しそうに笑い合つて、幸福で平和な一時を過ごす人々——

それを見た千尋と箒は、神妙な感情を抱いていた。

それに感づいたのか、光が2人に顔を向けて、言う。

「——言いたい事があるなら言ってみろ。私は否定しないし、受け止めてやる。」

「…ああ…なんていうかさ…平和、なんだな…ここ。」

千尋が言う。

「今まで、この景色は当たり前なんだなって、思ってた…。墨田大火災が起きてても、すぐに民間人が使えるエリアは解放されて、復旧したし、他の地区…渋谷とかも、平和な景色が広がってたから…。」

その声には黄昏ているような感情を孕んでいた。

「……………」

光は黙つて聴く。

「でも…違うんだよな…俺たちは当たり前のように、安価に平和の中で生きていたけど…彼奴らは…ロリシカの、奴らは…」

一瞬、千尋は口籠る。

けれど、ダムが放水するように口を開いて、言った。

「…ロリシカの奴らは、死に物狂いで生きてるのに…俺たちは、」

平和の価値 “ すら知らずにのうのうと生きてたんだな…つて。」

それに箒も、口を開く。

「……ロリシカの、ギジガ統合基地の第2前哨基地で、私と同年のが、こう言ってたんです。…『せめて希望くらい持たせてよ!』つて…」

目頭に何とも言えない感情が籠った涙が浮かぶ。

「…夢も希望もない。そんな世界で生きてるのに…そんな彼女たちが欲しかった平和とか希望は…ここには溢れすぎていて…つ…すみません、思い出したら…つい…」

目頭から零れ落ちる涙を手の甲で拭いながら、箒は言った。

ロリシカの凄惨な戦場と、国連が——ひいては人類全体が自分達の安寧の為にロリシカやウクライナの人達を生贄にして自分達は彼らの犠牲の上でのうのうと甘い蜜を吸いながら生きている——

——そんな残酷過ぎる現実が、千尋と箒の眼前に広がる墨田区の東京ソラマチ前の景色として具現していて、自分達が改めて搾取者なのだという事を、叩きつけられる。

特にロリシカの現実を知った2人には、かなり堪える光景だった。光はそんな2人の頭に手を置いて、撫でる。

「…そうだな…私達日本人は、平和というモノが当たり前だから、それに関する価値観はあまりにチープだ。」

光も憂うような目をして言う。

「そして日本人が搾取する側の存在というのも…今の若者は無自覚だが、事実だ。」

やはり憂うような声音で言う。

「…だが平和というモノはあまりに脆い。ちよつとした事で崩れ去る砂の城のように、酷く脆い——そして崩れ去つ

た先では、あまりに多過ぎる人が死ぬ。そしてそこから再び平和を掴み取るのは、茨の道のように険しい——だからこそ、平和とは貴重であり、尊いモノなんだ。」

ただ、日本人は長くそれに浸かりすぎた——という言葉は、飲み込みながら光は優しく、母性を孕んだ声音で2人に言った。

そして光の言う通り、平和という名の砂の城は、例の報道があつてから、崩れ去ってしまった。

昨夜の時点で日本の主要都市6カ所で暴動——今現在も、渋谷や永田町ではデモが続いている。

そして同地区には、つい先程、内閣府から厳戒態勢が発せられ、警視庁の機動隊や自衛隊第1師団・普通科部隊の派遣が決定されていた。

「今の若者は平和に慣れすぎていたからな…パニックになるのは当たり前だ。…だが悲しいかな、そんな若者達を利用して、国会の野党

…」

「うむ、了解した。…それにしても箒が鶏の唐揚げを頼まないのは珍しいな………まだ、肉は駄目か？」

「その…すみません…」

ロリシカ・ベルホヤンスク統合基地第2前哨基地での凄惨な経験から、以前は好物だった肉が箒は食べられなくなっていた。

それこそ、コンビニ弁当の小さなソーセージでも、少しでも口に含んだだけで吐いてしまうくらいに。

「気にするな、私にも似た経験がある。」

「そう、なんですか…？」

「ああ。私だって血の通った人間だ。そして人間は、誰しもが最初から強いわけではないからな。」

そう言いながら、光は会計をする。

そして千尋と箒は自分が頼んだモノを受け取る。

それらの皿を歩道にあるテーブルと長椅子がセットになっている簡易ベンチのテーブルの上に置き、千尋と箒が隣同士になるように、光が2人の正面に座る。

そんな2人を見た光は、意地悪そうな顔をして、

「…ほう、中々お似合いのカップルだな。お前ら。」
言う。

「はア!?？」

だから、2人は思わず、顔を赤らめて情けない声を上げてしまう。

「ち、ちよ！光!?？おま、何言つて…!!？」

「~~~~~ツ!!？」

千尋は耳まで顔を赤らめて、慌てふためきながら光に抗議し、箒は羞恥心を覆い隠そうと、両手で真っ赤な顔を抑えている。

「ははは、お前らウブ過ぎるだろう。」

そんな2人を光はからかうように笑う。

「~~~~~さて、冷めてしまつては美味しくなくなる。早めに頂くでしょう。」

光がそう言うと、2人も頼んだ品を手に取り、口にする。

とても美味そうに食べている2人を見ながら光が声をかける。

「時に2人とも、あと2時間ほどは自由時間なわけだが…どこか行きたい場所はあるか？」

「ん〜じゃあスカイツリー!!？」

千尋が無邪気に笑いながら、言う。

「また観光客しか行かなさそうなところを…」

箒が少し呆れるような顔をして、ケチャップをつけたフライドポテトを食べながら、千尋に言う。

それに千尋が中津唐揚げ丼を頬張りながら、子供みたいな顔をして、抗議する。

「む〜…いいじゃねえか、別に！墨田区に住んでも登ったこと一回もないんだから!!？」

「…そういうえは私も行ったことなかったな…。」

箒がふと思いついたように、言う。

「まあ、地元民からしたら当たり前だから遠方の人間と比べて価値観はチープだからな。」

光がたこ焼きをはふはふと熱いのを堪えながら食べて言う。

「…仕事で登った事はあるが…かなりの絶景だ。行く価値はあるぞ？」

光が、言う。

「まあ、箒としては多分メジャーな観光施設よりその辺の屋台やカフェ、商店を回りたいんだらう？」

「あ、はい。そうですね。そっちの方が新しい発見とか、有りますから。」

「どういってお店に行きたいんだ？」

千尋が箒に聴く。

千尋は面白い物はそんな好きじゃない。

だが、店次第では積極的に付き添ってくれる。

「う〜ん……雑貨屋、だろうか。」

「あ、あ、じゃあ俺も行く！」

箒が言うと、千尋も食いつく。

実は、千尋は雑貨が好きだったりする。

「この間墨田区の良さげな雑貨屋さんテレビで言ったからそこ行かねえか？」

「うん。そうだな、じゃあそこにするとうしよ……あ、千尋。」

「え？何だよ？」

ふと、箒が千尋の顔を見て声をかける。

そして指を口に伸ばして——

「口に米粒が付いてたぞ。」

箒が笑いながらそう言っつて、千尋の頬に付いてた米粒をひよい、と摘み取つて、それを箒は食べる。

「お、おう。サンキュ。」

千尋は思わず顔を赤らめて、少し恥ずかしげにしながら言う。

「なんだお前ら、やっぱりお似合いのカップルじゃないか。」

その一連の出来事を見ていた光は、やはり意地悪そうな笑顔をして、言う。

瞬間、また2人は羞恥心が原因で顔をさらに赤らめる。

先程より顔を赤らめている面積は、広い。

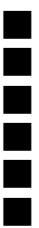
顔面は真っ赤。

2人して、まるでゆでダコのようにだった——。

「ツ!!??…違いし!!?／違います!!?!!」

そして2人は反射的に言い放った。

そんな様を光はさらに面白可笑しく笑った。



I S 学園・第2シャフト内

仮設浴場

「はあく……良いお風呂く〜♪」

楯無が特自の設けた仮設浴場の浴槽に浸かりながらリラックスしていた。

「……………」

「もう、黙ったり緊張してないで、貴女もリラックスしたら？」
豊かな胸を見せつけるようなポーズングをしてリラックスしながら、楯無は言う。

「…尋問明けにいきなりお風呂に入れられても…どう反応したら良いか…。」

その相手は、シャルだった。

いきなり楯無に、「お風呂でも入りましょう!!？」と言われて連れられて来たが故に、困惑していた。

(…まあ、気持ちいか否かなら、気持ちいけど…。)

シャルは内心、呟く。

「…別に、何も気にしなくて良いわ。盗聴器や監視カメラの類や見張りの方には退いてもらった。…私だって、暗器は身につけてない——」。

そしてそれを見せつけるように、湯船のお湯から身を上げて、立つ。
「貴女と腹を割って話し合いたかった——それだけよ。」
ドヤ顔を決めるように言う。

同時にふくよかな双丘が、揺れる——。

確かに、見た感じでは、ない。

それにシャルの警戒心は、若干落ち着く——が、シャルは残した警戒心から、まだ暗器を仕込めそうな場所を見る。

(…いや、まさか…ね。)

楯無の股の元——縦に割れているアソコを見る。

(…さすがに入っては…よね?)

「安心して、さすがにアソコには入れてないわ。第一入れても出し難いし。」

楯無がからからと笑いながら言う。

「ハジメテは私が好きになった人にあげたいもの…ま、好きな人がいないのが、アレよねえ…。」

楯無は苦笑いしながら、言う。

それを見て、シャルも吊られて愛想笑いを浮かべる。

(…そういうえば、僕も好きになった人……一人もいなかったなあ……) シヤルはふと思り返すように内心呟く。

いつも父や義理の母の顔色ばかり伺って、他人に使い潰されて当たり前のような世界にいたから――。

「その様子だと、そつちも居ないみたいね……ま、良いんじゃない？ 貴女は。」

少し羨ましがるように楯無がシヤルに言う。

それにシヤルは疑問を浮かべる。

(明らかに、自分より恵まれた環境下で、自分より明らかに優位な地位にいるのに――?)

そんな感情が顔に出ていたのか、楯無が苦笑いしながら少し悲しげな顔をして言う。

「…だって、私はいつまでも親が、更識家の敷いたレールの上しか歩めないもの。」

(ッ――!??)

「…でも、貴女は選択次第で敷かれたレールに色んな分岐点を作って、様々な未来に繋がられる――それは、家のしきたりや国家に縛られる未来しかない私からしたら、とても眩しいのよ――」

楯無は少し大人びた、それでいてやはり悲しそうな笑顔を浮かべて、言う。

選択次第で―― 昨晚言っていた、楯無のセカンドプラン――

―― 日本への亡命、などだ。

(そつか…なら、僕も…普通の女の子らしい生活とか、恋が、出来ないこともないんだ――)

そう、思う。

(じゃあ、僕は―― そんな未来に進みたい―― そのためにも、まずは―― …)

そう思うと同時に―― 頭がボンヤリしてくる。

「あらら、のぼせちゃった?」

楯無がシヤルの肩を担いで湯船から起こす。

僅かに冷えた空気が濡れた裸体を掠めて、ほんのりと涼しくて気持ちがいい。

「背中でも流そっか。尋問されてる間は、ロクにシャワーも浴びてないしね。」

楯無が言つて、シャワー下の桶にシャルを座らせる。

シャルは「自分でやる」と断ろうとするが、のぼせていて頭が上手く思考出来ない。

そのまま楯無のペースに流されて、いつの間にかボディソープをつけたタオルをぐちよぐちよ、と言わせながら泡立てている。

そしてシャルの背中を洗い始める。

泡が肌を濡らして、タオルの生地が擦れる刺激が脳に届く。

(…きもちよくって……あつたかい…)

楯無の手癖による程よい感度にシャルは頬を赤らめてしまう。

ふと、そう思った瞬間。

「ひにやっ!?」

楯無がふざけて背後から回した手でシャルの胸を揉む。

そのせいで、シャルは変に色っぽい悲鳴を上げる。

「へえ〜シャルロツトさんって案外、おっぱい大きいのね〜」

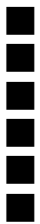
楽しみに楯無が言う。

なおも楯無はシャルの胸を揉みまくる。

「ちよっ、やめ…ふにやああ…!!」

思わずシャルは喘声を上げてしまう。

そしてその声は、仮設浴場内に木霊した――。



IS 学園・中庭。

芝生が敷かれた中庭のベンチに鷹月、立花、の2人は腰掛けていた。

「…はあ…。」

思わず鷹月は、とてもやるせない顔をして、ため息を吐く。

立花も、同じだ。

理由は単純、鏡ナギの処遇だった。

被害者であるはずのナギを学園は自室あるいは保健室にほとぼりが冷めるまで軟禁するというのだ。

ナギと同じように再起不能に近い重傷を負った他の者に関しても同様——。

なのに加害者側の織斑とラウラの方は——本来厳罰を受けるべき方は、アリーナの使用禁止という処遇だけ——。

これらを取り決めたのは織斑先生たちだが、裏でIS委員会が引ききしたという黒い噂もある。

「…もう、公正な教育機関とは……言えないわね……この学園は。」

立花が言う。

今まで女尊男卑に身を任せて違法的行為をしでかした学校はいくつか見たことがある。

だが、人命に関わる大事を引き起こして——しかも国連管轄の組織がそれほどの行為に及ぶとは——もう、異常性を通り越して、恐怖しかない。

「…ISの完全性が崩れ落ちないように被害者の生徒に対し、積極的に犠牲を強いる…マトモな公的機関のする事じゃないわ。」

「でも、昨日の報道でIS不敗神話は崩れ去っちゃったじゃない!!? ……なのに…なんであの処遇のままなの…!!?」

鷹月が言う。

「多分、公にできない理由があるんでしょう。」

「こんな状況下でも公にできない理由って……!!?」

「……たとえば、今回みたいな件で、今回みたいな処遇にした事が、過去にも有ったとしたら?それも1回や2回ではなく、何度も有ったとしたら?」

立花が言った瞬間、鷹月は固まる。

「…もしかしたら他にも問題が有りすぎる——なんてのもありえるわ……多分ひとつボロを出せば、芋づる式に問題が発覚する——

——だから、黙殺しようとしているのかもしれない。」

そう立花が言う。

ふと、そこに――

「よっ、何してんだ？」

織斑が、いつもと変わらないヘラヘラした顔で、2人に絡んで来る。

立花は素っ気ない感じの顔をして、

「別に。」

そう返す。

「いったい何の用？」

鷹月が聴く。

「いや、タッグトーナメントのメンバー組んでくれないかって頼みに来たただけけど。」

持ち前の鈍感スキルで2人の嫌悪感に満ちた視線に気付かないまま、首をかしげながら聴く。

「お断りよ。」

鷹月は真っ先に言う。

「は？なんで…？」

「加害者になっていながら被害者の子に謝りもしない人間性を疑うような人とは、御免よ。」

織斑が鈍感スキルで首をかしげながら言うが、鷹月はそれを両断するのように、切って捨てる。

「私としてもお断りね…今の学園の体制も、貴方への信頼も、私としては非常に如何わしいし。」

立花もやはり織斑を切って捨てる。

「は？な、なんで…てか、学園に疑念って…」

「加害者を擁護して被害者に犠牲を強いる――ま、これはどこの学校でも虐め問題とか、学校に都合が悪い事が起きたらよくある事――…」

立花はまるで物覚えの悪い生徒を指導するように言う。

「――問題は、この学園が――国連管轄の公的教育

機関がそれと同じ対策を取ったという事よ。ISの権威を守る為に…ね。」

「す、推測だろ？そんなの…!?？」

「あらそうかしら？ISの権威を守る為に犠牲を強いる…これはどこ
の国でもあり得るでしょう？この御時世。」

立花がさも当然のように言い放つ。

「…ハッキリしているのは…『ここまで人を腐敗させるISなんて
最初から無かったら良かった』————って、どこかしら？」
「なっ!?？」

立花の言い放った言葉に、織斑は驚く。

「で、でもそうだとしたら…ISが無かったら、白騎士事件の時のミサ
イルはどうやって止めれたっていうんだよ!?？」

一夏は、喚く。

白騎士事件————10年前に日本に放たれた2672発の
ミサイルを原初のIS————白騎士が撃墜した事件だ。

「あれはISが————白騎士がいたから、俺たちは生きてられ
るんだろ!?？」

確かに、織斑の言い分には、一理ある。

「白騎士が居なかったら俺たちは誰を頼れば良かったんだよ!?？」『無
能な自衛隊』以外誰も頼れないじゃ————」

だが瞬間、一夏の放った言葉が、鷹月を刺激する。

一瞬で鷹月の顔から理性が吹き飛ぶ。

そして気が付けば、頭が物事を考えるより先に手が出ていた。
パシイン!!？

瞬間、乾いた音が、響く。

鷹月が一夏の頬を叩いたのだ。

「…あんな…」

「鷹月ちゃんっ!!？」

鷹月を抑えようとするが、それは一瞬遅かった。

すでに鷹月は一夏の襟を掴み、射殺するような瞳で一夏を睨みつけな
がら、叫ぶ。

「あんな何様のつもりよ!?？」

一瞬遅れて立花が鷹月の肩を掴んで引き剥がそうとする。

けれど鷹月は一夏の襟を掴んだまま離さず、続ける。

「あんたもあたしも、今こうしてのうのうと生きてられるのはISのおかげでも、女尊男卑のおかげでもない！」 日陰者 “ である父さんたち自衛隊の人たちが国防に尽力しているからなのよ!?!? あんたそれ考えた事あんの!?!?”

その声は怒りを孕むと同時に何処か悔しさに耐えているような感情、を孕んでいた。

「いや…そんなこと…だ、だいたい知るかよそんなこと…!」

「ツ…あんた…!!?」

左手で一夏の襟首を掴んだまま、右手を握り締めて拳にして、後ろに引く――。

殴り付ける――直前、その右腕はすんでのところを割り込んできた右手に掴まれる。

「ツ!?!?」

「…そこまです。鷹月さん。」

山田だった。

「山田先生…た、助かりました…」

立花がへなへなとへたり込みながら言う。

「で、でも…ツ!」

やはり悔しさを堪えるような声音で、鷹月は抗議する。

「それ以上したら貴女が加害者になっちゃいます。…だから、落ち着いてください。」

山田は叱責することなく、にっこりと微笑みながら、鷹月に言う。

「ツ…!!?」

それで、鷹月は引き下がる。

「あ、た、助かりました、ありがとうございます山田先生。」

一夏が笑いながら言うが――山田は黒い笑みを浮かべながら無言で振り向く。

だから一夏も思わずたじろぐ。

「や、山田先生…?!」

「織斑くん」

「はい…」

「今すぐ生徒指導室に行きましようか？」

「え…な、なんで…」

「さっきの発言は、誹謗中傷もいいところです。…少し、指導の必要が有りますから、ついてきてもらいますよ。」

そう言うなり、一夏は山田によって、生徒指導室に連行されて行った。



東京スカイツリー・第1展望台

眼下には墨田大火災から復興した新墨田区と、旧墨田区跡地に建てられた墨田慰霊公園と特務自衛隊墨田駐屯地が一望出来るものとなった。

他にも、遠くにはもう一つの東京のシンボルである、空に伸びる赤い塔——東京タワー。東京湾の埋め立て地であるお台場、そして天気の良い今日はIS学園のある夢見島や千葉県が、ぼんやりと見えていた。

千尋と箒はその景色を複雑な心境でありながら、食い入るようにそれを見ていた。

光は2人の隣に立ち、無言で2人と同じ方角を見ていた。

墨田区——東京都民からしたら何て事はない下町で、他県民からしたらスカイツリーが名所の街…というのがありがちな認識だ。

だが、千尋や箒からしたら違う。

箒にとっては多くの死を目の当たりにし、自分の心象そのものを塗り替えられる原因となった場所。

千尋にとっては子供の死体という殻に受肉し、箒に出会い、人というモノに触れるキツカケを作った場所。

どちらも、墨田大火災によって起きた出来事だった。

そんな墨田大火災では10万人もの人が亡くなった。
その地獄の景色を、2人は忘れていない……否、忘れることが決して出来ない。

それほどに強烈な経験だったから。

だが眼下の墨田区には、墨田大火災の面影はもう無い——

そして墨田大火災前と変わらないように大勢の人が暮らしている。別にそれが悪いことではない。

だが：墨田大火災、ロリシカの戦場——そこで死を目の当たりにし過ぎた2人からは、今の平和な景色が違和感の塊にしか見えないのだ。

だが、全てが悪いわけではない。

死んでいるような景色しか無かったロリシカとは違い、ここは人々が生活を営み、街が活きている——。

その景色に2人はほのかに嬉しく、そしてまた安堵を覚える。

痛みと暖かさが乱れ合う感情を孕みながら二人共、その景色を見下ろしていた。

「やっぱり……この街は凄いな。」

箒がポツリと呟く。

「あれだけの災厄を受けてもなお、ここまで立ち直れて——
バケモノにいつ攻め入れられてもおかしく無いのに、こんなに街は活きていて——
ほら、あんなに人や車がたくさん——。」

嘘偽りない、屈託のない笑顔で言う。

多分、箒は内心は複雑……という言葉で表現出来るかどうかさえ疑わしいほど乱れているに違いなかった。

ベルホヤンスク統合基地第2前哨基地での凄惨な戦場の中で散つて逝った将兵たちが守りたいと願ったもの——に近い存在を目の当たりにして——その重みを実感しているのだろう。

「こちらに來い。窓際は、人が多過ぎる。」

光が言う、2人は光についていきながら、窓際から離れた。

「……光。」

「なんだ？」

「…その…なんていうか…今日は、色々多過ぎるモノを、見たな…。」
先程雑貨屋で買った箒とお揃いのコップが入った紙袋の持ち手を強く握りしめながら、千尋は言う。

「実はな、スカイツリーに来たのは、千尋の要望以外にもある。」

ふと、光が言う。

「…お前達にあの景色を見せる為————そして、知っただけでほしい事ついて、教えるつもりだった。」

「知っただけでほしい事？」

箒が聴く。

「私達の戦う理由だ。」

光が指揮官としての、凛とした空気を纏って言う。

「…結論から述べる。我々の目的は1人でも多くの日本人を守りながら、破滅を “ 乗り越える ” ことにある。」

「『乗り越える』？」

千尋は呟く。そして箒も気になったのか、光に問う。

「あの…破滅を防ぐ、ではないんですか？」

「その点は逆に聞きたい。ロリシカを見て来た貴様らは、どう思う？
現状を保ったまま、人類世界を存続させられると思うか？」

思わぬ問いに、一瞬2人は黙る。

だがもう、結論は浮かんでしまっていた。

そして、千尋が口を開く。

「…多分、無理…だな。」

重い声音で言う。

箒も、結論は出ていたとはいえ、辛そうに、身を強張らせる。

「ロリシカやウクライナみたいな国だって、いつまでも防衛線が耐えられるわけじゃない…あんなやり方じゃ遠からず限界が来て、何処かが支えきれなくなって、そこから突破されて、大陸伝いに侵略されて……それに、どうしようもないくらい力を持つバケモノが現れない保証だって…ない。」

箒も千尋の意見に同意していて、悲しそうに俯いている。

「そうだ。だから現状を維持したまま人類世界を存続するのは無理だろう、人類は国家という枠組みを越えて手を取り会わねば、食い潰される。」

「…でも、それは…」

箒が、辛そうな声で言う。

「ああ。言わずとも分かっている。…それは、夢物語だ。」

光は、現実を叩きつけるような声音で言い放つ。

「漫画やアニメの世界ならいざ知らず、現実世界では人類が互いの立場を越えて手を取り合うなどほぼ不可能だろう。ただでさえ国際社会は東西陣営…資本主義、社会主義陣営に分かれたままだ。…思想が根本から違うが故に、それらが障害となり、人類は手を取り合う事が出来ない——それが、現実だ。」

「けど、協力し合わねえと…本当に滅ぼされるぞ…」

「ああ、そうだな。…だが、 “ 今の世界情勢 ” では、協力し合うことは出来ない。」

ふと、また光の一言に2人は疑問を抱いた。

「今の世界情勢では…？」

箒が呟く。

「そうだ。恐らく破滅後の世界ではいやが応でも人類は協力する事を迫られる。…だからこそ、まずは私達が生き残り、人類戦力を統合する際の礎となる必要がある。…恐らく統合軍はアメリカが主体だろうが、アメリカに対し反感的国家でありながら親日国家という国家が東南アジアには多い。…それらの国を取りまとめる為にも、アジア圏でかなりの實力を持つ我々が生きのこらねばならない。」

そこで一旦区切り、光は溜息を吐いて続ける。

「だが同時に日本人も守らなくてはならない。——最悪、日本の領土を失う事になっても、な。」

「ツッ？し、しかし…」

箒がそれに、異議を唱える。

「———それでは難民になってしまう———か？」

それで光は少し微笑むようにして、言う。

「確かに、厄介な二流市民と見られかねないだろう。だがそれでも構わない。…最も恐れているのは、日本人の魂や誇りを持った人々が消えてしまう事だ。」

光は、静かに言う。

「たとえば日本という国家が減んでも、日本の誇りを持った人々がいれば、それが国家を再興する原動力となる。国家があつて人が有るのでは無い。人があつて初めて国家が有る——…私は、そう信じている。」

光はそう言い放つと、2人に対して、微笑みかける。

こんな先の事まで考えていたのか——と、2人は驚かされる。

ふと、光がスマートフォンを取り出し、時刻を確認する。

「ん、そろそろ駐屯地に行かないとまずいな。では降りるとしよう。」

光は、2人に言う。

——瞬間、千尋は光のスマートフォンのホーム画面に写っていた写真が目に映った。

10代半ば頃の光——と、光と同年くらいの少女。

「…光、その人って…?」

「ん? ああ、古い知人だ。…もう、生きてるかどうかすら怪しいが。」

「…え? なんで?」

「…まあ、色々あつたんだ。…白騎士事件のミサイルの流れ弾で自宅の下敷きになり、自分の住んでいた町の原因が別のミサイルの流れ弾でメルトダウンして——彼女は被曝したんだ。」

暗い声音で、言う。

「救助はされたが、原爆症で余命10年ほど…と診断されて——

——ある日行方をくらませて以来、それっきりだ。」

(…まあ、一部は、嘘だが…な。彼奴は…彼奴は天災の所為で見せしめにされて——あの時私にできたのは、彼奴を日本から逃すくらいで——…)

そう、本当は複雑な感情を抱いて内心眩きながらも、平静を装う。

「そつか…なあ、名前はなんて言う人なんだ？」

「名前？ああ、こいつの名前は――」

一瞬後、その名前は光の口から放たれた。

「朝倉美都、だ。」



南太平洋・キャロツ島

篠ノ之束のアジトがあるその島の海岸に、朝倉は来ていた。

キャロツ島はサンゴ礁が隆起した島で、さほど大きくはない。

周りを砂浜に囲まれ、さらにドーナツ型の山が砂浜の先に取り、篠ノ之束のラボはドーナツ型の山に囲まれた島の中央にある。

“ 彼 ” が中国経由でハッキングした衛星からの衛星画像によれば、中々豪華な豪邸らしい。

朝倉の目当てはそこに、ゴジラの目当ては島の裏側にある、座礁したタンカーに偽装した、原子力発電所。

朝倉は、“ 彼 ” から手渡された耐熱耐水耐放射能耐電磁波仕様に改造されたスマートフォンの電源を入れ、特殊守秘回線に切り替えて、首から掛ける。

ピリリ！

ふと、電話がかかってくる。

朝倉はスピーカーホンで出る。

『朝倉さくん、調子はどう？』

“ 彼 ” からだ。

「どうも倉田さん。調子は良いですよっ。」

濡れたワンピースを舐めるようにめぐり上げ、生脚が見え、太腿に

つけた、両脚のガーターホルスターから消音器付きのグロック18C
ハンドガンを抜きながら言う。

相手は今使っているスマートフォンや篠ノ之束のラボを特定した
倉田真也。

『簡単なトラップやセンサーならハッキングで除去しますけどどうし
ます?』

倉田は言う。

篠ノ之束の作ったトラップやセンサー群をハッキングで除去する
など、普通は無理だろう。

だが、ブラボーキヤツスルにあつたスーパーコンピューターを魔改
造しているから、可能ではあるだろう。

だが、朝倉は、

「結構です。」

そう言う。

「それじゃ、終わったら掛け直します。」

そう言つて、電話を切る。

そして、足を踏み込む、ザラザラした砂浜の砂が足の指と指の間に
入り込む——瞬間、朝倉は地面を蹴る。

砂が舞い上がる。

朝倉は勢いを殺す事なく、活かしながら手頃な岩の上に飛び乗る。

だが、全く勢いを、殺さない。

そして走っていた時と同じ速度を保ったまま、岩からドーナツ型の
山に生えている森林の木に飛び移る。

だがやはり、勢いを、殺さない。

不規則な高さ、不規則な太さ、不規則な形——それらの
木々の枝を、走るように、飛び移りながら駆け抜ける。

風を切り裂きながら、勢いを殺さないまま——いやむしろ

勢いがさらに増した状態で、木々を次から次へと飛び移りながら、1
00メートルを8秒程度で駆け抜ける。

そして——それを続け、山の山頂の一番高い木の枝に飛び
移る——けれども勢いは殺さない。

。今までの勢いを、活かして——そこから、飛ぶ——

直後、眼下に写る篠ノ之束のラボの豪邸の庭——の各所に仕掛けられた小型センサー群を、 “ 肉眼 ” で、視認する。

瞬間、両手に持っていたグロックを小型センサー群に向ける。

そしてアイアンサイトのみで、即座に引き金を引く——。

その銃弾が小型センサーのひとつを撃ち抜く。

けれどもそれだけで止まらない。

一瞬後、また引き金を引く。

2 発目。

3 発目。

4 発目。

5 発目。

6 発目。

僅かな誤差を手首や肘を曲げて角度をつけて修正しながら、次々に小型センサー群を撃ち抜き、全滅させる——空中から自由落下する、わずか10秒間にも満たない間の出来事だった——

そして、朝倉は小型センサー群が全滅した事でガラ空きとなった豪邸の庭園の花壇に、着地するように飛び降りる。

ボキリ。

高所から自由落下した衝撃で脚が、へし折れる。

けれども、すぐにそれは再生する。

人間の身体では、あり得ない。

けれども朝倉は気にせず立ち上がり、花壇から出る。

タイルで舗装された道に足を、下ろす。

そして、篠ノ之束のラボ——豪邸を見上げる。

瞬間、島の裏側で爆発——ゴジラが原子力発電所を襲っているらしい。

朝倉はニヤリ、と嗤うと加虐に満ちた口を言った。

「さて————借りを返しに来ましたよ……篠ノ之束。」

ウサギ狩りが、始まった――。

カチリ。

やはりまた、世界が破滅に進む。

世界の支配者面していたウサギが、搾取する者から搾取される者に
堕ちる瞬間。

「人でいたい」と願いながらも天災の私欲で歪められ、怪物になってし
まった少女は爪を研ぎ、天災に牙を剥く――。

EP-19 決断、そして怒気

IS学園近海

そこではラウラのシュヴァルツアレーゲンを先導に補佐としてラウラに付随してきた黒兎隊の隊員のラファール・リヴァイヴ（ドイツ軍仕様）2機が3機でアローヘッド陣形を取りながら飛行訓練を行っていた。

もちろん、IS学園を通して日本政府に特別に許可を得て行っていた。

「カニンヘン03、遅れているぞ。もう少し速度を上げろ！」

「は、はい!!？」

ラウラが少し遅れていたラファールに対して撃を飛ばす。

ラウラの第3世代機の機動性に第2世代機であるラファールで追いつけなど、無茶な話だが、隊員はそれをやってのける。

自分達の飼い主——ドイツ軍技術開発局IS課の女達に『用済み』と判断されて処分されるのが怖いから。

それは部下の女達のみならず、ラウラもそれに対して恐怖を抱いていた。

ドイツ軍技術開発局IS課がISの優秀なパイロットを求めた結果、『探すのではなく、作ればいい』という判断に達した結果、作られた人工生命体——それがラウラ達黒兎隊の隊員の実態——

——故に彼女らはドイツ軍技術開発局IS課の所有物であり、生き残る為には『優秀』でなければ、処分されてしまう。

それは人間同様に感情や意思を持つ彼女らからしたら恐怖の他何でもない。

——特に、製造過程で不具合が生じ、作られてからすぐに失敗作扱いされていたラウラはそれに人一倍強い恐怖心を抱いていた。

『優秀』でなくてはならない。

『最良』でなくてはならない。

『完璧』でなくてはならない。

自らを洗脳するように暗示を唱えながら、ラウラは人一倍努力した。

そして2年前——教官としてやってきた織斑千冬の指導で才能を発揮したラウラはドイツ軍技術開発局IS課からも評価を得て、黒兎隊隊長に昇格した。

——不良品だった、ラウラがだ。

その、自らに大き過ぎる転機を与えてくれた織斑千冬はラウラに強烈な印象として残った。

『いつか教官のような——教官と同じような人間になりたい』

織斑千冬という憧れと同じ存在になりたいという願望。

織斑千冬と同じ人間になりたいという純粋な願望。

その二つの意味を孕んだ願望を持って、ラウラは今ここにいた。だから織斑千冬と同じように冷徹に、完璧であるように振る舞う。教官のようになりたいという願望を叶える為に。

そして、『教官の経歴に泥を塗った織斑一夏から教官を取り戻しドイツに連れ戻す』——そんな子供じみた、身勝手な願望のために、IS学園にやって来た。

彼女の育ちが違えば、ここまでエゴに偏った人間にはならなかったかも知れない。

だが、それに滑車を掛けたのが、織斑千冬と、彼女に憧れた他でもない自分だとは——気付く事すら、なかった。

(ふん、一度戦ったが織斑一夏とはあの程度だったからな……あの程度なら、いつでもひねり潰せる。)

内心、ラウラは呟く。

(そういえば、あの後アリーナが使用禁止にされてしまったな……まあ、教官の手を煩わせてしまったからな……仕方無い。)

ラウラがそう自己解決した——直後、けたたましいアラーム音と共に『警告：長距離ロックオン』と網膜に投影される。

「なっ…!?？」

ラウラは…いや、ラウラ以外の2人も絶句する。

「レーダー照射のようですが…照射源に機影、ありません!!？」
部下の女が叫ぶ。

そしてその女の言う通り、確かにハイパーセンサーには機影らしきものが『一切』映っていない。

「バカな…!?？」

ラウラは思わず絶句する。

普通ならあり得ない。

ハイパーセンサーの索敵網をかくぐるなど、普通なら不可能——
——あり得ない筈だった——。

(なら一体誰が…何を使ってハイパーセンサーに映らないようにロックオンしている…!??)

ラウラの思考が固まってしまう。

「た、隊長！早く散開を——」

先程、ラウラに撃を飛ばされていた部下の女がラウラに叫びながら上申する。

——が、それを遮って、低い、それでいながら澄んだ声が響いた。

『こちらシユヴァルツ・リード。カニンヒエン各機、聴こえているならそのままでいろ!!??』

(第666戦術機中隊!??)

ラウラは通信ウインドウに映った、先日の小競り合いの場に現れた指揮官の顔を見て、驚く。

後方を見れば、海面ストレスを匍匐飛行するMEF-2020
【ヴァイツァヒンメル】6機編隊が、視認できた。

「ど、どういうことですか!? 私達に死ねと——」

第666戦術機中隊の指揮官——
——ユリアの命令に思わず部下の1人が反抗する。

だがそれをユリアは落ち着いた声音で受け流して言う。

『落ち着け、あれは友軍機だ。笑い物にされたくなければ、そのまま』

いろ。』

ユリアが冷静に言い放つ。

『——接近中のアンノウン（敵味方識別不明機）に告げる——
——今なら手荒い歓迎の挨拶の冗談と受け取ってやる。さもなければ、貴国に対してドイツ政府を通して正式に抗議すると共に訓練妨害の賠償を請求させてもらう！』

「冗談だと——？」

ラウラが屈辱に顔を歪めながら、呟く。

ユリアの警告と同時にレーダー照射が止み、黒兎隊各機のロックオン警報も解除される。

だが、そこまでしてもロックオンしてきた存在はハイパーセンサーに映らなかった。

——瞬間、唐突にハイパーセンサーのウインドウに4機のグリップ（光点）が網膜に投影される。

（速い——！?？）

ラウラは思わず驚愕する。

そのアンノウンの速度は、米軍の軍用IS【銀の福音】より、僅かだが、速い——だが、姿が見えない。

思わずラウラは周りを見渡した。

瞬間——自分たちに、真上から強力な風圧が襲い掛かる。

一瞬瞼を閉じかけて——僅かに開いていた瞼の隙間から見えたその光景に驚愕する。

何も無かった筈の場所——そこが急に歪んだかと思えば、フォレストグリーンの装甲がプラズマを纏いながら、突然現れる——

——そして、その機体の全身が現れる。

熱光学迷彩——世界でもまだ開発が進んでいない技術だった。

全身の所々に鋭角的で凶暴そうなユニットを持つ、複眼の機体を見て——ラウラは、絶句する。

「MF-222 プラプターII……!?!? アメリカ軍の、ステルス戦術機……!!?!」

それは、今まで資料でしか、見たことがない機体だった。

資料によれば、対人類戦に特化した戦術機で、元はと言えば近年アメリカで起きているテロや中東での紛争への投入を行ったり、対ISでは、ラプターのライバル候補はあの【銀の福音】——と言われるほどに強力な機体、と記されていた。

ラプター4機は一瞬、黒兎隊を一瞥するようにメインカメラを向けたが、直ぐに向き直ると黒兎隊を尻目にその空域から離脱して行った。

「米軍め……我々をコケにして……!!?」

黒兎隊の1人が忌々しげに漏らす。

「——それにしても、熱光学迷彩搭載型のステルス戦術機つて……まったく、贅沢なモン作るわねえ……。」

ユリアが素の声で、呆れるように言う。

だがすぐに指揮官然とした声音に戻る。

何故なら——

「た、隊長！アレを!!?」

黒兎隊の1人が、ラプターの去って行った方角を見たからだ。

そこには——鉄の牙城群が、有ったからだ。

普段は風光明媚なはずのその海域はまるで鋼鉄で満たされたように、艦艇——それも、駆逐艦や巡洋艦、空母のみならず戦艦までもが——IS学園目指して、進撃していた。

データリンクしている艦艇のクラス名と艦名が、ハイパーセンサーのウィンドウに投影される。

「日本の海上自衛隊、【あいづ型護衛艦】に、【こんごう型イージス艦】に……【やまと型護衛艦】……!!?そ、それに……米海軍【アーレイバーク級イージス艦】、【アイオワ級戦艦】に、【キティホーク級空母】まで!!?」

思わず、ユリアとエミリアを除く黒兎隊と第666戦術機中隊の面々は、その景色に圧倒されていた。

「ツ……どうなっている!!? シュヴァルツ・リード!!?」

ラウラがユリアに噛み付く。

『…どう、とは？』

「どういう状況か教えろと言っている!!？」

思わずラウラは声を荒げる。

そんなラウラを通信ウィンドウ越しに一瞥し、ユリアは、

『見て、聞いての通りだ——総員に通達する。』

凜として宣告した。

『これより我々は、IS学園の警備任務を解任——日米臨時編成軍指揮下のもと、IS学園の監視任務に移行する!』

—————

ジェラルド・R・フォード級空母【ジョン・F・ケネディ】

甲板上では艦載戦闘機【F-35ライトニングII】が並び、先程IS学園の守備システムが如何なものか偵察するついでに黒兎隊に手荒い挨拶をしたラプター4機が甲板上に着艦し、甲板作業員が忙しく駆け回っている。

そこに一機のペイブローウ輸送ヘリコプターが、ローター音を鳴らし、着艦する。

『…ふう…』

そして、そのペイブローウから、元・福音部隊のヘックス・オブラインがタラップを鳴らして機体から、降りてくる。

その彼女に金髪の女——CIA潜入捜査官スコール・ミューゼルが話しかける。

「わざわざご苦労様。…ニューヨークでは活躍したそうね？」
につこりと微笑みながら言う。

「…それは嫌みかしら？」

「まさか。ペンタゴンから女尊男卑主義者共を一掃する要因を作ってくれた、お礼よ。」

先のラドンとのニューヨーク空戦で、支援用フリゲート艦が轟沈した時点で、ペンタゴンから直接撤退命令が出た。

だがすぐにペンタゴンの女尊男卑主義者が取り消すよう求め、作戦室で乱闘沙汰に発展――。

その間ヘックスが福音部隊に撤退を申告したが――。

『黙れ！裏切り者が!!？ 私たちはまだやれる――!!？』

そう、一蹴されてしまった。

だからヘックスは彼女らを見捨ててペンタゴンの命令に従い、撤退した――つまり、福音部隊の残りを見捨てたということになる。

『あたし達を盾にして逃げるつもり!!？』

『この、裏切り者おお!!？』

その時に、そんな断末魔が聞こえてきた。

結果、生き残ったのはヘックスと彼女の意図に気付いて彼女に追隨した1人だけ――。

他は、ラドンにやられた。

だが、帰投後、ヘックスに向けられたのは叱責ではなく、賞賛だった。

『よく命令に従ってくれた。』――と。

「別に、私は命令に従っただけですよ。スコール。」

ヘックスは興味なさそうに応える。

「…ラドンは？」

ヘックスはスコールに聴く。

「アフリカに帰ったそうよ。ひとまずは安泰ね。」

スコールが世間話をするように言う。

その、瞬間。

「ヘーックス!!？」

「わぷっ!!？」

ヘックスの背後から衛士強化装備を身に付けた金髪の女性が飛びかかるように、首に腕をかけた。

「ひっさしぶりー!」

「…ナターシャ…：貴女ねえ…。」

ヘックスは、忌々しげにそのハイテンションな元・福音パイロットだった衛士——ナターシャ・ファイルス中尉を見る。

「あらあら、本当に仲が良いのね〜。」

スコールが笑いながら言う。

「誰が——…。」

「でしよう?…なのにヘックスったら素直じゃなくてねー…。」

「——もういい。…じゃあ私はもう行きます。」

呆れながら、ヘックスはそそくさと足早に艦橋の方へ向かって歩いて行った。

「ちよーっと、からかい過ぎたかしら?…ま、ああいうトコが可愛いんだけどね。」

ナターシャはそう笑いながら、ヘックスの後を追って艦橋の方へ向かって、行った。

一人残されたスコールは、IS学園の方を向く。

「世界最強の兵器とパイロットを育成する組織であり、世界最強たる織斑千冬を通じてIS委員会や女尊男卑主義者、天災の息がかかった場所——IS学園、ね。」

ふと呟く。

スコールがIS学園に来た理由は、学園の実態と、ある人物の素性を暴くため——。

「会うのが楽しみねえ。」

スコールの口端が頬を引き裂くように、つり上がる。

「あれを世界最強と言わしめて英雄まがいの存在に仕立て上げた美談がどれだけの嘘と罪で塗り固められているか——それを暴けると思うと楽しみで仕方ないわ。」

スコールの目が獲物を前にして勝ち誇った蛇のように鋭くなる。

加虐の衝動が全身を支配する。

そう、我々は近いうちに奴らを——ISを根こそぎにしな

ければならない。

人類と、我々の祖国・アメリカの未来のために――。



IS学園

織斑千冬は廊下を歩いていた。

ふと窓の外を見れば目に映るのは数多の艦艇群――日米臨時編成軍の艦艇だった。

――数時間前、日本政府は学園の警備体制強化を国連に要請。

それにアメリカが応じ、日米安全保障条約に則り在日米軍、本土米軍を派遣。

日本政府は国連租借地とはいえ仮にも自国領土であるため自衛隊に防衛出動を要請し、在日米軍、本土米軍と合流。

日米臨時編成軍を組織し、学園を警備――という名目で監視していた。

さらに先程学園守備――現在は監視だが――を
担当しているドイツ軍第666戦術機中隊の国防省本部付き将校の
エミリア・カレル中尉から、イギリス、ドイツ、ポーランド、フランス軍の予備戦力から成る欧州連合極東派遣軍も行動を開始しており、現在先遣艦隊が北海から北極海、ベーリング海を経由して、日本に向かっている――と連絡を受けていた。

「はあ……」

千冬は、ため息を吐く。

（世界から力が集まってきている――それも私たちを監視する為の――私たちを世界の異物と見るように――
……）

千冬は内心呟く。

（確かに、IS委員会の命令に従った私に問題はあるだろう。……だ

が、私が従わねば一夏が委員会や利権団体の息がかかった人間に――
――…)

瞬間、千冬の脳裏にあの時の光景がフラッシュバックする。

2年前、モンド・グロツソにて一夏が利権団体の息がかかった集団に拉致され、ドイツ軍の協力を得て救援に向かったものの、流れ弾が頭部に当たり、一夏が重傷を負った光景を――。

(一夏がもう二度とあんな目にあつて欲しくないから、あんな光景を見たくないから。私はIS学園の教員になって、一夏から利権団体や委員会の息がかかった人間を遠ざけようとした――)

私のやって来た事は正しいんだ。

そう肯定しかける。

だが、もう一人の自分がそれを否定する。

ならば何故、私は委員会の傀儡になつている？

何故守るべき生徒を切り捨てる命令を受諾してしまった？

それは誰のために？

そう、自問する。

答えが、出ない。

その問題から目をそらし続けてきたから、その問題に対する答えが出ない。

いや、もうわかつてはいる。

だがそれに結論が至つてしまえば私は人間として――社
会不適合な人間だと、認知してしまうから。

だから認めたくない。

認めてしまえばそこで私たちは――でも、認めなければも
う後戻りできないのも、分かっている。

私は、どうするべきか――結論が、出ない。

(どうすれば、いい――?)

思わず、継るように自問する。

誰かが聞いてくれる訳でもない。

誰かが導いてくれる訳でもない。

でもそうでもしなければどうにかなつてしまひそうで――

「織斑先生」

ふと、凜とした声が千冬の耳に入ってきた。

千冬はそちらを向く。

そこには、特務自衛隊の制服を身に纏った、神宮司まりも三佐がいた。

墨田駐屯地で戦術機の教導隊に属しており、教官を務めた事が幾度かある——千冬も資料を読んだため、彼女の過去は知らされている限りではおおよそ知っていた。

「少しお伺いしたい事があるのですが——よろしいですか？」

まりもが言う。

「構いませんが…何でしょうか？」

また、処遇関連だろう…そう思いながらも、千冬は応じる。

「先のシールドバリア破壊の件…何故、被害者を軟禁し、加害者を放免しているのか…それについて、教えていただけますか？」

「…適切な処置をとったままでです。」

IS委員会に、『先の件に関して問われれば、そう答えろ』——

——そう言われた答弁をする。

「…——それで貴女は納得しているのか？」

瞬間、まりものその問いに、千冬は揺すぶられる。

IS委員会の命令に従っただけというのを見透かされたからではない。

どの教師も生徒も自分の答弁に疑問を抱き、問いかけて等こなかったからだ。

それだけではない。その命令にお前は納得しているのか——
——自分が今最も悩まされている事を問い詰められたから——
——。

「…どういう、意味でしょうか？」

僅かに震える声音で聴く。

「委員会のイヌに成り下がって、平気で他人を犠牲にする——
—そんなやり方に納得しているのか？」と聴いている。」

見透かすように、蔑むような瞳で射抜くように千冬を見ながら、ま
りもは言う。

「…私の家族を——一夏を委員会や女権の連中から守るため
にやった事です。それに、学園の生徒やIS乗りの期待にも応えなく
てはならない…だから私は、そのやり方に従ったんです。」

千冬はやはり完璧人間を装ったまま、応える。

「…なるほど。」

やっと止まった。

内心千冬は安堵すると共に僅かに罪悪感に苛まれる。

今の言葉は彼女との討論を終わらせるために仕方なく言った——

——だが同時に、自分が最低な行為に手を染めたことに、改めて
自身の浅ましさと卑怯さを、呪う。

「…だが私は貴女の言い訳を聞きたいわけではない。」

「ッ———!!？」

瞬間、まりもが放った低く、鋭い声に千冬は身を強張らせる。

「納得しているのか、否か…私が聴きたかったのはそれです。」

断固として聞くまで退かない態度——しかも、やはり鋭い
視線を千冬に対して見透かすように向けている。

「そ、れは———!…」

口ごもってしまう。

今、千冬が立たされているのは分岐点。

委員会の傀儡になり続けて使い潰される道と、理性と自己意識を
持って傀儡から脱却する道の2つ。

委員会の傀儡になり続ける道は、確かに今のまま一夏を守れるだろ
う。

だが待っているのは破滅———。

理性と自己意識を選べば、今よりもより一層厳しい立場に立たさ
れ、一夏を守るどころか自身の立場され、危うくする。

だな僅かながら、未来はある———。

選ぶのは、千冬。

自らの意思で自らの道を選択する。

そこに、引くという選択肢はない——。

前に進むしか、ない。

だから、千冬は——。

「……………納得……………出来て、……………いません。」

理性と自己意識を選んだ。

「……………そうか。」

すると、まりもは少し表情を柔らかくして言う。

「…私は…どうするべき、なんでしょうか…?」

千冬がポツリと呟く。

それに、まりもは突き放すように言う。

「…それは分からない。貴女の事を私に決める権利など、無いのだから。」

「…あ」

「…だが、貴女にまだ自ら選択する意思があるなら——他人を思いやろうとする人間性があるなら——まずは負傷した生徒に会うべきでは無いか?」

「貴女の処遇は委員会が言い渡すでしょう…とはいえ、世界最強であり、天災と繋がりががあるが故に、厳罰には処されないでしょう。」

まりもの言葉は事実だった。

千冬はその言葉のひとつひとつに心臓を貫かれるような、錯覚を覚える。

「…だがいつまでも連中に縋り付いていては貴女自身が手遅れになる——そうなる前に、マシンな手を打つ事を私は推奨します。」

そう言うと、まりもは踵を返して廊下を歩いて行った。

残された千冬は、ただ今後自らがどうすべきか——決断を迫られる事と、なっていた。

「教官!!?」

ふと瞬間、聞き慣れた声——ラウラが千冬を呼び止めた。

そして、ラウラが駆け寄って来る。

「お願いが、お願いがあります!」

「なんだ?」

千冬は思わず、かつての教え子——ラウラの前で完璧人間を装ってしまう。

「どうか、どうかドイツに戻って来てください!!?」

「ラウラ。」

「教官!!?どうか…」

「……私は今はIS学園の教師だ。教官ではない。」

「そんな……お願いします!!?こんな極東で教官の教えについて行けるものなど1人もおりません!!?ですからどうか——」

ラウラが言う。

内容はメチャクチャだ。

だがそれが彼女なりのアプローチなのだろう。

それを聴いているのが千冬だけなら、どれだけ良かったか——

「……ふざけているのか? 貴様は。」

ふとラウラの後方から声が響く。

振り返るとそこには栗色の髪の毛、666のロゴマークが付けられたドイツ軍のBDUに身を包んだ女性士官——ユリアがいた。

それもかなり怒気に満ちた目を、している。

「ッ——貴様には関係な——」

ラウラが言う。

だがそれを遮って、

「甘ったれるのもいい加減にしろ、ボーデビツヒ少佐。」
冷たく、蔑むように言い放つ。

それにラウラは反射的に噛み付く。

「私が——私が、甘えているだど?」

「——そうだ、 “ 貴様は甘えている ” 。」

ユリアが氷のように冷たい声音で言う。

「——先のアリーナでの騒ぎ：何故、他人を巻き込むような騒ぎにした？」

「織斑一夏を誘き出し、奴の腕を確かめるためだ！」

「その結果、4人の重傷者を出しているが？」

「私の知ったことではない!!？」

群れる事しかできない甘ちゃん共のことなんぞ知ったものか——

——ラウラの瞳がユリアに対して、言外に訴える。

貴様ごときにどう思われようと、知ったことではない——
と付け足して。

だが、ユリアは許し難い何かを見つけたような視線をラウラに突き刺しながら、きつい口調で言う。

「…それで？」

ユリアは瞳に炎を見宿しながら聴く。

「貴様はその身勝手な行為をして、何を得た？」

「…ツ!!?……そ、れは……」

「…では質問を変えよう。先程織斑先生を連れ帰るつもりでいたようだが…どうやって、連れ帰るつもりだったのだ？」

「決まっているだろう!!?だからこうして説得を——」

「…それは、外交官の仕事だという事を理解しているのか？」

「そんなことは関係ない！教官に私は育てられた————それで、充分だ!!?」

ラウラが叫ぶ。

瞬間、堪忍袋の尾が切れて、ユリアは冷静さを保っていたその顔を烈火に染め、怒声を放った。

「それを思い上がりと言うのだ！ラウラ・ボーデビツヒ!!?」

怒鳴られると思ひもしなかったラウラは思わず、身を強張らせる。

ラウラの後ろの千冬も、虚を突かれていた。

「貴様一人で、一体何ができる？ドイツ国家代表候補生？ブリュンヒルデから教わった？その程度のこと、本気で全てを成し得られると思っているのか!!?だとしたら貴様はただの大馬鹿者だ!!?」

「…だ、だまれ！私は…」

ラウラが反論しようとするが、ユリアはラウラに対してその隙を与えない。

「先のアリーナの件に関しても同様だ。貴様が馬鹿な真似をしなければ、再起不能となった生徒の将来が潰える事も無かったのだぞ！貴様にとっては手段の為の消耗品だろうが、奪われた者からすれば、それが全てだ！クソのようなプライドと身勝手極まりない目的は守れて、何故他人は巻き込まぬように考えない!?？」

「……ッ！」

ラウラは何か言葉を紡ごうとする。

だが、ユリアの言葉のひとつひとつがラウラに直撃し脳震盪のような目眩を覚えていた。

そこにユリアは追い打ちを掛けるように、言い放った。

「貴様は訳知り顔で現実を理解したつもりになっている捻くれたただの “ 子供 ” だ！どれだけ戦技に優れているかが、己の私欲にしか使わない貴様に、 “ 軍人 ” を名乗る資格など無い!!？」

ユリアのその言葉は、ラウラに深刻なダメージを負わせる。

世界最強、ブリュンヒルデである織斑千冬から指導を受け、黒兎隊を率いるドイツ最強の I S 部隊を任され、もう怖いものなど無くなっている、千冬のように完璧人間になろうとしたラウラに突き付けられた、捻くれた子供と軍人と名乗る資格がない、という二言。

ラウラの精神的支柱になっていたその存在を粉碎するには、充分過ぎる口撃だった。

「…ちが、う…私は…私は……ッ!!？」

「ラウラ!!？」

思わず、ラウラは廊下を走って、その場から去ってしまう。

千冬の制止すら、耳に届いていなかった。

ユリアに突き付けられた現実から逃げるように、自身の無垢な心を守ろうと自室に逃げ込み、ベッドに沈む――。

「ちがう…私は…私は…ッ、私……はあ…」

現実から逃げる為に、うわ言を呟き、ベッドにうずくまりながら、ラ

ウラは涙を流した。

EP-20 暗赤ノ巨銃（スピット・エビラ）（挿絵あり）

IS学園・保健室

そこには、入院および軟禁状態の鏡ナギの見舞いのためにやって来ていた鷹月と立花がいた。

「…ホント…圧巻、としか言いようがないわね…この景色…。」

ふと、窓の外を見て鷹月が言う。

見渡す限り、学園の沿岸から遠く水平線は鋼鉄の塊——艦艇群に埋め尽くされている。

日本が四方を海に囲まれた国家であるが故に海上戦力が如何に強大で、アメリカが如何に馬鹿馬鹿しい程の国力と戦力を有しているかを見せつけられているような景色だった。

——まるで、そこにひとつの国家が存在し、それが海の上を移動しているような錯覚すら覚える。

「…あ、また新しく艦が来た。」

ふと艦隊を見ていた立花が言う。

新たに艦隊に加わった艦は軽空母ほどの大きさの全通甲板型で艦首には182の数字が刻まれた艦艇と、前部甲板に2門の主砲とVL S機構を持ち後部にはランチャーらしき機構と飛行甲板を備え143の数字が艦首に刻まれた艦艇だった。

「…多分、横須賀の【ひゅうが型護衛艦いせ】と舞鶴の【改しらね型護衛艦しらね】ね…本当にご苦労様だわ…。」

立花は感謝するように言う。

時折、艦隊上空を陸自の武装ヘリや海自の哨戒ヘリ、戦闘機や戦術機が飛び交っていた。

ふと、学園のすぐ近くを武装ヘリが飛ぶ。

威圧を兼ねた調整飛行なのか、そのまま遠ざかって行った。

「あれは…コブラ対戦車ヘリ…だっけ？」

立花がふと、呟く。

「ううん、違うわ。あれは、【AH64Dアパッチ・ロングボウ対戦車ヘリ】よ。」

鷹月が言う。

「どう違うの?」

ナギが鷹月に、聴く。

「ローターの上にレドームが付いてたでしょ?あれがロングボウの特徴なの。それに機首先端にもレーザーパッドが付いてたし、機首下部の機関砲がコブラはガトリングなのに対してロングボウは単装機関砲だから。」

「そうなんだ…そんなに違うんだね…」

ナギが驚くように呟く。

「まあ、あれ1機100億円越えでさ…12機しか調達してないのよ、陸自は。」

鷹月が言うと、

「それを引っ張りだして来たって事は——陸自の本気も伺える?」

立花が察して、続くように聴く。

「ええ…。まあ、アメリカ軍もハイパーセンサーでも探知し難いステルス能力を持っていて、コスパが馬鹿にならない【戦術機ラプター】なんて持ってきてるあたり、あちらさんの本気も伺えるわ…。」

鷹月が見透かすように、言う。

ふう、とため息を吐くと鷹月はナギの隣にパイプ椅子を置いて、そこに座る。

「多分、ロクでもない政治抗争とかが起きてるんでしようね…。」

うんざりした声音で、鷹月が言う。

「…だよね…ねえ、ふと思っただけだよ。」

立花がふと言う。

「ナギの処遇…ホントに織斑先生が下したのかな…?」

その言葉に2人は驚き、思わず、問い返す。

「ど…どういう、意味よ…?」

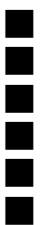
「…確かに織斑先生は、体罰沙汰な事をするけど…それでもあんなメ

チャクチャな処遇を下すような、人間の風上にも置けない下衆には、どうしても私には思えないの……もしそうなら、彼女はもつと非道に走っているはず——。」

立花が言うのと、鷹月とナギは納得する。

「…何か、織斑先生を——世界最強を、影から傀儡にしている存在がいるような気が、しなくもないのよ——。」

果たして立花のその考察は、的を射ていた——。



八広駐屯地・大会議室

灯りが落とされた部屋で、プロジェクターが投影され、長机に向かつてパイプ椅子に腰掛けた陸海空特自衛隊、在日米軍、派遣本土米軍の将兵らとモナーク機関の機関員らが、プロジェクターに映し出されてきた映像——ラドンと福音部隊の戦闘記録映像を見ていた。

福音によるシルバール——対装甲鉄鋼散弾による掃射を難なく躲し、対装甲鉄鋼散弾はあらぬ方向——ニューヨーク市街のビルの外壁を抉ってしまうという状況——。

そしてラドンが不意に工事中のビルすれすれに交差点を曲がると、福音部隊は倒壊してきた工事中のビルに指揮官機が潰され一時混乱——その隙にラドンは福音部隊の背後に回り込み強襲——。

福音部隊は迫り来るラドンにバックブーストで後退しながら対抗するために対装甲鉄鋼散弾を連射し、それがラドンに命中するが僅かに皮膚を抉る程度——。

さらにラドンが加速した際に爆発的に熱を放ちながら福音部隊に急接近——福音部隊の大半は地面すれすれまで急降下することによってラドンを躲す——が、反応が遅れた1機がラドンのソ

ニックブームによる衝撃波と爆発的な熱で爆散――。

直後、ハドソンリバーに展開していた支援フリゲート艦によるミサイル攻撃――だが、ラドンのソニックブームと爆発的な熱でミサイルはラドンを眼前にして次々と誤爆――。

さらにラドンは口から熱線――ウラニウム熱線を穿ち、支援フリゲート艦を撃沈――。

ペンタゴンから直接の撤退命令を受け、隊の1人が撤退を進言するが、他の者は戦闘を継続しようとし――撤退を進言した隊員と彼女の意図に気付いた隊員が他の隊員を見捨てる形でペンタゴンからの命令に従い撤退――数時間後、ラドンがアフリカに帰るべく大西洋に向けて飛翔し――映像が終わった。

大会議室内は静寂に包まれていた。

――無理もないだろう。世界最強の兵器が、ああも簡単に落とされたのだから。

「――家城一尉、その後のラドンの行方は？」

静寂を破るように、光が落ち着いた声音で聴く。

「現在は…アフリカ・カメルーンに居ます。片桐一佐。」

プロジェクト脇に控えていたモニター機関への派遣自衛官――

――家城燈一尉が応える。

それで一同はこれ以上ニューヨークに被害が出ることがないという事が分かり、僅かに安堵すると共に日本に近づいた――という事実には危機感を抱く。

「…き、きつと、福音の調子が悪かっただけよ。下賤な男どもが整備したから整備不良とか起こしただけで…」

「そ、そうよね！だって最強の兵器であるISが負けるはずないし…」

「そ、そうよね！あたしたちならワンパンだし。」

そんな中で米軍のIS部隊のパイロットたちはまるで他人事のように、あまつさえ男性の整備不良が原因で福音が殺られたんだと、笑って言う。

室内の指令本部勤務将校の一部——女尊男卑思想の将校も、釣られて笑う。

——全員がそうではないが。

だが、ロリシカなどへの派遣経験や巨大生物との対峙経験のある戦術機指揮官の将校は、男性も女性も笑わないし黙っている。

いや寧ろ、汚物を見るように不愉快な顔をしていた。

「……取り敢えず、質問をしても良いか？家城一尉。」

轡木誠特将が言つて、燈が有難いような表情をする。

「あ、はい。何でしょうか、轡木特将？」

「現時点でヤツに——ラドンに対抗可能な兵器はあるか？」

誠の質問に、燈は思わず強張る。

それは下手をすればIS派のみならず、戦術機派まで敵に回しかねないものだったから。

だが、燈は勇気を振り絞り、口にした。

「——おそらく……ほとんどありません。」

燈の言葉にISパイロットは絶句し、バルゴンやギャオス、その他巨大生物の脅威を知っている戦術機パイロットたちは、半ば分かっていたような顔をする。

「——最高速度はマツハ6.2を誇り、最高速飛行時は体温が爆発的に上昇し、さらにビルを容易く崩すほどの衝撃波を放つ——

——足の遅い地上戦力はおろか、航空機やIS、戦術機も容易く落とせてしまいう上にウラニウムを用いた熱線はシミュレーションではバルゴンの生体レーザーに耐えられる海上自衛隊の【大和型戦艦】、【紀伊型戦艦】やアメリカ海軍の【アイオワ級戦艦】、【モンタナ級戦艦】の《耐熱耐弾複合装甲》すら5秒と持たずに貫く——

——そんなバケモノに敵う兵器を、我々はまだ—— “ 実戦配備 “ できていません。」

燈は何処か悔しそうに、だが淡々と、冷静に、現状を説明する。

「——さらに言えば、脅威はラドンのみではない……というものが、問題です。」

燈は言いながら、手元のコンソールを操作——プロジェク

ターに世界地図が投影される。

何の変哲もない、ただの世界地図

だが、ロリシカ中央部、樺太、ウクライナ東部、カメルーン、アイスランド、ベーリング海に赤いグリップ（光点）が投影されている。他にも日本・熊本および山梨、中国・上海、フィリピン、ポリネシア、ラオス、中央太平洋に黄色いグリップ（光点）が投影されている。さらにミクロネシア連邦・インフアント島、ロリシカ・旧ネリユングリ、ベーリング海に緑色のグリップ（光点）が投影されていた――

「赤いグリップ（光点）が振られた地域は現在敵対中、あるいは敵性種と断定された巨大生物が、黄色いグリップ（光点）が振られた地域は現在調査中の不明種、出現、活動開始の可能性がある休眠中の巨大生物が、緑色のグリップ（光点）が振られた地域は人類に対して中立種と断定された巨大生物が生息している地域です。」

燈が言った瞬間、大会議室がどよめく。

ラドンやバルゴン、ギャオス陸棲種に関しては報道で知っていたが、実際はこんなにも巨大生物がいる――という現実を叩きつけられたのだから、当たり前だろう。

「ロリシカのバルゴン、ウクライナのギャオス陸棲種は数が多くとも、1体1体は弱いため、どうにかかりますが……それ以外の個体は、一部を除いて、通常兵器では太刀打ちできません。」

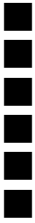
燈のその発言で、大会議室にいるメンバーはさらに戦慄する。

光と誠は、さして戦慄したりしておらず、「まあ、そうなるな。」とでも言うかのように冷めた顔をしていた。

もつとも、内心は焦燥に満ちているのだが。

（彼奴を使う事になるが……果たして、千尋と彼奴は……納得しないな……私達の都合でああなる事など……良いわけが……）

光は内心、葛藤に満ちた感情を孕みながら、思わず呟いた。



ベーリング海・欧州連合極東派遣軍艦隊

僅かに荒れている海上を、鋼鉄の牙城群が移動していた。

空母2隻、戦術機揚陸艦6隻、戦艦2隻、フリゲート艦6隻、駆逐艦4隻、コルベット艦2隻、補給艦6隻——東京湾の日米臨

時編成軍艦隊にも勝らずとも劣らぬ戦力を有する艦隊が、日米臨時編成軍艦隊との合流集結地点——東京湾内IS学園近海目指して、荒波を粉碎しながら突き進んでいた。

その艦隊の上は哨戒ヘリが飛び交っていた。それも、1機や2機ではなく、10機近くが対潜哨戒を行っていた。

——最も、潜水艦を警戒しているわけでは無いのだが。

だが、だからと言って気が抜ける相手ではない。

いや、むしろ気を抜くなど論外と言えるだろう。

何故ならこの海域の深淵に潜むモノは潜水艦などを遥かに超えるバケモノだから——。

クイーン・エリザベス級改装空母4番艦【HMS アーク・ロイヤル】

イギリス海軍が保有する、ツイン・アイランドという通常の艦橋と航空管制専用のコントロールタワーの為であると同時に甲板スペースを広げると共に甲板上の乱気流発生を防ぐ効果を持つ2つの艦橋構造物とスキージャンプ型の飛行甲板を持つ6万t級の戦術機航空母艦——それが、欧州連合極東派遣軍艦隊の旗艦だった。

アーク・ロイヤルの甲板上にはアメリカ軍からライセンス生産した艦載戦闘機【F-35B ライトニングII】や艦載戦闘機【MEF-2020タイフーン】、数少ない艦載型IS【サイレント・ゼフィルス】が甲板上で待機しており、その近くにはパイロットが何時でもスクランブル発進出来るように待機しており、作業員が搭載火器やエンジン

部分の最終確認を行っている。

度々、対潜哨戒任務から給油の為にリンクスHMA・8哨戒ヘリが着艦、甲板作業員が忙しく駆け回り、怒号が飛ぶ。

そして着艦したばかりの哨戒ヘリの代わりに別の哨戒ヘリが発艦し、対潜哨戒任務に移る――。

それをオルコット家に仕えるセシリアの専属メイド兼メイド長であるチエルシー・ブランケットはそれらの光景をアーク・ロイヤルの艦橋デツキから見ていた。

彼女はイギリス政府からの要請で、オルコット家の次期当主――

――すなわちセシリアに、“ある機体”を渡すために“ある機体”と共にこの、空母アーク・ロイヤルに乗艦していた。

ちなみにチエルシーは今、メイド服ではなく、イギリス海軍のBDUにコートを着込んでいた。

理由は至極単純――目立ち過ぎるから……というのもあるが、北半球の、それも北極に近い位置にあるベーリング海は一年を通して気温が0度近くあるいは氷点下という極寒。

6月になって暖かくはなってきたものの、ベーリング海に至るまでに通った北海や北極海は未だに猛吹雪が吹き荒れていて、雪や雹が窓を叩いていた時の音が未だに鼓膜に染み付いている。

さらにベーリング海も未だに底冷えする寒さだ。

空調設備の充実した艦内は20度前後に保たれているが、訓練を受けた兵士ではない一般人のチエルシーにとっては肌寒いことは変わりなく、以前1人の下士官から手渡されたコートは大事なゲストが風邪をひかないように気遣ってくれたアーク・ロイヤル艦長の英国紳士としての粋なはからいだった。

……とはいっても、やっぱり……。

首元にかかるような息苦しさを覚えて、チエルシーは崩れた襟元を整える。

(やはり、慣れませんか……服の感触といい、この景色といい……)

親切心にあやかっただけで着用し、寒さを防ぐことはできたものの、普段はメイド服しか身を包むことがなく、またそれに慣れたが故に、コ―

トのごわごわした感触やBDUの繊維が肌に触れて違和感が強く、着心地は決して良いとは言えなかった。

そして何より、目に入って来る景色に慣れない。

見渡す限り水平線まで灰色の軍艦で溢れているのだ。

オルコット家の邸宅でメイド業をしているチエルシーからしたら全く無縁であるが故に違和感が拭えなかった。

BDUの上からさらにコートを羽織っているから周りに溶け込んでいるとはいえ、どうしても場違いな気持ちがチエルシーの中にあつた。

(場違いにも程がありますね。一介のメイドが軍艦——それも艦隊旗艦に乗ってるだなんて——)

思わず、チエルシーはそのギャップに苦笑いしてしまう。

——直後。

凄まじい轟音——同時に艦隊外縁から、空に向けて水柱が高く高く、上がる。

同時に、艦隊の各艦から響き渡る総員戦闘配置に着く事を意味する、けたたましく響き渡るサイレンの音——。

『総員第2種戦闘配置——繰り返す、総員第2種戦闘配置——』

アーク・ロイヤルの艦内スピーカーや艦上スピーカーからもアナウンスが流れる。

第2種戦闘配置——チエルシーは知らないが、対巨大生物戦を意味するものだった。

『ポーランド海軍コルベット艦シフィノウイシチェ轟沈!』

艦橋内のオペレーターが焦燥を孕んだ声音で状況を報告する。

瞬間、さらに大きな水柱が立ち上がる——。

「キユイイイエエエツ!!?」

それと同時に、奇妙な——不気味さを孕んだ、空気を震わせるくらいに甲高い咆哮が、上がる。

刺々しい暗赤色の甲殻を纏い、巨大なハサミを両手に持ち、触角らしきものと顔にツノらしき突起と節足動物のように節を持ち、黒い目

をギョロリとさせている怪物——【スピット・エビラ】が、海中から凄まじい水飛沫と共に姿を現した。

「くそッ！なんでこんなところに…マダム、ここはあのエビ野郎の縄張りではなかったんですか!?!」

艦橋デッキから双眼鏡でスピット・エビラを確認した水兵が、艦橋から出てきた、チエルシーと同じくアーク・ロイヤルに乗艦していたゲストである女——モナーク北米シアトル本部所属のヴィアン・グレアム博士に聴く。

スピット・エビラは1973年に南太平洋・レッチ島で確認された海棲巨大生物【エビラ】と同じ肉食性の凶暴な海棲巨大生物であり、かつて1998年にアラスカに上陸した際、撃破には至らなかったが、米軍がハサミを破壊し、その破片を回収し解析した。

——結果分かったことは、ベーリング海の固有種であったエビが廃棄物による海洋汚染で突然変異し巨大化した巨大生物——
——という事。

いかんせん破片が少なかった為わからない部分が多過ぎたのだ。

だが艦船が襲われた海域からスピット・エビラの縄張りを特定——

——ベーリング海を通る艦船に、スピット・エビラの縄張りを『原潜事故による海洋汚染のため立ち入り禁止』——として艦船が襲われないよう航路を制限していた——。

そして欧州連合極東派遣軍艦隊も衛星からのGPS誘導に従い、縄張りを5キロ近く避けてベーリング海を航行していた——
——にもかかわらず、スピット・エビラは艦隊を襲って来た。

「——考えられる理由は幾つかあります。…：衛星の誘導ミスでスピット・エビラの縄張りに突っ込んだか、スピット・エビラが縄張り内で餌となる生物が枯渴したから縄張りの外に出てきたか、もしくは——」

淡々と語りながら、理由を——正確には仮説だが、それを述べて——下を見て、一拍開けてから、呆れるように言う。

「——何処かの誰かさん——」が【レッチラクトン】から生成した、エビラは嫌がるけどスピット・エビラは逆に凶暴化する

【黄色い汁】を散布してくれたかしら?」

見ると、海面には黄色い汁が漂っている。

南洋のレッチ島で採れる、レッチラクトンという固有果実から生成したものの、だった――。

だが艦隊の艦船から散布された様子はない。

海中から湧き上がってきているようで――。

「潜水艦が散布したのか!??だが、この艦隊にここまでの汁を散布できず潜水艦は――」

水兵が困惑しながら言う。

当然、そんな潜水艦はこの艦隊にいないからだ。

「じゃあ、米軍が…?いや、だが…」

水兵が、やはり困惑しながら言う。

「航海長!やはり海図データがズレてます!!?衛星のデータに誤りが

!!?」

瞬間、艦橋室から、そんな怒号が聴こえる。

衛星のGPS誘導ミス。

黄色い汁の散布。

二重のエラーが、あった――。

前者は事故だとしても、後者は意図的としか思えない――

そして黄色い汁がスピット・エビラを凶暴化させる事を、アラスカから何度も観察したアメリカ軍が知らないはずがない。

何よりそんなマネをすれば欧州との関係を悪化させかねない。

アメリカには、デメリットしかない――。

では何処か?――ロシア軍が?

だがそれもあり得ない。

ロシア軍はロリシカ建国後から、ベーリング海から手を引いているし、経済が低迷している今、遠洋に潜水艦を派遣するメリットがない――。

米露両国にメリットがなく、派遣を要請した日本にとっても、欧州連合極東派遣軍艦隊がスピット・エビラに殺られる事にはメリットがない。

メリットがあるとなれば女尊男卑主義者、IS狂信者、そして――

「……ああ、そういう事か……!!?」

水兵が思考の果てに結論に至る。

「やってくれたな……篠ノ之東……!!?」

呻くように、呪うように、水兵は言い放った。

その瞬間、スピット・エビラがイギリス海軍デューク級フリゲート艦の一隻に接近する。

フリゲート艦はC I W Sや主砲でやられまいと必死で迎撃する――
――が、スピット・エビラはそれを嘲笑うかのように、無慈悲に右手の巨大なハサミを海上から振り上げ、フリゲート艦の艦橋に、叩きつけ――
――フリゲート艦の艦橋構造物が爆発し、火の手が上がる――。

『アイアン・デューク、爆沈!!?』

アーク・ロイヤルの艦橋クルーが悲痛な声音で報告する。

だが、アイアン・デュークのクルーには、さらなる地獄が待ち構えていた。

生き残った艦のクルーは火の手から逃げるために海に飛び込む――
――が、スピット・エビラはそれを待っていたかのように、艦のクルーが相当数海に飛び込んだ瞬間、凄まじい力で艦のクルーを海水ごと口から、吸水する。

アイアン・デュークのクルーは必死で流れに逆らって逃げようと足掻くが、1人、また1人と、なす術なくスピット・エビラの口に海水と共に飲み込まれて行く――。

そしてスピット・エビラの口に飲み込まれた彼らは、硬い牙のような突起が全周囲にある口の肉壁に押し潰されてミンチにされて――
――そのまま、胃に放り込まれる。

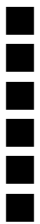
――その工程で全員が死んでいたらどれだけマシだったか――

「あゝあゝアアゝ!!?熱い!!とけ、溶ける……!だ、助け……!!?」

「溶けちまうう!!?だ、誰かだずげで、誰かア!!?」

強酸性の胃液に生きながら溶かされて行く者もいたのだ——
——それも1人だけではない。

胃液の海に、10人以上のクルーが、ミンチにされたかつてのクルーの中で助けを求める断末魔が木霊した——。
だが無情にも、それに応えてくれる者はいなかった——。



篠ノ之東のラボ

「うんうん、こんなものかな。」

東が画面に映る「ラビット級ステルス無人潜水艦ラビット6号」に汗の散布中止の指示を出す。

「ふふん、いっくんのラブラブハーレムとちーちゃんの絶対性を邪魔する輩は東さんがみんな潰しちゃうんだから!!?」

フフン、鼻笑しながら言う。

「この日の為にレッチ島まで行ってレッチラクトンを取ってきた甲斐があったよー……それにしても、やっぱゴミ共の作る衛星はザルだねえ〜アツサリとハツキング出来ちゃったよ〜。」

ニコニコと、無邪気に笑いながら言う。

「さて——次は東京湾の老朽艦共と、箒ちゃんがベツタリのこいつを殺して、いっくんと箒ちゃんをくつつけなきや——」

IS学園を包囲する日米臨時編成軍艦隊の衛星写真と、箒が千尋にくつついている写真を見ながら、狂人のような笑みを浮かべて、言う

——が、瞬間。

警報が鳴り響く。

「……」

東は驚いて、キーボードを操作して、侵入者を捉えたカメラの映像をモニターに新規ウィンドウで開いて——絶句する。

そこに映っていたのは——全身が黒いケロイドに覆われ

ていて、白骨化したようなで、それでいて炎のような形の背ビレを持ち、異形のように口に乱雑に牙が生え、何の感情も感じさせない乳白色の瞳をした、身長50メートルほどのバケモノ——【ゴジラ】が映っていた。

場所は座礁船偽装型原子力発電所——。

「な、まさか原発を狙って!??そうはさせるもんですか!」

再びキーボードを忙しく叩く。

「ゴーレムうううう!全機いい、起動おおおお!!?」

シフトキーを叩く。

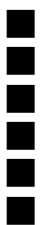
瞬間、格納庫に待機させていた、第3世代機や銀の福音と互角、あるいはそれ以上の性能を持つ無人IS【ゴーレム】20機が起動——

そして山肌に偽装させた発進用トンネルのハッチが開放され、ゴーレムが蟲の群れの如く、空に舞い上がり、ゴジラ目指して、突貫して行く。

「さあ、あのバケモノを蹴散らしなさい!!?」

東はマイク越しにゴーレムに命じ、ゴーレムのAIは東の命令を実行に移す。

そしてゴジラを見たせいとゴーレムに命令を下す時の東は興奮と焦りを孕んだ感情をしており、庭園の対人センサーが全て無力化されていることに、全く持って気付きすら、しなかった——。



ベーリング海・欧州連合極東派遣軍艦隊

東による汁の散布終了後も、スピット・エビラの猛攻は止んでいなかった。

1時間ほど、持続性があるからだ。

イギリス海軍デューク級フリゲート艦【リッチモンド】がMk. 8.

4. 5. 単装砲から主砲をスピット・エビラに向け————穿

つ。

しかし、スピット・エビラは甲殻の間から流れ出る粘質の体液が海水をジェル状に変質させて甲殻に絡めて水の鎧を形成する。

単装砲の砲弾が命令——しかし、水の鎧を僅かに抉ったただけで、スピット・エビラに対して豆鉄砲でしかない——。

それにスピット・エビラは嘲笑うかのように笑うような鳴き声を上げ、お返しと言わんばかりに口の近くにある突起——そこか
ら、先ほどアイアン・デュークのクルーを捕食する際に同時に飲み込んだ海水が収束され、凄まじい高水圧の海水をレーザーのように、穿つ。

瞬間、リッチモンドの艦橋を貫き——さらに、真下に切断するように超高水圧放射を放つ。

そして、超高水圧放射で切断された船体から浸水し、リッチモンドが転覆する。

リッチモンドの生き残ったクルーが脱出しようとするが、スピット・エビラがやはり、飲み込もうとする——が、クルーの脱出を支援するために僚艦であるフランス海軍カサール級駆逐艦「ジャン・バール」がスピット・エビラにM1e. 68CADAM100m単装速射砲を穿ち、アーク・ロイヤルの僚艦であるイギリス海軍デアリング級ミサイル駆逐艦「ドラゴン」のシルヴァーA50 VLS 48セルの内から6セルが開放され、そこから対艦ミサイルが、スピット・エビラのアウトレンジから、穿たれる。

そしてそれらがスピット・エビラに次々と命中する——
が、やはり水の鎧の所為で効果は薄い——。

だがその間リッチモンドのクルーらは、救助艇に回収される。

さらに、アーク・ロイヤルの艦載ISであるサイレント・ゼフィルスの1個飛行小隊がレーザーライフル《スターライトMark. II》をスピット・エビラに穿つ。

『支援します！撤退急いで!!?』

「ありがてえ！感謝する——!!?」

サイレント・ゼフィルス一個飛行小隊の隊長が救助艇の艇長に外部

スピーカーで言つて、艇長もサイレント・ゼフィルス部隊に応じる。
そしてフルスロットルでスピット・エビラから離れ——サ
イレント・ゼフィルス各機も全救助艇のエスコートに回り——
—スピット・エビラのレンジ外に退避する——それに怒つた
ようにスピット・エビラは甲高い耳障りな咆哮を上げ、怒りの矛先を
ジャン・ボールにぶつける——ジャン・ボールは近接迎撃用
のRAMを放ち、スピット・エビラの迎撃を開始する——が、
スピット・エビラは全く気に構わず、右手の巨大な鋏を一旦引き——
——そして鋏を開いてジャン・ボールの艦橋に殴りつけ——
——そのまま艦橋を、挟み斬る。
そして、スピット・エビラは自身に向けてミサイルが放たれた方向
——に、いた空母アーク・ロイヤルに狙いを定めた——
。

—————
アーク・ロイヤル艦橋

『リッチモンドに続きジャン・ボール轟沈!!?』

『スピット・エビラ、本艦に急速接近!!?』

やはり艦橋内部は焦燥に満ちていた。

「サイレント・ゼフィルスは——アイクラ小队は!!?」

航海長が怒鳴るように聴く。

「スターライトMark IIをもって迎撃中!!?しかし——

火力不足です!!?」

女性オペレーターが叫ぶ。

「くそっ!!?」

(艦隊密集隊形では戦術機より小回りを効くISを出して、戦術機を
格納庫に戻したのが裏目に出た——)。

思わず航海長は内心愚痴る。

チエルシーはその光景を見て、自らの死を悟る——が、し
かし。

「——大丈夫です。この辺りは彼の縄張りですから——

」。

ヴィヴィアンが言う。

するとアーク・ロイヤルの艦長————ホーンパイプを唾えた、いかにも船乗りという風貌の初老の男————がふと思いついたように言う。

「航海長、艦首の予備貯水槽はどれだけ水を貯めている？」

「は？ま、満杯ですが……？」

「よろしい。……全艦に通達。即時散開！出来るだけ本艦から離れさせてろ！本艦はバウスラスタ―起動準備!!？」

そう、命じる。

「ま、待って下さい!!？バウスラスタ―はまだ試験段階で——

——それに、間に合いません!!？」

機関長が抗議する。

バウスラスタ―————艦首の取り付けられた水流噴射推進（ポンプジェット）技術を使った急加速、緊急回避を行う為の装置で本来26ノットが限界のクイーン・エリザベス級を32ノットまで急加速させられる————だが実際に動かしたことはないため、どれだけの弊害が発生するか————それに、スピット・エビラはすぐそこまで来ていた。

準備中に取り付かれる————機関長の言い分は最もだった。

だが、艦長は紳士的な笑みを浮かべるとヴィヴィアンを見て——

「確か、ここは奴の縄張りでしたね？グレアム博士？」

「はい、艦隊は航路を修正してスピット・エビラの縄張りからすでに出ています。そして今は彼の縄張りに入っています。……他所の縄張りですピット・エビラが好き勝手やるようなら————」

瞬間、ヴィヴィアンの言葉に呼応するように、ソナーに『ソレ』が引っかかる。

「方位10—04より大型の先行物体急速接近!!？大きさは——

——全長300メートル以上!!？……ドラゴンのすぐ横で————」

瞬間、ドラゴンの左舷の海面が凄まじい水飛沫——否、水柱を上げる。

そして水柱の頂点を突き破るようにして『ソレ』が姿を現す。

蒼い鱗に覆われ、紅色の髭のようなモノを生やした——

深海魚のリユグウノツカイに似た特徴を持つが、しかしその姿は日本や中国に古来より伝わる伝説上の怪物である龍そのもので——

——。

そしてそれと同時にスピット・エビラがアーク・ロイヤルの左舷に押しかけ、左手の小さな爪で艦首を殴る。

その所為でアーク・ロイヤルの船体が右に傾く——

そしてその上を、蒼鱗の海龍——【マンダ】が飛び越える

——全長300メートル以上もの巨大が、100メートル近く空に舞い上がる——。

マンダにとっては数秒のこと。

だがアーク・ロイヤルのクルーからしたら、永遠に感じられるような一瞬で——。

マンダはその、一瞬の中で体を濡らしていた膨大な量の海水をアーク・ロイヤルの甲板に滴らせながら——自分が飛び上がった方とは正反対の場所にいた、自分の縄張りで好き勝手に暴れたスピット・エビラに——鋭く太い牙で水の鎧を——甲殻を

——貫き、肉に食らいついた。

次の瞬間、再びアーク・ロイヤル左舷で凄まじい水飛沫が上がる。マンダがスピット・エビラごと海中に飛び込んだから。

それと同時に、

「バウスラスター起動！速やかに離脱!!？」

艦長が命じる。

「了解!!？」

機関長が怒鳴るように応答し——艦首バウスラスターを

起動——直後、艦尾のスクリュー推進に加え、艦首バウストラスターのポンプ推進ジェットから大量の海水が噴射され——
——急加速。

アーク・ロイヤルはマンダとスピット・エビラがドンパチを繰り広げ、赤く紅く染まっていく海域から、離脱した——。

数日後——欧州連合極東派遣軍が日本に到着後して2日後、アラスカに体の彼方此方を噛み砕かれた甲殻の残骸を纏って、肉塊と化したエビラの頭部が漂着した。

だが、エビラの体の残りともマンダは発見されなかったらしい——。

EP—21 骸ノ鳥達（ギャオス・カダヴァー）

19年前——2002年

奈良県・南飛鳥村

緑豊かな山々に囲まれて付近を流れる川の水がせせらぐ音を立てている、ある盆地。そこには田園地帯が広がり、家屋が点在し長閑で穏やかな雰囲気を感じている村があった。

その村の中央には奈良県北部——県庁所在地である奈良市や天理市、北大阪への玄関口である王寺町などに通ずる国道が南北に走っている。

普段は観光客か道に迷ったドライバーや村の住民が自家用車で走っているが南飛鳥村自体が過疎地域であり、さらに年々人口が流出していつているが故に、1日に通る車の数はおそらく1000台にも満たない。

かつては和歌山に向かう人々がよく通っていたのだが、特急電車が開通した今となってはそちらに流れてしまい、ほとんど車が通らない。

村の国道沿いにある寂れた廃墟と化したガソリンスタンドが、まるでその象徴のようだった。

その日も村人達は国道を尻目にいつも通りに田んぼで農作業に追われていた。

今は4月——田植えの時期だからだ。

農家であるが故か、年寄りにもかかわらず全く衰えを感じさせず全身から精気が溢れ出ていて、まるでまだ若い体のままのような錯覚すら覚えさせられる雰囲気を纏って米の苗を一本一本植えて行く。

——ふと、1人が顔を上げる。

「……なんや、変な音せえへんか？」

初老の男性が言う。

それにつられて他の田植えをしていた村人も耳をすまし——

——音に気付く。

パトカーのサイレンの音だ。

だが、それだけではない。

もつと地面に響くような重低音やヘリコプターのローター音らしき音も聞こえて来る。

国道の北側——ソメイヨシノの木が作り上げた自然のトンネルの中からだ。

「なんなん？事件でも起きたん？」

齢60になる老婆が言う。

瞬間、国道北側の向こうの山から深緑色のカラーリングが施されたヘリコプターが現れる。

それと同時に奈良県警のパトカーがサイレンを鳴り響かせながらソメイヨシノのトンネルをくぐって現れ——背後からヘリコプターと同じ深緑色のカラーリングが施された装甲車や高機動車がエンジンの唸る重低音を響かせながらパトカーの先導に従い、地面を震えさせるようにして国道を南の方に向かって行く。

「ありや…自衛隊やんか…」

「なんで自衛隊がこんな田舎に…？」

その光景を見ながら、村人は困惑しながら口々に言う。

「…もしかして怪獣退治にでも来よったんちゃうか？」

老婆が冗談で言う。

それにつられて他の村人も笑ってしまう。

そして自衛隊車両やヘリコプターが飛び去ると、何も無かったかのように作業を再開した。

—————

南飛鳥村近郊・大和大空洞

かつて炭坑があったものの、バブル崩壊後の不景気によって経営難になり、廃坑となった炭坑跡——先日、和歌山県を震源とするマグニチュード5.2の地震により炭坑跡の一部が崩落。

国土交通省や環境庁が調査を行ったところ、意外なモノが見つか

り、それが自分達では手に負えないモノだった為、防衛省陸上自衛隊に出動要請が降っていた。

南飛鳥村の国道を南に移動した自衛隊車両はその炭坑跡の崩落現場手前で止まる。

そして、軽装甲機動車や高機動車、73式トラックが停車し普通科隊員や化学科隊員らが順次降車して来る。

そこに混じって、ある男性と、男性の助手らしき女性も降車する。

男性は場違いなスーツ姿をしていて、自衛隊員ではないことは目に見えて分かる——が、彼は今回の件で自衛隊のオブザーバーとして役立ってくれるという判断で同伴が許可されていた。

「ああ、お待ちしていました。芹沢さん!!？」

環境庁の男性役員がスーツ姿の男——芹沢大助に声をかける。

「例のモノはまだ見れますか?」

芹沢は男性役員に駆け寄って、聴く。

「もちろん!その為に呼んだんですから——」。

男性役員が応えると共に崩落した場所に視線を移す。

芹沢も男性につられてそちらを見る。

そこには光が差込めど底が見えない——まるで奈落の底にまで続いているかのような錯覚すら覚えさせられる程にまで深い深い、巨大な穴があった。

「……これは……」

芹沢も穴の巨大さに絶句する。

「大きさは東京ドームの約半分ほどです。……ですが、こんな陥没の仕方は私も見た事ありません……」

男性役員も未だに信じ難いように言う。

「……しかし、驚くのはまだ早いです。……この真下に、芹沢博士の専門にしているモノがあります。」

男性役員が言って、芹沢と助手を連れて巨穴の岩壁に沿って施設してから1週間も経っていない資材輸送用エレベーターに乗り込み、3人は地下へと降りていく——光が届かぬ、漆黒の闇に支配さ

れた世界へ。

「ヘルメットを。落石の可能性が有ります。」

「ああ、これはどうも。」

「ありがとうございます。」

男性役員が芹沢と助手にヘッドライト付きのヘルメットを手渡し、2人は礼を言いながらそれを装着する。

正直、巨石の落下や天井にあたる岩盤の崩落が起きた場合には効果があるとは言えないが、それでも無いよりはマシだ――。

芹沢はそう思いながらヘルメットのヘッドライトを点ける。

しばらくして、エレベーターが最下層に到達する。

最下層には仮設式のライトが辺りに備え付けられ、スタンドライトがあちこちに置かれている。

そしてそのライトの放つ光の向こうにあるのは――無数に転がる鏝のような形の頭を持つ異形の鳥たちの数十、数百ものミイラの山。

それらは鋭利な刃で切断されたようなミイラもあれば、爆炎で焼かれたようなミイラもあり、様々な死に様をたどった事が見て取れる。

「何度か崩落事故の現場の底を見た事がありますが――こんなのは初めてです。」

男性役員が言う。

芹沢はそれを聴きながらも異形の鳥たちのミイラ群を見ながら険しい顔をする。

「そんな……まさか……博士、ここは――……」

その隣で助手の女性――ヴィヴィアン・グレアムがミイラ群の中にあるモノを見つけて、驚愕に満ちた声音で声をかける。

あるモノに芹沢も視線を向ける。

それは、異形の鳥――ギャオスに似た頭部を持ちながらも、全く別物の外見のミイラだった。

左腕は肩の根元から千切れてるために分からないが、右腕は肘関節より先が剣のように鋭利な刃となっており、その刃はギャオスの頭を刺し貫いている。

さらに左脚は別のギャオスの頭を踏み潰し、背中から生えている4本の触手だったであろう器官の内健在の2本の内1本は遠く離れた場所のギャオスの頭を刺し貫き、もう1本は先端の鍔のようなハサミ型の器官の衝角を全開にして固まっている――。

ギャオスと類似点はあるのだが、明らかにギャオスと対になる存在だった。

それを見て芹沢はヴィヴィアンの言葉を繋ぐように口を開き、言い放った。

「ギャオスと――その、【抑止力】たる怪獣が殺し合った、古戦場跡だ――」。

その日の内に大和大空洞と名付けられたそこは、民間人にこの存在が露呈することを防ぐために環境庁から防衛省およびモナーク機関の管轄となった。

そして、ギャオスに対する、【抑止力】と見なされた巨大生物のミイラにはこう命名された。

――【イリス】、と。



現在――2021年

東京・八広駐屯地・第11格納庫

鋼鉄の上から特殊コンクリートで加工した高さ30メートル以上の壁に囲まれ、特殊合金の金属支柱が壁を支えるように地面から天井を貫いており、床を見下ろすように大型LED照明群が天井を埋め尽くしている第11格納庫は八広駐屯地の中では中規模な格納庫であり、普段は資材の出し入れの為に輸送科の73式トラックが数回出入りする程度で閑散としているのだが、現在は指示を飛ばす怒号に誘導するためにホイッスルを鳴らす音などの喧騒に満ちていた。

「倉持技研より【試製21式打鉄甲一型】搬入完了!!?」

【倉持技研】——第2世代ISにおいて、フランスのラファール・リヴァイヴと並ぶ名機である打鉄を手がけ、簪の専用機になる予定だったが、現在は織斑の専用機となってしまうている白式を手掛けたのも倉持技研だった。

本来、IS派側である倉持技研がIS派と対立する戦術機派である特務自衛隊に関わるというのは極めて珍しい——というより、異例だった。

例えるなら重さが違うが故に絶対に混ざらないはずの水と油が完全に混ざるに等しいくらいの事だった。

「荷解き済んだら空いているケージにポリプロピレンロープで固定! 万一に備えてリムーバーを限定発動しとけ!!?」

「了解!!?」

男性整備班長の怒号。

女性下士官がそれに応じる。

IS派や女尊男卑の支配する今の時勢からしたら違和感しかないだろう。

だが、これが特自では——いや、人間としてこれが普通だ。『兵装搬入完了、武器科各隊員は指定のケージに兵装を保管してください。』

新たに打鉄甲一式の兵装が73式特大型トラックのコンテナに乗せられて第11格納庫に入ってきて来る。

それらのコンテナを武器科管轄の第11格納庫の天井から吊るさされているスタッカクレーンが掴み、兵装用ケージの所まで搬送して行く——。

何故IS派と戦術機派が組したか——それはISと【強化装甲殻】の強化を図るためだった。

というのも、アメリカはテロ対策にステルス戦術機ラプターを用いているが、日本はそんな高価なモノを量産する余裕が無く、ISを用いていたが、それが女尊男卑に滑車を掛けてしまっているのだ。

その結果、テロを未然に防ぐべき存在がテロを助長させている——
——という、なんとも皮肉な状況となっていた。

近年ではその問題を解決すべく強化装甲殻を採用していたが、ISより性能が劣る上に対小型生物への対策も取るために強化装甲殻の強化改修は必須だった。

そしてIS派もラドンによるニューヨーク蹂躪以降ピリピリしておりISの強化を考えていた。

そんな中、倉持技研がIS打鉄と、強化装甲殻・打鉄改二の技術融合開発を特務自衛隊に持ちかけて来た。

——つまりそれは、ISと強化装甲殻を組み合わせたISの強化機種でもあり、強化装甲殻の強化機種でもあるといえる——

——【統合機兵】という機体の開発計画だった。

何故特務自衛隊に開発計画を持ちかけたかと言えば、それは倉持技研にIS打鉄のIS学園での対人戦を想定した運用データは豊富にあっても強化装甲殻打鉄改二の運用データはほとんどない。

対する特務自衛隊はIS打鉄の運用データはないが、強化装甲殻打鉄改二の運用データはロリシカ派兵時に収集した対獣戦のものが山ほどある。

何より、改修するのに資材が充分過ぎるほど揃っている——

——互いの穴を埋めて補完し合うには、充分な状況だった。

そして完成した暁には、巨大生物に対抗できる戦力が増えることに加え、パイロットを男女で選ばないために女尊男卑もアツサリ崩れ去る——要約すれば戦力が増強できて女尊男卑問題も解消できるといふ、一石二鳥な訳だ。

——もつとも、今試作機である1号機と2号機が完成して搬入されたわけであるから、今すぐに戦力増強には繋がらない。

戦力増強に繋がるのはIS学園のタッグトーナメントでの結果と生産ラインを倉持技研で確保すると同時に、統合機兵を扱う【機動歩兵部隊】の設立が完了してから——。

おそらく実戦配備まで、あと半年はかかる——というのが現実だった。

……それまで日本が健在ならばいいが――

「――これが……試製21式統合機兵【打鉄甲一式】……」

自身の眼前に鎮座する、深緑色に迷彩が施され、全身装甲型で頭部には双眼に、翼竜のトサカを連想させられるレーザーユニットがあり、肩部ユニットには打鉄の名残である武士の大鎧にある肩土を模したシールドユニットを持ち、戦術機や強化装甲殻由来の背部兵装担架を、腰部には跳躍ユニットを内蔵した多関節式補助脚を4基もつ、【打鉄甲一式】を見た箒がぼつりと呟いた。

今眼前にある機体が、タッグトーナメントで自身と千尋が駆る事になる存在だった。

なぜ、統合機兵というISと強化装甲殻の融合機である本機でISに挑むか――多分、これを期に国内のISを統合機兵へとアップグレードする口実を作るため。

いや、それだけではない。

武器輸出に対する憲法解釈が改正された今なら、東南アジアなどに戦術機よりコストが安い統合機兵を輸出して、世界破滅後でもある程度自力防衛させられる。

それだけでなく世界の警察たるアメリカにも売り込み、あちらの兵器強化を間接的に行わせ、よりアメリカ主導による人類の結束を強めるためにアメリカの軍事的地位を安泰させ、日本がそれらの取引で得た利益を極東における巨大生物迎撃に利用する――という目的が見え透っていた。

(……結局、また私達は政治の道具として使われる訳か……)

箒はため息をついてうんざりした顔で内心言う。

慣れているとはいえ、いざその役をやらされると、相変わらず気が滅入る。

だが、その結果が破滅から日本を救う手立てになると思えば――

――無駄ではないし、希望はある。

……人間単独で勝てる訳がないことは重々承知しているが頼る存在が人間以外にない以上、止むを得ない――。

だがその頼るべき人間は民主主義・共産主義思想によって西側と東側に分かれた冷戦時代の構造を残しながら存続している。

さらにISの台頭後に女尊男卑思想まで流行っている以上、手を取り合うどころか内ゲバに発展しかねない――それは巨大生物が出現してからも同じだった。

《はあ……ホント、人間って内輪もめが好きねえ……》

箒の中に巢食うナニカが呆れた声音で言う。

《私を作った連中も似た感じだったわ……バルゴンを作った人間と敵対していたギャオスを作った連中と、それに抗うために私を作った連中の内輪もめ――今は内ゲバって言うのかしら？そのせいでどれだけの生命が喪失したか――……》

(……へえ、いずれ私を取り込むだろうお前が他者の生命を気にするとは、な……)

箒は皮肉を込めた感情を纏って内心呟く。

《――私だって、好きでやってる訳じゃないわよ？貴女を取り込む事も。》

酷く珍しい、至極真面目な感じの声音でナニカが言う。

だから箒は黙ってしまおう。

《だってお友達になりたい子をどうして取り込まなきゃいけないの？》

ナニカがいつものように妖艶でいながら冷静な声音ではなく、感情的でやるせなさを孕んだ人間味のある声音で聴く。

急なことに箒がまた驚く。

《……ごめんね。前にも似たような事があったし、その娘に貴女がそつくりだから、つい……》

クールダウンした声音で、箒に言う。

《……でも、私の大元に埋め込まれて指示しているプログラムと状況がそれを許さないだけ。……ギャオスがいつ目覚めても可笑しくない今はね……。》

そういえば、私はこいつの事情や意思を考えたことは、一度も無かったな——ふと、箒は思った——瞬間。

箒は強烈な吐き気を覚え、咄嗟に近くの女子トイレに駆け込む。

そして個室に飛び込むとドアを閉め、鍵を掛けて清潔感に満ちた白い洋式便器の蓋を開くとその上に顔を出して——

「けほっけほ……うっ、ぐっふっ!!？」

激しく咳き込んだ一瞬後——口から赤い紅い鮮血が便器の中に吐き出され、白い清潔感溢れるモノを赤く紅く、獄炎が焼き尽くすように塗りつぶしていった。

「は、あ……はあ……はあ……」

吐血し終わると、全身から力が抜けてトイレの床にぺたん、と膝を着いてしまう。

「は……あ……く、う……」

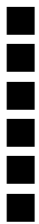
箒は自分の服を捲って胸部を見る。

前よりも黄色いシミが広がっている——しかも見れば、脇下を通って背中に到達しているモノもある。

箒は自分がさらに自分じゃなくなるような感じがして、自分の手を交差させるように互いの手で二の腕を掴みながら恐怖を覚えながら蹲る。

「くそ……」

震える声音で、自身に喝を入れるように箒は呟いた。



IS 学園・中庭。

そこには第2守備隊と立花、鷹月の面子が芝生に腰を下ろしながら、鋼鉄の牙城群が犇めく東京湾を眺めていた。

「あれはイギリス海軍のクイーン・エリザベス級空母ですわね……あんなものまで引っ張ってくるなんて……」

ふと、セシリアが言う。

「へえ、オルコットさん、艦艇の知識もあるんだ。意外。」

立花が少し驚くように言う。

「クイーン・エリザベス級空母は歴代の女王陛下の名を冠しておりますから…貴族である私は知らなくては女王陛下に不敬な気がしましたので勉強致しました。」

苦笑いしながらセシリアは言う。

と同時にふと、クイーン・エリザベス級改装空母アーク・ロイヤルの横に停泊してきた戦艦を見て、セシリアは驚く。

「あれは…キングジョージ5世級戦艦!?…あんなものまで……」

ちなみにキングジョージ5世級戦艦もクイーン・エリザベス級改装空母同様に、王族の名を冠した艦艇だった。

「艦艇祭りだね。」

本音がいつもの、のほほんとした雰囲気と言う。

だが、瞳にはどこか醒めた感情を孕んでいた。

「……いざとなれば、学園を制圧するかも知れない……」

簪が見透かしたように言う。

「制圧……?」

鷹月が驚くように聴く。

それに簪は応えるように言う。

「学園の大半は日本資本でそこには盗聴器や監視機器が大量にある……さらに不祥事を学園が揉み消そうものなら日本政府がそれを餌に国連に要請して——多分、日米安保に則って、アメリカとかに制圧させる可能性がある……」

ISが対巨大生物に役には立たないとはいえ、学園にある技術を独占できるのだからそれにアメリカが乗らないわけがない。

セシリアも、それに続くように口を開く。

「——あるいは、IS学園の独立自治権を剥奪し、学園の敷地を日本に返還もしくは国連管轄地域のまま治安維持として日米臨時編成軍や欧州連合極東派遣軍が国連臨時編成軍として居座るか——

——そのどちらかというのもあり得ますわね。」

その蒼眼は、眼前に映る鋼鉄の牙城市群を背後から操る者たちを見透かしているような眼をしていた——。

東京都内・赤坂

鈴は “ ある仕事 ” を終え、学園への帰路についていた。

ふと、すぐ横に黒塗りのセダンが停車する。

本音を言えばさっさと駅から学園に帰って、今回の相手が全身に残していった跡をシャワーで洗い流してベッドに埋もれて、現実からすぐにも意識を切り離れたかった——だが鈴は無言のまま、自分の隣に停車したセダンの後部座席のドアを開け、セダンに乗り込んだ。

「それで、今日の成果は？」

前置きもなしに隣に座っていた女——中国共産党隷下・特別武装隊の「周沢民」大尉が鈴に聴く。

彼女は特別武装隊のIS乗りで、中国大使館に置かれた対日諜報班第81号部隊の諜報役も兼ねていた。

鈴は感情を殺した声音で報告を口にする。

自らの鞆に仕込んでいた小型盗聴器を取り外し、周に渡す。

「……大尉の読み通りでした。国土交通省はIS学園に通ずるライフライントンネルを有しており、非常時にはそこからのアクセスが可能性だそうです。」

赤坂のホテルでハニートラップを仕掛け、自分と “ 行為 ”

を繰り返した国土交通省高官の男の顔を思い出し、思わず吐き気がこみ上げてきたがそれを堪えながら鈴は続ける。

「……また、臨海学校および、学園が万一壊滅的打撃を受けた際は霞ヶ浦研究学園都市に移転するそうです。……タッグトーナメント時は日米臨時編成軍や欧州連合極東派遣軍が見張っていますから襲撃は難しいですが、海から離れている上にIS学園と同じく中立地域の霞ヶ浦研究学園都市には自衛隊も在日米軍も展開していないため襲撃は容易かと。」

鈴はやはり感情を殺した声音で淡々と報告する。

「……そう、ご苦勞。あとから学園に送り込んでいる情報提供者からも情報を得て、照らし合わせてみるわ。」

「……………」

鈴はそれを聴いてもやはり感情を殺した顔をしていた。

だが内心では、違った。

(……やっぱり、どこにいつても、あたしに逃げ場は無いのね……)

諦観に満ちた感情を内心に抱きながら、内心呟く。

——第81号部隊中国大使館駐在班の仕事は、単なる諜報活動だけではない。

日本国内における破壊工作や国内の共産主義者を扇動して反与党・反民主主義デモを行なわせたり、他にも国内の中核派や親中派の間人を懐柔し、自らの手駒にして情報提供者に仕立て上げることも、活動の一環だった。

当然、日本国内にあるIS学園もまた、諜報の対象だった。

懐柔して情報提供者に仕立て上げた中核派の人間を偽造した履歴と共に教師や生徒、用務員、警備員などとして送り込み、学園の情報を収集していた——。

「それにしても、女尊男卑主義だなんて思想問題に対処するために我が国と繋がって反国行為を行っている野党や中核派という売国奴に対処できるだけの手を回せずにいるとは……日本も大変ねえ……。」

周はまったく真に思っすらいない事を言う。

「女尊男卑主義者にはかり手を回しているから、我が国に隙を突かれ、共産主義の蔓延を許してしまう……まあ、中国にとっては都合ねえ……このまま行けば、野党の各党にかなりの親中派を生み出し我が国との事を有利にして、我が国を間接的に肥やす存在になってくれる——

——それは党と祖国の権益になるわ——……………」

周が楽しそうにそう言うが、鈴は感情を殺した顔のままそれを左から右へ聞き流す。

正直、もう死んでしまった母さんの祖国だった中国なんて本当に……もうどうでも良い。

とにかく、今は——汚い大人たちから解放されたい。一夏

と一緒に居たい。

——鉄格子に囚われたような、汚泥に沈んでいるような感覚に襲われている鈴の中にある感情は、それだけだった。

「……要件が以上でしたら、私は失礼します。…明日も学校がありますので。」

鈴はそう言うのと会釈して、セダンから降りる。

そしてセダンから逃げるように、疲弊の残る体を引きずりながら、鈴は学園に向かう為に駅に向かって行った。

そしてセダンが視界からはずれ、少し気が軽くなる。

ふと、駅前広場に目を向けて——女尊男卑の社会ではあるものの、楽しく過ごすカップルが視界に入ってきて来る。

そのカップルは、とてもとても楽しそうで——。
自分が一夏と共になりたかった存在そのもので——。

「…ッ!!?」

不意に鈴は堪えきれなくなって、近くの公衆トイレに駆け込む。

誰もいない事を確認するなり個室に飛び込み扉を閉めて鍵を掛ける。

瞬間、目尻から大粒の涙がポロポロと零れ落ちてきて——

「…もう、嫌だ……。」

力無く、呻くように呟くと扉に背をもたれ、床の上に腰をつくように崩れてしまう。

それがキツカケとなり、先程まで堪えてきた感情が涙と共に奔流のように流れ出てくる。

立っていられない。

膝をついたまま、嗚咽を漏らす。

「助けて……一夏……!」

今までの鈍感ぶりからすれば、一夏が自分より千冬しか見ていない事を考えれば、応えてくれるはずが無い。

けれど、それでもそんな風に言わなければ鈴は気が狂ってしまいそうで——。

「あたし……これまで、たくさん、たくさん頑張つて来たんだよ……?」

毎日顔を合わせている——けれど今日のような行為や過去に受けた陵辱によって人格が歪められて、色あせてしまっている一夏の顔に語りかける。

「でも……もう、こんな嫌だよ、一夏……」

嗚咽を漏らしながら言う。

けれどやはり、記憶を辿っても、いつものあの、鈍感スキルを発動してヘラヘラ笑っている一夏しか見えてこない。

一夏は自分の現状を知らないから。

……自分の現状など言ったら——自分が汚れていることを知ったら、嫌われるかもしれないという恐怖を鈴は孕んでいるから。「このまま汚され続けるだけなのっ!??いつになったらあたしは、この地獄から解放してもらえるのっ……」

鈴は堪えきれなくなり、激情にまかせて叫ぶ。

「こんな思いをして、党に何もかも奪われて絞りカスにされて！最後はバケモノに殺されればいいってこと!??」

やはり激情のままに叫ぶ。

——こんな人生のまま終わりたく無い。

「だから、お願い……助けて……一夏あ……」

君が彼に手を出して欲しく無いから党の奴隷になることを選んだんだろう——賀の嘲笑が聴こえる。

あたしの側に関われば、一夏が苦しむだけなのよ——もう

1人の自分の声も聴こえる。

だが、泣き叫ぶことが許されるなら——。

「守ってくれるって……約束したよね？中学の時に、絶対に何があつても守ってやるって……絶対絶対だって、指切りだって交わして……だったら……!!?」

だから、あたしを助けてくれない一夏が憎い——その結論に至るのを必死で堪える。

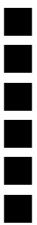
そんな結論に至ってしまえば、鈴自身の何もかもが崩壊するから。答えは返ってこない。

童話の世界みたいに白馬にまたがった王子様のように一夏が鈴の

前に姿を現すなどという事が、現実にあるわけがなかった――

「もう、やだ…やだよお……」

鈴はしばらくの間、嗚咽を漏らし続けた。僅かに聞こえてくる公衆トイレの外にいる人間たちの楽しそうな声が、呪いのように鈴の鼓膜にこべりついた。



IS学園・第2シャフト内

「…え？…解散、ですか？」

「そうだ。」

まりもに呼び出された第2学園守備隊の面子に告げられたのは、解散命令だった。

「そ、そんな…どうして!?？」

簪が声を上げる。

「納得できません！…そんな、急に…」

「――では更識、臨時招集部隊に過ぎない第2学園守備隊の本来の存在意義はなんだ？」

「それは――あ……」

まりもに言われ、簪は思い出した。

その簪が思い出した内容を他の者にも伝えるように、まりもが言う。

「そう。本来、第2学園守備隊はIS学園の教師部隊が中々動かなかったが故に教師部隊の穴埋めとして一時的に発足させた部隊だ。」

まりもは第2学園守備隊の面子に向けてそう言うと、続けて口を開く。

「だがIS学園が教師部隊を動かす判断を下した以上、これ以上生徒を戦線に立たせる必要は無くなった…だから第2学園守備隊は解散することになった…お前たちにこれ以上死のリスクを背負わせる必要も、人殺しをさせる必要もない――これだけの理由では、

不満か？」

まりもは序盤は指揮官然とした凜としている声音で、後半は子供を思いやる母親のような声音で言う。

「で、でも…それだとまりもちゃんは……」

ふと、本音が心配するように言う——が、普段呼んでいたらしいあだ名で口にしてしまい、思わず口を手で塞ぐが——
時すでに遅し。

「……まりもちゃん？」

まりもは訝しげな顔をして本音に顔を向ける。

だが意図を察したのか、すぐに何でもなような顔をすると、再び口を開いた。

「——まあ、いい。……私の事は心配ない…元より私達自衛官は国民のために命を賭けるべき立場にある人間だ。」

まりもはやはり、母性を孕んだ声音で言う。

「…で、ですが……」

セシリアが口にしかけて——黙る。

「なんだ？言ってみろ。お前が思うことを素直に。」

そうまりもが言っ、セシリアは少し口籠ったが、意を決して、口を開く。

「——元女尊男卑主義者の私が言うのもなにかもしれませんが……ですが神宮司教官…この学園には、守るほどの価値があると
は——…」

セシリアが言う。

するとまりもも何処か納得しているような、そんな顔をして、言う。

「…確かに、今のIS学園は公正ではないし、とても日本に利があるとは、私も思っていない。」

「で、でしたら——…」

セシリアが言いかける——が、それを遮って、まりもが言う。

「だが、この学園には私達自衛官が本来守るべき国民——日本人だっている。」

「ッ」

それでセシリアは黙ってしまふ。

自国の国民を自国の兵士が守るのは義務であり責務だ。

学園と女尊男卑の異常性に気を取られていてそれに関する意識が欠如していたことを、思い知らされる。

「たとえばそれが女尊男卑に身をまかせるクスズや国家転覆を狙う売国奴であっても———ですか？」

ふと、神楽がまりもに聴く。

「———そうだ。」

それにまりもは一瞬間を空ける。

だが、凜として告げる。

「たとえ国家の意思に反する者であろうとも、私達を妬み嫌う者であろうとも、彼らも国民であるが故にそういう人間も守り抜くのが自衛官だ。都合の良い国民だけを助け、都合の悪い国民は切り捨てる———

———自らに与えられた責務を放棄してしまえるような者に、自らを【防人】と名乗る資格などない。」

まりもはそう言い放つ。

そう、例え妬み嫌われ疎まれようと、国民を守る立場にある自衛官にとつてはどのような存在であろうと国民を守り抜かねばならないという責務がある———。

そして自衛官達は、自衛隊発足当時から今に至るまで———70年以上もそれを遵守してきた。

そして、その精神は今後も語り継がねばならないモノだった。

セシリア達は、まりものその言葉の重さを細々とまでは理解出来なかった。

だが、まりもの意思に何か重く、そして確かに強いものを感じた。

「お前達が真剣に考える必要はない。お前達は自衛官ではなく、あくまでI S学園の生徒なのだから。」

「ッ———！」

セシリアも簪も、自分達とまりもを隔てている壁にぶつかった———

———ような錯覚に襲われる。

同時に、まりもが——いや、学園の予備戦力に回されている自衛官達が如何に複雑な位置に立たされているかを、教えられる。「——話は以上だ。……そうだオルコット、湾港でお前のメイドと名乗る女性がお前のことを呼んでおられたぞ。」

「……え？」

まりもその言葉に、セシリアは思わず豆鉄砲を食らったハトのような顔をする。

「……なんでも、ブルーティアーズをベースに開発したモノを届けに来たらしい——。」

—————

IS 学園・湾港エリア

その埠頭区画。

ちようど、日米臨時編成軍・海上自衛隊〔おおすみ型輸送艦くにさき〕と欧州連合極東派遣軍・イギリス海軍〔クイーン・エリザベス級改装空母アーク・ロイヤル〕が停泊していた。

そしてその近くでは艦から積荷を降ろすために作業員が忙しく駆け回っている。

チエルシーはBDUからメイド服に着替えてそこに——

正確には邪魔にならないよう隅の方にいた。

傍らにはセシリアに渡すために自身と共にアーク・ロイヤルに積まれているイギリス陸軍の開発した、新型試験機——の入っているコンテナがあった。

「……ふう……」

チエルシーはふと、ため息を吐く。

先日の経験——スピット・エビラによる欧州連合極東派遣軍艦隊襲撃を生き残った——が、未だ実感がないのだ。

巨大生物がこの地球上に存在し、世界各地を跋扈していて、人類が巨大生物と戦争しているということが。

いや、確かにスピット・エビラに殺されかけておかれながらそれは

ないだろう、といわれるかもしれない。

だが、チエルシーは一般人、それも貴族という特権階級のメイドだ。戦場から離れた場所におり、一番そういうモノから疎かったチエルシーからすればそれが当たり前なのだ。

「チエ、チエルシー!?」

そこに懐かしい声が響く。

いや、懐かしいというほどではない。

離れてから2ヶ月しか経っていない。

それでもチエルシーには、長らく会っていなかった家族と数年ぶりに再会したような感情を抱かせた。

振り向けば、そこには両親を亡くした時からずっとチエルシーが側について世話をしていたセシリアが、いた。

「お久しぶりです。お嬢様。」

チエルシーはそれに、いつもと同じ——けれど一段とこやかに微笑みながら言う。

「あ、ああ…御機嫌よう…。ところで、またどうして学園に…?」

セシリアが聴く。

「あら?教師の方から何か聞いておりませんか?学園に連絡を入れたはずなのですが…」

チエルシーが疑問符を頭の上に浮かべながらチエルシーが聴く。

「いえ…伺っておりませんが…」

「…そうですか…」

セシリアが困惑しながら言う。

ちなみにチエルシーが連絡したことはブルーティアーズの発展型

——正確には日本から渡されたデータを基に開発されたI Sの強化機種を送り届け、セシリアにテストパイロットを務めるようにイギリス陸軍から頼まれたが故に、そちらに伺う——要約するとそういう内容だった。

そしてそれは、職員に確かに連絡は入れたがセシリアには届いていない——。

つまり、教員が故意に伝えていなかった事になる。

イギリス代表候補生宛ての連絡すら、鏡リカの再起不能化と同様に封殺されていたのだ。

「…では直接お伝え致しますね。」

チエルシーがにっこりと微笑みながら言う。

「——端的に言えば、ISの強化機種である統合機兵〔ユリウス〕の試験パイロットをしてほしい——とイギリス陸軍がお嬢様に依頼されたのです。」

チエルシーが言うなりセシリアが驚く。

「そんな……どうして私が……?」

「…お嬢様は仮にも国家代表候補生です。……にも関わらずブルーティアーズは不具合によって渡されなかった…イギリス政府はその詫びを兼ねて、お嬢様にこの機体を託すそうです。」

チエルシーのその言葉と共にコンテナの扉が開け放たれ、ブルーティアーズの同じ蒼を基調とした全身装甲型の機体が姿を現す。

チエルシーは一度その統合機兵————ユリウスに視線を送ったあと、再びセシリアに向き直る。

そして微笑みながら言う。

「この件には政治的な思惑があるのかもしれませんが。……ですが、それでも試作機であるこの機体をお嬢様に託したということは、イギリス政府がお嬢様に期待を抱いての事なのだろうと思います。」

「……」

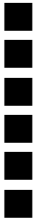
「私は兵器については詳しくは存じません。……ですが、お嬢様の働き次第で、この先の時代で喪われるであろう多くの生命を少しでも減らせることが出来るやもしれません——。」

チエルシーはそう言い放った。

するとセシリアもチエルシーのその言葉を聴くなり、何かを瞳に宿して——。

「…そうですね。私一人で出来ることは限られています…。なら、私は私に出来る事の最善を尽くし、期待に応えてみせますわ!!?」

そう言い放った。



特務自衛隊・八広駐屯地

第10番格納庫

格納庫の形は他の格納庫が上から見れば正方形あるいは長方形であるに対し、第10番格納庫は正8角形となっており、床から天井までの高さは100メートル近くもある。

天井部分は幾つかの超高圧LED照明を取り付けているものの、開閉式隔壁となっており、壁は合成ダイヤモンド複合装甲体で構成されている。

さらにその合間から格納庫を横切るように4本のそれぞれ高度が違う可動式空中連絡通路が通っていた。

普通の格納庫とは明らかに造りが違うその格納庫——の可動式空中連絡通路に、千尋はいた。

人通りが少なくなつた今の時間帯に、千尋は可動式空中連絡通路の鉄柵に体重を預けるように両腕について、眼前にある存在を見上げていた。

——銀色の鋼鉄に身を包み、自分の父——正確には遺骨だが——を使って人類が自分のような存在——

——ゴジラを模倣した存在であり、この格納庫の主である、機械の龍——
——【3式機龍】を。

「——よお。…馬鹿息子が会いに来たぜ。」
誰もいない第10番格納庫の中。

千尋は何処か反抗期の子供っぽい口調で物言わぬ機械の龍に語りかける。

だが返答は帰ってこない。

当たり前だ。機械の龍の内に閉じ込められた千尋の元となつたゴジラの父親——初代ゴジラはとっくに死んでいるのだから。

「…はあ……。」

それに千尋も、溜息を吐く。

「——分かってる。分かってるよ…親父が応えてくれない事くらい…。」

そして寂しそうな顔をして呟く。

それは何処か、親に期待を裏切られた子供そのもので——

「じゃあ、” あの時 ” のは、何だったんだよ…馬鹿親父…。」

千尋は俯きながら溜息を吐いてそう呟く。

そしてもう一度機械の龍の瞳を見つめる。

応えるはずがない。

けれど何処か意思を宿しているように見える瞳を。

「あれ、千尋?。」

ふと、声をかけられる。

声が出た方を向くと——いつも通りに作業員のキャップを逆向きに被っている山本がいた。

「あ、これは山本三尉!!?。」

声はいつも通り——ではなく少し張り詰めた声。

身体も反射的に背筋をピンと伸ばして直立不動の体勢をとると、ビシッと敬礼をする。

「そんな畏まらなくて良いぞ。誰もいないし、べつに素で構わない。」

そういうと、山本も千尋が見ていた存在——機械の龍を見上げる。

千尋もまた機械の龍に視線を戻す。

そしてふと呟いた。

「お前もここに来たら、いつも此奴を見てるよなあ…。」

「はあ…まあ。自分に似た感じがするので…此奴は…。」

千尋は自分の事を詳しく知らない山本には、まわりも程自分や機械の龍について掘り下げて話すことは出来ないが、それでも山本に接する。

戦闘訓練

—— 戦術機ではまわりも、対人格闘術なら頼人から

教わったから彼らに心を開いているように、整備に関して戦術機や強化装甲殻、今度学園で試される統合機兵そしてこの機械の龍——

——それらの整備に携わり、千尋に機体整備について一から十まで丁寧に教えてくれたが故に山本にも千尋は信頼を寄せていた。

「三尉は何故こちらに…?」

「ん? ああ、ちよつとヒマだったからな。此奴を見に来た。」

千尋の疑問に山本は笑いながら答える。

それは何処となく子供っぽかった。

「何故かヒマさえあれば此奴を見に来たくなるんだよなあ…。今まで色々な機体を弄ったけど、ここまで人を惹きつけるヤツは初めてだよ。」

「そうですか…。」

山本はやはり笑いながらそう言っ、千尋もそれにつられて笑ってしまう。

人を惹きつける存在だと言うのだ。

“ あの時 ” 機械の龍の内面に触れた千尋からしたら少しおかしく感じてしまう。

だが、それは千尋が感じている事であって、山本が感じている事は千尋とはまた違う。

機械の龍に対して各々が思っている事も、全員が全員同じではない。

近しい考えのものがいたりはあるが、それは細かく見れば全く違う。

……十人十色、という奴だろうか。

「……なあ」

ふと、山本が千尋に声をかける。

「何ですか?」

「…お前さ、此奴に意思があると思うか?」

「ツ!?」

突然の山本の何気ないその言葉に千尋は頭をハンマーで殴られたような衝撃が走る。

だが、それを隠しながら千尋は口を開いた。

「——ある、と……思い……ます。」

千尋が少し、たどたどしく応える。

自分の中で、本心でもまだ結論が出ていないが——直感で
応えてしまう。

——もちろん、そう答えたからには理由がある。

だがそれは千尋の正体を知らない山本に言える内容では無かった。
だから他の理由を言う必要があった。

そして、その理由を——正確には思ったことを口にする。

「…だって……彼奴に意思とかそういうのが無かったら…」
「あの時」
「あんな風に暴走したりしなかつたと思うんです。」

千尋が体験した “ あの時 ” の事を言うなり、山本も領い
て、口を開く。

「なるほどな……。……実を言えばな、俺も此奴に意思があるんじゃない
いかつて思えるんだ。」

その言葉に千尋は驚く。

あまりに意外だったからだ。

山本は視線を機械の龍から千尋に向けて、続ける。

「 “ あの時 ” 此奴はお前にギリギリ迫ってたろ？…上層部は
偶然だと考えたが……俺には、此奴がお前を求めていたようにしか見
えなかつた。……まるで長年生死不明だった息子に父親
がやつと会えたような——そんな風を感じたよ。俺は。」

千尋は山本のその言葉に黙ってしまう。

山本の考察は当たらずとも遠からず——と言ったところ
だったからだ。

「まあこいつはあくまで俺個人の意見だからな。事実がどうかは分か
らない。当たってるかも知れんし、外れてるかも知れん。」

山本は言う。

「…それよりお前、いつも悩んでる印象あるな。前は健気なガキン
チヨだったのに。」

不意に話題を変えて山本は言う。

「色々考えさせられることが多いんですよ。最近。…だから悩む量も
前より増えちゃって……。」

千尋は疲れたような顔をして山本に言う。

確かに、最近は悩まされることだらけだった。

箒の容態について。

ISの存在意義について。

IS学園の在り方について。

ロリシカの現状について。

平和の価値について。

活動が活発化した巨大生物について。

新しく開発された統合機兵について。

機龍について。

そして——世界の破滅について。

ここ最近に悩んだことを取り上げてもそれだけある。

「それに、いつまでも『小坊主』って言われて馬鹿にされたくないですから。」

千尋は身長に関してはいつも悩みを抱えている。

何せ高校1年生にもなるのに身長が155センチしかない——

——全国の男子高校生の平均身長である169〜170センチに

遠く届かない上に、箒の身長——162センチ——

にすら、負けているのだ。

その低身長故に、特自ではよく『小坊主』だの『ちっちゃい』だのと言われているのだ。

「なんだ、気にかけてたのか?」

山本が千尋のそれを聞くなり、やはり馬鹿にしたように笑いながら聴く。

「当たり前ですよ!!?これ以上子供扱いされんのは御免です!!?……だから身長伸ばすために牛乳とか飲んだり運動してんのに身長伸びないんですよ……」

「いや〜でも、お前、背が伸びたら可愛げないただの生意気坊主になっちまうぞ?」

「余計な御世話です!!?」

千尋はついヒートアップして、子供みたいにムキになって怒る。

それを見て山本が笑う。

が、それを遮るようにふとアナウンスが響く。

『輸送科第8列車運行隊より通告——1805に第5ターミナル発、夢見島行き輸送列車に乗車の隊員は速やかに第5ターミナルまで出頭して下さい。繰り返します——』

八広駐屯地から延びている、IS学園のある千葉県富津岬東端の沖合にある、IS学園が置かれた夢見島に通じるライフライントンネルを通る列車に関するアナウンスだった。

「千尋、今に乗るんだろ？急いで行った方がいいぞ。」

山本が言う。

「あ、はい！では失礼します——じゃあな、親父。」

山本にそう言つて背を向けて、同時に機械の籠——機械籠に視線を向けながら山本に聞こえないようにそう、ポツリと眩き、千尋は第10番格納庫を後にした——。

EP—22 ウサギ狩り

篠ノ之束のラボ

蛍光ランプが照らす金属質な廊下。

そこを一人の少女が歩いていった。

——朝倉美都が。

「……へえ、案外ザルなんですね。」

庭園から束のラボである豪邸に侵入した朝倉は、酷く意外そうに呟く。

世界一の天才、もとい天災を豪語する割りに庭園にセンサーは大量に有ったが、それと対象的にラボの中にセンサーの類は生活に必要な類を除いてほとんどゼロというに相応しいほどない。

いくらつい先程庭園の監視システムを破壊し尽くし、座礁貨物船偽装型原子力発電所に迫るゴジラを迎撃するためにISが出張って束自身もそちらに気をとられているからとはいえ——あまりにもザル過ぎる。

恐らく侵入されることを想定していないのだろう。

それだけこのラボは見つからない自信があるのか、侵入する手前で止められる自信があるのか——それとも。

そう考えていた朝倉はふと、僅かな空気密度の変化を感じる。

つい先程までその空間は物体によって満たされていなかった。

だが今は満たされている。

——つまり…敵。

朝倉は首を右に傾ける。

瞬間、機械仕掛けの腕が凄まじい速さで一瞬前まで朝倉の首があった空間を貫く——だがその腕は、朝倉が躲したことにより、虚空を掴むだけだった。

それを待っていたと言わんばかりに朝倉はすかさずその腕を両腕で掴み、思い切り肩に叩きつけて——機械仕掛けの腕を折り

ながら、そのまま背負い投げでその腕の持ち主を前に投げとばす。

腕の持ち主はそれで投げとばされ、床を数回転げる。

腕の持ち主は少女だった。

緑のリボンで結んだポニーテールの髪型をした、大和撫子というに相応しい外見の少女――。

だが先程へし折った腕はグニヤリと歪み、裂けた箇所からは機械油が漏れ出しており、さらに頭を打ち付けて異常が起きたせいか頭部周りの動きがガクガクと痙攣しているように動く。

「なるほど、義体人形ですか。」

朝倉は少し驚いた顔をする。

義体人形――すなわち人型ドローンだった。

【ある理由】で日本から逃げて、フィリピンやインドネシアなどを転々としていた先のテレビで朝倉も見た事があったため、義体人形の存在自体は知っていた。

だがそれらの義体人形はまだロボットののような外見で、目の前にいる少女の姿をした義体人形のように精巧なものは見た事がない。

そして先程自分の頭を殴ろうとした時の出力からして、多分このロボの警備をしているのだろう。

瞬間、義体人形は有無を言わずにまたストレートを入れてくる。

――朝倉は体を僅かに逸らして躲す。

そしてその拳がコンクリートの壁にめり込み、壁に30センチほどのクレーターを作り出す。

――人間を殺すには十分過ぎる威力だった。

――そう、人間なら。

――義体人形の姿が少女なのは、篠ノ之束の趣味だろうか
――？

そんな疑問を浮かべながらも朝倉はクスリ、と笑うと、囁くように口を開く。

「――とりあえずは、前言撤回ですね：篠ノ之束も、多少は警戒していたみたいです。」

そう朝倉が言うなり、義体人形は再度まだ健在の右手で普通の人間が喰らえば首が吹き飛ぶ威力のストレートを叩き込んでくる。

狙いは朝倉の顔面。

それは的確で――。

「――でも」

機械仕掛けの拳が朝倉に届く――直前。

「素手は、悪手でしたよ……だって――」

朝倉は義体人形の拳の甲に両手を置き、同時にそこに全体重を掛けると同時に床を蹴り――義体人形の拳を、その義体人形の上に倒立の体勢で飛び乗ることで躲す。

さらに今度は体重を手から足に再度移し――海老反りに近い体勢で足を義体人形の両肩に打ち付けるように降ろし、さらに朝倉は腕につけていた手に力を込め、手で義体人形の腕を弾くように跳ね上げ――さらに義体人形の背後にそのまま飛び降りるように軌道を描く。

同時に、両肩に置いていた両脚で義体人形の首を固定し――朝倉が床につき、前転すると同時に義体人形も背後に体を持つて行かれ――朝倉が足を床に叩きつけると同時に、朝倉の脚に固定されていた義体人形の頭部も、床に脳天から叩きつけられる。さらに駄目押しを食らわせるかのように、朝倉は足を捻り――。

バキンツ!!?

義体人形の首を、へし折る。

それで義体人形は沈黙する。

その一連の動作は、やはり、一瞬の出来事だった。

「――こうなりかねませんから。」

朝倉は、それ見たことか。とでも言う顔をして、今やガラクタと なってしまつて聞こえるはずがない機械仕掛けの少女――と、廊下の先にいる、新たな義体人形の増援である2体の少女達に微笑みながら、言い放った。

瞬間、義体人形はやはり、外敵である朝倉を排除するために突貫して来る。

それに朝倉は少し、哀れみを感じる。

なにせ、『自分で物事を考えて行動する』という、当たり前前の事が出

来ないのだ。

——何故か、人の外見をしているからか、朝倉は同情してしまう。

だが、迫って来るのは、敵だ。

それも所詮は魂を持たない機械だ。

だから、朝倉はホルスターからグロック18Cを抜き――

まず突っ込んで来た1体目の頭目掛けて、フルオートに切り替え連射――

最初の数発は弾くが、脆くなつていった箇所にも多重攻撃を仕掛けられた装甲は貫かれ、内部の中枢がやられ機能を停止する――

瞬間、2体目が機能を停止した1体目の背後から突っ込んで来る――

——そして剣突を喰らわせようとする――が、朝倉はマ

ガジンが空になったグロックを手から離し、何も持っていない状況の手で義体人形の剣突を受け流し――義体人形の背後に回り、後頭部を掴む。

そしてそのまま義体人形の剣突を放とうとした勢いを生かして――

――さらにそれに朝倉の勢いも加えて、義体人形の頭をコンクリートの壁に、『人間ではあり得ない力』で叩き込んだ。

瞬間、コンクリートの壁に亀裂が走り、コンクリートが砕け、破片が飛び散り砂埃が舞う――。

それもやはり、数秒の出来事で――。

砂埃が晴れた場所にあったのは、40センチほど陥没したコンクリートの壁と、壁に押し付けられた圧力により、内部の中枢が潰れて機能を停止した義体人形だった――。

朝倉が手を離すと義体人形がズルリと床に落ちる。

やはり動いたりはいしない。

ふと、朝倉は義体人形が居た先の廊下を見る。

そこは朝倉が進もうと思っていた先――つまり、その先に、エモノがいる――。

朝倉の中が、加虐の衝動で満たされる。

口は引きつったようにどうしようもなく歪んだまま笑っていた。
そして朝倉はその顔で呟く。

「ふふっ、会うのが楽しみですね…篠ノ之東。」
それは何処か楽しそうな顔で――。



篠ノ之東のラボ・座礁貨物船偽装型原子力発電所

東のラボの発電設備である座礁貨物船に偽装した3基の原子炉を
内蔵した原子力発電所。

そこから見えるのは、海より迫り来る黒く山の様に巨大な塊と、そ
れに向かって穿たれている数多の光芒――。

そこには、ゴーレム12機が守備すべく出撃しており、現在はレー
ザーによる砲撃戦を展開中だった。

侵攻してくるソレが、ただの駆逐艦や空母、普通に普及している第
2世代ISや戦術機であれば、ものの数分と経たずに迎撃は完了し
ゴーレムは撤退させるだろう。

――ソレがただの兵器なら。

――ソレが人智の範疇の存在なら。

――ソレが海より波を掻き分け―― 否、砕きなが
ら進撃してくる、放射能を纏った黒き巨獣―― 【ゴジラ】で
なければ。

ゴジラには既に1個戦車大隊を屠るに十分な火力に相当する威力
のモノがゴーレムの腕からは間暇入れず、絶やすことなく極太のレー
ザーとして、穿たれていた。

レーザーは情け容赦なくゴジラに撃ち込まれ、皮膚の表層部の水分
を蒸発させ、爆発を繰り返させる。

だが、しかし。

ゴジラには、まるで効果がない―― いや、効果はあるのだ

ろう。

だが、着弾した箇所の傷口が通常の生物では有り得ない速度で回復して——傷なんて最初から無かったかのように皮膚が完璧に修復されてしまう——何より、ゴジラが全く痛みを感じていないように見える事が、さらに効果がないように見させられる。

瞬間、ゴレムは遠距離からのレーザー攻撃では効果がないと判断したのかゴジラ目掛けて突貫を開始する。

近距離からレーザーの荷重攻撃を掛けようというのだ。

同時にゴジラがニヤリ、と口角を吊り上げる。

今までゴジラは目当ての原子力発電所にゴレムが陣取っていたから本気で——いや、本気という言葉の足元にすら遙か遠く及ばないが、やっと自分のやり慣れた戦いができるから——

ゴレムは突貫しながら——明らかに、先程より威力の上があったレーザーを連射してくる。

それは大気を一瞬でプラズマ化させ、あまつさえ大気がプラズマ化した瞬間に爆風で周囲のモノを破壊する威力のモノで——。

大出力のレーザーが至近距離から次々とゴジラの皮膚を焼く——

皮膚の水分がレーザーに焼かれ、瞬時に蒸発——そして爆発。

その攻撃を繰り返し、ゴジラを爆炎と爆煙が包み込んで行く——

束はその光景をラボの地下にある管制室からモニタリングしていた。

「やった!!?これで勝った!!?」

ゴレムのアイカメラから転送されてくる爆煙に包まれた映像をモニターで見ながら、束は嬉々とした顔を浮かべて勝利を確信した。

1個師団を全滅させられる火力を集中させたのだ。

いくらバカのように巨大なバケモノとはいえ、あれだけの攻撃を受けなければ原型を留めているはずがない——束はそう思った。

「あれだけの火力投射だもん。ケリは付いてるよね。」

対象の有無を確認せずにそう判断する。

そうしてゴーレムの操作盤を弄る。

「さくってゴーレム達を帰投させ——」

だが瞬間、爆煙の中が青く光り——青い、蒼い獄炎が穿たれ、ゴーレムが蒸発——だがそれに留まらず、ゴーレム部隊の後方にラボをぐるりと囲むようにそびえ立つ島のドーナツ型山地の山肌を融解し、粉碎——。

そしてそれによって生じた地震のようなその衝撃はラボの地下にいた束にも伝わり、衝撃で幾つかのモニターの液晶パネルが割れ、ガラス片が弾け飛ぶ。

束は反射的に腕で身を守り——衝撃が収まった後、腕を下す。

「はっ……な、何……今の……？」

束は啞然とした顔をしていた。

生き残っているモニターで状況を確認する。

ゴーレム5機蒸発。

残存機は戦闘を継続中。

ドーナツ山E3区画融解。

という状況だった。

「はっ。」

束は信じられないような顔をする。

だが、それは山を融解させられたからではない。

「ゴーレムが……ISが……束さんの傑作が……蒸発させられた？」

自分の作り出したモノがいと容易くやられたという事実が受け入れられなかったのだ。

「——ッ!!? そんなはずない!!? 束さんの作ったモノに勝てるモノなんてあるはずない!!? いやあっちゃいけないの!!?」

東は傲慢にも、そう言い放つ。

「そんなのがあつたら——いっくんやちーちゃんの為に作つた今の世界が…壊されちゃう——!!?」

そこには何処か自分の自己満足だけではなく一夏や千冬を思いやる感情を孕んでいた。

だがその顔はエゴに歪んでいて——。

「島の迎撃システム群もゴーレムの直援に回して——ゴーレムはリミッターを解除!!? なんとしても彼奴を殺しなさい!!?」

東がコンソールを叩きながら叫ぶ。

モニターの向こうでは依然として座礁貨物船偽装型原子力発電所に進撃している黒き巨獣——ゴジラへさらなる猛攻が実施される。

リミッターを解除され、さらにレーザーの威力が上がったゴーレムによるレーザー照射。

そしてドーナツ山——島のドーナツ状山地から東が命名した山——の山肌に内蔵されていた高性能ミサイル〔スパイダー〕や〔荷電粒子砲〕、かつてワームホール生成器からこの世界に抽出して再現した異界の兵器が次から次へと、物量が売りだった旧ソ連赤軍も真っ青になるほどの弾幕攻撃がゴジラ目掛けて穿たれる——。

弾着。

爆発。

それに続くように次から次へと弾着して行く——。

瞬間、先程とは比べ物にならないほどの爆発。

爆炎は1200メートル近く空高く上がり、周囲の温度を瞬時に上昇させ、さらには爆風が海水を吹き飛ばし、島の木々を薙ぎ倒し水分を奪い取り、火災を引き起こさせ、爆炎は空も海も陸も——
辺り一面を赤く赤く染め上げて行った。

そして最後に残ったのはモニターに映像を転送しているゴーレムのカメラアイの視界一杯に映る爆煙——。

「は……ははは、は……や、やった……今度こそ——」

束はそれを見て、乾いているものの歓喜を孕んだ笑みを浮かべる。だがその喜びは束の間のモノだった。

瞬間、爆煙を突き破って黒い何かモニターの映像の転送元であるゴーレムのアイカメラを覆い——破壊されたらしく、モニターにノイズの砂嵐が走る。

「☒なっ…!!??」

束が驚きの表情を浮かべ、直様別のゴーレムに転送元を切り替える。

——モニターに映ったのは——爆煙の中から生えるように在る、巨大な黒い腕。

そして黒い腕の先にある手の部分には——ゴーレムが掴まれていた。

次の瞬間、ゴーレムが黒い手に握り潰され、爆散する。

それが一体何なのか——束は嫌でも知らしめられた。

先ほどゴーレムの大出力レーザーに、迎撃システムである高性能ミサイルに荷電粒子砲、ビームマグナム砲の嵐を撃ち込み、倒したハズの——いや、本来生物なら、死んでなくてはおかしい火力を叩き込んだ黒き巨獣——ゴジラのモノだった。

米海軍の艦隊ひとつを屠り去れるだけの火力を持つてして——

——傷ひとつさえつける事が出来ていなかった。

「そんな…そんな、そんなそんなそんなそんな!!? そんなハズない!!? こんなハズ…!!??」

束は半狂乱になって叫ぶ。

「あんなトカゲなんかには、束さんが負けるワケ…!!??」
苛立ちのあまり指を咥えて、強く噛む。

皮膚が裂けたそこから血がポタリポタリと流れ落ちる。

その痛みで、束は平静を取り戻す。

「…お、落ち着いて…そうだ。ここじゃなくてあそこならまだ対抗できるモノがある…。」

あそこは束のもうひとつの拠点である島、レッチ島だ。

そこには、ビームマグナム砲同様にワームホール生成器で抽出した

情報を基にして再現した兵器群が幾つかある。

何より研究や開発用の資材も、警備システムもキャロツ島よりこちらの方が上だ。

そうと決まれば話は早い。

「ゴーレムたちを戦わせてる間に…早く、逃げなきゃ……ツ!!?」

恐怖と屈辱に歪んだ顔で言う。

世界の支配者たる者を気取っている束からしたら、どこの馬の骨かも知らないバケモノから逃げ回らなくてはならない———それは酷く屈辱なのだろう。

その感情を孕んだまま、束は荷物を纏め護身用に作ったレーザー銃を手にして管制室の床にあったフタを開けて、そこから続く梯子を降りて———薄暗い廊下に駆け出した。

向かう先は、超高速飛行艇【モツプ号】の格納されている地下格納庫。

そこまでは、今進んでいる無機質な仮設の金属タイルが壁や床に張り詰められ、天井には高圧ナトリウムランプが吊るされているだけの廊下が一直で繋がっている。

「チチッ!」

「ひゃあ!!?」

思わず、自分の足元を駆け抜けていったモノに驚かされる。

———ネズミだ。

ここは島の改造時に施設して以来ロクに手を加えていない。

だから先程いた管制室やラボより整備していない箇所や傷んでいる箇所が目立つ。

ネズミがいても可笑しくない。

だが、そのネズミは酷く怯えているように見えた。

まるでホラー映画のお化けを見た子供のように。

それと同時に後ろに気配を感じた。

しかもただの気配ではない。

———殺気だ。

束は思わず振り返り、レーザー銃を向ける。

——その先には、人影があつた。
女だ。

距離は10メートルほど。

高圧ナトリウムランプの影にいる所為で女の顔の輪郭は良く分らない。

ふと、女が近づいて来る。

ゆっくり、ゆっくりと、散歩するような足つきで。

そして高圧ナトリウムランプの照らす真下に来て——顔
がはつきりとまではないか、見えた。

——瞬間、束は驚く。

「な、なんでお前がここに……!?」

その女を、束は知っていた。

その女はさして有名ではないし、束からしたら気にかける事のない
ゴミ同然の価値——だがその女を束は認知していた。

自分の作り出した【完全無欠】の傑作であるISを【不完全有欠】の
存在である事を知らしめさせてしまう原因となった少女——

——ソレを束は、嫌でも知っていた。

「……どうも初めまして。ああ、貴女はそうじゃないかもしれませんが
ね——私は朝倉美都と申します。」

につこりと微笑みながら少女は束に言う。

それが束から平静をさらに奪う。

「……な、なんでお前が生きてるんだよ!?」

ビシツと指を指して束は叫ぶ。

いや……喚く、と言った方が正しいだろうか。

「あら、何でって……そりゃあ、心臓が動いていて、脳が活動しているん
だから生きていて当たり前でしょう?」

朝倉は何でもないように返す。

やはり微笑んだまま。

「……ッ!? そうじゃなくて! だから……何で束さんが日本政府に殺すよ
うに脅したのに生きてるんだよ!?」

そう、朝倉はかつて束が日本政府にISコアが欲しければ殺せと脅

して、殺させたハズなのだ。

死体もモニター越しとはいえ見させてもらった。

なのに生きている。

この女は死んでいなくてはならないのに生きている。

「お前は白騎士事件の直接的被害者だから…生き証人だから…見せしめに殺させたハズなのに…。」

そう、束が朝倉を殺すように脅したのは少なからず出たであろう白騎士事件の被害者が下手に動かないようにするための見せしめ。

束に逆らえば国家の、人類の敵にされて殺される——とい
う恐怖を人類に植え付けるため——。

そしてISの力を理解した各国は白騎士事件の被害者の監視を徹底した。

朝倉はソレを推進させるための見せしめに束が偶然選んだだけ——

そして殺されたハズだった——生きていれば、ISの絶対性を破滅させて、一夏や千冬が墓穴に放り込まれるような惨事になりかねないから。

なのに何故生きている!?!?

——取り乱す束とは対照的に朝倉は微笑んだまま、口を開く。

「光ちゃん…私の友人ですね…彼女が国外に逃がしてくれたお陰です。」

束はそれを聞いて何故生きているのか、そして見させてもらった死体はなんだったのか、脳裏に浮かんで来る。

「まさか——あの死体はダミー…☒だとしたら、あいつらは…。」

だがそれを遮って。

「ああ、殺されそうには何度もなりましたよ?…最終的に光ちゃんに助けられただけで。」

やはり微笑んでいる——だが冷水のような瞳で束を見つめながら朝倉が言う。

「じゃあ——あのダメーは……」

「……さあ？ 大方私を殺せなかった政府が私に似た無関係の子を殺して差し出したんじゃないですか？」

朝倉が醒めた目をして、言う。

「——ッ!?? そういうこと——どいつもこいつも束さんをコケにして——!!?」

子供の痲癩のように束は喚く。

朝倉はそれを微笑みながら、醒めた、見下すような目で見る。

「……はは……けど、好都合だよ……」

束は乾いた笑いを浮かべ、レーザー銃の照準を朝倉に向ける。

「おまえがいなくなれば、万事解決なんだから——!!?」

狂気に満ちた笑みを浮かべながら、束はレーザー銃の引き金を引く

——瞬間、プラズマと共に光芒が朝倉に向けて放たれる——

——そしてそれは朝倉の左胸——心臓に命中する。

衣服を焼く。

皮膚を焼く。

真皮を焼く。

筋肉を貫く。

骨を砕く。

心臓を貫く。

そして、それをまた逆に繰り返して、朝倉の体を貫通した——

——瞬間、傷口から血が噴水のように吹き出す。

「は、ははは……やった……死んだ……死んだ死んだ!!? あはははは!!?」

自分の作り出した傑作であるISを脅かす要因がひとつ消えた。

それだけで束は歓喜する。

外にはゴジラがいるというのに歓喜する。

朝倉がレーザーで貫かれてもまだ立っているにもかかわらず、歓喜する。

心臓を貫いたが故に死んでいるに違いないと思込んで束には些細なことだったから。

「それで終わりですか？」

「!?？」

それで朝倉が死んでいれば、どれだけ良かったか……。思わず束は朝倉を見る。

そこにはさして痛がる様子もなく、さらに傷口はあり得ない早さで治癒していく朝倉の姿があった。

「そんな…」

束の顔からまた余裕が消え果てる。

「そんな、そんなそんなそんなそんなそんなそんなそんなそんな!!？」
そしてヤケクソといふべきか、レーザー銃を乱射する。

それらは全て、朝倉を貫く。

けれどやはり朝倉の傷は、その全てがあつという間に治癒してしまつていつて……。

カチツ

「!?？」

さらに束のレーザー銃のバッテリーが切れる。

拳銃タイプ故に容量が少ないのだ。

だから乱射した所為で、すぐに無くなってしまった。

「もういいですか？」

朝倉の呆れたような声。

それに束はビクリ、とする。

「私は貴女に借りを返しに来たので——白騎士事件の時の、借りを。」

そう言うと、朝倉は足——つま先に全体重をかける、そして地面を、蹴る——。

瞬間、床の金属タイルがへこみ、埃が舞い——朝倉は人間では、あり得ない速さで束に迫る。

束が瞬きをした一瞬。そのわずか一瞬で朝倉は束の眼前に迫った。

そして束は反射的に声を上げようとするが、それより早く、朝倉が振り上げていた右の拳をレーザー銃に叩き付け——レーザー銃の銃身をへし折る。

すかさず東はレーザー銃から手を離す————そしてレーザー銃から離れた手は、指を開いた平手の形になってしまった——

瞬間、朝倉は左手の指をピン、と伸ばして整え、東のその手の中指と薬指の間目掛けて、穿つ——。

一瞬後。

バキバキバキバキグシヤツ！

肉が裂ける音。

骨が砕ける音。

体が潰れる音。

それらが、響き渡った——。

「え？」

東は驚く。

目の前の朝倉の左手は、血塗れなのだ。

指は割れていて、中指の先は変な方向に曲がっている。

怪我をしたのだろうか。

——自分の思い通りにならなかった奴が怪我をした——

はは、ザマア見ろ。

東の中にまた歓喜の感情が浮かぶ。

だが同時に、自分の右腕に違和感を感じた。

妙に涼しい。

それでいて何故か暑い。

そして空気に触れることさえ敏感に感じてしまう。

おかしい。

おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしい。

思わず、東は右腕を見る。

すると東の目に右腕が入って来た。

——中指と薬指の間から、肘関節のあたりまで縦に裂けて、ボロ雑巾のように潰れた肉の内側から中で砕けた骨が皮膚を貫い

ていて、そして2つに分かれたれ、明らかにおかしい方向に曲がった肉の断面からは幾つもの血管が飛び出っていて、そこから赤い紅い血がダラダラと床に零れ落ちて行っている。

それはもはや腕の原型を留めていない、腕だった肉の塊――

瞬間、束は腕を裂かれたのだと理解する――と同時に、痛みを認知する。

「ひッ…いぎやあああああああああああああああ!!?」

反射的に豚のような悲鳴を上げる。

「痛い…痛い…痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!?」

2つに裂けた腕だった肉の塊を必死に接合しようと、健在である左手で腕を握って合わせようとする。

普通に考えれば無理だ。

だが今の束にはそんな冷静に思考する余裕など、無かった。

皮膚を貫いた骨が動く度にさらに肉を切り裂く激痛が全身に走り、自身の心臓が鼓動する度に血管からは血が溢れ出している、今の状況では。

――朝倉の先程束の右腕を裂いたせいで爪が砕け、先端がおかしな方向に曲がった左手は、すでに治癒されていつている。

対して束は一向に治癒しない。

接合するはずがない、裂けた腕だった肉の塊を必死に再接合しようと押さえて、悲鳴を上げているだけ――。

「――じゃあ、次に行きますね。」

ふと、朝倉がさらなる宣告を言い放つ。

「今のは白騎士事件の時の借りです…次は、白騎士事件の後の借り。」

今度は微笑んでいない――加虐に満ちた笑みを浮かべ、狂ったような瞳をした顔で、朝倉は言う。

そして次なる「借り」を返そうとした――瞬間。

けたたましい警報音。

それと同時にラボを揺るがす衝撃。

『原子力発電所の原子炉にて放射能漏れを確認
——各ブロックを封鎖します。』

瞬間、朝倉の立っていた床がせり上がる——それは放射能
を阻むための隔壁だった。

「——ちッ」

朝倉は、すかさず後ろに飛び退く。

だが一瞬後、隔壁が廊下を閉ざし、束との空間を遮断した。

しかもその隔壁は朝倉一人の手で破れそうにない。

それに、朝倉は舌打ちをする。

——だが【借り】の1つを返せたから、良いか——

——と、朝倉は妥協する。

「…帰るとしましょうか。」

朝倉はそう呟くと、背後から迫って来た原子炉から漏れ出したであ
ろう高濃度の放射能の霧に吞まれながら引き下がって行った。



キャロット島・束のラボ

地下非常用格納庫

獣じみた息遣いのまま、束はモップ号目指して、彷徨っていた。

いや、実際は確かな道順に合わせて歩いているのだが、心情は迷走
しており、目的なく逃げるだけの体では、彷徨っている——
という表現の方が正しいだろう。

「——ッくっそお…どいつも、こいつもお……！」

怨嗟を込めた声音を放ちながら、片腕で壁を伝い、モップ号を目指
す。

右腕は当然、治癒などしていない。

中指と薬指の間から肘のあたりまで一気に裂かれたのだ。治癒す
る方がおかしい。

それに右腕の——右腕だった肉の塊からは相変わらず血

が溢れ出しているがソレの感覚など、最初は激痛に悶えていたがもう失われていた。

「…はあ、は…あ、はあ………」

片腕では体のバランスを取りにくく、歩くことさえ苦勞させられる
——そのせいと出血が多いせいか、足元がふらつき、左足のつま先に右足のつま先で躓いてしまい、転んでしまう。

だらり、と下げられた右腕はもはやゴミのようだった。

自分の体が何の用もなさないただのゴミだと認知した瞬間、束は笑い出した。

「…は、ははは、あは、あははははっ」

面白おかしく、笑う。

——痛い。

傷の所為だろうか、体は熔鋳炉から取り出した直後の鉄のように熱い。

出血により朦朧とした頭は今の醜い、肉の塊と化した右腕が崩れ落ちる自分の姿を想像した後、まわりの人間全てがそれと同じように崩れ落ちる光景を妄想した。

腕だけではない。

脚も臍物も頭部も——自分の姿が姿なのだ。

他のゴミ共は身の程を弁えて、より一層惨たらしく、無様で醜い姿になるべきだろう。

「——くっ、ふふふ……」

笑いが止まらない。

そう決めると痛みは少しマシになる。

だって正当な理由が出来たから。

まずやるべきことは自分のように腕や脚を潰して自由を奪ってやること。

誰であろうと——いや、親友であるちーちゃんといっくん、そして愛して止まない箒ちゃんとは例外だ。

「あ、はは…それはいい…じゃあ、一番最初は決まってる——」

東さんが愛して止まない箒ちゃんが想いを向けていて、箒ちゃんを東さんの思い通りに行かなくしてくれている少年だ。

そして箒ちゃんとかくつつけさせるいっくんなんかより、東さんより造形が美しいなんて絶対に許されない。

「はは…待ってなさいよ…絶対に、酷い目に遭わせてやるんだから…」
咳き込むように、東は言い放った――。

EP—23 修練・障害物戦訓練

IS学園・校舎内

「最っ底!!?犬に食われて…死んでしまえッ!!?」
「あがくくく!!?」

八広駐屯地から帰って来て、山田先生から召集がかかっていた千尋と箒が校舎内で見たものは目頭から大粒の涙をボロボロと流しながら怨嗟と呪いに満ちたような声を放ちながらアツパーカット…いや、顎部にアツパーで拳を打ち付けると同時にグインと180度反転させてストレートの拳で殴り上げる、アツパーストレート…とても呼ぶべき技を喰らわせて、間拔けな声を上げる織斑を殴り飛ばす鈴だった。

織斑は鈴に殴り飛ばされると、壁に頭を打ち付けて体をビクビクと痙攣させて気絶する。

(…お見事。)

ふと、鈴による一夏への仕打ちの一部始終を見た千尋と箒は2人揃って、内心そう思う。

一夏を殴り飛ばすと、鈴はフンツと鼻を鳴らすと廊下を進もうとして——千尋と箒と、目が合う。

瞬間、何処か怨嗟を込めた瞳で睨みつける——が、すぐに足早に立ち去って行った。

「…なんかしたか?俺たち。」

「さあ…少なくともした覚えなんて無いんだが…。」

千尋と箒は互いに困惑した声音で言葉を交わす。

そしてふと、床で未だに無様に気絶したままの一夏に視線を落とす。

「…まあ、十中八九間違はなく原因はあいつだろうなあ…」

「だろうなあ…」

2人共、また一夏の鈍感が鈴を怒らせたのだろう——と思
い、再び山田先生の召集先である第4アリーナへと向かおうと足を進
めて、中庭を歩いていた。

「つーか、織斑の鈍感って何喰ったらあなんだろ?」

千尋の陽気で無邪気な声音によるその一言で、思わず箒は笑ってしまふ。

「何って…食べ物で鈍感になるわけないだろう…:」

呆れるように——でも楽しそうに箒は笑った。

「だよな〜:」

千尋も “ バカみたいに明るい ” “ 雰囲気を纏い、笑いながら返す。

傍目からすればバカみたいに明るくて無邪気なやんちゃ小坊主と真面目そうな少女が明るく会話を交わしているようにしか見えない。

——だが、その明るい雰囲気の中で。

(…こんな対応で箒のシミの進行がマシになるか分からない——
——でも、少しでも…バカみたいに明るく振舞って箒に負担を掛けさせないようにしねえと…頭の悪い俺には、それしか思い付くことが無かったから——だからせめて、俺に出来ることは、やり遂げねえと…。)

バカみたいに明るく無邪気に振る舞う表面とは裏腹に、内心に深刻な感情を孕んでいたのは、最近拡大傾向にある箒のシミを気にかけて、箒に心配事や負担を掛けぬよう神経をすり減らしている千尋だった——。

——おかしい。どうしてこうも、箒に対してはこんなにも必死になるのだろうか。

——瞬間。

「ツ!!? 箒ツ!!?」

「え×きやあ!!?」

何かを察した千尋が箒を背中からその場に押し倒す。

そして千尋は左腕で箒の頭を守るように突き出した——
瞬間。

グシヤツ!!?

突き出した左手の甲に何かが飛んで来て、拳の骨を滅茶苦茶に砕いた。

——骨が皮膚を突き破り、そこや何かが飛び込んで来た傷口から赤い紅い、色鮮やかな血がボタボタと流れ落ちる。

感触からして銃弾——しかも、狙撃銃のモノだ。

仕込んでいた手甲がある程度銃弾の威力を抑えたから良いものの、それが無ければ手を貫通して頭を撃ち抜かれていた。

「ツ……!!? くそ、帰って来て早々にこれかよ……!!?」

千尋は思わず毒付く。

「ち、千尋!!?」

思わず箒は起き上がって千尋の手を診ようとする——が、

千尋は膝で箒の腰を抑え付ける。

視界には草むらしか見えない。

「頭を上げんな。まだ狙われている。」

千尋は視線の先——距離およそ380メートル先の校舎

屋上から未だにこちらに照準を定めたままのスナイパー——

——を見据えながら箒に警告する。

その一言で箒は千尋が草むらに隠してくれたのだと理解する。

だが、千尋は草むらに隠れていない。

——狙い撃たれてしまう。

「でっ、でも千尋も隠れないと——……」

——頭を狙い撃たれたら……かつての自分ならケロリとし

ているだろう。

しかし今の千尋^{不純物}では——人の身体では、即死になってしま

う。

——けれど、

「大丈夫。」

——ただ、箒を安心させようと必死に取り繕い、口にする。

「けどっ!」

「大丈夫!!?」



千尋の視線の先にある校舎——その、屋上。

「くそっ！仕込み防具だなんて小細工してッ!!？」

狙撃銃を担ぐ女が舌打ちをしながら悪態を吐く。

そして撃鉄を起こして再度引き金を引こうとした瞬間——

」。

P r r r !!? P r r r !!? ?

「!!?」

女の携帯電話が鳴った。

だから思わず狙撃銃から身を離して、対象が離れないように左手に双眼鏡を持って対象——篠ノ之千尋を見ながら右手に携帯電話を持って、電話に出る。

「はい、もしもし?」

苛々した声音で応える。

これから醜い男の頭を花火にしてやろうとしていた所なのに、空気の読めない奴だ。

これでもライフルの大会では3年連続で優勝しているからライフに自信はあるし、拳銃でも100発100中の右腕を持っている凄腕だった。

『あ……よ——』

「もしもし?聞こえてる?」

電波が悪いのだろうか、ノイズだらけで聞き取れない。

『……け——や、ぎ——ああ——……』

「もしもしッ!!?」

目の前の獲物を前にして、中々撃たせてくれない事に怒りがピークに達し、女は怒鳴った——。

ヒュン、ザシュツツ!!?

瞬間、空気を切り裂く音が響き、それに続いて肉を切り裂く音が響

いた——瞬間、女から右腕の感覚が無くなる。

「え？」

自分の右腕を見る。

——そこには、右腕であった部位の千切れた断面から赤い血を吹き出すかつて腕だったモノ——。

「ひっ、いやあああああッ!!?」

女は思わず悲鳴を上げる。

目の前に居たのは、赤い紅い血を滴らせる黒塗りのナイフを手にしたボブヘアの少女が女を見下すようにして立っていた——
——だが、女は目の前の少女など気にも止めなかった。

「あたしの右手————ない!!?あたしの右手————アレがないと、銃を撃てない!アレがないと……男共を殺す楽しみが味わえない————」

切断された右腕の断面から血が溢れ出し、血の池を作っているにもかかわらず女はそれに眼もくれず、必死で錯乱しながら右手を探す。

「右手!右手!右手!右手!右手!右手!右手!!?右手ええええええええ!!?」

ヒステリックな声で叫び————ふと、自分の流れ出た血の池に沈む、携帯電話を握ったままの右手を見つける。

「手……あたしの……手……」

それに安堵して、至極嬉しそうな顔を浮かべて、左手を伸ばす——
——直後、首に鈍い一撃を喰らい、女は意識を失う。

その一撃は先程女の右腕を斬り落とした少女————特務自衛隊佐官補佐の【久宇舞弥】二曹の放ったモノだった。

舞弥は胸ポケットから携帯電話を取り出し、ある人物に秘匿回線で電話をかける。

4回ほどコールして、相手は出た。

『はいもしもし、更識楯無です。』

相手は情報庁の母体となった組織である暗部の長————更識家当主であり、学園生徒会長である更識楯無。

「久宇です。今はよろしいでしょうか?」

『別に問題はないわ。今シャルル…おつと、シャルロットだったわね。彼女の亡命手続きが終わったトコだから平気よ。』

「そうですね…。——学園内にて侵入者を発見。諸事情により右手は切除。捕縛しました。」

『また?…今日だけで3回目じゃない…。第2学園守備隊が解散して、特自の警備が縮小された途端にコレって…。学園生徒会長に臨時学園理事長が抜けてるから、まあ警備がザルになるから仕方ないといえは仕方ないけど…。』

「——やはり学園内に内通者がいるものかと…」

『でしようね…。——できるだけ早く帰るようにするわ。…御苦勞様。』

「はっ」

そう応じると舞弥は携帯電話の通信を切り、捕縛した女を引きずるようにして校舎屋上から立ち去った。



視線の先——舞弥がスナイパーを始末した光景が千尋の視界に映った。

——屋上のスナイパーの気配が、消えた。

——再び訪れる静寂。

辺りに響くのは虫たちの鳴き声と、遠く校舎内から僅かに漏れて来る生徒たちの声。

そして箒の緊張によって荒くなった息。

「ち…千尋?」

震える声音で箒が声をかけてくる。

「…ん、もう平気だ。」

陽気で無邪気な声音で二重の意味——もう狙撃される恐れはないという意味と、手にめり込んだ銃弾は自分の指で引き抜いて、ジワジワとだが治癒が始まったという意味を孕んだ言葉を言い

放った。

「千尋ツ!!?」

「うわっ!!?」

瞬間、箒が急に立ち上がり、逆に千尋を押し倒すような姿勢になっ
てしまう。

だが箒は気にする事なく千尋の左手に手を伸ばして、傷口を見る。
傷口はもう塞がりかけている——。

それで箒は安堵する。

——そして押し倒したままの姿勢で千尋にもたれかかる。

「ほ、箒☒」

思わず千尋は困惑し、頬を紅く染める。

「……ばかあ……」

ふと、箒は泣き出してしまう。

そして千尋の胸を力の籠っていない拳で、ポカポカと殴る。

「痛い痛い。」

「ばかあ……ホントに、ばかあ……」

やはり箒は泣き続けている。

「狙撃が止まらなかったら、お前死んでただぞ……なんで、私を置いて逃
げなかったんだ……お前が、死んじゃったら私……ぐすっ……ほんと
に、ばかあ……」

また自分の所為で誰かが死ぬということへの恐怖。

親しくなった家族がまた不意に居なくなってしまうということへ
の恐怖。

ロリシカで味わった、家族以上に親しみを抱くモノにもう逢えなく
なってしまうかも知れないということへの恐怖。

それらによる感情から箒は泣き出してしまったのだ。

「……めん。」

千尋は酷く申し訳なきような顔をして、箒に謝る。

確かに箒の言う通りだった。

あそこで狙撃が止んでいなければ自分は死んでいたかも知れない。
そしたら箒は?

自分の大事な、家族以上に親しみを持つ存在を置いて一人で死んでいたかも知れない。

それは周りの人間が自分のすぐ近くで死んでしまった墨田大火災やロリシカ・ベルホヤンスク統合基地第2前哨基地で味わったトラウマを思い起こしてしまう上にまた箒を1人にしてしまうのだ。

——本当に酷く、申し訳ない。

「…ほんとに、ほんとに、だぞ…ぐすつ…」

箒は泣きながら、右手の小指を千尋の前に突き出す。

それにまた千尋は困惑してしまう。

「…指切り。…絶対、絶対に私を1人にしないって…約束してくれ。」

まだ目頭に涙を浮かべたまま、鼻をズズツと鳴らしながら言う。

それに千尋も微笑んで、言った。

「ああ。約束する。」

右手の小指を差し出して、2人は小指を絡ませて

「ゆーびきーりげーんまーん♪うーそつーいたら♪」

2人で声を合わせて、小指を絡ませた手を振って

「千尋の股間を蹴ーり上げる♪「え、いやちよ、それは」ゆーびきつた♪」

——最後は、箒に一方的にされてしまう。

股間を蹴り上げられるなんて、男からしたら堪ったものじゃない。

股間を打撲するなんて事は一度体験したが…アレは酷く痛い。

かつて新宿で戦った、自分の血を吸ってバケモノに堕ちたモノ

——光はミレニアンと呼んでいた——による念力や波動なんかよりも痛い。

こう、じわあ…と、鈍痛が全身に波及して行くのだ。

千尋的には…いや、男からしたら弁慶の泣き所や足の小指を打撲するよりも遥かに痛い。

だが。

「うん、約束したからな…うん。分かったよ。」

約束を、破った時は酷く痛い目を見るだろうが、要は約束を破らな

ければ良いのだ。

——だから、契りを千尋は受け入れた。

そして箒は嬉しそうに笑った。

さっきの恐怖を拭い去れたような——そんな笑顔。

そんな中、千尋はふと、ある事に気付いた。

「——なあ、箒」

「ん？なんだ？」

「…そろそろ降りてくんね？その…この体勢は……」

顔を紅くしながら、濁して言う。

——ちなみに2人の今の体勢は、騎乗位だった。

「!?う、ああッ！す、すまない!!？」

箒も自分の状況を察し、顔を墨田区の東京ソラマチ前屋台街で光にカップル、と言われた時以上に紅くして千尋から飛びのいて羞恥心に塗れた顔を浮かべる。

「——あ……」

だが、もうひとつ大事なことを思い出す。

——それは。

「山田先生の、召集……」

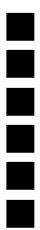
ふと、千尋が呟き、中庭に立っている時計に目を向ける。

時刻は20時37分。

召集時刻は20時40分。

「まずい————ッ!!？」

2人は叫ぶと、全速力で第4アリーナに向かって行った。



生徒寮・1035室

鈴は自室のベッドに蹲る形でそこにいた。

ふと、先程あった出来事を思い出す。

鉛のように重たい体を引きずって帰って来たのだ。
そして、一夏に会った。

一夏の顔を見たことで鈴は救われた気がした――。

――だが。

「あ、鈴！シャルなんだけど、何で退学になったか知らねえか!!?」
疲労を溜め込んでいた鈴の顔を見るなり口にしたのは、心配することではなく、先日HRで山田先生から退学になった事を知らされたシャルル・デュノアが何故退学したか知っているか否か。

しかもまるで鈴の疲労に満ちた顔など眼中にさえないような顔で言った。

(慰めてくれたっていいじゃない…あたし、今日も男のを啜えさせられたのよ?なのに――!!?)

声にならない叫び。

いや決して声には出来ない。

何処にいるかも分からない中国共産党隷下特別武装隊第81班が懐柔して学園に放った情報提供者に聞かれたら彼らに密告されるから。

密告されたらどうなるかは容易に想像できる。

危険思想の持ち主、党への反逆者、国家の敵――それらに仕立て上げられ、処刑されてあの世送りだ。

それに情報提供者が聞いていなかったとしても一夏に今のありのままの自分を話したら軽蔑されるかも知れない。

だから鈴は何も言えない。

誰にも話せない。

ただただ鬱憤が溜まっていく――。

だが、もう限界で――目頭から涙をボロボロと流してしま

う。
「な、なんで泣いてんだよ!!?泣いてばっかじゃ分からないだろ☒なんか知ってるなら言ってくれよ!!?」

やはり、鈴は眼中に無かった。

今はシャルにしか一夏の頭の中にしかない。

鈴が泣いてるのに、シャルについて聞き出そうとしている

「なんで千冬さんやシャルばかりなの!!? 多少はあたしの事を心配してくれたって良いじゃない!!?」

「なんか辛い事が有ったんだろうけど、お前の場合、些細な事だろ☒シャルの方がお前なんかよりもっと難しい事を抱えて——」
瞬間、鈴の中で一夏に対して殺意が湧き上がる。

「——些細な事、ですって…?」

震える声音で鈴は聴く。

「些細な事…? ふざけんじやないわよ!!?」

思わず鈴は一夏の胸倉を掴む。

「あんた、あたしの何を知ってるの☒何も知らないでしょ!!? 何も知らない上に知ろうともしないクセに、勝手に【些細な事】とか決めつけないでよ!!?」

「何言ってるんだよ!!? 些細なことだろ!!? シャルは会社に利用されてスパイに仕立て上げられたんだよ!!? そっちの方がお前なんかよりもっと大きな事だろ!!?」

それで鈴はシャルが自分と同じ——いや、近しい存在なのだを知る。

だがそれ以上に、鈴が死に物狂いで生きてきた中で味わって来た凄惨で陰鬱な陵辱や穢れの数々を知らないでいながら、そして鈴のそれを知ろうともせずに一夏はそれを【些細な事】と一蹴した。

そして、『お前なんかより』大きな事。そう言った。

——瞬間、鈴の中で湧き上がった殺意は何倍にも増幅して

「最っ低!!? 犬に喰われて…死んでしまえツ!!?」

冗談など微塵も含まれていない、怨嗟と呪いに満ち満ちた罵声と共に、一夏を殴り飛ばした。

「あが~~~~!!?」

一夏は間拔けな声を上げながら殴り飛ばされて、壁にぶつかり気絶する——。

多少鬱憤を晴らせた鈴は早く自室に帰ろうと振り返ると――
――そこには同じく帰って来たばかりの千尋と箒がいた。

――2人には、見るからに親しみに満ちたモノが見て取れた。

思わず、鈴は嫉妬に満ちた瞳で睨みつけてしまった。

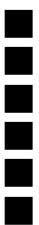
(あたしが不幸な目に、一夏に見てもらえないでいるのに、何で――

――?何であんた達は仲良くイチャイチャ出来てるの――

――?あたしだつて一夏とあんた達みたいな関係になりたいのに何であんた達ばつか幸せになれて、何であたしばかり――ツ

!!?)

内心叫ぶと、2人の横を走って行って、逃げるように自室に飛び込んだ。



IS学園・第4アリーナ

「はあっ…はあっ…は…」

第4アリーナ、格納庫の中を千尋と箒は共に息を荒くして駆け抜けて行っていた。

格納庫には喧騒に満ちており、山本三尉率いる特務自衛隊整備科隊員を中心とした整備兵たちの怒号と多種多彩な機械音が2人の鼓膜を叩く。

「遅れました!すみません!!?」

アリーナの待ち合い室のドアを開きながら、2人は叫ぶ。

視界にセシリア、簪ら召集を受けた生徒と召集をかけた当の本人である山田先生が飛び込んで来る。

「2人共遅いです…何をしていたんですか?」

「申し訳ありません!!?」

山田先生が少し怒り気味で言う。

遅れて来た2人は、すかさず謝る。

予定時刻に合わせて準備していた各種スタッフに迷惑を掛けてし

まったのだから、叱責されて当然——と言える。

途中、狙撃という思わぬ妨害があったが結果オーライ……という状況であった為無問題だろう。

「遅れて来た2人のために再度説明します。」

予定通りの時刻に来ていたセシリアと簪を見回すように山田先生が告げる。

「今回、特務自衛隊が臨時で接收しているこの第4アリーナで行うのは特務自衛隊の21式試製統合機兵【打鉄甲一式】2機とイギリス陸軍の統合機兵【ユリウスMk. 1A】、倉持技研の21式試製統合機兵【颯（あかしま）—改二】の2部隊による、タッグトーナメント直前の模擬戦闘訓練になります。」

千尋と箒、そしてセシリアと簪は言葉なく頷く。

このタイミングで統合機兵のテストパイロットになった4人が集められる理由はそれくらいしか思い付かない。

試作兵器、しかもシミュレーター演習でしか動かしたことのない機体でタッグトーナメントにぶっつけ本番で挑め——など、無茶にも程がある。

それにシミュレーターと実機とでは僅かに違う。

説明し難いが、感覚的に違う——とシミュレーターで動かした後実機を操縦するパイロットはよくいる。

だから実機を用いた演習を行うのだ。

「ただし、ISの訓練とは違い、各統合機兵の所有先——

——特務自衛隊、イギリス陸軍、倉持技研からの要望と諸事情により訓練では実弾の代わりにペイント弾もしくは模擬弾、長刀の代わりに硬化プラスチックを用いた模擬長刀、レーザーの代わりに観測用レーザー照射機を代用して下さい。」

山田先生の言葉にセシリアと簪は驚く。

だが、千尋と箒は驚かなかった。

——訓練で模擬装備を使うのは戦術機じゃないもの事だったから。

「な、何故ですか!?!?」

セシリアが問う。

「理由は幾つかあります。まず第一に機体の破損を危惧して——
——今日からタッグトーナメントまで1週間しかありません。そんな中で機体が破損し、タッグトーナメントに出られなくなった——
——という事態を避ける為です。」

山田先生が言う。

「次に調達できた弾薬の数。タッグトーナメント直前に開発が完了し、調達あるいは生産できた弾薬はタッグトーナメントで勝ち残っていない分だけ——予算などの諸事情と生産に間に合った弾薬を無闇に訓練で消費すればタッグトーナメントの試合で使う分がなくなる——だから訓練ではすみませんが、模擬弾などを使うことになります。」

（——既存の弾薬の調達が間に合わなかったのは、【女性利権団体】の妨害が入ったからなんですけどね…。）

山田先生は複雑そうな顔をして、内心呟いた。

「以上の理由から、訓練では模擬装備を使ってもらいます。——

——よろしいですか？」

微笑みながら山田先生が聴く。

「はっ異存ありません。」

「了解しました。」

千尋と箒がキツパリとしている、如何にも軍人然とした声音で応える。

「あ、り、了解しましたわ!!?」

「り、了解…」

セシリアと簪は2人の応答に一瞬戸惑ったが、了解した——



第4アリーナ・戦闘フィールド

普段なら——否、他のアリーナならば単なる更地でしかな

い闘技場めいたフィールドであるそこは、明らかに違う様相となっていた。

——何故なら。

「…なんで障害物が置かれたままなんだよ…」

千尋が愚痴ったように、強化装甲殻の訓練で使用した障害物がある程度を除いて残されたままだったのだ。

更地のフィールドに設置されているのはコンクリートの壁にコンクリートの柱、そして即席の塹壕——。

タッグトーナメントの試合で使われる第2アリーナとは似ても似つかない——というか、有り得ない構造だった。

『——明日のHRで伝える予定でしたが、タッグトーナメントは障害物を配置しそれを用いた戦闘にもなります。…ですから第4アリーナの障害物は気にしないで下さいね。』

山田先生から全員に伝えられる。

だがそれは、全員が全員、初耳だった。

特自からさえ、そんな連絡は受けていない。

——おそらく今日か昨日に決まったんだろう。

だがタッグトーナメント時のアリーナの高度制限が強化された事は知っていた。

——障害物の配置。

——飛行高度制限強化。

「——これ…対バルゴン戦を想定してないか…？」

開始地点で待機している打鉄甲一式のフルスキンの頭部装甲の下で千尋は呟やく。

バルゴン戦では否が応でも対地高度20メートル未満から対地高度3メートル以上もの低空飛行を迫られる。

戦術機で低空飛行は技術が必要だがISや統合機兵ではそうでもない——つまり、今回の試合で低空飛行に慣れたパイロット

を生み出し、その人材を徹底して育成、対巨大生物戦に投入——

——される可能性があるから鍛える、と。

そういう事なのだろう——と、あくまで個人の予想だが千

尋はそう思った。

『その可能性はあるだろうな…北海道などは樺太と宗谷海峡を挟んでバルゴンの脅威にさらされている…。今回のタッグトーナメントは、今後起き得るであろう巨大生物との戦闘——を想定しているんだらうな…。』

箒が通信ウィンドウ越しに千尋に言う。

『総員、配置について下さい。これより模擬戦闘訓練を開始します——』。

管制室の外付けスピーカーから響く、山田先生の声——。

『——はじめ!!?』

瞬間【打鉄甲一式】2機と【ユリウスMk. 1A】、【颯—改二】が動き出した。

『状況開始——』

通信ウィンドウ越しに響く箒の号令。

「了解！」

千尋もそれに応じる。

そしてアリーナのフィールドを写した広域マップに青の光点（グリップ）——千尋と箒の打鉄甲一式と赤の光点（グリップ）——セシリアのユリウスMk. 1Aと簪の颯—改二と、障害物となる物体と塹壕などような陥没した地形が映される。

『千尋、作戦通りに行くぞ。』

「りょーかい。」

個人通信を終えると、2人はNOE（匍匐飛行）でセシリアと簪目掛け、出来る限りコンクリートの壁などの遮蔽物に身を隠しながら突貫を開始した。

瞬間、セシリアがレーザー兵器——の模擬装備である観測用レーザー照射機だが——【スターライトMk. iii】とBT兵器【ストライク・エアMk. I】を展開し、穿つ——。

B T兵器【ティアーズ】の発展型にして戦術機用の兵装。

本来の戦術機なら6基搭載されているのだが統合機兵であれば容量や供給できるエネルギーの都合上、2基が限界——とはいえ、脅威に変わりはない。

なにせ、あらぬ方向からレーザーを照射してくるのだから。

（——レーザー警報システムが付いているから、事前に勘づけるけど…きつついなあ…。）

千尋は内心思い、苦笑いを浮かべる。

攻撃用レーザーと違い、大気をプラズマ化させる程のエネルギーを持たないが故に不可視である観測用レーザーは認知し辛い。

そのハンデとして戦術機にも搭載されているレーザー警報システムを装備してくれているから有難いが、このままではジリ貧だった。

——さらに厄介なのが簪の颯——改二のマルチロツクオンシステムだ。

今回は硬化プラスティックの模擬弾頭だが、その数は最大64発——それはシャレにならない数だった。

幸いそちらはまだ喰らっていないし、何より64発一斉発射などというマネを行えば、ミサイル発射基自体が発射時の反動で破損する——。

——瞬間。

『レーザー照射警報』

網膜にそう投影すると同時に、ヘッドセットにけたたましい警報がなる。

（そら、言わんこつちやない——！！？）

千尋は内心毒づきながらもすぐさま照射源の方角に90式戦車の複合装甲を流用した追加装甲シールドを向けて、レーザー照射を防ぐ——。

それで、レーザーは防げたがシールドは小破判定を受けてしまう。

すぐに千尋はシールドを手放すと、足元に転がっていた巨大なコンクリートの壁——の一部の端を勢いよく踏んづけてコンクリートを立たせて遮蔽物にして、それに身を隠しながら空自のF—1

5Jから頂戴して来た【20mmM60A1機関砲】の銃身をビット目掛けて——引き金を、引く。

瞬間、火薬が炸裂し、銃口からマズルフラッシュの閃光とガンパウダー、そしてけたたましい銃声と共にペイント弾が空気を切り裂き、ビット目掛けて、穿たれる——。

——だがしかし、それをビットは躲してしまおう。

ペイント弾はビットの後方——観客席のシールドバリアに虚しく弾着する。

「ちっ！」

思わず千尋は舌打ちをする。

競技用ISとは違い、火器管制システム（FCS）を実装しているため、いづらか射撃補助を果たしてくれる——だが、やはり装着者の射撃能力も影響してしまう為、千尋に至っては強化装甲殻やISよりはマシとはいえ、やはり射撃精度が低くなってしまるのが難点だった。

だが目標をすぐに切り替え、上空で滞空しているセシリアに穿ち——

——命中。

——瞬間、ヘッドセットから鳴り響く甲高い警報音。

『警報：ミサイルワーニング』

網膜にそう投影されると同時に広域マップの新規ウィンドが展開。

ミサイルロックオンされたのは——自分と、データリンクしている筈。

そして照射源は簷の颯——改二。

——瞬間、マルチロックオンミサイル【山嵐】が4発穿たれる——と同時に。

「フレア発射!!？」

千尋がそう叫び、腰部のサイドスカート部分に仕掛けられた高熱によって熱探知ミサイルの攻撃目標を逸らすIRフレアと、重金属弾のダウングレード版であるチャフを射出——。

それで簡易な熱探知システムしか積んでいない模擬弾はフレアを目標だと誤認——千尋と筈から大きく外れてしまおう——

だが次の瞬間。

『レーザー照射警報』

また網膜に投影される。

今度はコンクリートの壁を遮蔽物にしている千尋の後方――

「くそ」

千尋は落ち着きながらもそう毒突き――すかさず、背部兵装担架を起動――。

展開された背部兵装担架にマウントされている「ブーニングM2重機関銃」が火を吹き、ペイント弾をオートで穿つ――。

それでやつと1基、ビットを撃墜する。

「よう」

千尋は呟く。

だが同時にまた放たれる山嵐――。
数は2発。

瞬間、箒の打鉄甲一式が山嵐の前に出る。

そして拡張領域から量子化していた近接戦闘ブレードを2本展開し、抜刀――。
同時に腰部跳躍ユニットを吹かし――機体を急旋回させる勢いを利用し――。

一ノ太刀で先頭の弾頭を右から左に逆袈裟で斬り裂き、返す刀で二ノ太刀を放ち後方から迫り来た弾頭の左下から右上に山嵐の弾頭を斬り刻む――。
そして、弾頭は爆発するかわりに中に入っていたペイントをぶち撒

け――それが箒の打鉄甲一式にかかる。

『超電導装甲体残量・92%』

千尋のデータリンク先の、箒の打鉄甲一式のアイコンにそう表示される。

超電導装甲体――統合機兵に搭載、および戦術機に搭載予定である、ISの絶対防御の代用品。

諸事情でISコアではなくISコアが生み出すエネルギーに類似したモノを使っている統合機兵は絶対防御はあるものの、安定性に欠けるために安定化を図り、尚且つ強度向上を狙った防御システムとなっていた。

『千尋！後退しつつ牽制射撃!!?』

「了解!!?」

背部兵装担架のM2重機関銃を展開してバックブーストで後退しつつ簷に向けて射撃する筈の命令に千尋が応え、千尋も拡張領域から85mm6連装リボルバー型迫撃砲を展開。

銃口の仰角を高く設定する。

——遮蔽物に身を隠しながら、曲線射撃による面制圧砲撃を4斉射、穿つ——。

そして、2人は一旦塹壕に架かる仮設橋の下に後退——同
時に、遠くで響く爆発音。

「——千尋、どう思う?」

そして息を整えながら筈が問う。

「どうって?戦況?2人の戦い方?」

「2人の戦い方だ。」

「——あいつらは今の所遮蔽物越しに撃つて来てるよな…敵を倒すなら遠くで——まあ、当たり前の戦い方だよな。」

「ああ。だが、変だと思わんか?2人共案外高い高度で戦っている。言われてみればそうだ——と千尋は思う。」

2人共、自分達と遮蔽物に撃っているが高度は高めの場所にいるため、銃撃は当てやすかった印象がある。

ビットによる強襲を除けばお世辞にも遮蔽物をあまりうまく使えているようには思えなかった。

つまり——。

「遮蔽物を用いた戦闘に慣れてない?」

千尋が聴く。

「多分、な。」

——ならば。

「……いいこと思いついた。」

千尋はニヤリと笑う。

箒も意図を察してニヤリと笑う。

広域マップには千尋と箒に接近中のセシリアと簪を示すグリッ

(光点)――。

恐らく、一網打尽にするつもりなんだろう。

だが今度は、警戒してか高度を下げて来ている。

ならば、余計好都合――。

『やるぞー!』

箒の裂帛の号令――。

同時に2人は互いに反対を向いて、仮設橋から飛び出す。

――瞬間。

「対レーザースモーク!!?」

千尋が言うと、肩部装甲ブロックに取り付けられていた発射基から

ロケットアシスト付きの擲弾が放たれ――空中で炸裂。

同時に、弾頭内に詰められていた高濃度の重金属粉塵が展開――

――重金属雲を形成する。

重金属弾より重金属粉塵の展開時間は短く、わずか45秒が限界――

――。

だが、それで充分だった。

広域データリンクが途絶し、相手の位置が分からなくなる。

現在地をロストする。

さらに遮蔽物に囲まれ、尚且つ重金属粉塵による視界不良――

――。

それは双方が共にそうだった。

――だが、むしろ2人にとってこの状況は対人戦において

は格好のフィールドだった。

『突撃開始!!?』

箒の号令で2人は塹壕から飛び出し、遮蔽物群に突入――

重金属粉塵が展開され、視界不良になっている中、複雑過ぎる地形に

突入するなど自殺行為――。

だが、それは問題ない。

広域マップを見た時にあらかたは把握したし、後退しつつ細かな地形を把握して脳に焼き付けた。

だから問題ない。

だが突入するにしてもただ突入するだけではすぐ対処されてしまう。

素人ならともかく、代表候補生の2人ならすぐに対処されてしまう。———なら、ただ突入するだけでなくしてしまえば良い。

『やるぞ！ 難度Cのオルブライトターンだ!!?』

「了解!!?」

瞬間、2人は勢いをつけて僅かに跳躍———そして、神経を研ぎ澄まし、瞬間反射能力をフル動員する。

———跳躍した直後、機体を90度傾けて遮蔽物であるコンクリートの壁に脚をつく。

そしてすかさず跳躍。

反対の壁に体勢をぐるんと反転させて再び脚をつく。

次から次へと壁を足場に、飛びながら突き進んでいく———

そしてそれを繰り返しながら2人はさらに加速。

重金属粉塵によって形成された霧が晴れてしまう前にセシリア達に接敵せねばならない。

———時間との勝負だ。

さらに狭く複雑な地形で、尚且つ両機が密集している状況で行う高難易度の技術であるオルブライトターンは、失敗すれば大惨事になりかねない———。

以前、墨田駐屯地で戦術機訓練でオルブライトターンを使った兵士が失敗して爆死した———なんて話も聞いた事がある。

いくら超伝導装甲体を持つ統合機兵と言えど、ただで済むことはない。———

だから繊細過ぎる程にまで注意する必要がある。

だが重金属粉塵の濃度は刻一刻と下がってしまう———だ

から、加速する。

織細過ぎる程にまで注意せねばならない技術で加速などアホか、と言われるだろう——だが千尋と箒にはやり遂げる自信があった。

——さらに加速。

重金属粉塵の霧が薄れる前に接敵するために——加速する。

4.5秒という与えられた時間までに間に合うよう、加速する——

そして対レーザースモークを放つ直前までセシリアと簪のグリッ
プ（光点）があつた場所まであと僅かといった場所で。

『!??!』

重金属霧の濃度が低下——広域データリンクが回復して
しまう。

——そしてセシリア達は千尋達の位置を、千尋達はセシリ
ア達の位置を認知する。

——千尋達が進んで行っている厚さ30センチ程のコン
クリートを隔てて——両者はいた。

セシリア達は思わぬ出現により、混乱する。

それを見て千尋は叫ぶ。

「——ここまで来たら突入すんぞ!!?」

『ああー牽制射撃2斉射!』

箒が応え、命じる。

千尋はすぐさま背部兵装担架を起動。

そしてマウントさせていた85mm迫撃砲をアップワード方式で

展開——2斉射穿つ。

そしてコンクリートの壁の向こうに弾着し、爆発——。

同時に、加速しながら2人は拡張領域から追加装甲シールドを取り
出し、突き出すように前面に展開する。

——統合機兵は戦術機や強化装甲殻と違い、超伝導装甲体
を持っているため、多少無茶が効く。

———だから。

『このまま突っ込むぞ!!?』

「あいよ!!?」

2人はセシリア達とを隔てるコンクリートの壁に追加装甲シールドを突き出しながら突っ込む———。

統合機兵本体と追加装甲シールドの質量、そして統合機兵の移動エネルギーが加わり、コンクリートの壁を突き破り、粉碎———
|。

セシリア達が視界に映る。

セシリアと簪は驚きつつも、やはり代表候補生と言うべきか、すぐに対処しようとする———だが、遅過ぎた。

回避は間に合わない。

さらに打鉄甲一式の突貫して来た際の移動エネルギーと質量エネルギーをモロに食らえば一撃死不可避———。

だからセシリアと簪は近接兵装で迎撃を試み———千尋と簪はシールド先端のスパイクをセシリア達に向けて———さらに跳躍ユニットを点火し加速———。さ

『喰らえ、てめえ（貴様）らああああ!!?』

2人仲良く声を重ねながら、追加装甲シールドのスパイクをぶち込み———。

同時にセシリアのレイピアと簪の薙刀が千尋と簪のシールドスパイクと入れ違いで互いの装甲にぶつかり、火花を散らし———超伝導装甲体のエネルギー残量を削る。

だが千尋と簪もそれを気に留めず、シールドスパイクをさらに力強く、押し込んだ———。

「2人共ズルいですわ!!?」

格納庫に戻って響いたのはセシリアの恨めしい声だった。

「いや、だって対レーザーモークは使っちゃダメって言われてなかったし。」

千尋はケラケラと笑いながら返す。

「うむ、まああくまで『実戦形式』の訓練だったからな。」

箒も言う。

——訓練の結果は、引き分け。

最後のセシリアと箒の攻撃が千尋と箒の超伝導装甲体のエネルギー残量を削り、千尋と箒の突貫時の移動エネルギーと質量エネルギーがセシリアと箒の超伝導装甲体のエネルギー残量を削り切ってしまったのだ。

それはほぼ同時だった——だから、引き分けだった。

「みなさんお疲れ様でした。」

山田先生が声をかけて来る。

「オルコットさんと更識さんは障害物戦に不慣れでしたが、オルコットさんはよくビットによる強襲などをやり遂げました。ただ上空に停滞しがちでしたから、障害物に慣れることからですね…更識さんはミサイルを撃つ時に棒立ちになってしまっていましたから、今度は動きながら撃つてみましょう——時に篠ノ之くんに篠ノ之さん。」

「はい。」

「試合では重金属弾の使用は厳禁です。ですから訓練でも使用は控えてください。」

「はい。」

「まあ、言い忘れていた私も悪いです。…それに、2人のオルブライトターンは息もピッタリ整っていた見事なモノでしたから、見ものな点もありました。…ただ、着地する場所が等間隔だったからワンパターンでしたね。今後はランダムなパターンのモノを出来るように頑張ってみましょう。」

——今日はお疲れ様でした。解散！」

そう言つて、今日の訓練が終わつた。

I?????????????
翌日。

IS学園・第4アリーナ

廃墟の市街地——を想定した障害物が乱立する、特自が接収した統合機兵の訓練用アリーナ。

『ブレード1からブレード2！対象をハイパーセンサーで捕捉。方位08—04より接近中——お前が突貫して攪乱させ、注意を惹きつけろ！その隙に背後から私が強襲する!!?』

「——ブレード2、了解!!?」

箒がそう命じて、千尋が威勢良く応じる。

同時に路上を連続して短距離跳躍（ショートブースト）——断続的に跳躍ユニットのジェットを吹かせて小さな跳躍を繰り返す動き——で目標地点に移動を開始する。

『ブレード1・2』とは、箒と千尋の呼称名だった。

そして、2人は先の訓練の後からそれぞれポジションを決めたうえで訓練を行っていた。

千尋はアームブレードや長刀による近接乱戦が得意である為、突撃兵役の「突撃前衛（ストーム・バンガード）」ならびに「強襲前衛（ストライク・バンガード）」——最前線に位置し、近接戦・白兵戦を担当するポジションと前線に突貫し火力支援を行うポジション——を兼任で務めている。

箒は指揮官役であり、「強襲前衛（ストライク・バンガード）」ならびに「迎撃後衛（ガン・インターセプター）」——前述の千尋が兼任しているモノと同じポジションと中・近距離戦に対応し、現状を瞬発的に把握・判断する能力が求められるポジション——を兼任で務めていた。

前述の単語は戦術機のポジションで使われるものだが、統合機兵でもそれらのポジションでの運用も可能だろう、と判断したが故にそう

したものだつた。

また箒が指揮官を務めているのにも理由はある。

千尋は多少周りに気配りするものの、だいたい突撃しがちだったり、力任せや感覚で操縦してしまうクセがある為、お世辞にも指揮官に向いているとは言い難い。というか言えない。

そちらの才は周囲の状況を逐一確認して行動に移す箒の方が持ち合わせている為、箒が受け持つこととなった。

千尋が突撃・強襲前衛を務めるのも、千尋が力任せで感覚で操縦しているがそれが規則に囚われてなどいないモノでありながら、状況判断を的確に下しているように出来たモノで、障害物がある今回の状況では強襲と攪乱に向いていると箒が判断した為に千尋が受け持つていた。

先程、箒がISのハイパーセンサーで捕捉した機体――

【エネミー1】はこちらが待ち伏せ（アンブッシュ）していきそうな場所を徹底して潰して行っていた。

『ブレード2・エネミー1は間違いなくオルコットだ！ビットの索敵圏内に入らないように注意せよ!!?』

セシリアはさすが代表候補生というべきか、たった1日で低空飛行と遮蔽物を利用した戦闘に適応して、今では遮蔽物の影からビットによる強襲などをやってのける程までになっていた。

制圧能力――特に多数点制圧はセシリアのユリウスが一番だろう。

面制圧は箒の颯―改二が一番。

それに引き換えこちらはどうか――両肩に搭載可能な【84ミリ8連装多目的誘導弾発射基】と【85ミリ迫撃砲】の曲線射撃による面制圧くらいしか出来ない。

元となったISが千尋と箒が第2世代だったのに対し、セシリアと箒は第3世代、第2・5世代のものだから差が開くのは当たり前だろう。

――閑話休題。

『エネミー2』――箒は後方で構え、セシリアが接敵した後に

支援を行いつつ、背後を取るつもりだろう。』

簪は山嵐による飽和攻撃を敢行した直後に近接戦を仕掛けてくるケースが多い。

さらに初歩的ながらオルブライトターンの…もどきをしながら強襲を仕掛けてきたりしていた。

「んじゃ、どうするよ…」

『若干作戦を変更する。手順は——』

結果的にいえば千尋と箒のチームの方が勝った。

まず千尋の打鉄甲一式が20ミリ機関砲を乱射して、遮蔽物のコンクリートを銃弾が叩いて砂煙を巻き起こし、ビットのセンサーとセシリアの視界を阻害。

直後に千尋は跳躍。

アリーナの高度制限ギリギリの高さから20ミリ機関砲や40ミリグレネードランチャーを斉射。

さらに、跳躍ユニットを上空に向けて最大出力で噴射して急降下を開始——。

拡張領域から取り出した追加装甲シールドのスパイクを移動エネルギーと質量エネルギーを加えてセシリアに叩き込む——同時に超電導装甲体が展開され、シールドエネルギーを削り取る。

アリーナの高度制限が掛けられた上に遮蔽物に身を隠さなくてはならないとセシリアと簪は身に染み込ませてしまっていた為に、高度制限ギリギリからの攻撃には面食らっていた。

同時に簪が山嵐を放ち、千尋はシールドを上方に展開しつつバックブーストで後退——一瞬遅れて山嵐の模擬弾がセシリアを巻き込む形で着弾。

それでセシリアもバックブーストで離れたが何発か被弾し、先の千尋の突貫によるダメージが災いして、シールドエネルギーは残量ゼロとなる——それでセシリアは戦闘不能になった。

だが同時に千尋もシールドに何発か喰らいシールドが大破判定を受け、さらに左腕が中破判定を受け、脚部と左跳躍ユニットは大破判定を受けた——千尋もそれで戦闘不能になった。

瞬間、簪が薙刀で箒に斬りかかる——箒は銃火器をパージして少しでも機体を身軽にして長刀を抜刀——。さらにバックブーストで箒は簪から離れるように後退。簪はそれを追うように突貫。

そして行き止まりに辿り着き、簪が箒を追い詰めて薙刀を振り下ろす——が、箒はそれを予測していたかのように跳躍ユニットを吹かして機体を反転。

簪に背を向けるようにして跳躍ユニットをさらに吹かし、壁に飛び蹴りを入れて脚部に中破判定を受けながらも簪の薙刀の軌道の上を飛び越えて——長刀を投擲。

投擲された長刀は移動エネルギーと質量エネルギーを纏いながら簪の頭部装甲——の超電導装甲体に命中し、エネルギーを削り取る。

簪の薙刀は箒が飛び蹴りをかました壁に突き刺さり、隙ができてしまふ——。

さらに簪の背後に着地するなり拡張領域から長刀を抜刀し、跳躍ユニットを吹かして方向転換し、居合斬りを胸部装甲に叩き込んだ——。

それで、簪のシールドエネルギーは残量ゼロとなり、訓練は終了した——。大体の流れはそんな感じだった。

「相変わらず無茶しますわね……。」

格納庫に戻るなり、セシリアが忌々しげに恨めしい声音で千尋に言った。いや、どちらかと言えば呆れているのだろうか。

「いや、お前は早めに潰さなきゃ後々面倒くさい事態になりかねなかったし。」

(……まあ、実戦なら多分即死の高度だろうけどさ。)

千尋はやんちゃやそんな笑いをしながら応じて、内心そう呟く。

千尋の取った高度は確かにバルゴンのレーザーで撃ち抜かれてお陀仏になる高度だった。

第4アリーナがバルゴンの射程圏内になく、高度制限と障害物戦の条件が追加され、相手が人間だからこそ、出来た戦術だった。

「疲れたし、食堂で飯でも食いながら今回の反省会をしましょう。」
箒が言う。

「さんせー！あー、腹減った腹減った。」

千尋が馬鹿みたいに明るく——それでいて何処か気遣うように振る舞う。

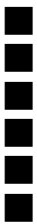
「……あ、そういえばさ……」

ふと、箒がふと思いついたように言った。

「織斑、アリーナで訓練したところ……見た事ないよね。」

「……え？」

箒のその一言に全員が啞然とした。



IS学園・屋上

「……ふう……」

千冬はそこでベンチに座りながら溜息を吐いていた。

「織斑先生」

「ん……ああ、山田先生。」

振り返ると、そこには山田先生がいた。

そして山田先生は微笑み、声をかけながら千冬のとなりに腰を下ろす。

「どうかなさったんですか？なんだか、元気がないように見えますけど。」

「ああ……先程、鏡に会いに行ってきたんです。」

千冬はポツリと言う。

それで山田先生は静かに黙りこむ。

「自分語りになりますか——あんな処分を出してしまったものですから、当然行くのに激しく迷いましたし、何より面会謝絶——などもあり得ると思いました。」

千冬はIS委員会からの命令とはいえ、鏡ナギの負傷をナギ自身を軟禁することで封殺してしまったのだ。

——拒絶され、恨まれても仕方ないと言える。

だが。

「でも、面会を受け入れてくれて——それで、酷く安心しました。」

「……」

やはり、山田先生は黙ったまま千冬の話聞く。

自分が口出しすれば、それから言い訳の糸口を見つけて逃げてしまう可能性があったから。

彼女自身の意思から発せられた言葉が聞けないから。

「——なんというか、色々話しましたね：お互いに腹を割つて。」

千冬は、その時のナギの顔を思い出しながら続ける。

「包み隠さずに：鏡に下してしまった処遇の話や私が何のためにそんな処遇を下してしまったか、何の意思でその処遇を下したか……：下手をすれば一生口を聞いてくれなくなるかもしれない内容とか、2人の秘密にしようと約束したこととか……：とにかく、色々：ですね。」

苦笑いを浮かべながら千冬は言う。

「——彼奴の話聞いて、実感しましたね：私は人を傷つけたんだって……：これからどうするべきか……：酷く、悩まされているんです。鏡のような犠牲者を出さないようにしなくてはならない。だがそうすれば唯一の肉親である一夏を危険に晒すかもしれない、学園の異常さを正そうものなら学園そのものが封鎖され他の生徒達も将来を失って路頭に迷うハメになる……：どうするべきか……：答えが出ないんです。」

自嘲するような顔をして言う。

「でも、鏡は違ったんです。私みたいに悩んでいるんじゃないくて、もう既にこの先にどういう道を進もうか…決めていたんです。」

「…鏡さんの…道？」

「…ええ。…彼奴は義体技師になりたいそうです。IS乗りにならないなら、なれないなりに何か成せることを目指そう——と。…正直、私より立派で、そう考えられる彼奴が少し…眩しかったですね…。」

千冬は己を卑下するように言う。

そんな千冬に対して山田先生が励ますように言う。

「…でも、織斑先生にも、織斑先生なりに出来ることが…あると思いますよ…。」

「……………そうか…そうだな…私もいい歳だから、少しはそういうのを探して、少しでも大人にならないとな…。」

千冬は覚悟を決めたように言う。

——だが、世界は確実に、破滅に転がり落ちて行っていた。



墨田駐屯地・IS学園間ライフライントンネル

連絡列車。

IS学園に戻る途中の光が乗って、疲労の溜まった体を椅子に預けながら座っていた。

——ふと、携帯電話が鳴る。

——私だ。」

『光ちゃん☒』

電話の相手は燈だった。

ひどく焦燥に塗れた声音をしている。

「燈か。どうした？」

『今、ロリシカ軍から緊急連絡が入ったの!!?』

瞬間、光は嫌な予感を感じた。

「何があつた？」

『バルゴンの一部梯団が、ロリシカ・ロシア間のレナ川国境線を越え
たつて——!!?』

——雷に打たれたような衝撃が、光に走る。

いつかは起き得ると恐れられていた事態——バルゴン包

囲防衛網が破られるという事が起きてしまったのだ。

つまりそれは、ユーラシア破滅の始まりを意味していた——
|。

EP-24 狂気ノ盾（挿絵付き）

IS学園・多目的室

深夜に急遽設けられた臨時の会議室にはパイプ椅子と長机、そしてプロジェクトが設置されており、その部屋には各部隊の指揮官の兵士や関係者たち――。

特務自衛隊第1特別邀撃隊司令官兼IS学園臨時理事長

【片桐光】一佐。

特務自衛隊第1学園警邏隊指揮官

【永井頼人】三尉。

特務自衛隊特一級機動隊指揮官

【権藤吾郎】一佐。

特務自衛隊学園臨時理事長秘書官

【久宇舞弥】二曹。

特務自衛隊第1戦術機甲連隊第2大隊指揮官

【神宮司まりも】三佐。

陸上自衛隊第2戦術機連隊第3大隊第17小隊指揮官

【鷹月仁】一尉。

海上自衛隊日米臨時編成軍艦隊日本方面司令官

【神宮司八郎】海将。

海上自衛隊日米臨時編成軍艦隊旗艦やまと艦長

【阿部雅司】一佐。

アメリカ海軍日米臨時編成軍艦隊米国方面司令官

【ウイリアム・ステンツ】少将。

イギリス海軍欧州極東派遣軍艦隊総司令官

【シエルビー・アレクサンダー】少将。

ドイツ陸軍第666戦術機中隊指揮官

【ユリア・ホーゼンフェルト】大尉。

ドイツ陸軍第666戦術機中隊本部付き将校

【エミールリア・カレル】中尉。

特務自衛隊モナーク機関派遣自衛官

【家城燈】三尉。

IS学園教師代表

【織斑千冬】。

IS学園教師代表補佐

【山田真耶】。

情報庁暗部当主兼IS学園生徒会長・ロシア代表

【更識楯無】。

特務自衛隊第1臨時試験分隊

【篠ノ之千尋】三曹。

特務自衛隊第1臨時試験分隊

【篠ノ之箒】二曹。

日本代表候補生

【更識簪】。

イギリス代表候補生

【セシリア・オルコット】。

ドイツ陸軍黒兎隊ドイツ代表候補生

【ラウラ・ボーデビツヒ】少佐。

中国代表候補生

【鳳鈴音】。

——それらの面子が集結していた。

「——夜分遅くに集まって頂き、申し訳ありません。」

プロジェクターが壁に投影している世界地図をバックに光が言う。

「——すでにご存知の方もいらっしゃるかも知れませんが、先日、突如西進を開始したバルゴンによりロリシカのスマン方面の防衛線が食い破られ、現在バルゴンがロシア連邦サハ共和国領内に侵攻中です。」

その言葉と共に室内にいた各々が——様々ではあるが異口同音とも言えるような反応を示す。

当然だろう。

今まで——17年間もバルゴンを封じ込めて来たロリシカというパンドラの箱が内側から開け放たれてしまったのだから。

同時にロリシカ共和国——旧ロシア領カムチャツカ地方の地図がプロジェクトによって壁に投影される。

「現在バルゴン梯団はロシア領内で2つに分裂。大規模梯団が中央シベリア高地へ。中規模梯団がレナ川沿いにヤクーツク盆地を北進——さらに第2波として旧ズイリヤンカを經由して旧チエルスキーに侵攻していた梯団も一部が突如来た道を帰るように西進を開始。現在、旧オホーツク市北部を進行中です。

：進軍速度から、ロシア領沿海地方に到達するのも時間の問題です。」

バルゴンの支配領域とバルゴンの侵攻ルートを示す矢印がプロジェクトによってロリシカ共和国の地図に投影され、光が現状を淡々と述べた。

やはり誰もが沈黙している。

——特に自衛隊や欧州連合極東派遣軍の兵士らは戦慄すらしていた。

当然と当然だろう。

ロシアという第3次世界大戦の火種がバルゴンによって潰される

——それは喜ばしいことだろう。

西側の敵が消えるのだから。

だが同時にそれはバルゴンの欧州への侵攻を許し、欧州がロリシカのような戦場になりかねない事を意味しており、決して他人事として楽観できるモノではない。

そしてそれは、宗谷海峡を隔ててバルゴンが樺太から侵攻してくる可能性のある日本にも言えることだった。

「——質問をしてもよろしいかね？」

ステンツ少将が挙手する。

光はそれに構いません、と応じる。

「何故、ススマン方面の防衛線はこうもあっさりと破られたのかね？」
「恐らく、ギジガ防衛線に戦力を配分し、さらに戦力が疲弊していた所に内陸部のバルゴンが一斉に——通常の4倍の数で押し寄せて来たんです。…戦力が疲弊している状況下で防ぎきれぬモノではありません。」

そう光が答えると、今度はユリアが手を挙げる。

「シベリアに侵攻したバルゴンの推定個体数はどのくらいですか？」

「推定2000体以上。うち大型種が10体…未確認だが超大型種も確認されたという話も聴いている。」

瞬間、光の話聞きながらメモを取っていた千尋と箒、セシリアや他の代表候補生の手が止まる。

「2000だと——」

それと同時にアレクサンダー少将が絶句する。

「何処からそんな数が湧いて出て来たんだ？」

アレクサンダーが呟く。

それに燈が応える。

「バルゴンの巣穴で成長途上だった個体が成熟し尽くしたか、未確認の巣穴から発した可能性があります。バルゴンの支配領域内の衛星画像は地形の変化や環境変化が著しい為に見落としなどが多いので——」

燈が応えるとアレクサンダー少将は納得するが、今度は神宮司海将が拳手をして、光に尋ねる。

「何故、奴らは今更西進を？17年間の間にいつでも出来たはずだが？」

「それは至極もつともであり、皆が一番気にかけていた事だった。」

「それは私から説明致します。」

再び燈が言う。

「原因は不明ですが、一部の巨大生物は現出時に私達モナークが「マナ」と呼んでいる未現物質の激減が関連している——」

「と考えられています。…巨大生物とマナの関連性は未だ不

明ですが、過去に観測したデータからマナの減少地域に巨大生物が侵攻する——というケースが多々見受けられた事から可能性は捨て切れません。」

そう言うと同時に「マナ」の濃度分布図が世界地図に投影される。「これらが白騎士事件以降に世界各地で観測したデータを基にまとめられた濃度分布図になります。——機密上、マナの観測方法にはお答えできませんが。」

——濃い地域は白、減少傾向にある地域は灰色で塗り潰されてきた。

濃い地域はアメリカやヨーロッパ、オセアニア州に東南アジア各国。

減少傾向にある地域は中央アジア、中国、朝鮮半島、ロシア、中東、アフリカ——そして、日本。

だが、ロリシカやウクライナは限りなく黒に近い配色だった。これでは燈の先の会見に矛盾する。

「——当然、先のマナの説明だけではバルゴンが突如西進を開始した理由にはならないでしょう。」

燈も自覚していたのか、そう言う。「全てがマナの減少だけではない。ということになるのですが。」

同時に新規ウインドがロリシカの地図上に投影される。

新規ウインドに映っていたのは——千尋達のロリシカ派兵時にバルゴン超大型種と対峙し、これを撃破した巨大生物——

——「アンギラス」だった。

「先の自衛隊ロリシカ派遣時において確認された新種のこの巨大生物は明らかにバルゴンを集中的に攻撃していました。——この巨大生物がバルゴンに敵対的、あるいは自らのテリトリーを犯すものとして攻撃的になっている事からバルゴンは自らの安全を鑑みてシベリア方面に侵攻したものと……。その証拠にこの巨大生物はシベリアに侵攻したバルゴン梯団には攻撃を行っておらず、ロリシカ国内に残っている個体殲滅を開始しています。」

燈が言い終わると衛星写真が映し出される。

——映し出されたのは白銀の雪原に蠢めく錆色の群れ——
——バルゴン梯団と、その物量を己の特殊能力や身体能力を以ってして難なく踏み潰し、押し潰し、薙ぎ倒し、血祭りにあげ、蹂躪するアンギラスが映し出されていた。

——以前の超大型種のレーザーによる傷は古傷となり、跡が残っているものの完全に塞がっており、やはり雪原の暴竜は遺憾なくその力を振るい、神亡き屍戚の大地を支配する君臨者としてバルゴンを殺し回っている。

「その間にロリシカ政府は西部戦線の戦力や民間人、軍属の人間や医療機関などを東部方面に移転を開始。現在ギジガ、マガダン、ネリガン、アヤンの市民や駐屯している軍をカムチャツカ半島のペトロパブロフスクカムチャツキー、ウスチベンチノ、オクチャブリスキーの3都市に移送中……との事です。」

光が言う。

それに不意に千尋は拳手をして、質問する。

「それは——ロリシカ政府が西部戦線を破棄した……ということですか？」

「そうだ。」

光は凜として応えた。

「ロリシカに強いられていたバルゴンを封じ込める為のパンドラの箱としての機能が喪われた以上、無理に西部戦線を維持して兵力を疲弊させるより首都ペトロパブロフスクカムチャツキーやアナデイリなどの東部戦線に集結させ、東部戦線の防衛を強化しようという動きだ。」

確かにそれは合理的だ。

バルゴンの支配領域ではない東部戦線を守ることで1人でも多くの国民を守りながらロリシカは国家として生き残ることができる。

そして千尋もそれを理解できる。

だが、それほどにまであっさり西部戦線を破棄するなど——

それでは——ギジガを守る為に自分達の目の前で散って

逝った兵士達の今までの犠牲は何だったのか――。

そのような感情が千尋の中で芽生え荒れ狂う。

それは千尋の隣に座っていた箒も同じで、報われない殉教者達を憂うような顔をしていた。

そんな2人の内情を察し、光は複雑な顔をしつつも口を開く。

「――ロリシカに派遣され、あの地の惨状を見た貴様らが複雑な事を思う気持ちは理解できなくもない。……少なくともロリシカに派遣された経験のある者――特にその先で仲間などの死を目の当たりにした者は――な。」

光のそれは、何処か母性を孕んだ声音だった。

――そして2人よりも以前から派遣されていた మరి도야仁、ウクライナでギャオスと死闘を繰り広げた経験のあるユリアやエミーリアも2人の内情に近い感情を浮かべた顔をしていた。

「――彼らの犠牲があつて、今のロリシカが有る――

――それは、忘れてはならない。……だが、同時に忘れてはならないのは、この先如何にしてロリシカを生かすか……ということだ。……その最良の選択が、ロリシカ国民、並びに軍の東部戦線への後退――

――ということだ。」

光はそう言う。

――西部戦線を破棄するという事は西部戦線で逝った者達の犠牲と同時に忘れてはならないという事があつた。

ふと、楯無が拳手する。

「ロリシカが西部戦線を破棄した結果、シベリアに侵攻し中国にも侵攻する可能性があるバルゴンへの対処は如何にするのですか？」

それに鈴がピクリ、と少し反応する。

所属先の国家だからだろう。

「シベリアではロシア軍が機甲軍団や3個IS連隊を用いて迎撃戦を敢行するらしい。中国も同じくロリシカとの国境線上に防衛ラインを形成し、迎撃戦に備えている。」

「国連は介入しないんですか？」

「――一応アメリカを中心とした国連軍の介入を提示したの

だが：ご丁寧に断られたらしい。『自国の問題は独力で解決する』——
——という姿勢を崩さなかつたらしい。」

光はそう言う。

つまり中国もロシアも、西側——特にアメリカの力を借りることなく状況を打破するつもりらしい。

その姿勢からは21世紀になっても未だに冷戦時代から東西間で続く民主主義と共産主義の対立構造が残っていることを知らしめられる。

「——こんな時だというのに、どうして……」

セシリアの呻くような声が聞こえた。

こんな時だというのに、何故人間はひとつになれないのか——

——セシリアが内情に孕んでいた思いはそれだった。

——アニメや漫画などの創作では、こういう状況下では人類は国家の枠組みを超えて互いに手を取り合う——という

展開だが、現実はそうはいかない。

……何より、人類同士を隔てるものが多過ぎるのだ。

思想。

宗教。

民族。

資源。

土地。

経済。

——人類を隔て、対立させる要因が多過ぎるこの世界で、
怪獣が現れたから人類が手を取り合いましたよ、と言われて、はい
うしましょう。……と言ってくれる国は確かにあるだろう。

理性的なら、確かにある。

千尋や箒、光だつてそう言うだろう。

だが、言ってくれない国も当然いる。

……そしてそういう国は決まって東側——中国やロシアの

属する、社会主義陣営だつたりする。

そもそも考え方が資本主義や民主主義と根本的に違う国が西側、資

本主義陣営の長であるアメリカに付き従ってくれる筈がない。

——なら、どうするか？

：光なら、こう言うだろう。

『残念だが切り捨てるしかあるまい。』

つまり東側陣営を見捨てるという事だ。

だが千尋にはそこまでの判断はまだ下せない。

全ての人間がそうでない可能性があるから。

そしてそうでない人間は少なくとも救われなくてはあまりに報われない。

——だから迷わされてしまう。

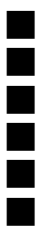
だが、今そんなことに迷っても仕方ない。

：今はシベリアに侵攻したバルゴンの会議に出席しているのだ。

東側と西側があーだこーだと考えている暇なんてない。

「次に、ロシア軍が発表しているシベリアに侵攻したバルゴンの迎撃方法ですが——」

——その説明に、誰もが目を見開いた。



ロシア連邦領・スタル市街

ヤクーツク盆地の端にあり、中央シベリア高原に隣接するその都市は林業で栄えている長閑な田舎町だった。

その街の未舗装の道路をガタゴトと鳴らしながらロシア軍の兵員輸送トラックが走って行く。

「…酷いもんだな。」

第29機械化歩兵連隊司令官の「ウラジスラフ・ゲオルギー」中佐は臨時の基地が置かれたヴリユイスタに向かう途中、外の景色を見て呟いた。

車外に見えたのはレナ川方面の街から避難してきた難民同然の人々で溢れかえっている光景だった。

歩いて避難している者もいれば、車に乗ってクラクションを鳴らし

ながら歩いて避難する人間をどかせて我先に避難しようとする者もいるし、それらの人々の合間を縫うようにバイクや自転車で避難する人もいるし、未舗装の道路だったが故に泥濘にはまり車を捨てざるを得なくなった避難民もいた。

地元警察や軍が誘導にあたっているが、混乱しているようだった。

「…長距離避難訓練などをしておくべきでしたね…」

ゲオルギー中佐の隣から副官の「ニカ・ベルナルト」大尉が言う。「バカを言うな。…そんなことしようなら国防省の連中が言ってる『対ロシア戦への備えは完璧』…っていうコトに反しちまう。そうなら、何されるか分かったモンじゃない。」

ゲオルギー中佐は嗜めるように言う。

「それに、だ…そんな事をすれば何処かの馬鹿が勝手なデマを流してそれを信じ込んだ国民が混乱を起こして中国やヨーロッパに流出してしまう。…それは今以上のロシアの国力衰退にも繋がるが他国の情勢悪化にも繋がる。———だから黙っていたんだろう。」

そうすれば人類の安寧に繋がるからな———と、声なき声をベルナルト大尉は聞いて、理解した。

だがその顔には納得しかねる感情を孕んでいた。

「…納得できない気持ちは分かる。だがな———仕方ないと諦めることも必要なんだよ。世の中は———」

ゲオルギー中佐が言うと、トラックが停車し、すぐ隣をT-80戦車の群れが走り抜けていく。

先頭の指揮車の銃座に着いているのは、皆若い顔ぶれだった。

民心の安心を図るためか健気に手を振ってみせる。

それに避難民は安心させられて、笑顔を取り戻す。

「———ああいう若い連中が戦争に、なあ…。」

だが、ゲオルギー中佐は複雑な心情をして呟いた。

齢50にもなる、シリア派遣経験もある彼からしたら若い兵士の戦死を多く見てきた為に、酷く神妙な気分になるのだろうか。

「果たして、どれだけ生き残れるか———」

ゲオルギー中佐が言いかけた瞬間、不意にトラックが反転。

来た道に戻り始めた。

スピードも先程より明らかに上がっている。

「おい！どうした!?!?」

ゲオルギーは思わずトラックの運転手に怒鳴るように聴く。

運転手は助手席の兵士と一言二言交わしたのち、困惑したように言う。

「ロリシカの化け物————バルゴンが攻勢を開始したそうです。進行方向からしてヴュリユイスタが戦場になる可能性があります。」

ベルナルト大尉が驚く。

ヴュリユイスタはこれから自分達が赴く筈だった駐屯地のある都市だった。

「移動先をウスチークトに変更します!…最悪、スントアルも戦場になる可能性があります!!?!?」

つまりそれは、ロシア軍主力に支えられている防衛線が突破される危険があるということだった———。

—————

ウスチークト基地

対ロリシカ戦に備えて作られたその基地に着くなり参謀スタッフ扱いで2人は地下の耐核司令室に案内された。

部屋に入るなり、2人の目は壁の大型モニターと側面の小型モニターに釘付けになる。

大型モニターには東シベリアの防衛線———ザバイカル防衛ラインが映し出されており、戦況がいくつもの兵科記号で示されていた。

やはり懸念は的中し、バルゴンは前線であるレナ川西岸のザバイカル第1防衛ラインを突破。

そのままヴュリユイスタを含むザバイカル第2防衛ラインに侵攻。

前線の部隊はほとんど全てが壊滅。

さらに第2防衛ラインの部隊もすさまじい速さで疲弊していき、敗走を開始している。

先程見た、避難民たちを励ますべく健気に振舞っていた戦車兵たちも敗残兵の一部になっているか、あるいは―――後者は想像しなくもなかった。

そしてその代わりにISが空いた穴を埋めるべく、飛来する。

「IS部隊の参謀付き指揮官が実力を見せつけようと勝手に出撃しなければ君を呼んだりしなかったのだがね。」

基地司令がゲオルギー中佐を見て忌々しげに言う。

―――まあ、自分も基地司令の立場ならそう思うだろう。

ゲオルギー中佐は内心そう呟く。

ここは命の駆け引きを行う場であるのに、どこの馬の骨とも知れぬ将校を招き入れるなど―――さらに先の発言を聞くに、どこかの馬鹿がISに乗って勝手に戦場に行ってしまったらしい。

「―――滅茶苦茶だわ。」

ベルナルト大尉が吐き捨てるように、だが何処か絶望を孕んだ声音で言う。

それは2つの意味を持っていた。

1つはそのIS乗りの身勝手極まりない馬鹿らしさに呆れるという意味。

もう1つは―――大型モニターに映されているバルゴンを示すマーカーの進軍速度。

それは、明らかに戦車などより圧倒的に速い。

そしてISの中継カメラ越しに前線の映像が映された―――

―――それは錆色の肥え太ったトカゲのような怪物だった。

大型モニターのマーカーを見る限り、推定個体数300以上。

ロリシカ軍が中型種と識別している個体群だった。

『全機！攻撃開始！女は下等な男どもとは違うところを、見せてつけてやりなさい!!?』

ふとIS部隊のものと思しき通信が聞こえてくる。
余裕のある女の声だった。

(そういうのは口頭で伝えるのが普通なのだが——)

ゲオルギー中佐は内心呟く。

その隣ではベルナルト大尉が忌々しそうな顔をしていた。

——だがしかし、それは突如ロリシカ方面から放たれた虹色のレーザーによってIS部隊も基地司令部も、雰囲気が一変させられる。

「ち、超大型種出現!!?」

オペレーターが切羽詰まった声で叫ぶ。

せれと同時に旧サンガル市に新たな光点(グリップ)が生み出された。

「終わった…」

それに続き基地司令の呟きが響いた。

「ど、どうして…」

それにベルナルト大尉が聴く。

「…君は知らんだろうがな、我々がロリシカなどという国の独立を許してしまったのは…あのバケモノの所為なんだ…。」

わなわなと震えながら基地司令は言う。

「アレは半径60キロ圏内に侵入した標的をレーザーで自動排除する。通常の航空機や砲弾はまず撃墜される…その所為で航空兵器はほとんどすべて、無力化された。」

今の時代、制空権を握ったものが戦場を制す——故に航空

機が注目されるべき兵器——とされていた。

バルゴンが現れてしまうまでは。

そこでロシア軍は航空機の代わりにISを大量に採用した。

「あ、あの、ISに超低空飛行をさせてバルゴンの無力化を行うという戦法は…どうでしょうか?」

ベルナルト大尉が聴く。

「私自身、IS乗りの態度などは気に入らないし正直言って癪に触ります。——ですがISは高度な三次元軌道が取れるので、そ

れらを使った突貫戦術をとるべきでは——」

だが、遮って。

「…それを我々が思いつかないとでも思ったのか？」

基地司令がベルナルト大尉にジロリと睨みを利かせながら問う。

それでベルナルト大尉は迂闊だった——と自覚し、黙り込む。

「——当然、その戦法を取ったさ。バルゴン超大型種の注意を引くために旧ソ連時代の赤軍も真つ青になるほどの弾薬やミサイルを投入し、レナ川北部に展開していた駆逐艦や巡洋艦からも巡航ミサイルを放ち、ISの弾薬輸送ヘリや攻撃ヘリなどの支援もつけて……！」

基地司令は震えた、激情を抑えた声音で言いながらモニターを睨み付ける。

「——結果は全滅だ！支援部隊であつたヘリ部隊はあっさり撃墜され、世界最強の兵器たるIS18機を投入しても、レーザーに撃ち抜かれて撃墜されるか下降し過ぎて中型種に踏み潰されて行つて——結局はあのザマだった!!？唯一残つたのはロリシカと違い、巨大生物戦のドクトリンを持たない身である我々がバルゴンに突貫するのは無謀に他ならないという戦訓だけだ!!？」

基地司令の悲痛に満ちた声音が司令室を木霊する。

「——だからこそ…【まともなやり方】で勝てない以上、我々は【狂気】に染まるしかない。」

直後、司令室の扉を開けて——連絡官が駆け込んでくる。手には伝票らしいペーパーが握られており、それを基地司令に手渡す。

基地司令はそれを見るなり何かにきつく耐えるように表情を歪め

——屹然と言い放った。

「ロシア政府から命令が下った…状況ベ—。」

基地司令が命じるとオペレーターが忙しく陸軍砲兵部隊や海軍、空軍と連絡を取り合う。

「空軍…？あ、あの失礼ですが超大型種が健在の状況では空軍は…」

「確かに、まともな攻撃なら働かん。——【まともな攻撃】、ならな。」

瞬間、ゲオルギー中佐は基地司令の意図を察し、顔面蒼白となる。ベルナルト大尉も同じだ。

「そんな…そんな…：…まだ、まだ戦場には兵士が、避難民の人達が…：…間違いなく、戦場となってるヴユリユイスタだけじゃない！スータルなどの周辺都市も【死の土地】になってしまっうんですよ!!?」
「戦力が足りていればこんな戦術はとらない！だが、…：…今は…：…！こうする以外…：…【祖国を救う手段】がないのだ…!!?」

「【戦略核兵器】と【戦術核兵器】を含む多数の遠・中距離弾道弾同時発射による過飽和攻撃…：…!!?確かに、それなら超大型種をどうにかできるかも知れませんが…：…!!?しかしそんなことをしたら!!?」

——無駄だよ、ベルナルト大尉。

ゲオルギー中佐は小さく呟いた。

「奴らの数や能力は通常兵器などでは防ぎ難い——だが、数百発もの対艦・対地ミサイルと核ミサイルを持つてすれば、奴らを撃破ないし遅滞させる事ができる——最早、【人類を守る手段】は、これしかないのだ!!?」

「しかし核で焼かれた土地は…!!?」

なおもベルナルト大尉は抗議する。

そう、核で焼かれた土地は放射能によって数百年から数万年間汚染されてしまう。

それに広島と長崎の惨劇をベルナルト大尉は知っていたから必死で抗議を続けた——。
すると隣から政治将校がベルナルト大尉の顛顛に拳銃を突きつける。

「黙れ！それ以上言うものなら抗命罪で強制労働キャンプに送るぞ!!?」

それで、ベルナルト大尉は引き下がらずを得なくなる。

「——大尉の心情も分からなくもない。…だが我々に手段を選んでいる余裕などない。そして理性を保っているままでは勝てな

い——だからこそ、例え人道を酷く踏み外してでも、【狂気】に染まっても勝たねばならない——。」

大型モニターに情報が映し出される。

それを見る限り、撃ち込まれるミサイルは1000発以上。

内、核ミサイルが全部で20発——。

「各爆撃機、攻撃距離に入ります。」

オペレーターが感情を殺した声で言う。

その中で基地司令のうわごとのような呟きをゲオルギー中佐は耳にした。

「こんな無茶な戦いは……祖国に核を撃ち込むような事は、もう直ぐ終わる……。祖国が完全なる国家総力戦体勢に移行すれば……。男だけではなく、女でも子供でも老人でも、ロシア人でもチエチエン人でもイングーシ人でも、キリスト教徒でもイスラム教徒でも仏教徒でも構わない……。国民全てが、バルゴンに立ち向かえば、こんな戦いは……！」

ゲオルギー中佐は基地司令の【狂気】を孕んだその呟きに恐怖を感じた。

つまり、それは今まで自分達がロリシカをバルゴンの肉壁にしてきたように、今度は自分達が肉壁にされる番だということだった——。

「ミサイル発射まで、3……」

バルゴン超大型種の穿つ湾曲する虹色のレーザーが爆撃機を次々と貫き、撃墜して行く。

モニターに映った光点が消えるたびにいくつもの命が消えて行く。

「2……」

バルゴンを足止めするべく、避難民を少しでも遠くに逃がす為に奮戦し、健気に戦い続け、次々と命を散らしていく地上部隊が核ミサイルが降り注ぐと知らずに今もなお奮戦し続けている——。

「1……」

人々を守るといふ、強い信念を抱いたまま。

そして避難民は互いを罵り合いながら、互いを支え合いながら、必

死で生き延びようと、明日に命を繋げようと、消えそうな命に灯りを灯して、醜いながらも必死に生に足搔いて生きようと抗い続けている。

「……発射」

暫くして起こった巨大爆発の連鎖によって引き起こされた衝撃は、地下に置かれた指揮所を猛然と揺さぶる。

そしてその爆発は、必死で人を守り抜こうと、生き延びようとしていた者達を一人残らず吹き飛ばし、押し潰し、焼き尽くし、殺し尽くして行った――。

????????????
S 学園・食堂

「鈴……昨日は、その……悪かった。」

鈴が一夏に会うなり開口一番に聴いたのは、昨晚の言い合いについての謝罪だった。

「……え？」

そしてそれを聞いた当の鈴本人はかなり驚かされていた。

何せ、まさか謝罪してくるなんて思っても見なかったからだ。

「いや、流石に昨日は疲れてたみたいなのに些細な事……なんて言つて悪かった。」

それで、その一言で、鈴は自身の中に溜め続けられていた毒が抜けていくような感覚を感じた。

「昨日事情を千冬姉に話したら滅茶苦茶怒られてさ……『謝つて来い!!?』って言われて……」

そんな鈴の内情は知らずにヘラヘラ笑いながらそう言う。

詰まる所、千冬に謝罪するよう促されただけであつて、先の謝罪は一夏本人のみの意思では無いらしい。

だがそれより前の言い分を聴く限り完全に謝罪の意思が無いわけではなく、幾分かは謝罪の意思があり、促されて来た……というのが正しいと言えるだろう。

(…また、『千冬姉』…)

千冬に促されたという言葉が、また鈴に毒を一滴注ぎ込む。

毒は鈴の中にある嫉妬心を爆発させる火薬になる。

——だが、鈴にとって今はそんな事はどうでも良かった。
一夏が自分を見てくれている——それだけで、充分だった。

一夏と一緒にいられるという事実が、鈴の中で心地良い感性を芽生えさせる——。

「…いいわ、許してあげる。」

笑いながら、鈴は言った。

(——そういえば心の底から笑えたのって、久しぶりだったなあ…。)

ふと、鈴は内心呟いた。

今まで浮かべた笑顔は全て自分の顔に貼り付けたメッキでしか無かったから。

「よかった…あ、なあ鈴。お前タッグトーナメントの相方決まってる?」

「?...ただけど?」

「良かったら俺と組んでくれねえか?」

瞬間、鈴の中で極樂——というに相応しい感性が生まれる。

ついに一夏のそばにまで行けた——という悦楽と歓喜が脳を支配する。

あまりの感動に泣きかけてしまうが、こんな時まで一夏に涙を見せまいと堪えながら——。

「ええ。喜んで引き受けるわ!」

鈴は言った。

『……速報です。防衛省によるとバルゴンがロリシカ・中国間国境線を突破したとの事です。現在中国軍は撫遠県に軍を展

開させ——』

——その後ろの食堂の備え付きテレビでは不穏な出来事を伝えていたが、今の鈴の耳には入らなかった。



中華人民共和国・撫遠市の東15キロ

アムール川南岸

——既にそこはもう、地獄と化していた。

対ロリシカ戦に備えて人民解放軍は基地を構えていたが、ほぼ抑えきれない有様になって来ていた。

戦車部隊や歩兵部隊などの地上戦力は次々蹂躪され、大型種が確認されなかったが為に航空機による攻撃が敢行されるも、あまりに数が少な過ぎる。

「くそ……」

ラファールリヴアイヴのライセンス生産版であるIS、「天山」4機から成る「中国人民解放陸軍第6空中機械化騎兵小隊」の隊員である【林清明（リン・シャオミン）】少尉はアサルトライフルを放ちながら毒突く。

敵——バルゴンの数が多すぎるにも関わらず、こちらの数が少な過ぎる上に火力が脆弱過ぎる。

弾薬も枯渇しつつある。

あまりにジリ貧だ。

一度補給の為に後退するか、半ば要塞化された撫遠市に撤退して体制を立て直すべきだ。

指揮官でない自分でも分かる。

「くそ……全機、撫遠市まで後退するぞ——」

第6空中機械化騎兵小隊の指揮官が怒鳴る。

だが、しかし。

『駄目だ同志大尉！後退は認められない!!？』

CP要員として撫遠市要塞で戦況を俯瞰している第6空中機械化

騎兵小隊の政治将校がイライラしたような、生気を感じさせないような声音で通信を入れてくる。

部隊の階級の最高位は指揮官の大尉だが、実質的に影響力を持つのは人事権や指揮官の罷免などの権限を持ち、その気になれば生命の剥奪すら可能な政治将校だった。

『前進！前進あるのみ！後退などあり得ない！！？』

政治将校が言い放つ。

（自分だけ安全な所にいるからって無茶言うんじゃないわよ…！！？）

清明は内心呟く。

ISのパーツのひとつとして登録されているチョーカー…所謂、首輪に仕掛けられたスロートマイクが喉の動きで言語を検出しログに記録している為、下手に発言すればログに記録され内容が党の意向に沿わないものなら反革命因子として告発され、強制労働キャンプ送りあるいは粛清されるか――。

さらにそんな手間暇掛けずとも政治将校がチョーカーに仕込まれている致死毒を即時、遠隔操作で投与して兵士の生命を剥奪する事だつて珍しくない。

要は、死にたくなければ政治将校の命令に従うしかないのだ。

「た、隊長！！？」

兵士の1人が叫ぶ。

広域マップを見ると、バルゴン100体前後が突っ込んで来る。

『いちいちうるたえるな！ロシアに侵攻した数より圧倒的に少ないだろう！！？』

政治将校が先程叫んだ兵士に怒鳴る。

「…で、ですがこんな武器じゃ……」

そう、彼女の言う通り天山のアサルトライフルでは圧倒的に火力不足だ。

おまけにロシアがこんな数に耐えられたのは戦車や自走砲部隊の援護があつたから――。

それに対し、戦車部隊は壊滅し、ISとはいえ軽武装のたった4機で迎撃するしかない自分達に、耐えられる筈がなかった。

理性的に考えれば後退して体制を立て直すべきだ。

だが――。

『貴様、敗北主義者として告発されたいか!?』

「ち、違います!!? 私は――」

党に忠誠を誓い、思考を放棄した政治将校達がそんなことを聞き入れるわけがなかった。

そしてそんな口論をしている間にもバルゴンは迫ってくる。

ふと、広域マップを見ると後方に補給部隊と別のIS部隊のマークがあった。

それで指揮官はふと思いつく。

このまま後退し、後方のIS部隊と後退。

その間に補給を行って戦線に復帰すれば――いける。

「くっ！各機、後退しつつ牽制射撃を――」

指揮官が命じる――だが。

『何を言っている！突撃だ!!?』

「な――」

指揮官や清明達は政治将校の命令に思わず絶句する。

『他の部隊に先を越されるわけにはいかん！突撃だ!!?』

他のIS部隊にも第6空中機械化騎兵小隊と同じく、政治将校がいる。

そして政治将校は指揮した部隊が築いた戦績が認められれば党の高官になる近道となる。

そして当然、他の政治将校もそのチャンスを狙っている。

――この政治将校は、他の政治将校よりもリードするために、そのために自分達を使い潰す気だ。

たった4機でバケモノ100体に挑み、勝ち得た――そう
なれば政治将校は英雄モノだろう。

だが失敗すれば国家の、党の所有物である貴重なISをぞんざいに扱
い無駄に消耗させたとして粛清――。

それが分かっている、命じている。

『突撃！革命精神で敵を撃滅せよ!!?』

「ツ……了解!!?」

指揮官機が応じる。

(ふざけないで……!)

思わず清明は内心そう呟く。

『3番機！林少尉！復唱せよ!!?』

「…ツ……了、解!!?」

清明は怨嗟に満ちて、呪いを込めた声で応じた。

(——くそが!!?これなら、まだ私達が殺したり殺されたりするバケモノ共の方が、数万倍マシだわ——!!?)

政治将校の横暴と、この腐敗仕切った国の体制を呪うように清明は内心呟いた。

それと同時にスラスターを吹かしてバルゴン梯団に突貫を開始する。

「あ、ああああああ!!?」

部隊の女の1人が恐慌状態になり、天山のアサルトライフルをバルゴン梯団目掛けて乱射する。

だが、その乱射した銃弾の大半はバルゴンには当たらず、地面の土を叩き、抉るだけだった。

「4番機！撃ち過ぎだ!!?」

指揮官が怒鳴る。

「でも……でも、撃たなきゃ私達がやられてしまいます!!?」

4番機が叫ぶ。

(確かに分かるけど、しっかり狙いなさいよ！じゃないと——)

清明が内心呟いた、瞬間——。

『同志大尉！4番機を何とかしなさい!』

政治将校が通信で怒鳴る。

(ほら来た——)

清明が内心毒突く。

『国家の財産である貴重な弾薬をぞんざいに扱うなど、国家への反逆に等しいぞ!!?』

「ふざけんじやないわよ！撃たなきやこつちがやられるってのに…！だいたいこの数をたった4機でやれとか、拳句の果てに突撃しろとか言ったのアンタでしょうが！そんなこと言われたら乱射せざるを得ないでしょう!!?）」

清明は内心叫ぶ。

気をつけなくては口から声が出てしまいそうになる。

下手に発言すればどうなるかは知っている。

だから溜め込むしかない。

「しかし、これほどの数を捌くには――」

指揮官が抗議する。

理性的に考えれば、軽装備で20メートル近くの敵、しかも1000体以上のバケモノは乱射しなければどうしようもない。

理性が働けばそれくらい、馬鹿な新兵でも分かる――。

『黙れ！私の命令は、党の命令だぞ!!?』

だが政治将校にそこまでの理性が働くはずがない。

党の掲げるスローガンを盲目的に崇拜している彼女らは正直脳味噌がつまっているかさえ、怪しかった。

『これ以上言うようなら貴様から指揮権を剥奪し、抗命罪として告発する！それが嫌なら、私の命令に黙って従え!!?』

「くっ……」

指揮官が悔しそうな顔をするなり、指揮官権限で4番機のチョーカーを操作する。

瞬間、空気圧によってチョーカーに内蔵されていた鎮静剤が4番機の女に投与される。

「あ……」

4番機の女はそんな声を漏らしながら、意識を喪う。

直後、指揮官が4番機を自立起動――先のIS学園襲撃後に入手した無人IS・ゴーレムのデータから構築したもの――に設定する。

そして、何事もなかったかのように戦闘を継続する。

(くそが……みんな……みんな腐ってるわ——!!?)

それを見た清明の声は口から漏れることなく、ただただ内心に反響した——。

(みんな、死ねば良い——!!?)

——だがしかし、後に清明は自身の放ったその呪いを酷く後悔することとなった——。

上海市・地下・下水道

ゴンクリートに四方八方を囲まれた暗闇。

空気は異臭と腐敗臭に犯されている。

そこには廃液混じりの汚染水が流れていた。

そしてその水面にはゴミとヘドロにガソリン、そして時折浮かんでいるネズミ等の動物の死骸——。

地上の都市は近未来的デザインビル群や上海のランドマークである上海タワーがそびえ立つ、中国の経済力を象徴するかのよう綺麗で美しいモノだった——。

だが、それは汚いモノを綺麗なモノで蓋をした——というだけだった。

——ぱしやり。

何かが汚染水の中で跳ねる。

「チチツ!!?」

「チューツチューツ!!?」

周りに居たらしいドブネズミが慌ただしく騒ぎ、汚染水の中を跳ねる存在から逃げるように走り出す。

——ぎばあっ。

汚染水の水面を突き抜け、ソレが下水道のコンクリートの上に乗り上げる。

——どぶん……。

異様な音を立てて、乗り上げる。

それはどす黒く穢れ、所々に刺激の強過ぎる色を引いているヘドロを身に纏い、その外見はオタマジャクシに似ていたが、とてつもなくサイケデリックな色をしていた。

全長は2メートルほどだろうか。

そして、完全に身をコンクリートに乗り上げる。

——ぐばあつ。

瞬間、それは目を覆っていた瞼を開いた。

赤く朱く、ただ紅い飛び出んばかりの眼球である、毒々しいその眼を蠢かせ、辺りを見回す。

——ぎよろり。

辺りに広がるは漆黒の闇だけ。

——敵は、いない。

ソレはそう理解するなり——声を、絶した——。

「ギユブボアアアアア……グビュオアアアアア……！」

漆黒の暗闇に響き渡るそれは、なんとも言えない、とても言語化出来ないような——声。

それを数回放った時だろうか。

「グビュオアアアアア……ギユオオオオオアア……！」

違う声が響いた。

それに対して、ソレもまた声を響かせる。

ソレの声に応じるかのように、それは段々近づいてくる。

——そして、姿を露わにする。

それ、もやはり、ソレと同じ見た目をした、グロテスクな見た目の、1メートル50センチくらいのオタマジャクシだった。

それ、が、ソレに近寄る。

「ギユブエオオボヨ……」

まるで、 “ おかえり ” とでも言うような声を放ち——。

——ばくんつ。

ソレは、それ、を丸呑みする。

瞬間——ヘドロの肉体が急速に膨張し出す。

——ぼこり。

——ぶくり。

——ぼこり。

——ぶぱんっ。

急速に膨張し、肥大化したヘドロの肉体が破裂し、急速に腐敗していく。

だがすぐに別の箇所が膨張し出し、肥大化し、破裂し、また腐敗していく。

均衡を保ったまま続く、膨張と腐敗——それを延々と繰り返すうちに、ソレは肥大化——否、巨大化していく。

——一通りそれが収まると、ソレ——否、公害怪獣【ヘドラ】は至極嬉しそうな声を下水道の闇に響かせた。

——カチリ。

また秒針は破滅に向かう。

かくして、パンドラの箱から開け放たれた魑魅魍魎たちは愚かな人間を蹂躪し——。

人間が溜め込み続けていた呪いや罪科は穢れを纏い、人間に向ける牙を研ぎ澄ます——。

——これは破滅。

——これは黙示録。

醜い、愚かで矮小な人間に神罰が下る、その前日談の物語——。

EP—25 共鳴するGたち

IS学園・会議室

そこには光以下、山田先生と千冬、楯無が集められていた。

「日米臨時編成軍艦隊と欧州連合極東派遣艦隊の監視レベルを下げる？」

「そうだ。」

山田先生の問いに光が応じる。

その顔は、本人はできるだけ顔に出さぬように努めているつもりだったが、酷く鬱陶しそうな顔をしていた。

「ど、どうしてまた急に——？」

「——学園に艦隊規模の戦力を集中させた結果、さして敵が現れなかった事とタッグトーナメント間近であるのに生徒の環境に宜しくない……とIS委員会が判断して直々に命じてきた為だ。もちろんこちらは却下したが：何かしら向こうが手を打ったんだろう：長期駐屯は緊張を高めるだけだから、まあ一理あるといえは一理あるが……あとは、館山市からクレームが寄せられたこともあるな。」

やはり忌々しそうに光が言う。

「そんな：守って貰ってるのにクレームだなんて……。」

山田先生が信じかねるような顔をして言う。

「学園が出来て、学園が行事を開くことで館山市に観光客が来て落としていった金を収入としている以上、間接的に国家財産に繋がるが故に観光客を威圧するような雰囲気醸し出す自衛隊にはお引き取り願いたい——」と言ったところでしょう。」

光が先程よりは少しマシだが、やはり忌々しそうに、それでいて少し諦観を含んだ雰囲気纏って言った。

事実、館山市の相模灘沖合にIS学園が出来て学園が行事を開く事によってかつては過疎地域だった館山市が学園の行事を目的にやって来た者達が寄り道がてらに寄って札束を落とす事で発展しているのだ。

向こうからしたら、稼ぎ時なのに自衛隊や米軍な威圧感剥き出しで

は客が来ない——と考えると退いてもらうようにクレームを言って、尚且つ財務省も防衛省にクレームを言う事で艦隊を退かしたのだろう。

既に3回も侵入を許しているのに商売だのなんだと言っている暇ではない気がするが、怪物が暴れまわってる地域の惨状を彼らは知らないから仕方ない……と言えなくもない。

ただ、ここまで来るともはや「平和ボケという名の病氣」にかかっているようにすら思えて来る。

信じかねるような顔をする山田先生や千冬に対して、楯無が口を開いた。

「……まあ、今回は防衛省とそれをバックアップする私達情報庁も引き下がらずを得なかつたんです。……国土交通省と進めている非常政策を実行する為にも……。」

「……非常政策？……一体どういうモノだ？」

千冬が訝しげに楯無に視線を向けて聴く。

楯無は光の顔を見て、説明して良いか否かを確認する。

光は、あつさり承諾した。

——だから、楯無は口を開き、内容を発した。

「——最前線になる可能性が高い北海道、北九州の国民を沖縄、グアム、サイパン、ハワイ、カムチャツカ、アラスカ、台湾、パラオ、インドネシアに退避させる、大規模疎開政策です。」

「——な×」

思わず、千冬と山田先生は声を上げて驚く。

——疎開。

そんな言葉が出てくるのはもはや先の大戦以来——。

いやそれ以前に、あまりにスケールが大き過ぎて2人は理解が追いつかない。

そもそも、そんなことが可能なのか——。

「そ、そんなことをしなくてはならないんですか……?」

山田先生が光に困惑に満ちた顔を向けて、聴く。

「——ああ。数日前に確認された巨大生物の新規データや分

布、現在位置、予想される能力、進行状況からして——最悪、年内に日本全土が戦場と化す可能性がある。」

それを聞いた山田先生は酷く青ざめる。無理もない。

年内に日本全土が戦場と化すなど、想像もつかない。

もし、日本全土が戦場となれば——負傷者、死者・行方不明者、倒壊建築物数、被害総額、その全てが想像を絶するモノになる。だからこそ、最悪の事態を回避するための疎開政策だった。

確かにそれなら、国土を失っても日本人は失われない。

「だが、なあ……」

しかし、光は溜息を吐きながら呟いた。

「疎開政策がいつ実行に移せるか……そして疎開先の受け入れ態勢が整い、実行しても——全ての国民を逃すのは……ほぼ、不可能だ。」

光が言う。

確かにそうだ。

日本には1億2千万人も人間がいる。

その中には移動の難しい高齢者や障がい者もいる。

さらにそんな大勢の人間を国外に逃がせるだけの輸送手段がなく、何より疎開先のキャパシティを超過するものになるのは目に見えていた。

その現実を知り、千冬も山田先生も顔が曇る。

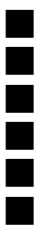
「話が逸れたな。」

閑話休題、と光はその話題に終止符を打つ。

「もう一つの方もまた……重大なんだ。」

光のその言葉に息を飲む。

「この学園に特自の【対G決戦兵器】を搬入することになった——」



半年前——2020年12月5日。

その日に “ あの時 “ の出来事は起きた。

特務自衛隊・八広駐屯地

B12F・第4実験場

【3式機龍無人稼働実験】

鳴り響く警報。

それに対処すべく飛び交う怒号。

そして眼前に移るは暴走を開始した異界の産物——3式機龍。

「ISコア、不安定化!!?」

「パルス逆流!!?」

「拘束具だけでは抑え込めません!!?」

——灰色のコンクリートに四方を囲まれた立方体型の第4実験場を見下ろす形で壁に設置された実験場管制室は喧騒と混乱に満ちていた。

行われていたのは、ISコアを搭載し、遠隔操作による無人稼働を検証する実験だった。

既に嚴重な確認を20回以上行い、実験に臨んだ——だが、あろう事か起動臨界領域に到達した瞬間に機龍は暴走を開始。今は壁に固定している自身を抑え込む拘束具を引きちぎろうとしている——いや、もう引き千切られる寸前だ。

「緊急停止信号を送信!!?」

アイリが焦燥に満ちた声音でオペレーターに怒鳴る。

そしてオペレーターもそれをすぐさま実行する——。

「…ツ！エラー!!?ダメです、信号拒絶!!?」

しかしそれは阻まれ、オペレーターが悲痛な声で叫びながら報告する。

瞬間、機龍は拘束具をひきちぎってしまう。

「キシヤアアアアアア!!?」

機龍が機械が擦れるような咆哮を放つ。

「3式機龍、制御不能!!?」

「第4実験場内の作業員は速やかに退避!!?」

「非常用電源回路遮断および事故対応用爆薬起爆。」

混乱と焦燥に満ちたオペレーターやアイリとは対照的に、光は落ち着いて言い放つ。

オペレーターは光の命令をすぐ実行する。

コンソールを素早く叩き、機龍に繋がっていた電力供給ケーブルが爆砕ボルトで接続口を爆破することで切断。

さらに機体表層部を覆っている黒い動力ケーブルの各部位の重要箇所の方が一の事態に備えてあらかじめ仕掛けておいた爆薬を起爆連鎖する爆炎と爆音。

そして第4実験場を包み込む爆煙。

それで管制室からは機龍は見えなくなった。

あとに残されたのは、静寂。

このまま何も無ければ機龍は3分程度で活動を停止する。

何も無ければ。

「やった、の…?」

女性オペレーターが沈黙を破り、呟く。

その問いには誰も答ええない。

否、答えられない。

第4実験場内部がどうなっているか分からないのだ。

耐爆ガラスの向こうに見えるのは爆煙だけ。

第4実験場内部のセンサーは先程故障したらしく、内部を確かめるには直接入るか、天井のダクトから爆煙を排出して中を晴させるか。

「天井ダクトをオンにして。爆煙の排気を…」

アイリが命じる。だが、それを遮って。

「総員、退避!」

光の命令が響いたと同時に、先程の第4実験場内部から拘束具を引き千切る時に生じた音よりはるかに大きな金属の擦れ

る音が響き、コンクリートの碎け散る音がそれに重なるように響き――
爆煙を切り裂くようにして、鋼鉄の拳が管制室の耐爆ガラスに叩き付けられた。

――ドオン!!?

地震のような衝撃が管制室を襲う。

耐爆ガラスは碎け割れて飛散し、窓辺の天井や床の金属フレームは変形して一部は耐爆ガラスと共に後方に飛び散る――。

「きゃああああ!!?」

先程の女性オペレーターが悲鳴を上げる。

それを皮切りに先程より遙かに混乱している状況になる。

――ドオン!!?

さらに追い討ちを掛けるように第2撃が放たれる。

再び管制室を襲う衝撃。

次の瞬間、アイリは信じかねるような顔をして、さげんだ。

「光ちゃん…なにしてるの!??早く下がって!!?」

光は先程から一步も動いていないのだ。

耐爆ガラスの破片が右の頬をザックリと切って、そこから血が流れているが、それにすら気にかげずに機龍を悠然と眺めているだけだ。

アイリの呼びかけにも応えない。

「キシヤアアアアアアアアアアアアアア!!?」

機龍の咆哮。

空気を振動させ、体が吹き飛ばされそうな衝撃が襲い来る。

「光ちゃん!!?」

アイリが呼びかける。

だが光は応じない。

ただ一言、こう告げただけだった。

「総員退避、と伝えたはずだぞ。…行け。」

有無を言わせない、威圧を孕んだ声音。

「――了解…。」

そういうなり、全員は出入り口に駆け出す。

瞬間、第3撃が管制室の耐爆ガラスの壁を叩く――だが今

度は拳ではない。

——爪による薙ぎ払いだ。

それで耐爆ガラスの窓枠も壁も抉り取られ、光と機龍を隔てるものは、何も無くなった——。

それは恐怖でしかない。

死が迫り来ている——そんな状況ではもはや、常人なら逃げ出すしかない。

だが、光は逃げ出さない。

むしろタバコを取り出し、火を点け、口に啜えて煙を吐く。

「———なんていうか、またこのパターンか……」

光は自嘲する。

部下を逃がす為の囿役になってみたが、それがあの時の出来事に近いモノになろうとは。

かつての千尋———ゴジラに殺された時もこんなシチュエーションだった。

あの時は新宿のビルだったが、一人でゴジラに間近で面と向かっているという意味ではあの時と同じだ。

(そーいや、あの時はゴジラー——!!?…なんて、叫んでたっけ……。)

タバコを啜えたまま、苦笑いを浮かべて内心呟く。

「さて———」

(どうする?…まだ逃げるといふ手はある。さっさと逃げるか?…あの時みたいに、柴田に言われたりする前に。)

光は内心審議する———だがそれをすぐに打ち切る。

「キシヤアアアアアアアアアアアア!!?…」

機龍が爪を突き立てるようになった手を振り上げて———今にも、振り下ろそうとしていた。

(———間に合わない。)

光の脳がそう判断する。

アレは避けようにも間に合わない。

ギリギリで一歩下がっても、アレは私を殺せる。

私に逃れる術はない。

ではこの避けようのない死を受け入れるか——それもいいかもしれない。

いや、それ以外に何が出来ると言おうか。

「死ぬのはこれで2回目だ。別に臆する事なんかない——」。
タバコを吸いながら、光は悟ったように言葉をタバコの煙と共に吐き出す。

瞬間、機龍はその鋼鉄の爪を比較目掛けて、振り下ろす——

——しかしそれは光から数メートルずれて、コンクリートの壁を粉碎した。

凄まじい衝撃と轟音が響き、弾け飛んだコンクリート片が乾いた音を鳴らしながらパラパラと落ちる。

光は額をコンクリート片が切り裂いたが健在だった。

鮮血が額から流れ、滴り落ちる。

光は動かない。

呆気にとられたのもあるが予想外な出来事だったから。

ふと、機龍が背後を振り返る。

そこには、金属製の渡り廊下でその光景を見て啞然としている——

——千尋。

「…グルル……」

機龍が威嚇するように唸った——と同時に、第4実験場の支柱表面と壁が炸裂する。

「!!??」

炸裂した箇所からは【ポリプロピレン・ワイヤー】が飛び出し、機龍の各部位に巻き付く。

それは、一本や二本ではなく無数に——。

さらに天井のスプリングラーからは【硬化ベークライト】が降り注ぎ、機龍の関節などのり絡まり、瞬時に固まっていき、機龍の動きを封じて行く。

「グオオキシヤアアアアア!!?」

機龍は四肢の自由を奪われ、もがき苦しむ。

まだ自由な尻尾を振り回し、それで天井を覆い尽くす大型LED証明群を次々と砕き、破壊して行く。

そして動きを封じられても、手足を動かし、固まったベークライトから手足を引き千切り、再び自由になる。

しかしまた硬化ベークライトとポリプロピレン・ワイヤーが絡み付き、また自由を奪う。

『3式機龍活動停止まで、あと20秒。』

アナウンスが響く。

機龍はなおも狂ったように何かを求め、拘束を引き千切る。

そして向かう先にあるのは——千尋、だった。

千尋はその光景を見て逃げようとしなない。

否、逃げてはならないと思わされていた。

見なくてはならない何かがそこに——自分に迫り来る機

龍の中にあるような気がして——。

——手が迫り来る。

『活動停止まで5秒！』

千尋は動かない。

『4…』

機龍の足に電力が供給されなくなり、それ以上の進行が無理になる。

『3…』

それでも機龍は進もうとする。

『2…』

機龍は手を伸ばそうとする。

『1…』

だがその手は新たに射出されて絡まったポリプロピレン・ワイヤーによって阻まれた所為で、届かなくて——。

『ゼロ…』

機龍の活動が、止まる。

千尋はまだ動けない。

動こうとすれば動ける。

今すぐこの場から離れるべきだ——理性がそう警告する。

しかし、千尋の感情がそれを拒絶した。

「お前、誰なんだよ……？」

千尋は物言わぬ機械仕掛けの龍に問う。

懐かしいような、それでいて嬉しいような、哀しいような、そんな感情がごちゃ混ぜになった声音で問いかける。

機械仕掛けの中にいる、ナニカに問いかける。

——だが、機械仕掛けの龍は答えない。

知る必要はないと言わんばかりに、沈黙を貫く。

「——答えろ。」

瞬間、千尋は低い、妙に大人びた、それでいて荒々しい獣のような声を放った——。

——その刹那、機械仕掛けの龍は再び起動——。

拘束されていた腕を、引き千切り——掌に僅かな空間を保ちながら、千尋の周りに指の爪を食い込ませるように——壁を、叩き付けた。

——凄まじい衝撃が走る。

——金属製の渡り廊下がひしゃげる音が響く。

——コンクリートの壁が砕け、破片が飛び散る乾いた音が響く。

——千尋は壁に叩き付けられた。

「か、はっ……！」

衝撃で一瞬息が出来なくなる。

それと同時に。

『……全く、口の悪いクソガキだ。』

——呆れるような。

——嗜めるような。

——叱るような。

——そんな声が響いた。

幻聴——というには程遠いくらい酷く鮮明で。

それは、とてもとても懐かしくて、それでいて憐れむような声で――

千尋が求めていた存在の声で。

その声の持ち主は――

「親、父……？」

確認するように呟く。

その時に何か聴いたような気がしたが、壁に叩き付けられた衝撃が引き起こした痛みが千尋の意識を暗闇に引きずり込むことで途絶えてしまった――。

――

――現在・2021年6月20日

IS学園。

第2シャフト最深部・超々大型輸送車両プラットホーム。

そこでは特務自衛隊墨田駐屯地から輸送されて来た3式機龍の搬入作業が行われていた。

万が一、学園が巨大生物の襲撃を受けた際の最終手段として配備が開始されることになったのだ。

――千尋は、その光景をぼんやりと眺めていた。

機龍を見ていると、あの日のこと――機龍の暴走事故を思い出してしまう。

自分が今筈の次に気にしている事だから、いつも見に来ているのだが、いざ学園にまで持つてくるとなると何故か気が引ける。

――こんな所には、来るべきじゃない――何故

か、理性が詳細な理由と共に判断を下すより前に、感情が感化されて動くより前に、本能的にそう感じた。

この学園の場所を中心に世界からナニカが零れ落ちて行くような、そんな感覚を覚えさせられる。

「あれ、家城一尉、帰られるんですか？」

後ろから声が聞こえた為にふと振り返ると、そこには山本三尉が燈に話しかけている所だった。

「ええ。でもすぐに帰ります。英理加ちゃんのお見舞いに行くだけですから。」

英理加——— 燈の友人らしいが今は入院しているらしい。詳しくは聴いていないが。

そうしていると山本三尉との会話を終える。

そして、山本三尉が千尋の隣にやって来た。

「千尋…おまえ例の件、聴いてるか？」

山本三尉が千尋に聞く。

その顔には重苦しいものを孕んでいた。

「ええ。…片桐一佐から聴きました。」

その光すらもやるせない感情を露わにした顔で千尋に伝えていた。

——— 3式機龍の臨時操縦士。

千尋に向けられた例の件とは、その事だった。

つまり、千尋が機龍に乗って動かせ——— と。簡単に言えば

そういう事だった。

「なんでまたお前に苦勞をかけさせなきゃならんのか…：…本当に、スマン。」

山本三尉が至極申し訳無さそうに謝る。

だから千尋は慌ててしまつて。

「あ、いやいや！山本三尉の謝ることじゃないですよ!!？」

山本に心配をかけさせないように必死に無邪気な作り笑いを浮かべて応じた。

「——— そう言つてくれると、助かるっちゃ助かる…。すまん、そろそろ行く。」

そう言つて山本三尉は去つて行つた。

残された千尋はふと溜息を吐く。

統合機兵のテストパイロットをしつつ、緊急時は機龍の操縦士も努めなくてはならない。

疲れるというのが正直な話だが、それ以上に酷く複雑な心境だった。

——— 自分の父親が武器にされている…：…という事に。

確かに機龍くらいの兵器がなくては人類は生き残れないだろう。
分かってる。

分かってはいる。

だが、しかし――。

千尋は酷く悩まされる。

けれど半年前の暴走事故以来、機龍の中に在る者の存在を感じられない以上、どうしようもない。

「……悩んでたって仕方ない。」

ふと呟く。

「……今はとりあえず、タッグトーナメントに……」

タッグトーナメントに集中しよう……そう、言おうとした瞬間、それは遮られた。

――ナニカを感じたから。

同時に機龍を格納していた区画からも警報がなる。

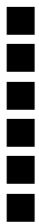
機龍に異常が生じたのだ。

そして、ゆつくりと、けれど確実に学園に迫り来る存在を千尋と機龍は感じた。

黒い、黒い――かつての自分に似た巨獣と、鳶などを身に纏い幾つもの子供が入った植物の存在を感じた。

「……来た――。」

千尋はふと、呟いた。



中央太平洋

ウエーブピアサー型輸送艦【大戸島】

「朝倉さーん、ゴジラは？」

篠ノ之束のラボがあったキャロット島から奪った流線形フォルムのウエーブピアサー型輸送艦輸送艦【ウサギ丸】改め――輸送艦【大戸島】の艦橋で艦の航行を制御している倉田自作のスーパーコ

ンピュータ【MAGI】の整備をしている倉田が艦橋デッキに出て外を見ている朝倉に聴く。

「潜ってるみたいですね。…水深はだいたい…：うーんと、200メートルくらいですかね…」

朝倉が言う。

「ははあ…ゴジラ細胞と自然同化したらそんな細かくも分かるんですかあ…」

倉田が気持ち悪い笑顔を浮かべながら朝倉に言う。

「ええ、でも、私の言いなりに出来たりとかはしませんよ？あくまでゴジラという始祖と、私という下僕の関係ですから。」

卑下するように朝倉は言う。

「卑下し過ぎじゃありません？」

「あはは」

「……ところで、朝倉さんは人類を滅ぼす気なんですか？」

倉田はさらりととんでもない事を聴く。

朝倉はクスリと笑う。

「いいえ。何人かは残って貰います。」

「何故？貴女は人間が嫌いなのにな？」

倉田は判りかねるような顔をして聴く。

「ええ。嫌いですよ、大嫌い。…でも嫌いというだけであって、興味が無いわけではない。」

朝倉は妖しい、妖艶な笑みを浮かべて倉田に言う。

「……好きの反対を人はよく嫌いだと言う。…でも、私は違うと思うんです。対象への反応や印象は確かに好きの方とは違うけど、嫌いの方は興味を示さなければ思わないはず。好きも嫌いも同じ様な存在で、本当に対になるのは無関心、だと思っんですよね。」

やはり妖艶な笑みを浮かべたまま続ける。

「だから私は人間は嫌いでも無関心ではない。つまり人間に興味が無いわけでは無いってことです。」

それは朝倉なりの回答。

朝倉の人類に対する印象。

束の所為で世界中の人類の敵に祭り上げられて迫害の対象にされてもなお、朝倉は人類に興味を抱いている――
奇妙な話だ。

「――まあ、最後に私が世界の王になって君臨するとか、そんなアホな事はないですから、その辺は安心して下さい。」

「ええ…何故？」

朝倉が言うと、倉田はさらに不思議そうな顔をして聴く。

それに朝倉は今度は妖艶な笑みではなく真剣そのものの顔をして倉田に向けて声を放つ。

「もし、世界が滅ぶ寸前の事をして人類を一定数残して間引いて、世界を変えちやつても、それは私という存在が秩序を破壊するという悪行を成すことで出来ることです。…そんな私が、のうのうと生きていて良い筈が無い。必ずなんらかの贖罪を迫られるべきです。…世界を変えたという罪科を償うのに手っ取り早いのが死ぬことです。…私は最終的に死ぬつもりですよ。世界が変わろうと、変わらまいと…。」

それはつまり、何があつても朝倉は死ぬという意識表明だった。

「それは無駄死にじゃありません？せつかく自由とかを手にしたら、好き放題やりまくれば良いじゃないですか。」

せつかく天災に一泡吹かせて自分に害を与える存在が居なくなつた後には自身は救われるべきだと考えている倉田は異を唱える。

「ええ、そんな自由があれば…の話ですが…。」

朝倉は少し悲しいような、寂しいような顔をして言った。

――何故なら、どう足掻こうと朝倉に残された余生は今年中に終わりを迎えてしまうという避けようのない現実があったから。
「私には限定された自由と終結に近い余命しかありませんからね。…どうせなら、派手な事をやってのけよう…なんてクチですが。」

ふと、朝倉が海に視線を向ける。

それと同時にゴジラが海面を突き破って現れる。

「グルル…」

唸り声を上げながら、北の方角を睨みつけるように見る。

何か、得難い難敵を得たような顔をしているその顔を朝倉が見て――

ふと、その存在が朝倉の脳裏にもフィードバックする。

「へえ、ゴジラと似た存在が。 ” 3つ ” も…そしてどれも日本に集結しつつある…。当然、ゴジラも向かう…なら」

思いついたように朝倉は倉田に顔を向ける。

「倉田さん、進路を日本に設定できますか？」

「勘弁して下さいよ…レツチ島に向かうはずでしょ？」

「なんだか、面白くなってきたんです。それに、レツチ島の天災なら、どうせそのうち日本に来ますよ。」

妖艶な笑みを浮かべて言った。

「なんで分かるんですか？」

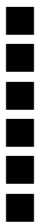
倉田はつまらなさそうに聴く。

そして朝倉は悪戯っぽく笑いながら言った。

「オンナの勘です。」

——— そんなやり取りをしている朝倉達を他所に、ゴジラはもう既に日本に向けて動き出していた。

——— 自分と同じモノを感じさせる者達を求めて、漆黒の巨獣は進撃を開始する———。



ロリシカ・沿海地方

旧ダリネゴルスク

天気は曇天。

相変わらず降り止まない雪。

いや、ロシアが戦略核を乱発した所為でさらに悪化した。

放射性物質を含む塵が舞い上がり、積乱雲にまで発展し、太陽光を遮るカーテンと化しており、辺りは極寒の冷気と明かり無き暗闇に支配されていた。

『プチ【核の冬】』…とでも言うべき事態に、国境付近の地帯は見舞わ

れてしまっていた。

放射能を含む雪が降り積もり、土壌は重金属粉塵による汚染のみならず放射能にまで汚染されてしまっていた。

その中を黒塗りで通信アンテナと観測装置が強化された「MF-4Rガンヘッド強襲偵察型」が2機、跳躍ユニットのスラスタを吹かしながら寒気を切り裂くように駆け抜けて行っていた。

『こちらチェーニ01、HQ、観測位置に着いた。指示を乞う。』

ロシア語で影を意味するコールサインを持つガンヘッド強襲偵察型分隊の指揮官がダリネゴルスク沖の日本海に展開しているモナーク機関の情報収集艦「プエブロII」に置かれた前線指揮所に通信を行う。

『HQよりチェーニ01、衛星から動きが確認され次第観測を開始。それまで待機せよ——』

HQのオペレーターが告げる。

今回観測する対象はいつもと同じ。

——とはいえ、今回はいつもとは様子が違っていた。

対象が、日本を指して進撃しているのだ。

そして対象とは、モナーク機関が重金属粉塵による多臓器障害を患った子供たちを対象に新薬実験を行っていた旧ダリネゴルスク——

——今はバルゴンの支配下にある——にあつたモ

ナーク機関の破棄された研究所を破壊して出現したバケモノ。

瞬間、広域マップに旧ダリネゴルスクから小規模なバルゴン梯団が接近して来る事を知らせるマークが表示される。

『!??中尉、ダリネゴルスク方面からバルゴン梯団が——!!?』

チェーニ01の僚機であるチェーニ02が言う。

だが、チェーニ01は落ち着いて返す。

『案ずるな。アレはどうせ対象のエサになる。』

瞬間。

——地面を埋め尽くしていた雪がバルゴンを巻き込みながら轟音と共に空高く舞い上がる。

何故なら、それはバルゴン梯団の真下——地中から現れた

それが地面に突き出した瞬間に発生した衝撃で吹き飛ばされたから。

『H Qよりチエーニ01、対象確認。観測を開始せよ。』

『チエーニ01、了解。』

そう応じると、ガンヘッド強襲偵察型の観測機器をフル動員して、ソレを観測する。

——ソレは鳶を全身に纏い、腹部と思しき場所にはオレンジ色に輝きながら鼓動する器官を持ち、所々ハエトリグサのような顔を持つ触手が生えていて、頭部と思しき部位の形はまるでワニのような形。

植物と爬虫類を合体させたような姿をしていた——。

「キユウヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!?」

ソレは荒々しく、そして何処か儂げな咆哮を灰色の曇天が支配する空に向けて放つ。

まるで大地を汚した人間を憎むように、人間にそうさせたバルゴンを蔑むように——。

だが、次の瞬間にその雰囲気は反転した。

「アハハ……」

「キヤハハ……」

ソレの本体から生えている触手の先端のハエトリグサのような顔が無邪気な子供らしい笑い声に近いモノし放ったのだ。

「…おねーちゃん、えりかおねーちゃん……」

「だっこ。だっこ。」

「おなか、スイタ……」

「ねえねえ、あのね……」

それだけではない。

完全にヒトの言語を理解しているとは思えない声を発したのだ。
「おねーちゃん……えりかおねーちゃん、どこ?……おにいちゃん?」

ふと、触手のひとつが疑問符を呟く。

「おにーちゃん……ちひろおにーちゃん!」

「えりかおねーちゃん、ちひろおにーちゃん……どこ?……?」

まるで迷子の子供が親や兄弟を探すように触手が次々と声を放ち出す。

そして本体にあたる部位が触手達の総意を反映するように、数十万トンの巨体を、根を動かし、地震のような地響きを鳴らしながら、動き出す。

ソレは——コード・【ビオランテ】は、雪原を薙ぎ倒すように、進撃を開始した——。

EP-26 群像と暇

IS学園・警備課課長室

そこに学園臨時理事長あらため、学園警備課課長の光と楯無がいた。

「学園理事長から警備課課長に転属とは…また急な辞令ですね。」

楯無が呆れるように言う。

先日、急にIS委員会が直々に光に臨時理事長を辞任し警備課転属するよう命令を下したのだ。

無論、その命令はあまりに不自然だし、光に学園の命運を左右する権限を握られている事を快く思っていないIS委員会の思惑が見え透っていた。

「…ま一応命令だからな。私はそれに従うだけだ。例え転属しても私は与えられた責務を果たす。」

光は何ら変わらない表情で言う。

だがしかし、次の瞬間には頭を抱えて苦い表情をして愚痴を漏らす。

「とはいえ、学園の警備課管轄の戦力がタッグトーナメントに出場予定の統合機兵と一個機械化歩行小隊、二個普通科小隊だけなのかな…。」

そう、神宮司まりも三佐率いる戦術機部隊はIS委員会からの退去命令と墨田駐屯地への異動ですでに学園の警備戦力としては存在しておらず、タッグトーナメントに出場予定の【対小型生物用機動兵器】である統合機兵と強化装甲殻、そして89式小銃とカールグスタフを装備する陸上自衛隊の2個普通科小隊が陣取っているだけだった。

正直なところ、これではタッグトーナメント前後に日本近海に迫る予測の巨大生物が上陸した際に警備課の戦力のみでは殲滅できない。

……いや、まあ教務課の教師部隊も出てきて、学園近海に展開中の艦艇が援護してくれたら殲滅できない事は無いだろう。

—————それが、援護可能であるなら。

—————まず、近海の艦艇による援護は正直なところ、期待で

きない。

いや上陸しなければ艦艇による迎撃が期待できるが上陸してしまえば艦艇による攻撃や援護は期待できない。

——「I S 学園対外規約第3条「学園の防衛ならびに支援は当事国および常任理事国が行う」。

まあ、分かりやすく言えば学園は当事国である日本の自衛隊と常任理事国であるアメリカ、中国、ロシア、フランス、イギリスのうちのどれかの軍隊が防衛ならびに学園の支援にあたるという決まりだ。

一時、学園に展開した日米臨時編成軍と欧州連合極東派遣軍の艦隊が学園を監視する事ができたのも、前述の決まりを口実にしたためだ。

だからもし学園に巨大生物が上陸しようものなら本来は支援してもらえるのだ。

だが、当然それが気に入らない輩もいる。

I S 不敗神話を唄うような連中が。

——「I S 学園対外規約第16条「第3国による学園への武力的・諜報的攻撃の禁止」。

これを理由にI S 委員会が騒ぎ立て、援護攻撃を行った艦艇の帰属する国家が国際社会で制裁対象にされてしまう可能性があるからだ。

そしてそれは当然、学園の主催国である日本の自衛隊も対象だった。

援護したのに制裁対象にされなければならない。

これほど馬鹿げた話はない。

だからこそこの海上艦艇も援護してくれることはまず無いと言って良い。

結果として、警備課の戦力と教務課の教師部隊のみで迎撃しなくてはならない事態になる。

確かに教師部隊の腕は申し分ないし、警備課の自衛官の腕前だって信用している。

だが、それでもどうしようも無いものがあるのだ。

——たとえば、今回日本近海に迫っている巨大生物など

が。

「そろそろ授業だろう？戻ったらどうだ、更識。」

「そうですね、そろそろ御暇しますね。」

「ああ…あ、そうだ更識。」

光とそんな他愛ない会話を交わして、楯無は警備課課長室から出て行こうとした——だがしかし、光はふと思い出したように楯無を呼び止めた。

「なんですか？」

「ひとつ、調べて欲しいモノがある。臨時理事長の権限を使つてもアクセス出来なかった、学園の第2シャフトとは別に、さらに地下に伸びている第1シャフト——その、最深部を調べて欲しい。」

「臨時理事長の権限より下の権限しかない生徒会長の私ですか？」

「警備課課長に左遷させられてお前より権限が下になったら、お前に頼むしかあるまい。」

「…まあ、そうですね…分かりました。虚ちゃんと一緒に調べてみます。」

パタン、と楯無が出て行つたドアが閉まると光は深く溜息を吐いた。

「…いつも、世話になる。」

ポツリと呟いたその声は警備課課長室に反響した。

――――
I S 学園・廊下

「…はあ…今日も授業かあ…」

千尋が廊下を歩きながらだるそうに、しかしそれでいて神妙な声で呟く。

「勉強は学生の本文だから仕方あるまい。…まあ、この非常時に授業を受ける気が起きないのは分からなくもないが。」

箒が前半は反面教師のように言うが一拍の沈黙を挟んで、後半は千尋と同じく神妙な声で応じた。

まあ、中国はバルゴン梯団によってハルビンまで後退を迫られ、ロシアは大規模梯団が南部の即席防衛線を突破しエニセイ川沿いに張られたエニセイ防衛線に接触。シベリア北部に設置された即席の防衛線は中規模梯団に耐えているが、突破されるのも時間の問題――

という、世界情勢が大きく変わり過ぎるくらいに変動している中でそれに対する訓練や会議への出席によって溜まった疲労など：仮にも自衛官の2人にとっては、まともに授業を受けられる状況では無かった。

――と、突然。

どんつ――何か物が千尋の頭に当たり、鈍い音を立てた。

「あ。」

千尋の頭に当たったソレは――コーラのペットボトルだった。

蓋は開いている。

一瞬遅れ、中身が千尋にかかって来る。

咄嗟に躲す――が、躲しきれずにやはり、頭に被ってしまった。

「ぶっふー！」

「千尋!!？」

思わず千尋は間抜けな声を上げてしまう。

幸い、濡れたのは髪だけだ。

制服や鞆までは濡れていない――いや、わずかには濡れたが、飛沫が僅かに付着しているだけの、無視できる程度のもだった。制服まで濡れたら替えが少なく、コーラは落ちにくいし匂いが付くから洗濯が酷く面倒臭い。

まあ今回濡れた髪は…水道で洗い流してタオルで拭けば、それで充分だった。

「はあ…まあたこれかよ…わざわざ御苦労なこった…。」

ふと、前を見るとキャハハと笑いながらそそくさと立ち去って行く女子の集団――。

千尋は最近、あの連中にコーラや何やらを投げつけられる——
——という、所謂嫌がらせにあっていた。

しかもご丁寧に、だいたい150円か160円くらいのモノを使っていた。

まあ、中学の時と比べればマシだろう。

中学の時なら、これとか石を投げられる類の嫌がらせは普通だったし、時には頭上からガラス片が降ってくる事だって何回かあった。

そして何より教員も男子だから、という理由で相手しなかったから。

この学園もまあまあそれと大して変わらないが多少はマシだった。やはり腐っても国際的立場にあるエリートだから風紀を弁えているのか、あるいは監視カメラが彼方此方にあるからあまり重大事件を起こせば退学させられるということを確認しているからか。

…まあ、そんなことはどうでもいい。

「千尋…大丈夫か？」

立ち去って行く女子集団を睨みつけていた箒が隣から千尋に心配そうな声で話しかける。

「平気だよ。これくらい水道で流したら大丈夫だから。」

「…そうか…あの、その…」

「なんだ？」

「…ストレスが溜まってしまいう前に、相談くらいはしてくれ…。あまり役に立たないかも知れないけれど、その……」

箒はたどたどしい感じで千尋に言う。

それに千尋は、箒に心配をかけさせた事に少し後悔しながら、しかし箒の好意に笑顔で応じる。

「ああ、わあつてるよ。中学の時みたいに、バカな真似はしない。」

——中学の時はこれより酷い嫌がらせに毎日遭っていたものだから、ある時ついに堪忍袋の尾が切れてしまい、当事者の所に殴り込み、血祭りに上げてしまう——という、大事に発展してしまった。

その後校内の調査で虐めや嫌がらせをしていた千尋に血祭りに上

げられた生徒は取り敢えず、厳罰に処された。

その時は今時珍しい男女平等主義の女性教師だった為に公正な処置が取られたが、この学園でもそんな公正な処置が取られるとは限らない。

だからこそ、前述のような大事になる前に痼をどうにかする必要があった。

そして中学の時は千尋には喧嘩というストレスの捌け口があったが今はそんな余裕もない。

だからこそ、そういう対策は自分が取ってやるしかない――

――箒はそう判断したからこそその言葉だった。

「…じゃあ、行こうか。そろそろ行かなきゃ遅刻しちまう。」

「あ、ああ。そうだな…」

千尋がそう言うのと、箒も応じて、教室の方に歩き出した。

――

1年1組

生徒は席に座り、教壇には学園上層部の会議で多忙の織斑千冬先生に代わって山田先生が立っている以外はいつも通りの光景だ。

「皆さんもご存知だと思いますが、あと3日でタッグトーナメントです。」

教壇に立つ山田先生が言う。

それでクラスの女子たちが口々に言う。

「楽しみだよね〜」

「織斑くんと組みたかったけど風さんが組んじやったしね…」

「なんで残った男がフツメンの篠ノ之だけなのよ。…死ねばいいのに。」

「篠ノ之なんかほっときなさいよ。どうせ下賤な男なんだし。」

「そうだよね〜どうせクズなネズミでしかない男だし。」

「取り敢えず軽い気持ちでやればいいよね〜。」

「そうそう、あとこれを機に他のクラスと交流とか……」

千尋は、もう慣れたから黙っている。

むしろ反応するだけ無駄に刺激して余計調子に乗らせる。

なら、黙ったり受け流した方が良い——それは自衛本能がそうさせていた。

だが、クラスの中では千尋アンチ派、とでも言うべき存在ではない生徒もいる。

だからそれらの生徒——箒、鷹月、立花、四十院、オルコツト、布仏など——は不快感を露わにしていた。

だが、黙っている。

面倒事に発展するのは目に見えていたから、黙って受け流していた。

それをいい事に好き勝手に言っているが、最後に言った女子の言葉にふと、神楽が反応して口を開いた。

「意気揚々とするのは結構だけど、それ以前に私達、本当に他のクラスと交流なんかしてる?」

冷たく、蔑むように、見下すような視線を向けながら言い放った。

「な、何よ四十院さん……。」

神楽の視線に、少し怯えたような声音で女子が言う。

「クラスの中でさえ纏まることが出来てないのに、クラス交流なんて出来るのかしらね?」

前述の不快感を露わにしていた女子達の心情を代弁するように、やはり、冷たく言い放つ。

「——タッグトーナメントは確かに学園のイベントだけど、それをやるのにも結構……では済まされなくらいの莫大な費用が掛かっているの。ちなみにその費用、貴女達や私の親だけじゃなくて、私達と無関係の人達の年がら年中汗水流して働いて得た給料から生じる給与所得税とか、そういう税金——いわば国民の財産ね。そういうところからも搾取してるの。」

神楽は先程浮かれていた生徒達全員に言い放つ。

「——で、そういう人達から財産を搾取してまでして開いた

タッグトーナメントで『何と無く何かを得た気になりました。』とかじゃ、親や自分達を支えてくれてる人や無関係だけど税金という名の財産を捧げてくれた人達に示しがつかないわけ。分かる?」

「…四十院さんの言う通りです。」

ふと、山田先生が意を決したような声音で言う。

「タッグトーナメントは学園行事であつて遊びではありません。——
——ですので、皆さんも軽率な発言は控えて、今回組む事になる人との確固たる結束を結んで下さい。」

そう言うのと、いつも通りの授業が再開され、いつも通りのように時間が過ぎていった。

——そしてその間にも、世界は破滅に向かって転がり落ちて行つた。



レツチ島

束のラボ【れつど・ばんぶー】

英語で赤い竹、を意味するその施設の地下で、束はコンソールを弄つていた。

「うんうん、紅椿はうまい具合に完成しつつあるね。さすが束さん。今までのISコアより出力の強いやつを使ったからかなり良くなつたはず!!?」

子供じみた声音で言う。

だが、意外に作業には手間取つていた。

何故なら、コンソールを叩く手は、利き手ではない左手のみだったから。

「…っ!…右手が使えれば、さっさと紅椿が作れるし、【れつど・ばんぶー】だつてわざわざインファイト島から人間を拉致してきて強制労働させる事なんかないのに…!!?」

肘関節あたりで切除した右腕の名残を左手で押さえながら束は恨

みがましい声音で言う。

外には、ダンプやシヨベルカータイプのドローンが1基ずつと、その近くで人力で土を運ぶ人々――。

実は「れつど・ばんぶー」はキャロット島を開発し尽くした際に遊び半分で開発した施設であり、未だ未完成なのだ。

しかも重機型ドローンや自動機械人形、ISの大半はキャロット島に置いてきてしまい、レッチ島に置きっぱなしにした事で辛うじて生き延びたドローンを動かしてなんとか稼働可能になるまで建設しようとしていたが、それでは時間がかかり過ぎる。

早くてもあと1カ月はかかってしまう。

だが自身は土木作業ができる状態にないし、したくもない。

ならばどうするか。

答えはすぐに出た。

――隣島のインファイト島から島民を拉致して強制労働させれば良い。

幸い、外敵駆除用の20ミリ機関砲を拡張予定地の敷地内各所に設置したため、逃げようとするものなら蜂の巣になるから逃げようとなない。

仮にそれを掻い潜っても近海には肉食性の巨大生物・エビラがいる。

船で逃げようにも、結果は船を破壊されて喰われるという末路。

だから逃げようとしなない。

生き延びたいなら束の言う事を聞くしかない。

それは例え飲まず食わずが続いても。

それは例え病気で体を壊しても。

それは例え事故で怪我をしても。

それは例え疲労で足腰が立たなくなっても。

――なんて、理想的な状況だろう。）

束は思った。

そこらのゴミ虫共が、束さんの言うことを聞いて、束さんの思い通

りに動いている。

「——世界中全ての人間がこのゴミ虫のように束さんの言う事を聞けばいいのに。」

この光景は束にそう思わせた。

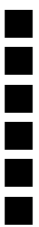
この様子なら、あと1週間程度で出来るだろう。

それまでに、拉致して来た島民50人の内、10人くらいは過労死するだろう。

「でも、束さんの知った事じゃないよね！」

無邪気に、そして残酷な笑みを浮かべて束は言い放った。

————インフアイト島から2つの飛翔体が接近する姿がレーダーに映ったのは、その時だった。



アメリカ合衆国・シアトル

モナーク機関北米本部

中央情報本部はラドンのニューヨーク蹂躪以来の喧騒に包まれていた。

バルゴンによるユーラシアへの戦域拡大時はそれ程騒ぎ立てることは無かったが今回は長年監視している場所に変化があったからだ。

場所は、インドネシア領インフアント島——。

「衛星からのデータ、モニターに出します!!？」

オペレーターが言うなりコンソールのキーボードを叩くと、中央に添えられた巨大モニターに監視衛星が捉えた情報が投影される。

画像に映っているのはインフアント島の航空写真だった。

その中央にある、インドネシア語で「巣」を意味する名を持つサラ山内部に強力な電磁波が確認されたのだ。

それが過去最大というほどにまで強大になったということとはつまり、監視対象が動き出した事を意味する。

「…間違いありません。若干の誤差はありますが、1961年に観測された電磁波と一致します。」

「……まったく…次から次へと…この星は怪獣だらけじゃない…!!?」

サンドラ大佐が忌々しそうに、しかし何処と無く怯えを孕んだ声で呟く。

無理も無い。

地球上で確認出来ただけでも巨大生物が生息している地域は全世界で21ヶ所。

内、モナーク機関が監視下に置いているのはそこに住み着いている巨大生物の生息地である10ヶ所程度。

それ以外は場所を転々と変える為に常時監視が出来ないのだ。

そんな常時監視不能になるかも知れない巨大生物がまた増える――想像しただけで恐怖だ。

「…あるいは我々人類が “ 怪獣だらけ ” にしたのかも知れない。大佐…。」

ふと、隣からバーク少将が言う。

「…あの辺りは1960年代の核実験の影響を受け、隠匿してはいるが生態系が大きく崩れた場所だ。…何があってもおかしく無い。」

核実験、という言葉が忌々しそうに吐き棄てる。

彼の父は冷戦時にアメリカ軍が行った核実験に携わり、事故により大量の放射能を浴びて急性被曝し、彼が生まれたその年に急死。

彼自身にも放射能という名の呪いは体に刻み込まれ、放射線被曝2世という形で受け継がれてしまっていた。

だから彼自身は核兵器に忌々しい感情を向ける事が多かった為に、核兵器を是とするペンタゴンで煙たがられ、ここに左遷されたのだ。た。

核実験で生まれた巨大生物がいるからこそ、彼はそういう存在に感情移入しやすいという面がある。

「……もしこの巨大生物が人類の敵になっても、核兵器を使

うなんて真似はして欲しく無いもんだ。——— 今時の奴らは、核兵器を威力の大きい爆弾としか見ていない。」

バーク少将はそう吐き棄てる。

「対象が飛翔を開始——— 過去のデータに該当します！対象はコード：【モスラ】！！？」

I??~~??~~??????????
ツグトーナメント2日前
IS学園・第2シャフト

仮設宿舍棟

『こちらは現場の美浜原子力発電所です。30分ほど前、地震と原発敷地内で大規模な爆発があったとの事です！詳しい被害はまだ不明ですが稼働状況に無かった為メルトダウンの危険はありません。しかし先程気象庁より万が一の事態に備え、近畿地方北部を中心に放射線警報を発令したとの事で———』

テレビに映っている、防護服姿のリポーターが叫んでいる。

内容を聴く限り、若狭湾沿岸の美浜原子力発電所で事故が起きたらしい。

リポーターの後ろを消防車や警察のパトカー、自衛隊の73式トラックに化学科の装備しているNBC（核・生物・化学）防護車とNBC防護服を着た自衛官が大勢映っている。

リポーターが言うには美浜原子力発電所は2011年3月11日——— 今から10年くらい前に起きた東日本大震災の翌日の福島第一原子力発電所のメルトダウンを機に稼働停止状態で、現在は廃炉に向けた作業が行われていた———。

その、最中に起きた事故。
（被害に遭った人達……心配だな……。あと、原発アレルギーの内閣は苦労しそうだな———。）

ふと、テレビを見ていた千尋は内心呟く。

「福島に続いて美浜も……。」

千尋の隣に座ってテレビを見ていた立花が呟く。

「原発近辺の対策にも追われるけれど、マスコミへの対策にも忙殺されちゃう…。今の報道機関は報道ではなく収入に力を入れているからデマを流すことも厭わないもの…。…」

立花が冷静に分析するように呟く。

千尋もそれに頷く。

立花の言っていることは事実で、近年はかなり偏向報道が目立つからだ。

正直、ニユースよりオンラインSNSの方が信頼できる――

――とすら言われているから、深刻な問題と言える。

重い空気が包み込むはず――なんてことは無かった。

千尋と立花のその後ろでは――。

「――王手。」

パチリ、と将棋のコマを打ち付ける音を響かせながら箒が言い放つ。

学園内のコンビニで買って来たインスタント将棋セットを畳の上を広げて、箒と鷹月が勝負を繰り広げているのだ。

「うええ☒ち、ちよつと待ってね箒ちゃん、ううう、ううううむむむ……」

箒と対面する形で床に正座している鷹月が腕を組みながら唸り、必死の形相で思考していた。

ソファに座ってペットボトルのウーロン茶を飲みながら簪がカウントする。

今日は鷹月たちが『ヒマだから千尋の部屋にお邪魔しない?』と言い出して上がりこんできたのだ。

もちろん、許可は取ったが。

「持ち時間数えるね…鷹月ちゃん時間あんまり無いよ。」

「わ、分かってる!分かってるから!!?」

「……残り……」

「いいから!!?」

などと盛り上がっていた。

さらにキッチンの方では。

「四十院さん、お料理できるんですね…。」

ジャガイモやニンジンを切って煮込んでいる神楽を見てセシリアが爛々とした瞳で少し驚いた顔で言う。

「別にカレーくらいは出来るわ…まあ、うまく行ったのがコレだけだから。」

何処か気品さを持った雰囲気を放ちながら、苦笑いをして言う。

「両親の帰りが最近では遅いから、色々やっではいるんだけど…。」

「メイドのようなお手伝いさんはいらつしやらないんですか?」

「居る事には居るわ…8人ほど。でも出来るだけ自分のことは自分で始末したいの。でない、社会に出た時に困るのは私だから。」

「立派な考えだと思えますわ!…私はメイドの皆さんに頼りっぱなしですもの…。」

ふう、と神楽が溜息を吐く。

年相応の柔らかい笑みを浮かべながらも、やはり何処か気品のある雰囲気を醸し出している。

「でも、中々上手くはいかないものね。カレー以外は焦がしてしまったり乾燥させてしまったり形を崩してしまったりと散々失敗してばかりだわ。」

「わたくしもですわ…あまりに酷くて、メイド長のチエルシーから殺人兵器級、だなんて評されてしまつて…」

セシリアと神楽はお互い貴族と名家出身という、一般人とは少し違う環境で育つた過去を持つからか、よく息や意見、感性が合う。

合わない点があるとすればそれは両親の有無だろう。

神楽には両親がいるが、セシリアの両親は彼女が幼いころに列車事故で亡くなっており、互いに両親に対する価値観が違う――

という点だ。

セシリアからすれば、例えそれが女尊男卑によって歪められていても、曲がりなりにも望んでいた幸せ。しかしもうどんなに手を伸ばしても、どんな対価を払ったとしても手に入らない幸せ。だから彼女はせめて思い出だけでも残したかったから、オルコツト家を守る為に――

S 乗りになり、紆余曲折を経て、今は統合機兵というイギリスの多くの将兵の未来を左右する兵器の試験パイロットとなった。思い出を無くさない為に、家族と過ごした世界まで無くさない為に。

神楽からすれば、家の為に自分を縛り付けて抑え込む鎖であり足枷——だから彼女は自立したがるのだが、それでも親に「愛して欲しい」という欲求が無いわけでもない。今は些細な反抗をしているだけだ。認められる為に様々なことを自らの手で試し、自分に出ることを模索し、失敗を積み重ねてそれを糧にして、将来と自分の実力に変えていく。そして終着点は「親に褒められる人間になる」こと。2人共少し子供らしいかも知れないが、それでも目標があるだけ立派だ。

「…鷹月さん、持ち時間超過してる。」

ふと、将棋をしている面子に目を戻すと簪が鷹月にそう言っているところだった。

「ぐぎぎぎぎぎぎ…ま、待って、もうちよつと…もうちよつとだけ…!!?」

「ふふ、これはもう無理な気がするがなあ…。」

微笑みながら簪が言う。

そして千尋も将棋のボードを覗き込み、呟く。

「あー…うん、詰みだな。こりゃ。」

「う、ぐ、ぬぬぬぬ…！まだよ！まだ終わん無いわよ!!?」

「いくらでも待つぞ。…さあ、打てるものなら打ってみろ。」

鷹月が必死の形相で言う。

簪がそれを楽しそうに、そして何処か嘲笑う様に黒い笑みを浮かべて言う。

ちなみに千尋と簪、神楽そして簪以外は将棋のルールすら知らなかった。

もうそんなゲームをする世代ですら無くなった、という事だろう。まあ今のご時世、ゲームといえばデジタル画面越しにプレイするモノだ。

サイコロをふるって駒を進めるすぐろくや駒を打ち合う将棋のよくなレトロなゲームをする子供は絶滅危惧種というに相応しい。

だがしかし、やって見れば楽しいものだ。

今箒と鷹月がやっている駒を打ち合う試合の他に、将棋の駒を積み上げた山から駒を山が崩れない様に抜いて行く将棋崩しなど、将棋のルールを知らなくても楽しめるモノはあるのだ。

将棋の試合なら箒、将棋崩しなら千尋が一番だった。

「——こういうのは、今のうちにパーっと楽しんどいたほうが良い。…もう少ししたら、多分…」

千尋は内心、不安に対して漏らしてしまうが、首を振ってそれを振り払う。

「いや、今は、やれることをしねえとな…機龍の操縦訓練に関しても何回かやった。あとは、震度やGが来るタイミングとかを体に馴染ませれば——」

「うああああ…もう無理い…降参…。」

千尋がそんなことを考えていると、隣では箒の前に膠着状態だった鷹月がついに根を上げ、床に轟沈していた。

「——次はお前が将棋崩しで勝負してやったらどうだ？千尋。」

ふと、箒が千尋に声をかける。

「やるーやるわ!!?千尋にまで負けてらんない!!?」

鷹月が食い付く。

「え、いいけど…俺強いよ?」

「知ったこっちゃないわーやるー絶対やる!!?」

鷹月が食い付き、千尋が相手をした。

——結果を言えば、鷹月は将棋崩しでも負けた。

頭に血が昇ってしまい、指先が震えている状態で将棋のコマを倒してしまったのだ。

対する千尋は落ち着いたまま、まるでそこらの石ころや砂で天に届く程の塔を作るような、繊細で綿密な作業で淡々とクリアして行ったのだ。

「負けた…また、また…。」

鷹月が尻を突き出しながら頭を床に疼くめた状態で再び、轟沈す

る。

「は〜い皆さん、お楽しみのところですが夕食が出来ましたのでお開きですよ〜。」

セシリアが言う。

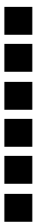
「ハチミツと林檎入りのカレーに夏バテ防止用のインスタント冷やし味噌汁よ。さあみんな座って座って。」

神楽が食器をちゃぶ台に置きながら言う。

それに応じるように、全員がちゃぶ台に着いて――。

「いただきます!!?」

――あと数ヶ月で、世界が終わるとは思えない、陽気な声音が木霊した。



東京都内・特務自衛隊八広駐屯地

第11多目的室・G関連研究本部

「うーん……これってどう見ても……」

清潔感に満ちた白い壁にリノリウム製の床で構成された室内の無機質なデスクに上半身を持たれかけさせながらコンソールのモニターを睨むアイリが呟く。

モニターに映し出されているのは【千葉県館山市・IS学園】、【福井県美浜町・美浜原発付近】、【小笠原諸島・孫の手島近海】の3ヶ所にそれぞれ黄色い光点（グリップ）が記されており、そこから衛星で観測された波長を照らし合わせる作業を繰り返していた。

――結果は寸分の誤差はあれど、ほぼ一致。

しかも特定時間によってはグリップのひとつが強力な波長を放てば他のグリップも反応して同波長を放つ――という奇妙な現象を起こしていた。

「どう見ても……【共鳴現象】……よね。」

【共鳴現象】

――先の機龍暴走事故の際に観測された現象名

だ。

機龍のDNAコンピュータに使われていた特定の塩基配列が同時に駐屯地内で行われていたG元素を用いたG2機関発電システムの機材の放つ周波数に反応し、機龍の欠けた装甲を補う為に試験搭載したG元素由来の特殊装甲——【G型装甲】を通じて、暴走。

しかしその2分後に別の周波数を機龍の実験場内で観測。

その別の周波数に共鳴するように機龍の波長が変異。

さらには、同時刻にG2機関発電システムの機材が破損。

それらが起きてやつと機龍の暴走は停止——。

それで一度は安堵したものの、別の周波数の発信源が千尋だと知った瞬間は、まるで頭をハンマーで殴られたような衝撃に襲われた。

「…やっぱり、G元素はヒトには早過ぎた代物なのかもね……。」

天井を見上げ、「ふう……」と溜息を吐いてアイリは呟く。

——まあ、G元素自体が未開拓の部分が余りに多過ぎるのだ。そもそもG元素はゴジラの生体エネルギーであり、人類が知り得る既存の元素の約8倍の数の未確認元素がありそれらが既存の元素にどんな影響を及ぼすのか、どれだけのエネルギーを生み出すのか——

未だ全体の13%しか分かっていない。

そもそも8倍で留まるかどうかすら怪しい。

もしかするとそれ以上に増える可能性だってある。

それ以前にこれが禁忌に触れてしまわないか、ゴジラやゴジラクラスの巨大生物殲滅用に行われていた研究や開発された武器がまた別のゴジラや他の巨大生物を生む原因にならないか——。

その点にもピリピリと神経質な程にまで警戒しながら行つて来たが——。

それが果たしてどれだけ効果があるのかすら分からない。

人が自然を支配する事などできないのと同じように。

「——そんなモノにも手を出さなきゃいけないだなんて……。」
ふと、アイリが呟く。

これまでG元素やG細胞を用いた研究をして来たが、どれも口クナ事が無かった。

いや、あるものも確かにあった。

しかしそれは余りに危険極まりない、ハイリスク&ハイリターンならぬ、ハイリスク&ハイデメリットだった。

どうしようもないまでに理想的な淡い期待を寄せ、どうしようもないまでに残酷で悲惨な結果を生む。

「…やっぱり、一番の怪獣は私達ニンゲンね。」

自嘲するように言う。

だが、それが事実だ。

それは歴史が証明している。

——人は利権を巡って戦争をした。

——人は核を作り、使用した。

——人は発展の為に公害を起こした。

——人は開拓の為に森林を焼き払った。

今までにして来たそれらの行いで被害を受けた存在がどれだけいるか、検討もつかない。

きつと、知ってしまったえば自らが人類を滅ぼしたくもなるくらいなのだろう。

——閑話休題。アイリは再び、作業に戻る。

「あ、お疲れ様です。アインツベルンさん。」

ふと、燈が話しかける。

「ああ、燈ちゃん？戻って来たの？」

「ええ、しばらくこちらで対巨大生物戦前略会議に出席しなきゃですから…大変です。」

苦笑いしながら応じる。

だが、暗い表情に切り替わり、重い雰囲気纏って口を開く。

「…それに…対G攻略戦には、彼女が…英里加ちゃんの力が、必要なんです。」

「……。」

ふう、と溜息を吐いて燈はアイリが向き合っていたコンソールの画面を見る。

「…それは共鳴現象ですよ？IS学園以外に2箇所もGが放つ特有

の周波数を放っている…と、なると…」

「…そうね…来るわね。…【ゴジラ】が。」

アイリが険しい顔をして言う。

ゴジラ—— 大戸島に伝わる伝説の荒ぶる海の神の名を冠する怪獣。

極秘ファイルの中にあつた資料でしか見た事がないが、1954年、この日本に上陸し戦後復興間もない東京を再び焦土に変えた——とされている巨大不明生物だった。

そしてそのゴジラとある意味同類なのが—— I S 学園の千尋と機龍、美浜原発敷地内の地下にいる、英里加が生み出してしまったバケモノだった。

「…で、英里加ちゃんはとうだった？」

「—— 精神は安定しつつありますが…やはりアレやG関連の話になると発狂してしまつて…」

燈が首を横に振りながら告げる。

「…そして、ひとしきり狂つたように叫び散らかした後は酷く悩ましげな表情になつて…うわ言みたいにブツブツと、こう言うんです。」

—— 燈が、一拍開けて口から言い放つた。

「—— 私がG細胞なんて使わなきやよかつた。私があの子達を治そうとしなきやよかつた。私なんて生まれなきや良かつた…したらあの子達は、人として人らしく生きて死ねたのに—— と…」

「…そう——。」

アイリは悲しげな顔をして、天井を見上げた。

「…ダリネグルスクのモナーク機関研究施設で行われていた【ベッセリング計画】の失敗—— 別名、【ダリネグルスクの惨劇】から

そう簡単には…立ち直れるワケが無いわよね…特に、当事者ならば尚更…。」

??????????????

2021年8時14分（日本時間17時14分）

アイスランド南部

北大西洋ウエストマン諸島スルツエイ島沖4キロの海域

夏になったにも限らず、未だ凍てつくような寒さの北大西洋の海を掻き分けながら、アイスランド沿岸警備隊巡視船【アイエル】は過去にノルウェーのベルゲン大学所属海底地震観測船【ホーコンモスビー】の施設した海底地震計を元に航行していた。

「振動探知。本船右舷よりおよそ3.5キロの地点にいます。」

地震計の統計データを確認していた沿岸警備隊員が言う。

「火山弾が飛んで来る危険がある。最低でも4キロ離れるぞ」

「取り舵。」

船長の男性が命じると操舵手は、了解。と応じて取り舵——すなわち船首を左に回答する作業に入る。

——その、瞬間。

「目標、浮上します!!？」

双眼鏡を覗いて地震計が示した座標の方角を監視していた観測員の女性が叫ぶ。

一瞬後、彼らが探していた存在が、海底を切り裂くようにして海水を熱水に変化させながら、現れる。

まるでそれは、言い表すならば火山。

厳密には、火山を纏った生き物。

荒々しい岩石めいた外皮は硬化した溶岩を連想させ——

否、溶岩そのものであるかのように、亀裂の走っている隙間からは赤い紅い、焰のような灯りが闇夜を照らすかのように光っている。

それは溶岩のような甲殻を纏った、爬虫類とも甲殻類とも言い表せぬ、かつて地球に生息していた首長竜を連想させる体型に、頭部は不釣り合いな程に大きく、無数の突起とバツファローのようなツノを生やした、岩石の巨獣だった。

『オ〃オ…オ〃オ〃オオオ〃オオオオオオ…オ〃オ〃オオオオオオツ!!?』

――鳴動する大地の咆哮。

あの生き物、巨大不明生物は形や並び方の不規則な歯を無数に生やした口から数百度もの蒸気と共に世界を揺らすかのような爆音を口から放つ。

「…今日はずい機嫌斜めみたいですよ。【トーガス】の奴。」

観測員の女性が言う。

『オ〃オオ〃オオオオオオオオ…オ〃オオオオオオオオツ!!?』

【トーガス】と呼ばれた巨大不明生物はアイスランドの南端にある火山島・スルツエイ島近辺に生息する生物だった。

自らの体を海水に浸しながら、痒いところに手が届かない猫がイライラとしているようで、その巨体で海を切り裂かんとばかりに海面を叩き、薙ぎ払う。

ふと、瞬間――溶岩のような体表を貫くようにして、鋭い

岩石のような新たな甲殻がマグマのような体液と不要となった体表の古い甲殻を火山弾のように撒き散らしながら、トーガスの体表に形成される。

――それは、正に噴火。

大地に新たな火山が形成される瞬間に酷似した現象だった。

『オ〃オ』

“オオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!?”

――再び轟く、咆哮。

空に、大地に、海に、波及するかのように。

それはもはや獣のソレではなく、プレートを軋ませる大地の轟音そのものだった。

「――ははあ…あのイライラは新しい甲殻を形成する前の痛みみたいにイラついていたのね…」

観測員の女性が言う。

彼女が結論に至ったトーガスの痛みとは、人間でいうと成長期に手足の関節が痛む『成長痛』のようなもの――否、そのものであった。

トーガスは冬から気温が暖かくなる春にかけて海底にまで潜り、体

表に新しい甲殻を形成する。

甲殻の素となるのは体内を循環する超高温のマグマめいた体液だ。海底に潜るのは、甲殻を形成する時期に上昇しがちの自身の体と形成し錬成した甲殻に対する冷却剤の代わりを成す為。

——しかし、

「今年は甲殻の形成に手間取ったし、まだ形成されるから、成長痛が絶えないワケね……」

そう。本来なら春の時点で甲殻の形成は終わり、浮上するのだが、今年甲殻の形成に手間取った上にこれからまだ甲殻が形成されるのだ。

それで、人間が成長期に手足の関節が痛むような成長痛が絶えないのだろう。

なぜそうなっているかと言うと、おそらくは近年問題となっている北大西洋の温暖化による海水温度の上昇が原因なのだろう。

海水温度が上がって緩くなってしまった結果、甲殻を形成するのに適していない水温になってしまった為に甲殻の形成に時間がかかってしまった。

そのまま海底にいれば良いと思うかもしれないが、トーガスも食糧を得なければ餓死してしまう。

故に仕方なく浮上して来たのだ。

「こりゃあ、かなりストレス溜まってから、八つ当たりはこの海域通りかかる船舶を襲いそうだなあ……」

操舵手の男性が呟く。

「そうだなあ……周辺海域に立ち入り禁止の勧告はしているが、それを強化する必要があるそうだな……」

船長も続いて言う。

そうするより駆除する方が早いと言えばそうだが、以前採取したトーガスの甲殻を調べたところ、モース硬度があり得ないレベルのモノだった。

端的に言えば、日本の海上自衛隊が保有する護衛艦やまとの46センチ主砲をもってしてやっと損壊させられるレベルだが、ダメージは

甲殻表層部にしか与えられず、どうやっても分厚い甲殻を貫通することは出来ないのだ。

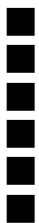
つまり、殲滅手段が無い。

さらに言えば、今回のような状態でなければ、こちらから手を出さない限りトーガスは人間を襲いはしない。

——であれば、トーガスにも気を遣いながら『共生する』という選択肢が無難だろう。

「——さて、怒らせない内にさっさと帰るぞ。」

船長の男性が命じると、巡視船アイエルはレイキャヴィック港へ向けた航路を取った。



IS学園・第1シャフト内

「…それにしても深いわね…特自が使ってる第2シャフトの倍近い深さかしら…?」

空中連絡通路から真下を見降ろしながら楯無が呟く。

光に頼まれた第1シャフトの調査を実行に移し、虚と共に第1シャフトに侵入していたのだ。

「しかし宜しかったのですか…許可なしに侵入して…?」

虚が心配気な声音で楯無に聴く。

「…学園理事長の権限を使っても入れなかった第1シャフトにわざわざ許可を取りに行っても突っぱねられるに決まってるわ。だから許可がとれないなら最初からアポに行かず、不法侵入した方が手っ取り早い。長い時間待たされてなあなあにされるよりマシよ。」

楯無のやり方は確かに理解できるし一理ある——そこは虚も納得したため、2人は学園中に張り巡らされた電力供給及び空調ダクトの整備トンネルを経由して第1シャフトの通風口から侵入していた。

「…まあ、こんなバレたら責任追及で退学か生徒会長クビでしょうね…その時は貴女にも迷惑をかけてしまう…ごめんなさい、虚ちゃん。貴女まで巻き込んで。」

「いえ、お嬢様にお供し、仕えることが幼き頃より私に与えられた使命にございます。嫌とは一言も申しません。」

「そう…そう言ってくれど助かるわ…。」

虚の苦勞をねぎらうように楯無が言う。

——しかし、ここである事に気付く。

「…ねえ虚ちゃん、何か、奇妙じゃない？」

「…はい。…人の気配がありません。異常な程に…。」

虚が獣が威嚇するような声音で辺りを警戒しながら呟く。

「…気配を消してるワケでもない、何処かから見てるワケでもない…どういうこと？」

楯無は顔を顰めながら呟く。

第2シャフトでさえ警備課や教務課によるかなりの警備体制が敷かれている。

だが第2シャフトより巨大な第1シャフトがここまでガランとしているのは、あまりにも異常だ。

——瞬間。

「…ツ！虚ちゃん、戦闘体制!!？」

楯無が叫び、専用ISの「ミステリアス・レイディ」を展開。

同時に水のナノマシンをシールド状に展開し、楯無と虚の前面をカバーすると同時に虚も自身のISである「打鉄（暗部仕様）」を展開。

——直後、けたたましい火薬の炸裂する音と共に水のナノマシンに20ミリの銃弾が叩き付けられる。

その20ミリ機関砲が放つのは、縦長の直方体に4本足の黒い機体——アメリカ製の対人制圧用ドローン【M3A1オート・マトン】。

「…ドローンによる警備体制とはね…。」

若干驚きつつも、お返しと言わんばかりに楯無はミステリアス・レイディのランスに内蔵されたガトリングを穿ち、オート・マトンを蜂

の巢にする。

だが瞬間、表示されるウインドウ。

『警告：下方より敵数4、接近。』

ハイパーセンサーが捉えた敵が接近しつつある事を告げる。

そこにアサルトライフルを穿つ虚が割って入る。

「お嬢様！このフロアのオート・マトンは私がやります！お嬢様は下方の敵を!!?」

「ええ!!?」

そして楯無は空中連絡通路から下方に向けて、飛ぶ――。

瞬間、壁をよじ登るように移動していたオート・マトンによる一斉射撃――。

ISの絶対防御を貫通し得る、20ミリ機関砲4基による同時攻撃――
本来なら、楯無は機関砲によって絶対防御を貫通され、穴開きチーズにされてしまう所だっただろう。

だが、水のナノマシンによる壁が、それを阻む。

「セカンド・プランは基本――ってね!!?」

さらに、オート・マトン4機が展開すると真ん中に飛び込み、水のナノマシンを増幅させ、湿度の高い霧がオート・マトンを包み込む。

オート・マトンは、それでセンサーがやられて楯無を追尾できなくなる――その瞬間を、楯無は逃さなかった。

「クリアバクション（清き情熱）!!?」

炸裂する、ナノマシンによる水蒸気爆発――。

それで、オート・マトンは沈黙した。

「ふう…」

「お嬢様！ご無事ですか!!?」

オート・マトンを始末したらしい虚が楯無を追ってやって来る。

「ええ、平気よ。：それにしても、学園理事長ですら入れず、さらにはオート・マトンをわざわざ使ってまでして隠したいモノって…」

楯無は疑問を浮かべながら呟く。

だが今迷っても仕方ないと割り切り、そのまま下方に進む。

――ふと、地下700メートル程の地点を通過した、瞬間。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。!!?」

ハイパーセンサーに追加されたガイガーカウンターがけたたましい警報音を鳴らす。

「毎時、150ミリマイクロシーベルト…!!? 福島の汚染地区並みの放射線量じゃない…!!?」

楯無は思わず絶句する。

絶対防御があるからこそ、被曝はしないがあまりに唐突過ぎるこの放射線量は誰でも驚愕させられてしまう。

だがそれと同時に第1シャフトの壁に固定されているあるモノに気付く。

——— 絶縁体の黒いゴムが巻かれた電力ケーブルだ。

それは下方から直上に向けて伸びて行っている。

さらに、下方にある隔壁をズームで確認するとそこに在ったのは――

——— IS委員会のマークと、放射能を意味するマーク。

そして観測された150マイクロシーベルトという無視できない放射線量。

465メートルもの深さしかない第2シャフトに対して850メートルもの深さがある第2シャフト。

それらを条件から導き出される存在は――。

「…原子力発電所…!!?」

10年前に福島を死の大地に変えた、忌むべき存在だった。

茶番1

てなワケで今回は茶番だよ！

千尋「待てコラ、本編は？」

シンゴジラの内容と取り寄せ中のゴジラ対自衛隊って本読んだら内容応用しつつ書くから…。

千尋「つまり尺稼ぎか？」

まあ…はい。

せ、せつかくだし他の小説の主人公や世界線、設定とかの差異とかを話し合いたいと思います。

…t w i t t e rとかで各世界線の詳しい解説お願いしますって言われたので。

って事で…自己紹介タイム。

千尋「んじや俺からな。みんなお馴染みの篠ノ之千尋。インフィニット・ストラトスadvanced【Godzilla】とPixiv版のシン・インフィニットストラトスadvanced【G】の主人公の元ミレゴジだ!!？」

雄飛「現在休載中のマブラヴレギオンの主人公を務めております大日本帝国陸軍軍曹の新田雄飛です！」

肇「同じく休載中だけどなんかup主から発表があるらしい永遠ノ燈の主人公、国崎肇だ。」

千尋2「ゴジラISを書くだけでも大変なクセに何も考えずにup主が書いた小説、シン・インフィニットストラトスEXTRAの主人公の黒坂千尋…この場ではややこしいから千尋2でいいや。」

ち、千尋2…毒舌…。

雄飛「つてちよつと待って下さい、自分らの小説が絶賛停滞中なのにまた新しいの書くんですか!？」

うん、インフィニット・ストラトスらしいゴジラISを書こうと思っ

千尋「え、てことは俺の方は？」

安心してくれたまえ。

どの小説にも「ゴジラISの並行世界」タグ付けてるしそもそもゴジラISは本気で終わらせるつもりだから。

千尋2「つまり派生作品の俺らは書き上げる気は無いと?」
い、いやあるよ!

少なくともシン・インフィニティストラトスEXTRA:長いからシンISで!...は少なくとも書き上げるよ!!?

肇「俺らは?」

.....

雄飛「うp主さん?」

.....気が向いたら:あと、ネタが溜まったら:。

肇「まあネタの大半をゴジラISに使ってるからそれ以外の小説に使うネタは枯渇するよな。」

うん:ま、まあそれぞれの世界は因果で繋がっているから何らかの影響とかでゴジラISと同じような展開もありだし:。

千尋2「それ、なんて【因果率量子論】と【確率時空】?」

雄飛「結局マブラヴネタですか。」

う:いい、因果の方はそう言われても仕方ないけど確率時空は:ゴジラだってパラレルワールドいっぱいあるし:特にミレニウムシリーズとか:。

肇「まあこのままだと進まないしそろそろ本題に入らないか?」

おっそうだな。

千尋「逃げた。」

千尋2「逃げたね。」

雄飛「逃げましたね。」

と、とりあえず各世界線を比較してみよう!!?

——まず、各世界線だけどゴジラISの並行世界ってして
るよね?

全員「うん。」

というのも、ゴジラISのプロローグで束がワームホール生成機を暴走させちゃったでしょ?

千尋「ああ、んな事もあったな。」

その時色んな世界に干渉しちゃった時の反動が墨田区に流れ込んで墨田大火災になったんだ。

千尋「ああ、あれってそういう事か。」

まあ、マグマみたいに流れ込んできたのはG元素だけど。

——話を戻すと、まあ東が世界に干渉しちゃった所為で厄災がゴジラISの世界に降りかかった訳だけど、反動による影響を受けたのはゴジラISの世界だけじゃないわけなんだ。

全員「え?」

例えばマブラヴレギオンの世界。

本来ならIS原作よろしく白騎士事件も起きてISが支配する世界になるはずが干渉しちゃった反動の影響で出現したレギオンという存在の飛来によって世界が原作から分岐しちゃったんだ。

雄飛「あれ?でも戦術機は?」

IS原作にEOSっていたでしょ?

アレの実戦配備型が戦術機って設定でいいかなって。…後付けだし修正必要だけど。

雄飛「ああ、なら…ってレギオンって何処あたりに出たんですか?」
太陽系の外縁、オールトの雲のすぐ外側に星間種子が次元を超えてきちゃったんだよ。

雄飛「お、オールトの雲…?」

くわしくはググってみて調べてね。

さて次はシンISだけど…

肇「おい、うp主、永遠ノ燈は?」

ん?ああ、また後付け設定になるけど永遠ノ燈はマブラヴレギオンの続きでいいかなって。

肇「え…」

いや、永遠ノ燈は当初予定していたマブラヴレギオンのTDALRトでいいかなって…。

雄飛「え!??じゃあ箒は!??」

永遠ノ燈だと雄飛はS11抱いてレギオンにカミカゼアタックして戦死してるから肇とくっつくかな。

雄飛「そんなー(´・D・´)」

：まあ、マブラヴレギオン本編ではハッピーエンドルートだから、永遠ノ燈はあくまでバッドエンドに分岐した世界だから。

——さて、改めてシンISだけど、この世界では東がワームホールで干渉しちゃった反動の影響を受けてるけど墨田大火災は起きてない設定だよ。

千尋「あ、良かったじゃん。」

代わりに異常気象による例年を遥かに上回る大雨の所為で関東大水害が発生。

多摩川や江戸川、荒川、墨田川などの河川が次々と氾濫して大洪水になる：という事態に至ったよ。

なお、死者行方不明者数はゴジラISの墨田大火災による10万人には劣るけど2万人が犠牲となったよ。

千尋「前言撤回。全然良くなかった。」

千尋2「でしよ？…何で俺らはうp主に毎回酷い目に遭わされるんだらうね。」

ちなみに箒もこれに巻き込まれてるね。

2人が出会うパターンはゴジラISに似てるけど。

あとはこっちの世界はヒトの肉体を介さずにいる千尋という名前の「怪物」が主役の世界線だからゴジラISの千尋とは性格が違うよ。

まあ、詳しくは近い内に投稿するシンISのEP-01「始まりは伽藍堂」を見てください。

千尋2「そういえばこの間、『オスト・イディアール』っていうボツった小説の主人公の：えーと、ニア・ラインハルトって人から聞いたけど、うp主ボツった小説多いらしいね。」

うん。

この際だから言うけど実はかなりの小説をボツった過去があるのよね：というのも大体オチは考えたけどそこに行くまでの過程が思いつかなくてボツったのが多くて：。

：酷い場合だとオチすら決めれず消滅したのがあるよ。

千尋「うわあ…」

肇「じゃあついでにどんな感じだったかいつてみようか。」
うん。

じゃあ1つだけ解説しよう。それはさっき千尋2が言ってた「オスト・イデアール」。

これはドイツ語で東の理想って意味ね。

肇「厨二乙。」

なんでや!!?なんでドイツ語ってだけで厨二言うねん!?!?

雄飛「まあまあ…で、内容は?」

学園ゆるふわモノ。

千尋「あれ、うp主としては珍しく平和だな。」
うん。

肇「舞台は?」

1980年の東ドイツ。

一同「…え?」

1980年の東ドイツ。

肇「聞こえてるよ!いやなんで冷戦時代なんだよ☒しかも東ドイツとか共産圏だし嫌な予感しかしねえじゃねえか!?!?」

うん。まあ第1部(1980年~1983年)はゆるふわ学園モノ
なんだけど、第2部(1988~1989年)は真打ちである東欧解
放戦争…東欧諸国とソ連の戦争の話になるからね。

ちなみに第1部のキャラで第2部まで生き残るのは8人中3人だ
けだよ。

雄飛「…え?第1部って、ゆるふわ学園モノですよね…?」

うん、けど舞台は冷戦時代の共産圏だからね、粛清とか弾圧とか、よ
くある話だからね。しょうがないね。

とまあ、第2部は機動戦車という…まあ、ガンダムのヒルドルブみ
たいな奴を駆ってガルパンみたいに戦車vs戦車で戦う予定だった
んだけど…。

肇「言つとくけどガルパンは死人でないからな。…で、どうなった
んだよ?」

下書きしてた大学ノートを紛失した(デデドン!)

一同「あーあ…」

それでオスト・イディアルはお蔵入りになりました。

千尋「つまりうp主の管理ミスの所為だど。」

…うん。

さ、さてそろそろ切り上げて本編の話に戻ろう。

千尋2「また逃げた。」

取り敢えずこの先ゴジラISはシンISと平行して書いていくから更新ペースはガタ落ちしてしまいます。

他にも次のEP-37はタッグトーナメントを書きます。

千尋「え?」おいその前に回収すべき伏線とかあるだろ?」

うん。だから閑話をいくつか: 予定では2、3話挟むよ。

取り敢えずは読者さんの要望に答えて更識楯無と四十院神楽のシーン結構入れたり、ビオランテ誕生に纏わる番外編書いたりする予定。

雄飛「予定は未定: なんてオチにはならないで下さいよ?」

だ、大丈夫。神楽のシーンはもう書いたから…。

後は楯無さんとビオランテのシーン書いたら: しかしビオランテのシーンが: なあ: 。

肇「なんか問題あるのか?」

いや、元ネタあるし、大体の流れ考えてるけど、その元ネタがニコ動なきや見れないんだよ。

しかも今いるのWi-Fi環境がない奈良の実家だし。

千尋「八尾の家に帰ればWi-Fiあるからいけるだろ?」

そうなんだけど: 実は16日の深夜から二泊三日で瀬戸内海の小豆島に行くんで。

一同「: は?」

しかも夏休み明けの必須科目の勉強もしなきゃだから: ね?

千尋「いや、じゃあさっさと勉強してろよ! こんなん書いてるヒマねえじゃん!!?」

今は休憩中だから。

千尋2 「早く机に向かいなよ。【無人在来線爆弾】ぶつけるよ？」

ちよ!!?? それシンゴジラのネタバレ…!!??

千尋・千尋2 「さあさあ早く。」

ちよつ、助けて雄飛！肇————!!??

肇 「帰るか、俺ら休憩中だし。」

雄飛 「そうですね。」

ちよ、薄情者————!!??

タッグトーナメント編

EP―27 タッグトーナメント前日

IS学園・第2シャフト整備区画

タッグトーナメント前日となった現在、千尋たち特務自衛隊統合機兵実験集団と、同じくセシリアのイギリス陸軍統合機兵試験隊、その他専用機乗りたちも、最後の整備に追われていた。

本来これは整備士の仕事なのだが、最後の最後にしか出来ない重要な点検作業でもあるために操縦者も整備士に混じって整備・点検作業を行うのだ。

千尋と箒も簪もセシリアも――皆ツナギの作業着を身に包み、機械油に汚れていた。

「ふう…。」

千尋は剥がした装甲の中にあるサブスラスター周りの整備を山本三尉と共に行っていた。

「たった一週間使っただけでこんなに汚れが溜まるとはな…。」

雑巾を手に、サブスラスター周りにこべりついた油混じりの埃を落としながら千尋は呟く。

――つまりは、それだけ使い込んだという事だ。

「跳躍ユニットはパーツの交換は必要ないけど、かなり汚れが付いてんなあ…。」

千尋の打鉄甲一式を共に整備していた山本がそう呟く。

これらの汚れが理由で機体に不調が起きたりする事が有り得る以上、些細な油汚れでも無視できない上に統合機兵の実戦評価テストでもあり、見た目が汚いのは喜ばしくない為に徹底的に汚れは落としていくのだ。

それは千尋と箒の打鉄甲一式だけではない。

簪の颯式式、セシリアのユリウスも同様だった。

――ふと、セシリアが顔を上げると鈴が自身の専用機である甲龍にもたれながら落ち込んだようにしていた。

よく見ると、千尋達を含め周りのIS乗りもISの整備をしているのに、何故か鈴だけ整備をしていなかった。

——いや、何方かと言えば鈴の雰囲気から察するに整備出来ないと言うべきとも見て取れた。

「どうしたんでしよう、鈴さん。」

セシリアが少し心配気に呟く。

それに、山本が応えた。

「多分、エンジン周りの整備スタッフが居ないんだろう：今ロシア大使館経由で整備士を手配している途中らしい。」

確かに、よく見るとエンジン以外の部位はちゃんと整備されているがスラスター：推進器やエンジンの整備は誰も手を付けていなかった。

だがそこでセシリアに新たな疑問が生まれる。

「あの、どうしてエンジンにロシアが絡むのですか？」

「中国は未だに国産のエンジンを開発出来ていないんだ。ISのみならず航空機のエンジンもな。」

再び山本が応える。

「だから、冷戦時代からの付き合いであるロシアのミコヤムグルビッチ設計局やスフォーニ設計局の設計したエンジンを輸入して自国の兵器に組み込んでいる。そしてそれは当然、航空機に留まらずISにも。」

世界最強の兵器たるISを他国の援助無しに維持できない。

ISをコアを除いて純国産パーツを用いているブルーティアーズを開発したイギリス出身のセシリアからすれば、その事実を衝撃を与えた。

なにせ、今まで全ての国がISのパーツを全て自国で生産できると思っていたから。

「：中国は国産エンジンを作ったことは作ったよ。」

ふと、簪がセシリアに向けて呟く。

「でも、その国産エンジンをISに使った事で【人類史上初のIS墜落事故】という不名誉な事態を引き起こしたから、中国政府は己の面子

の為にも技術が確立して優れているロシアに頼らざるを得なくなつたの。」

——さらなる衝撃がセシリアに走る。

ISの墜落事故が起きたことは前々から噂として聞いた事があつたがまさかそれが本当だとは思ひもしなかつた。

——だが、そこでまた新たな疑問が浮かんだ。

「あの、中国がロシアからエンジンを輸入するのは分かつたのですが、何故ロシアは中国にライセンス生産を許可しないのですか？」

「ライセンス生産」

——他国のメーカーに許可手数料を払う

事で許可を得て自国のメーカーで製造する方法。

それは日本の自衛隊でも、イギリス軍のみならず東西両陣営の各国で行われている手法だ。

「ああ、一時ロシアは中国にライセンス生産を許可しようとしたんだが——…」

セシリアの疑問に、山本が苦笑いを浮かべながら応える。

「その直前に中国軍がロシア軍の戦闘機Su-27フランカーのエンジンを無許可で『国産エンジンとして』製造しちゃつてなあ：コピー製品製造になつちやつてロシアは当然激怒、それでライセンス生産の話は白紙になつちまつたんだ。まあ、あの国はパクリスペクトが得意だからなあ：。」

やはり苦笑いを浮かべながら言う。

「それで中国への輸出が一時ストップされた。…だが最近のロシアは経済が低迷しつつあるから、輸出を再開。同時に中国はパーツを輸入して中国の企業で組み立てさせる「ノックダウン生産」を採用している。…こっちはライセンス生産以上に金がかかるが、中国は受け入れざるを得ない。」

——ただでさえ東側の製品は品質が悪いから、少しでもましなマシンなロシアに頼らざるを得ないからな。」

山本は淡々と語りながら、現実を見るような醒めた目をして、呟いた。

「——最近中国が東側の盟主として台頭しているように思わ

れているが、結局はロシア頼み——つまるところ、東側は未だに旧ソ連の末裔であるロシアという力の根源に依存しなくては決して何も出来ないってワケさ。」

山本の口から告げられる、東側の現実。

西側がアメリカによる統治や支援無しに存続出来ないように、東側もロシアの支配と隷属なくして存続出来ない——という、現実。

「だけど、最近是中国が調子に乗り出したからロシアは見切りをつけ始めたらしい。」

ふと自機の整備が終わった千尋が言う。

「まあ、誰だつてこの御時世に核の撃ち合いをおつ始めそうな国には関わりたくないからな——それ以前に、巨大生物に侵攻されている中で他国と戦争したがるようなバカは東側にもいないよ。」

——余程、狂気の沙汰で無い限りは……な。」

山本が千尋とセシリア、そして簪に告げる。

——つまり山本のそれは希望的観測だ。

千尋が見ると、セシリアも簪もそれを察しているらしく、胸を撫で下ろそうともしない。

——そこに、自機の整備を終えた簪も合流する。

場の雰囲気から何を話していたか何と無く察したらしく、少し複雑な顔をする。

「……さて、整備は終わり。休憩にでもするか。」

山本が言うのと全員の顔が緩む。

——同時に簪が千尋に声をかける。

「…千尋、ちよつと。」

「なんだよ?。」

簪に呼び掛けられ千尋は声を返しながらも何かを察している顔をして簪に着いて行く。

——場所は第2シャフトに設けられた仮設の炊事室。

「皆に何か振舞おうと思つてな。」

簪が微笑みながら告げる。

それに千尋も——久方ぶりの無邪気な笑みを浮かべて応える。

「知ってた。じゃあ、暑いし【冷やし茶漬け】でもするか？体は冷えるし山本三尉の好物だし。」

「うむ、そうだな。あまり具材を用意するヒマは無いから…冷凍食品の鮭と青ねぎ、それとゴマ味噌、出汁の代わりに冷やした緑茶を使うか。」

「そだな。じゃあ青ねぎは俺が切るから箸は鮭ほぐすの頼む。」

「任せておけ。」

箸もまた久方ぶりに——にかり、と笑う。

顔色も非常に優れている。

それを見て千尋は少し安心する。

「今日は元気だな、箸。」

「ああ、最近は発作も無いしアザの侵蝕も落ち着いている…アイリさんの特効薬のお陰で元気だよ。」

箸は微笑みながら返す。

——少し前まで黄色いアザが広がるたびに発作を起こして吐血していたのだが、アイリが処方してくれた特効薬のお陰で最近発作は静まり返り、以前のような普通の状態に戻りつつあった。

それにしても——。千尋は箸を見つめながらふと、思う。

箸は千尋の視線に気づき、そちらを向く。

「なんだ？」

「いや、やっぱり今みたいに笑って明るい箸は綺麗だなあ…って。」

「☒な、なななななななっ…!?？」

惜しみ無く口にしてしまう千尋に箸は思わず赤面する。

しかも、一夏とは違って鈍感無意識で言っているのではなく、真意で言っているのだから嬉しいと言えば嬉しいが、箸も思春期のごく一般的な女子だ。恥ずかしくないはずが無い。

「う…嬉しいことは嬉しいが…その、少しは相手のことも考えて言え。恥ずかしいだろう……ばか。」

顔を赤くしながら照れ隠しをするように少し棘のある言葉を箸は

放つ。

それに千尋は無邪気に笑う。

——しかし、やはり心の中は穏やかでは無かった。

いや、最近箒の心配をしていたが箒が元気になったことで少しはマシになった。

それはアイリの処方してくれた特效薬のお陰だ。

だが、千尋はそれが箒の精神的支柱となると同時に時限爆弾だとアイリに聞かされたから。

——アイリ曰く、その特效薬はあくまで箒を蝕むアザを一時的に抑え込んで侵攻を遅滞させる効果があるが、そこで溜め込まれた歪みが後になって爆発するのだそうだ。

つまり、その特效薬を用いるということは箒を一時的に苦しみから逃れさせられるが同時に時限爆弾の導火線に火を灯したのと同義なのだ。

あまりに危険だが、それが現状アイリに出来た最善のモノ……いや、言葉を飾り過ぎただろうか——現状、これ以外に方法が無いのだ。

箒に、いつ爆発するか分からない時限爆弾を持たせる他は。

既存の医療機関では箒のアザはもはやどうしようもなく、特自の生体研究所やモナークの医療班が頼りだが、それを持つてしてもこれが限界だ。

いつ爆発するか分からない箒の時限爆弾が起爆する前に、アイリや自分らは本格的な治療薬の開発が急ぎ求められる。

今の千尋に出来るのは今まで通り箒を精神的に安定させて体調も安定させることくらいしか、出来ないのだ。

自身の細胞を——オルガナイザーG1を使うという案も出したがアイリに却下された。

確かに理性的に考えれば当たり前だ。

自分の細胞を取り込んだ結果、バケモノに堕ちる——そんなオチがあるからだ。

——ぎり。

無意識の内に千尋は奥歯を強く噛む。

自分はそれなりに力があるものを持っていても他者に分け与えられるモノが何も無い。

せいぜい、気を使うことくらいしか出来ないのだ。

——なんて、無価値。

そんな風にさえ思われる。

——いや、これは自惚れているのだろう。

一個人の人間として生きている今、限界は当然のように存在してしまふ。

一人で出来る以上の事をやれるわけなど無く、それが出来ないのであれば自分出来ることをやるべきである。

——当たり前前の事なのに、それに頭が回っていない。きつと、疲れているのだろう。

「…はあ……」

そう自己完結すると、思わず溜息が漏れてしまう。

「千尋、どうかしたのか？」

「いや、なんでも……それよか青ネギ切れたぞ。」

「あ、ああ、ありがとう。」

微笑みながら——何処か儂さを孕んだ顔をして、箒は千尋に返す。

箒自身、察しているのだ。

自分がそう長くないことに——。

でも、だからこそ今自分は——

「はいこれ。白米は丁度いい具合に冷や飯があつたしこれにしよつか。」

笑つていよう。

そう思つて千尋は青ネギを渡しながら、箒に対して必死に無邪気に笑みを浮かべながら言った。

「——次のニュースです。ロリシカ政府は昨日、樺太にて大規模作戦を敢行する声明を発注し——。」

ふと、炊事室にあつたラジオから不穏な報らせが流れてきたのはそ

の時だった。



ロリシカ共和国・カムチャツカ州

エリゾヴォ市

カムチャツカ半島の先端にある「新首都ペトロパブロフスク・カムチャツキー」の北部に位置するその都市は以前は人口4万5000人程度の、周りを田園地帯が取り囲む閑静な田舎染みた都市だったが、今は西部戦線から逃れてきた難民達が加わり、人口は8万人と倍に膨れ上がり、都市の規模は拡大。

そして首都ペトロパブロフスク・カムチャツキー防衛の為の盾として機能すべく、街の象徴であったエリゾヴォ空港は貿易用のみならず【エリゾヴォ統合基地】として存在していた。

エリゾヴォ統合基地

季節は6月——バツチリ夏だ。

だが、高緯度のエリゾヴォは暑いという感じでは無く涼しいという感じの気温だった。

それは例年のこと——なのだが。

「——ペつくちゅー……うう、寒……。」

ロリシカ陸軍第1戦術機中隊・メドヴェーチ中隊の下士官であるユーゲンは震えながら口にする。

——今年は例年に比べて、非常に肌寒い。

毎年気温が20度を超えることが滅多にないのは当たり前なのだが、今年は異様に寒い。

「寒いですね……ベルホヤンスクよりはマシですけど、夏の割に寒いです。」

エリゾヴォ統合基地の官舎で休暇中であるため暇だったのでユーゲンと散歩していたリーナが言う。

「私の生まれのサンクト＝ペテルブルクもこんなに冷えたりしなかったのに……」

ヨーロッパ・ロシアにあるサンクト＝ペテルブルクも中々高緯度にあるが、シベリア・ロシアやロリシカ・カムチャツカのような寒冷地帯からの冷たい風はウラル山脈が遮っている上、沿岸地域である為湿った空気とイギリスから吹いて来る偏西風の影響でそこまで冷え込まない。

だからリーナにとって、夏にも関わらずエリゾヴォのこの寒さは異常だった。

だがまあ、この冷え込みの原因は恐らく————心当たりを思いついたのかユーゲンが口を開く。

「バルゴンが地形を滅茶苦茶にしたせいか、シベリア・ロシアに流れ込んだバルゴンを迎撃する為にロシア軍がバカスカ核ミサイルを撃ち込んだせいか————あるいは、その両方か……」

ロシア軍がバルゴンを迎撃する為にISや戦車部隊のみならず、戦術核兵器を大量に使用したことは、もはや国際的に既知となっており、特に核攻撃を受けて以来、核に敏感な日本とロリシカは非難の声を上げていた。

放射能が風に乗って周辺諸国にも影響を及ぼすからだ。

でなくとも、放射能を含む塵が舞い上がり、太陽を遮断するカーテンとなり、寒冷化————SF小説でお馴染みの俗に言う「核の冬」が到来しているのだ。

範囲は今でこそ、そう広くはないがこのままロシア軍が核兵器を多用するようならば核の冬はさらに過酷なモノになり、ユーラシア大陸全土……いや、地球環境にも影響を与える。

野菜などの生鮮食品は全滅。肉やチーズなどの加工品も激減し、物価の高騰化が懸念される。

他にも、放射能の塵から降る雪による雪害で交通インフラに打撃を与えかねないし、なにより放射能を含んでいることから人体への健康被害も懸念されている。

それに備え、ロリシカ政府はワカメの輸入を進めている。

——なんでも、ワカメは放射能に耐性のある体を作るのに役立つらしい。

：何処まで信じて良いかは分からないが、かの有名な旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所の事故で放射能が漏れ出た時はワカメの放射能耐性の話を聞いた人間達が凄まじい勢いで消費した為に事故から数週間でヨーロッパからワカメが “ 実際に “ 消滅したらしい。

正直、ワカメだけで放射能の耐性が付くとは思えないが、政府としてはワラにも縋る思いでワカメの大量輸入に踏み切ったのだろう。生き残った国民のバルゴンに対してだけでなく、放射能という見えない恐怖に対する不安を拭い去る為に。

だが核の冬への懸念は食料問題や放射能問題だけでは終わらない。最大の懸念は、周辺諸国から流れ込む恐れがある膨大な数の難民――

数は数千、数万では済まないだろう。

数十万、数百万：下手をすれば億単位になり得るかも知れない。

そうなればロリシカの物資供給が追いつかず、キャパシティオーバーに陥ってしまう。

今でさえ、西部戦線から逃れてきた難民を保護して難民キャンプに住まわせたままでは良くても、物資の不足により供給がギリギリで衣食住が満足に提供されている場所の方が少ないと聞く。

——こんな状況下で日本からの疎開を受け入れようとするのだから、正直耳を疑う。

だが、疎開受け入れの見返りにバクテリアを合成して作る合成食糧の生産プラントを提供してくれるのだから無益ではないと言える。

しかしそれ以外の周辺諸国はどうか？

日本は食糧生産プラントという、ロリシカの食糧不足を補う存在を提供してくれるが故にロリシカは受け入れた。

だが他の、ロリシカに益をもたらさない国家から流れ込んでくる難民はどうするべきか？

：普通なら、人道的配慮として受け入れるべきだろう。

だが受け入れたとしても衣食住を提供できるほど余裕などない。であらば、受け入れないべきだろうか。

ふと、北の空からジェットエンジンの唸る轟音を轟かせながら山間を這うように「An-225Rアントノフ改輸送機」が次々とエリゾヴォ統合基地の滑走路目掛けて飛んで来る。

北西戦線——ベルホヤンスク防衛線やヤクーツク防衛線から撤退して来た輸送機が次々とランディングし、兵員や積荷、そして救出した難民が降ろされていく。

誰もが着の身着のまま——埃で黒く汚れた格好のまま、皆が皆、活気のない死んだような顔をしている。

「物資の方……大丈夫かなあ……」

ユーゲンは少し不安げに呟く。

食糧や医薬品などの物資が行き届かずにパンク状態となり、大の大人が食糧を巡って乱闘沙汰になったり、持病持ちの人が薬を摂取できずに体調を崩し、そのまま亡くなる——なんてことはザラだった。

——自国民ですらこれなのだ。

他国の難民を受け入れるのに対価が無くては受け入れられない。

とても納得は出来ない歯痒い話だが、自国の防衛すら危ういのにそれに関してとやかく言えるわけが無いだろう。

「いずれ……サンクト＝ペテルブルクも……」

リーナが難民を見て、少し寂しそうな顔をして呟いた。

「——ロシアはシベリアのエニセイ川とオビ川に駆逐艦や巡洋艦、さらに沿岸に地上部隊を配置して防衛戦を展開するそうです。……万一突破されても、急ピッチで建造されているウラル要塞群が迎撃に当たるそうですから、当面は大丈夫でしょう。」

リーナを安心させる為にユーゲンはそう言う。

確証があるわけでは無い。

もしかするとウラル山脈に建造中のウラル要塞群の建造が間に合わずに突破され、ヨーロッパ・ロシアも蹂躪される可能性は充分ある。だがリーナを安心させるには、気休めでもそう口にするしかなかった。

た。

「ここにいたか、同志軍曹、同志伍長。」

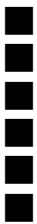
振り向けば、政務士官のイリーナがいた。

「樺太への大規模攻勢作戦——【ジヴラーリク作戦】のブリーディングを行う。司令部に集合しろ。」

「了解しました。」

「了解……」

イリーナの命令に2人は応えると、難民たちに背を向け、エリゾヴオ統合基地の司令部に向けて歩みを進め始めた。



日米臨時編成軍艦隊

空母「ジョン・F・ケネディ」

シャワー室

「はあく……やっぱりシャワーは気持ち良いわねえ……。」

シャワーから滴り落ちてくる程よい水圧の湯を浴びながら、ナターシャが陽気な声で言っつて、それがシャワー室に木霊する。

「……シャワーくらい、静かに浴びられないの？」

ふと、彼女の隣からヘックスが醒めた、冷氷のような瞳のままナターシャに言う。

「はあ……んもく、ヘックスだったら硬いわあくもつとリラックスしなさいよ。『風呂は命の洗濯だ』つて、昨日話した海上自衛隊の士官も言っつてたわ♪」

「……そういうの、要らないから。」

やはり陽気な声で言うナターシャに対してウンザリするような声音で言い放つ。

「私は合衆国の敵を排除する為の武器よ。人並みの感性なんて、要らない。必要ない。」

「……アンタはアレの所為で家族を亡くしたニュー Yorker だから……気持ちちは分からなくないわ……でも……」

「…でも、何？——私が【9. 11同時多発テロ】で両親を亡くした事に対しては同情するけど合衆国のイヌになってテロリスト狩りをする事には反対ってこと？」

——凍てついた、冷たく鋭い瞳。

ヘックスはそんな目をしてナターシャを見る。

「…復讐の為かは知らないけど、それで貴女の家族が帰って来るわけ

——「ふざけないで」

ナターシャが説得するように言おうとするが、ヘックスはそれを遮って口を開く。

「復讐？…はっ、そんなチンケな理由だけじゃないわ。……私のような人が増えて欲しくないからよ。」

瞳の奥に持ち前の白い肌とは対極の、黒い、暗い闇を宿しながらヘックスは声を放つ。

「——私みたいに親を失って、路頭に迷い、生活の為にゴミ箱を漁ったり男の竿を啜えて体を売らなくてはならないような世界に墮とされるような人を増やしたくないから——だから私は祖国アメリカとアメリカ国民の脅威となる存在を皆殺しにするのよ。人間だろうと怪獣だろうと——例外なく、ね。」

——まるで魔女のような、歪に口を歪めて嗤うような顔をして、彼女はナターシャを拒絶するように足早でシャワー室を出て行った。

「……はあ……」

1人残されたナターシャは溜息を吐く。

「…どうしてこうも、人って複雑なのかしらねえ……」

飄々としながらも諦観を含んだ声で呟く。

彼女は今までに喪ったモノは殆どない。

だからだろうか、ヘックスのような感性は理解出来なかった。

——ヘックスはアメリカの脅威となる存在を皆殺しにすると言っていたがそれでは、

「結局、復讐の矛先は貴女に向くじゃない……ヘックス……」

哀愁に満ちた声音でそう呟く。

——だが、今はそれ以上に不審に満ちた思いがあった。

「…それにしても、どうして私たちを東京湾奥部に配置したのかしら……？」

ヘックスとナターシャが所属することになった部隊はJFKに乗り込んでいるMF-22Aラプターを運用する第61戦術機小隊——対人制圧戦の要とされる部隊だ。

——明日はIS学園でタッグトーナメントがある。

先のクラス別トーナメント時の襲撃の件からして、また襲撃される可能性がある。

そうなった場合、必要とされるのは自分たちのような対人制圧戦に特化した部隊だ。

——にも関わらず、何故か後方に配置。

「…対人制圧戦では対処出来ない存在が日本に近づいているということ……？」

——果たして、ナターシャのその言葉が数日後に現実のものになるとは、声にした本人を含めて誰も思いもしなかった。

EP—28 タツグトーナメント1日目(前)

6月12日午前8時55分

IS学園第2アリーナ

ピット内

ピット内に備え付けられたアリーナの状況を写すモニターには席を一杯に埋め尽くす生徒の保護者や企業や各国のエージェントなどの来賓客にまみれている光景が映し出されていた。

「遂に…来たんだ…一夏と…」

ふと、鈴が紅惚した顔をして呟く。

「すげえ人だなあ…千尋も見えてみるよ。」

ふと、それを見ていた織斑は意気揚々として、少し浮かれたような、顔をして千尋に話しかける。

「予備弾薬輸送車両が接触事故☒」

しかし、千尋は織斑と同じ世界にはいなかった。

いや、同じ場所、同じ時間、同じ次元にいたのだが、千尋と織斑のいる立場が違うという意味では、その表現が相応しかった。

織斑は普通の学生のように浮かれているようで、機体の整備もせず呑気に過ごしているが、千尋は整備士と共に本当に最後の最後に残された時間で出来る点検作業に忙殺されていた。

そして今はピット内に置かれた、長机とパイプ椅子があるだけの指揮所の固定電話が鳴り、それを取った為に統合機兵や警備課の予備弾薬を輸送していたトラックが接触事故を引き起こしたという報告を聴いていた。

本来なら通信士が連絡に応じるべきなのだが、通信士も整備のアシストに参加しているため、今は近くに居た千尋が対応していた。

「被害規模はどれほどのもので—— はい、はい。」

「分かりました、20分の到着遅延ですね。はい、伝えておきます。」
キビキビと対応し、ボールペンでメモに殴り書きをしながら通話を終えると受話器を置いて、安堵のため息を吐く。

——接触事故の被害規模は先導車両が道を間違えた為に迂回しようとした結果、一台目の輸送トラックが一時停車。しかし二台目の輸送トラックが停車に間に合わず一台目に追突。幸い車体のフレームが一部へこんだ程度で済んだらしい。

このくらいなら、部隊内の責任で済む。

これに一般車両が巻き込まれていたらさらに大問題となっている所だった。

そこに、織斑が空気を読まずに訪ねてくる。

「——なあ、おい、聴いてる？」

「何？今忙しいんだけど。」

それに対して、思わず千尋は苛立ち混じりの声音で応じてしまう。

「いや観客席とか凄くないかって…」

一夏が言う。

——けれど千尋からしたら、正直この大会自体興味も無ければどうでも良かった。

統合機兵の性能テストにうってつけだったからという理由で今ここに居る。

けど、うってつけでなければ富士演習場などで試験が行われて居るのだから。

——何より、異常性の塊でしかない学園のイベントであるだけに怪しきすら感じていた。

「——別に、こんだけの人がいることで興奮することないだろ。それこそ1年前の【第2次東京オリンピックピック】だって今回以上の人がいたし、そこらの球技大会だってかなり人が集まるんだ。大して驚くこともないだろ……まあ、浮かれるのは分かるけど。」

織斑との間に出来た拗れも理由で、棘のある回答をしてしまう。

——それでも、事を荒立てないように配慮した回答だった。

「——話は終わりか？じゃあ、俺は行くから。」

そう言うと、千尋は殴り書きをしたメモを手に、整備の総指揮をとっている山本の元へ駆けて行った。

——今は、忙しいのだ。

何より、今まで織斑との間にあった出来事を思い出すと酷くモヤモヤとした気分になる。

過去にあった出来事に対してのイライラと昨夜から続いている作業による焦りが混ざり合って、今の感情を構築しているらしい。

だが、そんな事を思っても仕方がない。とりあえず、今は山本三尉に事故の報告をせねば——そんな風に思いながら、織斑と鈴を背に、小走りでその場から離れて行った。

「二夏、アンタなんかしたの?」

ふと、取り残された鈴は一夏に怪訝な顔をして、問いかけた。

抑えてはいたものの、隠しきれていなかった千尋の苛立ちを感じたから、問うたのだ。

「別に?俺あいつを怒らせるようなことしてないぞ?」

首を傾げながら、疑問符を浮かべながら織斑は応えた。

「…ふうん、まあ、ならいいけど。」

そう言うと、鈴は再びモニターに視線を戻した。

織斑もモニターに視線を戻そうとして——自分に違和感を感じた。

——千尋を怒らせていないと言うなら、何故彼奴は俺に対して苛立っていたんだ?」

内心、自問した。

(いや、それ以前に…どうして俺はあいつに気軽に話しかけてるんだ?俺はあいつと今まで話した覚えなんて——…)

続けて内心、自問する。

——おかしい。

内心、自答した。

千尋を怒らせるような事をした覚えなんてない。

今まで千尋に話しかけた覚えなんてない。

じゃあ俺はなぜ、今まで『話した事があるかのように振舞っているんだ?』

おかしい。

おかしい。

おかしい。

おかしい。

それでは矛盾する。

今まで話しかけた事のない相手に馴れ馴れしく話しかけるほど、自分は無神経ではない。

なのに、話しかけた覚えなんてないのに、あいつに気軽に話しかけている。

危害なんて加えた覚えなんてないのに、あいつを苛立たせている。

——何故だろう？

——何故だ？

——どうして？

頭が痛い。

頭がガンガンと鳴り、痛みが脳から神経を伝って全身に波及する。

そして脳から痛みが波及する度に、認識が変わる。

（——もしかして、俺が覚えていないだけで俺は彼奴らに何かしてしまったんじゃないか……？）

内心、仮定に至る。

（なんで憶えていないんだ？いや————なんで、忘れてるんだ？）

——ガチリ。

歯車が狂って外れたような音が、【脳内（あたま）】に響いた——

??????????????

——超高度の空を、爆音がつんぎく。

インドネシア空軍の超音速UAV「オランバッチ」がその鋼鉄の機体で音速を超え、大気を切り裂きながら飛翔していた。

モナーク北米本部から連絡を受けたモナーク・ジャカルタ支部から

のインドネシア軍への要請で、レッチ島に向けて急行していたのだ。
—— 僅か数分後、オランバッチの機首カメラが、レッチ島を捉えた。

—————

インドネシア空軍

ボルネオ島タラカン基地オペレーションセンター

決して広くはないその部屋には、無数のモニターがあり、その内のひとつには、レッチ島に差し掛かったオランバッチの映像が映し出されていた。

—— 煉獄。

映像に映し出された光景を言い表すならば、その一言で事足りた。地面はどこどころがクレーターと化し、森林は燃え盛り、なんらかの施設だったらしい建造物は瓦礫の山となっていた。

その島の上空に、羽や背中に大勢の人を乗せた巨蛾「モスラ」がいた。

「—— 《モスラ》の棲む島の島民に手を出したから、レッチ島にはバチが当たったんだ……」

オペレーションセンターのモニターを見た兵士の1人が呟いた。

確か彼はインフアント島近傍の島の出身だっただろうか。

「—— 米軍の情報、が正しければ、—— ここが確認されている中で7個目の篠ノ之束の拠点です。……生体反応は無し、完全に無人で——」

——

オランバッチの操作担当オペレーターが言いかけた。

—— 瞬間。

オランバッチのスカイセンサーが接近する飛行物体を確認する。

オペレーターがすかさず機首カメラを対地モードから対空モードに切り替えた。

—— 直後、鮮血のように赤い眼に、漆黒の羽を持つ巨蛾がオランバッチの機首カメラいっぱいに迫り来て—— ノイズの砂嵐に変わった。

—— 撃墜されたのだ。

その理解に至るまで、オペレーションセンターは衝撃から来た沈黙に一瞬支配された。

「――《バトラ》……！」

先ほどの兵士が再び口にした。

それで、沈黙が破られた。

「くそっ！モナーク・ジャカルタに伝えろ！『インフロント島の巨大生物2体を確認、しかし1体は報告と形状が違う――』と!!？」

オペレーションセンターは喧騒に包まれた。

――

レッチ島近海

束手製輸送艇【グローリー丸】

「くそっ……もう、なんでどいつもこいつも……束さんの邪魔ばつかるんだよお……!!？」

自動操舵にしたグローリー丸の甲板の上、ボロボロになった衣服のまま、束は怨嗟に満ちた声で言う。

新たに拠点を作ろうと、【インフロント島民（ゴミ共）】をこき使っただけなのに、どこの馬の骨とも分からないバケモノにレッチ島の拠点【れっど・ばんぶー】は壊滅させられ、インフロント島民は連れ帰られてしまうは、紅椿は完成にまで辿り着けないは――束にとっては災難だった。

顔は、腐臭を嗅いだことで歪んでいた。

「ホンット……役立たずもいいトコだよ！……このゴミエビ!!？」
見上げながら、叫ぶ。

――視線の先には、なんらかのエネルギーで破砕されたように部位のあちこちが変形し、摺座している巨大生物――

【エビラ】の姿。

バトラのプリズム光線によって一撃で撃破されてしまったのだ。

「……は、あ――……でも……でも、大丈夫……だって紅椿はここに
ある……そうだ。これを箒ちゃんにあげて、無双させれば……」

束の顔が愉悦に歪む。

—— I Sは束さんの傑作だ。

—— I Sは最強の存在だ。

—— I Sは束さんの傑作故に敗北などあり得ない。

—— だって I Sを作った束さんはそこらのゴミ共なんかとはちがうから。だから最強の存在なんだ。

束は歪んだ思考をして、それをするこゝとで、自我を保とうとした。確かに、束の作った I Sは最強クラスなのだから束の言い分はあつていゝとせばあつていた。

—— だが、悲しいかな。

破滅後の世界に、『超兵器としての I S』は、存在しないのだ。

.....

2023年——破滅から2年後。
3月2日午後8時48分

国連統合軍館山基地——旧IS学園跡。

「畜生……なんだあいつらは☒」

神奈川県方面を一望するエリアのひとつであるE-04区画。

バイオメジャー私設武装隊第1特殊騎兵大隊第2中隊の兵士は乗機であるEOS「ハーディマン」を駆り、20ミリ機関砲で応戦しつつ特務自衛隊の戦術機「24式戦術歩行戦闘機不知火」の追撃を躲しながら叫んだ。

「どうやら、自分達を追撃している不知火のパイロットはかなりの熟練兵士らしい。」

両腕に保持した長刀とナイフシースによる空力軌道制御と跳躍ユニットを目まぐるしく稼働させることで滅茶苦茶な動きをしながらもほぼ無駄のない軌道で自分達を追い詰めている。

——既に、あの1機だけに中隊の半数のEOSが屠られていた。

「第3中隊は何してる☒E区画にはかなりの部隊がいたろう!!?」

兵士の声には明らかな殺意が有った。

——しかしそんなことは部隊間データリンクを見ればすぐに分かる話だった。

第3中隊のマークは全て消えている——つまり、全滅しているのだ。

だが、眼前の敵にこの兵士は気を取られてそんな事にも気付けなかった。

『10時方向からさらに増援——!!?』

響く無線。

無線の方向を見れば、そこには新たに不知火と撃震の混成編隊を20機ほど視認する。

さらに、その中には露軍迷彩の不知火が6機いた――。

それを見て、兵士は凍り付く。

「露軍迷彩だと☒――富士教導隊のアグレッサ―部隊まで：!!?」

――富士教導隊のアグレッサ―部隊は、たしか5年前の東京防衛戦と北九州防衛戦、そしてユーラシア撤退戦を生き延びてきた猛者達の集まりだと噂されている。

それが事実なら、逃れられぬ死が自分達に襲いかかろうとしていることになる。

兵士の額を冷や汗が伝う。

「第1中隊を呼び出せないんですか!?!?」

兵士は指揮官に向けて怒鳴る。

大隊第1中隊と本部小隊は館山基地の司令本部ビルや通信センタービルの防御に回っている。

『――無理だ!司令本部ビルや通信センタービルには基地の参謀供を監禁している!それに例の――』

突如として通信が途絶える。

同時にデータリンクも途絶。

――撃墜されたらしい。

「中隊長!?!?くそつ!亡国機業に難民解放戦線の奴らめ:俺たちを囮に使いやがって:!!?」

バイオメジャーの根幹たる企業の経済回復の為に今回のテロに加担したことを今更になって兵士は後悔した。

――眼前では、先程からいる不知火が次々と友軍機のEOSを撃破してしまっている。

瞬間、東京方面のN区画から空気を裂く音が響き――爆炎が爆音を伴い轟かせながら、連鎖する――。

『今度はいったい――』

広域マップではN区画に展開している難民解放戦線の持ち込んだISやEOSのマークが次々と消滅して行く。

部隊の兵士がその攻撃の根源を、肉眼で捉えた。

それは東京湾に浮かぶ、東京防衛戦を生き延びた鋼鉄の牙城たる老兵^{戦艦}だった。

『やまと型戦艦——！』

太平洋戦争時にマリアナ沖海戦で米軍を主力とする連合軍が展開する湾港に突撃し、太平洋戦争時世界最大の巨大さの口径である46センチ砲で真珠湾攻撃以来の大打撃を米軍に与えた事はバイオメジャーに入る前に数年勤めた州軍の講義時によく耳にしていた。

実戦に投入された中では太平洋戦争後に建造されたモンタナ級戦艦の次に巨大で、砲の口径は太平洋戦争時最大だった46センチから東京防衛戦時に51センチに換装されたという話も聞いていた——

つまり、アレは正真正銘、日本が有するバケモノ兵器のひとつだった。

瞬間、火山が噴火したような爆音が轟き、やまとの51センチ砲が火を噴いた。

空を裂き、弧を描きながら襲い来る、鋼鉄の塊。

弾着まで、5秒。

「まづい——回避を!!？」

兵士が叫んだ。

弾着まで、3秒。

他の兵士が自機のEOSを駆って、回避行動に入る。

弾着まで、2秒。

しかしそこで、砲弾が空中で炸裂した。

榴弾、だったのだ。

兵士が声を上げるよりも速く、無数の散弾が、篠突く雨（しのつくあめ）のように地面に突き刺さって行き、EOSを薙ぎ払い、吹き飛ばし、潰していく——。

砂塵と衝撃波と轟音が連鎖し、世界が閉じたように、視界が奪われる。

「各機、に通達。…中隊長が戦死し、部隊が…崩壊寸前だ。…よって…小官が、指揮を、引き継ぐ。」

砂塵による視界不良のなか、震える声で兵士が告げた。応答するものがあるかを気にかける余裕など無かった。少しでも声して、目の前に迫る逃れようのない死からの背けようとした。

だから兵士は告げた。

—— 間暇入れずに再び轟く艦砲の砲声。

—— 絶え間なく響く突撃砲の砲声。

—— それに掻き消される呻き声。

—— 頭が狂いそうになる。

兵士は少しでも攻撃をやり過ぎすべく、基地の建築物を遮蔽物にして、スラスターを吹かしながら縫うようにして機動、狙ってか流れ弾か、飛んで来る砲撃を躲しながら、追ってきているかも分からない敵を振り切るようにして機動する。

（—— C区画：中央区画に撤退しよう：あそこには、鹵獲した戦術機で編成した臨時大隊がいたはず——！！？）

—— そう思うと、希望が見えて来た——。

—— 直後、その僅かな希望を打ち砕くように、目の前に不知火の機影—— こちらの動きを読んで、遮蔽物にしていた倉庫の影から飛び出して来たのだった。

—— 右手には20式長刀を手にしている。

—— 左肩には、銀龍—— 【3式機龍】—— の首を

象った部隊章。

「なああっ☒」

—— 兵士が驚愕の声を上げられたのは一瞬のことだった。

—— 不知火は兵士のハーデイマンに回避の余裕を与える事なく肉薄し、長刀を用いて峰打ちで殴打—— 兵士のハーデイマンは路上に叩きつけられる。

—— 機体に走る衝撃。

—— 待ち伏せされていた。

—— 兵士は戦慄し、恐怖しながらも、気付いた。

—— 思えば、艦砲射撃の後から何処から飛んで来ていた

36ミリの砲弾は、自分を此処に誘導する為だったのだろう。

——兵士は、逃げようと足掻く必要などなかった。逃げようと決めた最初から、踊らされていたのだから。

——だから兵士は諦めた。

そこへ、不知火は返す刀で路上に叩きつけられたハーデイマンに切っ先を突き立て——金属のひしゃげる音と肉が潰れる音が木霊した。

——兵士が最期に視界に映された世界は、自身の胸を押し潰すように突き刺さった、まるで巨人を殺す為とでもいうような、人間を殺すには余りに度が過ぎる鋼鉄の巨刃と、もはや原型を留めぬ、血液と体液を垂れ流す奇怪な肉塊と化かした己血を吹き出す壊れたスクリンクラの身体だった。

——ああ、失敗した。こんなことなら、このテロなんかには加担するんじゃないかった。

——こんな化け物に殺される様な事に、関わるんじゃないかった。

——それが、兵士の脳が活動を停止し、意識が途絶える前に浮かんだ最期の思考だった。

—————

午後9時17分。

国連統合軍館山基地・E区画—C区画境界

——手応えは、あった。）

不知火のパイロットは、敵ハーデイマンに長刀を突き立てながら内心呟く。

——敵兵を殺した手応えは、あった。

——けれど、懺悔はしない。

——難民の救済の為に立ち上がった彼らは正義だろう。

——だが、人類全体からすれば、巨大不明生物から守る要衝であるこの基地を意図的に落とそうと占拠した彼らは、独りよがりな悪人達しか無かった。

何より、自分には無関係の存在だ。

——自分には彼らのことを、日本、日本人を——正

直に言えば自分の家族を危険に晒してくれた下郎としか見ていなかった。

この場で公私混同は宜しくないということは百も承知だ。

——それに、自分からすれば下郎でも彼らには大義があり、彼らにも家族がいたかも知れない。

だが、しかし——

「生憎と、俺は敵にまで御丁寧に同情するほど優しくはない。」

何処か心の淵にある罪悪感は振り払うべく、言い放ち、ハーディマンから長刀を引き抜く。

そして、館山基地の中央区画を見やる。

——ふと、同時に思い出した。

「——そういや、2年前にここで、タッグトーナメントなんてあつたっけ……」

幼さと懐かしさを孕んだ声音でそう、呟く。

だが、感慨にふけている場合では無い——と首を振る。

——あの時が、女尊男卑だったままの世界は、曲がりなりにも平和だった世界はもう還つては来ないのだから。

『ウォードッグ01よりアルファ01、中央区画の状況を報告せよ——オクレ。』

ウォードッグ01のコールサインを持つ女性自衛官が通信を自分に送ってくる。

「——基地施設各所の合間に敵影と思しき熱源及び音門複数確認。——海上の艦隊に面制圧を要請しますか?——

——オクレ。」

自分は努めて冷静に通信を送る。

『ダメだ。基地施設にダメージを与え過ぎては復旧に時間がかかる——やむを得んが、シラミ潰しにしていくしかあるまい——オクレ。』

女性自衛官が乗機である不知火で自分の機体の隣にまで短距離跳躍して接近しながら通信で告げる。

「了解。突撃のタイミングはそちらにお任せします。——
オクレ。」

『了解した。——それと、だ。』
「なんででしょうか？」

『貴様の機体は余剰機体の借り物だからな…壊すなよ？壊したら、病み上がりとはいえシメるからな？』

——なんて、冗談まで女性自衛官は言う。
まあ、余剰機体を借りているのは事実だ。

——対人類戦に機龍を使うには許可や申請が必要になる。
そんな暇は時間の無駄でしか無い。

なら、余剰機体を拝借した方が早い。
そういうわけで、今の自機は借り物だった。

「はい、了解しております。神宮司二佐。——
オクレ。」

——ふと、女性自衛官の通信に自分は気が軽くなり、無意識に健気な声で応答した。

女性自衛官——神宮司よりも二佐は自分の応答に何処か突っ込みたい感情を見せながらも、それを水に流し——

『ウォードッグ01より、ウォードッグ全機、アルファ全機へ——傾注!!?』

——威厳に満ちた声を放った。

『これよりウォードッグ中隊とアルファ小隊は基地中央区画に突入——
同区画を占拠するテロリストを無力化または排除、基地の奪還を促す——』

——その声には、先程冗談を放った声とは到底似ても似つかない、歴戦の兵士めいた声音。

その声で、再び自分の気が引き締められる。

『突撃開始!!?』
『『了解!!?』』

——裂帛の号令。

それに間暇入れずに返す、了解の連鎖。

そこに自分も混じりながら応答し

——自分、篠ノ之千尋

は、突撃を開始した——。

EP—29 タッグトーナメント1日目（後）

午前9時30分

IS学園第2アリーナ

タッグトーナメント1回戦

観客席の喧騒を背景に、アリーナの中央にて、両者は距離を置いて対峙していた。

一方は織斑・凰ペア、一方は篠ノ之姉弟ペア。

千尋と箒は統合機兵【打鉄甲一式】を展開している。

（初戦でいきなり此奴と当たるなんてなあ…）

内心、千尋は呟く。

まあ、どうせ進んでいけば当たる相手であるから、さして驚きは無かった。

相手には前科があるが、この場に於いてねちっこくしていてもアレなのだからこの際にすべきではない。

その代わり、全力で相手する。

深呼吸。

肺と脳に新鮮な酸素を贈る。

焼けた鉄を叩いて錬鉄するように神経を研ぎ澄ます。

それは何という程大層なものでは無い。

ただ単にに試合の前に気を引き締めるだけなのだから。

「千尋、悪いけど勝たせてもらうぜ…」

織斑が言う。

しかし何故だろう、今までのように自信に満ちた声音ではなく、何処か『自身に不信感を抱いているような声音』でそう言った。

箒もその様子を違和感を抱いたらしく、一瞬千尋と顔を合わせるが、すぐに向き直る。

直後に鳴り響く、試合開始のブザー。

開戦の狼煙が上がった。

「先手必勝!!？」

織斑がそう言いながら、瞬時加速で雪片を構えて突撃して来る。

——速い。

織斑との距離は30メートル程。

廃墟街を想定した遮蔽物が佇む中、試合開始位置である中央の広場を模した空間を瞬時加速で千尋と箒に向けて迫り来る。

——接触まで8秒。

さすがは第3世代のIS——しかし、その動きは余りに力任せ過ぎた。

「——脚を止める、40ミリHE（榴弾）斉射!!？」

箒の声。

「アイ、ママ（了解）!!？」

——戦闘時の指揮権は箒に任せていたが故に、千尋はそれに従う。

——接触まで7秒。

右主腕の06式複合機関銃の照準を合わせる。

——接触まで5秒。

銃身下部に取り付けられた40ミリ滑空迫撃砲に装填されていた榴弾を、穿つ。

引き金を引いた瞬間、銃口で炸裂する発射炎と衝撃波。

——接触まで3秒。

しかし、そこで白式の左脚部と左スラスターに40ミリ滑空迫撃砲の榴弾が弾着。

脚部は大したダメージは無かったが左スラスターは至近距離での榴弾炸裂により破損。

衝撃が織斑を襲う。

「ちよっ、ぶッ……!!？」

そして左側に集中的に食らった為に、機体のバランスを崩し、ガリガリと地面を抉りながら直進する。

——それを、2人は互いに逆に避ける事で躲す。

結果、織斑は遮蔽物に頭から突っ込んでしまった。
舞い上がる砂塵。

崩壊するコンクリート。

しかし、2人は回避しただけで止まらない。

——瞬間、透明の質量が空気を切り裂く。

鈴のIS、甲龍の武装である龍砲の放った空気圧縮弾だった。

空気を圧縮し、見えない砲弾を放つ——つまるところ、強力な空気砲だった。

止まれば、絶対不可視の砲弾の餌食となる。

「——オルブライトターナー!!?」

「アイ、ママ——!!?」

だから、機動戦を仕掛ける必要があった。

しかしながら機動戦をもってしても見えない砲弾を放つ龍砲を躲し続けるのは至難の技だろう。

——遮蔽物の無い、平野なら。

——高度制限の無い、高高度からの攻撃が可能なら。

2人は腰部の跳躍ユニットのモーターを吹かし、瞬時加速。

体勢を地面と平行にしながら遮蔽物としてあるコンクリートの壁を足場に、一瞬、ほんの僅かな瞬間、蜘蛛のように張り付く。

張り付くといってもコンクリートの壁に脚部を押し付けた、否。着地した、という表現の方が正しいだろう。

しかし、蜘蛛のように張り付き続けるのは不可能だ。

この体勢では、重力に抗う術がない。

だから、跳躍ユニットを点火し、再び飛び跳ねた。

——タイミングは2人共ほぼ同時に。

——しかし跳躍距離や角度はバラバラに。

遅れて龍砲が弾着し、コンクリートの壁に直径80センチ、深さ30センチ程のクレーターを形成する。

しかしその場には、既に2人はいないのだ。

跳躍。

着地。

跳躍。

着地。

跳躍——繰り返す度に景色が何度も反転し、天と地が入れ替わる。

頭に血が登りそうになるのをスーツが防ぐ。
オルブライトターンは一步間違えれば事故に繋がる、危険さえある技だ。

しかしオルブライトターンを用いることで確実に、龍砲の回避は出来ていた。

着地。

跳躍——2人はオルブライトターンを継続したまま、幅6メートル程の狭い路地に入って行く。

先ほどまでオルブライトターンを行っていた道路の幅18メートルの3分の1しか無い。

普通なら、練度の低い一般生徒なら、事故を引き起こしてしまいかねない幅だ。

「ちよっ…冗談でしょ☒」

鈴も正気を疑うような声を上げてしまう。

あまりに無謀。

あまりに危険。

普通なら、やらないような行為。

——しかし、ロリシカでの近接機動戦を経験した2人からすればそれは、『出来て当たり前前』だった。

着地。

跳躍——幅6メートルという狭い空間で、2人はオルブライトターンを継続した。

鈴は、その2人を信じ難い目で見ながらも、2人が交差する瞬間を狙って、龍砲の照準を合わせる。

幸い、2人は背中を向けている。

これならば狙っても回避が間に合わず当たる可能性は高い。

——迎撃手段が無ければ。

瞬間、2人は背中の兵装担架を展開。

兵装担架にマウントされていた20ミリ機関砲を、穿つ——

瞬間、銃口で炸裂するマズルフラッシュと共に対人スチールコア弾が豪雨のように放たれる。

「つな…」

鈴は、思わず面食らってしまう。

ただの武装を搭載した兵装トラックだと思っていたそれは、自律攻撃も可能なガンマウントだとは思ひもしなかったから。

——直後、対人スチールコア弾の雨が頭部を集中的に叩く。

思わず両手で顔を覆う。

——いくら絶対防御があるからとはいえ、物理的な防御は可能でも、心理的な防御までは可能では無かった。

「スモーク散布!!?」

箒の声。

すかさず千尋は反応して、左肩部のスモークデイスチャージャーを3斉射する。

その隙に箒は兵装を06式機関銃から——拡張領域より取り出した09式120ミリ対戦車自動滑腔砲に変更する。

スモークデイスチャージャーにより、前方の視界は、世界が断絶されているかのように遮られていた。

「——威嚇射撃!!?」

「了解!!?」

09式120ミリ対戦車自動滑腔砲を構えながら、再び箒は声を放つ。

それに従い、千尋は06式機関銃の12.7ミリ機関銃を、穿つ。ガガガガガガ!!?と、12.7ミリの対人スチールコア弾が、煙

幕の中へ——今、2人と鈴を隔てている境界に吸い込まれて行く——。

——そこに、

煙幕を纏いながら放たれる、龍砲——。

千尋はそれを、紙一重で躲す。

何故躲せたかを問われれば、理由は簡単だ。

煙幕を巻き込むことで、《絶対不可視の砲弾》は「絶対可視の砲弾」になってしまったから——。

——つまり、先のスモークディスプレイチャージャーは視界を遮っただけでなく、龍砲の長所である、絶対不可視も潰したのだ。

そして、鈴はそれに気付いてはいたが、直後の煙幕の中からの射撃。それに対応すべく、煙幕の向こうから灯っていたマズルフラッシュを頼りに唯一の遠距離装備である龍砲を撃ってしまった。

——まず、それが1つ目の失敗。

そして、2つ目の失敗。

龍砲は絶対不可視であろうがなからうが、大口徑の兵器だ。

千尋の放った12・7ミリ機関銃より、圧倒的に空気に抵抗を与える面積が大きいのだ。

それは普段なら分かりづらいが、今は——煙幕が張られた

今は、龍砲は煙幕を押し退けて直進しなければならないのだ。

そして、その、龍砲が放たれた軌跡こそ、

「見つけた——!!?」

——砲撃すべき【相手(てき)】への、一本道——

!!?」

——箒は声を上げる。

そして——09式120ミリ対戦車自動滑腔砲の引き金を、引く。

瞬間——火薬莖の火薬が炸裂した。

——同時に轟(とどろ)く、雷鳴の如き砲声と大地を鳴動させるかと錯覚さえさせられる衝撃波が、業火の如き砲火炎と共に、砲口からタンングステン合金の塊である、120ミリ高速徹甲弾を解き

放つ——!!?

「!!?」

鈴はそれを見て、反射的に迎撃に移る。

先程放った龍砲は左肩のものだ。

チャージに時間が掛かる。

——だが、右肩の龍砲は健在なのだ。

故に、

「お生憎様、こつちだって迎撃出来るんだから!!?」

右肩の龍砲を、放つ——。

——空を駆ける鋼鉄の砲弾。

——空を走る圧縮空気の砲弾。

両者は互いに大口徑。

故に互いに当たれば、相殺し得るだろう。

両者は互いに直進し、鋼鉄の砲弾と圧縮空気の砲弾は、互いに命中

し、相殺——しなかった。

——何故なら、鋼鉄の砲弾たる120ミリ高速徹甲弾が、

相互衝突によって砲弾の形状を変えながらも、圧縮空気の砲弾たる龍

砲を破碎し、鈴に迫ったからだ。

「え——?」

鈴は啞然とした。

しかし、鈴にとつては幸。筈にとつては不幸か、120ミリ高速徹

甲弾は信管が誤爆したために、鈴には届かなかつた。

——鈴はそれに安堵する。

しかし、何故、龍砲を120ミリ高速徹甲弾が貫通したのかが、ど

うしても理解出来なかつた。

——それは、たいした話ではない。

ふたつの砲弾の運命を違えるモノがあつたとすれば、それは砲弾の

《性質》と【形状】。

確かに龍砲は空間の圧縮によって不可視の砲弾を生み出す、画期的な武装だ。

だがしかし、弱点も存在し得る。

——ひとつは、砲弾の継続時間。

龍砲は空間を圧縮することで砲弾を形成する。

しかし、砲弾を成す空気を圧縮できるのは、砲口の中でしか出来ないのだ。

一度放たれてしまえば、砲弾を成す空気を圧縮する要因は無くなってしまう。

最初こそ砲を維持できるが、進めば進むほど、砲弾の綻びは大きくなり、自然崩壊してしまう。

例えるなら、水鉄砲から放たれた水が、最初はレーザーのように一筋になっていても、勢いが衰えれば雫となって霧散してしまうように。

——ふたつ目は、形成された砲弾の形状。

空気を圧縮することで砲弾を形成するこの砲弾は、龍砲の砲口内部で全方位から空間を圧縮することで砲弾を形成する。

だがしかし、そこが問題だった。

それでは形成される砲弾は中世ヨーロッパで使われていた大砲の弾である砲丸のような球状の形しか生み出せなくなってしまう。

ひとつ目の問題はこれによる所為と言われても過言では無い。

何故なら形成される砲弾が砲丸——球体は、今より80年

近く前に廃れた筈の代物であるそれは、空気抵抗が現用主力戦車の砲弾より強いからだ。

空気抵抗が強いが故に圧縮した砲弾が周りの空気を押し退けながら飛ぶごとに空気抵抗によって砲弾そのものの耐久力が落ちていく。

皮肉なことに、空気の砲弾は空気によって殺されていってしまうのだ。

そんな中世ヨーロッパの大砲の弾の球状の空気抵抗で進む度に耐久力を擦り減らすことで質量が落ちる空気の砲弾と、現用主力戦車や現用艦艇で用いられている空気抵抗の少ない鉛筆型の寿命を迎えぬ

限り不変である鋼鉄の砲弾がぶつかり合えばどうなるか——
—これだけ言えば、明白だろう。

空気抵抗によって綻びを増やしてしまい、質量を失っていく空気の砲弾に対して、寿命を迎えぬ限り不変である鋼鉄の砲弾——
次いで言えば、7400ミリの装甲すら貫通可能な10式戦車の砲弾が命中すれば、空気の砲弾の綻びを突いて破壊するなど、造作も無かった。

「なん、で…?」

先程の啞然とした時に発した声を紡ぐように鈴は口を開く。

しかし、啞然とする鈴を現実には引きずり戻す存在が視界の片隅に写る。

煙幕を抜けて来た統合機兵を纏った、千尋だった。

「ふん——ツ!!?」

千尋は、14式装甲刀剣改の刀身を走らせる。

刃は空気を裂き、装甲にめり込むと、龍砲の装甲を火花を撒き散らしながら変形させて行く。

——斬(ザン)。

その、鋭利な刃音と共に鈴の龍砲が一基、両断される。

鈴はすかさず近距離兵装の双天牙月で斬撃を入れた直後の膠着状態にある千尋に斬撃を入れようとして——それを遮るよう
に、再び鳴動する09式120ミリ自動滑腔砲。

高速徹甲弾は斬撃を入れようと真横を向いた鈴に「直撃(クリーン・ヒット)」し、衝撃で吹き飛ばした鈴を遮蔽物のコンクリートに叩きつける。

「いのおおおー!」

先程コンクリートの壁に派手に突っ込んだ状態から、やっと復帰した織斑が雪片を振るい、千尋に迫り来る。

——千尋は視線だけを箒に向ける。

箒はコクリ、と頷き、14式装甲刀剣改を抜刀。吹き飛ばされた鈴の方角に向けて跳躍を開始する。

千尋も織斑の斬撃を受け止めながら、箒から引き離す。

——織斑と凰の各個撃破。

それが2人の目的だった。

「うおおおお!!？」

織斑は雪片を振るう。

どうやらエネルギー残量が無いのか、ワンオフアビリティである零落白夜は発動する気配が無い。

——隙を見て使うつもりなのだ。

だから織斑は隙を作ろうと、雪片を振るう。

一の太刀。

二の太刀。

三の太刀。

四の太刀。

——雪片を振るい、次々と斬撃を叩き込む。

しかしそれを上回る斬撃を放ち、千尋は14式装甲刀剣でいなす。

鉄と鉄が衝突する音。

刃と刃が風を斬る音。

刀と刀が交錯する音。

——遮蔽物に閉ざされた街並みに剣戟の火花が木霊する。

その渡り合いは互角——しかし互角と言えども、織斑と千

尋の剣戟は根本から違う存在だった。

「つ……っ、のッ!!？」

織斑の斬撃。

それはまるで梅雨の雨粒のように次々と連続して放つもの。

確かに、並の相手にはそれだけでワンオフアビリティを使う事なく仕留め得る実力だった。

——だがしかし、それは機体任せで強引に繰り返す斬撃に過ぎない。

ISという世界最強の兵器であるからこそ、その斬撃は通用するだけ。

そしてそれが通用するのは自身と同格か自身より下でなければ通用しない。

事実、数十合を越える立ち合いは、一向に両者の立ち位置を変動させず、拮抗したままだ。

——そこに、風穴を穿つかの如く、

「——っはあッ!!？」

千尋の斬撃。

爆薬が叩きつけられたかのように重い一撃が、織斑の雪片に走る。

それで千尋は止まらず、さらに足を踏み込み返す刀で——

一閃。

まるで暴風を纏っているかの如き斬撃が織斑の腿、脇、首に叩きつけられ、装甲に浸透していく。

その斬撃は例えるならば、正確無比な狙撃銃と火力にものを言わせた散弾銃を合わせたような存在だ。

千尋はそれを、呼吸を止めさせて放つ。

——否。呼吸はしている。

しかしそれはあまりに静かな、必要以上の分を削ぎ落としている、戦闘に特化させた状態であったが故に呼吸をしていないと錯覚させられるのだ。

酷く落ち着いて、微風のように乱れていない呼吸。

その状態で、千尋は刀を振るう。

手にした刀のを振るう腕が勢いを増す。

絶え間ない、豪雨じみた剣の舞。

鍛冶場の錬鉄を思わせる程に、激しい、霧雨のような火花が飛び散る。

しかしそれほどにまで激しい斬撃でありながら、刀が描く軌跡は不規則ではあるが、何処か自然的な動きだった。

織斑の斬撃が大気を破壊して繰り出す斬撃だとすれば、千尋の斬撃は大気を流れる風に刀身を乗せて、自然現象である風の上を滑らせる事で空気抵抗を減らし、まるで剣戟の一撃一撃が風そのもののように錯覚してしまう程に洗練された斬撃だった。

「くっ、ぐ……！」

織斑はそれらをスラスタ制御と僅かに雪片の角度を変えながら反射的に防ぐ。

その動きは並の学生ではかなり上位だろう。

「ふ——っ！！？」

だがそれもここまで。

守りに回った相手は、斬り伏せるのではなく叩き伏せるのみ——

そういわんばかりに千尋はより深く踏み込み——滝壺に落ちる水流のように、渾身の一撃を叩き下ろす——！！？

「ッ、くそ……！！？」

しかしここが勝機と見たか、織斑は瞬時加速で消えた。

いや、消えるように後ろへ飛んだ。

ゴウン、と空を斬って地面を粉碎し、数多の土塊を巻き上げる千尋の一撃。

——そこへ、

「これで……どうだあつ！！？」

ワンオフアビリティ、零落白夜を発動した織斑が斬りかかってくる。

対して、千尋は刀を大地に打ち付けてしまったまま。

——これで勝敗は決する。

零落白夜——。

ISのシールドバリアや絶対防御破壊を可能とする。

対消滅エネルギー系統のワンオフアビリティ。

燃費が悪いことを除けば、世界最強のワンオフアビリティといっても過言ではない。

このまま行けば、零落白夜のエネルギー波は千尋の打鉄甲一式の絶

対防御の代替品である超電磁装甲を破壊し、勝利し得るだろう。

このまま行けば。

このまま零落白夜のエネルギー波が届けば。

しかしなんの妨害もなく、零落白夜の刃が届く。

これで勝敗は決した。

「え？」

——ハズだった。

しかし、織斑は自らが刺し貫こうと手を動かしたモノを見て、声を漏らした。

それはシールドバリアなどでは無く、それは——凹凸のある、戦車の装甲のような形をした、盾。

ギリギリのところまで拡張領域から招び出し、左手に保持して突き出したのだ。

織斑は引こうとする——。

しかし、頭は働いても体はすぐには反応せず、そのまま刺し貫こうと盾の凹凸に突き立てて——突然その凹凸が、爆裂した。

爆炎と衝撃波による熱エネルギーと風力エネルギーが発生し、それが零落白夜の対消滅エネルギー波を相殺する。

「な……っ……っ！」

織斑は驚愕の声を上げた。

——確かに零落白夜は対消滅エネルギー波を用いた、ISでは最強のワンオフアビリティだ。

しかし、弱点がないわけではない。

零落白夜を無効化するか、白式本体のエネルギーが切れるまで逃げ続ければ良いのだ。

後者が安全と言えば安全だ。

しかし、織斑だってエネルギー切れになることへの対策は考えてあるから乱発はしないだろう。

結果、こう着状態が長引くだけだし、エネルギー切れになるまで逃

げることと勝った——というのでは統合機兵は評価されないのは当たり前。

ならば、前者を選ぶのが危険ではあるが英断だ。

しかし真つ向から零落白夜に当たれば——待つのには敗北という名の奈落へ落ちるだけ。

ならばそうなる前に、命綱を渡すのが普通であろう。

そこで千尋が拡張領域より量子変換で招んだのが、ロリシカの地において重宝した盾——【シエルツエン】。

ただの盾であれば質量エネルギーをがち割って、零落白夜は千尋を両断するだろう。

——だからこそ、爆発反応装甲という、当たったモノの圧力で起爆する旧ソ連が開発した装甲を用いたシエルツエンを使ったのだ。

爆発反応装甲による爆発時の瞬間的熱エネルギーと爆風による風力エネルギー、そして、爆発した結果反対に威力を押し出そうとするエネルギーが働くことで、零落白夜を相殺したのだ。

もとより、この爆発反応装甲もかつてはRPGロケットランチャーなどの成形炸薬による熱と衝撃を相殺し、尚且つ自分の被害を最小限に抑えながら高威力を発揮すべく開発されたのだ。

それは、既存にして洗練された——ゼロ距離迎撃武装。

例えるならば、バラの花の棘がそれに近いだろうか。

その、シエルツエンの爆発反応装甲のひとつに雪片を突き立てた織斑はそれを知らずに迎撃時の爆炎と爆風に襲われ、身を硬直させてしまふ。

そこへすかさず千尋は、シエルツエンを垂直に保持したまま、織斑めがけて左ストレートを叩き込む——!!?

「なっ…ちよっ…!!」

織斑の驚きの声。

しかし、それを遮るようにシエルツエンを叩き込み、

——直撃。同時に、シエルツエンの全爆発反応装甲が炸裂し、凄まじい爆炎と衝撃波が織斑を襲い、シールドエネルギーを残り

12%にまで削り落とす。

そこへ、千尋は容赦無く踏み込み——刀を、振るう。

振り下ろす弧を描きながら、刀の刃は絶対防御越しに織斑の頭蓋に叩きつけられる。

しかし、まだ止まらない。

頭蓋に叩きつけられた衝撃を緩和しきれず、白式は前のめりの体勢のなってしまう。

織斑の視界から千尋が消える。

それは、相手に背中を見せたも同義——!!?

千尋は、スラスタアのロケットモーターを点火し、加速しながら、足を踏み込む。

「………!!?」

織斑はそれに対応しようとして、雪片を盾がわりに此方に刃の面を向けて、斬撃を防ごうとして——

「——はあッ!!?」

三尺もの装甲刀剣が陽光を映し、千尋は織斑に踏み込む。

切っ先は演舞のように。

刃の鉄は謳うように、空を斬り裂きながら、雪片めがけて振るわれ——!!?

——斬。

再び、錬鉄するように火花を飛び散らせながら、14式装甲刀剣の刃は死に体であった雪片を粉碎し、さらに振るわれた一刀は、軌跡を描きながら織斑を両断する——!!?

『シールドエネルギー残量ゼロ、および全武装損壊。織斑一夏、戦闘不能。』

——それで、織斑と千尋の戦闘は幕を下ろした。

——それと時を同じくして、

『シールドエネルギー残量ゼロ。凰鈴音、戦闘不能。』

鈴と対峙した箒も戦闘を終え——1回戦初戦は、千尋と箒の勝利というカタチで幕を下ろした。

????????????
前9時47分。

ピット内・リラックスブース内

コーヒーメーカーと無機質な長テーブルとベンチしか無いが、取り敢えず休憩はできる場所。

——わずか15分と少しの攻防の末に、千尋と箒の2人はそこに居た。

「——次は、神楽たちと当たるのか。」

ふと、長テーブルに突っ伏して伸びている千尋が言う。

「だろうな……それより、気になるのはボーデヴィツヒだが。」

箒は冷めた目をしながら呟く。

正直な感想を言えば、ボーデヴィツヒの戦い方はただ暴力を振るっているようにしか見えないような、規則もチームワークもへったくれもない。

それでいて、手を抜いている——いわゆる、舐めプレイというモノ。

「——まあ、あれで部隊長を勤めているというのだから、正直耳を疑うよな……軍隊のセオリーであるチームワークすらままならな何とかどうなってるんだって……」

千尋はイラつきを覚えたような顔で言う。

チームワークは重要。

どれだけ強くとも、1人では生き残れない。

——それはロリシカという “ 戦場 ” を見て、知つて、学んだから。

逆を言えば、ボーデヴィツヒはソレを知らないからあんな戦い方なのだろう。

「……まあ、今は素直に初戦に勝った事を喜ぶか……先は長いが息抜き

は大事だからな。」

そう言つて箒はコーヒーメーカーに寄る。

「コーヒーはどうする？カフェオレか？」

「いや、ブラックで。」

「飲めるのか？お前、まだ砂糖とミルクがいるだろう？」

「——んな!? バカにすんな！こう見えて俺だつて俺なりに大人の階段登ろうとしてるんだよ!!？」

箒のバカにしたような発言に、ムキとなつて千尋は子供みたいに抗議する。

そんな千尋を箒は笑いながら、はいはい。といなす。

——久しぶりに訪れた、束の間の平穏だった。

「——ぶふうッ!!？」

——数十秒後、やはりまだ、お子ちゃまな千尋には早かつたか、ブラックコーヒーを盛大に吹き出す姿があつたそうな……。

??????????

間時刻・ピット内廊下

「なに!?俺負けたんだろ…」

ピットに戻つた織斑の第一声はそれだった。

「いきなり突撃なんかするからでしょ!!? だいたいアンタ弱いのに前衛に出るつて何考えてんの!!？」

鈴は思わず怒鳴り返す。

——単に戦術や連帯の面が欠如しており、それが千尋たちに劣つていただけの話だ。

鈴は判断能力と機体能力が高かつたが戦術や観察能力で劣つていた。

織斑は機体能力以外全てが劣つていた。

これを戦術や連帯で補えば、相手が実戦経験者といえど機体性能が低いために多少は善戦出来ただろう。

つまり、それだけだ。

だがしかし、根本的な問題もある。

鈴の指導の仕方と、織斑はそれを聴きながらも反復しなかったという事。

「いや、まあ…その……すまん。今度から善処する……」

アツサリと、織斑はその事に謝罪する。

以前の鈍感さからは比較にならないほど、適切な対応だ。

しかし、鈴は、

「つ、善処する、じゃないわよ！……あたしには、もう…後が……」

鈴は思わず口にする。

最後までは言わなかったが、織斑は鈴が何を言おうとしたかを察した。

——もう後がない。

「鈴…それってどういう…」

だがしかし、遮って。

「……凰鈴音。」

鈴に声がかけられた。

その方を向くと、見慣れぬ制服の女性がいた。

「話がある。……こちらに来なさい。」

「……あ……はい。」

鈴は恐怖に固まったような顔で応じて、その女について行く。

——織斑には、その姿が、冤罪の人間を断頭台に連行するような景色に見えた。

EP—30 幕間の群像（前）・（挿絵有り）

9時50分

IS学園第2アリーナ

鈴は女性——共産党特別武装隊の士官に連れられ、ある一室に連れてこられた。

鈴の顔は蒼白で冷や汗に満ちている。

この先何が待ち構えているかは容易に想像出来た。

先ほど負けたことに対する罰を与えられるのだ。

恐らく、一夏にハニートラップを仕掛ける任務から除名されるか、本土に強制帰還させられて強制労働キャンプ送りか、それとも——

——肅清か。

しかし上辺は恐怖に満ちていたが、内面は冷めた、諦観に満ちていた。

（——あたし、何してんだろ…？）

ふと、鈴は内心呟く。

（一夏と一緒に居てくれるのは、嬉しい。あわよくばこのまま関係を肉体的築いてしまってもいいかもしれない。——でも、一夏は私を見てくれてるんだらうか？）

今まで留意し続けていた疑問が脳裏に浮かび上がる。

よく思い返せば——一夏は私を見ていなかったのでは無

いか、という瞬間が再生される。

（——でも、そんなことない！だって、一夏は——）

一緒にタツグを組んでやるって、約束してくれた。

ヘマをしたけど一緒に戦ってくれたし、試合が終わってから謝ってもくれたじゃない——自分に言い聞かせるように、内心に反響させる。

「凰少尉。」

女の声。

——瞬間、鈴は凍りつく。

まるで蛇に睨まれた蛙のように凍りつく。

—— 心臓を驚掴みにされたような衝撃。

それを悟られぬように、平静を装いながら、ぎこちない動きで首を後ろに向けると—— 鈴の監督官である、鈴の生命与奪権を掌握している—— 周沢民大尉がいた。

「は、はい…」

平静を装いながら応えるも、喉で声が詰まる。

「—— 今回が如何に重要な出来事だったか、分かっているのか?」

「は、はい!もちろんです!!? 今回の一件は党や国家の威信をかけた重要な出来事です。ですから——」

「失態は許されない。だがお前は敗北した—— お前は党と祖国にの顔に泥を塗ったのだ。」

冷たく言い放たれた、宣告。

鈴は恐怖で全身が石のように硬くなるのを感じた。

「そ、れは——」

「失態を晒せば罰せらる…特に貴様は党に刃向かった経歴があるから—— 肅清ものだろうな。」

追い討ちを掛けるように放たれる言葉。

—— ごくり。

鈴は喉に溜まった息を飲み込む。

この女の口にした言葉は脅しでも冗談でもなく、全て事実だから。

「まあ、貴重なIS乗り—— しかも貴様は特上品のものだ。

そう簡単に肅清などには処されないだろう。我が国には人民は腐るほどいるが、優秀な者は一握りしかない…。党は常に優秀な人民を求めている以上、貴様を肅清するのは勿体無い—— と判断したそうだ。」

「そう—— ですか…」

顔には出さないが、安堵と不愉快極まりない感情を鈴は内情に浮かべる。

詰まる所、周の言ったことを要約すれば、党の備品—— ヒ

トではなくモノとして在り続けるなら、殺しはしない。
そういうことだった。

(どうしてこんな奴らに従わなきゃならないんだろう…あたしは、一夏と一緒になりたくて、IS乗りになっただけなのに…!!?)

—— 思えば、母親に付いて行つて中国に渡つたのが間違いだつたのかも知れない。

—— 情けなくて、ビタの一文も貯められない、けれど優しくしてくれた父親に着いて、日本に居続けたら良かったのかも知れない。

しかし、そう思おうとも、時間を遡るなんてSFじみた事など出来やしない。

自分は選択してしまった結果行き着いた今を生きるしかない。

—— 常に党の備品にされ、監督官に監視され、例え日本に亡命できても何処に潜伏しているか分からない親中派日本人の密告者に尻尾を掴まれないように、怯えながら生きなくてはならない。

(—— いっそ、みんな死ねばいいのに。こんな世界滅んどじやえばいいのに。)

鈴が泥のように濁り、淀んだ意識で内心呟いた。

—— 直後。

足音が鳴る。

軍靴の足音だ。

だが、周のものではない。

「け、敬礼ツ!!?」

瞬間、周は先程のように優越感たつぷりだった声音とは打つて変わり、困惑に満ちた声音に変わる。

鈴はその声に反射的に振り返つて敬礼をする。

—— その目に映つたのは特別武装隊の警察の制服を着込んだ、しかしそれでいてその制服が似合わなさ過ぎるくらいに芯から冷たさに満ちた雰囲気の人—— 特別武装隊・孫華輦(スン・カレン) 大佐だった。

「—— そう堅くならなくていいわ。2人とも。」

表情を変えない、氷像のような顔で華輦は鈴と周に告げる。

「は、はあ……し、しかし何故大佐がこちらに……？」

周が困惑と緊張に満ちた声音を発する。

——何故だか、鈴には理解できなかったが。

「少し鳳少尉と話がしたくてな——周大尉、悪いが2人にさせて貰えるか？」

「なっ……困ります!!？鳳少尉は私の監視対象で——何よ、《香港派》の貴女に我々【北京派】の兵士は関係無いはずだ!!？」

上官である筈の華輦に対して、周は噛み付く。

普通ならあり得ない光景だ。

そして周は今、華輦のことを《香港派》、自分と鈴のことを【北京派】と言った。

そこから鈴は結論を生み出した。

——つまり2人は同じ特別武装隊の兵士でありながら別々の派閥に属していて、尚且つ互いに対立している、ということだ。(……まさか、噂には聞いていたけど……共産党と反体制派の内ゲバのみならず、共産党支配下にある特別武装隊内でも……ホントに内ゲバをしていたのね……)

噂では、中国共産党遵守の【北京派】、西側の政策を真似て部分的に改革を目指す《香港派》、ロシアとの友好関係を取り戻そうとする【莫斯科（モスクワ）派】の三大派閥が存在し、それぞれのやり方で党や人民解放軍、一般人、果ては肅清対象者や囚人、政治犯までも自らの支配下に置くために、それらの争奪戦を繰り広げている——という話だった。

——ぶるり。

鈴は背筋に悪寒を感じた。

つまり、この女は、私を——私??

鈴はそう直感する。

だが、香港派は三大派閥の中で最も勢力が小さく、比較的理性派集団の人間たちだから、そう横暴はしないだろう。

——でなければ、共産党の支配する中国では生き残れな

い。

「同志大尉、なんなら君を上官に対して叛意ありと判断して告発しても構わないのだぞ?」

しかし、鈴のその結論を覆すように華輦は周に対して、相変わらず氷像のように冷たく、凍てついた瞳で言い放つ。

「…そんな脅しは……」

——通用しない。

何故なら国内の三大派閥の中で “ 今のところ “ 一番の勢力があるのは北京派だ。

彼らに逆らうことは国家への反逆に等しい。

にもかかわらず、華輦は横暴な手段に出た。

あまりに危険極まりない自殺行為だ。

「私はこう見えても、党の中枢や人民解放軍高官にコネがあるし私自身党の高官だ。必要あらば、君を告発するだけの偽装書類は幾らでも用意出来る。」

「な——」

「場合によっては君を米国と繋がっていた売国奴に祀り上げる事だつて可能だ—— そうなれば君の命はもちろん、ご家族はどうなるか——」

華輦のその言葉に、周は凍りつく。

—— そんなレッテルを貼られて告発されてしまえば、間違いなく周はスパイ罪と国家反逆罪で処刑だ。

しかも、それは周だけに留まらない。

極端な例だが、ロシアにおける革命初期の人物であるレフ・トロツキーとその一族のような目に遭う。

—— 具体的にどうなるかと言えば、周が処刑されてメディアアや歴史から抹消されるのは変わらない。

—— 次に、周の同志たちが粛清される。

周は北京派のそこそこ中枢に近い位置にあるから、間違いなく北京派の頭脳たる中枢も粛清対象者になりかねない。

そして粛清されれば北京派は力を喪う以前に、党の面子を潰したか

ら、という理由で党によって生き残りも粛清される。
そして北京派の人間たちもマスメディアや政府のリスト、歴史から抹消される。

——さらに、今まで抹消された人間の遺族や血縁者にも疑いが向けられ、粛清され、皆殺しにされる。

そして彼らもマスメディアや政府のリスト、歴史から抹消される。それはつまり——大粛清というモノだった。

そこまで事がうまく働くとは思えないが、最悪の可能性というモノがある。

最悪、粛清対象者の数は数十やそこいらでは済まないだろう。

数百、数千——それだけの人間が周の偽装書類によって国家反逆罪のレッテルを貼られて告発された結果、皆殺しにされる。

いや、それ以前にこの女は——華輦は間接的に大粛清を引き起こすことを分かっていたいながら平然と言ったのけた。

それだけの人間の命を無常理に奪う行為——虐殺の引き金に指をかけて、その引き金を引こうとしたのだ。

「…ば……売国奴は、貴女の方でしよう☒」

しかし、周も負けじと再び噛み付く。

このまま引き下がるのが北京派の一人として許せなかったらしい。(そんなプライドなんて…捨てればいいのに…)

鈴はうんざりした顔で内心呟く。

「私に偽のレッテルを貼って告発し、その情報を米帝に売り渡すつもりだろう!!?…資本主義寄りの香港派がやりそうな事だ。そうすれば国際社会で中国の立場は形骸化し、共産党政府の弱体化を促し——

——

「もういいぞ、そこまでで。でない私たちが偽装書類を作らずとも君は粛清されるぞ。」

「えっ？」

「…君の言ったことは、確かに資本主義寄りの香港派ならやりかねないだろう。……だがそれ以前にそれが原因で共産党政府の弱体化——
——という結論を言ってしまったのは、『私は敗北主義者です。』

どうぞ告発して労働キャンプ送りにして下さい』——と言っているようなものだ。」

「……あ……」

周の額から、珠のような脂汗が流れ出す。

今ここで華輦が周を告発すれば、先のような最悪の事態が現実になるかもしれないからだ。

だが、華輦はそんな醜態を晒した周には目もくれずに口を開く。

「日本にはこんなことわざがある。『雉も鳴かずに撃たれまい』——余計な事を口にしたがゆえに災いが自分の身に降りかかって来るといふ意味だ。現代では、ブーメラン現象……と言ったかな?」

日本で暮らした経験のある鈴にふと、視線を向けながら華輦は口にする。

「似た様な言葉には、『口は災いのもと』というのがあるな。——

—— 今後は余計な発言は控えるといい。……生き残りたいなら、な。」
冷ややかに、突き放す様に、華輦は周に告げる。

それで周は怯んでしまう。

「さて、いい加減、鳳少尉と話がしたいんだが?」

—— 威圧するような声。

弱みを掴まれ生命与奪権を華輦に掌握された周は、思わずその場から退いた。

「—— さて、邪魔者は消えたな。」

周が部屋の扉を開けて出て行ったのを確認すると、華輦は呟く。

そして、その扉の向こうに男性が2名いたのを鈴の視覚が捉えた。入って来る時には居なかったことから、恐らく華輦の部下だろう。そして次の瞬間、

「……うん、じゃあ改めて、初めまして。 鳳少尉。」

—— 先程まで氷像のように冷たかった華輦が女性らしい笑顔を浮かべながら、鈴に挨拶をした。

「—— はっ。」

それで、鈴を束縛していた緊張という名の糸は切断されてしまっ

た。

そして先程の雰囲気まで撃ち壊した華輦のあつけらかなとした態度が鈴から状況を把握して判断させる余裕さえ奪い去る。

「あら、何か変かしら？初対面の相手には挨拶するのが当たり前でしよう？」

「え？え、ええ…それは…って、あの、そうではなくて…」

「……なんなの、この女…!?」

思わず、鈴は思わされる。

今まで特別武装隊にこんな人間らしい人物なんて会った事がないが故に、今まで以上に困惑させられる。

「貴女と一度話してみたくてね…ああ、盗聴に関しては気にしないで。部屋の外には私の部下がいるし、元よりIS学園の警備システムは異物を見つけるのが得意だから。」

やはり華輦は女性らしい笑顔のまま、口にする。

「何故こんなマネをしたのか…と言いたい顔ね？」

「…はい。」

鈴の顔を見た華輦が言う。

それに鈴は頷き、当たり前だ。と内心呟く。

先程の華輦が偽装書類を用意して告発するという話は周にも出来ない訳ではない。

故に、下手すれば自分たちが周に告発される可能性すらある。

(なのに、何故――)

鈴は内心呟いた。

「貴女のことが入っているからよ。」

「……はい？」

再び、鈴はポカン…と口を開けたまま固まってしまふ。

それを見て華輦は大きく苦笑いする。

「――貴女の過去を調べさせてもらったわ。…この矛盾と欺瞞、腐敗に満たされた国の中で正しいと思ったことを貫こうとした。…そして特別武装隊に入隊させられてからも従順に従ってはいないが内には反抗心を宿している――そんな貴女に少し興味が

あつたから。」

鈴はそれに驚かされる。

従順に従っていたつもりだったのに、常日頃から内に孕んでいた反抗心を感じ取られていたのだから。

「…で、ですが大佐は私の属している北京派と対立していて――

――」

「私は北京派を脅威と認識していない。」

今、この女は、なんと行つた？

自分をここまで墮とし、恐怖の象徴として脳に刻まれ、自分を奴隷に仕立て上げた北京派を脅威と認識していない――そう、言つた。

「私たち香港派には強力なスポンサーがいるもの……多くの人民と私の取り込んだ党の高官、台湾経由の西側諸国……西側諸国と繋がりがあつたからこそ、我々香港派の諜報能力は北京派のソレを凌駕している――そして私なりに取り込んだ党の高官も、良い傀儡として機能してくれているわ。数では劣勢、しかし能力では優勢……そんなところね。」

華輦はそれを誇る訳でもなくただ現実を告げるように淡々と口にする。

――そういえば、党は近年行き詰まりつつある中国経済を回復すべく、西側諸国のやり方を中国式に改変するために西側諸国との交流機関を創設していたという。

その機関が香港派の傘下にあるのだろう。

だから、香港派は西側諸国から情報を与えて貰える。

「…で、ですが……」

「貴女が北京派に恐怖を抱くのは分かるわ。でも、貴女たち北京派が仕える共産党は――いずれ、アメリカの別荘に逃げ込むわよ。」

「――えっ？」

鈴の脳に衝撃が走る。

——では、本土に取り残される人たちは？

答えるまでもない。

近年の中国の横暴が理由で外交関係が悪化している国家など山程ある。

少なくとも、近隣諸国には逃げ場は無い。

つまり——下手をすれば、中国民族が死滅する可能性すらあり得る。

そしてその現実から逃避し、党の人間たちは自身の保身に徹して人民を救うという責任を放棄し、アメリカに我先にと逃げ込むだけ。

「——少なくとも、貴女はそのままでは党に使い潰されるわ。……だからよく考えて、選びなさい。このまま共産党の奴隷で居続けるか、私の同志になるか、あるいは——何が貴女の幸せに繋がるかは貴女の意味と決断次第よ。……私は同志たちと果たすべき責務を果たした暁には貴女を解放し、自由の身にしてもいいと思ってるわ……もつとも、貴女が私の同志になるならば、だけど。」

「……………」

「私からはそれでお終い……何か質問は？」

「……ひとつだけ、教えて下さい。」

度重なる衝撃に心を揺らしながら、鈴は口を開け、言葉を紡ぐ。

「何故、私にそこまで話してくれたんですか……？私だって何人も密告しているんです。私が大佐を密告する危険だって貴女にはあったのに、どうして……」

「私は、部下にだけ危険を押し付けることを良しとしない。」

華輦が再び氷像のような表情になり、華輦の瞳が鈴を捉える。

華輦の瞳は真剣そのもの——彼女は今、自身の貫く信念を口に出している。

「特別武装隊だけでなく、党の傘下にある組織は少なからず薄汚れている。私たち香港派でさえ、外道と罵られても文句は言えない——

——だからこそ私のように大勢を率いる者は進んで自ら手を汚し、自ら命を捧げなければならぬと考えている。穢れて、血塗られた道だからこそ、その邪道に走っても成し得ることを成すということ

に誇りを持たせてやる必要がある。」

それは、鈴をここまで堕とした賀とは正反対の理念。

賀は周りのもの全てを道具——否、玩具と見ている。

「それと同じだ。信頼を得るには、それしか無いと思っただからだ。それに共産党の今後の方針を伝えてもなお、共産党に隷属するほど党に忠誠心があるわけでも無い……あとは……そうだな……」

人間らしい表情をしてから一拍開けて、

「——昔、大連の爆発事故で亡くした娘に似ていたから……だろうか。」

——私的な理由。

華輦の行いを勝手だ、自己満足だ、と罵ることは出来る。

しかしそれまでで鈴に対してどれだけ救いの手が降ろされたらう。

鈴は無意識に華輦に感謝と思しき感情を覚えていた。

「——じゃあね……次に会う時は、敵でないことを願うわ。」
そういうと、華輦は部屋から出て行った。

午前10時17分

東京都八王子市気象庁高尾山地震観測所

「だからっ、何度も言ってるじゃないですか……っ!!?」

そのこの女性職員が受話器を手に、通話先の相手に向けて叫んでいた。

その手元では、地震の振れ幅を記録する機械が作動している。

「美浜から、東白川村、飯島町、中央市、上野原市——」

震源が移動している “ んです!!? ”

今もなお記録を続ける地震計は次第に振れ幅が大きくなってきている——つまり、観測所のある八王子市に迫って来ている

のだ。

「…なんでつて…：…知りませんよそんなの！連動型にしては不自然だし…：…とにかく、各自治体に住民への注意を呼び掛けるよう指示して下さい!!？お願いします！」

女性職員がそういった、瞬間。

ブツリ、と音を立てて電話が切れた。

「…：…もしも…？もしも…？！」

切られたのだ——女性職員は嘆き混じりの吐息を吐きながら察した。

「やっぱり相手にされないよ…『震源が移動している』なんて言ったら。」

もう1人、観測用紙の処理に追われている男性職員が言う。

「他にどう言えつて言うんですか!?？これどう見たつて震源が移動してるしか…：…似た例だと、東日本大地震だつて3つの震源が連動して発生した連動型地震ですし…：…!!？」

だが今回は違う。

周りの震源に連鎖はせず、美浜原子力発電所直下から関東に向けて真っ直ぐ走つて来ているのだ。

普通なら、あり得ない。

「それに…：…もし、大惨事に発展したら…：…!!？」

「はあ…：…【新潟中越地震】で被災して祖父母を亡くしたお前の気持ちには分からんでも無い。だが地震観測士という地震において重要なポジションにいる人間が、勝手に憶測で引つ掻き回すワケにもいかんだろう。」

「それは…：…」

「まあ、やりたいんなら好きにやれば?やらかしたら給料減らすけどね。」

「ッ、ありがとうございます!!？…：…とにかくもう一度電話を…」

女性職員が受話器を取つてダイヤルボタンを押そうとするが、そこで違和感に気付く。

電話の液晶画面が真っ暗になっているのだ。

ふと、周りも見れば窓の外から入ってくる日光の所為で気付かなかったが、電気も消えている。

動いているのは、万一の際に非常用電源が作動する地震計と地震のデータを保管するサーバーコンピュータ群のみ。

「電気が、落ちてる…？」

女性職員が困惑した声音で呟く。

基本、高尾山地震観測所は隣県である神奈川県相模原市からの電力供給に依存している。

電気が絶たれたということはずまり――

「まさか…」

――瞬間、鈍い、地鳴りのような振動が伝わって来る。

「まさか…！」

悪い予感的中したように、血相を変える。

2秒後、窓の外から金属の軋む音が響き、窓際に駆け寄る。

窓はいつ地震が来ても大丈夫なように開けっ放しにした上で固定している。

少なくとも固定器具が外れない限りは大丈夫だった。

――女性職員は窓に駆け寄り、相模原市緑区が遠目に見える景色を視界に入れた瞬間、

「あ――なんて、こと……!!??」

崩れてしまった。

高尾山から見えたのは、緑区を埋め尽くす土煙だった。

ただの土煙ならどれだけ良かったか――。

距離の所為でくぐつもつてはいるが土煙に混じって、地面が砕けるような、車のクラクションと、コンクリートが砕け木が潰れるような音まで聞こえて来る。

ただごとではないのは遠目からでも見て取れた。

そして、新潟中越地震での被災経験から、女性職員はそれが建物の倒壊音だと嫌でも気付かされた。

あそこには避難勧告も何も布告されていない。

あそこに住む17万人以上の住民は先程まで何の変哲もない生活

を送っていただろう。

では、あの土煙の中にいる17万人は今――

「――感傷に浸るのは後回しにしとけ。」

それを遮るように男性職員が言い放つ。

「で、ですが…」

「地震つてのは何の前触れもなくやって来て何もかも破壊し尽くすもんだ。…俺らにそれを止めることは出来ない。そこで嘆くだけであるか、出来る限りの事をするかは別だがな…」

午前10時19分

神奈川県相模原市中央区国道129号線

「緑区で地震だつてー。」

「え、うっそマジで？すぐ隣じゃん。」

プリウスを運転する女性に対し、助手席に座っていた女性がスマートフォンで確認した情報を言う。

「詳しい被害は不明だつてさ、超怖くない？」

「分かる！超怖いよね〜！」

彼女らは怖いと口にしたが、声には一切恐怖というものは含まれていなかった。

それは当たり前だ。

何せ生まれてからそのようなモノは体験した事がなく、『少し危険なイベント』程度にしか認識していなかったから。

「……………え？…ち、ちよつと……………」

――だから、自分たちの真下から地響きがした瞬間に、彼女らは沈黙した。

真下から響く振動は、震度6クラスの地震のソレだった。

「……………ね、ねえ……………」

「な、なによ……………」

2人共、困惑した声音で互いに声を交わす。

「に、逃げない？これヤバイよ絶対!!？」

「そ、そうだよね！逃げよ!!？」

本当の意味の恐怖を感じて、車のドアを開け、出ようとした瞬間――

――足が、アスファルトに吸い込まれた。

「ひっ、な、何よコレ!!？」

思わず助手席の女性が声を上げた。

足がアスファルトに――正確には、アスファルトに出来た

亀裂を足が踏んでしまい、底の見えぬ奈落に足を取られたのだ。

助手席の女性はすぐさま足を引き抜いて、再び車の中に戻り、ドアを閉める。

「…や、やっぱりここにいよ！なんかヤバイよ!!？」

運転席の女性が叫んだ。

周りを見ると、他の車も降りて逃げようとする者、車の中に籠ってやり過ごそうとする者に別れていた。

前には――突然陥没した道路に吸い込まれていく車両と

人間。

振動。

地面の割れる音。

悲鳴。

クラクシヨン。

地面の割れる音。

クラクシヨン。

クラクシヨン。

悲鳴。

地面の割れる音。

振動。

悲鳴。

悲鳴。

クラクシヨン。

地面の割れる音。

地面の割れる音。

地面の割れる音。

——それらが不規則に響き、不協和音に満ちた音楽を作り出す。

「…っ、やだ…やだあ……」

運転席の女性が泣き出す。

助手席の女性も同じだ。

けれども、そんな彼女たちには構わず無情にも、彼女らはプリウスごと道路の陥没に——奈落へと、呑み込まれて行った。

午前10時22分
内閣府・首相官邸

官邸3階廊下

清潔感に溢れた廊下——そこをスーツ姿の2人の男性が足早に歩いていた。

「午前10時15分から20分ごろ、相模原市にてマグニチュード5.2の地震による地割れが発生、車両数百台と建築物数十棟が巻き込まれた模様。被害は現在進行系で拡大中です。」

男性——内閣官房副長官秘書官の【志村祐介（しむらゆうすけ）】が口早に、それでいて分かりやすく要約してもう1人の男性——内閣官房副長官【矢口蘭堂（やぐち らんどう）】に報告する。

「官邸に対策室が設置されることになりました。」

「その前に被害の詳細な情報が欲しい。官邸災害対策本部に行く。」

官邸直下災害対策本部

オペレーションセンター

いくつものモニターが壁に備え付けられ、数多のデスクの上では数十人もの各省庁の役員がコピー機で印刷された無数の紙媒体資料を

手に対策に追われていた。

『Jアラート（全国瞬時警報システム）発動。』

『横浜線、京王相模原線、横浜線、相模原線は全線運転を見合わせ。』

『国道16号線は相原インターチェンジで通行止め。』

『横浜市、相模原市他自治体に非難勧告、避難準備警報を勧告。』

飛び交う、報告の声――。

情報は錯綜している。

しかし、これといって確定的な情報は存在しない。

『東京消防庁観測ヘリより現地映像、入ります。』

モニターに新たに映される映像。

――深く、深い底をもつ、地割れによって引き裂かれた大地が映し出される。

「…やはり、局地的地震による地割れでしょうか……？」

志村が矢口に問う。

「――それにしては違和感がある……志村、現地で発生した地震のマグニチュードは5.2で間違いないのか？」

「え、あ、はい。確かに地震観測所からの情報ではそれで間違いありませんでした。」

「――だとしたらおかしい。」

志村の答えを聴くなり、矢口は画面を睨みつけながら異質な存在を見るような目をして言う。

「――あれが地割れだというなら、あまりに大き過ぎる……あれは陥没と捉えるべきだろう。」

午????????????
午前10時25分

IS学園・第2アリーナ

アリーナではセシリア・簪ペアの試合が展開されていた。

やはり、廃墟街を想定した遮蔽物郡が乱立している。

そこを、セシリアが統合機兵《ユリウス》を纏い、超低空で駆けていく。

——機動砲撃戦。

セシリアが先日習得したばかりの機体運用戦術だ。

先程千尋や箒がやってみせたような遮蔽物を足場に不規則な軌道を取るオルブライトターンを行いながら、ハイパーセンサーの捉えた敵影の元に突撃する。

裏路地を想定した遮蔽物群を抜けた——瞬間、対戦相手であ

るラファール・リヴァイヴと打鉄のペア2機と会敵——そして、

「はあああつ!!?」

——セシリアの雄叫び。

同時に、09式120ミリ自動滑腔砲をその2機に向けて放つ——

!!?。

今までイギリスのISおよびその発展型である統合機兵は高出力レーザーによる狙撃を主目的としていたが、それを可能たらしめていたのは制空権を確保できた場合の話。

加えて、ただでさえエネルギーの消費が激しく、継戦能力の低いISにとってレーザーは非常に相性が悪い。

補給がいつでも出来るならば話は別だが、補給がままならない状況下においてレーザーをいたずらに使用すれば言わずもがな、継戦能力を喪失し、ISの絶対防御も喪われ、もはやただ高価なだけの鎧に成り下がる。

おまけに、絶対防御があるから——という理由で地肌を晒している箇所が多いために、絶対防御を喪えば身体を守る術がなく、重傷を負いかねない。

それはISの発展型である統合機兵も同じだった。

さらに言うなら、巨大不明生物相手に、既存のレーザー兵器では威力不足という事実。

——その現実から、戦術の方針転換を迫られたイギリス陸

軍が編み出したのが、既存の戦車や自走砲などの砲兵や機甲部隊との連携を前提にした、戦車砲を流用した突撃滑腔砲装備での地表面三次元立体近接打撃戦。

——もちろん、既存のレーザー兵器は艦艇や戦闘機のC IWS（近接防御兵器）に転用するなど、ある程度既存兵器の発展を實現させたため、“決して無駄ではなかった”のだが。

——高速徹甲弾が炸裂する。

遮蔽物のコンクリートも爆風で表面が抉られ、砂塵が舞い上がる。

——敵のラファールに着弾。

ラファールを吹き飛ばし——後方の打鉄に衝突させる。

ラファール・リヴァイヴは打鉄と同じ第2世代機だが、打鉄と比べると軽装甲であるため、吹き飛ばされやすい——その点を突いた砲撃だった。

「っ、この……」

そんなセシリアには余裕をかます暇など無い。

敵ラファール・リヴァイヴが発砲。

50口径アサルトライフルの銃弾が迫る——。

——セシリアはそれを、

「……ふっ……っ」

——拡張領域から喚び出したシールド、《シエルツェン》を前面展開する。

ガガガガガガ!!?

銃弾がけたたましい音を立ててシエルツェンの表層部に命中しながら、火花を散らす。

表層部の爆発反応装甲は任意で反応起爆させるか否かを決められる。

今は反応起爆させないようにしているため、起爆する怖れはない。

「——セイバー02よりセイバー01へ！弾種の交換完了！繰り返す、弾種の交換完了!!?」

セイバー——セシリア・簪ペアが戦闘中に使おうと決め

たコールサインがプライベート通信に響く。

——簪だ。

「了解ですわ…発射をお願い致しますわ。発射されれば、わたくしが誘導します。」

（——正々堂々と戦う騎士道の精神には反しますが、これは試合とはいえ実弾や実刀を用いた戦闘——おままごとでは以上、このような邪道もやむを得ません。）

簪に返答するなり、セシリアは少し複雑な感情を抱く。

もとより貴族出身で幼い頃から騎士道精神を叩き込まれて育った彼女からすればこれから実施する戦術には抵抗があるが、これが単なるスポーツの試合とは違って、現代の戦場で用いられている存在を使っている以上、多少の邪道はやむを得ない。

『セイバー02、フォックス2——!!?』

簪の声。

それと同時に、噴煙を伴いながら穿たれる、64発の小型誘導弾——しかしそれらは、的はずれにも程がある地点に飛んでいき制限高度ギリギリの高度で弾頭のカバーが、——外れた”。

同時に、筒型の塊を地表に突き刺すように撒き散らす——

——轟音。

弾頭から解き放たれた筒型の塊は地面に突き刺さると、自身を固定するように、表面の隆起部分の火薬式ノッカーが炸裂、簡易式脚位が展開され、地面に打ち付けられるようにして筒型の塊を地面に固定する。

——12式単一指向性爆弾《ブラスト・ボム》。

本体内部に蓄積された火力を特定方向に放出して爆発する、対人・対戦車兵器。

固定されたものは、それだった。

「セイバー2！作戦どおり行きますわよ!!?私がブラストボム群まで誘導。貴女は指向性操作で遠隔起爆させて下さい！相手が怯んだ隙

に私がビットで沈めますわ——!!?」

『分かった——起爆15秒前——』

勝負をシメるべく、作戦が開始された——。

——爆発。

鼓膜を劈く爆音の連鎖がアリーナに轟き、爆風が入り込んだ遮蔽物の合間を縫うように駆け抜け、砂煙が舞い上がる。

ブラストボムが起爆し、単一方向に放たれた50ポンドもの爆発エネルギーとその余波がアリーナの闘技場内を蹂躪する。

絶対防御を持つISそのものには、シールドエネルギーを擦り減らす程度と、爆風で相手の動きを硬直させる程度の効果しかない。

——けれど、それで充分だった。

爆風で相手の動きが固まった瞬間が、セシリアと簪の狙いだったのだから——。

「——指定展開!!?」

指定展開。

量子変換された武器を取り出す容量で、指定した座標に拡張領域から量子変換で展開させる機能。

——それをもって、4機のBT兵器「ストライク・エア」を展開させる。

連鎖爆発による爆風に吹き飛ばされぬよう、4機のビットのスラストターを微調整し続ける。

——これは『一度に5つ別々の思考をしている』ということとなのだ。

並大抵の人間が出来る技ではない。

そういう意味では、彼女は天才なのだろう。

——けれども、ストライク・エアの能力を完全には引き出せていない。

引き出そうとするならば、戦術機部隊でも使用されている【思考拡張薬物】を投与する必要がある。

それは、かつて得られなかったIS、ブルー・ティアーズでも同じだった。

けれどもセシリアにはそんなことは気にならなかった。

『今この瞬間を乗り越える』ことこそ、自分に課せられていることなのだから。

09式120ミリ自動滑腔砲に焼夷榴弾を装填しながら、自身に言い聞かせる。

『セイバー02よりセイバー01、面制圧用誘導弾の装填完了!!?』

—— 簪からの通信。

「了解ですわ…連鎖爆発の爆風が晴れた瞬間に、頼みます。」

『分かった。』

—— そういうと同時に起爆する、最後のプラスチックボム弾頭。

そして爆風がアリーナを蹂躪し—— 晴れた。

『セイバー02、フォックス3!!?』

瞬間、簪が64発もの、面制圧用27式マイクロミサイル《山嵐》を、

解き放つ—— !!?

—— さあ、爆風（かぜ）は止んだ。

—— 味方の面制圧（合図）も鳴った。

では—— わたくしは、眼前の敵を射落とすのみ——

—— !!?

「セイバー01、フルファイア!!?」

セシリアは叫ぶと、ストライク・エアと09式自動滑腔砲を、敵ラファール・リヴァイヴと打鉄めがけて、穿つ—— 4筋のレー

ザーと120ミリのタンングステン合金、そして簪の放った山嵐が、空を裂く—— !!?

—— 爆炎と共に轟く弾着音と爆風が世界に波及して——

—— それが、試合の終わりを宣告した。

『—— シールドエネルギー残量ゼロ。勝者、セシリア・オル

コット、更識簪ペア。』

その裏で、

—————

第2シャフト・IS学園警備課仮設指揮所

使われずに余っていた部屋を改装して作られた臨時の指揮所内の隅で、光は守秘回線の携帯を手に通話をしていた。

「———袖原、状況は？」

相手は光と防衛大学時代に同期であった、陸上自衛隊統合幕僚監部防衛計画部防衛課長〔袖原泰士〕一佐だった。

『現在緊急の閣僚会議を準備中だ。巨大不明生物の可能性を否定できない為、横須賀に駐機中の〔ACS―3しらさぎ〕が観測のために発進。入間のF―15Jに護衛されながら現在現場上空で旋回中だ。』

ACS―3しらさぎ———元はといえば3式機龍の空輸・

援護を目的に開発された超大型攻撃輸送飛行艇だ。

その1号艇が横須賀に配備され、2号艇が今現在、広島県呉市の海上自衛隊呉基地で就役式典の真つただ中だ。

「花森防衛大臣は今呉か？」

『ああ、現在しらさぎ2号艇の就役式典に出席してて不在だ。———

———予定を全てキャンセルして今帰ってきてる最中だが…』

袖原の報告を聴くなり、光は菌痒い感情と、ある意味感心を抱かされた。

菌痒い感情は、今から航空機に戻って来ても手続きや陸路の移動時間も含めれば1時間く4時間はかかる。

つまり、間に合わない。

感心した理由は女性の閣僚なのに全ての予定をキャンセルしてまで戻って来てくれる点だ。

当たり前と言えども当たり前前なのだが、前政権時代はこのような災害が起きても予定をキャンセルして帰ってくる事はなく、そのまま行き先でのんびんだらりんとしていたからだ。

それに比べ花森防衛大臣は有難い。

「袖原、閣僚会議で防衛大臣の代理は誰が？」

「――傘松副防衛大臣だ。」

「分かった。では先日渡した『巨大不明生物侵攻想定マニュアル』の侵攻パターン第4種を元に対策するよう上申してくれ。」

巨大不明生物侵攻想定マニュアル。

特務自衛隊がロリシカ戦線のデータやウクライナ戦線のデータ、各地の散発的的巨大不明生物のパターンを研究した結果、海中侵攻、海上侵攻、空中侵攻、地中侵攻、地上侵攻の5パターンに分類した侵攻にどう対応するかを記したマニュアルだ。

「災害でマニュアルが役に立った試しは無いが……無いよりはマシだ。頼むぞ。」

『了解した。一旦切るぞ。』

そういうと、通話は中断された。

光は溜息をつくとき、頭をガシガシとかきながら、

「――こんな時に来るとはな……いや、いつ来てもおかしくなかったんだ。ただ、私も浮かれていたただけだったんだろうな……。」

呻くように、自嘲するように呟いた。

――

前10時31分

内閣府・首相官邸第2会議室

第一次相模原地震に関する対策会議

(花森防衛大臣は海自呉基地しらすぎ2号艇完成式典に出席しているため不在。)

また、里見農林水産大臣もオーストラリアに豪遊中のため不在。)

何処か和風らしきが見受けられる白い壁と木の組み合わせで出来た会議室。

10メートル以上あるのではないかと思わされる木製の長テーブルを挟み、各省庁の官僚が集い、相模原地震に関する解説を繰り広げていた。

「相模原の地震災害による経済的損失を鑑み、現在東名高速道路は通行止め。東海道新幹線も全便運行を取りやめております。」

【柳原邦彦（やなぎはら くにしん）】 国土交通大臣が報告する。

常識ではあるが、東名高速道路は東京・名古屋間を結ぶ高速道路であり、東海道新幹線は東京・大阪間を結ぶ新幹線の事だ。

交通に関しては日本の動脈のひとつと言っても差違えない代物だった。

ふと、彼の部下らしき男性が後ろからメモを手渡し、柳原はそれを見るなり、

「失礼。訂正致します。東名高速道路及び東海道新幹線は経済的損失と〔人命に関わる危機的事態に発展することを懸念して〕神奈川県内においては全面的に封鎖致しております。」

——そう、訂正する。

閣僚会議で発言権を持つのは大臣クラスの政治家のみであり、それ以外の政治家はこうしてメモを手渡し、大臣に意思を反映してもらうのが常識（セオリー）だ。

次に、地震によって生じた地割れですが…正確には陥没と捉えるのが適切であるため以後は陥没として——

——待て、陥没？どういうことだ。」

しかし柳原のその発言に、大河内清次（おおこうち きよつぐ）内閣総理大臣が難色を示し、質問する。

「——は、まず当初地割れと思われていた現象が地震のみでは起こり得ない規模——具体的にはマグニチュード10クラスの地震が来なければ起こり得ない規模であるにもかかわらずマグニチュード5・2という規模の地震で発生していることから、地割れはあり得ないこと。」

さらに相模原市一帯には相模湖や津久井湖、相模川を水源とする水脈が広がっており、それらの幾つかが破断し地盤を浸食した結果、大規模陥没に至ったと考えられます。

——過去、大阪・梅田で地下鉄の開発時に水脈を破断し陥没が発生した事例と照らし合わせた結果、「局地的地震による水脈の破断が地割れを助長し大規模陥没に発展」したモノと考えたため、このような結論に至りました。」

矢口はその光景を見つめ、柳原の会見を鼓膜に染み入らせる。

——過去の事例と照らし合わせた結果編み出された常識の中の回答。
確かに一理あるし、仮説としては充分だった。

——しかし、それだけでは事態の解決には程遠いように思えた。

「ですが局地的地震は未だ続いており、それはほぼ一直線に三浦半島に向かっています。」

さらに如何に連動型局地的地震と見ても、あの辺りは断層が通っておらず、「常にマグニチュード5・2を維持」しているのは不可解と思われませんが。」

矢口の疑念を代弁するように、傘松防衛副大臣（防衛大臣代理）が質疑する。

「えー…そのあたりにつきましては、目下調査中ですので現段階ではなんとも……」

痛いところを突かれたように柳原は顔をしかめながら言う。

（——このままでは埒が開かない。）

矢口は内心呟く。

今、現在進行形で事態は悪化しているのだ。

にも関わらず、呑気に会議を開かなくてはならない。

——民主主義であるが故にやむを得ないのだが、これは初動対応が遅れすぎてしまう。

どうにかして、埒を開かなくてはならない。

だが、いかにして埒を開くべきか——矢口が思考していた、その瞬間。

「会議中失礼します。」

会議室のドアを開け、制服姿の陸上自衛官が慌ただしい様子で入って来る。

首相官邸にいるということは、彼は連絡将校なのだろう——

矢口は思った。

自衛官はそのまま傘松防衛副大臣の元に駆け寄ると、なにやら資料を提出し何やら耳打ちする。

——会話が終わると、傘松防衛副大臣は深刻そうな表情をする。

それを見て、矢口は思考する。

一瞬見えた資料の画像を見る限り、今回の陥没事故に関してのようだった。

しかし防衛省が陥没事故においてここまで深刻な反応を示す事自体珍しい。

——確かに、被害想定範囲内には在日米海軍厚木基地があるからそこが被災することを懸念しているのかも知れないし、本人が今回初の閣僚会議というのもあるだろう。

しかし、それを差し置いても今までした事がないほどにまで深刻そうな反応をしているのだ。

防衛省にここまで深刻そうな反応をさせる存在は、この世に2つしかない。

——1つはIS。

毎年のように領空侵犯を繰り返され、その度に空自の戦闘機が邀撃の為にスクランブル発進している。

しかし、今回ISの関連性は希薄だ。

そうになると、つまり陥没事故に関わって来るのは――

「――総理、地下に何者かがいる可能性があります。」

――矢口は結論に達し、声を放った。

「何者って?」

「今までの不可解な地震発生のパターンからして――巨大不明生物と推測します。各省庁の検討を願います。」

矢口の声に閣僚は騒つく者、侮蔑の視線を向ける者に分かれる。

――そこに、

「矢口、議事録に残るんだぞ。閣僚会議で不用意な発言はよせ。」

【東竜太（あずま りゆうた）】内閣官房長官が矢口に告げる。

――彼には内閣官房副長官に推薦し引き上げ、今まで支えてもらった恩がある。

だからこそ、矢口はその言葉に従うべきだ。

だが、しかし――

「――しかし先の東日本大震災のように不測の事態が惨劇を招いた事例があります。それらを未然に防止あるいは抑制する為にも予測されるあらゆるケースを想定し、具申する必要があると考えます。」

矢口は申し訳なさと決意を孕んだ顔をして、言い放つ。

この時、【しらさぎ】が地下深度50メートルを長駆侵攻する全長120メートルもの巨大潜行物体を探知していた。

????????????
IS学園

東海モノレール南房総線夢見島学園前駅

白を基調とした床や壁、青みの色ガラスが天井となっているIS学園と本土を結ぶモノレールの駅。

そこを光からの密命を受けた舞弥は歩いていた。

服装はおおよそ目立たない格好でありながら、地味過ぎない普通の服装。

仕草も少し控えめな性格を装うべく、人混みを横切る際に「すみません」といちいち言いながら頭を下げる行為までしている。

ホームにまで上がり、ふう…と溜息を吐く。

—— 瞼を閉じる。

—— 偽装は目立つべからず。

幼い頃に拉致された先である北朝鮮の工作員養成施設で嫌と拒絶したいくらいに頭と身体に叩き込まれた鉄則だ。

だから予め脳と身体に用意したいくつかの性格と仕草を使い分けることでこういう仕事に参加していた。

それがどんなに異常な事か、平和な日本で生きてきた者ならば誰でも分かるだろう。

普通自分の脳にいくつもの性格、身体にいくつもの仕草を用意したりなんかしないし普通の人間ならば出来ない——それが18歳の少女ならなおの事。

それは脳の容量が他の情報で埋まっているからだ。

—— USBメモリに例えると分かりやすいだろうか。

例えば、一般ならば小中高と教育を受けたりそうして成長する過程で教育のみならず友人や趣味のモノから様々な情報を脳に集積する。そうすればそれらの情報は脳に蓄積される。

しかし成長するに従って脳の容量を圧迫しだすから人は必要ではないと感じた記憶（データ）を忘却（削除）する。

そうして新たな知識を脳というUSBメモリに集積していくのだ。

—— 舞弥の場合、脳（USBメモリ）はそのように機能しない。

無理矢理工作員として育て上げられた故に興味に該当するデータは無く、生きる最低限の情報と一般教育のデータも必要最低限のモノしかなく、残りは軍事的知識、諜報活動のコツのみ。

脳は忘却することを知ってはいても、ひとつの情報を洗練し新しい

情報に上書きする事で情報の空き容量を保持したまま生き続ける。

——そう教育されたから。

情報を蓄積する。

情報を上書きする。

情報を蓄積する。

情報を蓄積する。

情報を上書きする。

情報を蓄積する。

情報を上書きする。

情報を上書きする。

情報を蓄積する。

情報を蓄積する。

情報を蓄積する。

情報を上書きする。

——それはただのコンピュータや機械と何ら変わらなかつた。

その状態から外れた理由があるとすれば、それは自分の在り方に疑問を抱いたから。

——自分が行う行為に意味はあるのか？

そんな、単純な疑問。

けれどもそれで充分だった。

ただ機械のように生きるのが正しいのか、今まで使われる事なく朽ち果てた者も数え切れないほどいた。

このまま自分も使われずに朽ち果てるのではないか？

だとしたら、何の意味がある？

——その瞬間、久宇舞弥という機械は破綻した。

そんな単純な躓きで破綻した。

——思い返せば、ただ恐怖に支配されていたから今までこうして機械になり切っていただけなのだろう。

それを成させるべく指導官は無駄をそぎ落とすために、北の指導者に忠誠を誓わせるために恫喝し、暴行し、恐怖心による支配を行なっ

ただけ。

産み出される結論——同時に心に穿たれた穴。

今まで機械になることで思考する必要が無かったのに思考したから疑問にぶつかり、埋められぬ穴が空いてしまった。

——此処にはいはずれ朽ち果てる。ならば——
——還ろう。

気がつけば、施設を抜け出し、必死で港を目指していた。

——北から逃げる者達が港の船から出るのだと知っていたから。

——そうして、久宇舞弥は脱北者となった。

対日作業員として養育されたのが幸いだったのか、色褪せそうなくらいに磨耗した日本語を口にしたのが理由なのか——今でも思い出せない。

けれど今こうして再び日本の土を踏んでいる。

——瞼を開く。

次のモノレールを待つ乗客たちがスマートフォンをいじったりベンチに腰掛けたりしている景色が視界に映る。

——欠けた記憶を覗いていたようだ。

舞弥は思わされる。

ふと、ホームの隅——あまり人が座らないであろうベンチに腰掛けている女性めがけて、久宇舞弥は歩き出す。

——歳は30代後半だろう。長い金髪と白い肌が特徴のその女性は何処か妖艶な雰囲気を漂わせながら東北地方の写真集の本を読んでいる上品な感じの女性だ。

舞弥は周囲を確認してから、少し興味ありげな女子高生のような人格に切り替える。

「Excuse me, May I sit next

to you? (すみません、隣に座ってもよろしいですか?)」

「Well, I do not mind. (ええ、構いませんよ)

——それと、日本語で構いませんよ。」

「あ、分かりました。ありがとうございます。」

そう言つて、女性の隣に腰を下ろした。

「貴女は東北に興味があるんですか？」

「ええ、歌川広重の浮世絵に描かれている風景の松島が気に入っているんです。」

「そうなんですか——— でしたら三浦半島の風景もオススメですよ。」

「ええ、だから昨日のうちに三浦半島は回ってしまったんです———

……さて、合言葉はクリアね。」

なんてことのない痴話話レベルの会話——— に見せかけた

合言葉を舞弥と交わして、スコールは言う。

諜報員同士が接触する際に合言葉を交わすのは当たり前だ。

そしてその内容も他者に怪しまれないようにごく当たり前の痴話話レベルにする——— 当たり前のような内容なら何処にでも

転がっているし、何か特別な内容でなければ人の耳には入らない。

例え入っても脳が必要ないと判断してシャットアウトするのだ。特に意識するべき内容ではないから。

——— 舞弥は改めて周囲の人の気配を確認する。

そして問題ないと判断すると、ホームの人々や駅の構内放送の音に
かろうじてかき消されないくらいの、一般人には聴き取りづらい程度
の声で話を切り出した。

——— 彼女、スコール・ミューゼルがCIAの潜入捜査官
なら一言半句漏らさず記憶できるだろうと舞弥は判断したからだ。

「——— 単刀直入に申します、モナーク北米本部とCIAが共同で管理している【ベッセルング計画】のデータを渡していただけると助かります。」

「あら、どうしてまた？」

「相模原市の陥没現場からベッセルング計画で放棄されたダリネグルスク実験場内にあった酸性物質と同一のモノが発見されました。：特自上層部は神奈川県北部を三浦半島に向けて縦断中の地中潜行物体が同計画で発生した巨大不明生物ではないか——— と考え

ています。」

「だからデータを寄越せ——と？でも、当事者がいるでしょう？」

「——まともな会話が出来る精神状態ではありませんので……。」

——ベッセルング計画で巨大不明生物を産み出してしまった白神英理加博士は精神崩壊を引き起こしてしまっているからだ。

今は回復に向かっていているがベッセルング計画関連の事を聞こうとするたびに彼女は発狂してしまうのだ。

——なんでも、噂では重金属汚染に苦しむ子供達を治そうとして、彼らに怪物に変えてしまった事がトラウマとなつて今のような精神崩壊に至らしめたらしい。

——急を要する事態で彼女にそれを問うても時間の無駄。愚策でしかない。

であれば——

「なるほどそれは確かにそうね……まあ、見返り次第では構わないでしょうけど……。」

スコールは思案するように手を顎に当てがいながら呟く。

——まあ、世の中タダが通るモノはない。それは当たり前だ。

C I Aがモナーク北米本部とベッセルング計画の情報を独占できるなら、独占したままでもいい。

国益を優先するなら当然の話だ。

「——生憎、アメリカはタダで情報を開示するような生易しい国じゃなくてね……まあ、他人にタダで情報を喜んで差し出すのなんて、【信じる事に凝り固まった】貴女たち日本人くらいよ。」

——裏切られる、なんて概念を知らないのか、理解したくないのか知らないけれど。

なんて添えて、スコールは言う。

確かに、日本は鎖国、開国、文明開化、開戦、敗戦を経て、他者を

【信じることに凝り固まった】特殊な国だ。

日本人からしたらごく当たり前だが、アメリカ人からすればそれは『狂信的なまでのお人好し』と映るらしい。

まあ、理解出来なくもない。

先の大戦以降、日本は他国との信頼を取り戻すべく自己犠牲にも程がある行為を度重ねてきたのだから。

それらは当たり前前といえば当たり前だが、敗戦直後や20世紀半ばごろならまだ分かるが、2020年代の今の世の中になってもそれは続いているのだから、異国からみればお人好し過ぎるのだろう。

実際、日本人も気づいていないのだ。

度が過ぎたお人好しに漬け込んで、この国を転覆させようとする異邦人まで受け入れてしまったのだから。

この政治問題は今後改善すべきだろう。

——しかし今は、

「ええ、ですから特自が解析中のG元素のデータを貴国に開示します。」

地下潜行物体に関連しているであろうベッセルング計画の詳細なデータを得るべく、交渉のカードを切る必要があった。

——G元素のデータという、日本とモナーク日本支部独占している情報、すなわち切り札を。

「…いいの？それ。私やアメリカとしては嬉しいけれど——」

「許可は光より受けています。」

——その言葉で、スコールは理解した。

「ああ、片桐一佐は私やアメリカがその情報に引つかかるのを知っていたのね。」

「はい。——いづれ、対G殲滅用に必要となる存在：当然アメリカは欲しがるはずです。ベッセルング計画にもG絡みの情報はあったでしょうけれど不完全。世界の警察として覇権を誇示したいアメリカとしては喉から手が出るほど欲しいハズ——光はそう読んでいました。」

舞弥がそう言うときスコールもそれを予見していたかのように、A4サイズの封筒を舞弥に手渡す。

「私もラングレー（CIA本部）からG元素に関する情報収集の通達が下っていた所だったの。——下手に調べ回して米日両国の関係悪化に繋がる事態にならなくて良かったわ。」

「私もそうなる事態は避けたいですし、お上はもっと避けたいでしょう。…まあバレても逮捕には繋がらないでしょう。——

——日本には、「スパイ防止法」が無いのですから。」

——スパイ防止法。

言葉通り、他国の諜報活動による情報漏洩を阻止するための法律だ。

海外では当たり前だが東西両陣営の最前線たる日本にそれが無い。例えるなら、コンピュータウイルス対策を施していないパソコンと同じ状態だ。

——いつ情報が筒抜けになってもおかしくない状態。

こうなったのは、やはり日本人特有の「平和ボケ」という病気だろう。

——閑話休題。

ひとまず情報は得たのだ。あとはG元素のデータを大使館経由でアメリカに送るなりする必要があるが、それは情報庁——更識楯無率いる暗部の仕事だ。

自分はこの場で退散する。

「ではそろそろ失礼します。」

舞弥はそう言ってベンチを立ち、その場から去ろうとして——

「もうひとつ、特別に情報を教えてあげる。」

——スコールの放った言葉が鼓膜を刺激し、舞弥の足を止めさせた。

「貴女、デンマーク王国領スヴロイ島って知ってる?」

「——いいえ。」

聞き慣れない名前に舞弥は訝しげな顔をしながら応える。

「——イギリス北部スコットランドとノルウェー西海岸、アイスランドに挟まれた北大西洋に浮かぶフィロー諸島っていう諸島の一番南に位置する島——それがスヴロイ島よ。」

「——それが何か？」

「非公式ではあるけれど、スヴロイ島の町であるファンジンスベガーの56世帯全員が昨夜消失したそうよ。」

スコールのその声に舞弥はふと、脳裏に仮定が浮かぶ。

「しかも、逃げようとする車の無線からはこんな通信があったそうよ——」

そんな舞弥の様子を愉しむかのようにスコールは口から声を放った。

「『鳥だ——!!?』——と。」

その言葉で、舞弥は核心に至った。

「——まさか」

「ええ、そのまさかよ……ウクライナの怪鳥か、この間ニューヨークを蹂躪したラドンと同種の生物と思しき存在がスヴロイ島にいるわ。——」

——ラングレー（CIA本部）もモナーク北米本部と共に調査を開始したそうよ。……何もないと良いけれど。」

スコールは憂うように呟く。

しかし舞弥は内心スコールの言葉を——何もないと良い、という言葉を否定した。

そこまで要因が揃い、ウクライナの怪鳥かラドンと同種の生物の可能性がある以上、何も無いわけがない。

——生物は時として自然災害が人智を超えた姿形となって人に牙を剥くのと同じように、想定外の事態を引き起こすのだから。

「それともうひとつ、孫の手島沖合で我が軍の原子力潜水艦【シードラ

「ゴン」が消息を絶ったわ。」

「……?」

そしてもうひとつの報告に、舞弥は思考が凍結してしまった。原子力潜水艦が消息を断つことは事故ということもありえる。

しかし、あの海域は事故に繋がるような要因は無いのだ。

つまり、

「DOE（米国エネルギー省）が興味を示し、貴女達特自がもっとも恐れている存在が日本に来る可能性が極めて高いわ————早ければ明日明後日には浦賀水道に出現する可能性がある。」

——すなわちそれは、「ゴジラ」の出現を決定付ける話だった。

——カチリ。

また秒針は進む。

秒針は時計の5を刻む。

破滅まで残りあと半分と少し。

秒針は無情に進む。

破滅の世界へ。

巨獣の世界へ。

世界が終わるまで——人間の支配していた世界が終わるまで、あと半年足らず。

EP—31 幕間の群像（後）

情報庁第2棟庁舎

心地良い畳の匂いが充満し、外の世界とは耐爆ガラスと壁紙や断熱材を施された特殊コンクリートの壁と天井で遮られた10畳程の1人部屋にしてはそこそこの広さの空間。

それが暗部の用意した一室だった。

——そこで無機質なテーブルに座して対面する2人の少女がいた。

「——それで、最近はどう？」

につこりと優しそうに、けれど少し意地悪そうな、悪巧みをしている子供のような笑みを浮かべながら、更識楯無は対面する少女——

——シャルロット・デュノアに問う。

「……どうも（こうも）……」

若干、というかかなり不満そうな顔をして声を返す。

「…確かにコンクリート造の牢獄よりはるかに有難いですけども、毎日この空間に缶詰にされると……」

いや、自分の立場は分かっていますしそんな贅沢が言える状況にないのは理解してますけど……」

そう抗議するようにシャルは言う。

もちろん、シャルとて先の言葉通り自分の立場を理解していない訳ではない。

ただ単純に、 “ こうも閉じ込められていると気が滅入って無気力になってしまふ ” という当たり前の言葉をしたままで。

「ん、そう？…娯楽の類は一通り集めたんだけど……」

そう言って楯無はチラリと部屋の片隅に視線を向ける。

テレビ、パソコン、小説に漫画などの書籍、身体を動かすためのトレーニング機材—— 必要最低限の娯楽用品は揃っている。

ふと、そこで楯無は思い付いたようにポンツと手打ちをして、

「——生理用品とか、えっちな玩具持つてくるの忘れてたわね。」

その一言で、先程までの重かった雰囲気が消し飛んだ。
否、楯無によって消し飛ばされた。

「どうしてそっち方面の話題に持って行くんですか☒」

茶目っ気全開の楯無が放った言葉に慌てながら、青リトマス紙が変色するように羞恥心で真っ赤に染まった顔をして、全力でツツコミを入れるシヤル。

「えーだってフランスの人って、えっちいコトが大好きって聞いたわよ?」

「そんなわけないでしょ!!? そりゃフランス人は確かにそういう類が好きなのはいますけど全員がそうじゃありません!!? ていうかイギリスの方が愛では変態です!!? 風評被害になるような事言わないでください!!?」

——— 実のところ、『戦争と愛では変態』と言われるイギリスと比べてフランスはそう大差はなく、 “ どっちもどっち ” なのだが、今までの人生でそういうことに関わった事の無いシヤルはその現実を知らず、生真面目に抗議する。

それがおかしくて。

意地悪そうに、ふざけたように、それでいて何処か母性を醸し出す雰囲気纏って言う暗部の長である楯無に、フランス人に対する風評被害に対してつい脊髄反射で怒ってしまう元フランス人のシヤル。

その景色は今の混迷する世界情勢の中に咲いたオアシスと形容しても間違いは無いほどに微笑ましいモノだった。

「なんで笑ってるんですか☒ いいですか! フランス人はそんなことありませんから! 少なくとも僕の周りの人はそんなことありませんでしたから!!? 恋と戦争で手段を選ばないのはイギリスだけですツ!!

?

?????????????

同時刻・IS学園第2シャフト内部。

「…ぺつくちゅ!!?」

イギリス代表候補生のセシリアが可愛らしくくしゃみをしていた。

「どうしたのセシリア、風邪?」

それを心配そうに簪が尋ねる。

「う〜…誰かが噂してるみたいですよ…」

??????????????

情報庁第2棟庁舎

シャルを散々弄り倒した後、はしやぎ過ぎて乱れた呼吸を楯無は整えて、

「…で、要するに外の空気が吸いたいんでしょ?」

やはり茶目っ気に満ちた顔でシャルの本心を見透かしたように言い放つ。

それに対して、シャルは無言。ただ首を縦に振る。

——あれだけフランス人に対する風評被害がどうの〜とはしやいだにもかかわらず、シャルの楯無に対する警戒心は完全には薄れていないらしい。

まあ、それも当然と言えば当然である。

はしやいだのは主に楯無だけであり、シャルは楯無の言葉に随時動揺し、楯無の言葉に脊髄反射で反応しただけ。

さらに言えば暗部の長という立場の人間に対して緊張感を持つてしまっていた。

普通ならば逆に緊張感を持たない方が一般人としておかしい——の、だが……暗部の一族という一般家庭とは懸け離れた家庭で育った楯無には多少の一般常識はあろうとも、残念ながら一般人としての感性はほとんど存在していないためにシャルの持っている妙な緊張感を理解出来ていなかった。

「別に、ただの先輩後輩の仲なんだからもつと軽く接してくれて良いのよっ。」

楯無としては面倒見の良い先輩、全校生徒の模範となるべき生徒会長としてのつもりで微笑みながら口を開く。

一方、やはりシャルは沈黙。

シャルからしてみれば、いやシャルと同じ立場に置かれた一般人からしてみれば、自分の生命与奪権やその類の権利を持っているだろう人物からそう言われても逆効果である。

浮かぶのは親近感などではなくむしろ警戒心ばかり。

——それに楯無が気付いたのはシャルの沈黙から5分が経過してからだった。

最近是一般人の感覚を掴むよう従者である虚に手伝ってもらって訓練しているものの、やはりその辺には鈍感である。

「んーまあ…」

何を話すべきか、髪をクルクルと指に巻いては離す仕草をしながら思案して、

「とりあえず、私は貴女を殺したり刑務所行きにするつもりは無いわ。貴女が思ってるような権利なんて私には無いし————ていうか、たかが一公務員にそんな権限があったら日本は今頃何処ぞの独裁国家みたいな暗黒卿ディストピアになってるもの。」

あはは————と悪戯つぽく楯無は笑うが、シャルは固まったまま。

完全に緊張緩和せしめるには至っていないかった。

「————話が逸れたわね：外出だけど、行きたい時には私に言っ。私の監視ありならOKだから。」

シャルはやはり沈黙。

「————ていうか行きましようー！」

「ふええ」

楯無は楽しそうに、張り切りながら言う。

それに対してシャルは思わず変な声を出してしまう。

「い、いや、なんで…」

「館山市にまたいいトコ出来たから行きかけたのよ。明日には学園に戻るし、暇つぶしにちょうど良いから行きましよう♪」

“ いや、僕は全然関係ないですよね☒ ”
思わずシャルはそう言いたくなるが、楯無の黒い笑みを見てその言葉を飲み込んだ。

「先・輩・命・令♡」

“ 返事はいいかYESか了解で——肯定以外は是としない ” という無言の威圧を孕んだ笑顔で、そう言う。

そしてその命令に、デュノア社のスパイである事が目の前の楯無にバレた結果、楯無の推薦する条件を呑んで日本に亡命。それにあたってフランス国籍を破棄し、フランス代表候補生という後ろ盾を無くしたうえにまだ仮国籍のシャルはそれに従わざるを得なくて——

「…はあ、分かりましたよ。もう…」

観念して、渋々カバンに財布やケータイを入れながらうなだれる。
もうシャルの人権なんてなんのその。

否、スパイという犯罪者の身であるにも関わらずここまでして貰っているのはありがたい…のだが。

（正直、無理矢理私情に他人を巻き込むのはどうかと思う。…いや、一夏の専用機のデータを盗もうとした僕が思うのもなんだけど。）

そう思い、やはり項垂れる。

…というか楯無は先輩命令と言ったが、シャルは既にIS学園の生徒では無いため厳密には先の発言は間違っている。

しかしそれを口にしても楯無は絶対聴いてくれない。

それはシャル自身がこの半月の間に送った軟禁生活ですでに体験している。

——だから、諦めた。

「じゃあ、先に待ってるわね。」

そう言うのと、楯無はシャルの部屋から出ていった。

——それを見送ると、

「はあ…」

シャルはため息をつきながら、

(なんか父さんとは別の意味で大変な人に捕まっちゃった…)

ただ一人、項垂れるのであった。

芝生が張り巡らされ、浦賀水道からの海風が心地よい中庭。
S 学園中庭

歩けるようにはなつたために、リハビリがてら散歩に来ている鏡ナギと、それに付き合う鷹月静音がそこにいた。

「ホントに良かったの？タッグトーナメント行かなくて？」

ナギが歩きながら心配そうな声音で問う。

彼女が心配するのも当たり前だ。

タッグトーナメントは学校行事である以前に成績や進級に響くほど重要なコトなのだ。

「いいのよ、どうせ私出場出来ないし。」

にべもなく、さも当然というように鷹月はナギに答える。

それにナギは思わず驚く。

「…なんか生徒分の訓練機が足りないとかそんな理由でさ、私は参加できなくなっちゃって。」

——その言葉に、ナギの足が止まる。

「そんな、見え透いた嘘…」

鷹月の説明を聴いて、ナギは絶句する。

訓練機はイベントの際、基本的に生徒がローテーション方式で使うのだ。

仮にナギの説明したことが事実なら他にも数人参加できない人間がいることになる。

——けれど、そんな情報聴いたことが無い。

確か4人ほど辞退した生徒はいたが、それだけでは説明がつかない。

何せ学園でイベントに参加する生徒に支給される稼働状態にある

ISは16機。

1年生が4クラス160人。

2年生と3年生が2クラス80人。

それでも合計320人もいる。

それらの人間が割り当てられたISをローテーションで扱う。

そして1機あたり使用する人数は20人。

訓練機が1機欠けるだけでそれだけの人間が成績に関わるほどの支障を生み出す。

だがしかし、ここで矛盾が生まれる。

機体が足りないということに関する矛盾だ。

生徒の320名の中には専用機持ちが何人かいる。

事情はあるが辞退したのは鷹月を除けばナギを含む3名だけなのだ。

機体のローテーション運用に支障はない。むしろ人数が減る分円滑な運用ができる。

仮に1機足りなくなつても予備機を回してもらえば良いし、1機足りない状態になるということで学園の管理体制の責任問題になるため学園だつてそんな間抜けな事はしない。

万一そんな事があれば1機をローテーション運用する20人が参加できなくなり、成績や進級に関わる問題となる。

だが、そもそも10人以上の未参加者が居ない。

ではなぜ鷹月は――

「まさか…」

――それらの情報から、ナギは結論に至る。

「多分ね。誰かがあたしに参加出来ないように手を回したんじゃない？」

ナギの結論を肯定するように口を開いて、さりと告げる。

「学園の教師とか生徒つて女尊男卑主義者多いし、女権団体の娘とか、そこと癒着してる奴とかいるだろうし――そんな奴からしたら、男子と絡んでるあたしが『女の恥さらし』――とやらに見えるんだらうから、親のコネなんか使ったんじゃない？」

——理解に苦しむ思考だけど、と付け足して鷹月は言う。
「ちよ…千尋と絡んでるからって…：そ、そんなこと言ったら織斑くんだって——」

ナギが思わず声に出して言う。

鷹月が今言った推測が仮に正しかつたとしても、『男と絡んでるから』という理由だけなら千尋と絡んでる鷹月だけでなく、人類最初の男性IS操縦者の織斑と絡んでる人間も対象にならなければおかしい。

「——んじゃナギに聴くけど、織斑くんと絡んでる女の子って学園に何人いる？」

「そりゃ——…あ」

鷹月に何気無く聞かれた問いに応えようとして——彼女が何を言わんとしているかをナギ察した。

「そう、学園のほとんどの女子が織斑くんと絡んでる。…それほどまでの女子を男と絡んでるからって理由であたしと同じ目に合わせたら学園中を敵に回しちゃう。」

そうならいくら女尊男卑主義者とはいえ学園内で生きて行くことは難しいわ。」

教師然とした態度で鷹月は言う。

そして、付け足すように口を開いて言葉を紡ぐ。

「それに織斑くんは世界最強、ブリュンヒルデと唄われる織斑先生の弟だし、専用機持ちとも交流がある。」

手を出せば女性が敬愛する織斑先生や専用機持ちの帰属先国家に喧嘩を売って、自分が狩られる側になっちゃう。そしたら学園どころか世間的に生きづらくなるわ。」

鷹月は言う。

最強無敵の盾に護られた織斑。

凡庸普遍の中にいる千尋。

それを耳にしたナギは『ああ、なるほど』と合点がいった。

いや、ナギとしてはいききたいなんてこれっぽっちもないのだが納得はいった。

——要するに、織斑は多くの女子が絡み、尚且つ専用機持ちと女性の多くの憧れである世界最強たる織斑先生の弟というこれ以上ないくらい最強の攻性防壁を持つている。

そんな人間やそれに絡む女子達にちよっかいを出せばわが身を滅ぼすのは分かりきった話だ。

故に、あくまで特務自衛隊の保護下にあり、女子の大半がヘイトの対象としている千尋と絡む女子の方がやり易いし、むしろ周りの女子からも英雄扱いされる。

——ならば、どちらに絡む人間に手を出すべきか、おそろく猿でも分かるだろう。

「なるほどね…女尊男卑主義者も片っ端からではなく、ちゃんと相手を選んでるのね…。」

「ええ。案外あの連中も理性的なんだなって、あたし自身も関心させられるわ。」

——まあ、分かりたくなんてこれっぽっちも思わないし理解したくも無いけれど。

ナギの言葉に応えながら、鷹月はそう付け足す。

「……話変わるけどさ、ナギは脚のリハビリ終わったらどっか行きたいところある？」

——鷹月は重くなりつつあったムードを変えようと声をかける。

「え？あ、うーん……この間館山にオープンした館山ブロードパークかな…。」

“ 館山ブロードパーク ” とは、館山湾（鏡ヶ浦）北条海岸・北条海水浴場に隣接して最近作られたアミューズメントパークだ。

どんな感じのモノかと言うと、遊園地、水族館、美術館、公園、デパート、温室プール等なんでもござれ——という感じの複合商業娯楽施設である。

関東最南端の巨大遊園地としても知られており、同じく館山市にある巨大ショッピングモールである “ レゾナンス ” と熾烈な客寄せ競争を繰り広げると予想されている。

また、IS学園から千葉モノレール南房総線のモノレールでIS学園の最寄駅である夢見島学園前駅から2駅跨いで直にアクセスできる事から、IS学園の大半の生徒が行きたがっている場所でもある。「え、あそこ?…まあ、良いかもね。確か南関東最大の観覧車にジェットコースターとかあるし。」

若干面倒臭そうに、けれども満更でもないような声音で応じる。

人混みの中で長時間待たされる場所は苦手だが、たまにはいいか——と、鷹月は内心呟いた。

——同時刻、その館山ブロードパークには、とある二人組がちょうど入園していた。

同時刻・館山市

館山市は千葉県内で千葉、幕張に次ぐ都市である。

もとは農業ばかりの田舎であったのだが、沖合にIS学園ができ、千葉県や日本政府によるモノレールなどの交通インフラの整備やIS関連企業の進出によって、農場の広がる田舎町から伝統と古きを残しながらもわずか10年で巨大都市へと成長していた。

——タッグトーナメントが行われている6月上旬。

館山市の街並みは館山市の住民と、遠方からの観光客で満ち溢れていた。

日本最大のショッピングモール『レゾナンス』や建設中の館山舞台芸術・コンサートホール『新浜劇場』、そして『館山ブロードパーク』などの観光地目当てでやって来ている人々がほとんどだろう。

楯無とシャルも人混みで混雑する表通りを歩きながら、館山ブロードパークを目指していた。

「ふーん、あれが建設中のコンサートホール？やっぱり大きいわね。」
楯無がそういいながら、建設中の新浜劇場を見ながら呟く。

「ふむふむ…なにに？来年8月に完成予定…お盆には豪華アーティストらによるライブ…って、イヴ・マリーンズが入ってない☒やった！これ日本初公演よデユノアさん!!」

なんて、はしやぎながらガッツポーズが取って、言う。

シャルも最近知ったが楯無は日々のフラストレーションを発散するためにロックを聴いてはっちやけたりするのだ。

中学校時代の同級生にロックバンドのコンサートに連れて行ってもらって、日々の疲れを忘れるくらいはしゃいだのが始まりなんだとか。

だからそのイヴ・マリーンズというのも楯無的には注目株のロックバンドだったらしい。

しかしシャルにはそんなものは分からないし、そもそも興味の範囲外である。そしてそれよりも気になるものを見つけて、

「…それよりオープニングのポーランド楽団ワルシャワフィルハーモニーの方が驚きですよ。」

ポーランドのワルシャワフィルハーモニーやドイツのベルリンフィルハーモニーは旧共産圏であったからかして、西欧諸国にはない音楽を奏でることで知られており、欧州の中でもかなり人気の楽団だった。

もちろん、演奏させるにしても、とてつもなく高い金がかかる。

言ってみれば欧州音楽界の宝石である。

——ふと、下の主催者欄を見て、

「…またあの人かあ…本当、懲りない人…」

呆れ顔でゲンナリとしながら呟く。

「あ。」

主催者の欄にはシャルの帰属先だったデユノア社の姉妹企業の名前。

確かこの企業はフランスに “ 某・夢の国 ” を建てようとして多額の投資をしたが、建設を請け負った企業の事故により計画は頓

挫。

日本円にして9800億7000万円の損失を負ったのだ。

これで倒産しないあたり、さすがデユノア社の姉妹企業と褒めるべきか……。

しかし盛大に爆死しながら、また多額の投資をする辺り、懲りていないらしい。

それを察した楯無は、

「さ、さく次行こっかあ。」

シャルの手を握っていいいと脚を進めた。

「それにしても、昨日デユノア社がフランス政府によって国営化されたニュースを見たときは驚いたわねー……」

場の雰囲気を変えようと、楯無は露骨過ぎる主題の変更に移る。

「国営化した上で、戦術機ラファールやオラージュ制空戦闘機を手がけたダツソー社の下に置かれましたけどね……。でも、妥当な処置だとは思いません。」

シャルもその主題に乗ったように口を開く。

「そうね……ニュースでは報道されてないけど、トルコ経由の情報ソースによれば、ウクライナもそろそろマズいみたい。ウクライナ政府は首都や生産拠点等をギリシャ領クレタ島ヘラクリオンに租借地を借りて、そこに移転するみたいだから……」

——実のところ、ギリシャ領クレタ島の租借地に移れるのは臨時首都オデッサやその近郊にいた国民だけであり、ウクライナ北西の内陸部に住む国民はルーマニアやポーランドに殺到しており、国民が散り散りに四散しており、クレタ租借地に辿り着けず難民となつてしまっている……という事実もあるが主題からは逸れるため楯無はその事を呑み込んだ。

「はい。……そうなれば東欧から西欧に難民や労働者が流れ込んでくるし、欧州全体の軍事力低下は必至です。だから……」

シャルはそれに續けて、口を開く。

「……欧州有数のISメーカーであるデユノア社を解体せず、将来的にダツソー社と合併させる事で欧州連合の軍事産業の主要生産ライ

ンを確立させる……多分、それが目的なんだと思います。今後さらに不安定化する欧州情勢を考えて……」

「……いえ、それだけじゃないわね。」

しかし、シャルの考えに対して楯無は否と鋭く言う。

——理由は単純だ。

シャルのその考えは確かに “ 半分ほど ” 的を射ている。

だが “ 半分 ” だ。

何故なら欧州連合だけのための主要生産ラインならば、ドイツのジーマンス・クラウスドルフ社にアウディ・ポルシェ社、イギリスのローラーズ・ルイス社、欧州連合直下のユーロ・ファイター社など、複数の軍需産業関連のメーカーが存在する。

そして伊達に産業革命をいち早く迎えた地域というわけではなく、それらの企業は単体であつてもかなりの経済力と生産力を誇る。

——そんな状況下でデユノア社が将来的にダツソー社と合併しても生産量が過剰化するだけである。

普通なら IS という “ 世界最強の兵器 ” がある時点でそんなもの必要ない。

——普通なら。

だが、今は普通ではない。

“ 世界最強の兵器 ” IS では火力不足である対巨大不明生物の戦いにおいても旧時代の兵器、とほくそ笑われていた戦車や駆逐艦、空母が必要とされる時代だ。

しかしそんな中でもデユノア社をダツソー社が合併して敷かれるであろう生産ラインは過剰なのだ。

——ふと、そんな時、楯無の脳裏に先日イスラエルがアメリカ経由で開示した情報がよぎる。

それが正しければ、おそらく北アフリカにも巨大不明生物が侵攻する。

——つまり、

「多分アフリカの先進国家にも自力防衛させるための輸出用でしょうね……2015年にミストラル級強襲揚陸艦を2隻も買ってくれたり

したフランスのお得意様であるエジプトはアフリカ大陸最前線にして地中海からインド洋に抜ける為のスエズ運河があるわ。

エジプトが堕ちればスエズ運河は通行不能になり欧州連合にとつてかなりの痛手になる…ううん、それだけじゃない。

スエズ運河を突破されたらアフリカへの侵攻を許したも同然…そうなれば欧州連合は東欧と北アフリカから挟撃されることになる――
――いくら列強諸国の集まりである欧州連合でも、最悪イギリスやアイスランド、グリーンランドを残して全滅は必至ね…ああ――

淡々と、数学式を計算するように楯無は告げる。

だが途中で、露骨に変えた話題が返って場を暗くしている事に気づくと、

「さ、さあ〜て暗い話はこの辺にしといて…館山ブロードパークはすぐそこだから早く行こう！シャルロットさん!!？」

「あ、ちよつと…」

またもや強引に話題を変えてシャルの手を握りながら館山ブロードパーク方面へと駆けて行つた。

――

館山ブロードパーク

――しかし、思わぬ形で悲劇は訪れる。

チケットを購入して入園し、楯無の目当てであつた南関東最大のジェットコースターであり、館山ブロードパークの目玉アトラクションであるドラゴンライダーに乘ろうと入り口に向かつた時である。

『本日、ジェットコースター・ドラゴンライダーはレールの不具合により運転を見合わせております。』

電子掲示板に、無情の宣告が映し出されていた。

「…は？」

楯無はその結果に目を剥く。

それは、楯無が一番楽しみにしていたアトラクションであった。

——そして、数分後。

「…いい加減、気を取り直して下さいよ。先輩。」

「ううう…貴女に今の私の気持ち分かるもんですか…。」

楯無はショックのあまりベンチに体育座りしながら項垂れてしまい、シャルがそれをどうにかしようとなだめていた。

——シャルには何故ここまで楯無が落ち込んでいるのか理解しかねていた。

普段からIS学園の生徒会長としての職務と情報庁職員としての報告書提出や尋問、書類整理などといった雑務を『暗部の長だから』という理由で押し付けられている仕事の山。

更識家に生まれた為に暗部からの道からは逃れられないストレス。上に立つ者は従える者の士気低下を招かぬように常に毅然と振舞わせねばならないという更識家の教え。

——それらにより、楯無は同年代の女子と比べれば満足に休息さえ取れないのだ。

そんな中で得た数少ない僅かな安息。

今日はここ館山ブロードパークのジェットコースターではしやぎながら休日フリーデーを満喫するハズだったのだ。

だというのに、その肝心なジェットコースターが運転中止。

彼女にとつてはあんまりな仕打ちだった。

「ジェットコースターの無い遊園地なんて遊園地じゃないわ…そんなの牛肉の乗ってない牛丼と一緒によ…」

「…買い物いきましょ、買い物。ボクが荷物持ちますから。」

…なんて、ダメな姉…酷く落ち込んで項垂れている楯無を宥める出来た妹もとい白ウサギにさえ見えるシャルが焦りながら気を遣って慰めようとしている構図を形作っていた。

——そのやり取りは約10分間続いたそうなの…。

「あ????????????」
S 学園・廊下

「はあ……」

溜息を吐く。

——篠ノ之千尋は今現在、酷く面倒臭い状況下にあった。

「ちよつと聴いてんのあんた?」

「なに私達の織斑君を負かしちゃってんの☒」

「あんたみたいなクズ男が地面這いつくばって惨敗すれば良かったのよ!!?」

——理由はこの通り、織斑親衛隊という3人の女子集団に絡まれている事だ。

「なんか言いなさいよ!!?」

「……………発端から結論までお前らが勝手に全部言ってるのに何を言えっというんだ?」

千尋は冷めたようにうんざりして言う。

確かに千尋の言う通り発端は女子集団の方からであり、発端は何故織斑に勝ったか、そして自分達の好きな織斑を負かした事が許せない、最終的にお前が負ければ良かった——と勝手に……………この言葉を用いるのは正しくないかもしれないが、起承転結の結まで勝手に女子達が言っているのだ。

その上で千尋に何か言え——おそらく、彼女らからしたら謝罪などを期待していたのだろう。

女尊男卑主義者の彼女らからしたら下賤でクズの男がヘコヘコと頭を下げるのは当たり前だったから。

「つ……うるっさいわよ!!?下等な男のクセに——!!?」
千尋の対応が癪に触ったのか、そういつて女子集団のひとりが、拳を千尋に穿つ。

——遅い。

けれど拳を打ち出す速さは千尋からすれば酷く遅い。
だからその手を掴んで畳み掛けることだって出来た。

——けれど、

「ぐっ……！」

喰らった。

口の中が裂けたらしく、鉄の味が広がる。

何故喰らったか——理由は単純。

箒と光に『何があっても手を出すな』と言われていた事と、武装したテロリストでも無い限り千尋に他人を拘束する権限など無いからである。

——だから、千尋からしたら癩ではあるが耐え忍ぶ事にした。

「はっ——しよせん口先だけねえ!!?」

それで女子は更に調子に乗ってISラファール・リヴァイヴを部分展開して千尋を壁に抑えて、殴りかかろうとして——

「あ、ち、ちよつとストップ!!?」

何故か隣の女子がそれを制す。

「なんで止めんのか!!?」

怒浸透状態で、正気を失い暴走寸前の女子が噛み付くように叫ぶ。

「ほ、ほら……アレ……。」

天井を指さす。

——そこには、格納型監視カメラ。

「ツ……だからなんだってのよ！下劣な男なんか誰も助けないわよ!!?」

「ちよつ、それだけじゃないって！コイツをやる為にISをパクったのがバレるじゃん!!?」

——ISを私的理由で無断展開してはならない。

もし違反した場合IS犯罪対策刑法に則り懲役15年と禁錮8000万円の罰金となる。

それはIS基礎という授業で習った禁止事項だ。

さらに言うなら、学校の備品を勝手に盗ってきているあたり、それは窃盗と変わらないから一般刑法の窃盗罪も適用される。

「バレるって誰によ☒それにね、男の1人や2人死んだって誰も悲し

まないわよ!!?」

しかし、女子は頭に血が上っているらしく、そんな事にも頭が回らなかった。

だから、

「ほう、私の前で堂々と法に触れるようなマネをすることはいい度胸だな。」

学園の生徒取り締まり役兼臨時学園理事長代理教員——
織斑千冬の接近に気付かなかった。

「ひっ——」

女子の1人が声を漏らす——だが、既に遅く、2人は3秒にも満たない内に千冬によって無力化されてしまう。

「くそっ!!?」

そしてISを部分展開していた女子はラファール・リヴァイヴを完全展開すると、窓を突き破り、逃走した。

「無事か篠ノ之?」

「ええ、まあ…訓練で殴られ慣れてますから平気です。」

実際、千尋は特に損傷は無いので素直に千尋に言う。

それに千冬は神妙な顔を浮かべる。

「そうか。だが保健室には行っておけ…すまないが私はあいつを追わねばならないからもう行く。」

そう言って、千冬も階段を駆け下りて言った。

「ふう…」

千尋は少し溜息を吐いて、

「もういいぞ、出てきたらどうだ?」

廊下の角に向けて、声を放つ。

「——気付いていたのか。」

千尋の声に反応し、廊下の角から出て来たのは——白銀の髪をたなびかせながらも冷水のような雰囲気醸し出している、ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデビツヒ。

「——あなたはどんな要件?大したもんじゃ無いなら、もう行くけど。」

酷くうんざりした顔で言う。

それが失礼だと分かっているても、女尊男卑の巣窟にいたらこうもなってしまう。

「……では2つ程言わせてもらおう。」

まずは……よくも私の獲物（織斑一夏）を横取りしてくれたな。」
純然たる忿怒に満ちた声でラウラは言い放つ。

「アレは私が仕留めねばならなかったのだ。」

—— 貴様に横取りされたと思うと腹がたつ。」

「そんな事を俺に言われても困る。それなら、『私は織斑とどうしても戦いたいから当たらせて下さい』って教員に頼んだら良かっただろ？」

「—— フン、生憎私は私の部下以外他人は信用していないのでな。」

（……よし、あんたは訓練兵からやり直せ。）

千尋は思わず内心呟く。

資料で読んだ冷戦時代の東ドイツならまだしも今の御時世でその思考は兵士として大問題であった。

—— 最も、ラウラの境遇からすれば、そんな思考に至ってしまうのは止むを得ないのだが。

「だが貴様には、感謝もしている。織斑一夏がああ程度の人間だったと理解出来たからな……溜まった鬱憤は明日晴らす……貴様は、私が倒させてもらう。」

フン、と言いながらそうして踵を返し、ラウラは去っていった。

「……はあ。」

それに千尋は溜息を漏らす。

—— 女尊男卑が支配する無法地帯。

—— 女尊男卑に身を任せて無茶をやらかす輩。

—— 常識の通用しない相手。

それらを短時間のうちに相手取れば溜息のひとつも吐きたくなる。
いや、常人なら過労で倒れてしまうかもしれない。

「……………」

口から垂れていた血を、右手で拭う。

——もう出血は止まったらしい。

「…悪いな、乱暴に扱って。」

——誰に言うわけでもなく、口を開く。

その言葉は自分自身。正確には、自分自身の肉体の本来の持ち主であつたものに対して。

——この身体は借り物だ。

いつか脳裏に苔のようにこべりついていた感情が思考を支配する。

…この身体の本来の持ち主はもうこの世には居ない。

この身体に宿っているはずだった人格はもう死んで、消えて無くなってしまった。

代わりにカラになった身体に G細胞 異物が流れ込んで、取り込んだだけ。

——篠ノ之千尋という人格は、その後細胞が同化した身体
の脳で自然発生した後付けの不純物だ。

「…身体こゝにいて…いいのかな…俺。」

ポツリと漏らす。

——この身体は死在るべき場所へんだ者の元へ還さなくてはならないの
ではないか。

「…ツ！」

——ぎゆう、と心臓を締め付ける幻痛。

「…はあ……」

それを和らげる為に溜息を吐く。

「何考えてんだ、俺…。」

頭を抱えながら、独りごちる。

考えたところで答えは出ない。

そして、今は箒の側についてやれと言われている。

——勝手に自己中心的な言い訳。

けれど、今はこんな不毛な自問自答を繰り返しても意味がない。

「…とりあえず、寝るか…明日も試合あるし…」
そう呟く。

ボーデビツヒに明日は打ち負かすと宣告さえされているのだ。

——明日を十分な状態で迎えられるようにする判断を千尋は下した。

…これは問題の先送りであり、いずれ降り掛かる自己への課題がさらに積載されることに何も対処出来ない、低脳で幼稚な自分に嫌悪感を抱きながら、自室へと向かって行つた。

「いや、その前に。」

ふと、足を止め、歩む先を変更した。

「?????????」
時刻・学園地下非常用排水エリア

湿気と僅かに流れる水の臭いが染み付いたコンクリートが支配する狭苦しく暗い——何処か異界に通じているのではないかという錯覚さえ覚えさせられる空間。

「はあっ、はあっ……」

先程千尋を殴つた女子生徒はラファール・リヴァイヴで逃走を凶つた後、同機にGPSが取り付けられている事を知りISを放棄。

現在は人が減多に出入りせず、監視カメラの類も置かれていない非常用排水エリアを駆けていた。

「はあ、はあ……ここまで来たら……大丈夫ね……」

息絶え絶えでありながらも、嗤いながら呟く。

「……ふ、ふふ……見てなさいよ……あたしの母さんはIS委員会の幹部なんだから……すぐにこんな汚点、消してやるわ。」

勝ち誇つたように呟く。

——ふと、女子生徒の鼻腔を潮の臭いが刺激する。

この非常用排水エリアは学園内の排水用の水道がなんらかの問題によって使用不能に陥つた際に学園内の全水道から水を直接海に流すことで排水を行う設備だった。

もっとも今は濾過設備を追加する予定らしいが予算が降りない為に放置されていた。

「……あ、そうか。……こじや電波通じないのよね……。」

携帯を開いて圏外となっている事に気付く。

——それと同時に、

視線の先に、波打ち際を見た。

——否、それは有り得ない事だった。

元より水を排水するトンネルがなんの前触れもなく途中でそのまま海に通じていることなど構造的に有り得ない。

つまり、これは、

「……浸水？」

女子生徒は震える唇で呟く。

どうして、と口にしようにとした

——瞬間、ぼしやり、と音を立てながら波打ち際からナニカが湿ったコンクリートに這い上がった。

それは、

『キュイイイイ……』

グロテスクな姿へと変貌した1メートルもの、巨大フナムシだった。

「——ひっ☒」

思わず女子生徒は反射的に後ずさる。

本能が、アレは危険だと警鐘を鳴らす。

——まるで出来の悪いB級パニック映画みたいだ、と視界の情報を現実と認識出来ない脳の思考が顔に反映され女子生徒は不覚にも諛う（へつらう）。

けれど、すぐにその思考も恐怖に汚染される。

——B級パニック映画なら次に待ち受ける光景は、眼前に現れた怪物に殺されるという犠牲者役のお約束とも言えるシーン。

故に、彼女は来た道を駆け出した。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……!!？」

無人の排水トンネル。

光の届かない闇の洞穴。

暗い物陰から感じる寒気。

そういったカタチのない不安と、後ろからジリジリと鈍間だが確實

に迫り来る巨大フナムシというカタチのある恐怖が彼女の神経を削っていく。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ——」

振り返る。ついて来ているのはやはり鈍間な巨大フナムシが1匹。

——しかし慢心するな、今すぐここから離れる。

そう、脳が警鐘を鳴らす。

単なる思い過ごしで、アレは実際無害かも知れないという考えは、先程からあったのだ。

けれども、本能は警鐘を鳴らす。

——心臓の高鳴りが加速する。

イヤな気配だけが強くなる。

……これはそう、子供のころに夜中に目を覚まして動けなくなった時に似ていた。

部屋の隅に誰かが蹲っている気がしてトイレに行けず、朝が来るまで眠ったふりをしていた、世界そのものから拒絶されているような感覚に。

——それが、混乱を誘発させる。

「あ、あれ……？」

来た道を思い出せないのだ。

脳が混乱し、正常な思考と記憶の再生が出来ないでいる。

まるで故障したビデオデッキのように。

——ふと、振り返る。

視界には後をつけて来る鈍間な巨大フナムシ。

けれども、少し足が速くなったような——

「は……や、や……っ……」

気が付けば全力疾走していた。

走らなければ危ない。

多分この先の道は間違いだ。

多分この先の道はそのどれもが真っ暗だ。

彼女は危険しか感じられない暗闇の中、安全だと思える直感だけを頼りに、つんのめるように走り出す。

.....

——— 以つて、巨大フナムシ達の食事は5分と経たずに終わった。

『キュイイイイイイイイ!!』

彼女は身体をあり得ない形に損壊させられ、血液や体液を吸い取られた事でカラカラに干からび、残されたのは絞り尽くされ残りカスとなった肉塊だった。

その上で、巨大フナムシ——— ショッキラスは高らかに声を上げ、それが不気味に無人の非常用排水トンネルの壁に木霊する。

そして残骸となった肉塊をフナムシ達は群れでズルズルと運び、波打ち際の向こうへ——— 東京湾の海底へと引きずり込んで行く。

——— 蠢く蟲たちは、迫り来るゴジラの予兆を意味していた。

EP—32 タツグトーナメント2日目(前)

2011年3月12日午後8時57分

東北地方

福島県双葉郡双葉町

——寒い。

滅茶苦茶に潰れた家の中、タンスや家具の下敷きになった少女は思う。

冬特有の冷風が身体を貫き、肌から水分と体温を奪う。

両脚はタンスの引き出しと落ちてきた家の骨組みに潰されて粉碎骨折したらしく、あり得ない方向に曲がっている。

脚だけではない、全身という全身にタンスやテーブル、引き出しなどあらゆるモノが叩きつけられ、他にも数箇所、骨が破断ないし粉碎されていた。

幸か不幸か——それで神経が断線したらしく、痛みは感じなかった。

代わりに、肌を貫く寒さと、鼻腔を突く磯臭い匂い、全身に負荷を掛ける山積みになり、のし掛かる瓦礫（凶器）の山——それらが少女を追い詰め、押し潰さんとばかりに重圧を加えていた。

「……………あ……………」

か細く、吹けば消えてしまう蠟燭の火の様に弱い声。

声を出そうと顎を微かに動かすだけでショートした電線から漏電する電気で感電するような痛みが走り、健在の神経と肉体をズタズタにしている。

けれど、今は身体のあらゆる箇所を損傷し現在進行形で身体を破壊する痛みなどよりも、心細さが遥かに勝った。

「…お、とー…や……………」

——弱く儂い声。

「わた…し……………ん、ん……………」

——壊れたロボットの様な声。

「…た、す…け、て……………」

—— 助けを求める声。

12歳の少女が瓦礫の下敷きになっているという状況下であれば、当たり前であろう助けを求める声。

しかし、そんな声を出すことに対してでさえ、代償に鞭打った痛みが全身から神経を伝い脊髄を経由して脳に集積される。

「…お、と……うさ……ん……」

しかしそれでも、助けを求める。

自分と目と鼻の先に、父親の身体が見えたからだ。

だから、痛みなんてものは全て叩き伏せてでも、助けを求めた。

—— けれど反応しない。

助けて欲しいのにどうして、という感情が沸き立つ中、きつと聴こえにくいのだと思い至り、聴こえやすいように少し身体を動かす。

—— 瞬間、身体に奔る激痛。

「……つ、あッ……!!?」

—— 儂く小さな悲鳴。

今にも潰えてしまいそうなくらい華奢な身体に奔る痛み、思わず反射的にギョツと瞑った目蓋を開いて、父親を見た。

「……あ……」

その父親を見て—— 泣きそうだとか、恨めしいとか、助けて欲しいとか、そんな感情は失せてしまった。

—— そこに居たのが父親ではなく、父親だったモ死父親だったモ体ならば助けを求めても仕方がないという、単純な話だったから。

よく見ると父親だったモ死父親だったモ体は自分と同じように全身を打撲したらしい。身体の彼方此方に内出血特有の青瘀や普通ならあり得ない方向に曲がった手足と腰。

けれども極め付けは上顎より上の部位が丸ごと家の骨組みに潰されて原型を留めていない頭部と、そこから流れ出たであろうおびただしい量の血液と散乱する肉片だった。

—— 自分が助かりたい一心であったが故に死父親だったモ体に気付かなかっただけのこと。

—— そして諦観に満ちた思考の中で、『それもそうか』と内

心眩く。

家の中ごとひっくり返され、荒れ狂う家具と共に、自分と父親はシエイクされたのだ。

——その状況下であれば自分も死自分だったモ体になっただけでもおかしくはなく、むしろ今自分が生きていること自体が奇跡だった。(もう、いいや……)

瓦礫に埋もれた暗闇の中、少女は諦めて目蓋を閉じた。

——直後、暗黒の世界と化した目蓋の内にある視界に突如、未だかつて耳にしたことの無い不協和音国民保護サイレンが鳴り響き渡る。

『——ミサイル発射情報。ミサイル発射情報——』——当地域に、着弾する恐れがあります——』

町役場は無事だったらしく、防災無線が流れる。

——廃墟と山々に木霊する、不協和音国民保護サイレン。

それに少女は混乱と恐怖を覚えるが、瓦礫に閉じ込められた今はどうにも出来ない。

『——ミサイル発射情報。ミサイル発射情報——』——屋内へ、直ちに避難して下さい——』

——後に「白騎士事件」と呼ばれる事になったミサイル攻撃を知らせる警鐘が、自然の猛威に蹂躪され尽くされた町に木霊したのを少女——朝倉美都は耳にした。

——午後9時08分、福島第1原子力発電所5号原子力建屋にミサイル着弾。

——午後9時10分、5号原子力建屋爆発。放射能飛散。

——午後9時11分、双葉群双葉町に高濃度放射能到達。

??????????????

——これは昨日の話。

6月5日午後11時18分

IS学園第2シャフト・医務室。

織斑一夏親衛隊なる女子3名に絡まれ、さらにラウラにも戦線布告をされた数分後。

千尋は医務室にやって来ていた。

理由は勿論、千冬に促されたから……ではない。

そもそも放っておけば独りでに治るものであるから、皮膚が裂けた程度で治療をする必要などなかったのだ。

——にも関わらず、千尋は “ 毎日 ” 医務室に足を運んでいた。

「…ああ、ちよつと待ってね。もうちよつとで報告書終わるから……。」

医務室の戸を開けるなりまず視界に入ってくるのは、清潔感に満ちた白い部屋。

何かの実験機材。

——そして机に向かってコンソール叩くアイリ。

アイリは誰が入って来たか確認はしなかったが、なんとなく察していたらしい。

「——それで?。」

コンソールを打ち終わるなり、回転椅子に座ったままクルリと千尋の方に向き直る。

そして物分かりの悪い生徒に注意する教師のように、テスト一週間前に遊び呆けている子供を叱るような雰囲気で口を開く。

「明日も試合があるのに、どうして来たの?。」

「箒の特効薬についてです。」

千尋はそれに臆さず応える。否、臆する理由が存在しない。

なにより、千尋にとって命の次に大事な存在についての話だからだ。

——先ほど、 “ 毎日 ” 訪れているといっていた理由も、これである。

それも何となく察していたアイリは溜息を吐くと少し困ったような顔をして、

「……未だに有効な手段は見つかっていないわ。」
嘆くように言葉を返した。

「…細胞障害薬のシスプラチンにネダプラチン、アクリルピシン、ドキソルピシン、ネララビン、パクリタキセル。

分子標的薬のベバシズマブ、エベロリムス、オフアツムマブ、セツキシムブ。

内分泌療法薬のビカルタミド、デガレリクスなどなど……がん治療で用いられる薬品を一通り全て試したけれど、駄目。どれも一番良くて侵食を遅滞させる程度だったわ…。

……箒ちゃんの侵食された細胞から薬品を作る案も今特自つくば駐屯地でやってるけど……完成まで、あと1、2ヶ月はかかるわ。」
「……………」

——重い、沈黙。

千尋にそれらの薬品名や効果に関してはチンプンカンプンだったが、それでも通常の薬品では太刀打ち出来ないということは、理解出来た。

——普通の薬品なら、太刀打ち出来ない。

その言葉に、ふと思いついたり、千尋は思わず弾かれたように声を放った。

「——アイリさん、普通の薬がダメなら俺の細胞……オルガナイザーG1を使えませんか？」

千尋は、必死の声音で言う。

「…俺の細胞を使ったら、もしかしたら箒は助かるかもしれない…!!
？」

……だから——

だがしかし、千尋のその声を遮って、

「ダメよ、千尋くん。」

バッサリと斬りふせる。

——その声は、今までで一番険しいものだった。

「確かにオルガナイザーG1は貴方……ゴジラの強力な再生能力の要であり、【あつちの世界】の人類からも甘美な存在でもあったでしょう。」

——— けどね、オルガナイザーG1は千尋くん、貴方の細胞の本来の持ち主であるゴジラや奇跡的に同化した貴方でしか制御出来ない……この意味、分かる？」

——— それはすなわち、オルガナイザーG1を使うなどもつてのほかということだった。

「……でも……それくらいしないと箒は……！」

先の言葉は、千尋が藁にもすがる意志で放った、千尋の思える最良の手段だった。

——— オルガナイザーG1がゴジラ以外に適応出来ないという現実から、目を逸らせば。

「——— だからダメだと言ってるの。貴方だって知っているでしょう？ 貴方以外がオルガナイザーG1を身につけた末路を。」

その上で、箒ちゃんを苦しめるかもしれないとは考えなかったの？」

「あ………」

事実、オルガナイザーG1の再生能力は一時的に喪われた部分を再生するのだが、それで止まることはない。

再生が完了しても代謝は止まらず、時間を追うごとに本来の身体の数倍の速度で過剰代謝を行なっていく。

そうなれば過剰代謝に適応するために強制的に肉体を作り変えられる。

そして結局、治すために行った行為が治すはずだった相手を怪物に変えてしまう。

その果てにどうなるか——— 【あつちの世界】で “ オルガ “ という怪物になってしまった生き物（ミレニアン）を見た者（ゴジラ）から乖離した細胞でありながらもその記憶を持つ千尋が、知らぬはずがない。

「貴方が箒ちゃんを救いたい一心で上申してくれた事は感謝するわ。」

…でもね、都合の悪い現実から目を逸らしてはダメよ。

——人は自己欲求の実現、他者救済の為に良かれと思つて行つた行為が返つて他人を傷付けてしまう事だつてある…そして他人を傷付けて非難されてからしか自分が愚かだつたと気付けない生き物なの。

現実から目を逸らしては貴方もそれと同じになつてしまうわ。」
「……………」

——千尋は反論できなかつた。

千尋は『箒を助けたいから』という理由でリスクやデメリット…いや、それ以前の問題で、『オルガナイザーG1を用いたところで箒は救えない』という現実が見えていたのに見えなかった。

——表面上はバカで明るいガキのように振舞つていても、箒の病状が心配でならなかつた千尋は、かなり追い詰められていて認識力が落ちていた事を改めて理解させられる。

そして、なんとも言えない感情が湧き上がり——ああ、やはり自分は異物なのだ——と思わされる。

認識上での異物。

常識上での異物。

感性上での異物。

存在自体が異物。

——人間社会の中に入って共存出来るはずのない怪獣の残骸でしかないのだと。

…だというのに、今たつた一人の少女のために人間の都合が見えなくなつてしまうほどに必死になつていたのだ。

——それは、なんておかしくて異常なことだろう。

「…じゃあ、どうしたらいいですか…？」

実際、アイリの仮特効薬のおかげで苦しそうに咳き込みながら吐血するといった発作はここ最近起きていないものの、この安寧は長く続かない。

体内で蓄積された毒は一気に爆発し、箒の身体を喰い犯しながら死へと誘う。

それを理解しているからこそ、千尋は焦燥にかられてしまっていた。

——— だけとおかしい。どうして、箒に限ってこうも頭に血が昇るのか。

「…だから現実を直視して、間違いを犯さないように、今自分に出来る事、成せる事を考えて行動しなさい。」

——— 私から言える事はそれだけ。」

「……え？」

アイリの言葉に、千尋は虚を突かれたように目を点にする。

そんな千尋を見てアイリは呆れたような顔をして、

「…はあ……『え？』じゃないわよ。」

…貴方、医学的知識はある？薬物の調合とかできる？遺伝子の構造解析はできる？」

本当に、物分かりが悪い子供にむけて問い返す。

当然、そんなこと千尋には。

「無理…です。」

「…でしょう？出来ない事をしてもし方ないわ。時間という有限の資源を無駄に消費するだけ——— なら自分出来る事をするのに当てるとかして、時間は有意義に使うべきじゃないかしら？」

…私も、箒ちゃんの特効薬を作るという理由に時間を使ってるワケなもの。

……箒ちゃんの薬にどの薬品を用いるか選んで考えて、どれだけ迅速に対応するかは私達医者や科学者の領分——— だから学生である貴方は貴方が思いついて、自分で実現可能だと思って、自信を持ってやることをやり遂げてみなさい。」

右手でコンソールを叩きながら、アイリはウィンクをして千尋にそう告げた———。

「…それとね——— ちょっとは大人を信用しなさいな。」

夕??6?????????

月13日

夕??6?????????

IS学園・第2アリーナ控え室

二日目のトーナメントが行われている中――ふと、千尋はアイリに言われた言葉を思い返していた。

――学生である貴方は貴方が思いついて、実現可能だと思つて、自信を持つてることをやり遂げて見せなさい。

…なら、千尋に出来ることは、

（――箒のそばにいて、支えてやること…くらいか…?）
――でもそれだけじゃ…）

まだ疑問はある。

けれど、今のところ自分が信じられることを考え――千尋は、ふと内心呟いた。

――相変わらず、2人は重い。

「――ところで千尋…」

箒が声にする――瞬間。

ビシリッ！と額に乾いた痛みが走る。

それに千尋は反射的に瞼を開く――そこには、
「まったく…だいたい何考えてるか見え見えの顔を人前でするな。」

呆れながら、けれど至極真面目そうな顔で箒が言う。

…どうやら、デコピンを食らわしたらしい。

「なにすんだよ…」

千尋は思わず、うー…と痛む額をさすりながら抗議する。

「なににもこうも、お前のことだから私の身体を考えてたんだろ？」

――ピシリと、その言葉で一瞬にして頭が石になったように固まってしまふ。

「な、え…なんで…?」

「はあ…やつぱりなあ……」

千尋は半ば混乱。

箒は半ば知っていたように呆れ返る。

「そりゃ、私の身体のごとは私がよく知ってるよ。」

それに…光さんから聞いたんだよ、一週間前にお前がアイリさんに私の薬について聞きに行ってたって。」

「…あ……」

光經由で聞いたという事に千尋は思わず盲点を突かれたように目を見開く。

——けれど、冷静に考えれば当たり前だ。

一応アイリは光に情報提供する立場にある。

だからアイリに自分が相談した事など、アイリに話した時点で光に筒抜けなのだ。

「…まったく、お前は…：まあ、でも、私を心配してくれたことは感謝してるし、正直嬉しい。」

…でも、私はアイリさんの特効薬を信じてるから、大丈夫だ。」

「……………」

箒は場を和ませようと明るい顔で、千尋はやはりまだ心配さを拭えぬ顔で——完全に普段の2人がいる立ち位置は反転していた。

千尋は箒の気を遣い努めて笑顔を繕っていて、箒はその笑顔に依存して安堵を得ていた。

——けれど今この瞬間、そのポジションは変わっていた。

——そもそもなぜこの話をしているかといえば、箒の身体を蝕んでいた腫瘍が遅滞したとはいえ、確実に侵攻は進んでしまっているのだ。

だからこそ、千尋は事を起こして少しでも事態を打破すべきではないか——そう、思ったことが始まりだった。

「…それに——山本三尉や楠本二曹から言われてな。最近、千尋が無理をしていると。」

「……………」

箒が思い詰めたような声を放つ。

——それに対し思い当たる節があるのか…：というか凶星

であるため千尋は固唾を飲んでしまう。

「…お前は私が安定できるよう、出来る限り明るく振舞っていてくれたんだな……。」

「…それは…」

——大したことなんてない。

そう言おうとして、箒が先に制する。

「——あまり自分を卑下するな千尋。」

「…けど、俺は結局お前の役には立ててない。それに——」

「…確かに、この人間世界では分を弁えたり自身に責任を感じたり、他人のために動こうとなってしまうのは当たり前だ。

…けれど、そのせいで自分を卑下するような存在になるな。」

「…いや、けど、組織って枠組みにいる以上は…」

「確かにそれは正論だ…だがな…：私が言うのもなんだが、他者を重んじるばかりに自身を卑下し、さらに組織の規範のまま生きて、自分の意思を殺すことを仕方ないと流されながら是として顧みないのがお前の理想なのか？」

その言葉で、千尋はハツとする。

——そういえば、最近は自分の意思を殺すことしかしていなかったと、改めて再認識する。

「千尋…——昔の、私と出逢ったばかりのトンがついて好き勝手やっていた頃のお前はどこに行った？」

…私としてはその時の方が——今のお前より数段、輝いて見えていたぞ。」

前半は少し冷たく——けれど後半は温かな声音と笑みを浮かべながら、説教じみているような、憧憬を思い返したような視線を千尋に向けながら箒は口にする。

それは、篠ノ之千尋という存在に一番最初に触れて、篠ノ之千尋という存在に誰よりも永く接した箒だからこそ、言える言葉だった。

——そしてその言葉が、千尋の綻びを貫いた。

(…なんだ…なんでこんな事で迷ってたんだ…)

思わず口から溢れそうになる言葉を閉じながら、内心呟く。

「なあ、箒。」

そして少し、恥ずかしそうにしながら、千尋は口を開く。

——その顔には最近忘れていた子供らしい表情を宿しながら。

「…俺は、あまりお前の役に立ててないかも知れない。」

「うん、そうだな。」

——しかし恥ずかしながら意思を固めて口にした事を箒はアツサリと肯定する。

これには、最近我慢というものが否が応でも必要であり、それがいつしか自分勝手を許さないという自己暗示に変質させてしまった流石の千尋も、理屈や道理などを放り出して——

「即答かよ☒」

感情的に、かつ反射的に言葉を発してしまった。

「…だってロリシカの時はともかく、お前が目立って私の役に立ったことなんて、あった試しが無いじゃないか。昔だっただいたいトラブルしか起こさなかったし。」

「…づ…」

「二夏がシールドバリアを破壊した時破片から庇ってくれたから、それには感謝してるけど、あの時私がどれだけ心配したか——

——

「づづづ…」

——それには反論出来ない。

けれどもロリシカ戦線での救助任務しかり、シールドバリア破壊事件しかり、箒の事を考えるとつい先走ってしまうのだ。

だって——

消えた命は還ってこない。

自分の家族の命が消えて還ってこなかったように。

奪われたものに残るのは自身と奪った者への憤怒だけ。

だからその憤怒を頼りに奪った者達を殺しにかかって。

けれど、ただただ一方的に踏み潰しただけ。すなわち虐殺。

ヒトの命の価値などその時は知らなかったし、眼中に無かった。人間がアリの踏み潰しても何も感じないように。

自分がヒトと同じ殻に落ちて、言葉を交わして、初めて知った。

それは自分の家族を奪った者達と変らないという現実。

残されたのは虚無感と罪悪感。

しかし自分と家族になりたいと思うものが現れたらどうか。

結果的に少女の幸せと自身の欲望が入り混じる結果となってしまうた。

少女の幸せを失くさないように、今度こそ家族を亡くさないように。

——それはなんて一貫性があるようで実は無く、またその少女の視点から考えられない独り善がりなモノだったのか。

——ただ少女が幸せならそれでいい。家族が無事ならそれでいい。

——つまりそれは、その他はどうでもいいと、死のうが生きようがどうでもいいと、そういうことだった。

——最初はそのままで良かった。しかし他者と関われば関わるほど、その価値観は破綻していく。

——それはただの独り善がりで、世界から要らない考えである、いつからか考えるようになった。

——何かを犠牲にしなくては何も成し得ない。それは確かな真理である。

——大切なものが増えていけば行くほど、何を護るべきか分からなくなる。

——それでも、少女だけは幸せでいて欲しいと願った。だからこそ、自身を擦り減らすことを自身に強要した。

——少女が、家族が幸せでいて欲しいと、幸せを失くさないで、家族を亡くさないでいる為には自分を犠牲にすれば良い。自分は咎人なのだから。

——命を消して亡くさないためにも、自身の命と肉体を削ってでも少女には幸せでいて欲しいと。

——それがどんなにおこがましくて、どんなに願いからかけ離れていたかは、自身には分からなかったが他者からは明白だったのだろう。

——事実、今こうして少女——篠ノ之箒に言われなくては、気付かなかったのだから。

——ここに来て、ようやく篠ノ之千尋はそれを理解した。

そんな千尋を見ながら、箒は口にする。

「でも、そうだな……目立って役には立たなくても良い。」

「……………」

「ただ…その代わり、」

——少し、微笑んで、

「私のそばにいてくれると——嬉しい…かな。」

それは確かに——千尋は初めて見たが、篠ノ之箒という少女の、在りし日に彼女が浮かべていた表情（かお）だった——

「あ——」

思わず、千尋は声を漏らす。

その表情はこれまでに見たことのない顔だった。箒の表情といえ
ば、『ダメな弟を気遣う姉』と形容するに相応しい顔しか見たことが無
かったから。

けれど——けれど、この表情は。

「——っ、ずるいぞ。そんな顔…。」

思わず、千尋は赤面してしまう。

それは年相応の少女らしい、表情だったから。

ただそれは、精神的には未成熟な千尋にとって精神的進化を乗り越

えるための毒であるために、反射的に顔を赤くしてしまう。
それを箒は不思議そうに眺める。

「ああもう、年端の男児つてやつをなんだと思つてんだこいつツ！ただでさえそんな顔されると頭痛くなるのに…てか、俺が箒を心配してたつていう重苦しい雰囲気だったのになんでこうなつた」

——思わず内心絶叫。

とにかく千尋は自身にとって、箒のその表情は克服せねばならない毒だと認識する。

——深呼吸。ヒートアップした脳を冷却する。

そして言いたかったことを千尋は口にする。

「白状するとさ…」

先程の羞恥に満ちた顔は無く、真剣そのものの顔をして言う。

「…俺の言いたかったことつて、今箒が言ったことのまんまなんだよ。

——先に言われちゃったから、言う言葉はもう無くなって

…だからこの言葉はその代わりなだけだよ。」

——どこか悲しいような、けれど喜んでいるような顔を浮かべて少年は箒に告げる。

思えば、昔から自分の表情は常にふたつの感情が混じり合ったものだった。

それは千尋の立脚点を浮かせていて、今だつて確かな意思をここにちゃんと着けることはできていない。

その意味だけでなく自分も自分は半人前なのに、それがより一層半人前で未熟者だと自分に思い知らしめる。

——けれど、これだけは確かだから。

これだけは口にしたいと迷いなく思えた事だから——千尋は声を放った。

「これからも——お前を支えて行きたいんだ。今の俺にできるのはそれくらいだから……こんな半人前でどうしようもないガキだけど、よろしく頼む。」

——学生である貴方は貴方が思いついて、実現可能だと

思って、自信を持てることをやり遂げて見せなさい。

アイリに言われた言葉を思い返して放った言葉。

それを嘘偽りの無い、屈託も無い子供らしい笑顔で言い放つ。

「それが “ 今の千尋 “ に、未熟者に今できる精一杯のこと。」

「ああ——それで、充分だ。」

箒はその言葉を受け入れる。

——箒もまた、千尋にはそれくらいしかできないことを理解しているし、それ以上を求めていなかったのだから。

ただ、千尋が居てくれればそれで良かった——。

千尋と箒（ふたり）の意識が互いの意思を理解した——その時、

「——あら、相変わらずお熱い関係ね。」

——シリアスブレイカーが強襲した。

「二んな——」

思わずふたりは声をハモらせながら顔を上げる。

——そこには、お嬢様らしい気品さを保ちながらも加虐者（サディスト）の顔をした四十院神楽が居た。

「全く、お熱くなるのに場所くらい弁えなさいな。」

「だ、誰がお熱くなってるだよお、俺は箒をちよつと心配しただけだな…!!」

「そ、そうだぞ神楽！勘違いするな!!？私はいくまでこれからも千尋にサポートしてほしいと頼んだだけで…!!」

——神楽の弄り倒す態度に対して、千尋と箒の2人は羞恥に顔を赤く染めて反論する。

しかし神楽は動じることなく、それを愉快そうに見て顔を愉悦に歪めながらつつづけて口にする。

「はいはい。まあそれも良いけどタッグトーナメントの話もしたら？」

次の相手、 “ ドイツの問題児 “ でしよう?」

神楽が揶揄う（からかう）ように、けれどもそれでいて気にかけるような口振りで告げる。

——ちなみに “ ドイツの問題児 ” とはもちろん、ラウラ・ボーデヴィツヒのことである。

彼女の織斑に対する敵対心や普段の態度、戦闘時に味方を盾にするなど協調性の欠落などが理由で女子からも嫌われているポジションにあり、 “ ドイツの問題児 ” とはどこかの女子が言い始めた結果学園中に拡散した彼女に対する陰口だった。

「……ん？」

——だがここでふと疑問を箒が抱き、思わず声を漏らす。それについて同じく疑問を抱いた千尋が口を開いて神楽に問いかける。

「なあ、次のボーデヴィツヒの対戦相手ってアメリカの代表候補生とギリシャの代表候補生じゃなかったか？」

「——貴方たちまさか知らないの？」

神楽は出来の悪い生徒に頭を痛める教師のような表情をして呆れ返った顔をする

「——アメリカ代表候補生のダリル・ケイシーとギリシャ代表候補生のフォルテ・サファイア——両名は昨日、同政府の命令で帰属国家に召喚されるかたちで帰国したわ。」

つまるどころ——タッグトーナメント1日目にI S学園2年生でありアメリカ代表候補生の「ダリル・ケイシー」とギリシャ代表候補生の「フォルテ・サファイア」の2名が本国から帰国命令が下り、タッグトーナメント1日目の午後に羽田空港から帰国した——
——という事だった。

「…な、なぜ……このタイミングで……？」

箒が千尋に続いて問いかける。

「さあ……？日本が危ういのかも知れない。

……でも、大元の理由は本国の方でしょう。

——特にフォルテ・サファイアの帰属国家であるギリシャは、ウクライナが全土を失陥したからウクライナ難民と亡命政府を受

け入れてただでさえ難民キャンプに中東難民が溢れて治安が悪化しているのに租借地の設置まで許可しているもの。」

——実際に神楽の読み通り、代表候補生の2人が帰国したのは日本に巨大不明生物が迫っているからというだけではない。

：特にフォルテ・サファイアの場合、帰属国家であるギリシャ領中央ギリシャ地方エヴィア県エヴィア島と北エーゲ地方レスヴォス県レスボス島に戦線崩壊で領土を失陥したウクライナ亡命政府が租借地を置いており、その際に租借地にウクライナから流れて来る難民が治安悪化を招かぬよう牽制する役割が与えられていたのだ。

フォルテ・サファイア自体はただの学生であり、大した権限も無い。しかしISという世界最強の兵器を纏えば完全武装した兵士や装甲車、戦車と同等の抑止力になる。それ故の帰国命令。

——同時に、代表候補生まで治安維持部隊に加えなくてはならないほど、現地の戦況は逼迫しているということを嫌でも知らしめられる。

「——でもまあ、貴方たちが知らないのも当たり前よね：マスコミは女尊男卑を維持したい一心と女尊男卑政党による政権奪還に扇動したい一心で現政権の批判しかしてないから欧州の状況なんて報道されてないもの。」

——ウクライナ人はもう総人口の4分の1：1020万人程度にまで激減しているのよね…。」

——冷めた瞳で、憂うように神楽は言う。

つまりそれは、ウクライナの総人口4520万人のうち3500万人が死亡し、なおかつウクライナという国家の領土が世界地図から消滅し、ギリシャ政府の分け与えた租借地無しにはウクライナという国家を維持出来ない事態にまで陥っているのに、日本のマスメディアは女尊男卑を維持したいがために見て見ぬフリをしているということだった。

——正直に言っただけは、正気の沙汰ではない。

「——なんだよ、それ。」

——気付けば千尋は拳を強く握りしめながら、震わせている。

顔は目に見えて分かる程の怒気に満ち溢れていて——
——箒も同様だ。

——しかし同時に、2人ともどうしようも出来ないもどかしさも孕んでいた。

「……ていうか神楽はそんなのどこかで知ったんだよ。」

——その中で、ふと疑問に思ったことを千尋は問う。

「ん？ああ、ツイッティアっていうSNSや7チャンネルっていう掲示板よ。マスコミが役に立たないこのご時勢じゃ、ネットの情報は貴重な情報源であり生活に必須よ。」

……まあマスコミに真実がなく、ネットにしか真実がないっていうのも問題だけどね……そんなの、冷戦時代の旧ソビエトや東側諸国のメディアと同じだし……。」

神楽は露骨に非難めいた声音でそう答える。

「……話がズレたわね……まあとにかく2人はボーデヴィツヒとの試合について対策を考えなさいな。」

……私はその様子を観察しておくわ。」

私が付き合う人を見つけた時にどう接するべきか……という参考にもなるからね——
——にんまりと笑いながら、付け足して言う。

その顔は明らかに他人の初々しいやりとりを見て愉悦に浸る顔だ。

——だがしかし、対策会議だなんてその程度で動揺するほどウブではない。

「——はあ……まあ、とりあえず作戦を言うとき、まずは二手に分かれて各個撃破すべきだと思う。」

千尋が真剣な表情で箒に対して言う。

箒も同じく真剣な表情をしてコクリ、と肯定するように頷く。

「ああ。相手は第3世代IS、さらに軍用機だが幸いにもチームワークは壊滅的……ていうか実質皆無だ。」

箒の言う通りラウラは援護射撃や近接格闘支援などチームワークらしいチームワークを全くせず、さらには自身の僚機を掴んで相手に

投げつけるなどもはやチームである必要さえない行動がどの試合でも目立っていた。

——故に、自然と千尋と箒が二手に分かれ、一方がラウラに対する囮役。もう一方が僚機の撃破を行い、それが完了した後ラウラを2機で撃破するという作戦が2人の思考に浮かんでいた。

おそらくこれは千尋と箒でなくともその結論に至っただろう。

「——『どのような時でも最小単位に分隊（エレメント）で行動し、チームワークを重視せよ。』…神宮司三佐に何度もどやされたから、そのへんは折り込み済みだよな。」

「ああ。この手の件はいつもの気持ちでかかれば良いが…：問題は奴の兵装だな。」

「プラズマブレードと30mmマルチレールガンだな。確かに面倒だよな…特にプラズマブレードは装甲を融解、蒸発させて体積膨張によるプラズマ爆発を誘発する…：とかがあるんだっけ？」

「ああ。だがマルチレールガンも脅威だな。あれ程の貫徹力のある武装の砲弾…シエルツエンの爆発反応装甲だけでは相殺不可だぞ。間違ひなくシエルツエンに風穴を開けられる。」

頭痛を堪えるように額に手を当てながら箒が言う。

実際、シエルツエン以外の追加装甲盾はあるのだが拡張領域の容量がかなり食ってしまったために弾薬と推進剤の格納も考えると一枚格納するのが限界だ。

2枚装備するなら1枚を拡張領域に、もう1枚を主腕に保持することで、数を揃えるという目的は達成出来る。

しかしそうなると保持できる銃火器の数を減らしてしまう上に機体にかかる重量が増えてしまい、機体が重くなる。

「だがまあ大丈夫だろう。いざとなったら——な？」

「そうそう。」

——千尋が箒に対して心配を抱いていたために千尋の心情が安定していなかったとはいえ、二人共作戦は事前に練っていたのだ。

互いの作戦が似たようなものだったから結論を言わずとも互いに

理解してしまったというだけ。

「——でもボーデヴィツヒはA I C（慣性停止結界）っていうチート技をもってるわよ？」

千尋と箒がウブらしい反応をしなかったために詰まらなそうな顔をして神楽が言う。

それに対して千尋が応える。

「戦闘映像見たけど、多分アレはどうか出来ると思うぞ。僚機を早急に撃墜する必要があるけど。」

「あらそう……やっぱり作戦会議程度じゃウブらしい反応するわけないか……いやまあ、よく考えたら当たり前ね……。」

なんて神楽は残念そうに自問自答する。

「あら、やはり皆さん試合前の作戦についてお話中でしたか？」

ふと声が聞こえ、千尋と箒に神楽が声のした方へ向く。

見れば午後の部に出場するセシリアと簪がいた。……今の声はセシリアが放ったものらしい。

それを見た神楽が真つ先に声をかける。

「あら、貴女も簪と会議にでも？」

「ええ。……それに——わたくし、みなさんにお話しないといけないことがあります……。」

神楽の問いに対して少し浮かない顔をしてセシリアは回答する。

それを怪訝に思った者はその場にいる簪を除く全員だった。

「どうしたというのだ、そんなにかしこまって。」

箒が誰よりも早く問うた。

——数拍黙してから申し訳なさそうに、しかし意を決してセシリアは口を開く。

「——実は……わたくしは今月付けで……おそらくこのタッグトーナメントが終わり次第、本国に帰国することになりました。」

「……え？」

——控え室の空気が凍る。

千尋と箒に神楽は驚いた顔。否、その3人だけではない。

控え室にいた女子生徒8名を含めた全員が驚いた顔をして凍って

いた。

——ただ一人、簪を除いて。

「——そう。やはりそうなるわよね……貴女の故国も危ないよ
うだし……で簪さん、貴女驚いてないけど、オルコットさんから聴い
てたのかしら？」

——凍結からいち早く復帰した神楽が冷静に言葉を口に
して、簪に問う。

「……うん。昨日オルコットさんにイギリス政府からの通知書を持って
きたことを伝えられたから。」

「——そう。」

簪の回答に対して神楽は驚くことはなく、ただ淡白に反応する。

——少し、せつかく得た親友を失うことへの悲しさを感じ
させる瞳をして。

「な、なによそれッ☒」

——ふとそこに割り込むようにして投げかけられる、ぞん
ざいな声。

振り返ると、如何にも機嫌を悪くした——否、もはや嫌悪
の域に達した女子がセシリアを睨みつけていた。

制服の襟に付けた校章の上にスペイン国旗をモチーフにしたバッ
ジが付いていることから彼女はスペイン出身だということが分かる。

——そして彼女はコテコテの女尊男卑主義者だ。何を隠
そう昨夜千尋に暴行を加えた集団の一人なのだから。

「なんでアンタまで——卑怯じゃない！同じ高校生で、同じ
女なのに!!？」

——つまり、そういうことだった。

彼女は同じ欧州圏の出身で同じ女性なのにセシリアが帰国させら
れることに対して嫉妬している。

——自分だけ残されるなんて不公平だ。
——そう言いたいのだった。

「——帰っても、良いことなんか有りませんわよ。わたくし
は貴女の方が羨ましい限りです。」

——それに対してセシリアはあくまで冷淡に応える。

「はあ何言って——」

「わたくしは帰国すれば、すぐさまイギリス陸軍に転属しそのままイングランド北部、ヨーク陸軍基地に配属——だそうです。」

「二——」

セシリアの言葉に全員が再び固まる。

「——なんでもイギリス軍のほとんどの将兵、特に男性が東欧戦線に派遣されているらしくイギリス本土の防衛にはISを主力とした部隊を配備するらしいです。」

——イギリス陸軍の人員は正規兵約10万5000人、予備役3万3100人。

セシリアの話ぶりからすれば正規兵をほとんど前線に出し、さらに予備役まで投入した結果本土がガラ空きになったためにISを中心とした部隊を国内に展開することで本土防衛を成そうという考えらしい。

——さらに付け加えるならIS適正があり、IS教習を受けたならば学生であっても徴兵するというものだ。

「……」——「応わたくしもIS乗りですから、徴兵となりました。

……わたくしとしては貴女が羨ましい限りです。わたくしと同じ高校生なのに、軍に転属するわたくしとは違って平和な学校にいられて。」

——セシリアも嫌味と不満を籠めた声を放つ。

それで、終わりを告げた。

「……っ……!!??」

迂闊な発言をした彼女は少し悔しそうに顔を歪めながら早足で控え室を出て行く。

——以って、不毛な争いはここに終結した。

「——無様な姿をお見せして申し訳ありません……ついカツとなってしまうって……。」

「いや、良いよ。俺だってあんな風に言われたら腹が立つから。」

申し訳なさそうに口にするセシリアに対して千尋が言う。

「…そう言っていたけると助かりますわ。」

「——それにしても、なんなのだ彼奴の態度は…!!?」
箒が吐き捨てるように言う。

——それに反応して神楽が口を開く。

「…さあ。ああでも、ピリピリしているのかもね…彼女の知り合いが昨夜から行方不明らしいから。」

I????????????
IS学園・地下区画

「そんな…は、話が違います…!!?」

——タッグトーナメントが華やかに開かれている地上とは相反する陰湿で薄暗い資材集積所という人目につき難い場所。

中華人民共和国共産党隷下特別武装隊北京派周大尉はエリジウム衛星携帯を手に、受話器の先にいるであろう相手に対して思わず口にした。

回線を介した先にいるのは共産党のお墨付きという理由で中華人民共和国の国家権限を掌握した駐日中国大使の王永革（ワン・ヨンゴ）大使。

——共産党専用機が黄海上空で消息を絶ち、党の人間の大半が死んだであろう状況下で最上位の地位にあり、党から次期党首と推薦を受けていた彼が指示を下す側に回るのには当たり前と言えた。

周大尉は彼と通信をしているのだが周の反応を見れば誰でも分かるように、決して良い内容ではない。

「計画では確かに凰鈴音の処遇については——は、はい。香港派の横槍が入り…」

周は抗議するような口調だった。しかし受話器の向こうにいる王はさらに強い口調で言葉を言い放つ。

「で、ですが…」

周は不安げに言葉を放つ。

しかし次の瞬間、衝撃を受けたように顔を硬ばらせる。

「そんな×そうしてしまえば、私達は…」

しかしそんな周を無視して、王は冷酷そのもののような声音で返答を口にした。

—— 周の背筋が恐怖に震える。

—— 後戻りは出来ない。後ろには、過去には戻れない。

彼女は前に、未来に進むしかない。

ただその未来にあるのが—— 断頭台か自身に向けられる銃口しかないというだけの話で。

—— つまり周は、どん詰まり（デッドエンド）の淵に立たされた。

恐怖に震える。

背筋から体温が冷めていく。

歯をカチカチと鳴らしてしまう。

皮膚に悪寒が走る。

しかし圧倒的な人生の終焉しか未来にはないと、そう分かった上で。

「……はい、了解いたしました。必ずやその使命を成し遂げます。党のために死ぬるならば—— 迷うことなく幸福です。」

—— その、どん詰まりに進むことを選んだ。

会話の相手は一方的に通話を遮断した。

ツ、ツ、という音が鼓膜に響く。

—— 周はそのまま口を噤んだまま立ち、視線を床に向ける。

もとよりこうする他ないのだ。

党に絶対忠誠を誓った自分にはこうする以外に道など無いのだと、周は内心呟く。

—— この先にあるのは党の同志たちによる粛清か、敵に殺されるか、野垂れ死ぬか。

日本に住む在日同胞に紛れ込む———という考えがなくは無かった。

しかし鬼畜小日本（リーベングイツ）に亡命することは党に身を置いた人間などといったこと以前に崇高な中華民族として許し難いとだからだ。

日本に亡命するくらいならば同志に粛清された方が遥かにマシだ。さらに付け加えるならば日本に寄生虫の如く巣く、中国人の責務である兵役の義務を履行しない在日同胞には吐き気がする。

あんな連中と共に暮らすくらいなら同志に粛清された方が遥かにマシだ。

———何故ならば彼女の存在意義は党に仕えることしか無いのだから。

党に死ぬと言われたのならそれは確かに怖い。しかし死という義務を遂行する責務がある。

だからこそ最初は恐怖による迷いこそあれど、私は死を遂行する。———党はそういう風にかつての人格（わたし）を殺されて今の人格（私）を産んでくださったのだから。

私は党に恩を返す責務がある。———党は全てにおいて正しい。

だからこそ———。

「私への最終指令…織斑一夏の捕縛を為さねばならない。」
党に絶対忠誠を誓うが故に周はそう言い放つ。

———しかしそれが、恩を返す責務ではなくただ道具となるべく人格を徹底破壊された果てに植え付けられた脅迫観念から来るものだという事に周が気付くことは、これより先の未来———
———周が絶命するその瞬間を過ぎても、彼女は気付くことは無かった。

?????????????
2021年6月13日午前9時04分

館山市湊区

ホテル・グラントシテイ館山

国道302号線・内房なぎさライン沿いの、平久里川を北に覗き、西には館山湾を覗く立地に建つIS関連企業の投資によって建設された施設のひとつ。

スペイン風の壁紙が貼られ、欧州らしさが満ち溢れているホテルの一室。

そこに楯無と黒スーツの男がいた。

「———ではこちらの書類にサインを。」
「分かりました———英語でも構いませんか？キリル文字は難しくくて。」

「ええ、構いませんよ。我々が欲しいのは 更識楯無さん、貴女がサインした。という事実だけですから。いつまでも旧ソヴィエトのようにアルファベットよりキリル文字がどうだのというつもりはありません。」

黒スーツの男がにんまりと笑う。

———男はロシア大使館が寄越した人間で、ロシア代表のスポンサー……すなわち楯無の担当者ということになる。

そして今楯無がサインしている書類は———【ロシア代表解約】と【専用IS所有権放棄】に関する内容だった。

国家代表、あるいは代表候補生からすればそんなものにサインなどしたくはない。

———しかし、楯無は迷わずボールペンで自身の名でサインする。

そしてサインし終えてから、ふと微笑んで。

「……こちらでよろしいですか？」

「ええ結構です。突然すみませんね……」

「いえいえ、日本政府が用意しきれなかったISコアと専用機、国家代表という地位を提供していただいた私の立場は貴方がたロシア政府の意向で決まるものです。」

現在の貴方がたの祖国の情勢を鑑みれば、これは仕方のない事でしょう。」

楯無は少し微笑みながら冷静に、淡々と事実だけを述べていく。

——事実、ロシア連邦はバルゴンやウクライナのギャオス陸棲種に加え、新たに出現した新種の巨大不明生物にシベリアと、中東に繋がる北カフカース地方からヨーロッパ・ロシアを挟撃され、二正面ならぬ三正面防衛を取るカタチとなっており、さらにシベリアにおける大多数の兵力喪失から自国内での常時的核兵器使用など、ジリ貧の消耗戦を強いられている。

掻き集められるだけの兵器を必死になって収集している最中であり、楯無の専用IS・ミステリアスレイディもその対象となっていた。「ご理解が早く、助かります。」

……私の個人的な考えとしては、もう少し貴女のそばに置いておきたかったのですが……これも政治でして——では。」

——そういうと、待機形態のミステリアスレイディと書類をアタッシュケースに入れ、男は去って行った。

——ボタン、とドアが閉まる。

「——もう良いわよ、シャルロットさん。」

楯無がふと告げる。

部屋には、誰もいない。

だがしかし。

「——ぶはあ……!!?」

ガラガラとクローゼットを開けて、シャルが出てくる。

呼吸を止めていたらしく、息は荒い。

「いきなりなんなんですか、もうっ!!?」

呼吸を止めていたのにいきなり呼吸を再開したせいかな、生理的な涙

を浮かべながら抗議するようにシャルは楯無に食ってかかる。

そんなシャルを楯無は意地悪そうに、面白おかしそうに笑う。

「あはは、本当に涙ながしちやって…あははははっ…」

「貴女が勝手にクローゼットに放り込んで呼吸するなどか言うからでしよ☒」

マジ切れ数秒前の顔でシャルが怒鳴る。

実際、これは楯無が悪い。

しかし犯罪者であるシャルにもこれにとやかく反論する権利はない。

「ごめんごめん。…でもまあ、『殺人鬼から隠れるホラー映画のヒロイン』みたいなスリルは味わえたでしょう?」

「…はあ…おかげで寿命が縮みましたよ…」

相変わらず、反省する気ゼロな楯無を見てもはや呆れてしまい、シャルは弱々しく回答する。

ちなみにドキドキすると寿命が縮むというが、これは迷信ではなく医学的にも証明されている全くの事実である。

人間の一生における心拍数は約15億回と決まっております、無駄に心拍数を上げて心臓に負担をかけるホラー映画やギャンブルの類は寿命を縮めて死期を早く迎えさせる劇薬といっても過言ではない。

—— 閑話休題。

「…昨日学校に帰らず、ホテルにチェックインしたのってさっきの彼と落ち合うためですか?」

「うん、そうよ。」

「はあ…でも…良かったんですか?」

もはや突っ込む気力さえなく、呆れた顔でシャルが聴く。

「何が?」

「ロシア代表をやめて…良かったんですか?」

国家代表や代表候補生をやめてしまえば国からの援助は下りなくなる。

そして元国家代表や元代表候補生のようなIS適性の高い人間は

亡国機業のようなIS関連の犯罪を犯すテロ組織に狙われるし、IS関連企業でテストパイロットという名のモルモットにされてしまいかねない。

——先程シャルに隠れているように言った理由もそれだ。

彼女はフランス代表候補生を降ろされ、さらには未だ日本国籍取得には至っておらず、現在はまだ仮国籍であるため、拉致される危険があったから。

…なにせ、先程の男はロシアンファイア系のIS組織と繋がりがあ

る。そして、かつて赤い帝国、悪の帝国と呼ばれたソヴィエトの末裔であり、現在もそれと変わらぬ姿勢を取っているロシアがそんな手を取らないとは限らない。

…閑話休題。

先ほどの話の続きになるが、シャルのように犯罪行為を犯して代表候補生の立場を剥奪・あるいは放棄せねばならない状況になれば仕方ない。

だが自分から解雇を受け入れて国家代表の立場を放棄する楯無はIS乗りからしたら異端にも程があるのだ。

——だが楯無は少し冷めた笑みを浮かべながら。

「仕方ないでしょう、これも政治なの——そして暗部の長たる私には日本政府が決めた方針に従う義務があるもの。」

楯無は口を開く。

「もとより私がロシア代表になったのも、日本政府がISコアを用意出来なかったこともあるけど、北方領土問題解決に向けての日露関係改善の為にIS関連技術の交流を行うことが目的——つまりは日本政府の外交交渉のカードのひとつとしてだし、私の地位なんか日露両政府の都合でアツサリなくなっちゃうものだもの。」

あはは、と興味ないように笑いながら、さらりと重要な事を言う。

——その感性は歪な経緯で国家代表候補生に仕立て上げられたシャルには、分からなくもなかった。

「でも、どうしてまた急に…」

「彼らも追い詰められているのよ、デユノアさん。：昨夜ついにカザフスタン全土が陥落し、ヴォルガ川にまで巨大不明生物が到達。その時点でロシア連邦は国土の6割を喪失していたもの。」

「…このまま行けばあと数週間から数ヶ月後にはアストラハン、サラトフ、スターリングラードが戦場になるでしょうから。」

「——」

淡々と告げる楯無にシャルは息を呑む。

ロシアは国内に河川を用いた大規模水運網を張り巡らせており、特に楯無の言ったヴォルガ川は「ロシアの母なる川」とさえ言われる、全長約3690km、川幅1kmにもおよぶヨーロッパ最長の大河川だ。

そしてそこは東ヨーロッパ平原と黒海を繋ぐ重要な経路——
——言ってしまうえば水運の大動脈だ。

そこが巨大不明生物の勢力圏内に飲み込まれればロシアは黒海方面から掃討されたも同然であり、東ヨーロッパ平原北部やコラ半島、島嶼部のノバヤ・ゼムリヤなどがロシアに残された国土であり、同時にそこに逃げ場が限定されてしまう。

「おそろしく首都もモスクワからサンクトペテルブルクかムルマンスクに遷都：ううん、それに留まらないでしょう。」

最悪の場合、全土を失陥することを見据えて各国に避退租借地の提供を求めて交渉してるでしょうね…。」

「——」

「——さりと、楯無はまた恐ろしい事を言う。」

しかし現にカザフスタンやモンゴル、ウクライナなどの国家が全土を失陥し、さらにはロシアも戦線が瓦解しシベリアを喪っている今を鑑みれば、それが実現してしまう日が遠くはないことは容易に想像できる。

「——」

「幸い、楯無が口にしたサンクトペテルブルクに至るまではヴォルガ川源流やモスクワ運河、レイビンスク湖、シエクスナ川、オネガ湖、ラドガ湖などの河川や湖が。」

ムルマンスクは南に27000もの大小様々な河川と約6000

0もの湖を持つカレリア共和国があり、前述のサンクト＝ペテルブルクの時に触れた面積で言えばヨーロッパ第1、第2の湖であるラドガ湖とオネガ湖がある他、ムルマンスク州にもポノイ川、ヴァルグザ川などの河川やイマンドラ湖などの水場があり、さらには不凍港で知られる軍港セヴェロモルスク、そして世界最北（緯度はハンメルフェストの方が高いのだが。）の不凍港たるムルマンスクが存在している。

——それらの要素から見れば、水を隠避する習性を持つバルゴンに対してサンクト＝ペテルブルクとムルマンスクは防衛に関して理想的な立地と言える。

—— “ 今のところは ” 。

「ロリシカに租借地を提供して貰うとかは出来ないんでしょうか……」
「無理よ。」

—— ロシアはロリシカ独立戦争時にロリシカに対して2発の核ミサイルを放ち、32万人もの民間人を虐殺しているわ。

それに関して謝罪はなし、おまけにそれ以降に発生したバルゴンの相手をロリシカに押し付けて体の良い肉壁として利用したし、防衛線崩壊後はシベリアで核ミサイルを乱発して『プチ核の冬』を起こして寒冷化や微量とはいえ放射能混じりの積雪でロリシカ国民を苦しめてるから—— ロリシカの反露感情はピークに達しているわ。」

またさらりと—— 人類を隔てる現実を告げる。

—— だが、シャルはそれについては分からなくもなかった。

日本人ならば「水に流す」という行為を行うだろう。

しかし世界全てを探してもそんな習慣を持っているのは日本人だけなのだ。

—— 他の民族であれば、受けた痛みを忘れない。痛みを受けた怨みを決して忘れない。

痛みを与えた者に対する復讐心を決して忘れない。

痛みを与えた者を決して許しはしない。

許しを得たいのならば、誠心誠意をもって代償を支払い、隷属し、奉

仕することで信頼を得るしかない。

——ほとんどの人類は日本人のように【お人好し】などではないのだから。

——ぐう。

「あ……」

ふと、シャルロットがお腹を鳴らしてしまう。

「あ、ごめん。お昼まだだったわね。じゃあコンビニに買いにでも行きましょうか。」

「そうですね、お腹空きましたし……」

そう言つて、楯無はシャルを連れ出した。

「……ところでタッグトーナメントはサボって良かったですか？成績に関わりますよね？アレ。」

「うゝっ……！そ、そこは……死に物狂いで単位稼ぐしかないわね……」

????????????????

——同時刻。

第2アリーナ第3選手控え室

千尋達がいる控え室と同じ造りの部屋。

——そこにラウラ・ボーデヴィツヒはいた。

……ペアの女子はいない。

否、他の生徒たちもこの部屋にはいない。

誰もが “ 問題児 ” であるラウラと同じ部屋にはいたくないと考え、別の部屋に行ったのだ。

…いわゆる孤独。

言い方を変えれば独占。

そんな状況になった部屋にラウラはいた。

(ふん…孤独とやらには慣れてはいるが……。)

ふと、ベンチに座りながら内心呟く。

そして数泊開けてから部屋を見渡す。

盗聴器の類が無いことを確認すると、はあ…と大きく息を吐いて。

「…いつまで、私は『備品』でなければならぬんだらうな…。」

学園に来てから、否。作られてから継続的にひた隠していた本音を吐露する。

——ドイツ軍技術開発局 I S 科所有物『I S 高適合型
ホムンクルス
人工生命体 Ver 1. 21—18号／仮呼称名：ラウラ・ボーデ
グイツヒ』。

2016年からウクライナで発生した大規模な巨大不明生物との戦争とそれを隠蔽したい国連によってドイツ国民の関心をウクライナから I S に向けさせるべくして始まった軍用 I S 搭乗者創造のための【ホムンクルス計画】——それによって生まれた…否。作られたラウラの本名。

人体実験の末に失敗作として世に作り出されたデザインチャイルドの名前。

人類に偽りの平和という幻想を享受させて凄惨な現実から目を逸らさせるために製造された “ ドイツ軍の『備品』 ” の名称。

【廃棄処分】されまいと死に物狂いで計画に従事した人形の名前。

織斑千冬に憧れた少女の名前。

織斑一夏を倒すと誓った元千冬の教え子の名前。

同じドイツ軍兵士で前線帰りであるユリアに打ちのめされたドイツ軍人の名前。

篠ノ之千尋に織斑を倒された八つ当たりの矛先を向けた人間の名前。

——だというのに。

(本当に、これで良いのだろうか…?)

内心に産まれたその疑念がラウラにあった『教官を取り返しドイツで再び教えを請う』、『織斑一夏を倒した篠ノ之千尋を打ちのめす』——その鉄の意思を錆びさせていく。

仮にそのふたつを成したとして、ドイツ本国で千冬に教えて貰っていた頃を再度行えるとは限らないからだ。

——考えてみれば分かるような簡単な話なのだ。

教官を取り返すというが、それには織斑千冬という公務員をどうするか日本国外務省とドイツ大使館で協議する必要がある。

日独両国の合意無しに無理にでも千冬を連れ帰ろうものなら、それは拉致——犯罪行為と変わらない。

次に織斑一夏を倒した篠ノ之千尋を打ちのめそうとしても、まず両者にメリツトは無い。

満たされるのはラウラの自己満足感だけ。

——そもそもドイツ軍技術開発局IS科の下にいる限り、ラウラに自由はない。

そんな根本的な問題を、ユリアに罵倒されるまで気付かなかった。

(…結局は浮かれていたのだろうか…?)

内心、呟く。

いや、そんなことはない。

(だって織斑教官を救い出すために織斑一夏を倒すと——

——え?)

そこでラウラは気付く。

織斑一夏を倒す必要などどこにも無い。

むしろ千冬を悲しませ、怒らせる原因になると理解した。

さらに言えば、織斑一夏を打ちのめした篠ノ之千尋を倒すことの方が、よっぽど意味がないと理解した——否、理解してしまつた。

——瞬間。

「——っ、あッ!!」

突然頭に走った、無数の針に刺し貫かれるような痛みにも、ラウラは

思わず短く低い、呻くような悲鳴を上げてしまう。

——脳に埋め込まれたマイクロマシンが放電を発し、脳を焼きかけたのだ。

ラウラ・ボーデヴィツヒはドイツ軍技術研究局IS科の備品である。

故に人権は存在しない。

備品である以上、人間の指示に従わねばならない。

僅かでも反抗の意思と見られるものが確認されようものならば脳に放電し、反抗的思考を制圧する。

それでもなお反抗の意思を表明し、制圧が困難である場合脳そのものを焼き、処分する——すなわち、それは非常時の安全装置であった。

ラウラ・ボーデヴィツヒはそれに従わねばならない。

従わなければ「処分」される。

だからこそその思考を消し去り、ラウラは既存の思考を無理矢理再構築する。

「——はあつ、はあつ……そうだ……私は織斑教官を連れ戻して……織斑一夏を倒した篠ノ之千尋を倒さねばならない……!!?」

珠のような汗を浮かべたまま、死に物狂いで思考を再構築する。

生命あるものにある生存本能をついたシステムからは逃がれられない。

まだ生きていたいと望むラウラ・ボーデヴィツヒはマイクロマシンの放電から逃れるべく、『自らの思考』を封じ込めた。

しかし、ラウラ・ボーデヴィツヒは気付いておらず、また記憶から消されていた。

帰属先の意向に背く思考をしても、今日この瞬間まで——学園に来てから一度もマイクロマシンは起動していないという現実を。

そしてドイツ軍技術研究局IS科そのものが、天災の傀儡であることに。

「……ああ。仕留めてやるとも、篠ノ之千尋……!!?」

――それを知らないヒトガタは、ただ第3者の期待と用意した脚本に沿うように操られることしか出来なかった。

前9時45分

館山市内房なぎさライン沿い・コンビニエンスストア

楯無は自分とシャルの分の朝食を買いに訪れていた。

買い物カゴの中にはサンドイッチや簡易サラダ、コンビニ弁当などが入っている。

ちなみにコンビニ弁当は楯無の分であり、サンドイッチはシャルの分である。

最近のコンビニ弁当は質や味が良くなり、温めてさえいれば捨てた物ではない。

だがシャルの口には合わない恐れがあり、比較的欧州でも馴染みがあるだろうサンドイッチにしたのだ。

そして現在はレジに並んでいる。

「――やっぱり行っちゃうの?」

ふと、レジの方から声がしたために前を向く。

レジの店員が楯無の前で会計中の買い物客と話をしているのだ。

「どうやら親しい仲らしく、お互いに砕けた口調で会話している。

「ええ、主人が『俺の事は良いから長野の実家へ疎開しろ』って…。」

「疎開…ねえ。この時分でそんな言葉を聴くなんてね…。」

（――それに関しては、同感ね。）

楯無は内心呟く。

今現在の平和な時代からしたら違和感の塊でしかない言葉だ。

「――」「――」
「いつ頭上から核ミサイルが降ってきてもおかしくない」
「多分今日は大丈夫…と違って明日にでも来るかもしれない」
「全面核戦争による人類滅亡」
「に怯えながら生きてきた冷戦時代だって疎開なんてモノは無かった。」

「最も人類滅亡に近づいた」
「とされているキューバ危機当時だって疎開なんて無かった。」

東日本大震災とその後の原発事故に至ってから、自主避難と呼ばれているが疎開が実施された。

だが、楯無が『疎開』という単語自体を国民から耳にするのはこれが初めてだった。

——みんな分かっているんでしょね：マスコミがユーラシアの戦況を報道せず、野党が必死で保守第一党を叩いていて、平和ボケしているように見えても、いつかは日本が戦場になるじゃないかって…。）

——国民の平和ボケが削がれつつあるのは良い事だ。

しかし日本が戦場になるという結果は楯無も望んでいない。

むしろ平和であった方が遥かに良い。

だが、それはもはや回避不可能な話でもあった。

・
・
・

「はあ…。」

溜息を吐く。

(さっきの話を考えるだけで憂鬱…。)

会計を終えた楯無は内心そう思う。

しかし自分ではどうしようもないというのが現実だ。

——それより、今はシャルを表で待たせてしまっている。

「…よし!!?。」

——気持ち切り替える。

コンビニの自動ドアを開けて外に出る。

「ごめん遅くなって——…。」

しかしそこでは楯無は異変に気付く。

——シャルがいない。

代わりにシャルが持っていたバッグとケータイだけが落ちている。

——まさか…攫われた☒

直感的に楯無はそう察する。

(なんて、迂闊——!!?)

店先に待たせて置かず、連れて来るべきだった——と内心思
い、同時に数分前の自分を張り倒したくなる。

しかし嘆いても何も始まらないので、とにかくシャルの位置を探ろ
うと、彼女の服に仕込んだGPSを探知するべく、スマートフォンを
取り出す。

場所は——館山市南部・南館山港。

(急がないと——!!?)

間暇入れず楯無は地面を蹴り、走り出した——。

?????????
間時刻・沖ノ鳥島の東10キロの海域
海底基地【ムウていこく】

そこはレッチ島からの脱出に成功し、高速艇と潜水艇の能力を併せ
持つ『グローリー丸』で辿り着いた、篠ノ之束のラボがある海底基地
だった。

——無論、御都合主義で事をなしてしまいう束であっても、
この海底基地の全てを作ったわけではない。海底に基地を作るのは、
無人島に基地を作るのとはわけが違うのだ。

事を隠密に成そうにも、日本の潜水艦探知網は異常なまでに高度な
もので、束の御都合主義能力を持ってしても気付かれないで続ける
のは至難の技だった。

——そんなところに運良く見つけたのが【ムウていこく】
の軀体となった旧大日本帝国海軍の作った潜水艦の修理基地だった。

若干浸水していたものの、80年前に作られたとは思えないほどに
保存状態が良く、当時の酸素が残されていたその基地を再利用すると
いう選択肢を選ばない手は無かった。

「ああもう、危ない危ない…」

コンソールを叩きながら束は声を漏らす。

————モニターには1人の少女と、その少女の脳髓らしきモノがデータ化された上で投影されていた。

「全く、せつかくの手駒がまた離れちゃうとこだった…」

Laura Bodhewig …

Micro machine arise . —————ラウ

ラ・ボーデヴィツヒ：マイクロマシン起動。

そのように英語で表記されていた。

「いっくんのマイクロマシンが壊れちゃったから、自己不信になってるが心配だけど…まあ、IS操縦能力は残ったままだし、大丈夫だよね!!?…あとはいっくんと箒ちゃんをくつつけようとするのを邪魔してるのと束さんの白式を散々ボロボコにしてくれたクズガキをぶっ飛ばしていっくんのマイクロマシンを治せば『いっくんハーレム計画』は安泰だね!!?」

自信満々で束はそう言う。

—————そこにある感情は自己満足だけではなく。

「…だってそうじゃなきゃ、いっくんが可哀想だもん…ううん、いっくんだけじゃなくて、ちーちゃんも、いっくんに想いを馳せてた箒ちゃんも…。」

—————ただ純粹に、しかし方法は歪な形で他者の幸せを成そうとする感情があった。

そもそもなぜ織斑一夏にマイクロマシンを埋め込んだのか、答えは単純だった。

—————何故なら今の織斑一夏は束のマイクロマシン無しに生きていけないからだ。

第2回モンド・グロッソにて織斑一夏は攫われ、ドイツ軍協力の下、大会を棄権した織斑千冬が救出した。

…ここまでは合っている。

しかし救出時に思わぬイレギュラーがテロリストによって引き起こされたのだ。

織斑一夏を攫ったテロリストの銃弾——それが一夏の頭に命中してしまうという、イレギュラー。——それが一夏の頭に命中してしまおうという、イレギュラー。——『一生

辛うじて一命こそ取り留めたが、遺されたのは——『生涯涯【脳死】状態で緩やかな死へと向かう日々を過ごすことになる』という残酷な結末。

——そんな結末なんて、可哀想過ぎる。

——そんな結末なんて、救われなさ過ぎる。

——そんな結末なんて、認められない。

——だからマイクロマシンで欠けた脳を補完し、出来る限り脳死以前の一夏の人格をデータ化・インストールさせた。

そして、せめて幸せな世界で生きられるようにと、IS操縦能力を付与させて。

——舞台は整った。

——役者は揃えた。

——万事完璧だった。

なのに——またイレギュラーが起きた。

溺愛してならない妹の箒が自分に黙って養子を取っていた上に、既に関係が出来てしまっているのだ。

——信じられない。

——箒ちゃんはいつくくん一筋のハズだったのに。

——否：そうでなくてはならないのに。

——そうでなくてはいつくんが幸せではない。

——そうでなくては箒ちゃんも幸せではない。

——だからあの養子になったクスガキは殺さなきゃいけない。

——いつくんと箒ちゃんが幸せになる為には邪魔だ——だから

——殺さなきゃ。

——いつくんが幸せになるためなら、どんな犠牲を強いても構わない。

——何処の馬の骨とも分からない奴が死んだって、知った事じゃないんだから。

「…東様。」

——ふと、澄んだ声が束の鼓膜を震わせる。

ラウラと同じ白銀の髪。

瞼は閉じて——しかし淡白な表情の中に何処か母性を孕んでいる女性。

ラウラ・ボーデヴィツヒの姉にしてドイツ軍技術研究局IS科のホムンクルス——「クロエ・クロニクル」がそこにいた。

「ああくーちゃん、どうしたの?」

「…妹が——いえ、ラウラ・ボーデヴィツヒが試合を開始する様です。」

「そつかあ。じゃあ『アレ』が起動したら起こしてね、ちよつと寝るから。」

「…しかし『アレ』が起動するのはシールドエネルギーが2割を切つてからでなければ起動しないのでは…?」

「ん?…ああ、多分それくらい削られるよ。歯痒いし認めたくない話だけどあのクズガキ、中々やるみたいだからさ…あとはいくーちゃんの妹がチームプレイ皆無の俺TUEE系じゃない?だから削られるつて。」

「……。」

「そんなの見てたって不愉快だし、『アレ』が起動してクズガキがボコボコにされてるところしか見所ないよ……。じゃあちよつと寝るね…。」

そう言うと束は、くあ…と欠伸をするとソファベッドに倒れ伏した。

——それを好機と見て、クロエはコンソールを操作する。束が技術研究局IS科を掌握し傀儡にしたからこそ、クロエは今束の部下として限定的ではあるが自由を得られた。

——しかし自分の幸福のために他人を、家族を犠牲には出来ない。

特に、家族を犠牲にしようとしている元凶の下にいるのに何もせず傍観するなんて出来ない。

「——データの改竄は…ダメ、ロックされてる……。」

先程、『アレ』と言っていたものにアクセスしデータの改竄を試みるが、それは不可能だった。

何故なら束が仕掛けた嚴重なプロテクトがあったからだ。

仮にも世界各地のミサイル基地をハッキングできる天災。故に並みのプロテクトではない為ハッキング等の情報電子戦専門クロエにも書き換えるのは不可能だ。

——ならば…改竄ではなくデータの追加はどうか？

ふとした思い付きからクロエはデータを確認する。

——予備スロットは空。すなわちデータの追加は可能だ。

それを見るなり即座にコンソールを叩く。

「………よし……!!？」

——そして、データの追加に成功した。

——V. T. システムに「Delayed virus

／Orga」の追加情報。

そう履歴に標示されるが、その履歴をすぐに削除する。

——…これが束にバレれば自分は殺されるだろう。

だが。

「あの子が生きてくれれば…それで構わないですね…。」

束がまだ眠りについていいる中、静まり返った管制室でクロエはぼつりと呟く。

——視線の先にあるモニターでは、ラウラと千尋達が戦闘を開始していた。

EP—33 タツグトーナメント2日目(中)

6月13日午前10時15分・南館山港

薄汚い、寂れた港。

散乱するゴミ。

棄てられた主無き船。

ひび割れた栈橋。

廃港を包み込むような濃霧。

再開発された館山市とは正反対の、過疎地域特有の景色を持つ南館山港。

——そこにシャルはいた。

「悪く思うなよ、あたしらの祖国のためなんだ。」

ロープで縛られたシャルに銃を突き付けながら、女が言う。

——流れるような金髪。

——澄んだ碧眼。

——若干の脂肪に弛んだ身体。

——強い訛りのあるフランス語。

——数十分前に楯無と話していた男と同じ雰囲気。

「…貴女ロシア人でしょう?」

冷めた瞳で見つめながら、シャルは口にする。

「随分落ち着いてるな…。まあ、いいか…。ああそうだ。あたしらの目的はね、あんたみたいな人間を掻き集めて兵士にする事さ。」

「…祖国のため——というワケですか。」

——やはり、冷めた声音でシャルは淡々と語る。

——周りにいる女はシャルに銃を突き付けている女を含めて4人。

——要するに、彼女らの任務はシャルのような人間…すなわち日本国籍を持たないが同時に本国籍も持たない人間を拉致し、本国に送り兵士に作り替えるというものだ。

銃の扱いさえ教えればそれ相応にはなる——という考えなのだろう。

当然、こんな行いはどう考えても非合法であり、人権を踏みにじる

行為として国際社会や日本国政府から糾弾されてもおかしくないものだ。

だが悲しいかな、国際社会ではそうでも、日本ではそうではないのだ。

—— 過去、北朝鮮によって公式に認可された人数で17人、未確認では868人もの日本人が拉致されるという事件が起きたにも関わらず、日本は海上保安庁による領海の安全確保を図ったのみで、国内で再度拉致事件が発生した際の対策法が存在しないのだ。

—— そう、800人以上もの国民を拉致されていながら、それに対する法整備を行わなかったのだ。

ロシア政府はそこを突いて、日本国内での非国籍保有者の拉致作戦を敢行した。

—— それは日本のように平和ボケした国家でなければ不可能だから。

そして、非国籍保有者が拉致された事実が分かったところで全ての国民には伝わらない。

何故ならば日本国内の報道局のほとんどは既にロシアや中国、韓国などが掌握しており、報道局が支持する国家に対して不利な情報は流さないようにしているからだ。

—— これもまた、日本人の平和ボケという病気を利用した間接侵略作戦と言える。

「まあアンタは特別さ。…元フランス代表候補生だしね。」

—— 他の連中は肉壁にしかならないような奴ばかりさ。」

ロシア人の女が言う。

つまりそれは、シャル以外にも拉致対象となる人間がいることを告げていた。

—— シャルは知らないが、日本には東京都心部だけで2000人ももの無国籍者がいる。

彼らは当然生活保護・行政の対象外であり、彼らが日本を去ったとしても日本政府はこれに一切関与しない。

日本政府が関与する時は不法滞在として逮捕する時のみ。

———その中に仮国籍者も含めれば、恐らく5000人は下らない。

それだけの人数を拉致するというのだ。

———だが、シャルに疑問が生まれる。

「…でもどうやって拉致する気ですか？船や飛行機で連れ出そうにも、税関で引つかかるでしょう？」

———日本は極度の手続き大事主義だ。

そうなれば、税関などは厳重な管理体制が敷かれている。

そのシャルの問いに対し、ロシア人の女は鼻を鳴らす。

「だからこういうところを使うに決まってるじゃないか。」

———廃墟と化した南館山港に顎をしゃくる。

「日本は最近都市部への人口過密化で地方の過疎化が酷くなっているね、地方の行政が取り壊そうにも金が無くて放置されたままの廃墟や廃港がゴロゴロあるわけさ。」

ふと、汽笛を鳴らしながら沖合から輸送船が停泊して来る。

艦首には『дельфин(ズルフン)』———ロシア語でイルカを意味する言葉———という艦名らしきキリル文字が刻まれている。

「ああ、ミコラーウ社からのお出迎えか…予定より早いな。」

ミコラーウ社———ロシアの大手IS企業の事だ。

シャルのいたデュノア社のライバル企業リストにも載っていたから名前だけは知っていた。

「…まあ、世の中こんなものだよな。」

———シャルはふと溜息をついて、ポロリと口にする。

「ああ、連れてかれるのが寂しいのかい？」

———まさか。今まで散々な人生でしたから、慣れてますよ。
…それに、ただ獄死するか野垂れ死ぬかの終着点が変わっただけでしょ？」

シャルはやはり、淡々と、諦観に満ちた口調で呟く。

———でも。」

———ふと、自分を振り回して困らせてはいたものの、同時

に楽しませてくれていた楯無の姿がフラツシユバックする。

——なんて、傍迷惑。

——なんて、自分勝手。

——なんて、マイペース。

——なんて、自己中心的。

——なんて、お人好し。

——なんて、無駄に優しいのか。

ああ、なんて——あそこまで優しくしてくれたのか。

ふと、内心そう思うと同時に自然と涙が零れ落ちる。

——シャルをあそこまで人として扱ってくれた人間はいなかったから。

今までなら父が利益を得るための道具として扱われ、義母からは、「おまえさえ居なければ私の遺産は減らなかつたんだ」、「泥棒猫め。」と罵られ、暴力を振るわれ。

——いつしか、「個」なんて要らない。こんなに苦しいなら道具になってしまえば良いと、そう願ひ、そうなる事に没頭してしまっていた。

それが今ではどうか。

『——日本に亡命すれば良いのよ。』

そんな風に声をかけてきた少女に振り回されながらも、人並みの悦びを蘇らせてくれた。

——素直に告白すれば、楽しかった。

けれど、もうそれも終わり。

楽しかった昨日の思い出と、その終わりに対する諦観から、思わず小さな笑みがこみ上げてくる。

「なにがおかしい?」

『——いい夢を見させてもらった、かな…。』

気付けば頬を涙が伝っていた。

「…下を向いてな、その方が楽だよ。」

女が言う。

だからシャルは下を向く。

——ああ、確かに楽だ。見たくない世界から目を逸らし
て、自分の足元だけを見ているだけで済むのだから。

ほんのささやかな現実逃避。シャルを支配しているのは諦観。

泣き叫んだところで誰も助けに來ない。なら、現実から目を逸らし
た方が少し楽だ。

「…ね、ねえ、おかしいわよ?」

ふと、女ボスの部下が言う。

「ズルフン号…いくらなんでも速すぎない?」

それに釣られてシャルも顔を上げる。

——確かに輸送船…ズルフン号は停泊するにしては勢
いがあり過ぎる。

そして濃霧に映っていた艦影は速度を緩めることはなく——

突然、視界いっぱいには鉄の塊が濃霧を抜けて迫り來る。

正面のサイズだけでゆうに50メートルはある。

…そんな巨大な代物が迫り來る。

——速度は落ちない。

——巨大な波を立てながら迫り來る。

——全長257メートルもの鉄の壁が、棧橋目掛けて突っ

込んで來る。

「た…退避——!!?」

女ボスが叫ぶ。

しかし、もうすでに遅過ぎた。

ズルフン号は止まらない。

船底が浅くなっていた海底を擦るが、止まらない。

巨大な波を打ち立て、停泊していた廃船を次々と飲み込み、破碎し
ながら28ノット——時速51.9キロの速さでコンク

リート造りの棧橋に激突する。

——しかし止まらない。

棧橋のコンクリートを抉り、砕きながら進撃する。

女たちは逃げ出そうとするが、間に合わない。

——人間の平均時速はわずか5キロ。

——迫り来る鉄の塊は時速51.9キロ。
逃げるにはあまりに速過ぎ、またあまりに時間がなかった。

——コンクリートを砕きながら、嘲笑うかのように女の1人を飲み込み粉碎する。

ぐちやぐちやという肉が潰れる音。

ごきやりごきやりという骨が砕ける音。

そして女たちを追い抜いて——コンクリート造りの堤防に乗り上げる。

地震と錯覚してしまうほどの衝撃がシャルや女たちを襲い——

——それでやつと、ズルフオン号は停止した。

「……な……」

女の1人が声を上げようとするが、声は出なかった。

——自分たちを踏み潰さんとばかりに進撃してきたズルフオン号と、

「なんだ……これは……ズルフオン号に、何が……」

船体に刻まれた、無数の切り傷に圧倒される。

切り傷はまるで、猛獣が引き裂いた動物の肉のように鉄の船体は引き裂かれていた。

しかもそれは1ヶ所だけではなく、2ヶ所、3ヶ所……とにかく多く刻まれている。

女たちは、それを見て唾然とするしかなかった。

——なにせ、ズルフオン号に仲間を1人殺された上に、ズルフオン号に正体不明の切り傷が無数にあり、ズルフオン号という逃走手段を失ったのだから。

——それをシャルは、冷めた瞳で見ている。

その視線に気付いた女の1人が、

「何見てんだ!!？」

自分たちの置かれた立場に気付いてしまったが故に怒りを浮かべて、八つ当たりにシャルの顔を蹴り飛ばす。

「うぐッ……」

突発的な頬への痛み。

ヒリヒリとした痛みが頬から全身へと波及し、神経を伝って脳に伝播する。

「くそ、せめてこいつを捨ててズラからないと…!!?」
自分を殺す、と女が言う。

——けれどシャルは気にならなかった。

なにしろ、シャルからしてみればここで死んでも構わないから。人らしく生きて、人らしく死ぬことが出来ないだけで、最終的に『死ぬ』という生命の終点は変わらない。

だからここで死んでも構わない。

——ああ、けれど。

（——最期に、先輩にお礼くらい言いたかったかな…）

ぼんやりとそう思う。

——こつん。

小さな——けれど存在感の強いコンクリートを踏みつける音。

それはシャルにもシャルを蹴っていた女にも、未だに現実に戻れていなかった女の耳にも入ってくる。

——ふと、全員が音のした方を見ると、その先に人影が映る。

女だ。

「——」

しかしシャルの意識が凍る。

そうとしか言えないほど、その女はボロボロの貨物船が突っ込んでいる地獄絵図めいた事故現場と化した廃港には、あまりにも不釣り合いとしか言いようのない容姿だった。

——全てを呑み込むようで中身が無いような、漆黒の髪。

——それと反発するようなシスターの服装に似た白いワンピース。

——無彩色の髪と服の中に血痕のように両目へ穿たれた

赤眼。

——全体的に白い、日本人形のような肌。

その女はまるで幽霊か人形か何かと勘違いしてしまうほどに人間らしさがない”。

彼女の履いているボロボロのレザーシューズが地面を蹴る音。

一步一步、こちらに近づいてくる。

揺れる髪。

すれる衣の音。

その動作のひとつひとつにシャルは釘付けにされる。

品定めするようにもう一度容姿を見る。

アジア人特有の玄い髪。

病人か死者のように白い肌。

細く幽美な身体。

「こちらの魂を見透かしているかのような、赤い紅い瞳。

なぜ彼女がこんなところにいるかは分からない。

彼女が何者か分からない。

そもそもそれを思考するだけの余裕が脳に残されていない。

「それだけ、シャルにとっては衝撃的な容姿だった。

「動くな！アンタ、何も」

女の1人が怯えた口調で拳銃を向けて命令する。

しかし遮って。

どんっ、と女性が地面を蹴る。

「10メートルもの距離を僅か1秒で抜けて、女の1人

に詰め寄る。

そして女の目を覗く女性の瞳が迫る。

その瞳は、尋常ではない。

鮮血のように紅く、獣のように鋭い瞳には感情がない。

「正気では、ない。

「え」

女性の接近にやっと気付いた女が間拔けな声を上げて。

「喉に、女性の指が突き刺さる。」

——ぐちゅり。指が表皮から真皮、皮下組織を軽く貫かれ、肉が潰れる。

——ぶしゃり。皮下組織の肉ごと動脈が裂けて鮮血が舞う。

——こきやり。そのまま頸推を碎き、続いて脊髄と棘突起までも碎く。

——ぶちり。そうして、女の首が吹き飛ばされた。

それはたった1秒にも満たない時間の中で繰り広げられた出来事
で。

声はなく。もとより声など声帯を潰された時点で消滅した。

首を喪った身体は糸の千切れた操り人形のようにコンクリートの
地面に崩れ落ち——真紅の赤絨毯が首から溢れ落ちた。

「な、あ——」

他の女の混乱に満ちた、しかし間の抜けた悲鳴。

それをシャルロットは、ただ見ていることしか出来ない。

そうして——朝陽の灯す廃港にて惨劇が始まった。

????????????
同時刻・IS学園第2アリーナ

——第4試合。

篠ノ之箒・千尋ペアvsラウラ、葛川ペア

アリーナ中央にはオリーブグリーンの機体塗装が施された打鉄甲
壱式を纏った千尋と箒、そして黒一色に塗られたシュヴァルツアレ
ーゲンを纏ったラウラ、そしてラウラのペアである葛川が纏ったラ
ファールリヴァイヴが対峙していた。

ボーデヴィツヒは沈黙。ただ無表情に2人を見下す。

「織斑くん……仇は討つから……!!？」

その隣ではボーデヴィツヒと対照的に、葛川が言う。

それに対し、『なんで織斑は俺に殺された的な扱いになってんの?』
と思わされるが問うたところで意味などない。

——余談だが、葛川とは先程のスペイン国籍の女子生徒と
共に千尋に暴行を加えた織斑一夏親衛隊のメンバーの一人だった。
つまり、今の発言もそういうことだ。

「千尋——」

「わかってる。作戦通りに動けば良いな?」

箒の声に千尋が応える。

2人のその顔には緊張は見られるものの、勝機は刻まれている。

——一瞬後、試合開始の号令が鳴り響き——
両者は突撃を開始した。

第2アリーナ管制室

「……ラウラ……」

神の玉座にて、千冬はぽつりと呟く。

——勿論、神の玉座とは比喻であるが、アリーナで繰り広
げられている試合の行く末に介入することも可能で、必要があれば観
客を客席ごとアリーナ直下にある第2シャフトに降下させることす
ら可能で、さらにはIS学園内における仮設指揮所ともなるから「学
園内では」という意味では、あながち間違っではない。

(…私が以前から大人になっていけば、お前はそんなに歪まなかった
のかも知れない…)

主モニターに映る、ラウラの暴力的な戦い方を見ながら、千冬は内
心呟く。

「——すまない。」

思わず、懺悔の言葉が口から零れ落ちた。

ふと、そこに横槍の言葉が突き刺さる。

「あら、何か言ったかしら？織斑教諭？」

「…いえ、何も。」

——言葉を発したのは、つい先日左遷された…というより、左遷した片桐一佐に代わってIS委員会が派遣した臨時理事長の女だ。

そして、千冬を傀儡にしていた女の一人でもある。

「そう。…不用意な発言は避けた方が良くてよ？貴方の弟が大事なから。」

「…肝に命じておきます。」

甘ったるい声で言う女に対して、千冬は昂然として答えた。

——大人になろうと決めたものの、IS委員会が無くならない限り、千冬は一生首輪付きのまま…それが現実だった。

千冬なら、今ここにこの女を再起不能にすることくらい可能だろう。

だがそれをすれば——実弟である一夏がIS委員会の毒牙にかかる可能性が極めて高かった。

例外を除けばどのような人間でも、家族の死という事態は回避したいと考える。

それは家族が最終的な精神の支えであり、心の拠り所であるからとされている。

——その心理を突いたIS委員会の工作は、今のところ上手く機能していた。

「…あんな男がISを巧みに扱っているのは不快極まりないけどね…まあでも、ドイツ代表候補生が叩き潰してくれるでしょう。貴女が鍛えたんだもの——ねえ？織斑先生。」

露骨な嫌悪感と期待の眼差しに歪んだ顔を千冬に向けながら問う。

——ラウラが負けた場合、あの娘や織斑一夏がどうなるかわからないわよ——と言外に言っていることを察し、千冬のは表情は険しくなる。

逆に臨時理事長は加虐的な笑みを浮かべる。

ふと、瞬間。

「理事長先生!!？」

どこかと電話を交わしていた真耶が声をかける。

それに臨時理事長は鬱陶しそうな顔をする。

「なんなの？騒々しい。」

「海上自衛隊護衛艦【くらま】より入電。IS学園の南方100キロ：見宅島沖を時速40ノットで潜行する物体を捕捉したとのことです。」

それとは対照的に、真耶は焦燥に駆られた声で告げる。

「それがどうしたの？潜行物体ということは潜水艦風情でしょう、騒ぐことでもないわ。」

やはり臨時理事長は鬱陶しそうに応える。

——それに、真耶は目を見開く。

潜水艦を自国の領海内に侵入することを許しただけでも大事なのだ。

：なにより、潜水艦を発見しても現行法では自衛隊による潜水艦への対処法は限られてしまう。

だが、それ以前に——。

——理事長先生、お言葉ですが時速40ノットで航行可能な潜水艦は、今現在どの軍隊にも存在しません。」

——その言葉に臨時理事長はピクリと反応し、真耶の方を向く。

「じゃあ、なんだと言うの——？」

その顔に先程までの加虐的な表情はなく、あるのは蒼白を通り越して——土気色に染めながら、何が来るかを察していながらも、理解したくない表情だった。

??????????????

IS学園第2アリーナ・闘技場

空に舞う砂塵と、破壊され一部は燃え盛る遮蔽物群から漂う噴煙。それらを背景に金属がぶつかる音。風を切る砲声。大気を劈くジェット音が、世界を支配している――。

それらを取り囲むようにアリーナの観客席が無ければ、本物の戦場と見違えるような景色がそこに展開されていた。

「はあああああああああつ!!」

そこに新たに響く――ラウラの雄叫び。

それと共に、右腕のプラズマブレードが遮蔽物の中で近接格闘戦を繰り返している千尋目掛けて斬り放たれる。

「――っ」

千尋はそれを、すんでのところで躲す。

プラズマブレードは虚空を裂き――直後、隣接していた金属製の遮蔽物を斬り裂く。

――膨大な熱によって、遮蔽物はバターののように溶断される。

「てええええいつ!!?」

そこからおよそ10メートルほど離れた場所では、同じように葛川がブレードナイフを突き出すようにして、箒に斬りかかる。

「ふんっ――!!?」

それを箒は、装甲刀剣で受け流し――

「あ――」

葛川がナイフを突き出した体制で硬直したまま、間拔けな声を上げた直後。

反復横跳びをするように、葛川の横に跳躍し――地面を強く踏みつける。

地面に亀裂が奔る。

土塊が舞う。

膝関節を曲げて、脚に力を込める。

下段に向けた刀を握る手に力を込める。

――その0.6秒後、曲げて、力を込めていた脚をピンと伸ばし、バネ人形のように飛び上がり――

「はあッ!!?」

—— 込めた力を爆発させて、半月を描きながら下段から上段へ刀を振り上げる——!!?」

「が、あッ☒」

直後、ガアン!!?という低く鈍い重低音を響かせながら刃が葛川の顎を殴打——単純に数値化して4トン以上もの圧力が葛川を襲い、そして文字通り彼女を3メートル打ち上げる。

—— 衝撃が葛川の脳を揺さぶる。

すかさずISスーツの操縦者保護システムが作動し、脳の保護に当たる。

—— しかし、ISスーツがカバー仕切れるのはわずか4トン丁度の衝撃まで。

つまり—— 4トンより上の衝撃は直接脳へと襲いかかる。

「あ、ぐ——」

—— 単純な数値にして200キロ程の衝撃が脳を震わせる。

ボクサーならまだしも、頻繁に脳に衝撃を受ける経験のない一般の女子生徒がそれ程の打撃を受ければどうなるか。

—— 普通なら、脳震盪ですぐに失神してしまうだろう。

「ま、だ—— まだ、よオ!!?」

—— だがしかし、葛川はすぐに意識を立て直す。

その目は何処か、野獣じみた血走り正気さを感じさせない瞳——

—— それを見て、箒は毒づくように内心舌打ちする。

(ドーピング—— おそらく簡易興奮剤の類か——
?)

なにも、ドーピングは珍しくない。

箒や千尋は経験こそ無いが、特自の訓練でも実戦を想定したものは興奮剤や鎮静剤などの後遺症が残らず一過性戦術薬物を用いることがあるからだ。

—— しかし、今回のような公の試合の場でのドーピングは言うまでもなく、違反行為であり、薬物法違反にも繋がるため、大

会ルールのにも法律的にもアウトだ。

(…もつとも、口にする暇がないのが、な。)

脳は冷静に事象を分析する。

しかし肉体は激しく動き回らなくてはならないため、声を出すことで酸素を無駄に消耗し、息切れを起こすことを避けるために、黙るという選択肢を取ろうとする。

「織斑君への、愛のためにもおお…」

——その葛川の一言が面白く、箒は久方ぶりに意地悪そうな笑みを浮かべると、

「ふん、まるで——汚泥のような愛だな。」

——冷たく言い放った。

それと同時に——

「そうね、身を穢した人間は、昔から悲惨な最期を遂げるものね——」。

(——ツ☒)

——息が詰まる。

溶かした砂糖が耳にこべりつくような幻聴^{こえ}。

ナイフの刃が喉仏に突きつけられたような幻覚^{かんかく}。

久方ぶりに聴いた、柳星張^{イリス}の声。

——背筋に悪寒が奔る。

一瞬——心臓を締め付けるような幻痛^{いたみ}が全身へ波及する。

——直後、葛川が獣のように荒い息をしながら涎を撒き散

らしながら突撃して来て——

「——はああああつ!!?。」

幻痛を紛らわすべく、雄叫びを上げる。

——歯を食いしばりながら、箒は再び葛川に迷い無く斬撃を繰り出した。



――打ち上げられる土塊。

――粉砕されるコンクリート。

――焼き切られる大気。

――木霊する雄叫び。

箒と葛川から十数メートル離れた場所では相変わらず、千尋とラウラが近接格闘戦を展開されていた。

「はああああッ!!?」

ラウラの雄叫びと共に大気を焼きながら振るわれるプラズマブレード。

それは、千尋が右手に保持していた30ミリ機関砲を切断する。

「ちっ――」

千尋はすぐさま機関砲をラウラに向けて投棄――そのままプラズマで溶断され、融解した装甲の熱によつてマガジンの弾薬に籠められた火薬に引火し、ラウラの至近距離で爆発する――
だが。

「――遅い。」

爆煙が晴れ、無傷のラウラがほくそ笑みながら言う。

――再び千尋は舌打ち。

ラウラは機関砲が爆発する直前、不可視の壁を形成し、爆発からのダメージを防いだのだ。

「AICか――」。

分かつてはいたが、改めてその厄介さを理解する。

原理は不明だが、対象の慣性を制御し拘束するシステム。

――今の不可視の壁は、爆発から身を守るために自分の前にあつた大気を圧縮して形成したものだつた。

――確かに、厄介だ。しかし、

「厄介ではあるけど、それだけか?」

冷めた表情のまま尋ねる。

「…なんだと?」

「そのままの意味だ——A I Cなくして何も出来ないのか——

と。」

それにラウラは顔を歪める。

——「どうやら、痛いところを突かれたらしい。」

「凶星か?」

冷めた表情で言う。

「ほぞげ——雑魚が!!?」

しかし不快感は示したものの、ラウラは努めて冷静にプラズマブレードで斬りかかる。

「はあああああ!!?」

ラウラの雄叫び——同時に、再び放たれるプラズマブレードの斬撃。

「——ふんッ」

千尋は、シエルツエンでプラズマブレードを受け止める。

——それは愚策だった。プラズマブレードがシエルツエンの爆発反応装甲に触れて融解し、熱によって内部が蒸発し、体積膨張とによる爆発を誘発させる。

特に爆発反応装甲の場合、プラズマブレードは衝撃がないためにゼロ距離迎撃は行えず、さらに内部に仕込まれた火薬が熱で誤爆しかねないためにそれは悪手中の悪手——。

「——マヌケめ。」

ラウラもそれを理解しているが故にほくそ笑みながら、強者の余裕とでも言うかのように言い放つ。

——しかし、その期待と展開は、爆発反応装甲がプラズマブレードを “ 弾いた ” ことによって裏切られる。

「な——」

ラウラは愕然とする。

あるべきはずの展開に繋がらない。

信じきっていた展開に繋がらない。

——思考が混濁する。

――驚愕で肉体が強張る。

――一瞬、ラウラは停止する。

――一瞬、ほんの一瞬。

しかし、千尋にとってはそれで充分だった。

「マヌケは――」

千尋は、シエルツエンを持つ手を僅かに後ろに引く。

――同時に、脚は前へ踏み出す。そして、

「てめえの方だ――」

荒んだ、しかしどこか澄んだ声が響く。

直後、シエルツエンがラウラに殴りつけられる。

――爆発。

全ての爆発反応装甲は刹那にして爆炎に。

そして、爆炎の中からまるでアスファルトを叩く梅雨の豪雨の如

く、内部に仕込まれていたタングステン合金の散弾が飛翔――

――ラウラを、滅多打ちにする。

「が――っ☒」

ラウラは列車に轢き飛ばされたような衝撃を全身に受けながら吹

き飛ばされ、呻く。

――しかし、その程度で彼女は倒れない。

「く――っ」

ラウラはすぐに態勢を立て直す。

そして復旧し切れていない脳をフル回転させて、何が原因でこう

なったかを思考する。

――プラズマブレードは爆発反応装甲に対して相性が良

く、普通なら爆発反応装甲を持つ相手だけがダメージを負う。

それが常識である。故に、ラウラはプラズマ装備を持つ自分に爆発

反応装甲で挑む千尋を馬鹿にしていた。

そして慢心していたが故の結果――確かに、そうだろう。

慢心していなければ千尋のシエルツエンを用いた左ストレートの

直撃を避けられたはずだった。

――だが、それだけでは説明がつかない。

それでは何故、プラズマブレードの直撃を受けながら、体積膨張や火薬の引火による爆発を引き起こさなかったのか——説明がつかない。

ラウラは歯をぎり、と鳴らす。

——実のところ、それは大した話ではない。

第2次宇宙開発黎明期において開発された耐熱耐超電磁プラズマ蒸散塗膜を幾重にもシエルツェンに施しただけ。

——いい加減な例えではあるが、車のフロントガラスや靴に撥水加工を施すことと似たようなものである。

故に、シエルツェンはプラズマを “ 弾いた ” のだ。

AICを使って拘束すれば、一方的にダメージを与えられたらう。

だがその直前の——『AICなくして何も出来ないのか』という言葉に反応して、無意識にAICで拘束するという選択肢を封じてしまった結果でもあった。

「貴様——」

他人に踊らされた。その結果がラウラに琴線に触れたらしい。

——ラウラは憤怒に顔を歪める。

荒んでいく呼吸のまま、千尋を凝視する。

そこにあるのは憤怒の他に敵意と殺意。彼女は左目を覆う眼帯を取り払う。……開かれた左目から、爛と輝く金色の瞳が覗く。

「殺してやる——」

——ラウラは本気を出した。

——応えるように千尋は右手に刃渡り80センチ、幅3センチ程の鉞のように分厚く小太刀のように長い刀身の大型マチェツトナイフを抜く。

「——そうかよ」

憤怒に満ち、荒んだ息をするラウラとは対照的に冷めた——

——しかし何処か獣じみた息遣いをしながら言う。

——今思えば、ラウラとアリーナで対面したのはこれが3回目。

1 度目はシャルとの訓練時。

2 度目は織斑がバリアを破壊した時。

そして今回——ふと思い出す。

織斑がシールドバリアを破壊した時、そのせいで箒は死にかけたのだ。

そしてその後、鏡はラウラの放った流れ弾によって再起不能の重傷を負った。

後者はもちろん、前者の直接的な原因は織斑だが、それを誘発させた間接的な原因はラウラだった。

——今やそれは前の話だ。今は関係ない。それに怒ったって仕方ない。もう前の話だから——もちろん許すわけではないが今は触れるべきではない。

そう、振り切った直後、ラウラが斬りかかる。

——右腕のプラズマブレードを右から左へと、横へ斬り払う。

——千尋は押し出すように構えたシエルツェンでそれを防ぐ。

爆発反応装甲を使い潰した今となってはただ頑丈なだけのシールド——しかし、同じくプラズマ対策の塗膜が幾重にも施されており、それがプラズマブレードを拒絶する。

「この——」
続けざまに、左腕のプラズマブレードが左から右へシエルツェンを斬り払う。

それで、塗膜は剥がれ落ちてしまう。

——好機。

そう捉えたラウラは右腕のプラズマブレード振り下ろすように構えてようと右腕を振り上げて——

「——!!」

それを待っていたと言わんばかりに、千尋はおおよそ人では言語化出来ない咆哮を上げて——ラウラのプラズマブレード機構にシエルツェンのスパイクを突き穿つ。

直後に響く、重低音を纏い、装甲を変形させる摩擦によって火花を散らせる――鋼鉄の一撃。

それは、プラズマブレード機構の回路と収束機を圧砕する――
――!!?

――以って、右腕のプラズマブレード機構は沈黙する。

同時に――右腕の同機構は脅威という存在から、ただ高価なだけの廃品に成り下がる。

続けざまに残りの武装も破壊できれば――だが、そう上手くはいかない。

「きさ、まあああツ!!?」

大気を焼くように、千尋に向けて振るわれるもうひとつの斬撃。

――千尋はシエルツエンを咄嗟に手放し、すんでのところで躲す。

しかし――その行動は自身を守る手段を放棄したことと同義である。

それを裏付けるように、振るわれた左腕のプラズマブレードがシエルツエンを切断する。

――盾は無くなった。

後退しながら前を向いていた千尋は、ラウラの瞳が金色に輝くのを視認して――瞬間、異変は訪れた。

「ぐっ…」

動かない。

身体が動かない。

身体が何かに抑えられている。

身体は見えざる力で拘束されていた。

――「……!!?」

千尋は舌打ちする。

――A I Cに捕まったのだと、千尋は理解したから。

……まるで、蜘蛛の巣に捕らわれた虫になった気分だと、千尋は場違いなくらい冷静にそう思う。

「ふん、形成逆転だな。」

ラウラは相変わらず上から目線でほくそ笑む。

それを無視して千尋は機体ステータスのウィンドウに眼を走らせる。

それを見て——千尋は思わず笑う。

「どうした、絶望のあまり気でも触れたか?…まあ良い。貴様には、調子に乗った罰をくれてやろう。」

ラウラはそう言って、右肩にマウントされている30mm超電磁加速砲パンツァーカノニアの砲口を千尋の顔に向ける。

——鼻先と砲口の間にある距離はわずか10センチ程度。放たれば間違いなく被弾する。

さらに言えば絶対防御が稼働しようにも重傷を負うのは必須である。

——しかしラウラは千尋がAICの弱点を見抜いたことに気付いていない。

「キャー、ボーデヴィツヒさんそのままやっちゃってー!!?」

「織斑くんの仇を打ちちゃってー!!?」

しかしながら、それを理解していながら外野からはこんな声援が来る始末である。

——ついでに言えば、ボーデヴィツヒが織斑に敵意剥き出しだったことすら頭から抜け落ちているとしか思えない内容も聞こえて来る。

「ふん、貴様も災難だな——まあ、同情はしないが。」

そう言つて、ラウラはパンツァーカノニアを放つ——直前。

『千尋おおおおッ!!』

鼓膜を粉碎せんとばかりにヘッドセットに木霊する雄叫びが轟く。

「二なつ——」

千尋とラウラが妙な同調を起こしながら、声のした上を見上げる。

高度制限空域から50センチ下——空中を舞う、箒の打鉄

甲一式。

ラウラが箒を視認した——直後、豪雨の如く12.7ミリ

弾が降り注ぐ。

「ぐう…!!??」

直後、A I Cの拘束が停止する。

——すかさず千尋は動こうとする。

——しかしラウラもすかさずパンツァーカノニアを放とうとする。

——距離はあまりに近い。千尋がいかに躲そうが、千尋はパンツァーカノニアに穿たれることは変わらない。

そしてまた、ラウラの反射神経とパンツァーカノニアのFCSを持ってすれば跳躍ユニットのロケットモーターを点火して距離を取ろうが遮蔽物に隠れる前に狙い撃ちされる。

——後ろに避ければ被弾。

——上に避けても被弾。

——左右に避けても被弾。

——どう足掻いても、普通に躲すだけでは被弾することを回避出来ない。

——故に、進む方向は一方に限られる。

——しかし、千尋を縛り付けるモノは今は存在しないのだ。

——故に、千尋は地面を蹴る。

——砲口から、超電磁で加速された30ミリ劣化徹甲弾が

穿たれる——直前。

——躊躇いなく、千尋は前へ疾走する。

——そうして、砲塔下部を右腕と頭の間——右肩に滑り込ませる。

——直後、砲口から放たれ、1秒前まで千尋が立っていた場所を穿ち、土塊を巻き上げる。

——砲声が、鼓膜を破る。

——衝撃波が、脳を揺さぶる。

——しかしそれら全てに構わず、千尋は突貫する。

——土塊を巻き上げながら力強く、しかし旋風のように軽く速く。

——向かう先は敵の懐。

右腕には岩盤を打ち抜くことに特化した固定兵装である手甲の03式近接掘削打刀。

——狙う先は左胸部。

「……!!?」

また、人間の言葉では表現できないような獣じみた咆哮（こえ）。

直後——叩きつけられる、千尋の拳。

5トンもの力を纏い、近接打刀を備えた拳で皮膚と筋肉越しに、心臓を殴りつける。

——だがそれは絶対防御に阻まれる。

鈍い打撃音と飛び散る火花。

腕に走る痛みも拳が碎ける音も全て千尋のもの。

しかしラウラの胸に痛みが走る。

何が起きたか理解するよりも早く不明な一撃が心臓を震わせる。

一瞬、ほんの一瞬——正常に機能しなくなった心臓を前

に、呼吸を忘れる。

「……っ、——!!?」

息を吐こうと、酸素を取り込もうと喉をあげる口。

ラウラは知らず、喘ぐように前へうつ伏せに倒れかかる。

——その横を、小さな人影が舞うようにすり抜ける。

衝撃や痛みなど知らぬように。

人影は碎けた拳を庇いもせず、前のめりに倒れかかるラウラのパン

ツアーカノニアへ、

——左腕の近接打刀を、抉り打つ。

バギイン、という激しい轟音。

同時に碎け、フレームの破片やパーツを撒きながら散華する花びら

のように散る、パンツアーカノニアのFCS。

そして、今の部位破壊はついぞと言わんばかりに千尋はラウラの背中に回り込む。

「……ッ、お、のれ……ッ!!?」

——呼吸を思い出したラウラが、苦し紛れにワイヤーブ

レードを振るう。

千尋の瞳は油断から招いた驚きを浮かべながら、しかし表情は何もないような顔をしながら、それを胸部装甲で受け止める。

——薙ぎ払われた鞭が、火花を散らしながら千尋の胸部装甲を刻む。

ゴギン!!?という、装甲が変形する音が響く。

同時に、千尋の肋骨に痛みが走る。

（肋骨：1、2本逝ったか。）

千尋はこの状況にも関わらず、そんなふうに冷静に思考する。

——まるで、この程度は何十年も前から体験し、身体に刻んだと言わんばかりに。

そこへ——轟く砲声。

そして炸裂する76mm砲弾。

箒が放った、76mm支援ライフル砲による砲撃だった。

再び斉射——ラウラは後退しながら回避。

それを追撃するように砲撃しながら、箒は千尋の隣に舞い降りる。

「ばか、危なくなったら呼べと言ったろう！お前がやられてしまつては、意味がない。」

「——わかってる。」

「なら、今度から気をつけてくれ。…拳は?」

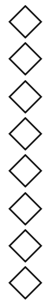
箒は先程の攻撃で砕けた千尋の右手に視線を向ける。

「小指が第二関節あたりで逝っただけだ。まだ大丈夫。」

千尋は箒を安心させるように——それでいて、獲物を前にした狩人のように、

あるいは——過去に自分の大切な存在へ手を出した者に、同等の跋を与えんと——報復行為を行おうとしている獣のような視線を向けて応える。

それに箒はゾクリとする——否、怯えたのは箒ではなく柳星張であつた。



(———驚いた)

柳星張はイリスは呟く。

それは箒の視界に映る少年——千尋の思考に関してである。

人間社会において、報復行為はやり過ぎた悪行と捉えられる。故にヒトは理性で報復行為を封殺する。

———しかし目の前の少年はどうか。

彼は報復行為を是としている。

しかも分別や方法は人間的なクセに、行う内容は等価交換の動物的なモノ。

———理性が働きすぎる生物であるヒトには理解できないが———
———報復行為とは、全ての生物において共通の行動である。

———自然の掟、上下関係の理解、自他の関係———人間らしく言うなら、それは社会を律する法となんら変わらない。

報復とは如何な形であれ万物に共通する摂理である。

それが力で痛めつけるモノか、

法によって罰するモノか、

道具を持って滅ぼすモノか。

———ただ、その違いだけである。

しかしヒトとケモノは価値観の違い故にどちらも違う行動を必ず取る。

———にも関わらず———この少年はどうか。

ヒトの考えと分別をする。しかし起こそうとする行動はケモノのそれと変わらない。

———それはまるで、ヒトの皮を被ったケモノのようだ。

(———箒と話して吹っ切れた結果がこれなのね……。)

———今までの行動は、無理にケモノらしさを封じた結果ヒトの行動を

持って補完していただいだけ。

しかしケモノがヒトの行動に慣れるのは不可能である。

故に、少年は弱くなった。

故に、少年はこれから強くなる道を歩める。

ケモノの行動を抑圧することを辞めた今なら、可能だろう。

(それにしても――)

――千尋の思考を自身の脳波にて一瞥した柳星張は思わず笑う。

(あの子、箒たちニンゲンより “ 私たち “ に近い生き物なの

ね――)

笑う。

嗤う。

微笑う。

様々に意思を混在させた感情を浮かべて、わらう。

(――もし私が箒を取ったら、ちゃんと私から箒を取り返してくれるかな…。)

そしてわずかに期待を寄せながら、呟いた。

2021年6月13日

????????????????????

午前10時17分・南館山港
惨劇は、とうに止んでいた。

赤

朱

紅

見渡す限り広がるのは鮮血によって血化粧を施された棧橋のコンクリート。

シャルの目の前には骨と肉の集りになった肉片が転がっている。

肉片、という表現は酷だが、そうとしか形容できない。シャルを拉致した女達は原型をとどめないまでに目の前の女性よって破壊されていた。

シャルはへたり込んだまま、何もしない。

ただ女達が惨殺される様を、醒めた瞳で観ていただけ。

女達が助けを求めても醒めた瞳で、劇場のスクリーンで隔てている様に観ていただけ。

そもシャルを殺そうとしたのは女達であり、助ける義理など無いから。

しかし女達が残骸になってもシャルは動かない。逃げようとしな
い。

逃げるまでに、女性に殺される。

その事実を受け入れていたから。

だからシャルは動かない。

ただ醒めた、全てを諦めた瞳で自分から生を剥奪しようとする死神が一步一步、歩み寄って来るのを眺めるだけ。

そうして、女性がシャルの眼前30センチの距離にまで到達して。

「大丈夫…でした？」

血濡れの手を差し出ししながら、場違いにも程がある言葉を放つ。

だからシャルは目を見開いて、

「はっ。」

そう、思わず口にしてしまう。

あまりに不自然だ。

あまりに不合理だ。

あまりに——理解し難い。

これがつい先程まで自分を殺そうとした女達を殺戮した者の言う言葉だろうか。

思わずシャルが唾然としていると、女性は少し燻んだ生地ワンピース——今は所々に散りばめられた返り血が血化粧のまだら模様を作っていた——で手を拭いながらふと気付いたように、シャルの額を触れる。

「え、あ、あの——…」

「出血してる…止血しなきゃいけませんね、でも、私の服は汚いし…」
思わず混乱する。

先程まで女達を殺戮していた女性がシャルも殺すのかと思えば今度は殺すどころかいつの間にか出血していた——おそらく女の1人に顔面を蹴られた時だろう——額の傷を気にかけている。

「あ、ここなら——」

そう言つて、女性が自身のワンピース——の、比較的汚れていない清潔な部分——を破き、ハンカチ程のサイズにしてシャルに手渡す。

「はい、よければこれで止血して下さい。」

——何気ない、極普通の…先程まで殺戮行為を働いていたとは思えないくらい普通の笑顔で、言う。

もしここで女達を殺戮し、その返り血を浴びていなければ彼女は極普通の人間なのではないかと錯覚してしまうくらい——それくらい、人間味を帯びた表情だった。

「あ、ありがとうございます…」

そして止血布を渡されたシャルは断れずにそれを受け取る。

——だが彼女の行動は、何を衝動として行われたのだろうか？

純粹な親切——にしてはあまりに行き過ぎだ。

シャルは少し、彼女の行動が気になり——思わず訪ねた。

「あの…どうして…」

少し口籠もり、言葉が続かない。

だがもう一度息を吸ってから、再び問う。

「どうして、私を助けるんですか…？あの人達は、殺したのに——

——」

それに女性は「ああ」と、つまらない事を思い出したように言葉を発すると、

「彼女達は邪魔でしたし——それに退いてもらおうにも対話の余地なんて無さそうでしたし。」

冷めたような顔で、そう告げる。

それは生物として当然の生存本能から生まれた自己防衛の派生である。

故に彼女は自分を殺そうとした敵を自身が生き残る為に殺した。

——決してシャルを守るといふ訳のわからない程甘い理由ではない。

…では、なぜシャルの傷を見ようとしたのだろうか？

少なくとも、そこには彼女にとつての利など見出せない。

「貴女を助けたのは…そうですね、昔の私に似ていたから…でしょうか。」

——つまるところ、自己投影。

自身の過去に負ったトラウマを他人に重ねて、他人を救うことで自身の痛みを減らそうとする行動。

しかし——彼女の心傷がこの程度で減るはずなど無い。

彼女の心傷が7万桁の数字で表すならば、今の行為で減る数はわずか0.5程であろう。

——そもそも、彼女の立場とシャルの立場はあまりに違い過ぎるのだから。

「さて——じゃあ、私はもう行きますね。」

そう言うなり背を向けて歩き出して——ふと、足を止める。

「そういえば、貴女名前はなんて言うのかしら？」

「え——？」

また唐突過ぎる展開に、シャルは困惑する。

だが、もう乗り切る他ない事を悟り、名前を口にする。

「シャル：シャルロット・デュノアです…」

「デュノアさんか…いい名前ね…もう会う事なんて一生無いでしょうけれど——覚えておくわ…。」

どこか儂げな表情を浮かべる。

それが何処と無く、シャルの印象に遺される。

女性は再び歩き出そうとする——だが、しかし。

「あ、あの——」

それをシャルが止める。

「なにかしら？」

「…その、貴女の名前の名前も教えて貰えませんか？私の名前は教えただのに、貴女の名前を知らないのは、アンフェアですし。」

——女性は虚を突かれたような顔をする。

どうやらシャルの立ち直りの早さに驚いたらしい。

だが直ぐに笑みを浮かべると、背中を向けて。

「美都——朝倉美都です。」

——そうして、名前を遺してその場を後にする。

以って、殺戮現場という環境下でありながら何の変哲も無い、それでいて場違いにも程がある会話は終わった。

——その後を追って、彼女を止めてあげればよかったと、僕は何度思わされただろう。

——2021年6月21日、特務自衛隊八王子駐屯地。

過ぎた遠い日の事に僕——シャルロット・デュノアは、まだ囚われたままだらしい。

6月13日10時21分
IS学園第2アリーナ・闘技場

立ち込める砂塵。
連鎖する爆発音。

コンクリートの壁で幾多にも遮られ、迷路の一角、あるいは裏路地を連想させられるレイアウトを施されたIS学園の闘技場。

しかしコンクリートの壁はその大半が崩壊し、黒煙がたち籠り、もはや戦争によつて廃墟と化した市街を連想させる瓦礫の山へと変わり果てていた。

「まづいな……」

その中のひとつ——コンクリートの裏で、打鉄甲一式を駆りながら箒は眩く。

——試合開始から15分経過。

それまでの戦闘でラウラの駆るシュヴァルツアレーゲンのプラズマブレードやワイヤーブレードによつて遮蔽物はほとんど破壊されてしまっていた。

アレを相手に遮蔽物無しで戦うのは正直自殺行為だ。

だが——

——スーパーカーボンとタングステン合金のぶつかる音が近づいてくる。

——少年と少女の雄叫びが近づいてくる。

それで、箒は首を振る。

：例え遮蔽物が無くなるうと、何か出来なくなる訳ではない。

それに——私は千尋も頼ってみると言ったばかりではないか。

——直後、箒の隣で轟音。

2つの影がコンクリートの壁を突き破る。

箒は思わず振り返る――。

ワイヤーブレードと左腕のプラズマブレードを振るうラウラ。

手甲の03式近接掘削打刀と膝部に溶接した09式近接戦斧を武装した千尋。

近接格闘戦を繰り広げながら――まるで濁流に呑まれた大木のように、躍り出る。

箒は、それを視線で追いながら――

「千尋！」

そう、少女は叫びながら一丁のライフルを放り投げる。

千尋はライフルを瞳で追いながらそれを掴む。

――否。それはライフルなどではない。

確かに見た目は先程まで箒の使っていた76mm支援打撃ライフル砲だ。

だがしかし、それにはいくつもの異物が着いて――もはや原型を留めていなかった。

――砲身の真下に取り付けられ、砲口よりも前方に突き出された試製12式改耐熱装甲刀。

――砲身上部に取り付けられた2門の12.7mmM2重機関銃。

――砲身両側面左右対象に取り付けられた

計6門の150mm79式対舟艇対戦車誘導弾（重MAT）。

すなわちそれは――多重複合兵装。

――名を、試製20式複合ライフル砲。

「…はっ」

――なんてもの、作ってやがる。思わず千尋は内心口にする。

多重複合兵装――を受け取るように掴み、さらにラウラのワイヤーブレードを躲しながら千尋は思う。

一度見れば素人でも分かるゲテモノだ。

そんなゲテモノを何故持って来たのか…それは単純な話だった。

各種武装を持ち込もうにも拡張領域に量子化した上で格納できる

兵装の数は限られている。

だが格納に限りがあるからという理由で兵装を疎かにして良いほどラウラ・ボーデヴィツヒは楽な相手ではない。

故に、給弾効率を酷く低下するというデメリットはあるが——
——各種兵装をひとつに纏めた複合兵装で拡張領域の上限を節約しようとした。

——その結果がこれ（試製20式複合ライフル砲）であった。

「それが——」

どうした。と、ラウラはプラズマブレードを振り降ろす。

ガゴオン!!?と、凄まじい音を立てようとして——ドンツ
という、鈍い音に遮られる。

「——な……」

ラウラは眼を見張る。

プラズマブレードを、漆黒の試製12式改耐熱装甲刀が受け止めている。

ばかな、と首を振る。

そしてもう一度ソレを凝視する。

そこには——蒼雷の刃を受け止める、漆黒の鋼刃が映っていた。

——それは有り得ない。

通常の実刀で、プラズマブレードは受け止められない。

何故ならプラズマブレードとは高圧電流を用いて副次的に発生する膨大な熱を用いた切断武装。

つまるところ、電子高熱カッターともいうべき存在である。

そんなプラズマブレードの前では、鋼鉄製の実刀など、カッターナイフに切断される紙切れと同等だ。

——ラウラが驚くのも無理はない。

何しろ、今日の前で起こっている現象は藁半紙でカッターナイフと鏝迫り合いをしていることと同義なのだ。

——普通なら、ありえない。

だがしかし、目の前の少年はプラズマブレードを実刀で受け止めている。

そう——漆黒の実刀で受け止めている。

(×まさか——)

ラウラはハツとする。

漆黒。

鋼鉄。

耐熱。

同時に、千尋の実刀を見たラウラの脳裏にそれらの用語が浮かぶ。

——冷戦時代、アメリカの開発した2万5000mという高高度をマツハ3という高速で飛行する偵察機が存在した。

当然そんな高高度を飛行しようものなら早々に壁にぶち当たる。

それは空気との摩擦による 高熱 だ。

この高度と速度域になると、空気との摩擦などにより機体表面の温度は摂氏260℃になり、部分によっては570℃にもなる。

そのためその偵察機を開発するにあたっての課題は摩擦熱対策だった。

このような温度になると通常のアルミニウム合金の装甲では強度が低下する。

そこで取り上げられたのは当時では初のチタニウム合金を装甲に用いることだった。

その偵察機こそ、漆黒の鳥——《SR-71ブラックバード》。

——もし、あの実刀に使われている素材がブラックバードと同じチタニウム合金であるなら？

全ての話は解決する。

つまり——あの実刀はチタニウム合金で出来た、耐熱装甲の刀剣。

彼らは自分との機体の性能差を埋めるべく、装備の相性差で勝負を仕掛けてきたのだと——。

ラウラがそう確信した瞬間。

——自身の背後より、煙幕を切り払うようにして箒が躍り出る。

そして——漆黒の刀剣を抜刀し、弧を描きながらラウラのうなじ目掛けて斬り振るう。

「ちいつ!!?」

——すかさずラウラは反応し、右腕のワイヤーブレードを振るう。

それが箒の刀剣とぶつかり、火花を咲かせる。

「不意打ちとは卑怯な——」

思わずラウラは眩く。

「——」

しかしそこに、和風侍少女：と思わせる箒の感情などない。

冷静に、機械的に戦況を判断する少女だけが、篠ノ之箒という人間を務めている。

そこにあるのは武道としての誇りではない。

生死を別つ、勝敗を見極める兵士としての箒。指揮官としての箒。

そんな箒は、ラウラの言葉など意に介さずに——いようと

するが、そこまで兵士としての箒は完成されてなどいない。

「——それがどうした、お前は戦場でも卑怯だ何だと喚きながら死ぬつもりか?」

「何——!!?」

努めて冷徹に、言葉を投げかける。

「聞こえなかったのか?」

「黙れ——私の事を、何も知らない分際で——!!」

軍人でありながら温室の外に出た事の無い、ラウラの言葉が箒を逆撫でする。

ふと——箒の思考を塗り潰すようにフラッシュバックする、ロリシカの景色。

——引き千切られて絶命したライサ。

——周りで十人十色な最期を迎える兵士達。

—— 医務室で治療さえ受けられずに絶命した兵士。

—— 瓦礫に潰され、原型を留めぬ肉塊となった兵士達。

—— ラウラの言葉がそれらを誘発させる。

だが今は—— 怒りを浮かべるべきでは無いと、思考を切り離す。

—— そして、

「千尋ー！」

叫ぶ。

「—— ああ」

それは笑いだったのか、箒の言葉に応えるように口角が吊り上がる。

そして、力を込め、試製20式複合ライフル砲の耐熱装甲刀剣を横薙ぎに振るう。

「ぐっ——」

箒に注意の逸れていたラウラは虚を衝かれ—— 思わず右に飛ぶ。

2人は留まる暇など持たず、千尋と箒はラウラに斬りかかるようにして—— 二つの凱武が疾走する。

「ちいつ!!??」

—— 迎え撃つは青い閃弾。即ちパンツァー・カノニア。

—— しかしてそれは当たらない。

FCSが潰されたそれは、科学で固められた神速の投石器と何ら変わらない代物だった。

それをラウラは感じ、パンツァー・カノニアを手動射撃モードに切り替える。

その動きは早い。

そしてすぐさま千尋を捉え—— 神速の砲弾を、穿つ。

—— それを、

「千尋ー！」

箒の声が耳に届くより0.6秒前。

千尋は流れるような動作で試製20式複合ライフル砲の上下を反

転させる。

そして迫るパンツァー・カノニアの砲弾。

それが、あと30センチメートルで直撃するといふところで、千尋は音速にも及ぶ突きを放つ。

――奔る刃、流す一撃。

高速で迫ったパンツァー・カノニアの一撃を、千尋はすんでに耐熱装甲刀剣で受け流す。

――二人の疾走は止まらない。

だが――黙ってそれを許すラウラでは無い。

「ッ――！」

千尋の突撃が止まる。

敵は、千尋の疾走を許さなかった。

長さが6メートルにもおよぶワイヤーブレードの間合いまで、接近すらさせない。

刃先と持ち手の遠い武器にとって、距離は常に離すもの。

6メートル近い長さを持つラウラは、自らの射程範囲に入つて来る敵を迎撃するだけで良い。

そうすれば、自ら打つて出るよりも、踏み込んで来る外敵を仕留める方が手早く容易だ。

現に千尋は侵攻を食い止められている。

しかしそれは一対一で大きな効果を発揮するものだ。

――つまり、

「――援護する!!?」

箒の澄んだ声――同時に響く、12.7ミリを撃ち鳴らす試製20式複合ライフル砲。

――つまり、一対一ならばともかく一対多であれば、その戦い方は通用しない。

そして、ワイヤーブレードによる迎撃網を食い破っただけではない。

「くっ…A I Cが…」

そう、それはA I Cをも封じていた。

正確には、A I Cの弱点を突いただけの話だが。

—— A I Cとは対象を空間ごと停止させる存在だ。それは確かに強力であり、また一見攻略も不可能に見える。

しかし、千尋は先程A I Cに拘束された際に、その弱点を視認し、理解した。

—— A I Cとは、原理は不明だがI Sの機能でもなんでもなく、単にI Sを介した操縦者個人の能力であると。

それを発動している間、操縦者は自己暗示的に右手を掲げた状態を維持しなくてはならないということ。つまり右手を戦闘に使ってはならない。

A I Cの制御に相当な集中力や演算処理を要するらしく、接近する筈に全く気付かなかったこと。

そして—— 対象は視界に映って居なくてはならない。

つまるところ—— ” 右手を使わせ続け、集中する隙を与えず、尚且つ片方が視界に入らずに攻撃を続ける ” 必要があった。

多少陰湿で嫌らしく、千尋も癪に触る戦法ではあるが——

” 今の千尋 ” 出来るのは、その程度だった。

—— 閑話休題。

今は前方の敵を倒すことに専念しなくてはならない。

ついでに言えば、シールドエネルギーも残量は3割と心許ない。

残弾に至っては既に2割を切って1割4分。

ただでさえシールドエネルギーの貯蔵量が決して多くはない第2世代I Sを使っているのだ。これ以上の長期戦はこちらの自滅を意味する。

しかしそんな中でも千尋と箒が計算したように事態は推移している。

この機を逃せば、勝ち目はないだろう。

—— 故に今、畳み掛ける—— !!?

「総員散開!!」

—— 箒の号令が響く。——

その言葉に従い、2人は互いの役割を担うポジションに移動する。
このままやられるつもりなど2人には毛頭ない。

「———そういえば、間接的とはいええ、こいつのせいで箒は死に
かけたんだっけ。」

ふと、千尋は内心眩く。

それも鑑みれば、なおの事負ける気にはならない。
だからいい加減、

「行くぞ。ここにできつかり———」

（散々やってくれたツケを返してやる———！）
跳躍ユニットのロケットモーターを点火。

同時に溜めに溜めた力を、右脚に爆発させて、地面を蹴る。

狙いは一点、心臓への直接打撃のみ———！！

「ぐっ……い」

———迎え撃つは、怨嗟を込めた超電磁の一撃^{カノリーネン・フォーゲル}

リニアレールが焼き千切れる事を恐れない最大出力の破壊的弾頭。

「———っ、フッ———！！」

それを視認すると同時に、千尋は全力で再び地面を蹴った。

軋む身体に鞭打つように喝を入れながら、少年は真横に躍り出る。

「っ、く———」

無理矢理な横移動で崩れ落ちそうになる身体を、腕の一振りを持ち
直す。

———直後、左肩に衝撃が奔る。

「っ……い」

金属の軋む音を立てながら、超電磁の砲弾が左肩部装甲ブロックを
抉り飛ばす。

夾叉した左肩が白熱し、骨に亀裂の入る音がする。

「———構わない。どんな不利な体勢でも、アレの直撃だけは
回避する———！！？」

———その意思を試さんとばかりに、ワイヤーブレードが放
たれる。

応えるように、千尋は試製20式複合ライフル砲のM2重機関銃を

持って邀撃する。

——しかし、軌道を逸らすことは叶わず、そのまま千尋の眉間目掛けて飛翔する。

——それを、

(弾く…!!)

——痛みとバランスの乱れから、立ち直るのに0.3秒。眼前に迫る凶器を右手手甲の03式近接掘削打刀で殴り弾く。

「せー、のお——!!？」

ラウラが歴戦の兵士であれば、間違いなく目を見張っただろう。驚嘆すべきは。

その一連の動作をしながらも、疾駆する脚を止めない意思の強さだった。

「…ぐ、うツ!!？」

五月蠅いハエを叩き落とさんとばかりに、ラウラは再びワイヤーブレードを振るう。

今度は片方だけではなく、両方だ。

このまま行けば、千尋は挟撃される。それは覆りようなない事実。

——そう、1人なら。

「私を忘れてもらっては困る。」

落ち着いた声——同時に響く、76ミリ機関砲の砲声。

寸分変わらず片方のワイヤーブレードの喰い千切る。

それは、筈の試製20式複合ライフル砲が放ったものだった。

一瞬——ラウラの意識はそちらに向けられる。

「貴様…!!？」

——直後、千尋が手甲の03式近接掘削打刀で、残るワイヤーブレードを邀撃する。

火花を咲かせながら、コンマ数秒の世界で弾かれる凶器。

少年の力では完全には弾ききれず、僅かに軌道を逸らし、背部兵装担架をえぐり攫って行く。

「——っ、この…!!？」

最期の足掻きに、ラウラはAICを発動する。

完全な停止とは行かずとも、動きを鈍らせることは可能だ。

事実、千尋の空間はゼラチンのように固められて行つて――

――千尋の疾駆は、衰えなかった。

「ハ――」

こぼれたのは余裕か怒りかそれとも疲労か。

思っていたよりも数次元脆弱な防衛機能を、神経や筋肉が断裂してしまう程の負荷をかけながら突破し――

(蹴り飛ばす……!!)

今まで蓄積したエネルギーを込めた渾身の右脚が真一文字の体勢を描きながら、ラウラの心臓むねを空へ打ち上げる――!!

――以つて、ここに勝敗は決した。

――そして、ISの装甲が強制解除の兆しを見せた頃合いに、異変は起きた。

(私?????????)
少女は内心独言る。
(私が、負ける……? そんな、バカな……。)

(認めん! 私がこんなところで! こんな奴らに!)

ここで負ければ自分はまた「出来損ない」になってしまう

(嫌だイヤダいやだ嫌々イヤ――)

「望むか? 自分の欲するものを」

――ふと、機体から声が脳に反響した。

全身に纏わりつく汚泥のような、耳に溶けた砂糖を入れられるような声。

「自らの全てを私に委ね力を望むか?」

そうだ! 私は力がほしい! こんな体など要らん!

寄越せ最強の力を私に!!

「ヴァルキリートレースシステム」 STAND BY...

【Delayed virus / Orga】起動。

――それが過ちだったと誰かが教えてくれれば、どれだけ幸福だっただろうか。

「…え？あ、やめ…」

頭に、何かが入ってくる。

—— 遺伝子

—— 復活

—— 支配

—— 千年王国

—— ゴジラ

—— 肉体（カラダ）を、寄越せ、寄越せ寄越せ寄越せ寄
越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄
越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄
越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄
越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄
越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄
越せ寄越せ寄越せ。

？「や、め——」？

クラツシユする。

犯される脳。侵される神経。冒される自己。チガウモノがワタシ
に入ってくる。カラダに2つのイブツが入ってくる。

意識がぐちゃぐちゃに擦り潰されて監禁される。一重。二重。三
重。とんで？314兆1592億6511万4514重の檻がワタ
シを幽閉した。破裂する水晶。景色は虚無へ還る。？

初めから納まらないという約束。初めからあぶれだすという規
則。初めから死ぬという契約。毒と蜜。内臓がスクランブルエツ
グになる。記憶が黒くなって行くやめておねがいおもいでまでこわ
さないでわたしはどうなってもいいからきょうかんとのおもいで
うばわないでだからやめろっていつてるでしょねえききいてよ。

道具、道具、道具。際限なく再現せず育成し幾星へ意義はなく意
志はなく。叶うよりは楽。他の誰でもな いワタシワタシワタシワ
タシハドコワタシヲカエシテワタシワタシワタシワタシワタシワ
シワタシワタシワタシワタシワタシワタシワタシワタシワタ

俯瞰するミレニアンニオルガガすべて否定。螺鈿細工をして無形、ゲ
ヘナでありヴァルハラ煉獄でありながら極楽浄土その矛盾そのあり

えざる 法則に呪いこそ祝いを。

「い、や——」

それが、誰もが知るラウラ・ボーデヴィツヒとしての最期の言葉
だった。

EP—34 タッグトーナメント2日目（後）

2021年6月13日

第2アリーナ管制室

「あれは…私…ういや、なんだ…アレ、は…」

———あまりの状況異常に混乱する。

この試合の決着がついたと思われた瞬間———ボーデ
ヴィツヒの機体『シユヴアルツエア・レーゲン』が変化し、かつての
私と同じ姿———否。一部かつての私と同じ部分はあるが、全
体的に違う。

暮桜に酷似した外見のISを、腫瘍のようなモノが取り込んだ異
形。

それに、アリーナにいる黒一色で暗い光を放つあれは私ではない。

だが、篠ノ之に振られる刀が、篠ノ之を倒そうとする太刀筋が——

———すべて私織斑千冬と同じ。

まるで、自分はこのようにして———暴力を振るうのが好き
で好きで堪らない…そう言わんばかりに刀を、巨腕を振るう。

それは、過去の己の姿を、悪行をまざまざと見せつけられているよ
うで心が食い破られそうになる。

「織斑先生！」

山田先生の叱咤———それで思考は現実へと引きずり戻さ
れる。

「っ！ すまない。アリーナにいる者たちを緊急プロトコルで回収。
闘技場にいる者に退避命令と戦闘教員に出動命令———それ
と指揮権は警備課に移譲しろ、私も出る。」

「ちよつと織斑先生」

すぐに指示を出す。だが、理事長代理の女が騒ぎ立てる。

「私も出るのですから、そうなるを取り纏める者がいるでしょう。そ
れに警備課は現役、予備役問わず自衛官や在日米軍からの派遣者集団

———つまりその道のプロです。

「このような場合…餅は餅屋に任せるべきだと考えます。」

見えなくもないが醜悪に歪んだ頭がひとつ。

——その異形の中央、磔のように取り込まれたシユヴアルツアレーゲンニ暮桜。

これを——この異形を、千尋は知っている。

忘れもしない、自分から生まれた怪物。

——自らの肉体を取り戻したいが為に勝手に身体を弄られた厭な記憶。

かつて異界元の世界の新宿で対峙した古い来訪者ミレニアアンの成れの果て——
——オルガ。

それを視認した瞬間、千尋から音を立てるように、ブツンブツンと理性の糸が連鎖的に断絶されて行く。

——あたまに、ちがのぼる。

まるで写し鏡を見せ付けられてるみたいだと、未だ健在の理性を持つて冷静に思う。

——それは自己嫌悪だろうか。

誰かと共に居たいという想いも。

誰かと共に家族になりたいという想いも。

誰かと子を育みたいという想いも。

誰かを救いたいという想いも。

善意や幸福も全て成し得ず返って他者を破滅させてしまう身に仕立て上げられた自身。

——そんな呪われた血オルガナイザーG1を宿す自分ゴジラへの怨嗟か。それとも自分をこんな怪物にした者達人間への憎悪か。

千尋の理性を断絶せしめようとしているのは鏡面に映った己が身を殴りつけようとする衝動。

もしくは己が身を流れる呪いを拡散させないように自らを殺しにかかる自己犠牲精神。

——あるいは自身の想いを知らずに血の欲しさに自分を弄り回す他者の欲への激昂か。

古い記憶は千尋の脳を刺激して、獣のソレに変貌させようとする。そこには人の法則ルールはない。

「なっ…バカって——っ!!?」

——箒のその言葉で、やっと現状を思い出す。

残弾は1割程度。

SEは2割と少し。

推進剤は残り3割弱。

装甲強度は4割にまで摩耗。

——こんな機体で戦えるはずが無い。

…それが理解出来ないまでに、正気じゃなくなっていた。

それを見て、箒は物覚えの悪い生徒に悪態を吐く教師のような雰囲気
気で口を開く。

「全く…ただでさえお前は感情のスイッチが入ると暴走しがちなんだ

…少しは気を抑えられるようになれ。」

「う”…：…面目無い…。」

申し訳なさそうに千尋が謝る。

——ふと、鳴り響くサイレン。

『試合中断——繰り返します、試合中断!アリーナ闘技場に

残っている生徒は至急ピットへ退避して下さい。教師部隊が対応し

ます。——繰り返します、試合中断!アリーナ闘技場に

…』

『第2アリーナ、緊急時対応プロトコル発動。観客席の地下降下収容
を開始します。』

——観客席の皆様は、危険ですのでその場から動かないで

下さい!!?』

アリーナにアナウンスの嵐が湧き上がる。

それはすぐさま反響し、また他のアナウンスと混じり合い、不協和
音を生み出す雑音ノイズと化す。

箒はそれを聴くなり、千尋を立たせながら口を開く。

「とにかく今は——」

——教師部隊に任せて引くぞ。と言おうとした瞬間、

「うおおおおお!!?」

織斑が白式を纏いながら、雄叫びを上げてシールドバリアに突貫す

る光景が視界に映る。

”——あれ？デジャヴ…”

千尋は冷静にそんな場違いな事を思いながらも、その一瞬後に起こる事象を察知し——

「——— 箒ツ!!？」

「え、ちよ———」

千尋は叫びながら、反射的に箒の横腹を抱き抱えて——— 跳躍ユニットを点火する。

——— 直後、頭上より破碎音が響く。

四散するシールドエネルギー。

砕け散る耐爆強化ガラス。

落下ではなく崩落して来るガラス片^{凶器}。

直下にいた千尋と箒を串刺しにせんと降り注ぐガラスの雨^{凶器}。

”———”

ロケットモーターが点火される。

ガラス片は頭上2メートルを垂直落下。

”———”

右脚に力を込める。

ガラス片はあと1メートルで二人を串刺しに。

「——— のオ!!？」

——— 右脚を爆発させる。

土塊を巻き上げ、壁伝いの前方へ向けて、駆ける

——— そこへ降り注ぐはまるで剣の雨。

ガラス片は次々と地面にその身を突き立てるように、地に刺さり墜ちて来る。

「——— つ!!？」

息を飲むように走る。

窮地における緊張から、脳は倍速で稼働する。

自分達を反射させて映しながら地面に刺さり墜ちていくガラス^{凶器}が緩やかに流れて行く。

まるで死に際の走馬灯。

今の千尋にとって1秒は5秒に相当する。

それほどにまで神経を研ぎ澄まし、体感時間は延長される。

——ドミノ倒しの如く勢いで突き刺さるガラス片^{凶器}。

——地を踏みしめ、土塊を巻き上げながら疾駆する脚。

——降り墜ちる凶器の雨を、全力で走る少年。

——そして、その雨を駆け抜ける二人。

その災難は決して無難にあらず、しかしてアツサリと突破した。

「…っ、はっ、はあっ…」

息が荒い。

その身にはコンマ数秒の間にあまりに有り過ぎた事象に対して脳
の理解が追いつかず、呆気に取られた箒。

その背後には、地面に突き立てられたガラス片^{凶器}の樹海。

その遥か遠方にはアレとやり合う織斑。

「……………」

0. 3秒後、箒は全てを理解した。

「だ、大丈夫か千尋!!?」

「あ、ああ…なんとか。」

箒の心配そうな声に対して、千尋は息絶え絶えの声で応じる。

——ふと、

「があああ!!?」

ISの装甲を吹き飛ばされる織斑が、2人の視界に映る——

。

迎撃に赴く異形^オの暮桜^{ルガ}に対し、親の仇と思わせるような形相で織斑
は雪片を振るう。

だが、振るわれた白い雪片は軽くないなされる。

「d@, j q @ @ : : d @ , j q @ d @ , j q @ d @ , j q @ d @ , j q
@ d @ , j q @ d @ , j q @ 4 p ?」——「!!」

そして、素早く胴を入れるように巨腕によるリアアツト——

——まるでバットでサンドバッグをカツ飛ばすような豪快な一撃。

「が————っ!!?」

織斑はそのままスーパーボールのように30メートル以上地面を

リバウンド――

「それがどうしたああああ！」

もはやシールドエネルギーによる装甲を維持するだけの力も無いらしく、白式は粒子となって崩壊寸前となってしまふ。

――にも関わらず、織斑は突貫する。

「…つち、あのアンポンタン!!？」

――気が付けば千尋は、駆け出していた。

本当なら、あんなアンポンタンは放ってさっさと撤退すべきだ。

けれどとつさに、衝動的にと言うか――。

「あの頃に比べて丸くなり過ぎだろ!!？」

――なんて、自分で自分を罵倒する始末。

「私が支援砲撃を行う。お前は――あの馬鹿者夏を頼む。」

ふと――試製20式複合ライフル砲を構えながら筈が言

う。

「――了解、隊長！」

その声と共に、千尋は跳ぶ。

――為すべきことは戦闘ではない。

要救助者の確保、そして迅速な一撃離脱。

――故に、求められるのは速度。

――千尋は地面を蹴る。

土塊を巻き上げながら――目標との距離50メートルを

3秒で駆け抜ける。

――そしてそれを、黒い暮桜オルガが黙って見過ごすワケがな

い。

「33、33、7Zsgq!a)4q@e、3uq||mZsa)4q@

ea)4q@e9bp――!!」

――意味のわからない、そも、意味があるのかさえわから

ない咆哮こえを放つ。

同時に、薙ぎ払うように振るわれる左腕らしき異形の巨腕。

それを――

「うるっせえよバケモノ――!!」

右腕の03式近接掘削打刀で殴り弾く。

狙うは腕ではなく肘。
腕そのものを破壊してもコレに対しては意味がない。
だからこそ、破壊するなら時間稼ぎが出来る場所を狙う事こそが重要であった。

故に、姿勢を低く落として潜り込む。

そして、肘目掛けて鋼鉄の拳を殴り穿つ——!!

「あっ、3#3#3#3#3#3#3#3#3#3#Z——!!」
あっけなく、肘は粉碎される。

思っていた以上に脆かったその関節の軟弱さに千尋は驚かされてしまう。

——そこへ。

「支援する!!」

試製20式複合ライフル砲の76mm砲を穿つ筈と、

「これでええええええッ!!」

雪片を振るう織斑が重なり——。

筈の76mm砲は黒い暮桜の左腕付け根を抉る。

織斑の雪片は黒い暮桜の右横腹の胴体を斬り払う。

「e7#3#3#3#3#3#Z、3、3#3#3!#Z、e q#33#

##!#Z——!!」

「やった——」

——やはり意味は分からない。だが悲痛な咆哮をあげる。

それで筈と織斑は嬉しさのあまり凶らずも声が重なってしまう。

——だが、それを両断するように。

「馬鹿が、2人共気を抜くな……こんなんじやコイツは死なない!!」
千尋が叫ぶ。

「え?」

思わず、2人は呆気に取られた声を漏らす。

「……22、c;p e t e——!!」
それを裏付けるように黒い暮桜は啞う。

——直後、黒い暮桜の切断された部位と抉られた部位は急

速に再生していく。

それはまるで、時間の巻き戻しのよう——。

「な——」

思わず箒は、こんなデタラメがあつてたまるか——と言わんばかりの顔をして絶句。

織斑は現実を理解出来ずに眼を白黒させる。

——ただ、単純な構造ではない関節部の再生には手間取っている。

「……ぞ」

千尋は黒い暮桜オールガを背に地面を蹴り、土塊煙幕を張りながらと土煙を巻き上げ織斑目掛けて跳ぶ。

「え、な——」

そうして、軽くフリアットをかますような勢いで織斑を掴むと——

——見様見真似の瞬間イグニッション・ブースト加速を掛ける。

” 見様見真似だが、案外上手くいった。 ” ……と喜ぶ暇など、千尋には無かった。

——とにかく今は駆ける。

遠方からは箒のものらしき砲声。

遮蔽物の残骸の合間を縫うように駆ける。

100メートルを2秒台で駆け抜ける速さを以って、疾駆する——

「お、降ろせよ！アイツは、アイツは俺が倒さなきゃいけないんだ!!」

——ふと、要救助者織斑一夏が叫ぶ。

それに、頭に血が上っているせいか、いつも以上に乱暴に怒鳴る。

「言ってる場合かこのド阿呆！第一俺らが束になっても今の状況じゃ殺されるがオチだ！」

「そんなのやってみなきゃ——!!っ。」

「ギャーギャーうるさい！ガキかお前は!!」

「んだと——」

——しかし、そんな速さを以ってしても。

「6 c e、 z t j 5 q ! !」

—— 追い付かれる。

黒い暮桜はあの巨軀にも関わらず、アツサリとこちらに追い付いてみせる。

しかも瞬間 イグニッション・ブースト 加速を行わず、ただの跳躍で追い付いてみせた。

—— 距離にして僅か50センチ。

どう足掻こうがリーチの長さで逃げられない。

—— だから、

「くそ、箒!!」

要救助者 織斑一夏 を、ぶん投げる。

「そいつを——」

そいつを受け取れ、と言おうとして。

—— ボキヤリ、と。

厭な音と、鋭利な痛みが右肩に走る。

同時に凄まじい速さで血を喪う感覚。

「ぐ、う、くそ、が…」

原因は判っている。

—— そも、喰いついて血を吸う者など、この場に オルガ ひとつしか存在しない。

「ふ、つう——」

千尋はすぐさま非常用近接ナイフを展開し、それを——

黒い暮桜の眼球に、突き立てる。

「3” 3” # # # ! e q e e q e e q e ! e q e E E E E E E E E E E E

E E Z —— !!」

—— 思わず、オルガは眼を潰された痛みで肩に喰いついた顎を離してしまう。

その隙に——

「—— はあ” ツ!!」

その頭を掴み、背負い投げる。

黒い暮桜は背中から地面に叩きつけられ、無防備な姿を晒す——

そこへ、穿たれる03式近接掘削打刀。

鋼鉄の拳は阻害されることなく、そのまま黒い暮桜オ ル ガの頭部を圧潰す

る———!!

———ぐしやり、と。

砕ける頭蓋骨。

飛散する肉片

飛び出る眼球。

撒き散る歯。

拡散する血液。

痙攣する残骸。

破碎される脳髓。

そこにあつたのは確かに潰れた黒い暮桜オ ル ガの頭。

———しかし、直感的に千尋は後方に跳ぶ。

「千尋……ち、血が……早く手当てしないと……!!?」

ふと、箒が千尋に駆け寄りながら叫ぶ。僅かに、ヒステリックな声音を孕んで。

「大丈夫だ。こんなの、焼いて止血すりや良い。」

———安心させようと、少し痛みで歪みながらも笑みを浮か

べて、千尋は応じる。

しかしそれは、返って箒の不安を煽ってしまう。

「や、焼けば良いって……そんなことしたら……!」

「お、おい……そんな事よりお前、なんで彼奴を倒しちやっただよ……」

☒

俺の獲物を横取りしやがって———と言わんばかりの顔で、

織斑は聴く。

———だが、それを遮るように。

「h & g @ () \$ E & & & & & & 6 ” ……!!」

異形の咆哮こえが、響く。

「……な……」

箒は絶句する。

それもそうだろう、あのバケモノは確実に千尋によって頭を潰された——にも関わらず、潰されたハズの頭は完全に再生してしまっている。

織斑は自分が倒さなくてはならない存在が生きていた事に喜ぶが、同時に自分に倒せるハズがない相手に思わず恐怖する。

「…ああ、くそ。頭を潰しただけじゃ、やっぱダメか……。」

3人の中で、この瞬間、言葉を話せたのは千尋だけだった。

——おそらく、アレを仕留めたくば過剰火力の集中打撃か、内側から吹き飛ばすしか無いのだろう。

「…やっぱ、内側から吹き飛ばさないとダメか……あの時みたいに。」

「…待て、千尋。お前アレと対峙した事があるのか？」

「え？ああ、まあ……詳しい経緯は省けば、その時はアレの体内から爆発させて倒すことには成功した。」

”——まあ、アレは自分も怪物だったから出来た芸当で、今の自分じゃムリだけだな……。”

と、千尋は内心呟く。

「そんなのどうでもいい……それより、なんで彼奴が千冬姐の刀を持ってるんだ……。」

「一夏……？」

ふと、織斑は震慄いた声音で黒い暮桜を睨みつける。

「あの刀は……千冬姐だけのモノじゃなきゃ——ダメなんだ!!？」

そして、零落白夜を展開しながら織斑は瞬間加速で再度突貫する。

「何をやっている馬鹿者！死ぬ気——」
箒が呼び止めようと叫ぶ。

——しかし、もう遅い。

「くそが、箒！援護!!？」

そうやって、千尋は跳躍ユニットを蒸して織斑を追う。

そして——それが失策であったと悟る。

黒い暮桜の左肩——腫瘍にぽっかりと空いた不自然な孔。

——そこに黄色おうしよくの粒子が収束する。

それに千尋は見覚えがある。見覚えがあり過ぎる。

——ああ、不味い。

頭が理解した時には遅過ぎた。

千尋は反射的に跳躍ユニットの噴射ノズルを上方に向けて噴射――

——地面に機体を擦り付けながらそのまま匍匐の体勢で伏せ、被弾面積を減らそうと足掻く。

織斑も危機を感じたのか、斬りかかろうとした零落白夜発動状態の雪片を反射的に盾のように構える。

——そこへ、黒い暮桜オルガは嗤いながら。

「x#:diuxe——!!」

黄色の線光を、放ち穿つ——!!

「ぐうっ!」

線光の最たる近者——織斑は零落白夜発動状態の雪片式

型を盾のように構えて防ごうとする。

零落白夜とは、対消滅エネルギーの結晶を展開するワンオフアビリティ。

故に如何なエネルギーであろうと、零落白夜の前には無に還されてしまう。

それは覆りようのない事実。

——しかし、それは人の観点から想定したモノが使役するエネルギーに対処する場合を前提としたモノ。

今眼前に迫り来る線光ものは、この世あらよに非るもの。

さらに言えばこの地球ほしにも非るもの。

であれば人が知り得る物でもない。

故に――

「え…雪片、が…?」

織斑の眼球に映るは線光を相殺しながらも亀裂が入り、崩壊している雪片式型。

——それは、零落白夜を凌駕する。

その、認め難い、否。決して認められない現実を叩きつけられた直

後、雪片は霧散し――

「…あ……」

線光に、吹き飛ばされる。

――運が良いのか悪いのか。

織斑はそのまま、衝撃波によって線光の照射範囲外へ吹き飛ばされて――。

――その後方。千尋もまた、線光の直撃を受けていた。

しかし地面に伏せている訳ではなく。

織斑の零落白夜が稼いだ時間をもって、予備のシエルツェンを展開し、それで線光を防いでいた――。

「――、う――ぐっ…!!」

ビリビリとシエルツェン越しに、腕から全身に波及する衝撃。

連続的に手から、衝撃がマシンガンのように襲い来る。

シエルツェンに亀裂が走り、そこから線光の熱が漏れ入り、千尋を焼く――。

この線光の本質は2つの波動――。

波動とは単に波とも呼ばれ、同じようなパターンが空間を伝播する現象のことである。

この線光は物理的衝撃波と熱伝導波が波動となって同時に襲い来るという代物――。

さらにどちらか片方だけでも数秒の照射でISの装甲を蒸発せしめる威力――

――本来のサイズなら高層ビルを粉碎するのだから、数次元弱体化パワーダウンしているとはいえ、ISで対応するには相手が悪過ぎる。

――と、要点は理解しているが。

「…ああ、くそ。こりゃ不味いな。」

この状況では耐える以外に対応のしようがない――それ
が現実だった。

そしてあと数秒で――シエルツェンは崩壊する。

否。ミサイルと呼ぶのが正しいのかさえ疑わしい。
機関銃めいた掃射、一撃一撃が秘める威力は岩盤さえ穿ちかねない。

一度につき12発——それが八度。

街の一区画を丸ごと陥没させかねない、計96発もの
タイプ000・フルメタルミサイル
000式貫徹徹甲誘導弾の豪嵐。

余波が地表を砕き、土塊を巻き上げ、土煙を起こしながらも、96
タイプ000・フルメタルミサイル
発もの000式貫徹徹甲誘導弾が黒い暮桜を砕き潰す——！！

——続けて、

「撃ち方始め!!」

山田が下す、裂帛の号令——。

地下に収容された観客席を覆う防護天蓋装甲。

そこに展開したIS学園第2教師隊が纏う、ラファール・リヴァイ
ヴによる、グレネードランチャーの連続投射。
炸裂するは煙幕。

——それで箒は、アリーナの外からタイプ000・フルメタルミサイル
を放っている部隊が攻撃、IS学園第2教師隊が自分達の救出を担当
する班に別れ、部隊が連携を実施している事を悟る。

「篠ノ之さん、離脱しなさい!」

突入してきた教師部隊のうちの1人が声をかける。

「で、でもまだ千尋が——!」

教師部隊の人間は主に女尊男卑に対して保守的な人間が大半——
——故に、千尋は置いていかれるのではないかと危惧して、箒が
言う。

——それを感じ取ったのか、その教師が口を開く。

「…安心なさい。たしかに私自身、男性はどちらかと言えば苦手だけ
ど、だからって見殺しにする程、私達だって人として落ちぶれてはい
ないわ。」

その回答に、箒は頷くと速やかに離脱する。

——その回答で、充分だった。

ふと、右を向けば辛うじてISの装甲を維持しているボロボロの白式を纏った織斑が教師に支えられながら離脱していくのが視界に映る。

「ミサイル第2波！来ます！」

他の教師が言い放ったその言葉にハッと視線を空に向ける。

そこには、緋炎を吹かしながら再度飛来する96発もの00式貫徹徹甲誘導弾。

それが再生途上の黒い暮桜を、今度こそ原型を留めぬまでに圧碎する——！！

再び余波が地表を砕き、土塊を巻き上げ、土煙を起こす。

”この戦い方……”

ふと、教師に肩を貸されながら離脱する千尋はその攻撃パターンに思い当たるものがあるのか、少し思考する。

：もとより、00式貫徹徹甲誘導弾とは80年代後半に開発された地对艦ミサイルの改良型であり、

MLRSやSSM、BMなどの多連装ロケット砲による攻撃運用がセオリーだが、それは連射を想定しておらず主に単射が主である。

にも関わらず、今回は連射ばかりを実行している。

——それは如何に対人類戦では不釣り合いであろうと、対獣戦ではそれを行わねば守れないという事を嫌という程刷り込まれた人間の戦い方。

——つまり、

「アリーナ外の砲兵隊を率いているのは……光か。」

その結論に至った。

????????????

S学園北部・夢見飛行場

第1対艦攻撃特科中隊前線指揮所

——黒い暮桜^{オトルガ}への攻撃に用いられた計192発もの
タイプ00・フルメタルミサイル
00式貫徹徹甲誘導弾の発射起点：そこには16台の94式自走ミ
サイル発射砲〔大鵬（多連装ロケット砲型）〕が展開していた。

光はその車列中央に駐車する、多数のモニターが戦況を告げる、戦
域を統べる匣の中——82式通信指揮戦闘車内にて指揮を
執っていた。

「フルメタルミサイル第2波、全弾命中。」

同車内で戦域情報を収集する、通信科の自衛官が淡々と告げる。

「目標の状況は？」

光はその自衛官に問う。

「暮桜：いえ、シユヴァルツアレーゲンとそのパイロツ
トを除いて、原型を留めていないそうです。」

「——やったんでしょうか？」

自衛官の報告に、他の自衛官が光に問う。

「いや、アレは死んでいない。原型を留めないまでに破壊してもどう
せ再生する。」

——その言葉に、2人は目を見開く。

原型を留めていない——文字通りミンチにしたにも関わ
らず、そこから再生するのだという。

これを驚かずしてどう反応を示せというのか。

「今は多少再生の時間を稼いだけだろうか——まあ、それ
でも良しとしよう。」

あくまで我々は支援の立場だからな——生徒や来賓者の
避難状況は？」

「アリーナ直下からは避難完了。しかし学園外へ繋がる海底地下路線
の方はやはり急な対応のため、列車の手配に時間がかかるかと。」

「非常事態に備えて、防衛省に木更津でモスボール保存していた70
式ディーゼル機関型装甲列車をいつでも発進可能な体制で待機させ
るようリクエストしておけ。」

「了解。——それと三浦半島直下に潜伏中と思われる巨大不

明生物は未だ現在沈黙中だそうです。」

「了解だ。こちらを片付けたらおそろく次はそちらだろうが――

――
言いかけて、光は口を閉ざす。

「I佐？」

「…いや、なんでもない。とにかくまずはここを片付けるぞ。」

――
光は、ただ現在の状況を完遂すべく、そう言い放った。

6?????????????
6月13日午前10時35分

IS学園第2アリーナ・ピット

離脱しピットに着機――速やかに千尋らは後に治療を受
けるべく統合機兵を解除する。

「っ――!!」

焼けそうな右肩に、成長痛のような激痛が走る。

――
先程、肩に焼けた刃物で皮膚を斬り付けられるような
激痛が走った時から同時にその痛みは生まれていた。

「…くそ。いってえなあ…。」

ふと、アリーナを見渡すと戦闘教員の数が3人と少ない。恐らく他
のアリーナで使っているISやISコンデンサーの数が足りず急ご
しらえでどうにかしているのだろう。

――
それらの状況を理解し、”最悪だ”と千尋は
判断する。

機体も人も数は少ない。

相手は全盛期の世界最強と異界の古い来訪者。

その相手は現在着実に再生中。

対してこちらはラウラ戦と黒い暮桜戦で千尋の統合機兵が中破、箒
の統合機兵が小破。

後者は整備でどうにかなるにしても前者は整備が間に合わない。予備パーツでどうにかなるにはなるが、この時間では損傷した既存パーツと新規パーツのツギハギ状態となり、動作不良を引き起こすリスクが高い。

現在オルコットと簪、そして凰も召集中らしいが避難する人間の濁流に飲まれてしまい、アリーナからかなり離れたため合流に時間がかかる。

——おまけに騒ぐバカが一人。

「離せよ箒！邪魔するならお前も殴ってやる！」

「っ！いい加減にしろ!!」

——是が非でも黒い暮桜オルガを倒そうとするゴネる織斑を箒が止めようと取り抑えている。

もはや收拾がつかない。

「こんの、離せって——」

——このままでは埒が開かないと箒も察したのか。

離せと言った織斑を箒は離してやる。

不意に離されると思っていなかった織斑は、つい数瞬間前までかけていた力の余波で、体勢を崩して、箒に背を晒す——そこを狙って箒は頸うなじに手刀を放ち、織斑の意識を奪う。

意識を奪われた織斑の身体は垂直落下するように床に伏す。

——一連の動作は流れるように、3秒と掛からず完遂される。

その光景に誰もが啞然と——することはない。

ただ少し、静かになったと認識する程度。

——それほどまでに、余裕がないのだ。

…ふと、そう思っていると千尋は箒に手を掴まれる。

「——箒？」

千尋は呼びかける。

けれど箒は無視して——山本三尉に機体を頼みます、と。

そう言うとき箒は人目につき難いであろう水場に千尋を連れて行く。

「箒…何の用だよ。」

千尋は先程から成長痛のような激痛が走り続けている右肩を押さえながら問いかける。

「何って、傷の手当てに決まっているだろう。医務室は葛川と織斑が使っているし、救急用具ならここにもある。」

「いいって。もう血は止まってるし。」

——そういうなり、右肩の成長痛のような激痛はさらに強くなる。

「良くない、もし良くないモノが体内に入ってたなら…!!?とにかくガーゼに包帯、あと抗生物質は飲ませるからな。」

「いや、本当に大丈夫なだけ…:血は止まってるし、ちよつと成長痛みたいな痛みがするだけでさ…:」

千尋は思わず苦悶に歪みながらも必死に作り笑顔を浮かべながら言う。

しかし額には脂汗が浮いて、痛みのせい、顔にも皺を作ってしまった。

” ああ、くそ——早く痛み引いてくれないかなア…:

”

「…本当だな?骨が砕けてたりはしないな?」

箒は訝しげに、そして心配気に問いかける。

「していない。湿布貼ったら行くから。」

たはは、と千尋は笑いながら箒に言う。

——だから、

「分かった。そのかわり——あとで心配かけさせたら許さないからな。」

——フンツと言うと、足早に去って行く。

怒らせるつもりは毛頭なく、心配させたくない一心だったのだが、少し不味かった…:と千尋は思うが、もはや後の祭り。

——だがこんな些細なことよりも、まずは黒い暮桜だ。

アレが完全再生したのち行動を再開するのはあと25分後だという。

少し、余裕があるように感じなくもない——だが逆に言え

ば、全身をミンチにされても25分もあれば完全再生出来るのだ。

それは、なんて脅威だろうか——そも、何故アレがシユヴァルツアレーゲンに取り憑いて居たのか、何故この世にもいるのか謎だ。

——まあ、考えても仕方ない。

そう千尋は思うと、右肩の成長痛のような激痛を抑えるべく、湿布を貼ろうとして——。

「？」

不意に痛みが止んだ。

直後——がちん、という鉄のような音。

——音源は右肩。

なんだろうと、思わず上半身のインナーを脱ぐと、そこには、

「え？」

大きさは5ミリから1センチ未満。

鋼鉄のような、肉のような感触の深緑色。

剣の切っ先に見えなくもない鋭利な表皮。

——それが傷口から生えている。

——見間違える筈がない。

——忘れる筈がない。

それは正真正銘——ミレニアムゴジラかつての自身の表皮であつた。

———^{混じり者}不純物が、^{ゴジラ}純正になり始めた。

????????????????????

6月13日午前11時00分

第2アリーナ

———^{アリーナ}先より25分が経過した空間。

———そこには再生を繰り返した……否。

時間を巻き戻したとしか思えぬまでに完全再生を遂げた異形がひとつ。

「3———3、33：3、3、3333333##_##———

———「Z!!」

———それは悲鳴。

———あるいは産声。

———殺してくれ、と懇願する声と。

———私を観て、と歓喜する声と。

矛盾する意味、相反する意思を持つ声が螺旋のように相克したような声。

そのどちらにも聴いて取れる奇声の咆哮を、^{オール}黒い暮桜^ガは上げる。

それを、祝福するように———。

———いや、否定するように。

『^{コマンドポスト}CP—00より^{オールハンド}全部隊へ^{ヒトヒトマルマル}通達。———状況開始———^{ヒトヒトマルマル}』

『^{コマンドポスト}CP—00———』

———^{のろし}前線指揮所より下る、狼煙の下命。

直後、緋炎を吹かしながら再度飛来する16発もの

タイプ00・フルメタルミサイル
00式貫徹徹甲誘導弾と79式対舟艇ミサイルの混合射撃。

それは再び黒い暮桜オールドガの身体を、大地ごと砕き、斬り刻み、吹き飛ば

す———!!?」

「gg@g@Z!E、7#33###3Z!33##Z———

———!!」

再度上がる悲鳴歓喜。

———それに応こたうるは。

「…少し待っている、ラウラ。」

———急遽臨時編成された教師部隊2個小隊と選抜生徒部

隊2個分隊。

臨時第1挺身突撃小隊『スノウ』指揮官———地下より持ち

出して来た純白真なる暮桜のISを纏いし織斑千冬。

「———今、助けに行つてやる。」

純白の雪片を手に、玄い髪をたなびかせる世界最強ブリュンヒルデ。

そして———その指揮下に在りし者。

臨時第2挺身突撃分隊『セイバー』———蒼藍のユリウスを

纏いしセシリアと、銀鉄の打鉄式を纏いし簪。

「こんな時に凰とデュノアは何処行つてるんだか…。」

「セイバー1よりセイバー2。愚痴を言つても仕方ありませんわ、簪

さん。彼女らが来ないのならば———私達が死に物狂いで迎

え討つだけです。」

思わず、簪はこの場にいない2人の代表候補生の事を愚痴る。

それに対し、澄んで落ち着いた声でセシリアは応じる。

「簪さん、危うくなれば私わたくしの後ろに下がって下さい。」

「…え?で、でもセシリアの機体は後衛だから———」

「機動砲撃戦でなら、前衛も勤められます。それに———この

身を呈して友軍を守るのは、貴族共わたくしの責務ですから。」

———威風を纏う碧眼。

そこにあるは入学した時の高飛車な貴族ではなく、騎士道を宿した

王の如く———僅かな時を経て成長した彼女セシリアだった。

「装填時や補給時の前衛は任せて下さい。」

「…あ、う、うん。分かった…。」

臨時第3挺身突撃小隊『ガンナー』指揮官——ラファール・リヴァイヴを纏う、山田先生。

「皆さん——準備は良いですね？」

マガジンを装填し、撃鉄を起こす——「一連の動きをしなが
ら山田先生が問う。」

それに部下の教員は肯定の応答。

トレードマークである緑髪は後ろに括り、メガネは外してアイコン
タクトに換えた姿。

そこにあるのは教師としての山田真耶ではなく、兵士としての山田
真耶。

その一言一言に凜とした雰囲気纏い、有無を言わせぬ言葉を口に
する。

「——突入の指示を待ちます。そのまま皆さん待機。」

臨時第4挺身突撃分隊『ブレード』指揮下——デジタル迷
彩を施された凱武である打鉄甲一式をその身に纏いし千尋と箒。

「…時に、本当に肩は良いんだな。」

——なんて、箒が千尋に問いかける。

その姿勢は何処と無く女房気質。

この場に不似合い極まりないほどの優しい声音を孕んで。

「ああ——。心配してくれるのは嬉しいけど…：今は捨てと
け。死ぬぞ。」

——それに千尋は、感謝を抱きながらも咎めるように言葉
を返す。

此処で余計なことを考えるな、下手したらそれが命取りになる——
と。

それはまるで、既に数多の戦場いくさばを駆けてきた猛者かいぶつを思わせる声音。
「——了解した。では作戦通りに事を成すぞ。」

それに従うように、箒は蠟燭の火を吹き消すように感情を消した声で返す。

——それに千尋は微笑み、

「ああ——了解だ。箒姐。」

——いつ以来かの、懐かしい言葉を放つ。

言葉の意味こそ幼さに満ちた子供の口にするもの。

されど、それを構成する感情は酷く大人びた声で。

それを耳にしながら、ふと箒は作戦を思い返す。

——作戦は単純かつ明快。

——千冬のチームを黒い暮桜正面の第1ピット。

——セシリアのチームを黒い暮桜左側面の西観客席天蓋

装甲板上。

——山田のチームを黒い暮桜右側面の東観客席天蓋装甲

板上。

——千尋のチームを黒い暮桜背後の第2ピット。

——まずそのように挺身突撃隊をアリーナの4箇所に分散配置。

——次に作戦開始と同時に第1対艦攻撃特科中隊による

00式貫徹徹甲誘導弾と79式対舟艇ミサイルの混合射撃。

——それによって黒い暮桜の外皮をもう一度損壊させる。

——そして再生に回った所に挺身突撃隊全隊が周囲から

斬り込み、正面の千冬のチームが零落白夜とその他三方のチームが

秘密兵器をもって、ラウラを引き剥がす。

——暮桜の零落白夜は白式より出力が劣るが、そこは世界最強の技巧を

もって補完するしかない。

——…そも、正面からの突撃隊が千冬なものも、現時点でもっとも強力な

IS乗りは彼女であるというのが大きい。

——元より、ラウラさえ引き剥がせばアレを倒す事に手加減は要らな

い。

——故に、最終段階においては00式貫徹徹甲誘導弾19

2発の過飽和攻撃と秘密兵器をもって殲滅する。

——万が一それで殲滅に至らなかった場合は在日米軍の

C-130輸送機からMOAB、それもGBU-43/Bのペレット
大規模爆風兵器
投下を用いた空爆をもってアリーナ諸共を消滅させる。
核兵器と同威力の通常爆弾

それが今回のラウラ救出作戦の内容であった。

オーバーキル
過剰攻撃かも知れないが、それは対人戦しか知らない者から見た話。
そもそも今現在の戦力だけでも遥かに不足している。

アレを確実に殲滅したくば、あと1個戦車中隊と1個自走砲小隊、
あるいは強力な対地攻撃能力を持つトマホーク巡航ミサイルを装備
した日米軍の駆逐艦1隻は現在の戦力に加わって欲しいのが現状
だ。

それでもしなければアレを殲滅させる事が出来ない。

その状況下で、戦況はただ推移する。

廃墟と化した無人のアリーナ。

豪雨の如く降り注ぐ鉄塊の嵐。

中央に座する異形の黒い暮桜。

突撃の秒読みを待つ教師生徒。

今此処に、役者は揃う。

そこへ

『コマンドポスト
CP-00より第1対艦攻撃特科中隊指揮官へ。貴隊は支援砲撃を

継続
—— オクレ。全挺身突撃隊へ通達。突入開始——

—— 繰り返す、突入開始！オクレ——。』

突撃の慟哭と、

「了解！—— 総員、突撃開始！！？」

千冬の、裂帛の号令が下る——！！？

午前11時03分
??????????????

IS学園北部・夢見飛行場

82式通信指揮戦闘車（前線指揮所）

多彩な機材が奏でる無数の機械音響。
通信士オペレーターの通信と報告。

隣で支援砲撃を継続する第1対艦攻撃特科中隊の大鵬が齎す震動と砲声。

——それらが82式通信指揮戦闘車の狭い車内に反響し、
奇怪な空間を演出する。

それはまさしく異界。

一般人であればまず見て、聴くことのない因子によって支配された
——異形の空間。

——そこに、光は身を置いていた。

「挺身突撃隊、全機突入しました。」
通信士オペレーターが前線指揮官である光に告げる。

——それに光は頷きながら、

「了解——特科中隊は一時支援砲撃を中断。別命あるまで待
機。」

落ち着きを払って命じる。

——そこに私情はない。

——ここに感情はない。

——そも、それは不要。

前線指揮所を統べる指揮官に求められるは冷静に事象を観察し、分
析し、それに対処する能力。

此処では機械的に判断するべきで無くてはならない。

——感情でその代用や補完が効くほど、現実世界は優しくな
い。

” それは、よく分かってるさ—— ”
ふと、思考の片隅にかつての友人が映る。

——普通に生まれた少女。

——普通に育った少女。

——天災が歪めた少女。

——天災が追いやった少女。

——自分が救おうとした少女。

——自分が逃した少女。

——今は何処にいるか判らぬ少女。

「美都……」

「思わず、ポツリと呟く。

だが—— ” 今は、邪魔だ。 ” と、消しゴムで鉛筆の線を消すように思考の片隅から消し潰す。

——決して想っていないワケではない。

だが、今の自分は何十人も人間を率いている。

否——何十人も部下の命を預かっている。

自分が判断を誤れば、自分の預かっていた命を潰して、部下を殺してしまう。

——自分の部下として人間だ。

意思も有れば、人生も有るし家族も居る。

当たり前の、一般人と変わる事のない——ごく普通の間。

その部下を——生きて帰らせる事もまた、作戦遂行と同時に光が為すべき責務だった。

「片桐一佐。」

——ふと、通信士オペレーターが口を開く。

「今程入った情報ですが——横須賀基地より同基地所属の第

11護衛隊が我が方IS学園に向け出航準備中との事だそうです。」

「第11護衛隊——護衛艦【やまと】を中核とする砲撃艦群か。」

護衛艦やまと——海上自衛隊の護衛艦であり旧大日本帝国海軍の戦艦。

レイテ沖海戦で湾内に突入し、輸送船団の多くを葬るも、帰投中に雷撃を受け両艦共に中破。

呉基地所有の江田島特秘ドッグに極秘裏に入るが、たび重なる資源不足と資材が他艦に回されたために修理が1年以上遅れてしまい、1962年に海上自衛隊が江田島特秘ドッグを発見し、同じく鎮座していた天城と共に発見されるまで置き去りにされていた老艦。

しかし老艦と侮るべきものではなく、1971年・太平洋方面の日本領海内に侵入した世界で3番目の巨大不明生物に対して航空機では火力不足であるという結果となるや絶大な火力をもってそれを殲滅せしめた存在。

—— 故に、対巨大不明生物用戦力の切り札のひとつとして度重なる大改装を経て今日まで遺されてきた巨艦。

—— それが動き出したのだという。

「はい—— 間に合うかは……判りませんが。」

「期待は出来んな、ここから横須賀まで直線距離で50キロは離れている。……仮に最大戦速の36ノットで駆けてきても40分以上はかかる。」

光は事実を述べる。

—— 元より、「やまと」はこの支援が目的なのかさえも怪しかった。

……もし、この学園が目的地でないとすればそれは—— 日本領海内に巨大不明生物が潜伏している事になる。

だが今は——

「……それに学園がそれまで待てないだろう。アメリカも事態終息の為にGBU-43/B核兵器と同威力の通常爆弾を落とそうとするだろうしな—— とにかく、我々がやれるだけのことをやるしかない。」

—— 懸念要素を抱えながらも現状に向き合う他、選択肢など無かった。

????????????
午前11時04分

第2アリーナ・闘技場バトルフィールド

—— 連係する応答。

—— 連鎖する銃声。

—— ? 摩擦? する剣戟。

—— ? 紛紜する? 両陣。

崩落する瓦礫。

咆哮する対敵。

状況は、やはり混乱していた。

12式装甲刀剣や短刀で突撃する前衛——それは巨腕と雪片に阻まれ迎撃される。

20式試製ライフル砲にて砲撃する後衛——それは超電磁砲と線光波動によって撃墜・応戦される。

そこに無駄はなく、人と異形のキメラという不安定な体躯でありながら世界最強さえ上回る軌道を生み穿つ。

∴それはある意味当然の道理。

——何しろ対峙するのは異形の者であると同時にV Tシステムなのである。

ただでさえ強靱なV Tシステムに、第3世代機のシュヴァルツアレーゲンと未知の能力を持つ異形の者までもが加わっている。

如何に世界最強を含めた強固な部隊で纏めようとも、勝算があるのかすら疑わしい。

——否。それ以前にラウラを引き剥がせるかさえ不明瞭。

——なれど、やらねば何も変わらない。

「もう一度、突撃の機会を作ります！セイバー2！ガンナー1！」

09式120ミリ自動滑腔砲を担ぎながら、後衛を務めるセシリアが中衛の簪に向けて叫ぶ。

「セイバー2了解——」

「ガンナー1、了解。」

——そこに、64発の山嵐を装備した簪と、対戦車？84mm？回転式弾倉型？無反動砲を背負う山田先生が応

える？

多数同時集中照準固定マルチロツクオンからハッチ展開まで——。

一連の動作は流れるような速さでそれは実行され、

「指定展開——！」

——セシリアの宣告。

—— 拡張領域より、舞うように黒い暮桜外周に位置する座標へ指定展開される4機のBT兵器。ストライク・エア

砲身にはすでに充填され、今か今かと放たれるのを心待ちにする自由電子の光。

—— 通常であれば超電磁砲と線光波動によって撃墜されるがそれは単発の攻撃をチマチマと撃つた場合の話。

そも—— アレに単発の対戦車ミサイルや砲弾を撃つなど、ハリネズミの針に風船を当てるようなものだ。

今の黒い暮桜は超電磁砲に加えて線光波動という二つの迎撃能力とVTシステムの影響か、それを極限にまで引き上げるレーザーシステムとIS本来のハイパーセンサーを併用して、自身に穿たれた砲弾やミサイルを完璧に撃ち墜とす。

—— 逆を言えば、迎撃を行なっている間はISに向けて飛び道具を放たれる心配は無い。

当初はその特性を突いて近接戦を展開していたが、それでは埒が開かない。

故に、簪の山嵐—— 64発のマイクロミサイルによる過飽和攻撃をもって認識を飽和させると同時に、BT兵器をもって急所への的確なダメージを与える必要があった。

「—— セイバー1／セイバー2、遠距離斉射!!？」フォックス・スリ

—— 宣告する。

—— 両者の網膜に投影される、「FIRE」の文字。発射

直後—— 64発のマイクロミサイルはハッチより、緋炎を引きながら飛翔。

—— 同時に。

BT兵器より放たれる—— 蒼条の閃光。ストライク・エア

餌に群がる魚群の如く、山嵐は黒い暮桜目がけて踊り上がり——マイクロミサイル

雷の如く空を切り裂かんとばかりに、光の槍が黒い暮桜を刺し穿ついかづち

「h&g@(\$E&&&&6&66Z!!」

まるで手脚を落とされたような悲鳴を上げる黒い暮桜。

否。———今の一撃で、その巨腕の片方は腐蝕した樹木のよ
うに損傷。

———もう片方は確かに肘関節より下がゴツソリと消し飛
んでいた。

それに畳み掛け、追撃するように———。
「ガンナー1、遠距離斉射!!?」

———山田が下す、
対戦車? 84mm? 回転式弾倉型? 無反動砲の3斉射。?

? 大気を震わせて穿たれるは84mm対戦車榴弾。?

? それは未だ健在である残りの巨腕を、さらには? 超電磁砲のり
ニアレールを? 間違いなく吹き飛ばす———!!??

「3、#33!eq, eqe!...、b?、bbbb?r, rrrrrr:
!!」

———黒い暮桜が吼え、唸る。

以って、黒い暮桜は両巨腕と超電磁砲を喪う。

「———突つ込むぞ!!?」
好機と捉え、千冬が号令をかける。

「———了解!!?」
それに応うるは、千冬の部下と篠ノ之姉弟———前衛突撃班
の者。

そして可及的速やかに: 否。可及的などではなく、もはや限界の速
さで突貫する。

この相手には、時間が命なのだ。
事実———既に黒い暮桜は喪った巨腕を4割ほど再生させ
てしまっている。

その黒い暮桜正面より、千冬は突貫する。

———同時に瞬間的に煌めく雪片。

それは紛れもなく零落白夜の対消滅エネルギー波の閃光。

———それを、

「はあッ!!?」

黒い暮桜オウルガの下腹部目掛け、零落対消滅エネルギー白夜の刃を振るう。

「h & g @ (\$ E & & & & 6 " 6 " 6 ! ! 」

—— 咆哮。

同時に空気を奔る —— 漆黒の雪片。

両者は互いに零落白夜を発動したまま、ぶつかり合い ——

剣戟を歌う。

響き渡るは雪片ハンモノと雪片ニセモノが撃ち鳴らす金属音のオペラ。

千冬の剣戟は機関銃の銃口より放たれる弾丸の如き密度と速さと斬撃の嵐。

その相手が並みの国家代表や通常兵器ならば間違いなく完膚なきにまで破壊し尽くせる暴風のような —— 高速の蓮撃。

「ッ —— !!?」

—— だがしかし、今対峙しているのは織織斑斑千千冬冬である。

如何に織斑ハンモノ千冬千冬が最強であるとVTシステムニセモノが織斑ハンモノ千冬千冬に敵わぬ道理など存在しない。

—— 故に両者は拮抗。

無尽蔵に衝突し合う零落白夜は互いにシールドエネルギーを喰らい合い、消費し合う。

—— それは相互侵食。

斬り合えば斬り合うほど両者は損耗し、戦闘終わり不能に転がり落ちて行く。

それは諸刃の剣 —— しかし今ラウラを助け出すにはそれが最も的確な事は言うまでも無い。

「梅塚先生スノウウツ、支援射撃から近接支援射撃。橋上先生スノウウツ、近接支援攻撃。」

剣戟の嵐の中、千冬は背後より支援射撃を行っていた2人の教師 —— 部下に近接攻撃による支援の命令を下す。

—— 千冬1人が正面から黒い暮桜オウルガを受け止めている内に他部隊と連携して黒い暮桜オウルガのシールドエネルギーを削り取ろうとい

う魂胆なのだ。

だが——それを黙って見過ごす程甘い黒い暮桜^オではない。

「h&——!!?」

——千冬への猛攻に拍車がかかる。

嵐のような剣戟を右腕で繰り出しながら——左腕に展開されるプラズマブレード。

そう、この機体は本来シユヴァルツアレーゲンなのである。

故に、その武装を展開出来る事は容易に想像できる。

だが——まさか、このタイミングでそれを使うなど誰が想定しようか。

——そのまま、黒い暮桜^オはプラズマブレードを千冬に振るい。

バチイツ!!?と電子が弾ける音が響く。

——そこには、試製20式複合ライフル砲の試製12式改耐熱装甲刀でプラズマブレードを受け止める、梅塚^ス先生^ウ。

「生憎と——これ以上暴れられるわけにはいきません。」

梅塚は言うなり、漆黒の試製12式改耐熱装甲刀を振るう——

——バチイツ!!?と再度響く音響。

プラズマブレードは試製12式改耐熱装甲刀によって打ち上げられ、その無防備な左腕を晒す。

そこへ——間髪入れず、放たれる76ミリ砲。

「hG、a a——!!?」

——もって、左腕のプラズマブレードは沈黙。

そこへ再度繰り出される、千冬の連撃。

そして——無防備を晒す背中に、橋上^ハが斬りかかる。

武器を扱う腕は剣戟の嵐によって拘束されている。

超電磁の砲撃もリアールの破損によって発射不能。

故に、その攻撃は通る——ハズだった。

「as@(\$E&&——!!」

——突如としてその思考は覆る。

「え？あ、がつ——！」

橋上の苦悶に満ちた声。

同時に——千冬と梅塚の眼前に、蛇が走る。

すぐさま、2人はバックステップで距離を取る。

そして——

「な——」

——眼前に写る景色を前に、絶句する。

自分達の視界に走り、橋上に一撃を加えたであろうソレは。

蛇の体躯の如く、奇妙にしなり、とぐろを巻きながら蠢くソレは。

白銀の大蛇に見えたソレは——はたして、ケーブルの束で

あった。

「ば——、な、ケーブル、ですって…？」

梅塚は思わず絶句する。

そして同時に齒軋りする。

——蛇のように蠢くケーブルは、黒い暮桜の周囲でとぐろを巻くように展開している。

下手に攻め込もうものなら、たちまちアレの近接迎撃によって墮とされるのは目に見えている。

——故に、今の手法は通用しない。

「——…くそ。」

思わず、梅塚は毒付く。

それは今自分達が行った戦闘が水の泡になった事を意味する。

シールドエネルギーを削ったという面では意味のある戦闘であったが、それが一度しか出来ないのでは全体的に見て意味が無い。

——そしてソレは、千冬も理解していた。

何か他の策を探さねばならない。

そうしている内に、黒い暮桜は時間を稼ぎ、巨腕を再生する。

黒い暮桜は先程千尋達と交戦していたラウラを彷彿とさせる不敵な笑みを浮かべる。

そしてもう、巨腕は6割方まで再生して行っていたところで——

「隙だらけだぞ、ケダモノ。」

突然の声。

反射的に黒い暮桜は硬直してしまう。

そこを、背後から躍り出た2つの影が巨腕を再断する――

！

「h&g、g、aaaaaaA!!？」

飛び散るは異形の巨腕。

舞い散るは異色の血液。

雄叫ぶ声は漆黒の暮桜。

――巨腕を斬り飛ばしたのは、やはり紛れもなく千尋と箒だった。

千尋の手には19式大型装甲長刀改がひとつ。

箒の手には試製12式改耐熱装甲刀がふたつ。

――2人は刃を携えたまま、千冬の下へ舞い降りる。

そこへ――2人の攻撃に続くように放たれる蒼条のレ

ザーと対戦車榴弾の嵐雨。

それらが再び、黒い暮桜を砕く――!!

「……無事ですか？」

19式大型装甲長刀改を構え、黒い暮桜を睨みつけながら、飢えた肉食獣のような声音で千尋が問う。

「あ、ああ――だが、アレは一体何だ？」

一瞬、気圧されてしまうも千冬はすぐに平静を取り戻し、蛇のように蠢くケーブルを見やりながら呟く。

「――たぶんシユヴァルツアレーゲンのフレーム内部に格納されていた筋電圧情報送信用のものでしょう。」

千尋は今にも獲物を噛み殺そうとする猟犬のように、しかして努めて平静を孕んだ声音で千冬の問いに答える。

その隣では箒が試製12式改耐熱装甲刀を二刀流で構えながら――

――ふと、部隊間データリンクを見て呟く。

「織斑先生、ここは私達が務めます。貴隊はシールドエネルギーの補給を。」

箒が千冬に言い放つ。

——箒の言う通り、暮桜のシールドエネルギー残量は既に5割を切っていた。

通常のIS相手ならば大して問題はない。

だが今の相手はVTシステム^{織千冬}。

気を抜けば死にさえ直結しかねない相手。

故に補給は必須だった。

「補給？でもどうやって——？」

橋上に肩を貸しながら梅塚が問う。

——その疑問も当然と言えば当然だ。

元々このアリーナにはピット以外補給設備は存在しない。

そして、ピットにあつた物資は現在全て持ち出し、現在進行形で消耗中だった。

——だがそれを、予見出来ぬほど抜けている訳ではない。

「特自の第11施設科中隊と第7武器科中隊が、アリーナの非常用昇降口に補給スポットを設置しています。そちらへ向かって下さい。」

「…用意周到だな。長引くと予見していたのか？」

箒の答えに、千冬が問う。

——それに箒は少し、ニヒルな笑みを浮かべる。

「——みたいですね、私と千尋の上官は。」

「ふ——では、好意に甘えさせて貰おう。すぐに戻るが…」

——少し申し訳なさそうな声で千冬は言う。

それに対して箒は自信たっぷり、

「任せて下さい。こう見えて、私だって自衛官なんですから——」

——そう、回答する。

それは虚勢。

千冬達を安心させる為の戯言。

しかしながら、そうでもしなければ千冬達は絶対に後退しない。

あの人はそういう人だ。

だからこそその戯言。

「すまん——」

——そう言つて、千冬は一時離脱する。

それを見るなり、

「くそ——とは言つたものの…正面から対峙すると中々厄介だな…。」

——思わず本音を吐露する。

千冬でさえ手こずつた相手と、今から殺り合うのだ。

それを前にしてこのような感情を抱かないはずがない。

ただ一人——やはり飢えた肉食獣のような雰囲気纏う千尋を除いて。

「それでもない、案外ラッキーかもな、俺たち。」

ふと、千尋が呟く。

「彼奴はまだ小さいからあの程度しかケーブルは操れない。」

だが元のサイズなら…：そうだな、新宿みたいな大都市のケーブル全てを今のアレみたいに操つて迎撃したり攻撃も出来る。」

「ちよ、な——アレでまだ本来より劣るといふのか☒」

「うん全然。例えるなら宇宙戦艦が木造帆船にスケールダウンしたようなモンだし。」

——それを聞いて箒は絶句する。

最早それはスケールダウンどころではない、全く別次元の存在だ。

だが今そんなことはどうでも良い。

つまり本来は今の黒い暮桜^アより数次元強大で今本来の力を取り戻したら——そうなつたら詰みだという事。

——無限に再生し続ける機械化された数千個師団規模の歩く城塞を生身、しかも素手で相手取るようなものだ。

「…今でも十分キツイのに、まだラッキーな方とはな。」

思わず箒はへつら笑いを浮かべながら呆れ返るような声音で呟く。

——無理もない。

本来のオル^{旧い来訪者の成れ果て}ガとは、実際にデタラメなのだから。

「——だがつまり、今のアレなら倒せない事もない…：そうだな？」

思わず、箒は問う。

アレが本来はデタラメで強大だと千尋は言った。

だが今は宇宙戦艦から木造帆船にスケールダウンしているようなモノだと千尋は言った。

ならばそれは――

「ああ……つちも滅茶苦茶なやり方をしなきゃいけないが――
――倒せない事はない。」

そう呟きながら、千尋は秘密兵器を展開する。

――それは無反動砲に見えなくもない外観。

しかしして砲身に取り付く回転式銃身のガトリングのような収束機、マガジンのように搭載された引火性物資を意味するマーキングを施したタンクがそれを否定する。

――砲身から、火焰が奔る。

「え……？」

それを見た箒が愕然とする。

眼前にあるのは砲身から炎を放つ火炎放射器――それは間違っていない。

「なに……あの、火力……？」

だが、規模はそんな生易しいものではなかった。

” 冗談じゃない、これのどこが火炎放射機なの：☒ ”

そう思った者は果たして何人いただろう。

確かにアレが火炎放射機である事には違いない。

だが元来火炎放射機とは距離のある敵に引火性の液体を吹きかけ、燃え上がりながら焼却する兵器である。

対して眼前の事象はどうか。

――砲身から放たれた業火は砲口に留まりながらも膨大な熱量をもつて地面を溶かし、蒸発させながら大地を焦がし、上昇気流によって土塊を巻き上げ粉碎する。

――業火の発生による衝撃波で荒れ狂った大気は風を、周囲に存在するありとあらゆる事象を斬り刻む鎌鼬かまいたちに変異させる。

――これは発火ですらない。

——もはやこれは爆発でしかない。

なにしろ、火炎放射の引火性薬液に通常の重油やゲル化ガソリンではなく一液式液体燃料ロケットにも使用されるヒドラジンを使用しているのだ。

ロケットや大陸間弾頭ミサイル打ち上げの際に発生する噴射炎——爆発的^{VTシステム}火炎の連射はもちろん、3キロ圏内の事象に対して爆風による無尽蔵な破壊をもたらす存在だった。

——つまり、アレは300トンもの物体を^{時速12240キロメートル}マツハ10にまで加速させる程のエネルギーを絶え間なく放つ、そこにあるだけで効果を発揮する無差別殺戮兵器と同義の対獣兵器。

——名を、試製18式原子火焰砲。

——如何に力を持つ黒い暮桜^{オルガ}でも、アレが危険だと理解できる。

——脳が警鐘を鳴らす——。

——それが黒い暮桜^{VTシステム}としてではなく、オルガ^{旧い来訪者}としての意識を完全覚醒させる。

——千尋もそれを感じ取る。

——それに応えるように、試製18式原子火焰砲の砲口から地面に向けて荒れ狂う炎の奔流はさらに限界を知らずに溢れ出す。

——際限があるのかさえ不明瞭な灼熱を、獄焔を千尋は使役する。

——「いくぞ、オルガ^{旧い来訪者}。」

——そして静かに、しかして確かに——^{かの怪物}千尋は脚を踏み出しながら処刑宣告を告げる。

????????????

——S学園沖合南西38キロ洋上

——IS学園からの砲声と銃声が僅かに残響する洋上。

——そこを、海上自衛隊のDDG-172^{はたかぜ型ミサイル護衛艦}「しまかぜ」と在日米海軍

DDG-1004^{ズムウォルト級駆逐艦}「キング」が航行していた。

——彼らはIS学園に向かっていているわけではない。

ただ彼らが追うモノの進路の都合上、結果的にIS学園へ向かって
いる次第である。

◆◆◆◆◆

護衛艦しまかせ艦内艦橋CIC

精密機械に満たされた空間。

そこに報告を放つオペレーターの声が混じり合い、そこは混迷とい
う名の竈へと変貌を遂げていた。

「——目標、警告無線通用せず。浮上を開始しつつも進路、速
度を維持。」

——ソナーマン 対潜哨戒のオペレーターが報告する。

彼らは30分ほど前から国籍不明の潜航物体を捕捉。

それを追って今ここまで到達したのだ。

警告無線で呼びかけるも依然として無線は通用せず。

警告を無視して潜航を継続している。

——本来ならば、今ここで魚雷攻撃や爆雷攻撃のひとつや
ふたつを施されても不思議ではない。

だが、それは出来ない。

憲法上それが不可能であるという事もあるが、亡命船舶である可能
性もあるためにただ追跡するに留まっているのだ。

「目標浮上——、キングも捕捉した模様。」

再びソナーマン対潜哨戒のオペレーターから下る報告。

そして、入れ違うように通信士のオペレーターが報告を告げる。

「キングより入電——対象を捕捉。船舶ではない——

——繰り返し、対象は船舶ではない。対象を巨大不明生物と断定!!？」

オペレーターの、切迫した声。

それを耳にして、報告を元に状況を整理していた艦長が口を開く。

「横須賀の第1護衛隊は？」

「現在観音崎沖を南下中——間に合うかどうか——……」

それに出て来ても、内閣の承認が無ければ攻撃できません——

——オペレーターの瞳が、そう言外に訴える。

さらにセシリアに向けて幾条かのケーブルが走る――。

「舐めないで下さいませ……インターセプター!!？」

不規則に追撃するケーブルに対してセシリアが選んだ武装は近接自衛兵装・インターセプター Mk. 2 Type-B。

しかし、セシリアには近接戦で迎撃するという思考はない。

そも、ナイフ型の武装であるインターセプターでアレに近接戦を仕掛ければ、碌に対応しきれずに捕まるがオチ――そう、理解したからである。

ならば拡張領域より招び出したインターセプターの使い道など知れている。

――故に、インターセプターソレをケーブルの群れに投擲。

そこへ、09式120mmライフル砲のHE弾を放つ――

！
HE弾ソレはインターセプターを蜂の巣にしながら、刀身を四散させ――

――HE弾本来の燃烧効果と飛散する刃の破片でケーブル群を薙ぎ払う。

しかし――

「くっ――!」

そこへ――続け様に黄色の線光が穿たれる。

”ツ、まず――”

不味いと頭が理解する。

しかし遅い。

出来る事といえばアレの直撃を受けるか、無理な体制変更で地表に墜落するか、それとも――。

黄色の、熱と衝撃による破壊の光がセシリアに迫る。

――そこを。

「セシリア!!？」

打鉄甲一式を纏いし箒が、セシリアにリアアットを喰らわせるように無理矢理抱き抱え――跳躍ユニットのロケットモーターを点火。

背後を黄色線光が駆け抜け――間一髪で、躲す。

そして、黄色線光と対を成す方角より、大気を焼き払う熱線が疾る
——。
——それは、黄色線光を相殺し、アリーナを蹂躪する荒風
を生んだ。

「————つち、相殺が限界かコレ。」

——黄色線光を相殺した千尋は苦虫を噛み潰しながら言葉
を吐く。

今の熱線は試製18式原子火焰砲が放った、極限まで収束させた
焰。

それはもはや火炎放射器などではなくビーム砲である。

生物を焼き殺すことを前提とした火炎放射器の概念を木っ端微塵
に粉碎し、主力戦車などの装甲車軸を融かすという概念に新しく塗り
潰してしまう程度には火力を秘めた武装。

——しかし、それは人類ヒトの観点から見た話であり、これだ
けではアレを殺すには遠く及ばない。

オルガナイザーIG1
自分の血の再生力の前にはせいぜい瀕死に追い込むのがやっと。

黄色線光に対しても、相殺が限界。

「9 b p 9 b p 9 b p 9 b p 9 b p 9 b p 9 b p 9 b p ! m z

s 9 b p —— ! b @ d @ o —— !! ? .」

黒い暮桜オルガが吠える。

異形の体躯が千尋を目掛けて地を砕き、土塊を巻き上げながら走り
迫る。

その速度は時速135km/h。

陸上最速の生物であるチーターさえも上回る俊足。

それは意図も容易く、そしてほぼ瞬間的に千尋の眼前に襲い来る。

今黒い暮桜オルガの眼球に反射する千尋鈍重な獲物など、追いつけるはずも無い速
さ。

だが――

「はっ――」。

――笑う。

千尋は笑う。

自信と自戒。

狂喜と悲哀。

二律相反。けして混じり合わない感情を殺意がぐちゃぐちゃに混ぜ溶かした感情。

獣のようにどうしようもなく歪んだ口と、射殺すように収縮した瞳孔で彩られた顔を浮かべそして――

「――鈍足、上等。」

――冷たく荒々しい声が、大気を慄ふるわせた。

次の瞬間――

跳躍ユニットを点火と同時に地面を弾くよ

うに地面を蹴る。

背後に吹き飛ぶ土塊。

黒い暮桜との距離は10メートル弱。

獲物の砲口は黒い暮桜に牙を剥くよう前に構え、黒い暮桜目掛

けて疾走する。

「33、33、33、d@、j###N!!」

――迎え撃つは金属の大蛇。

セシリアに破壊されたものとは違う、シュヴァルツアレーゲンの内より新たに引き剥がした別のもの。

幾多ものケーブルはやはり奇妙に踊る蛇のように、或いは不快に舞う翅虫のように。

不規則な軌道を描きながら、千尋に迫る――。

それを、

「拡散――!!?」

収束より素早く切り替えた砲身より放たれ、広範囲を焼き払う、業火の一撃が振じ伏せる。

1500度を超える高熱はケーブルをことごとく全て、一本の残骸さえ残さず鉛細工のように溶かし、黒い暮桜の体表を焼き払い――

——動きを止めさせた。

——そこを、

「箒!!？」

千尋の声。

それに応えるように箒が千尋の背後より、獲物を仕留める鷹のように飛びかかる。

「3####33t@#3&&&&&&——!!」

黒い暮桜は、今度は喪われたケーブルの代わりに、どろどろになった肉片を触手状に変形させ、迎撃を開始する。

「ふっ、く——っ!!」

それら触手を、箒は受け流し突貫する。

しかし触手は止まらない。

一本から数十本に、数十本から数百本に、先端から裂けるように分岐しながら箒に追い迫る——!

——それを、

「——収束。」

箒の後を追って駆けて来た千尋と、

「援護しますわ——!!？」

補給を終えたセシリアが、砲口を黒い暮桜に向ける。

瞬間、2人の砲口から光が上がる。

——試製18式原子火焰砲と、BT兵器《ストライク・エア》。

——極限まで収束し、もはや熱線と化した火焰。

——最大出力で放たれ、光線と化した電磁波。

——紅蓮と群青。

対となる色を持つ、二種の光を纏う鉄槌が再び、触手ごと黒い暮桜を叩き伏せる——!!

「33、33、33、d@——!!」

再び上がる悲鳴。

「お代わりも、ありまして——よっ!!」

再充填をすませたBT兵器《ストライク・エア》2基からの光線。

それは黒い暮桜の頭部に向けて、襲いかかる。

しかし——黙って何度も喰らうほど、黒い暮桜は優しくな
どない。

巨腕が頭部前面に突き出される。

その掌は、異様なまでに輝いていて——それは、頭部を穿
つ筈であった光線を反射させた。

「な——」

思わず驚愕に満ちた声を発するセシリア。

それはまるで鏡。否、まるでではなく、オルガの掌は
鏡そのものとなっていた。

鏡とは光を反射、あるいは屈折させる性質を有している。

故にそれは、熱で鏡面が融解するか鏡面に亀裂が入らぬ限り無尽蔵
に光を反射する。

——さしずめ、鏡面反射装甲。

——つまり黒い暮桜は、この短時間でこちらの攻撃。パター
ンを理解し、光学兵器を封じ込めるべく、肉体を変異させたのだ。

……いや——これは、『進化』と呼ぶべき事象だろうか。

どちらにせよ、掌の鏡面を潰さない限り光学兵器は通用しない。

言葉にせずとも、今そこで対峙していた者の全てがそれを理解す
る。

『——こちらCP-00、全IS部隊、聴こえているか。オク
レ——』

突如、光から無線が入る。

それに千尋が応じる。

「こちらブレード2、聴こえています。オクレ——」

『現在第2アリーナに18式メーサー殺獣光線車が急行中——

——到着次第黒い暮桜への攻撃を行う。』

その言葉に全員がザワリと、厭な感覚を覚える。

特に千尋と箒は余計にだ。

——18式メーサー殺獣光線車。

ロリシカ戦線にて2500体ものバルゴン梯団の半数以上をたつ

た6台の、一度の斉射のみで殲滅した兵器。

確かにそれなら、今現在拮抗状態の黒い暮桜オウルガを一撃で跡形もなく蒸発させて倒し得るだろう。

しかし、レーザーとはセシリアが先程まで使っていたレーザー兵器とは全くの別物だ。

原理自体はレーザーと変わらないが、ただ表面を焼くだけのレーザーとレーザーとは効果が違う。

——レーザーとは、《誘導放出によるマイクロ波増幅》の英語訳の頭文字を合わせた言葉を起源に持つ指向性エネルギー兵器。

つまるどころ——巨大な電子レンジ砲である。

——その効果は着弾した対象の部位を起点に全身の細胞を焼却。

さらに副作用として、余剰加熱によって対象の体内で内臓や血液が蒸発・気化。体内の容積を超える極限まで膨張し最期は体内の気化ガスが外皮を突き破り対象を破裂させる——この間、僅か0.87秒。

つまりほぼ一瞬で、生物を一撃死させられるという存在。確かにこれなら、黒い暮桜オウルガを殺せる。

だが、それでは——体内にいるラウラも死ぬ。

「——こちら織斑スノウ。コマンドポスト CP-00、それだけは認められない。我々がラウラ・ボーデヴィツヒを奪還するまで待ってくれ。」

ふと——補給を終え、アリーナ闘技場外縁に降り立った千冬が言う。

ほんの一瞬——千尋と箒の意識はそちらに向けられるが、すぐさま黒い暮桜オウルガへ意識が向くよう修正される。

真耶の部隊が黄色線光で半壊した事を告げるウィンドウが網膜に投影されたからだった。



「——こちら CP-00。悪いが待てない。米軍による

核兵器と同威力の通常爆弾

GBU-43/B使用を外務省が止めさせた代わりに、《迅速に事態を収束させろ》という命令が防衛省経由でアメリカ大使館から下った。」

光は冷めた、けれども感情を殺し切れてはいない声音で言う。

「しかし、それではボーデヴィツヒが…」

『^{スノウ}織斑、貴方の心情も理解出来る。だがドイツがアスカ条約違反のVTシステムを搭載、尚且つ違反と知りながら意図的に稼働させた痕跡を確認した現状を鑑みれば、止めることは難しいのだ。

——よって、攻撃の中止は出来ない。』

「くっ——！」

『……確かに、中止は出来ない。だが、時間稼ぎは可能だ。』

「…え？」

ふと——そんな千冬に救いを差し伸べるように、光は言葉を放つ。

『ルート変更やメーサー砲の最終点検などで時間を稼ぐ。』

だが、よく持つて6分が限界だ。それまでに、ラウラ・ボーデヴィツヒを引き剥がして置いてくれ。：私としても、メーサー車の搭乗員としても、生きた人間ごと殺すよりそちらの方が気が楽だ。』

「——了解。」

そう告げると、千冬は地面を蹴り——^オ黒い暮桜^{ルガ}へと駆けた。



「——はあッ!!」

——閃迅が振るわれる。

——爆風が振るわれる。

——今や前衛を務められる人間は筈のみ。

あれだけいた12名ものIS乗りは大破あるいは補給で戦線を離脱し、残されていたのは千尋と箒、そして新たに復帰した千冬の3名

のみ。

あまりに――損耗と消耗が早すぎる。

さらに言えば先程復帰した千冬も無理をして復帰した結果、零落白夜を一撃放つのが限界のシールド残量。

つまり戦闘継続可能である者は、事実上千尋と箒の2名のみ――

「千尋！近接戦！配置転換！！？」

「了解！！？」

――箒の号令。

――千尋の応答。

2人に余裕などはない。

2人は焦燥に満ちている。

絶え間なく荒ぶる剣戟。

際限無く襲う暴力。

間合いが違う。

速度も違う。

力も違う。

残された体力も違い過ぎる。

今の2人に許される事は爆風の如き巨腕による一撃を、それを遥かに上回る速さの一閃で相殺する事で、身体を潰されぬ様にする事だけ。

例えるならば、今の黒い暮桜オムルガは滅茶苦茶に暴れ回る削岩機である。

四方八方に回転する刃は触れるもの全てを容赦なく粉碎する。

少しでも手を伸ばせばそれで終わり。

逃げる事など叶わず、刃物の回転に巻き込まれて血と臓物を撒き散らして肉片になる結末があるだけ。

――そんなモノに生身の人間は立ち向かえない。

近づくだけで死ぬのならば、千尋も箒も逃げるしかない。

しかし2人は回転の渦の中に身を置き、退くという選択肢を排除した。

――もう、そうでもしなければならない程にまで事態は切

迫していると。

そう——【G本体】と《イリス意識》が千尋と箒に警鐘を鳴らす——

——戦力が違うなど、百も承知。

当然の如く、敗退か全滅の未来しかそこにはない。

だが——人間を遥かに凌駕するあの暴力。そこに、僅かな隙が生まれるまで持ち堪え、その僅かな隙へ渾身の一撃を入れられるならば。

つまりこれは——、

「はっ——千載一遇の博打だが……やる価値はある!!?」

——内に秘めた声を口にしてしまう程にまでの焦燥に駆られながらも、箒は剣戟を振るう。

試製12式改耐熱装甲刀と巨腕。

互いに火花を散らす、絢爛な乱舞を繰り広げるその戦い。

されどそこには一撃毎に傷付いて行く箒の姿しかない。

——そう、箒一人であれば。

「千尋!」

号令と共に横一閃。

箒は試製12式改耐熱装甲刀で弧を描きながら黒い暮桜オウルガの触手群を断絶し、巨腕を弾き飛ばす。

「——あいよ!!?」

箒と入れ替わるように飛び出した影から応答。

黒い暮桜オウルガが後方に飛んだ箒の代わりに眼にしたのは試製18式原子火焰砲を構え、眼前に飛び出した千尋——ゴジラの片鱗を宿した屍体。

喰らうべき極上の餌。

自身がかつての姿に還る為の手段のひとつ。

だがしかし、突発的に自身の眼前に物体が急接近すれば如何なる存在であろうと驚愕し、身体が硬直してしまうのは当然の道理である。

故に黒い暮桜オウルガは自身を守ろうと手で顔を覆い——掌の鏡面を晒してしまう。

そこへ――

「収束!!？」

千尋の声と共に、試製18式原子火焰砲の砲口が収斂しゅうれんされた爆焰の熱線を解き放つ――!

――だが。

光を受け止め、弾く鏡面。

瞬間火炎温度3000度に到達するG元素が、真つ向から爆焰を相殺する……!

黒い暮桜オオルルガが掌の鏡面ファイヤーマイラー反射装甲で、試製18式原子火焰砲の熱線を受け止めたのだと、千尋は理解する。

”――まだ。まだ届かない。”

内心で舌打ちしながら、千尋は眼前を睨む。

そこには、勝ったつもりでいる醜悪な笑みを浮かべた顔がひとつ。

――確かに、今千尋オオルルガが放った一撃では黒い暮桜オオルルガに勝ち得ない。

曲がりなりにも、千尋の一撃は熱と光線が混じったモノの類。

対する黒い暮桜オオルルガが持つ鏡面反射装甲はその名の通り鏡。そして鏡は光を反射する存在である。

となれば、鏡の性質の前に光線は悪手である。

だが――熱線の場合であれば話は少し異なる。

熱線とは光線に類似したモノではあれど、熱線とは文字通り高熱を帯びたモノ。

光線が対象を切断するのであれば、熱線は対象を焼却する事象である。

そして鏡とはつまるところガラスと同質の物体で、ガラスは熱に弱い。

すなわち――熱に歪められ、光軸のずれを引き起こしてしまふ。

そうなればどうなるか――それを証明するように、補給を終えた2機の統合機兵がアリーナに躍り出る。

「――オルコット!!？」

それを見るなり千尋は、命令を下すように怒鳴る。

「指揮系統を無視しておいでですわよ…つと!!?」

そして千尋の声に応えるように、鏡面反射装甲に向けて放たれる
ストライク・エー
BT兵器の光線。

直後——大石を投げられた水面が跳ねるように、激しく爆
発する鏡面反射装甲。

「33、d@、j#####Z!!」

響く黒い暮桜の悲鳴。

そして甲高いノイズと共に巨腕が崩壊する。

——もって、最大の障害は失墜する。

故に、次に行うべき行動は。

「前衛全隊!——突撃にいい、移れええええええ——

——ツ!!?」

それを示すように箒の声帯より響き、空気を奮わせる裂帛の号令。

——そう、最大の障害が堕ちたならば斬りかからない理由

はない。

そもそもあのバケモノは再生する。

みすみす放っておいては最大の障害である鏡面反射装甲まで再生
されてしまう。

故に、仕留める好機があるとすれば——それは今この瞬間

以外ない……!!

「c4f、x p u e y q @ t o ##### ——!!?」

黒い暮桜が吼える。

咆哮と共に触手達は大蛇から弾丸と化した。

黒い暮桜の周囲を滞空していたうねり達は刃物めいた鋭い音と形に
変異し、突貫する篠ノ之箒に喰らいつく。

機関銃めいた暴力の嵐。

だがそれに構わず、跳躍ユニットを点火し箒は誰よりも速く走り出
す。

触手達は一種の近接防御システムであり、先の鏡面反射装甲が遠距
離攻撃に対応するモノならばコレは近距離攻撃に対応するモノだろ

う。

だが——そんなモノはどうでもいい。

邪魔をするならば斬り伏せ、焼き払い、撃ち落とせば良いだけのこと……!!?

故に、箒は試製12式改耐熱装甲刀を両手に構えながら、

「千尋!!?」

——叫ぶ。

箒の声に応じて、突如火柱が触手を焼き払う。

直後——その残火を突き破るように。

千尋が前屈みの体勢で躍り出て、箒と並ぶ。

その手には試製18式原子火焰砲を握りしめて。

「ああ——行くぞ!!?」

駆ける。

足を止めること無く、2人は駆け抜ける。

前方には迫り来る触手の波——否、壁。

隙間と言える隙間はほんの8センチメートルにも満たない空間しかない程にまで密集している、壁としか形容できない物体。

それを、

「収束!!?」

試製18式原子火焰砲の砲口より放たれる、業火を極限まで束ねた焦熱の一撃が粉碎し、孔を穿つ——!

「:jq@...:jq@#####——!」

黒い暮桜オールガが吼える。

直後、触手は壁から形を変えた。

それは、ありとあらゆる方角、ありとあらゆる角度から自分達を閉じ込めるかのように迫り来る——そう、例えるならばそれは檻だ。

防御に徹するだけでは容易く突破されると理解した黒い暮桜オールガは敵から身を守る防壁から、敵の動きを封じる檻房へと変形したのだ。

だが、だからといって触手の強度が変わったわけではない。

故に、

「はあッ!!？」

箒が手にした試製12式改耐熱装甲刀が奔る。

自分達を撃ち抜こうとする触手達を、彼女は演舞を舞うように斬り伏せる。

……触手の群れが標的に向かって放たれたミサイルならば。

彼女の剣はソレを叩き墮とす弾道弾迎撃ミサイルだった。

そして、箒が防御・迎撃を担うモノであれば、千尋は敵を粉碎する巡航ミサイルである。

5秒に満たない速さで黒い暮桜との距離を一気に詰める。

「e7:h. u. h. u#####!!」

最後の足掻きか、再び触手は変化する。

再度黒い暮桜を遮る、隙間のない分厚い触手の壁。

そして迫り来るモノを串刺しにせんと縦横無尽360度全方位より迫り来る凶器の豪雨。

——ここに来て、箒は振り返り千尋に背を向ける。

それを千尋は通り越える。

——決して箒が気にならないわけではない。

だが、ここで2人共が迎撃に徹してしまつてはこの戦闘に幕を下ろす事が出来ない。

どちらかが攻めなくてはならない。

何より秘密兵器の状況からして箒は防性役^{ディフェンダー}、千尋は攻性役^{オフエンサー}である。

故にこうなるのは必然。そしてそれをやり切れると箒を信じたが故の行動であつた。

脚を踏み込み土塊を撒き散らしながら黒い暮桜を遮る隙間のない分厚い触手の壁に、千尋は迫る。

そして——

「収束——!!？」

試製18式原子火焰砲の砲口より放たれる、焦熱の一撃。

それは防壁の表層部を焼き払う。

——だが、

「くっ——」

千尋が声を漏らす。

防壁の表層部を焼き払った。

だがそれだけだ。

防壁を構成している触手の厚みも強度も今までの数倍にまで増幅されている。

今も継続して焼却しているが、それでも防壁の表層部にダメージを与えることしか叶っていない。

それは、先程まで効果があった試製18式原子火焰砲でさえほぼ無力化してしまう程にまで進化している証拠であった。

黒い暮桜はニヤリと勝利を確信した笑みを浮かべる。

確かに、どう考えても詰んでいる。

せつかく持ってきた秘密兵器を上回る程にまで進化されてしまつては、勝敗は既に決したと言つても過言ではない。

秘密兵器が、ひとつだけならば。

千尋が口角を吊り上げ不敵な笑みを浮かべる。

直後、拡張領域よりもうひとつの秘密兵器——試製18式

原子火焰砲と酷似したガトリングの様な回転式銃身型収束機構とドラムマガジンをぶら下げ、砲口の代わりに槍を持つ装備が展開される。

名を、試製14式誘導熱展開式対獣射突槍。

試製18式原子火焰砲が火焰を放つ射撃武装であれば、こちらはメーサーを纏った槍をG元素由来の射出機で撃ち刺す近接武装。

すなわち——直接打撃を下すモノである。

既に射出用のエネルギーは充填済み。

試製18式原子火焰砲を手放し、素早く試製14式誘導熱展開式対獣射突槍に切り替える。

この間2秒。メーサーを纏った槍を構え、槍先を向けるは先の焼却で焼き払われ、軟化した防壁。

ダンツ！つと足を踏むと、ヒュツと口笛を吹くように漏れ出す息。

掬い上げるボディীবローのように、試製14式誘導熱展開式対獣射突槍は弧を描き、防壁に突き立てる。

「射出！」

思考操作により紡がれる動作。

それに従い——3. 8トンにも及ぶ刺突型鉄塊が弾速200m/sにまで加速し、防壁に突き刺さる……！

ぞぶ、と嫌な音が鼓膜を震わせる。

「放射——ッ!!」

再度紡がれる思考操作。

刺突型鉄塊より、レーザーによる暴力的な熱が防壁を内側より焼き払う。

瞬間、一瞬にして大気が燃え上がる。

否、燃えてなどいない。されど、燃えているとしか形容出来ぬほどの熱が肌を焼く。

防壁は一瞬にして内側の水分を蒸発させられた事で崩壊する。

その先に、両腕の再生に徹するも間に合わず、自身がダメージを負うのを構わずに黄色線光を放とうとする黒い暮桜オルガが映る——
—それを、

「そうはさせないから！／させませんわよ！」

響く2つの声。

それと同時に視界に奔る蒼状の光線レーザーと数多の誘導弾ミサイル。

言うまでもなく——それはセシリアのストライクエアと

簪の山嵐によるモノだ。

もって、黄色線光の照射は中断される。

それに千尋は眼もくれず、しかし礼のつもりに口角を吊り上げて。脚を踏み出すと共に、勢いをつける拳のように試製14式誘導熱展開式対獣射突槍を後ろに引く。

「——いい加減、」

レーザーの放射によつて赤く紅く緋く焼けた刺突型鉄塊を用いて、
「倒れ、ろ——ッ!!」

右ストレートのように、直線打撃を黒い暮桜オルガの腹部に叩き込む——

!!

「e7!e7######!」

「ごおッ、と焼けた刺突型鉄塊を突き立てられた腹部が燃える。体内に混じっていた機械油に引火したのか、オルガの体表は木製の人形にガソリンをかけて火をつけたように炎上する。それで、動きは封じられる。」

「——後は、最後の役に幕を下ろさせるだけ。」

「織斑先生！」

「承知した——！」

千尋の声。

それに応える千尋の声。

そう、幕を下ろすのは千尋ではない。

織斑千冬だ。

今ここを離ればオルガは再度行動を開始する。

それに、単純な威力であれば現状このアリーナにある機体の中で最強の装備は零落白夜を使役できる雪片のみ。

だが、零落白夜はエネルギーの損耗が急激であるため一度しか使えない。故に下手には使えない。

逆を言えば——

「下準備さえすれば、いつでも使えるという事……!!？」

「ラウラを——」

「——起動する零落白夜。」

「返して、貰うぞ——!!？」

一閃。

振るわれた雪片は零落白夜の対消滅エネルギーをもって、黒い暮桜胸部を斬り裂く。

そして、雪片を投げ捨てると共に。

「——ラウラ!!？」

両腕を裂いた胸部に突き入れ、

「戻って——」

グチャグチャに胎動する体内の手を掴み、

「来い——!!」

ラウラを、黒い暮桜より引き剥がす——！！

それで、ラウラは奪還される。

核を失った黒い暮桜は半狂乱となって暴れ出す。

「離脱するぞ——！」

千冬の命令。

ただでさえ、あと38秒でメーサー車が突入する手筈となっているのだ。

すぐさま黒い暮桜より全員が離れると共に——警報音が

響く。

「な、何ですの——？」

セシリアが困惑の声を漏らす。

同時に——光より、無線が入る。

『総員、よく聞いてくれ——』

半ば焦燥に満ちた声音。

そして、口を開く。

『——IS学園南部海岸に巨大不明生物が上陸した。』

——その報告が終わると共に、

「????????」
「ッ!!」

千尋にとって光にとって、例え地獄に堕ちても鮮明に思い出せる、黒き荒神の咆哮が、大気を揺るがした——。

6月13日11時34分・第2アリーナ

———景色せかいが半分、赤い。

：傷口から流れた血が眼球に入ったからだろうか。

それとも———左眼が、潰れたからだろうか。

ひゆう、ひゆう、と音を立て肺の呼吸に連動して口と破れた喉から漏れ出す二酸化炭素が占める空気。

心臓が鼓動するたび途絶した血管から体外へと流れ出し、身体を源泉とする赤い河を形成する血と内臓の集まり。

めちやくちやにへし折れ、枯れて乾き果てた木枝のように肉体という地面に横たわる肋骨だったもの。

離れた場所に身体から千切れて、骨と肉の塊あるいは残骸や破片となつて転がっている下半身と左半身。

左半分の頭蓋骨が内部で砕け散り、もはや原型を留めぬまでに壊れて脳も眼球も、潰れた肉の塊になつた頭。

———それはおおよそ残骸としか形容できぬまでに壊れきつた、人間であつた肉片。

人間の常識の範疇でそれを呼ぶならば、そう死体。それも変死体。既に死んでいなければおかしい状態———もう、生きている方が異常だ。

とつくに心臓は止まり、脳も止まり、骨と肉の塊を遺して死んでい
るべき存在。

———けれど生きている。

呼吸もしている。

心臓は動いている。

意識もある。

脳は大半が機能している。

痛覚もある。

神経は機能している。

視界も半分見えている。

無事な眼球は機能している。

「????????」——この惨状に至ってもなお、この肉塊篠ノ之千尋は生きている。

「????????」——「ッ!!」

「????????」——遠方より響く、死の慟哭。

それに続くように、連鎖する砲撃音と爆発音。

世界に反響するのは黒き荒神の咆哮と非力なヒトの抗う音。

「…箒は……ゴフツ……はあ……はあ……つ、逃げれた……かな……う、ゲ
ホッ!!」

息は絶え、口から塊としか形容の効かないほどの量の血を吐き出し
ながら千尋は独ひとりごと言る。

——死に堕ちて行く中で、己が身より他人である少女ほうきに意
識を向ける。

同時に、脳に突き刺さるような痛みと耳の中が生暖かいもので満た
される。

——きつと、頭蓋骨が割れたんだらう。

——そこから耳へ血が溢れたんだらう。

死滅を開始した肉体を前に冷静に分析する。

どこか他人事みたいだ。

…別に。

別に——自分は死んでも構わない。

だって、自分が死んで悲しむ奴はほとんどいない。

…箒は絶対に哀しむし、光や頼人に神宮寺三佐も悲しむかもしれな

いけれど——でもそれでも、今回ばかりは死ぬ。

こればかりはどうしようもない。

そも、今まで箒との日常に入り浸っていたから忘れていたけれど——

——自分は死を渴望していいではないか。

——家族に会いたいが為に、自身を終わらせたいが為に——死

を渴望していたではないか。

そもそもどうかしている。

人類ヒトの箒と共に未来永劫いようなど、無理にも程がある。

そんなの、人間がセミを愛するようなものではないか。

——ただ一度、自分を救ってくれた。

——ただ一人、自分の生を願ってくれた。

——ただ一つ、自分の生き甲斐となった。

……ただ、それだけ。

ただ単純に、嬉しかっただけ。

そんな淡く幼く拙く脆い、埃のような存在を自身の生命いのちの重さと釣り合わせる程嬉しかっただけ。

こんな自分オレが生きていても良いのだという希望を与えてくれたから——嬉しくて、ただ仕方なかっただけ。

——だから、箒の為に生きてみようと思っただけ。でも、そんな淡く脆い日々まぼろしはもうお終い。

もう声さえ碌にでないし、身体も冷め始めている。

上半身と下半身が千切れて、生きていられる訳がない。

心音の間隔もだんだんと開いて行く。

それは心停止までのカウントダウン。

……さすがに今度こそ死ぬ。

……箒、泣いてたなあ。

……一緒にそばに居てやるって。

……支えてやるって約束したのに。

……でも箒にあの時は死んでほしくなかったし。

……箒が死ぬくらいなら、俺が死んでやりたかったし。

……ああ、でも泣かせたら、結局いっしょか。

……結局、箒との約束破った上に泣かせたし。

……なにやってんだ……。

『……馬鹿、だなあ……俺……。』

——吐血混じりの、声にならない声。

容易く掻き消される程に儂い音。

呆れるような感情と、心残りを抱く意識と、体内から湧き出て来る痛みに伴う痛みが緇交ぜになった表情を浮かべて口より漏らす。

世界を震わせる黒き荒神の慟哭。

ヒトが生を示さんと響く抗いの連鎖。

贖い赦しを乞うように辺りより散る悲鳴。

その地獄の只中で。

——最期に転がり落ちて映る走馬灯。

——それを受け流しながら、千尋は如何にして現^{この状況}在に至つ

たのかを思い返した。

閑話 壊レタ世界ノ聖夜

2023年12月24日

破滅から2年後。

東京都新宿臨時新都心

新宿駅西口

乗り換える人数は世界1位を誇る新宿駅。

正面に見えるのは4レーンに各4つずつ、計16カ所もの停留所を持つバスターミナルと地下駐車場に通ずるロータリー、そして空へ届きそうな、けれど地上に踏みとどまっているように見える摩天楼たる西新宿の高層ビル群。

——相変わらずというべきか、此処は大勢の人が行き交っている。

否、暫定首都立川市からの分割遷都が始まり暫定的に政府機能が移転される新宿は2年前より活気が増し、行き交う人の数は目に見えて分かる程に増えている。

治安を安定させるべく新宿区への警察官増員や足りない警察の人員を補完すべく、依然発令中である自衛隊の治安出動に則り、陸上自衛隊第1師団および第3師団が警戒に当たっている。

しかし人々はそんな混乱の中でも確かにある平和を享受している。視界に入ってくる景色は平穩そのものだ。

——視界に映る世界だけなら、人類世界が崩壊しているなんて到底思えなかった。

「ふう…」

箒は腕時計を見ながら溜息を吐いた。

時刻は9時50分。

待ち合わせの時間は9時30分——20分遅刻だ。

「勝手に呼び出しておいて遅刻とは…いい度胸だな。彼奴…。」

箒はイラつきを抑えられず足の爪先を駅前の歩道に敷き詰められたタイルにコツコツと鳴らす。

——先日、八広駐屯地の自室のポストを開けると手紙が

入っていたのだ。

『明日の休みにはそつちに帰るから、そんな時にどつかつれてけ。』脅迫状めいた内容で、差出人は私も皆も知る “ あいつ ” だった。泥沼のような激務の日々の中において、突然の誘いは確かに嬉しかった。

けれど困惑せざるを得ない内容に私は2年間したことも、最近の流りも知らない有様だったのにお洒落をして、新宿駅で待ち合わせることとなり——半年ぶりに前線から帰って来る “ あいつ ” の遅刻にイライラしている現在に至る。

「——はく……落ち着け、東雲箒……。」

自身を落ち着かせる為に言うが、それが逆に自分の心臓を締め付けた。

——東雲箒。

それが今の私がこの世界で生きていく上で使っている名前だ。そうしている理由は、私が本名の篠ノ之箒だと不味いのがひとつ。ただでさえ今は亡き天災の妹なのに、要人保護プログラムは機能せず、IS学園のような保護施設も存在しないこの世界では偽名を名乗り何処かの組織に身を置くくらいしか自身の身を守る術がない。

さらに、私自身が柳星張を宿している今、本名のままであればどれだけ危険か——言わずとも分かるだろう。

だから篠ノ之箒という人間は死亡、もしくは行方不明にする事で、東雲箒という別人に成り切るしか無い。

——最も、成り切るのは簡単だ。

戸籍や経歴の捏造に改竄なども行わねばならない。普通、一人か消えれば今の社会はその気になれば極限にまで探し出すことが出来る。

昔は人一人消えようが記憶が欠落しようと、妖精に誑かされたと一蹴する事ができた。

けれど今は違う。

情報は極限化され人は僅かな異常にも機敏に反応し、その異常に対処しようとする。

奇妙な例えだが、それはまるで体内に侵入した黴菌を駆逐しようとする白血球のようだ。

けれども、そんな中で私の戸籍や経歴の捏造・改竄は行われ――

――篠ノ之箒という人間は消えた事になった。

なぜ成し得たか―― 答えは簡単だ。

――人間1人が消えても誰も気にしない程に混乱していた時期に行ったからだ。

木を隠すなら森の中というように、死人を隠すなら屍山の中――と。

そうして篠ノ之箒という人間は消えて無くなり、今私は東雲箒として生きている。

――それもこれも、私と “ あいつ ” を本当の子供のように面倒を見て頂いている光さんのお陰だ。

「――ふう……」

ため息を吐き、再び街並みに視線を向ける。

――眩い。

街の彼方此方にカラフルなLEDライトによる装飾がほどこされている。

よく見れば、男女のカップル――俗に言うリア充が各所で

見受けられ、装飾が施された巨大なツリーも見受けられる。

「……あ……」

それで箒は今日が何の日か思い出した。

「そっか……今日は――クリスマスか……」
ぽつり、と呟く。

ここ最近というものの、復旧した八広駐屯地内で雑務をこなす缶詰状態だったり、瓦礫の山や廃墟と化した千代田区・中央区・江東区などの復興工事への参加と警備作業、凄まじい頻度で行われる戦闘訓練――それらに忙殺された所為でまともな日付は残っていたが、それが何の日だったか……などの感覚が麻痺して来てしまっていた。

――自分の誕生日さえも忘れてしまうくらいに。

だが、ユーラシア戦線や欧州戦線、中東戦線の現状を鑑みればそれ

は分からなくもないし、2021年から今年にかけて、あまりに多過ぎることが起きたのだから。

—— カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、アフガニスタン等中央アジア陥落。

—— クーデターによる中華人民共和国の民主化と台湾をはじめとした西側との軍事同盟締結。

—— ロシア連邦、シベリアおよび東ヨーロッパ平原放棄。アラスカ北部と北方領土に租借地を設置し、アラスカ・セラウイクに政府機能を移管。

—— スコットランド北部に巨大不明生物侵攻。ISおよび機甲師団、制空戦闘機部隊による大英帝国防衛戦が展開される。

—— 中東砂漠地帯がほぼ陥落。中東戦線激戦化、過去最大規模の石油高騰化に伴う第3次石油危機。

—— モンゴル陥落と同亡命政府および難民受け入れと租借地提供申請。

—— 中華人民共和国、国土を放棄。マレーシア領サバ州に租借地を設置し政府機能を移管。

—— アメリカ、イエローストーン国立公園が噴火。火山灰と火砕流により大半の地域が壊滅し、さらに火山灰は西欧やアフリカにも降着。各国の輸送網と食料生産設備に甚大な被害を齎す。

—— アフリカにて大飢饉が発生し、億単位の犠牲者が出る。

—— インド亜大陸陥落。政府機能を西オーストラリアに設置した租借地へ移管。

—— 欧州大陸、イタリア半島やボヘミア高原東部、東ヨーロッパ平原など全体の6割を失陥。なれど英独仏を主力とする欧州連合軍により戦線維持。

—— 朝鮮半島陥落と国連軍による同半島に対するNN弾道弾およびS11航空爆雷を用いた作戦の結果半島諸共、巨大不明生物消滅。

—— 国連軍が旧パキスタンにて巨大不明生物に核兵器を

使用。

——北極海より飛来する巨大不明生物に対し欧州連合・北
欧連合が英氷丁諾4ヶ国共同の北海防衛ラインを敷設。

——アフリカにて致死性の新型伝染病が発生し、サハラ砂
漠を中心に死者多数。

——エジプト、スエズ防衛ライン崩壊。アフリカ連合は在
ア米軍との奪還作戦を思案。

——ユーラシア及びユーラシア近傍国家にて、核の冬と火
山灰により生鮮食品が壊滅。それに伴い未曾有の食糧危機が到来。

——世界人口が僅か半年で80億人から8億1920万
人にまで激減。

その他諸々——上げ出せばキリがない。

国外の “ 主なニュース ” だけでもそれだけなのだから、日
本国内はもつと混乱しているのは容易に想像できるだろう。

そんな中で、やれ誕生日だやれクリスマスだ——なんて祝
う暇がある筈がない。

唯一祝っていたことがあるとしたらそれは、年末の年越しと新年の
正月くらいだろう。

「だと言っのに…クリスマスかあ……。」

筈はため息を吐きながら呟く。

——だが、それは喜ばしくもある。

それが出来るほどあの東京決戦以来、混乱の只中であつた日本が安
定して来たこと。

そして、自分たちのやる事が減って来たということ。

それは喜ばしいことだ。

——自衛官はやらねばならないことが少なければ少ない
ほど良いのだ。人は、その事を平和と呼ぶ。

自分達がやらねばならないのは、少しでもその状況に近付けること
だ。

だからこそ、今の平穏な景色は日々の成果が開花したようで——

——心の底から、喜ばしい景色だった。

——しかしこの景色も東京、それも都心だと新宿のみなのだ。

他の地域は依然として瓦礫の山となったままで、数多の帰宅困難者を生み出し、立川市や八王子市の仮設住宅での避難生活を余儀無くされているのが事実だ。

——平和に漕ぎ着くまでの道のりは、まだまだ遠い。

「…はあ……」

思わず、そんな事を考えると溜息が出る。

溜息を吐くと幸せが逃げるというのが、溜息を吐かねばストレスが体内に充満し、身体が参ってしまう。

——つまりは、これはガス抜きでストレスに対する自己防衛だ。

そう結論付けて自己完結する。

だから気付かなかった。

ふと、瞬間——後ろから忍び寄ってきた手が、首を掴み——

「わッ
!!!!!!」

耳元で、声を出された。

——そのせいで箒は、

「うひへやあッ☒」

動揺し、情け無い変な声を上げてしまった。

「にや、な、な、なな……な……な……」

心臓は激しく鼓動し、思考は混乱する。

反射的に振り返ると視界に入ってきたのは、

「よっ、悪いいな待たせちまって。」

——無邪気に笑う、破滅前と変わらない子供らしきを見せながらも、何処か大人びた感情を内包した千尋だった。

「運悪く列車のトラブルに巻き込まれてさ——…？どした、変な顔して。」

箒は形容し難い、少し味のある顔をしたまま固まっている。

突然耳元で声を出されて驚いたこと、不意を突かれて心臓が張り裂けんばかりに内心を掻き回されたこと。

——そして千尋に声をかけられて、

「ち、千尋………だよな？」

「ああ、それ以外の何に見えるんだ。箒。」

思わず惚けた質問をし、それに千尋が意地悪そうな顔をしてツツコミを入れる。

——それで箒は我に返り、

「う、うるさい！ビックリしただろう！………というか遅過ぎだバカ!!？」

羞恥心と動揺を隠そうと、鼻先から耳朶まで赤くして、頭から蒸気を噴き出しながら強気になって怒る。

（——うん、相変わらずのツンデレだ。）

千尋は内心そう思い苦笑いを浮かべる。

「悪い。信号トラブルに巻き込まれて。」

信号トラブル——という言葉に箒は黙る。

最近、都内の復興工事をしてはいるものの、技術的トラブルが上げられているのだ。

いずれも原因は無理な突貫工事が原因とされており、今後都内においてかなり危惧すべき問題と言える。

——そんな箒の神妙な顔を見て、千尋が意地悪そうな笑顔

を浮かべる。

「とりま、今日は交代ばんこで行きたい場所回る感じでもいいか？」

「つうえ^{!!}?あ、う、うん…:そう、だな。」

その意地悪そうな笑顔が箒は未だに苦手で、さらに先程の羞恥がまだ残っているせいかして顔を相変わらず赤く染めたまま、必死に言葉を紡ぐ。

「そんじゃ、俺とデートするってコトでいいか？」

にかっ、と相変わらず元氣一杯なんだか意地悪そうなんだかよく判別つかない笑顔を浮かべて箒に問う。

箒はそれでさらに動揺を加速させられ、羞恥心を隠す自己防衛としてのツンデレを発動してしまい、顔を赤くしたまま言い返す。

「ちよ、ちよつと待て! だいたい、私はお前に付き合うとは言ったが、デートするなんて言った覚えはないぞつ。こ、これはあくまで、たまには息抜きをしようって、2人でだな——」

だがしかし、手を握られると同時に千尋の声で箒に言葉は遮られる。

「はい残念。世間じゃそういうのをデートって言うんだよ。しぶといのは箒の長所だけど、あんまり過ぎると嫌われるぞ?」

「なっ——き、嫌われるって、誰につ?」

(ああもうつ、久々に会ったと思えばさつきから人をからかって何が楽しいと言うのだこいつはっ^{!!}?)

箒は内心そう思われる。

やはり、そこには破滅前と何ら変わらない、無邪気さを孕んだ意地悪そうで元氣一杯な笑みの千尋と、動揺と羞恥心を隠そうと必死になつて隠せていない箒がいた。

「さあ、誰だろうな? さて、せつかくの貴重な時間がもつたないから行くぞ。」

「あ、ちよつと…!!?」

千尋が楽しそうな顔でそう言うなり、箒の手を握って半ば強引に引っ張りながら、先導する。

遅刻して来たのに、その相手に自身の動揺を突かれて主導権を握ら

れてしまった筈が、そこにいた。

（——ああもうっ!!?..こうなったら、どこにだって付き合っ
てやるッ!!?）

——自暴自棄ぎみに……だがしかしやはり、何処か楽しそ
うに筈は内心、叫んだ。

10時06分

新宿区西新宿1丁目
にいやどカフェ

両側4車線の国道414号線と両側6車線の国道20号線こと甲
州街道が交じり合う西新宿1丁目交差点に向き合うようにして建て
られたビルの中にあるチェーン店形式のカフェ店に2人は入って来
ていた。

——木造の落ち着いた、狭いのだが広いようにも感じられ
る雰囲気印象的な店。

店そのものは新しいらしい。

現在は10時を少し過ぎた、小腹が空く時間であるためこのカフェ
において腹に軽くモノを入れようと思いい立ち寄った次第だ。

千尋によると、元は潰れた居酒屋を改装してオープンしたカフェら
しい。

本来、新宿で店が潰れることは滅多にないのだが。

新宿区は繁華街である歌舞伎町や超高層オフィスビルなど、人を引
き寄せる要素は多い。

しかもただでさえ乗車数は世界一を誇る新宿駅から然程離れてい
ないのだ。

立地的に言えば、潰れる要素は見当たらない。

しかし東京防衛戦直後、立川市が日本の臨時首都となり、さらに放
射線流の汚染も相まって、都心23区から立川市にかなりの人口が流
出した。

現在は新宿に臨時政府が分割移転して来たり、除染が進んでから人

口戻って来ており、このカフェもそれに応じて新しくオープンされたらしい。

2人は窓際のテーブルに座り、千尋はヒンベアートルテというゼリーで固めたラズベリー——ドイツ語でヒンベアーと言う——をケーキの生地の上全面に贅沢にコーティングした、ドイツ版ラズベリーケーキを食べていた。

「ん〜、甘いけどさっぱりしててうまい!!?」

—— 久々に口にする洋菓子の味。

ヒンベアートルテはラズベリーの旬である初夏が一番美味しいのだが、甘いのだがさっぱりしていてくどくないその味が千尋のお気に入りとなっていた。

—— それを食べて、最近甘味料といえばエネルギーバーや飲料ゼリーくらいしか口にしていなかった千尋は顔をのほほんどさせて、テンションがさらに上がる。

「…確かに、美味しい…甘過ぎるくらい…」

箒が口になっているのはブドウのタルトレアチーズケーキ。

こちらにも上全面に贅沢にブドウジャムを使って、さらにケーキの生地は隠し味のレモン汁により酸味のある代物だ。

—— それを食べた箒は、まるでリスが砂糖菓子を舐めたような、驚きに満ちた顔をしていた。

「あれ?なんで箒の方がびっくりしてんの?」

「いや、私はこういう今時の学生が行きそうな店にはこの2年間寄ったことが無かったから…なんていうか、こう…:ケーキの甘さに舌が驚いている…」

—— それだけ、背負えるものを背負わされ、年相応の時間を謳歌する暇さえない程に忙殺されていたということだろう。

千尋はそう察する。

けれど今は単純に、

「ところで次はどこ行くよ?」

—— この、かけがえのない平和を享受することにした。

カフェで腹ごしらえを済ませると甲州街道の北側に曲がる道、所謂裏路地への角を曲がった。

華やかで喧騒に満ちた甲州街道とは裏腹に、そこには閑静ながらも賑やかな商店街が広がっている。

以前は——2021年の、まだ世界が減ぶ前は表通りである甲州街道の活気に押されて衰退しつつあったが、現在は——
——千代田区を含む湾岸地域が壊滅した今はそこからも人が集まり裏路地は以前からあった商店街だけでなくバザールや屋台が並ぶ、何処ぞのお祭り会場のような状態となっていた。

「へえ〜やっぱ賑わってんなあ…。」

千尋は、思わず声にして言う。

「ああ、この辺は色々な物が売ってるし、みんな基本安価で買えるからな。デパートの商品の値段が高騰化したらみんなこういう裏路地のバザールに買いに来るんだ。」

箒が解説するように言う。

——首都東京、行政の中心地が未だ廃墟の区画があるという程、経済的に苦しい時世を反映してか、バザールと化している商店街を歩く人の数は多い。

主に扱われているのは衣服や家具、食器などの日用品に加え本や漫画、雑誌などの嗜好品。

そして所々の露店では鯛焼きやタコ焼きなどのジャンクフードも販売されている。

今はクリスマスシーズン故か、大半の店頭の色鮮やかな装飾を施したクリスマスツリーが並んでいる。

露店のひとつひとつを回りながら、このバザールだけでなく、歩いて行く先々で様々なモノを視界に2人は焼き付ける。

大袈裟な表現かもしれないが2人にとってはなんとなくしなくてはいけない様な、そんな感じなのだ。

——この景色がまた焼け落ちてしまう前に、目に焼き付けておきたかったから。

そして、やはりバザールのような場所に来てしまうと、買い物欲を

刺激されてしまうのがヒトという生き物で――

「あ、なあなあ、あの雑貨屋寄ってかね？」

「ん？ああ、良いな。あの手の店は私も好みだ。寄って行こう。」

――結局、そこでは千尋はオレンジ、箒は赤のマグカップを購入した。

2人とも案外雑貨が好みで、その店ではテーブルや掛け時計などを見て回ったが、やはり身近でいつも触れるであろうマグカップを購入することにしたのだ。

ついでに隣の屋台にて、たい焼きも購入した。

「なあ、たい焼きってどっちから食う？やっぱり頭？」

「いや、尻尾からだろう。」

たい焼きを購入して、どちらから食べるかを軽く論争する。

しかしそれは、美味ければ良いという結論に至り今は愚問となっていた。

「――とところで箒、サンタさんっているのかな？」

ふと、千尋が呟くように聴く。

「さあ…どうだろう、私自身サンタからプレゼントなんて貰えなかったし。」

たはは、と苦笑いを浮かべながら箒は言う。

まあ、仮に居たとしてもフィンランドからソリに乗って空を飛んで来るなんて、常識的に考えてムリだ。

魔法でもないとなんな事なし得ないし、そもそもそんな御都合主義やオカルトめいたものなんてこの世界には存在しない。

そして多分、神様もいない。神様がいると人は信じていただけなんだろう。

――それはただ、人間が人智を超えたモノを神の仕業として見ただけなのだろう。

仮に神様がいたとしたら、それはなんて意地悪で残酷で非道な神様なんだろう。

「何故こんな世界にした☒言え!!？」と、罵声のひとつやふたつ浴びせて本気で一発殴ってやらないと気が済まない。

——話がそれたが、箒はサンタやオカルトの類を信じていないわけだ。

「でも——サンタがいたらどうする?」
箒が問う。

それに千尋はわずかに悩み——

「ん〜どうだろ、確かに欲しいもんはあるけどもう歳的にガラじゃないしさ。」

ははは、と笑いながら千尋は応えた。

——その後も2人は色々歩き回った。

ゲームセンターでクレイジーゲームに白熱して、ぬいぐるみをゲットしたり、ビルの屋内水族館を見て回ったり、商店で品物を見て回ったり——しかしあまり面白い物はしなかった——その店の興味が尽きて飽きるとまた次の店を回るというのを繰り返した。「たまには動物園とかも行かね?」

「ど、動物園☒」

千尋の言葉に箒が目を剥く。

確かに今まで千尋と動物園になんて行ったことはないから、行ってみても良かったかも知れないが——さすがに動物園は無理だった。

なにしろ都内の動物園と言えば台東区にある上野動物園くらいだ。新宿からは距離的に遠いし、まだそこまで伸びる鉄道も復旧していない。

さらに言えば上野動物園は東京防衛戦時の放射能汚染により放棄せざるを得ず、取り残された動物達は檻の中で白骨死体になって全滅していたという惨状により閉園している。

他にも江戸川区自然動物園や多摩動物公園、板橋区こども動物園などがあるのだが、どれも上野動物園より遠いし時間がかかる。

行けないことはないが、回りたい場所が新宿に集中しているのに離れた動物園に行く為だけに時間を割くのは勿体無かった。

——というわけでその案はまた今度にする事になった。
ついでに言えば映画館も2人は言い出さなかった。

——なにしろどの映画館も今は数年前の破滅前に上映された映画の使い回しをしているからだ。

東京防衛戦とその後起きた混乱の中で映画なんて作ったり輸入したりすることなど滅多になく、最近やっとハリウッドから翻訳した内容の海外産映画が入ってきたらしい。

最も、上映はまだなので行っても面白くない。

それに今は映画一本観るくらいなら他の事を堪能する方が遥かに有意義な気がしたから。

——その後も互いに行きたい場所を交代ばんこで色々見ながら歩き回り、西新宿の商店を制覇していく。

そして今は、とある服屋に来ていた。

「——こ、こんな感じのはどうだ☒」

箒は赤いウールステンコートに黒のミニスカという今風の服装を試着して、若干顔を赤くさせながらも自身満々に聴く。

「あ、うん可愛い。」

千尋も思わず顔を赤くして応える。

その顔は、馴れてはいるものの、久々にこうして出歩いて付き合っているからかして、何処か初々しい。

「そ、そっか…で、では千尋は……」

しかし、未だに顔を赤くして千尋のそれを遥かに上回る初々しさを放っているのは箒の方であった。

「…千尋はこんな感じの上着はどうだ？」

ふと、緑のメンズジャケットを差し出す。

「あ、これかっこいいかも!!?羽織ってみる!!?」

「おお、中々似合ってるな!!?」

千尋も箒の差し出したそれを手にとって、子供染みた笑顔を浮かべ、箒も一昔前のようにはしゃぐ。

——なんて事の無いそれらのモノや体験は、今の千尋と箒にとって、まるで宝石のように価値のあるものだった。

——そんなことを繰り返していると、いつの間にか西新宿の商店は全て制覇し終え、お昼を回る時間になっていた。

午後0時26分

新宿御苑上ノ池近辺

——散々歩き回ったからかさすがに疲れた為に、千尋と箒は都民の憩いの場のひとつである新宿御苑に足を運び、そこで休憩していた。

東屋のベンチに2人は腰を下ろし、ファーストフード店で買って来たハンバーガーを口にしながら、箒が話しかける。

「そういえば千尋——ユーラシア戦線の方は…どうだった？」

——今更ながら、千尋と半年ぶりに会ったのは千尋が出張に出っていたからとかそういうわけではない。

いや、ある意味出張といえば出張だろうか。

千尋はこの半年間、特務自衛隊のPKO部隊の一員として激戦地と化しているユーラシア戦線に海外派遣されていたのだ。

「ん…なんていうか……」

千尋は箒の問いに対して、どう応えたらよいか分からず困った顔をする。

別に戦況が機密事項だとかそんなことは無い。

ニユースで一般人に対しても大まかに伝えられているのだから、同じく特務自衛隊に属している箒が知らないわけがない。

だから伝えても構わないのだ——が、

「…あんま思い出さたくないっていうのが…本音かな。」

苦笑を浮かべながら応える。

——そこから、千尋がだいたいどんな体験をしてきたかは、箒に想像がついた。

——重くなる空気。

（ああ、やってしまった——）

地雷を踏んでしまった、と箒は後悔する。

だから、違う話題に切り替えようとして——、

「そ、そういうえば背はあんまり変わっていないんだな——」
「……………」

——さらに、地雷を踏み抜く。

一瞬して、しまった——と気付くが時既に遅し。

千尋の瞳には明らかな怒りの色が浮かび上がる。

つまるところ、千尋は自身より背が高い者に低身長であることに關して触れられるのを嫌がるのだ。

それは破滅前と変わらない。

——そして付け加えるならば、破滅前は身長155センチメートルで現在は160センチメートルと、身長もさしてかわっていないかったのだ。

さらに付け加えるならば、箒は身長162センチメートルと破滅前から千尋より背が高く、特自ではもっぱら『おねシヨタ』認定されてしまう有様——。

だから千尋は拗ねてプイツとそっぽを向いてしまった。

そんな千尋を前にして、箒はあたふたとしながらも機嫌を取り戻して貰おうと声をかける。

「——あ、あくえつと、千尋……………」

「……………」

無反応。

箒は冷や汗を流しながらも再度声をかける。

「す、すまない。悪気は無かったんだ、その……………そ、それにホラ、身長が小さくたって私は気にしないし……………」

「——箒は気にしなくても俺は気にすんの。…せめて170代までは伸びないと困る。これ以上ガキに見られてたまるか。」

不貞腐れた声音で千尋が応える。

千尋はただでさえ低身長なのにそこに童顔という要素まで重なってしまっているために、より一層そういう辺りを気にしているのだ。

「…ああ、多分それなら問題ないぞ。きつとまだまだ大きくなるからお前。」

「…………それは嬉しいけど。箒、その根拠はなんだよ。」

励ますつもりで箒は千尋に言うが、こればかりは別次元の問題だから、千尋は真剣な表情と拗ねている声音で逆に箒に問いかける。

「え——あ、と……」

箒は思わず言い淀み、理由を探すように目を泳がせて思考する。だから少し千尋も期待した。

「ほ、ほら、骨格はしっかりしてるんだからちやんと栄養を取れば育つだろ？しつかり光合成したら千尋も大きくなるかな……なんて……あはは……」

「……この葉っぱの話だ、それ。人間と植物はつくりが全く違うから光合成なんかできるか馬鹿。」

再び千尋はそっぽを向く。

「あ……千尋、すまない。これでも私なりにフオローはしたんだが……箒が申し訳なさそうに謝ってくる。

それを見て千尋は、うつ——、と息を飲まされる。

箒のそういう顔が千尋は苦手だった。

「……べつに。話半分に聴いとく。」

——まあ、いわゆるオナナの勘とやらを戦場以外でなら信じて見ても良いかもしれない。

そう千尋は思わされる。

——ふと、不意に手を箒に握られる。

反射的に振り向くと、箒は今日一番の笑顔を浮かべていて、そして声を放った。

「——ああ。背のことは保証出来ないが、きつとどびつきりのいい男になる。それだけは私のお墨付きだ、千尋。」

「な——」

千尋は思わず鼻先から耳朶にかけて、赤くしてしまう。

——ど、どうしてそう、顔が沸騰するようなコト言うんだお前はっ!?!??

「あはは、照れてる照れてる。お前も案外すぐ顔に出るから可愛いなあ。」

「っ——く、こ、この性悪っ！」

「あはは！今朝のお返しだっ!!？」

なんて言って駆け出す。その顔は今日一番に高揚した笑顔を浮かべながら走り出した。

「待てゴルア!!？」

千尋もすぐさま箒を追いかける。

生憎前線に出ていたために嫌でも体は普段より鍛えられる。

故に——

「捕まえた——!!？」

「きゃあ!!？」

——千尋は10メートルも進まないうちに箒を捕まえて、押し倒す。箒はそれを望んでいたかのように子供みたいに笑っている。

澄んだ空の下、芝生の上で繰り広げられる2人の甘い時間。

——永遠には決して続かない幸福な時間。

けれど今この瞬間が、ずっとずっと、終わることなく続いているように感じた。

2人は芝生の上で子供みたいにはしゃぐ。

——きつと後になってから羞恥心にもみれるパターンが待ち受けている。

けれども今は、魔法にかかったように幸せなこの時間の1分1秒を心の底から堪能することにした——。

????????????
後5時

新宿区・臨時国会議事堂（旧東京都庁第1本庁舎）

——気が付けば、とつくに夕方だった。

夜の帳とほりが落ち始めた2人が向かう先は現在立川からの分割移転を進む東京都庁南棟。

現在は、臨時国会議事堂と内閣府が置かれている建物であるが、や

はり未だに東京都庁の方が親しみがあるらしく、そう呼ばれている。しかしそれ故に以前まで一般人の観光ツアーが可能だったところも、日曜日のみ一般解放される程度のものとなっていた。

そして今日は日曜日。本来なら入るのにパスイＤが必要だが今日はその、南棟屋上と展望フロアが一般解放される日だ。

箒が見せたいものがあつた為に2人は観光客の列に混じつて東京都庁に入つて行く。

——それにしても、と

「…やっぱり物々しいよな、都庁前。」

——千尋が口にする。

それもそのはずだ。臨時国会議事堂となるからか都庁前には警視庁の機動隊を乗せたバスはもちろん、他にも治安出動に当たっている陸上自衛隊の10式戦車や93式偵察警戒車、82式通信指揮車などが展開し、テロの警戒に当たっているのだ。

日常の中の非日常——しかしこれは何も都庁前に限った話ではなく、都内各所で自衛隊車両が展開しているのだ。

別段珍しい話ではなく、もはや当たり前前の景色として慣れてしまっている都民は誰も気につけない。

そして千尋も箒も慣れていている側なので、特に気にかけることなく入つていく。

——それに都庁に入れば都庁前の自衛隊車両など気にもかけないくらいになる。

何故なら、ここから先は観光客であろうと都民だろうと都庁職員だろうと玄関先でX線検査と金属探知機を用いた持ち物検査が行われるからだ。

内閣府となるのだからこれくらい入館が厳重なのは妥当だろう。

——アレがバレないか心配だなあ…

千尋は心配げに内心呟きながら手荷物を渡す。

しかし心配は杞憂だったらしく、引つかかることなく千尋は突破した。

——さすがにあのサイズで引つかかるわけ無いか…てか、

引つかかったらどの空港でもピアスとかかしてる人通してもらえないもんなあ…。

ホツと千尋は胸を撫で下ろす。

「？千尋、どうしたんだ？」

「え？あ、いやなんでもねえよ。さき、行こ行こ。」

箒の手を握り、千尋は屋上・展望フロア行きのエレベーターに乗り込んだ。

◇ ◇ ◇

役2分後。

同・屋上

陽が傾き、空が緋色から紺色へと移り変わろうとしている時間。

屋上に吹き付ける冬の冷風が皮膚を貫く。

眼下には先ほどの都庁前広場のみならず、今日練り歩いた西新宿の高層ビル群や街並み、待ち合わせをした新宿駅に、昼食と子供みたいに2人でじゃれあつた新宿御苑が視界に映る。

街はそろそろ夜に移ろうとしている。

それを裏付けるように道路を行く車がライトを点灯させて、ヘッドライトの白い糸とバックライトの赤い糸を拵げ、道を紅白に染めて行っているのだ。

そして、ビル街にもまばらに灯が灯り始める。

それは綺麗、としか言えなかった。

当たり前のような夜景でも、俯瞰するように覗き込むだけでこんなにも違うのか――、そう千尋は思わされる。

「――箒、これを見せたかったのか？」

千尋は問う。

「ん？まあ、それもある。けど、本命はあそこだ。」

箒は指を指す。

――そこは未だ沈黙しブラックアウトしたままの港区と品川区、目黒区、世田谷区の方角だった。

そこは復興工事を進めているシグクライミングクレーン群が乱立し、不気味なまでに異質な雰囲気を出していた。

「時間だ。」

ふと、箒が眩く。

それと同時に、太陽が完全に西の果てに姿を消す。

それに呼応するように、暗闇の中にひとつの光の柱が姿を現す。

赤い、紅い鉄骨を組み合わせることで形成され、天に延びるように高く高く聳え立つ——東京タワー。

そして、そこを起点に、まるで雫を落とした水面に波紋が拡がるように、周辺の建物や街灯にも灯がともっていく。

灯が灯を呼び、また灯が灯を呼び、漆黒に染まっていた大地を螺鈿細工の真珠色のように黎明に満ちた景色が咲き乱れるようにして埋め尽くしていく——。

その壮大な景色に、千尋は息を飲んだ。

——生きている。

東京防衛戦で一度焼け落ちたあの景色の中でも、人は再び生きようとしている。

その光景はともかく、とても言葉に出来ないくらい綺麗だった。

いや、綺麗なんてものじゃない、この景色は綺麗とか美しいとか、壮大だとか、そんな単語では言い表せないくらいの存在感を持つナニカで——とにかく、千尋の心象に響く存在だった。

「今日は復興地区の一斉送電テストの日でな……ちようどお前が帰って来るから見せてやろうと思ったんだ。」

箒が言う。

そしてさりげなく、千尋に腕を回して組む。

千尋は一瞬ビククリしたが、腕越しに伝わって来る箒の体温が千尋をぼんやりとさせる。

「本当なら1人で見るともりだっけど、お前が帰って来るっていうから、凄く嬉しかった。」

箒が落ち着いた声で言う。

「この景色せかいを見るのは、1人より2人の方が——
——ずっと暖かいから。」

「うん、そうだな。」

千尋も落ち着いた声で、そう返す。

——そういえば、初めて帰って来た時も此処で夜景を見たな……あの時は新都心の一斉送電の時だったけど。

「1人で見えるのも良いんだが……その時は重圧や責任感の方が勝つてしまうんだ。……先人が——東京防衛戦で使命に殉じ、命を散らしてまでして護ったこの景色せかいを二度と失くさないようにしなくてはいけないって——でも、2人で来ると気が楽っていうか、弱さを吐露出来るって言うか——……はは、私、何言ってるんだろうな。」

「……………」

箒の言葉に隠された想いを察し、千尋は黙ってしまった。

箒は苦笑いをしていたが、それは普段押し殺してまでこの景色せかいを、あの灯の中に住まう人達をあらゆるものから守ろうとする責任感に満ちた感情が決壊したダムのように溢れて行っているような声音だった。

——だから、

「……そっか。じゃあ、弱音なんていくらでも吐いちゃえよ。……俺がいくらでも聞いてやる。」

千尋は組んだ腕を、優しく握る。

握った掌からは箒の体温が伝わって来る。

——暖かい、けれども冷たい。

人らしい弱さを内包したまま責務を果たそうとする箒を具現したような感触が、掌から伝わってくる。

「……ありがと。」

箒は頭を左肩にもたれかける。

そしてふと思いついたように、口を開いた。

「……そういえば千尋、お前何か私に言いたい事があるのか？」

「え？なんで分かった？」

「なんとなく。」

「なんとなくで、千尋が箒に何をしたいのか、察されてしまっていた。」

だから、

「…うん、実は箒に渡したいモノがあつてさ。」

千尋が言つて、カバンからひとつのケースを取り出して渡す。

ケースは掌に収まつてしまうサイズで、それはよく恋愛ドラマの最終回とかで見るようなデザインのモノだった。

「え？こ、これ…!?!?」

ケースを開けた箒は驚かされた。

中にあつたのは、赤い紅いルビーが埋め込まれた、か細い、けれど
強く強いプラチナの——指輪だった。

「渡すの遅れてごめん。その、今更だけど結婚指輪……。」

千尋は恥ずかしい顔をして、赤面した頬を人差し指でぽりぽりと掻きながら言う。

「…もしかして今日遅れたのって……」

「うん、指輪買つてたら時間かかってさ。店の開店直後に行つてギリギリで済ませただけど……」

やはり、恥ずかしそうな顔をして応える。

「っ!!」

——次の瞬間、箒に抱きしめられた。

「え、箒!?!」

ぎゆう、と強く抱きしめられる。

——お互いの体温と、お互いの心臓が鼓動する音と振動が密着した体を介して共感する。

ぎゆう、と強く抱きしめられる。

——箒の吐息と千尋の吐息が互いの肌に当たり、互いに感情を沸騰させる。

——もうそこまでされたら、恥じらいとかそんなのに構つていられなくなつた。

千尋も箒をぎゅう、と強く抱きしめる。

さらに感じる体温の熱と心臓の鼓動が強くなる。

お互いにもう離れてしまわぬように、もう離れて行かぬように、2人は抱擁し合う。

どう足掻いても立場上、離れてしまうのは必然だ。

——けれど、生きているうちは、こうして触れ合うことが出来るうちは、互いに絶対に離れぬように抱擁し合う。

人類の支配する世界が破滅した中でも、決して離れないように。

そして、2人を祝福するかのように——

「…冷たっ」

千尋の鼻先に不意に冷たく湿った感触がした。箒もうなじにそれが触れたらしく、それで抱擁は解除された。

——見上げると、街明かりが反射し琥珀色に染まった夜雲から白い白い、結晶の群れ。

「——雪だあ…。」

千尋が声を放つ。

箒もそれに釣られ、楽しそうな顔を浮かべる。

「まるで、天使の羽みたいだな…。」

箒が言う。

なんて、ロマンチックな喩えだろう。

地上を煌びやかに照らす黎明が反射した琥珀色の雲から降ってくる雪は天使が舞い降りてきたかのような幻想的な光景だった。

「——千尋。」

箒が千尋の方を向く。

その手には先ほどの指輪をはめていて。

「最高のクリスマスプレゼントを、ありがとう——。」

街灯の明かりが雪のヴェールに反射し、時間さえ融けてしまいそうなくらいにあたり一面を琥珀色の世界で覆い尽くす幻想的な、残酷な世界の片隅で、2人は破滅後の聖夜を迎えた——。

閑話 壊レタ世界ノ除夜

2023年12月31日——破滅から2年後

午後22時52分

東京都新宿区西早稲田

——白雪が覆い尽くす閑静な住宅街。

新都心と置かれている西新宿とは相對する、場所。

——街とは人の営みの具現。

人が起きれば街も目覚め、人が眠れば街も寢屋に墮ちる。
だからだろう。

今この辺りの街区は街そのものが明かりの無い暗い夢に墮ちていた。

そしてその街角は世界を埋め尽くさんとするか^{の如く}積雪によって侵蝕された——白闇^{しちやみ}を形成している。

その白闇^{しちやみ}の中を、蒼髪の少女は傘を差しながら歩みを進める。

「…はあ——…」

冷めた手を温めようと、そこに口から吐息を吹きかける。

それは水をかけたドライアイスのように白い霧煙を引き起こしながら、掌に僅かな熱を与える。

そしてその熱を増幅させようと、掌を合わせて擦り合わせる事で、摩擦熱を作り出す。

だが悴み過ぎた手の動きは錆びた歯車のようにぎこちなく、また皮膚は濡れたゴムのように違和に満ちていた。

——ふと。

蒼髪の少女——更識簪は、空を見上げ拝む。

——見上げる空は曇天。

——雲からは純白の雪。

——雲には街灯が反射する。

——そこにあるのは琥珀色の灯り。

「…12月の雪…もう、当たり前前になっちゃったな…」

破滅前は東京に雪が降るなんて物珍しい話だったのに、と付け足し

ながら簪は呟く。

——それは当然にして必然であった。

何しろ、怪獣と人類がこぞって地形を滅茶苦茶にした事に加えて核の冬が到来し、さらにゴジラが噴火させた世界最大の火山であるイエローストーンのばら撒いた火山灰の残滓が大気中に充満し、太陽光を遮った事による地球規模の大規模寒冷化。

人類世界破滅直後の日本では真冬には気温がマイナスに至る事なんて当たり前で、凍死者・餓死者こそ出なかったものの、極度の冷害による生鮮食品壊滅を受け、食糧の不足に悩まされる事となった。

——だが、まだ日本は幸福な方だろう。

貧困国が多数を占めるアフリカ大陸ではただでさえ新型伝染病が蔓延していたにもかかわらず、この大規模寒冷化まで重なってしまった。

∴結果として、億単位の餓死者・凍死者を生み出した上に消滅した国家や自治区は数知れない。

——『地上に地獄があるなら、それはユーラシアとアフリカ、そして南米だ。』

国連軍の将官が呟いた言葉だが、それは正に的を得ていると言える。

イエローストーン噴火による直接的な被害を受けたとはいえ、アメリカ大陸は国連主導の火山灰の凝固・強制下降を誘発するG由来の気象兵器を持って窮地を脱している。

そればかりか、アメリカ合衆国はミシガン州に租借地を置いたドイツ連邦共和国とアラスカ州に租借地を置いたロシア連邦——それらの支援によって完全には立ち直ってはいないものの破滅前の経済力と生産力を回復させており、ある意味地上の楽園のひとつと化している。

対するユーラシアはどうか——。

——無数の怪獣が跋扈し、数多の人間が流血で満たそうと、もはや還ることの叶わぬその大地。

具体的には、数10万から数100万の怪獣がユーラシアに生息し

ているのだ。

シベリアに。

中国大陸に。

タクラマカン砂漠に。

中央アジアに。

中東に。

アラビア半島に。

マレー半島に。

インド亜大陸に。

旧ヨーロッパ・ロシアに。

スカンジナビア半島に。

東欧地域に。

イタリア半島に。

南極に。

南米大陸に。

北極海に。

宇宙空間にさえ。

——もう、地球の大半は人類の領域ではない。

対する人類は8億1920万人程度。

数では優っているだろうが、まるで力が及ばない。

怪獣アレラと人類私達の間には、何次元もの隔りと力の差が存在する。

今の人類が束になったところで、ユーラシアを取り戻すなんて不可能だ。

であればやる事はただひとつ。

——静観と徹底防戦。

情け無いが今の人類に出来るのはこれくらいだ。

反攻作戦が発動されるとしたら、おそらくそれはずっとずっと先――

——少なくとも100年以上はずっと先の未来。

そして、先に述べた地球上の8割が怪獣に支配され、世界人口が半
年で9・9%にまで激減している現実。

人類に牙を剥くように発生し続ける異常気象と新型伝染病でさら

に人が死ぬ現実。

さらにゴジラがその気になれば
1時間程度で地上から人類を殲滅できる現実。

———これだけ突き詰められれば、人類の世界は破滅したと捉える他あるまい。

にも関わらず———新宿は破滅前と変わらない、むしろ発展しているようにさえ見える。

世界が崩壊したのに、変わらぬ姿を維持している新宿の方が———ある意味、異常だ。

だがしかし、同時に簪はその事実にあ堵する。
例え新宿が異常でも、帰れる家がある———それだけでも、幸福だ。

ふと閑静な住宅街の中に、貫禄を感じさせる木造の家屋敷が映る。
それこそが簪の帰れる家であり、更識家本邸であった。

———ここ新宿は今でこそ超高層ビルの乱立する大都会と化しているが、かつては田園風景が広がる宿町であり、同時に徳川幕府に仕える数多くの武家が屋敷を構えた地でもある。

更識家も、その武家の末裔———即ち、何代も続く由緒正しき武家というわけである。

……とはいえ明治時代以降、四民平等に基づく身分制廃止に伴い武士は世間から価値を排斥され、武家としての機能は喪われた訳だが。

しかして———門前からは確かに、かつての威厳威風を宿したまま、現在に至るまで時を刻んだ姿がある。

たとえ政治的・軍事的に価値のない存在に失墜したとしても、決して否定出来ない歴史の具現がそこに在った。

———それは世界が崩壊してからも変わることは無い、過去より続く景色。

ふと———門前にて悴む手を必死で擦り、凍えながら蹲る少女が視界に映る。

「あ———」

それを見て簪は思わず声を上げてしまう。

全くどうして、彼女はこんなに変なところでマジメなのか。

簪は半ば呆れ返りながら、歩みを進める。

そして――

「ただいま。本音。」

声をかける。

すると、凍えながら蹲る少女――虚本音は弾かれたように顔を上げる。

そして――

「…あ、おかえり。かつちー。」

…ふにや、と笑顔を浮かべる。

「遅くなるから出迎えは良いって言ったのに……。」

「いや……だって私これでもかつちーの従者だもん。」

簪の言葉に本音はふにや、とした笑顔を浮かべたまま言う。

「…そっか、本音は昔から律儀だったもんね。」

ふふ、と簪は微笑む。

「お姉ちゃんは…元気？」

「うん…まあ……。」

――そう問うと、やはり本音の表情は曇ってしまう。

ああ、やはりダメなんだな……――と思わされたその瞬間。

「…何？なんだか焦げ臭くない？あとなんだか煙っぽい……。」

思わず簪は怪訝な表情を浮かべて、足を進める。

焦げ臭い匂いの源泉は庭の中から。

だから門をくぐり、庭へ足を踏み込む。

「なんだか庭の方から――」

――言いかけて、思考が止まる。

そこには、

「あ、お帰り〜かんちゃん。」

ドラム缶に詰めた薪木に火を点けてストーブとして暖をとりながらヒラヒラと手を振る見るからに元気そうな楯無――否。更識刀奈が一人。

”——ついでさつきまで心配してた私が馬鹿だったわ!!

” 思わず簪は内心叫ぶ。

「ちよつと本音^{!?}??」

「あはは〜ドツキリ大成功♪」

くわツと睨んだ簪に対して、やはり本音はポヨポヨした笑顔を浮かべて言う。

それに続くように、刀奈が微笑みながら口を開く。

「せっかく自宅に帰って来るのに、しんみりした雰囲気はあんまりでしよう?だからま、体張って見たの。」

そう言って刀奈は松葉杖をつき、腰を下ろしていたベンチから立ち上がる。

——その足取りは、千鳥足のようにもあまりにも**覚束無い**不安定さ。

けれど顔を染めるのは、確かに本物の笑顔。

「う〜ん…なんていうか、やつぱり足が動かなくなってきたのよねえ…つとと…。」

やはり、ふらついてしまう足取りで簪の元に歩いて来る。

「…やつぱり、二年前の…?」

「うん、急性被曝による筋肉の凝固および壊死らしいから、そうなんじゃない?」

…まあ私は放射線流の直撃を受けた訳だし。」

——サラリと、まるで他人事のように自身の深刻な病状とその原因を告げる。

「まあ、今そんなこと言っても仕方ないけれど。不自由だけど生きていれば大概のことはなんとかなるもの。」

そしてアツサリと未練を捨て去るように思考を切り替える。

——本当に、その神経の太さと潔さは此方が見習いたいものだ。と簪は思わされる。

今の時代を生きるには、刀奈のような人間が不可欠だから。

「そうね。お姉ちゃん、火葬炉に放り込まれても自力で脱出してくる

くらいしぶとい性格してるから、生きていけるんじゃない？」

それに、簪は簪なりの褒め言葉を吐く。

「……めん、かんちゃんそれ褒めてるのよね？」

「ええ、勿論。ところで虚さんは元気？」

玄関へと向かいながら、簪は聴く。

それに刀奈も続きながら応える。

「ええ、元気元気。それに仕事は虚ちゃんに手伝って貰わなくちゃならなくてさ……ホラ、もう私の身体能力おばあちゃんだし。」

無論、仕事とは暗部の仕事である。

以前ならばISを駆って仕事場に突入していた刀奈であるが、今となつては事務職が限界であつた。

……むしろ今すぐ車椅子生活をするべき身を、なんとか松葉杖でやり過ごしている程だ。

「……ま、今に暗部の仕事は国連軍や再編中の警察に新設の準軍事警察部隊の仕事になるから、もう少ししたら事務職だけで済みそうだけだね。」

靴を脱ぎ、廊下に脚と松葉杖を下ろしながら刀奈は言う。

……つまりそれは、遠回しに暗部は前線や現場では必要とされなくなると言っている。

——まあ、ある意味それは当然の摂理だろう。

暗部は対人類組織。

今後最前線国家である日本に求められるのは対獣組織であり、対人類組織は治安維持を主目的とする警察機関を除いてほとんどが不利用となる。

かつて対人類組織であつた政府機関も多くが対獣組織に衣替えしたが、それらは防衛省や海上保安庁などの防衛機関にそれらを支援する気象庁や国土交通省、外務省などである。

そこに暗部はいない。

そもそも、暗部は諜報機関である。

巨大不明生物に諜報活動は通用しない。

辛うじて偵察衛星による情報収集が可能だが、それは気象庁の気象

衛星、国土交通省の計測衛星に搭載された光学望遠カメラでも可能だ。

そして偵察衛星を運用するだけでは独立した省庁にする必要がない。

さらには指揮系統の混乱を避ける為に極力小さな政府にしようとする。

——つまり、どこかの省庁の指揮下に取り込まれる事になる。

現に気象衛星を運用する気象庁は国土交通省指揮下の外局だ。

だからまあ：良くて他の省庁に指揮権譲渡、最悪解体となるのは必然と言える。

——分かりきっていた事とはいえ、そこに僅かな寂しさを感じなくも無い。

今までの人生18年の中に暗部が存在しなかった時などない。

暗部が好きだったであれ嫌いであつたであれ、無関心という感情を抱かなかつたモノがなくなってしまう事に寂しさを覚えるのは人として普通の反応だ。

だから刀奈も簪も、僅かな寂しさを覚えていた。

——そんなことを思考しながら廊下を進むと、2人は居間に辿り着く。

16畳の畳が敷き詰められたそこは杉の木で作られた家具が置かれており、落ち着いた雰囲気満ちている。

「——お帰りなさいませ、簪さん。」

ふと、和室に佇んでいた虚が言う。

「国連軍での勤務、御苦労様です。」

「ありがとう：虚さんも元気そうで何よりだわ。」

簪は微笑みながら虚に声を返す。

：彼女も何ら変わらない。

破滅前も、破滅後も。

刀奈の従者として支え続けた存在。

この家の中で、唯一変わらなかつた存在。

「ところで簪さん、本音は…?」

ふと、本来簪の従者であるはずの本音が見当たらないからか訝しげな顔をする。

…言われてみればそうだ。

本音は玄関から全くついて来ていない。

「ああ、あの娘なら庭で雪だるま作ってるわ。」

ふと、縁側の廊下にある大窓から庭を見やる刀奈が言う。

「な———っ!?? 主人がいるというのにあの子は…!!?」

「まあまあ、たまにはいいじゃない。せつかくの大晦日なんだしさ。」
怒る虚。

宥める刀奈。

まるで漫才コンビというか、夫婦というか、そんな感じの2人。

”——— ああ、平和で暖かな場所に帰って来たんだ。”

そんな景色だけで、簪は微笑みを隠せないくらいに心が溶ける。

「全くあの子は…。簪さん、外套がいとうは私がお預かり致します。」

——— それで…どうでしたか? 戦況は…?」

それでふと、虚が簪に問いかける。

それは落ち着いた声音で、心配するような表情を浮かべて。

「そう、ね…。」

溶けかけた心が再び凍る感覚——— その中で、簪は情報と言葉を取捨選択し、構成する。

「私は極東方面軍所属だから全世界を詳しくは把握してはないけど、日本海戦域と台湾海峡戦域は安定しているみたい。」

あと、純粹水爆で海峡を構築したロリシカも。」

日本と台湾は怪獣の支配するユーラシアから海で隔てられている。

またカムチャツカ半島に撤退したロリシカも半島の付け根を純粹水爆で爆砕するという苦肉の策で海峡を構築し、天然の防衛線を構築する事で国土を維持している。

海で隔てられた地域は上陸する地点をあらかじめ予測出来るため、防衛戦力の集中展開が可能だ。

対して陸続きの地域は進行ルートの把握が困難であり、戦線が広大

化してしまう原因になる。

だからこそ、海で隔てられた地域では人類が優勢であり陸続きの地域では人類が劣勢と言える。

「では――」

「うん、北九州と佐渡島、それと北海道東部は依然警戒が必要だけど基本的に太平洋側地域は大丈夫だと思う。」

――現に日本は生産拠点や経済基盤を日本海側地域から太平洋側地域や再開発を行った沖縄、小笠原諸島、東南アジア地域に移転している。

無論それは太平洋側地域が安全であろうと判断されたからである。

「ところでさー虚ちゃーん…」

ふと、話をぶった斬るように緩々な雰囲気をつた刀奈が話しかけてくる。

「おうどんマダ〜?」

「あ、失礼しました!今すぐ作って参ります!!?」

というなり、いそいそと虚は台所へ駆けて行く。

「しんみりムードは嫌いだもの…。」

なんて、電気ストーブで暖をとりながら刀奈は口にする。

…だが正直、簪はそれに救われていた。

「それにしても、あの子たちこの雪の中お参りに行くつてのよねえ…。」

ふと思いついたように刀奈は独言る。

「…?なんの話?」

「ん?ああ、千尋くんと簪さん。2人つきりで神社に参拝するんだつてさ。」

??????????????

午後23時47分

新宿区花園神社

——花園神社。

東京都新宿区にあり、古来より新宿の総鎮守として新宿の発展を見守ってきた存在。

『乗降者数世界一の新宿駅』東口から徒歩7分、新宿区役所のそばにあり鳥居から参道までの両サイドは建物という、大都会・新宿の中にポツンと佇む異界のような場所。

——コンクリートが四方八方を支配する世界の中に江戸より残る自然を宿した原初の姿。

そして現代と過去の時間の流れが乖離しているような錯覚さえ与える風景。

そこに、少なからぬ人がひしめいていた。

「…驚いたな。お前から誘って来るなんて。」

その人混みの中に居た少女——篠ノ之箒東雲箒は呟くように言う。

「…約束してたからな。いつか、お参り行こうって。」

それに対して応えるのは、篠ノ之千尋西河千尋。

お互い、凍えるように震えながら、参道を歩みを進めて行く。

「ところで箒こそ良かったのかよ、花園神社ここじゃなくて雪子叔母さんトコ篠ノ之神社の方が

良かったんじゃないのか？」

心配気に放つ言葉。

それは確かに、箒の心を刺し貫く。

けれど——不思議と悲しさは無く、むしろソレに触れてく

れた嬉しさを感じながら、箒は口を開く。

「…そりゃあ、久方ぶりに行きたいのが本音だ。あの家もガワを見るだけで構わないから行きたくかったし——雪子叔母さん雪子叔母さんの顔だって見たかったよ。」

表情は何かを悟るように。

声音は常時と変わらぬ声。

憂う事も悲しむ事も嘆く事もなく、ただ俯瞰するように。

「けれど、帰れないだろ？篠ノ之箒たしはもう死んだ事になっている。

それに——死者が生者の前に姿を現わすとロクな事が無い。」

他人事のように、笑いながら。

——如何に願おうが叶わぬ願いなのだと言った顔をしなから。

未練がないと言えばソレは嘘になる。

だがいつまで引きずっていても、叶う事はない。

ならばいつそ、ソレと決別してこれから先をリスタートする道を選ぶ方がよっぽど楽だし人生にとってプラスに繋がる。

「…そっか。」

それは千尋も理解している思考。

だから箒の在り方に憤りも哀れみも抱かずにその在り方を尊重する。

——そも、それは千尋にも言えることだ。

依然として千尋は怪物であるという現実ゴジラは覆らない。

家族も殺して自分と父を呪われた生き物にした人類を憎悪した過去は変わらない。

人への憎悪とただ自分を「終わらせられる者」を求めて破壊と殺戮を繰り返した事実は拭えない。

死に体の身体を酷使してただ一人の少女護りたかったモノ／家族の為にもう一度怪物になる選択をし、機龍を依代に純正なゴジラに変異した結末は変えられない。

——それらは全て過去の自分である。

極端な話、現在いまの自分から切り離された誰か、つまり別人と言ってしまっても良いかも知れない。

時間が過ぎれば、かつての自分と今の自分とは当然価値観や倫理観は異なっている。

よく「今の自分にある感性は過去の自分があるから」という話を耳にするし、それは実際正解なのだろう。

だが、それは過去の自分から良い部分だけ抜き取り、悪い部分には蓋をするか俯瞰する。

すなわち過去の自分から取捨選別を経た自分が今の自分であり、過去の自分は別人なのだと思うのも、強ち間違いではないように思う。もつとも、今の時代ではそう考えなくては何も出来ないし、前に進めない。

囚われ続けているは未来へは進めないし、進めなければ唐突で強制的な死が待ち構えている。

それを乗り越えるには、そんな考え方になるしかない。薄情だが、そうしなければ生きていけない。

——— 千尋と箒
——— 千尋も思っているか？

「そういえば覚えていたよ。」
ふと、箒は思い出したように口を開く。

「ホラ、八広駐屯地に住み着いていた野良犬達だよ。一時期私たちが匿っていた。」

「ああ、彼奴らか。」

千尋も思い出したように、そして少し寂しそうに呟く。

——— 破滅後、柴犬の親1匹と仔犬6匹の計7匹が八広駐屯地に住み着いていた。

もちろん餌は誰も与えていなかった。

人間が餌を与えるという狩りをするよりも容易に食糧を手に入れる手段を知れば、彼らは狩猟能力を喪失し、彼らは自然界で生きていけなくなる。

非情ではあるが、人間の自己満足で彼らの命を終わらせるよりはマシ……という思考に至り、誰も餌は与えていなかった。

——— しかし焼け野原となった墨田区で獲れる獲物や食物はたかが知れている。

……必然的に、その親子は日を追うごとに痩せ細って行った。

——— それを見かねた箒がついに保護してしまい、人事課と交渉した結果「屋外で飼育する」・「餌代は自己負担」という条件付き

で千尋も巻き込んで飼うことになったのだ。

これが案外大変なもので、到底2人では賄いきれないが善処し続け、訓練の合間や自由時間を割いて遊んでやったり…と、それはもう仲の良い関係であった。

…だが千尋がユーラシア派遣から帰投する頃には既に姿は無く、もう亡くなったのかあるいは里親にでも引き取られたのかと思ひ、少し寂しげな思いをしたという話もあったりする。

「実はな…片桐一佐…ああいや、もう将補か。あの人が拾ったらしい。」

「え、光が？…でも営内は動物禁止じゃなかったか？」

「うん、だから千葉にある片桐将補の実家で飼ってもらった事にしたそうだ。」

それを口にする、面白おかしい事を思い出したように頬を緩め「ふふ」と笑うと、それはとても楽しそうに、そして年並みの少女のように笑いながら口にする。

「千尋の言った通りだったな…ヒトとは違う種族いきものでも、親愛関係に至った者にはそれなりの愛情を抱くと——この間、片桐将補の身内の方の葬式でお邪魔した時に会ったら、顔を舐めたり戯れついできたりしてくれたよ。」

——そればかりは、千尋の折り紙つきだ。

何しろ、人類ヒトに憎悪感情を抱いていた自分が、いつの間にか1人の少女シラゲンに惚れるなんて異常に陥っていたのだから。

獣はヒトと違って、基本的には純粹で単純だ。

だから感情は憎悪の塊にも、慈愛の塊にも変質する。

そして純粹という事は周囲の環境から影響を受けやすい。

…ちようど、先程述べた自分／千尋の異常のように。

「だが…犬にしても猫にしてもそうだが、どうして顔を舐めたがるんだろうな？…顔とかに美味しい匂いか何かがあるんだろうか？」

——なんて思っていると、筈はなんともキレているのか筋金が入っているようなボケをかます。

” いや、まず美味しいなんて発想になるワケないだろう。 ”

…と思わされ、千尋はハア…と溜息を吐くと、少し呆れた顔をして
箒の顔を見ながら口を開く。

「それはなあ——」

——好きだからに決まってんだろ。

そう口にしようとして、羞恥心が心の隅より生まれ、千尋の脳を侵
す。

” ……まったく、何バカやってんだよ。いつまでも初々しくさ。この
間、指輪渡したとこじゃねえか。”

思わず頭痛がする——
——幻覚を覚えた頭を手で押さえなが
ら千尋は内心自問する。

2人の手には——
——白銀の指輪。

8日前のイブに千尋が箒に渡した代物である。

だがしかし、それは互いの関係を象徴する装飾に過ぎない。

如何に優れた装飾であれ、それを纏う側の心が幼ければ、今の2人
のような反応になってしまうのは必然である。

だから思わず赤面してしまつて——、

「…やっぱりいい、たまには自分で考えろ。」

「?え、あ、ああ…。」

…なんというか、破滅後の箒は人として大事な部分が退化してし
まつた様に感じる。

雑務に過労、それらに侵される日々の中でも国民に少しでも以前の
生活を提供できるようにしようとする身を粉にするような努力を積み重
ねて来た事には変わらない。

けれど、大局に尽くす事を選択したが故に自分の感情は欠如…否、
どちらかと言えば退化してしまつたのだろう。

だからこそ、破滅前の箒ならば察しのつくような事柄でも、あの織
斑と似たような鈍感ぶりを発揮してしまっている。

否——
——訂正、少なくとも一夏^{アレ}よりはマシである。

「…そうだ、お前も今度行くか?片桐将補、年明けはしばし実家で過ご
すらしいし、顔合わせがてらにさ。」

そんな千尋の感情を知ってか知らずか、箒はそんな事を口にする。

——それは別段不快なんてなく、千尋はむしろ嬉しい感情が浮かぶ。

けれど、

「別に良いよ、オレは。」

拒絶する。

別に嫌というわけではない。

けれど今は、

「俺は今お前と居るから、それで良い。」

何よりも愛おしい者と一緒に居たくて。

だからこそその拒絶。

だからこそその否定。

だからこそその——告白。

「…えっ？え、えっと、千尋、その、それって——」

やっとそのの意味を理解したのか、思わず箒は頬を赤く紅く染め上げる。

だからそれに、千尋も釣られて頬を赤く染めて——、

「——なんでもない！」

そう言うと、箒の手を強く握り、照れ隠しのつもりか——

参道を足早に進み始めた。

——脚を踏み入れればそこは大都会の景色からは反転する。

参道を挟むように、両側に鎮座し林を形成する常緑広葉樹。

樹木による緑の壁は都会の騒音やネオンの光を掻き消し、静寂と月明かりに満ちた原初の景色を形成する。

これはまるで異界のようだ。

都会の中に存在する緑の世界。

人によつて街が切り開かれてきたこの時代を生き残ってきた絶対不可侵の領域。

脚を踏み出す毎に人の世界から遠ざかり、神の領域に脚を踏み入れていく。

鳥居という人と神の世界の境界にして門であるそれを潜ればもう

そこは異世界。

されど来訪者を拒絶するのではなく、迎え入れるように澄んで、落ち着いた空気が辺りを包み、原始より刻まれてきた景色が歓迎する。

「——やっぱり、神社は周りと雰囲気が違うな……こう、なんていうか、都会なのに空気が澄んでいて、都会から遮断された空間にいるみたいだ。」

箒が言う。

たしかにその通りだろう。

境内には参道以上に街の騒音どころかネオンの光が全く届かず、境内に置かれた照明灯代わりの焚き木と月明かりのみ。

静寂と暗闇に支配された空間に、再び雪が降り出し、白闇を形成する。

：闇の中だというのに奇妙なまでに明るく、不可思議な景色。

「……てか、やっぱり人が居ないな。」

ふと、白い息を吐きながら千尋が呟く。

見渡せば確かに人はいるものの、数えられるほどしか居らず確かに少ない。

自分達も含めて20人程度だろうか。

それに対して箒が口を開く。

「それもそうだろう、雪が降っていて、おまけに今日の気温はマイナス5度だぞ？ そんな日の午前零時にお参りに来る猛者は都内ではそうそういるまい。」

「あ、そっか。」

すっかり失念していた——といった顔を千尋はする。

なにしろ、この時期のユーラシア戦線……特に北部はマイナス50度というのが当たり前の世界であり、その辺りの感覚が日常の感覚を麻痺させていたのだ。

——そんな戦線を経験してきた千尋からすれば、この新宿の方がよっぽど異界だ。

けれどそこにやはり、懐かしさを感じさせる。

ふと——響く、低い重低音の慟哭。

威厳に満ちていながらも万人を受け入れる音色。
それは紛れもなく、鳴り響く除夜の鐘。

「…年が明けたみたいだな。」
箒が言う。

であれば次にやる事はひとつ。

「よし、御賽銭のトコに行こうか！」

言うなり、箒は千尋の手を掴んで歩き出す。

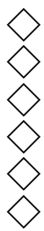
” いやそれより挨拶しろ—— ”

と、千尋は思わされる。

だが、まあ——

「…いつか。」

たまには後で良いや。と千尋は考えを切り替えて、歩みを進めた。



——参拝を終えた後に、琥珀色の曇り空より再び降り始める雪。

雪下せっかの下、千尋は本殿に続く階段を登った場所の端にあり、ビル群を望める位置のベンチに座しながら、ネオンの光で琥珀色に染まる曇天を見上げながら、千尋は言う。

皮膚を刺し貫き真皮を抉るような痛みを与える冷気が充満する深夜午前零時過ぎ。

世界は氷河期のように冷え込んで、死んでしまったように静まり返った。

「…ああ、また降ってきたな。」

際限無く、地表を埋め尽くすのではないかと思わされるくらいに降り積もる白い結晶の再来を見届けて、思わず千尋は呟く。

「…千尋、お待たせ。」

ふと、箒が湯気を蒸す紙コップをふたつ持ってやって来る。

——中には黄緑色の液体…ただの緑茶が入っている。

「冷えるだろうから買ってきておいたんだ。冷めないうちに飲んでくれ。」

「ん——。」

そういうなり千尋は緑茶を取ると、中身を喉へ流し込む。

——ああ、暖かい。

体内そのものが柚子湯をはった湯舟になったような——
そんな錯覚すら覚えさせられる暖かさ。

「ところですよ——」

同じようにお茶を啜る筈を隣から横眼で見つめながら、千尋は声をかける。

「筈は何をお祈りしたんだ？」

「ん？…まあ、当たり前すぎるけれど大切なことをいくつか。」

嫺やかな微笑みを浮かべ、白い息を纏いながら、筈は応える。

「お前の事だし、世界平和とか？」

お茶をぐい、と豪快に流し込みながら千尋は聴く。

——確かにそれはあり得るし、今の人類からすれば当たり前であり実現を願う最果ての願望。

そして——人類の守護獣たる柳星張イリスを植え付けられ、それを稼働させられた結果、本格的にそういう風にしか思考出来なくなつた筈であるからこそ、実現を祈るであろう願望。

——それを肯定するように、
——うん、まあそんなところだ。」

「はあ——だと思ったよ。」

ため息を吐いて、呆れたような顔をして千尋は言う。

——もう分かりきっていた話だし、今更変えることなんて

できるはずがない。

そもそも、元より存在した感性を殺害して塗り潰された呪いだ。

それを治すことは叶わない。

——だから、せめて筈コイツを守ってやらなきやいけない。

——自分に生き甲斐をくれた、筈を——。

「千尋」

お茶を飲み干した箒がベンチにから立ち上がると――

「今年も、よろしく。」

瀕死の人間に与えられた救済にも見えるような雰囲気を纏う手を差し出しながら――微笑みを浮かべて言う。

――それに応えるように、

「ん。こっちも、よろしくな。」

精一杯の、明るくて――どこか童心に満たされた怪物は笑いかけながら、手を取り応じる。

眼前にいる少女の、終わりの無く始まりさえありもしないような夜の果てを待つこの空のような、琥珀色の瞳を見つめながら。

――眩むような時代の産声の下で。

――永遠にさえ降り落ちて闇を埋め尽くす白い雪片。

――ゆらゆらと天使の羽根が空を満たす下。

――空は曇天が埋め尽くし、琥珀色に染まった、いつかの聖夜のような夜。

――崩壊した世界の片隅で、2人は手を繋ぎながら。

――暗く長く、遠い道程。

――されど、至る終着が見えるならば話は違う。

――そこに至るまで足掻き、蹴き、抗い尽くすのみ。

――これは、その満ち足りた道程に至るまでの物語。

そして、これは満ち足りた道程を駆け抜けた、2人に与えられた束の間の福音。

――この時代と、あなたに感謝を。

――最後に――2人は互いの心中で、祈りを復唱した。

《――どうか、君と君を囲む世界が、これからも幸福でありますように。》

【――どうか、君と人類のその祈りが未来の福音に満ちていきますように。】

第2次日本本土防衛戦編

EP-35 黒キ荒神（ゴジラ）：序

2021年6月13日

日本国青森県むつ市

海上自衛隊大湊基地

青森県の？内湾である陸奥湾。？

？その湾内は地の利も良く、砂嘴である芦崎に囲まれた水域に海上自衛隊の艦艇停泊場が置かれ、港湾の南西部には航空基地も整備されており、旧海軍が建設した修理用ドックを引き続き運用している。？
？そして海上自衛隊の基地で唯一、専用のドックを保有している場所でもあるそこには来客が停泊していた——？。

.....

ロリシカ海軍輸送艦【ニューカーク】

「———それにしても…よく、こんなオンボロ艦が現役ね…。」
ふと、エリザはニューカーク艦内の甲板に通ずる廊下を歩きながら、ふと呟く。

———元々、ニューカークは1979年に竣工したノルウェー船籍のかつて建造された全長458.45m、全幅68.8m、564,763重量トンにも及ぶ世界最大の石油タンカー、「ノック・ネヴィス」をロリシカが購入・改造を施した艦艇だ。

以前は1988年にイラン・イラク戦争で撃沈されたが戦後に浮揚され修理された上で2004年から2009年まで沖合でFSSO浮体式貯蔵積出設備として使用されていた。

だが艦齢の限界である30年に差し迫った2010年にインドのグジャラート州にて解体される———ハズだった老朽船舶である。

艦体の彼方此方に錆が目立ち、腐食が激しい箇所が至る所に散在し

ているオンボロ艦は5年にも及ぶ大規模改装を経て、揚陸輸送艦として使用されていた。

とはいえ、今までこんな老艦にまで頼らねばならなかった——それを考えただけで、ゾクリと悪寒が走る。

——ニューカークだけではない。

ロリシカに配備されている戦艦ガングートでさえ、第一次世界大戦時の戦艦を改造した老朽艦なのだ。

：唯一の新造艦と言えば、現在ペトロパブロフスクで整備中のガングート級2番艦チエルスキーと3番艦コルイマだけか。

あれらの老朽艦が沿岸部の戦線を支えていたと思うと——如何に戦況が逼迫していたかを嫌というほど思い知らせる。

「まあ、無いよりはマシなのだけれど……」

実際、ニューカークはその巨体を利用して補給物資の輸送積載、給油燃料の積載、戦術機およびヘリ等の航空支援プラットフォームとして機能するほか、冬季には凍りつくオホーツク海においての活動を支援すべく艦首には砕氷用のドリル型シールドマシンが搭載されているなど、単艦でも数多の役割を担える程に様々な能力を付与されていた。

唯一の不満があるとすれば見ての通り老朽化が激しい事と、武装は20mmフラックスCIWSが5基しか無い事、最大速力が25ノットと極めて鈍足であることだろう。

……とはいえ元は民間船なのだから、仕方ないのだろうか——

……閑話休題。

——エリザはふと、自分がここにいる理由を思い出す。

——30日前、首都ペトロパブロフスクカムチャツキーから北西に20キロの地点にあるエリゾヴォ市。

その市内にあるエリゾヴォ空港を流用したエリゾヴォ統合基地の会議室にて、エリザはニコライおよびイレーナの両名から呼び出しを

受け、出頭していた。

「私を特別顧問としてIS学園に派遣…ですか？」

エリザは信じかねるような顔をして、思わず聞き返してしまう。

「なにせよ、今は西部から難民救出や撤退支援、ロシアが引き起こした核の冬による異常気象によるインフラ麻痺、兵員の枯渇などでチユクチ・コリヤーク戦域の防衛が極めて不安定化しているのだ。」

場合によっては今すぐに防衛網に穴が開いてもおかしくない。

「そんな一兵たりとも惜しい状況化で、中隊後衛指揮官という重要ポジションの自分を国外に派遣する。」

「…いくら自分達が軍の再編途上で予備戦力扱いとなっているからとはいえ、無茶な話だった。」

「そうだ。——IS学園では対獣戦を想定した授業を行うとされている。」

故に実戦経験と後衛とはいえ指揮経験も豊富な貴様に行ってもらおう。」

ニコライは厳然たる態度で言葉を放つ。

隣に佇むイレーナも言葉を発してはいないが、表情からニコライと同意見であると言外に伝えている。

「…お言葉ですが、この時期にその判断は——」

エリザが反発しようと言葉を放つ——だがそれを遮って。

「この時期だからだ。」

ニコライが告げる。

「未だ軍が大規模な再編を行なっている途上だからこそ、我々は予備戦力扱いだ。」

つまり今ならまだ、一線から下がって戦闘以外の行動にも専念できる。」

訓練や教導——もちろん外部顧問も。」

それに続いて、イレーナが口を開く。

「またそれらは国内の戦力の4割を国連に依存している我々としても、国連管轄のIS学園に関わることで国際社会に貢献し、結果次第では今後強力な支援を受けられる可能性を産むことに繋がる。」

人員は気にするな。ジャーナル大隊の予備1個中隊が我々の指揮下に編入されることになっている。

——だが再編が終われば、それすら叶わないだろう。

我々はまた最前線に舞い戻ることになる。」

——この期を利用して隊と国を強くする必要がある、つまりはそういうことだった。

「それに——」

ふと、ニコライは口を開いて、言葉を紡ぐ。

「貴様も今のうちに曾祖父の祖国くらい拜んでおけ。——これが最後になるかもしれないからな。」

・
・
・

「——ひいお爺ちゃんの祖国…か。」

廊下を抜け、甲板に佇みながらポツリと呟く。

視界に映るのは大湊の街並みと深緑に包まれた山肌。

——エリザ自身は、シベリア抑留によって旧ソ連領に連れ込まれた旧満州国在住であった日本人の末裔にあたる日系ロシア人である。

故に、少なくとも程度に日本への憧れは強く、いつかは行ってみたい——という、叶わぬ夢を見ていたのだ。

——それがまさかこんな形で叶うというのは思いもしなかったのだが。

「う〜…あったかい…」

ふと——若い男の震えるような、けれど伸びるような声音がする。

振り返るとそこにはラテン系の男性が肌を貫く暖気に歓喜に打ち震えながら甲板に出て来ているところだった。

「あら、ガルシア伍長。」

エリザが声をかける。

——男の名はハビエル・ガルシア。

今は久方ぶりの暖気に絶好調の様子。

しかし、いつもなら慣れない寒さに歯をカチカチ鳴らしている。

それもそうだ。何しろハビエルはロシア人でもロリシカ人でも無く、メキシコからの移民なのだから。

2018年以降、人的資源の不足に悩まされていたロリシカは、同時にメキシコからの不法移民に悩まされていたアメリカに対し、ロリシカはアメリカにおける不法移民を請け負う盟約を交わしていた。

不法移民とはいえ、それは枯渇する人的資源を補完するためであった。

その為に多くのメキシコ人がロリシカに雪崩れ込み、ペトロパブロフスク・カムチャツキー周辺はロシア語とスペイン語が飛び交う地区と化していた。

…ひとつ誤算があったとすれば、メキシコ人の大半が極寒のロリシカに慣れないということだろう。

ハビエルもその1人だった。

「ああ、マツナガ曹長…。ところで本国の寒さどうにかなりませんか？」

「ええつと…私に言われても…元々、カムチャツカは年中極寒で、温泉が海水浴の代わりと言われる程の場所だもの…。」

エリザは苦笑しながら口を開く。

ペトロパブロフスク・カムチャツキーは、ケッペン気候区分：Dfc 亜寒帯湿潤気候の気候に属している。

加えて太平洋に突き出たカムチャツカ半島南部に位置するため、気温はシベリア内陸部より比較的温和だ。

——しかし、だからといって温暖というわけではない。

冬の平均気温は常に摂氏マイナス10度を下回る。

夏の平均気温は10度を超えることこそあれど20度を超えることは決してない。

———それほどにまで過酷な極寒。

カムチャツカ半島南部に存在する安全地帯グリーンゾーンのペトロパブロフスク・カムチャツキーでさえそんな環境なのだ。

そこより北———最前線のチュクチ・カムチャツカ戦域が

それ以上に過酷な地獄であることは想像に難くない。

「…まあ、此処は暖かいから良いじゃない、ハワイやメキシコほどじゃないけど。」

「…違います。」

エリザが微笑みながら口を開くと、ハビエルもくつくつと笑う。

———ふと、視界にまた自分達とは違う別の来客が映る。

所々に散りばめられた星のように錆が浮かぶ暗みがかった灰色の艦体。

金網型の巨大アンテナを掲げるトップヘビーなマスト。

両側舷に陳列された対艦ミサイルの巨大な発射基群。ランチャー

そしてマストに掲げられ、はためく赤・青・白の横三色ロシア連邦国旗の旗。

それが視認出来るだけでも———6隻。

そしてその全ての艦は甲板に大量の仮設テントが張られ、無数の人間が鯖詰めにされている。

「…ありや、ロシア海軍の駆逐艦じゃないか。それになんだったてあんなに…民間人がギユウギユウ詰めにされてるんだ?」

ハビエルが言う。

視界に映ったのはロシア海軍のソブレメンヌイ級ミサイル駆逐艦とウダロイ級駆逐艦。

どちらもソヴィエト時代に開発され現在に至ってもなお建造されている主力艦である。

そして———ウダロイ級の奥に見えたある艦影が視界に入ると、エリザも口を開く。

「…奥には、キーロフ級重原子力ミサイル巡洋艦もいるわね…。」

キーロフ級重原子力ミサイル巡洋艦。

ソヴィエト時代に建造された、原子力機関搭載型のミサイル巡洋艦である。

非常に強力な対水上打撃力・防空力・核攻撃能力を備えている他、防護装甲まで備えており、さらには大戦後に建造された水上戦闘艦としては海自の「きい型」に次いで世界最大のサイズであることからミサイル巡洋艦よりワンランク上の ” 重ミサイル巡洋艦 ” として知られている。

詰まる所、キーロフ級とは大口径砲塔の代わりにミサイルの 垂直発射システム VLS を無数に搭載し、厚い重装甲に身を包んだ事実上の巡洋戦艦である。

しかし——その威厳を台無しにしてしまうように、甲板はやはり仮設テントが埋め尽くし、無数の人間が鯖詰めにされている。

しかもその人間が、ほとんど全て私服に身を包んだ民間人——
——つまり。

「おそらくウラジオストクからの難民移送艦隊でしょう。この辺りでロシア海軍が展開可能な地域といえば不凍港のウラジオストクか、不法占拠している北方領土くらいでしょうし。」

——おそらくここに展開している臨時国連軍から補給を受ける手筈になっていたのでしょうかね。」

エリザが口にする。
つまり彼女の言葉を整理すれば。

——ウラジオストクから発した難民移送艦隊はこの大湊で臨時国連軍から補給を受けたのち、北方領土に難民を移送するつもりなのだろうという話であった。

「……この分だと、民間のフェリーとかも……？」

「……いるでしょうね。ウラジオストクは人口60万人もの人間を抱える、ロシア極東管区最大の都市だから……。」

仮に極東ロシア最大の都市が難民で溢れかえっているなら、本来の人口の倍以上——120万人以上の人間がいることになるけれどね、という言葉は呑み込む。

——ふと、ある事に気づく。

「…それより、そろそろ出航の時間じゃないかしら？」

エリザが腕時計を覗きながら呟く。

時刻は午前11時05分。

予定では午前11時ちょうどに大湊基地を出航し、IS学園に程近い神奈川県・海上自衛隊横須賀基地へ2週間ほど時間をかけて向かう手筈になっている。

しかし——抜錨はおろか、出航前の点呼さえ実施されていない。

——厭な、予感がする。

「何か、有ったのかしら…関東地方で…。」

——果たして、エリザの予感は既に現実のものとなっていた。

10時58分

——黒い暮桜制圧より22分前。

——東京都墨田区・特務自衛隊八広駐屯地

——第一機動団第一情報分析本部中隊司令部

巨大なスクリーンとコンピュータの操作端末が墓標のようにずらりと並ぶ灰色の空間。

J・T・W・Nを駆使し、巨大不明生物の本土侵攻を事前に察知し
日本国土領海警戒網
情報分析本部中隊
情報を見極めるI・A・H・E——すなわち対巨大不明生物

物専門の偵察部隊——の司令部はその空間に置かれていた。

J・T・W・N設立のキツカケは、1971年・太平洋方面の日本領海内に世界で3番目の巨大不明生物が侵入した事——

公式にはソ連の原子力潜水艦による領海侵犯とされている——
——だった。

—— 当時は対ソ連・対中国牽制を名目に現役であった砲撃護衛艦 ——

—— 事実上の戦艦 —— の活躍により撃破に至ったものの、それは当時主流と化していた空母艦載機による航空攻撃を全く受け付けず、対人類戦で余剰火力となった戦艦を投入せざるを得なくなった結果である。

偶然撃破を可能とする実力 —— 戦艦が現場に間に合ったから良かったものの、もし間に合わなければいかな結末を迎えていたか：それは想像に難くない。

当時東西冷戦と最前線であった日本に怪獣を上陸させるという事は、東側に自衛を名目に日本への核攻撃の口実を与える事と同義である。

そしてそれに釣られてアメリカは核の傘に基づき東側に報復核を撃つ。

それにソヴェイェトも報復核を撃つ —— この結末は全面核戦争勃発による人類滅亡。

冷戦下の東西最前線国家において怪獣の上陸は、文字通り —— 人類世界存亡の危機であった。

だからこそ、その最悪の結末を回避し、より確実に安定した迎撃を取るべく行われたのが島国である日本列島を囲むように張り巡らされた海底ケーブルや領海内海峡間を通る海底トンネル上部への全周囲アクティブソナー併設。

大掛かり且つ無茶苦茶な計画。

だが、意外や意外。そこに怪獣上陸による人類滅亡とソ連の太平洋進出を食い止めたたいアメリカの意図が絡まり —— 事は容易く大成し、三重の索敵網から成るJ. T. W. N. は構築された。

そんな数千数万キロにもおよび広大な監視網を駆使する情報分析本部中隊はこの日、擬似目標を用いた週2回の模擬訓練が行われる事になっていた。

—— それが訓練ならどれだけ良かっただろうか。

—— それが機器類の不具合ならどれだけ良かっただろうか。

——それが悪い夢ならばどれだけ良かっただろうか。

——緊急事態を告げる警報アラートが司令部に鳴響する。

模擬訓練を前に僅かな和みを見せていた司令部の空気が瞬時に冷却される。

分析中隊の自衛官が持ち場に駆け付け、ある者はヘッドセットをつけて通信を始め、ある者はコンソールに張り付く。

大スクリーンに投影された日本地図に、警戒網から送られてきたデータが重ね合わされ情報ウインドウの塔が構築される。

別のスクリーンには測定のアングルを変えたデータと、対象である巨大不明生物に最も近い艦艇————Shimakaze DDG-172と DDG-1004が表示される。

それはすなわち————巨大不明生物の領海侵入を告げる警鐘であつた。

6月13日

11時16分。

——黒い暮桜オウルガ制圧より4分前。

——スタッフが固唾を飲んで、あるいは冷や汗をかきながら奮闘する中で、状況は確実に悪化の一途を辿っていた。

「警報システムに異常なし、該当する自然現象シグネチャなし、信頼度依然高い。」

「【しまかぜ】より入電、追跡中の未確認目標を巨大不明生物と断定。現在緯度34.7292、経度139.7983を時速40ノットで北上中。」

通信士がディスプレイにしがみつくように告げる。

「首相官邸とは?。」

司令が落ち着きを払って訪う。

「現在予算委員会会議により繋がりません。」

——状況は最悪だ。

要約すると、本土ギリギリに詰まられるまで巨大不明生物の侵攻を

察知出来なかったのだ。

結果、もう巨大不明生物は本土と目と鼻の先——否。その前にIS学園が存在する。

にも関わらず、憲法によって常に制限を受けるが故に独断で動けない自衛隊を唯一動かせる首相とは繋がらない。

仮に有害鳥獣駆除を目的に部隊を派遣しようにも出動要請が無ければ動かせない。

そして上陸予想地域であるIS学園はVTシステムの対処に忙殺されており繋がらない。

さらに巨大不明生物はこちらの事情など御構い無しに侵攻を継続する。

——これを最悪と言わずしてどうしろというのだ。

そもそもここまで発見が遅れたのはある意味必然だ。

何しろ、J. T. W. N. システムの老朽化したソナーを補充する予算を女尊男卑主義であった前政権が削り、補修期間が大幅に遅れ、警戒網に穴が開いてしまったのだ。

——この巨大不明生物は、まさにその警戒網の穴を突いてきた。

：…こうまでされては、上陸阻止は出来ないだろう。

それに、如何に足掻こうと法による制約がある以上、上陸阻止を行えるかさえ怪しい。

「法を尊重し、国防を疎かにしてきたツケ……かな。」

思わず、しわがれた声音で——だが平静を保ったまま司令が呟く。

嘆いても仕方ない事は理解しているが、口より漏らさなくては気がどうにかなくなってしまおう。

そしてそこへ、現実が押し寄せる。

「——巨大不明生物、^{IS学園}夢見島上陸まであと…7、6、5、4、

3、2——」

1時20分

S 学園第2アリーナ

黒い暮桜オ制圧ルより32秒後。

轟音と共に、海より異様な影が現れる。

異彩を放つ、大きな影が。

そこにあるだけで万物を破壊してしまいそうなほどの大きな影が

海を破り、世界へと顕現する。

全高50メートル以上にもおよぶその巨体は、まるで歩く山のよ

う。

威圧と破壊の音色を感じるその影は先の黒い暮桜オとは違い、正真正銘巨大不明生物の怪獣。

それに関する知識や認識の疎い者ですらも理解できる。

あの怪獣バケモノは、桁違いだと。

そして——黒き荒神が、こちらを睨む。

リボルバー銃の弾倉が回転するように。

引き金が、徐々に引かれていく感覚。

顛顛こめかみに当てがわれた銃口が、火を噴くように。

——動き出す。

空気が、死が、異形の巨躯が。ゆっくりと、音を立てて動き出す。

脚を踏み出すごとに大地が鳴動する。

巡航ミサイル14発分に相当する衝撃を持つ一歩で、土塊が舞い上

がり地表は陥没する。

????????

!!!

地獄の底より響くような咆哮。

そこに難しい意味はない。

ただ、殺すと。

皆殺しにすると。

その意思だけが込められている。

——アレは死だ。死そのものだ。

視界を埋める此^{IS学園}処を破壊し尽くすと。

此処にいる仇者^{あだもの}を皆殺しにすると。

そう告げる破滅の音色。

…なぜ、そうも分かりやすく伝わって来るのかは分からない。

ただ確かなことは、アレは殺す側であり、此方は殺される側に在る存在ということ。

——処刑宣告を下す死の破音が大気を^{ふる}振動^{わせ}させる。

「——なん、ですの…アレ…。」

沈黙の口火を切り、セシリアが呻くように言葉を発する。

その表情はまるで、猟犬に睨まれた野ウサギのようだ。

セシリアだけではない、簪や山田先生、その他教師部隊の面々——

——皆が皆、同じ顔をしている。

——当然と言えば当然だ。

先程までの黒い暮桜^オは巨大不明生物の類とはいえ、規模からしてI Sクラス。

故にISや統合機兵での戦闘・制圧も辛うじて可能であった。

だが——眼前のアレはどうか。

サイズは身長50メートル。黒い暮桜^オの20倍近いサイズである。

3メートルの黒い暮桜^オでさえ相当の戦力を消耗させたにもかかわらず、それを遥かに上回るバケモノ。

——考えずとも、今の装備が明らかに火力不足である事は言うまでもない。

例えるならば小口径拳銃一丁で恐竜に挑むようなもの——

——否。人間の基準で語るのも烏滸^{おこ}がましい。

実際には人間ではなく蟻が恐竜に挑むようなものだ。

——ならばもう、やるべきことはひとつだけ。

『総員傾注！』

それを告げるようにヘッドセットに響く、光の号令。

通常の通信規則を飛ばして放たれたソレは、緊急を要するという意味である事は、誰でも判る。

『直ちに第2アリーナから退避しろ。ソレは、今の装備では抗戦すら叶わない。』

有無を言わせない、撤退の号令。

——直後。

「…333、333…b@ac4——!!」

再起動を告げる、黒い暮桜オトルガの咆哮。

「ツーまだ、動いて…☒」

思わず簪は驚愕の声を上げる。

ISを動かす上でコアの他に必要なメイン・パーツとも言える人間パイロットを失った以上、ISが起動する筈はない。

先の無人ISのようなタイプならばいざ知らず、ラウラのシユヴァルツアレーゲンはそれを実現出来ない機体だ。

——故に誰もが驚愕。

そして、先程までラウラが埋まっていた空間を見て——再
度、驚愕。

「ボーデヴィツヒ、さん…?」

白い肢体。

鋭い銀髪。

細い体軀。

赤い隻眼。

金の隻眼。

——それは紛れもなく、千冬が救い出したラウラと瓜二つの複製であった。

…つまり、ラウラの奪還により自己の維持が不可能となった黒い暮桜オトルガは、この短時間でラウラの代わりになる存在。

——すなわち複製クローン体を形成することで生命維持を図り、そして成功した。

…それはある種の生命維持機能なのだろう。

「…333…b@ac4、ezf「e…!!」」

黒い暮桜が吼える。

それは千尋を上回る御馳走を見つけたという歓喜。

それは黒き荒神に喰らいつくという宣言と威嚇。

直後、地を蹴りながら飛び上がる黒い暮桜。それは文字通り獲物に牙を突き立てようと飛びかかる猟犬のよう。

牙を突き立てられれば、間違い無く黒い暮桜は黒き荒神の体内をそこから悉く食い潰す――。

……………だが。

――大きさは歴然。

――両者の差も当然。

……………それを示すように。

「b@ac4、:⊠

――突如として黒い暮桜の視界が暗黒に塗り潰される。

同時に骨が砕ける乾いた音と、金属がひしゃげ歪む不快な音が響く。

直後、大地に叩きつけられ――土を、舐めさせられる。

黒い暮桜は今の一瞬で何が起きたのか理解し得なかった――

――今の一瞬を千尋達は視界に写し、眼を見張る。

――先程まで、数人がかりで抗戦しようと、圧倒していた。

――たとえ原型を留めぬまで破壊されようとも完全再生していた。

……その黒い暮桜が、まるでハエを叩き落とすように、一撃叩かれただけで撃墜されたのだ。

「な――……」

簪が絶句する。

否、簪だけではない。

セシリアや千冬、山田先生――箒でさえも、眼前の光景に

釘付けにされる。

何しろ、先程まで猛威を奮っていた黒い暮桜はただの――

――アリーナにクレーターを形成するほどの質量エネルギー――

——一撃で、沈黙させられたのだ。

それは、今眼前におり、黒い暮桜オトルガに敗北に傾き掛ける戦いを強いられた千尋達に自身の力量差を見せつけるように——。

生気の無い——まるで屍のような乳白色の眼が眼下の人間を睨む。

：必然的に、人間の集団に混じっていた千尋と黒き荒神の視線が交錯する。

——ニヤリ、と、死神が嗤う。

ざわり。

次の瞬間には、大気の変質を感知する。

——死が来る。

本能的に千尋はそれを察知する。

そこに理屈など要らない。

振り下ろされるナイフを肉眼で見ているような感覚。

銃口から撃ち出された銃弾を肉眼で見ているような感覚。

全ての理屈を無視した絶対的な死が迫り来る感覚。

それを肯定するように、死神は鈍い光を奥に宿しながら、口角を吊り上げて、嗤う。

——次の瞬間、千尋はただ、喉がはち切れそうになる程の

声で、

「全員、散れ

——ツ!!」

叫んでいた。

——直後、眼を潰すほど眩い閃光が、世界を焼却した……

!!?

時刻
S 学園北部区画地下

地下C棟学園・本土間連絡貨物線搬出入ターミナル

6つの貨物鉄道路線と4つの輸送トラックロータリーから成形されている小規模操車場。

——そこに、学園内の人間が雪崩を打って溢れかえっていた。

『——次の列車は5分後に発車します。どうかみなさん落ち着いて——』

駅に反響するアナウンス。

半円形の車庫から忙しくディーゼル機関車が搬出されては三点支持形ターンテーブルによって路線に振り分けられ、人員輸送車両に連結される。

——そして走行に問題がないかの最終確認。

——その隣では、本来貨物列車から積荷を下ろすトラック達が列を成す所を、バスや人員輸送トラックに教師部隊護送車、挙句の果てには用務員の軽トラックまでもが行軍するアリののように群れていた。

先のアリーナ観客席の地下収容後、在校生・非戦闘教員・用務員・来賓らを一時本土へ逃がすべく東部区画学園モノレール線、北部区画夢見飛行場、そして北部区画地下・学園本土間連絡貨物線ターミナルの3ヶ所の集積場から退避を継続していたのだ。

——既に地上モノレールと飛行場エリアからの退避は完了し、現在は地下貨物線に残された人間を退避させるのみとなっていた。

……とはいえ、避難が開始されたのはつい20分前。

IS間連の問題が起きた事を封殺したい学園側とIS委員会により、避難経路の確保などが大幅に遅れた。

さらに言えば、学園に配備されていた輸送手段は大人数の輸送に向かないという事実。

——地上モノレール路線はその性質上大人数を乗せられない。

——飛行場エリアには小型ジェット機やセスナ機に小型警備ドローンしかなく、大勢の輸送などもはや論外。

——地下貨物線は唯一大人数の輸送を一度に行えるが、退避しようとする人間が殺到して来るのは目に見えている。

結果——ここは、1000人以上の人間が殺到し魔女の釜鍋のように混沌と化していた。

「すみませんー鈴を見てませんか☒」

ふと——教員に問いかける男性の声。

言うまでもなく、その声の主人は織斑一夏であった。

それに教員は困惑と焦燥を浮かべた顔をして、ただ事実を告げた。

「どこにも、いない…？見てもいない…？」

頭から血の気が引き、青ざめながら一夏は復唱する。

そして——ふと、思い出す。

——タッグトーナメント1日目に、鈴に声をかけてた女性。

あの時の鈴の反応とただならぬ空気——。

「まさか。」

——あの2人の関係は分からない。

だが、素人目に見ても危険な関係であったのは明白だ。

…では、鈴はまたあの女に…☒

「くそっ…!!っ?」

教員の制止を振り切り、アリーナの直下にあつた第2シャフト方面へと駆け出す。

鈴は自分の大切な幼馴染なのだ。

…もし、もし、彼女に何かあれば、どうすればいいのか。

——どうしてこんな時になるまで気付いてやれなかったのか。

「くそっ、くそっ！くそっ！」

第2シャフトに通ずる廊下を駆け抜ける。

——地下階層廊下には人影は一切ない。

封鎖されている訳ではないが、ほとんどの人間は既にそこから退避している。

故に無人。

「くそっ！鈴、どこだ☒」

無人の廊下に響く織斑の声。

しかし虚しく反響するだけで、反応はない。

——直後、地震と錯覚するほどの衝撃と爆音が廊下を震わせる。

…今のはなんだ？

…何が起きてる？

…鈴はどこだよ？

錯綜する思考を振り払いながら足を進める。

——ふと、どこかで鈴が自分を呼ぶような声が聞こえた気がした。

「鈴☒」

微かに、しかして確かに自分を呼ぶ声。

それを頼りに、第2シャフトの二つ隣——第4アリーナ直

下の第4シャフトにまで至り、

「こっちに来ちゃダメ！一夏!!？」

「……………」

右手の空中連絡橋から、鈴の声——。

振り向けばそこには、タッグトーナメント1日目に見たあの女と、右手を後ろ手に掴まれた鈴の姿があった。

EP—36 白光、大地ヲ焼ク（挿絵有り）

6月13日午前11時31分

IS学園・第2アリーナ

砂塵が舞う。

焦熱が覆う。

雑音が鳴る。

地面は焦げる。

建物は崩れる。

世界は焼ける。

放射熱線が解き放たれたその場所は、さながら原爆の爆心地
——高熱と爆風に蹂躪された跡地と化していた。

「ぐっ……う、く……」

節々が痛む身体に鞭を打ち、千尋は立ち上がろうとする。

だが、左腕に違和感が走る。

「……？」

ふと、見下ろす。

……そこには、撃ち抜くように鉄骨が突き刺さり、潰れた肉の塊と化した腕があった。

（……くそっ。）

千尋は舌打ちをすると、迷い無く、鉄骨を無造作に引き抜く。

飛び散る鮮血。

神経を伝播する痛み。

脳から溢れ出すアドレナリン。

すぐさま千尋は続けて、先程までの砲撃戦で加熱したライフルの銃口を拾い上げると、それを焼きコテのように傷口に押し付ける。

——ジュウ、と肉の焼ける音がする。

それは出血多量を防ぐために、熱で皮膚を焼いて無理矢理傷口を塞ぐという荒治療。

——名を、焼灼止血法。

肉体の細胞や神経に重度の負担をかける上に雑菌などが残留する

事となるが、そんなコト知ったものか。

——左腕だけで済んだのは幸運だ。

傷口を溶接し、機体のステータスをチェックしながら内心呟く。
瞬間、敵性巨大不明生物の反応を示すウインドウ。

——眼前には、あの黒き荒神が。

「…はっ…。」

千尋は思わず笑う。

——これじゃあ、あんまりにも不利過ぎる。

火力もサイズも何もかもが——次元が違いすぎる。

アレは今の自分達が到底及ばない領域にいる。そんな勝敗が分かりきってるバケモノとどう足掻いても対峙し相手取らなくてはならないであろう現実。

——笑わずにいられるか。

…おかしくて、頭が狂いそうだ。

——それとも、ゴジラだった頃前の自分を知っているからこそ、同胞と対

面して喜んでいるのか。

——眼前の事実に対して違うことを思うのは、死を前にし

ての、ある種の現実逃避だろうか。

…どちらにせよ、自分の中に在るモノが狂い始めた事を千尋は知覚する。

「きゃあああああ!!?脚が、私の脚が!!?」

「し、死んでる…!みんな死んでる!!?」

——直後、悲鳴が爆心地に溢れ出す。

振り向けば、焦げた肉と融けた鉄がごちゃ混ぜになった、奇怪なオブリジェ——つい先程まで人間だったもの——が多
数転がっている。

その周りにいる、悲鳴の音源たる生存者も誰一人として無傷ではなく、四肢を吹き飛ばされた者、眼球を潰された者、肌が焼け爛れた者が錯乱している。

——それはまさに地獄絵図。

その中から、1人千尋の元に飛び出てくる。

——— 箒だ。

「千尋！無事か!?」

その表情には焦燥と困惑と心配と。

純粹に、千尋を気にかけている声音。

「大丈夫だ。さつき止血した。」

だからその感情を甘受したい欲求を押し殺し、箒に冷静さを取り戻させるように平静さに満ちた声音を返す。

ハツとして、箒は平静を取り戻し——— 2人して、コンクリート壁の残骸に身を隠す。

——— そして、壁に穿たれた風穴から黒き荒神を一瞥して。

「…どうにかして、アレを止めないと。せめて、アリーナ内の人間が撤退が終わるまでは———」

箒が冷静さを欠いた自分を呪うように忌々しげに口元を歪めながらも、指揮官然として言い放つ。

——— 驚いた。

どう足掻いても止まりようの無いバケモノを、箒は足止めしようとしている。

…あまりに無茶苦茶で無謀だ。

アレとの実力差はかつて張本人だった自分がよく知っている。

「——— 千尋、お前はみんな連れて回避してくれ。」

——— 直後、頭をハンマーで殴りつけられたような衝撃が走る。

「せめて、お前だけでも———」

その言葉にある意思を、千尋は分かってしまった。

箒は1人で殿を務める気だ。

さらに言うなら、それは急所への自爆特攻を前提とした戦略という事は、素人にも分かるような言葉で———。

「——— ギッけんナツ!!?」

思わず千尋は声を荒げて叫ぶ。

「お前1人でアレを止められると本気で思ってたのか☒それとも何か? 自爆特攻でもする気か!?」

察した意図を改めて口にして、箒にぶつける。

——案の定、箒は痛いところを突かれたのか顔を歪めてしまふ。

だが、それも数瞬。

黒き荒神^{ゴジラ}が再び前に踏み出した巨轟音によって意思は固められてしまふ。

「…くそ。悪いけど、撤退なんかしてやらない。」

「——な☒」

「俺もお前と足止めをする。2人で対峙した方が——被撃墜のリスク半減と、足止め時間の延長が出来るかも知れない。」

千尋は箒の反論を振じ伏せるように言葉を放つ。

だが、直後——

「箒！千尋！そこから逃げて！！？」

簪の声が、アリーナに木霊する。

同時に、千尋は頭上から空気密度の変化を知覚する。

「ッ——！！？」

振り返って見るまでもない。

——何がやってきたのかもよく分かる。

——それは、目にしてみれば容易いもの。

全長は50メートルを上回り90メートル。

蛇のように多数の関節を持ちしなる物体。

…黒き荒神^{ゴジラ}の尾であった。

だからまずは箒の胸ぐらを掴んで、打鉄甲一型のロケットモーターを点火。

——100メートルを2秒で駆け抜ける…！！？」

…だが、機体は思うように動いてくれない。

先程の熱線で装甲が融解したのか？

それともオルガ戦で蓄積されたダメージが機体にガタを齎したのか？

あるいはその両方か。

「ああ、クソが！！？」

——考えても仕方ない。死にたくなきやさつさと動け!!
?

自身に叫びながら、機体を引きずるように、機体よりも先に身体を動かしながら—— 駆け抜ける。

直後、全長90メートルを超える黒い物体が地を叩き割るように——

—— 否。文字通り、地を叩き割る…!!?

—— 捲き上げる土塊。

—— 地を震わせる振動。

—— 大気を揺るがす衝撃波。

それらの要因が、地を駆けていた千尋の脚をぐらつかせる。

そして、それを逃さないとばかりに、再び尾が千尋目掛けて振るわれる。

…このまま尾の射程外に逃げるか?

無理だ。追い付かれる。

…じゃあ砲撃して軌道を逸らすか?

無理だ。質量が桁外れだ。

…箒を見捨てる?

ふざけんな、そんなの論外だ。

…じゃあ箒を逃がすか?

それしか—— ない。少なくとも自分は逃げられない。

だからせめて。

—— 暴風を纏いながら迫り来る死の嵐舞。

生者の首を刈り取る死神の鎌の如く迫り来る絶対的な破壊。

その、ほんの数メートルまで迫って時。

—— 千尋は反射的に箒を簪目掛けて投擲した。

「なっ×千ひ…」

箒が言い終わるより早く、千尋は時速380kmの速さで投げ出した。
た。

それは如何なる道理や思考などよりも、本能が優先された結果で——

——直後、終わりの一撃が自分を粉碎した。

衝撃が走る。

鮮血が走る。

骨が粉碎される。

内臓が破裂する。

視界が塗り潰される。

口から赤い塊を噴き出す。

——千尋はアリーナの壁に叩きつけられ、地に倒れ伏す。

…けれども意識はある。

だからこのまま起き上がって、箒と合流を、

「……っ、えっ。」

…あれ？

起き上がれない。

なんで…？

俺はあの尻尾に潰されても構わないから、箒だけでも逃がそうと投げ飛ばして、その後はその後で何か考えようって思ってたのに、なんで。

「が——は」

なんで、こんな。

仰向けに地面に倒れて。息が、出来なくなってるのか。

「☒」

……驚く声が聞こえた。

箒を受け止めた簪。

ついでに遠くで脚が千切れた教員を地上地下間搬出搬入リフトに運び終えたセシリアが愕然としていて。

そして最後に、自分が投げ飛ばした箒から。

「…あ、れ？」

腹がない。

地面に倒れている。

脚の感覚もない。

視界も半分ない。

地面には傷の割には少ない血液。

ゼリービーンズのような赤い肉片。

赤い蛇みたいに転がる大腸と小腸。

焼き木のように折れた無数の骨。

少し離れたところには、何かの残骸が転がっている。

よく見ると、それは自分のISスーツの布切れを履いた脚が2本くっ付いた肉塊で――。

そしてその少し手前、血溜まりの中に白い球体と白くて固そうなモノが転がっている。

――よく見るとそれは、眼球であった。

…その周りに散乱しているモノは、恐らく頭蓋骨の一部で――

――そこで初めて、千尋は自分の残骸を見ているということに気付いた。

「…ああ、なんて、バカ…」

箒だけでも助けたいと思って、だから放り投げて――自分
は尻尾に潰されちゃったのか。

…そんでもって、全身に波及した衝撃の所為で上半身と下半身が千切れて、内臓をぶちまけたただけでなく、ついでに頭が半分砕けてしまった。

「――こぶッ」

ああ、なんでこんな分かりきってた結末を、よりによって肝心なところで予測出来なかったんだ。

――なんて、マヌケ。

「――ちひ、ろ？」

ぼんやりと、目を見開いたままの箒が口を開く。

その瞳は眼前の事実を拒絶していた。

「…嘘」

小さく、けれども錯乱した声音を箒は放つ。

「…なんで？私、私なんかをなんで…どうして☒」

——狂いそうな彼女を前にして、千尋…だった残骸は初めて罪悪感を抱く。

…箒と一緒にいてやるという、交わした約束を反故にってしまった
からだ。

「?!?!?!?!?!」
——
「!!!」

異^カ荒^ラ神^シが吠える。

それで正気を取り戻した簀が箒の手を掴む。

「箒!!?早く!!?」

「千尋…!千尋!どうして、なんでツ!!」

——発狂しながらリフトに押し込められる彼女は、泣いていた。

—————

——それが、ついさっきまでであった事。

ぼんやりと、血が混じったのか赤く染まった視^せ界^{かい}を見ながら、迫り来る死に千尋は備える。

酷くアツサリしているけれど、これが死ぬ感覚なのだろうと受け入れながら。

——ああ、だけど。

——せめて、約束を破ってしまったこと、箒に謝りたい
なあ…。

——そう、内心呟いた時に。

——ピシリ、とガラスが割れるような音がシタ。

「あ、ぐ、あ——」

視界外から、未知の感覚が身体に入ッテ、くる。

——熱い。

融けた鉄を飲まされたような激痛が走る。
思わず首を傾ける。

…そこには、赤い紅い結晶を生やし、死体に群がる蟲の如く自分の
身体に這いずり迫って来る、眼球と下半身が。

——直後、眼球に生えた結晶が自分の頭部左を刺し貫く。

「が、あ——」

瞬間、目を潰される感覚が再接合された視神経を伝い、脳にフィードバックする。

否。視神経だけではない。

四散した脳の破片もまた結晶を生やし、頭蓋の穴を塞ぐように、異物として侵入して来る。

「う、——げ、あ」

体外からの異物
自分の脳に自分の脳を犯される。

——なんて、悪い冗談だろう。

頭の中でナニカが蠢く音と、脳が千切れ飛ぶ感覚がフィードバックする。

まるで頭の中を蟲に喰い荒らされているような——間違
いなく、発狂してしまいそうな感覚が全身を襲う。

いや——全身、ではない。

「は、あ——」

思わず首を上げる。

——そこには、上半身の切断面に再接合を試みる、結晶を生
やした下半身の残骸が。

…そして結晶が、肉に剣を突き立てるように——突き刺さ
る。

「ぎ、あああああああああああああああああああああああああ
あああああッ!!?」

——絶叫する。

——発叫する。

——叫喚する。

——狂乱する。

上半身と下半身の神経が強引に再接合され、ソレらがバラバラになる感覚が、全身にフィードバックする。

——熱い。

熱した石室に閉じ込められている。

全身から侵入してくる熱と感覚は極小の蟲のよう。

身体。あるいはバラバラになった肉、からだ際限の無い群れを成した野犬に生きたまま貪り喰われているよう。

——熱い。

身体の中から焼ける。で接合を開始した結晶達が爆ぜる。

熱した石室どころか鉄の箱の中だ。

じゅうじゅうと肉を焼かれて、気が付けば真つ黒焦げの炭になっている。

——熱い。

身体の中で爆ぜた結晶は融けたガラス片となり、心を焼き払う。

ジリジリとゴウゴウト。

細胞を焼却し、リセットゼロから書き直すリスタートするように、熱は強く重く全身を侵食する。

——熱い。

——痛い。

古いモノを切り棄てるように、ナニカが壊れて穴が開く。

その穴を埋めるように、ねっ蟲と野犬いたみが殺到する。

——熱い。

——痛い。

——熱い。

——痛い。

——熱い痛い熱い痛い熱い痛い熱い痛い熱い痛い熱い痛い
……!!

例えるなら、そう——、

——全身の骨を金属バットで満遍なく粉碎され。

——その上全身の皮を刃物で削ぎ落とされ刺身にされ。

—— 終いには全身の肉に融けた鉄を流し込まれるような。
—— そんな、壊れたり死んだ方が遥かに幸福なくらいの痛み。

それは、激痛なんて生易しい言葉では収まらない。

これは、言葉にするなら—— 獄痛だ。

戦場で負う致命傷などが可愛く感じる痛み。

地獄に叩き落とされても経験しないであろう痛み。

きつと地球上全ての生命体が経験することなど無いであろう痛み。

—— 熱い…!!

—— 痛い…!!

変わっていく。

全身が得体の知れないモノに変質し始める。

入ってくる。

精神は知っていて肉体は知らない知識と記憶が流入する。

それはかつての自分の戦闘経験であり、自分がかつての自分から千

切れるまでの記憶。

「は—— あ、が、あ—— ↓——」

父親。

キノコ雲。

怪物。

瀕死の己。

強制的再生。

憎悪滾る自身。

虚無感と破壊衝動。

怪物になりし自分。

殺戮の道を歩む脚。

自らの死を乞い願う心。

強制的に蘇生させる身体。

死を。

殺す。

死を。

殺す。
死を。
殺す。
誰か。
死を。
誰か。
死ヲ。
クレ。

——意識を埋め尽くす記憶の群れか、脳を焼く。

やめる無理だそんなもの入り切らないし要らないそんなの思い出したく無い知りたく無いやめろ出て行けこの身体はお前のモノじゃない!!？

——それは、自分が今日まで人間のフリに使ってきた身体の由来の持ち主たる人間の、最後の悲鳴だったのだろうか。

痛みと熱が冷めた身体をゆっくりと起こす。

——断裂した傷口は完全に塞がっている。

——断線した神経も血管も接合され正常に機能している。

——粉碎した骨も粉碎前の状態に至るまで完全に再生している。

——グチャグチャに四散した脳の肉片も全て定着し、正常に稼働を開始している。

喪われた肉体の全てを、細胞が無理矢理再生してみせた。

それは自分の意思など介入しない強制的なモノ。

もうここまで来ると人間どころか生物じゃない。完全に人外や化け物の次元だ。

…もう、人間の範疇に居られない。

…もう、バケモノに両足をつっ込んでいる。

…もう、長く筭とは居られない。

…いつか、箒や光たちの敵になるかも知れない。
…そして、箒や光たちを殺すかも知れない。

…そんな事実は今更気付く。
…どうして気付かなかったのだろう。

——目を逸らして、幸福な時の中に浸って居たかったのだろうか？

——それともいつかこの手で箒を殺したいと考えていた？

——あるいは、本当に忘れていて、ただ『ゴジラの記憶を持つ人間』になり切ったつもりでいたのか。

——もしかして、それら全て？

…ああ、自分は既に壊れていたのか。

…いや違う。壊れていたのではない。

…人間の視点から見て壊れているのであって、バケモノの視点から見て正常なのだ。

…はは、そりやそうか。

だって、今の自分はしよせん：

——【オルガナイザ細胞1】なんだから。

…オカシイ話だ。

…ただの死体に乗っ取った細胞が、人間の真似をして、人間並みの幸福を求めて、しかもその細胞は先程のバケモノと同種のモノと来た。

…その事実から目を背けて、自分が如何にも人間の弟みたいに振舞って。

…いつか自分を呪った、憎悪する対象である、ニンゲンに。

…いつか自分に終止符たる死を齎こいねがったすことを冀こいねがったつた、ニンゲンに。

…そんなニンゲンを求めて。

…そんなニンゲンの為に生きて。

…そんなニンゲンを、剩こいねがったえ愛して。

——ああ、笑える。ケツサクだ。

…それで、先程自分が何故笑っていたのかに気がつく。

自分は、黒き荒神ゴジラの圧倒的な実力差に笑っているのでもなく。

自分は、黒き荒神かつての同胞との再会を喜んでいるのでもなく。

自分は、自分自身の歪さを今更になって思い出して嗤っているのだ。

あまりにおかしくて、歪んでいて、狂っていて、矛盾した自分自身に。

—— どうして、こんな事忘れてたのだろう。

—— どうして、こんな事から目を逸らしてたのだろう。

笑う。

嗤う。

微笑う。

破顔う。

わらう。

ワラウ。

—— オカシクテ、笑エル。

けれど心と乖離するように、千尋は身体を起こす。

体内に入りこんだガラス片が擦れるような激痛を全身に宿しながら、脚を前に出す。

「…箒と、合流しない、と……。」

チグハグな言葉を放つ。

…いや、言葉自体はチグハグでは無い。

ただ心に秘めている感情とは温度差も目的も行動も全て乖離があり過ぎるが故に、チグハグという言葉が相応しい。

死をあれだけ渴望しておいて、やっと死ぬるかも知れないのにどうして—— ああ五月蠅い。邪魔するな。

ふと、千尋は思考を振り払う。

そしてアリーナの地面に落としてしまった試製18式原子火焔砲と試製14式誘導熱展開式対獣射突槍サーバイルパンカーを拾い上げると、その痛む身体を引き摺りながら、地下を目指す。

箒達が向かったのは地下だ。

ゴジラはどこ行ったか分からないけれど、今はいない。

なら、まずは箒と合流しよう。

そうしなきゃ戦力再編もままならないし約束破ったのも謝れないし。

ああ、でも打鉄は壊れちゃったから今は生身だし……いや、やめよう。

——グチグチ考えたって仕方ない。

それに——どうして本質が侵食してもなお人間ゴツコに興じるのか、そんなのは思い出せば簡単な話なのだ。

——ただ単に救われたから。

本当に、ただそれだけ。

それだけで充分なのだ。

——だから、

「ああ、箒——おまえのために死生きてやるんでやる。」

——血混じりの声を吐きながら、純正化した怪物ゴジラは歩みを

進めた。

——ある時、怪物は少女に告白した。

自分は昔、たくさん人を殺したと。

自分は呪われた事への怒りでたくさん殺したと。

自分が生まれなきゃ、死ななくて済んだ人はいるのだろうか？

だとしたら自分は産まれた事が、生きてる事こそが罪なんじゃない

か?…こんな自分は、死ぬべきじゃないか?

——その言葉に少女は首を横に振る。

そんなことはない。

私はお前のような経験をした事はないから、なにも言えない。

…けれども、これだけは言える事がある。

——少女は一拍開けて、口を開く。

どんなに誰かを殺しても、どんなに誰かから怨まれても、生まれて来たことそのものに…罪はない。

だから…生きていてくれ。生きていれば…きつと、どこだつて天国に変わるから。

——ただ優しく、嫺やかな声音で少女は怪物に告げる。

——その言葉こそが怪物への救済であり、呪縛であった。

I????????????
IS学園中央区画

近未来的造形の校舎が林立する学園中央区画。

学生がIS関連の勉学に励み、学び舎に通うという当たり前の幸福を享受していた空間。

そこは見渡す限り、無人の建築物。

そこは見渡す限り、混乱する部隊。

そこは見渡す限り、立ちこめる煙。

耳を傾けてみれば、鳴り響く銃声。

耳を傾けてみれば、木霊する悲鳴。
耳を傾けてみれば、震わせる咆哮。

——そこは今、戦場と化していた。

「第2アリーナと通信途絶!!？」

——切迫した報告が教務課野戦指揮所テント内に響く。

そして間髪入れずに、

『こちら警備課

——教務課司令部、状況を共有されたし。繰

り返す、状況を報告されたし、オクレ——』

——応答を促す通信。

「警備課への報告は後回しよ！まずは…!!？」

——現場指揮官の怒鳴り声。

ソレら全ての音が入り混じり、さながら魔女の釜のような混沌に満ちた空間を形成していた。

…昨日まで女子生徒がここを闊歩し、地上の楽園を思わせるような絢爛豪華な学校であったと言われても、嘘のようにしか思えない。

——それほどにまで、状況は悪化していた。

まるで——廃墟と化した都市を、連想してしまえる程には。

…そして、

?????????!!

——全ての物を圧砕する咆哮。

——全ての者に宣告を下す音。

——全てのモノを圧倒する声。

死刑宣告を告げる事象が校舎前グラウンド外縁に顕現する。

動くだけで世界を破壊する、黒き荒神が歩みを進める。

乳白色の屍体を思わせる生気の無い眼球が、ギョロリと現場指揮官の女を睨み付ける。

——一瞬交錯する視線。

「ああ、くそ…、総員戦闘配置につけ!!？」

焦燥を滲ませながら、現場指揮官の女が吠える。

もはやここ、IS学園は死の都^{ネクロポリス}へと転がり落ちて行く。

それは変えられない。
その結末を変えられない。

だが、指を咥えてそれを待つ程、人間とは往生際が良く出来ていない。

「第1分隊は左側面下腹部、第2分隊は右側面上肩部から挟撃！まずはあのデカブツをグラウンドに誘導する！！？」

無線越しに現場指揮官が怒鳴る。

…作戦がないわけではない。

——まずは計6機のラファールリヴァイヴ I S による機動砲撃戦を展開しつつ巨大不明生物を校舎前グラウンド方面に誘導。

——グラウンドに到達した時点で地表たる人工基盤の支柱を爆砕、校舎前グラウンドそのものを落とし穴とする。

——そして落とし穴に落ちたところに、I S 全機による対戦車砲やミサイルポッドによる一斉射。

——総合火力は肉片も残さぬレベルには至らないが、通常の生物であれば過剰火力極まりないものである。

空を裂くように舞う、深緑の影。

火薬と共に砲弾を穿つ、6名の女。

『死ねえ——ッ！！？』

『私達の聖域から出て行けエ！！？』

6機のI Sが、ゴジラの外周を捕捉しきれないような高速で飛行しながら、50口径アサルトライフルを穿つ。

無線越しにI S操縦者の雄叫びと50口径アサルトライフルの銃声が響く。

勿論、I S部隊の部下のモノだ。

それを指揮官が戒める様子はない。

——誰も彼もが、本来の目的からズレたモノを守ろうと必死なのだ。

——現在I Sは腐っても最強の兵器であり、対人類戦であれば立場は他の兵器より優位に立っている。

しかし、先のラドンによるニューヨーク襲撃に始まり、ユーラシア大陸に於ける敗走の連続により、その優位はとうに揺らいでいる。もはや高性能ではあるが産廃——という認識が拡大し、近いうちに自らの権力や立場が形骸化する。

それを焦ったIS委員会の一部が彼女たちにIS学園……ひいてはIS部隊のみによる殲滅を行うことでISの立場を維持しようとする政治的意図を孕んだ命令を下したのだ。

——つまるところ、彼女らが守ろうとしているのは、

学園の生徒ではなく。

学園の来賓でもなく。

学園そのものでもなく。

剩れ日本の領土でもなく。

——ただ、ISと女性の地位だけ。

……ただ、それだけ。

聞けば呆れるだろう、何しろ、本当にどうでも良いモノの為に護るべき人命を見捨てる命令に従うのだという。

——もはや狂気の沙汰。

——もはや妄執の領域。

——もはや異常な情景。

↑「こちら警備課、悪いが生徒および来賓の避難支援に回る。オクレ——」

ふと、警備課が戦線から離脱することを知らせる無線。

だが、彼女らには聴こえていない。

必死過ぎて聴こえていない。

——なにしろ、

『……なぜ——なぜ、50口径で傷ひとつつかないの』

IS部隊の一人が放つヒステリックな悲鳴が言ったように、50口径の銃弾で傷ひとつつかないのだ。

50口径アサルトライフルに使用されている50口径の12.7mm NATO弾は10000〜13000フィートポンドに達する。

一方、生身で使用する突撃小銃で使用されている7.62mm A

TO弾では2000〜3000フィート・ポンド。すなわち12.7mmの50口径弾のエネルギーは端的に言って、小銃弾とは桁違いの威力を持っているのだ。

人体に近いと言われるバリステイクゼラチンに撃ち込んだ実験では、50口径で人体のどこかを撃たれたら負傷程度では済まないという結果が残された。50口径狙撃銃を実際に投入されたイラクでは長距離から狙撃後、敵の体が上下に引き千切られていたという記録やヘリコプターを撃墜した記録もある。

そも、50口径はその成り立ちが対空兵器であったため、2キロメートルという距離まで弾丸が落差も少なく威力を保ったまま飛翔する程の低伸性を持つ為、超長距離狙撃用のライフルにも使われる。

——特にIS用の50口径アサルトライフルは重機関銃と対物狙撃ライフルの要素を兼ね備えた武装であるが故に、貫通力も極めて高い兵器なのだ。

…だというのに、

『どおしてー！傷ひとつつかないのよ!!?』

それらが全く歯が立たない。

表層部を削ることさえ叶わない。

——そも、先に述べた50口径銃の威力は対人類戦に限った話。

人間の常識という概念が通用しない怪物相手に、通用する筈がない。

少し冷静に考えてみれば、それは素人であっても理解できる。

『落ち着きない!!?』

ふと、IS部隊指揮官の声が響く。

『私たちはISを使えるエリートよ！警備課の自衛隊共とは違って色々なことができる！だからあのデカブツを倒すわよ！さあ——』

鼓舞するように言いながら機動砲撃戦を展開し、そして——

——視界いっぱい、光を遮る黒い塊が写る。

『え——』

それが何であるか、IS部隊指揮官の女には最期まで理解出来る事は無かった。

直後——空に、鮮血の花火が開く。

『た、隊ちよ…いい、いやあああああつ!!?』

無線越しに響く、IS部隊の絶叫。

「…そんな…そんな…」

現場指揮官は眼前の現実を前に、虚ろな声を発することしか出来ない。

ゴジラは特別何かをしたわけではない。

——ただ、高速で動き回るISと同等の速度で動かした掌でIS指揮官機を握り潰したのだ。

その証拠に、右腕の閉じた握り拳の隙間からは——赤い液体と赤い物体が滴り落ちている。

ソレを見たIS部隊は錯乱し、ソレを見た野戦指揮所はただただ啞然とするしかない。

ISさえあれば怪獣は倒せるんじゃないのか？

全ては嘘だったのか？

絶対防御さえあれば助かる、それも全て嘘だったのか？

——ああ、嘘だ。嘘だこんな…!!?

彼女はこれを否定する。

——これは悪い夢ではないか？

『こ、こちら第3地下連絡通路！虫…！蟲が…!!?いや、来ないで——』

——げづツ』

——リアルタイムで絶命する声。

それが指揮所の女達を目の前の現実に取り戻す。

だが、その時には何もかもが手遅れで。

「あ——」

現実に取り戻り戻された瞬間、ゴジラが此方を睨みながら、背鰭を青白く発光させていて——瞬間、白熱光の閃光が全てを焼い

た…!!?

第2アリーナ直下第2シャフト最下層
同時刻

ゴミが散乱した床。
置き去られたであろう私物群。

もう動く事は無いであろう作業アーム群。
地上から伝わる振動に、埃が降り積もる。

既に人が退避した後の区画であるそこには、第2アリーナより退避してきた箒達がいた。

「…千尋…ごめんね…。」

箒は涙を流しながら虚ろにただ一人、口を開いている。

千尋があのように、肉と骨の塊——としか形容出来ない様相になって死んだのが余程精神的に応えたのか、箒は破綻寸前の精神で懺悔を続けていた。

「…篠ノ之さん、彼は…。」

セシリアは声をかけようとして、言い淀んでしまう。

——
今や箒は軽いPTSDだ。
心的外傷ストレス症候群

…以前、この手の人間には慰めの言葉よりも、自身の内にある負担を減らすべく、言葉を話させた方が良いという内容を本で読んだ事がある為に、セシリアはその選択をした。

「…私は…千尋が辛い目に遭って欲しく無かったから、あの子より前

に出てたのに、なんで…あの子が、先に…逝くんだ…。」

「…箒、後でいくらでも聴いてあげる。だからまずは、搬出入ターミナルに向かおう?」

「…そう、だな…うん…ごめん…。」

そう言うなり、箒も全員に続いて歩き出す。

だが、

「まあ、そうは問屋が許してくれないみたい…団体さんが来るわよ。」

ふと、イリスが話しかける。

だから箒は反射的に振り返り、何かを凝視する。

…視線の先には第2シャフトから南部区画に通ずる廊下への防火扉。

そこから本来あらざるべきものが迫る気配を、擦り減って衰弱した精神でありながらも本能が脳へ警鐘を鳴らす。

向こうから響く異音。

腐った卵のような臭い。

炭酸の様に泡立つ防火扉。

ナニカが酸で防火扉を溶かしている。

「篠ノ之さん?どうか——」

どうかしましたか?とセシリアが言おうとしたその声と、ソレが溶けて朽ちた防火扉を突き破ったのは同時であった。

「なっ——」

後方にいた山田先生が驚きの声を上げる。

唐突な出現に泡を食らったのか。

…全員が現れた「敵」を凝視する。

蜘蛛のような体躯。

平たい台形の甲軸。

口から溢れる水泡。

異様に小さな鋏脚。

異様に幅広い節足。

ザラザラした表面。

貝殻のような甲殻。

3 mはあろう巨軀。

…見間違うことは無い。

何しろ、見間違おうにも見間違うことが出来無い。

それは節足動物型巨大不明生物であった。

「え、な、何アレ…？カニ」

思わず、簀が奇妙なモノを見たような声を上げてしまう。

直後、その化け物が異様に小さな鋏脚———されど人間の首

を落とすには十分なサイズ———で襲い来る。

狙いは簀の首。

瞬間、簀が反射的に試製20式複合ライフル砲の1

2.7 mm重機関銃の引き金を引く。

50口径の銃弾は対象に向けて吸い込まれていき———甲

殻に弾かれる。

「☒…———ちッ」

50口径の銃弾を弾いたことに思わず簀は驚かされる。

そして鋏が飛んで来る。

回避は間に合わない。

鋏の先端が到達するまで1メートルもない。

故に、それを簀は試製12式改耐熱装甲刀で受け流

す。

———すかさずセシリアが09式120 mm滑腔砲を穿つ。

…もって、120 mm滑腔砲の爆裂と熱波と共に、対象は挽肉にな

る。

「———サメハダヘイケガニだな。北海道から台湾にかけて広

く分布してる。」

ふと、千冬が口を開く。

サメハダヘイケガニとは実在するカニであり、サイズは40 cm

80 cmだった。

…だが、これはどうか。

あまりに巨大過ぎる。

「アレも、先程のゴジラ絡みか？篠ノ之。」

「…詳しくは分かりませんが、恐らく。」

—— 擦り減った神経で、無理矢理平静を維持する。
だが、それも維持が難しくなる。

「ッ☒」

—— 先の防火扉のみならず

ダクト。

通気口。

さらには壁面。

それらが溶けていく。

直後—— 轟音を立てて無数の機材が地表に叩きつけられる。

—— 舞い上がる粉塵。

—— 反響する轟音達。

—— 更に落下する機材群。

—— その中から現れる無数の蟹。

—— あらゆる箇所より異形が顕現する。

……ざっと、100体近くはあるであろう異形の群れ。

「いっちら…どっからいっちら…!!？」

—— 思わず箒は絶句する。

—— 当然と言えば当然だろう。

—— つい30分前までこんな化け物はいなかった。

何しろ、先程の戦闘—— 対VTシステム戦のバックアップとして、補給物資をここから搬出していたのだ。

—— 化け物がいれば補給物資を搬出することすらままならない。

—— つまり、あの化け物達は、先の黒き荒神ゴジラが連れて来たという事になる。

「くそっ…!!？」

—— 思わず箒は唾棄したくなる感情に駆られる。

—— とにかくアレらが此方に攻撃を仕掛けて来た以上、間違いない人間を襲う。

となれば、退避する予定の物資搬出入ターミナルにも危険が迫る。

——理想的な判断としては、今ここで迎撃する。

だが全機平均で弾薬は2割未満、推進剤は3割程度。シールドエネルギーはどの機体も危険域に至るまで枯渇している。

ここで戦つても罠り殺される未来が見えている。

——それに、物資搬出入ターミナルには人員を載せるために弾薬が放棄されている可能性もある。

…なら——と、思考を遮るように化け物が迫る。

——すかさず、76ミリ機関砲の引き金を引く。

「織斑先生！このまま物資搬出入ターミナルに向かいますか！！？」後衛は私が務めます！！？」

意を決したような表情をして、箒は口を開く。

「——了解だ！！？」

織斑先生も箒が思考していたことと同じ内容を思考していたのか、即答し、部隊の先鋒をとる。

今、シールドエネルギーの残量が一番多いのは箒である。

ならば、少なくとも自分が殿を務めながら後退するべきだ。

心傷に浸つて泣き言を吐きたい気分は山々だが、今はそんなことしてられない。

だって、そんなことしたら、セシリアや簪、千冬さんに山田先生が

……

——そしてふと、そこに千尋が居ない事を再認識する。

「千尋……」

箒が口を開く。

「彼女らを逃したら……」

まるで懺悔するように、まるで願いを込めるように。

「……すぐ、そつちに逝くから——」。

——死を渴望する願いを口にしながら、箒は76ミリ機関砲を眼前にたむろする、無数の異形にむけて掃射した。

同時刻

S 学園第4シャフト

地下62階・東棟―西棟間空中連絡橋

「やつと会えたな？織斑一夏。」

中国共産党特別武装隊の周大尉が優越感たつぷりに口にする。

――だが額には珠のような汗が滲み出しており、焦燥に満

ちている事は明白だ。

右手には中国軍正式採用の半自動拳銃、92式手槍（9mmパラベラム弾採用型）が握られている。

そして――その銃口は、左手で腕を捻組むように拘束している：鈴に突き付けられていた。

「な――！..」

あまりの光景に絶句する。

――そして、その女の背後に95式突撃小銃を構える兵士が3、4人。

銃口の先には

織斑一夏
自分がいる。

――直後、脳裏に走る死の予感。

同時に、この空中連絡橋がまるで処刑台のようだ――とい
う錯覚を覚える。

「自分から探しに来てくれるとは有り難い：我々と共に来て貰おうか。もちろん白式も一緒に、だ。」

「――なんで、鈴を...？」

「：貴様は馬鹿か？貴様との交渉材料に決まっているだろう。」

昔から親しい関係であったと聞く。」

悪魔のように囁く声。

：彼奴らに付いて行けば、鈴は助かる。

——だが千冬姐の剣である雪片をどこの馬の骨とも分らない奴らに侵されて千冬姐の名誉を傷付けることになる。

…彼奴らに付いて行かなければ、雪片も千冬姐の名誉も守ることができる。

——だがその場合、鈴が死ぬ。

脳裏に浮かぶ選択肢と結果がもたらす光景。

それが、一夏から思考の余裕を奪って行く。

最愛の姉の名誉を取るか、幼馴染の命を取るか。

…分からない。

…分からない、分からない。

…分からない、分からない、分からない。

——俺は、どうしたら良いんだ。

「…一夏、逃げて…私の事はもういいから早く！」

「裏切り者が言葉を話すな!!?」

「——ッ!!」

弱々しく一夏に言葉を放った鈴の額を周は92式のグリップで殴り付け、黙らせる。

——皮膚が裂け、血が滴り落ちる。

——鈴の顔がさらに悲痛に染まる。

「や、やめてくれ!!?」

「貴様の話など聴いてはいない！時間が無いんだ、もろともバケモノに殺されたいか!!?」

——バケモノ、と言った。

つまりは、今IS学園には怪物が攻めて来ているというわけだ。

じゃあ、こんな事やってる場合じゃ——

「——まったく、この非常時で、あまつさえ切り捨てられたにも関わらずよく覚への忠誠心が揺るがないものだ。」

——ふと、一夏の思考と周の脅迫を遮るように、冷風のような声が走る。

それはカツカツと軍靴で連絡橋の床を踏みつけながら、一夏の背後より現れる。

そして溶け始めた雪のように人間らしい表情を浮かべて。

——孫華輦は口を開く。

「——関心するよ…なあ？周大尉。」

「——孫、大佐…！どうしてここに…!?？」

思わず顔が引き攣り、強張った声を周は放つ。

「どうして？…鈍いな同志。その娘を救出する為だが。」

にべもなく言い放つ。

それに対し、周は黙っているわけではない。

「ちっ——おい!!？」

周の声。

直後——彼女の背後より現れる完全武装の1個分隊…7

名の兵士。

手には03式自動歩槍^{アサルトライフル}。

そのドットサイトから発せられる赤色のレーザーポインターが孫の頭や心臓を照準に絞り出す。

——なれど、孫は覚めた表情。

『それがどうした』と言わんばかりの顔をして——霞んだ音と共に兵士の頭蓋が砕かれながら、鮮血の花を咲かせる。

「な——」

何だ、と言おうとして、それは遮られる。

兵士は絶句する。

周も絶句する。

——その男も頭蓋が砕かれたからだ。

「狙撃だ！全周警戒——」

だが、それも遮るように、頭蓋が砕かれる。

——数秒で、3人の兵士が倒される。

そこで残った4人は狙撃兵搜索ではなく、周を取り囲むように陣形を立て直す。

「…なるほど、それでは殺せないな。」

孫が冷めた声と共に『待て』のハンドシグナルを下す。

…つまり、今兵士を狙撃したのは孫の部下という事になる。

しかも射撃間隔からして——狙撃兵は2名。

銃声がしない事から消音器サプレッサーを取り付けているのも明白だ。

狙撃兵とは元より隠密性の高い兵士だ。サプレッサーを狙撃銃に取り付ければ、さらに隠密性は高まり、肉眼での発見は困難となる。

——つまりこの状況は、絶対的に周らが劣勢であった。

それでも狙撃しない理由——それは、鈴を拘束している周を取り囲むように陣形を立て直したということ。

———、
—、

「どうするっ…このまま、救出する筈の鳳ごと私達を殺しても良いんだぞ?。」

つまりはそういうことだ。

狙撃して一網打尽にすることは出来る。

だが、貫通力の高い狙撃銃では兵士のみならず鈴にも銃弾が当たる可能性がある。

だからこそ、孫の部隊は撃てない。

———ここに来て、優劣は反転した。

しかし視覚出来ない敵に対しての恐怖を拭えないのか、その笑顔を引きつっている。

…それもそうだ。

孫の部下とてバカではない。

狙撃に不向きなポジションであるならば、すぐさま移動を開始し、陣地転換を行う。

そして狙撃兵のセオリーは、静かに素早く、である。

ある狙撃兵は4キロもの重さの狙撃銃を隠しながら匍匐前進で数百メートルを1分と僅かで移動できるという。

誰もがそれと同じように出来るというわけではない。

だが———それに迫ることは、可能である。

故に周とその部下はソレに警戒する。

「なんで…。」

…そこに、今までの一連の事態に圧倒されていた一夏が口を開く。

「な、なんで…こんな事してるんだよ、アンタら…。」

「何度も言わせるな！これが今我々のすべき事だからだ！」

「それをおかしいとは思わないのか？このままじゃみんな殺されるかもしれないんだぞ！いくら俺の身柄が欲しいからって、こんな時にこんな真似を…アンタら、頭おかしいのかよ!？」

——それは、普通の感性の持ち主である誰もが思うコトである。

普通ならば、怪獣が攻めて来ている今ここで内ゲバをしたところで得はしない。

むしろ、命を落とす危険性が限りなく高い状況下で揉め合うなど、損でしかない。

…ならば、ここは武器を互いに下ろして協力するのが最適解である。

——普通の感性の持ち主であれば、その解答に到達する。

——普通の感性の持ち主であれば。

——一夏と同じ思考回路の持ち主ならば。相互理解を可能とする存在

「我々は祖国の守護者たる党に忠誠を誓った！それで充分だ!!」
「なっ…!」

——ここで、一夏と周の間に亀裂が生じる。

彼女と一夏は相互理解が出来ない。

…否。そもそも分かり合うという【結末】以前に話し合いという《過程・前提条件》自体が成立しない。

どれだけ現実を理解して理想的な結末を説いても、相手が現実を理解する、という前提条件が満たされていない。

説得や会話をしようにも、一夏と周とは思想信条や思考回路が根底から異なる。

——結末や過程以前に前提条件から破綻している。

例えるなら、【家を建てる】という結末を迎える為に《建てる》という過程に至ろうとするよりも前に《土地を確保する》という最低限の前提条件が満たせず、全てが成立しないようなモノ。

——つまり最初から全てが破綻しているのだ。

「私達や党がいなければ、人民は我先にと逃げ出しているはずだ！我

が祖国が未だに極東随一の大国であり、戦争にされされている今この瞬間でもその地位を揺るぎないモノとしているのは、我々が人民を統率し、国家の敵の存在を許さなかったおかげだ!!」

「何を…言ってるんだ…あんだ…。」

…こんなモノは、物言わぬ石に仏教やキリスト教の経典を説くのに等しい有様。

あまりにも理解不能な解答と唐突に展開された自画自賛に一夏は困惑する。

——【馬の耳に念仏】、とは上手く考えられた言葉だ。今の状況に遭う言葉は恐らくそれ以外存在しない。

——人類が地球規模での協力関係至れない原因はコレにある。

対話や議論をして、協力関係になれないワケがない。

過程次第では、理想的な結末にも至れる。

だが、今の周や一夏のように、対話という過程に至る前提条件が最初から破綻している人間が余りにも多過ぎる。

だからこそ、まずは互いに対話不可能な人間から排除しようと内ゲバになる。

そしてその隙を人類の事情など関係ない怪獣によって突かれて蹂躪される事を許す。

そしてその責任の擦り合いで再び内ゲバとなり、その隙を突かれて

——その繰り返し。

——現に今も——、

「——これで分かったらう？」

孫が実力行使による対話不可能な存在——周の排除を行おうとしている。

手には中国軍の17型拳銃^{モーゼル・ミリタリー}。

「彼女とは対話出来ないよ。…何しろ、思想教育で完全に人格を破壊されているんだ。壊れた花瓶に水を注いでもただ零れ落ちるのと同じように、心を壊された人間に何を説いても無駄だ。」

「…じ、じゃあ…どう、したら…?」

一夏の問いに醒めた声で、背中を向けたまま孫は一夏に声を放つ。

「殺切り棄ててしてしまう以外、道はあるまいよ。」

——その行為はある意味、選民思想である。

互いに対話不可能な人間を殺切り棄ててしてしまえば、少なくとも互いに協力関係になれる人間だけを遺すことは出来る。

そうして相互協力を可能となる人間だけが生き残れば、人類は地球規模で協力も可能となり、延命を実現する事さえ夢物語ではないだろう。

…だが、それまでに何十億人を殺し、そうした結果、何億人が生き残れるのか。

そんな事をしてしまえば最終的に生き残れる人類の数など知れている。

だが——彼女、孫はそれを実際に実現しようとしている。

だから今彼女は、周に17型拳銃の銃口を向けていて——

「…残念だよ、大尉。君ら党がマトモなら、私達が同士討ちをする事も、大陸で今日までに8億人もの同胞が死ぬ事も無かつたらうに。」

ふと孫が言い放った言葉に一夏は驚愕する。

…中国に怪獣が侵攻したのは1ヶ月程前。

…だと、言うのに。

——1ヶ月で8億人も死んでいる。

その現実を叩きつけられる。

——8億人。

——8億人の死者。

あまりのスケールの違いに思考が追いつかない。

「…はッ…敗北主義者が、何を言うー…どの道我々に大陸以外の逃げ場など無い!!?それは分り切っているだろう☒」

周が怒鳴り返す。

彼女の言う通り、中国に逃げ場はないのだろう。

——東南アジア諸国は南沙諸島問題からチャイナ・ブロッツク政策に走っている。

台湾は中国の戦力拡大を警戒して日本と関係を強めている。

日本はメディアに中核派が浸透しているから世論操作は叶うが、尖閣問題での関係悪化から永住は見込めない。

豪州諸国や北米、欧州も対中戦略に全力を注いでいたことから救いは有り得ない。

中南米も陰の主人あるアメリカが居住を許さない。

資源採掘権を得たアフリカはあまりに遠く、懐柔したフィジーはあまりに狭過ぎる。

南極などはもはや論外。

確かに彼女の言う通り、逃げ場はない。

だからこそ、国民を住む場所を守る為に大陸の死守に努めている。それも理解できる。

だが――

「…逃げ場が無いも何も、逃げ場になり得たであろう先との関係自分から潰したのは、他でもない私達だろう。」

「…おまけに江戸時代の日本よろしく鎖国体制に近い状況を開いて国民を逃がさないようにしている上に在日同胞を拉致して大陸に送って…そこまで大陸が惜しいか？」

さらなる衝撃が一夏を襲う。

「…8億人もの犠牲を出してもなお、大陸の死守に努めるのも分かる。」

「…逃げ場が無いから大陸を維持しようとする寸法も分かる。」

「…だが、これはどうだ。」

大陸を死守する人材流出を避けるために国境を封鎖し、さらには海外の在外国中国人を拉致して回っている。

「…こんなバカな事があるか。」

「…これが事実なら、もう、めちやくちやだ。」

「…何もかも、めちやくちやだ。」

「大陸以外に逃げ場はない以上、確実に住む事が叶う土地を守る為に人民が戦うのは当然だろう？何のために徴兵制を敷いていると思っ

ている!!?それは人民の住める土地を守る為だ!!?

：だと言うのに、貴様は党と人民の意志を捻じ曲げるか☒」

「——人民の意志、ではなく党の意志だろう?…ま、強ち間違
いではないだろう。」

利己主義に凝り固まった我が民族が、党への忠誠心だけで動く筈が
無い。住める場所と喰えるモノを与えればすぐ掌を返す。

そういう単純で制御し易いから、君らは彼らを使ってるんだろう
?」

「——だ、黙れ!貴様、我が党と民族の聖戦を侮辱するか☒」

「——大尉、これは聖戦なんかじゃない。これはね…君ら党
が、政治的正しさとプライド大事にやってる、14億人もの国民を巻
き込んでの壮大な無理心中だよ。」

「ツ——、貴様ア!!?」

周が銃を孫に向ける。

孫は不動のまま。

——その景色を一夏は俯瞰している。

——あまりに次元が違い過ぎる世界に思考が追いつかな
い。

——あまりに自分が今いる世界と違い過ぎる人間達に頭
が追いつかない。

——こんな、こんな…みんな、狂ってるじゃ、ないか…:

!!

一夏は絶句する。

もはやここには狂気に満ちた人間しかいない。

もはやここには自分が知るマトモな人間はいない。

もはや誰も彼もが狂い果てている。

一夏はこの、受け入れ難い現実を前にただ啞然として——
直後、区画を揺らす衝撃が襲った…!!?

??????????????

午前11時31分

千葉県館山市平砂浦海岸

——黒煙巻き上がるIS学園の対岸。

普段は長閑な海岸線沿いに、欧州連合極東派遣軍ポーランド陸軍第2機械化軍団第8装甲騎兵師団第3戦車中隊所属のT-72M1モデルナ戦車18両が布陣していた。

スロバキアのZTSテース・マルチン社による近代化改修型である本車は車体前部と砲塔に爆発反応装甲を装着し、射撃管制装置を電子化。さらに射撃サイトを換装した上にエリコン・コントラバス製KAA-001 20mm機関砲を砲塔左右に1丁ずつ装備している、旧東側の傑作にして西側からも評価の高い、584輜というポーランド最多の保有数を誇る戦車であった。

——その戦車中隊を束ねる本部管理小隊では、情報が錯綜していた。

「——だから何度も聴いている！そちらの情報を知らせよ！こちらも対応をしかねる!!？」

若い女性指揮官——ナタリア・コヴァルスキ少佐が無線機相手に怒鳴る。

相手は勿論 I S 学園教務課。

そして I S 委員会子飼いの治安部隊である。

現在彼女らは I S 学園を陸上から警備する役割と館山市の I S 関連企業に携わる邦人保護を名目に平砂浦海岸に布陣していた。

だが、I S 学園があろうことか内側から襲撃を受け、さらには巨大不明生物が上陸したという未確認情報が流れて来た為に、現在配置を変えるべきか司令部に指示を仰ぎつつ、情報を得ようと学園に無線で呼びかけていたところだ。

：しかし学園側は「問題ではない」の一点張りで、情報の共有を拒んでるのが現状であった。

「ああくそー話にならない!!」

思わず苛立ちから、コルヴアスキ少佐は無線機を握ったままの拳で戦車の装甲を殴り付ける。

「イライラするな少佐。身体に毒だぞ。」

——ふと、低い声が響く。

操縦担当のヤロスワフ・ヴィシニエフスカ軍曹の声だった。

コヴァルスキ少佐より20も歳上である彼は、前世紀からT-72に乗り続けていた、まごう事なきベテランである。

彼自身を尊敬しているのか、コヴァルスキ少佐は彼の言う事に対して飼い主に躡られた仔犬のように言う事を聞く。

「——分かっていきます。ですが話になりません。：連中理解してないんですよ、今どういう状況に置かれてるか……。」

思わず、うんざりしたような声音で愚痴をこぼす。

「向こうはなんと?」

「——『問題ではない』の一点張りです。素人目に見てもあんなんで対抗出来ないって分かるのに……。」

「：奴さんが守りたいのは、人命や学園ではなく、権力や地位だろうさ。I Sで権力や地位を得た人間は決して少なくはない。んで、そういうのを喪うキツカケになりかねないが故にI Sの価値とそれに伴う自分達の権力と地位を死守しようて腹積もりだろうさ。」

ヴィシニエフスカ軍曹が、醒めた声で口にする。

「——流石、ウクライナでISがボコボコにされた途端アラスカ条約を理由に真つ先に逃げ帰って、私らに全部擦りつけて行っただけの事はありますね。」

皮肉と怨嗟の入り混じった声を吐く。

「なんで彼奴らの代わりに私らがウクライナで命を擦り減らさなきゃならなかったんだか…。」

——言うまでもなく、コヴァルスキ少佐もヴィシニエフスカ軍曹もウクライナ戦線に派遣されていた過去がある。

そこでコヴァルスキ少佐——当時二等兵だった彼女は、運だけは良かったらしく、周りが戦死していく中でただ一人生き残り、指揮官不在の中、無理な戦時昇格（少尉）をさせられ、部隊を率いていた。

ISが撤退しなければ、十二分に教育を受けられる時間があつたらう。

だが——ISの早期撤退という結末により、未熟なまま戦場に、しかも指揮官として放り出されてしまった。

その結果は、語るまでもなくほぼ全滅。

ヴィシニエフスカ軍曹の属していた戦車中隊——こちらにも指揮官たる車長が戦死し、指揮官不在——に拾われなければ、今頃彼女はギャオスの腹の中で消化され、白い無機質な糞の中だつたらう。

…これが5年前の話。

今はそれなりに優秀な指揮官には成長し、少佐の位に着いてはいるが、やはり未だ粗があり、ヴィシニエフスカ軍曹に支えてもらっている身だ。

彼に対して常に敬語なのもそれが理由だ。

「とにかく、司令部からの指示を待とう。それまでは——」

——直後、空に閃光が走る。

一瞬で本能的な危機を感じとったコヴァルスキ少佐は戦車の車内に飛び込む体制となり、ヴィシニエフスカ軍曹はコヴァルスキ少佐を車内に引き摺り込んだ。

—— 2秒後、T-72の車体を揺るがす爆風が襲い掛かった……!!?

第1号巨大不明生物 ” ゴジラ ” 迎撃戦・戦況図

時刻

千葉県館山市房総フラワーライン

館山市都心部とは打って変わり、過疎地域と化している地域。

そこを1台のセダンが駆けていた。

「……めんなさい。デユノアさん、大丈夫だった？」

運転席にてハンドルを握る楯無が申し訳なきと心配気な声が混じった声で問う。

「……え？え、ええ。まあ……。」

それにシャルは浮かない声で応じる。

—— シャルはロシア系の集団に攫われ、拉致寸前のところを助けられたのだという。

： 『だという』、というのは助けたのが楯無ではないからだ。

彼女が着いた頃には既に全てが終わった後で、シャルは【朝倉美都】という女性に助けられたのだという。

—— 直後、学園から掛かった緊急の招集。

生徒会長である以上、反故には出来ない。

だがシャルを一人にするわけにもいかない。

だから今、こうして同行して貰っているわけだが——。

（朝倉美都……って、片桐1佐の友人……だった人よね……？どうしてまた……。）

思わず、ハンドルを握りながら思考してしまう。

——直後。

「きゃあつ——!!？」

閃光と共に、セダンを揺るがす衝撃波が疾る。

反射的に楯無はブレーキを踏み、シャルの頭を抑えながらダツシユボードの下に伏せさせる。

——衝撃が止み、安全確認に顔を覗かせた楯無が目にしたのは。

「——原爆……？」

——IS学園の方角から伸びる、キノコ雲であった。

????????????????????
同時刻

IS学園・第4シャフト

地下62階・東棟—西棟間空中連絡橋

——衝撃が走る。

まるでバットで頭を殴られたと錯覚してしまうほどに、視界を揺さぶる振動が区画そのものを震わせる。

「なっ、うわっ！」

思わず、誰も彼もが足元をふらつかせてしまう。

「——伏せろ、凰少尉。」

その瞬間を待っていたと言わんばかりに、体勢をいち早く立て直した孫が——
モーゼルミリタリー17型拳銃を構える。

直後、鈴は拘束されているながらも、できる限界まで反射的に頭を下げる。

その眼前で孫は銃を構えている。

——構えは横撃ち。

——狙いは周の周辺に展開し、未だ足元がふらついている兵士。

ソレを目掛けて、引き金を——引く。

——銃弾の火薬が爆裂する。

——7. 62ミリ弾が撃ち出される。

——硝煙を散らして銃口が跳ね上がる。

——銃弾は兵士の頸部に命中し、絶命する。

：一般的に銃口の跳ね上がりは銃の構造上、反動で上に向けて跳ね上がる。

それはいかに鍛えた軍人であろうと封殺することは叶わない存在である。

これがある以上、射撃から狙いの定めまで時間を要してしまう。大口径拳銃ならば尚のこと。

多対一の状況下で、拳銃で完全武装の集団に挑むのは自殺行為だ。

だが——ほんの少し工夫すれば、その特性さえ逆手に取ることができる。

そう、例えば——今のように、マズルジャンプを利用して、薙ぎ払うように銃撃する、など。

——横撃ちに構えた孫の17型拳銃モーゼルミリタリーが銃の上面方向へマズルジャンプする。

——銃口は、左へ跳ね上がる。

——照準は、その隣の兵士。

——撃つ。

——銃弾が兵士の喉を喰い破る。

——銃口は、左へ跳ね上がる。

——照準は、その隣の兵士：即ち周。

——撃つ。

——銃弾が周の左二の腕を喰い破る。

「がっ、あぁッ」

——周の絶叫と、反射的に拳銃の引き金を引こうとする指が映る。

だがそれより早く。

銃口は、左へ跳ね上がる。

照準は、周のまま。

撃つ。

銃弾が周の右腕人差し指を根元から、中指を第2関節から、薬指を第1関節から吹き飛ばす。

「あ、あああああああッ!!?」

再度上がる悲鳴。

だがそれを無視する。

銃口は、左へ跳ね上がる。

照準は、その隣の兵士。

撃つ。

頭蓋が砕け散る。

最後の兵士がふらつきから回復し、小銃を孫に向ける。

直後——霞んだ音と共に兵士の頭蓋骨が弾けた。

狙撃だ。

孫が一人で銃撃を始め、敵が隙を見せた瞬間を狙い、孫が取り零した敵を仕留めてみせたのだ。

それで、鈴を巡る攻防は呆気なく終結した。

「立てるか? 凰少尉。」

周の拘束から解き放たれた鈴を起こしながら、孫は問いかける。

「は、はい…。」

「り、鈴!!?」

そして、ようやく現状に追いついたのか、一夏が鈴に駆け寄る。それを背景に、憎々しい声で周が荒んだ声を放つ。

「孫大佐…きさま…きさま、よくも——!!?」

だが、それに孫は冷たく覚めた瞳を向けるだけ。

「…ツクつ、殺せーどうせ私はもう終わりだ!!?」

全てを投げ捨てるように叫ぶ。

「断る。怪獣に争うための貴重な物資が勿体無い。」

ただそれを、孫は無情に切り棄てる。

それに半ば失望の顔を浮かべながら、周は口を開く。

「……きさまは、間違えている……！人民を逃すなど……余計な混乱を招き、より多くの死者を齎すだけだ……！！」

——たしかに、周の言うことには一理ある。

……まず、中国国民を逃す為にはその檻たる、中国共産党政府を打破する革命を起こさなくてはならない。

それで、確かに中国国民は逃げる機会を得られる。

——だが、指揮系統の混乱による戦線崩壊は確実となる。

「だからこそ、人民の犠牲を減らす為にも、党が統制し、人民と国土を守っているのだ！——にも関わらず——！！」

「——冷静に考えてみる。 北京政府と軍閥および地方政府 大きく5つの勢力に分かれて勢力

争いが常に発生……しかも、今この瞬間にも現在進行形で続いていて、私達以外にも内ゲバが頻発しているような有り様の大陸に籠っている、どのみち全滅する。」

「だッ、黙れッ！軍閥ではない！戦略区だ！それに戦略区を党は完全に制御出来ているッ！！？」

「……では何故、北京政府陥落後も戦線は後退を続けているにも関わらず、広州や福州と言った後方地域で戦闘が起きている？内容は対人類戦。しかもつい先日だ。」

「……そ、それは……」

「……ついでに聞くが、なぜ社会主義国として軍閥というあるまじき存在を中国発足当時から放置しているのだ？」

「……」

「——答えは単純だ。貴様が絶対の忠誠を誓う党には、自らの私兵である軍部を制御し切れるだけの力を持っておらず、人民解放軍内部でクーデター……いや、美辞麗句を取れば内戦が多発しているというわけだ。前線が常にギリギリだと言うのに。」

……そして、党にはこの末期的状況を打開する能力も権力も残されてはいないと……そういうことだ。」

「……ッ、ちが……う……党は……党は……」

震える声音で、癩癩を起こした子供のような声音で、必死に反論の言葉を探す周に憐れみの視線を向けながら、孫は背を向ける。

左腕の二の腕の筋肉は破壊した。

右腕の指も吹き飛ばした。

：彼女はもう、銃を撃てない。

——もう相手をする必要もない。

だから孫は立ち去るのだ。

「ッ、まっ、待て！」

——泣き喊るような顔を浮かべながら周が立ち上がる。

それにただ孫は冷たく、

「…殺す気はない。後は大陸に帰るなり海外に逃げるなりあの世へ逝

くなり…好きにしろ。」

——そう言い放つと、僅かに衰弱した鈴と未だ現実を完全

には飲み込めていない織斑を連れて第4シャフトを後にした。

????????????????????
S学園北部区画

第1シャフト方面第3地下連絡通路

——現在、そこには教員4名と3年生80名から成る、上

級生選抜防衛班が展開していた。

：だが、ISを身に纏っているのは20名程度であり、その他の生

徒はISの下位互換である強化装甲殻を身に纏っているというのが

現状であった。

：もちろん、如何に腕に自信がある上級生とはいえ自ら進んで戦場

に赴くなんて勇敢無謀な事をするのではない。

つまるところ——事実上の学徒動員。

「…やだ……」

ふと、強化装甲殻を纏った女子が眩く。

その声音は恐怖に震えている。

「…まだ、死にたくない……。」

——先程凄まじい衝撃が走ったが、考えている余裕もない。

すでに精神的な負荷はピークを迎えていた。

——同時に、自分達が今まで男相手に息巻いていられたのは、絶対防御があるISを纏っていたからだと理解する。

…ふと、以前、織斑一夏の墜落事故に巻き込まれ、負傷した強化装甲殻の訓練班の姿を思い出す。

死に至る致命傷こそ出さなかったものの、重傷を負っていた。

…自分達には無縁だと、そう思っていたから気にしてなどいなかった——だが、それがどうだ。

今では自分がISが足りないからという理由で強化装甲殻を纏わされている。

絶対防御がない——それだけで、死への恐怖は極限に至った。

直後——

「来たわよー！みなさん構えて!!?。」

教員の声——生物の襲撃を告げる声。

ただ彼女達に出来たのは、アサルトライフルを構えるだけであつた。

——トンネルを駆けてきたのは異形の蟹であつた。

ただの蟹の群れ。

ただのヘイケガニ。

——身長が3メートルもあり。

——12.7ミリ弾を弾く程の甲殻を持ち。

——金属を腐食させる水泡を吐く以外は。

「この化け物！でかい図体しているくせにちよこまかと避けやがって！」

「なんで、なんで当たってるのに死なないのよ!？」

ラファールリヴァイヴや強化装甲殻を纏った女たちは攻撃が節足を用いた複雑軌道の所為で当たらないことに苛立って次々と銃弾を放つ。

だが——当たれど、銃弾は弾かれてしまう。

反動制御やハイパーセンサーによる照準アシストはISが行ってくれるが、狙うのは搭乗者自身なので当たらないのは即ち搭乗者の実力が無い、あるいは低いということになる。

逆に当たれども弾かれてしまうのは武器の相性が悪いのか、当たりどころが悪いという事になる。

——そして、それらの現実を叩きつけられながらも状況の改善を図らない教員は無能ということになる。

そんなことは女たちはわかってはいないので、12.7ミリアサルトライフルで攻撃するが外れた、あるいは夾叉して銃弾が明後日の方向を撃ち抜いていく。

ふと——異音が頭上から鳴る。

「なん——」

口を開こうと、見上げた女の視界に映ったソレは、視線の先にある、ダクトの通気孔から降り落ちて来るソレは、

蟲。

蟲。

蟲。

蟲。

蟲。

蟲。

蟲。

無数の巨大シヨックフナムシキラスであった。

それらはまず、彼女の顔面に飛びかかり、醜悪な牙を彼女の眉間に突き刺した。

「あ、ぎあゝあゝあゝあゝあゝ——!!」

——悲鳴が上がる。

後衛の強化装甲部隊が混乱する。

——直後。

その瞬間を狙っていたのか、異形の蟹が一斉にIS部隊に襲いかかる。

「ひっ！ や、やめろ！ やめろおおおお！」

ISのエネルギーシールドによって異形の鋭利な爪は女を傷つけることはないが、女の視界の角に表示された数字『シールドエネルギー』が凄まじい速度で損耗していく。

打鉄の両肩の浮遊物理シールドはハンマー、あるいは槍のように叩き貫く節足に碎かれる、…あるいは溶解性の水泡によって腐食させられ、喪失。

装甲の無い部位を攻撃されISが搭乗者を守ろうと絶対防御を発動させる。

それによりシールドエネルギーが刻一刻と摩耗し、その光景——
——すなわち自らの余命を視認させられているようで女は悲痛な叫び声を上げる。

そして、数字が0になった瞬間——女を守るISは粒子へと変化し、消失する。

「やめ——」

絶対の盾を失い女は異形に制止の声をかける。

すると——異形はピタリ、と止まる。

「——は、っあ……」

助かった——と声を漏らそうとして。

異形の口から伸びた肉管が、頭蓋骨を貫いた。

「ひ、ぎ、ああああああ、あああああああッ!!」

——頭蓋骨を貫かれ、脳に肉管が触れた事を理解するなり、女は半狂乱になり叫ぶ。

だが、それは痛みを訴える叫びから、理解不能な叫びへ。

そして、理解不能な叫びから、恍惚とした呻き声に変質する。

——脳を、溶解液で溶かしたのだ。

——その、溶けて液状化した脳にショッキラスが体液を啜ろ

うと集る。

それを見て他の女達は絶叫し——地獄の釜に放り投げられた。

????????????????????????????
S 学園第2シャフト中層階

凄まじい衝撃が走り、天井を構成していた機材が地表に向けて無数に落下する。

立罩める砂塵。

鳴り響き反響する轟音。

瓦礫に薙潰された空中連絡橋。

原型を留めぬほど押し潰されたブース群。

…ひどい有様だ。

神経回路と筋繊維の再接合が完全に終わっていない身体を引き摺りながら、俺は思う。

グチャグチャにされた廊下や第2シャフトを見て思ったのかもしれない。

けれど、多分自分の身体を見て思ったんだろう。

だって、全身がツギハギだ。

手も足も、内臓や骨肉、脊髄や脳に至るまで全て木っ端微塵に砕け散ったのだ。

自分の身体でありながら、異物と繋がっているよう感覚が拭えな

い。

例えるなら、そう——病院の点滴が全身に刺されているような感じだ。

時間をかければ慣れるのだろうか、強制的に再生させられてからまだ5分も経っていないし、皮膚に刺すだけの点滴と違って筋肉や骨に至る領域から異物が身体に入り込んで来るのだ。

…ヒトは義手や義足に慣れるのにひと月はかかるらしい。

自分の場合は分からないけれど、結局それくらいかかるのだろうか。

…なんて自問自答するけれど、誰も反応しない。

——そりゃそうだ。だって自分以外に誰もいないんだから。

「——箒…無事、だよな…？」

思わず口にする。

そして、ごぼり、と血の塊が口から吐き出される。

——身体は繋がったけど、繋がったのは外見だけ。内面：特に神経や内臓は構造が複雑な所為か、再生に時間がかかっている。

…いや違うか。

既存の細胞では、再生に耐えられなくて、あの後すぐに全部壊れてしまったんだ。

だから、再生直後は全部繋がっていた内側も、第2シャフトの上階層から中階層に至る中間辺りを降りていた時に全部ブツ切りになった。

そして全身で内出血や内臓破裂を引き起こして、文字通り、『血の詰まった肉袋』になってしまったという状態。

…恐らく、クモ膜下出血や脳内出血も引き起こしたのではないだろうか。

おかげで今も、神経回路と筋繊維はズタボロのまま。それを再生に耐えられるように…俺 オルガナイザーG1 自身が侵蝕して、自分をG細胞の塊に置換している。

——結局、人間の死体に乗っ取ったに過ぎない細胞が人間 自分

ゴツコに興じてるのは変わらないけれど。

…だけれども、

「箒…生きてるよな……。うん、彼奴強いし。……でも、俺のこと追って死に急いだりしそうだから、やっぱ、急ごう…。死なれたら、嫌だし…さ……。」

やっぱり、俺は自分の身体の有り様なんかより箒のことを気にかけている。

——その辺が、箒に似ていて。

——その辺が、壊れている所で。

だからかな——箒の為に死^{生きてやる}んでやると思えたのは。

…なんて、俺／千尋は思ってしまう。

千尋も箒も、つまるところ輪郭は似ているのだ。

輪郭が似ている、というのは肉体の形というわけではない。

あくまで精神的な話だ。

——箒は自分という存在を行使して他人を救いたい。そして何よりも千尋に傷ついて欲しくない。その為には自身の犠牲も厭わない。

——千尋は自分という物行使して他人…強いて言うならば、箒を支えていたい。そして箒を救えるなら自分の命など惜しくない。

両者は自分の命を投棄してまで守りたいものがある。

大体は、似た者同士と言える。

だが箒は????の????。

対して千尋は????の????。

視ているモノは大局と小局。

見ている先と見ている対象の違い。

しかしして歪な心。

ぎざぎざな形の心。

噛み合うのに噛み合わない心。

奇妙なままに似ているように見えて、細かく吟味すれば全く似ていない二人。

——ふと、視界にウィンドウが投影される。

大破した打鉄の機器の中で唯一無事だった網膜投影システムから投影されたものだ。

…内容は箒の機体IDの現在地を示すものだった。

現在箒は第2シャフト下層階から物資搬出入ターミナルに向かっている。

それに千尋はホツとする。

だが、それも一瞬で——箒を追尾する敵性生物と判別された存在の光点が無数に投影される。

「ッ!!?」

思わず千尋は焦燥を覚える。覚えずに居られるものか。

V Tシステムの時にあれだけ戦闘をして体力も機体の推進剤・弾薬も枯渇しつつあるのだ。

その状況下で追撃されている。

——下手をすれば、死んでしまう。

そんな思考が過ぎる。

「くそッ!!?」

——悪態をつきながら、千尋は次に取るべき行動について思考する。

…どうする?——当然箒に追いつく。

問題はどのようにして降りて行くか。

…スロープを降りて行く?

——そんな行儀よくやってる余裕なんかない、ていうか最下層には敵性生物と思しきカニの異形がいる。

…迂回する?

——ダメだ、そんな慎重にやってたら時間がかかりすぎるし箒が追いつかれるかも知れない。

…箒を見捨てる?

——クソ論外だド畜生。

「ああ、もう面倒くせエ!!」

叫ぶ——気がつけば、千尋は思考を投げ捨てて第2シャフ

ト中階層のスロープから飛んでいた。

否、『飛んでいた』というのは間違いで、現状は『落ちている』というのが正しい。

——高さ150メートルからの自由落下。

——まるで投身自殺でもするかのように、千尋は躊躇いなく飛び降りた。

当然ながら、千尋はどうこうすることもなく——脚から地表に叩き付けられた。

ばきやり、と音を立てて脚が破裂する。

ばきやり、と音を立てて骨が粉碎する。

ぐちやり、と音を立てて肉が切断する。

「——ッ!!??」

脳を引き裂かんばかりの痛覚が全身に走り、顔は苦悶に歪む。

——だが、すぐにそれも消える。

痛覚が消えたのかと錯覚するように、すぐに痛みが閉じていくからだ。

痛覚が機能している状態で痛みが閉じるということは、すなわち傷が閉じて行っている。

——言うまでもなく、篠ノ之千尋オルガナイザーG1自身が破裂した脚を復元

しているのだ。

ほんの——僅か5秒。

原型を留めないまでに壊れた脚が、完全に再生される。

「——なんだ、こんな…簡単な、こと……。」

思わず、薄く笑う。

どうしてこんなに容易いくらいの無茶苦茶な事をしないようになってたんだ——と。

——その眼前に、異形の群れが立ち塞がる。

それを睨みながら、千尋／俺は口を開く。

眼前には100近い数の「敵」。

どう足掻こうと、鬬り殺される未来しか存在しない。

「——邪魔、するな…!!」

——ああ、それがどうした。

数の差は覆らない。

そんな都合のいい話はない。

覆らない。

覆らない。

覆らない。

それは判りきった自明の理。

それでも、この体は動くんだから——！

こいつらをどうやり過ぐそうとか、どうやって箒に追いつこうとか、考えるのもいちいち面倒くさい。

——とりあえず、コイツらを全部ブツ飛ばす……！

——考えるよりも速く、俺／千尋の身体は動き出す。

千尋の疾走が始まった。

生身でありながらコンクリートの地表を踏み砕き、前方へ飛び上がる。

右腕には杭に蒼電を走らせる試製14式誘導熱展開式対獣射突槍^{メイサー・パイロバシカ}。

左腕には砲口に紅蓮を燈らせる試製18式原子火焰砲。

蒼電と紅蓮——双極する色彩を宿した武装を手に、千尋は

異形の群れに突貫する……！

『——！！』

——気味の悪く、甲高い音と共に反撃の鋏が放たれる。

小さく、しかし人間の首を刎ねる事は容易い大きさの鋏が迫る。

回避は間に合わない。

最初から躲す気もない。

箒に追いつくのに余計に時間を消耗することなど、してやるものか

と、千尋は内心叫ぶ。

……ではどうするのか。


答えは至極単純——^{穿ち墜とせば}迎撃すれば良い。

そう判断するなり——

『——はアッ!!』

——蒼電纏う、鋼鉄の杭を殴り射つ。

乾いた音と共に甲殻が砕ける。

「———!!?」

響く、耳障りな悲鳴。

…それを遮るように。

———鋼鉄より放出された蒼電メイサーが、異形を内側より焼き払う

…!!?」

異形は断末魔ひめいを上げる暇もなく、身体の内側から膨張し

———0.7秒後には破裂して、肉のオブジェが出来上がる。

「次———!!?」

振り返る。

———そこには、積み重なる、異形。

異形。

異形。

異形。

異形。

20体近くの異形たちが積み重なり、5メートルはあろう肉の高波
となつて、襲い来る———!

———それを、

「———上等。」

掲げた左腕が握る、試製18式原子火焰砲。

それをもって、千尋は引き金を引く。

———瞬間砲口より疾る、大気を焼き払う熱線。

人間の常識という概念が通用する、有象無象を焼き潰すその爆炎は
砲身から放たれ膨大な熱量をもって地面を溶かし、蒸発
させながら大地を焦がし、上昇気流によつて土塊を巻き上げ———

———それ諸共異形を粉碎する。

「つ———!!」

だが、それほどのモノを生身で扱つて無事なハズが無い。

千尋の顔が苦悶に歪む。

———左腕は燃え上がる。

———爪は焼けて砕け散る。

皮膚は焦げ落ちていく。

血液が過剰熱で沸騰する。

爆風が全身を鋭く切り刻む。

…すぐに左腕は使い物にならない骨付きの肉塊へと成り下がる。

その隙を見計らい、

「……ッ!!？」

左側面から飛びかかる、異形の脚鋏。

狙いは首。

そこさえ断てば、生命活動を停止すると異形も知った上での行動。

それを——千尋は使い物にならなくなった左腕で受け止める。

当然、それでも構わない——と異形は鋏に力を籠め、自らの側に引く。

ばつん、という鈍い音——瞬間、焼けた肉の匂いと大気に

舞い散る赤黒い血液。

左腕を切断されたのではない。

左腕を根元からもがれたのだ。

だが、千尋は気にしない。

異形に引き寄せられた移動エネルギーを利用し、そのまま——

右腕の試製14式誘導熱展開式対獣射突槍の杭で、甲殻を叩き割

る——!!？」

「……!!？」

やはり耳障りな、そして悲痛な声が響く。

だが、甲殻を叩き割った杭に疾る蒼電が異形の脳を焼き払った——

——!!？」

…もって、1分とかからずに30体近い異形の死骸が積み上がる。

もちろん、根元からもがれた左腕の傷も健在である。

絶え間なく溢れ落ちる血液は地面に鮮血の海を開いて行った。

全身から血が急速に失われた感覚。

だが、千尋はソレに目もくれない。

何故ならば、既にその断面は3秒とかからず肉塊で塞

がれてしまったからだ。

そしてその肉塊は、炭酸の泡のように膨張と破裂を繰り返し――

――新しい腕へと、変貌した。

「……、……」

――思わず、異形までもが絶句する。

彼らは元はと言えばカニ。

カニは切断した腕を生え変えさせることが出来るが故に、喪われた腕の再生などは珍しくもなんともない。

だが――コレはどうか。

――喪失から5秒とかわからずに完全再生：否、もはや復元というに相応しい現象を引き起こしてみせた。

いかに迅速な細胞分裂を行おうと、そんな速さは不可能だ。

故に異形達は千尋を睨み付け、人間どころか他の生物にすら理解出来ない、自分達だけの言葉でこう口にした。

”――バケモノ化け物め。”

……その声を耳にして、千尋は詳細は分からずとも意思は理解したのか。

「……悪いな。……こんなんじや、死なないし――死んでなんか、やらない。」

異形を睨み付け、千尋は口を開く。

「……絶対筈のツラ拝むまで、死んでなんかやらない。だから――」

――落とした火焰砲を拾う。

脚に力を籠める。

視界には、異形ではなくその先だけを睨み。

「……テメエ等そこを、どけえええ――ツツツツ
!!」

――ゴッラ千尋は、咆哮を上げた。

第1アリーナ直下第1シャフト
時刻

地下850メートルの地点に、ソレは降下していた。

全身ケロイドの様な荒々しい様相。

禍々しい体表と白骨化したような背鰭。

屍人を連想させる、乳白色の濁った目。

黒き荒神——ゴジラが。

先程学園の地下全体を震わせた正体は彼である。

2万5000トンもの質量が850メートルも自由落下する——

それだけで及ぼす質量エネルギーは絶大なものになる。

：眼前には放射性物質を意味するマークと、IS委員会のマーク。

周辺には、壁伝いに伸びる黒い絶縁体を纏った電力ケーブル。

すなわちそこは——以前、楯無が発見した原子力発電所。

——ゴジラの狙いはコレである。

放射性物質を捕食対象とする生命体であるゴジラにとって、原子力

機関はエサ同然。

つまるところ——IS学園固有の総戦力をほぼ全滅させ

たことも。

——特自の防衛班にも多少の被害を負わせたことも。

ただ、” 食事 ” の邪魔だったから、という理由。

だから今、” 食事 ” に有り付こうとして。

——先程殺した筈の、^{千尋}存在を認知した。

EP-37 混迷ト異形ナル甲殻（クラブロス）

IS学園北部区画

地下物資搬出入ターミナル・直通入口区画

南部・第2シャフト方面連絡通路前エントランスホール

かつては非常用に置かれただけの無用の長物と蔑まれ、静寂に取り残されていたターミナルは怒号と悲鳴の飛び交う混沌とした魔女の釜と化していた。

—— 金属を溶かす硫黄の匂い。

—— 耳障りな異形の声と。

—— 地を踏む殺戮を予感させる音と。

：来賓や生徒など非戦闘員が避難出来ずにまだ残されているそれも、既に戦場と化していた。

「各隊、撃ち方始めッ!!」

響く、裂帛の号令。

—— 直後、バリケード越しに展開していた部隊の89式小銃が火を吹く。

銃口より放たれるはNATO5.56mm弾。

それらは次々に異形の蟹クラブロスの甲殻と節足に命中する。

—— 当然、甲殻に命中した5.56mm弾は全て弾かれる。

ISの5012.7ミリ口径アサルトライフルをもってしてもなお、突破出来ないのだ。

生身の人間が扱う武装ではあまりに無理がある。

さらに言えば—— 威力よりも命中精度を重要視している

西側小銃であれば、なおの事甲殻を突破する事など不可能と言える。

—— 甲殻で、あれば。

「.....」

突如、節足への銃撃を受けた個体が支えを失い転倒する。

脚が乾いた音と共に、碎け散る。

—— 関節への集中銃撃を受けたのだ。

いかに強固な甲殻をもち、それをささえるだけの強靱な脚を持って
いようとも、ソレを柔軟に動かすだけの関節が必要になる。

…であれば、関節とは比較的脆弱な部位となる。

そして、ソレをその場の指揮官——片桐光一佐は見逃すは
ずもなく。

「前衛普通科中隊、目標の脚部に射撃を集中させろ!!」

——すぐさま号令を飛ばす。

直後——応答するように全ての兵士が銃撃をクラブロス
の脚部に集中させる。

——連鎖する148の集中砲火。クロスファイア

群れを成していたクラブロスの最前衛に位置していた10数体が
転倒し、後続の個体群が障害物となった前衛個体群に衝突し、殺人的
な密集状態に至る。

——そこを、

「——前衛機械化小隊、密集個体群にグスタフ斉射。」
落ち着きを払った声音で、光が命じる。

——直後、ターミナル施設上部に展開していた強化装甲殻
部隊による、84mカール無反動砲グスタフの一斉射。

30もの鋼鉄の矢が爆裂し、20体を超える個体群を焼き払う——

…爆煙と共に、異臭を放つ奇妙な肉のオブジェが姿を現わす。

そこに、生きている個体はいない。

…後方から、新手が迫る気配もない。

だが——念には念を。

「…総員、警戒体制を維持。後衛普通科中隊は警戒を行いつつ、民間人
の退避を優先せよ。…中衛各小隊は第1シャフト方面への警戒を優
先せよ、オクレ——」。

そういつて、光は通信を告げる。

…その顔は相変わらず申し訳なささと怒りに満ちている。

——当然といえば当然だろう。

——よりにもよって、民間人を戦闘に巻き込むハメになったのだ。

自分達が防衛陣地を展開している直通入口区画にこそ民間人はいない。

だが、そこから300メートルも行った物資保管区画には避難を待つ鮪詰め状態の民間人が取り残されている。

—— たった300メートル。

戦闘地帯キリングフィールドからそれだけしか離れていない。

相手に飛び道具こそ無いが、こちらの攻撃による破片の落下範囲内には確実に入っている。

つまりは直接的ではなくとも民間人を巻き込んでしまっているのだ。

……これらの経験が彼らの心に傷を刻むのだと思うと、それだけでも憂鬱だ。

だが—— 話はそれより深刻だ。

自衛隊は憲法の制約上、民間人を巻き込む事を原則的に禁止されている。

それは当然といえば当然だ。

だが、民間人が取り残されていた場合、自衛隊こちらは発砲すらままならないのだ。

つまり発砲すらままならず、意思疎通不可能な敵を前にすれば——

—— 無抵抗で殺されるということ。

—— それが齎す結末はどうか、至極単純。自衛官も民間人も関係なしに皆殺しにされる。

それは民間人からしても自衛官からしても最悪の結末である。

……専守防衛故に致し方ない、という意見もあるだろう。

だが専守防衛とは、聞こえは良いが—— 常に後手に回り、全てが手遅れになってから初めて戦えるようになると、そういうものだ。

……今は学園駐在武官という立場上、若干の制約は緩和されており、それ故に辛うじて武力行使可能な状況が構築されていた。

だが—— そもその問題は、民間人を巻き込むということ自体ではなく、民間人を避難させる手段が皆無に等しかった事。

そして民間人を避難させる時間があつたにも関わらず利権維持の為に人命を軽視し、避難をさせなかつた事。

…そちらの方が遥かに問題だ。

だが、今それよりも気がかりなのは――。

「…山本三尉、学園第4教導隊と上級生選抜防衛班との通信は？」

――通信および整備班の指揮を執っている山本三尉に、光は問いかける。

学園第4教導隊と上級生選抜防衛班はターミナル物資保管区画の西部に隣接する第1シャフト方面の警戒に当たる手筈だったのだ。

「相変わらず応答有りません。…最悪のケースを想定すべきと判断します。」

「だろうな…――こちらCP、中衛普通科小隊長、オクレ――」

――顔を歪めながら、光は中衛普通科小隊の指揮官を任された永井頼人一尉に無線をかける。

『こちら中衛普通科小隊長、オクレ――』

『グラップラー01、学園第4教導隊と上級生選抜防衛班と依然通信不能だ。…最悪、第1シャフト方面からも浸透される可能性がある。事態発生に備えよ。オクレ――』

『グラップラー01了解。恐らく民間人の退避が間に合わない可能性がありますが…最善を尽くします。――オクレ。』

「了解。通信終了――オクレ。」

通信を終えると、無線機を握る力が無意識に強くなる。

…上級生とはいえ、無理な徴兵などするからこのザマだ。

恐らく、既に全滅しているか、よほど苦戦を強いられているのか。

…であるならば、第1シャフト方面ゲートも固める必要があるだろう。

だからこそ――中衛には、アレを配置しているのだ。

「…通信によると、1メートルくらいの高さもあるらしいです。」

ふと、山本が言う。

もちろん、通信で情報を得たわけではない。

教師部隊から情報共有がなく、情報庁や防衛省からの情報で遣り繰りしている警備課が学園の情報を得ようとするなら、学園の無線を傍受し、盗聴するくらいしかない。

…幸いにも通信無線の周波数は固定されているため、傍受自体は容易い。

——閑話休題。

山本の報告を受けた光は数秒間思案すると、

「——通気口ダクトや排水溝への警戒も強めておけ。…最悪の場合に備えて同箇所へ指向性焼夷爆弾の設置と後衛施設科分隊に火炎放射器も準備するよう伝えろ。」

——命令を下す。

「了解。…しかし、そこまでやりますか？」

「…用心するに越したことはあるまいよ。」

——直後。

物資保管区画から一斉に銃声が轟き渡る。

同時に、光の怒号が飛ぶ。

「グランプラー01！状況報告！！？」

—————

同ターミナル・物資保管区画西部

第1シャフト連絡通路前エントランスホール

「——くそっ！案の定第1シャフト方面ゲートが突破されました！現在応戦中！！」

無線越しの光の怒号に対し、頼人もまた怒号で返す。

そして報告を終えるなり——右手に64式小銃を構え、引き金を引く。

銃口が火を噴くと共に大気に舞い上がるNATO7・62mm弾。

89式に使用されている5.56mm弾よりも比較的大口径の7.

62mm弾は、1発の被弾で手脚を吹き飛ばすなど造作もない。

…当然、それは甲殻以外を狙うしかないクラブロス相手であっても同じである。

脚を潰された個体は転倒し、次々と進路を塞いで行く。

「浸透を抑えるぞ——ゲート付近まで押し戻せ!!？」

言いながら頼人は64式による後続への脚部集中斉射を継続する。

続く中衛普通科小隊による64式の斉射。

連鎖する施設科小隊による火炎放射器による焼却。

直後——グレネードランチャー MGL-140による40mm炸裂弾によつて

擱座した個体群が絶命させられる。

…150秒程度の射撃ののち、そこには高さ5メートルにも及ぶ、屍の山が築かれた。

そしてそれは、第1シャフト方面ゲートを上手い具合に塞いでいる。

敵の死体を利用した即席のバリケード——致命傷を負うまで前進することしか能がない特殊変異生物だからこそなし得る戦術であった。

「——こいつで少しは侵攻を遅滞させられるはずだ。——」

——何もなきや…な。」

——だが直後、肉塊のバリケードが内側から爆砕される。

頼人と期待を裏切るように、懸念が具現する。

（…ああくそ、予想通りに悪い方向にばかり転がりやがって!!）

思わず頼人は舌打ちする。

——何しろ、肉塊のバリケードを破壊したのも、破壊したバリケードの穴から飛び出して来たのも、

「や」、あああああッ!取って!これ取ってよお!!?」

通信不能となっていた第4教導隊と上級生選抜防衛班のIS乗り達と、僅かな——数が極端に減少している辺り、ほぼ確実に

大半が死亡したのだろう——強化装甲殻部隊がゲートから

雪崩れ込んできたからだ。

…ほとんどの人間が、1メートルほどのフナムシ——シヨッキラスに全身を齧られながら錯乱している。

しかも最悪な事に――その背後からは第2波として多数のクラブロスが。

さらにクラブロスと共に無数のシヨツキラスが迫って来る。

その事に気付いた上級生選抜防衛班の生徒が錯乱して――

―50口径アサルトライフルを乱射する。

「全員伏せろ！流れ弾で死ぬぞ!!」

頼人が叫び、身を伏せる。

直後、銃弾が頭上の空間――立っていた際、自身の頭が

あつた位置――を飛翔する。

…もし、伏せるのがあと数秒遅ければ、自分は首無しの死体になっていたところだ。

さらに後方で轟音――どうやら、乱射された銃弾が天井から吊るされたLED照明器群やクレーンのワイヤーを食い千切り、それが地表に落下したらしい――が響く。

…落下したであろう場所は、もしかしなくても車両基地区画に入り切らなかつた避難民が溢れていた場所だ。

…今ので犠牲者が出たかも知れない。

「――くそっ。」

――この有り様に思わず頼人は舌打ちする。

…もうメチャクチャだ。

変なプライドを張って情報共有をしなかった結果、敵陣ど真ん中で孤立。

そして連中の取り零しをこつちが始末していたのに、逃げ出して来た連中が錯乱して引つ掻き回して被害を拡大させるは化け物は際限なく来るわ――状況は最悪だった。

「――総員傾注！エントランスを放棄し物資保管区画前昇降口まで後退!!？」

――頼人が怒鳴る。

「教師部隊も後退しろ！ここにいたら邪魔だ!!？」

邪魔だ、と言われて衝撃を受けたのか、女達の顔が強張る。

だが頼人は無視して、撤退を支援すべくミニミ軽機関銃をもって制

圧射撃を開始する。

元々、エントランスの部隊はゲートの包囲封鎖を行うことを前提として布陣していたのだ。

だがエントランスでの防衛も包囲戦継続も困難となった以上、消耗速度が速くリスクの高いやり方ではなく、階段という防衛に向いた地形での対応に転換する必要がある。

ここで戦闘を継続するということは無理に損耗を増やし、これ以上に犠牲を増やすハメになるからだ。

部下の命を預かっている身としても、それは避けなくてはならない。

故に、自分は最後に離脱する。

ふと、部下達の撤退を確認していた視界に、無数のシヨツキラスに食いたかられながらもこちらに這いずり寄る少女が映る。

その少女の見た目はシヨツキラスにたかられているというだけでも凄惨なのに、両脚が無くなっているのだ。

もしかしなくともそれは——クラブロスに切断されたのだろう。

さらにシヨツキラスが喰いたかっているということは、内臓のいくつかは既に溶解され、スープ状にされているという事。

にも関わらず、儂げな顔を浮かべたまま頼人の方へ這いずり寄りろろとする。

逃げる手段を失い、命を喰い荒らされながら、死ぬまで苦しみ続ける。

仮に助けても決して生き残ることは出来ない。

痛覚が作用しなくなるまでの致命傷を負っていた彼女が望むとしたらひとつ。

そんな、苦悶を終わらせて欲しいとでも言うかのように——

頼人の方へ手を伸ばす。

それを見た頼人は一瞬躊躇い——しかし意を固めて、ミニ軽機関銃の銃口を彼女に向ける。

——それで、少女は安堵に歪んだ微笑みを浮かべて。

「ごめんな。」

懺悔の声と共に——響く銃声。

放たれた銃弾は一撃で脳を破壊し——苦痛無く、彼女を絶命させた。

：いかに彼女が率いられていた部隊や率いていた部隊が軍事的観点から見れば、全滅しても自業自得と評されても、彼女にまでそう言ってしまうのは酷な話だろう。

——間違いなく彼女は、こんな世界とは無縁の生活を送っていた一般人なワケで。

：言ってみれば、彼女は被害者だろう。

——狂い始めた世界に平和な未来を殺されて、惨たらしい最期を迎えた、ただ一人の人間であり犠牲者。

（願わくば、来世で幸せになって欲しいばかりだ…。）

頼人はその少女を脳に刻みつけると、内心そう呟く。

：だが自分にはやるべきことがある。

もう少し少女を見届けたくもあるが、今は許されない。

「グラップラー01よりCP。エントランスを放棄。これより物資保管区画に撤退する。——オクレ。」

——報告し、頼人は再びミニミ軽機関銃を構え直すと、後退を開始した。

—————

地下物資搬出入ターミナル・直通入口区画

南部・第2シャフト方面連絡通路前エントランスホール

「——了解、グラップラー01。こちらもエントランス維持の必要が無くなった為、物資保管区画に後退する——オク

レ。」

そう通信を終えるなり、ハンドシグナルで『撤収』を告げる。

だがふと——第2シャフト方面連絡通路に人影が走る。

人影は連絡通路を横切り、第1シャフト方面へと向かう廊下へと走って行った。

：民間人だろうか？

避難が遅れて彷徨っている……という可能性も否定は出来ない。

：連絡通路内は危険だ。実戦慣れした者でなければ命を落とす可能性もある。

：なら、この中で実戦慣れしている光が早急に対応し、こちらに誘導する必要がある。

だが現在指揮系統の最上に位置するのも光だ。

——下手に動けば指揮系統の混乱を招き、こちらに被害を齎してしまう。

：だが動かなければ先程見た民間人が犠牲になる。

早急に選択する必要がある——ふと、自分より年上の権藤

一佐と視線が交錯する。

「…権藤一佐。」

すかさず光は声をかける。

それに対して、若干嫌そうな顔を浮かべるが、

「…さっきの民間人だろう？…行けよ。指揮権は俺が引き継いでやる。」

「ありがとうございます。」

：グループ01、第2シャフト方面連絡通路にて民間人を確認
——少し現場を離れる。指揮系統は権藤一佐に委譲。彼に

指示を乞え、以上——オクレ。

——では頼みます。権藤一佐。」

そう言うと、光はミニミ軽機関銃とアーウエン37グレネードラン
チを背負い、第2シャフト方面連絡通路に消えて行った。

IS学園第1シャフト外周空中通路

—— 乾いた気流と湿った大気が混じり合いながら相克する空間。

ゴジラの熱線により天井の一部に穿たれた孔は今や連鎖崩壊を引き起こし、天蓋が存在した場所には直径380メートルにも及ぶ——

—— 黒煙混じりの青空が穿たれていた。

：正確には、直径380メートルにも及ぶ第1シャフトの蓋たる天井が完全崩壊しているだけなのだが、その先には青空が広がっているため、間違っではない。

空中通路から第1シャフトの底辺を覗けば、そこには黒き荒神——

—— ゴジラがいた。

崩落した天井—— 表面にはグラウンドらしき焦げた地表

が見える—— によって下敷きになってしまった原子力発電所から放射性物質を咀嚼しようと、瓦礫を退かしているのだ。

：その姿が、何処と無く泥遊びをする子供のように——
女、朝倉美都の瞳に写る。

成り行きでシャルロット・デュノアという名前の少女を助けたのち、当初の目的通り彼女はそこに来ていた。

目的—— というのは、当然篠ノ之束である。

以前右腕を潰し、重傷を負わせたとはいえ逃げられてしまった。

当初はそこで妥協していたが—— やはりどうしても、妥協出来なくなった。

：ふと、手にしている、くしゃくしゃの資料に目を移す。

それは—— ISの現行絶対防御および次世代型絶対防御の試験を示したモノだ。

それだけならば大したことではないし、妥協を非妥協に変えさせるような理由にはならない。

今の世界であ篠ノ之束の女はもう視界にすら入らない小物に成り下がっているし、正直放っておいても勝手に自滅する。

：にも関わらず、それだけの放っておけなくなるような理由があつ

た。

…朝倉美都以外にも発生していた白騎士事件時の被害者――

――総勢382名を殺害させていたという記録を見つけた事、とか。

――目にして、胃の内容物が逆流するような不快感が脳に走る。

…それは、非情な末路を辿った者達への同情。

…それは、理不尽に死した者がいるにも関わらず生き残った自分への嫌悪。

…それは、自分を逃がしてくれた少女の想いを反故にすることへの懺悔。

…それは、自分をこんなことにした天災への憎悪。

――様々な感情が緇交ぜとなって沸々と煮え滾る。

要するに、朝倉が行おうとしているのは個人的な報復行為――

――キレイゴトを取り払えばただの復讐。

復讐。

復讐。

…あまりに自分のしている事のスケールの小ささに、思わず朝倉／私は口から笑いを漏らす。

結局私がしたいのはそういうこと。

――普通に生きたかったただけなのにあんな目に遭わせた

天災が許せない。

――守って欲しかったのに守るどころか売り渡した母親

が許せない。

――天災に媚を売って私を殺した人類ニンゲンが許せない。

――ようはそういう、自分を不幸にした奴が許せないから、自分が満足する為に復讐してやろうとしている。

――あまつさえ――『自分のような人間をこれ以上増やしたく

ない』――という建前まで用意して。

――その事実があるのに。

――そんな浅ましいことの為だけに全てを犠牲にしようと進んでやる自分を許せない私がいる。

…どうして、

「どうして、私はこんなに複雑なんだろう。」

思わず声が漏れる。

——— 所詮、復讐だって彼ゴジラについて行くついで。

…私一人では何も出来ないというのに。

——— それに、今生きている事だって、所詮は彼ゴジラがいる

ついで。

…私一人では生きてさえ行けないというのに。

——— そんな傲慢な私を嫌悪することさえ、今はもう

ついで。

…今の私に、朝倉美都わたしの人格はどれだけ残されているのか。

——— そもそも身体がある事さえ10年前からついで。

…何もかもがついで。

多分、そんな私が復讐だなんて小さくてつまらない事をしているのも、ただ何もせずに死ぬのを待つより、何かした方がマシ…だと、私が思ったから実行しているだけ。

…或いは、その気など無かったにせよ、仮初めの命とはいえ、彼ゴジラが私にくれた恩を返そうと何か模索した結果だからだろうか。

…間違いなく、役になんか立ってないし、世話になっただけのだけ。

——— でも。

「彼ゴジラといた時は、曲がりなりにも楽しかったですからね…。」

なんて思い、そしてソレを口に出す。

…だけれどもきつと、その想いも腐り落ちて、溶けて無くなってしまふ。

私を取り巻く人間関係も。

私が生きて来た人生も。

私が辿る未来も全部。

——— どうでもいい、と小局が大局に取り込まれて消えて無くなってしまう。

…死んでしまったままの方が、良かったのかな。

なんて思いながら——ふと、脳裏に自分を助けてくれた少女の姿が過ぎる。

自分のやってている事が公人として非るべき行いだと自覚しながら。自分の立場を自ら脅かすことになる。と自覚しながら。

——友人を助けたい一心で、処刑される筈の私を逃がした、ただ一人の少女。

——間違いなく、今の私は朝倉美都とは別人だとしても、決して忘れない少女。

別れ際、彼女が残した言葉が再生される。

『どんなに辛くても、まずは生きてくれ：生きて、歩き続けてくれ——』

——それは励ましの言葉であり束縛の呪い。

——それは無責任な言葉であり精一杯の願い。

二律相反、相見えることなき筈の言葉。

けれど確かなのは、それは揺るぎない善意から放たれた言葉。

だから私は彼女を恨むつもりなんてなかった。

「：光ちゃん：」

ふと首からかけたアクセサリーを弄りながら呟く。

：会いたくなんか無いといえば嘘になる。

それに、出来れば会いたいのだ。

コレ——手に握った首飾りのアクセサリー——
を渡す為に。

——閑話休題。

：建前とはいえ、『これ以上自分のような人間を増やしたくない』という感情は嘘ではない。

少なくとも、嘘なんかじゃない。

：とりあえずそんなわけで、篠ノ之束を殺すべく、拠点から逃走した彼女が逃げ込みそうな場所を探していたのだ。

当初はIS学園に逃げ込みと思っていたのだが、見当違いだったらしく、彼女はココに退避していなかった。

：まあ、そう都合よくなんかいかないだらう。

きっと今までは運と、彼と、認めたくなんかないけれど倉田さんのおかげで上手くいっていただけだ。

…そう思っ、振り返る。

「美、都…？」

「思わず目を剥いてしまう。

眼前には、戦闘装束に身を包んだ女性。

ヘルメットと首隠しで顔の半分近くが見えないけれど。

「すぐ、彼女だと分かった。

「光…：…ちゃん？」

第2アリーナ直下
第2シャフト最下層

「全てが終わった場所。

蹂躪と。

崩壊と。

死滅と。

別離と。

再生と。

決意と。

「ゴジラに蹂躪された2人…篠ノ之千尋と篠ノ之箒が過ぎ去った跡地には、瓦礫の山と異形の屍が転がっていた。

既にこの場所では全てが終わり、何も注視すべきものは存在していなかった。

「…」

「群れからはぐれたらしいクラブロスが1体そこに居座っている。

攻勢に出るタイミングを失い、ここに取り残されてしまったのだ。

だからとりあえず、溶解液で金属を溶かすなどして暇を持て余して

灰色のリノリウムで作られた床に、「白神英里加」は俯いていた。

「私がいなきや、あの子達は…」

枯れかけの涙を流しながら。

懺悔に満ちた声音で壊れた人形のようにブツブツと呟き続ける彼女は、思い返す。

（分かっている…一人駄々をこねてちやダメって事くらい分かっている…！…でも…）

「うッ」

目頭から涙が頬を伝うたびに、自責の念と自身への嫌悪感から強烈な吐き気を催す。

思わず洗面台に駆け込む。

「うっ…げ、ええ…うッ…ええええッ…!!?」

胃の中に有った消化途上のモノや胃液を口から吐き出し、床に吐瀉物をぶち撒ける。

清潔感に満ちた床は一瞬で絵の具をぐちゃぐちゃに混ぜたような濁色に染まっていく。

「は、あ…はあ…はあ…食べなきや…無理矢理でもいいから、何か食べなきや…ああ、でも、ダメ…食べたらまた吐いて…苦しい思いをしなきやいけなくなる…けど、食べなきや、私が、あの子達を苦しめた分、私も苦しまなきや…じゃなきや、生きていく価値が無い…私、には…生き地獄が妥当、なんだから…!!？」

過食症になってしまっている英里加は錯乱したように食事を口に放り込む。

「けれど、足りない。」

「あ、ははは…」

英里加は乾いた笑みを放つ。

「なんだ…食べるモノなら、ここに…あるじゃない。」

瞬間、英里加は自身の手首に喰らいつく。

皮膚を噛み千切る。

…あるいは、あの時ひとつになっているべきだった。

ふと、地響きが鳴る。

それもそうだ。

現在この街の直下には地中潜行を行なっている巨大不明生物がいるのだ。

…当然、避難勧告は出ている。

だけでももう御免だ。

はやくあの子達の所へ行きたい。

だから地上に出てくるのなら早く殺してくれ、と。

目を瞑りながら思う。

直後。

「キュウヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!？」

それに応えるように大地を突き破り、巨大不明生物が顕現する。

禍々しくも悲哀に満ちた咆哮が世界に響く。

だが——ソレはすぐ反転して。

『アハハ…』

『キャハハ…』

無邪気な子供らしい笑い声に近いモノし放ったのだ。

その声に聞き覚えのあつた英里加は弾かれたように顔を上げ、ソレを直視する。

—— 鳶を全身に纏った巨軀。

—— 橙色に輝きながら鼓動する器官。

—— ハエトリグサのような顔を持つ触手。

—— まるでワニのような形の頭部。

…ソレは植物と爬虫類を合体させたような姿をしていた——

…先の声はソレの本体から生えている触手の先端のハエトリグサのような顔が放ったのだった。

『…おねーちゃん、えりかおねーちゃん…』

それだけではない。

完全にヒトの言語を理解しているとしたか思えない声を発したのだ。
——ああ、この怪物はあの子達なのか、と英里加は理解する。

願っても見なかった願い。

この子達に殺されるなら、それは良い。

因果応報…という結末に処されて仕方がない私なんだから。

『ねえ、おねーちゃん…えりかおねーちゃん、あのね…』

「なあに…？」

——その声に、英里加は反射的に幼児をあやすような声で問う。

『おこつてないから…あノね、ソノ、かゾクに、なつテ…』

・
・
・

——それを英里加がどう感じたかは分からない。

なんと応えたのかも、正直覚えていない。

だけれど…それでも良い。

…だって、今はこの子達とひとつなんだから。

——それは英里加にとって、罰であり祝福であった。

EP—38 離別と紛イ物タル蜥蜴（マグロ食つて
るようなの）

IS学園第1シャフト外周空中通路

——そこで私は光ちゃんと邂逅した。

彼女は小銃を握っている。

多分、それは護身用。

私は拳銃を握っている。

勿論、それは殺傷用。

彼女は世界に溶け込むように、緑を主とする迷彩の戦闘装束を身に纏っている。

私は世界の異物である事を示すように血のついた白のワンピースを身に纏っている。

——私と光ちゃんはもう違う場所にいるのだということ
を思い知らされる。

手を伸ばせば届く場所なのに。

声をかければ届く距離なのに。

けれど互いの立ち位置は、多分地球10周分くらいには遠い場所に
いる。

「美都…なぜ、ここに？」

動揺を絞め殺した様に平静に満ちた声を彼女は放つ。

けれど動揺を殺し切れておらず、声は僅かに震えている。

「…うーん、そうですね…嘘偽りなく正直に言えば、私は篠ノ之束を殺
しに来ました…ここには居ませんでしたけれど。」

だから私は事実をぶつけてみる。

…すると、やはり衝撃に彼女は目を見開く。

…だけれど、彼女は再び平静の海に身を沈める。

「……そうか。」

覚めた瞳と、冷たい声が大気を震わせて音を鳴らす。

——小銃を私に向ける。

…ああ、やっぱりこうなるのか、と。

少し残念そうに顔を歪めながら、腹をくくり切る。

私を逃してくれた事には感謝しているし、光ちゃんのそういう情を捨て切れないところとか、とても愛おしいけれど——死に場所くらいは自分で決めたいから。

——微笑みながら、口を開く。

「うん、だから私は——貴女の『敵』。」

それで2人の中にある枷は引き千切られた。

——朝倉の疾走が始まった。

朝倉は足——つま先に全体重をかける、そして地面を、蹴る。

踏みつけた床の金属タイルがへこみ、埃が舞い——朝倉は人間では、あり得ない速さで迫る。

十メートルを駆け抜けるのに、3秒とかからなかった。

片桐を押し倒して無力化するには容易い。

だから、朝倉は片桐の顔めがけて手を伸ばす。

…だが。

片桐はミニミ軽機関銃に取り付けた07式大型汎用銃剣でそれを阻害する。

——それは、風に刃を乗せるような流麗さで。

銃剣をもって朝倉の腕を浅く斬りつける。

「ッ——！」

鮮血が舞う。

思わず朝倉は顔を僅かに顰めて、片桐の真上を跨ぐようにして、さらなる斬撃を躲す。

「……………」

片桐は背後に飛んだ朝倉に再び照準を合わせる。

——それを見て、朝倉は笑う。

不思議そうな物を見るように微笑みながら、片桐に問う。

「——どうして、撃たなかったの？」

——それは最もな質問だった。

先程、片桐は朝倉の腕を浅く斬りつけた。

斬りつけた事でさえ、刃を皮膚に斬りつけたものの夾叉したのではなく——ワザと浅く斬りつけて牽制してみせたのだ。

…そう、ワザと。

どの程度で斬りつければ良いかという制御が可能な程度には余裕があったのだ。

…つまり、人間では有り得ぬ速さで走る朝倉に対しても十二分に対応可能だった。

ならば——朝倉を射殺することはより一層容易かったはずである。

…だが、片桐は撃たなかった。

——まるで、躊躇っているように。

「……………」

——沈黙。

そんなことは関係ない、とばかりに片桐は朝倉を見つめたまま平静を維持する。

…そんな片桐を朝倉は見つめる。

…片桐は勝手に再生する朝倉の腕を見つめる。

それで、——ああ、彼女も千尋と同じ存在になったのか、と

——理解する。

その片桐に、再び朝倉は飛びかかる。

——朝倉は人間の動きをしていなかった。

彼女は蛇のように蛇行する。

広いようで狭い外周連絡通路の道は、人間には狭く、人外には広過ぎる狩猟場だった。

片桐が五感を駆使して感じ取る警戒網を、彼女はケモノのように認知出来ぬ素早さで潜り抜ける。

視認できる——だが動きを捉えられない。

しかし片桐に焦燥はなく、淡々と覚めながらミニミニから銃剣を取り外す。

——直後、蛇の動きが猛獣へと変化する。

爆ぜる火花のような迸り。

朝倉^{ケモノ}は片桐^{ニンゲン}の頭上へと跳躍し、肉を引き裂かんと手刀を繰り穿つ——

!!?

ギイン、と刃^{ツメ ナイフ}と刃^{ナイフ}が衝突した。

片桐^{ニンゲン}の脳天から肩にいたる肉を狙った刃^{ツメ}と、防ぎと邀撃に入った片桐^{ニンゲン}の刃^{ナイフ}が衝突する。

一瞬——己の刃^{ツメ ナイフ}と刃^{ナイフ}を共有するように、互いの視線が交錯した。

朝倉^{ケモノ}は悲哀に歪んだ笑みを浮かべながら。

片桐^{ニンゲン}は平穏に見えながらも揺らぎながら。

——朝倉^{ケモノ}は寂しそうに微笑みながら口角を吊り上げると、後方に飛び退く。

…たった一度の跳躍で、6メートルも離れ飛ぶ。

明らかに人間では、もうない。

それが望んだモノだろうとなかろうと、彼女^{朝倉}はもう人間ではなくなっていた。

——それは肉体が変異したという意味であるのか。

——あるいは、人間扱いされていなかったという意味なのか。

どちらもなのか…それは定かではない。

だが、そんな物は関係ない。

朝倉^{朝倉}は6メートル離れ飛び、床に着地しようとして——
瞬にして眼前に現れた片桐光の左手によって、押し倒された。

「えっ？」

一瞬にして6メートルを詰めた片桐の速さが、視認出来なかった。
自分^{朝倉}の上に被さるようになりかかった片桐光の動きが視認出来なかった。

——握られた刃^{ナイフ}が振り下ろされる。

気が付いた時には、片桐光の動きはもうその段階にまで到達していた。

あとは、そのナイフを自分の肉に突き刺すだけ。
獲物を狩る肉食獣の動きは速過ぎてニンゲンには視認は出来ても
捕捉は出来ない。

ソレと同格の動体視力をもつてしても、朝倉美都は片桐光を捕捉出
来なかった。

：たとえば、ニンゲンがケモノに劣る生き物であったとしても、ニン
ゲンもケモノも動物の一種である以上、極限環境下でケモノと拮抗出
来るだけの能力を保有或いは獲得する個体がいてもおかしくない。

ただ、その事実を目の当たりにしただけ。

こんなにもアツサリ終わってしまう自分を嗤う。

：だから、朝倉^{ケモノ}はそのまま刃^{ナイフ}が肉を食い破る結末を受け入れて。

しかし、いつまで経ってもその時は来なかった。

「。」

眼前には空中で静止したナイフ。

平静のままに激情を宿した表情。

あと2、3センチ押し込めば朝倉の眉間を貫くにも関わらず、片桐
は刃を空中で静止させている。

「何故殺さないの？」

当然といえば当然の問い。

「…友人を殺せると思うか？」

それに対して、無難な解答を片桐は放つ。

——直後、振動と警報音が空気を疾る。

ゴジラが放射能を捕食すべく、原子炉建屋の壁を破壊したせいで放
射能が漏れ出したのだ。

高濃度の放射能を含む霧は400メートル程下層から世界を侵食
しながら2人に迫る。

——当然、放射能漏れを防ぐべく、隔壁が次々と閉じられ
て行く。

それにより霧は第1シャフトを上昇し、2人に迫る。

——あと300メートル。

「…光ちゃん、どうして逃げないの？」
美都が問いかける。

——あと250メートル。

「…昔、お前を救うと約束しただろう？…だけど出来そうにない。」
光が応える

——あと200メートル。

「……だから、責任とって一緒に死んでやる。」
続けて言う。

——あと150メートル。

「……嬉しい。」

——あと130メートル。

「…すまない。」

——あと110メートル。

「…謝らないで。それに、謝らなきゃいけないのは、私の方。」

「——ぐっ」

美都が光の首を掴む。

——あと100メートル。

「そんなに言われたら、私も一緒に死んであげても良い。」

——あと90メートル。

「……だけど、それはダメ。——光ちゃんは、まだ、死んじゃダメ。」

先程のケモノらしきなど露ほども感じさせない口調が走る。

——あと80メートル。

「光ちゃんは多分、たくさんの命を任されてるんですよ？…じゃあ、死んじゃダメ。」

——あと70メートル。

「……それに、ね——」

——あと60メートル。

「光ちゃんには、貴女には、私を託しても良いかなって、思えるから。」
首飾りのUSBを引き千切る。

——あと50メートル。

「私は人類が大嫌いだし、赦せないけれど——」
USBを光のマガジンケースに差し込む。

——あと40メートル。
——貴女には、絶望的なまでに崩壊した未来でも生きてもらいたいから。」

——あと30メートル。
そのまま、光を第2シャフト方面連絡通路目掛けて放り投げる。
そのゲートは隔壁の自動閉鎖システムが破損してしまっているのか、封鎖システムが作動していなかった。

——あと20メートル。
「がっ——」
連絡通路の床に光は叩きつけられる。
全身に痛みと衝撃が疾るが、構わず顔を上げて第1シャフトを見る。

——あと10メートル。
「美都——!!?」
叫ぶ。

それに、美都は儂げに微笑む。
「——死んだら許しませんよ。」

——そう言うと、彼女は手動で隔壁の封鎖システムを作動させて——
——放射能の霧に、呑み込まれた。
——光／自分に残された選択肢は、茫然と立ち尽くすか、部下の元へ戻るか。

——冷静に考えればどうすれば良いか、嫌でも分かる。
——公人である以上、私情は許されない——だから私は、元来た道を辿る事にした。

????????????????????????????????

第2シャフト方面連絡通路

肉片と。

肉塊と。

血液と。

体液と。

葉莢と。

硝煙と。

—— 殺戮の沼、と評するに相応しい有様と化した連絡通路。

そこで第1教導隊と日英共同開発実験団の残存混成部隊は撤退戦を継続していた。

「はあッ—— !!?。」

最後尾—— 箒は打鉄甲一式を纏い、試製12式耐熱装甲刀を振るう。

近接防御戦をもって、クラブロスを漸減する様子はどう考えても危うく、距離を保つべきである、という思考に至る。

だがしかし—— 今の箒を含む全員が、それが許されぬ状況に置かれていた。

箒が全機のステータスが表記されたウインドウを自覚する。

—— 全機残弾ほぼゼロ。

—— 平均推進剤残量2割。

—— シールドエネルギー S E 平均残量1割。

—— 部隊内総稼働機体数9機。

—— うち、交戦可能機体2機。

—— 操縦者の生命維持に全てを回した戦闘不能機体が3機。

—— SE枯渇とそれらを輸送する為に武装を投棄し戦闘不能となった機体が4機。

—— 眼前の敵個体数は推定60体近く。

—— 状況は最悪で絶望的だ。

—— こちらに抗う術は近接装備以外に無く、ただ逃げるしかない。

だがジェットを蒸し続けて飛行しながら逃げれば推進剤は枯渇する。

故に主脚歩行と飛行を併せた方法でなければターミナルに辿り着く事は不可能だ。

しかしこのやり方ではいずれ奴らに追いつかれてしまう。

故にシールドエネルギー残量と推進剤残量が最も多い筈と簪が邀撃に当たっていた。

そうしても、もはや無理だった。

際限なく襲い来る異形の群れ。

絶え間なく続く暴力の嵐。

枯渇していくシールドエネルギー。

——限界などとうに超えている。

迫り来る破滅の可能性に呼吸が浅くなる。

「——筈、このままじゃ……!」

簪の乱れた、苦しげな声。

超振動薙刀——【夢現^{ゆめうつ}】を振るうその腕の動きは、次第に

鈍り始めている。

まるで波打ち際に作られた砂の城のように、いつ飲み込まれてしまってもおかしくはない状況に、彼女は立たされていた。

「私がカバーする!とにかくその夢現^{デカブツ}を振るっていろ!!?死にたくなければな!!」

思わず怒鳴る。

——筈／私は、別に死んだって構わない。

だけれど、此奴まで巻き込むなんて許されない。

だからこそ、死に物狂いで彼女に生まれる隙と綻びを潰す。

だが——限界を迎えたのは肉体だけでなく武器もであった。

飛び掛かる鋏を受け止める——直後、手にしていた試製1

2式耐熱装甲刀が金属音を立ててへし折れる。

——無理もない、対ラウラ戦から対VTシステム戦という

激闘を経て、ゴジラの白熱光の直撃を受けたのだ。

それほどの苛烈なダメージを受け続け、整備無しで酷使され続けられ
ばこうなるのは必然と言える。

「ち」

舌打ちと共に箒は拡張領域よりふた振りの武装を顕現させる。

—— 右手にはタイプ15・プロトメーサーブレイド試製15式誘導熱放出剣。

—— 左手にはタイプ92・バイルバンカー92式火薬式射突槍《改》。

…どちらも、対VTシステム戦で使わず仕舞いに終わり、今の今まで
温存されていた装備だった。

しかしそれだけではない。

箒と共に箒が左方に拡張領域より2枚のシエルツェンを指定展開
—— そのままスパイクが鈍い金属音を立てて床に突き刺さ
る。

さらに打鉄から拝借した近接刀【葵】を合計2本拡張領域より呼び
出され、同じく床に突き刺さる。

—— それで、拡張領域は空になる。カラ今度こそ、抗し得る手
段はここにあるモノを除いて全てが尽きた。

—— そんな中でありながらも—————— 箒は左右に
タイプ15・プロトメーサーブレイド試製15式誘導熱放出剣とタイプ92・バイルバンカー92式火薬式射突槍《改》を構え、眼前を
見据える。

—— 眼前には依然として迫り来るクラブロス数10体。

—— 対するは、墓標のように立つ武器の中に佇む箒。

—— その隣には箒がいる。

—— だが—— 箒は最初から箒をここに残しておくつもりなど、
露さえも無かった。

「—— 箒、お前は離脱しろ。」

—— 箒の纏う、あかしま颯——改二の機体ステータスを見ながら告げる。

—— 兵装

荷電粒子砲【春雷】：EN残量ゼロ。

MLO誘導弾【山嵐】：残弾ゼロ。

超振動薙刀【夢現】：耐久度低下。

シエルツエン（借出）：使用中。
近接刀【葵】（借出）：使用中。

推進剤残量17%
飛行継続可能時間残り11分。

機体損傷蓄積量61%
操縦者保護機能に問題発生。

シールドエネルギー残量9%
被撃許容回数推定2回。

絶対防御、PIC出力低下。

機体内部バッテリー残量21%
機体稼働限界時間まで18分。

これだけ見れば、継戦能力など無いに等しい。
：次の攻性を迎え撃てば、間違いなく簪は死ぬ。

だから——
「なっ、何言ってるの☒」

突出したクラブロスに夢現を突き立て、刺殺しながら、簪は心底驚愕した表情を浮かべる。

対する簪も誘導熱放出刀にメーサーを流していない状態で、突出して来たクラブロスを横一文字に両断しながら応える。

「それはこちらのセリフだ——そんな機体状況で、ここを守り切れるか。」

務めて、突き放すように言い放つ。
「それは簪だって——！」

だが、簪は簪の機体ステータスを確認しながら反論する。

—————兵装

試製12式耐熱装甲刀：喪失。

試製20式複合ライフル砲：喪失。

76mm支援ライフル砲：喪失。

試製15式誘導熱放出刀：使用中。

92式火薬式射突槍《改》：使用中。

シエルツェン（借出）：使用中。

近接刀【葵】（借出）：使用中。

推進剤残量25%

飛行可能時間限界まで21分

機体損傷蓄積量57%

操縦者保護機能に問題発生。

シールドエネルギー残量18%

被打撃許容回数推定4回。

絶対防衛、PIC出力低下。

機体内部バッテリー残量28%

機体稼働時間限界まで25分。

………

確かに、箒の方が余裕があるとはいえ、ギリ貧具合は

簪と大差ない。

だから簪は、ここに残るというのだ。

ただでさえ、死に近い場所にいるというのに。

…それは決して仲間を見捨てたく無いと、身を呈することを決意した簪の意思の表れであった。

それに箒は思わず口角を上げてしまう。

「優しいな…簪は。」

聞こえないように、小さく呟く。

その意思是嬉しいし有難いとさえ思う。

…だけれど、元より腹を括った自分にその意思は不要だった。

そして自分の行いに簪を巻き込む訳にも行かない。

だから…
箒は、自身の中に蠢くものを使うことにした。

（…
ワソフアビリティイ
イリス、単一能力起動。）

《…あら…いいの?》

（…何度も言わせるな。）

僅かに苛立ちを込めた、箒の声。

それにイリスは憐憫と憂慮するような声音で返す。

《…考え直す気は？貴女、千尋君の為に死のうとしてるけど、まだ生きてるかも知れないわよ？貴女だって彼が普通じゃない事くらい知ってるでしょう？貴女が普通じゃないと、彼が知っているように――

――

(だから、何度も――それに、あんな状態で、生きてる訳が――

――!!?)

《…どうしても、やるの?》

――最終確認のような問い。

それを箒は、

「ああ、やってくれ。」

――迷う事なく選択した。

…直後。

「ぐッ――!!」

――胸に焼けた鉄が突き刺さるような、鋭く鈍い痛みが走る。

…体内で抑制していたイリスが活性化したのだと、箒は理解する。

同時に、

「え――な、何コレ☒」

箒の声が響く。

見れば、機体ウインドウには数多のノイズとハッキングを告げる警告ウインドウが無数に現れる。

その箒の前に、箒が飛び出し――92式火薬式射突槍でさらに迫り来るクラブロスに風穴を穿つ…!!?

《――颯コアユニットに侵入……機体制御システムおよび姿勢制御バーニア制圧。》

イリスの淡々と頭に響く報告を聴き流しながら、箒は眼前の異形を斬り捨てる。

――偶発的とはいえ、機体ステータスに単一能力を発現した箒の打鉄甲一式。

その能力内容は――イリスによる自身の侵蝕範囲拡大を

代償とした対象の無条件での電子的制圧および無力化。

早い話——ハッキングである。

《——挙動偏向テーブル展開。》

簀の颯改二を囲むように、一輪の光輪が浮かぶ。

そして颯改二ごと、簀は180度方向転換させられる。

「簀、何を——」

——一連の事象が簀の仕業であると理解して、簀は背を向けさせられながらも叫ぶ。

「——すまない、言う事聞かないから、無理矢理言う通りにさせる。」

簀は背を向けながら、申し訳なさそうに口を開く。

——同時に。

《——対象の従属化を完了。》

頭に響く、支配の宣告。

——直後、響く警報。

ウィンドウが投影され、警報の正体を知らされる。

それは第1シャフト最下層にある原子炉からの放射能流出。

それに対する処置として各ブロックを隔壁で封鎖するというもの。

そして——都合が良い事に、たった今ここも封鎖されるのだという。

「…これで、逃す口実は出来たな…。」

迫り来るクラブロスを斬り伏せ、イリスの侵蝕に伴う激痛で顔を歪ませ、声を曇らせながら、簀は呟く。

「…颯改二に現戦域からの離脱指示。」

《——了解。》

指示から実行へは流れるように速く、実行される。

——簀の意思とは全く異なるように。

颯改二は跳躍ユニットを吹かし、ターミナル方面への後退を開始した。

「ま、待って——簀!!」

簀の声。

——だが、箒は振り返らない。

背を向けたままただ一言、謝罪の言葉を放つべく口を開く。

「お前を巻き込む訳には行かないから…。」

——警報と共に隔壁が迫り上がる。

——箒と箒を隔てる壁が顕現する。

「箒………!!?」

箒の、泣き出しそうな声が響く。

——隔壁はさらに迫り上がり、箒の下半身はすでに箒のい

る世界から隔てられている。

「…すまないな——迷惑ばかりかけて…。」

箒の自嘲するような声音。

そして——振り返りながら、口を開く。

「…片桐一佐に会ったら言ってくれ——千尋は最期まで優し

い子で、私は最期まで大馬鹿者だった、って。」

——泣き出しそうな笑顔を浮かべながら、告げる。

「ほう——」

箒の呼びかけ。

だが——それを遮るように、隔壁が閉ざされる。

こちら側に残された人間は箒のみ。

——これで、気を遣う必要はない。

——これで、思う存分やれる。

——これで、千尋の元へ行ける。

——だけど、その前に。

…眼前より迫り来る、数10体の異形共を視認する。

——今から死ぬ、それはいい。

——だけど私情による自決をするならば、それ相応の行い

をしなくてはならない。

…故に。

「三途の川の駄賃がわりだ——貴様らを殺させて貰うぞ……

!!」

——右手に試製15式誘導熱放出刀。

——左手に92式射突槍《改》。

——そして陣地に突き立てられた武装群。

それらを手に、箒は咆哮した。

第1シャフト直上
地上区域跡廃墟群

：放射能を含む霧が舞い上がる第1シャフト直上。

——焼けた重鉄骨。
コングリート

——砕けた混凝土。
プラスチック

——溶けた観客席。

——真正正銘の廃墟。

放射能の霧に包まれた世界にポツリと浮上するその姿は、さながら幽霊船を彷彿とさせる不気味さを孕んでいる。

それこそが——原型を留めぬまでに破壊し尽くされた第1アリーナの残骸であった。

：高さ1メートルほどの瓦礫のひとつに、朝倉美都は腰掛けている。

第1シャフトから登り出てきた彼女は、放射能に満たされた空間の中、生身で何処か浮かかない表情を浮かべて。

「——意外でしたね……。」
ポツリ、と呟く。

「光ちゃん、てつきり私の事を敵だと断じて殺しちゃうものだと思っ
てました。」

誰に言うわけでもなく、あるいは自身に対しての独白か。

——もちろん、光の性格が冷徹でないことは知っている。けれど、朝倉美都が知っているのは子供時分の光だけ。大人になつてからの片桐光を、彼女は知らなかった。

——人は子供の頃と大人になつた後とでは大きく性格が変わるといふ。

だから、子供時分に「友人を失いたくない」という私情で、白騎士事件の生存者になつただけで犯罪者扱いの身に墜とされた自身を逃がしてくれた彼女はもういないと思つていた。

：けれどほんの僅かな、砂粒程度の期待だけれど、少し考えれば絶対無いつて言える奇跡に対する期待もあった。

——だから、私はあのUSBを用意していたのだ。

完全に天災みたいな、ISに身を委ねて、結末がわかつているのに無視して現実逃避するような人間じゃなかったら…：そう思わずにはいられたかった。

今の世界は破滅に「傾く」とか「転がり落ちる」とか、そんなんじゃない。

言葉にするならそう——「墜落」とか「垂直落下」の類。

——傾く程度であれば、いずれ限界に至るにせよ、歯止めをかけられる。

《破滅という結末》を抑制することが可能かも知れない。出来なくても長い時間をかけて可能にできるかも知れない。

——だが、今の世界はビルから飛び降りて、地面に叩きつけられて絶命するまでの垂直落下中の自殺志願者に等しい。

《破滅という結末》に歯止めすらかけられず無条件で墜落していく状態。

：私からすれば、それがどうした、という感じだが。

——正直、そのまま滅んでしまえとさえ思う心があるといふのも事実。

…これは理不尽で死ぬ未来を世界と天災ひいては当時の人類に強制された朝倉美都の記憶から生まれたものか。

…あるいは、彼女に仮初めの命を与えた黒き荒神の古い記憶から生

まれたものか。

：それとも、前述の両者が混じり合って生まれたものか。

———それはともかく———
どちらとも言えないし、分かりようがない。
閑話休題。

意外だったのは———彼女、片桐光が全く変わらない認識で接したからだ。

いや、多少は変わっていただろう。

敵だ———と宣言したし、殺すつもりで攻撃もしたのだから。
しかし、それを経てもなお、片桐光は朝倉美都を友人として見ていた。

———土壇場で共に心中してくれるくらいに。

そこまでされたら、朝倉美都に対する認識は変わらないと思わざるを得ない。

：それが、印象操作の可能性もあるが、今の政府が私にそこまで気を遣うメリットは存在しない。

何しろ、朝倉美都は故人。

死んだ人間であり戸籍も人権も権力も財力も存在しない、政治的にも無価値なモノでしかない。

それに、朝倉美都があそこにいた事を事前に知っていた訳では無いだろう。

：だとすれば独断。

そして片桐光が独断で朝倉美都にあのような対処をするという事は私情。

———そう判断したからこそ、『私だった者』の記憶と記録を渡して、生き残らせようなんてしてしまった。

：結局、朝倉美都も私情で対応してしまった。
朝倉美都はゴジラが混じってから酷くあやふやだ。

思考はなく、ただ本能的に動かされているだけのようにも感じてしまう。

いや、感じてしまうのではなくその通りなのだ。

だって——今の私は、【ただの死体】だもの。

「…ああ、だけど——」

——その私情は、確かに朝倉美都だと。私の意識

少し頬を赤らめながら、そう思う。

『あーさくーらさーん。』

ふと、先程までの時間を粉碎するように、倉田が通信をかけて来る。手にした半ばトランシーバーに改造されたスマートフォンを見ながら、美都は鬱陶しげに口を開く。

「——なんですか？」

『いや、放射能の霧柱が立ったモンですから。今霧の中に居るみたいですけど大丈夫ですかw？急性被曝でハゲたりしてませんw？』

倉田がニタニタと笑っている姿が通話越しにも分かる。

——やはり、朝倉美都は彼のことが嫌いなのだ。生理的に。

他人の不幸に悦を見出す人間が、多分、朝倉美都は嫌いなのだ。

天災を痛め付ける時も、ゴジラは僅かな加虐心を抱いたが、朝倉美都は何も感じてはいなかった。

少なくとも、報復対象たる篠ノ之束やその他の誰かを殺めても、快楽を感じない。

ただ、「ああ、こういうものなんだな」と俯瞰するだけ。

それは自分が殺戮で悦を得る人間を悪しき者と捉えているからか。

…まあ、何はともあれ、彼のニタニタと笑っている顔が見えないのが、まだ救いだろうか。

「——嫌味を言いに来ただけなら、切りますよ。」

言って、通話終了ボタンを押そうとして。

『ああ、違うんですよ。朝倉さんこの間見たいマグロ食ってたゴジラモドキを覚えてます？』

「…ああ、あのレッチ島近海にいた…。」

『そいつがIS学園南部に上陸しまして。』

!!
———!!———
直後、響く異形の咆哮^{こえ}。

同時にその姿を現わす新たな異形の体軀。

速さに長けることを選んだであろう細長い印象を抱かせる身体。

元はイグアナだったのか、その面影を残している頭部。

発達し強靱さを感じさせる脚と腕に反して貧弱さしか感じられない全身。

背中には皮膚を突き破るように並び立つ鋭利な背ビレ達。

以前太平洋で見かけ———【^ジ紛^ラい物】と名付けた巨大不明生物であつた。

「———そういうのは、もっと早く言つてください。」

そう言うなり、スマートフォン^{スマートフォン}の通信を切る。

これ以上の通信は時間の無駄だ。

どうせ通話越しにニタニタ笑われるがオチ。

———それに、背後からは無視したくても出来ない程にまで肥大化した暴力的な気配が漂っている。

振り返れば、背後は第1シャフトから立ち込める放射能の霧柱。

放射線量は遥かに減衰したものの、微量に残されている。

……だが、そんな絞りカスなど眼中にないのか———龍を連想

^あせる長く黒い尾が霧を引き裂きながら世界に浮上する。

……!!……
??地^の底から響くような唸り声。

それが再び振動を纏い、唸り声と共に地上へと登り来る。

———霧の果て。

放射能という最凶の毒によつて隔絶された孔より、霧の根源を全て喰い尽くした黒い影が現われ出でる。

それは先程この地を焼いた災厄の怪物にして罪科の具現。

????????
———!!———
全身が壊れるかと錯覚する。

それは13キロメートルもの距離を隔ててもなお爆風となって肉
体に轟く大音響。

再び黒き荒神の咆哮が世界を戦慄させる。

「!!」

呼応するように、紛い物が咆哮を上げる。

対峙する2体。

僅か数刻の硬直の後、両者は動き出す。

先手を打つのは、ジラであった。

発達したその強靱な脚をもつて大地を踏み碎きながら、疾走する。

巡航ミサイル14発分に相当するその踏み込みは、

地表を踏み碎く。

土塊を巻き上げる。

1万8000トンにもおよぶ巨体が時速200キロもの速度を

もつて、ゴジラに突貫する…!!?

疾走は、肉眼で追えるものではなかった。

後手に回されたゴジラは、背鰭を青白く光らせる。

増大する放射線量。

明確に対象を視認する肉眼。

空間を照らすチェレンコフ光。

口内に満たされた核の炎は3000度に到達する。

…鉄を溶かすには1500度の熱が必要であるとされている。

すなわち、今ゴジラが溜めている炎は鉄を容易く焼き払うというも

の…!

…2秒の後。

開け放たれた口より焰が眩く荒れ狂う高熱の蒼炎が穿たれる…!!

?

獄炎の咆哮は、紛い物を討ち払わんと大気を焼却す

る。

それを、

「!!」

紛い物は、それを跳躍で躲してみせる…!!?

つまり先の突貫は、ゴジラの白熱光を放たせる為の囮^{デコイ}。
その賭けの末に、ジラはゴジラに白熱光を放たせることで隙を作ら
せることに成功した。

ゴジラは確かにすかさず白熱光の放射からジラの迎撃防御に回る
だろう。

だがそれには僅なタイムラグがあり——その隙を突く事
が、ジラの狙いであった。

——跳躍したジラは、本命たる、疾走と跳躍からの落下に
よる移動エネルギーと質量エネルギーによる飛び蹴^{ハイジャンプキック}りを放つ…!!??

：先の疾走より圧倒的にソレは速い。

間違いなく機動力と反射神経、知性——それらどの面にお
いても、ジラは全てがゴジラを凌駕している。

ゴジラは獣の側に在る巨大不明生物ならば。

ジラは人の側に近い巨大不明生物と言える。

ヒトはケモノを狩る為に、知恵を絞りながら対峙する。

ジラも同じように、知恵を絞り、勝てるであろう陽の要素をもって、
ゴジラに対峙した。

白熱光は既に放射を停止し、眼球は迫るジラを視認する。
しかし遅い。

既にジラの攻撃はゴジラを有効射程に捉えている。

仮に避けられたとしても、次なる第2撃を放ち、有効打たらしめる
には造作も無い。

そして今これは——限り無く勝利に近い状態。

だから今この状態では、ジラの攻撃を躲す事など叶わず、抗えぬ高
速に無抵抗に押し潰される結末だけが存在しない。

——その相手が、ニンゲンであれば。

「!!」
「????????????」
両者が激突する。

しかし——ジラは上空で停止してしまっていた。
それに対するジラの驚きの声と。

ゴジラの唸り声が大気に揺れる。

—— 突如、ジラの腹部に未知の感覚が発生する。

上空で静止するという未知の現象を体験する。

蹴りを打ち込む筈が、対象の眼前で停止するという謎が残留する。

—— ごふっ、と吐血する。

そして血を吐き出した際に、ふと下を向いてしまう。

—— そこで、腹部を貫通して、体内に残留しているゴジラ

の腕が見えてしまった。

⊠

????????? ———— その現実にはジラは恐慌する。

……自分の腹部に手を入れられている。

これほど恐ろしい状況はそうないだろう。

何しろ体内に手を入れられた側は、手を入れた側に命を握られたも

同然。

……手を引き抜けば、間違いなく大量出血で死に至る。

……手を入れたままでは、生きていくことさえ難しい。

だが、そんな理屈よりも先に、ジラは早く手を引き抜こうと手脚を

ばたつかせる。

—— ゴジラは、ただ無言で、ジラの腸を握り掴む。

腸を握られた激痛に悶え狂うジラなど視野にも入れないまま、ぐ

ちゆり、と濡れた肉の音を響かせて。

—— 握り掴んだ腸ごと、腕を引き抜いた……!!?

どす黒い血と。

澄んだ鮮血と。

体内から二酸化炭素を多く含んだ血と酸素を多く含んだ血が溢れ

出す。

同時に、肝臓と腎臓までも体外に零れだす。

????????? ———— !!?

????????? ———— あまりの激痛に悶え、ショック死出来なかった自分を呪うようにジ

ラは発狂しながら倒れ行く。

——— だが、このままでは終わらせない、とでも言うかのよ

うに。

「ゴジラはあろうことか、腸を握ったまま、ジラを振り回し始める。」

「??、
ジラが苦悶と訳の分からない悲鳴を叫ぶ。」

ゴジラは無言のまま、ただひたすらに容赦なく、ジラをブン回す。それはまるで、ではなく、正しく鉄球だ。

振り回される度に体内から腸を漏らすジラはなす術もなく、ゴジラに振り回され、残骸と化した校舎や未だ無傷だった校舎、果てはISの格納庫に激突し、有象無象を粉碎して行く。

その度にジラの手脚はあらぬ方向に押し曲がり、全身の骨が次々と砕かれて行く。

「…つて、きやあッ！危な…!!?」

ゴオツ、と旋風を纏いながら振り飛ばされるジラを視認して、朝倉美都は思わず伏せて避ける。

その隣では、ジラが第1アリーナの残骸であった観客席の廃墟に激突し、粉碎され、残骸から破片へと成り下がる。

「??、
??、
??、
??、
!!」

怪力だの暴力だの関係ない。

そんな概念で済まされる次元ではない。

この悪魔的なまでに凶悪な回転を繰り返した後、ゴジラはその遠心力を生かして、

「
咆哮を叫びながら、ゴジラは鉄球を放り投げる——
まさにハンマー投げ。!!」

まさにジャイアントスイングである。

全身の骨を砕かれたジラは、無残にも最後は頭から投げ飛ばされ、飛んで行く。

貧相なイグアナの怪獣は、ポイ捨てされたゴミのように投げ捨てられた。——進行方向に存在した、モニュメント・タワーに激突した。

「あ……うわあ……」

…あまりの惨さに朝倉美都は顔を引き攣らせる。…正確には、一連の惨殺を嬉々として行ったゴジラに。

——ジラの最期は。

血を撒き散らしながら痙攣するジラに、駄目押しのとドメと言わんばかりにモニュメント・タワーが倒れて来て——下敷きになる形で潰死した。

——モニュメント・タワー一帯には、血と肉片の沼地だけが残されていた。

『——朝倉さん』

不意に倉田が通信して来る。

朝倉美都は一連の惨殺劇に顔を引き攣らせていて、彼の言葉さえ届いていない。

だが、それも見越していたのか、独り言のように倉田は言った。

『——やっぱマグロ食ってるようなのはダメだなあ。』

E P | 39 変質シ行く人間

2021年6月12日午前11時51分・IS学園

◆現時点での被害

● IS学園

?? 中央区画

?? 中央校舎：ジラの激突により半壊

?? グランド：熱線の直撃により崩落・陥没

?? 学園講堂：全壊

?? 行政校舎：全壊

?? 生徒宿舎：全壊

?? 食堂：全損

?? モニュメントタワー：投擲されたジラの直撃により倒壊

?? 第2アリーナ：熱線直撃により全壊

?? 第2シャフト：機材落下により全損

?? 第2シャフト整備区画：全損

?? 第2シャフト生徒宿舎（仮設棟）：全損

?? 第1地下格納庫：崩落

?? 第2地下格納庫：埋没

?? 第1アリーナ：熱線直撃とジラの激突により全壊

?? 第1シャフト：ゴジラ降下と放射能漏洩により崩落・全損

?? 学園原子力発電所：ゴジラに捕食され全損

?? 南部区画

?? 南校舎：熱線の余波とジラの激突により全壊

?? 第3アリーナ：熱線直撃により全壊

?? 潜水艇ドック：不明

?? ドック連絡通路：ガス管破裂と爆発事故による火災発生・封鎖

?? 東部区画

?? 東校舎：熱線の余波により半壊

?? 湾港埠頭：健在・封鎖中

?? 埠頭直通連絡通路：不明

- ?? 第4アリーナ：熱線の余波により半壊
- ?? 第4アリーナ格納庫：全損
- ?? 房総モノレール本土連絡線：非常事態につき通行不可
- ?? 西部区画
- ?? 西校舎：熱線の余波とジラの激突により全壊
- ?? 第5アリーナ：熱線の余波により半壊
- ?? 地下非常用排水エリア：クラブロス、シヨツキラスの侵蝕により
浸水・放棄
- ?? 北部区画
- ?? 北校舎：熱線の余波により半壊
- ?? 第6アリーナ：熱線の余波により一部倒壊
- ?? 物資搬出入ターミナル：被害拡大中・変異生物と交戦中
- ?? 第1シャフト方面連絡通路：全損
- ?? 第1シャフト周辺通路：封鎖・放棄
- ?? 第2シャフト方面連絡通路：放棄・篠ノ之箒が交戦中
- ?? 第1ライフライントネル：健在
- ?? 第2ライフライントネル：健在
- ?? 夢見島飛行場：封鎖中
- ?? 総合
- ?? 学園地上区画：7割が放射能により汚染
- ?? 学園地下区画：生物浸透により9割を放棄
- ?? 電力施設：発電設備全損により途絶
- ?? 水道設備：水道管破断により途絶
- ?? ガス設備：ガスパ破裂と爆発により途絶
- ?? 施設損壊率：91%
- ?? 施設稼働率：7%
- ?? 未確認箇所：2%

提案：本学園施設の放棄。

第2シャフト方面連絡通路

先程閉ざされた隔壁より150メートル北の通路。

ここでは重傷を負った教員の機体の生命維持機能を継続させるべく、千冬達が自身の機体からシールドエネルギーの転送を行なっていた。

ほんの僅かな——文字通り絞りカスとしか形容できぬ量のものしか残されていないが……無いよりはマシである。

「……つ、あ……お、織斑先生……置いて行って下さい……私なんか、そんな処置をしてたら、先生が……。」

教員——左脚がヒザ関節より下から千切れ、骨が内臓を傷つけたのか酷い内出血を起こしている——が口を開く。

チアノーゼを起こしている唇は赤みを失い、青紫色に変色している。

……絶対的に血も足りないからか、意識も朦朧としている。

「……バカを言うな、私はお前の上司だ。部下であるお前を救う義務がある。」

千冬はただ、その教員に模範的な事実を告げる。

——ふと、後退して来る颯式型が視界に映る。

「ッ、更識！大丈夫か☒」

千冬が声をかける。

続くように、セシリアも口を開く。

「簪さん！大丈夫ですか☒」

気かけながら、セシリアは簪の元に駆け寄る。

そして、駆け寄って来たセシリアを目にした簪は、顔をしわくちやに歪めて。

「っ、セシリア…簪が…簪が……。」

珠のような涙を零しながら簪は呻くように口を開く。

——それで、セシリアも事態を察してしまふ。

簪は、命を落とすか、あるいは殿を務めて簪を逃したのだ——

——と。

「…簪さん……」

思わず、セシリアも心が沈んで行くような感覚が走る。

だが——それを許さぬように、警告ウインドウが視界に投影される。

『警告：敵性変異生物接近。推定個体数200。』

——簪や千冬には日本語で。セシリアには英語でその内容が網膜に投影される。

「に、ひやく…?」

血が、凍りついた。

あまりに多過ぎるその「敵」の数に目を剥いてしまふ。

山田が絶句する。

そして望遠センサーをもって、「敵」を視認する。

——シヨッキラスだ。

200体以上いるのでは無いかと錯覚するほどに溢れて来る無数のフナムシ達。

それは濁流のように真っ直ぐこちらに向かって来る。

「そんな…どこから…いえ、どれだけいるんですか…☒」

教員の一人がヒステリックに叫ぶ。

それに全員が同意する。

——確かに、アレが現れる場所は幾らでもあるだろう。

…通気ダクト。

…配電溝。

…排水管。

…放置された通路。

——これだけ肥大化し、廣大化した地下空間であれば、ひとつ通り道を塞いだとしても、いくらでも穴があるだろう。

だが——これだけの数が一度に湧いて来るのはあまりにもおかしすぎる。

(…まさか——学園のどこかで、繁殖している…?)

この異常な事態に置かれながらも、簪は冷静に、そして考えたくも無い最悪の仮説を考えてしまう。

——だが、他に説明のしようがない。

いくらあのデカブツゴッヅラに取り付いて来たとしても、数があまりに多過ぎる。

「…織斑先生、私が食い止めます。織斑先生は皆さんを連れて早く!!」

山田の声で、その思考はブツ切りにされる。

——無茶だ、と簪は思う。

…如何に第2世代機単騎で第3世代機2機を同時に相手どり、圧倒することができると腕前がある人間だろうと、機体が万全ではないこの状況で単騎で殿を務めるなど自殺行為に他ならない。

——そしてシヨツキラスは、こちらの事情など御構い無しに迫り来る。

「や、山田先生☒無茶です! あんな数一人じゃ…わ、わたくしも…」

セシリアが食ってかかるように口を開く。

しかしそれを両断するように。

「オルコットさんは皆さんと一緒に逃げなさい! 今戦えるのは私くらいです…なら、私がやらないといけない。」

——確かに、シールドエネルギーの量が現時点で一番多いのは山田だ。

だからこそ、彼女は殿を務めることを志願した。

「——それに、私は教師です。教師なら、生徒を守らなくてどうするんです。」

ラファールに近接装備たるダガーナイフを2本保持しながら、微笑むように言う。

——眼前にシヨツキラスが迫る。
ナイフ2本のみでは対峙などしようもない。
弾薬を使い果たしている今ではどう足掻いても逃げるしかない。
だが、それを睨みながら、山田はナイフを保持したまま構え——

『——二階級特進したいと思うのは勝手だが…その前に全員
両脇に退け…!!?』

「えっ——」

突如緊張を断ち斬るような通信。

同時に——再びヘッドセットから響く、後方からの照射警
報。

それに全員が反応し、咄嗟にトンネルの両脇スレスレにまで、機体
を擦りながら退避する。

——直後、トンネル内部の空間に稲妻が奔^{はし}る。

青白い稲妻は空気を焼きながら、シヨツキラスの群れに放たれる。
瞬時に水分を蒸発する。

気化した体内の水分が肉体を破裂させ、トンネル内部にシヨツキラ
スの体液と内臓物が飛散する。

それはまるで、電子レンジに入れた生卵が破裂するように。

——蒼雷^{シヨツキラス}が船虫を粉碎する…!!?・

……もって、事態は1分とかからず収束した。

200体もいた異形の群れは、そこには在らず。

遺されたのは、弾けた水風船の中身と変わらなくなった、船虫だつ
たモノの残骸だけであった。

「??
S 学園北部区画
地下物資搬出入ターミナル

「??
メーサー照射やめ!!?」?

? 光の怒号が飛ぶ。?

? : 同時に、先程まで殺戮の雷霆を撃ち放っていたパラボラアンテナレーザー照射器が沈黙した。?

? —— ターミナル ここでの戦闘は終結しつつあった。?

? 第1シャフト方面連絡通路からの侵攻にはありつただけの銃火器とレーザー、そして地雷：いや指向性爆弾による掃討をもって対処し、結果的にはどうにかなった。?

? : 無論、損害が出なかった訳ではない。?

? 隊員が1名重傷、3名中傷、7名軽傷。?

? : 死者が出なかったただけ良いだろう。?

? だが問題は—— 弾薬が枯渇しつつある事や、民間人が未だ避難しきれていないこと。?

? —— 元々、このターミナルは非常用にしか使われていなかった事やアーリーナに物資が集積されていた事から、ターミナルに掻き集めた弾薬だけでは十分とはいえない。?

? : もう一度襲撃を受ければ疲弊する。?

? 弾薬の消耗を抑えるべく、レーザー車によるトンネルに向けた漸減など—— ある程度はレーザー車に対応出来なくはない。?

? だが私達は良くても民間人が良くない。?

? 彼らは疲弊しきっているし、教師部隊が乱射したせいで落下した機材の下敷きになった人間もおり—— 既に2名が死亡している。?

? 下敷きになった者は教師部隊などの手の空いている者が救助を実施。?

? 現在はどうにか避難も大詰めに至りつつあるが、万事が全て上手くいくとも限らない。?

? 「ちよつとあんた! ボケツと突っ立ってないで手伝いなさいよ!!

? 教師でしょ☒」?

? —— ふと、怒鳴り声が響いた。?

「自衛官警備課の人達は警戒に当たってんだから、ヒマな教師あんた達が手伝うってのは当たり前でしょうが！あんたバカなの☒ゆとり世代なの!?!」?

「そこには、教師部隊と上級生選抜隊の指揮をしていたと思しき女に噛み付く鷹月の姿があった。」?

「その、傍らには——教師部隊の誤射で落下した鉄骨に、腕を潰された神楽がいた。」?

「そしてその鉄骨を退かそうとする鏡ナギと立花。」?

「それを見て、慄くように教師が聴く。」?

「わ、私に何をしろって……」?

「見て分からない☒鉄骨をどかすなりなんなり——……」?

「それに苛立った鷹月が叫ぶ——だが、それを遮って。」?

「……いいえ……良いわ、鷹月さん。……ねえ、とりあえず銃とか無い?……出来れば、拳銃が良いわ。」?

「左腕を押し潰す鉄骨の齧らす痛みのせいか、珠のような汗を浮かべ、荒い吐息混じりの言葉を吐く。」?

「それに、教師はただ呆然としながら非常用に渡されていたK9ピストルを取り出す。」?

「K9ピストルとは、アメリカ・カーアームズ社が製造したコンパクト・ピストルであり、素人や女性でも取り扱いが簡単な銃として知られていた。」?

「「ちよつ……か、神楽ちゃん!?!」?」?

「まさか自決するつもりか——と思いついたのか、鷹月が正気を疑うように叫ぶ。」?

「そしてそれが本気ならば、周囲に流されて拳銃を手渡そうとしていて教師は自殺幫助者という事になる。」?

「だが、そんな鷹月の感情を悟ったのか、神楽は微笑

みながら。？

？「大丈夫——死ぬ気なんか、ないから…!!？」？

？拳銃を手渡そうとする教師の手から半ば強引に拳銃を分捕りながら言う。？

？——直後、彼女は左腕の肘関節をゼロ距離で撃ち抜いた。？

？…銃声が鳴る。？

？…薬莖が飛ぶ。？

？…肉が裂ける。？

？…骨が砕ける。？

？…鮮血が舞う。？

「…ツ」、う、あ”…っ? ——!!?」?

？想像以上に痛いのか、痛みを堪えるように歯を噛み締める口から、声なき声が漏れる。？

？——だが、やると決めたのか、彼女は躊躇いなく引き金を引く。？

？…2発目。？

？…3発目。？

？…4発目。？

？…5発目。？

？…6発目。？

？…7発目。？

？…弾切れ。？

？弾丸を撃ち尽くした拳銃の先には、穴あきチーズのように風穴を穿たれた左腕の肘関節。？

？皮一枚と切断を免れた僅かな筋肉繊維や1本の神経回路で辛うじて繋がっている肉片。？

？——それを。？

？「ツ、づ、あ”あ——ツ!!」？

？——力任せに、神楽は引き千切る。？

？辛うじて繋がっていた筋肉繊維も、神経回路も、後遺症が残るや

もしれないというのに、彼女は躊躇いなく引き千切った。？

？水溜りのように、血が溢れ出す。？

？「つ、くくくくくくくくくくくく!!?いつつ…たい…!!?」?

筋肉繊維の断裂。

神経回路の切断。

動脈静脈の破断。

? ————— それらの痛みが一斉に神楽の脳を焼く。？

?思わず目をきつく閉じて顔を顰める。？

?…痛い、なんてモノではない。？

?体が動かない。？

?止血しようとさえ出来ない。？

?脳が動かない。？

?考える事も言葉さえも浮かべられない。？

?肺が動かない。？

?息をする事さえできず気道が締められる。？

? ————— ありとあらゆる機能が壊れると錯覚するような痛

みが身体を内側から刺し貫く。？

?…彼女に出来るのは、ただ痛みを抑えようと口から熱と痛みを孕

んだ荒い息を漏らすことと、生理的な涙を零すだけ。？

? ————— だが頭のどこかに達成感が浮かぶ。？

?…何しろ、腕を挟み潰されたままという状況では無くなったの

だ。？

? 挟まれていた腕は、素人目に見ても二度と使い物にならないのは

明白だった。？

? 上手く逃げだせたとしても、潰れた左腕は後程切断されるのは確

実。？

? ————— ならば、邪魔だから此処で落としておこう。？

? そう思ったからこそ、神楽はアツサリと自分の腕を千切ってみせ

た。？

? 「…千尋みたいには……いかないわね…。」?

? アドレナリンが痛覚を麻痺させる。？

? ———— そこから生じた余裕からか、笑いながら神楽は口を開く。?

? 「か、神楽ちゃん何やってんの!?!」?

? 神楽の行為に呆けてしまっていた鷹月が正気を取り戻すと、すぐさま神楽の左腕———の断面———に手を当て、止血しようとする。?

? ———— こういう場合、断面に蓋をしても意味がない。?

? ∴血管から断面に向けて赤血球が流れ落ちる以上、最終的には血死という結末に直結する。?

だからこういう場合は? ————?

? 「神楽ちゃん、ちよつと痛いけど我慢して!!」?

? 鷹月は緊急時用に持ち歩いていたパラコードをカバンから取り出すなり、それを神楽の二の腕へ力一杯巻き付ける。?

? ———— 腕が千切れた こういう場合、断面に蓋をするのではなく断面より

上の箇所の血管を塞ぐことが重要である。?

? そうすることで、少なくとも失血死に至る可能性を減らすことが出来る。?

? ———— これは以前、ご近所さんと海外旅行へ行った先で隣の旦那さんが脚をサメに食い千切られた時に、父がした対応。?

? そしてその際使ったのがパラコード———パラシュートに使われているロープである。?

? パラコードはかなり頑丈で、軍民間人問わずサバイバルツールのひとつやベルトの素材として広く普及している。?

? ただ、頑丈かつ束縛性が強いパラコードを止血用を使う、という入れ知恵は軍隊やそれに連なる者でなければそうそう知らない。?

? ———— 鷹月は、それを自身もするやもしれない事態に備えてソレを持ち歩き、たつた今父が行った止血方法を真似ただけ。?

? ∴本職の人間に比べて稚拙ではあるが、止血性は確かである。?

? 「できた∴!多分、これで出血は抑えられると思う!!」?

? 未だ焦燥を孕んだ声で、未だ事態が飲み込めない声で、鷹月が神楽に言う。?

? ――― 教師はただ、その理解を超えた行動力を前に啞然とするしか出来なかつた。?

? ――― 同時に、跳躍ユニットが空気を焼く音がした。?

? ――― 第1教務隊と日英合同技術試験隊、計8機は、第2シャフト方面連絡通路前エントランスに着陸した。ランディング?

? 彼女たちは全員、マトモでは無かつた。?

? いや、精神的な意味ではマトモだろう。?

? だが、外観や肉体的な意味でマトモな者は誰一人としていなかった。?

? …… 返り血に塗れた者。?

? …… 四肢の何れかを失つた者。?

? …… 生命維持として機械に繋がれた者。?

? ――― それだけで、彼女らが辿つた激戦具合を察せられる。?

? ふと ――― 千尋と箒がない事に気づく。?

? (――― そうか…彼奴らは…。) ?

? ――― 悲しくないと言えばそれは明確な嘘になる。?

? 指揮官、という後方に待機せねばならない自らを呪いたくなる程には、荒んでいる。?

? だが ――― 今はそれ以上に、遣らねばならない事があまりにあり過ぎる。?

? …… 私情に浸るのは、遣らねばならないことを全て終えてから。?

? 「 ――― 舞弥、彼女達に毛布か何かを。」 ?

? 「はっ ――― 」 ?

? 光の指示で舞弥が毛布を手に、彼女らの元へ駆けて行く。?

? その行動は迅速、の一言に尽きる。?

? それを見届けた後に、山本から手渡されたタブレットを睨みつける。?

? —— 画面に映るは学園の地下区画に張り巡らされた、熱感知センサー群と動体センサー群による索敵網の索敵範囲。?

? クラブロスやショットキラスの侵食によつて相当な範囲が壊滅したものの、ターミナル周辺は未だ大部分が機能していた。?

? そしてターミナル周辺：隔壁で閉ざされた向こうは、クラブロスやショットキラス —— と思しき動体反応によつて赤々と染められている。?

? —— その中に、千尋と箒はいる。?

? (—— 殿を務めようなど：馬鹿共が：!!?) ?

? —— これでは探そうにも探しようがないし、救出しようにも救出しようがない。?

? 助けるべく隔壁を開け放せばショットキラスやクラブロスの侵攻を許してしまう。?

? ……でなくてもどこかの抜け穴からこちらに迫つて来る。?

? —— ただでさえ危ういターミナルの民間人を更に危険に晒してしまう事になる。?

? ……ターミナルの民間人210人。?

? ……ターミナルの自衛官48人。?

? ……隔壁先の自衛官(生徒)2人。?

? —— 切り捨てるべきはどれか、分かつてはいる。?

? それは当然隔壁先の2人。?

? 見殺しにする形になるが、2人を見捨てることで民間人の脱出は無事に完了する。?

? ……だが：あの2人を見捨てることを、私は許容できない。?

? ……ターミナルより民間人を脱出させてから救出：否、時間がない。?

? ……VTシステムの件で学園に向け発進待機を命じられていた在日米軍横田基地所属のB-1爆撃機ランサーがゴジラ出現と変異生

物の浸透を受け燃料気化爆弾を搭載して発進。?

?…この地下さえも焼き払うつもりだ。?

?幸いにも、民間人脱出までは堪えてくれるそうだが。?

?…だが仮に我々が踏み留まり、爆撃前に救出を実施しようにも—

—千尋も箒も生きてるかさえ疑わしい。?

?—2人とも死亡している可能性の方が極めて高い。

?

?「—ああ、くそっ…!!?」?

?…つくづく、自分は指揮官に向いてないと思わされる。?

?合理的な判断を下せないでどうする。?

?—千尋と箒を見殺し(生きてるか怪しいが)にして民間人を逃し、こちららも損害と犠牲を抑えて離脱する。?

?…それが合理的な判断。?

?—民間人を逃しながら、身内だからという理由で生き

ているかさえ怪しい千尋と箒の救出に向かい、返って犠牲を増やす。

?

?…それが感情的な判断。?

?指揮官としてどちらを取るべきか、それはもう分かりきった話。

?

?—仮に妥協案を見つけるとすれば。?

?それは千尋達を誘導しながら民間人を逃している第1ライフラ

イン・トンネルとは別の、第2ライフライン・トンネルで警戒中のメー

サー車分隊と合理させる—くらいだろうか。?

?…「18式メーサー殺獣光線車」—異界から流れ込ん

だ90式メーサー殺獣光線車のデータを基に開発された、この世界に

おける人類史初のメーサー車—は多少なりとも高い速力

と走破性を持つ。?

?…待機させている第2ライフライン・トンネルはコンクリート式

の扉と二重気密隔壁で閉ざされた、学園敷地内でありながら学園から

遮断された場所。?

?…そしてそのセンサー群は無傷。つまり今のところ最も破壊

の手が及んでいない区画。?

?——気化爆弾による爆撃が始まって、おそらく五分は持ち堪えられる。?

?そこへ2人を誘導させられたのなら、まだ助けられる方法がないわけではない。?

?——だが…。?

?「…山本、2人と連絡は?」?

?「——繋がりません…。」?

?「…そうか…。」?

?光は頭を抱える。?

?助かる方法がないわけではない。?

?だが——通信で呼びかけが可能であることが大前提であり、その大前提が満たされていない現状では話にならない。?

?——此方が通信を出来ても彼方が通信出来なければ意味が無い。?

?そして何より——／直後、思考を遮る様に、世界が揺れた。?

?——それは、腹の奥底に響く轟音。?

?「——」——一佐、ゴジラが…この上を通過して行きます…。」?

?地鳴りがターミナルという箱を揺らす中、山本が言う。?

?——死が、すぐ近くにいます。?

?「…ああ、くそ——。」?

?——やはり長くは留まっていられない…もう、腹をくくるしかない。?

?「山本、第2ライフラインの三村三佐に伝えろ。内容は——」——

????????????????????????????????????

IS学園第2シャフト方面連絡通路

湿ったコンクリート。

腐臭を放つ血肉の塊。

響く、一人の荒い息。

暗い、閉じた世界の中。

赤色だけが灯す異様な空間。

—— 箒は、その中で佇んでいた。

非常灯が灯す廊下の中、隔壁を前に武器を手にした彼女はぼんやりと廊下の果てを覗いていた。

足元には、クラブロス達であった無数の肉片が広がる血肉の海。

： 箒を逃した直後に押し寄せて来た第1波のクラブロスは全て殺してしまった。

—— その証拠に、今の箒は全身に鮮血を浴び臓物を絡みつかせているという、修羅を体現したような有様となっている。

付近にいる個体が仮死状態になっているだけの懸念も当然残るだろう。

だからそうならないように—— 全身を刻んでやった。

先程までの撤退戦で、致命傷を負わせてから仮死状態による奇襲を受けたことそれあれ、原型を留めない程にまで破壊した個体の回復は見られなかった。

： なら、クラブロスには黒い暮桜程の回復能力は無いワケだ。

であれば、過剰なまでに斬り伏せるか、脳を破壊してしまえばそれで良い。

そしてそれを実践すれば良いだけの、非常に簡単な話。

その結果が今眼前に転がっている屍の山。

殺すこと自体は成功したが——

「…次で、限界か……。」

薄く笑いながら、箒は口を開く。

推進剤、シールドエネルギー残量が1割弱。

兵装耐久度が6割にまで低下。

生命維持機能は作動率2割。

《次は大挙して来られたら終わるわよ、貴女。》

ふと、イリスが箒に語りかける。

その口調はどこか——憐憫を抱いていた。

イリスとしても、それは単に宿主を失ってしまうから、というだけではない。

——誰にも傷ついて欲しくないから、自分一人だけが傷つければ良い。

だから千冬も逃した。

覚悟を見せた簪も逃した。

確かに、それなら少なくとも箒が逃した彼女らが死ぬ可能性は目に見えて下がるだろう。

そうすれば少なくとも不幸にはならない。

箒は本気でそう考えている。

そして——その行為のせいで、心を傷付かせる者がいることを理解出来ずにいる。

ほんの些細な勘違い。

ほんの些細な擦れ違い。

それが取り返しのつかぬ状況に箒を至らしめていた。にも関わらず。

「——うるさい……、索敵に……集中している……。」

箒は自らのやり方を曲げずに抗ってから死んでやる——

と、頑固に、そして健気に死へ墜落することを選んでいった。

それが余りに痛ましくて——イリスは憐憫を浮かべたのだ。

イリスの器という立場に置かれてしまった少女の思考回路は既に変質を始めている。

——人類を守護する、という目的のために箒は都合良く改竄されていく。

箒の意思ではなく。

イリスの意思ですらなく。

ただ遺伝子に刻まれたプログラムによって改竄されていく。
…ただ単に、人の殻を被った兵器へと。

ふと、イリスが進行するふたつの集団を探知する。
そしてイリスと感覚を共有している箒もそれを探知する。

ひとつはショッキラス。

ひとつはクラブロスともうひとつ。

《…箒!!?》

「見れば分かる。」

? 右手には92式火薬式射突槍《改》
タイプ94:パイルバンカー

? 左手には爆発反応型追加装甲。
シエルト

? 背中には試製15式誘導熱放出剣。
タイプ15:プロトメーサーブレイド

…これが残された最後の装備。

近接刀【葵】はすでに喪失。

? 在るのは先述の計3つのみ。

? 《箒…?》

貴女まで死んだって意味がない、諦めて逃げなさい。
い? ?

? …:そうイリスが言おうとして、遮るように? ?

? 「…:諦めろと言いたいのか? 悪いがその気は無い——」。

?

? 箒は言い放つ? ?

? ?そして続いて口を開いて? ?

? 「それに、武器が無くなれば跳躍ユニットの推進剤を用いて自爆すれば良いだけのこと——」? ?

? 《——いい加減になさい…!!?》?

? その言葉に、イリスは堪えていた限界を迎えた? ?

? その諦観に満ちた態度に、イリスは苛立ちを抱覚えた? ?

? その覚悟に歪められた箒に、イリスはどうしようもない程に憐憫を抱いた? ?

? 《…:貴女は、柳星張の正規の依り代ではない…:貴女は巻き込まれ

たに過ぎない：貴女はそんな風に歪められる必要など無い：!!?>>?
? イリスは言う。?

? 《本当は怖いんでしょう：□貴女は巻き込まれただけで、私だつて貴女を欲してなんかいない。》?

? ———— そう、篠ノ之箒は柳星張イリスの本来の依り代ではない。?

? …… 箒はただ10年前の白騎士事件直後に、どういうわけか柳星張イリスを埋め込まれてしまった、柳星張とは無関係の人間。?

? 本来ならば、柳星張イリスに適した依り代を用意する者達が居た。?

? それは柳星張イリスをもつて、悪しき者ギャオスによる人類の絶滅を回避する為に、人柱を用意していた。?

? …… 血縁的には、箒は無縁ではない。?

? だが——— 元より依り代として育てられたワケではないのならば、何も知らないのならば、彼女は無関係と評するに相応しい。?

? ———— だからイリスは、箒にはこんな風になつて欲しくなかったのだ。?

? …… だというのに。?

? 《だから———>>?>>?

? 「うるさい。静かにしろ、私1人が死んだつて、誰も気にしない。?

? だけど自分勝手に死ぬくらいなら、殿を務めて、簪たちの為に：誰かの為に、千尋にまた逢う為に、こんな命——— 捨ててやる。」?

? ———— 其処に、頑固で負けず嫌いで恋する乙女だった彼女はもう居ない。?

? ———— 世界に、時代に翻弄されながらも純愛を願った少女はもう居ない。?

? ———— 今の彼女は、人間性の残り滓を僅かに宿した、機械になろうとする人間であつた。?

? 事態は——— イリスにとっては本来好都合だが、イリス自

身の意味からすれば悪化。？

？—— 箒にとつては悪化、されど本人の意味からすれば都合。？

？…少女に人間のままでいて欲しい怪獣と。？

？…自らが怪物になつても構わないと思う人間。？

？—— ただ自分を封じた上で、剩え人類の為人柱になる道を進んで受け入れてしまっている。？

？それがどうしようもなく哀しい。？

？…あんな非業をまたやらされるのか、とイリスは怯える。？

？そして、自分が生きる理由を失つたが故に暴走状態の箒は、眼前より迫る異形達を視認する。？

？「—— 来い、私が黄泉へと道連れにしてやろう。」？

？箒が告げる。？

？—— もうそれは、篠ノ之箒の意思では無い。？

？…その、痛ましさを理解して。？

？《—— 馬鹿…!!?》？

？ただ彼女を言い表すに相応しい言葉を吐き捨てながら——
—— 自らを箒に植え付けた存在を呪つた。？

？—— そんな2人の事情など気にかげず、異形、クラブロスが迫る。？

？…異形が迫り立つ。？

？先程まで対峙していた個体より僅かに大きい。？

？…一体に留まらず、次々と鎌首をもたげていく。？

？湧き上がる異形は4体。？

？それは獲物を食らわんとする捕食者として、眼前の人間へと鋏を放つ。？

？異形の鋏が少女を切り刻まんと、あるいは少女を押し潰さんと。？

？防ぐ事も躲す事も構わぬドン詰まりに佇む少女を飲み込まんと鋏の波が迫る。？

？篠ノ之箒というちつぽけな獲物を逃すまいと両手を広げ、高波と

なつて襲いかかる。？

？———それを前にして、箒は左腕に保持した爆発反応追加装甲を殴りつけるように前面に突き出して。？

？「———起爆…!!?」？

？告げる口頭命令。？

？———爆発する。？

全ての反応装甲は刹那にして爆炎に。

爆炎の中より豪雨の如く、内部に仕込まれていたタンクスステン合金の散弾が飛翔———クラブロスを、挽き肉へと変質させる。

そのまま———爆発の衝撃が、クラブロスを弾け飛ばす…!!
それで、4体の屍が出来上がり———シエルツェンは大破し

た。

：元より、爆発反応装甲は装甲の表面で爆弾を起爆させているというモノ。

そして爆発という現象は何の処置も取らねば、基本的に360°全方位に拡散する。

それは熱も衝撃波も当然ながら。

：であれば、こちら自身もダメージを受けてしまうのは当然の道理。
———眼前より、新たに異形が迫る。

：その数32体。

それに対し箒は、92式火薬式射突槍《改》を放り投げるようにして左手に持ち替える。

そして右手で背部兵装担架より———抜刀。
試製15式誘導熱放出剣を、その手に握り取る。

？「?」———?起動。」?

？箒の口頭命令。？

———?それに応えるように、刀身に?蒼電?が奔る。?
?箒はその刀身の切っ先を迫り来る異業たちに向けて?———

———6体のクラブロスが?鋏をもって、箒を叩き割らんと振り下ろす。?

それを――

悉く討ち払う、蒼菜の斬撃――

!!

驚くような声の主はクラブロスのものである。

異形が眼を見張るのも当然。

クラブロスの甲殻は真正面からの物理的打撃であれば、12・7 m

m重機関銃に手榴弾――

――どちらも人間の肉体を容易く引き

裂ける火力を有する武装――

――の直撃さえ耐え抜く硬度を持

つのだ。

関節を肉薄することによってようやく初めてダメージを与えられる……言葉にするのは簡単だが、実際に行おうとすればそれは至難の業。

……そうでもしなければ太刀打ち出来ない。

仮に出来たとしても、その荒技は刀身を痛めてしまう――

現に、箒は2本の葵を喪失していた。

近接刀

……シエルツエンの爆発反応装甲が失われた以上、箒に残された武器はパイルバンカーとメーサーブレードのみ。

そしてメーサーブレードは武器の性質上、刃そのものの耐久力は高くない。

……故に、今の箒が異形と真正面から打ち合う事は死を意味する。

その前提条件がある以上、クラブロスの存在は一体であれ命運を左右し得る、要害であった。

――その全てを覆すように。

異形を既に8体

――全体の4分の1を、真正面からの一撃

の下に殺していた。

だがそのような理屈は人間の観点から見てわかるモノ。

人間の理屈など分からぬ異形は眼前の箒に構わず殺到する。

「……しいい……?」――次弾装填……!!?」

紡がれる口頭操作。

――メーサーブレードに次なる電力が繋がれる。

装填される間は無防備となる中、クラブロスの殺到は止まらない。

ならば、その穴は副兵装サイドアームを持って塞ぐまで——!!?

「ふッ——!!?」

力む声とともに左手は手に握られた武装の引き金を引く。

直後——火薬を爆裂させて、92タイプ94式火薬式射突槍《改》より1トンの鉄杭が飛翔する。

：それは、質量エネルギーと移動エネルギーの二重奏をもって異形クラフロスに孔を穿つ——!!

「」

気味の悪い断末魔を上げて、取り囲もうとした一体が絶命する。

：だが、その他の個体——眼前に迫り来る3体と、それに続く20体は健在。

故に——箒は止まらない。

体勢を崩したまま、パイルバンカーの引き金を引く。

反動でさらに体制が揺らぐ。

だが、引き金を引くたびに身体を揺るがす反動でさえ、彼女は制御する。

：一槍目。

：二槍目。

：三槍目。

その様は舞踏のように——廊下には新たに肉塊のオブジェが3つ出来上がる。

：なれど、異形クラフロスの侵攻は止まらない。

——それを前にして、箒は脚を踏み出す。

止まらない。

止められない。

全て此処で詰め。

篠ノ之箒クラフロスの命も。

異形クラフロスの侵攻も。

その結末は理解している。

：なればこそ、人間的に考えれば、逃げるのが正解。

：だが、人間的に考えることを、柳星張篠ノ之箒が許さない。

…どちらにせよ死ぬ。ならばせめて人類の役に立って死ななくてはならない。

——かつて、先の大戦で日本は戦艦の砲弾に匹敵する量の火薬を積んだ爆弾を抱えて敵艦への体当たりを行うという命令を遵守させられていたという。

…当然、それをすれば死ぬ。

だからそれは、死ぬことを前提とした攻撃。

彼らは元首のため国のため家族のためと命を投げ打って死ぬことを選ばされた。

——今の箒とどう違おう。

…退路は閉ざされ。

…武器弾薬など既に枯渇し。

…生存の余地など既に無いというのに。

…自らの意識は「人類の存続」へと変質し。

…自らの精神は「人類のため」に改竄され。

…死と引き換えに、「人類の延命」を強制され、それを受け入れた。

——もはや今の箒は特攻兵器であった。

国家でもなく軍でもなく、人類の既存の枠組みだけのみならず、延いては人類という種そのものの為に自由意思を破棄させられた、ニンゲンの皮を被った、怪獣専用の特攻兵器。

——それはかつて、先史人類第3文明^{レムリア}が遺した人類の防護機構。

…守護者^{ガメラ}を真似て造られた、人柱^{生け贄}をもって稼働する、ある種の生物兵器。

…一人の地獄をもって、万人の平穩を遺そうとした、矛盾と祈禱に満ちた対獣専用特攻兵器。

それが柳星張^{イリス}——箒に埋め込まれた兵器の名。
……ああ、だからそんなことがどうしたというのだ。

箒はメーサーブレードを振るう。

今の箒の人間らしい思考は停止していた。

もはや剣を振るう自動殺戮人形。それが箒である。

…その筈に異形クラフロスが大挙する。

——黒鉄の直刀が光を放つ。

黒曜石じみた色であった刀身は淡い群像色に輝き、激しい稲妻を発し。

「斬撃——…一斉射!!」

トンネル世界を、眩いばかりの蒼雷で照らし上げる…!!

——群像の刀が一閃される。

刀剣はその軌跡通りに誘導熱メーサーを放ち、異形クラフロスを残骸さえ残さず蒸発させる…!!

そればかりか、小メーサー砲と言うべき光と熱の塊はトンネルを震動させる。

おおよそ、10体近い個体が消滅した。

「——はあッ!!?」

それに続くように——振るわれる蒼雷の剣戟。

…一体。

…二体。

…三体。

…四体。

…五体。

…六体。

…七体。

甲殻は枯れ木のように碎け散る。

肉は内側より膨張し、弾け飛ぶ。

命はソレに容易く刈り取られる。

——その武装は確かに、怪獣…否。生物全てを等しく殺し尽くす魔剣だろう。

銃弾さえ防ぐ堅牢な甲殻などに影響されず、内側から水分を蒸発させて破裂させることで確実に死を齎らす対生物特攻武装。

コヒーレント・マイクロ波——電子レンジで使用されている加熱方式——

——を応用した一種の光線兵器。

この世界の技術では確立し切れず、墨田大火災の後に確立された概

念実証兵器。

——それがメーサー兵器である。

だが——当然、リスクはある。

ただでさえ生物に対する特攻能力を持つのだ。

：機体の操縦者保護機能は既に停止。

：絶対防御さえ、まともに機能していない。

今の筈は生身とそう変わらない。

：その状況下でそれだけのモノを振るえば、当然——肉体は限界を訪れる。

それは唐突に。

——ぼつん、と音を立てて、右腕と両脚の筋肉の千切れる音がした。

「あ。」

——間拔けな声が漏れる。

それは自らの油断を呪う声でもなく。

それは敵を前に狩られる側に堕ちた絶望でもなく。

：ああ、壊れてしまったのかと。

脆い自分の肉体からだを、つまらないように呟く声。

その筈に、生き残った三体のクラブロスが迫る。

それに対して、もはや人間らしい思考も感情もない筈は、跳躍ユニットのリミッターを外そうとする。

跳躍ユニットの暴走による自爆——即ち自決を、迷いなく行おうとして。

「——おい、ふざけんな」

——懐かしい。

実際はついさつきまで聴いていたのに、とても懐かしく感じる声が、鼓膜を震わせた。

跳躍——クラブロスの背後に稲妻が走る。

そしてソレ等は内側から炸裂し、跡形さえ残さず蒸発する。

残ったのは、そのクラブロスの返り血を浴びた筈と。

同じくクラブロスの返り血を全身に浴びて、満遍の無い赤を纏った、

「俺の女に、手エ出してんじゃねえよクズ蟲共。」
死んでしまったハズの——篠ノ之千尋であった。

EP—40 閉幕二至ル学園

正午12時01分

IS学園北部区画・第2シャフト方面連絡通路

「…ち、ひろ?」

「おう。無事か?遅れて悪かった、箒。」

——信じられない、という顔で箒は千尋を見上げる。

だって、だって千尋はあのデカブツゴジラに木っ端微塵に吹き飛ばされて肉片に

なったハズで——今の千尋みたいに五体満足に戻っている

事も、ましてや生きている事さえ有り得ない筈だった。

だから、確かめようと——千尋の頬をつねった。

「?!ッ痛いひゃいひゃいひゃいひゃい!ふあんへふんふんふん痛だア痛」

頬が伸びた所為で間拔けな声を発しながら千尋は抗議をする。

…普通、夢か現実かを確かめるのならば、自分の頬をつねるモノなのだが。

それで箒は自分の頬もつねる——痛い。

痛みは痛覚が作用している証拠。

過度な痛覚は夢現ではない証拠。

つまり眼前の千尋は生きている。

…そう分かると、思わず感情が込み上げて来て。

「——馬鹿ア!!?」

「ぶっ」

『ラッキースケベに遭った女子のような顔』をして、思いつ切り千尋を引っ叩く。

対する千尋はなぜ引っ叩かれたのか分からず、箒の理不尽に怨めしそうな眼差しを向ける。

——その眼差しの先にいる少女は、泣いていた。

明らかかな怒気を浮かべていて。

顔はしわくちやに歪んでいて。

だが嬉しさも奥に潜んでいて。

怒りと。

悲哀と。
歡喜と。

それらが入り混じった、複雑な感情。
それが箒を支配していて、

「死んだと、思ったじゃ、ないか——ばか、あ…。」
ボロボロと溢れ出す涙と共に、箒の身体が膝をつくように崩れ落ちる。

それで千尋は崩れ落ちる箒を受け止めて——
侵食が拡大していた事を視覚した。

「箒——おまえ、まさか…。」
千尋が驚いた顔をして箒を見る。

——
「どうして、侵食が拡大している？と言外に問いかける顔。」

それを見て箒は、
「…機体にあつた単一能力ワンオフアビリティを使ったせいだな。」

——
逃げている途中に見つけたから、千尋は知らなかっただろうが。と付け加えて箒は言う。

それに対して千尋は反射的に口を開く。
「——馬鹿!!なんでそんなもん使うんだ!!?」

それは怒りを露わにした千尋の声。
箒が行った行為は例えるならば——
瀕死の人間に輸血する為に自分の動脈を切断したという事象に相応しい。

動脈を切断すれば、大量出血により人間は3分から4分程度しか生きられない。

その先にあるのは確実な死。
それと同じような行為を——
否、ともすればそれよりも更に質の悪い結末を寄越すかも知れない行為を箒は選択した。

——
千尋が怒るのは、当然といえば当然。
「そ、そうでもしないと…簪を逃せなかったし…それに、お前も死んでしまったと思っていたし…。」

——
だが箒にも言い分はある。

あの極限状況下、誰かが犠牲になることが確定していた中で、誰の犠牲も出さずに事に抗うには——自分が人柱になるしか無いと考えていたから。

そしてそんな自分——千尋の生存、という想定外の事態が無ければ死ぬことが確定付いていた人間——と共にあろうとした簞。

彼女は見た目に似合わず、非常に頑固者だ。

一度こうすると決めればそれを決して曲げない。

微笑ましいくらい真つ直ぐな性格。

だから、友人を見捨てるワケには行かないと、簞と共に残るという選択をした彼女は、簞が行動を起こさなければ死んでいた。

そして彼女を生き残らせる為に使ったことが、柳星張イリスの侵蝕を拡大させる代償に I S を完全制圧し、従属化させる単一能力ワンオフ・アビリティ。

——使えば寿命を擦り減らすかも知れないし、肉体あるいは精神が崩壊するかも知れない。

：何しろ、分かっているのは侵蝕が拡大する事だけで如何なるデメリットがかかるかは不明瞭なのだ。

そんなものを使う人間はそうそういない。

いるとすればそう——自己の生など知ったことでは無いと捨てられる、簞のような人間だけだろう。

：そも、あの時は極限状況に加えて千尋が死んだ前提で動いていたのだ。

愛した者の後を追って自決——というのも、普通の人間でさえ起こり得るのだから別段不思議では無い。

「だからって一人で死に急ぐな馬鹿!!」

「な—————そ、それはこちらのセリフだ馬鹿者！私を庇ってバラバラになるなんてされたら死んだと思ってしまうだろうが!!」

「うゝ……そ、それは………簞に死なれるのは嫌だったし、あの時出来た最善の方法があれくらいだったからで……」

「だいたいお前には『私なんか構わず自分を大事にしろ』といつも言ってるだろう！どうしていつも自分をか殴り捨てて先走るんだ馬

鹿!!」

「んな——うっせえバーカ!それだったら、俺だってお前に『俺なんかの為に死ぬような真似するな』つつつてただろ!というか何殿務めてるんだバカ!もつと自分を大事にしろ!!」

「お、お前が死んだと思っただけからに決まっているだろうが!この馬鹿!!」

「なんで俺が死んだらお前まで死ぬんだよ?!いやそりやお前の側にいてやるって約束は破ったよ☒それはすんげえ悪かったと思ってるよ☒だからってなんで死に急ぐんだ馬鹿!!?」

もう、色々台無しだ。

——もはや、そこで展開されていたのは意思のぶつけ合いという名の、「小学生レベルの口喧嘩」。

そして2人が口に行っている事は、そのまま口にした者に返ってくるブーメラン発言である。

——箒は自分が死んでも構わないと思っっている癖に、千尋に自分を大切にしろと言う。

——千尋は自分の命をアツサリ投げ捨てる癖に、箒に自分を大切にしろと言う。

∴これがブーメランでなくてなんだというのか。

とうかこのブーメラン合戦以前に、千尋は箒を庇って一度本当に死んで箒に心配を掛け、箒は千尋が死んだと思っ込んで千尋が食い止めたかった侵食を広げてしまい、剩え死ぬ気でいたのだから——

——この際お互い様である。

∴そんな言葉で済まされないのも、また事実であるが。

千尋は——箒に死んで欲しくない、箒が死ぬならば自らも立ちほだかる者^敵全てを殺し尽くして死ぬ未来を選ぶ。

∴だから、自分は箒^{人の少女}の為に死んでやる。

箒は——千尋に死んで欲しくない、千尋が死ぬのなら誰か^{人類}に尽くしてから後を追う。

∴だから彼^{千尋}が生きれるならば、千尋の為に死んでやる。

2人は噛み合っているようで——致命的なまでに根底が噛み合っていない。

両者の自己犠牲。

両者の相互懇切。

二律相反の感情で表面上は絡み合っているようにと中身は狂った歯車だ。

少年はたった一人の少女の為に。

少女は少年を含む全ての人類の為に。

少年は手に収まり切る分相応の者の為に。

少女は身に収まり切らぬ分不相応の者の為に。

少年はたった一人の少女の為に命を投げ捨てる。

少女は少年を含む全ての人類の為に命を投げ捨てる。

怪物であるが故に人間にはなれない少年と。

人間であるにも関わらず怪物に成り果てる末路の少女と。

——千尋と箒の違があるとするればそこであり、2人が噛み合わないように見えて歪に噛み合っている事も、そこからであった。

要約すれば——千尋も箒も他人を愛せても、自分自身を愛せない存在であった。

だがしかし、このままここに踏みとどまって居ても埒が開かない。

——くそ、話は後だ。」

「…ああ、まずは光と合流すつぞ。」

——追記。

2人は物事の切り替えも、まあ出来る方である。

——故に、2人はそのまま地下物資搬出入ターミナルに向けて、跳躍を開始した。

「——ところで、腕と両脚は良いのか？筋肉が千切れていたみたいだったけど。」

ふと、警戒を継続しながら声をかける。

…箒は、ああ。と思い出したように自分の身体を見て、

「——それなら大丈夫だ。断裂した筋繊維も再生している。」

自分のことであるにも関わらず、淡々と下らないモノを報告するよ
うに口を開く。

…それは、人間であることを放棄した自分を俯瞰しているような。
…あるいは、少しは千尋の足を引っ張ることも無くなると、喜んで
いるような。

怪獣に成り果てる未来を、既に受け容れてしまった箒
がいる。

それが、千尋に酷く物悲しい感情を孕ませる。

「そうか。…なら、良かった。」

だからせめて、俺までは変わらないようにしよう。

箒がいつまでも人間の側に居られるように。

箒が怪獣に成り果てても、人間に帰って来られるよう
に。

だから今は、いつも通りに応えよう。

死体に寄生して、人間の真似を興じるのが大好きな、
怪獣リビングデッドの肉片として。

…そう千尋は自分に言い聞かせながら、暖かみのある声音で、箒に
応えた。

それに、跳躍ユニットを吹かしながら箒は若干反応を示す。

「こんな時だというのに、お前は…」

—— 言いかけて。

…

…

…

—— 腹を開かれる私。

—— 肉塊を埋め込む男。

—— 忌み子と憎悪する女。

—— 散乱した変死ミイラ体の群れ。

—— やめて、と制止に入る母。

—— 全身の血を失い萎れた義父。

—— 腰に4対の触手を生やした私。

——化け物と罵る義母の首を刎ねる。

それらが唐突に。

なんの前触れもなく脳裏にフラッシュバックした。

……

……

…

「ッ☒」

——今は、なんだ。

身に覚えのない映像が頭の中に再生される。

箒は困惑を隠せないまま——「がくん、と箒の打鉄甲一式が揺らぐ。」

「あ」

間拔けな声が漏れる。

このまま箒は顔面から前のめりに地上へ墜落して。

「箒!!」

「っ——!」

千尋のその声で。

思わず主脚を床に叩きつけるように着地する。

火花を散らしながら、滑走し——千尋が前に駆け出す。

箒が目を見開く。

何しろ——千尋は、生身のままに打鉄甲一式を追い越し、

その滑走線上に飛び出したのだ。

「ば」

——馬鹿!どけ!!?と箒は言おうとする。

だが間に合わない。

それどころか、千尋は×の字を描くように腕を交差させたまま踏み

留まり——。

——激突する轟音。

——破裂する両腕。

——停止する機体。

千尋は、生身のままに統合機兵を受け止めていた。

その両腕は原型を留めぬまでに破壊されている。皮膚は焦げ落ちて。

血管は裂けて血を溢れ出して。

筋繊維はズタズタに千切れ。

骨格は木っ端微塵に碎け散る。

「ッ、な——」

——何をやっている☒、と口にしようとして。

「大丈夫か☒」

…千尋の言葉によって遮られる。

その、あまりにも場違い過ぎる言葉に箒は驚き、

「えっ、あ——う、うん。だ、大丈夫…」

…思わず千尋に流されてしまう。

——いやいやそうじゃなくて!!

「…すまない、千尋…今のは私の操縦ミスだ…！う、腕の傷は…!!？」
慌てて箒が千尋に声をかける。

——その当の千尋は、原型を留めないまでに壊れた腕が勝手に再生されて行く。

…それは、以前よりも圧倒的に早い速度で。

——ああ、もうこの子はヒトの側には居ないんだ、と思わされる。

「いや、良い—————こんなのすぐ治るから。行くこう。」

「…でも…私、お前の腕を…」

それは、嘘偽りない素直な顔で。

この一瞬だけ、確かに人間らしい、罪悪感を抱いた雰囲気漂わせる顔で。

—————————

「良いから…こんなのツバ付けときゃ治る!!？」

千尋が怒鳴る。

だが、すぐに『しまった———』と顔が歪む。

「だから———」

だから、必死で何か言葉を紡ごうとして。

「だから、気にすんな。こんなんで気にされると、恥ずかしいんだ……怒鳴って、ごめん。」

務めて、抑えた声音で言葉にする。

それは本気で箒を不安にさせない為に。

——千尋が木っ端微塵に粉碎された瞬間を目の当たりにした箒だからこそ、千尋が傷付くのを望まない。

…それは、ヒトとして当たり前の事だった。

——ふとそれに水を差すように。

「ッ——」

ずん、と響く衝撃と。

「!!?。」

ぐもりながらも地の底より響く咆哮が通路を振動させる。

それで千尋も箒も、頭から冷水をかけられたように平静さを取り戻した。

同時刻・千葉県館山市布沼地区

国道257号線・房総フラワーライン

——放射能の霧に浮かぶIS学園の対岸。

平砂浦に面した国道257号線、平砂浦海岸、館山カントリーゴルフクラブ敷地内に欧州連合極東派遣軍ポーランド陸軍第2機械化軍団第8装甲騎兵師団第3戦車中隊のT-72M1モデルナ戦車18両は布陣していた。

——遠方より響く爆音を背景に、布沼地区は静寂に満たされていた。

既に館山市南部全域には非常事態宣言が発令されており、藤原地区の千葉県立館山運動公園と神余地区の耐震度災害避難所への避難指

示が館山市役所より出されているという。

…現状で、ナタリアに出来る事はない。

最前線は海を跨いで向こう側、ここから2キロメートル程海で隔てられたIS学園だ。

日本本土での後方待機の命令が与えられた自分達に最後の最後まで出番がないというのならば、それはそれで良い事だ。

— 何しろ、それはIS学園で撃破に至ったか、被害をIS学園だけに留められたかのどちらか。

…悪いことは何も無い。

— だが、先程から続いていた一連の戦闘過程を鑑みるに、その可能性は酷く希薄だ。

IS学園教師部隊との通信途絶。

委員会介入部隊との通信途絶。

学園で炸裂した原爆級の爆発。

駐在部隊が撤退開始との報告。

避難民にも多数の死傷者アリ。

— どう考えても、良い状況ではない。

それを証明するように。

「…どうも芳しくないな。」

欧州連合極東派遣軍司令部との通信を行なっていたヴィシニエフス力軍曹が呆れたような顔で声を放つ。

「…館山市の欧州邦人の収容は完了。横浜に移送を開始したらしいが

……学園は依然として通信途絶。

— 陥落した、と捉えるべきではないか？」

「…そうですね — 総員傾注！全車戦闘準備…！」

— この展開になると決まって悪い方にしか転がらない。

それはウクライナ戦線にいた時から嫌というほど経験し、学んだこと。ト。

…前線の部隊から通信が途絶し、部隊撤退の情報も入って来ているとすればもうこれから降りかかる事象はひとつしかない。

それは全員が身をもって体験したからこそこの事態は既に織込み

済み。

直後、激しい水飛沫と共に——海が、割れた。

同時に、

????????

!!

——黒き荒神が顕現する。

：それは真つ直ぐに、館山市に向けて脚をもって、その巨軀を踏み進める。

「——全車、射程に入り次第砲戦開始！飛び道具にも気をつけろ。機動回避を怠るなよ!!？」

それを前にして、ナタリアが発破をかける。

——これほどの化け物を相手取るなんて事はウクライナで浴びる程やった。

だからナタリアは、否。ここにいる全員が、巨大不明生物程度では臆する事は無かった。

故に、彼らは戦車という矛を荒神に向けて構えた——。

「??
S 学園北部区画・地下物資搬出入ターミナル

くそつ、ちよつと遅かった……！」

——そこは、既に撤退もぬけを終ぬえていた。

回収仕切れなかったであろう機材の残骸が打ち捨てられ。
??
ところどころに血痕や血溜まりとそこに浸かる葉莢の群れ。

滅茶苦茶に潰れて折り重なったコンテナの山と鉄骨の山。
停めていた車両が走り出した際に刻まれたであろうタイヤ痕。
墓標のように佇むコンクリートの破片や塊の群れ。

—— 抜け殻となったターミナルに、千尋と箒は辿り着いて
いた。

「…くっそ…歩いて帰れってか？」

—— いやまあ、できなくはないだろうけどさ。と千尋は独
言る。

人間の平均移動速度は時速6キロメートル程度。

北区画のライフライントンネルは全長2キロメートル程度。

ならばまあ、およそ20分程度で抜けられる。

つまり障害さえなければこのまま足早にいけば歩いてでも脱出は
可能なのだ。

「—— いや、千尋。そうもいかないみたいだ。」

ふと、仮設指揮所だったらしいデスクの上に置き去りにされたタブ
レット端末を見て、箒は口にする。

「どうやら18分後—— 米軍のB-1ランサー爆撃機が燃料気化爆弾サーモバリック
を投下するらしい。」

—— 言いながら、箒は舌打ちをする。

…彼の国は無茶を言う—— と吐き捨てながら。

「…まあた米軍かよ……。」

ウンザリするように放置されたデスクに視線を向けて——

—— その横には、「篠ノ之姉弟は必読！」と殴り書きされたメモ帳。

千尋と箒が生き残っていた際に備えて、光が残していたものだけ
だ。

—— 簪や織斑先生の報告から、俺らが死んだって事は確定
だろうに…律儀っていうか過保護っていうか、信じていたい思想の奴
なのか…でもそこが良いところだよな。今更だが、アイツは良い奴
なのだ。

—— あ、もちろん俺が元居た世界の方の片桐は知らない。
だってあつちはいいとこストーリーカーとどう違うよ。

…ふと、千尋は視界からメモ帳の内容を読み取る。

…要約すると、「第2ライフライン・トンネルのメーサー部隊がギリギリまで待つてくれるからさっさと合流して脱出しろ」…という内容だ。

——生きてるかも定かじやねえのに気を遣ってくれたんだなあ…指名された部隊からしたらたまたまもんじゃないかもしれないけれど。

…なんて、千尋は思いながら。

「——箒、第2ライフライントンネルに行こう。まだ部隊がいるらしい。」

「——了解だ。」

第2ライフライン入り口は本当の本当に非常時に備えた場所。

故に核シエルター並みの強度を持たされている事から侵食は少ないだろう。

それに爆撃が想定よりも早く始まっても、耐えられるだけの頑強さはあるはずだった。

なら、行かない手はない。

急がば回れ、なんて言わずに真っ直ぐ行くが吉。

故に2人は、すっかり死んでしまったターミナルを後にした。

……………ずんつ。

…その時千尋はふと、遠方から振動を感じた気がしたが——
——気のせいだろうと意識から除外した。



IS学園北部区画最下層

——白いLEDライトが灯す、コンクリートの箱の中。

第2ライフライントンネル手前は整然としていた。

大型車両が停車する白線とソレを反転させる為のターンテーブル。予備の建築資材と思しきパイプ管や土嚢、非常食を入れた段ボールが規則正しく所狭しと並んでいる。

まるでホームセンターの店内や倉庫のよう。

先程までの壊れ尽くし、荒れ尽くしていた区画とは正反対。

むしろ、あそこまで破壊されていた学園の中では、平時の姿と何ら変わらないこの場所の方が異常に思えてしまうまでに——
本当に同じ学園かと疑ってしまう程に。

——まるで、絵画を壁一面に並べた中にぽつんと白紙の紙が一枚だけあるような。

…そんな、異常平常な世界。

…もつとも、そこからすれば今の2人——全身が血まみれで擦り傷や焦げ跡が全身に刻まれている——の方が、異常なのかも知れない。

——眼前には、大型トラックが一台くぐれるくらいのおおきさを持つ第2ライフラインに通ずる二重の気密扉。

それを目指して2人は歩みを進める。

……………ずんつ。

チカチカとLEDライトが点滅する。

——また、くぐもつた振動が響く。

千尋は訝しみながらも、足を止めず、まずは箒を連れ出そうと意識を逸らす。

……………ずんつ。

再度響く振動。

チカチカとLEDライトが点滅する。

千尋の足が止まる。

…僅かに、近づいているように感じる。

……………ずんっ。

続け様に振動が響く。

チカチカチカと激しくLEDライトが点滅する。

そこで千尋は、間違いなく近づいて来ていると確信した。

「くそ…!!？」

「え」

僅かに焦燥を孕んだ千尋の声。

それに箒は違和を感じるが、それを遮って。

……………ずんッ!!？」

一際大きな振動が轟音を鳴らして響く。

LEDライトが砕け散り、赤い非常灯が灯る。

同時に——世界が、白から赤へと塗り潰される。

それで箒も、何かの接近を察知する。

——次の瞬間。

「e7#3##.#333#Z、3、3###!#Z、eq#33#
##!#Z——!!」

——ばがんっ、と自分達の通つて来たコンクリート製の隔壁扉を突き破るようにして、黒い暮桜…否。旧^{オル}来^ガ訪^ガ者が2人に追い付いた。

その顔は、確かな執念を感じる形相を浮かべていた。

「なっ——あいつ、まだ生きて…!!？」

思わず箒が信じられないものを見たように声を上げる。

——視線の先、全身を軋ませながら異形の体軀は2人に追

いついた。

……………そう。

要するに相手も必死だった。

自身の命を焼き尽くしてでも箒を救いたい千尋と、自身の命を投棄
ててでも千尋に生きて欲しい箒と——同じように、必死だったのだ。

認識の甘さに憤慨する。

そしてアレが自分を付け狙う理由を思い出す。

—— アレは、死滅を回避する為に喪った肉体を取り戻そうともがいていただけの、異星^{ミレニアン}の人間。

—— 自分みたいに死へ至る為に命を焼き尽くしていたのではなく。自分が生きたい未来を掴み取る為に、捨てた^{からだ}肉体を取り戻そうと命を燃やしていた。

—— 自分を付け狙うのは、自分の全身にある細胞：ようは、俺そのものを触媒にして、自らの肉体細胞を再生させようとしていただけ。

—— だが悲しいかな。前^{かつてのアレ}の世界は自分の細胞を取り込んだ事で肉体の復元にこそ成功したが、制御には至らず醜い怪物になっってしまった。

……だから今度は、怪物の自分でも生きられるよう自分自身を更に順応させる肉体にしようと命を燃やす事にした。

—— だが、そんな為に自分が喰われるなんて御免被る。最後の最後に怪物に成り果てる為に自分が使われるなんて、自分が増えるみたいで同族^{吐き気がする}嫌悪する。

「d,@,jq@:d@,jq@d@,jq……」

ふと、眼前のオルガIIは地面に転がっていたコンクリートの塊に躓き転倒する。

” ……はっ、そもそも自壊寸前じゃないか。アレ。 ”

元々シユヴァルツェアレーゲンを核として動き始めたオルガが、核たるラウラ・ボーデヴィツヒを失った時点で全ては決していた。

現在はラウラ・ボーデヴィツヒのクローンで仮^{カリソメ}初めの核を維持しているが、それも時間の問題だ。

クローンとは遺伝子の複製だが、不完全であつたり複製の複製を生み出せば遺伝子は劣化して寿命は極端に短くなる。

ラウラの遺伝子をどれだけスキャン出来たかは知らないが、あの短時間で完全再現は不可能だろう。

—— 何しろ、死に際の苦し紛れに行つた処置だ。劣化遺伝

子による寿命と、肉体に与えられたダメージを考慮すれば、もう長くはない。

：言ってしまったえば、今のオルガは人間から独立した皮膚が単独で生きて行こうともがいているようなもの。

：それに。G細胞という永久機関を取り込んだところで制御出来ないのなら、それは単なる癌細胞と変わらない。

——確かにG細胞の特性上、不治の病を治す特效薬にも、気化ないし液化化した肉体を再構築する奇跡にも成り得る。

だが制御が叶わなければ意味がない。

そうなれば自らを破滅真つしぐらに叩き落とす災厄の代物へと変質する。

そんな苦しめるしか能が無いモノなんて、他にあるので幾らでも事足りる。

——例によって、制御しきれなくなった細胞が瞬く間に増殖を開始し、膨張と腐敗を繰り返し始める。

——それはまごう事無き無間地獄。

「d@、jq@dd@、jq……!!?」

そこには——ただ生きたいと願っただけだというのに、無限に苦しみ続ける怪物となった憐れな異星の人間だけがいた。

——同情が無いわけじゃない。でも、コイツだけの為に箒まで心中させるなんて御免だ。

…だから。

「箒、先に行ってくれ。」

「…駄目だ、お前また無茶するだろう。それなら…」

…完全に見破られてる。

たはは、と千尋は笑いながら。嘘をついても仕方ないと、諦めたように口にする。

「——うん、無茶はする。だって、アレ相手に無茶するなっつ方が無理だ。」

それに、狙いは俺なんだから——という言葉は、飲み込む。それを言ったら箒は今度こそ離れてくれない。

「…でも、箒の機体だって、スクラップ寸前だろ。そんなんじや箒が死ぬ——俺は、それが堪らなくイヤだ。」

「——これだけは譲れない。」
脳の片隅に浮かぶ、生き物としての死すら剥奪されて肉片にされた家族。

生き物という境界から外されて怪物にされた父親。
父親を利用することを固めた元凶たち。

——箒まで、そんな目に遭わせたくない。

だから——千尋は瞳を見つめて。

「——信じろ。今度は約束、破らないから。」

——屈託のない瞳で、そう告げる。

…ついさつき、約束を破ったばかりの奴の言い分なんか信じないだろう。

だがそれは、頼みであると同時に、有無を言わせない命令のような口調で言い放たれる。

「…馬鹿。」

——先に折れたのは箒だった。

呆れたような、観念したような顔を浮かべて千尋を一瞥する。

そうして身体を第2ライフライン・トンネルに向けて——
踏み留まる。

ほんの少し、箒は何を言うべきか言い淀んだ末——

「——泣いて、喚いて、漏らしたって、助けてやらないんだからな。」

——なんて場違いな台詞セリフだろう、と箒は内心滑稽に笑いながら、同時に羞恥に萎れながら。

しかして——それは確かに、弟家族の生還を願う姉少女の顔で言い放った。

だからそれに——

「——ああ、だから先に行行って来れ。すぐに追いつくから。」

千尋は箒に背中を向けて——箒にはそれが、いつか来る永

遠の別離に見えた——オルガIIと対峙する。

：ごごんつ、と音を立てて第2ターミナルと学園最下層を隔てる扉が閉じ落とされる。

——残されたのは純正になり始めた少年と、自ら怪物になろうとしている異形の2体。

今更ながら、少年は因縁深い敵であると再認識する。

——彼の世界。

東海村にて一度目の対峙をした2人。

新宿にて二度目の対峙をした2人。

異形は肉体を得てあるはずだった未来を生きる為に怪物を欲し、怪物は自らに死を与えてくれるかも知れないと期待して異形と会敵しそして。

——異形は敗れた。

——怪物は生き残った。

：異形は怪物を殺すどころか怪物になろうとした。

：怪物は異形が自らと同じ怪物になろうとしていると理解した。

——だから、怪物は異形を殺した。自らと同じ苦心を味わうくらいならと、異形を殺した。

ただその一部始終を——その世界の人間達は、ただ一度異形に打ち負かされた怪物が再戦したと思っただけで。

——その時初めて、怪物は自らを殺してくれなかった異形を憎んだ。

——その時再び、怪物は自らに永遠に続く苦心だけを与えた人間に殺意を抱き、そして自らの名前を叫んだ男をこの手で殺し眼に映る万象一切を焼き尽くした。

：単純な話。

これはあの時の続きだ。

——別にこのまま逃げたって良い。

でもそうしたら此奴は地の果てまで追って来るし、此奴単体で文明を乗っ取るくらいはするだろう。

——そんなの、俺の知った話じゃない。

でも——後々の事を考えればどうあがいても筈が巻き込まれる。

だから——今ここで殺す。

非常につまらない理由だし、なんともチンケな動機。

———ただ———あいつは、自分の命をかけるに値する奴だから。

———少なくとも、俺がニンゲンの手先になってやれるくらいには、大切な奴だから。

———そいつまで不幸にするのだというのなら。

「…異星の人間だかどうやってコツチに来たか知らねえが———」

今度は共倒れなんか御免だ。

気持ちの整理はしたし、身体も皮一枚で繋がったし。時間も無えし、いい加減。

「———行くぞ。」

———テメエをブツ飛ばす……!!?

溜めに溜めた力が両脚を起爆させる。

狙いは一点。正面からの直接打撃。

両手に03式掘削打刀を、背に試製14式誘導熱展開式対獣射突槍を備えながら異形目掛けて疾駆する———!!?

———迎え撃つは、有象無象を砕く双極の波動。

仮初めの命が果てることさえ恐れぬ最大出力での一撃。

”———っ、はッ———!!?”

それを視認すると共に千尋は全力で床を蹴り穿った。

その身体は姿勢を下げ、空気抵抗を極限にまで擦り減らしながら滑空するように駆け抜けて。

———眼前より、二重の波動を纏う黄色線光が放出される。

「っ、ぎ———」

衝撃で体勢が揺らぐ。

地に叩き伏せんと世界を揺るがす線光を前に、気力で脚を前へ前へ前へ飛ばす。

躲した線光が左肩を掠める。

皮膚は千切れ飛び、真皮は擦り切れ、次々と筋肉繊維も断線する。だが、それでは止まらない。

この程度では篠ノ之千尋は止まらない。

「がっ」

その愚直さを嘲笑うように、閃光が砕き巻き上げたコンクリート片が左胸部と左脇腹を刺し貫く。

肋骨と肺が潰れる。

胃袋が破裂する。

ついでに肝臓も潰れた。

—— 血が喉を逆流する。

それに千尋は歯を食い縛り、喉を鳴らして再度体内に飲み込む。

そして再び床を蹴った。

構わない。腕が潰れようが、骨が砕けようが、内臓が破裂しようが、

この程度の激痛など知ったことか。

怪物ゴジラだった頃に受けた傷

—— 全身の皮を剥いで溶けた鉄を

浴びせられてもなお飽き足りない獄痛に比べれば屁の河童。

肢体欠損や内臓破裂などの生温い痛みでは止まらない。

—— 次に、オルガIIはその巨腕で千尋を殴り迎え撃つ。

なるほど確かにそれでは一度止まらねばならない。

だが

「なめん、」

巨腕が迫る。

距離にして50センチメートル。

しかしそれを躲す事もせず、千尋はそれを。

「な」

「ッー」

半ば潰れた左腕を持って、正面から殴り打つ

—— 迎撃する

—— 巨腕と左の拳が衝突する。

その両者は、コンマの世界で互いに原型を留めないまでに崩壊した。

オルガIIはその結末に驚愕する。

——確かに、千尋の左手に込められた質量などたかが知れている。

オルガⅡ自身の巨腕が持つ質量と正面衝突すれば、それは千尋の左手だけが一方的に破壊される。

だがそれは両者が共に棒立ちしていた場合の話。

今の千尋はオルガⅡ目掛けて疾走している。

更に言えば、その都度加速するべく脚で床を蹴っていた。

千尋とて、互いの質量エネルギーだけでは勝ち目がないのは分かっていた。

だからこそ——そこに、オルガⅡの質量と拮抗出来るだけの移動エネルギーと、03式近接掘削打刀の質量エネルギーを加算して、相殺してみせただけのこと。

「っ、——」

千尋はそのまま使い物にならない肉片に成り下がった左腕でオルガⅡの巨腕を背後へ受け流す。

オルガⅡは戻そうとするが、咄嗟の事態に神経の伝達が間に合わない。

そうしている間にも潰れた左腕から溢れ出た血液に濡らされた巨腕は千尋の左腕を滑り、軌道をずらされる。

当の千尋は、左腕が潰れた人間がするとは思えないほど冷静な顔で、オルガⅡの懐に飛び込んで行く。

しかしそれを待ち望んでいたように、オルガⅡは笑う。

笑う。嗤う。破顔う。微笑う。

ぐぱり、と首角が大きく裂ける。

相手を逃すまいと無数の触手が口の奥より千尋を捕らえる。

——それは、千尋を呑み込まんとする、奈落の穴。

千尋の細胞を喰らい尽くさんとする執念が具現した醜悪な肉塊。オルガ・フェーズ2

——千尋はその光景を待ち望んでいたように、笑う。

「よし、口開けたな。」

直後、右腕を振るうように03式近接掘削打刀を投棄。パーズ

続け様に試製14式誘導熱展開式対獣射突槍を抜刀する……！

「be z : ☒」

それでオルガⅡは顔色を変える。

それでオルガⅡは千尋の真意を理解する。

喰われるフリをして、体内から焼却する。

詰まる所——「獅子身中の虫」を文字通りやってのけるつもりだった。

それにオルガⅡが気付いた事を察して千尋は舌打ちする。

…これは不意打ちで成り立つ戦法。

だが、やはりというべきか——一度バレてしまつては意味がない。

オルガⅡが残存する巨腕を横一文字に薙ぎ払うように振るう——

それで、千尋は三等分に切り刻まれる…！

直前、今まで以上の爆音が鳴り響く。

乾いた轟音と共に、捲き上る煙幕。

「な…☒」

瞬間、千尋は否オルガⅡさえも目を疑った。

直後、ディーゼルエンジンの駆動音と無限軌道の回転

音と共に、18式メーサー殺獣光線車がオルガⅡフェーズ2を撥ね飛

ばす…!!?

「u、#####Z?!」

フェーズ2
オルガⅡは驚くと共に絶叫する。

同時に響く、肉が裂ける音と骨が碎ける音、そして。

それを遮るように放たれる、M2重機関銃の一斉射：

!!

メーサー車の牽引装甲車の銃座にから放たれた12.7ミリの銃弾は、次々とオルガの巨腕に命中し、筋骨隆々としていた腕をボロ雑巾に変えて行く。

「それ見たことか——!!?」

その聞き覚えのありすぎる、否。つい数分前に別れたばかりの少女の罵声が千尋の鼓膜を震わせる。

見上げれば、そこにはM2重機関銃をブツ放す筈がいた。

故に、オルガⅡは千尋を呑み込まんと口を大きく開く。
それが致命的なミスであれ、もはやオルガⅡにはこうする以外に道がない。

先程からの無茶の所為で肉体は崩壊寸前。

肉体の崩壊を食い止めるにはG細胞の塊たる千尋を食い尽くすしかない。

だからこそ、もはやそうする以外に無かったのだ。

——もちろん、同情なんかしない。

千尋はそのままオルガⅡの巨顎目掛けて飛び掛かる。
オルガⅡが獲物を狙う狩人ならば。

千尋は、その狩人を噛み殺す肉食獣そのものだった。

前かがみの姿勢のまま巨顎の中に飛び込んで、初めて足を止める。
ダン、と脚でコンクリートの大地を砕く踏み込みと、ヒュツと口笛のように吐かれた呼吸。

そのまま、赤く緋く燃え上がる試製14式誘導熱展開式対獣射突槍
を手にしたままストレートを放ち。

「F i s t !!」
ファイスト

——爆炎の拳が、異形を内より一切合切カタチを残さず焼き尽くした……!!

…結末は呆気ないものだった。

残ったモノは、上半身を喪い、灰とも鏽とも言えない物質となって飛散していく異形の亡骸と。

ほぼ全身が炭化し、明らかにもう一度は絶命したという状況を経て
もなお——再生していた千尋の姿であった。

「…ふう——」。

爆炎の拳を抉り穿った本人は息を吐く。

そして同時に——「アレ？どうやって倒したんだっけ？」
という疑問と共に、力が抜けて、体が地面に落ちる。

「…あ、れ——？」

…ヘンだ。

起き上がれない。

別に致命傷になるような傷なんか受けてないのに。

ただ、胴体に大穴がふたつ開いて。

ただ、肋骨が折れて肺が破裂して。

ただ、胃袋と肝臓が破裂し潰れて。

ただ、左腕が滅茶苦茶ブツ潰れた。

ただ、それだけなのに——身体、動かない、や…。

ふと——意識が飛び掛けて、

「千尋ー」

箒の声。

それで意識が蘇る。

——気が付けば、第2ライフライン・トンネルを撤退中の装甲牽引車のシートに固定されている。

「…へ、あ——？」

何でここにいて、と口にしうとして間抜けな声が漏れる。

「…良かった…。」

ふと箒が呟くと、そのまま千尋を抱きしめる。

「ちよっ、ほう——」

言おうとして、千尋は口を閉ざす。

抱きしめたまま、千尋の胸に顔を埋めているその身体は。

強く強く抱きしめてくる箒は、震えていた。

「千尋お、箒に感謝してやるか謝るかしろよ？すげー心配してたんだからな。」

ふと、三村が言う。

その隣の助手席に座っている自衛官が、三村に「学園内の全部隊の撤退完了」の報告をしている。

…ふとそこから千尋は視線を箒に戻す。

——確かにそうだ。大切な家族が1日に実質二度も死んだのだから。

それを前にして、何も感じない方がおかしい。

——だから、千尋は安心出来るよう、箒の頭を撫でてやる。

そうして、少し萎んだ声で謝罪する。

「…無茶してばっかで…ごめん。」

「…うるさい、馬鹿…。」

応答は、若干泣きを孕んだ声音。

しかしソレは、確かに安堵を孕んでいた。

『——こちら、欧州連合極東派遣軍ポーランド陸軍第2機械化軍団第8装甲騎兵師団第3戦車中隊……』

ふと、雑音が混じった通信が、その雰囲気叩き割る。

それに応じるように、通信担当のオペレーターが通信用の機器を操作する。

『——現在、IS学園を襲撃したと思しき巨大不明生物が館山市に上陸：我が隊は戦闘続行不能…この通信が届いている部隊は速やかに迎撃を——』

それは、未だ戦闘は終わらぬ事を告げるモノだった。

EP-41 館山市防衛戦／荒神、上陸

2021年6月13日・正午12時15分

千葉県館山市南部・布沼地区

「こちら、欧州連合極東派遣軍ポランド陸軍第2機械
化軍団第8装甲騎兵師団第3戦車中隊……！」

コヴァルスキ少佐がオープン回線で無線機を手に怒鳴る。

放射能の霧に浮かぶIS学園の対岸。

平砂浦に面した国道257号線、平砂浦海岸。

館山カントリーゴルフクラブ敷地内には—————
大破したT-72M1モデルナ戦車18両が残されていた。

「現在、IS学園を襲撃したと思しき巨大不明生物が館
山市に上陸：我が隊は戦闘続行不能……この通信が届いている部隊は
速やかに迎撃を—————！」

蹴り飛ばされた車両。

無理な機動で履帯の外れた車両。

焦げた土塊の下敷きとなった車両。

熱で溶解したアスファルトを浴びた車両。

幸いにも死亡者が出ることは無かった……だが—————。

「くそっ……!!」

認識が甘かった、とコヴァルスキ少佐は唾棄する。

：IS学園で発生した複数回の原爆級と思しき爆発の原因はおそ
らくあの巨大不明生物だろう。

なら—————
小規模とはいえ核爆発に耐えるだけの堅牢な肉
体を持っていたということだ。

：つまり戦車の正面砲撃は通用しない。

それは推測出来ており、またその手の存在とも対峙した事もあつ
た。

アーマード・ギヤオス
ギヤオス甲殻種。

ウクライナにて確認されていた個体であり、核爆発にも耐える耐熱

装甲として機能する甲殻を全身に持つ希少種。

過去にポルタバ戦線にて戦術核による漸滅作戦を実行せざるを得なくなった状況下で出現し、即座に戦術核を投下——合計300体以上ものギヤオスの殲滅に成功した。

——だが、ギヤオス甲殻種アーマード・ギヤオスただ一体のみは健在であった。

さらにある事か甲殻表面が激しく炎上し、火達磨になりながら時速180キロという速さで疾走し、味方陣地に突っ込んで来た。

——その余りに想定外過ぎる敵を前に前線は瓦解。

：唯一救いがあった点があるとすれば、甲殻が重過ぎるのか飛行能力を失うまでに退化した種であったことだろう。

——これで飛行能力まであるとなれば目も当てられなかった。

——そしてポルタバ市街から30kmの地点で第2機械化軍団第8装甲騎兵師団第3戦車中隊はギヤオス甲殻種アーマード・ギヤオスと交戦した。

甲殻への直撃弾は当然ながら意味が無い。

だからこそ——ギヤオス甲殻種アーマード・ギヤオスの関節部を狙うという作

戦を実行した。

ギヤオス甲殻種アーマード・ギヤオスの甲殻は全身を覆っているというわけではなく、関節部分は露呈していたのだ。

それは、中世ヨーロッパの甲冑と同じように——鎧の繋ぎ

目が弱点である事を晒していた。

だからこそ、後衛車両が後退しつつ頭部および脚部への陽動砲撃を実行。

同時に左右からの前衛車両の挟撃を合図に後衛は脚部への集中砲撃にシフト。

ギヤオス甲殻種アーマード・ギヤオスの機動力を低下させた上で、前衛による関節部に位置する皮膚への劣化ウラン弾の集中砲火。

——脚部の破壊と同時に前衛後衛全車は機動砲撃戦に移行し——

——関節に全力砲撃を実施。

——実際それしか手段が無かったとはいえ——結果的には颯り殺す形で殲滅に成功した。

——その教訓から、今回上陸した巨大不明生物にも同じ戦

術を取ったのだ。

だが—————あろうことか今回は皮膚そのものが
アーマード・ギヤオス
ギヤオス甲殻種の甲殻に匹敵：否。それを上回る硬度であった。

劣化ウラン弾の持ち込みが叶わなかったとはいえ———い
やそもそも表層部への物理的打撃をもって敵を撃破する戦車との相
性が悪過ぎる。

———アレの皮膚を貫通・突破するには、おそらく
貫通力に限れば水爆にも匹敵する地中貫通爆弾並みの貫徹力が必要
だろう。

そしてそんな贅沢な装備を欧州連合極東派遣軍は持ち合わせてい
ない———もちろん、ポーランド軍もだ。

” ……それにしても、皮膚そのものが甲殻を超える防御力を持つて
いるって：一体どうなってるんだ：デタラメにも程がある。 ”
軽く頭痛を起こしている頭を抱えながら、半ば呆れたように内心呟
く。

———兎にも角にも、欧州連合極東派遣軍ポーランド陸軍第
2機械化軍団第8装甲騎兵師団第3戦車中隊の継戦能力は完全に喪
失。

今出来る事は、館山市周辺に展開している全部隊に注意勧告をしつ
つ、敗残兵らしく立ち去るだけ。

” 車両大破5、中破7、小破4、損害軽微2。

乗員重傷21名、軽傷32名———だが。 ”

…だが、ひとまずは。

” 全員生き残っただけ、良しとするか。 ”
———そう自分に言い聞かせる。

「中隊長———稼働可能車両への応急修理が完了した。」

ヴィシニエフスカ軍曹が告げる。

それにコヴァルスキ少佐は顔を向けて、強く頷く。

———ここで項垂れていても仕方ない。

…とにかく今は。

「了解………では動ける車両に負傷者を乗せ、我々は西

岬海水浴場に向けて出発する。」

無線機を通信士に預けながら言う。

——先程、無線のやり取りで西岬海水浴場にイギリス海軍のL C A C—1級ホバークラフト型揚陸艇が上陸しているという情報^{ランディング}を耳にした。

：上手くいけば、負傷者を乗せた上で補給が出来るかもしれない。主砲の砲弾はイギリスとは規格が違う代物だから部隊内でやりくりするしかないが——M2重機関銃の弾丸くらいは貰えるだろう。

：それで対抗出来るわけではない。だが、あるに越したことはないだろう。

ウクライナでは大型種の後に小型種の巨大不明生物の侵攻が確認されていた。

今回は種類も違う生物だが——無いとも言い切れない。ならせめて、歩兵支援ができる程度の火力を補充しておく必要があるのは必然と言える。

だからこそ、さっさと戦車に乗り込もうと未だ軋む身体に鞭を打つ。

——直後。

自分達から東北東——出野尾地区より、銃声と爆発音が木霊する。

「——報告！現在、出野尾地区にて臨時国連軍IS部隊が交戦中：!!？」

通信士の声に、コヴァルスキ少佐は反射的に館山市一円の地図を開く。

——出野尾地区は現在中隊の展開しているアロハガーデン^{アロハガーデン}たてやまゴルフ場から東北東に直線距離で4km程行った、二方向から山に挟まれた細長い地区。

起伏が激しい上に平野が少ない事から侵攻速度の低下は必至と言える。

：IS部隊としては、そこを挟撃する形で仕留めようとしたのだら

う。

コヴァルスキ少佐からすれば——そんな自殺願望めいた行動は理解出来ない。

だが——好機である事も確かだった。

「急ぐぞ——」

T-72に飛び乗りながら、コヴァルスキは発破をかけた——

??
正午12時09分・千葉県館山市出野尾地区

大地という床に走った亀裂のようにさえ錯覚する山間部。

40メートルから100メートルの山々に囲まれた安房丘陵の大地を、ひとつの山と誤認する程の巨躯が——進撃する。

それはさざ波のようにゆっくりと。

それは雷のように荒々しく。

大地を踏み潰し、踏み砕き——黒き荒神は前進する。

「!!」

????????——大気を揺るがす咆哮。

空が割れるような爆音が大気を揺らし。

震、と地殻を踏み抜くように降ろされた脚をもって歩く度、その重量によつて地表が2メートル陥没する。

∴60メートルにも及ぶ巨体。

∴3万トンにも及ぶ体重。

一体どのようなにして二足歩行による個体生命を維持しているのか。

普通、これ程ものサイズの生物が陸上にいれば、歩行することすら叶わず自重で潰れてしまう。

数十メートルにも及ぶサイズの生物が存在出来ないわけではない。何しろ、現代における世界最大の哺乳類たるシロナガスクジラは30メートル以上ものサイズでありながら個体生命を維持している。だがそれは水中……つまり浮力が働いている場合に限る話である。故に、水棲生物が浮力の存在しない地上に上がってしまったら内臓の自重で死んでしまうのだ。

それを補完・回避するモノがあるとするれば、重心の分散……即ち多脚化と頭部と尾を用いたシーソー化による水平にバランスを構築する事こそが巨体を支える要素。

…だが、ゴジラは直立二足歩行による個体生命維持を実現している。

自重による自滅も、バランスの構築も関係なく———あらゆる常識を無視して、ゴジラは顕現していた。

いや、人間の常識で測るのが間違いなのだろう。

……ふと、唸り声を大気に刻む。

それは外敵の知覚。即ち威嚇行為。

睨みつけるように、敵がいる方角を睨みつける。

…視線の先、北東に2キロ———。

———同時刻。

館山市・大戸地区

豊房駐在所前・県道86号線

国連軍第11空中機械化歩兵中隊

簡易指揮車（イスズ2tトラック改造型）

———ゴジラより、北東に2キロの地点。

そこに国連軍第11空中機械化歩兵中隊の指揮車———民間トラックのコンテナ積載部分に情報統合指揮ユニットを搭載した

だけ——は展開していた。

：その傍らでは、CP役となる女性指揮官が非常に不機嫌極まりないような。不安で押しつぶされたような——そんな表情を浮かべていた。

——元々、彼女らは陸上自衛隊の自衛官であり、陸自の数少ないIS部隊のひとつだった。

もちろん、自分は男より優れている事は自負している。

ISに乗れるのは女だけだし、子供を産めるのも女だけ——

——そう考えれば『男は生物学的に不良品である』とさえ思えてくる。

——故に装備は一番優遇されるべきだ。

……だと言うのに。

「…どうして支援装備は民間改造車やロシアの中古車両なのよ…!!
？」

呻くように愚痴る。

——彼女の言う通り、簡易指揮車の隣には。

ロシア軍から購入し、KPV重機関銃をM2重機関銃に挿げ替えたBRDM—2J—18装甲偵察車と、同車を改造した——車
体の屋根に板チョコのような形のフェーズドアレイ・レーダーを搭載
しただけ——観測支援車が追隨している。

BRDM—2とは、1962年よりゴリキー自動車工場により設計された「装甲偵察哨戒車」だ。

タイヤの気圧集中制御システムと車体後部に設置されたガソリンエンジン、前面に収納式の波切板を持つ艇体形の車体と車体後部の1基のウォータージェット推進装置による水上走行能力を持ち、尚且つ大口径機関銃を密閉式の銃塔に装備し、赤外線式暗視装置が標準装備となっている。

他にも主車輪の間に設置された4つの展開式補助輪を持ち、軟弱地では地面に接地させて不整地走破能力を向上させることが可能である上に——値段が安い。

その低コスト故に発展途上国でも手に入る為、現在ロシア本国を含めて45ヶ国が運用している。

…だが、IS部隊に配備するにはあまりにお粗末と言える。
そして彼女らも当然それについて憤りを見せていたが――

「――仕方がないでしょう、中隊長。私達が防衛省からどう
捉えられているかを考えれば分かる話です。」

――その隣で、「いい加減そのリアクションは飽きました」と彼女の部下である木村曹長がウンザリしたように言う。

…木村曹長の言う通り――それはやむを得ないと言える。

――ただでさえISは高価なパーツを使う上に、オーバー
ホールとなると専用の設備が必要となる。

結果、本体と整備設備込みで1機あたり……100億円越えとい
う価格となる。

…比較対象として、

F―15戦闘機は1機あたり30億円。

F―2戦闘機は1機あたり73億円。

97式戦闘機荒吹は1機あたり65億円。

IS周りの設備を揃えた上で予算の9割を使い果たし、支援車両に
ついては大幅に予算を削らなくてはならなくなる。

――次に、アラスカ条約によってISを用いた軍事目的で
の武力行使の禁止。

これによって自衛隊内でのIS部隊におけるIS以外の装備の充
足化が見送られた事。

――最後に巨大不明生物の存在によってISより既存兵
器を優先化、あるいはEOSを発展化させ戦闘機という兵器を作るな
ど、露骨にISの充足化路線から外したという事。

…もちろん、ISが巨大不明生物相手に無力なのは知っている。

だが、実戦に投入せざるを得ない状況に此方が置かれた時の事を考
慮していなかった……否。実戦に投入することすら想定されていな
かった。

――つまり、防衛省からすればIS部隊は「金食い虫」で
あり始まる前から「戦力外」と認識されていた。

——故に、「支援装備は必要最低限のモノで良い」という判断になるのは必然。

…そもそも、ISとはスポーツ・競技用の存在である。

分かりやすく言えば——アサルトライフルやマシンガンの飛び交う現代の対人類戦に単発式かつ性能はマスケツト銃並みの競技用ライフルを装備させた兵士を送り込むようなモノ。

そうなれば結果がどうなるかは見えているし、最前線ではハツキリ言って話にならない。

——戦力外通告がなされるのも無理はない。

…理性を持った状態で冷静に考えれば簡単にわかる話。

——だというのに。

「だ、だまらっしやい！この敗北主義者！女の恥め!!」

——事実を述べるとこの通り、発狂して罵詈雑言を吐き散らす。

まるでガキだわ…正直、貴女みたいな人が幹部自衛官になれた事に驚きを隠せません——と、木村曹長は内心思う。

「…ま、そんな性格だから二尉^{中尉}止まりなんでしようケド——」

続けてボソリ、と口にする。

「なんか言った☒」

「いいえ、何も——それより、迎撃に向かわなくてよろしいんですか？」

何もなかったように木村曹長が聴く。

——ゴジラを挟むように八幡神社と観音寺院に彼女の子飼いの部隊が展開している。

そして彼女自身も迎撃に参加すると息巻いていたのだ。

「はん——言われずとも——」

「こちらも支援には尽力しますので…」

「要らないわよそんなのツ!!」

——聴くと、周囲の人間を全く考慮せず、所謂腰巾着と言える部下2名を引き連れて飛翔した。

…その衝撃でいくつか石が舞い上がり自分達の展開している隣に

あつた派出所——現在は住民の避難誘導により無人となつている——の窓ガラスを叩き割つた。

「…はあ……。」

——木村は溜息をつく。

…どうしてこんな部隊に来てしまったんだろう、と。

残されたのは、木村曹長を含む本部付き支援小隊——各車両とオペレーター総勢15名のみであつた。

「…どうします？ 補給物資だけ置いてズラかりますか？」

ふと——木村に尋ねる声。

声の主は、打鉄を纏つた木村の部下である川口三曹（伍長）。

「私達だけであんなのを相手取るなんて無茶ですし…せめて、艦隊や航空隊、砲兵の支援を受けられなければ火力不足です。」

——確かに、彼女の言う通りである。

ISは、その何者にも追従を許さない機動性が売りである。機動性だけであれば地球最強の兵器と言っても過言ではない。

——だが機動性にステータスを振っている分、火力投射力は現行既存兵器の全てに劣る。

…何しろ、重武装の歩兵が空を飛び回っているだけに過ぎないのだ。

対人類戦ならばいざ知らず、巨大不明生物相手となると圧倒的に打撃火力が不足していた。

「それに国連軍の通信が正しければこの辺り一帯は——…」

「…そうね、軒並み焦土化確定かしら。」

——現在、ゴジラの侵攻予測ルートにある大戸・東長田・西長田への面制圧砲撃を行うべく、大綱地区丘陵地帯・館山市城山公園にM1クルセイダー自走砲とMLRSから成る野砲部隊が展開しているとの情報があつた。

…そして、今木村や川口ら支援小隊が展開している場所は面制圧の該当地域内。

足の速いISならいざ知らず、こちらは足の遅い地上車軸である。支援小隊にも2機のISがいるが、それはあくまで支援車両の警備

機体。

即ち地上車軸との連携が前提となっている。

ならば。

「早いところそうしましょう。…総員傾注！」

木村が無線機を手に取りながら、支援小队全員に告げる。

「これより我々は現地域から離脱。館山港へ退避する。」

——館山港は現在国連軍が展開しており、臨時の地上拠点が置かれていた。

本来ならここに最初から布陣するのが正解なのだ——

そうは出来ない理由があった。

まず、館山港は前線になる可能性が高く、戦力外通告をされていた我々は内陸部に展開せざるを得なかった事。

次に、戦力外とはいえ予備戦力としてIS学園、そしてポーランド陸軍の後方に配置されていた事。

最後に、あの中隊長おバカさんが頑なに陣地転換を固辞していた事。

——それにより、たつた今陣地転換を行わなければならぬ事態となっていた。

死 —: まあ何はともあれ、このまま陣地転換が叶わず味方の面制圧で爆死 —: 思わず川口は胸をなで下ろす。

——直後、出野尾地区にて爆発音が連鎖した。

2分前

館山市西長田区・観音院前

荒神ゴジラが田畑や住宅、木々を破壊しながら突き進んでいた出野尾地区と山を挟んで隣接する地区。

ゴジラから西へ約800メートル。

観音院前に――FIS―3Jラファール・リヴァイヴを纏った女たちは展開していた。

――彼女らこそ、国連軍第11空中機械化歩兵中隊実働第2小隊であった。

機体フレームには山岳地帯での戦闘を想定して施された迷彩色。

腕には3連装バルカン式大型ロケットランチャーを装備。

先頭に立つ女は中隊長が布陣しているという実働第1小隊と交信をしている。

「こちら一番機、目標を確認、今から仕掛けます。」

ISを纏った女はそう言うのと第1小隊との通信を終える。

女の後ろにはISを纏った女15名がおり、全員が装備の最終確認を行っていた。

「…全員、装備はちゃんと確認した？」

全員が応じる。

――しかし、それには確かな不安と焦燥を孕んでいた。

彼女らは陸自所属のIS乗りたちだが、上層部の警告、そして臨時国連軍への正式な異動命令、ついで自治体からの災害派遣要請を待たず、機体も装備も無断で基地から出撃し国連軍のIS部隊に合流したのだ。

――基地に帰投すれば、間違いなくMP警務隊に拘束されるだろう。

…現在ISの立場は他の兵器より優位に立っているはずだった。

――しかし巨大不明生物の出現と相次ぐ敗走によって、その優位が揺らいだ為に自らの権力が形骸化する事を恐れた女性権利団体の一部が彼女たちに命令したのだ。

――その、指揮系統も組織の規則も無視した行いによって、彼女らは背水の陣を強いられていた。

…ゴジラを倒さなければ、自分達の人生が破滅する。

だからこそ、死に物狂いで戦うことが出来る。

――ふと、先頭の女はそんな彼女らを鼓舞するように拳を掲げて声を上げた。

「大丈夫！ 私たちはISSを使えるエリートよ！ 他の兵科の男たちとは違って色々なことができる！」

——彼女自身、それは虚勢であった。

まるで波に攫われる砂山のように、脆く壊れやすい意思。

だがそれでも、彼女は指揮官としての使命を果たそうと声を放つ。

「だから——あのデカブツを倒すわよ！」

——私達の未来のためにも。と付け加えるように叫ぶ。

——直後。

センサーに熱源反応が急接近していることを伝える警報が鳴る。

「——ッ!？」

女は反射的にスラスタを蒸し跳躍——その場を離れ、遮

蔽物に飛び込もうとするが。

唐突に吹き荒れる豪風。

まるでミキサーにぶち込まれて掻き混ぜられている果実のように

吹き飛ばされる。

——観音院の本殿。

——喫茶店の内装。

——田園の真ん中。

——農家の倉庫。

——ビニールハウスの中。

——民家の玄関。

次々と暗転と変遷を繰り返してめちやくちやに掻き回される景色。

最後の衝撃と共に——そこに、仰向けに倒れ伏していた。

眼前には、

砕けた木製の床。

倒れ伏したドア。

原型を失った玄関。

ではここはリビングか。

そして今私は——ああ、民家の壁を突き破ったのか。

混濁する意識の中で彼女は理解する。

つまり、先程めちやくちやに掻き回され景色の中を通って来たわけ

で——ああ私は民家やビニールハウスを突き破るように吹き飛ばされたのか、と更に理解する。

朦朧としていた意識が再構築されて行く。

そして——

「な、何が……、っ……!?!」

思わず、反射的に口に出す。

そして——後頭部に違和感を感じた。

…なんだ、これは。

——後頭部に食い込むように存在する異物感。

奇妙なままに——まるで、万力で固定されたように動かない肉體。

——頸を伝う、生暖かい液体。

「あ、あ、あああああッ!!」

女は恐怖で動けなくなった。

——否、恐怖だけではない。

物理的に動けなくなったのだ。

別に手脚が瓦礫で埋もれてはいない。

その程度であれば身に纏ったISのパワーアシストを持って除去出来る。

…それすらできない。

ISの制御系がやられたのか？

——否、そうではない。

確かに機体各部は損傷しているが、致命的損傷というわけでもない。

…では何故か？

パイロットに問題があるにしても、肉体が欠損したわけではない。そうでないとするればひとつしかない。

——後頭部に食い込むような異物感。

それが全てを物語っていた。

すなわち——瓦礫が小脳に突き刺さっていたのだ。

脳は大きく分けて2つの機能に分類されている。

大脳は複雑な思考。

小脳は肉体の動作。

それらを司るように、脳とは分担されている。

つまり今、後頭部に突き刺さった瓦礫によって小脳を破壊された彼女は—— 礫にされた死刑囚同然であった。

かちかちかちかち、かちかちかちかちかちかちかちかちかち。かちかちかちかちかち……！

動けない未知の恐怖を前にして、歯を震わせる。

(ほ、他のみんなは…⊗)

—— 一縷の希望を託し、思考操作でウィンドウを展開する。

しかし—— 残ったのは、自分だけであり、他の隊員は全滅した事を告げる内容だけが映し出された。

かちかちかちかち、かちかちかちかちかちかちかちかちかち。かちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかち、かちかちかちかちかち…ツ!!

このまま失血多量で死に至る未来が脳裏をよぎり、女は先程以上に歯を震わせる。

そして再び高熱源反応をセンサーが捉え、警告音を鳴らす。

女は顔を上げ—— ゴジラと視線が交錯した。

…直後、ゴジラの背が光り—— 青白い白熱光を放つ……！

「は、はは…あ、はははは…!!？」

そして女は自らが絶対的に助からない未来を前にして、狂気に満ちた声で乾いた笑いを上げて—— 蒸発した。

2分後。

館山市岡田区・八幡神社前

????????

ゴジラの進撃していた出野尾地区から山を挟んで西に隣接する地区。

そこに———実働第1小隊は布陣していた。

そしてそこに中隊長が合流し、攻勢を仕掛け———直後に、西長田にて火柱が上がる。

「第2小隊と通信途絶———」

同時に上がる報告。

———つまりそれは、第2小隊の全滅を告げていた。

その報告に中隊長の女は舌打ちするなり、

「使えない女たちねえ……！」

思わず吐き捨てる。

……それに、周囲の部下達は顔を曇らせる。

いくら同じ女で、尚且つ同じ女尊男卑主義思考であれ。

———ここまで露骨な態度を取られれば表情を曇らせるくらいする。

その言動は、明らかに自分以外の人間を男女平等に見下している内容だったから。

……最も、中隊長はソレを気にも留めない。

———苛立ちを浮かべたまま、3連装バルカン式対艦バズー

カを手に。

「さあ———行くわよ！全機続きなさい！」

中隊長の号令と共に———15機全てが跳躍を開始した。

……うち、中隊長を含む8機はゴジラと視線が交錯する高度、即ち対地高度60メートルを。

……残り7機は、ゴジラより遥か上空。即ち対地高度100メートル以上を。

それぞれ二手に分かれながら———対艦バズーカを穿つ……

！

「????????」
「!!!」

———全ての物を圧砕する咆哮。

—— 全ての者に宣告を下す音。

—— 全てのモノを圧倒する声。

乳白色の屍体を思わせる生気の無い眼球が、ギョロリと現場指揮官の女を睨み付ける。

—— 一瞬交錯する視線。

” 来るが良い ” と告げるように吊り上がる口角。

「総員攻撃開始！」

焦燥を滲ませながら、中隊長が吠えるように、無線越しに怒鳴る。

… 作戦がないわけではない。

だがその為には今—— 陽動攻撃を行う必要があったのだ。

… 空を裂くように舞う、深緑の影。

… 火薬と共に砲弾を穿つ、8名の女。

『死ねえ—— ツ!!?』

『私達の未来の為に…! 死んでよ!』

8機のISが、ゴジラの外周を捕捉しきれないような高速で飛行しながら、副兵装である50口径アサルトライフルと、主兵装である対艦バズーカを穿つ。

無線越しにIS操縦者の雄叫びと50口径アサルトライフルの銃声と対艦バズーカの砲声が響く。

—— 彼女らが守ろうとしているのは、先の学園教師部隊と同じ。

館山市の市民ではなく。

在日欧州邦人でもなく。

館山市そのものでもなく。

剩え日本の領土でもなく。

更に言えば女性の利権でもなく。

—— ただ、自分達の権力とソレが約束された未来。

… ただ、それだけ。

—— ゴジラが人間の感情と思考を理解出来たなら、呆れて殺すことすら止めるだろう。

そして—— 嘆くだろう、こんな者達の為に先人は命を散ら

したのか、と。

『…やっぱり…やっぱり効いてない!』

IS部隊の一人が放つヒステリックな悲鳴が言う。

50口径アサルトライフルに使用されている50口径の12.7mm NATO弾が通用しない事はIS学園の部隊が交戦したデータ

—— IS委員会が秘匿回線で中継していたもの ——

—— で分かりきっている。

「落ち着きなさい!」

中隊長が叫ぶ。

—— 策が無いわけではないのだ。

—— そも、作戦も無しに戦力を分散するなどあり得ない。

—— それを証明するように。

ゴジラの後方 —— 否、上空300メートルより突っ込んで来る7機のラファール。

直後 —— 砲声と共に対艦バズーカが二斉射放たれる。

—— 合計14発。

現用艦艇の装甲を貫くに足る砲弾の貫通力に、上空からの落下エネルギーによる上乘せ —— 確かにそれならば、与えられる威力は向上するだろう。

それはさながら爆撃というに相応しい…!!

—— だが、それだけである。

「……………」

ゴジラの唸り声 —— それは鬱陶しい羽虫Isに対する苛立ちから。

『ち、中隊長!やはり効果ありません!!?』

「だまらっしゃい!角度が浅いのよ!もつと突入角度を垂直になさい

!!?。」

『か、角度の問題じゃないです!こいつ ——』

—— 並みの兵器では、貫けません。と言おうとする声を遮るように。

ゴジラは爆撃というに相応しい攻撃を行った部隊を見るなり ——

——青白い、白熱光を放つ。
すぐさま、全員は回避行動に移る。

『……え？あ、嫌(ザ)……』
しかし、その狙いは努めて冷静に。精密に。

『や(ザ)……』
確かな、必殺の一撃をもって、ラファール・リヴァイヴを撃墜して行く。

『中隊ちよ(ザ)……』
撃墜の度に鳴る悲鳴と砂嵐のような音。

機体のみならず、断末魔さえも焼却し尽くし無に帰して行くその様は——まさに荒神そのもの。

既に——こちらは残り3機にまで減らされていた。
「ッ、まだよ——」

中隊長が吠える。

直後——自分に追従していた部下の機体制御を制圧。
半自律モードに切り替える。

『ち、中隊長、何を——！』
「うるさい！役立たずでも困ぐらい出来るでしよう!!？」

2人をゴジラの眼前で棒立ち状態にさせ——中隊長はゴジラの後方へ飛ぶ。

狙いは一点、頸のみ。

『ふざけ——ひっ、やつ、い(ザ)——』
『この、クズが——(ザ)——』

恐怖に怯えた声と、怨嗟に満ちた罵声と共に、最後の僚機が撃墜される。

——だが、それで充分隙は出来ていた。

中隊長は対艦バズーカをゴジラの頸に当たる皮膚に密着させる。
：彼女が頸に拘る理由は至極単純。

そこに脊髄があるからである。

脊髄とは、神経の塊と言うに相応しい程精密かつ重要な機能。

それを破壊すればどうなるか——まず、頸より下の身体を

動かすことが叶わなくなる。

完全殲滅には至らずとも、なんとか行動不能に持ち込むことが出来る。

「はっ——死ねェ!!」

——躊躇いなく、中隊長は引き金を引く。

1 発目。

弾着。

砲身回転。

2 発目。

弾着。

砲身回転。

3 発目。

弾着——。

…ゼロ距離からの対艦砲弾が皮膚を焼き払い、そして。

——無傷の表皮が、姿を現わす。

「…ッ、う——そ…う…」

…あり得ない。

ゼロ距離からの3斉射——イージス艦を撃沈せしめるだ

けの攻撃——を受けたのだ。

健在であるはずが無い。

——だが、現実の光景が無情にも事実を告げる。

直後——振るわれる尻尾。

それは頸を狙ったものではなく——ゴジラ自身の背後の

地表を薙ぎ払い。

「は、どこ狙って……」

どこを狙ってるのよ。と、後がないにも関わらず馬鹿にしたような口調で言う中隊長の言葉を遮るように、未知の衝撃が後頭部を震わせた。

「か——は、っ——な……」

何が襲ったのか理解出来ず——朦朧とする意識の中で眼球を動かし後方を見る。

——眼球に映ったものは、ソーラーパネルであった。

そしてふと——出野尾地区の多目的広場に太陽光発電所が隣接していた事を思い出す。

……つまり、先程尻尾を振るったのは。

頸に張り付いた女を叩き落とす為でも苛立ちから無造作に振り回した訳でもなく。

——ソーラーパネルを空中に巻き上げて、私を叩き落とす為……？

中隊長／女は理解する。

直後——重々しい音を響かせ、女は地面に叩きつけられる。

ソーラーパネルが後頭部を打ち付けた衝撃で朦朧としていた意識はそれでハッキリとする。

そして、咆哮が大気を震わせる。

????????
!!!

「っ……っ……」

先程から何度も聴いていたハズの音量が、片耳の鼓膜を破る。普通ならば、耳を塞ぐだろう。

だが女は耳を塞ぎもせずに、ただ這い蹲るようにその場を離れようと試みる。

「ひい……い、いやあ……っ！」

かちかちかちかち。

恐怖に歪んだ顔は歯をカスタネットのように打ち鳴らし、ただただ無様に敗走しようとする。

逃走を促す警鐘が脳内に反響する。

痛みで小さく悲鳴を上げながらも無理矢理体を動かし、赤ん坊のように四足歩行で地を這い逃げる。

それを嘲笑うように、あるいは罰するように、轟音と共に巨脚を持って前進する。

その進路上にあるのは女。

——その巨脚が、自身を踏み潰そうとしていると気付いた女は。

「い、嫌ッ！死にたくない！」

急ぎ、覚束ない動きで逃げようと足掻く。

しかし感情も思考もぐちゃぐちゃに混濁している状況下ではまともにもISさえ操れない。

その速度は亀より遅く——ゴジラはそれを睨みつけ。

大地が軋むような轟音を響かせ。

????????

!!!

「ひい——!!?」

女の悲鳴が大気を震わせるより早く——3万トンもの大質量が女を粉碎した。

同時刻。

三浦半島沖・南方6キロの海底

水深821メートル

暗い^{みなそこ}海底に、潜む巨体。

海面の波が織り成す光の舞が体表を舐めるように伝う。

その中で――ソレは動き出した。

――千尋にーちゃん？チガウ？

――コレは…だあれ？…千尋にーちゃんに似てるけどチ

ガウ…敵？^{テキ}

――敵？^{テキ}英理加おねーちゃんを虐めた、” あいえす ”

と同じ、敵？^{テキ}

――千尋にーちゃんジャナイ、コレハ、敵。^{テキ} 怖いモノ。

――じゃア、殺サナイト…おねーちゃんヤにーちゃんヲ酷

イ目ニ遭ワセルカモ知レナイ。

――アア…殺ソウ。

…海底に囁く、無垢な子供の声。

それは明確な殺意を持って――^{ピオラント}バイオ怪獣は浮上を開始
した。

EP-42 館山市防衛戦／掟二縛ラレシ者達

6月13日正午12時16分

館山市街・正木地区

房総モノレール南部線・平久里川大橋

館山市を南北に分かつ、平久里川に架かる橋。

そこに――緊急停車したモノレール。

次いで、緊急停車に対するお詫びの車内アナウンス。

：そして、車両を降りて最寄りの正木駅まで職員の指示に従って徒歩で避難してくれという。

突然の事に乗客たちは戸惑いつつも、レール下の連絡通路に降りながら、最寄りの駅を目指して歩みを始める。

『歩ける方は徒歩による――』

「すげえこんな風になってるんだ。」

「もうヤダよ、あつつい。」

――係員の指示を仰ぐ声。

――口々に聞こえる乗客の声。

様々な声が海を形成する。

：共通している事があるとすれば、そこには不安を孕んでいるという事。

そしてこのような異常めいた事態であればあるほど、人はお喋り――

――言い換えれば、不安を拭うべく誰かに伝えようとする習性がある。

「やばいよ皆んな、ねえ。」

――ある少女は、スマートフォンの動画系SNSの生放送機能を用いて、現状を無差別に拡散している。

これが人によっては「ふざけている」とも取れるかも知れないが、人によっては「人の手で加工されていない無修正の情報」・「自分の側に事態が回ってきた際に備えるべき要素」が流れてくる状況でもあるが故に、食い付く者も多い。

『避難路すげ』

『なんかあったの??』

『たかが緊急停車でこの騒ぎw』

『こえええええ』

『やばいw w w F P S やめられへんw w w』

『レールが逝ったのか?』

『ぎゃああ』

『うわw』

——リアルタイムでコメントが投稿されては、画面の中を右から左へと流れて行く。

「すげえな、これってスクープ映像ってやつじゃね?」

「ね、はやく行こうよ。危ないし…」

…口々にスマートフォンが周囲の音声を取り込む。

——直後。

豪^{バコン}ツ、という爆音が南部——彼らからすれば後方に位置する——で轟き、閃光と共に大気を揺らす。

「うわっ」

「えっ、何何何? 何何何…」

「何なに? 何なの?」

——事態を理解出来ぬまま、大勢の人間が後方を向く。

少女が手にしたスマートフォンもそちらに向けられて、しかし——
——そこには降車した乗客がたむろしており、人の群れが映るだけ。

『!』

『うわw w w』

『爆発起きてるやん!』

『ヤバイヤバイ』

『?』

『これは貴重な体験』

『何? ガス爆発?』

『草』

『あまいら自重w』

『避難して!』

『うp乙』

『館山市よ、さようなら』

『ざわ、ざわ、ざわ、』

『キター(、▽、)・ω・)。▽。); D。(・▽・)。。ー。)

?ー?)。ω。)ノ!!!』

『…ヤバくね?』

『ごりや俺も避難せんと』

——そのスマートフォン画面には、無数の無関係な人間の

言葉が写っていた。

…画面それを見て。

「平久里川の南に…何か——いる…!」

——怯えたように、少女は訴えかけた。

6月13日・正午12時17分
東京都千代田区首相官邸・記者会見

「——であるからして、有識者会議の情報からしても、巨大不明生物の上陸は有り得ないと思われま

各マスメディアの記者が座する前に——現・内閣総理大

臣大河内清次は会見を開いていた。

——1時間前。

巨大不明生物の上陸を受け、急ぎ官邸対策室を設置するよう行動を移そうとした。

——が、『予算審議会を繰り上げるとは何事か——

——』という特定野党の反発により官邸対策室の設立が遅れに遅れ、事

態の把握と対策法の確立は完全に後手に回っていた。

特に未だ情報は錯綜している事と、館山市はIS学園が置かれた事で半ば強制的に国連主導の経済特区となつていて、故に国連あちら側が情報を遮断すれば日本政府には一切情報が流れてこない。

…こうなれば出来る事はもはや限られる。

自治体に対し住民の避難勧告を発令し、一般住民に自治体で定められた災害時の避難所への避難を呼びかける程度。

…自衛隊に関しては自治体からの災害派遣要請がない限り出撃は不可能。

仮に出撃出来たとして、住民の避難が完了していなければ攻撃は出来ない。

つまり、日本政府としては指を咥えて避難を呼びかけるしか無いというのが現状であった。

…そもそも、IS学園からも館山市からもリアルタイムで情報が更新されていない事から、何かあったという事は容易に想像できる。

現場が錯乱しているのか。

…あり得るだろう、IS学園では催しの最中に何らかの事故が発生。

それが南房総半島沿岸地域に避難勧告を発令する程の事態だったのだ。

既に手遅れの可能性すらあった。

「しかし方が一の事態を考慮して、当該地域の住民の方々は自治体の指示に従い、出来るだけ早めの避難を心掛けて下さい。」

だからこそ、今はこうして警鐘を鳴らす他ない。

…もちろん、この言葉も全て保険だ。

いくら我々の世界が常識という概念で守られているにしても、自然や生物とは常識を容易く破壊してしまうもの。

一度それに付け入れられれば、後はされるがままとつてしまう。結果的に遺されるのは膨大な犠牲の山。

その時誰もが言う言葉が『想定外の事態』だ。

『想定外の事態など、よくある事だ』…とは、よく言っ

たモノだ。

内心大河内は思いながら、繰り返すように口を開く。

「繰り返します。巨大不明生物の上陸は、あり得ないと思われませんが、万が一の事態に備えて早めの避難を行なって下さい。」

念を押すように、告げる。

そうでなくとも我々は戦後76年の間、平和という名のぬるま湯に浸かっていた為に多くの国民は行動力が緩慢なのだ。

通常の自然災害でも、『きつと大丈夫』という、何の確証もない理由で避難を怠り死亡したケースが数多存在する。

そのような事態に備えて、念入りに復唱する。

ふと、左方より壱岐首相秘書官が飛び込んで来る。

「総理。会見中に失礼します。」

そう言うなり、壱岐は大河内に耳打ちし。

驚愕する。

…それは、大河内の懸念が具象化した瞬間だった。

「え、館山に？」

正午12時18分千葉県館山市

館山市。

別名：経済特区・館山

IS学園建設以来、IS関連の企業が進出することで経済的発展を遂げた街。

経済特区とする事で安定に至り、尚且つ都市限定型の特例によりI

S 関連企業の私設部隊と国連軍の駐留容認。

行政権が日本政府と国連のどちらかにかにあるかさえ曖昧に溶け合った街。

内政干渉とも言えるし国際社会への貢献とも言える混沌の街。

日本にありながら日本の外に在るようで、日本の外に在るようで日本にある街。

…高層ビルが軒を連ねるそこは。

…逃げようと対向車に激突する車両。

…その事故車に追突する運送トラック。

…急ぎ自転車を動かそうと横転する者。

…その現実離れした騒動を傍観する者。

…咄嗟に背を向けて走り出す歩行者。

…前進する黒い死の塊。

悲鳴を上げて、走り逃げる者。

恐怖より好奇心が勝り、スマートフォンで撮影を試みる者。

そこに「撮つてないで早く逃げて」と怒声を飛ばし、逃げるよう促す者。

その背後で、路上に打ち捨てられた無数の乗用車を、落雷の如き轟音と共に黒い塊が踏み潰す。

地鳴りと共に踏み潰された乗用車は爆発し、四散した破片が周囲の建築物群を豪雨のように叩きつける。

つい数分前まで平穏に満ちていた都市にはあまりに不釣り合いで、異界とさえ錯覚してしまう光景。

その中を——黒い塊が、^{ゴジラ}ゆっくりと歩いて行く。

——それを、甲高い降下音と共に——^{ゴジラ}陽光の下。

流星じみた何条もの飛翔体が^{ゴジラ}をつるべ打ちにする——

一度の外れもなく、寸分の誤差もなく、ゴジラを叩き打ち付け爆裂するソレは、紛れもなくミサイルとロケット弾による混成攻撃だった。

正確無比を体現したように、急所を狙う^{ミサイル}誘導弾。

動きを止めるべく機関銃めいた掃射でつるべ打つカチューシャ・ロケット。

…都市の区画を根こそぎ吹き飛ばし、地表をエグリ、クレーターに作り替える火力。

——しかし。

…なおも、無傷。

あらゆる事象を遮断するように、全ての攻撃は無力化される。

…代わりに、街より火の手が上がリ——

????????
——
!!!

地獄の底より響くような咆哮。

それは破壊の具現。

それは殺戮の顕現。

赤々と燃えるなかで。

…黒き荒神は、空を穿つように吼える。

——街は、虚構が侵略する戦場へと変貌した。

…その、1キロ北。

——館山市八幡地区。

黒煙により黒く濁った空を裂くように。

複数の青い噴炎ジェットエンジンが駆けて行く。

「——目標捕捉、距離2000。」

バイオメジャーグループ私設空中機械化歩兵部隊第2ISS中隊を率いる女が言う。

「奴は館山市を北上しようとしている。ここからあそこへ行かせるわけには行かない…正面から迎撃する。」

”——止められるとは思っていない…だがせめて、支社の人間たちが撤退し終えるまでの時間稼ぎくらいは…!”

——女は内心独りごちる。

彼女ら私設ISS部隊に与えられた任務は、第1ISS中隊と連携しての、館山市・那古地区に置かれたバイオメジャーグループ館山支社の

防衛・ないし社員撤退の時間稼ぎ。

——つまりは囚役である。

普段であれば囚役など不服中の不服だところだが、今回は
そうも行かない。

何しろ、正規軍である国連軍のIS部隊が1部隊のみとはいえ全滅
したのだ。

∴場合によつては、足止めや時間稼ぎすら叶わない可能性が極めて
高い。

——考える事は同じなのか。

ハイパーセンサーには館山市内のIS関連企業の社屋から出撃し
たと思しき私設IS部隊群と国連軍が増援に投入したIS部隊——

——総勢78機。

∴先程投入された数の倍以上。

——僅かに心強さが宿る。

∴だが、どうにも不安は払拭出来ずにいる。

これだけの数を揃えたところで、最低限のデータリンクで表示され
る各機の装備が平均して火力不足だと訴えている。

”——これでは∴いや、それでも私達は、”

『中隊長！右20度、倉持技研私設部隊の展開位置に高熱源反応∴！』

——中隊副官の絶叫。

一瞬遅れて、轟音と共に右方の空が蒼あおに染まる∴！
そこには、

『——倉持技研の部隊が∴！』

戦況ウィンドからも、目視界からも——並走していた倉持
技研の私設IS部隊1個小隊6機が消えていた。

——文字通りの、消滅。

1人の生存者も存在しない——否、一瞬前まで生命体が存
在していた痕跡さえ残っていない。

∴同時に、ハイパーセンサーに併設されていたガイガーカウンター
が警鐘を鳴らす。

——その警鐘が如何なる意味を齎すのか、もはや頭には無

かった。

ただ、体内から燻り溢れ出す感情を抑えるべく、強く奥歯を噛み締める。

「…あの巨大不明生物に飛び道具がある事は知っていた。

だがまさか——絶対防御を貫通し、尚且つ機体ごと操縦者を蒸発させる威力。

…原理的にはレーザーに似ているのだろうが、ISのレーザー兵器はイギリスしか持ち得ていない為、対レーザー演習を実現することは叶わなかった。

当時ソレを別段どうでもよいと評した自分を呪う。

——ISには、戦術機のような「対レーザー自動回避システム」は実装されていない。

そして、レーザー…光とは1秒間に地球を7周半する速さで空間を飛翔する。

——見えた瞬間には、既に撃ち抜かれているのだ。

…再び、空が蒼あおに染まる。

『サウスロック社の私設部隊が…！』

次の瞬間には、サウスロック社の私設IS部隊2個小隊16機が蒸発する。

——現状で、既に78機中22機が撃墜されていた。

——直後、熱源反応の増大を告げる警報。

「くっ——各機、高度を落としてビル群に飛び込め!!？」

一斉に、全機が回避行動に移る。

「えっ…何、これ…。」

その瞬間に指揮官が視たものは。

——視界を覆う眩くも神々しき閃光。

——高熱により、発火する自らの肉体。

——不可視の毒に命を分解される自身。

そして女は、全てを理解するよりも早く、世界から消滅した。

正午12時25分

内閣府首相官邸・大会議室

巨大不明生物に対する緊急災害対策本部の設置に関する閣僚会議
(第1回)

「…設置に関する閣僚会議を終了します。では皆さん、これで。」

——東官房長官による宣言。

同時に、閣僚一同が一斉に立ち上がる。

この会議は、郡山内閣危機管理監の具申により本案件

館山市に上陸した巨大不明生物に対し、緊急災害対策本部を設置するべきであるとの判断から開かれたものであった。

——席から立ち上がった閣僚と共に、首相秘書官は大量の資料を詰めたであろう大きなカバンを手に、早歩きで廊下を急ぐ。

「形式的な会議は極力排除したいが、会議を開かないと動けない事が多過ぎる——！」

…この非常時に、呑気に会議などやっている場合か

と、秘書官の一人が愚痴る。

…彼の言い分は至極当然と言える。

確かに、眼前に脅威が迫っているにも関わらず、いちいち会議を開いていては対策しようにもままならない。

——ただでさえ、国連からの情報不足で後手に回っているというのに、これでは事態の悪化を招くばかりである。

「効率が悪いが、それが文書主義だ。民主主義の根幹だよ。」

ふと、その愚痴を漏らした秘書官の隣をかける、別の秘書官が告げる。

——確かに、文書主義が民主主義の根幹であるというならば、それは覆しようがない。

…それを否定するという事は民主主義の否定にも繋がるからだ。
日本国が民主主義国家である以上、それは切っても切れない要素。
——だがこのルールを守り続けるだけでは過ちを繰り返すばかりというのも事実。

…誰かが言った。

——日本人は、ルールは守れてもルールを作る事は出来ない。
いと。

まさにその通りじゃないかと秘書官は思う。

「しかし、手続きもないと会見すら開けないとは——」

——非常時に際して、即応性が低過ぎる。

秘書官はそう内心独りごちた。

????????????????????????????????????

——同時刻。

——館山市平久里川北岸・正木地区

——市街地の中心である長須賀——
——一帯の通りに人は無く、景

色に不釣り合いは爆音と砲声だけが木霊している——
——とは、

平久里川を挟んだ、副都心に分類される地区。

そこもまた、戦場と化した長須賀と同様に混乱に満ちていた。

唐突に始まった非常事態に市民は皆、商業施設や地下鉄駅への避難を余儀なくされている。

——正木地区のモノレール駅もそれらの影響を受け、一種の避難所と化していた。

バスや列車などの公共交通機関も路線寸断による運転取り止めや道路の混乱により、完全に沈黙。

現在は屋内に避難するか、徒歩ないし車で市外に脱出するか、の二択

となっていた。

——とはいえ。

戦場となっている長須賀と比較すると現在は未だ日常に片足を突っ込んでいるような状態で、まだ落ち着いてるとさえ言える。多くの人々はすぐに収まるだろう。

所詮は対岸の火事。

——そう信じて止まなかった。

…そんな人々が300人以上、駅構内に溢れていた。

「…どうなって、いるんですか……？」

その光景が彼女——シャルロット・デユノアには信じられなかった。

眼前に脅威が迫っているというのに。

明らかにシエルターには不向きな構造である駅に入り込んだ程度で安心して——もう、他人事。

…その、シエルターが国民の6割近くに普及しているシャルからすれば、この景色は確かに異常であろう。

——何故、こんな紙細工みたいな所に逃げただけで安心していいのか。

どうしてこんな場所で安心出来るのか。理解出来ないが故に、楯無に問う。

「——まあ、仕方ないっちゃ仕方ないんだけど……日本だと、マトモなシエルターがないし……」

確かに避難所は存在する。

災害時、身の安全を確保する為だけの設備として機能する施設は各自治体に無数に存在する。

…だがシエルターとなると。

「シエルターは日本国民全体に対して——0.02%しか普及してないもの。」

それを聴いてシャルは絶句する。

”——嘘でしょ☒下手な発展途上国並みの普及率じゃない!!”

…とても、先進国とは思えない。
そんな余裕はないのか。

それだけ安全面に対する意識が低いのか。

それとも——他者に滅ぼされても構わないと思っ
ているのか。

恐、と嫌な思考が走る。

幾ら何でもそれはないと思いたい。

だが：そんな風にさえ思われる程、元フランス人のシャルから言
わせれば、それは異常であった。

「んまあ、だから皆、災害時は大きな施設とかに入ると安心して気が抜
けちゃったりしちゃうのよね…。」

たはは、と楯無は笑う。

：ちなみにだが、IS学園に向かったハズのシャルと楯無が何故館
山市北部のモノレール駅にいるかというところ——それは学園
で起きた原爆級の爆発と光の避難指示を受けたからだ。

そのまま市街を抜ける予定ではあったがあちこちがグリッドロッ
ク状態であった為に、止むを得ずこの駅に退避したのだ。

——だが、この平穏な景色に不安を抱いていたシャルはど
うも落ち着かない。

：まるで、『同じ部屋で殺人鬼が人を刺し殺しているのに周りの人
間は殺人現場でいつも通りの生活を送っている』かのような——
——そんな風にさえ見える。

その周りには、まだ落ち着いている人々。

すぐに収まるだろうと他人事のように思う人々。

所詮は対岸の火事だし自分とは関係ないと考える人々。

自分とは無縁の話で、自分には平和な日常が約束されていると信じ
て疑わない人々。

——その、全てを叩き割るように。

一斉に鳴り響く、ケータイやスマートフォンのアラーム。

先程まで半ば平和だった空気は一瞬にして崩壊し、警鐘を告げる緊
急災害速報の通知。

そして—— 駅に備え付けられたガラスケース内のテレビやケータイのワンセグに、東官房長官の記者会見映像が流れ出る。

『先程政府は、千葉県館山市に上陸した巨大不明生物に関する緊急災害対策本部を設置致しました。』

——これにより、国民皆様の安全に対して万全の対策を講じ、速やかな避難活動を実行するため、千葉県庁・館山市役所および関係省庁との連絡を密とした——』

——ほぼ全員が停止する。

立ち止まって、息を呑むようにスマートフォンスクリーン越しに流れる会見映像を見始める。

——突然の事に戸惑いながら。

——全員が沈黙したまま。

——ようやく、自分達が非日常に墮とされたのだと知覚して。

……そして。

楯無とシャルは—— 耳を劈くつんざくような爆音が急速に迫り来ることを認知する。

その音は2人共、何度か聞き覚えがあった。

それは—— 不調により異常を起こしたエンジンを抱えて、墜落するI Sの音。

「ッ—— みんな、伏せてエ!!」

誰よりも早く。

シャルは切迫した表情で、駅構内に留まる人々を見渡しながら—— 叫んだ。

……一瞬後、想像を絶する轟音と共に、未だ嘗て人生で経験した事の無い衝撃を頭部に受け—— 五感が、飛ぶ。

一瞬—— シャル聴覚と視覚を失った。

……きいん、という耳鳴りが世界を支配する。

目に映っていた景色は真っ白に漂白される。

「……う、あ——」

シャルは思わず口を開けて、声を放つ。

しかしその放ったハズの声さえ、脳は言語化出来ない。
そも、音を拾えない。

だから今自分が声を放ったのかすら知覚出来ない。

…聴覚のブラックアウトと視覚のホワイトアウトから5秒後、シャルはようやく景色を取り戻す。

——そこには。

「なに…これ…？」

——地獄と化した駅構内が在った。

…改札口は突っ込んで来たISに根こそぎエグリ取られ。

…改札口の向こうはホームが落盤した事で完全に押し潰されてい
て。

…墜落の衝撃で飛散したガラスが無数の避難民に突き刺さり赤い
海が形成され。

…崩落したコンクリートの下からは、赤い水溜りと、肌色のナニカ
が覗いて居て。

…先程まで、ギリギリ平穩を保っていた空間は完全に消滅してい
た。

「そん、な——！」

思考が完全に停止する。

仮にもスパイとして訓練された身ではあるが…シャルにとって、そ
れは理解を超えた景色であった。

「おい、ISが墜落したぞ！怪我人もいる！」

駅構外から警察官と思しき男性の声がする。

同時に——シャルの手を握る。

「行くわよ——デユノアさん。」

戸惑いを浮かべてはいる——しかしそれを押し殺した楯
無が、告げた。

…シャルは一瞬、迷う。

瓦礫の中からは、呻き声や悲鳴が無数に聞こえる。

——今助けに行けば、あの人は助かるのでは無いかとい
う考えが浮かぶ。

しかしそれを遮るように。

「ダメよ。この状況下じゃどうせ全員は助けられない。それに、私達はかえって邪魔になるわ。」

∴それは無慈悲過ぎる宣告。

∴それは無情ながら現実。

ISを持たない自分達に出来る事など知れている。

精々足手まといになる程度。

∴その、無力で残酷過ぎる自分達に対して、不甲斐ない感情が支配する。

シャルは一瞬だけ瞑目すると——強く唇を噛みしめ、楯無と共に駆け出した。

「!!」

駅を抜けた瞬間。

くぐもった咆哮を上げながら国道410号線沿いを北上する巨大不明生物と。

それに対して応戦を継続するIS——35機を視認した。

正午12時27分

富邸地下危機管理センター・幹部会議室

——灰色を基調とした部屋。

中央をU字型の木製長テーブルが穿っており、そこには閣僚達が座している。

——その前面。

正面スクリーンに投影される——館山市の地図。

そしてそこに巨大不明生物の現在地を表す光点が表示され、その隣には館山基地から出撃したSH-60哨戒ヘリコプターによる高高

度空撮映像と、同基地の観測スポットの捉えた映像。

それを食い入るように、閣僚達は見つめていた。

『巨大不明生物は国連軍と交戦しつつ長須賀区から八幡区方面に向けて北上中。平均移動速度は時速14キロ!』

——SH—60シールホックからの通信。

∴その報告に対する反応は多種多様。

「図体はデカイのに随分と遅いんだな∴。」

菊川環境大臣の安堵する声。

∴確かに、それは普遍的な反応であった。

50メートルから60メートルもある怪物が、直ぐにでも自分達の元に来るわけではないのだという安堵。

——だが、それを切り捨てるように。

「∴これでも2時間あれば富津市に到達、また浦賀水道を渡洋すれば神奈川県にも被害が拡大、さらに2時間もすれば首都圏にも被害が拡大します。」

——努めて冷静に、矢口が言い放つ。

その言葉は詰まる話、巨大不明生物が首都圏∴即ち東京に到達するまで僅か4時間しかないという話だった。

4時間後には——東京も廃墟となっている可能性が極めて高いのだと言う。

∴その事実全員が戦慄する。

——同時に。

「——やばいぞ、被害が尋常じゃなく拡大している。」

秘書官から受け取ったメモに目を通した河野総務大臣が呻くように漏らす。

●館山市被害状況（現状）

下真倉∴ビル等3棟全壊

上真倉∴ビル等5棟・住居1000棟以上が全壊

長須賀∴ビル等9棟・マンション11棟以上が全壊

??館山∴住宅680棟以上が炎上

J R 内房線寸断

中央：火災燃焼範囲拡大・詳細不明

正木駅崩壊

現状で確認された限りで、メモには被害規模が書き殴られていた。

つまり、今後巨大不明生物によって被害が拡大することは勿論、未確認だった箇所が発見されれば、更なる被害規模拡大に？る。

「だからこそすぐ駆除するべきじゃないか！現に国連軍は応戦してるんだろ☒」

河野の言葉に対し、金井防災担当大臣が食ってかかる。

：確かに、巨大不明生物の侵攻と並列して国連軍が現在進行形で応戦している。

だからそこに自衛隊も応援に参戦させろ、と。

そう言っているのだ。

それは至極もつともな意見と言える。

：しかしそれを斬り伏せるように。

「しかし現場が人口密集地です、今は攻撃より避難を優先させるべきです。」

凜とした声音で——花森麗子防衛大臣が言い放つ。

：現状で自衛隊による攻撃を実施すれば、誤射誤爆による民間人の死亡という事態も有り得る。

そしてその反感は、ともすれば自衛隊の存続にも関わる。

：それは自衛隊および防衛省の解体、という事態だけではなく。

——国民が自分達を守る手段を自分達から放棄するとう、最悪の未来に直結しかねない。

——自衛隊が国民と国土を守り続けるには、「民間人を戦闘に巻き込まない環境」が整備されて初めて真価を発揮する。

それが整備されていない以上は避難誘導などに徹するほかない。

：それは国連軍が応戦を繰り返している状況でも同じ。

それはつまり——不本意とはいえ、遠回しに「国連軍を見

捨てる」という事であった。

” …何もかもが手遅れにならないと自衛隊は動けないとは――

――よく言ったものだわ。”

苛立ちを孕んだ感情の中、彼女は内心呟く。

その点は常々指摘されていた点だ。

――この国では憲法上、民間人を軍事目的の犠牲にカウントする事の容認が成されていないが故に、友軍に犠牲を強いてしま
う。

だからこそシーレーンを固める事でこの事態を回避していたが、この戦闘に伴いその欠点を見事に突かれてしまった。

…だが嘆いたところで所詮は無い物強請り。

この状況を放置しようものなら、日本側の犠牲は減るだろう。

しかしそれでは、国連や各国から「非協力的国家」という誤解を与える可能性すら高い。

敵に――今は避難を優先する事に徹する他、選択肢は存在しなかった。

同時刻

千葉県千葉市中央区市場町・千葉県庁

庁舎・6階・防災危機管理センター

白く無機質な大会議室。

規則的に並ぶ無機質な長机。

奥に位置する半円卓の木製机。

その眼前にある黒の大スクリーン。

…館山市の状況を受け、その長である千葉県は多くの職員と防衛省から数名を招集。

既に災害対策本部を設立していた。

「――官邸より当庁に対する、シャドウ・エバキューションを考えた避難処置の指示を受理しました。」

職員が一人が報告するように声を上げる。

――《シャドウ・エバキューション》とは、避難する必要性のない場所の住民が避難指示に過剰反応した結果、避難用の通路に渋滞が発生して、かえって避難すべき住民の避難が遅れるという問題が発生することである。

…しかしその対策は館山市役所の仕事でもある。

だが、行政主導権が不明瞭となり、今では一自治体として明確な指示を出すことすら困難となっている。

…つまり、現状の館山市には、マトモな避難民統率能力が存在しない。

故に、千葉県が直々に参加する事態となっていた。

「何故、すぐに避難指示が出せないんだ！」

――ふと、木之原県知事が入室しながら愚痴るように声を放つ。

「…な、何せ、想定外の事態で、該当する初動マニュアルが見当たりませんでしたのでなんとも――」

それに対し、梅原チヨ副知事が困り果てた顔で応答する

――確かに、本案件は前例がない。

故に、既存の災害に備えた災害マニュアルによる避難計画では全く事態に対処出来ない。

…しかし困り果てた顔の梅原を斬って捨てるように、

「災害マニュアルはいつも役に立たないじゃないか！すぐに避難計画を考ろ！」

「…し、しかし、このような事態の防災訓練も行っておりませんし…パニックの回避を考えるならば、避難区域の広域な指定も困難です…！」

――木之原が言い放つ。

どうすればいいか分かりかねる表情を浮かべ、自らの席に座りながら机をトントンと、釘を打ち付ける金槌のように叩く――

明

らかに苛立っている——木之原に顔を伏せながら、彼女は訴える。

「……ここは住民の自主避難に任せるしかありません。」

ふと——木之原の右隣に座る會澤副知事が告げる。

そして、紡ぐように千葉県警総監が口を開く。

「現場には、交通統制によるコントロールを徹底させま

す

千葉県館山市・県道302号線
12時30分

所狭しと犇めく渋滞車両。

力ーナビの地図によると、渋滞の車列は那古から船形山を越えて南房総市まで——6キロも続いている。

その車列の中には、シャルを連れた楯無の運転するセダンも含まれていた。

ふと——突如、信号がブラックアウトする。

『この信号は、止まっています——』

同時に、交通規制のアナウンスが鳴り始める。

「不味いわね——グリッドロック状態だったとはいえ、ついに幹線道路まで完全に使えなくなった。」

ハンドルを握りながら、楯無が愚痴を漏らす。

渋滞しているが故に僅かだが、市内から脱出が可能だった唯一の手段が交通規制により使用不能となったのだ。

こうなればもはや徒歩以外に逃げる方法が無い——だが
それでは逃げ切れない。

『——直ちに降車して、警察官や自衛隊の指示に従って行動

して下さい。』

「：仕方ない、降りましょう。シャルロットさん。」

シートベルトを外し、運転席のドアを開きながら楯無は告げる。

慌てて、シャルもシートベルトを外しながら助手席のドアを開けて降車する。

「で、でも何処へ——?。」

思わず問いかける。

確かに、館山市内の住民ではない2人は市内の避難場所の所在地を知らない。

おまけに、先程の正木駅とは違い本格的な避難所を探さなくてはならない。

だがそれを自分達が考えているという事は、当然誘導を担当している警察官や自衛官も把握していると言える。

——故に、楯無は口を開いた。

「——アナウンス聞いたでしょ?警察や自衛隊の指示に従って避難するわよ。」

——直後、湊新街区にて白熱光が炸裂した…!

——同時刻

千葉県館山市・大山岬西端より北西1キロ沖

国連軍第11軍第2艦隊

オー・ジマ級強襲揚陸艦2番艦オキナワ

1961年から1970年にかけて就役した7隻の次女にあたる、古戦場の名を冠する艦。

東西冷戦を経て老朽化した本艦は1992年に退役したのち解体を待つべく、暫定的にモスボール保存処置が施されていた。

だがロリシカの巨大不明生物出現に際し急遽復役。

近代化改装を経て、アメリカ海軍から国連軍に転属され、水上部隊旗艦を務めていた。

——が、今の状況は最悪であった。

「…正気か？君らの司令部は。」

——同・艦橋ブリッジ。

黒煙捲き上る館山市を一望できるその艦橋では、切迫した事態の打開を図るべく、各方面への連絡と情報収集に忙殺されている。

そこに、受話器を手に通信していた幕僚の声が響く。

その声は、信じかねるものを見たように震えている。

——相手は欧州連合極東派遣軍旗艦／イギリス王立海軍第4艦隊旗艦・クイーンエリザベス級戦術航空母艦4番艦アークロイヤル。

「この状況下で、援軍が望めない…？日本からも欧州連合極東派遣軍からも…？」

『…その通りです。』

” このままでは被害が拡大するばかりだと言うのに、欧州連合も日本政府も何をしているんだ!! ”

——同時刻

東京都港区・中央防波堤外側埋立処分場

——東京湾内に浮かぶ人造の群島。

その中でも極めて大きい中央防波堤外側埋立処分場には現在、機械仕掛けの巨人達と艦艇が鎮座していた。

「…その通りです。」

——同・仮設埠頭

欧州連合極東派遣軍旗艦／イギリス王立海軍第4艦隊旗艦・クイーンエリザベス級戦術航空母艦4番艦アークロイヤル

本来のHヘッドクォーター Q オペレーターが生牡蠣食当たりで倒れたために、臨時HQオ

ペレーターを務める——第666戦術機中隊所属、エミリーア・カレル中尉は歯を噛み締めながら、応える。

そして——戦況図を睨み付ける。

——極東派遣軍旗艦・英海軍揚陸艦「アルビオン」。

——アメリカ海軍第7艦隊旗艦「ブルーリッジ」。

∴その双方より送られて来る、衛星データリンクによるリアルタイム更新型戦域情報。

館山市に展開・迎撃に当たっていた78機のISは、すでに15機を除いて全滅。

うち国連軍機は7機、それ以外の8機は企業の私設部隊。

その7機も、2機は館山湾を超えて強襲揚陸艦オキナワに着艦。

残る5機は市街地にて孤立——。

他に制圧砲撃を実施していた野砲部隊は数台が大破している上に
残弾ゼロ——。

そしてF-35C4機と戦術機タイフーンを6機艦載しているにも関わらずアークロイヤルは沈黙を維持。

おそらく国連軍ISの撃墜から、戦術機を失いたくない欧州連合は
F-35Cと戦術機の発進を固辞している——。

更に沖合いには、海上自衛隊の護衛艦が2隻待機している——
——にも関わらず、憲法上の枷により援軍として参戦する事は不可

能。

そして我々第1混成戦術機連隊は東京湾最奥の中央防波堤にて待
機中——。

∴このままでは更なる犠牲の山を築き泥濘化を招く事は明白であ
った。

——ならば介入するのが筋であるが∴そうもいかない。

∴現在彼らは駐日大使館および駐日欧州連合代表部署防衛の為に
展開しており、IS学園の遙か後方に存在していた。

まず、物理的に間に合わない。

彼らが布陣している中央防波堤は東京都沿岸地域の中でも最も東
京湾沖に突き出た場所に位置するが故に、大使館の多くが位置する港
区を防衛する為に各方面からの侵攻に対する迅速な展開が可能であ
る事と、大量の戦術機を駐機可能なスペースがあるという理由から——

——中央防波堤外側埋立地が欧州連合極東派遣軍第1混成戦術機連隊の陣地に選ばれていた。

元はと言えばIS委員会の圧力による急な配置転換——
だがそれが結果的に、全戦術機総勢108機が館山市での戦闘を逃れ完全無傷の状態が無事という結末を齎していた——。

IS委員会による圧力で退けられただけであれば。

さらに本土上陸というこの非常時に介入は難しくはないかも知れないが——欧州連合は日本と何の軍事同盟も締結していない。

締結しているのは精々、経済協定などの類。

——だからこそ日米安全保障条約を締結しているアメリカほど自由に行動が出来ず、出来る事は大使館防衛程度に限られる。

——そして、あくまで予備戦力として派遣されているだけに過ぎない彼らは、欧州での戦火が拡大すればすぐにでも帰国しなければならぬのだ。

特に戦術機や母艦は対巨大不明生物戦の最前線でISの代替戦力として重宝されている。

それ故に損失を出すわけには行かず——本案件の最中にあっても、大使館防衛を名目に第一線からは退けられていた。

——防衛戦力を温存するという意味では正しい判断だろう。

つまるところ——欧州連合極東派遣軍を日本本土で発生している戦闘に駆り出すには、【物理的距離・法的根拠・戦力温存】の3つの観点から不可能と言える。

……本当ならば、今すぐにでも出撃したいというのがエミリアの本音だ。

それはアークロイヤルのみならず、展開中の部隊全員の意思でもある。

だが法的根拠も無い他国での武力行使——それは国際社会では【侵略行為】に分類される。

……ポーランドのT-72戦車中隊がIS学園方面にいたが、指揮権

は国連に譲渡していた為にあれば例外と言える。

：だが我々は国連に指揮権を譲渡してはいない。

—— 故に、欧州連合極東派遣軍は援軍として出撃することは不可能だった。

” ……こんな形で、法律や憲法の壁が邪魔するなんて——
!!? ”

思わず吐き捨てたくなる感情を必死に堪える。

今は感情を爆発させるべきではなく、状況の打開を図るべきである。

「現在、駐日欧州連合代表部を介して日本の外務省と交渉しています
が、このペースでは間に合うかどうか……!」

—— 欧州連合極東派遣軍は援軍として参戦不可能。

その事実が変わらない。

—— ならば自衛隊は？

彼らはこの国を防衛する為の準軍事組織……いわゆる国営警備員だ
(そこ、『どう見ても軍隊』とか言わない!)。

彼らは先に手を出すことが出来ず、政治的事情—— おそらく

く此処でも法律や憲法の壁が邪魔をしている—— により出
動は必ず後手後手となってしまふ点さえどうにかすれば、優秀だ。

つまり—— こちらから発破をかけてやればいい。

そう、例えば……自治体などからの出動要請……とか、例えばアメリカ
からの要請とか。

：特に、国際社会をバックボーンに持つ国連からの要請など効果は
絶大だろう。

断れば今後国際社会から白い目で見られるが故に、出動させざるを
得ない。

—— 自らでも気付かない程、邪悪な笑みを浮かべてエミ
リアは思う。

まあ、効果を残せるかどうかは定かではない。

だが……無いよりマシだろう。

それ以前に、いい加減発破をかけなければ日本も立場が危うい。

先の大戦で敵国条項という烙印を押され、今なお国連から仮想敵国として認識されているのだ。

このままでは巨大不明生物殲滅を目的に、国連の名の下に他国による侵略を受けてもおかしくない。

：それだけは流石に無いと、信じたいが。

「———です、国連名義で日本政府に自衛隊の出動命令の要請を出して下さい。」

12時40分

平久里川北岸・館山市正木区

「ヨッピングモール「レゾナンス」

「南関東最大の大型複合商業施設である其処は、事実上の廃墟と化していた。」

地域で広域避難場所に指定されていたそこは、一時的に巨大不明生物の侵攻に対する避難所となったもの———巨大不明生物の進路上に位置していた為にすぐさま避難対象地域に指定され、避難民は既に退去。

今は———国連軍IS部隊およびそして第11空中機械化歩兵中隊の支援部隊が退避しており、臨時の集積所と化していた。

数は2機。

———どちらもが———見るからに、疲弊していた。

「：ダメね、基地でオーバーホールしてパーツ総取替えでもしなきゃ全機スクラップ行きだわ：！」

———新しく機体を購入した方が安上がりなくらい、と機体のダメージ蓄積量を確認している木村曹長が言う。

外では再度装填された野砲による制圧砲撃が実施されている。

目的はこちらへの侵攻を遅滞させる為。

それに呼応するように国連軍と私設部隊の I S 合計 13 機が最後の迎撃戦を展開している。

だが——効果は見られない。

『先程、治安出動に続いて、初の災害対策基本法の災害緊急事態の布告を総理が宣言。巨大不明生物に対し、自衛隊初の防衛出動が決定されました。』

緊急措置として、国会での承認を事後に回し、災害派遣に基づく有害鳥獣駆除を目的とした武力行使命令を総理が下した模様です。』

首相官邸を背景に、マイクを握りしめた男がカメラに向かって話しており、テロップには『自衛隊初の防衛出動』——と。

家電屋の 47 インチテレビに映されている。どうやら電気はまだ生きているらしい。

…それを尻目に。

「——遅過ぎるのよ……！」

思わず愚痴を漏らしながら、50 口径アサルトライフルのマガジンボックスを運び走る。

自衛隊は初動対応が遅過ぎる。

実際、出動するにしても法律による制約が多過ぎるが故に、3つの方法でしか出動出来ない。

——自衛隊法第 81 条（要請による治安出動）

1 都道府県知事は、治安維持上重大な事態につきやむを得ない必要があると認める場合には、当該都道府県の都道府県公安委員会と協議の上、内閣総理大臣に対し、部隊等の出動を要請することができる。これは都道府県知事からの要請にかぎらず、治安出動は、内閣総理大臣の命令によっても行うことができる（自衛隊法 78 条 1 項）。

治安出動とは、一般の警察力をもっては治安を維持することができないと認められる場合における自衛隊の出動であるため、武器の使用については、警察官職務執行法と海上保安庁法を準用することになる。

そのため、基本的には正当防衛と緊急避難でしか使用できない。

つまり、防衛行動には全くもって無力と言える。

…次に可能性があるとすれば。

——自衛隊法第76条（防衛出動）

1 内閣総理大臣は、次に掲げる事態に際して、我が国を防衛するため必要があると認める場合には、自衛隊の全部又は一部の出動を命ずることができる。この場合においては、武力攻撃事態等及び存立危機事態における我が国の平和と独立並びに国及び国民の安全の確保に関する法律（平成15年法律第79号）第9条の定めるところにより、国会の承認を得なければならない。

（1） 我が国に対する外部からの武力攻撃が発生した事態又は我が国に対する外部からの武力攻撃が発生する明白な危険が切迫している

（2） 我が国と密接な関係にある他国に対する武力攻撃が発生し、これにより我が国の存立が脅かされ、国民の生命、自由及び幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険がある事態

防衛出動は、日本に対する外部からの武力攻撃が発生した事態または武力攻撃が発生する明白な危険が切迫していると認められるに至った事態に際して、日本を防衛するため必要があると認める場合に、内閣総理大臣の命令により、自衛隊の一部または全部が出動するもの。

大河内首相は「戦後初の防衛出動」として、防衛出動がこれまで実例がないことに言及しているが、治安出動についても今まで実例はない。

過去には、安保闘争、1960年代の学生運動、労働争議、新宿騒乱、あさま山荘事件等への対応やオウム真理教事件における教団への強制捜査において治安出動が検討されたことはある。だが結果的に治安出動が発令されたことは一度も無かった。

だからこそ、今日一日のうちに治安出動と防衛行動が発令された事に大騒ぎだったのだろう。

——だが防衛出動は、先行する武力攻撃の主体を国またはそれに準じるもの

当しないため、超法規的措置として実行するほかない。

：最後に可能性があるとすれば。

——自衛隊法第83条（災害派遣）

1 都道府県知事その他政令で定める者は、天災地変その他の災害に際して、人命又は財産の保護のため必要があると認める場合には、部隊等の派遣を防衛大臣又はその指定する者に要請することができる。

2 防衛大臣又はその指定する者は、前項の要請があり、事態やむを得ないと認める場合には、部隊等を救援のため派遣することができる。ただし、天災地変その他の災害に際し、その事態に照らし特に緊急を要し、前項の要請を待ついとまがないと認められるときは、同項の要請を待たないで、部隊等を派遣することができる。

3 庁舎、営舎その他の防衛省の施設又はこれらの近傍に火災その他の災害が発生した場合においては、部隊等の長は、部隊等を派遣することができる。

この場合、巨大不明生物に対して武器使用を認めることができるのか、という疑問がわくだろう。

だが実際、1960年代には、有害鳥獣駆除として航空自衛隊のF-86戦闘機による機銃掃射や、陸上自衛隊の12.7mm重機関銃M2、7.62mm小銃M1などによる実弾射撃が行われている。

今や希少海獣として保護の対象にあるトドだが、資料室で目にした記録によれば、昭和30から40年代には、北海道や三陸沿岸では、その「悪行」に困り果てた漁民らが自衛隊に泣きつき、機関銃で退治する事となった。昭和34年3月26日、航空自衛隊の三沢第三飛行隊のF86F戦闘機が地元の海岸に出動、トドに対して機銃掃射を敢行した他、昭和43年1月28～29日には、北海道北部の羽幌町で、陸自第一特科団が12.7ミリ四連装対空機関銃を数基海岸に並べて射撃し、トドを駆除している。

——そう考えるとコレが最適解なのだろう。

：だが、問題も残る。

それらはどれも沿岸部の水際で実施され、機関銃以上の装備を使用

していない。

対して、今回は人口密集地である市街地のど真ん中であることに加えて求められる火力は大砲やミサイル級。

そして災害派遣は被災者の救助が主体となる為、災害派遣で度を越えた武力行使を行えるかという事にも疑問がある。

過去、福島第1原子力発電所事故や御嶽山の噴火に際して気密性が高いという理由で74式戦車や89式戦闘装甲車が派遣された事例があるが射撃などを行ったわけではない。

——どちらも前例がなく、法的解釈が難しい。

こういう事例に囚われて行動が遅れることが分かってきたからこそ、部隊を国連軍に派遣する事を木村は考えたのだ。

…部隊長の頭が残念だったのは、全くの想定外だったが。

——閑話休題。

とにかく今は可能な限り国連軍機の応急処置を終わらせるしかない。

「これで大丈夫！あと30分くらいは継戦できるわ!!？」

木村が叫び、同時に5機は平久里川南岸へ向け——迎撃すべく飛翔した。

…そこには心強さと、どうしようもない不安が遺される。

何しろどう考えても止めるなんて無理だ。

最初は自分達の中隊を合わせて108機いたISも——
今では15機しか残っていない。

ここを抜かれれば、館山市内の各避難所が壊滅する事態が容易に想像できる。

…それを阻止する為にも。

”——戦闘機でも対戦ヘリでもミサイル護衛艦でも良

いわ…早く、防衛出動によって派遣される部隊に来てくれる事を願うしかない…。”

飛翔する各機を見つめながら、途方に暮れるように木村は内心呟いた。

—— 同時刻

平久里川南岸・湊区新市街

かつて住宅地であった街区を押し潰すように再開発された、高層ビル群が織り成す新市街。

「……………」

…本能的に唸り声を大気に刻む。

敵を知覚したわけではない。

だが—— 60メートル程の体躯である自身に対し、100メートル以上ものビル群に囲まれているのだ。

周囲の環境が齎す威圧感は一層となつて、ゴジラに苛立ちを覚えさせる。

そこに、叩き込まれる84mm対艦バズーカ。

「……………」

爆風に煽られたとさえ錯覚する程の衝撃波。

鬱陶しさと苛立ちを孕んだその咆哮が、新市街諸共彼女／自分達を震わせる。

『畜生、いったいどうなっている…!!?』

女—— 私設部隊の一人が自分目掛けて振るわれた腕を躲しながら叫ぶ。

—— 一体何発の砲撃を受けたのか。

—— それで尚何故無傷なのか。

『他兵科の奴らは何故応援に来ないの!』

同時に、殺意さえ籠った声が響く。

もはや火力投射力の差ではないと理解しているが、それでも動きを封じるといふ意味では明らかに数的優位を確立するべきであると考えたが故の声。

だが—— 切り捨てるように、悲鳴染みた声上がる。

『野砲部隊は装弾中だ! 私設部隊の他部隊は☒』

『社員の退避中でへりは無理! 装甲警備隊は戦力外と判断してとつく

にトンズラしてるわよ———!!?』

響く、私設部隊指揮官の声。

機体の各所のパワーアシストは既に停止し、唯一稼働する左腕に手にした4連装重機関砲で応戦しつつ、叫ぶ。

『くそ———ストライプ04よりH.Q!これ以上の抗戦は無理だ!』

私設部隊指揮官の声を聞き、戦線維持は不可能と判断したのか——

——振るわれる尾を躲しながら司令部の置かれた強襲揚陸艦オキナワに怒鳴る。

『——戦線を維持させるならせめて支援砲撃を寄越せ!それが出来ないなら立て直させろ!こんなデカブツをたった15機で相手してられるか!!?』

『——こちらH.Q、撤退は許可出来ない。繰り返す、撤退は許可出来ない。何としても対象を足止めせよ。』

『なっ……ふざけるなッ!このままではそれすらも———!!』

——言いながら、ISが世界最強の兵器である事を呪う。

ISは対獣戦での惨憺たる結果を残しながらも、未だ各国においては最強の兵器と認識されている。

だからこそ———戦術機の配備されていない戦線ではISに縋るしかない。

∴それが例え分かりきった結果しか無いにしても。

『も、もう無理……やってらんないわよッ!!?』

——私設部隊の一人がヒステリックに、或いは憎悪を撒き散らすように叫ぶ。

直後、反転。

逃走を開始———それにもう2機が追隨する。

『おい!撤退はまだ———』

私設部隊指揮官が叫ぶ。

『中隊長!このままでは———』

隣で、機動回避を行いつつ砲撃戦を展開する国連軍機の一人が指揮官の女に撤退を促す声を上げる。

『分かっている！だが今ここを退けば、後方の民間人が皆殺しにされる！』
『それに上からの許可なく撤退など出来ん!!?』

『しか…』

次の瞬間。

抗議の声を放とうとしたISと。

逃走を開始した3機のISと。

その3機に怒鳴り声を放っていたIS指揮官機と。

——5機のISが、巨大不明生物から放たれた白熱光によつて跡形もなく蒸発する。

『…ッ、悪魔め……！』

その光景から目を逸らすように戦況図に目を落とす。

ふと——西方、館山湾沖より迫る2隻の艦艇が眼に映る。

『H Qよりストライプ04、騎兵隊の到着だ。現戦域より退避せよ!!?』

12時41分

館山市沖西方30.5キロ・東京海底谷直上

37.5キロ
黒煙をたなびかせ、霞んだ戦闘音が連鎖的に木霊する館山市沖合い

東京海底谷という浦賀水道を抜けた——荒波に満たされ

た海域。

——海を割きながら進撃する。

——鋼鉄の牙城が2つ。

海上自衛隊横須賀地方隊

DD B—01護衛艦「やまと」

DDDB—02護衛艦「あまぎ」

から成る、第11護衛隊であった。

やまと型護衛艦【やまと】・艦橋CIC

中央戦闘指揮所

多彩な機材が奏でる無数の機械音響。
オペレーター通信士の通信と報告。

モニターのブルーライトのみを光源とする暗黒と——青
で満たされた世界。

それこそが現代艦艇における戦闘情報中枢。

レーダーやソナー、通信などや、自艦の状態に関する情報が集約され、情報処理と情報統合、火器管制などの艦として重要な機能も集中している部署——指揮・発令の源泉にして現代艦の頭脳にして四肢。

——あるいは、心臓部。

その司令座席に、神宮司八郎海将補は座していた。

「…どうにか、間に合ったようだな。」

——強張る眉間を指で解しながら、しわがれた、しかし芯のある言葉で呟く。

…実のところ、本土上陸を許している時点で手遅れと言える。

——1時間30分前、J. T. W. N. 監視網に巨大不明生物が到達。

それを受け第11護衛隊は横須賀基地から緊急出航。

最大船速——しかし主機たるNNリアクターの点検期間であり、急遽予備のディーゼル機関への換装作業を実施・点検していた為に出航が遅れ、さらに最大船速は26ノットにまで低下——

——で直線距離でも45.4キロ離れた館山湾を1時間かけて進行。
しかしやはり足は遅く——旗艦やまと率いる第11護衛

隊が到着したのはIS学園が陥落し、尚且つ住民避難が完了していないまま国連軍が館山市で戦闘を始めたタイミング。

さらに——有害鳥獣駆除を名目に武力行使に移ろうにも住民の避難が完了していない為に、攻撃不能。

完全に手遅れとしか言えない状況であった。

——故に、今の発言は国連軍が全滅する前に正式な武力攻撃命令が降りたという事。

…戦後初の——国内における正式な武力攻撃命令。

「自国領土への攻撃」という意味では、明治政府と旧薩摩藩による日本最後の内戦である西南戦争以来——実に144年ぶり。

” 嫌な任務を与えられたものだ。 ”

自身のコンソールを前に、C I C 中央に置かれた戦況表示板を睨み付ける。

…やまと、あまぎはNNリアクターの搭載試験と近代化改修によって6年程前線から身を引いていた。

その間に多くの人事転換があり——ベテランが新人に入れ替わり——実戦経験が皆無なクルーが多い。

艦自体は冷戦期から何度も対獣戦を経験しており、それに合わせた装備が施されているが——当時のベテランは今や3分の1。

C I C 要員に至っては神宮司と副長のみ——クルーのほとんどを占める新人の彼らにとっては、初めての实戦となる。

横須賀^{海上}基地^{作戦}船越^{セン}庁舎^{ター}からの指示で真つ直ぐ飛んで来たものの、不安を拭えぬモノもいるだろう。

——そして神宮司は僅かに瞑目したのち。

「…副長。」

副長に声をかける。

「——は。」

「俺たちにとっては、いつもの話。」

だが新人にとっては対応が想定外で、前例がない危険な任務だ——始める前にもう一度聴くが、いつも通りの面子で構わんのか？

——険しく、しかして芯には情を宿した声。

…それは、新人の人命を尊重した発言。

志願者を募った上で志願しなかった者を退艦させ、他の護衛艦に移乗させるといった話であった。

「…はい、通常通り行きます。」

——入隊した時から、皆覚悟は出来ております。」

やはり穏やかに——しかし、反転。

意を決しているように、硬い声音で副長の女性士官は宣言する。

副長の声に、周囲のCIC要員も強く頷く。

——その答えを待っていたように、神宮司は頷くと。

「——【あまぎ】に通達、砲戦準備…！」

鋼めいた声で命じる。

——副長が頷き、命令を具象化する。

「了解、全艦砲戦準備！目標——館山市湊区、巨大不明生物！！」

——その命令に倣い、砲雷長が更に具体的な指示を各部に発する。

『こちら射撃指揮所。砲術長了解、第1・第2主砲、第1から第6砲門全てを館山市巨大不明生物に射撃目標設定——装弾急がせます！』

「了解——現海域にて待機しつつ、装弾とデータリンクが完了次第データリンク連動による艦砲射撃を実施。」

——再び副長は指示を飛ばす。

「…いよいよ、ですね。神宮司海将。」

副長が緊張に満ちた表情を浮かべながら、口にする。

——普段ならば楽しそうな表情を浮かべながら言うのだが、今は神妙に沈んでいる。

…当然だ。今回は上陸された地域に向けての対地艦砲射撃。

しかも人口密集地——。

「装填準備、完了しました!!？」

砲雷長が、報告する。

——同時に。

「——該当地域より住民の避難完了との報告！官邸より攻撃

命令受理との報告!!?」

海上作戦センタール横須賀基地船越庁舎と通信を行なっていたオペレーターが告げる。

——それで、吹っ切れたように。

「全艦レーダー連動射撃用意!!?」

——副長が命じる。

同時に、【やまと】の前部甲板に搭載された3連装46センチ砲が2基と3連装15.5センチ副砲1基、オートメラーラ速射砲群とVL Sミサイル発射機構も解放される。

重く、鉄の軋む音を立てながら——巨人が手にした大剣を振り上げるように、老艦に懐かしい躍動が蘇る。

レーダー照準による仰角調整——久しく喪われていた老艦の巨砲に力が籠る。

「さて、艦長。」

神宮司が口を開く。

——待っていたと言わんばかりに、机に肘で立たせた手を眼前で組みながら。

「——始めようか。」

強く芯のある声と共に、神宮司が言う。

それに副長は、強く頷き——

「トラックナンバー1—01、2—01撃ち方始めツ!!?」

——始まりを告げる号令を言い放つ。

……先の大戦時。

その砲は、レイテ沖海戦にて32キロという長距離を飛翔し、敵空母とレイテ湾に集結していた輸送船団と数万人にも及ぶ兵員を悉く噛み砕き、水底に射ち沈めたという。

その砲は、あまりに巨大である為に暴力的過ぎる量の火薬を用いねば砲を打ち出せず、甲板にいた者を衝撃波で肉塊に変えたという。

その砲は、その当時存在していた兵器群の中で——海上に於いては世界最強と謳われた。

——両者の距離は30.5キロメートル。

暴力的な火薬の爆裂によって、鋼鉄が宙に舞い上がる。

剛、^{ガオン}と空間が軋みを上げる。

瞬間、火薬が炸裂する爆音と熱と共に46センチの鉄の巨筒から大気を震わせながら穿たれる——6年ぶりの砲声。

——老艦は暫し忘れていた牙を剥き出しに、鉄火の咆哮を上げた…!!

30.5キロ先、水平線の果てのさらに先より放たれた巨砲。

それは25キロメートル地点で、高度1万1900メートルまで上昇し。

——砲弾は再突入角度へ移行した。

天空より時速1710キロという速度で、大地目掛けて落下する。

同時に、1トンにも及ぶ大質量を、落下による加速が砲弾を研ぎ澄ます。

——0.017秒というコンマの世界で展開された一連の事象。

それら全てによって昇華された鉄塊は。

流星の如く尾を引き、1秒にすら届かぬ時間を経て——音

速を超えマッハ1という高速をもつて、黒鉄の一撃が黒き荒神をつるべ打つ……!!

——衝突する鉄鋼の一撃。

——爆裂する火薬の業火。

炸裂した——地殻さえ穿つと錯覚する程の威力は。

巨大不明生物の表皮を焼き払い、そして——吹き荒れた爆

風と衝撃波が、周囲一帯の窓と瓦^{ガラス}を紙吹雪のように散らす。

…なれど、無傷。

大地震を巻き起こし地表を破壊する、1個機甲師団の火力投射量に

匹敵する——現用艦艇を即死足らしめる威力。

…それを受けても尚、無傷。

——だが荒神に未知の、しかして懐かしい痛みを焼き起こ

?????????

!!!

——荒神が吠える。

今までのモノとは比にならない、否。ようやくゴジラにとって、ようやく明確な痛みとして認知させた一撃に対し、反射的に咆哮を上げたのだ。

——その時点で、意識は『この一撃を放ったモノ』に固定された。

だからこそ、ゴジラはソレを焼き払おうとして——理解する。

そのモノは、水平線の果てのさらに先にいる。

そこに——彼の焰は届かない。

——射程12キロの焰。

——射程32キロの鉄。

その差は歴然。

——ならば、その差を埋めるのみ。

——!!

唸る声と共に、白熱光が大気を焼く。

……それは確かに水平線の果てには届かない。

だが——直後、閃光を纏った炎は収束し、

——!!

——空を貫く、蒼焰へと変貌する……!

音速を超え、光速に至る一撃。

100万度を超える高熱は大気を焼き尽くし、【やまと】の左舷を焼

き払う……!

……しかし——重く金属の軋む音を上げながら【やまと】は

完全に、放射熱線を弾いてみせた……!!

——激しく、計器より火花が散る。

放射熱線の左舷への直撃を受け、一部の耐圧計が破損したのだ。

——だが、それだけである。

「損害報告。」

落ち着いた声音で神宮司が命じる。

それにオペレーターが応答する。

「敵熱炎、本艦左舷に直撃。なれど複合装甲をもってこれを相殺…艦体に損傷無し…無傷です！」

「すごい…！と息を呑みながら、その巨大不明生物の対応能力と、【やまと】の防御力に感嘆する。

人工ダイヤモンド表面処理複合装甲。

それが、「やまと」型護衛艦の船体を形作る——従来の耐熱耐弾耐レーザー複合装甲に超耐熱合金NT-1S装甲体を上乗せした多重複合装甲であった。

その防御力をざつと言うならば。

水爆の至近直撃を受けて尚も航行は可能と言うほどだ。

「了解、全艦砲戦継続——対象を館山市から引きずり出す。」それを聞くなり、神宮司は何もなかったように、先程と同じことを繰り返す。

元より、彼とてこの艦の火力投射力を持ってしても倒せない事を、本能的に感じている。

だからこそ——殲滅ではなく撃退。

このまま館山湾に引きずり出し、その後太平洋まで誘導するという方針にシフトする事とした。

そして——賭けは成功した。

巨大不明生物は転進し、館山湾方面に進路を変えた。

…ひとまずは、館山市の安全確保に乗り出せたと見えるだろう。

後は太平洋まで誘導したとしてどう撒くかであるが——

それよりも、まずは館山市から引き離すことが優先であった。

「了解、^{第1主砲}トラックナンバー1-01、^{第1砲塔}2-01、^{第1砲門}2-01、^{第2主砲}トラックナンバー1-02、^{第2砲塔}1-03、^{第2砲門}2-02、^{第3主砲}トラックナンバー1-02、^{第3砲塔}1-03、^{第3砲門}2-03——
——撃ち方始め！」

『砲術長了解——撃ち方始め!!』

——砲術長の命令を受け、護衛艦【やまと】が主砲による一斉射を再開する。

マグニチュード9クラスの大地震が起きたのかと錯覚する程の震動が、連続して艦内を震わせる。

——全弾命中、陽動効果確認。」

僚艦の【あまぎ】も同様と言える。

直後——再度、高熱源体の接近警報が響く。

此度は【やまと】ではなく。

「【あまぎ】艦橋に敵熱炎直撃——損害無し!!」

”——ひとまず、館山市は安泰か。”

神宮司が内心呟く。

——だが直後、期待を裏切るように。

「——館山市、国土交通省地殻観測所より入電！先日の相模原市および三浦半島で観測された震動と同様のものを探知とのこと！——」

オペレーターが告げる。

それに思わず副長は顔を歪める。

——先日の相模原市から三浦市に至るまでに発生した大規模な地殻変動は何者かが地中潜行をしていたからだという。

：それが出来るものと言えはひとつしかなく、またそれが館山市で発生するという事は。

「別の巨大不明生物が……ここに、来る——」

思わず副長は絶句する。

——その隣で、神宮司はただ一人落ち着きながら悟ったように口を開く。

「——まあ、そう上手くは行かんわな。」

——その直後。

大森をもって文明を地表から切り取るように、地中より無数の蔦が出現し——建築物を薙ぎ払う。

——そして、

「キユウヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!？」

禍々しくも悲哀に満ちた咆哮と共に——

植獣が顕現した。

EP-43 館山市防衛戦／異形ノ花（ビオランテ

）
正午12時43分・館山市八幡516番地

大森をもつて文明を地表から切り取るように、地中より無数の蔦が出現し——建築物を薙ぎ払う。

薙ぎ払われた平均35坪の一戸建の住宅達。

…それは、人間に対して空より降り注ぐ凶器となって——
街を押し潰す。

…そして、

「キユウヴオオオオオオオオオオオオ!!?」

禍々しくも悲哀に満ちた咆哮。

それと共に——植獣が顕現する。

「…何、何よ、コレ——X」

撤退の最中、ソレを見た私設IS部隊の女が呟く。

…巨大なトカゲが現れたくらいならば誰も、もう驚かない。

現に自分達はその巨大なトカゲとつい先程まで対峙していた。

だが——これはどうか。

——隆々と湧き立つ緑の血管。

——乾き、何千年もの時を食んだ大樹のような表皮。

——無数の蔦を生やし、地に根を落とした巨大樹のよう

に。

——花を連想させる美麗さと爬虫類を連想させるグロテ

スクさ。

——ハエトリグサ蠅取り草を従える、ワニアギト鰐の顎門。

——言うならば、ソレは植物と動物の融合体。

…ふぎけるな。こんなデタラメな奴があつてたまるかと、女は思い

——それが彼女の最期の思考だった。

「——は??」

——視界を覆う暗黒が現れ——彼女は、間拔けな声と共に押し

潰された。

破裂する直前の眼球には、緑色の血管が写っていて――

緑の津波が文明を破砕する。

――無数の蔦が建築物を薙ぎ払う。

――無数の蔦が放置車両を薙ぎ払う。

――無数の蔦が高層ビル群を薙ぎ倒す。

地表を覆い尽くしていたアスファルトやコンクリートが根こそぎ飛散する。

――大地震と錯覚する震動が地表を砕く。

しかしソレにとつて大地を震わせる一撃は、虫を払った程度のものでしかない。

∴そして元より、ソレにとつて、あんな小さなモノは眼中にない。

ただ、眼前にある黒い荒神。

それを睨み付けながら――ワニ鰐めいたアギト顎門を開き。

「キュウヴオオオオオオオオオオオオオオ!!?」

――吼える。

全長120メートル、

体重20万トン以上にも及ぶ山の如き巨体が大気を震わせる。

地に根を張った緑の怪獣は一步も動かず、しかし圧倒的威圧を孕んだ咆哮を放つ。

ソレこそ、植獣――バイオランテ。

北欧神話に伝わる植物の精霊の名を冠する異形の巨大樹。

????????
――!!
――対となるように、黒ゴキツ荒神ラが吼える。

全長60メートル、

体重3万トンの巨体は。

自らに類似した怪物であるソレを殺そうと、咆哮を上げる。

そして迷いなく、突進を開始する……!

それはバイオランテも同様に。

無数の鳶をもつて、弧を描きながらゴジラに殺到する……!

——対峙する双極の体躯。

——大地を踏み迫る巨躯。

——もはや語る事など非ず。

——互いに孕んだ殺気を放出し。

……両者は激突した——!!

????????????????????????????????????
館山市沖西方30.5キロ・東京海底谷直上
横須賀地方隊・第11護衛隊
やまと型護衛艦【やまと】・艦橋CIC
戦闘指揮所

「……なんてこと……。」

眼前の状況——我々と巨大不明生物の間に乱入して来た別の巨大不明生物を前に、副長が絶句する。

先程完全に意識をこちらに向けていた巨大不明生物は、唐突に現れた別の巨大不明生物に向けられてしまった。

……本艦の乗組員の生命という意味では助かったと捉えるべきだろう。

だが——それは同時に、巨大不明生物の撃退という当初の目的が潰えたとも言える。

更に言えば、新たに出現した個体と戦闘を開始した為に被害状況も更に拡大する。

——これを、絶句せずはどうしろというのだ。
——我々はフラれたな。」

ふと艦長帽を被り直しながら——神宮司一佐が冗談めいた口調で口にする。

「海上作戦センター——現場では判断しかねる、作戦続行
海自船越庁舎に通信——」

の可否を問う——と。」

「了解——やまとより横須賀。本艦のみでは現状の判断をしかねる。作戦続行の可否を問う——オクレ。」

神宮司に促され、オペレーターは横須賀・海上作戦センターに指示を請う。

——だが無論、聞かずとも指示内容は理解出来る。

：作戦が瓦解したとあれば、行動は一時的に保留するしかない。そうなれば下る内容は作戦の中止。

——だが確かな事は。

「勝った方が我々の敵になる事……くらいか。」

横須賀基地

海上作戦指揮センター司令部

「当方では判断しかねる、作戦続行の可否を問う！」

?????

防衛省本省舎中央指揮所

「本省のみでは判断しかねる、作戦続行の可否を問う！」

同時刻

官邸地下危機管理センター・幹部会議室

——新たに出現した巨大不明生物によって、其処は混乱の極みと化していた。

そんな中叩きつけられる統幕長からの報告。

そしてその内容は当然……攻撃目標に含まれていない別の巨大不明生物に対しても攻撃を実施するか否か——。

——それを、防衛省からの報告を受けた財前統合幕僚長が

花森に視線を合わせながら問う。

「現場が指示を求めています、作戦を続行しますか？」

「総理続けますか？良いですか!？」

「……………」

——花森の声に、大河内は思わず気圧される。

…今撃たなければ、後に更なる被害拡大を招く。

それは国民に更なる犠牲を強いる事態となる。

…しかし下手に刺激すれば巨大不明生物を2体同時に相手取る可能性もある…。

そうなれば、今なら房総半島南端だけで済む被害が更に拡大する可能性も——!!?」

——大河内は思わず、思考の海へと沈んで行く。

「——総理!!」

花森が発破を掛け——大河内を思考の海から引きずり出す。

今、最善と思えるモノを紡いで。

「…中止だ…作戦一時中止…この想定外の事態に、これ以上国民と自衛官を危険に晒すわけには行かない!!?」

——それは今現時点で大河内が最善であると思えた内容。

花森は ” それで良いんです ” と強くうなづきながら、

「——了解。統幕長、作戦一時中止と伝えて下さい。」
——そう言い放つ。

「…………花森君…これで良かったのか…?」

——自分の決定でアツサリと対応は固定した。

だがこの対応では間違いもあるのではないか、という感情を抑えられずに——大河内は花森に問う。

——だが彼女はそれを斬り伏せるように告げる。

「新たに出現した巨大不明生物は攻撃目標に含まれていませんのでこれ以上の攻撃続行への法的根拠に欠けます。

…それに下手に刺激すれば市民を更に危険に晒す可能性がありま
す。そして何より——相互に戦闘しているととなると、どちら

かが勝つまで、我々の敵は、判別しかねます。

——その判断自体は、間違っていないかと。」

…正面スクリーンに映る——対峙する2体の巨大不明生物を睨みつけながら花森は告げる。

——それに続くように。

「とりあえず、どつちかが倒れるまでは静観か…。」

まあドでかくても生き物だ。殺し合えばいずれ死ぬし、これ以上防衛費に補正予算を当てることも無い——。」

「ああ。どつちかの死骸を利用した復興財源案を考えてみるか。」

——柳原と金井が言う。

…そのどちらにも、安堵の表情が浮かんでいる。

だが——それに対し、釘を打つように。

「大臣——先の大戦では、旧日本軍の希望的観測・机上の空論・こうあつて欲しいという発想等にしがみついたが為に、国民に300万人以上もの犠牲者が出ています。

——根拠のない楽観は、禁物です。」

矢口が言い放つ。

2人はそれに対し忌々しげに顔を歪めるが、彼は気にも留めず——

「——総理、今は更なる避難指示を仰ぐしかないと考えます。」

——矢口は、新たに具申した。

同時刻

館山市・平久里川北岸

郷古地区・館山市立第一中学校

依然、そこは混乱に満たされていた。

『当避難所は、避難該当区域に指定されました。施設内におられる方々は速やかに——』

臨時の避難所が置かれていたそこは。

新たに出現した巨大不明生物の引き起こした被害拡大によって、危険地域に指定された。

一時的に避難し、安心しきっていた住民にとって、それは中々酷な話ではあるが——被害拡大によって犠牲者が出る前に住民の安全を確保する必要があるという判断から、住民の避難先移転が決まったのだ。

——子供や荷物を抱えて住宅街の路地を足早に逃げる人々。

——ビル群やマンション群に響くサイレンの木霊。

——避難所から続々と溢れ出し、道路や迂回路としての歩道橋を埋め尽くす避難民。

——火に油を注ぐように、避難準備区域から避難該当区域に切り替わった住民がマンションや住宅から続々と逃げ出して来る。「足元に気を付けて下さい！落ち着いて下さい。」

——その中に混じり——警察や消防は具体的な指示もなく、自らの判断で住民の避難誘導に当たる事を余儀なくされていた。

「早くここから離れて！急いでください——」

——直後、遮るように。
頭上に爆音が轟く。

……パラパラと、乾いた音と共に砂利が降り落ちる。

——見上げると、有り得ないモノが視界に映る。

それは、ベランダからマンションに突き刺さる——モノ
レールの車両。

幸いにも、避難が完了していた棟だ。

それに消防隊を率いる隊長は僅かに安堵する。

——つい先程など、2階建アパートが丸ごと降ってきてト
レーラーが潰されたのだ。

それに比べればたかだか知れている——だがそれでも溢

れ出た住民の避難先があるわけではない、という事実を前に、意識は現実を引き摺り戻される。

指示を仰ごうと無線機を手にして——再び爆音が鳴る。

今度は遠方——平久里川南岸から。

” くそ、好き放題プロレスめいた滅茶苦茶な戦いしやがつて——

——！——”

それに内心毒付くと、今度こそ指示を仰ぐべく——無線機

に向けて怒鳴った。

「地震災害時の避難場所では役に立ちません！新たな避難場所の指示を請う——どうぞ！」

??
2時44分
館山市湊地区

「ユウヴオオオオオオオオオオオオオオ!!?」

ぶつかり合う巨軀と巨軀。

ビオランテの葛が繰り広げる乱舞に圧されながらも、ゴジラはその連撃を緩めない。

——白昼の下に走る漆黒。

2倍近い体格差があるにもかかわらず、60メートルの体軀にどれだけの力を有しているのか、力負けしている筈のゴジラは一步も譲らない。

台風めいたビオランテの葛を受け、弾き、真つ正面から切り崩して

行く。

それに対し、攻撃を継続する緑森りよくしんの高波と。

——それに抗するかのよう放たれる白熱光。
だが効かない。

…否、確かに効いてはいる。

しかし——致命傷には遥かほど遠い。

元より、この植獣は火への耐性を心得ている。

それ故に——生半可な炎では傷にさえ至らない。

「キュウヴオオオオオオオオオオオオオオ!!？」

植獣は止まらない。

振るわれた蔦の群れ、その放たれた数100にも登る連撃が。

——ゴジラを刺し貫く…!!

「!!」

悲鳴めいた咆哮が上がる。

——それは刺し貫かれた痛みではなく。

——それは体内を溶解する強酸によって。

グズグズと、刺し貫かれた箇所は腐蝕し融解する。

それは高熱と強酸性の体液によって細胞が破壊される音。

ゴジラは酸性の体液と混じり合った血液が噴水のように吹き出し

——辺り一面にソレを撒き散らす。

通常の生物であれば大なり小なり致命傷に至る損傷。

——だが、止まらない。

……ここに来て、ビオランテはゴジラの異常性をようやく理解する。

この怪物は屈強などという次元の頑丈さではなく、自分達と同じく桁違いの「法則」で守られた不死性なのだ。

…ああ、だからどうしたと言うのだ。

それなら、動けなくなるまで殺し尽くせば良いだけのこと…!!

——その意思を形にするかのよう。

更なる蔦が地を割りながら顕現する…!!

「キュウヴオオオオオオオオオオオオオオ!!？」

建築物
ビルを巻き込みながら振るわれる、暴風じみた鳶の乱舞。

植獣が咆哮と共に一閃する度に、40階建高さ120メートルにもなる高層ビルが両断されていく。

それは対艦ミサイルに匹敵する力。

それは戦艦の主砲に匹敵する大質量。

それをもって——荒神を、打ち付ける……！

「……しかし。」

「……！！」

相手とて黙ってやられてやるわけではない。

それを証明するように。

吹き荒れる鳶の乱舞の中。

ドンドンと音を立てて吹き飛ぶビル。

——その中で、先程と同じ……否。それ以上の力を振る

い、荒神は植獣と対峙していた。

殺される気は僅かもないと植獣を睨め付けながら。

植獣の心臓部に照準を合わせた——蒼い炎が、植獣を射ち

貫いた……！！

「ゴッ……ポ………ッ！！」

血の塊が巨大な顎門から零れ落ちる。

——その一撃でビオランテは心臓を穿たれ、吐血したの

だ。

当然だ。心臓に孔が開いたのだからこうなってしまうのは必然と

言える。

——荒神はその呆気なく決まった決着に、慢心の感情を浮

か……る。

——だが——それはすぐに、未知に対する畏怖へと反転した。

??

12時45分

官邸地下危機管理センター・幹部会議室

「巨大不明生物、双方が停止。突如戦闘を停止した模様です。」

危機管理担当要員の防衛省職員が、前哨基地として未だに機能している海上自衛隊館山航空基地からの通信を報告する。

その報告に、思わず大河内は困惑する。

「停止？何だ、急に？」

中央スクリーンに映る現地映像を見つめながら、大河内が言う。

だが誰も答えない。

それは分からないからではなく……すぐさまに、答えが提示されたからである。

中央スクリーンに映る怪物。

120メートルもの異形は、ビオランテ茶色く変色を開始したように枯れていく。

だが、それは死ではなく。

その証明に——山のような巨躯が、割れる。

枯れて水分を喪った表皮は僅かに走った亀裂を大源に——

——連鎖的に崩壊を始める。

枯れた部位は崩れ落ち。

それは老化した部位を切り捨てるように。

それはまるで新たな部位を切り拓くように。

内より新緑が覗く。

——それは。

——文字通り、『脱皮』であった。

割れた巨躯は、まるで種子から新芽が発芽するように。

——新たな体躯が顕現する。

ただ古い皮を突き破り、新しい身体を形成しただけであれば、それは差して驚くべきことではない。

『ゴ、オ——…』

だが、形状が一致しない。

…背ビレと思しき部位はより突出し。

——緑の焰が揺れているような錯覚さえ見せる程のモノへと。

…鰐のように細長い顎は腐り落ち。

——肉を噛み千切るのに適度な長さとなった顎門。

…胸部には、肉を突き破るように白いカルシウムの塊が生え。

——皮一枚を挟んで剥き出した心臓部を守るように肋骨が隆起し。

…上半身はより戦闘に特化した形状へと変化し。

——身体細胞が急速に変形し、肩と腕が形成され。

…対して下半身は根としての形状を維持しつつも、樹肉は重質化し、脚を成し。

…エリマキのように、花獣時に散った筈の赤い花びらが再び現れ。

——急激に多脚直立歩行形態へと身体構造を変化させる

……！

——言うならば、それは。

「…すごい——まるで、進化だ。」

その姿を愕然と見つめながら。

——それ以外に言葉が見つからないとばかりに、矢口は口にした。

同時刻

館山市湊地区

「キュウヴゴアアアアアア—— ツ!!?」

禍々しくも悲哀と、太古から細胞に記憶されていた恐怖を人類に思
い出させるような声が入り混じった咆哮。

それは、異形の花の開花を告げる慟哭であった。

「!!」

狼狽ながらも、荒神は戦意を露わにする。

だがそれに、異形の花はただ微笑んで。

——じゃあ殺すね。

子供が虫を潰すように無垢な意思を——歌うように、露わ
にした。

巨体が飛ぶ。

20万トンを超える大質量を持つ異形の花が、200メートル離れ
た間合いを詰めようと一息で落下してくる——!

：それを、荒神は尾を振るうことで迎撃しようと身体を振るった。
打者の如く尾を振るう荒神と、

旋風を伴って落下して来た異形の花とは、全くの同時であった。

——空気が荒波の如く震える。

山塊そのものとも言える異形の花を、荒神は尾の一振りを受け止め
ていた。

しかし、力量に差が生まれた事を認知したのか。

「!!!!!!」

荒神は口元を歪める。

そこへ。

旋風じみた、異形の花の蔭が一閃する——!

——爆音。

一瞬、大気に真空を形成したのではないかと錯覚する程の、肉と肉
の激突は荒神の敗北で終わった。

——どががが、という轟音。

地を砕く一振りを受けた荒神は、その巨体を背後へ吹き飛ばされ
る。

…それで、荒神の姿勢が崩れる。
すかさず——追撃する、新緑の山塊。

異形の花は、それしか知らぬかのように数多無数の蔦を機関銃めいた連射をもって叩きつける。

避ける間も無く、荒神はその全てを叩きつけられる。

…当然、この程度では致命傷たり得ない。

だからこそ荒神は、無理に避ける事で体力を消費するよりも、あえて受ける道を選んだ。

だがしかしこれは——前進を許さない、攻戟の嵐だった。

その場より動く事を許さない。

その場より進む事を許さない。

その場より退くしか許さない。

だが荒神は自ら退く事は無い。

——故に、異形の花は荒神をその場に釘付けにした。

荒神にとって、勝機とは異形の花が繰り出す乱舞の合間に活路を見出すこと。

だが。

それも、異形の花に隙があり——ここに踏み留まることを許してくれるならの話。

…それを許さないと告げるように。

「キュウヴゴアアアアアア——ツ!!？」

重量20万トン。

全高120メートルに及ぶ。

植物の巨躯が——地表というテクスチャと、その上に築かれた文明というストラクチャを粉碎しながら。

地を鳴らし震わせながら疾走する…!!

思わず、荒神は目を見開く。

アレが植物であるという事は今までの手合いで把握していた。

そして植物が如何なるものかも理解していた。

…だからこそ、眼前の光景に対して理解が追いつかない。

——異形の花は、節足のように硬化した根を脚部として歩

行している…！

走る植物など見た事もない、何より——アレは山と同程度の大きさを持つている。

であるならば、それ相応の重量がある。

——だというのに。

あれほどの巨体。

あれだけの触手や蔦をもつてして、異形の花は荒神と互角——

——否。一部に至っては荒神ゴツラを上回ってさえいる。

何もかもがデタラメで釣り合っていない。

：自らが理不尽的存在であるにもかかわらず、荒神は異形の花のデタラメに圧倒される。

そこへ、休む暇を与えないと言わんばかりに蔦の機関掃射が放たれる。

繰り返される乱舞は何の工夫もない——ただ叩きつける

だけの駄撃でしか無い。

だがそれで充分。

圧倒的なまでの力と速度が在るのなら、技の介在する余地はない。

技巧とは、人間も含めた動物が欠点を補う為に必要とするモノ。

：もちろん、異形の花に弱点がないわけでは無い。

しかしそれが求められるのは防御の際。

故に——攻める際には技巧など要らず…！

「??………！」

しかし——そう容易く荒神は墜とせない。

：それは足掻きか、口内をチェレンコフ光が蒼白に染め上げて。

——穿たれる、放射熱線…！

「キユウウ——…ッ！」

その直撃によつて、30本程の蔦が爆ぜる。

：数万度に至る熱焰。

それが蔦に内包されていた樹肉と水分を蒸発させ——内

部から水蒸気爆発を引き起こすことで、爆散させたのだ。

：仮にも異形の花を形作るモノは植物。

それである以上、炎に勝る道理など何処にも存在しない。

——だが、異形の花は怯まない。

断絶し断面から垂れ流れている、樹脂とも血液とも取れる体液——
それを、鳶を振るうことで、撒き散らす。

…その体液は、孕んだ高熱をもってアスファルトを融解する。
ソレを荒神は浴びるが、この程度では傷さえ負わせられない。

無論、異形の花もそれは理解している。
ばら撒いた体液はあくまで着火剤に過ぎない。

…あるいは、気化したガソリンか。
——背ビレに、稲妻が走る。

だからこそ。

——口内に、青磁色の光が宿る。

異形の花はそれに、火を灯す…!!??

——氣勢と共に樹脂性放射帯焰を口部より解き放つ…

!!

瞬間。

気化したガソリンに走った静電気が大爆発を引き起こすように。

撒き散らされていた体液と、気化した血液たちに青磁色の焰が引火し——
——自分達諸共、街区を丸ごと吹き飛ばす…!

瞬間火炎温度3000度に到達する青磁焰は。

周囲のビル群を高熱で犯し、コンクリートは波打つ飴細工のように溶け落とし。

周囲の住宅群を基礎ごと、紙風船のように根刮ぎ吹き飛ばす。
打ち捨てられていた放置車両は紙吹雪のように飛散する。

…その、破壊の余韻を裂くように。
異形の花は攻撃を再開する。

——再び疾走する、山塊は。

「キュウヴゴアアアアアア——ツ!!?」

咆哮と共に——
——掬い上げる拳の如く、『初めて腕として』振るわれる前腕衝角。

その衝角は荒神の鳩尾みぞおちに叩き込まれ。

——ガ、と荒神が喘ぐように声を漏らす。
体軀は前のめりに倒れながら。

異形の花は、それを受け止めるのではなく。

疾走したまま——荒神を轢き潰す…!!

20万トンという大質量は、轢き殺すように。

3万トン程度重量しかない荒神を引き摺りながら。

疾走を辞めず——それを成されるがままであるはずもな

く、荒神は再び放射熱線を放つ。

……だが。

表層の水分が僅かに奪われたのみで、本体にこれという損傷はない。
い。

それで、異形の花は既に自身の炎にさえ耐え得る強度を手にしたと
理解して。

……幾棟にも渡るビル群を突き崩し。

——再度、荒神は放射熱線を心臓部めがけて連発する。

……幾重にも渡る幹線道路を踏み潰し。

——それを異形の花は鬱陶しく思い、蠅取草をもって荒神
を噛み上げる。

……海岸沿いの遊園地を無茶苦茶にして。

——荒神は苦悶の声を上げるがソレを良しとして更に蠅
取草の歯を食い込ませて筋繊維を喰い千切りながら疾走し。

……最後に、高度200メートルはあろうかという水柱を築きなが
ら。

——勢いのまま、進路上にある館山湾へと飛び込んだ。

……その後も、水中で闘争を続けているのか。

幾重にも連なる、水柱の列が海面を突き破る。

しかしそれは確かに、沖合いへと向かって行き。

——双極の怪物たちは、海へと没した。

『報告。』

巨大不明生物は平久里川河口より離岸。館山湾を横断し、相模トラフに侵入した模様。：以後は海底の状況が悪く正確位置などはロスト。現在、所在不明——オクレ。』

EP-44 東の間の終息

——2021年6月13日午後17時25分

千葉県いすみ市西方20キロ沖合いの海域

ウエーブピアサー型ステルス輸送艦【大戸島】

キャロツ島より奪った流線形フォルムのウエーブピアサー型ステルス輸送艦ウサギ丸：改め——ステルス輸送艦【大戸島】。

その船は現在対水上・対衛星熱光学迷彩を展開し、ウオータージェット推進による隠密性を高めた上で九十九里沖を目指し航行中であつた。

これだけの隠密性があるというのなら、これまで各国の篠ノ之東が支援していたとされる女権団や亡国機業へ接触するのも難しい話ではなかつただろう。

…その艦橋で、倉田は艦の航行を制御している自作のスーパーコンピュータの整備をしながら、独言る。

その隣では——寒いのか、少し肌を掻く朝倉が。

「いや、それにしても放射能の霧に包まれても生きてるなんてやりますねえ。」

倉田がニタニタと笑いながら朝倉に声をかける。

一方の朝倉は無言。

…少し無理をしたのか——あの後戻って来てから身体の調子がおかしい。

血管に僅かな異常。

内臓に微かな傷と出血。

身体の細胞が冷めて行く。

——ああ、そろそろ限界が来たのかと理解して。

それに呼応するように。

……ずぞり、と。

黒い血を撒き散らしながら、

——根元から、右腕が千切れ落ちた…。

????????????????????????????????

6月13日午後19時40分

巨大不明生物離岸より6時間50分後

82式戦闘通信指揮車・車内

「一旦八広駐屯地に収容後、受け入れ準備の完了と共に箱根へ……?」

ふと、光が疑問符を浮かべる声を浮かべ、対人防諜設備が施された82式戦闘通信指揮車車内で——スマートフォン通信相手に問いかける。

：無論、こちらも防諜の為に守秘専用回線を用いている。

そして通話相手は、本来の学園理事長である轡木十蔵の肉親である轡木誠特将。

「そうだ、つくば市の予備施設は国連軍および日本政府が接收。在日国連軍つくば基地として稼働することだ。

——だが予備施設を全て接收するのも良くない……とモナーク機関が温情で元箱根の鞍掛くらかけに予備施設を確保してくれたそう
だ。」

「新箱根市は未完成じゃなかったのか?」

——新箱根市。

地方自治体再編計画に基づき箱根山一帯を整備し、築かれた地方創

生都市のテストベッドと言える新興計画都市。

国家非常事態時においては立川や有明などと同じ内閣府移転先・分散首都としても機能するべく、複数の公共交通機関や行政機関などの整備が行われており、国連傘下の設備も多く存在する。

だがIS学園の建造と八広駐屯地の建造に予算を割かれ、未だ完成には至っていないというのが実態であった。

「都市そのものは未完成だ。何しろ芦ノ湖北岸に合同庁舎他ビルが5本建ち、都市環状モノレールと都心郊外間直通快速がようやく開通したばかりだ。」

誠は、” そりゃ、予算ないからな ” と付け加えながら告げる。「政府機関を最優先で建造したおかげで、辛うじて機能はする。学園を入れる為の元箱根・鞍掛^{くらかけ}国連施設の整備も完了している。」

「———おい、鞍掛^{くらかけ}って：そこ、ゴルフ場がなかったか？」

ついでに言えば、都市中枢の置かれている仙石原にもそれなりに巨大なゴルフ場があり、都市建造にあたり、それを取り壊す事になった為にゴルフ場経営者と国土交通省が大いに揉めたと記憶しているが…。

…流石に、二の舞いはないと願いたい…。

「…ああ。くらかけゴルフ場があったな。ちなみに国連施設はそのゴルフ場を丸々潰して作ったらしい。」

そして大いに揉めたそうだ。」

———前言撤回、担当者は何も学んでいなかった。

「…はあ…：もういい。ちなみに敷地は？」

「東西に1. 2キロメートル、南北に500メートル程。…標高860メートルにある為、落雷が心配だが、それを除けば———地方の大学よりは敷地は広い。」

…麓^{ふもと}の元箱根と函南には、直通インクラインが整備されているし、交通の便も悪くはない。」

” ——— ついでに言えば、函南にはJR東海道本線が走っているし、そこから一つ西に行けば三島駅で、そこから二つ東に行けば熱海でそれぞれ東海道新幹線との乗り換えが出来るからな。函南

駅にも新幹線乗り換え口を設ける話があるが、まだ時間がかかる。”

…と誠は付け足して、言う。

「——無駄に詳しいな、お前。」

軽く引きながら、光は言う。

それを知ってか知らずか、あるいは恥という言葉を知らないのか。

「鉄ヲタだからな。」

——キツパリと、誠は言う。

「お前…そういうトコだぞ——」。

光は呆れながら内心呟く。

するとそれに反論するように、

「貴様だってゴジラヲタクではないか。」

「——む。」

誠の言い放った言葉が、光の言葉を啄む。

…柴田に影響されたのか。

…間近で見たせいか。

…千尋ゴジラに一度殺されたせいか。

——確かに光自身、ゴジラに取り憑かれている事は、自覚

していた。

「まあ、それはそうだが——ところで、受け入れにはどれくら

いにかかる?」

「2週間と少しは。まだ首都圏からの地下弾丸直通列車や新箱根市役

所との調整で時間がかかる…まあ——臨海合宿までには間

に合うだろうさ。」

——それまでは、八広駐屯地に収容するが。と付け加え

て、誠は言った。

6月13日午後19時40分

巨大不明生物離岸より6時間50分後

館山市宮城無番地

海上自衛隊館山航空基地

遠方から響くサイレン。

西の空を紅く灯す炎。

大気を震わせるヘリのローター。

地上に響く地上作業員の怒号。

ただ見るしか出来ないIS学園関係者。

…先のIS学園における戦闘の後、本土へと退避したIS学園の関係者や避難民はそこに集められていた。

ここが避難所というわけではない。

正確には東京都墨田区の八広駐屯地が正式かつ臨時の学園関係者収容所となる。

だがしかし、先の巨大不明生物——暫定呼称【甲】・《乙》——

の戦闘により、地下直通トンネルが崩落。

輸送手段が断たれたが故に今は、海自の基地からヘリコプターによる輸送を取り行う為の交渉…その、最中である。

故に生徒たちは滑走路脇に設けられた臨時設営のテントに身を収めていた。

「…東の空が——紅い、な……。」

箒がふと眩く。

陽が沈み、照る筈のない東の空は——赤く紅く朱い暁け色に染まっている。

…まるで、漆黒の中に現れた夕陽のよう。

その光景に——ある景色がだぶって見える。
泥が街を飲み込んで行く。

人が燃える。

人が死ぬ。

車が燃える。

車が爆発する。

建物が燃える。

建物が崩壊する。

その中を、箒は逃げる群衆にまみれながら墨田区を走って、泥から逃げる。

その後ろで。

1人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

3人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

8人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

悲鳴や断末魔を上げて燃えながら死んで行く。

燃えた跡には。

タンパク質が炭化する臭いを放ちながら燃えていくヒトだったもの。

煙を大量に吸ったせいで呼吸ができずに窒息して死んだヒトだったもの。

未だに燃え続ける木造建築が一部に使われていた建築物。

焼け落ち、完全に瓦礫と化した建築物。

誰もいない、生きている人間が誰もいない、廃墟と化した街。

私が壊れた日。

私が変質した日。

私が見殺した日。

私が千尋と出逢った日。

墨田大火災という地獄を見た日の——景色。

……結局——私は、自己犠牲だけは一人前だが、それ以外

は何も出来やしていないじゃないか。

あの時から——何ひとつ、変わっていない。

だって、あの火災あかの中に人がいるだろうというのに、私はまた——
——ただ見ているだけだ。

そんなの……良いワケが無い。

”——今すぐにでも、あの中に飛び込んで救助に加わるべきだ。”

そう内心思い、脚を踏み出す。

偽善とかそんなの関係ない。

——ただ、今はそうするべきだと判断して。

……それを、戒めるように——

《……ダメよ、貴女自分がここを離れたら他人に迷惑かけるの分かってるでしょう?》

柳星張イリスが、話しかける。

それは出来の悪い子供を軽く叱る母親のように。

「……………分かってる。」

《分かってるんなら脚を止めなさい。人命救助は悪い事じゃないし——
——アンタはそれで良いかもだけど、集団の輪を乱すのは良く無いんじゃない?》

「……………分かってる。」

《分かってない。だいたい貴女、私に侵食範囲を広げさせた所為で身体ボロボロなのよ?》

行ったところで邪魔でしかないわ。

他人に心配かけさせて、尚且つ邪魔しに行くなんて、ただの無能よ。》

「……………分かってる!!?」

分かってる——それは凶星だった。

柳星張イリスのその一言一言は、確かに箒の見ないようにしている箇所を的確に指摘して行く。

故に、箒はつい声を荒げて言ってしまう。

分かってる——それは箒が一番理解していた。

だからこそ、自分一人だけが安全な場所で悠々と居る事が許せない。

他人にそれを強制するつもりはない。だけどせめて、私だけでも――

「箒」

ふと――その声で思考の海から引きずり出される。

ふと、振り返れば千尋がいる。

「…なんだ？」

「なんだ――じゃ、ねえよ。お前現場に行こうとしてたろ。」

…凶星を突かれる。

動揺しまい。と表情を固めるが、瞳にはハッキリと動揺が伝わってしまい。

「やっぱりか。…当てずっぽうでも、結構当たるんだな。」

ふと千尋が、案の定というか何というか味のある顔をして言う。

――それはつまり、『カマをかけてみたら本当だった』という話。

その事態に箒が気付いたのは2秒後で…

「あつ、な――…」

羞恥とは別の感情から顔を赤くして。

「だ、騙したのか!？」

「騙したんじゃないよ。ちよつとそうなのかなって思って聴いたら箒が引つかかったただけだ。」

「なん――うッ☒」

” 何だと―― ” と言おうとして、それは自らの額に放たれたデコピンによって遮られる。

「――だいたい、人命救助以外にもやれる事あるだろうが。」

” ―――ちったあ頭冷やせ。 ” と、付け加えながら千尋は言い放つ。

それは戯けた顔ではなく、至極真面目な顔で。

ぶん取るように、箒の手を握りながら言う。

…些か強引だが、こうでもしないと箒は勝手に自分自身を危険に晒す。

――それは学園撤退戦で既に理解した。

だから悪いけど、箒の意思を捻じ曲げてでも生きてもらおう。
…もちろんこれは傲慢だ。

それは自分がよく自覚している。

——箒の意思は詰まる所人助けだ。

困っている人、瀕死の人間、その全ての為に自分の命を捧げるというモノ。

それは——尊いモノだ。

それは——敬うべきモノだ。

…ならば黙って意思を尊重してやるべきと言うのが筋だと理解しているが。

…こつちにだって、言い分は有る。

——現在現場は数多複数の火災と生物汚染による危険地帯と化している。

そしてそんな地域での活動を目的とした訓練は最低限度こそ受けているものの、陸自化学科や特自汚染防護隊ほどの本格的訓練は受けていない。

消火活動訓練など以ての外。

——そんな状況では足手まといになるのは目に見えているし、下手をすれば箒が命を落とす可能性だってある。

…箒が死ぬなんて、そんなの絶対に御免だ。

だからこのように——強引に手を引いても引きずり戻して来たのだ。

「おい千尋、そんなに引つ張るな！腕が千切れる！」

その箒の抗議を受けて——千尋はハツとする。

それで、手を離す。

「…こんな時にどこへ連れて行くつもりなんだ…！」

箒が居ても立っても居られない——と言わんばかりの声音で言う。

それは箒の意思を考えれば当然である。

箒としては1人でも多く救わなくちゃいけないと感じているにも関わらず、それを阻まれているから。

…だが、悪いが今日ばかりは箒に譲歩出来ない。
今日ばかりは――

「うるせえ、今日は休め。」
そう告げる。

…ただでさえ、今日は危急な事態が山のようにあり、身体を落ち着かせることさえ叶っていないかった。

それに箒自身気づいていないが。

今の箒は顔色が悪く、脚も悴むように震えながら身体を支えている。

――どう見てもオーバーワークだ。

まるで整備不良で墜落寸前の飛行機みたいにボロボロの身体に鞭打って、どうにか立っている現状。

これでは救助活動の最中に身体を壊す未来など容易に見える。

…だから寝ると、そう言わんばかりに箒を千尋は睨みつけた。

…それに負けじと。

「そんな暇――」

”――そんな暇ないに決まってるだろう！被害状況を
見て分からののか!?”

そう言おうとして箒は、

「…え――?」

目眩と共に――脚が、崩れ落ちる。

…視界に芝生が見えて、そこに頭が激突する数秒前。

空中から自由落下する物体が途中で留められる衝撃が箒に走る。

決して柔らかくはないが堅くもない。

痛くもなく、むしろ心地よくて。

ほんのりと、身体が暖かくて――それで、篠ノ之箒の意識は途絶した。

…ヘリコプターの轟く爆音にかき消されながら。

「…ほら見ろ。無理が祟ったじゃねえか。」

気を失い、幼子のように寝息を立てる箒を支えながら、千尋は呟いた。

…その口調は呆れるように、戒めるように、しかして——
愛であやすように。

「ゆつくり休め。じゃなきや、お前ほうきが壊れちまう——」

そう呟きながら、千尋は箒を背負う。

——向かう先は、臨時の避難所となっている仮設テント群。

そこへ箒を背負いながら千尋は脚を運ぶ。

——暖かい。

背中越しに、伝わる箒の体温と感触。

それはあの日、願望通り死に転がり落ちる中で触れた少女のまま。

——軽い。

あの日より成長したのは確かな話。

だが、箒の重みは想像を遥かに超える具合に軽い。

…ふと思いつ返す、IS学園入学当日の朝。

箒から『ドーン!!? 起こし』を食らい、

” 朝っぱらからいきなり何すんだよ箒姐!!? ”

——思わず、千尋はそう抗議した。

” 何度起こしても起きないお前が悪いのだろう? ”

——それを箒は、ケラケラと笑いながら、言った。

……それはただ2ヶ月前の話。

……それはたった2ヶ月前の話。

だというのに、それが—— 酷く懐かしい。

「…そっか、まだ2ヶ月しか経ってねえのか。」

あまりに出来事が多過ぎて、まるでもう遥か昔の事のように感じる。

死に際でもないのに、回想が脳裏に過ぎる。

箒と過ごした日々と。

曲がりなりにも楽しめた学園生活と。

初めて面と向かって人間と話した記憶と。

：光に、今年中には世界が終わることを告げられた記憶。

——ふと、空を見上げる。

市街地から流れ込む火災の煙のせいかわかに霧がかかっている。

だが——雲ひとつ無い、星空が視界に映る。

世界が減びるなんて、思えないくらい。

：そういえば昔、箒と小学校に通っていた時。

もしも世界が終わるならどうする？なんて事をクラスメイトが

言ってたっけ。

そしてその時はまだ荒れてたから——自分の考えは、『自分を殺してくれる者を探す』だった。

そんな風に誰も寄せ付けない空気を漂わせていたから、質問なんて回ってこない。

つまりは仲間外れ。

まあ、今思えば自業自得だ。

——ただ——昔、ラゴス島の浜辺ではしゃいでいた小鳥の様に。

皆が楽しそうに答えていたのは見ていた。

：カレーを腹一杯食う、と男子が言った。

——悪く無いな、楽しそうだ。と自分は思った。

：お父さんとお母さんにお礼を言う、と女子が言った。

——ああ、それは絶対にやりたい。もう絶対叶わないけど、独り言うだけでも構わないから、やりたい。と自分は思った。

そしていつしか、自分自身にも問いを発した。どうする。

世界が終わるなら。

世界が終わるなら、俺はどうする？

その時はまだ答えなんて出なかったし、どうでもいいと内心突き放した。

でも——今ならば。

今日この瞬間、頭に浮かんだ答えを口にして、

「——やっぱり、箒に笑っていて欲しいな。」
——がちん。

身体の何処で、細胞が死滅を開始した。
だけれども、それを理解していながら、

「——ああ、それが良い。」

なら、やる事はひとつ。

その時まで——6ヶ月で尽きるだろう命を、精々燃やし尽
くしてしまおう。

——そう、純粹に内心呟いた。

——2021年7月7日19時59分

——新箱根市仙石原区湖尻町・県道75号線上

——非常事態宣言が布告され、地上より人々が退避した——
——空っぽの街。

街に散在する無人のビルがまるで抜け殻のように佇む下。

県道を血だらけの少年が駆けている。

—— 駆けて行く先は銀シルバリオ・ゴスベルの福音に撃墜された、想い女おもいびとのフ
ライトコードの途切れた場所。

…金時山・太郎嶽付近。

仮にその目的があるにせよ、少年は自らの異常に気付かない。

—— 腹は裂けて腸が爛れ。

—— 左手の薬指は切断され。

—— 左耳は、無くなっている。

それは福音との戦闘で自らが相打ちとなり、堕ちた先で新たに一
戦、二戦交え—— 肉体が損壊した事を意味する。

…故に血みどろなのだ。

それにもかかわらず、少年は駆ける。

自らの命よりも大切なモノがあるから、と駆ける。

—— 馬鹿らしい。人間の為に自分を尽きさせるなど、墮落
も甚だしい。

…誰かの笑う声が聞こえた気がした。

それに、

” うるせエよ、このハゲ。”

内心、呟く。

” …それが傲慢だとか偽善だとか愚かだとか気持ち悪いとか思う
なら鼻で笑ってろ、チキンの石頭野郎。”

—— そして自分の言葉の悪さに苦笑する。

相当苛立っているのか、また怪物怪物に戻っていつているからか。

それとも—— 殺せるから、なのか。

…面倒くさい。

—— 分からない事を考えたって仕方ない。

— そう思い、思考を終了すると。

—— 携帯が鳴る。

—— 通話相手は、非通知番号。

「—— 誰だ。」

『……………』

「…この電話は——」

『盗聴は、されてない。』

「そうかよ…時間ないから用がないなら切るぞ。」

『ああっ！待って待って！…その、貴方にしか、頼めない事だから…』
たどたどしい声。

箒の声。

確かに彼女の声。

しかし違う。

——コイツは。

「お前、誰だ？」

『…それは、言えない。あえて言うなら、キミと同じってコトぐらい。

千尋、ううん——オルガナイザーG1ゴジラ。』

「お前、箒を蝕んでた奴か。」

『結果的にはそうなる。ただ、私では、もうどうにも出来ない事が、あるから——』

「勝手言うな——」

『箒を、助けて止めて、欲しいの。』

——それは、自ら生贄となる道を選んだ少女を止めたいと言イリスう怪物の真意であった。

故に、千尋も再びゴジラ駆けることを選んで——

——暗転。

——がちん。

秒針が壊れたように時間を刻む。

それは確かに、破滅へ向けて。

これは破滅への直行線。

——災いの使徒が満ち溢れ、

——柳星張が守護者として起動し、

——魔海獣が海を犯し、

——公害怪獣が毒の雨を降らし、

——破壊の王が大地を殺し、

——完全生命体が大気を溶かし、

——地球外戦闘生物が飛来し、

——虚構の荒神が現実^{世界}を焼き尽くし、

そして人類世界が破滅する、その時までの物語。

あと——147日と、5時間20分後に滅亡する世界の物

語。

世界情勢Ⅰ

時系列Ⅰ

??ゴジラⅠS時系列

◆紀元前^{????}年

??大西洋、太平洋、インド洋に第1始祖民族が降下・入植。

??現実世界より分岐、多世界並行化現象を確認。以降区別化のために現実世界を《ミズガルズ》、本分岐世界を「ホツドミミル」と暫定呼称。

◆紀元前4000年代

??大西洋にアトランティス文明、太平洋にムー文明、インド洋にレムリア文明が誕生。

??地球上の各種生物の融合生命体である守護者^{ガメラ}誕生。

◆紀元前3000年代

??アトランティス文明により人造怪獣ギャオスが誕生。

??ムー文明により人造怪獣バルゴンが誕生。

??アトランティス文明およびムー文明、武力衝突を開始。大戦に人造怪獣を投入。

??レムリア文明、自らを守る為に守護者と契約。

??守護者、「星の維持」という本能によりアトランティス、ムー文明を滅ぼす。

??レムリア文明、守護者とギャオスを模した抑止力《イリス》を生み出し最終戦争を生き延びるも環境の激変により内部瓦解し滅亡。

??守護者、自らの肉体を割いて7つの獣を世界に撒き散らす。

??守護者の肉片より『モスラ』、『バトラ』、『アンギラス』、『ギドラ』、『マンダ』、『ラドン』、『プロト・ゴジラ』が還元される。

◆紀元前2000年代

??各文明の僅かな生き残りが原始人類と接触しエジプト文明やメソポタミア文明などの高文明や天文学を構築。

??血の薄れにより第1始祖民族は絶滅。第2始祖民族（現在の人

類)がホッドミミル世界の地球における主要民族となる。

・
・
・

◆西暦1945年

??ラゴス島にて戦闘中の日米両軍が第0巨大不明生物『プロト・ゴジラ』(正式呼称・ゴジラザウルス)と遭遇。

??アメリカ軍、陸軍参謀本部に巨大不明生物の調査機関を設立。

??広島・長崎に原爆投下

??日本降伏、太平洋戦争終結

◆西暦1947年

??アメリカ陸軍参謀本部付き未確認生物調査機関を改組し、モナーク機関設立。

◆西暦1954年

??アメリカ軍、ビキニ環礁において水爆実験を実施。

??水爆実験により、第1巨大不明生物『ゴジラ』が誕生。

??第1巨大不明生物『ゴジラ』、日本上陸。

??陸上自衛隊対生物化学災害対策班設立。

◆西暦1957年

??ソヴェエト連邦、ウラル地方チェリヤビンスク州マヤーク技術研究所にて核爆発事故(ウラル核惨事/キシテム事故)発生。共産党政府は同事件を隠蔽。

◆西暦1959年

??ソヴェエト連邦海軍初の原子力潜水艦K-19就役。および原子炉暴走事故発生。

??キューバ革命により、キューバが社会主義国化。

??ソヴェエト連邦領ロシカ共和国内にて冬眠中の巨大不明生物『バトラ』を発見。

??ソヴェエト連邦ロシア本国が調査機関をニューカーク・グラードに設置しバトラを生きたままの解剖を試みる。

◆西暦1961年

2月

??ソヴェエト連邦、インフアント島にて水爆実験。

3月

??インフアント島よりロリシカ共和国ニューカーク・グラードに第2巨大不明生物『モスラ』飛来。

??ソヴェエト連邦、証拠隠滅にニューカーク・グラードを戦略核兵器で焼却し、大量のロリシカ人を虐殺。

4月

??ピッグス湾事件

◆西暦1962年

3月

??旧帝国海軍江田島特秘トッグにて戦艦大和、天城が発見される。

10月

??キューバ危機

◆西暦1971年

6月

??太平洋より、第3巨大不明生物【ガニメ】が日本領海に侵入。

8月

??先の砲撃護衛艦（事実上の戦艦）の有用性を理解したアメリカ海軍はアイオワ級の追加建造とモンタナ級の新規建造を開始。

◆西暦1972年

??アメリカ、アムチトカ島で確認された第4巨大不明生物ギャオスに対しグロメット作戦発動。

??アフリカにて第5巨大不明生物メガヌロン確認。

◆西暦1979年

??J・T・W・N・システム構築。

??陸上自衛隊対生物化学災害対策班、独立。特務自衛隊に改組。

??ソヴェエト連邦アフガニスタン侵攻。

◆西暦1980年

5月

??世界保健機構WHOが天然痘の根絶を宣言。

??韓国、光州事件。

??アメリカのセント・ヘレンズ山が噴火し山体が崩落。

6月

??セント・ヘレンズ山跡地直下にて化石化した巨大不明生物の死骸を発見。

8月

??富士山大規模落石事故

9月

??富士樹海の地質調査で休眠中の巨大不明生物発見。

??イラン・イラク戦争勃発。

10月

??アルジェリア大地震

??アルジェリア地下にて巨大不明生物と思しき振動を確認。

◆1981年

1月

??ギリシャがEC加盟。

??パラオが自治領となる。

4月

??アメリカ、初のスペースシャトル打ち上げ成功。

8月

??遠東航空103便が初めて確認された大陸間飛翔型巨大不明生物と接触し空中分解・墜落。?

◆西暦1982年

3月

??メキシコ、エルチチョン火山大噴火。

4月

??フオークランド紛争勃発。

6月

??フオークランド紛争終結。

??アルゼンチン、コモドロ・リバダビア近郊地下にて巨大不明生物と思しき振動検知。

◆西暦1983年

1月

?? ARPANETがIPに切り替わり、インターネットが開始。

3月

??米ロナルド・レーガン大統領、ソ連に対し「悪の帝国」発言。

5月

?? I R A S ・荒貴・オルコック彗星が地球から約466万kmを通過。

??アメリカ、通過中に分裂した破片内より異星起源の地球外巨大不明生物と思しきの肉片発見。

??日本海中部地震発生。秋田県を中心に大きな被害。

??モナーク機関に租借されていた砲撃護衛艦「やまと」がクエゼリ
ン島沖にて15体目の敵性巨大不明生物と会敵。これを撃破。

10月

??アメリカおよび東カリブ諸国機構、グレナダ侵攻。

◆西暦1984年

7月

??ロサンゼルスオリンピック開催。

9月

??仏領ポリネシア・ソエテ諸島にて太平洋最後の敵性巨大不明生物
殲滅。

12月

??ボパール化学工場事故発生。

??南極にて火星を起源とする隕石「アラン・ヒルズ84001」が
採取される。

◆西暦1985年

3月

??ボパール近郊にて昆虫型変異生物を確認。

??国際科学技術博覧会（つくば，85）開催。

??イラン・イラク戦争で空襲警報が鳴り響く中、トルコ航空が自国
民より優先して日本人全員を救出？

? 4月?

??ソヴィエト連邦、東カザフスタンで核実験。

5月

??バングラデシュでサイクロン被害。約1万人死亡。

???第18巨大生物トーガスが熱した海水の影響で計41の竜巻が

発生しアメリカ・オハイオ州、ペンシルベニア州、ニューヨーク州と、

カナダ・オンタリオ州を襲撃、76人死亡。?

? 9月?

???メキシコ地震発生。?

? 11月?

???日本、極左過激派による国電同時多発ゲリラ事件発生。首都圏、

大阪を初め各地で線路のケーブルが切断されダイヤが混乱。600

万人に影響が出る。?

? 12月?

???ソヴィエト連邦、アフガニスタンにて巨大不明生物を確認。?

◆西暦1986年

1月

??スペイン、ポルトガル、EC加盟。

4月

??ソ連領ウクライナ、チェルノブイリ原子力発電所核爆発事故発

生。歴史上最も重大な原子力事故と判断される。

??南大西洋およびインド洋での巨大不明生物の活動活性化を確認。

5月

??アメリカでモスボール保存されていたアイオワ級、モンタナ級戦

艦が全艦再就役。

10月

???ソ連海軍の戦略原子力潜水艦K-219が、バミューダ沖で哨戒

中、原子炉の暴走事故を起こし沈没。?

???米ソ首脳会談。アイスランドのレイキャビクでレーガン大統領

とゴルバチョフ書記長が会談。?

???アメリカ、スターウォーズ計画戦略防衛構想発表。?

◆西暦1987年

1月

?? 中国で天安門事件発生。

2月

??? 超新星 SN 1987A が観測される。肉眼で見られる超新星の発見は1604年以来。また、超新星爆発によるニュートリノが初めて観測された。?

4月

??? 国鉄分割民営化により日本国有鉄道が解散し、分割民営化により発足したJR（旅客6社・貨物1社）に事業を継承。?

5月

??? 西ドイツの19歳の青年マチアス・ルストがセスナでソ連の防空網を突破してモスクワの赤の広場に着陸。?

7月

??? 単一欧州議定書が発効。?

??? 世界の人口が50億人突破。?

??? 台湾で1949年以来続いてきた戒厳令が解除される。?

9月

??? ロスアラモス研究所で第1回人工生命国際会議が開かれる。?

? 10月?

??? 南西大西洋にて米海軍水上戦闘群が巨大不明生物と交戦。?

? 12月?

??? ロナルド・レーガン米国大統領とミハイル・ゴルバチョフソ連共産党書記長、中距離核戦力全廃条約（INF全廃条約）に調印。?

? ◆西暦1988年?

? 1月?

??? ソヴィエト連邦、ペレストロイカ開始。?

? 2月?

??? カルガリーオリンピック?

??? ソヴィエト連邦軍、アフガニスタンにて砂漠棲巨大不明生物と遭遇。1個連隊が全滅。?

? 3月?

??? 青函トンネル開通。 J. T. W. N. システムの素敵網拡大。
?

赤瓜礁海戦。 ? 中華人民共和国とベトナムが衝突。

??? イラン・イラク戦争末期のイラクで、サダム・フセイン政権下の
イラクが、クルド人が多く住む同国内ハラブジャで、化学兵器を使い
多くの住民を殺害したハラブジャ事件発生。

5月

?? ソヴェエト連邦、アフガニスタンより撤退開始。

??? アフガニスタン国境にて巨大不明生物と遭遇。 ソ連軍は核を使
用し、撤退中だった陸軍第50軍団諸共巨大不明生物を殲滅。 ?

8月

?? イラン・イラク戦争終結。

??? アメリカ、再突入駆逐艦および質量爆撃弾の開発に成功。 ?

11月

?? ソヴェエト連邦領エストニアが独立宣言。

12月

?? アルメニア大地震発生。

◆ 1989年

1月

?? 昭和天皇死去。 元号が「昭和」から「平成」へ。

?? ソヴェエト連邦、アフガニスタンからの撤退終了。

2月

?? ポーランド人民共和国、統一労働者党と反体制派の円卓会議始ま
る。

??? グローバル・ポジショニング・システムに必要なGPS衛星24
機が地球周回軌道に投入される。 ?

3月

??? 大規模な磁気嵐が発生。 カナダ・ケベック州で大停電が発生する
など地球各地で被害（1989年3月の磁気嵐）。 ?

??? エクソンバルディーズ号原油流出事故発生。 ?

? 5月?

??? 鉄のカーテン崩壊。?

? 6月?

??? 天安門事件勃発。?

??? ソ連・ウラル地方にて震源が移動する奇妙な連鎖型地震を観測。

?

??? ソ連・ウラル地方で天然ガスのパイプラインから漏れたガスが大爆発し、通りかかった列車2本が吹き飛ばされて607人が死亡する。?

? 8月?

??? ハンガリーで汎ヨーロッパ・ピクニックが開催、約6000人の東ドイツ市民がオーストリア経由で西ドイツへ亡命。?

11月

?? 東ドイツ首都東ベルリンにて、ベルリンの壁崩壊。

?? ハンガリー、ブルガリア、チェコスロバキアなどが社会主義体制を放棄し民主化。

12月

?? 東ドイツ、憲法改正に伴い一党独裁による社会主義体制崩壊。

?? ジョージ・H・W・ブッシュ米大統領とソ連のミハイル・ゴルバチョフ最高会議議長がマルタ島で会談し、冷戦の終結を宣言（マルタ会談）。

?? 米軍パナマ侵攻。

?? ルーマニア、社会主義体制崩壊。

・
・
・

◆ 西暦1992年

?? 湾岸戦争

?? ロシア連邦、ウラル核惨事／キシユテム事故の存在を公表。歴史上3番目に重大な原子力事故と判断される。

- ◆西暦1995年
- ?? 阪神淡路大震災
- ◆西暦1996年
- ?? 仏領ポリネシア・ファンガタウファ環礁核実験により数体の巨大不明生物が再度発生。
- ◆西暦1999年
- ?? ロリシカ独立戦争勃発。
- ?? ロリシカにバルゴン発生。
- ?? ロシア連邦、バルゴン侵攻によりカムチャツカ地方およびチュクチ自治区、マガダン州、サハリン州、アムール川流域を放棄。
- ?? ロリシカ、バルゴンからの防衛戦を主目的とする第1次極北戦争勃発。
- ◆西暦2000年
- ?? 東海村原子力発電所臨界事故
- ◆西暦2001年
- ?? ロリシカ、バルゴンの大規模移動沈静化により第1次極北戦争終結。
- ?? ロリシカ、国土の32%を喪失。軍は組織的には壊滅状態となり、再編の為に国家総動員体制に移行。
- ?? アメリカ、ロリシカに対して軍事同盟締結。
- ?? 9・11アメリカ同時多発テロ発生。
- ◆西暦2003年
- ?? ロリシカにてバルゴンの大規模移動が再度活性化。これに伴い第2次極北戦争勃発。
- ?? バルゴンの洋上侵攻によりサハリン州にバルゴン上陸。
- ?? 緯度50度の戦い。
- ◆西暦2004年
- ?? ロリシカ、日本と水面下で同盟を締結。
- ?? 日本からロリシカへの支援が開始される。
- ?? アテネ五輪開催。
- ◆西暦2005年

- ?? ロリシカの戦況悪化を受け日本、防衛庁を廃止。防衛省に改組。
- ?? ロシア、ロリシカの戦況悪化を受け国境線付近に核兵器を配備。
- ?? 樺太島失陥。
- ?? 第2次極北戦争終結。
- ◆ 西暦2006年
 - ?? バルゴンの想定より早い大規模移動活性化に伴い第3次極北戦争勃発。
- ◆ 西暦2007年
 - ?? 第3次極北戦争終結。
 - ?? ドイツ軍、ホムンクルス計画発動。
- ◆ 西暦2008年
 - ?? 北京五輪開催。
- ◆ 西暦2009年
 - ?? 保守第一党から民政党に政権交代。
 - ?? 第4次極北戦争勃発。
- ◆ 西暦2010年
 - ?? バンクーバー冬季五輪開催。
 - ?? 尖閣諸島問題発生。
 - ?? 民政党政権の対応に国民の不満募る。
 - ?? ドイツ軍、人工生命体^{ホムンクルス}の生成に成功。
- ◆ 西暦2011年
 - ?? 東日本大地震（3・11）
 - ?? 福島第一原子力発電所メルトダウン発生。歴史上2番目に重大な原子力事故と判断される。
 - ?? 関東・東北を中心とした東日本太平洋側地域に2347発のミサイルが放たれた白騎士事件発生（3・12事件）。
 - ?? 白騎士事件により福島第2原子力発電所建屋損壊。放射能拡散。
 - ?? 片桐光、朝倉美人の逃亡幫助
 - ?? アラスカ条約締結。
 - ?? I S 学園建設開始。
 - ?? 女尊男卑の風潮広まる。

??国内各所にて女尊男卑主義者および特定アジア諸国人による犯罪件数増加。

??国内各所にて反民政党デモ激化。

◆西暦2012年

??保守第一党、解散総選挙にて政権奪還。

??ロンドン五輪開催。

??第4次極北戦争終結。

??ドイツ軍、人工生命体試験用部隊として陸軍第108独立技術試験中隊《シユヴァルツ・カニンヒェン》設立。

◆西暦2013年

??第1回モンド・グロツソ開催。

??国内各所にて野党民政党および女尊男卑主義団体、特定アジア諸国人主催の反与党デモ発生。

??世界各地で全世代にオンラインネットワークが普及。既存メディアの陳腐化現象発生。

◆西暦2014年

??第5次極北戦争勃発。

??ソチ冬季五輪開催。

??IS学園、部分的に稼働開始。

◆西暦2015年

??第2回モンド・グロツソ開催。

??織斑一夏誘拐事件発生。

??織斑一夏、脳死状態となり、治療として篠ノ之束により半人工脳化。

◆西暦2016年

??ウクライナにギャオス発生。

??ウクライナ戦争勃発

??墨田大火災発生。

??異界より流入したオルガナイザーG1により篠ノ之千尋誕生。

??墨田大火災跡地にて大量の汚染物質（G元素）を検知。

??資金途絶によりIS学園の建設停滞。完全稼働予定日を201

9年まで延長。

?? リオデジャネイロ五輪開催。

?? 第5次極北戦争終結。

北大西洋条約機構

?? NATO、ウクライナに軍隊派遣を決定。

?? ロシアおよびベラルーシ、ウクライナ国境付近に水爆群埋設。

◆ 西暦2017年

?? G元素の調査・管理を目的に墨田区旧八広に八広駐屯地建設開始。

◆ 西暦2018年

?? ニズニイエ要塞の惨劇。

?? ベツセルング計画失敗。ダリネグルスク事件。

?? ウクライナ政府およびNATO軍、戦線を来年までにドニエプル川以西まで後退することを決定。

?? ウクライナ政府、首都機能をキエフからオデッサへ移転。

?? 第6次極北戦争勃発。

?? 八広駐屯地稼働開始。特務自衛隊、司令部を上砂駐屯地から本駐屯地に移転。

◆ 西暦2019年

?? スイエヴェロドネツク撤退戦

?? IS学園完全稼働開始。

◆ 西暦2020年

?? 第2次東京五輪開催。

?? 世界人口が80億人に到達。

◆ 西暦2021年

4月

?? 篠ノ之姉弟、IS学園入学

?? 学園守備隊・第2部隊所属設立

?? ビキニ環礁にて「ゴジラ」、活動再開。

?? リーナ、ロリシカに亡命

?? ロリシカ、第11次侵攻阻止作戦開始。

?? オキシジエン・デストロイヤー酸素破壊剤完成

?? 亡国機業保有の空母ホーネット、ゴジラにより撃沈
?? 特務自衛隊ロリシカ派遣

?? 第19次ギジガ防衛戦発動

?? 新種巨大不明生物「アンギラス」を確認

5月

?? ラウラ・ボーデヴィツヒおよびシャルロット・デュノア転入。

?? 日本、ロリシカ、樺太にて漸減作戦。

?? 第5アリーナにて重大な人身事故。

?? アフリカ大陸カメルーンにて「ラドン」覚醒、飛翔。

?? シャルロット・デュノア、スパイ行為により捕縛。

?? ラドン、米領ニューヨークに飛来、同市を壊滅させる。米軍はI

S部隊を出すも逆に全滅する。

?? 日米欧各国、IS学園の度重なる隠蔽体質への不信感から臨時国連軍を編成し警備体制強化を図るべく艦隊を派遣。

?? ベーリング海にて欧州連合極東派遣軍艦隊が「スピット・エビラ」に襲撃され、艦艇を数隻喪失。同時に出現した「マンダ」により危機を脱する。

?? 第2学園守備隊解散。同時に日英臨時合同技術試験隊に再編。

?? 日英合同でISの発展兵器、統合機兵の戦闘試験が特務自衛隊統合機兵実験集団とイギリス陸軍統合機兵試験隊の合同で開始。

?? 篠ノ之束の拠点・キャロット島がゴジラの襲撃により壊滅。

?? ロリシカのバルゴン包囲網瓦解。中露両国に大量のバルゴンが

流入。呼応するように世界各地で巨大不明生物活性化。

?? 国際連合は「第1次巨大生物人類戦争」の勃発を宣言。

?? NATO・その他西側勢力を主力とする臨時国連軍編成。

?? 臨時国連軍、NASAおよびESO、JAXAを主力とする航空宇宙軍創設。

?? ロシア、シベリアにて過飽和核攻撃漸減ドクトリンを実施。一時的な侵攻遅滞に成功。

6月

?? 篠ノ之束拠点・レッチ島が島民奪還の為に飛来したモスラ・バト

ラにより壊滅させられる。

?? I S 委員会の要請と第1次巨大生物人類戦争開戦後の各国の事情により日米臨時編成軍艦隊と欧州連合極東派遣艦隊は学園の監視レベルを下げる。

?? ロリシカ、カムチャツカ半島へ撤退開始。

?? I S 委員会の命令により臨時理事長を警備課に左遷し、警備体制を縮小。

?? ダリネグルスクにて巨大不明生物〔ビオランテ〕の活性化を確認。

?? 土星外縁衛星タイタンにて未知の発光現象確認。

?? ビオランテ、日本海を縦断し本土直下を地中海潜行、三浦半島に潜伏。

?? タツグトーナメント開催。

?? ウクライナ全土失陥。東欧および南欧東部諸国は警戒を強める。

?? I S 学園内にて変異生物〔シヨッキラス〕確認。

?? ギリシャおよびアメリカ、自国代表候補生に帰国命令。

?? 日英合同技術試験隊が十分な実戦データを記録。

?? ドイツのVTシステム不正搭載および何らかの手段で潜伏していたウイルスに制御を奪われ巨大不明生物化。これを撃破。

?? ゴジラが67年ぶりに日本再上陸。

私は好きにした、君らも好きにしろ。

まとめ回【世界情勢編】

??巨大不明生物侵攻状況

6月14日時点の勢力圏は以下の通り。

(赤・巨大不明生物の支配領域、紫・巨大不明生物に壊滅させられた地域、青：人類の支配圏)

◆アジア

ロリシカからのバルゴン流入を受け、核兵器兵器漸減ドクトリンを乱発しても尚止まらない侵攻を前にロシアはシベリアの防衛を放棄した為に、事実上シベリアは（敗残兵による集結地点となっている沿海地方とタイミル半島を除いて）完全に陥落。

中国大陸においても同様であり、東北地方より侵攻したバルゴン群とモンゴルから南下した別種の巨大不明生物の挟撃により首都北京が陥落し、さらにウイグル自治区およびチベットも中央アジアから侵攻したギャオスによって壊滅。長江以北までの地域が（大連半島と青島半島を除いて）完全制圧されている。

日本と台湾は現時点では巨大不明生物の大規模な侵攻は受けておらず、宗谷海峡を隔てた樺太でのバルゴン漸減作戦もロリシカ軍によるサハリン奪還作戦の成功によって必要は無くなった事から、今のところは平和と言える。

インドも同様に、ヒマラヤ山脈という天然の要害とパキスタンを盾にすることで比較的安定している。

だが6月13日のゴジラ上陸による千葉県館山市の被害は（大陸での被害と比較すれば些細なものであるが）日本国内には大きな影響を与えた。

さらに6月14日未明には朝鮮半島戦線において巨大不明生物が北緯38度線を突破し、韓国首都ソウルを壊滅させた為に、日本へも戦争の足音が迫っているという実情が存在する。

◆欧州

ウクライナから流入したギャオス群との戦闘が展開されており、当

初はヨーロッパ・ロシア方面への侵攻が行われたが、ロシアによるウクライナ国境の水爆による爆砕で相当数が殲滅された為にギャオス群は現在ポーランドおよびロシア・コーカサス地方、トルコ方面への侵攻を行っている。

ポーランド方面では平野部という地形が災いしギャオスの侵攻を助長。ポーランドの首都ワルシャワを陥落させた上に一部はドイツ国境付近の地域に至るまでの一帯を壊滅させるなど甚大な被害を齎している。

一方でカルパチア山脈やバルカン山脈といった山岳地帯の突破は飛行種を除いて得意ではないらしく、そこまで侵食されていない。

◆北米
アラスカ南西にて、過去にスピットエビラが上陸した事とラドンがニューヨーク市マンハッタン島を壊滅させた事を除けばほぼ無傷である。

◆南米
被害ゼロ。

◆中東
シリアにて新種の巨大不明生物が出現し、その後も砂漠地帯を中心に被害が拡大し続けており、石油危機を誘発させている。

◆アフリカ
西サハラにてトンボ型巨大不明生物が出現。
しかし出現した場所が乾燥した砂漠地帯であり、ヤゴ型の幼体と共に河川部を中心に生息範囲を広げている。

◆オセアニア
ニューギニア島にて昆虫型巨大不明生物カマキラスと爬虫類型巨大不明生物ジラが複数体出現し、一部の群れがオーストラリア東海岸を襲撃。

シドニーやキャンベラ、メルボルン等オーストラリアの主要都市を壊滅させた。

◆南極
被害ゼロ。

????????????????????
国際情勢

◆ 日本国

極東有数の列強国であり、その狭い国土に1億2800万人という人口を抱える島国であり、世界有数の人口過密国家。

ラドンによるニューヨーク蹂躪直後こそIS台頭後にあつた女尊男卑による不満が爆発したとされる大規模な暴動が政令指定都市5ヶ所で発生したものの現在は巨大生物の上陸が確認されておらず、暴動やパニックは今のところ鎮静化しており、平時と変わらない平穏さとなっている。

現在国内では今後の巨大生物の上陸を見越した避難経路の確保、万一に備えた台湾やロリシカ、パラオ、インドネシア等の国外への国民の疎開準備、要所防衛のための要塞陣地構築が防衛省、国土交通省、環境省、外務省を中心に行われており、巨大生物の迎撃準備を進めているほか、防衛省でも自衛隊と海上保安庁の共同警戒や特自がロリシカ派兵で得た対バルゴン戦の経験を経験を陸海空自衛隊および海上保安庁と共有し、それを基にすることで複数のケースを想定した対巨大不明生物迎撃ドクトリンを研究、確立化させつつある。

しかし肝心の『巨大不明生物迎撃に関する法案』が野党側が「日本の軍国主義化」として反発した為未だ制定されておらず、巨大不明生物が上陸した際に武力面での迎撃は可能といえは可能だが、それを動かす政治的判断が遅れ被害を拡大させる事と戦後80年間平和に慣れ親しんだ国民が危機に対して緩慢な事が懸念されている。

また「核焦土戦術ドクトリン」を否定しているため、いざとなればアメリカは日米安保条約を破棄して在日米軍を撤退させるのではないかと懸念も防衛省、外務省の間で囁かれている。

アメリカの防衛に依存してきたため、日本に一方的・不都合な政策を押し付けてきたとしてもアメリカとの協調を示さざるを得ない

め、事実上【彼の国の属国】となっている。

さらに、巨大不明生物以外にも政権転覆を狙う野党側改革政党、諸外国との関係など、巨大不明生物以外にも仮想敵としての国家が近隣に存在し、巨大不明生物だけでなく一部の人類も敵というのが現実である。

また、巨大不明生物戦においてISは火力不足である為、米国合衆国本土でIS台頭後に不要とされ在庫処分を待つ装備の処分地として大量の戦車や装甲車、艦艇が在日米軍基地に配備されていたが、ラドンによるニューヨーク蹂躪後、改めてそれらの兵器による必要性に迫られた為、在日米軍の余剰化していた戦力は現在は撤退ないしロリシカに転属させられたが、第2次日本本土防衛戦における対ゴジラ戦にて甚大な被害を出した為に再度召集されている。

2021年6月14日時点で、激変する国際情勢に対してようやくまともに対応可能となるなど、対応の遅さを指摘する声が多い。

現時点では、日本海を挟んでユーラシア方面への警戒を強めている。

しかし日本には非常事態に対応可能といえる環境が全く整っていないと言うわけではないが、軍事行動となると、専守防衛・憲法9条という要因により全てが手遅れになってからでなければ行動出来ない為、現時点では法整備が完了するまで海外派遣部隊（国連軍）としてしか自由度の高い作戦行動が望めないという問題を孕んでいる。

だが一方で、打撃戦力として使用可能である「やまと型」護衛艦の追加建造や、国内各所に防衛要塞を構築している他、2016年の墨田大火災後に回収された3式機龍や90式メーサー殺獣光線車の解析によりメーサー車の強化やEOSの発展型である戦術機の配備などで飛躍的に装備を充実化させた特務自衛隊をより巨大不明生物戦に特化した本来の運用目的である対生物戦を司る第四の自衛隊として、【対特殊生物自衛隊（特生自衛隊）】へと再編・改組されるなど、僅かではあるが確実に前進しつつはある。

●防衛組織

??陸上自衛隊

??海上自衛隊

??航空自衛隊

??特生自衛隊（旧特務自衛隊）

● 関連情報

??特務自衛隊

1954年のゴジラ上陸（第1次日本本土防衛戦）以降にモナーク機関指導のもと設立された陸上自衛隊B・C・S・T^{対生物化学特別班}を祖とする、第四の自衛隊。

巨大不明生物が隠匿されていた時期は試作メーサー車を運用する部隊として特務自衛隊の名称で活動していた。

またIS台頭後も国内組織のパワーバランス崩壊の抑止力として機能していた。

2016年の墨田大火災跡地に漂着していた90式メーサー殺獣光線車の残骸や三式機龍改、G細胞を回収・研究することにより、自らの保有していた装備群の強化に成功している。

その後はロリシカ派兵を実施するなど実戦経験を蓄積すると共に、今後巨大不明生物戦が頻発するであろうことを予見した為に、アメリカやドイツ、イギリスに保有装備に関する情報を提供した他、G元素由来の技術を用いてメーサー車や三式機龍の他に、新概念兵器である戦術歩行戦闘機や統合機兵の開発に乗り出している（その一方で、試作オキシジェン・デストロイヤーなどのような大量破壊兵器を生み出してしまいう事も少なくなく、封印処理が施されたモノも多数ある）。

巨大不明生物の存在が露呈し、67年ぶりのゴジラ上陸（第2次日本本土防衛戦）が発生した後にはより積極的な巨大不明生物迎撃を想定した《対特殊生物自衛隊》に改組された。

??特生自衛隊（対特殊生物自衛隊）

巨大不明生物の存在が露呈し、67年ぶりのゴジラ上陸（第2次日本本土防衛戦）が発生した後に、積極的な巨大不明生物迎撃を主目的として特務自衛隊を改組して創設された組織。

「特生」とは「対特殊生物」の略称であり、正式名称は「対特殊生物自衛隊」。特務自衛隊時代の略称である「特自」とも呼ばれる。英文略記号は「JXSDF (Japan Counter-Xenomorph Self Defence Force)」。

あくまで「巨大不明生物戦用の実力」であるため、通常の防衛出動（対人類戦が前提である軍事的行動に於ける戦闘行為）には非常事態や特異な状況でなければ通常、参加出来ない（これは元より特務自衛隊時代より専守防衛としては過剰であったメーサー車に対する国内外からの懸念を解消する為の処置である）。

だが逆に、対巨大不明生物戦を前提とした（有害鳥獣駆除に基づく）防衛出動であれば、陸海空自衛隊・在日米軍・国連軍など多方面からの全面的な支援を受けることは可能となっている。

指揮系統等は特務自衛隊時代の流れを引き継いでおり、司令部は東京都墨田区の八広駐屯地に所在する。

また他にも、非常時に臨時司令部として機能する八王子駐屯地や千葉県・習志野駐屯地などの施設が存在する。

？ 隊員数は3万4,098名で、主力装備は18式メーサー殺獣光線車、73式小型車、97式戦術機、試製21式統合機兵、3式機龍など。？

実働部隊は特定の管轄区を持たずに機動的に出動する「第一機動団」、東本州を管轄する「第二機動団」、九州および中国地方を管轄する「第三機動団」、近畿および四国地方を管轄する「第四機動団」、北海道を管轄する「第五機動団」、沖縄を管轄する「第六機動団」から成っている。他にもメーサー殺獣光線車を運用する第1メーサー群（第1―4メーサー隊で構成）、機龍を運用する機龍隊／第1機龍隊、巨大不明生物の動向に対する早期警戒を任務とするJ・T・W・Nシステムを運用する分析中隊、その他各種支援部隊が組織されている。

??八広駐屯地

東京都墨田区に所在する、特務自衛隊（現・対特殊生物自衛隊）の

司令部が置かれた駐屯地。

本来は2016年の墨田大火災跡地にて確認された汚染物質（G元素）の封印を目的として建造された施設。

その後はG元素および漂流物の研究の舞台となり、特自の最重要拠点となった。

現在はそれらに追加の設備が後付けされる形で建造された。

地上には全長2キロ級の滑走路が1本とSSTOの打ち上げを可能とするリニアカタパルト（旋回式台座型）1基、通信施設や格納庫、管制塔などが置かれており、3式機龍格納庫や作戦発令所、各部門研究施設、コンピュータ室、G元素炉心等主要施設は防諜・防衛の観点から全て地下に建造されている。

なお、本施設は重要機密保持の為地上での移動を極力避けるべく八王子、つくば、習志野、箱根などに所在する特自施設と地下リニア路線（物資搬送・人員輸送用）で接続されている。

この地下リニア路線には2車線道路が並走しており、巨大不明生物出現時にグリッドロックが予測される首都圏を迅速に横断、防衛線に布陣する為の部隊移動用としても活用される（どちらかといえばこちらが本来の運用方法である）。

（八広駐屯地上空写真からの区画割り画像）

??八王子駐屯地

特務自衛隊（特生自衛隊）の駐屯地。

1955年竣工。

八王子市石川町に所在する、八広駐屯地完成前まで特自の司令部が置かれており、現在でも非常時に臨時司令部として機能する為の設備が整えられている。

また、建造当時が冷戦時だった事もあり、核攻撃に備えて主要施設が地下に建造されている他、多摩川を挟んで存在する陸上自衛隊立川駐屯地、在日米軍横田基地との円滑な移動を実現するべく地下トンネ

ルで接続されている。

??分散首都

かねてより東京への中央集権化と一極化に対する脆弱性を鑑み、非常時に備え各省庁の機能を関東各地に分散させ、非常時における政治の空白を補完する存在として開発された。

1980年代時点では東京都八王子市、茨城県つくば市が分散首都となっていた。

冷戦終結と共に本案件は用無しと考えられたが、東日本大震災と白騎士事件を経て再燃。

地方創生も兼ねて新たに神奈川県箱根町、東京都立川市が分散首都に指定された。

非常時に首都機能の役割を担うだけでなく、平時から東京都首都特別区（東京23区）のバックアップに当たっている。

??琵琶湖運河

日本海―太平洋間の迅速な移動を目的に第二次世界大戦中に部分的に建設された巨大運河。

戦時中に破壊された事や戦後の高度経済成長により、琵琶湖運河は手付かずの無用の長物と化していた。

しかしユーラシア戦線の戦況悪化を前に、日本政府は本土防衛計画の修正を開始。

それに伴い、巨大不明生物による本土進攻への対応を開始。琵琶湖運河にも再び脚光が浴びせられ、浚渫工事を着工。

大阪湾・伊勢湾―琵琶湖―敦賀湾を結び、海上自衛隊が保有するきい型護衛艦や30万トクラスのタンカーも通行可能とするため再整備工事を実行中である。

完成すれば、太平洋から日本海方面への迅速な兵力展開が可能となると同時に、本土防衛戦時には運河そのものを防衛線として活用出来るなど、国土防衛の上で非常に重要な拠点となる。

現時点では伊勢湾方面と繋がる運河は完成に時間がかかるが、大阪

湾―敦賀湾間の運河は7月上旬中に再整備が完了する見通しである。

?? J・T・W・N.
日本本土領海警戒網

EP―35に登場した、巨大不明生物の本土侵攻を事前に察知し情報を見極める、全長数千キロにもおよぶ広大な監視網から成る対巨大不明生物専門の早期警戒システム。

1971年・太平洋方面の日本領海内に世界で3番目の巨大不明生物が侵入した事件(公式にはソ連の原子力潜水艦による領海侵犯とされている)が原因である。もし殲滅が間に合わず、当時東西冷戦と最前線であった日本に怪獣を上陸させるという事は、東側に自衛を名目に日本への核攻撃の口実を与える事と同義となってしまう、最悪の場合全面核戦争勃発さえ起こり得る事態であった。

その最悪の結末を回避し、より確実に安定した迎撃を取るべく行われたのが島国である日本列島を囲むように張り巡らされた海底ケーブルや領海内海峡間を通る海底トンネル上部への全周囲アクティブソナー併設等の大掛かりな計画のもと、三重の索敵網から成るJ・T・W・N. は構築された。

??洋上邀撃戦術ドクトリン

四方を海に囲まれた島国であるという点と、国土の70%以上が山岳地帯であるという地理的要因、憲法9条の都合上軍事目的の致し方無い犠牲コラテラルダメージが認められない等の状況下で国土を防衛する為に編み出された戦術。

一般船舶を除けば比較的民間人が皆無と言える洋上(自国領海内)であれば、比較的自由度の高い防衛行動が可能である為、対人・対獣戦を問わず自衛隊の作戦行動はこの戦術が前提として成り立っている。

??総合邀撃戦術ドクトリン

洋上邀撃戦術ドクトリンが失敗し、(人類・巨大不明生物問わず)敵または敵に準ずるものが上陸した際に防衛行動として発動する戦術。

発動条件が住民の避難完了が絶対条件であることや内閣の法的根拠に基づく決議が求められる為に即応性が極めて低い。

だが発動されれば、陸上自衛隊が主軸となつて作戦が展開され（対巨大不明生物戦であればここに特生自衛隊も加わる）、それらを支援する形で航空自衛隊、海上自衛隊（場合によっては在日米軍も参加する）が参加し、全方面からの実力投入をもつての国土防衛が可能となる。

また、「山岳地帯での防衛」・「河川沿岸部での防衛」・「海岸地域での水際防衛」等多岐に渡るパターンが想定されている。

?? I S 学園

日本の国立教育機関。

白騎士事件後、I S の教育を目的として千葉県房総半島南端沖の人工島・夢見島に国連主導のもと建造された学園であり、自治権を持つ、事実上の国連租借地。

E P - 35 から E P - 40 にかけてのゴジラ上陸と変異生物によつて壊滅的被害を受け、第2次日本本土防衛戦時に敢行された在日米軍の燃料気化爆弾と白リン弾（新型焼夷弾）による空爆によつて完全破壊された。

6月14日時点ではI S 学園の実態や、I S 委員会が日本政府や国際原子力規制委員会に無許可で原子力発電所を建設していた事などから本格的に日本政府および国連の監視チャンネルを用意するべく独立自治権を剥奪。国連管理下の施設に移管される予定となっている。

?? マスメディアと女権団体

ユーラシア大陸が世紀末的状态にありながらも、日本ではその実態は報道されていない。

これは大陸においてI S 配備によつて軍縮が行われた国家群の度重なる大敗がこれ以上知れ渡ること、自らの権力の形骸化を回避したい女性利権団体が圧力をかける事で事実上の情報統制を敷いてい

る形となっている。

その為、最前線国家になりつつある現在でも日本国内では大した危機感を持つ国民は少ない。

しかし一部メディアの働きかけやSNS等で情報が浸透しており、情報統制はもはや機能せず、更にゴジラ上陸に伴う第2次日本本土防衛戦によって完全に無意味となった。

??九州全島疎開令

6月14日未明、朝鮮半島戦線38度線の陥落を受けて（沖縄や奄美諸島を除く）九州全域に発令された緊急避難勧告。

対馬・北九州地域の住民を優先的に中国地方や四国地方に疎開させるという内容であった。

??食糧生産プラント

ユーラシア大陸の戦況が悪化の一途を辿る中、他国からの輸入に頼って来た日本国内で食料不足問題が発生する可能性を危惧して開発された、海中の藻類・プランクトン類から合成食品を生成するプラント。

：味はともかく、食料自給率の向上を促すことは事実である。

そのため現在最も合成食料の素となるプランクトンが大量に生息している東京湾・広島湾・伊勢湾・松島湾・根室湾にて運用を開始している。

??第1次日本本土防衛戦

1954年のゴジラ上陸時における自衛隊による迎撃戦の名称。

結果として大敗であり、東京都心部は再度焦土と化した。

また、自衛隊が防衛に当たっている裏では在日米軍による「全面核戦争回避を目的とした」放送設備の破壊工作による情報統制と記録した媒体の強制徴発が行われ、巨大不明生物の存在露呈までは「毒ガスと爆発物を用いた極左勢力による大規模テロ」として処理されていた。

その為当時の記録は数える程しか残されていない。

：特務自衛隊の前身である、陸上自衛隊生物化学対策特別班（BCST）設立のきっかけともなった。

??第2次日本本土防衛戦

2021年6月13日のゴジラ上陸時に発生したIS学園と国連軍、自衛隊による迎撃戦の総称。

IS学園→館山市相浜→館山市都心部にかけてゴジラが侵攻。

やまと型護衛艦2隻による艦砲射撃を除いて攻撃による効果は認められず、最後はビオランテの横槍でゴジラ共々館山湾から太平洋へ没することで事態は収束した。

この戦闘で各軍はIS 161機、機械化歩兵装甲49機、地上車両36台を喪失。一般人を含めた犠牲者は推定1000人。被害総額に至っては9兆3036億円（単純計算で平均的な台風・水害21万回分、平均的な大規模災害9回分の被害総額）に昇るとされている。（その内の1兆6100億円はIS合計の被害総額、5兆5260億円がIS学園の被害総額であり、ISと同施設にどれだけの予算がかけられていたのかがよく分かる。）

なお6月14日時点では未だに2体の巨大不明生物は確認できておらず、相模トラフおよび房総半島沖、浦賀水道にて搜索中である。

◆アメリカ合衆国

ラドンによる攻撃でニューヨークを蹂躪されたが、極めて巨大不明生物の被害に遭にくい位置にある為、後方支援国家として機能す

る。

基本国連の命令はアメリカによるものである事が多いが、それは【世界の警察】として人類の支配する世界の覇権を握り、人類世界の崩壊後もそれを誇示していくという意味が見え隠れしている。

自国中心主義ではあるが、まともに破滅後の世界を見据えていないかと言うとそうではなく、どのような防衛ラインを構築するかなどの計画を既にいくつも編み出している。

また、CIAとNSAを統合・再編した情報軍をもって亡国機業を殲滅した他、国外各地に駐留する統合軍を逐次戦線に投入、世界の50%を占める豊富な海軍力を生かして世界各国に迅速に展開するなど、人類防衛の主力を担い、多方面で人類に尽力している。

●国内の軍事組織

??アメリカ陸軍

??アメリカ海軍

??アメリカ空軍

??アメリカ海兵隊

??アメリカ情報軍

??アメリカ統合軍

??アメリカ沿岸警備隊

??アメリカ航空宇宙軍

●関連用語

??統合軍

アメリカ統合参謀本部隷下の軍隊。

? 各軍種が高度・専門化した現代の軍隊において、作戦行動の際に軍種によって指揮系統が分かれることによって作戦の阻害要因(縦割り)が生じる事態を懸念して、軍種を超えた統合司令部を設置し、アメリカ軍は2つ以上の軍種を地域別・機能別に統合した統合軍を編成・設置している。?

2021年時点では6つの地域別統合軍および3つの機能別統合軍がある。なお、2021年時点でこれら統合軍と同格であり、1軍種で構成された特定軍と呼称される部隊も存在する。

《管轄地域別》

- ?? アメリカ北方軍 | 北米担当
- ?? アメリカ中央軍 | 中東担当
- ?? アメリカアフリカ軍 | アフリカ担当
- ?? アメリカ欧州軍 | 欧州担当
- ?? アメリカ太平洋軍 | アジア・太平洋地域担当
- ?? アメリカ南方軍 | 中南米担当

《機能別》

- ?? アメリカ特殊作戦軍 | 特殊作戦担当
- ?? アメリカ戦略軍 | 核兵器・宇宙軍を統括
- ?? アメリカ輸送軍 | 戦略輸送を担当
- ?? アメリカサイバー軍 | サイバー戦を担当

?? アメリカ航空宇宙軍

アメリカ戦略軍隷下の軍隊。

既存の宇宙軍同様、衛星やロケットの打ち上げ・管理等を行うが、それ以外に再突入駆逐艦（戦闘型スペースシャトル）による地上への質量弾を用いた軌道爆撃を実施するなど、前線に立つこともある。

6月14日時点では、オーストラリアへの巨大不明生物漸滅・および殲滅戦に本軍が大きく貢献している。

?? 世界最大の海軍力

アメリカ軍は世界の50%を占める世界最大の海軍力を保有しており、それらを世界各地に展開させ、各地の支援に回っている。

?? アメリカ情報軍

巨大不明生物という敵と対峙する為にアメリカが思案した事は、同じ人類同士で殺し合う環境の排除。即ち全人類が団結可能とする土俵作りであった。

その布石として、諜報機関であるCIAとNSAを解体・統合。《アメリカ情報軍》として再編することで亡国機業や女尊男卑系組織、篠

ノ之束のような人類種にとってのガン細胞を早期に殲滅する役割を担っている。

?? 移民への兵役の義務

かねてより、移民によって成り立って来た国家であるアメリカだが、ユーラシア大陸の戦況悪化に伴う膨大な移民・難民流入によって急激に治安が悪化。

その対策として永住権獲得の為に兵役の義務に就かせるという法律を制定した。

一見非情なものではあるが、イラク戦争やアフガニスタンで多くの自国の兵士が犠牲となった経験やこれ以上自国民に犠牲が出る事を回避することを考えての事：即ち自国を優先するという国家運営の上で初歩的対応を取ったに過ぎない。

??? マウント・ウエザー緊急事態指揮センター？

アメリカ領バージニア州に位置する施設。

核戦争勃発の危険が高かった冷戦中、当時のアメリカ合衆国大統領であるドワイト・D・アイゼンハワーの命令で《政府存続計画》に基づき作られた、政府高官や軍事指揮官の生き残りを核攻撃や放射能汚染から守るためのシエルターでもある。

アメリカ合衆国連邦緊急事態管理庁(Federal Emergency Management Agency、略称：FEMA(フイーマ))の司令部でもあり、現在はモナーク機関シアトル本部と連携して対巨大不明生物戦に対応している。

??? シヤイアン・マウンテン空軍基地？

アメリカ空軍の基地の一つ。コロラド州コロラドスプリングス近郊にあり、冷戦期には北アメリカ航空宇宙防衛司令部(NORAD)の地下司令部が所在した場所として知られていた。2006年以降は待機保管状態にあったが、巨大不明生物出現に伴い現役復帰。

アメリカおよび国連の航空宇宙総軍司令部が置かれている。

??国際連合本部の移転

国際連合本部は現在、ラドンのニューヨーク襲撃によって都市機能が壊滅状態に陥ったニューヨーク市マンハッタン地区より、カナダ領バンクーバー市に部分的な移転作業が始まっている。

??ニューヨーク攻防戦

EP-17にてマンハッタン島を襲撃したラドンとアメリカ海軍IS部隊による戦闘。

結果としては迎撃に出た《銀の福音》部隊の壊滅による大敗とラドンの離脱による形で終結。マンハッタン島の都市機能は壊滅し、犠牲者は300万人に登ったという。

??海岸線防護壁

アメリカ沿岸部に築かれた防衛システム。

「グレートウォール計画」によって考案されたモノであり、海岸に面した土地に厚さ25メートルもの耐爆コンクリートの壁を建造し、接近する巨大不明生物をそこで迎撃することで侵攻を遅滞化し、その間に沿岸部に戦力を展開し上陸を阻止するという内容である。

だが大陸全てを取り囲む事は不可能である為、主要拠点の防衛用に建造されている。

現時点では「アラスカ防護壁」・「シアトル防護壁」・「フロリダ防護壁」・「ノーフォーク防護壁」が築かれている。

◆欧州連合

ドイツやイギリス、フランス、イタリアなど、文字通り（衛生中立

国のスイスを除く）欧州各国の国家からなる組織であり、NATO（北大西洋条約機構）の指揮下にある各国の軍隊から成る欧州連合軍を持つ。

以前までは欧州共同IS開発計画「イグニッション・プラン」を推進していたが、巨大不明生物による侵攻で今はそれどころではなくなっている。

欧州連合本部はベルギー・ブリュッセルにあるが、欧州大陸の戦況悪化に備えて一部はイギリス・ベルファストに移転している。

（わざわざ島国のイギリスに一部とはいえ本部を置いたのはあくまで噂ではあるが、戦勝国であるのにも関わらず敗戦国であるドイツや古くから関係の悪いフランスに従うことに反発し欧州連合から脱退されることを防止するため——という、黒い噂が囁かれている。）

外交上では大半の国家がロシアと対立気味であるが、シベリアからの天然ガス提供に頼らざるを得ない現実があったが、ロシアのシベリア撤退戦で天然ガス供給パイプが破断し、ガスが提供されなくなったために経済的に苦境に立たされている。

現在は欧州連合軍の一部余剰戦力をIS学園警備という名目で極東派遣軍を日本に展開しているが、ウクライナ戦線の全面瓦解により予備戦力の緊急帰還召集を開始している。

またウクライナ陥落と同時に、ロシア・ベラルーシ連合軍がウクライナ国境そのものを水爆で爆砕。これが原因で巨大不明生物群は西欧諸国に殺到し、膨大な数の犠牲者と水爆による被曝者を出した。

2021年6月時点では、欧州連合軍はドイツ軍やイギリス軍、在欧アメリカ軍を主力として、ヴィスワ川やオーデル・ナイセ川、ドナウ川などの河川部や、カルパチア山脈およびバルカン山脈などの要塞化した山岳部を利用した遅滞防御戦を展開している。

だが遠くない未来に欧州大陸が陥落することは明白であり、西欧諸国は東欧諸国が苛烈な防衛戦を展開している事を利用し、生活基盤と工業生産拠点の移転を開始している。

一方、欧州大陸の陥落を食い止めるべく、イギリスのドーバー基地

群やマンセル大要塞、ドイツ北西部およびベネルクス三国から成るノイエスIIジークフリート要塞線をはじめとした大規模要塞施設の建造も開始されている。

◆ドイツ連邦共和国

欧州連合の一端を担う有力国家であると同時に、ロシアに次ぐ欧州第2位の陸軍力を有する、中欧最強の陸軍国でもある。

ウクライナ戦線に出兵し、多大な戦果と膨大な犠牲を払いながらもウクライナ防衛による欧州大陸の安寧に従事していた事から対巨大不明生物戦に精通しており、最も高い練度と完成された対巨大不明生物ドクトリンを有している。

また、2017年から巨大不明生物の侵攻という事態を予見していた為に、当時よりフランス、ロシア等諸外国からの非難を浴びせられながらも軍拡に踏み切った事が功を制し、欧州の中で最も対巨大不明生物戦に耐え得る戦力を保有している。

ウクライナ陥落後の現時点では、巨大不明生物の侵攻に伴い、生産拠点をアメリカ・ミシガン州エセックスヴィル、北アイルランドの租借地に政府機関を移転中であると同時に、最前線である東欧諸国への兵力派遣と、沿岸部に於ける揚陸艦を用いた避難民移送作戦、欧州主要防衛線であるオーデル・ナイセ川防衛線とノイエスIIジークフリート要塞線の整備を行なっている。

：非公式情報であるが、旧特務自衛隊（現・特生自衛隊）からの技術提供を受け、「メカゴジラ」なる兵器をイギリスと共同で2機建造しているとの情報もある。

●軍事組織

??ドイツ陸軍

??ドイツ海軍

??ドイツ空軍

??ドイツ航空宇宙軍

◆イギリス

正式名称、グレートブリテン北部アイルランド連合。
ベルギーからEU本部の機能を一部移転されている。

現在はウクライナ戦線への派兵や豊富な海軍力を活かした北海防衛線の構築に尽力していたが、他の欧州各国と同じくロシアからのガス供給途絶により経済が低迷している。

そのため「イグニツション・プラン」を一時棚上げし、新たな発電システムと防衛ライン構築に梶を切る。

ウクライナ陥落後はEU本部機能の半分近くが移転され、EU第2本部がベルファストにおかれた事とベルギーEU本部の発言力低下によって事実上の欧州連合宗主国と化し、欧州全域の経済と政治の中心地となったと言っても過言では無い。

2021年6月時点では、在独イギリス軍を中心とした陸軍戦力と、豊富な海軍力を活かしたバルト海や地中海沿岸部での防衛戦に参加している。

●国内の軍事組織

??イギリス陸軍

??イギリス海軍

??イギリス空軍

??イギリス海兵隊

??イギリス航空宇宙軍

◆フランス

欧州連合の一端を担う国家のひとつ。

「イグニツション・プラン」においてデユノア社が不正を行っていたため、代表者を逮捕し会社はフランス政府が即時に買収、国営化した。

本来ならばデユノア社は解体されるところだが、破滅後の世界を見越して欧州各国の兵器製造ラインとすることと、ロシアからの天然ガス供給途絶による経済低迷と失業者増加を防ぐ事と、アフリカに自力防衛させる為の輸出用である。

だがウクライナ陥落後、主戦場となっているポーランドやドイツより西方に位置するにも関わらず本土防衛を早々に断念しており、東欧諸国を盾にする形で生産拠点と一部政府機関を海外領土やカナダ・ケベック州、アルジェリア沿岸部に移転しているというのが現状。

●国内の軍事組織

??フランス陸軍
??フランス海軍
??フランス空軍
??フランス航空宇宙軍

◆ウクライナ

2021年6月上旬に激増したギャオス陸棲種と飛翔種の猛攻に耐え切れず、ついに全土を失陥。

全人口の78%が犠牲となってしまう。

現在はギリシャ領中央ギリシャ地方エヴイア県エヴイア島および北エーゲ地方レスヴォス県レスボス島に租借地を置き、同租借地に亡命政府を含む国家そのものを移転している。

●国内の軍事組織

??ウクライナ陸軍
??ウクライナ海軍
??ウクライナ空軍

◆ポーランド

2016年のウクライナでのギャオス出現以降、ドイツやバルカン諸国と共同でウクライナでの戦闘に参加していた国家。

豊富な陸軍力を生かした戦線維持を担っていたが、ウクライナ陥落後に戦線を突破されてしまい、首都ワルシャワが陥落。

これに伴いポーランドは政府機関をイギリス・ロンドンの駐英ポーランド大使館および記念駆逐艦ブリスカヴィカに移管。自国民救出に尽力している。

??ポーランド陸軍
??ポーランド海軍
??ポーランド空軍

◆北欧理事会

北ヨーロッパに位置する各国家の政府・議会による協調と協力のため、第2次世界大戦後にスカンジナビア三王国が中心となって結成された国際機関。

北欧理事会の加盟国は、5ヶ国3地域。フィンランドと地理的・民

族的・文化的に近いバルト三国もオプザーバーとして参加している。
2021年6月時点では、軍事組織である【北欧理事軍】を設立し、北ヨーロッパ一帯の防衛に尽力している。

●関連用語

??ドイツの軍拡

ドイツは東西冷戦終結とIS台頭以降、軍縮傾向にあった。

しかし2016年のウクライナにおけるギャオス出現により将来的にウクライナ、延いては東欧、最悪ヨーロッパ全土が陥落する可能性を鑑み、東欧諸国との連携強化と防衛戦力拡充を目的に軍拡に全面的に方針転換。

予定では2020年までにバルカン山脈、カルパチア山脈、ビスワ川、ビエブジャ川、湖畔地帯を利用した欧州防衛ラインが完成する筈だった。

だがこれに対し、「ナチスと同じ事を繰り返すつもりでいる」というフランスおよびロシアからの政治的圧力により、軍拡は大幅に遅れることとなる。

再び軍拡が軌道に乗ったのはウクライナの戦況が絶望的なまでに好転不能となった2019年であり、その頃になると当のフランスおよびロシアもドイツの軍拡を支持していたがもはや後の祭りであった。

現在は最善を尽くすべく、ギリギリまで拡充が行われた部隊をポーランド撤退支援作戦に投入している。

??オーデル・ナイセ要塞線

首都ベルリンと国土防衛の為に、ポーランドとの国境であるオーデル川・ナイセ川流域のドイツ領内に展開された要塞陣地群の総称。

だが未だに未完成の区画が多く、防衛は厳しいと言われている為、急ピッチで建設が進められている。

??ノイエスIIジークフリート要塞線

ドイツ軍の要塞。

ドイツ領西部・エルベ川河口からハルツ山地、エルツ山脈、フオーゲスベルク山地、ライン川に至る、半円周状の要塞線。

本要塞線は非常時に臨時首都を置く予定であるボンおよびデュッセルドルフの安全を確保することと、オーデル・ナイセ要塞線が崩壊した際の保険として築かれた、冷戦時代の設備を流用しており塹壕陣地や野砲陣地程度のものから核シェルター並みのもので規模に差こそあるが総勢115個もの要塞陣地が展開されている。

??カルパチア・バルカン防衛線

峻険なカルパチア山脈とバルカン山脈の地形を利用した防衛線。

ルーマニア、ハンガリー、ブルガリア、チェコ、スロバキア等複数の国家による防衛体制によって支えられている。

??ウクライナの航空機生産

国土を喪失し、国家基盤をエーゲ海諸島部やエジプト沿岸に移転したウクライナであるが、租借地設営を可能とした背景には、旧ソ連時代に超大型輸送機開発を数多く行なったアントノフ社の存在がある。

安価かつ大量の物資・人員輸送を可能とする機体を求める声は各国から上がっており、これを可能としたのがアントノフ社である。

同社は本土から北米および北アフリカに工場を移転し、機体の生産と各国への輸出を行うなどウクライナの経済・政治的影響力と人類勢力の輸送システムに従事している事から国連からも一目置かれている。

??テムズ川河口要塞基地群

イギリス領テムズ川河口に築かれた欧州連合軍の要塞基地群。

ロンドンIIブリタニア空港とマンセル大要塞から成っており、イギリス最大級の基地となっている。

??ユーロ・トンネル

英仏海峡海底を走る、海底トンネル。

後述のダンケルク作戦にて避難民移送手段として活用されている。

??スヴァールバル世界種子貯蔵庫

ノルウェー領スピッツベルゲン島に所在する、世界規模での食料不足と巨大不明生物による大陸での植物の大量絶滅に備え、各種作物の種子を貯蔵している施設。

??スルツエイ島

アイスランド最南端に位置する火山島。

巨大不明生物〔トーガス〕の生息地域でもあり、島より周囲4キロ圏内は立ち入り禁止となっている。

??ポーランド撤退支援作戦

ウクライナから侵攻したギャオスによって危機的状态に晒されたポーランドから政府および国民の撤退を支援するべく実施された国際規模での作戦。

??ダンケルク作戦

ポーランド撤退支援作戦と同時期に発動された、将来的に予測される欧州大陸陥落を見据えて実施した、欧州各国の政府機関・生産拠点・国民・文化財をブリテン島やグリーンランド、南北アメリカ、アフリカ、アジアに退避させる為の脱出作戦。

◆ロシア連邦

ロリシカとの国境であったレナ川国境線をバルゴンに突破され、シベリア高地において地形を利用したISによる間引き戦と核焦土戦

術による撤退戦を行いながらエニセイ川、オビ川に河川砲艦を多数配備した2重の防衛線、さらにウラル山脈にヨーロッパ・ロシア防衛のために置かれた隣国カザフスタンと共同の「ウラル・カザフ絶対防衛線」を敷いている最中であつたが、想定を上回る侵攻速度にシベリアは陥落したと同義になつてしまい、さらにウクライナのギャオスも活性化。

2021年5月中旬にはオビ川を地中侵攻で突破・浸透された事でカザフスタンが陥落し構築中であつたウラル・カザフ要塞線は瓦解。

現在は首都モスクワを守備する為にウクライナ国境を水爆で爆砕・海峡化した他ヴォルガ川に戦線を構築し、核の使用と物量を用いた防衛戦を展開している。

??国内の軍事組織

- ・ロシア陸軍
- ・ロシア航空宇宙軍
- ・ロシア海軍
- ・ロシア戦略ロケット軍
- ・ロシア空挺軍

●関連用語

??不足するモノ

現在ロシア政府は不足する装備と人員、資金の確保に努めている。
∴それは、日本政府に対して「不法占拠している北方領土を（ロシア領として）売却する」事で軍資金を得ようとする程に。

??欧州からの不信

首都防衛の為とはいえ、ウクライナ国境を水爆で爆砕・海峡化した為に欧州諸国が被曝したことから、欧州諸国からは批判的な目で見られている。

??食料問題

元より肥沃な土地が少ないロシアはウクライナ近隣地方での生産や輸入に頼っていたのだが、ウクライナ陥落による疎開と欧州諸国か

らの事実上の対立から食料難に陥ると推測されている。

非公式な発表によれば、来年度までに8000万人以上が餓死するという情報も存在する。

??内部対立

現在ロシア政府内では、自国防衛を絶対とする徹底抗戦派と欧州の指揮下に下ることによって国民の支援を受けさせようとするユーロ協調派が存在する。

現時点では徹底抗戦派が圧倒的に優位であるが、ユーロ派は避難民の支援をしながら国家機能の一部を暫定的にアイルランドに移転を始めるなど地道に動き始めている。

??核の冬

ロリシカに流入したバルゴン群に対する対応として用いられた戦略核兵器の乱発によって引き起こされた大陸規模の寒冷化現象。

特にシベリアにおける影響は甚大であり、6月14日時点で気温は夏であるにもかかわらず、マイナス25度を下回る極寒の環境となっている。

◆ロリシカ共和国

カムチャツカ半島と北部のチュクチ自治区および西部のマガダン州、飛び地として樺太と北部沿海州の5つの地域からなる1995年に台頭した新興専制民主主義国家。

1995年からバルゴンとの戦争に突入し、国連からはバルゴンの存在を隠匿する為の肉壁として扱われていた。

さらにバルゴンの存在が漏れないように内戦を装い、バルゴン関連については共産圏時代同様の厳しい監視体制が敷かれていた（現在は

巨大不明生物の存在認知により緩和)。

首都はアナデイリに置かれていたが、現在はカムチャツカ半島南端に位置するペトロパブロフスク・カムチャツキーに遷都しアメリカや日本の支援のもと、抵抗を続けている。

なお、ロリシカ共和国に住む国民は自らをロリシカ人と名乗っているが、ロリシカ人という人種は地球上には存在しない。

正確に言えば、ロリシカという地名に基づいて名乗っているのみであり、実態は白系ロシア人もしくはウクライナ人、ウクライナ系ロシア人、チユクチ人であるが、その地域に住んでいるという広義的な意味と便宜上ロリシカ人と呼称する。

その為公用語はロシア語、またはウクライナ語が使用されている。

また後述の理由からロシア人からすればロリシカは侮蔑・差別的な名称なのだが、ロリシカ側からすればロシアから決別した者という勲章的名称として名乗っている反面、ロシア人の事を赤ロシア人とソ連時代を彷彿とさせる差別的発言を言い放ち忌み嫌っている。だがロシア革命時に迫害ないし亡命を迫られた旧ロシア帝国人である白系ロシア人に対しては親近関係にある。

元々ロリシカはロシア革命時に緑ウクライナと同じく、ポリシエヴィイキ、スターリン政権によって極東に強制移住させられたウクライナ人やベラルーシ人の居住地であり、国名たるロリシカも、資本主義的思想を持った人間が多く收容された事や地理的にアメリカに近いという理由から侮蔑の意味を込めて作られた造語である。

冷戦時代にはベーリング海を挟んでアメリカに面していることからソ連のプロパガンダ市が数多く建設され、特にカムチャツカ地方の首都であるニューカーク・グラードには数多くの住民が居住していた。

しかし1961年のモスラ飛来とその隠蔽によってソヴィエト共産党政府は水爆を持ってニューカーク・グラードを核攻撃し、目撃者たる住人20万人と街そのものを蒸発させる事で「無かった事」にした。

この事件によってロリシカ人の独立運動に火が灯る。

そしてソ連崩壊後の1992年、ロシアの国力が衰え低迷していた時期にロリシカ人は独立戦争を展開。

しかし1995年に巨大不明生物バルゴンが出現。ロシア軍の後退・停戦という形で独立を果たすも巨大不明生物との戦いを国際社会から強制される事となる。

そのバルゴン出現後、実に16年間ロリシカは対ロシア国境線と国土そのものを防衛包囲網として「パンドラの箱」としての役割を担い持ち堪えるが2021年5月20日、ついにロシア連邦領と接するレナ川が突破され、ロリシカは西部戦域を放棄。カムチャツカ半島への籠城戦を展開した。

2021年6月現在はバルゴンが隠避する火山地帯であるカムチャツカ地方のカラギンスキー県コリヤーク川流域に防衛線を展開している。

●軍事組織

??ロリシカ陸軍

??ロリシカ海軍

??ロリシカ空軍

◆中華人民共和国

中国共産党による一党独裁体制であり、IS台頭後は女尊男卑思想が党の意向に反する思想だったために取り締まられ、それに伴い厳重な監視社会を構築している。

以前より沖縄を中心に日本各地に工作員を放ち、懐柔・協力者に仕立て上げていた。

しかし中国・ロリシカ間国境線をバルゴンによって北京を陥落させられ、現在は長江以南にまで後退している。

加えて党の人間は自身たちの保身としてアメリカなどの国外に退

避してしまつた挙句、党首脳部の専用機が黄海上空で消息を断ち、混乱が生じている。

現在は駐日中国大使館の駐在大使が臨時国家主席に任命されている。

最前線では徴兵された一般人が使い捨て同然の扱いとなつている上に過去の不法占拠などに不快感を現した東南アジア諸国の発した『チャイナ・ブロック政策』による中国船舶・航空機の侵入禁止や台湾の反共産主義姿勢などの要因も重なり、現在の体制では近い内に中華人民共和国の国民が滅亡するという事態に陥り、党上層部はアメリカや日本を始めとする西側と共闘する「合作派」と中国単独での防衛に執着する「国粹派」に分裂。

当初は巨大不明生物相手に共闘出来ていたものの、国粹派が合作派に対し攻撃を仕掛けた事で内戦に発展。

巨大不明生物との戦争、合作派と国粹派の内戦により膨大な犠牲者が築かれている。

そのため孫華輦ら特別武装隊香港派や国内の有志や戦区(軍閥)らが合作派、国粹派に対してクーデターの準備を開始している。

??国内の軍事組織

- ・ 人民解放陸軍
- ・ 人民解放海軍
- ・ 人民解放空軍
- ・ 特別武装隊
- ・ 海上警察

● 関連用語

??男女全年齢徴兵

6月13日時点で既に8億人という犠牲者を出してしまつた中国は、残された6億人の国民全てを軍属に置き、それらを用いて防衛戦を展開することを実行に移した。

これにより16歳以上の男女は最前線に投入され、5歳から15歳の男女は工場等で勤労奉仕に当たるといふ、末期的な状況と化してしまつている。

??合作派と国粋派

現在の中国における派閥勢力。

国民を救うべく国際社会、特に西側と共闘することを目論む合作派。国民を犠牲にしてでも国家を維持しようとする目論む国粋派。

「自国民」と「国家」のどちらを優先するかで巨大不明生物を前にしながら、対立関係に至ってしまったている。

：更に深刻であるのは、政治的対立関係にあるだけならばまだしも、国粋派が合作派に対し「粛清」として武力攻撃を仕掛け、両者が内戦状態となってしまうという事態である。

?? I Sによる核特攻

巨大不明生物群に対して実施された戦術。

I Sコンデンサーを搭載したI Sに核弾頭を装備させ、核攻撃を行わせるというモノである。

だが巨大不明生物が遠距離の飛行物体を撃墜する習性を持つ事から核の有効範囲内まで接近しなければならぬ為、事実上の特攻と変わらない事からそう呼ばれている。

??逃げ場無き民

現在中国は国民全てが軍属に置かれた為、全て国家の管理下に置かれている。

：当然、国民達も逃げようとしないうけではない。

だが、東南アジア諸国は近年の中国を警戒しチャイナ・ブロック政策を実施しており、日本は近年反中感情が高まっている上に移民に対し厳重であり永住権獲得が非常に困難であること、韓国は風前の灯、台湾は余地こそあるが最終的には拒絶される、その他は避難してもまた最前線に逆戻りである等の理由から、逃げる余地も逃げる場所も無いというのが現実である。

◆台湾（中華民国）

中国国民党や台湾民進党などの民主主義政党が存在するが、国連からは国家と認定されていない地域。

しかし政治体制も相まって、共産主義体制の中国とは対立関係にあり、さらには台湾内部に中国大陸を共産主義から解放しようとする大陸反抗主義者も数多くいる。

しかし軍事力ではアメリカの支援無しにはほとんど成り立たないのが実情であり、積極的にアメリカを支持し、また隣国であり中国という共通の（仮想）敵国を持つ日本とも同盟を結んでいる。

—— 現在は中国共産党特別武装隊香港派が計画しているクーデターの支援と、その後想定されている大陸失陥と溢れ出す難民に備えた政策、そして将来的に必要なとされる中台合同の【中華連邦】発足に向けた政策を香港派と共同で極秘裏に進めている。

●軍事組織

??台湾国防陸軍

??台湾国防海軍

??台湾国防空軍

◆東南アジア連合

フィリピン、インドネシア、シンガポール、ブルネイなど東南アジア各国の共同体であり、経済・社会・政治・安全保障・文化に関する地域協力機構、東南アジア諸国連合（ASEAN）の拡大強化型に当たる連合国家。

もとより対巨大不明生物用ではなく南沙諸島に侵攻してくる中国を牽制して改組されたために巨大不明生物戦には向いておらず、日本やアメリカ、オーストラリアの支援を受けながら戦力の強化を図っている。

それと同時に巨大不明生物出現前に中国に対する不信感・不快感から各国が共同で発した『チャイナ・ブロック政策』が解消されずに放置されている。

◆フィリピン

古くからアメリカと根強い関係があり、それはフィリピン独立後と対中国戦を見据えた時代になっても継続していた。

巨大不明生物戦を強いられるであろう時代に突入した現在はアメリカから戦術機の運用訓練を受けている。

??フィリピン軍

陸軍

空軍

海軍

◆インドネシア

東南アジア南部に位置する島国であり多民族国家にして大東亜連合本部を首都ジャカルタに置く大東亜連合の宗主国。

フィリピンと同じくチャイナ・ブロック政策の一環としてスロー海峡やマラッカ海峡の中国船航行禁止など、積極的な反中国体制を貫いていたが現在はその中国が巨大不明生物を食い止めなくては次は自分達が滅びるといふ皮肉な立場にある。

太平洋戦争時代から日本との関わりが深く、戦力増強には同じ島国である日本の自衛隊方式の防衛術を模倣している。

それというのも、インドネシアは群島国家であり、本来ならば敵に接近する脅威が無かったため主力戦車などを導入せずに航空機や艦艇を大量に保有し、上陸される前に倒すという戦術が国防においてセオリーだからである。

しかし（対中戦を見越したものだ）敵が上陸した場合に備えて陸軍の強化もアメリカやドイツ、オーストラリアの支援を受けなが

ら行なっている。

??インドネシア国軍

陸軍

空軍

海軍

●シンガポール

マレー半島南端に位置する主権都市国家であり、北をジョホール海峽によりマレー半島から、南をシンガポール海峽によりインドネシア領リアウ諸島州から分断された島国でもある。

東南アジア地域の経済を左右するほどの国家であり、大東亜連合の中でもインドネシアに次いで重要な国家となっている。

またイギリス連邦加盟国でもあるため、イギリスから積極的支援を受けている。

国土が狭小であるが装備の質、量ともに他の東南アジア諸国に引けを取らない。

現在は大東亜連合宗主国のインドネシアや5か国防衛取極を締結したイギリス・オーストラリア・ニュージーランド・マレーシア、在シンガポール米軍などと共にマレー半島における防衛作戦を考案しつつ、今後編成されるであろう国連統合軍基地の誘致を行なっている。

??シンガポール軍

陸軍

空軍

海軍

●関連用語

??チャイナ・ブロック政策

領海内の資源や海産物を食い尽くした中国は外洋に進出し他国の領海に侵犯や人工島を作り出し、新たな領有権を主張するなど近年南シナ海に進出している中国に対する政策として打ち出した、中国企業の進出規制や中国船舶の通行禁止など多岐に渡る規制政策。

これによってある程度までは中国を抑え込むことは出来たが、今度

は却って中国の破滅を助長してしまっている。

??対中戦力の対獣戦力への転換。

南シナ海への中国進出を警戒し東南アジア諸国は海軍力の増強を
実行していたが、当の中国は風前の灯となった為に、それら戦力は対
巨大不明生物戦用に転換されている。

??日本・欧州からの生産拠点誘致

対中国戦を想定して戦力を整えていた東南アジア諸国だが、実のと
ころ技術力が高いとは言えず、海洋国家が多数おり海上戦力の拡充が
必須な中で造船に関しては韓国や台湾への委託、陸上・航空兵器にお
いては欧州からの輸入等に頼っていた。

その為生産部品の確保とダンケルク作戦による国外退避を目指す
欧州各国と、生産拠点の海外移転を思案していた日本などに土地を提
供し、技術取得を目指すべく生産拠点の誘致を行っている。

◆中東

世界有数の石油産出地域にして、イスラム教の宗派間における紛争
やテロが絶えない、全体的に砂漠気候の地域。

巨大不明生物出現後もそれは相変わらずであり、それが今後の世界
における中東の陥落に直結する原因となると言われている。

●イスラエル

アメリカなど西側国家に対して友好的であり、巨大不明生物戦に備
えた準備を進めているが、隣国ヨルダンやアラブ諸国との民族対立は
未だに残されたままである。

??イスラエル国防軍（ツアハル）

陸軍
空軍
海軍
航空宇宙軍

●シリア

2011年から断続的に内戦が続いている親露派国家であり、アラブ最大の軍事国家にしてアラブ最強の陸軍機甲装甲部隊を保有している。

中東における新種の巨大不明生物が確認された土地でもある。

しかし長年の内戦により国土のほとんどが半ば無政府状態でありマトモな対応が出来ていないこと、また政府を支援していたロシアが自国防衛に専念しており援助が断ち切られているなどの要因が重なり、2021年7月までには陥落してしまうと予想されている。

??シリア軍

陸軍
空軍
海軍

●サウジアラビア

世界有数にして中東最大の石油産出国。

しかし砂漠地帯を住処とする巨大不明生物の出現により全土失陥はなかったものの石油プラントを含む国土の大半が危険地帯となつてしまっており、経済を支えている石油産業に大打撃を与え、サウジアラビアのみならず世界に未曾有の石油危機を起こすと推測されている。

??サウジアラビア軍

陸軍
空軍
海軍

●カタール

北と東をペルシャ湾、西をバーレーン湾、と三方を海に囲まれたカタール半島にある穏健派（親米派）国家であり、サウジアラビア同様

中東有数の石油産出国。

国土のほぼ全域が砂漠地帯であり、新種の巨大不明生物・ニーズヘッグにとつては絶好の住処になる環境であり、サウジアラビア同様陥落の危険性が極めて高い国家。

しかしカタールまで陥落すれば人類は資源面でさらなる危機に立たされるため、現地の在カタール米軍や在カタール英軍、米海軍第5艦隊がカタール半島南方のカタール・サウジアラビア間国境線に防衛ラインと要塞陣地を構築中である。

??カタール軍

陸軍

空軍

海軍

◆アフリカ連合

人類が支配する大陸の中でも未だに未開発の地域が多く、砂漠とジヤングルという、自然豊かな環境を持つ裏腹に、世界有数の富裕国家と貧困国家の格差が激しい地域でもある。

また、中東から伝わったイスラム教の宗派間の対立による内戦が頻発しているという現実を抱えており、全てのアフリカ諸国が一丸となつて巨大不明生物に立ち向かうなどそれこそ夢のまた夢であり、これらの地域は中東と同じく陥落してもやむを得ないと思われるが、地中海とインド洋を往来できるスエズ運河などを失えば欧州にとつてもかなりの損失であるため、欧州がエジプトやモロッコ王国、南アフリカ共和国などのアフリカの富裕国家と対談を持ちかけており、その成果としてエジプト・スエズ運河には欧州アフリカ共同防衛ラインが構築されつつある。

●エジプト

アフリカの玄関口にあたる国家であり、前述のスエズ運河を有しており、これを失えば欧州各国も補給・輸送の面で痛手を負うこと、エジプト自身も自国防衛のために欧州の力が必要と判断しており、フランスやドイツ、イタリアと共同防衛政策について対談している。

また、首都カイロの人口膨張を緩和する目的で中東方面のダハブに移転予定だった新首都計画を取りやめ、巨大不明生物侵攻に備え地中海に面した都市・イドウクに首都を移転する計画が進んでいる。

??エジプト軍

陸軍

空軍

海軍

●モロッコ王国

地中海と大西洋に面し、地中海の玄関口たるジブラルタル海峡を隔ててスペインに近い国家。

欧州との関わりが多く、現在はスペインやフランスから貸与された兵器で王立軍の再編成を行なっている。

??モロッコ王立軍

陸軍

空軍

海軍

●南アフリカ共和国

アフリカ大陸最南端に位置する国家であり、金やダイヤモンドの世界的産出国であるなどアフリカ大陸の後方支援国家であり経済的生命線に当たる国家。

そのためアフリカ連合の本部が置かれている。

イギリス連邦加盟国でもあり、イギリス軍から兵器を無償で貸与されるなどの贅沢な支援を受けている。

また欧州の他に冷戦時代から友好国であったイスラエルや中華民国（台湾）などとの軍事交流や支援も受け、南アフリカ国防軍の強化を行なっている。

??南アフリカ国防軍

陸軍
空軍
海軍

◆オーストラリア

南半球の列強国であり、巨大不明生物との戦争が遠い世界の出来事と思われている後方支援国家。

ニューギニア島からの昆虫型巨大不明生物の飛来によって東海岸が甚大な被害を受けている。

また将来的に予想されるユーラシア難民の受け入れに対して反発的な白豪主義者や女尊男卑主義者などの歪な人種価値観の温床ともなっており、整備が進んでいない。

そのため、出来る限りユーラシア各国の陥落を阻止するべく軍事同盟を結んでいた東南アジア諸国や対中政策で協力関係にあった日本や台湾、インドの他に5か国防衛取極の締結相手であるシンガポールやマレーシアにも積極的支援を行なっている。

●オーストラリア国防軍

陸軍

空軍

海軍

●関連用語

??オーストリア本土防衛戦

6月11日：即ち、タツグトーナメント時に展開されていた大規模戦闘。

ニューギニア島で発生した昆虫型巨大不明生物「カマキラス」および【ジラ】の襲撃により、首都キャンベラやシドニー、ブリスベン、メルボルン等主要都市を含むオーストリア東海岸一帯は壊滅状態と

なつた。

両生物が大量の子体を生み出す性質から、在オーストリア米軍は核兵器の使用を鑑みるも、単なる核兵器では焼け石に水の状態でしかなく、また大量の核兵器投入は更なる環境破壊を招くことから、アメリカ軍は軌道上からの質量弾爆撃による絨毯爆撃を敢行。

6月14日現在、オーストリア東海岸一帯からの文明消滅と引き換えに防衛に成功した。

??パインギャップ軍用基地

オーストラリア中央ハリススプリングス南西18キロに位置する基地。

1960年代以降、アジア諸国の各種通信を監視してきた基地で、2003年以降は豪政府の決定により米国のミサイル防衛システムの重要な拠点として米豪共用となっていた。

現在はアメリカ情報軍の基地のひとつであると共に国連宇宙総軍の基地でもあり、オーストリア本土防衛戦時には前線司令部となっていた。

??臨時首都ホバート

タスマニア州の州都。首都キャンベラの壊滅に伴い、オーストリア臨時政府が置かれた。

◆南米共同体

南米大陸における国家連合。

だが、欧米諸国の植民地時代にことごとく国家を滅ぼされている為にまともな国家がなく、アメリカや欧州の支援無しにはマトモに立ち行かないという現実がある。

◆ブラジル

南米最大の経済国家にして領土的に最大の国家。

◆アルゼンチン

南米有数の軍事国家。

◆チリ

南米有数の軍事国家であると共に、ドイツと親密な関係にある。

◆ギアナ

南米における宇宙戦力の拠点がある。

◆国連軍

ロリシカのバルゴン包囲網崩壊後、中露両国に大量のバルゴンが流入し、呼応するように世界各地で活性化した巨大不明生物に対処するべく組織された国際規格の軍隊。

従来の国連軍同様、限定的な地域展開であるが、順次拡充を行なっている。

装備は主に欧米諸国の兵器から成っているおり、コスト面や出回っている数などの理由から東側兵器も導入されている。

自衛隊も退役した主力戦車や護衛艦を再改修した上で提供するなど、協力関係にある。

国連軍基地の使用兵器に関しては現地政府が負担することが通例で、また人員も上層部以外は現地採用が通例である。

現在は6個方面軍と宇宙総軍、120万人の人員から構成されている。

●各方面軍

?? 欧州方面軍
?? 極東方面軍
?? 中東方面軍
?? インド方面軍
?? アフリカ方面軍
?? オセアニア方面軍

まとめ回【兵器編】

??対巨大不明生物戦に用いられる兵器群

◆陸上兵器◆

●主力戦車

??90式戦車

陸上自衛隊の第3世代主力戦車。

武装はラインメイタル社製44口径120mm滑腔砲、12.7mm機関銃、7.62mm機関銃。

戦域データリンクへの対応は改良型の902型から。

純国産のセラミック、チタニウム主体の複合装甲を採用（内装モジュール式拘束型セラミック装甲と言われる）しており、耐久試験では既存の自衛隊戦車砲を全て防御した上でエンジンも無事に再起動するなどかなりの強靱さを誇っている他、正面装甲に関しては「やまと型」護衛艦の46cm砲の直撃にさえ理論上は耐えるという。

北海道の第7師団や富士教導団に配備されている。

??10式戦車

陸上自衛隊の第3.5世代主力戦車。

現有戦車（計画当時は74式戦車と90式戦車）の後継として、現在主力の90式戦車よりも上回る戦闘能力を有する他に、

本土でも運用できるように小型軽量化し、戦略機動性を高めC4Iシステムによる情報共有および指揮統制能力に加えて火力・防護力・機動力の向上、従来の対機甲戦闘・機動打撃に加えてゲリラ・コマンド攻撃対処能力が付与された。

派生型として、78式戦車回収車の後継となった11式装軌車回収車が存在する。

開発中にロリシカにおける極北戦争が始まったことから、モジュール装甲、自動装填装置の採用により、部分的ながら対巨大不明生物戦を想定した設計にもなっている。

主砲は新開発された軽量高腔圧砲身の日本製鋼所製の国産44口径120mm滑腔砲を装備、

砲弾は発射薬や飛翔体構造を最適化した国産の新型徹甲弾が開発され、弾丸の高威力化を達成。

これにより、10式戦車の砲は7440ミリ(7m44cm)の装甲すら貫ける火力を獲得した。

北海道の第7師団や関東の第1師団、北九州等に配備されている。

??74式戦車

陸上自衛隊の第2世代主力戦車。

現在は10式戦車と後述の16式戦闘車の配備により退役が始まっている。

また、ロリシカ陸軍に輸出された事もあり、現地にてT-74戦車として運用されている他、在日国連軍にて運用されている。

??M1エイブラムス戦車

アメリカ陸軍の第3世代主力戦車。

湾岸戦争にてその強力さを見せつけ、アフリカや中東の西側諸国で広く運用されている。

??レオパルド2主力戦車

ドイツ陸軍の主力戦車。

特にA7I(3.5世代)は戦域データリンクに対応し、対レーザー蒸散塗膜と耐熱耐弾装甲、自動装填装置(乗員3名)と55口径120mm砲を装備した対巨大不明生物戦仕様となっている。

レオパルド2はドイツだけに止まらず、欧州の多くの国で採用され、欧州標準戦車とさえ呼ばれるに至っている。

??T-72戦車

ロシア製の戦車。

東西冷戦時代にその存在感を示した戦車であり、その安価で手に入るコストと整備性の高さから、旧東側諸国や発展途上国に至るまで未

だ幅広い地域で運用されている。

EP-36にて、欧州連合極東派遣軍ポーランド陸軍が運用する派生型のT-72M1モデルナ戦車が登場。EP-40では、千葉県館山市布沼地区沿岸部に上陸したゴジラの迎撃を行うが敗北した。

??T-80戦車

ロシア軍の戦車。

T-72の発展型であり本車輛の特徴として、車体全体に爆発反応装甲が搭載されている。

??ルクレール戦車

フランス製の戦車。

??チャレンジャー2戦車

イギリス陸軍の主力戦車。

? ●装甲車?

??82式指揮戦闘車

陸上自衛隊及び在日国連軍で使用されている指揮戦闘車両。

コマンド・ポスト・オフィサーが戦域官制を行なう、移動型前線指揮所となる。

EP-34にて片桐1佐がVTシステム鎮圧部隊と特科部隊の指揮に使用した。

小型生物対策として遠隔操作式12.7mm重機関銃を標準装備。

後に本車輛をベースとした87式偵察警戒車と化学防護車が開発された。また、同じく小松製作所が製造している96式装輪装甲車の開発にも経験が活かされ、開発期間の短縮に繋がった。

??89式戦闘装甲車

陸上自衛隊が運用し、戦車に随伴する装甲兵員輸送車に武装と装甲を施した車両として開発された、日本初の歩兵戦闘車。

車体は圧延防弾鋼板を使用しており、アルミ合金製の73式装甲車よりも生存性が向上している。砲塔と車体は兵員輸送車と砲塔架台車を兼ねている。

??16式機動戦闘車

陸上自衛隊の戦闘車。

2016年から調達が開始された装輪装甲車であり、積極的に戦闘に参加させる点から「戦闘車」に分類されている。

普通科（歩兵）に対する直接火力支援と軽戦車を含む装甲戦闘車両の撃破などに使用するための車両であり、主に機動師団および機動旅団・即応機動連隊に配備されている。

??96式装輪装甲車

陸上自衛隊の運用する兵員輸送装甲車。

??ストライカー装甲車

アメリカ陸軍が進めている再編計画（トランスフォーメーション）の一環として計画された装甲車。

装甲、火力に優れており、戦術機動力としても有力であり、ネットワーク化に伴う広域データリンク対応改修が施されている。

偵察車から機動砲システム車、対戦車誘導ミサイル車、指揮車、野戦救急車など幅広い派生型が存在する。

??ピラーニヤ装甲兵員輸送車

スイス製の装輪式装甲兵員輸送車。

??VBL装甲車

フランス製の軽装甲4WD。

巨大不明生物戦に備えて対戦車ミサイルを搭載した型が配備されつつある。

??BRDM-2装甲偵察車

ロシア製の装甲車。

低コスト故に発展途上国でも手に入る為、現在ロシア本国を含めて45ヶ国が運用している。

EP-41にて、日本仕様のJ型が国連軍第11空中機械化歩兵中隊で運用されていた。

? ● 自走砲・自走ロケット砲？

??99式自走榴弾砲

陸上自衛隊で運用されている自走砲。

??88式地对艦誘導弾

陸上自衛隊の運用する地对艦ミサイル（対艦誘導弾）システム。

艦船に対する防衛兵器として開発された。

島嶼防衛ドクトリンを運用し始めたアメリカ軍向けに何台か輸出されている。

??94式自走ミサイル発射砲〔大鵬〕

陸上自衛隊で運用されている自走式ミサイル発車砲。

多連装ロケット砲型と大型誘導弾発射型が開発されており、前者はロシア軍の《BM-30》を参考にしている。EP-34にて、VTシステムに取り込まれオルガ化したシュヴァルツアレーゲンに対して00式貫徹徹甲誘導弾による過飽和集中制圧攻撃を実施した。

大型誘導弾発射型は、海自で運用されているD-03削岩弾の搭載・発射を可能としており、装備の互換性確保を目的としている。

（搭載誘導弾）

??00式貫徹徹甲誘導弾

タイプ00・フルメタルミサイル

モース硬度10以上の金属を使った運動エネルギーミサイル。

幾重にも重ねられた厚さ10メートルの耐爆コンクリートを貫通することが可能である。

??D-03削岩弾

対爆コンクリートをも破壊する威力の推進式搾孔型ミサイル。
先端のドリルで岩盤に穴を開け、自走して地中に進行、内部で爆発する。

?? M2001クルセイダー

155mm砲を搭載した米国製自走砲。乗員は車長、砲手、操縦手の3名。射程距離は40km以上。

?? M270 | MLRS

長射程の阻止砲撃用としてアメリカ陸軍が開発した自走多連装ロケット砲である。主にMLRSと呼ばれる。

アメリカ以外では計画参加国に加え、日本や韓国、イスラエル、欧州各国など13ヶ国で採用されている他、各方面の国連軍でも運用されている。

?? 2S19自走榴弾砲ムスタ

ロシア軍の自走砲。主砲は152mm榴弾砲。

?? BM | 21

ロシア軍の多連装式ロケットランチャー。122mm 40連装砲を搭載。

? ● 自走対空砲?

?? 87式自走対空高射砲

陸上自衛隊の自走式対空砲。対巨大不明生物戦では飛行種および陸棲小型種の掃討を担当する。

武装はスイス・エリコム社製90口径35mm機関砲。

対巨大不明生物戦仕様に改修され、砲身にサーマルジャケットを装備している。

?? 2S6自走対空砲 ツングースカ

ロシア軍の自走式対空砲。武装は30mm機関砲。
??ZSU-23-4 自走式高射機関砲 シルカ
ロシア製の自走式対空砲。

旧東側諸国を中心に西側諸国でも運用されている。

23mm機関砲4門装備。これを4門で毎分4000発射撃する。

●特殊車輛

??試製66式メーサー特車／92式メーサー特車

特務自衛隊が試作・運用していたメーサー車。

正式名称は「コヒーレント・マイクロウェーブ投射砲機動車」であるが、メーサー車、メーサー砲車と略して呼ばれることが多い。

65式高速装輪機動車を二両連結し、連結部にメーザー砲ターレットを搭載している。92式も基礎は同じである。

66式は未舗装路での運用に支障がある事や、メーサーの消費電力が多く常に電源車からの電力供給を必要としていた他、メーサーの出力が不十分であり天候に左右されやすい(豪雨時にはメーサー出力が49%にまで低下する)等の欠点を抱えていた。

92式は電力供給および変換効率、メーサーの出力(豪雨時にはメーサー出力70%にまで低下する)こそ向上したが、不整地での移動が十分に解決できずにいた。

18式配備に伴い初期型の66式は全面退役。後期型として設計された92式は18式のシステムを導入する形で改修され、運用が継続されている。

??18式メーサー殺獣光線車

特生自衛隊(旧特務自衛隊)のメーサー車。

墨田大火災跡地にて発見された90式メーサー殺獣光線車を解析し、そこから得られた情報を基に開発された。

基礎システムこそ92式と然程変わらないが、不整地での運用や戦

場での小回り等を考慮し02式牽引装甲車によって牽引されるト
レーラー方式になっており、機動性が向上している他、衛星データリ
ンクにも対応している。

またメーサーの出力問題に関しても、G元素由来のシステムを組み
込むことで出力が向上。悪天候時に僅かな出力低下を招いてしまう
ものの、豪雨時でも出力低下を82%にまで抑えられる等全体的に性
能が向上している。

だが、02式牽引装甲車のディーゼルエンジンの発電だけでは長期
戦（具体的には1週間以上にも及ぶ無補給下での戦闘）の際には牽引
車の燃料が底を尽きメーサーのエネルギー消費を賄いきれない為、長
期間に及ぶ大規模戦闘が予想される場合は牽引車の燃料節約を兼ね
て支援電源車輛が1〜4台ほど追隨することになっている。

また02式牽引装甲車は車長兼メーサー砲手、操縦士、通信士の3
名が座乗している他、非常時に人員を4名まで収容可能である等内部
インテリアは広く設計されている。

2018年に配備が開始されたが、先行量産型の配備開始は201
7年となっている。

EP-10にて、ロリシカ派遣中隊に参加。三村二佐率いる第3
メーサー隊の車輛としてギジガ防衛戦に投入された。

EP-34でもIS学園の警備戦力として布陣。VTシステムに
よってオルガ化したシュヴァルツアレーゲンに対するメーサー照射
を行う予定であったが不要に終わる。

IS学園防衛戦ではEP-39では予備戦力として第2ライフラ
イン・トンネルに布陣。

EP-40ではオルガIIを轢きながら箒が02式牽引装甲車のM
2重機関銃を斉射して千尋を援護した他、千尋と箒のIS学園からの
脱出手段に用いられた。

??90式メーサー殺獣光線車

3式機龍と同じく、墨田大火災を通じて「こちら側の世界」に流れ
着いたと思われる超兵器。

その正体は機龍2部作の特生自衛隊が運用していた主力車輛であ

り、18式開発のキツカケとなった。

本車自体は破壊されており（微量な放射線が確認された事から「あちら側の世界」でゴジラに破壊された可能性が非常に高い）作動する事は無いものの、研究材料として保管されている。

??レーベン1試作メーサー砲特車

ドイツ陸軍のメーサー車。

特自の貸与した18式メーサー車を基に開発されたドイツ製メーサー車の試作型であり、18式と同等の戦力を有している。

2019年のウクライナ派兵で活躍し、かなりの戦績を挙げた。

●戦術歩行戦闘機（戦術機）

スターウォーズ計画に基づき開発・実用化し使用されていたEOSの発展・進化系と言える兵器。

不整地踏破能力・兵装搭載能力・継戦能力の点で、巨大不明生物に抗するに足る性能を有しており、跳躍ユニットと主脚を用いた燃費効率の良い地上走行と匍匐飛行の組み合わせによる高速機動と、全局面性を確保。

さらに主腕およびマニピレータ、兵装担架を駆使する事で状況に応じた柔軟な兵装選択と補給の容易性を実現した。

若干ISに機動性は劣るものの、パイロットを選ばず、戦闘車両には不可能な3次元機動力と戦闘ヘリコプターではなし得ない地上制圧能力、巨大不明生物に制空権を奪われた際の航空機の代替となるだけの汎用性を有するなどの性能から対巨大不明生物戦主力兵器の座に上り詰めた。

??MF-1ガンヘッド

アメリカ製の戦術機。

初期の機体である為、装甲防御能力と操縦者の生存性を重視した為に重装甲機となっている。

また汎用性が高い事や、IS台頭後もある程度対応可能な存在であった事から、多くの国家軍に配備されている。

EP-04にて自衛隊仕様様の「16式荒吹」およびその改良型である「16式荒吹一型丙」が訓練に使われた他、EP-08とEP-14のロリシカ派兵時にも運用されている。

またその配備先であるロリシカでも運用されており、EP-05からロリシカ編全般にかけて登場した他、改良型の「プラティパス」がジャール大隊にて運用されていた。

??MEF-2020ヴァイツアヒンメル戦術機

EU製の戦術機。

ガンヘッドをベースに、IS・ラファールリヴアイヴの技術を組み合わせられて開発された、ISと戦術機の混血機種。

継戦能力の延長と、機動性向上を目的に開発された。

正式配備は2020年からだが、先行試験型がドイツ陸軍指揮下のもと、ウクライナ戦線に投入され、戦闘データ収集と並行して戦線維持に尽力した。

EP-15にて、回想という形で2019年6月のウクライナ戦線スイエヴェロドネツク防衛戦に参加し、ドイツ陸軍第66戦術機中隊が運用する形で登場。その後、同・中隊第1小隊と共に欧州連合極東派遣軍に合流する形でIS学園警邏行動に参加した。

EP-41では、第2次日本本土防衛戦時に駐日ドイツ大使館および駐日欧州連合理事会防衛に出撃していた。

??MF-22ラプターII

アメリカ軍の新型戦術機。

銀の福音をライバル候補と言わしめる程、対人類戦に特化した機体。

本機の特徴は極めて高い隠密性であり、惑星間距離ほどの範囲を捉

える事が可能なハイパーセンサーの索敵網をかいくぐる程のステルス能力と、レーダーの他に現行の赤外線センサーでは探知不能とされる熱光学迷彩システムを世界に先駆けて搭載している。

EP-19にて、訓練飛行中の黒兎隊に長距離ロツクオンを浴びせた上に、高いステルス性を見せつけた。

同名の機体であるF-22ラプター戦闘機が存在する為、本機にはラプターIIと名称に若干の変更が加えられている。

??三式銀龍

特務自衛隊（特生自衛隊）の戦術試験機。

ロリシカに派遣され、千尋が一時的に乗機としていたが、実際は機龍に反映させる戦闘データ収集とG型装甲運用の為の試験機である。

その為6月14日時点では既に解体され、3式機龍各部に補強パーツとして増設されている。

●機械化歩兵装甲（パワードスーツ）

??IS

白騎士事件以降世界に拡散した超兵器。

一種のパワードスーツであるが、女性にしか乗れない汎用性の悪さや継戦能力と絶対防御の出力の低さ、火力投射力の不足、そして本体やパーツ及び周辺設備の高コストなどから対人類戦はともかく対巨大不明生物戦では戦力外と認識されていた。

特にEP-17のニューヨーク攻防戦で最強のISと名高い《銀の福音》I4機がラドン相手に一方的に敗北した事から戦力外であるという認識が決定的となった。

その結果、早々に国連軍へISを売り飛ばした国も少くない。

だが一方で、IS導入の為に通常兵器の軍縮を行った国も少なくはなく、そういった国々にとっては、例え戦力外であったとしてもIS

を運用する以外に国家を守る方法が無いという実情が存在し、それがユーラシア大陸の戦況悪化に拍車をかけている。

だが必ずしも無用の長物化というところではなく、次世代型兵器群の開発や既存兵器の強化の為の礎となっている。

??打鉄

日本製第2世代IS。

武装面で戦力外と認識されたが、機体フレームの強度は優れている為に統合機兵へのアップグレード改修が真っ先に決まった。

??ラファールリヴァイヴ

フランス製第2世代IS。

汎用性が極めて高いが防御力の面で戦力外と認識されたが、その高い汎用性は統合機兵開発の礎となった。

??白式

東製第3世代IS。

「ハッキリと言って武装以外は産廃（by特自装備科技術開発班スタッフ）」とのこと。

織斑一夏の専用機。

??ブルー・ティアーズ

イギリス製第3世代IS。

セシリアの専用機となる予定だったが、開発が難航し頓挫。

そのまま開発途中で放棄された本機は統合機兵ユリウスに流行・アップグレードされる形で陽の目を見ることとなった。

??甲龍

中国製第3世代IS。

鈴の専用機であり、量産型。

「対人類戦に特化した」特別武装隊によって運用されている。

なお本機も対巨大不明生物戦では戦力外となっている。

??ラファールリヴァイヴ2

フランス製第2・5世代IS。

シャルの専用機：なのだが、シャルのスパイ行為発覚・逮捕となった後にフランス本国に返還された。

その後の詳細は不明。

??シユヴァルツアレーゲン

ドイツ製第3世代IS。

ラウラの専用機。

専用機の中では最も戦力となり得る存在だったが、当のドイツとしては各種兵器に搭載予定の装備を詰め込み運用させる、程の良いモルモットでしか無かった。

VTシステムの暴走によって大破したが、実はこれは戦術薬物（一時的に反射神経を限界まで底上げさせる薬物）の運用実験および検体の耐久性試験の一環であり、最初から使い捨てられる事を前提として開発されていた。

（つまりクロエがVTシステムを稼働させた事も全てドイツ軍内で計画されていた《テスト》の一環に過ぎない）

??ミステリアス・レイディ

ロシア製第3世代IS。

楯無の専用機だったが、ロシア政府による楯無の代表候補生権利の強制破棄によってロシアに返還された。

それ以降の詳細については不明。

??サイレントゼファイルス

イギリス製第2世代IS。

本機も火力投射力の不足から戦力外と認識されたが、ユリウス（ブルーティアーズ）の運用実績次第では統合機兵へのアップグレード化することが予定されている。

??銀の福音

アメリカ製第3世代IS。

EP-17にてラドンに完膚無きまでに叩きのめされたが、シユヴァルツアレーゲン同様に戦力になり得る可能性はある為、無人化改修によるUAV化の計画が進行中である。

??紅椿

東が開発中の第4世代IS。

：正直、今の世界情勢下で役に立つか不明。

少なくとも原作より箒は乗りこなせそうではあるが果たして…。

●統合機兵

ISに戦術機運用で成されたノウハウと、歩兵の延長線上であるという運用概念の確立化及び、対巨大不明生物戦にも耐え得る性能を付与するべく開発された、ISの進化系にあたる新概念兵器。

ISの弱点であった継戦能力の低さとデータリンクの接続、各種部隊との連携を前提とした設計と、既存兵器と共通パーツを使用することやISの装備との互換性を保たせる事で、高コストによる既存兵器の装備不良化防止と運用・維持コスト削減も実現している。

??打鉄甲一式??

特務自衛隊と倉持技研の打鉄アップグレード用の共同開発機。

本機にはデユノア社の技術者も関与している為、ラファールリヴァイヴの設計やシステム等も組み込まれている。

その為本機は打鉄とラファールリヴァイヴの混血機であると言える。

??試作1号機

頭部装甲ユニットのユニコーン・マストが特徴的な機体。

通信・指揮能力を強化した指揮官機として設計された。

EP-23から箒によって運用されていた。

6月14日時点では、機体の蓄積ダメージが許容範囲を超過していた為にスクラップとして解体されている。

??試作2号機

汎用性に特化させるべく、関節強度と装甲強度を向上させた機体。

EP-23から千尋によって運用されていたが、EP-36のゴジラ上陸時の戦闘で箒を庇い、ゴジラに大破させられた。

僅かな機体フレームとフライトレーダーは回収出来た為に、運用データは後の正規量産型に反映された。

??正規量産型

試作1号機および2号機の運用データから、各種改善点を抑え、既

存の打鉄を対巨大不明生物との実戦にも耐え得るようアップグレードした機体。

既に国内の打鉄36機をアップグレード済みであり、追加発注として100機の生産が予定されている。

??颯式式

特務自衛隊と倉持技研の共同開発機。

打鉄式式の設計・運用思想を反映した設計となっており、面制圧能力に特化した機体となっている。

打鉄甲一式のように正規量産型配備となる事は無かったものの、その運用データと64連装ミサイル「山嵐」とマルチロックオン・システムのプログラムの機龍やMOGERRA等に火器管制システムの一部として組み込まれている。

??ユリウス

イギリス陸軍が試作し、ブルー・ティアーズを流用・改修した機体。

B T兵器に加えてビット展開中であっても機動砲撃戦を可能とする他レーザービットとミサイルビットの同時運用さえ可能であるなど、従来のブルー・ティアーズより大幅に改善されており、本機の運用データを基にサイレント・ゼフィルスの統合機兵化（アップグレード）も実施されている。

??ヴァルチャー

アメリカ軍が銀の福音とIS学園より接收した無人IS・ゴーレムのデータ、そして特自から入手したG型装甲のデータを基に設計、開発が行われている機体。

現在はまだ試験段階であり、本格配備は2025年ごろを予定している。

??機動装甲殻

ISのダウングレード版に当たる兵器。

戦車等の機甲戦力に随伴する機械化歩兵部隊などで運用されている。

●MFS（多目的戦闘システム）

対巨大不明生物戦を想定して設計された巨大機動兵器群の総称。

現時点で通常兵器や特殊兵器の枠を超えた超兵器に位置付けられる存在。

通常兵器を凌駕する火力を有している事はもちろん、対獣戦線において瀕死の人類陣営を支える大黒柱的存在でもある。

??3式機龍改二

正式名称：『多目的戦闘システム三式機龍』

型式番号：MFS-3（Type3：Multi-purpose Fighting System）

全長：60m

総重量：4万t（重武装型）

3万6千t（高機動型）

特生自衛隊（旧特務自衛隊）が保有しているMFS。

ゴジラの骨格（1954年に上陸した個体と同規模のサイズで入手経路は不明）を使用した一種の生体ロボットで、墨田大火災時に90式メーサー殺獣光線車同様に『あちら側の世界』から《こちら側の世界》に流れ着いた。

ほぼ再利用可能な状態で回収された為、名称は「3式機龍」のままとなっている。

ゴジラの骨をメインフレーム化しており、

情報伝達システムには二進法のデジタルより優れた4つの因子を利用した「DNAコンピュータ」を使用をしている。

当初、この「DNAコンピュータ」はゴジラの骨に残留していた骨髄間質細胞を使用していた為か、EP-21にて機動実験時に暴走事

故を引き起こし、実験設備を完全破壊した。

その後の再調整を経て、安全性を確認した為に配備計画は軌道に乗った。

それに伴い各種装備及び推進機・その他周辺設備もより実戦に耐え得るように改修された。

機体背部や太もも・バックユニットなどにはバーニアが内蔵され、自らの自重どころか巨大不明生物を抱えたまま空中移動を行えるほどの推進力を発揮するほどに強化した他、バッテリー稼働であるが故に駆動可能時間が約2時間と制限されている機龍の継戦能力を向上させるべく、関東圏やその他地方の主要自衛隊基地に「しらすぎ」を経由して機龍の背鰭型アンテナに電力供給を可能とするマイクロウェーブ送信設備群（これは後述のプラズマ推進で稼働する再突入駆逐艦への電力供給にも転用可能）の敷設等が実施された。

だが、機龍の操縦方式については未だ正式な決定が下っていない。というのも、機龍は手動による操縦も可能ではあるが戦闘中は機龍内部に凄まじいGが掛かるため人間には耐えられない事から、飛行艇「しらすぎ」から送信されたコントロールコマンドを内蔵するスーパーコンピュータで処理する半自立型操縦が検討されたが、膨大な予算を消費してしまう為承認が下りず、加えてそれほどの小型化スーパーコンピュータを開発することに10年以上かかる事から、遠隔操縦方式の確立は暗礁に乗り上げ頓挫。

妥協案として、本体各部に設置されたメンテナンス用のコントロールブース（機龍機動時には殺人的なGがかかる）にIS由来のPIC由来のG緩和設備を設け、そこで手動操縦する方式を採用した。

しかしそれでも殺人的なGに耐え切れる人員は確保出来ず、半ば（唯一操縦後も平然としていた）千尋の専用機となっている。

戦闘時の運用方針としては、重装備型では遠距離からの砲撃、高密度弾幕によるダメージ。

（シミュレーションとはいえ）熱線を回避できるほどの高い運動性を持っている高機動型ではDNAコンピュータの処理能力にモノを言わせた主腕や主脚、尻尾にバーニアを用いた近接格闘戦、と2パター

ンに使い分けられる事が決まっている。

6月14日時点では、本格的に千尋の機龍操縦に関する訓練が開始されており、「対巨大不明生物決戦兵器」としての実戦配備へ向けた準備が進められている。

：余談だが、回収当初にパーツを解析したところ、日本国内の各メーカーで取り扱っているまたは開発中であるモノに酷似しており、また本機が2003年に開発された純日本製である事を知り、関係者は『あちら側の日本』の科学力に戦慄したそう。

??M・O・G・E・R・A。（モゲラ）

正式名称：Mobile Operation G. u. l. f.
Expert Robot A er o - t y p e（対巨大不明生物
作戦用飛行型機動戦機）。

3式機龍から得たデータを基に2018年から日米独3ヶ国共同で開発された、巨大不明生物（G. U. L. F. ∥ Gigantic Unknown Living Fact）戦用巨大兵器。

地上では足裏に装備されている車輪（ローラーシステム）による機動が主であり、足の下部のサブエンジンで自重を相殺。大型キャタピラで滑走することで移動する。

また場合によっては脚部関節を働かせ、二足歩行することも可能となっている。

基礎開発が成功するも、日本が3式機龍の新型艦装開発、ドイツが全面的軍備増強、アメリカがモスボール艦の再就役に予算を割くなど3ヶ国が同時に不備が発生した為、計画は一時凍結された。2021年に凍結が解除され、国連主導で建造が再開された。

建造再開後は火器管制装置には統合機兵《颯式式》の「マルチロツクオン」システムのプログラムと、フランスより日本へ亡命したシャクルの技術である【高速切替^{ラピッド・スイッチ}】の動きをトレースしたシステムが採用されている。

また、3式機龍で問題となった操縦システムと手動操縦時のパイロットの安全性については、コックピットブロックそのものをISの非固定浮遊ユニットのようにPIC由来の技術で機体内部に出来た

空間に数センチの隙間を隔てて浮遊させるという方式が採用されている。

完成後は国連軍に支給されるとのこと。

——開発者からは「鳥モグラ」の愛称で親しまれている。

??メカゴジラ（仮称）

アメリカが開発中のMFS。

現在2機存在しており、1号機はネヴァダ州グルームレイク基地、2号機はアラスカ州ユーコン基地に所在している。

建造機数こそ最多であるが、日本やドイツ・イギリスに比べて基礎研究が遅れている為実戦に耐え得るかは非常に疑わしい。

??ドラツヘンI型LZ

ドイツとイギリスが特務自衛隊から得たデータを基に共同開発していた（現在はドイツが独自に建造中である）MFS。

名称のドラツヘンはドイツ語で「竜」を意味し、LZは「Land」Z e r s t · r e r（ドイツ語で陸上駆逐艦の意）の頭文字を繋げた略称であり、独自の型番。

即ち基礎躯体こそ3式機龍と同じであるが、本機は艦艇扱いという事になる。

??ペンドラゴン級MFS

ドラツヘンI型の研究から得たデータを基にイギリスが独自に建造を開始したMFS。



◆航空兵器◆

●戦闘機

?? F-2 戦闘機

航空自衛隊の戦闘機。

F-16をベースに開発された機体。

F-16との差異としては、「対艦ミサイル4発を搭載するため主翼を大型化」・「軽量化のため主翼に炭素系複合材を用い、一体成形構造を採用」・「アクティブ・フェイズドアレイ・レーダーを火器管制レーダーとして世界で初めて実用機に搭載」・「エンジンを推力向上型に換装」・「国産のFBWを搭載」などが挙げられる。

”日本特有の”事情もあいまって、対艦攻撃能力は世界トップクラスを誇り、大型対艦ミサイル4発を搭載しての長距離飛行という他に例を見ない性能を有する。

対艦攻撃に特化している事や、単発エンジンである為F-15等には勝らないが同時に劣る事もなく、遜色無い機動を可能としている。

?? F-3 戦闘機

航空自衛隊の次世代戦闘機の先行試験型。

F-2とは対照的に、空戦能力に全てを振った機体であり、ISの運用データやシステム等が使用されている為、従来の戦闘機を上回る戦闘力を持つ。

?? F-15 戦闘機

アメリカ製の戦闘機。

多くの西側諸国で運用されており、日本にも自衛隊仕様のJ型が存在する。

?? F-16 戦闘機

アメリカ製の戦闘機。

F-15より安価である為、F-15以上に幅広い国々で運用されている。

?? F-18E 戦闘機

アメリカ製の戦闘機。

?? F-22 戦闘機

アメリカ空軍のステルス戦闘機。

?? F-35 戦闘機

アメリカ空軍および海軍にて運用されているステルス戦闘機。

日本にも自衛隊仕様のJ型が存在し、イギリス仕様のE型も存在する。

?? EF-2000 戦闘機

欧州連合共同で開発された戦闘機。

イギリスやドイツ、スペインで運用されており、欧州共通戦闘機とも呼ばれている。

?? Su-27 戦闘機

ロシア軍の戦闘機。

?? Su-33 戦闘機

ロシア海軍の艦載戦闘機。

● 輸送機

?? An-225 ムリーヤ

アントノフ225、愛称はムリーヤ。ウクライナ（旧ソ連）製の大型輸送機。

戦闘機の空挺輸送が可能で、戦闘機空輸の主力を担う、全長84m、全幅88m、全高18mの超大型輸送機。

米国、欧州、日本、国連等、全世界に多数配備されている。輸送コンテナは米国製軌道降下コンテナそのものであり、コスト削減、打ち上げ作業の省力化と、空輸中の巨大不明生物襲撃に対し戦闘機の生存率を高めるための方策として流用されている。

現実世界ではスペースシャトルの輸送（上に載せる親子亀）を想定

して作られた、300t以上（公称は250t、最大離陸重量は600t）の世界最大のペイロード量を誇る輸送機。一機のみ作られ、現存。

なお自身も世界最重だが「戦闘機なみの機動が可能」と操縦士に言わしめるほど機動性が高い。

??C-5ギャラクシー

アメリカ製の輸送機。

??An-124ルスラーン

ウクライナ（旧ソ連）製の輸送機。

??C-130ハーキュリー

アメリカ製の輸送機。

日本でも航空自衛隊が運用している。

??C-1輸送機

航空自衛隊の輸送機。

??C-2輸送機

航空自衛隊の輸送機。

●攻撃ヘリコプター

??AH-64Dアパッチ・ロングボウ

アメリカ製の攻撃ヘリコプター。

ローター上のお椀型レドームと機首先端のレーダーパッドが特徴的。

日本においても陸上自衛隊にて「対戦車ヘリコプター」として13機が運用されている。高コスト故に配備数は少ないが、世界最強のヘリコプターであることに嘘偽り無いほどの性能を誇る。

EP-20にて立川駐屯地から発進し、日米共同のIS学園警邏行動に参加した。

??AH-1Sコブラ

アメリカ製の攻撃ヘリコプター。

日本においても陸上自衛隊が運用している。

??Mil-24ハインド

ロシア(旧ソ連)製の攻撃ヘリコプター。

豊富な火器を搭載可能な他に人員を4名まで輸送可能であり、汎用ヘリコプターとしても機能する。

旧東側諸国を中心に世界各国で運用されている。

●輸送ヘリコプター

??CH-47輸送ヘリコプター

アメリカ製の輸送ヘリコプター。

日本でも陸上自衛隊にて運用されており、災害派遣等で高い実績を持つ。

??MH-53ヘリコプター

アメリカ製の輸送ヘリコプター。

??Mil-8ヘリコプター

ロシア製のヘリコプター。

●爆撃機

??B-1Bランサー

アメリカ軍の爆撃機。

可変翼による加速を生かした高速機動と精密爆撃を可能とする。

?? B-52 ストラトフォートレス

アメリカ軍の戦略爆撃機。

1952年に開発された、東西冷戦を代表する爆撃機。

大陸間爆撃機と呼ばれるほどの航続距離と通常爆弾45発・巡航ミサイル20発・戦略核兵器ないし水素爆弾の搭載すら可能であるなど、「成層圏の要塞」に相応しい火器搭載内容となっている。

また、本機は2055年まで運用予定であるという。

?? Tu-95

ロシア軍の戦略爆撃機。

東西冷戦を代表する爆撃機であり、B-52に対抗して開発された。

レシプロ機でありながら、ジェット機に匹敵する飛行速度を持つ。

●飛行艇

?? US-2 救難艇

海上自衛隊にて運用されている救難艇。

?? ACS-3 しらさぎ

海上自衛隊の飛行艇。

3式機龍の空輸・援護を目的に開発された超大型攻撃輸送飛行艇。

胴体に搭載する形で輸送した後、機龍と機体を接続しているワイヤーをクレーン代わりに機龍を地上へと降下させる。

非常時はロックボルトを解錠し、機龍を強制投下する形で空挺降下させることが可能となっている。

また、戦闘時の機龍を支援することも視野に入れて設計されており、機龍のエネルギーを補給する為の充電用マイクロ波送信機を機体

下部に備えているほか、120mm砲と巡航ミサイルの発射サイロに加えて機首直下格納式ガンポッドにメーサー砲を搭載しているなど、ガンシップとしても機能する。

1号艇が横須賀に配備され、2号艇が広島県呉市の海上自衛隊呉基地で就役したばかりである。

??超高速飛行艇【モップ号】

東の飛行艇。

キャロツ島襲撃により、同島から退避する際に東が使用した。



◆海上兵器◆

●戦艦

??やまと型護衛艦

海上自衛隊の護衛艦であり旧大日本帝国海軍の戦艦。

史実では4番艦は建造中止、信濃は空母に改装されたのち米軍潜水艦の雷撃により轟沈、武蔵はフィリピン沖で轟沈、大和は沖縄特攻に出撃し轟沈した。

こちらの世界では4番艦天城が建造されており、信濃が戦艦として就役している（後にフィリピン沖で轟沈）。

大和と天城がレイテ沖海戦で湾内に突入し、輸送船団の多くを葬るも、帰投中に雷撃を受け両艦共に中破。呉基地所有の江田島特秘ドッグに極秘裏に入るが、たび重なる資源不足と資材が他艦に回されたために修理が1年以上遅れてしまい、代わりに戦艦武蔵が沖縄特攻に出撃している。

1962年に海上自衛隊が江田島特秘ドッグを発見し、そこに同じ

く鎮座していた状態で発見される。

その後海自が摂取し、アメリカが対中ソ戦を見据えた事とソ連海軍に対する抑止力とするべく、日本に要請する形で砲撃護衛艦として就役した。

しかしすでに世界は制空権がモノを言う時代となっており、さらに東西両陣営の緊縮緩和が進んだために目立った活躍がないまま予備役となり、博物館か記念艦として余生を過ごすと考えられていたが1971年・太平洋方面の日本領海内に侵入した世界で3番目の巨大不明生物に対して航空機では火力不足であるという結果となるや絶大な火力を誇る戦艦に出番が来ることとなり、「やまと型」2隻と後述の「きい型」2隻の計4隻が「有害鳥獣駆除目的の災害派遣」に基づき出撃。領海・接続水域の境界にて「やまと型」は戦後初、「きい型」は事実上の初陣を飾り、3時間におよぶ追撃戦を展開。見事殲滅せしめた。

だがこの当時は国連直属のモナーク機関（旧米軍参謀本部隷下未確認巨大陸生生物対策機関）により巨大不明生物の存在が伏せられていたため、公式には『「やまと型」、「きい型」は領海侵犯してきたソ連の駆逐艦に対する威圧を行うために出撃させた』という結果にされ、巨大不明生物の死骸はモナーク機関に回収されるなど、活躍しようとも戦果はないという結果を迎えてしまうが、「巨大不明生物に戦艦の火力が有用である」という結果を残し、アメリカ海軍で20年遅れてモータナ級戦艦とアイオワ級5番艦6番艦が建造されるなど、必ずしも負の面ばかりではなかった。

しかし国民は同護衛艦の活躍を知らないために同護衛艦に対して疑念を抱いてた上に、湾岸戦争・レバノン侵攻でミサイル駆逐艦の方が（対人類戦では）戦艦より有用であり、戦艦の有用性が消滅した事、さらにソ連の崩壊により存在価値を喪失してしまい、完全に無用の長物となってしまう。

その結果極秘裏にモナーク機関に数回の巨大不明生物戦に協力した事や観艦式旗艦を勤めた以外に経歴はなく、現役から予備役に回されることとなる。

しかしソ連崩壊後に勃発したロリシカ独立戦争後に発生したバルゴンによる日本本土侵攻の危険性と25キロ圏内にまで近づいた航空機を生体レーザーにより撃墜・完全無力化という事態に陥った為に現役に復帰。

国民に知られることはなかったが2001年から2021年に至るまで、ISが台頭しても人知れずロリシカ支援の任に就いていた――最も、巨大不明生物の存在露呈により機密情報とされていた冷戦下における戦艦による対巨大不明生物戦の情報は開示されたため、「やまと型」および「きい型」は日隠者の苦悩から解放されたと言える。

ちなみに2008年からおよそ60年ぶりに新規艦が2隻造船される予定が入っており、2017年に3番艦「はりま」が、2020年には「むさし」が就役している。

就役して以降数次の近代化改装を受け、対レーザー近接防御システム、準イーゼルスシステム搭載による衛星データリンク射撃管制システム、後部甲板の飛行甲板化と艦載機増加による対潜能力の向上、NNリアクター機関搭載による速力向上と航続距離および電力の無制限化が図られた。

また特務自衛隊（現・特生自衛隊）から技術提供された超耐熱耐弾人工ダイヤモンドコーティング複合装甲を船体を使用。また艦橋やVLSへの直撃を防ぐべく新たに艦体側面中央部両舷に増設された4基のシールド・アレイ構造物に使用するなど最新装備が施されている。

2021年現在、艦歴80年を迎えた今でも横須賀基地に所属し対巨大不明生物戦において第一線に立ち続け、獅子奮迅の戦いを繰り広げている。

6月14日時点では「やまと型」護衛艦2隻、「あいづ型」ないし「しらね型」ヘリコプター搭載護衛艦2隻、「はたかぜ型」ミサイル護衛艦2隻、「あさひ型」ないし「あきづき型」汎用護衛艦2隻から成る対獣撃艦隊が2艦隊編成されている。

- ・全長：263メートル
- ・全幅：38.9メートル
- ・機関：NNリアクター機関
- ・機関出力：212000馬力
- ・最大速力：33.6ノット
- ・基準排水量：64000トン
- ・満載排水量：72800トン
- ・主砲：460mm砲三連装2基
- ・兵装

OTOメラール127mm単装速射砲8基
155mm両用砲三連装2基

20mmフアランクスCIWS機関砲6基

RAM近接防御誘導弾4基

Mk.41垂直誘導弾発射システム(VLS)110セル

- ・装甲：対20インチ超耐熱耐弾人工ダイヤモンドコーティング複

合装甲

- ・艦載機

戦術機4機

哨戒ヘリコプター2機

メカゴジラ
MFS級大型兵器1機

(同型艦)

??やまと

1番艦。海上自衛隊横須賀地方隊第11護衛隊所属。同護衛隊の旗艦を務める。

EP-19にてIS学園警戒任務のため日米臨時編成軍の一員として警戒任務に就く。

その後警戒レベルが引き下げられ一時横須賀に帰投したがEP-35でゴジラが出現した際、僚艦「あまぎ」と共に横須賀から緊急出撃。

EP-42の館山市防衛戦に参加し、房総半島館山市沖合37.5kmの海域・東京海底谷直上に展開し、熱線射程圏外のアウトレンジ

から艦砲射撃による遅滞攻撃を敢行。

アウトレンジからの精密射撃と、熱線に耐え得る堅牢さを見せた。

??あまぎ

2番艦。海上自衛隊横須賀地方隊第11護衛隊所属。

EP-35でゴジラが出現した際、僚艦「やまと」と共に横須賀から緊急出撃。

EP-42の館山市防衛戦に参加し、房総半島館山市沖合37.5kmの海域・東京海底谷直上に展開し、熱線射程圏外のアウトレンジから艦砲射撃による遅滞攻撃を敢行。

アウトレンジからの精密射撃と、熱線に耐え得る堅牢さを見せた。

??はりま

3番艦。74年ぶりの新規同型艦であり、次世代砲撃護衛艦のテストベッド艦。「はりま型」とも呼ばれている。

現在は広島県呉基地に所属している。

??むさし

4番艦。「はりま」をベースに建造された、進水したばかり新造艦。佐世保基地所属。

??しなの

5番艦。呉造船所にて建造中。7月までには進水可能とのこと。

??ながと

6番艦。計画中。

??きい型護衛艦

海上自衛隊の護衛艦。史実では計画が中止された超大和型戦艦に相当する旧大日本帝国海軍の戦艦だが、こちらの世界では紀伊型戦艦として建造されていたが完成は間に合わず、ドッグに建造途中で放棄されたまま終戦を迎えた。

戦後、アメリカ軍に水爆実験の実験台として主砲を徴収され、警察予備隊から改組された保安隊の後継たる自衛隊への改組に伴い海上戦力の主力として日本が戦後から落ち着いた1954年に建造が再開された。

だがその年に世界で最初の巨大不明生物が東京に上陸（当時は米国

の圧力により箝口令が敷かれ隠蔽された。し、復興予算に建造費を奪われたため建造スケジュールは遅れに遅れ、さらに旧大日本帝国海軍に隠匿されていた大和型戦艦が完全な形で発見され建造中の「きい型」を差し置いて「やまと型」として再就役した上に汎用護衛艦の多数配備計画も重なり、砲撃護衛艦として就役したのは建造再開から12年経過した1966年だった。

この時点で「やまと型」が直面していた戦艦の不要論が強まっていた時期であり、さらなる不幸として、本艦を建造したのはあくまで日本が空母を持つだけの国力がないことを証明しソ連を刺激しないための金食い虫役を押し付けられていたという酷な話がある。

それを覆したのが、前述の日本領海・接続水域間における巨大不明生物との戦闘である。

これによつて対巨大不明生物戦において「やまと型」と共に「きい型」も有用性を発揮したが、元より「やまと型」より巨大で、尚且つ航続距離が短く、さらに足も遅いためそれ以降巨大不明生物戦に駆り出される事はなく、大規模改装が幾度も計画されたがミサイル護衛艦やヘリコプター搭載型護衛艦など対人類戦向けの護衛艦開発・建造に予算を取られてしまい、さらには前述の湾岸戦争やレバノン侵攻における戦艦の価値消滅に伴い「やまと型」と共に予備役となったが試作型NNリアクター機関搭載試験艦として「やまと型」より一足早く再就役し、ロリシカでのバルゴン出現以降、やまと型同様の大規模改装を施され（ただし、シールド・アレイ構造物は予算の都合により増設が見送られた。）艦歴55年を迎えた今でも第一線に身を投じている。

- ・ 全長：293メートル
- ・ 全幅：39.9メートル
- ・ 機関：NNリアクター機関
- ・ 機関出力：23000馬力
- ・ 最大速度：31ノット
- ・ 基準排水量：79700トン
- ・ 満載排水量：96000トン

- ・主砲：460mm砲三連装3基
- ・兵装

OTOメラーラ127mm単装速射砲12基

155mm両用砲三連装2基

20mmフアランクスCIWS機関砲8基

RAM近接防衛誘導弾2基

Mk.41垂直誘導弾発射システム(VLS)128セル

・装甲：対20インチ超耐熱耐弾人工ダイヤモンドコーティング複合装甲

- ・艦載機

戦術機6機

哨戒ヘリコプター3機

(同型艦)

??きい

1番艦。EP-16にて樺太漸減作戦に参加、上陸部隊の支援砲撃を敢行した。

??するが

2番艦。EP-14にてロリシカ派遣中隊の回収の為にロリシカ領マガタン港に寄港。

EP-16では樺太漸減作戦に参加。鷹月仁一尉率いる陸上自衛隊第1師団第1戦術機連隊隷下第3戦術機小隊の母艦を務めた。

??3・4番艦

紀伊型の後期型で、前期型である1・2番艦より僅かに小型化している。

建造途中で空母への改装がなされようとしていたが、終戦に間に合わず放棄された。

当初は戦後の復興材料として解体予定だったが、終戦間際の混乱期に行方不明となっていた。

その後消息不明であったが、1980年代の琵琶湖運河再生計画発動後、琵琶湖の永原旧海軍秘匿工廠跡にてモスボール保存された状態で発見された。

2隻は解体予定だったが、後に「いずも型」の船体に流用された。

??アイオワ級戦艦

アメリカ海軍の戦艦。

第2次世界大戦終結後から朝鮮戦争、ベトナム戦争に派遣された以外にモナーク機関指揮下のもと、MUTO（未確認巨大陸生生命体）探索の司令艦として使用された。

当時は航空機やヘリコプターの有用性が知られ、戦艦が軽視されていたが1971年の「やまと型」と「きい型」の戦果を耳にしたペンタゴンによって史実では建造中止となった5番艦、6番艦がモンタナ級1番艦と5番艦と共に建造される。

レバノン侵攻と1992年の湾岸戦争にて対人類戦における戦艦の価値が消滅し、全艦が予備役ないし退役の危機に瀕するがモナーク機関の想定を遥かに上回る物量の巨大不明生物が出現したロリシカに派遣することでその役目を食い？いだ。

現在では近代化改修が施され、巡航ミサイル発射プラットフォームとしても機能する。

余談だがアイオワ級の乗員は本級と同規模である海自の「やまと型」を（勝手に）ライバル視しているらしい。

（同型艦）

??アイオワ

アイオワ級1番艦。

日本・佐世保基地を母港とし、アメリカ海軍第7艦隊に在籍している。

??ニュージャージー

アイオワ級2番艦。

ロリシカ・ペトロパブロフスクカムチャツキー基地を母港とし、アメリカ海軍第7艦隊に在籍している。

??ミズーリ

アイオワ級3番艦。

ハワイ・真珠湾基地を母港とし、アメリカ海軍第7艦隊に在籍している。

??ウイスコンシン

アイオワ級4番艦。

日本・横須賀基地を母港とし、アメリカ第7艦隊に在籍している。

IS学園への監視派遣により、洲崎沖合に展開。

現在は警戒レベル低下に伴い東京湾内に後退している。

??イリノイ

アイオワ級5番艦。史実では建造中止。

サンディエゴ・ロマ岬基地を母港とし、アメリカ海軍第3艦隊に在籍している。

??ケンタッキー

アイオワ級6番艦。史実では建造中止。

シアトル・エバレット基地を母港とし、アメリカ海軍第3艦隊に在籍している。

??モンタナ級戦艦

アメリカ海軍の戦艦。

1971年の「やまと型」と「きい型」が巨大不明生物を殲滅した戦果を耳にしたペンタゴン指揮の下で建造された、アイオワ級を上回る、史実では全艦建造中止となった戦艦。

建造後はモナーク機関の指揮下で制御不能となったMUTO（未確認巨大陸生生物）の殲滅作戦に参加した。

レバノン侵攻や1992年の湾岸戦争で戦艦の価値が消滅したのちにアイオワ級共々退役する予定だったが、ロリシカにおけるモナークが想定していた規模を遥かに上回る物量の巨大不明生物が出現し、それに対処しなくてはならなくなったためアイオワ級と共にロリシカ戦線に加勢することでその役目を食い繋いでいる。

2021年6月14日時点ではモンタナ級1隻、ニミッツ級ないしジェラルド・R・フォード級N2機関改装型正規戦術航空母艦2隻、巡洋艦2隻、駆逐艦3隻で構成された対怪獣用の母艦打撃群を編成し、

日本海と地中海に展開している。

(同型艦)

??モンタナ

モンタナ級1番艦。史実では建造中止。

米国バージニア州・ノーフォーク基地を母港とし米国海軍第2艦隊に所属している。

現在はノーフォーク基地の造船所にて整備中である。

??オハイオ

モンタナ級2番艦。史実では建造中止。

ロリシカ、ペトロパブロフスクカムチャツキー基地を母港とし米国海軍第7艦隊に所属している。

現在はロリシカ海軍の打撃艦隊と共に艦対地砲撃による面制圧任務に参加している。

??メイン

モンタナ級3番艦。史実では建造中止。

イタリア・ガエータ基地を母港とし米国海軍第6艦隊に所属している。

現在は欧州各国海軍と共に東欧に展開し、巨大不明生物への侵攻遅滞を目的に艦対地砲撃を実施している。

??ニューハンプシャー

モンタナ級4番艦。史実では建造中止。

ハワイ・真珠湾基地を母港とし米国海軍第7艦隊に所属している。

??ルイジアナ

モンタナ級5番艦。史実では建造中止。

シアトル・エバレット基地を母港とし米国海軍第3艦隊に所属している。

??ビスマルクII級戦艦

ドイツ海軍の戦艦。

1940年に就役した、ドイツの科学力や知識の粋を結集した戦艦であり、「鉄の聖堂」と称えられた。

その戦艦は、第2次世界大戦時、イギリス海軍と苛烈極まる激戦を繰り広げ、ビスマルクは空母打撃群に包囲されながらも包囲網を食い破りドイツ領ヴィルヘルムスハーフェンに帰還し、ティルピッツはノルウエー水域へ向かう途上に爆撃され、ヘルゴラント島に着底する形で大戦を生き延びた。

冷戦時代は連合国に接收された後に1950年代の西ドイツに返還され、ビスマルクは「ビスマルクII」と改称して同国のドイツ連邦軍設立後、水上部隊旗艦を務めた。

一方ティルピッツは完全に観光名所と化し、戦力になる事は無かった。

直接的に巨大不明生物に脅かされるが無かった為に、ビスマルクIIは1991年の冷戦崩壊と同時に退役。

ティルピッツ共々、敗戦モニュメントと化すが、2016年のウクライナでのギャオス出現を受け、急遽大改装を受け現役に復帰し、獅子奮迅の活躍をして見せた。

また先の大戦でドイツ領ヘルゴラント島に着底したティルピッツも保存状態が良好であった為に、本土決戦時に備えた「ティルピッツ要塞」に改造されている。

2021年6月14日時点ではバルト海に展開し、ポーランド撤退支援作戦に参加している。

(同型艦)

??ビスマルクII

1 番艦。ドイツ連邦海軍第1機動団旗艦を務めている。

??ティルピッツ

2 番艦。現在は洋上要塞化されている。

??ドイツチユラント級装甲艦 (ポケット戦艦)

ドイツ海軍の装甲艦 (ポケット戦艦)。

史実では全艦が戦没ないし除籍によって喪われている。

この世界では、反体制派となり連合国側となった(史実において自沈した) 3 番艦「アドミラル・グラーフ・シユペー」のみが現存している。

だが長年博物館とされていた為に近代化改修はされておらず、現時点では戦力足り得ないので、ドイツ本土から日本・横浜に国民を乗せた疎開船団を護衛したのち、現地で近代化改装を受けている。

??フリードリヒ・デア・グロッツセ級戦艦

ドイツ海軍の戦艦。

H39戦艦とも言う。史実では全艦建造中止。

この世界では3隻就役しており、それらは戦後連合国に接收された後に、1番艦・3番艦は西ドイツ海軍として、2番艦は東ドイツ海軍として東西ドイツの対立に組み込まれた。

その為ある種のプロパガンダとして3隻は東西ドイツ双方で延命させられ、ベルリンの壁崩壊と東西ドイツ統一まで同型艦同士での対立を強いられていた。

冷戦終結後は解体もしくは売却される予定だったが、計画が難航し放置されていた。

しかし2016年にウクライナのギャオス出現を受けて急遽全艦が現役に復帰。

改装を受けていた為にウクライナ戦線に派遣される事は無かったが、2021年6月14日時点で、ビスマルクIIと共にポーランド撤退支援作戦に参加している。

(同型艦)

??フリードリヒ・デア・グロッツセ

1番艦。現在はポーランド撤退支援作戦に伴いバルト海に展開している。

??ロスバツハ

2番艦（東ドイツ海軍時代の艦名はカール・マルクス）。

現在はポーランド撤退支援作戦に伴いバルト海に展開している。

??クネルスドルフ

3番艦。現在はポーランド撤退支援作戦に伴いバルト海に展開している。

??シャルンホルスト級戦艦

第1次大戦後に建造された戦艦。

第2次世界大戦以降は生き残った2番艦がモナーク機関に貸与されていたが、ウクライナでのギャオス発生を受けドイツ海軍に復帰した。

??シャルンホルスト

1番艦。

1943年に戦没。

??グナイゼナウ

2番艦。

現在はポーランド領シチエチンに停泊中。

??グローサークルフルスト級戦艦

ドイツ海軍の戦艦。史実では建造中止。

ウクライナ戦線瓦解後を見据えて、2017年から「オーデル川防衛計画」の一環として建造が開始された。

460ミリ3連装砲を4基搭載しており、装甲にも対レーザー防御処置が取られている。

現在はポーランド撤退支援作戦に参加している。

(同型艦)

??グローサークルフルスト

1番艦。現在はポーランド領シチエチンに停泊中。

??ケーニヒ

2番艦。現在はドイツ領ハンブルクにて艀装作業中。

??キングジョージ5世級戦艦

イギリス海軍の戦艦。

先の大戦でドイツ海軍と苛烈極まる激戦を繰り広げ、戦没した2番艦を除いて全艦が戦後も現役であり続けた。

冷戦時代は対ソ連警戒と、巨大不明生物（米国呼称：MUTO）出現に伴う調査・場合によつては殲滅が求められる為に国連・モナーク機関に貸与された。

2016年、ウクライナにギャオスが出現した際に返還され黒海に展開し、対地支援砲撃を敢行した。

2021年6月14日時点ではバルト海、地中海に展開し、各地の支援作戦に全艦が参加している。

(同型艦)

??キングジョージ5世

1番艦。現在はポーランド撤退支援作戦に参加している。

??プリンス・オブ・ウエールズ

2番艦。第2次世界大戦にて戦没。

??デューク・オブ・ヨーク

3番艦。現在は黒海に展開し、欧州主要防衛線であるブルガリアのバルカン山脈防衛線の支援に当たっている。

??アンソン

4番艦。現在は地中海キプロス島近海に展開している。

??ハウ

5番艦。現在はノルウェー沖の北海に展開している。

??ライオン級戦艦

イギリス海軍の戦艦。

史実では全艦が計画段階で建造中止となったが、この世界では史実よりも戦果を挙げたドイツ海軍に対抗するべく、アメリカの支援を受けて全艦が完成・就役している。

(同型艦)

??ライオン

1番艦。現在はポーツマス海軍基地に停泊中。

??テメレーア

2番艦。現在はバルカン山脈防衛線の一角として黒海に展開している。

??コンカラ

3番艦。現在はバルカン山脈防衛線の一角として黒海に展開している。

??サンダラー

4番艦。現在は北海に展開中。

??ヴァンガード級戦艦

イギリス海軍の戦艦。

第2次世界大戦後に建造された、イギリス戦艦の集大成とも言える艦。

充実した対空、レーダー兵装はもちろん、イギリス新戦艦で問題となっていた不具合や欠点を解消すべく意欲的に現場からの改良要求を設計に取り入れた結果、イギリス戦艦史上の最良の戦艦と呼べるものになった。

しかし就役は大戦中に間に合わず戦局に全く寄与することは出来なかった。

その結果早々にモナーク機関に貸与される事となった。

2016年のウクライナにおけるギャオス出現を受けてモナーク機関より返還され、大改装を受けた他、レールガン運用試験艦として姉妹艦の建造が開始された。

2021年6月14日時点では、イギリス近海の警備に就いている。

(同型艦)

??ヴァンガード

1番艦。現在はブリテン島近海の北海に展開している。

??サンダーチャイルド

2番艦。ドイツから貸与されたIS・シュヴァルツアレーゲンのパソツァーカノニアの試作型を砲塔化し、その運用艦として現在艤装中。

艦名は「雷震の子」の意味を持つ。

(名前の元ネタはH・G・ウェルズのSF小説『宇宙戦争』に登場する水雷衝角艦《サンダー・チャイルド》)

??レナウン級戦艦

イギリス海軍の戦艦。

??レナウン

1番艦。

??ネルソン級戦艦

イギリス海軍の戦艦。

現在運用されている英国戦艦の中では最も古く、老朽化も激しいため予備役となっている。

航行速度が遅いことと、40.6cm3連装砲を3基、5インチ単装速射砲6基、ハーブーン対艦ミサイル16基という重装備であるため、拠点防衛用の砲艦として運用されている。

また、平時は砲術練習艦としても運用されている。

(同型艦)

??ネルソン

1番艦。現在はドイツ・ポーランド国境、シュチエチンに展開中。

??ロドニー

2番艦。現在はイギリス領テムズ川河口に展開中。

??リシユリユー級戦艦

フランス海軍の戦艦。

第2次世界大戦以降、度重なる改修と改装を受けた為、洋上火力投射プラットフォームとして機能する他にヘリコプター艦載能力を有している。

2021年6月14日時点ではバルト海や自国周辺海域などに展開している。

(同型艦)

??リシユリユー

1番艦。現在はビスケー湾に展開中。

??ジャン・バール

2番艦。

??クレマンソー

3番艦。現在はバルト海に展開中。

??改リシユリユー級戦艦

フランス海軍の航空戦艦。

史実では建造中止。

先の大戦後、ヘリコプター搭載艦として機能し、冷戦時の潜水艦哨戒任務に多いに貢献した。

2021年6月14日時点では地中海に侵入したであろう巨大不明生物の哨戒活動を行っている。

(同型艦)

??ガスコーニユ

1番艦。現在はギリシャ領クレタ島近海に展開中。

??エクレール

2番艦。現在は英仏海峡ドーバー基地にて、対獣新型誘導弾「プロトン・ミサイル」の搭載作業と、新概念兵器《大鉄球型メーサー投射砲》の艀装作業が行われている。

(艦名の元ネタはゴジラFINAL WARSに登場した地球防衛軍フランス方面軍の空中戦艦《エクレール》)

??ヴィットリオ・ヴェネト級戦艦

イタリア海軍の戦艦。

先の大戦後、連合国に一時的に徴収された後に国連軍を経てイタリア海軍に返還された。

イタリア海軍としてはスクラップとして解体したかったのだが、大戦時は当初枢軸側であったことから、空母を建造する余裕を奪うべく冷戦終結までその維持を半ば義務化されていた。

冷戦終結後は解体が行われる手筈だったが、2016年のウクライナにおけるギャオス出現に伴い全艦を急遽現役に復帰。

2021年6月14日時点では地中海およびエーゲ海に展開している。

(同型艦)

??ヴィットリオ・ヴェネト

1番艦。

??リットリオ

2番艦。

??インペロ

3 番艦。 史実では建造途中で解体。

??ローマ

4 番艦。 第2次世界大戦にて戦没。

??プラティパスⅢ級戦艦

オーストラリア海軍の航空戦艦。

戦術機の運用及び単独支援を想定して2018年から建造された。
2021年6月14日時点では、カーペンタリア湾に展開中。

(同型艦)

??プラティパスⅢ

1 番艦。

??ガングート級戦艦

ロリシカ海軍の戦艦。

1 番艦は第1次世界大戦時に完成したものであり、現役戦艦の中では世界最古の艦艇。

ロシア革命後、亡命白系ロシア人(旧ロシア帝国臣民)と共にカナダへ亡命した後、紆余曲折を経てロリシカ独立戦争に参加。

ロリシカ独立後は対バルゴン戦の第一線に立つと共に、新たな新規姉妹艦がアメリカで建造され、3隻体制でロリシカ防衛に当たっている。

現在はカムチャツカ半島防衛の為にオホーツク海に展開している。

(同型艦)

??ガングート

1 番艦。

現在はオホーツク海に展開中。

??チエルスキー

2 番艦。 EP-16にて樺太漸減作戦に参加し、コルイマと共に艦砲射撃を実施。

EP-35にて、エリザよりペトロパブロフスク・カムチャツキーで整備中である事が言及されている。

??コルイマ

3番艦。EP-16にて樺太漸減作戦に参加し、チエルスキーと共に艦砲射撃を実施。

バルゴン大型種からのレーザー照射を受け第2砲塔を破壊された。

EP-35にて、エリザよりペトロパブロフスク・カムチャツキーで整備中である事が言及されている。

??アルミランテ・ラトーレ

チリ海軍の戦艦。

第2次世界大戦後にイギリスから売却された戦艦であり、現在は南米共同体太平洋方面軍艦隊旗艦。

??ハラルド・ハールファレ

ノルウェー海軍の戦艦。

第2次世界大戦時、ノルウェー本土奪還の為にイギリスより提供されたポケット戦艦であり、記念艦としてスタバングルに係留されていたが、ギャオス出現により現役に復帰。

北欧理事海軍の旗艦を務めている。

??イルマリネン級戦艦

フィンランド海軍の戦艦。

小型の船体に254m連装砲塔を搭載した、一般には海防戦艦と呼ばれる沿岸警備用の艦艇。

そのため航続距離が短い。

厳冬期に海面が凍り付くバルト海での活動を想定しており、砕氷能力を有している。

1933年に就役し、冷戦期も対ソ戦力として活躍した本級は現在、ダンケルク作戦発動に伴い、フィンランドから国民を脱出させている船団の護衛に就いている。

(同型艦)

??イルマリネン

1 番艦。

2021年6月14日時点では、スウェーデン領ゴットランド島に向け避難民移送船団護衛に就いている。

??ヴァイナモイネン

2 番艦。

??ミナス・ジェライス級戦艦

ブラジル海軍の戦艦。

1913年から現役であり、世界大戦や冷戦を経て記念艦になっていたが、国連からの要請で急遽現役に復帰。

南米共同体海軍の艦艇として国連指揮下のもと活動している。

??ミナス・ジェライス

1 番艦。

2021年6月14日時点では国連指揮下に組み込まれ、リオデジャネイロ沖に展開中。

??サン・パウロ

2 番艦。

1951年に大西洋上で巨大不明生物の襲撃を受け轟沈。

??トンブリ級戦艦

タイ海軍の戦艦。

1938年に就役した海防戦艦であり、2000トンという駆逐艦レベル船体に重巡洋艦の主砲である203mm連装砲を搭載していた。

造船元は日本の川崎重工。これは当時列強各国によって植民地化されていた東南アジアで数少ない独立国だったタイが列強各国に対抗するべく日本の協力を受けていたことという事情が絡んでいる。

現在は記念艦となっていたが、巨大不明生物の大量発生を受け現役に復帰している。

(同型艦)

??トンブリ

1 番艦。

6月14日時点では、タイ領サツタヒーブ海軍基地に停泊中。

??スリ・アユタヤ

2 番艦。

6月14日時点では、タイ領ソンクラーク海軍基地に停泊中。

??コロラド級戦艦

1917年海軍整備計画に基づき日本帝国海軍の長門型戦艦に対抗して建造されたアメリカ海軍の戦艦。

戦後はモナーク機関に貸与される形で国連に移籍し、巨大不明生物の存在露呈後は国連海軍の戦艦として活動している。

??コロラド

1 番艦。

6月14日時点ではパキスタン領カラチ沖のアラビア海に展開している。

??メリーランド

2 番艦。

6月14日時点ではスペイン領カナリア諸島近海に展開している。

??ウエストバージニア

3 番艦。

6月14日時点ではアラフラ海トレス海峡諸島近海に展開している。

??ノースカロライナ級戦艦

アメリカ海軍がワシントン軍縮条約後に建造した戦艦。

戦後はモナーク機関に貸与される形で国連に移籍し、巨大不明生物の存在露呈後は国連海軍艦として活動している。

??ノースカロライナ

1 番艦。

6月14日時点ではビスマルク諸島ニューブリテン島近海に展開している。

??ワシントン

2 番艦。

6月14日時点では韓国領仁川沖を目指し、対馬海峡を航行している。

??サウスダコタ級戦艦

1942年に就役したアメリカ海軍の戦艦。

戦後はモナーク機関に貸与される形で国連に移籍し、巨大不明生物の存在露呈後は国連海軍艦として活躍している。

??サウスダコタ

1 番艦。

6月14日時点ではペルシャ湾ホルムズ海峡に展している。

??インディアナ

2 番艦。

6月14日時点ではイスラエル沖の地中海に展開している。

??マサチューセツ

3 番艦。

6月14日時点ではアメリカ領マイアミ沖に展開している。

??アラバマ

4番艦。

6月14日時点ではジブチ共和国に配備されている。

??ニューヨーク級戦艦

国連軍の戦艦（砲術練習艦）。

第1次・第2次世界大戦でも活躍したアメリカ海軍で最初の超弩級戦艦だったが、保存状態が悪く、腐食による浸水も発生しやすいために、ほぼ消滅した戦艦の運用ノウハウを教育する練習艦として再就役した。

（同型艦）

??ニューヨーク

1番艦。

ビキニ環礁での水爆実験に提供され、1948年7月に標的目標として沈没処分された。

??テキサス

2番艦。

サン・ジャシントで記念艦として保存されていたが、巨大不明生物の出現多発と戦艦の運用ノウハウ低下を受け、砲術練習艦として再度就役した。

●空母

??ニミッツ級空母

アメリカ海軍の正規空母。

?世界で初めて量産された原子力空母であり、1番艦の起工から10番艦の就役まで実に40年以上の期間に渡って順次に改正されつつ全10隻が建造された。世界最大級の軍艦としても知られる。?

途中で工法や設計の変更が行われたことから、小分類として4〜8

番艦をセオドア・ルーズベルト級、9・10番艦をロナルド・レーガン級と呼ぶこともある。

巨大不明生物出現に伴い、飛行甲板の強化、カタパルト配置の変更、格納庫及びエレベーター形状の刷新、耐熱耐レーザー防御システムの実装、防御兵器を簡略化しつつレーザー砲への強化などの改修を施された。

(同型艦)

??ニミッツ

1番艦。

??ドワイト・D・アイゼンハワー

2番艦。

??カール・ヴィンソン

3番艦。

??セオドア・ルーズベルト

4番艦。

??エイブラハム・リンカーン

5番艦。

??ジョージ・ワシントン

6番艦。描写されてはいなかったが、EP-17のラドン飛来(ニューヨーク攻防戦)時にノーフォーク基地から緊急出撃していた。

??ジョン・C・ステニス

7番艦。

??ハリー・S・トルーマン

8番艦。

??ロナルド・レーガン

9番艦。第7艦隊(太平洋艦隊)所属、2021年6月14日時点では神奈川県横須賀基地に配属されている。

??ジョージ・H・W・ブッシュ

10番艦。

??ジェラルド・R・フォード級空母

米国海軍の原子力超大型正規戦術航空母艦。

高いステルス性と強力な個艦防御兵装、米軍初となる電磁カタパルトを採用した（現時点での）最新鋭航空母艦。

2016年の巨大不明生物出現後、2番艦以降を全て設計変更し、飛行甲板の強化、カタパルト配置の変更、格納庫及びエレベーター形状の刷新、耐熱耐レーザー防御システムの実装。

防御兵器を簡略化しつつレーザー砲への強化などの改修を施され、戦術機1個大隊強（約40機）の戦力投射が可能な本格戦術機母艦となっている。

飛行甲板上に12基のエレベーターがあり、戦術機1個中隊（12機）の迅速な展開が可能となっている。

（同型艦）

??ジェラルド・R・フォード

1番艦。本艦のみ計画通り航空母艦として建造され、その後戦術機母艦へ改装された。

??ジョン・F・ケネディ

2番艦。東南アジア洋上基地「ヤンキー・ステーション」に配備されている。

??エンタープライズ

3番艦。

??サラトガ

4番艦。ゴジラ搜索の予備戦力として硫黄島にて待機中。

??コンステレーション

5番艦。

??マティアス・ジャクソン

6番艦。

??いずも型護衛艦

海上自衛隊のヘリコプター搭載護衛艦。

? 先行して建造・配備されたひゅうが型をもとに、琵琶湖にてモスボール保存されていた旧紀伊型戦艦3番艦4番艦の船体を改装した為、現実世界のいずも型よりも大型化している。

航空運用機能や多用途性を強化しており、兵装はひゅうが型と比べ簡易な物となり、よりヘリ空母に近づいた設計となっているが、対巨大不明生物戦を想定して、ドイツより5インチ超電磁単装砲を2基搭載している。

前級のひゅうが型と比較していずも型は艦そのものの戦闘能力は低く抑えられており、ヘリコプターの運用に重点を置いた艦である。多機能レーダーやソナーは簡略化されており、武装も20mm CIWSおよび5インチ超電磁単装砲など最低限の自衛火器および支援火器を除いては搭載せず、対潜用の魚雷すらない。本艦は艦隊中核のプラットフォームに徹する運用が想定されており、防空能力の高い護衛艦を伴った艦隊として運用することを前提としている。

だがその代償に、指揮・統制能力を強化している。また、同甲板には大画面モニターを複数そなえた多目的室が設けられており、統合任務部隊司令部（幕僚等100名規模）を設置できる。プレスセンター等としても使用できるように床下配線スペースがあり、非常用の医療区画としても使用できるように手術灯や簡易手術台となる机なども装備されている他、戦術データ・リンクに至ってはひゅうが型を凌駕しており、アメリカ軍の静止軌道衛星とも通信可能なだけの指揮・通信システムも保有している。

また船体自体が巨大化した為、ヘリコプターの駐機スペースが5つに増加した他ハンガー内の格納機数、設備等も充実したものとなった。

2021年6月14日時点では急ピッチで戦術機運用に対応した仕様に改装する作業が行われている。

（同型艦）

??いずも

1番艦。横須賀基地にて戦術機運用に対応した仕様への改装作業が実施されている。

??かが

2番艦。呉基地にて戦術機運用に対応した仕様への改装作業を実施中。以前STOL仕様への改装が行われていた為7月までには作

業が完了する見込みである。

??ひゅうが型護衛艦

海上自衛隊のヘリコプター搭載護衛艦。

? 高度な指揮統制能力と合わせて、対潜・対空ミサイルを発射できる垂直発射システムと新開発のC4 ISTARシステムにより艦自身が強力な対潜・対空戦闘能力を備えており、航空機運用に特化した航空母艦ではなく、自前の装備で対潜戦などを行える護衛艦としての機能も重要視されている。?

? また広大な全通甲板と大きな船体容積によつて、多数のヘリコプターを同時運用する能力を備えている。これにより、従来のヘリコプター搭載護衛艦よりも優れたゾーン対潜戦能力を実現するとともに、輸送ヘリコプターや救難ヘリコプターにも対応できることから、災害派遣や国際平和活動など戦争以外の軍事作戦、水陸両用作戦の支援など多彩な任務に対応可能となっている。?

これらの点から、2021年6月14日時点では日本海にて巨大不明生物の哨戒任務に着いており、場合によっては殲滅が求められる為に、D-03誘導弾／魚雷を装備している。

(同型艦)

??ひゅうが

1 番艦。 京都府舞鶴基地所属であり、現在日本海に展開中。

??いせ

2 番艦。 長崎県佐世保基地所属であり、現在対馬海峡に展開中。

??クイーン・エリザベス級空母

イギリス海軍の正規空母。

? 当初計画によると、F-35B艦上戦闘機と艦載ヘリコプターをあわせて最大48機の搭載を予定していたが、上記のようにF-35はB型からC型、再度B型に変更されている。艦載ヘリコプターは哨戒型と早期警戒型のマーリン HM-2や攻撃型のアパッチ AH Mk 1を予定しているが、V-22の搭載と運用も視野にいて

設計されている。？

また3番艦・4番艦は2016年のウクライナにおけるギャオス出現を受けて、戦術機運用を視野に入れて1個中隊+2個小隊(18機)を艦載可能となるよう再設計された為に大型化している。

1番艦・2番艦の合計搭載機数は約40機、20機を格納庫に収容可能であり後に戦術機母艦に改装されたが、艦体規模の制限から戦術機を2個小隊(6機)しか運用出来ずにいた。

3番艦・4番艦は約60機を搭載可能、30機を格納庫に収容可能となっている。

STOVL空母とされていることから、滑走エリアはインヴェンシブル級と同様、首尾線と平行に設定されており、その先端部、飛行甲板の左舷前部には13度の傾斜をもつスキージャンプ勾配が設けられている。

艦載機であるF-35Bはアフターバーナー、戦術機タイフーンIIは跳躍ユニットを備え、排気が高温になることから、スキージャンプから160メートルの位置にブラスト・デフレクターが設けられている。

(同型艦)

??クイーン・エリザベス

1番艦。2021年6月14日時点ではイギリス海軍マンセル要塞に配備されている。

??デューク・オブ・エディンバラ

2番艦。建造途上で戦術機運用を前提とした設計に直された為中途半端に大型化しているが、十分な運用に至る程では無かった。

2021年6月14日時点ではバルト海に展開し、ポーランド撤退支援作戦に参加している。

??プリンス・オブ・ウェールズ

3番艦。本艦以降、戦術機運用を前提として計画的に大型化している。

2021年6月14日時点ではブルガリア領ブルガス湾に展開し、バルカン山脈防衛線の支援に尽力している。

??アーク・ロイヤル

4番艦。EP-20にて欧州連合極東派遣軍艦隊を率いてベリ
ング海を移動中にスピット・エビラの襲撃を受けるも窮地を脱した。
2021年6月14日時点では東京湾中央防波堤地区に設けられ
た臨時港に寄港している。

??インヴェインシブル級空母

イギリス海軍の近代軽空母。

スキージャンプ型発艦方式を採用しており、全通飛行甲板の左舷側
が滑走レーンとされている。

艦首尾線にほぼ平行ではあるが、当初は艦首にシーダート発射機が
設けられていたことから、これを避けるため、わずかに左側に寄せら
れている。ヘリコプターの発着スポットが6ヶ所、滑走レーンには
4ヶ所のスタート・ポイントが設定された。

巨大不明生物出現後は改装戦術機母艦となり、2万2000t級
の小型空母であり、船体が小さいために1個戦術機小隊の運用が限界
と全面改修は見送られ、限定的な戦術機運用設備の設置と対巨大不明
生物戦仕様への変更のみが施された。

(同型艦)

??インヴェインシブル

1番艦。2021年6月14日時点ではイギリス海軍マンセル要
塞に配備されている。

??インディファデイクブル

2番艦。2021年6月14日時点ではブルガリア領ブルガス湾
に展開し、バルカン山脈防衛線の支援に回っている。

??イーグル

3番艦。2021年6月14日時点ではキプロス島近海に展開し
ている。

??支援航空母艦アーガス

イギリス海軍の航空支援艦。

?艦尾甲板には、広大なヘリコプター甲板が存在しており、?

ハンガーにはシーハリアー8機とシーキング3機を収容可能(これ

に加えてヘリコプター甲板上にヘリコプター3機を露天駐機できる)。

また本艦は、病院船としての機能も重視して改造されており、当初は100床の病床を備えていた。その後、2001年の改修で手術室4室、集中治療室20床、一般病床90床に増強された。

??シャルル・ド・ゴール級空母

フランス海軍の正規空母。

? 同海軍初の原子力水上艦かつアメリカ海軍以外では唯一の原子力空母でもある。?

ヨーロッパの海軍では数少ないの正規空母であり、アメリカ海軍の空母と同じように蒸気カタパルトを備えている。デザインは正規空母としてはじめてステルス性を考慮したものとなり、エンクローズ型艦首から艦尾に渡って飛行甲板が設置され、カタパルトは艦首側とアングルド・デツキ側にそれぞれ1条ずつ設置された。

また格納庫内に艦載機約40機を収容可能となっている。

(同型艦)

??シャルル・ド・ゴール

1番艦。

??ジャン・ソヴァニヤルグ

2番艦。

??フィリップ・ペタン

3番艦。

??空母ジャンヌダルク

フランス海軍のヘリコプター空母。

一度は退役したが、巨大不明生物出現の混乱により、現役に復帰した。

??軽空母カブール

イタリア海軍の軽空母。

? 左舷側の前端には12度の傾斜をもつスキージャンプが設置さ

れている。スキージャンプ後方から艦尾にかけての平坦部分184m×14mの空間が、固定翼機の滑走レーン及びヘリコプターの発着用とされている。？

12機のヘリコプターか8機のV／STOL機を搭載可能であり、飛行甲板には8機が待機可能である。

また本艦は、軽空母だけでなく、揚陸艦としての機能も有しており、標準状態で325名の海兵隊の乗艦が想定されているほか、航空機の代わりに24両のアリエテ主力戦車、あるいは100両の軽車両、あるいは50両の水陸両用装甲兵員輸送車などが搭載可能となっている。

??軽空母ジユゼツペ・ガリバルディ

イタリア海軍の軽空母。

スキージャンプ式の発艦法を採用しており、スキージャンプ勾配後方の平坦な部分には、6つのヘリコプター発着スポットが設定されている。

2016年現在は固定翼機運用を後継艦のカブールに移した為、固定翼機運用は終了しており、ヘリコプターおよび戦術機の運用を主としている。

??軽空母プリンシペ・デ・アストウリアス

スペイン海軍の軽空母。

V／STOL機およびヘリコプターの運用に長けており、最大で37機の機体を運用可能としている。

??アドミラル・クズネツォフ級航空巡洋艦

ロシア海軍の空母。

史実では1番艦のみだが、この世界では3隻就役している。

?CTOL方式の艦上機をスキージャンプで発艦させる短距離離陸・拘束着艦(STOBAR)方式での航空機運用を行っている。？

また本艦の特徴が、極めて充実した個艦戦闘能力であり、重航空巡洋艦(TAVKR)という艦種呼称の所以ともなっている。その中核

となるのが、飛行甲板前部のVLSに収容されたP-700「グラニート」艦対艦ミサイルであり、衛星データリンクと連動することで、極めて強力な対艦火力を発揮することが可能。しかしこれを発射する際には艦上機の発着が困難となる問題がある。

(同型艦)

??アドミラル・クズネツォフ

1番艦。

??アドミラル・アリストフ

2番艦。

??アドミラル・ツァネフ

3番艦。

??ヴァリヤーク

4番艦。中国海軍に売却。

??遼寧級航空母艦

ロシア海軍の空母ヴァリヤークをウクライナ経由で購入、改装した中国海軍の艦。

2021年6月14日時点では黄海に展開中とのこと。

??山東級(001A型)航空母艦

? 短距離陸拘束艦方式を採用した全通甲板を持つ。?

遼寧では対艦ミサイルの区画だった飛行甲板前部を格納スペースとすることで、遼寧より約10機の追加格納庫が可能となっている。

2021年6月14日時点では大連攻防戦に参加している。

(同型艦)

??山東

1番艦。大連近海に展開中。

??基^{キエフ}?級航空巡洋艦

ロシア海軍より中国に売却された近代軽空母を改装した中国海軍の艦。

? 艦の前方には通常の巡洋艦と同様に兵装を搭載、中央部に上部構造物を配し、後甲板をヘリコプター甲板としていた。これに対し、本

級では上部構造物は右舷側に寄せたアイランド型とされ、上甲板は前後全通型であるが、前甲板は艦対艦ミサイルの巨大な発射筒などで占められており、飛行甲板は左舷前方に張り出したアングルド・デッキ式となっている。？

？それぞれテーマパークの目玉として保管されていたが、中国戦線の戦況悪化に伴い現役に復帰させた。？

(同型艦)

??^{キエフ}基?

1 番艦。天津市にてホテルに改装されていた為、現在黄海洋上の浮きドックにて現役復帰の為の改修を受けている。

??^{ミンスク}明斯克

2 番艦。南通市の空母公園より接收後、黄海に展開中。

??空母サン・パウロ

ブラジル海軍の正規空母。

南米共同体大西洋方面軍艦隊旗艦を務めている。

現在はニテロイ級フリゲート艦「コンステイトウイサン」と共にリオグランデ海膨直上に建設中のメガフロート、リオグランデ・フロートの警備任務に就いている。

??空母ベインティシンコ・デ・マヨ

アルゼンチン海軍の空母。

1997年に退役する形でモナーク機関に貸与されたが、世界中での巨大不明生物出現により返還を要請。

アメリカで近代化改修を受けた後にアルゼンチン海軍に返還された。

だが政治的事情により、所属こそアルゼンチンではあるが、国連の指揮系統に組み込まれている。

現在はロス・エスタードス島プエルト・パリー海軍基地に停泊している。

??キティーホーク級航空母艦

アメリカ海軍から退役後に国連軍へ提供された旧式航空母艦。

(同型艦)

??UNSキティホーク

1番艦。

??UNSコンステレーション

2番艦。EP-19にて日米共同のIS学園警邏哨戒行動に参加。

??NN航空母艦エンタープライズ

アメリカ海軍のIS運用母艦。だが、国連軍設立に伴い同組織に転属させられた。

(同型艦)

??UNSエンタープライズ

1番艦。EP-17のラドン迎撃戦に参加。IS「銀の福音」中隊の母艦として機能した。

これ以降はアメリカ・イスラエル共同統合機兵開発実験団「ビルサルド」に接收された。

??フォレスタル級航空母艦

アメリカ海軍から退役後、国連軍に提供された旧式航空母艦。

(同型艦)

??UNSフォレスタル

1番艦。

??UNSサラトガ

2番艦。

??UNSレンジャー

3番艦。

??UNSインディペンデンス

4番艦。

??空母ホーネット

亡国機業が所有する原子力空母。

亡国機業が南太平洋の移動式活動拠点としており、ジェット戦闘機やISが搭載されている他、プレイルームも完備されていた。

EP-05にて、ビキニ環礁近海を航行中のところをゴジラに襲撃され爆沈した。

●巡洋艦

??タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦

アメリカ海軍のミサイル巡洋艦。

現在6番艦以降の全22隻が米海軍所属である。

5番艦以前の初期型である「タイコンデロガ」、「ヨークタウン」、「ヴァインセンス」、「ヴァリー・フォージ」、「トーマス・S・ゲイツ」の

5隻は国連軍に提供されている。

(同型艦)

??UNSタイコンデロガ

1番艦。

??UNSヨークタウン

2番艦。EP-16の樺太漸減作戦に参加。

バルゴン大型種のレーザー照射を受け爆沈した。

??UNSヴァインセンス

3番艦。

??UNSヴァリー・フォージ

4番艦。

??UNSTトーマス・S・ゲイツ

5番艦。

??しらね型護衛艦

第1世代ヘリコプター搭載護衛艦の後継艦。

はるな型と同様全通甲板を有する長船首楼型という船型だが、電子

装備の充実に伴い艦橋構造物と船体が大型化した。

船体の後方3分の1を占めるヘリコプター甲板の横幅を確保し、なおかつ旗艦機能を持たせるために必要な艦内容積に加えて、指揮統制能力の強化が図られている。また静止軌道衛星との通信も可能であることから本型は「海上自衛隊初のシステム艦」とも称された。

本来ならば史実通り後継艦のいずも型就役に伴い退役予定であったが、巨大不明生物の出現により現役のままとなっている。現在はそのそれぞれの母港で対巨大不明生物用の艀装に換装されている。

(同型艦)

??しらね

1番艦。EP-20にて日米共同のIS学園警邏哨戒行動に参加した。

2021年6月14日時点では、76mm単装砲2基を独製5インチ超電磁投射単装砲に換装されている。

??くらま

2番艦。

2021年6月14日時点では、76mm単装砲2基を独製5インチ超電磁投射単装砲に換装されている。

??あいづ型護衛艦

?海上自衛隊の汎用護衛艦?。

イージスシステムの中核たるAN/SPY-1フェーズドアレイレーダーの意匠もそれら通りに備わる。一方、VLSを持っていないため、各種誘導弾は台湾海軍やスペイン海軍の一部艦艇にみられるように、通称アスロックランチャーとも呼ばれるMk112八連装発射機(Mk 16 GMLS)に混載される。SH-60シーホークなどのヘリコプターだけでなく、特殊潜航艇「さつま」も3隻搭載できる。

巨大不明生物出現後は耐熱耐レーザー防御システムが導入された。

ちなみに本級は実存しない架空艦(出典はゴジラ・モスラ・キング

ギドラ大海獣総攻撃の防衛海軍《巡洋艦あいづ》)。

(同型艦)

??あいつ

1 番艦。EP-16にて立花一佐が噂されてくしゃみする形で一瞬だけ登場。

2021年6月14日時点ではゴジラ搜索の為に相模トラフに展開中。

??あこう

2 番艦。

2021年6月14日時点ではゴジラ搜索の為に紀伊半島沖に展開中。

??わかな

3 番艦。

孫の手島沖合で消息を絶った原潜・シードラゴンの搜索に派遣されている。

??改アドミラル・ヒツパー級巡洋艦

ドイツ海軍の巡洋艦。

ビスマルクやH39戦艦と同様に第2次世界大戦を生き延びた艦艇であり、アメリカに接收された後に国連・モナーク機関に受け渡された。

2016年のギャオス出現後にはドイツ海軍に返還された。

装甲には耐熱耐レーザー・対振動波防御が施されている他、主砲はIS・シユヴァルツアレーゲンで運用実績を得たパンツァーカノニアのシステムを部分的に取り込み、火薬併用レールガンと化している。

(同型艦)

??アドミラル・ヒツパー

1 番艦。6月14日時点では予備戦力としてオランダ領ボーンホルム島沖のバルト海に展開中。

??ザイドリッツ

4 番艦。

6月14日時点ではポーランド撤退支援作戦に参加している。

??リユツツオウ

5 番艦。

??ミュンヘン級巡洋艦

ドイツ連邦海軍の砲術巡洋艦。

2016年のオーデル川防衛整備計画に基づき建造された。

(同型艦)

??ミュンヘン

??ライプツィヒ

??ニユルンベルク

??ドレスデン

??ケルン

??ドルトムント

??ハノーファー

??シュトゥットガルト

??ガランド級巡洋艦

ドイツ連邦海軍の巡洋艦。

2016年以降、オーデル川防衛整備計画に基づき建造された。

現在はドイツ・ポーランド国境のシュチェチン湖に展開している。

(同型艦)

??ガランド

??メルダース

??ヴィルケ

??ラル

??テムズ級汎用巡洋艦

イギリス海軍の汎用巡洋艦。

22隻が建造された。

(同型艦)

テムズ

セヴァーン

バン

テイ
ツイード
リー
モール
エイヴォン
マージー
フリート
ウエストボーン
トレント
チャーン
ワンドル
クライド
ダレント
テスト
スペイ
ビューリー
ライミントン
ネス
オルヌ
??ライン級汎用巡洋艦
ドイツ連邦海軍の巡洋艦。
アメリカおよびイギリス支援のもと、現在16隻が建造されている。(同型艦)

ライン
エルベ
モーゼル
マイン
オーデル
ネツカー
ヴォーザー
イーザル

シユプレー
ハーフェル
ザルツァハ
ヴァルノウ
アルトミュール
ローダツハ
エーガー
ヴェルニツツ
??シユフラン級巡洋艦
フランス海軍の巡洋艦。
??シユフラン
??デュケーヌ級巡洋艦
フランス海軍の巡洋艦。
??デュケーヌ
??トゥールヴィル
??ラ・ガリソニエール級巡洋艦
フランス海軍の巡洋艦。
??グロワール
??モンカルム
??ジョルジュ・レイグ

??タコマ級戦闘巡洋艦
アメリカ海軍の巡洋艦。

対獣非原子力永久機関搭載型巡洋艦建造構想に合わせて建造された新型巡洋艦であり、アメリカ海軍初のレールガン実装型実戦艦となっている。

だが建造が遅れており、2番艦以降は建造中となっている。

装備

- ・155mm単装レールガン2基
- ・VLS発射基90セル

- ・ 127mm単装速射砲1基
- ・ 4連装ハーブーン発射基2基
- ・ CIWS 2基
- ・ RAM 2基
- ・ レーザーターレット1基

(同型艦)

??タコマ

1番艦。

??インディアナポリスII

2番艦。サンフランシスコ海軍造船所にて建造中。7月上旬には就役可能の見通し。

??カムデン

3番艦。建造中。

??コーパスクリステイ

4番艦。建造中。

??ニューアーク

5番艦。建造中。

??ユリーカ

6番艦。建造中。

??スラヴァ級巡洋艦

ロシア海軍のミサイル巡洋艦。

(同型艦)

??スラヴァ

1番艦。

??アドミラル・フロタ・ロボフ

2番艦。

??アトラント(スラヴァ)級巡洋艦

ウクライナ海軍の巡洋艦。

建造途中で放棄されていた旧ソ連海軍のスラヴァ級ウクライナを

完成させたもの。

(同型艦)

??ウクライナ

1 番艦。

??キーロフ級原子力重ロケット巡洋艦

ロシア海軍の巡洋艦。

史実では5番艦以降は建造中止。

(同型艦)

??キーロフ

1 番艦。

??ジダーノフ

2 番艦。

??カリーニン

3 番艦。

??ユーリ・アンドロポフ

4 番艦。

??ジェルジンスキー

5 番艦。

??ロシア

6 番艦。

??ジダーノフ

7 番艦。

??スヴェルドロフ

8 番艦。EP-35にてウラジオストクからの避難民を載せて、北方領土へ向かう中継として青森県大湊基地に寄港した。

??ジエレスニャコフ

9 番艦。

??ベインティシニコ・デ・マヨ級巡洋艦

アルゼンチン海軍の巡洋艦(旧ヘネラル・ガルバルデイ級重巡洋艦)。
1961年にモナーク機関に貸与される形で除籍されたが、世界各

地での巨大不明生物出現によりアメリカで近代化改修が施された後、形式上はアルゼンチン海軍に返還された。

だが2001年の債務不履行以降、不信感を募らせていた諸外国からの要請、そして南米での人類間闘争を回避したいアメリカの圧力もあり、事実上、アメリカ・国連軍の管理下にある。

現在は南米共同体大西洋方面軍第2艦隊に属している。

(同型艦)

??ベインティシンコ・デ・マヨ

1番艦。現在はプエルト・ベルグラノ海軍基地に停泊中。

??アルミランテ・ブラウン

2番艦。現在はロス・エスタードス島プエルト・パリー海軍基地に停泊中。

??改タイガー級ヘリコプター巡洋艦

イギリス軍の巡洋艦。

退役したイギリス海軍のヘリコプター搭載巡洋艦を国連・モナーク機関に提供した艦で、巨大不明生物の本格的出現後にはイギリスに返還された。

(同型艦)

??タイガー

1番艦。2021年6月14日時点ではイギリス領ドーバー基地に展開している。

??ライオン

2番艦。2021年6月14日時点ではドイツ領キール基地に展開している。

??ブレーク

3番艦。2021年6月14日時点ではエーゲ海に展開している。

??サリー級巡洋艦

イギリス海軍の巡洋艦。

史実では全艦建造中止となった重巡洋艦。

(同型艦)

??サリ

1 番艦。

??ノーサンバーランド

2 番艦。

??タウン級巡洋艦

イギリス海軍の記念巡洋艦。

現在は第2次世界大戦を生き延び、記念艦となったベルファストのみが現存している。

??ベルファスト

現在はイギリス領ロンドン・テムズ川に停泊している。

??はるな級巡洋艦

国連軍の巡洋艦。

元は海上自衛隊のヘリコプター搭載護衛艦であり、退役後解体予定だった本艦を国連が買い取った形となる。

国連軍配属後も本来の用途である対潜哨戒艦として活躍している。2021年6月14日時点では極東方面軍に配備され、日本政府からの支援要請を受けてゴジラ捜索に参加している。

(同型艦)

??UNSはるな

1 番艦。現在はゴジラ捜索の為、紀伊半島沖に展開中。

??UNSひえい

2 番艦。現在はゴジラ捜索の為、相模トラフ直上に展開中。

● 駆逐艦

??こんごう型護衛艦

海上自衛隊のミサイル護衛艦。

自衛隊初のイージス艦でもあり、当時アメリカ海軍以外が初めて保有したイージス艦でもある。

現在は対巨大不明生物戦を想定して、トマホーク巡航ミサイルの試験運用を行なっている他、D-03誘導弾／魚雷とフルメタルミサイルを搭載している。

(同型艦)

??こんごう

1 番艦。

??きりしま

2 番艦。 6月14日時点では相模トラフにてゴジラ捜索に参加している。

??みようこう

3 番艦。

??ちようかい

4 番艦。

??あたご型護衛艦

海上自衛隊のミサイル護衛艦。

こんごう型の後継でもあるイージス艦。

(同型艦)

??あたご

1 番艦。

??あしがら

2 番艦。

??まや型護衛艦

海上自衛隊のミサイル護衛艦。

あたご型の後継でもあるイージス艦。

(同型艦)

??まや

1 番艦。

??たかお

2 番艦。

??あきづき型護衛艦

海上自衛隊の汎用護衛艦。

イージスシステムのダウングレード版を搭載しており、準イージス艦とも呼ばれている。

(同型艦)

??あきづき

1 番艦。

??てるづき

2 番艦。6月14日時点では相模トラフにてゴジラ捜索に参加している。

??すずつき

3 番艦。

??ふゆづき

4 番艦。

??あさひ型護衛艦

海上自衛隊の汎用護衛艦。

あきづき型の後継艦でもある。

(同型艦)

??あさひ

1 番艦。

??しらぬい

2 番艦。

??はたかぜ型護衛艦

海上自衛隊のミサイル護衛艦。

(同型艦)

??はたかぜ

1 番艦。

??しまかぜ

2 番艦。EP-34にてIS学園沖合南西38キロ洋上にてズムウォルト級駆逐艦と共に同学園を目指すゴジラを探知した。

??アーレイバーク級駆逐艦

アメリカ海軍の駆逐艦。

世界初のイージス駆逐艦でもある。

本級は現在76隻全艦が稼動状態にあり、世界各地での軍事作戦に参加している。

EP-16の樺太漸減作戦やEP-19のIS学園警戒任務のため日米臨時編成軍の一員として警戒任務に就くなど、幅広く作戦に参加している。

??ズムウォルト級駆逐艦

アメリカ海軍の駆逐艦。

アーレイバーク級の後継艦となるはずだったが、原子力空母を遙かに上回るコストに加えて設計面での欠陥が多く、3隻で打ち切られた。

EP-34にて、3番艦「キング」がはたかぜ型護衛艦しまかぜと共に、日本を目指すゴジラを探知した。

??リデル級駆逐艦

ロシア海軍の原子力搭載型次世代駆逐艦。

??ウダロイ級駆逐艦

ロシア海軍の対潜駆逐艦。

??ネウトラシムイ級駆逐艦

ロシア海軍の防空駆逐艦。

??デアリング級（45型）駆逐艦

イギリス海軍のミサイル駆逐艦。

EP-20にて、欧州連合極東派遣軍に参加していた4番艦「ドラゴン」がスピットエビラに対して対艦ミサイル攻撃を敢行していた。

??ホバート級駆逐艦

オーストリア海軍のミサイル駆逐艦。

イージスシステムを搭載したイージス艦でもある。

??記念駆逐艦ブリスカヴィカ

ポーランド海軍の駆逐艦。

元は1937年に就役したグロム級駆逐艦2番艦。

第2次世界大戦後、記念艦として港湾都市グダニスクに記念艦として係留されていたが、巨大不明生物の侵攻によって首都ワルシャワが陥落した事で、ポーランド政府首脳や民間人らをポーランドから脱出させる手段のひとつとして現役復帰。

6月14日時点ではイギリス領テムズ川河口に展開しており、ポーランド亡命臨時政府が置かれている。

??あぶくま級駆逐艦

国連軍の駆逐艦。

元は海上自衛隊の護衛艦だったが、退役に伴い国連軍に提供された。

極東方面軍に派遣されており、現在は北九州に展開している。

●フリゲート艦

??MEKO型フリゲート艦

ナイジェリア海軍のフリゲート艦。

フリゲートとしては世界最大の艦であり、またアフリカ諸国最強の水上戦闘艦と称された。

(同型艦)

??アラドゥ

1番艦。

6月14日時点ではギニア湾に展開。

??U130?フリゲート艦

ウクライナ海軍のフリゲート艦。

クリミア危機やギャオス出現など、様々な事態を潜り抜けてきたウクライナ海軍の象徴でもある。

ウクライナ海軍第2艦隊旗艦を務めている。

(同型艦)

??U130ヘトマン・サハイダチヌイ

ウクライナ海軍第2艦隊旗艦。

6月14日現在では黒海に展開し、イギリス海軍と共にバルカン山脈防衛線の一翼を担っている。

??コニ型フリゲート艦

ブルガリア海軍のフリゲート艦。

??ウィーリングン級フリゲート艦

ブルガリア海軍のフリゲート艦。

●コルベット艦

??タランタル級コルベット艦

ブルガリア海軍のコルベット艦。

??U209コルベット艦

ウクライナ海軍のコルベット艦。

(同型艦)

??テルノーピリ

ウクライナ海軍第2艦隊所属。

6月14日時点ではフリゲート艦「ヘトマン・サハイダチヌイ」と共に黒海に展開。

??エリンミ級コルベット艦

ナイジエリア海軍のコルベット艦。

(同型艦)

??エリンミ

1番艦。

??エニヤミリ

2番艦。

●揚陸艦

??アメリカ級強襲揚陸艦

? ?アメリカ海軍の最新鋭揚陸艦。?

ワスプ級の最終艦をもとに、航空運用機能を増強して開発され、飛行甲板にはヘリコプター発着スポットが9ヶ所、エレベーターはデッキサイド式で2基（それぞれ力量34トン）が設けられている。

従来から海兵隊で運用されていたV/STOL攻撃機のハリアーII、その後継機のF-35B、テイルローター輸送機のMV-22B、大型輸送ヘリコプターのCH-53E/Kをはじめとして、UH-1Y汎用ヘリコプター、MH-60S多用途支援ヘリコプター、AH-1W/Z攻撃ヘリコプターの航空機その他、MF-22戦闘機ラプター等の搭載が可能となっている。

搭載機数としては、制海艦運用の場合は固定翼機を中心に最大20

機前後、通常はV／STOL機6機、MV-22B 12機を中心に各種回転翼機を加えて合計約30機、戦術機運用の場合は1個飛行中队12機の搭載が想定されている。

加えてウエルドックにはLCA-C-1級エア・クッション型揚陸艇を搭載可能であり、大型化による高価と引き換えに、正規空母並みの航空機運用能力に加えて、LCA-Cを用いた揚陸能力を持たせるために50,000トン超の大型艦となった。

最終的には12隻の配備が予定されている。

(同型艦)

??アメリカ

1番艦。現在はインド洋ダイエゴガルシア基地に配備されている。

??トリポリ

2番艦。現在は地中海に展開している。

??ブーゲンビル

3番艦。現在はペルシャ湾カタール近海に展開している。

??ペリリユー

4番艦。現在は長崎県佐世保基地に寄港している。

??ベロー・ウッド

5番艦。現在はシンガポールに寄港中。

??サイパン

6番艦。現在は大西洋バミューダ島北30キロの海域に展開中。

??オキナワ

7番艦。現在は青森県大湊基地に展開中。

??グアム

8番艦。現在はミクロネシア連邦領キャンブ・イレイズドに配備されている。

??ノルマンディー

9番艦。建造中。

??ニューオーリンズ

10番艦。建造中。

??タラワ

11番艦。建造中。

??ガダルカナル

12番艦。建造中。

??ワスプ級強襲揚陸艦

?アメリカ海軍の揚陸艦。?

AH-1W/Z攻撃ヘリコプター、UH-1N/Y汎用ヘリコプター、CH-46・CH-53Eなど大型輸送ヘリコプター等最大4機か、ヘリコプター最大30機およびAV-8B V/STOL攻撃機6-8機を等の航空機を搭載可能。

なお、制海艦任務にあたる場合は、V/STOL機を最大20機と哨戒ヘリコプター6機を組み合わせて搭載し、戦術機運用においては2個飛行小隊8機の搭載が可能となっている。

船体内後部にはウエルドック(長さ81m×幅15.2m)を備えており、LCC-1級エア・クッション型揚陸艇3隻、あるいは機動揚陸艇(LCM)12隻を収容・運用することができる。

医療設備として病床60床(うち集中治療室14床)、手術室4室も備えており、また、医療区画に隣接した海兵隊居住区を一般病床として転用した場合、さらに200床を確保することができる。

(同型艦)

??ワスプ

1番艦。

??エセックス

2番艦。

??キアサージ

3番艦。

??ボクサー

4番艦。

??バターン

5番艦。

??ボノム・リシャル

6番艦。

??イオー・ジマ

7番艦。

??マキン・アイランド

8番艦。

??ブルー・リτζ級揚陸指揮艦

アメリカ海軍の揚陸指揮艦。

?艦隊の指揮を執るための専用艦。?

軍における指揮・統制および通信の確保は重要であり、特に水上艦船のほか、陸上部隊・航空部隊が交錯する揚陸戦においては、特にその確保が求められる。アメリカ海軍は、戦艦・巡洋艦・航空母艦・輸送艦などの大型艦に司令部人員を搭乗させ、指揮にあたらせてきたが、特に多くの司令部要員を必要とする揚陸戦の指揮艦については、戦闘艦艇の限られた司令部区画では手狭であるため、第二次世界大戦以降は輸送艦改造の指揮艦を用いてきた。

1960年代においてアメリカ海軍が使用していた揚陸指揮艦は第二次大戦中に建造されたものであり、旧式化が進み、それらを更新するために本級が建造された。

本級の特徴として、艦の中央に船橋があり、前甲板・後甲板とも原則としてフラットであることが挙げられる。これは、電波障害の原因になる構造物を極力排したもので、甲板上には各種通信アンテナが設置されている。速力も20ノット以上が求められ、最大23ノットと、従前の揚陸指揮艦より高速化された。

この為武装は軽微であるが、充実した指揮・通信設備を搭載しており、艦齢延長工事により少なくとも2039年までは本級が運用される予定となっている。

(同型艦)

??ブルー・リτζ

1番艦。第7艦隊(西太平洋艦隊)旗艦であり、神奈川県横須賀基地を母港としている。

??マウント・ホイットニー

2番艦。第6艦隊(地中海艦隊)旗艦であり、イタリア・ガエツタ

基地を母港としている。

??イオー・ジマ級強襲揚陸艦

国連軍の強襲揚陸艦。

1961年から1970年にかけて就役した古戦場の名を冠する揚陸艦。

東西冷戦を経て老朽化した本艦は1992年に退役したのち解体を待つべく暫定的にモスボール保存処置が施されていたが、ロリシカの巨大不明生物出現に際し急遽復役。

近代化改装を経て、アメリカ海軍から国連軍に転属され、水上部隊旗艦を務めていた。

(同型艦)

??UNSイオー・ジマ

1番艦。

??UNSオキナワ

2番艦。現在是在日国連軍所属。

EP-40とEP-43において館山湾に展開し、在日国連軍司令艦として機能した。

??UNSガダルカナル

3番艦。

??UNSグアム

4番艦。

??UNSTトリポリ

5番艦。

??UNSニューオーリンズ

6番艦。

??UNSインチョン

7番艦。

??タラワ級強襲揚陸艦

国連軍の強襲揚陸艦。

イオージマ級の後継である強襲揚陸艦で、2015年にアメリカ海

軍より退役した全5隻が国連軍に提供された。

(同型艦)

??UNSタラワ

1番艦。

??UNSサイパン

2番艦。

??UNSベロー・ウッド

3番艦。

??UNSナツソー

4番艦。

??UNSペリリユー

5番艦。

??おおすみ型輸送艦

海上自衛隊が保有する輸送艦。海外では戦車揚陸艦やドック型揚陸艦に分類される。

? 艦内後部ウエルドックには2隻の輸送用ホバークラフトを搭載しており、巨大な船体と見通しの良い全通飛行甲板のおかげでヘリコプターの発着も容易であることから、高い輸送および揚陸能力を持つ。?

? 陸上自衛隊の部隊であれば330名の1個普通科中隊戦闘群と装備品を搭載でき、民間人輸送時には約1,000名の乗艦が可能。また優れた医療機能も備えている。?

(同型艦)

??おおすみ

1番艦。

??しもきた

2番艦。陸上自衛隊水陸機動団の揚陸母艦としても機能する。

??くにさき

3番艦。

??グラーフ・ツェッペリンII級揚陸母艦

ドイツ連邦海軍の揚陸艦。

MHD-200多目的母艦をもとに、2016年のウクライナにおけるギャオス出現以降の軍拡に建造された艦であり、全長406.6m、積載重量516,895トンという破格の巨大さと積載量を誇る。

単純計算でレオパルド2主力戦車4325台分を収容可能(ただし弾薬等は含まないものとする)、また一般人に至っては8200人を収容・可能とするという、高い輸送性を持つ。

他にもウエルドツグにホバークラフトを艦載している他に、全通甲板に多数の輸送ヘリコプターを艦載可能である為に高い揚陸性も持つ。

また、5インチ超電磁投射単装砲を4基搭載するなど自衛能力および支援攻撃能力も兼ね備えている。

(同型艦)

??グラーフ・ツェッペリンII

1番艦。ポーランド撤退支援作戦に参加しており、バルト海に展開中。

??ベルンハルト・ロッゲ

2番艦。ポーランド撤退支援作戦に参加しており、バルト海に展開中。

??ラインハルト・シエーア

3番艦。ポーランド撤退支援作戦に参加しており、バルト海に展開中。

??フェリクス・ルツクナー

4番艦。ダンケルク作戦に伴うドイツ国民の国外疎開任務に就いており、現在は日本領横浜市に寄港している。

??アルビオン級揚陸艦

イギリス海軍のドック型揚陸艦。

イギリス海軍において初めて統合された電気推進システムを持ち、

その結果機関部要員がそれまでの3分の2に減少し、艦全体では40%の要員削減が達成された。艦首にはバルバス・バウが付されている。

指揮統制システムとして、イギリス海軍で標準的なCSS (Command Support System) を備えている。本級搭載のシステムではワークステーション72基を備えている。

車両甲板は、駐車レーンとして使った場合には550メートル分に相当しており、チャレンジャー2主力戦車であれば6両、軽車両であれば2トントラック16両、小型トラック36両、糧食30トンに相当する。ウエルドックには、戦車輸送可能な揚陸艇LCU Mk. 10を4隻、人員あるいは軽車両を輸送する揚陸艇LCP Mk. 5を4隻搭載できる。またアメリカ海軍のLCAAC-1級エア・クツシヨン型揚陸艇を受け入れることもでき、この場合は2隻を収容できる。艦尾門扉は17.2メートル幅がある「1」。艦尾甲板は、CH-47の運用にも対応できるヘリコプター甲板とされており、長さ64メートル、2個の発着スポットが設定されている。ただしハンガーは備えていない。

(同型艦)

??アルビオン

1番艦。

??ブルワーク

2番艦。

??ミストラル級揚陸艦

フランス海軍の強襲揚陸艦。

? マルチハザード化およびグローバル化に伴う任務の多様化に対応して、水陸両用作戦以外にも人道援助など戦争以外の軍事作戦も考慮した多目的母艦。?

自衛のための最小限の兵装のみを有している。小型艇対策に、30mm機銃を2門、M2 12.7mm機銃を4挺装備。また、対空兵装としてミストラル近接防空ミサイル用のシンバッド連装発射機を

2基搭載している。

上甲板(第1甲板)は全通した飛行甲板とされており、またその直下の艦後半部には2甲板分の高さ(第2・3甲板)でハンガーが設けられている。これらを連絡するエレベーターとしては、アイランド後方の右舷寄りと艦尾に各1基のエレベーターが設置されている。前方のエレベーターはインボード式で、後方のエレベーターもインボード式であるが、艦尾側に張り出していることから半ばデッキサイド式となっている。

飛行甲板は面積5,200m²を確保しており、6ヶ所のヘリコプター発着スポットが設定されている。ハンガーは面積1,800m²で、最大16機程度の中型・大型ヘリコプターが収容できる。

(同型艦)

??ミストラル

1番艦。

??トネール

2番艦。

??デイクスミュード

3番艦。

??イワン・ロゴフ級揚陸艦

ロシア海軍の強襲揚陸艦。

1個歩兵大隊(1000人)の装備や兵員の輸送が可能である。

2021年6月14日時点ではロシア国内からの避難民移送に活用されている。

(同型艦)

??イワン・ロゴフ

1番艦。

??アレクサンドル・ニコラーエフ

2番艦。

??ミトロファン・モスカレンコ

3番艦。

??キャンベラ級揚陸艦

オーストリア海軍の揚陸艦。

全通した飛行甲板と大型のウエルドックを備えている。2隻が建造されており、オーストラリア海軍史上最大の軍艦である。

(同型艦)

??キャンベラ

1番艦。

??アデレード

2番艦。

??マカツサル級揚陸艦

インドネシア海軍の揚陸艦。

(同型艦)

??マカツサル

1番艦。

??スラバヤ

2番艦。

??バンジャーマシン

3番艦。

??バンダーチエ

4番艦。

??スマラン

5番艦。

??ポルノクヌイA型揚陸艦

ブルガリア海軍の揚陸艦。

??シリウス

??アンタレス

??ヴィドラ型

ブルガリア海軍の揚陸艦。

??フリーレンドルフ級輸送艦

欧州連合共通規格の輸送艦。

? ホヴァアルツヴェルケ¹ドイツ造船? やBAEシステムズ・サーフェス・シツプスなどの欧州造船企業の他に米国防産局も建造に携わっており、24隻の同型艦が建造された。

??フリーレンドルフ

??ナツサウ

??リビングストン

??マツセルバラ

??ポメラニア

??スロベニア

??ラベンナ

??ゾロトウリン

??ボヘミア

??モラバ

??シロンスク

??スウォンジー

??レバーバーグ

??ヒュータウン

??インヴァネス

??ドーノック

??サンダーランド

??クールラント

??ル・マレー

??クラビー

??ポドラシエ

??ザールラント

??クネルスドルフ

??クツクスハーフェン

??ウエーブピアサー型輸送艦【ウサギ丸】

東の輸送艦。

朝倉達に奪取され、【大戸島】に改名された。

艦橋には艦の航行を制御している倉田自作のスーパーコンピューターが存在している。

●潜水艦

??オハイオ級潜水艦

アメリカ海軍の原子力潜水艦。

西側諸国最大の潜水艦であり、現在17隻全艦が稼働中である。

??スコープオン級原子力潜水艦

アメリカ海軍の原子力潜水艦。

EP-30にて、2番艦シードラゴンが孫の手島沖合で消息を絶つた事をスコールが言及している（おそらくだがゴジラに撃沈された）。

??そうりゆう型潜水艦

海上自衛隊の潜水艦。

7番艦《じんりゆう》にドイツ海軍が機龍のデータの見返りとして日本に提供した「ローレライ・システム」を搭載。実験艦として大規模改装が施している。

前部甲板に533mm旋回式魚雷発射砲を2基、後部甲板に？放射能遮蔽？特殊潜航艇「さつま」を2隻搭載可能なサイズにまで大型化している。

??タイフーン級潜水艦

ロシア製の原子力潜水艦。

東側最大にして世界最大の潜水艦。

大半が退役しており、現存する3隻のうち2隻もロリシカ独立戦争時にロリシカ軍に強奪されている。

現在は原子力機関からNNリアクターに換装されている他、核ミサイルを格納していたサイロを戦術機ハンガーに改装した潜水揚陸母艦となっている。

(同型艦)

??ドミートリー・ドンスコイ

1番艦。唯一ロシア海軍に残ったタイフーン級潜水艦。

現在ムルマンスクを拠点とする北洋艦隊に配備されている。

??パレオロゴス

4番艦(旧称セヴァストーポリ)。

ロリシカ海軍によって潜水揚陸母艦として運用されている。

艦名であるパレオロゴスはロシア語で「独立」を意味する。

??クラスヌイ・アーヴグストウ

6番艦(旧称セヴェルスターリ)。

ロリシカ海軍によって潜水揚陸母艦として運用されている。

艦名であるクラスヌイ・アーヴグストウはロシア語で「赤い8月」を意味する。

(名前の元ネタはアメリカ映画『レッド・オクトーバー』の架空のタイフーン級潜水艦《レッド・オクトーバー》)。

??ラビット級ステルス無人潜水艦

東所有の潜水艦。

EP-20にて6番艦ラビット6号が欧州連合極東派遣軍をスピット・エビラに襲わせるべく、艦隊の進路上に同生物が興奮するレッチラクトン(黄色い汁)を散布した。

??グローリー丸

東所有の艦艇。

モスラおよびバトラの襲撃によって壊滅させられたレッチ島から

の脱出に使用した艦艇。

高速艇と潜水艦の機能を併せ持つ。

?◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇?

?◆宇宙兵器◆?

?●再突入駆逐艦?

?輸送機や軌道降下作戦時の母機として用いられる再使用型宇宙往還機。全長約60m。?

?平時は非武装だが、状況に応じて機体上部に兵装オプションを搭載可能。打ち上げにはロケットブースターや電磁カタパルトが用いられる。?

?また同部分には戦術機および統合機兵等の格納カーゴも搭載可能である。?

?：元々はアメリカが1980年代に開発した、ソ連領の核兵器配備基地に対して質量弾の軌道爆撃ないしレーザーの精密狙撃による核兵器の誘爆を用いた先制攻撃を実施する為の兵器であった。?

?西側諸国にて、国際規格で運用されている。?

?EP-08にてJAXA所有の「ゆうなぎ」、EP-15にてECST所有の「フアルケンベルク」・「シュルトヴェンベルグ」・「アンガームィンデ」が登場している。?

?●神の杖 (Rods from God) ?

?核兵器に代わる戦略兵器として計画されている衛星兵器で、タングステンやチタン、ウランからなる重量100kgの金属棒に小型推進ロケットを取り付け、高度1,000kmの低軌道上に配備された宇宙プラットフォームから発射し、地上へ投下するというもの。?

?一種の運動エネルギー弾であると言える。落下中の速度は約マッハ9.5にも達し、激突による破壊力は核爆弾に匹敵するだけではなく、地下数百メートルにある目標を破壊可能。?

?オーストリア東海岸を制圧した昆虫型巨大不明生物殲滅戦に投

入された。？

??ソルズ

ファイアミラーを搭載した衛星兵器。

太陽光を高度に収束させ、更にファイアミラーで1万倍に増幅させることで、クリーンで強力な大規模破壊兵器となる。

元々は大気圏外から各地の集光施設に太陽光エネルギーを供給する太陽光集積システムを搭載した大型人工衛星。

●フラールレン軌道衛星基地群

閉殻空洞状に地球中間軌道に展開する衛星基地で構成される、航空宇宙軍衛星基地群の総称。

バンカー01からバンカー56の衛星基地によって構成されている。

まとめ回【人物編】

◆◆ I S 学園 ◆◆

◆ 篠ノ之千尋 ◆

ご存知本編主人公。

今はまだ I S 学園の生徒。特自での階級は三尉（少尉）。

ミレゴジの外皮の一部がデイメンションタイドに吸い込まれ、その外皮の一部が I S 世界に流れ込み、その先 II 墨田大火災時の東京・墨田区で死んでいた少年の死体に G 細胞が入り込み、細胞レベルで同化したもの。

ミレゴジのオルガナイザー G 1 細胞こそが千尋の本体であり、普段見る肉体は歩く死体リレンゲデッドに過ぎない。

ミレゴジ時代の感性である「死への渴望」と千尋としての感性である「箒への恋慕」が介在しており、それが「箒の為に死生きてんでやる」という感性の根源となっている。

それ故に自分の命を投げ捨てても箒を救おうとする。

箒関連では非常に面倒くさい奴なのだが、それ以外の面では基本的に普通。

特生自衛隊第 1 機動団第 1 機龍隊への配属が決定している。

6 月 14 日時点では体内の G 細胞とヒト細胞のバランスが崩壊し、余命が 6 ヶ月であると判明してしまっている。

だがそれに悲観することもなく、「だったら箒の為に燃やし尽くしてしまおう」と開き直ってしまっている。箒に対する愛情や思考に常に箒がいるなど、ある意味束と同類ではある（最も、箒に対する方法も行動も全くベクトルが違うのだが）。

普段はやんちゃであり、低身長がコンプレックスである等年相応な性格。

現在は統合機兵運用の為に I S 学園にいたが、臨海学校が終わり次第、特生自衛隊に復帰する予定となっている。

■人間関係■

●篠ノ之箒

墨田大火災時とその後「生きている」事を受け入れてくれた為に慕っていたが、いつの間にか「命を投げ捨ててでも守りたい存在」へと昇華した。

：互いに恋慕を抱いてこそいるが、両者の自己犠牲と両者の互いに想いやる意思によって、2人は「噛み合っているようで致命的なまでに根底が噛み合っていない関係」となっている。

表面だけならただの初心者同士のバカップルなのだが…。

●片桐光

かつての世界で殺した男と同じ記憶を持っていることから警戒していたが、関わってみると普通に良い奴であった事を知る(そして、千尋が本能と自らの死の為に人を殺し続けて来た事への罪悪感を生むキツカケにもなった)。

●永井頼人

特自に匿われた際に、色々としりが合った為仲が良くなった。

現在は先輩兼八広駐屯地園芸サークルのメンバー。

●四十院神楽

世界情勢についての情報源兼会話相手。互いに恋慕などは無い。

●織斑一夏

無関心。

●初代ゴジラ(機龍世界)

3式機龍の内部に存在するゴジラの骨。

ただ確かに残留思念めいたモノを感じるらしく、機龍に乗っていると懐かしい感情に陥るのだとか。

◆篠ノ之箒

ご存知本編ヒロイン。

特生自衛隊での階級は三尉(少尉)。

墨田大火災でサバイバーズギルトを患っており、自身に対する価値観が完全に死んでいる(反面、他人には神経質なまでに気遣いをする

事からストイックな性格であると勘違いされがち。

柳星張の因子を埋め込まれた存在でもあり、当初はイリスに対して怯えを孕んでいたが、今では「誰かを救えるなら寧ろ都合じゃないか」と考えて柳星張を完全に受け入れてしまう。それに欲望らしい理由はなく、ただ、『誰かを救えるなら』という善意と強迫観念から来たものである。

上記のように精神が病んではいるが、その病んでいる部分を『他人に心配をかけまい』と抱え込んでしまうだけであり、普段は原作通りツンデレに加えて他人想いな性格。

千尋同様に臨海学校が終わり次第特生自衛隊に復帰予定だが、箒には特自管理下の元で要人保護プログラムを用いて民間に戻るという選択肢も存在する。

■人間関係■

●篠ノ之千尋

かつて墨田大火災で助けられた命であり、数少ない家族として慕っていたがいつの間にか「命を捧げてでも生きていて欲しい存在」に昇華した。だからこそ（柳星張の因子によって刷り込まれた人類同様に）、『人であることを捨ててでも守らなくてはならない存在』と認識してしまっている。

表面だけならただの初心者同士のバカップルなのだが…。

●柳星張

当初は柳星張が（意識体しか残っていない事とギャオス殲滅手段として）箒を嫌々ながら取り込むつもりであったが、情が移った事と、今では精神が変異し始めた箒が進んでイリス化しようとしている事から、本気で箒を救おうと侵蝕を押し留める方針に移行した。

●篠ノ之雪子

今でこそ叔母さんというポジションになっってしまったているが、実は箒の実母。

そして箒もそれを知っているからこそ雪子を愛していたのだが、要人保護プログラムによって別離させられてしまい、箒が束を憎悪する要因にもなった。

●篠ノ之泰平

箒の実父。冤罪で逮捕されてしまった後に獄中で自殺していたという。

これによって箒と雪子は篠ノ之神社の元へ身を寄せる事となり、同時に箒が女尊男卑主義者を忌み嫌う要因となった。

●片桐光

上司兼保護者という認識。

同時に、別離させられてしまった実母である雪子を重ねている節がある。

●織斑一夏

もはや情勢にもまれて眼中にない。

●？篠ノ之 柳韻？

箒の義父であり、束の実父。妻は諸事情で亡くなったらしい。

●篠ノ之束

：誰ですか？私はそんな人知りません（意識：お前だけは、絶対に死んでもイヤ）。

◆セシリア・オルコット

第2学園隊やVTシステム戦、IS学園防衛戦を経て原作の高飛車っぷりは息を潜めている。

6月14日現在では、臨海学校に行くより前にイギリス本国に召集・本土防衛師団に編入される事が決定している。

■人間関係■

●四十院神楽

名家出身者同士であることもあり、よく話をする他に料理を作り合うなど、親友と呼べる関係にまで至った。

その為、非常に別れを悔やんでいる。

●更識簪

整備能力とプログラミング技術の高さに感嘆を覚え、裏で色々整備技術の教師的存在であつたらしい。

◆ 凰鈴音

中国共産党特別武装隊のメンバーとして調教された為、原作のような激しい性格も全て演技となっている。

同組織の西側系派閥に袖替えする。

ちなみに非処j（龍砲の着弾音）

■ 人間関係 ■

● 孫華輦

新たに鞍替えした香港派の上司。

ある意味、新たに縋ることの出来る存在。

● 織斑一夏

自分達の政争に巻き込みたくなかった為、別れを決意する。

● 劉学音

鈴の実親。

● ? 凰乱音?

? 顔も知らない遠縁の従姉妹。?

? ● 楊麗々?

中国代表候補生管理官（北京派）。対立関係にある。

◆ シャルロット・デヌノア

スパイ騒動の後にフランス国籍を破棄。現在は日本に亡命し、日本国籍を取得を目指して仮国籍の中、国連軍に従事する形で頑張っている模様。

6月14日時点ではラピッドスイッチ高速切替の能力を買われて国連軍のとある開発計画に参加している。

■ 人間関係 ■

● 更識楯無

自分に日本への亡命を提案し匿ってさえてくれる、ある意味救世主。レズレズしい事をよくされるが、それを除けば面倒見の良い姉という印象。

● 更識簪

6月14日現在参加中の計画に参加して来た同年代である為、親近

感を抱いている。

●デュノア夫妻

実父と義母。

それ以上に対した印象は抱いていない。

●織斑一夏

特に何も。

◆ラウラ・ボーデヴィツヒ

黒兎隊の部隊長。

だがVTシステムIIオルガに取り込まれた際に継戦能力を維持するべく、チョーカー（首輪）に内蔵されていた圧力注射による戦術薬物を過剰投与されており……。

ただ一つ言える事は、本編からは退場（ただし死亡でも廃人化でもない）してしまう事だろうか…。

（メタい事を言うと、作者の不手際でラウラアンチめいた事になってしまった上にここまでヘイト買ってしまったラウラをどうにかして幸せにするにはこうするしか思いつかなかったからでもある）

■人間関係■

●織斑千冬

自らをドン底から救い上げてくれた、ラウラにとっての救世主であり神。

●織斑一夏

千冬を貶め墮落させた存在という認識。

●黒兎隊メンバー

自分の手駒という認識。

●篠ノ之千尋

自分が倒す予定だった一夏を横取りした卑怯者という認識。

◆更識楯無

IS学園生徒会長。

ロシア代表資格をロシア政府より一方的に返還要求という名の剥

奪をされているため、専用機は喪失している。

■人間関係■

●更識簪

可愛い妹。

●シャルロット・デユノア

かんちゃんが構ってくれないの…だから代わりに癒して〜！

●布仏虚

従者。

◆更識簪

原作通り白式を一夏に奪われた（簪の主観）為に式式の開発と、それをベースとした統合機兵・颯式式およびマルチロツクオンシステムの開発に携わる。

6月14日時点ではワケ有って国連軍のとある開発計画に携わっている。

■人間関係■

●更識楯無

私の姉、以上。

●セシリア・オルコット

タッグトーナメントで組んだりしたけど…別れちゃうのが辛い…。

●シャルロット・デユノア

なんで貴女が☒…え？日本国籍取得を目指してる途中？今は仮国籍？あ…そういうことか…。

とりあえずよろしく。

●布仏本音

従者。

●織斑一夏

今はもうどうでもいい。好きにしたら？

◆織斑一夏

6月14日時点での状態を要約すると、「俺は、正気に戻った！」状

態。

モンドグロツソ誘拐時に犯人側によって破損させられ脳死状態となった為に脳を束による人造義脳で補完される形で再生したのだが、結果はタッグトーナメント以前のようにとんでもない性格となってしまう。

現在は人造義脳の故障とその存在が脳の機能代償を誘発させ、モンドグロツソ以前の性格に回復。

しかし後の祭りとなっており、周囲に振り撒いた不信と認識の齟齬から孤立してしまう。

■人間関係■

●織斑千冬

姉であり、自分の非を指摘する共に味方で居てくれる存在となった。

：しかしそれが孤立を強めてしまった一夏を禁断の親近愛に目覚めさせつつある事を彼女は知らない。

●篠ノ之箒

ファースト幼馴染であるが、墜落事故時の対応・バリア破壊時の被害・鏡ナギの怪我に対する反応等、振り撒いてしまった不信により避けられている。

だがそれとは別に避けている理由があるらしく…？

●凰鈴音

セカンド幼馴染であり、鈴自身も一夏を抛り所としていたが彼女自身の諸事情で一夏と別れることとなってしまい、これが一夏の孤立を強めた。

●セシリア・オルコット

墜落事故やバリア破壊など積み重なる不信によって避けられている。

●シャルロット・デュノア

仲こそ良かったものの、フラグ建設以前にドナドナされた挙句退学した為別離。

●ラウラ・ボーデヴィツヒ

千冬を巡つてのライバルであり、フラグすら建っていない上に加えて今は本人が無関心という（）

●更識楯無

関係構築にすら至っていない。

●更識簪

白式の怨み+墜落事故などの不信で関係構築不可能。

加えて今は本人が無関心という（）

◆鷹月静音

生真面目な性格であるが、その一方でジョークが満載された本を好む。

父親が自衛官であることから軍事関連の知識が一般人と比較して豊富である他、技能面でも稚拙さこそあれど人並み以上に腕前を發揮する。

また、父子家庭（母親は白騎士事件で死去）だった影響か若干ファザコンである（ちなみに父親に対して近親愛願望を持っている節がある）。

6月14日時点では将来について真剣に考え始めており、IS学園防衛戦を経た為に、将来は防衛大学を経て陸上自衛隊・衛生科（衛生兵）への所属を決めており独学と身近な医療関係者からの指導を受け始めている。

■人間関係■

●四十院神楽

友人であり、鷹月が初めて（医療的に）救った人間。

この時の対応が彼女の将来を固める事となった為、ある意味神楽は重要人物である。

●鷹月仁

父親。自衛官である為に会う事が叶う時間は短いが娘ことを第一に考えているらしく、それ故に静音も彼を慕っている。

…なお鷹月の恋愛対象でもあるらしく、このまま行くと近親姦の可能性も：（）

●鷹月愛子

母親。乗り合わせていた航空機が白騎士事件のミサイル攻撃に巻き込まれ、千葉県銚子市沖50キロの海域に墜落。

亡くなったと思われる（遺体未発見）。

◆四十院神楽

原作のおっとりした雰囲気ではなく、こちらでは冷淡な性格となっている。

特生自衛隊（旧特務自衛隊）創設に携わった旧い名家の出身。

その為彼女が物心着いた頃には既に国防に携わる未来が固定されていた。

別段彼女自身、特に抵抗も感じておらずやりたい事も無かった為にそれを受け入れているが、最近は遅めの反抗期に突入した所為か趣味と呼べるものを探している。

ちなみに、恋愛対象は「年上（25〜40歳）のイケオジ（公務員・特に国防関係が望ましい）」という中々コアな内容であり、同年代の異性は恋愛対象としては眼中にない。

また、EP-39では鉄骨に潰されて（後々切断するしかない）腕を自分から切断するなど度を越した合理主義な面もある。

6月14日時点では切断した腕に簡易義手を装着する作業に掛かっている。

■人間関係■

●セシリア・オルコット

名家の出身同士気の合う良い親友となったが、セシリアがイギリスに緊急招集されてしまう事態となった為に別れを寂しく感じている。ちなみにセシリアには料理の教授（カレーライスやローストビーフの味付けなど）をしていたらしく、これがセシリアの殺人兵器級の料理改善となったのだとか。

●鷹月静音

友人。

神楽が自力で腕を切断した際に彼女が止血してくれなかった場合、神楽は失血死していた可能性がある為命の恩人と言える。

●鏡ナギ

友人。

●篠ノ之箒

友人であり、剣道仲間。

●轡木誠

上司であり、初恋の相手でもある（24歳差の恋愛対象）。

◆鏡ナギ

IS学園の生徒。

一夏によるシールド破壊事件時の二次災害により重傷を負っており、現在は松葉杖生活を余儀なくされている。

6月14日時点では工業と医療の融合と言われる生体義手の技師を目指す事を決めている。

◆立花葵

新聞部の部員。

海上自衛官の父親、外務省職員の母親、大手放送局リポーターの姉を持つ。

その為鷹月同様に軍事関連知識に詳しい他、情報収集能力に長けている。

■人間関係■

●鷹月静音

友人であり、軍事関連知識仲間。

●四十院神楽

友人。

●鏡ナギ

友人。

◆布仏本音

簪の従者。

：本編ではあまり触れられていないが、日常面ではのほほんとした雰囲気で場を和ませてくれる。

◆城内照美

原作にてセリフのみ登場した「千冬に憧れて北九州から来た」娘。

6月14日時点では九州への全島疎開令発令に伴い、奈良県北葛城

郡に疎開する家族を心配している。

◆黛薫子

新聞部の編集長。

6月14日時点では立花達と協力して「ラジオ放送部」設立を目論んでいる。

◆織斑千冬

一夏の姉であり世界最強のIS乗りにしてIS学園1年1組担任教師。

世界最強という立場に縛られているのを良い事にIS委員会から一夏を間接的な人質とされた上で黒い仕事をさせられていた（もちろん本人は全く納得出来ていなかった）。

だが最近では吹っ切れた様子で、彼女なりに頑張り始めた模様。それと同時に束の行動に疑念を抱き、警戒をし始めた。

◆◆日本国◆◆

○内閣府

◆矢口蘭堂

内閣官房副長官。

日本国内で発生している異常事態が巨大不明生物によるモノである可能性を考慮する他ネットなどからの情報収集を行うなど、従来の閣僚とは一線を画す対策法を取る。

所属政党は保守第1党。

○陸上自衛隊

◆袖原泰司

一等陸佐（大佐）。

防衛省統合幕僚監部防衛計画部防衛課長。同「厄介者」。

光とは防衛大学時代の同期であり、対巨大不明生物作戦の関係上よく連絡を取る。

◆鷹月仁

一等陸尉（大尉）。

陸上自衛隊第1師団第1戦術機連隊隷下第3戦術機小隊 “ ブ
レード隊 ” 小隊長。

静音の父親でもある。

またEP-39にて、静音の回想という形で過去に脚を欠損した人間へパラコードを用いての止血処理を施していることが言及されている事からサバイバル知識や医療スキルも高いと思われる。

◆如月スミレ

三等陸尉（少尉）。

仁の部下であり、かつてはIS乗りを目指していたが、訓練中の事故から戦術機パイロット（衛士）に転属した。

●海上自衛隊

◆神宮司八郎

海将補（少将）。やまと型護衛艦「やまと」艦長であり、第11護衛隊司令官。

常に落ち着いた性格をしているらしく、EP-42と43における対ゴジラ戦にて取り乱した様子を見せていない。

◆長田雄一

一佐。こんごう型ミサイル護衛艦「みようこう」艦長。

●特務自衛隊（特生自衛隊）

◆片桐光

特務自衛隊（特生自衛隊）の1等特佐（大佐に相当）。

千尋と箒の上司であり、保護者でもある。

どうやら《こちら側の世界》出身でありながら千尋同様に「あちら側の世界」を知っているらしいが詳細は不明（ゴジラファンなら片桐の名前でなんとなく分かるかも知れない……）。

特自創設と暗部に関わりのある名家の出身らしく、10代から暗部にて教導を受けていたらしく身体能力が非常に高い。

現在はその立場上指揮官の座にいるが、本人曰く「やはり指揮官には向いていない」らしい。

事実、IS学園防衛戦時に千尋と箒を見捨てるべき所ですぐさま判断を下せず葛藤するなど感情が合理的判断を阻害してしまう一面があった。

ちなみに年齢は26歳で花の独身…。

■人間関係■

●篠ノ之千尋

保護対象兼部下。ある意味因縁持ち（詳しくは映画『ゴジラ2000 ミレニアム』の片桐を参照）。

墨田大火災の現場で保護した際は噛み付いてくる千尋に呆れ返っていたが、今では千尋と箒の関係を見ながら「さっさと結婚しろ」と感じているらしい。

●篠ノ之箒

保護対象兼部下。

墨田大火災の現場で千尋と共に保護した。

●久宇舞弥

保護対象兼部下。

暗部研修時代に拾った人材（脱北した拉致被害者）でもある。

●永井頼人

保護対象兼部下。

千尋同様、墨田大火災の現場で発見・保護したらしい。

●更識楯無

名家繋がりの縁。

●四十院神楽

名家繋がりの縁。

●轡木十蔵

名家繋がりの縁。

●轡木誠

名家繋がりの縁であり、上司でもある。

●袖原泰司

防衛大学時代の同級生。

●朝倉美都

親友であり、暗部研修時代に殺害を命じられた相手にして、生きていて欲しいと願い海外に逃がした人物。

10年が経過した今でもその想いは変わらず、IS学園防衛戦時の第1シャフトで対峙し敵であると宣言されても尚殺せずにはいた。

◆轡木誠

特務自衛隊（特生自衛隊）の特将（中将に相当）。

原作の轡木十蔵の肉親であり、八広駐屯地の司令代理でもある。

特自創設に関わった旧い名家に生まれらしい（現在は没落している）。

ちなみに鉄ヲタでもあり、休日はカメラとカップラーメンを手に鉄道路線沿いに陣取っているらしい（最近だと大阪府八尾市の近鉄高安車庫に出没）。

好きな電車は東武1720系デラックスロマンスカー並びに近鉄21000系アーバンライナーとのこと。

あと童貞d（銃声）。

■人間関係■

●片桐光

名家繋がりの縁。

●轡木十蔵

血縁者。

●四十院神楽

名家繋がりの縁。何故か惚れられて困っているとかなんとか。

●矢口蘭堂

鉄道ヲタク仲間。

◆永井頼人

特務自衛隊（特生自衛隊）の一尉。自称「健康優良児男子」。

墨田大火災跡地で保護された。その際には陸上自衛隊のBDUを

身に付けており、「夜見島にいた」等の供述があつたが詳細は不明。そのまま身柄を保護される形で特自に入隊。現在は特生自衛隊（旧特務自衛隊）実働大隊に所属しており、試作メーサーライフルの他、小型艇の操縦も得意としている。

余談だが、八広駐屯地では環境実験部にも所属しており、駐屯地内でG元素の土壌汚染状況の確認という建前で植物を育てている模様。

◆久宇舞弥

特務自衛隊（特生自衛隊）の三尉。

脱北者であり、拉致被害者の一人でもある。

暗部時代の光に保護されており、そのまま身柄保護も兼ねて特自に所属した。

ISの操縦はもちろん、MA-10J凄鉄などの戦術攻撃機の操縦も得意としている。

◆権藤吾郎

特務自衛隊（特生自衛隊）の一佐。

◆山本晃

特務自衛隊（特生自衛隊）の三尉。

整備課に所属しており、千尋たちとは機体整備でよく関わっている。

なお、整備士だからといって戦闘能力が低いわけではなく、EP-11のバルゴン戦にて、近接戦でバルゴン小型種をMINIMI軽機関銃で倒すなど、戦闘能力は高い。

◆三村拓海

特務自衛隊（特生自衛隊）の三佐。

第1機動団第2メーサー群に所属している。

EP-10におけるロリシカ派兵にも参加していた他、EP-40における千尋と箒のIS学園脱出支援などを担っていた。

● 情報庁

◆ 巻紙礼子（オータム）

防衛省情報本部所属の自衛官。

コードネームはオータムであり、亡国機業に潜入していたが各国諜報機関合同の殲滅作戦終了後にその名前は捨て、今は情報処理という後方任務に就いている。

◆ ◆ アメリカ ◆ ◆

◆ カヨコ アン パターソン

アメリカ大統領特使。

日系3世であり、アジア系でありながらアメリカ上院議員という手腕を持つパターソン家の長女。

基本的にアメリカの利益を優先するが、同時に自分達と相手側の双方がWin | Winな関係であることを求めるなど、ハッピーエンド主義者な節がある。

祖母が長崎原爆で被曝しており、その孫にあたる彼女は被曝3世である為アメリカ人でありながら核に対しては否定的であり、核関連で主流派の人間と度々衝突することもあったという。

■ 人間関係 ■

● 矢口蘭堂

ゴジラ関連でよく関わることや、第2の祖国とも言える国の政治家であることからアメリカ政府という公的なポジションだけではなく、私的なポジションでも何らかの感情を抱いている。

● ゲンジ アン パターソン

カヨコの父。

父親であるヒデアキの戦績から、アメリカ上院議員に上り詰めてい

る。親のコネではあるが、政治家としてのその手腕も確かなものである。

●ヒデアキIIアンIIパターソン
カヨコの祖父。

第2次世界大戦時にアメリカ軍第442連隊戦闘団（日系人部隊）の兵士としてイタリアにてナチス・ドイツ軍と激戦を繰り広げた英雄でもある。

●モトコIIアンIIパターソン
カヨコの祖母。旧姓は「阿玉（あだま）」で、長崎の原爆によって家族は全員死去。

進駐軍としてやって来たヒデアキに惹かれ渡米した。
被曝者でもあり、カヨコが幼い頃に原爆症に伴う急性白血病で亡くなっている。

◆ナターシャ・ファイルス
アメリカ海軍戦術機大隊所属の兵士。

銀の福音量産化によりお払い箱となった為に戦術機部隊に転属した。

現在はキャンプ・イレイズドを母港とする空母ユナイテッド・ステイツ艦載戦術機大隊第2中隊の指揮官を務めている。

◆イーリス・コーリング

アメリカ海軍太平洋方面軍キャンプ・イレイズド所属の兵士。

ナターシャとは知り合いだが、ナターシャが気に入ったというヘツクスとキャットファイトを繰り広げている。

ちなみにガチレズ。

◆カレン・カレリア

アメリカ陸軍第66部隊「アンネイムド名も無き兵たち」隊長。

冷静沈着だが、移民・難民を中心とした外国人部隊を取りまとめているせいか民族を超えて分かり合おうとする心の広さがある。

◆スコール・ミューゼル

アメリカ情報軍所属の兵士。

以前はCIAに属し亡国機業に潜入・実働部隊「モノクローム・アバター」を率いていたが、内部制圧作戦の指示と共に亡国機業の消滅させた事とNSAおよびCIAの統合化・情報軍への再編により鞍替えした。

◆ダリル・ケイシー

アメリカ海兵隊所属の兵士。

元アメリカ代表候補生であるが、IS学園の壊滅以前に本国へ強制召喚され、海兵隊機械化歩兵部隊に配属された。

現在はアメリカ中央軍（中東地域における統合軍）中央海兵隊に配属されている。

◆◆中華人民共和国◆◆

◆孫華輦

中国共産党特別武装隊香港派の人間。

現行の巨大不明生物への対応では国民が絶滅する可能性があるという危機感から、国民を逃すべく革命を画策している。

他にも東南アジア諸国との関係改善や人民解放軍合作派と共にアメリカや台湾など西側との関係を構築するべく奔走している。

?◆楊麗々?

中国代表候補生管理官（北京派）。

現在は北京派残党と共に駐日中国大使館に退避している。

◆賀弘文

中国共産党特別武装隊北京派。

鈴の処女を部下に奪わせた挙句精神的に追い詰めた外道。

◆王愛徳

中国共産党特別武装隊北京派の親ロシア派。

現在の中国の実権を握っており、巨大不明生物による被害も合作派

と国粋派の内戦も全て対岸の火事、と駐日中国大使館から静観を決め込んでいる。

◆劉学音

鈴の実親。

◆◆欧州連合（EU、ユーロ・ロシア）◆◆

??クロエ・アドルガツサー

欧州連合ドイツ陸軍第1装甲師団所属の決戦迎撃兵器LZ―02

（独製メカゴジラ2号機）操縦士。

ラウラの姉であるクロエ・クロニクルその人だが、それはコードネームであり本名ではない。

妹を天災の魔の手から解き放つ為とはいえ半ばば???にしてしまった罪悪感から、激戦地に赴く事を希望することが多いという。

ちなみに、彼女自身も人工生命体（ホムンクルス）である。

また他にも、ワールドパージの能力を応用したT計画など多くの計画に携わっている。

??デーゲンハルト・ボクスベルク

欧州連合ドイツ陸軍第1装甲師団所属の決戦迎撃兵器LZ―01

（独製メカゴジラ1号機）操縦士。

??クラリツサ・ハルフオーフ

欧州連合ドイツ陸軍第1装甲師団混成機械化連隊第3大隊第2中隊指揮官。

黒兎隊副官だったが、ラウラの離脱により指揮官に昇格した。

??ユリア・ホーゼンフェルト

欧州連合ドイツ陸軍第666戦術機中隊指揮官の大尉。

ウクライナ派兵経験があり、EF―2020ヴァイツァヒンメル開

発にも携わっている。

EP-15で極東派遣軍に参加しており、第2次日本本土防衛戦時は大使館防衛に参加していた。

臨時IS学園にて2週間の講義を行った後に部隊を引き連れて帰還することがきまっている。

??エミリア・カレル

欧州連合ドイツ陸軍第666戦術機中隊副官の中尉。

母親がドイツ政府に関わっており、政治に関する情報収集ならびに交渉を得意とする。

極東派遣軍として参加し、EP-42にて国連軍に交渉するなどの行動を起こしている。

??クラウス・エルツエンガー

欧州連合ドイツ陸軍第666戦術機中隊次席指揮官の中尉。

部隊の1/3が極東派遣軍となった後に暫定的に指揮権を引き継いでいた。

??コリーナ・イリオポウロス

欧州連合ギリシャ海軍第1航空機動団所属の兵士。

実はギリシャ代表候補生のフォルテ・サファイア（事実上の偽名だが、本人曰く芸名）。

??ベルベット・ヘル

欧州連合ギリシャ陸軍所属の兵士。

元はギリシャ代表候補生。

??アリーシャ・ジョセスターフ

欧州連合イタリア空軍のエース。

元はイタリアの代表操縦者。第2回モンド・グロツソ大会優勝者。現在は軽空母カヴールを活動拠点にダンケルク作戦に参加している。

???ロランツイーネ・ローランディファイルネイ?

? 欧州連合オランダ陸軍の兵士。?

? 元はオランダ代表候補生でガチレズ（ただしこれは本人が性同一性障害である事も加わっている）。?

?これまで99人の恋人がいた(過去形) そうな。?

現在はドイツ・オランダ合同師団に所属しており、ポーランド撤退戦に参加している。

??ログナー・カリニーチェ

元はロシアの元代表操縦者で、かつて楯無にロシア代表の座を奪われたが、今では微々たるモノと語っている。

現在はロシア軍ユーロ協調派海軍のアドミラル・クズネツォフ級航空母艦【アドミラル・アリストフ】艦載航空隊に所属している。

??クーリエ・ヘククシエフカ

ユーロ・ロシア海軍艦載航空隊所属の兵士。元はロシア予備代表候補生。

現在はロシア軍ユーロ協調派海軍旗艦のリデル級駆逐艦【アドミラル・アレクセイ・オルロフ】に乗艦し、アイルランドに向かっている。

◆◆その他◆◆

◆篠ノ之束

全ての元凶であり、同時に彼女が居なければ滅び真つ逆さまの世界となっていたであろう、人類にとっての必要悪でもある。

■人間関係■

●篠ノ之箒

箒を愛しているように見えるが、正直なところ箒を愛しているかさえ疑わしい。

…というのも、箒を悉く不幸に蔑めていることがあまりに多過ぎるからである。

これが単に「自分の後悔を箒に覆させることで自己満足を得ている」だけなのか、「自分の歩めなかつた道を歩んでいる妹を見て喜びた

い「代償行為なのか、「可哀想な妹に姉として優しくしてあげること
自分に酔いたい」筈の辛さに気付いておらず正義と正しさと優しさを
示して語ることで得られる愉悦を無自覚の内に求めているだけなの
か。

…どちらにせよ歪んでいる事は変わらない。

●織斑一夏

束としては一夏の事も親友の弟としているらしい。

その憐憫は確かなものだが、それは束にとっての「理想の一夏（主
人公）」を束の主観で押し付けてしまうだけという結果だった。

…現に、一夏は人工義脳による補完システムの故障が起きるまで、
何処と無く束を連想させる振る舞いをしていた。

現在も辛うじて一夏は繋がりを維持してくれているが、真相知れば
拒絶される未来は目に見えている。

●織斑千冬

束曰く、親友。

●クロエ・クロニクル

少なくとも束自身は助手であると考えていたらしい。

●篠ノ之千尋

束本人は筈を奪い、一夏の活躍の場を奪った為に目の敵にしてい
る。

（しかし皮肉にも、束本人がプロログにてワームホール装置を稼
働させなければ千尋はそもそもこの世界に存在していない）

柳星張《イリス》覚醒編

EP-45 (崩壊の) 日常、再開。

6月13日午後19時30分

館山市・海上自衛隊館山基地

—— 巨大不明生物離岸から6時間40分後。

—— 篠ノ之姉弟との会話より10分前。

臨時の避難所となっている仮設テント群。

その、連なる白い屋根に隣接する深緑の屋根—— 軍用テン

トのひとつ。

そこが、学園撤退戦に参加していた兵士達の衛生確認の為に設けられた臨時の医務室であった。

医務室とは言っても、看護師が出迎えてくれるわけではない。

出迎えるは、NBC防護服に身を包んだ——

陸上自衛隊化学防護隊と。

特務自衛隊汚染防護隊だ。

IS学園では原子力発電所の原子炉—— それも日本政府・

資源エネルギー庁や国際原子力管理委員会に建設許可申請を出していない、ド違法のもの—— が破損し、極めて大量の放射能が流出した。

更には館山市では巨大不明生物同士の戦闘が発生。

—— 結果として、広範囲で放射能・生物汚染が付近一帯で発生した。

：それらを考慮すれば、住民や避難民、自衛官への身体検査を行うことは必然と言える。

そしてそれは勿論—— 自分／千尋もそうである。

何しろ、ゴジラによってバラバラにされた拳句—— 生身でオルガIIと対峙した、という人間の常識からすれば無茶にも程がある事態を経たのだ。

検査対象にならない方がおかしい。

だから今は採血だの放射線検査だのその他諸々を経て、今はアイリに呼び出される形で、テント内で2人きりとなっていた。

—— テント越しにくぐもった音が伝わって来るなかで。

対面する千尋ゴジラとアイリ。

彼女は手にした資料と千尋の顔を見比べながら、酷く神妙な顔をして。

…本人に向けて言うべきか、悩んでいるかのように。

「—— アイリさん、言いたいことがあるなら言ってくれ。とりあえずそんな顔でチラチラ見られてたって、話が進まない。」

少し気遣うように、しかし若干苛ついた声音でぎつくばらんに言い放つ。

…もちろん、相手を気遣うことは重要だ。

だがそれ以前に千尋自身も疲れているのだ。

—— それでようやく、アイリは決心がついたのか。

「—— タッグトーナメント前と比べて、少し大人に成長したみたいね。」

呆れながら、” 降参だ ” とでも言うかのようなジェスチャー

でアイリが言う。

—— それに千尋は少しムツとして。

「—— 俺は元から大人ですってば。」

—— 拗ねた子供のような表情と声音をもってアイリに抗議する。

その反応こそが、未だ子供であることの象徴なのだが。

だが、いつもなら窘めるハズのアイリは軽口すら叩こうとせず、やはり神妙な顔—— まるで自らの子供が離別してしまうかのような顔を浮かべて。

「…ふう——」

深呼吸。

まるで睨みつけるかのように意思を決めた顔を浮かべたアイリは、

「…結論だけ言うわね。」

覚悟を決めて、そして——

「千尋くん貴方——あと、6ヶ月で死ぬわよ。」

の脳を揺らす。

——ハンマーで頭蓋骨をぶん殴られたような衝撃が千尋

…は？

…死ぬ？

…なんで？

…俺死ぬの？

…あと半年で？

…あと6ヶ月で？

——唐突に告げられた死亡宣告。

——唐突に告げられた余命宣告。

それが…千尋の頭を混乱させた。

「——なんで…？」

思わず、声が漏れる。

思わず、乾いた笑みを浮かべた表情のまま固まってしまおう。

「——貴方の肉体が、ヒトの細胞にG細胞が寄生・共生するこ

とで生きているという話はしたわね？」

アイリの問いに、千尋は頷く。

——千尋は知つての通り、墨田大火災で犠牲となつて子供の亡骸に寄生したG細胞がヒトの細胞を乗り物にする形で産まれたモノ。

一度死んだ細胞を強制的に蘇生し続けることで動き続ける骨と肉の塊。

言わばリビングデッド。

即ち、ゾンビである。

それは、ヒトの細胞とG細胞が微妙な均衡を保っていたからこそ成し得ていた安寧。

…だが今は——

「…今の貴方は、G細胞が各所で活性化しているわ。その所為でバランスが崩れて、ヒトの細胞がどんどんG細胞に侵蝕されてる。」

——均衡は崩れ、自滅に転がり落ちていいるのだと言う。

「…身に覚えはあるはずよ。例えば——かつての貴方の表皮に変異した右肩とか。」

その言葉に、千尋は身を硬くする。

——タッグトーナメントにおけるVTシステム≡オルガI制圧戦にて負傷した右肩。

そして一度ピットに戻つた際に成長痛のような痛みと共に、傷口から生えるように変異していた——ミレニアムゴッラかつての自身の表皮。

… ” あの時からか ” と、この時初めて事象の深刻さを自覚する。

「侵蝕を止める手段は——今のところ無いわ。箒ちゃんのシミの侵蝕と同じく。」

だから——完全にヒトの細胞が侵蝕され尽くされるのが、今から6ヶ月後。その時個体生命を維持出来ているかさえ怪しい。「アイリは顔を歪めて。」

「だから——貴方は、あと6ヶ月しか生きられないと、覚悟して。」

「……」　「こんな事しか言えなくてごめんなさい」
とアイリは申し訳無く、謝りながら告げる。

…千尋はただ、静かにそこを後にした。

——この結末を、俺は望んだのか？

それは肯定とも言えるし、否定とも言える。

だからあんなに申し訳なく謝られたら、こつちが居心地悪くてたまらない。

…自虐自暴というヤツだろうか。

ただ、6ヶ月後に確実に死ぬ未来を告げられて。

——冀った死を迎えられる事に歓喜する自分がいた。

——救われた命を無碍にしてしまう事に怒る自分がいた。

——死ぬしか無い自分より、壊れた少女の未来だけを危惧する自分がいた。

壊れ始めた俺／箒。

壊れるしか無い俺。

壊れる事を望んだ箒。

守らなくてはならない少女。

守ろうと決めた少年と世界。

——ふと考えれば、箒と千尋は似ている。

どちらも自分を勘定に入れず、分不相応な抱えきれないものを抱えようとする。

どうしようもなく似ていて。

——どうしようもなく違っていて。

まるで千尋／俺は人間になりたいかのように思っていて。

まるで箒は俺と同じ怪獣になりたいかのようにさえ見えて。

「……ああ、くそ。」

…だめだ。頭がパンクする。

あんまりにも多過ぎるこの事象や事態の数々に、千尋の頭は根を上げた。

「——俺、やっぱり頭が良くないんだなア…。」

溜息を吐きながら、空を見る。

—— 煙で曇った空に、星は映らない。

…なので、千尋はすぐに顔を下ろした。

今はとりあえず散歩でもしよう、と独り言ちて。

その足取りは軽やかに楽しそうに。

—— 残り少ない命を謳歌するセミのように。

—— 心の何処かで死にたくないと訴える子供のよう。

「別に、死が怖いわけじゃないけどサ。」

1人呟く。強がりではない。何しろ、千尋は死よりも辛く苦しい痛みを知っている。

秒単位で延々と、全身を焼き尽くされるような痛みと共に繰り返される死と蘇生。

放射能によって死に至る細胞と蘇生させられ無理矢理作り変えられる身体。

どれほど自らの手で死を迎えようとも、死を許さないかのように蘇生される肉体。

” —— この苦しみが終わるなら、誰か殺してくれ。もう

俺じゃ、無理だ…!! ”

—— かつて、死を渴望した時の声が頭を過る。

…だから、それを考えれば死は甘美な救済でしかない。

だから怖いのは別の話。

” 生きてる…生きてる…!!? 良かった……ありがとう…生きていて…1人でも生きていてくれて…1人でも救えて…救われた…!! ”

—— 墨田大火災で初めて箒と出逢った記憶が脳を過る。

それが、悪魔に誘惑される人間への戒めのように、自らを食い止める。

そして同時に、箒との記憶が再生される。

—— 初めて、こんな俺ゴッラが生きている事を受け入れて祝福し

てくれた少女。

—— 初めて、こんな俺ゴッラに生きて欲しいと言ってくれた少

女。

——そんな彼女と見た、昼休みの青空。

——そんな彼女と過ごした、夕焼け。

そういう、ただ一人の人間というちっぽけな、手に取る事さえ値しないと決めつけていた存在を介して見た——あまりに尊い憧れが、俺には眩しくて。

けれどもあまりに脆いその存在を、初めて守ってやりたいと思えた千尋ゴジラが居て。

：そこで——自分は箒ゴジラの為に生きてやりたいのだと、再度自覚する。

こんなぐちやぐちやになりつつある世界の中で。

大義とか。

組織とか。

そういうのが飛び交う複雑なこの世界で。

人類滅亡が秒読み段階に入ってしまったているこの世界の中で。

——たった一人の少女の為に自らの命を焼き尽くす。

自分はそんな小さな事に対して必死ゴジラこいて生きてやろうとしている。

：自己満足とか、そんな風に言われそうだけど。

でもそれが、死に飢えていた自分に生きる事を教えてくれた——

——箒少女への、せめてもの恩返し。

人間の基準で測れば、少しの感謝で済む程度のもの。

だが千尋ゴジラからすれば——いくつ命を焼き尽くしても、足りない程のもの。

今まで失望しか無かった世界が塗り替えられ、希望に転化する程に綺麗だったもの。

：だから千尋は、” それならそれでもう良いや。” と内心独り言ち——

「箒——お前の為に死生きてんでやる……！」

寂しげに笑いながら口にする。

微かな喜びと胸の痛み。それを補強するように力強く口にして。

——あと6ヶ月。

——あと6ヶ月で尽きる命。

——あと6ヶ月しか残ってない命。

——これは多分、人を殺め過ぎた罰なんだろう。

——俺には償いの代わりに自分に都合の良い方法しか取れないけれど。

：だからせめて償い代わりに、一人の人間：箒くらいは、幸せになつて貰えるように。

——どう足掻いても詰みだし、お先真つ暗だけど——残った余

命は、箒の為に焼き尽くそう。

「しっかし、お先真つ暗つてもオレらしい末路だよな。」

——自虐めいて無邪気に笑いながら、少年はひとり呟いた。

??
——暗転。

——これは夢。

——泥が街を飲み込んで行く。

——火が燃える。

——火が死ぬ。

——車が燃える。

——車が爆発する。

——建物が燃える。

——建物が崩壊する。

——その中を、箒は逃げる群衆にまみれながら墨田区を走って、泥から逃げる。

——その後ろで。

1人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

3人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

8人が泥に飲み込まれる。死ぬ。

悲鳴や断末魔を上げて燃えながら死んで行く。

燃えた跡には。

タンパク質が炭化する臭いを放ちながら燃えていくヒトだったもの。

煙を大量に吸ったせいで呼吸ができずに窒息して死んだヒトだったもの。

未だに燃え続ける木造建築が一部に使われていた建築物。

焼け落ち、完全に瓦礫と化した建築物。

誰もいない、生きている人間が誰もいない、廃墟と化した街。

私が壊れた日。

私が変質した日。

私が人を見殺した日。

私が千尋と出逢った日。

墨田大火災という地獄を見た日の——景色。

6年前から変わらぬ、夢にこべりついた光景。

ただ筈は焼け落ちる世界をボウッと眺めていて。

「…え？」

でも少し、それは変質していて。

——この後救い出すであろう少年が炎の中に立っている。

——よく知っている少年が、血塗れのまま獄炎の中に立っ

ている。

——その眼前には。

「…あ——」

——煙の如く、群れを成して空を席捲する異形の鳥達ギヤオスが。

それらは少年／千尋目掛けて急降下、して…

——やめろ。

千尋の身体がぐちゃり、ぱきやり、と音を上げる。

——やめろ。

ぐちやぐちや、ぺちやぺちや、と千尋の身体を弄る音がする
—— やめろ。

じゆるじゆる、と千尋の身体を齧る音がする

—— やめ、

—— 直後。

業ツという轟音と。

蒼状の熱光が、異形の鳥諸共千尋を焼き尽くす…！

遅れて響く、黒き荒神の咆哮。!!!

知っている。

知っている。

知っている。

あの鳴き声の主を私は知っている。

IS学園で私達と対峙したアレを、覚えている。

だけどそんな事より今は少年の方が先決で。

…手を伸ばす。

助けないと。

—— もう手遅れだけど。

違う、そうじゃない。

—— あの子は、こんな風に死ぬべきじゃない。

だから絶対助けてる。

—— お前達が居たら、その子が笑えない…！

絶対、傷付かないようにする。

—— その子が戦わなくても良いようにしないといけない。

私が全部背負ってやらないと。

—— 私自身を投げ捨てたって、その子が幸せになれるなら

…！

—— 瞬間、轟音とともに背後で爆ぜる音。

…振り返ると。

—— 黄色の単眼を浮かべる骸骨めいた、異形の鳥が。

…その鳥は哀しげに箒を見下ろしながら。

《—— アレを救う為に自分を投げ捨てるのか》、と問いかける

かのように。

箒の前方を見つめている。

振り返る。

そこには、

”

千尋の本質が、剥き出しとなっていた。

「あ。」

光景は、理解の範疇を超えていた。

最強の肉を宿す身体。

紅蓮に息衝く焦熱の具現が此処にある。

沈黙する赤い世界の中。

業火に焼かれながら、黒い影がひとつ。

焰の眼をもつて、矮小な一人の人間を捉えていた。

咆哮する。

応えるように、再び無数の異形ギヤオスの鳥が空より襲い来る。

それは確かに、地上に在る全てを蹂躪し、根こそぎ喰らい尽くすで

あろう貪食の具現。

…だがそれは、あくまで人間の基準で測った話である。

故に、

人智を超越したモノが目覚めます。

都市という構造物を蒸発させるように、業火が渦を巻く。

赤い大気が柱となり空を焼く。

あるいは、嵐の渦中とはこういったものなのか。

荒れ狂う波音はあまりに重く巨大であるが故に聴覚は知覚出来な

い。

大き過ぎるが故にものが見えないように、その咆哮は無音に等し

く。

一瞬の時、全身が赤く満たされて——紅蓮が世界を焼き払

う………!

——体内放射。

ひとたび放たれたその一撃は。

貪食する異形の鳥を一蹴するかの如く——全て殺し尽くす……!

”——!!”

…それは、もはやヒトの咆哮ではなかった。
…それは、もはや生物の咆哮ではなかった。

アレはもはや生物の摂理から外れ、天災めいた現象に成り果てた存在。

ヒトの手が決して届かぬ皇。

なれど、ヒトが生み出してしまった罪悪の象徴。

そして、ヒトに歪められてしまった被害者でもある存在。

絶対の強者であり。

呪われた者であり。

不死の霸王であり。

永遠に孤高である。

——星の頂点に位置する君臨者。

ソレが、千尋の本質だった。

…だからこそ。

「……ああ——」

…だって、これは。

こんなものは。

千尋が望まなかったはずだから。

…最初からそうだったのなら違うかも知れない。

…だけど、そうではなかった。

最初から怪物などではなかったのだ。

ソレを私達が彼の家族を殺し、彼を怪物に仕立て上げてしまった。

…そんな結末、誰が望んだのか。

…そんな結末、誰が望むのか。

諸悪の根源は私達である。

…だけど、否。だからこそ。

「だからこそ、もうアイツが不幸にならないで良いように。【自分】な
どくれてやる。」

——凜として、箒は応えた。

そこにはもう、人間性など露ほども遺されてはおらず。

…ソレで、柳星張は初めて少女に恐怖した。

——彼女は、自ら進んで怪物になろうとしている。

…ただ一匹の怪物の為に。

——怪物が人間に出逢い、人間になろうとしたように。

——彼女は怪物の肩代わりをする為に、怪物になろうとし

ている。

…ただ一匹の怪物の為に。

これが恐怖でないならばなんだというのか。

彼女のソレはもはや、狂氣的なまでに強い精神だけを動力源とする機械ではないか。

「…私がアイツの代わりに全て背負う。」

…もはや翻す意思などないのか。

…器として死ぬ選択肢を。

…彼女は本来無関係だったというのに。

畏怖と共に、憐憫が柳星張の意識を駆け巡る。

しかしそれを叩き伏せるように、

「だから——追従しろ、柳星張。」

——心を鉄にした少女は言い放った。

——暗転。

6月14日午前8時45分

——巨大不明生物離岸より20時間後

——一夜が明け、東京は何事も無かったかのように通常通

りに朝を迎えた。

通常運行の路線。

陽光に照らされた高層ビル群。

稼働するガントリークレーン。

道路を往来する車両の群れ。

騒音と共に朝を迎える工事現場。

アスファルトに落ちる木漏れ日。

公園をランニングする人。

「おはよー」と挨拶を交わし通学する学生の群れ。

電車という箱に押し込まれながら出勤するサラリーマン達。

——— いつもと変わらない日常風景が展開される中で。

テレビやラジオ、無線では——— 無数の危機管理センター要

員や報道アナウンサーの声が木霊する。

『よって、久里浜・金谷フェリー港は全便が欠航中———』

『館山市消防署管内館山バイパス付近にて新たな火災発生———』

———

『都内および千葉・神奈川各路線は館山直通線および房総モノレール線を除いて運転を再開———』

『各国首脳から哀悼の意と支援の表面が届いています』

『援助物資やスタッフの受け入れを東京都と千葉県の防災課と至急調整してくれ。』

『東京証券取引所は通常通り取引を行い、特別な事は計画していないと発表しました』

『房総環状新幹線は、東京―新成田間と東京―木更津間で折り返し運転を行なっております』

『アメリカ、フランス、ドイツを始めとする各国の学術的調査団が羽田空港や成田空港、関西空港に降り立ち、現地へ向かいました。』

『現在、浦賀水道および相模灘を捜索中なるも、未だ目標【甲】・【乙】共に発見に至らず。海自の横須賀地方隊が探索範囲を拡大し相模トラフ全域を中心に捜索中』

『——— 巨大不明生物離岸から既に20時間が経過しています』

が、関東沿岸部を中心とした東海地方全域には未だ特別警戒注意報が発令されています。』

『昨日の巨大不明生物上陸による死者行方不明者は500人を超え、今後もさらに増えるの見込まれています。』

『館山市内の火災はほぼ沈静化され、現在、金井防災担当大臣を団長とした政府視察団が派遣されており、直接被害状況の確認を行っております。』

——同時刻。

八広駐屯地隊員官舎3号棟
407号室

「——IS学園については、何一つ触れないわね。」

——テレビの電源を落としながら、鷹月が言う。

彼女の言う通り、テレビは館山市の被害やそれに関連する情報ばかりであり、IS学園については一言も触れていない。

…まるで、IS学園など初めから存在していないかのような錯覚を覚える程に。

「——テレビではね。…ツイッティアを開いてご覧なさい。」

IS委員会が無許可で建造したらしい原子力発電所からの放射能漏れの件で大炎上してるわ。」

覚束ない片手での操作でスマートフォンを弄る神楽が言う。

それに鷹月は反応して、

「なら、尚更…!」

「…情報が不足しているんでしょう。不正確な情報は無駄な混乱を招くわ。…そこにデマが加わればもう泥沼。收拾がつかなくなっ下手すると流血沙汰になる。」

——まあ、ホントはもつと黒い利権絡みの話とかがあるから報道したりしないのかもね。

と神楽は付け加えながら鷹月に返す。

…ふと、

「——んで、なんでお前らは俺の部屋にいるんだ。」

箒をあやすように眠らせている千尋が、二人を睨みつけながら言う。

——断固抗議する、と言わんばかりの表情で。

「…仕方ないじゃない。部屋足りないって言われたんだから。」

それに、バツの悪い顔をして鷹月が言う。

そして釣られたように、

「私達がいるから夜の営みが出来なかったって言ってるんですけど、察してやりなさい。」

「ちがうわ——ツ!!」

——ボケなのか、話をややこしくする神楽と。

——ツツコミを入れるように反射的に吠える千尋。

…なんだろうか、この光景は。

…なんだろうか、目を覚ましてすぐに飛び込んで来た状況は。

とても。

とても、久しくて。

とても——穏やかで。

だから、

「——ばかみたいだ…。」

その一部始終を見ていた少女が、身体を起こしながら口を開く。

それに、千尋は驚きながら振り返る。

そこには、布団に寝転がりながら自分達を見つめる少女——

——箒が。

「げ⊠いつから起きてたんだ箒!？」

「…ずっと。千尋が2人に声をかけた辺りから。」

——正しくは、意識は有ったけど身体が起きたくなかっただけだな。

と付け加えながら、寝転んだまま箒は少しほぐれた笑みを浮かべながら言う。

そして意地悪そうな表情を浮かべ、

「——朝から不潔だぞ。」

「だから違うってエ——ツ!!」

千尋は揶揄うように言い放つ。

——千尋は反論こそしているが。

その実、内心喜んでいいる。

…何しろ昨日は箒に負担を掛け過ぎた。

だからこそ、こうして僅かにでも笑つてくれるだけで、こちらも救われる。

——そして同時に。

この、面白おかしい愉快な時間は、そう長くは続かないと——

——心の隅で理解してしまっていた。

「——ま、全員起きたなら朝食に行きましょう。まだ食堂開いてるだろうし。」

ふと神楽が言い——全員の目が点になる。

それを訝しむように神楽は顔をしかめて口を開く。

「…何よ？その目は。」

「——いや、だってお前、腕…。」

歯切れ悪く、千尋が応える。

——それに神楽は、「ああ」と思い出したように千切った左腕を見る。

…IS学園撤退時。

崩落して来た鉄骨に潰された左腕を、神楽は引き千切る形で切断したのだ。

今は包帯でぐるぐる巻きになっているその断面の内側は、見るに耐えない肉塊と化した左腕の残骸が生えていた。

「別に大したことないわ。思い出話のネタのひとつくらいにはなるでしょう。」

それにいざという時は食べさせて貰えば良いじゃない。」

——と、千尋達の危惧など何処へやら。

そこには杞憂という言葉を具現化したような神楽の姿があった。

「——んじゃ、飯行くか。」

——箒、と。

箒を見つめて、千尋は口を開く。

「ああ。」

そう言つて、箒は身体を起こそうとして。

「…びっ——ッ!？」

びしり、と全身に走つた痛みを受けて、奇妙な悲鳴を上げてしまう。

「どうした箒☒」

思わず千尋は駆け寄り、箒を抱えて問うように叫ぶ。

それに箒は——

「多分、筋肉痛…。」

——羞恥心に塗れた、消えそうなくらい情け無い声で応える。

…1秒の後。

——どつ、と407号室に爆笑の渦が発生した。

同時刻

八広駐屯地・隊員官舎・医療棟

次を目覚めた場所は、見知らぬ天井。

…なんだろう、凄く、怖い夢を見ていた気がする。

顔を横に向ければ——黒髪の、女の人と目が合った。

…女の人は驚いたように。

「ラウラ…？」

…私の名前を口にする。

「——ラウラ、意識が戻ったんだな！ラウラ！！」

女の人はいきなり私を見て喜んで。

だから私はとても困ってしまっ

でも、どうしてそんなに喜んで

「えっ…あ、あの——」

それに、この女の人は——

「お姉さん……」

「だあれ？」

窓から吹き込む風に白銀の髪を揺らし、赤い紅い瞳で女の人を見つめながら。

——私、ラウラ・ボーデヴィツヒは聴いた。

八広駐屯地・医療棟203号室

「お姉さん……」

「だあれ？」

その声に、千冬は困惑した。

「——ラウ、ラ……？」

ラウラの反応に思わず私は困惑する。

かつて私がドイツで教え子として技術を与え、私にひどく懐いていた少女は。

私が如何に否定しようと私を引きずり戻すと狂信的なまでに息巻いていた少女は。

「あ、あの、私……」

——まるで無垢な子供のように、漂白されていた。

……私から見ても、数日前の狂犬としか形容出来なかった彼女など、最初から存在しなかったように。

故に愕然とする。

何故こうなってしまったのかと、唾然とする。

「お姉さん、大丈夫？ 顔色が凄く悪くて……。何処か苦しいの？」

——VTシステムの仕業だろうか？

……可能性はある。

ヴァルキリーの動きを処理し切れるだけの脳がなければ、廃人になる可能性はある。

だが——ラウラの出自的に可能性は低い。

では何故——、

「——やはり、こうなっただけですね。」

ふと、凜とした——だが慈しみを孕んだ声が部屋に響く。千冬が振り返るとそこには、

ラウラと同じ銀髪。

左目には医療用の眼帯。

右目には治療後なのか痛んだ瞼。

その中にラウラと同じ紅い瞳。

ドイツ軍のBDUと国連名義の入館証明書をぶら下げた女が。

「クロエ・クロニクル…。」

千冬がその女——クロエを睨みつけながら言う。

彼女は束の助手を務めていた女だった。

——今の服装を見る限り、おそらく国連軍の兵士としてのこの駐屯地に入ったのだろう。

…八広駐屯地には、国連軍管理下の区画もあるのだから。

…千冬の声に、クロエは少し申し訳ないように顔を浮かべながら。

「…それは篠ノ之束の元に潜入する為のコードネーム。私の本名は『クロエ・アドルガツサー』——ドイツ陸軍情報部の人間です。」

——『転属したので、今は元・陸軍情報部ですが。』と付け加えながらクロエは言う。

そしてラウラを見つめて、

「ラウラ——私のことは…分からない、わよね？」

「…うん、こっちのお姉さんも、知らない…。」

「——そう…。」

その答えに、クロエは少し悲しそうに微笑み返す。

「…まさかとは思うが——」

クロエに千冬はある疑念を抱き、投げかける。

「——お前達ドイツ軍もドイツ政府も…利用していたのか？束も、それと蜜月の関係にあったドイツ軍内のIS部隊も…ラウラも。」

…怒りを孕んだ問い。

それにクロエは、

「はい——VTシステムを、実戦投入可能とする為に。」

——隠す事なく、そう告げた。

「何のために？」

「兵士の生存性を高める為に。」

「——何故そこまでする？」

「祖国を守る為に。」

「何故？」

「欧州、延いては人類の未来の為に。」

震える感情のこもった千冬と。

淡々と状況を報告するクロエ。

——対を成す2人の声が部屋に響く。

「その為にお前達は何をした？」

「VTシステムを制御可能とする思考拡張剤や戦術薬物の投与。」

「——ラウラに何をしたか分かっているのか？」

「VTシステムの運用実験の被験体にした。システムと薬物に改良の必要がある分かっただけで今は良いです。」

「ッ——！！」

相変わらず淡々と告げるだけのクロエ。

それに、千冬は堪忍袋の尾が切れたのか、彼女の胸ぐら掴み上げる。

「その結果がコレか!？」

「薬物の副作用で精神崩壊を起こし、幼児退行しただけです。」

「だけ…だと？何を軽々しく——！」

「廃人になるよりはマシです——それに、元より私達は実験動物です。」

その言葉に、千冬は雷に打たれたように硬直する。

「ではVTシステムの搭載も、システムの起動も——予定通りだと？」

苛立ちを孕んだ声を震わせながら千冬が問いかける。

それは、ISを纏っていたならばクロエの首を跳ね飛ばしかねない形相で。

「——はい。」

だが、そのようなことなど知らないとばかりに——クロエは勤めて冷静に言い放つ。

「本来ならばIS委員会や近隣諸国から咎めや非難が来る所ですが——
——もう、そんなことに構っている余裕など、我々には無いので。」

そこにはただ、篠ノ之束の助手としてのクロエ・クロニクルではな

く。

滅びるか否かの瀬戸際に立たされ、覚悟を決めた——クロ
エ アドルガツサーの姿だけがあった。

??
時刻

ロシア連邦共和国

カリーニングラード州ゴゴレヴォ

ポーランドとリトアニアに隣接し、バルト海に面したロシアの飛び

地領土——カリーニングラード。

第2次世界大戦以前、オスト・プロイセンと呼ばれていたその土地は、戦後のソ連領への編入と冷戦終結によるロシア領への編入を経て、未だ欧州における戦火の火種たり得る土地として存在していた。

そして今この地は——鮮血と泥に埋もれる地獄と化していた。

——田園地帯が広がっていたであろう平野は無数のクレーターに侵食され。

——豊かな自然を蓄えていた森林は炎によって焼き払われ。

——穏やかに営まれていた住宅は瓦礫の山へと変えられ。

——地平線の果てより、異形の鳥ギヤオスが破滅の足音を鳴らして

迫り来る。

——それを迎え撃たんと、天よりつるべ打つ、鋼鉄の雨。

——その光景は確かに、この地が戦場と化している証左で

あった。

「はっ……はっ……——っ、くそッ！」

IS「グストーイ・トウマン・モスクヴェ」を駆る女性――

――ログナー・カリニーチェは、口角から血を流しながら毒づいた。

周囲には単一能力〔沈む床〕^{セックヴァベック}によって拘束することで殲滅することに成功した複数のギャオスの死体。

――沈む床とは、高出力ナノマシンによって空間に敵機

体を沈めるようにして拘束する超広範囲指定型空間拘束結界であり、対象は周りの空間に沈み、拘束力はAICを遥かに凌ぐというシステムであった。

だがしかし、コレを用いても尚――止められるのは精々一体が限界。

加えて通常形態では15〜30メートル級ならいざ知らず、60メートル級の個体には火力不足である為、常時高出力形態〔麗しきクリーナヤ〕の発動を行わねばまともに立ち回れない。

――故に彼女は、バルト海に展開するロシア海軍ならびに国連軍艦隊による面制圧砲撃を生き延びた残敵掃討を担う後方に配置されていた。

：だがそれであっても、彼女にとっては重荷であった。

――今やモスクワ方面とコラ半島の防衛に尽力する方針に傾いたロシア軍は戦力をそちらに集中させている。

それ故にカリニングラードの防衛は困難…否。事実上切り捨てられたと言っても過言ではない。

現在はISと野砲部隊、水上打撃部隊の連携を保つことで戦線を辛うじて維持している。

だが――長くは保たない事は、目に見えている。

（――この戦いに…意味などあるのか…？）

ふと、ログナーは思考する。

――現在、軍上層部はカリニングラードの民間人をロシア方面に逃がすかイギリス方面に逃がすかの議論で揺れている。

…早い話。

――ログナー達はその議論にケリがつくまでの時間を稼ぐ役割を与えられたに過ぎない。

だが巨大不明生物はそんな事情も御構い無しに攻め込んでくるのだ。

それを抑えることで民間人の脱出先が決まるまで守る事は出来る。故に必ずしも無意味というわけではない。

だが——もし脱出先が定まらず、この地の住人全員を巻き込んで玉砕に至る可能性も極めて高い。

付け加えるならば、巨大不明生物によって東はウラル山脈以東、南はウクライナ国境付近とコーカサス地方、そして西はカリニングラードと——ロシアそのものが包囲されつつあるのだ。

：このままでは、仮にロシア本国に逃がしたところで——ならば、イギリスなど、仮想敵国ではあるが巨大不明生物の被害が極めて届きにくい西欧諸国に逃がす方に傾くのが普通だろう。

つまり——議論そのものが無意味に近いと言える。

戦いに意味はある。

だがその理由に意味が無い。

(——これでは本末転倒だ。)

内心、独言る。

——直後、新たな情報が網膜投影で映る。

《旧ポーランド領ビシユコボよりギャオス梯団第17波の侵攻を確認。

推定個体数350体。

旧ノヴォセロヴォ市街跡にて戦術核を交えた面制圧攻撃を実施。

貴官は発生するであろう残敵を掃討せよ。》

「……今日一日だけで、何度目よ……この命令……。」

いい加減うんざりしたように口を開く。

——だが、眼前敵はこちらの事情など構わないのだ。

——やるしかない。

だから彼女は、複合兵装ランス・蒼流旋をアクア・ナノマシンを一点に集中、攻性成形した「ミストルティン」を構える。

やらなければ、こちらがやられるのだ。

—— 眼前に、禍々しいキノコ雲が爆風と共に形成された。



同時刻

—— ポーランド領ポモージェ県東部

—— ビスワ川東岸・旧ドレフニツァ市街

—— ベスキト・シロンスク山脈を水源にバルト海へと注ぎ、流域面積は国土の6割を占めるポーランド最長の河川。

—— そこが、欧州連合軍と巨大不明生物群の最前線—— ビスワ川絶対防衛線であった。

—— そして、ポーランド国民救出を目的としたポーランド撤退支援作戦。

—— それを継続する為の戦線維持として—— 泥濘のような戦いが繰り広げられていた。

「総員傾注——」

—— バルト海に注ぐビスワ川河口より5キロ南。

—— 核の冬により、季節外れの雪がちらつく下。

—— 泥と血と肉で満たされた大地の中。

—— ドイツ連邦陸軍第1装甲師団混成機械化連隊第3大隊第2中隊

—— シユヴァルツァ・ハーゼ 黒 兎 隊 指揮官 —— クラリツサ・ハルフオーフ大尉は号

令を掛ける。

—— それに答える部下 ——

—— 当初は26名いたが、今では9人に減った

—— の顔は皆疲労で満たされ、覇気がない。

—— だが仕方がないのだろう。

—— ポーランド撤退支援作戦はもはや、壊滅的なまでの打撃を被る戦死者数を出していた。

—— ポーランド軍、28万716人。

—— 国連軍、9万5927万人

—— ドイツ軍、1297人

—— イギリス軍、1061人

—— 北欧理事軍、2506人

—— 民間人、無数（少なくとも2000万人以上）。

否、これから更に増える可能性もあった。

クラリツサは懸念を押し殺し、ISのマニピレーターに装備したM60バルカン砲をギャオス目掛けて斉射しながら叫ぶ。

「—— 間も無く沿岸部より面制圧が開始される。これより我々はビスワ川西岸に撤退する！」

クラリツサの声。

—— 続くように力のない「了解」が連鎖する。

それに唇を噛み締めながら、機体のスラスターを吹かす。

—— 直後、グダニスク湾より響く爆音。

同時に—— 火柱を立て大地を砕かんと着弾する砲弾群が、ギャオス群を肉片に変えていく…！

クラリツサたちは、それを撤退しながら眺めるだけしか出来ない。

…これほどまでISを手にしなから、自分達を無力に思う事は無い。

それは隊員の練度もだが、自分達の継戦能力の無さもあった。

…持ち込んだ武装は、当初は機能していたが既存兵器との互換性が無く補給が困難であった為に放棄。

また、シールドエネルギーの消耗により機体ごと捕食された隊員も数知れない。

…現在は既存兵器の転用やバッテリー・増槽等を増設した戦時改修が施された事で辛うじて戦えているというのが現状。

（…あと、どれだけ保つか…）

—— だが、そんな不安も遮るように。

集音センサーが、異常な音波が発生した事を知らせる。

…それが破滅をもたらす音であると脳に訴えかけて。

「全機高度落とせ——！」

クラリツサが叫ぶのと。

甲高い光の刃が空を裂いたのと。

最も高い高度を飛行していたISが鮮血の花火を開いて爆散したのは、同時であった。

——耳を劈く程の音の刃が、戦場に踊る。

『超音波メス…!!』

隊員の一人が畏怖の念を孕んだ声を上げる。

超音波メスは、ギャオス群の中の成熟した陸棲個体や飛翔種が頭部の音叉型突起を共振させ——口部から収束された音の刃を光線の如く放つ、というものであった。

…超音波メスを目にしたのはこれが初めてではない。

幾度と無く仲間をこの攻撃方法で殺害されている。

そしてその過程で、超音波メスは物質を振動によって分解切断することから、ISが喰らえば即死であるという事も——仲間の死から学んでいた。

だからこそ、残された8機のうちの1機が超音波メスによる照射を回避しようと、高度を下げ——

「ハーゼー！ー！高度を下げ過ぎだ!!」

——ハーゼー11のコールサインを与えられていたパイロットは、高度を下げた進路上の地表が、突出していたギャオス陸棲種群に埋め尽くされていたことに気付かず。

——下方より伸ばされた異形の手に捕まった。

『ひッ！い、いやっ、いやアッ!!』

ハーゼー11は当然ながら悲鳴を上げる。

『隊長！助けないと——』

続くように別の部隊員が叫ぶ。

しかし、

「跳躍を継続しろ！」

それを遮るクラリツサの怒号——そして、ISを捉えたギャオスの腕が、ハーゼー11の機体ごと彼女を地表に叩き付けて。

『ぐ、げ……っ』

バケツの水を撒き散らすような音。

金属のひしやげ折れる音。

そして——潰されたカエルのようなハーゼーの音がクラリツサの鼓膜を打ち鳴らす。

ごぼツ、と口から泡混じりの血が吐き出される独特の音が、声に追随するように鳴る。

続くように木霊する——肉を裂く濡れた音と、骨を砕く乾いた音。

——ハーゼーの人生に幕を下ろす、咀嚼音が鼓膜を侵蝕する。

『……あ……た、たいちよ……』

部隊員の一人が掠れそうな声をかける。

「——振り向くな……！」

……クラリツサは、ドイツ最強のIS部隊と粹がり踏ん返り返っていた過去の己達を呪う。

部隊長のラウラ——今は連絡がつかない——が何も対策を講じなかった事もそうだが、副官の自分がもう少し、ウクライナで戦術機部隊や戦闘機部隊が得たデータから対策を講じる等出来たはずだった。

……だから、今はただ——世界最強の兵器を扱う人材、というポジションに胡座をかいて何もしなかった事が腹立たしく恨めしい。

もし何かすれば——先程超音波メスサウンドレーザに蒸発させられた隊員や、ギャオスに捕食されたハーゼーのような犠牲者を抑えられた可能性だってあるのだ。

——こんな私が世界最強の兵器を扱う兵士だなんて、笑い物だ……！

思わずクラリツサの口は後悔と怒り、そして自責を孕んだ表情に歪む。

——せめて……私の独断でも対策を講じるか、VTシステムの制御と運用法確立が、あともう少し早ければ……！

——だがそれも所詮は後の祭りと無い物ねだりだと、内心一蹴する。

直後、再度鼓膜を震わせる集音センサーのアラート。

同時に、指向性音波の振動予測位置が戦域マップに表示され——

——クラリツサの機体が、サウンドレーザー超音波メスの射線上にいる事を知らせる。

「あ、」

思わず漏れる、間抜けな声。

——自分への怒りに周りを見る事を怠り、高度が上がってしまっている事に気づけなかったのか。

——ああ、なんてバカなのか。

思わずクラリツサは、全てを諦めたように醒めた表情を浮かべる。

視界には、自らを蒸発させんと甲高く劈く音を撒き散らして迫る——

サウンドレーザー黄色の超音波メスが。

『死ぬにはまだ早いで、貴官。』

——だがしかし、サウンドレーザー超音波メスは突如鼓膜に響いた無線と甲高いジェット音と共に振り下ろされたシエルツエンに遮られた。

——否。単純なレーザーと違い、物体を振動で侵食・切断するサウンドレーザー超音波メスを防ぐ術はほとんどない。

——だというのに——眼前のソレは。

無線を投げかけたソレは。

見慣れぬ巨盾を装備したソレは。

獣の数字666を刻まれた戦術機は。

——サウンドレーザー超音波メスを遮断してみせた。

音を遮断した。

そして、クラリツサはその戦術機が保持しているシエルツエンと、その性質を鑑み——ハツとする。

「高速道路の、防音壁」

眼前の戦術機——ヴァイッパヒンメルMEF-2020は、シエルツエンに爆

発反応装甲ではなく、高速道路で用いられる防音壁と同質の素材で出来たモノを装備していた。

…否、おそらくそれだけでは無いだろう。

戦術機部隊はウクライナでギャオスと散々殺し合ってきた。

ならば、その戦闘データが装備に反映されていないハズが無い。

そして超音波メスの原理を理解しているならば、おそらくあのシエルツェンは防音・吸音・制振・防振などの各種素材で構成されていてもおかしくない。

——なるほど。確かにこれならば、分単位の長時間照射で無い限り数度の直撃であっても防ぎきれぬだろう。

——直後。地表より爆発が連鎖する。

見ると、クラリツサを超音波メスから守った戦術機と同じ部隊と思しき機体が、地表のギャオス陸棲種を掃討している。

それはハルバード型近接武装で。

それは57mm機関砲による掃射で。

それは155mm砲による制圧射撃で。

『な、何……？』

『援軍——？』

他の部隊員が呆けるように零す。

クラリツサも同様だ。

…現在の戦況図を見れば、ほぼ全ての部隊がグダニスク湾からの面制圧に任せて撤退中。

加えてこの戦術機を運用している部隊も推進剤・弾薬ともに枯渇している。

さらに言えば、この戦術機を運用している部隊——第66

6戦術機中隊は、取り残されていた避難民がビスワ川を渡る為に使用していたキエズマルクの仮設橋の防衛を担当していた。

…聞こえは他愛ないが、実態は四方八方を数万体単位の敵に囲まれた中から千人単位の避難民を護衛し、孤立しながら戦闘を実施する——

——というもの。

切り捨てるように言えば、それは正気の沙汰ではない。

それを証明するように。

——全身を返り血に染めた機体。

片方の跳躍ユニットを失った機体。

片腕を失った機体。

頭部を失った機体。

激戦に続く激戦を潜り抜けながら此処に到達した事が一瞬で理解できるほどの損傷を、ほぼ全機が負っていた。

今すぐにも帰投しなければ自分達が危ういというのに、彼らは此処に来た。

何故？という疑問がクラリツサを支配する。

『撤退を支援する。キエズマルクの仮設基地はもうダメだ。グダニスク基地へ向かえ!!』

鼓膜に響く、中年と思しいが芯のある男の声。

クラリツサは一瞬表情を硬直させたが、すぐさま叫び返す。

「すまん、助かる——！私は第1装甲師団混成機械化連隊第3大隊第2中隊 シユヴァルツァ・ハーゼ 黒 兎 隊 指揮官——クラリツサ・ハルフオーフ大尉だ。」

『——こちらは第1装甲師団第2戦術機大隊隷下・第666戦術機中隊第2小队指揮官。クラウス・エルツェンガー中尉。そうか……貴官らは初陣か。』

ふと——その言葉に心が曇る。

自分達は初陣で——当初26人もいた部下を7人にまで減らしてしまったのだと、自覚して。

世界最強の兵器——という謳い文句を振りかざしていたISを装備しておきながら、だ。

あまりに惨めで——舌を噛み切りたくなる。

『——初陣にしてはよくやった。全滅していないだけ、運が良い。』

だが返ってきたのは嘲笑でも、軽蔑でもなく——礼讃であつた。

それに、弾かれたようにクラリツサは顔を上げ、

『退路と安全は確保した——追隨しろ!』

「り、了解！全機続け——!」

クラウドスの覇気溢れる怒号に気圧され、クラリツサは追隨の命令を下し——スラストターを蒸し、疾走する。

：肩から僅かに力が抜けていく。
同時に思考など全て投げ捨てたいような、暗く汚泥に沈んでいく感覚が脳を犯して行く。

：安全圏へと離脱しつつあるクラリツサの網膜に投影された戦況ウインドには。

カリニンングラードで4発の戦術核が使用されたことを示す放射線のマーカーと。

水上打撃部隊と、MLRS部隊、野砲部隊の面制圧砲撃によって、ギャオスを示すマーカーが消失しつつあった。

：戦況は安定しつつある。

面制圧が終わる頃には、ギャオスは殲滅されているだろう。

だが恐らく——この地獄は明日も繰り返される。

まだこの地獄は終わらない。

むしろ、これから激化の一途を辿るのだろうと、クラリツサは予感した——。



同時刻

八広駐屯地・隊員官舎・屋上

——PX^{食堂}へギリギリで滑り込み、食堂内に併設されている

売店で手頃なパンやおにぎり等を購入した千尋達は、そこにいた。

：本当ならばしっかりとしたものをお食べたいのだが、食堂を閉める都合というものがある。

それらを考慮して、ひとまず腹を満たせるものを腹に放り込む事に

したのだ。

「唐突だけど、今後IS学園とISはどういう運用をされて行くのかしらね。」

ふと、神楽が焼きおにぎりを口にほうばりながら口にする。

そしてそれに全員が視線を交え、思案する。

——確かにそれは最もな疑問だ。

：先のIS学園防衛戦、続く館山市防衛戦においても、ISが単体で有効に機能したとは言えない。

むしろ、ISの火力不足と継戦能力の低さを露呈させるに至っている。

対人類戦ならばともかく、対巨大不明生物戦においては圧倒的に戦力外であることは明白である。

「——とりあえず、山本三尉：俺と箒の統合機兵の機体付き整備長な。その人曰く、タッグトーナメントでの打鉄甲一式のデータを反映して、日本国内の打鉄36機を統合機兵にアップグレードするのと、倉持技研との交渉で、追加生産の正規量産型が100機ほど製造ラインに乗るらしい。」

魚肉ソーセージに齧り付きながら、千尋が口を開く。

——正直な話、昨日の今日でここまで事態が進展していることに驚きを隠せない。

——というか、昨日の今日で事態が進展できるとは思えない。

——つまり、

「特自と倉持技研は、元々統合機兵へのアップグレードは実施するつもりでいた。ただ、巨大不明生物の襲撃によって、大幅にスケジュールを繰り上げただけで——…特務自衛隊の対特殊生物自衛隊への改組も同様ね。」

——応えるように神楽が口を開く。

——特務自衛隊の対特殊生物自衛隊、略称：「特生自衛隊」への改組。

今朝方、唐突に発表されたその内容に総務課が忙殺されていた事を思い出す。

側から見れば、巨大不明生物の襲撃によって組織を再編したように見える。

だが、そもそも政府内での防衛省隷下の組織への認識と憲法の壁を鑑みるに、再編は1日では不可能であることは明白。

であるならば、特生自衛隊への改組はタッグトーナメント以前：下手をすればロリシカ派兵ごろから作業が実施されており、改組直前に巨大不明生物が偶然襲来した——というだけの話。

——閑話休題。

とりあえずISの運用に話を戻そう。

「統合機兵の基本運用についてはどんな感じなわけ？」

レーズンバターパンに食らい付きながら、鷹月が問う。

「基本的には戦術機や航空機の支援や歩兵と連携しての防衛線維持：他には工兵と共に土木作業など：一応、幅広くはある。

基本はISとは変わらないから、運用・教導の面でもさほど予算を食う事は無いということで運用する分には問題ない。」

箒がハムチーズデニッシュパンを喰らいながら応える。

「ついでに言えば、整備と補給・データリンクの面でコスト削減と互換性を持たせる為に、パーツは機動装甲殻やEOSのような機械化歩兵部隊の強化外骨格の部品を流用。

補給面も弾薬や火器の安定性を考慮して既存兵器の武装を流用したものが多い。

：データリンクに関してはNATO国際規格のものを採用しているから、西側諸国とであれば、通信障害や味方の座標位置に悩まされることも無い。

——まあ掻い摘んで言えば、ISをより実戦特化型に改良したようなものだな。」

——彼女の言う通り、統合機兵はある種ISの発展改良型であった。

弱点であった火力不足を既存兵器の重火砲で。

弱点であった継戦能力の低さを既存兵器との連携・並びに補給面の互換性を付与することで。

それぞれの弱点をある程度は払拭することに成功している。

「…そのせいかして、イギリス軍の第2世代ISサイレント・ゼフィルスと、同機がベースの第2.5世代ISフォッカーの統合機兵化が決定したらしいわ。」

…というか、一部では既に実戦配備済みだそうよ。」

紡ぐように神楽が口を開く。

「…どこで聞いた？」

「廊下で国連軍将兵が話してるのを立ち聞きしたの。」

千尋の問いに、神楽はサラリと告げる。

そして、

「話によると、欧州戦線はポーランド領ヴィスワ川、スロヴァキアおよびルーマニアと旧ウクライナ領カルパチア山脈、ブルガリア領バルカン山脈を防衛線として戦線を維持しているらしいわ。」

…で、統合機兵化改修を受けたフォッカーがイタリア海軍の軽空母「カヴール」および軽空母「ジュゼッペ・ガリバルディ」に。統合機兵改修を受けたサイレント・ゼフィルスが戦術機と共にイギリス海軍の正規空母「プリンス・オブ・ウェールズ」と軽空母「インディファデイカブル」に艦載されて、バルカン山脈防衛線の沿岸部————バルナ要塞に展開中だそうよ。

…イタリアの国家代表も参加してるって話も聞いたわね。」

————あまりにも濃密過ぎる内容が投下される。

…話題に必要な部分だけ抜粋すると。

統合機兵化改修を受けたサイレント・ゼフィルスとフォッカー。

それらが、欧州戦線の一角を担うブルガリア領バルカン山脈防衛線の東端に位置するバルナ要塞の防衛戦力として、軽空母3隻と正規空母1隻と共に展開中である…という話だった。

「でもなんでバルカン山脈防衛線の東端だけなの？他の地域にも展開したら良いのに。」

ふと、鷹月が言う。

それは至極当然の意見と言える。

「そこに地形の問題が絡んでくるのよ。ええと…あー、もう。ごめ

んなさい篠ノ之さん、グー●ルマップの地形図開いて。」

少し片腕で操作が難しいが故に、神楽は取り乱す。

しかしすぐ立ち直り、グーグ●マップの地形図が表示された画面を3人に見せながら口を開く。

そこにはブルガリア領バルナ市周辺の地形図が表示されていた。

バルナ市とは黒海に面したブルガリアで3番目に巨大な都市であり、「海の首都」もしくは「夏の首都」と呼ばれる。メジャーな観光地でありビジネスや大学、海港、ブルガリア海軍の司令部、商船などの各拠点が置かれている大都市であった。

都市は海拔356mもある北側の高原から下がって来た^{モエンアフラットフォームのヴァルナ単斜}緑豊かな台地と南のアヴレン台地、馬蹄型に沿った黒海のヴァルナ湾、細長いヴァルナ湖や湾と湖をつなぐ二つの人工的な運河やアスパルホフ橋が占め。

中心部はコナベーションが沿岸に沿って北側に20 km、南側に10 kmにわたり成長し広がり。

南側はほとんどが住宅地や保養地が広がる街並で、湖に沿った西側25 kmは交通や産業用の施設がほとんどである。

古代以来、都市の周辺はブドウ畑や果樹園、森林に囲まれており、商船施設は湖の内側や運河に再配置され湾内は保養地となりそのほとんどがウォーターフロントの緑地という、絵に描いたような長閑な様相である。

「——バルナ要塞と言っても、実際は北側の台地を用いた砲兵陣地……分かりやすく言うなら、ミサイルや大砲をバカスカ撃ちまくる基地と言ったところね。

…そして他のバルカン山脈沿いの要塞陣地と違って、この要塞はある問題があるの。」

神楽が地形図を縮小しながら口にする。

「——あ、」

千尋が地形図を見ながら、ふと気付いたように口を開く。

「川が、無え…。」

「その通り。他の要塞陣地はルーマニアとの国境にもなっているダヌ

べ川が正面にあるから、ある程度の侵攻遅滞が叶うわ。だけど、バルナ要塞正面には、台地より北にダヌベ川は流れていない。

流れてはいるけど、それは200kmも北。実質的に台地より北には平野部しかないと言っても良い。」

千尋の回答に頷きながら神楽は言う。

——確かに、ダヌベ川はバルナ要塞から北西50kmの位置までは国境に沿っている。

しかしそれより東では、弧を描くように北へと曲がりくねった流れとなっていた。

最終的にダヌベ川は海に注ぐとはいえ、それはバルナ要塞より200kmも北の話。

：それでは、神楽の言う通り侵攻を遅らせる遮蔽物が無いに等しい。

——加えて、ここにはブルガリア海軍の司令部が所在する。

そう簡単に落とされてはならない拠点でもあった。

：つまり。

「もう分かると思うけど、そういった理由から、バルナ要塞に戦力が集中しているのよ。」

：バルナ市が避難民の国外脱出の拠点のひとつとして機能する事を強いられる事態になる可能性だってあるから。

だから、統合機兵や戦術機が最優先で配備されている——

裏を返せば、それ以外の要塞陣地は既存兵器でもいまのところはまだどうにかなるって感じかしらね。」

——そう、神楽が言う。

「：まあ、ポーランドが一番の激戦区でしょうね。あの国って全体的に平野続きだし、第2次世界大戦時その地形がナチス・ドイツ軍の電撃的侵攻を助長したわけだし：。」

「神楽——話が逸れているぞ。」

「ん？ああ、ごめんなさい。」

箒が戒め——神楽はコッペパンに齧り付きながら話を戻

す。

：ISの将来的な運用と、現状成されている運用環境についての話は終わった。

——そうなれば。

「ISの今後はまあ分かったけど、じゃあ、IS学園はどうなるのって話よね。」

全員の声を代弁するように鷹月が言う。

それに千尋は少し考えて口を開く。

「——とりあえず、独立自治権は剥奪だろう。現に今だって特自の駐屯地に居候してる状況だし。」

「…可能性としては、国連軍に編入される可能性があるのではないかな？元はと言えば、IS学園は日本資本とは言え、国連主導の施設だからな。」

そして、紡ぐように箒が言う。

——可能性としてはそれが最も高かった。

IS学園が国連主導であること。

また八広駐屯地には国連管理区画が存在しており、臨時校舎も暫定的に国連の管理区画に割り当てられるという噂があること。

そして現在、国連は各国の予備戦力をかき集めた国連軍を編成中であり、独立自治権を喪失し帰属先がどつちつかずのIS学園は国連軍に組み込まれる可能性が大いにあった。

「じゃあ、私達また戦場送り…?」

思わず昨日のIS学園防衛戦で繰り広げられた惨状が脳裏によぎったのか。

ふと、鷹月が怯えを孕んだ声で口にする。

肝が座っているとは言え、彼女は学生である。

怯えを隠せるはずが無い。

——そんな鷹月を落ち着かせるように、

「大丈夫だ鷹月。国連軍に組み込まれたとしても、まずは訓練部隊だろう。私や千尋、セシリアに簪を除いて、対獣戦の心得を持つ生徒はほとんどいない——それに人によって向き不向きもあるし、

やはり力仕事は男の方が向いている。：場合によっては後方への配置になる可能性の方が高い。——だから気にするな。」

柔らかな笑みを浮かべて、箒が言い放つ。

それに鷹月は少し安堵して。

——ふと、遠方より甲高いジェット音が接近して来る。

観ると——4機の16式荒吹あらぶき戦術機が滑走路へとラン

ディングしていく光景が視界に映る。

その光景が、ここが学園ではなく。

特生自衛隊駐屯地——国際基準で言うところの軍事基地

である事を思い出させる。

「私達の学生生活はいつの間にか軍隊生活だねー…いやまあ、私は良いんだけどさ。」

ふと、鷹月が言う。

それに箒が口を開いて、

「そうだな…なんなら私と千尋が指導しようか？一応特自の元で生活してたし。」

「ちよ、なんで俺まで…!」

それに千尋が文句を垂れる。

——『女子の必須アイテムやら話題にはついて行けねえぞ俺…』なんて、ぶつくさ付け加えながら。

「大丈夫だ千尋。その辺は私がどうにかする。…さて——朝食も済んだし、授業の連絡もないし、とりあえずは今後の話題について話そうか。」

——『多分、これから忙しくなるだろうしな』と付け加えながら、箒は口にした。

確かにな、と千尋が苦笑する。

多分このまま行くと、遠からずこの世界は壊れ墮ちる。

そして箒も自分も、壊れて爛れ墮ちる。

俺はもう一度怪物になるか、それとも死ぬかのどっちか。

箒はきつと、多分、俺みたいな怪物になってしまう。

それはどれくらいかは分からないし、なるかすら分からない。

つまりはただの予感だ。

…まあ、でも。

「怪物になっても、死に物狂いで止めれば良いだけの話だもんな。」

千尋は静かに独りごちる。

それがどんな結末を齎そうが、どんな末路になろうが。

—— 箒が幸せなら、それでいい。

多分、きつと。

俺が化け物であつても—— 誰かの幸せを願うくらいは、間違つてないハズだから。

だから、うん。

「箒の為に、死生きてやろうんでやろう。」

小さく、風に掻き消されるように小さく呟いて。

それに箒が反応して、

「ん？なにと言ったか？千尋。」

「いや別に—— そういえば、明日から『怪獣学』つてのをやるとかなんとか、燈さんが言つてたような氣イすんだけど。」

—— 好きな奴に、生きていて欲しいとか、幸せになつて欲しいって願いは、きつと間違いじゃないと信じて。

だからそれまでは—— 仮初めの平和を維持しよう。そう考えて、千尋は応えた。

番外編【怪獣基礎学Ⅰ】ゴジラ

2021年6月15日東京都墨田区八広

特務自衛隊八広駐屯地第6予備棟

IS学園暫定臨時被貸与校舎1階101号室

特務自衛隊より貸与された校舎の一室、そこが現時点でのIS学園となっていた。

「今日も授業かあ…」

制服を着込み、教室の机に座した千尋が気怠そうに呟く。

何気ないいつもの声——しかし左腕にはギプス、左目には眼帯とその下に若干血が滲んだ包帯を巻いた痛々しい容姿をしている。

「学業は学生の本分だ、仕方なかろう。」

箒が千尋に返すように言う。

その箒も額と右腕に包帯を巻き、左脚にギプスをはめて松葉杖をついている、痛々しい容姿だ。

「——ま、そういうわけだから諦めなさい。千尋。」

ふと、千尋の隣に箒が座ると同時に右斜め前隣に座している神楽が振り向きながら告げる。

「そうだな……とこころで神楽。」

「なに?」

「…腕は、大丈夫か?」

千尋が神楽の左腕を見ながら聴く。

——神楽の左腕は肘関節から下がゴツソリと無くなっていた。

「ああ、平気よ。少し体が軽くなった感じね——まあ、幻肢痛に悩まされてるけど……貴方こそどうなの?左腕粉碎骨折に左胸部肋骨2本骨折による肺損傷…あと頭蓋骨左半部損傷に左目眼球破裂——常人じゃ即死の重傷って聞いたけど。」

神楽は揶揄うように、しかしして気にかけるように問いかける。

「大丈夫だ。元から、身体は頑丈だからな。」

千尋は子供らしい笑みを浮かべながら返答する。

——直後、スパーン!!?という音と共に箒のチョップが頭部に炸裂する。

「痛ってえ!!?」

「この馬鹿!!?だからと言って無茶をし過ぎるな!!?……私が、どれだけ心配したか……」

瞬間的に箒は怒り、噴火したような声音で言うが、悲哀が勝ったのかすぐに声は萎れていく。

その顔は、すぐにでも泣き出してしまいそうだ。

「う……悪かったって……」

千尋はどうしようもない罪悪感を抱き、すぐにでも謝罪する。

箒が泣いてしまうのは、箒が幸せでない時なのだから、幸せでいて欲しい千尋にとってそれは回避したい状態だから。

「——金輪際、あんな無茶しないと約束してくれ……ホラ。」

そう言つて、箒は右手の小指を出す。

「……わあつたよ……」

千尋も右手の小指を出す。

そして、千尋の小指に箒は自分の小指を絡める。

「ゆーびきーりげーんまーん、嘘つーいたら……」

うーん、箒は少し考えて。

「千尋のエロ本さくらす。」

「オイちよつと待て!!?」

思い掛けない発言に千尋は間髪入れずに抗議の声を叫んでしまう。
だが、無情にも。

「ゆーび切った。」

——約定は定められた。

「……いや、でも俺エロ本なんて……」

千尋はせめて最後の悪足掻きを企もうとする——だが、しかし。
かし。

「あるよな……? 宿舎自室のベッド下の裏にマスキングテープで貼り付けてる、黒髪巨乳女子の表紙が掲載されている。」

——箒は威圧感を纏った黒い笑みを浮かべながら、死刑宣告を告げる。

「…やべえよ…なんで、バレた…?」

対する千尋は思わず困惑。

ベッドの下というメジャーな隠し場所しかない宿舍自室で、少しでも工夫しようとマスキングテープでベッド裏に貼り付け、悟られないようにしていたつもりだったが——甘かった。

——箒の索敵能力恐るべし。

「ふうん、千尋も男の子だったのね。」

神楽も揶揄うように言う。

「——まあ、そんな事は置いといて…いつまでここに鯖詰にされるのかしらね…私達。」

神楽が言う。

——自衛隊から貸与されたこの校舎自体は元来のIS学園と比べれば規模は10分の1…否、100分の1程度の規模だろうか。

何しろ特自の予備施設の一部を使わせて貰っているだけなのだから設備も決して充分ではないし、元来のIS学園校舎と比べれば環境的には不便と言える。

また、他に貸与された設備と言えばIS整備用のプレハブ式仮設ハンガーが第6予備棟隣の空き地——元々は訓練場——にあるくらいである。

生徒達は「自衛隊はケチ」だと言っているが、それは大間違いと言える。

現に八広駐屯地はIS学園を誘致しただけで基地機能の一部が低下。

またIS整備や模擬戦に伴う過剰電力消費で隊員宿舍が終始強制的節電状態。

さらには食料供給量増加に伴い学園に通常の献立を提供するべく一部隊員らには非常用保存合成食料——主にゼリー状栄養食品やカロリーメイト、人工混成肉、ポテトサラダ状のビタミン食物

など：ディストピア系創作作品で見ると、酷く不味そうな食物――を班ごとに日替わりローテーションで食べることを止む無く強制。

……と、ただでさえ予算的に貧乏な自衛隊をさらにひもじくさせているのは他でもないIS学園なのである。

――だが国連管理下の設備があり、迅速に対応可能な設備は八広駐屯地しかなく、つくば市の学園予備校舎は国と地方自治体の協議が必要だ。

そのため空いた穴を埋めるにはどうしても八広駐屯地に校舎を置かねばならない――そのために現在の現象が起きている。

――閑話休題。

現在はこの駐屯地に臨時校舎が映されてから2日目の授業が行われようとしている。

（――それにしても、この学園も人数が減りに減ったな……）
30人分の席が並ぶ教室の一室を陣取る新生1組で、千尋は内心呟く。

現在このクラスの人数は30人。

――うち、旧1組の生徒は僅か16人。

残りは旧2組から編入された生徒達だった。

――最も、その旧2組も15人しか在校生がいないというのが現実である。

隣の教室に陣取る新生2組の人数は教室の収容人数30名に対して25人。

――うち、旧3組の生徒は9人。旧4組の生徒は16人。

1年生は僅か在校生55人――と、下手な過疎地域の学校並みにまで在校生の数が激減していた。

その激減した人数――実に105名の大半はIS学園と同レベルないしそれ以下の高校への転校や退学。

2年生に至っては3クラス120名のうち24名にまで激減――

――96名のうち、転校や退学を希望したのは1割のみ。

それ以外でここに居ない他の者達は――語るまでも無い

だろう。

「はい、皆さん授業始めますよー。」

ふと、始業のベルと共に家城燈教諭の山田先生に勝るとも劣らない
明るい声が教室に木霊する。

そしてこの科目は——【怪獣基礎学Ⅰ】。

いわゆる怪獣学だった。

何故このような科目を行うかと言うと、先のIS学園防衛戦で教師
部隊および2年生選抜部隊がマトモに対応出来ず、かえって被害を拡
大させてしまったという事態を鑑み、急遽組み込まれたのだ。

もちろん、この科目は特務自衛隊主導で行われる。

その為、生徒の後ろで生き残った教員も授業を受けている。

：余談だが、【部隊連携基礎Ⅰ】という科目では陸海空特自衛隊の他
に海上保安庁、在日米軍からも顧問を呼んで授業が展開される。

「さて…まず今日授業するのはなんだけど…教本の27ページを開い
て。」

燈が言うなり、生徒達は27ページを開く。

もちろん千尋や箒、セシリア達も開く。

——そこに記されていたのは、【ゴジラ】というコードネー
ムの巨大不明生物だった。

「これ…？？」

「うん…だよね…」

それを見るなり、生徒達に動揺と騒めきが奔る。

そこに映っていたのは先日学園を強襲した巨大不明生物と瓜二つ
の外観をして、熱線のようなもので街を焼き払う、まるで亡者を連想
させる——黒い、巨大な塊。

その容姿から、先日の事件によるトラウマから顔がひきつっている
生徒が何人もいる。

「はい、静かに。…みんなも知っての通り、先のIS学園を襲撃した巨
大不明生物よ。」

燈が講義に戻すべく、ノイズを取り払う。

「さてこの巨大不明生物だけど——実は、解説に凄く困るの

よね：映像資料はほとんどないし。」

そう毒付くなり、クラス中から非難の視線が向けられる。

ただ一人、山田先生だけが苦笑いをしていた。

「仕方ないじゃない：上陸した1954年当時の記録映像であるフィルムや写真の類は官民間問わずみんなアメリカが持つて行っちゃったか焼却しちゃったんだから：教本の写真だって、政府が2017年に裏でアメリカから取引する形で奪還してきたモノだし：。」

「——教諭、質問してもよろしいでしょうか？」

そう溜息をつく燈に、神楽が挙手する。

仮にも燈が自衛官であるからか、自衛隊らしい質問の仕方をする。

——もつとも、挙手した手が握り拳ではなく平手な辺りが

素人らしさを表しているが。

「いいわよう？何かしら？」

「——何故アメリカは当時のフィルムや写真の回収を？当時の日本が連合国撤退直後であり、尚且つ日米同盟締結に伴いアメリカに頼りっぱなしだったとはいえ官民間わずにその措置がとられたのであれば、それは内政干渉では？」

片腕を失くしてなお、神楽はいつもと変わらない整然とした態度で声を放ち、問いかける。

それに燈はクスリ、と笑うと。

「それは、ゴジラの基本的な解説をした後に当時の世界情勢をあい混ぜながら回答するわ。」

——そう告げる。

「じゃ、まずゴジラの解説をするわ。教本に載っているとおり——

——初出現は1954年。身長は50メートルで体重は2万トン。

生体は今のところ不明：だけど恐らく夜行性ね。この辺りは当時の資料の欠落が酷いから詳細までは不明。

——この頃は米ソが核開発を競い合い、各地で原水爆実験を繰り返しており、ゴジラはビキニ環礁におけるアメリカの水爆実験の影響により陸上水棲生物が放射能と急激な熱に対応すべく急激な変異を経て進化したとされているわ。

——じゃあ教本の図7の地図を見て。」

そういうなり、千尋も教本の地図に目を向ける。

——そこには小笠原諸島大戸島、房総半島沖、東京都品川、東京都芝浦に赤いバツ印が刻まれ、順に1〜4の番号が振られている。

「それがゴジラの日本領海内で出現したとされる位置よ。」

燈が告げる。

したとされる——と言っていろいろあたり、ここも当時の資料が欠落し詳細不明となっているらしい。

そして欠落した原因は、先程言っていた通りアメリカに当時の資料を接収ないし処分されたからだろう。

「本来なら大戸島に上陸したところから話をしたいんだけど——」

——ここも詳細不明なの。あとから調査しようにも、当時の人達はどう他界されているからね……」

燈は真実を伝えられないことを非常に残念がるように言う。

実際、残念なのだろう。

些細な情報であっても、後世に語り継ぐことで、未来を生き抜く糧に出来るやも知れないのだ。

特に——すでに巨大不明生物という脅威が現実化してしまつた今なら、尚更だ。

「……ここからはあくまで私の推測だけど、ゴジラは大戸島に上陸後、甚大ではないけれど決して微々たるものでもない被害を刻んだと思われるわ。」

幸いにも接収されず、広島放射能研究機関で嚴重に保管されていた当時の放射能汚染の測定データによれば、井戸や一部の村が丸々汚染された事や道端に転がっていた家畜の死体からも、高い放射線が計測されていることから、物理的にも放射能の面でも、大戸島にかなりの被害を与えた事が見て取れるわ。

——余談だけれど、大戸島はその後1970年まで閉鎖されてしまったの。

——調査のため、として米軍主導でね。」

だから、当時の惨状語る人が居なくなつて、より一層当時の被害が後世に残らなかつたのかも知れないわね——そう付け加えながら、燈は解説を再開する。

「その後ゴジラは房総半島沖に出現。

海上自衛隊のフリゲート艦隊による爆雷攻撃が行われるけど、ゴジラはその後も日本近海に現れてシーレーンを脅かすことになるわ。

——けれど、コレも実際は米海軍による海上自衛隊への対潜教導演習……として、事実から抹消されている。」

（——おかしい）

そしてふと、千尋は思う。

—— どうしてこんなにもアメリカが介入し、ゴジラが出現した地域から人間を遠ざけたり、事実を捻じ曲げているんだ……？

これじゃまるで——

まるで、アメリカがゴジラを隠してしまいたいみたいじゃないかと、そう思わされる。

その間にも、燈の解説は続いて居た。

「その後ゴジラは2度東京に上陸したとされているわ。

—— これは当時アメリカが接收し、冷戦崩壊後に返還された一部資料やそれを目の当たりにした当事者の遺族が保管していた手記に至るまで、資料をかき集めた結果、最初は品川を中心に都内を蹂躪。当事者の手記によれば、品川駅に甚大な被害を与えたそうよ。

—— 2度目は芝浦に上陸。新橋、銀座と進行し、永田町へ侵入後に国会議事堂を破壊。その後上野、浅草と移動しテレビ塔などの主要施設を破壊し隅田川を南下。その後、東京湾に向かつていった。

—— ここまでで、死者は少なくとも10万人に登るわ。

—— 教本の図15を見て。そこには、現在の街とゴジラ上陸後の写真があるわ。」

—— そう言う燈に従って全員が図15を見る。

—— そこには、今のその場所の写真と、当時のゴジラ上陸の際の写真と比較するように並んでいる。

誰もが信じ難いように交互に2つの写真を見返す——ふ
と、何人かの生徒がこの進行ルートに見覚えのあるだろうか、目を剥
くように見開いている。

「そして何の因果か、奇しくもこのゴジラ進行ルートは1945年の
東京大空襲でのB-29の進行ルートとほぼ一致していた。

——教本には必要ないから載ってないけど、私が比較用に
用意した画像を渡すから、順に回して行ってね。」

燈がそう言って一番最初の出席番号の生徒に手渡した個人資料。

——そこに映し出したのは東京の上空からの写真。

しかしどちらも焼け野原になった場所があまり変わらず、それに気
づいた彼女は顔中から血が引いていくのを感じながらも、何か思わさ
れるモノがあるのか、固まったまま写真を見つめていた。

「そして東京湾にゴジラが没してもなお、被害者は次々と増えていっ
た……」

「え×ど、どうして…×」

生徒の1人が驚きの声を上げる。

燈は重苦しい雰囲気を出しながら、口を開き、懺悔のような声音で
応えた。

「……放射能よ。ゴジラの通過した地域は高濃度の放射線が漂ってい
て、それによつて二次被害が増えていったの——さつき言っ
ていた広島放射能関連研究機関から取り集めた被爆した値、被爆し
た人間の年齢と性別が書かれた資料と内閣の巨大不明生物対策特設
本部から送られて来た情報を見るに、おそらく3から5シーベルトは
出ていると推測されるわ。」

——あ、シーベルトについては教本の図13のグラフと解
説を……そうね、篠ノ之箒さん、読んでもらえるかしら？」

「はい。【被爆量には大きく分けて、《日常生活における被曝量》と《健
康被害をもたらす被曝量》に分類でき、日常生活で一番低いとされる
被曝量が『胸部X線の集団検診で受ける被曝量』の0.05ミリシー
ベルト。そして高く、健康被害を齎らす被曝量は『放射線業務従事者
の年間被曝の上限』である50ミリシーベルトである。」

しかし、この50ミリシーベルトは健康被害をもたらす被爆量の一番低い値にも含まれており、被爆が蓄積されて行けば、それは日常生活における被爆量から健康被害をもたらす被爆量になりかねない。

そして現在、6シーベルト以上が放射能での致死量とされている。」

「ありがとう。放射能については皆もニュースや新聞、各種関連書籍とかで聞いたことあるでしょう——現に、福島第一原発のメルトダウンの時は頻りに報道していたしね：放射能は微量であれば難病を直す福音にもなるけれど、多量だと生命を殺すことに特化した史上最悪の毒となるわ」

今まで日本は数多もの放射能の被害に見舞われてきた。

——広島への原爆投下。

——長崎への原爆投下。

——水爆実験による漁船第五福竜丸汚染。

——東海村原子力発電所の事故。

——福島第一原子力発電所のメルトダウン・および白騎士事件による同原発へのミサイル攻撃。

これらの災厄に侵されながらも、その都度復興し、日本が何度も立ち上がり、発展を続けて行った。

スクラップ & amp; ビルド——破壊と再建。

これで日本という国は成り立ってきたのである。

黒板にまとめたものを生徒たちはノートに板書している。

誰もが必死だ——まるで、これを板書して記憶しなくては死んでしまうと云わんばかりに、狂ったようなペン捌きでノートに文字を刻んでいく。

これが先日の襲撃を受ける前ならば、この方面に対して意識がある人間でなければ誰もが授業を気にせず喋っていたりするだろう。

——しかし、そんな平和ボケはもう許されないことは、当の本人達が自覚していた。

「最終的に朝鮮戦争後に横須賀に配備されていたアメリカ海軍のアイオワ級戦艦ミズーリが艦砲射撃を行いながら追撃——なれ

どゴジラをロスト。

その後はゴジラが何処にいるか、全く分からなかったわ――

――先日のIS学園防衛戦まではね。」

そう言つて、解説を終える。

――言葉を発する者はいない。

「……ここまでで質問は……あ、そっか、四十院さんのが有ったわね。」

燈が言いかけるが、思い出したように呟くと、神楽を見ながら口を開く。

「四十院さんはさつき言っていたアメリカが何故官民を問わずフィルムや写真を接収したのか、そして――何故こんな国家非常事態じみた事を今日まで習わなかったのか……そう聴きたいのよね？」

「はい。」

燈の問いに、神楽が応える。

「――それはね、当時の世界情勢が影響していたの。」

燈が口を開き、語り始める。

「当時はアメリカとソヴィエト連邦に分かれて対立し、『世界大戦の一步手前で軍拡を競い合っていた』冷戦という時代――しかも全面核戦争回避のための代理戦争であった朝鮮戦争が休戦してすぐだった……というのがあるわ。」

そして日本の仮想敵国であるソ連も北朝鮮も中国も目と鼻の先――
――そんな日本に、軍でも手に負えない、歩く核兵器とも言えるゴジラが現れた……なんて世界中に知れたらどうなっていたと思う？」

冷めた声音の問いかけ。

それに一人の生徒が自分なりの考えで回答する。

「えっと……日本は危ない国ってレッテルを貼られちゃう……？」

「……まあ、それもあるわね。」

――でも、もしそうならソ連は迷わず『自国防衛・ゴジラ討伐のため』に日本に核を落としていたでしょう。」

――瞬間、教室の空気が凍り付く。

「そしてもし日本がソ連からの核攻撃を受ければ、アメリカは日米同

盟に基づき核の傘で守っていた以上、報復核攻撃を行わなくてはならないわ。

…もし黙認すれば、他の同盟国から白い目で見られるのはアメリカだもの。

——結果として、米ソ両陣営は通常兵器と核兵器を用いて全面核戦争に突入してしまったでしょうね。」

——そうして、第4次世界大戦は『石と棍棒で殴り合う』時代になっていたでしょうね、と付け足す。

つまりそれは——ゴジラの存在が、間接的に人類文明の未来を左右したと言える。

「そんな——まさか…」

誰かが言う。

——あり得ないと。

確かにあり得ない。

21世紀に生きる自分達からすればそんなことは想像すらつかない。

——しかしそれに、

「確かに、今の時代の貴方達なら信じられないでしょうね。

…でも、これから7年後の1961年にはソ連初の原子力潜水艦K—19の事故が起きるんだけど…その時K—19の原子炉が核爆発していれば、K—19に搭載されていた核ミサイルが暴発して全面核戦争へ発展し、人類文明は1時間程度で崩壊していたとさえ言われているわ。

——たった1隻の原子力潜水艦の事故が原因で。」

燈は釘を刺すように告げる。

——たった1隻の原子力潜水艦の原子炉核爆発が原因で全面核戦争に発展する可能性があったのなら、ゴジラが原因で全面核戦争に発展してもおかしくはないかもしれない。

「では——その為にアメリカは写真やフィルムを接收して——

⊠

思わず箒は声を上げてしまう。

——事情は理解出来る。

だが、これではあまりにも——。

「そうよ。…それに当時はゴジラの混乱を東京のみに抑え込む為に、アメリカは在日米軍を使って通信設備を破壊して、徹底した箝口令による情報統制を敷いたそうよ——結果として、ゴジラの混乱は東京都心部に限定された。」

いえ、もつと言ええばゴジラが上陸した事さえ他県民は知らなかったし、ついでに言えばゴジラによる10万人の犠牲者も、ゴジラという存在さえも『最初から存在しなかった』事にされたのよ——原因不明の大火災、と処理されてね。」

——絶句する。

つまりは、ソ連率いる東側からの核攻撃をアメリカとその同盟国が受けることによる全面核戦争への発展を回避するために、アメリカはゴジラによる事件のみならず、『ゴジラそのものの存在』すら消してしまっただのだ。

——それはまるで、以前千尋と箒が派遣されたロリシカを彷彿とさせるような話だ。

「…その後は、ゴジラに関する報道や書籍が出ないかどうかを取り締まる情報庁が設立され、1994年に至るまで、ゴジラ関連の情報が出ないかを徹底的に監視させたそうよ。」

——40年。

それまでゴジラという存在が歴史から抹消されてしまったのだ。

だが——今年まで27年も有ったにも関わらず、今年まで情報統制は解放されていなかった。

——何故か。

「じゃあ、どうしてそれ以降はゴジラという存在が今日に至るまで俺たちは教わらなかったんですか？」

——思わず、千尋が問う。

「…まず、ゴジラ関連の情報を教科書に載せようにも圧倒的に資料が足りないし、アメリカが2017年まで当時の情報を独占していた——というのが大きいわね。」

それに、それらの情報返還と引き換えに情報開示のタイミングはアメリカに任せる形にしないと情報は返して貰えなかったし。

仮に開示して教科書を修正するにも莫大な予算が必要になるし、知っての通り日本は不景気から脱することに手一杯でいつしか特自以外は政府機関さえゴジラという存在を忘れていた———だから、一概にアメリカが悪いとは言えない。」

燈は、千尋を見つめながら告げる。

———そこへ。

「納得、出来ませんわ…!!?」

震える声音で、セシリアが言う。

「…どうして、そこまでアメリカにされなくてはならないのですか…

!!?」

確かに、当時の情勢を鑑みれば仕方ないのかも知れません…全面核戦争を回避するためなら仕方ない———でも、こんなのはあまりにも

———!!?」

理性では分かっているけど感情が理解出来ない。否、したくない。

だからこそ、様々な感情が縋い交ぜになった声がセシリアの口から零れ落ちる。

———それにメスを入れるように。

「———それは日本が敗戦国だからよ。オルコットさん。」

努めて冷静に、燈は告げる。

それに、セシリアは硬直する。

———敗戦国。

その立場に立たされているが故にアメリカの言いなりになるしか無かったと、アメリカの核の傘で守られるしか無かったと、だから日本はアメリカの言いなりになったのだと、セシリアは思い知らされる。

———2発の原爆で20万人の命を奪われ、水爆の恐怖に冒され、核の申し子に蹂躪され…それでも尚皮肉なことに、日本はゴジラを生み出した核兵器を用いた核の傘に入る以外に、生き延びる道は無かったのだ。

「——もつとも、本当はもつと込み入った事情があるんだけど、それは授業から逸れるから次の機会にするわ。授業もそろそろ終わってしまうしね。」

——それじゃ、みんな今回の授業内容をA4レポート用紙に書いて次回提出するように。

以上——解散!!？」

燈がそう言うと同時に、終業のチャイムが鳴り響いた——

EP-47 戦闘ト平穏と特使、来日。

6月14日午後2時

——福岡県福岡市中央区

——天神明治通り・天神交差点

世界全てが燃えていると錯覚するほどに、闇の中——市街地は赤く爛れ落ちていた。

——立ち込める火の粉と煙。

外気と遮断されている筈の内部管制整備室内でさえむせ返えるような錯覚を覚えるほどの——煉獄。

炎は視界を覆い尽くし、煙は空を閉ざし。

空に在る筈の月さえ曖昧に。

全方位から鳴り響く地鳴りと爆砕音、そして

警報音——それは軽く数1000体は下らない数の、無数の巨大不明生物が建造物を粉碎しながら進撃している証左だった。

日本有数の貿易港として機能していた政令指定都市、福岡は今、朝鮮半島からの巨大不明生物侵攻によって——死の都と化していた。

——糸島市に上陸した巨大不明生物群に対し、福岡市西区を防衛線に設定。

福岡前原道路・福岡西料金所付近に正面防衛を目的として、

陸上自衛隊第4師団

「西部方面混成団第19普通科連隊」

「第4偵察戦闘大隊」

陸上自衛隊第8師団

「即応機動連隊」
を展開。

側面支援防衛として、

「叶岳下山門砲撃陣地」

「叶岳上ノ原砲撃陣地」

「能古島展望台砲撃陣地」

「鴻巣山砲撃陣地」

など4つの仮設砲撃陣地群。

加えて博多湾に展開している国連海軍の

ノースカロライナ級戦艦

「ワシントン」

タイコンデロガ級巡洋艦

「タイコンデロガ」

「トーマス・S・ゲイツ」

はるな級巡洋艦

「はるな」

「ひえい」

スプルーアンス級駆逐艦

「スプルーアンス」

「ヒューイット」

「エリオット」

あぶくま級駆逐艦

「あぶくま」

「おおよど」

「とね」

OHペリー級フリゲート艦

「ジョージ・フィリップ」

「ブーン」

GB型ロケット支援砲艦

「GB—006」

「GB—011」

「GB—014」

「GB—015」

「GB—020」

——以下、20隻から成る水上部隊による支援砲撃、そして地形さえも利用しての巨大不明生物の侵攻阻止戦を展開。

当初は正面と南北からの挟撃によって漸減に成功するも、一部の個

体群が西区横浜町より今津湾に入水。

海底を打通侵攻し——松原町に上陸。

さらに巨大不明生物の第2波が福岡市東区志賀島・勝間海水浴場に上陸。

これにより第4師団司令部および国連軍司令部は混乱状態に陥り

市街地への内部浸透を許す事となった。

そして——今に至る。

……既に福岡市の防衛は半ば放棄されたと言って良い。

現に守備部隊の大半は臨時の集積場となつている博多空港および

郊外の福岡駐屯地に撤退中だ。

……戦況図には巨大不明生物を表す赤の光点^{グリッパ}。

主に4つのグループに分かれて分布しているそれは、

……左翼は——荒津埠頭。

……中央は——大手門および警固。

……右翼は——城南区福岡大学付近。

その位置に点在していた。

……追いつめられつつある。

今や福岡市中央区大正通り以西は。

その悉く全てが、業火燃え盛る火の海へと沈み墜ちていた。

そして、街の中には人の姿は全く無い。

だが——ここ、明治通りは別であった。

業火に燃え上がる車両であった鉄の塊。

半ば崩落した、ビルだったコンクリートの塊。

なぎ倒された電柱だった棒切れ。

度重なる振動で粉碎されたアスファルト。

その最中——全高60メートルを超える、銀鉄の巨獣が君

臨する。

「——各種兵装、残弾平均3割強……キツいな、こりや。」

その、^{メンテナンス・ブリス}内部管制整備室——この人造の巨獣を繕う為に設け

られた設備を転用した操縦室で、様々な情報モニタを前に眩く。

……そしてひとつの情報モニタを目にして、千尋は生唾を飲む。

『荒津山仮設基地、陥落』というログと、樋井川以西より肉の津波が押し寄せる戦況図。

——推定8万体のギャオス梯団が、迫り来る……!

『各機、まだ行けるか!? 鷹月、ホーゼンフェルト大尉、状況報告!』

——まりもの号令——即座に中隊副官の鷹月仁一慰が反応する。

『第75中隊全機健在! なれど、推進剤・弾薬共に枯渇しつつあり……!』

『こちらシユヴァルツ01、第666中隊第1小队も同様だ。』

焦燥を孕んだ声と、務めて冷静に放つ声。

——対局の感情を孕みながら仁とユリアは回答する。

『中隊長、このままでは……!』

『ああ。鷹月、貴様は損耗の激しい機体を引き連れて那珂川以东へと先行して撤退しろ。殿は我々が務める。』

……それは、部隊の全滅を避ける為の判断でもあった。

千尋も操縦桿ステイックを強く握りしめて応答し——あることに気が付き、そして、

『中隊長!!』

——叫ぶ。

同時に。

那の津通りから舞鶴2丁目交差点を経て、天神西通り、自動会館通りに至るまで展開していたバリケード——本来は水害時の浸水や津波による市街地浸水を防ぐ為の、路面格納型緊急展開式防波堤——を突き崩しながら、異業ギャオスの鳥達群が姿を現した。

……粉塵を巻き上げながら迫り来る姿は、さながら濁流のように。

——昭和通りへと、雪崩れ込む……!!

煤汚れた街路樹が。

遺棄された放置車両が。

踏み潰されて行く——。

「自分が直接食い止めます！中隊長らは援護を!!」
千尋が叫ぶ。

この状態でまともに太刀打ち出来るのは千尋の機体だけだ。
だからこそ、

『了解した。中隊各機、——食い止めるぞ!!』
まりもの号令。

続くように「了解」の連鎖が響き、

『機龍——前へ!!』

「了解——!!」

号令と共に千尋は機体を起こす。

直後——体高60メートルの巨躯が跳ぶ。

「——ぐ、う…ッ!!」

——全身が押し潰されかねないと錯覚するような、殺人的なGが千尋を襲う。

それは、実に400メートル近い距離を飛び。

轟ッ、と。

轟音と地鳴りをもって大気を震わせながら、4万トンにおよぶ鋼鉄の塊が——舞鶴一丁目交差点に着地する。

：眼前には、距離100メートルにまで迫ったギャオスが。

《ギユヴァアアア——ッ!!》

ヒステリックな、金切り声めいた咆哮。

醜悪な牙を剥きながらソレは、機龍に飛び掛かる。

機龍は、

「——うるっせえ…!」

ギャオスの顔面目掛けて、

マニピュレーター
大質量の拳を叩き込む…!

ぶぱんッ、と。水風船が爆ぜるような音。

数100トンにおよぶ拳を受け。

ギャオスの頭部は鮮血と内臓物、そして奇跡的にほぼ無傷だった眼球を撒き散らしながら爆ぜ墮ちる。

千尋は流れるように、アンダースローでマニピュレーターをもって

後ろに投げ飛ばしそして――

「次ッ！」

新たに視界に映る敵へと狙いを移す。

福岡天神センタービルに突き刺さった先程のギャオスと同じく、他の個体群も千尋に襲い来る。

――迫り来る、8体の猛鳥。

千尋は、投げ飛ばした所為で下を向いていた腕部兵装の、

――腕部の旋回は追いついていない。

4式120mm2連装超電磁投射砲をギャオスに向けながら、

――着弾修正も完了していない。

千尋は操縦桿の引き金を握り、

――故に、

「ふッ――！」

――乱れ撃つ。

瞬間、4式120mm2連装超電磁投射砲の砲口が火を噴く。

大気をプラズマ化させながら、毎分800発――1秒間に

14発ずつ――もの連射性をもって。

超電磁場で加速された120ミリ高速徹甲弾が緋色の光芒と化す。

：超電磁投射砲は大気を裂きながらアスファルトを砕き、

――爆ぜる。

大きさ2メートル、重さ約10トンものコンクリート塊の群れが――

――紙吹雪のごとく吹き荒れる。

それは人間にとって生命を脅かす事象。

ギャオスに対しては致命どころか負傷となる事象でさええない。

だが意識していた存在に向かっていた先で、予想だにしない事象が

起きた時、生物とは反射的に怯んでしまう。

もちろんそれはギャオスも例外ではない。

ただギャオスは立て直す時間が早いというだけで――千

尋にとっては、それで充分だった。

地雷の如く爆ぜたアスファルトは、篠突く雨の如くギャオスを叩き打ち、

だが、僅かに怯んだ程度。

ギャオスが顔を上げ、進撃を再開しようとする。

…そこには、

——— 光芒と化した徹甲弾を放ちながら、稲妻を走らせる2

つの砲口が。

…腕部の旋回は終わった。

…着弾修正は終わった。

…照準は怪鳥の頭部。

ならば、

「——— ツ!!」

異形の頭を穿つのみ……!!

…1秒とかからず、120ミリの砲弾はギャオスへと吸い込まれて

行く——— …!!

——— 爆ぜる。

ギャオスの頭は潰れたトマトのように原型を失い、地に伏し尽きる。

だが、これで終わらない。

さらに後続として迫る、ギャオスの群れ。

視界に入るは、

異形たちの濁流。

砲弾が枯渇していく様を訴えるウインドウ。

——— 残弾100発未満。

千尋はそれを躊躇うことなく撃ち放つ。

…先のように、砲弾は最先頭にいた個体を蜂の巣にして———

——— 同時に響く、残弾欠乏の合図。

それはヒトからすれば畏怖の瞬間であり、千尋からすればそれは、足枷が解かれた瞬間である。

「——— 機龍、弾薬欠乏！近接戦闘に切り替えます!!」

そう言うと共に腕部兵装の付け根より展開される——— 蒼

雷を纏う、黒鉄の刃……!!

それは、統合機兵・打鉄甲一式の試製14式誘導熱放出打刀の祖と

なつた劔。

…名を、

——00式誘導熱放出斬刀。^{メーサー・ブレード}

その刃を持って、迫り来るギャオスを迎え撃とうとして——

『サーベラス01了解。…後詰めは任せろ。貴様は前衛で漸減に臨めば良い。』

まりもの言葉に、千尋の口角が歪む。

…獣めいた笑みを浮かべるように、千尋は口を吊り上げ、そして、「了才解ッ!!」

跳ぶ。

脚部の内蔵型跳躍ユニットのロケットモーターが点火される。熱でアスファルトが融け弾ける。

衝撃で土塊が空中に投げ出される。

ビル群のガラスは飛散して空を舞う。

千尋／機龍はそのまま、ギャオス梯団へと突貫する…!

そして、4万トンを超える大質量の巨体をもって。

高さ200メートルを超える塵柱を立てて大地を抉り、

「潰れ、ろ…ッ!!」

——その巨体で、ギャオスをすり潰す…!

飛び散る肉片と鮮血。

残るは赤い肉塊。

だが千尋は見向きもせず——否、見る暇など与えないとばかりに。

《ギユヴァアアア——ッ!!》

——ギャオス達が、押し寄せる。

血走った眼球が機龍を睨み、それを、

——斬^{ザン}

千尋は機龍の跳躍ユニットを吹かし、腕を旋回させる。

豪風の如く振るわれた腕は、大気を裂きながら宙を舞い。

同時に——雷光疾る刃が、ギャオスを一閃する…!!

…一瞬で4体の胴体が上下に泣き別れとなる。

そして千尋は、眼前に迫り来る新たな個体を見て、

「次ッ——！！」

——刃を突き立て、メイサー雷光を放つ…！

肉に深く突き立てられた刃は、瞬時に体躯の水分を蒸発させた。

そして、全身の水分や血液は沸騰し、皮膚を食い破る如く瞬時に爆ぜる…！

《ヴュア”ア”ア”アア——ツ！！》

上がる断末魔。

あるいは怨嗟の声。

その、地獄の釜の中身めいた咆哮が渦巻いているかのような。

——否、本当に渦巻いている。

真つ正面から対峙しても勝てないと悟ったのか、

《ア”ア”ア”アア——ツ！！》

ギャオス達は、機龍を取り囲むように渦を巻く。

それは渦潮。

あるいは竜巻か。

…なるほど、確かにこれでは一匹一匹を狙おうにもやり辛過ぎる。

…口角が吊り上がる。

呼応するように、豪雨の如きギャオス達が襲い掛かり——

——ならば、

「バックユニット背部兵装、全弾斉射——！！」

——まとめて叩き潰すのみ…！！

紡がれる思考操作。

瞬間——垂直発射システム肩部に搭載されていた追加艤装のVLSより放

たれる、98式320ミリ多目的誘導弾の嵐。

…照準や誤差修正は完全には終了していない。

だが、それで十分。

…なぜならば、

《ア”ア”ア！?》

放たれた誘導弾は、次々にギャオスを焼き爆ぜさせていく。

…それが済んでいなくても当たり尽くすほどに密集していたからだ。

…そして何より、そうまでしても殺し尽くせないのだ。

——近接信管で爆裂した誘導弾により生じる火炎。

その向こうより躍り出る、6体の異形。

それら全てが口を開き、超音波メスを放とうと——だが

遮って。

「——背部兵装、強制排除!!」

再び紡がれる思考操作。

千尋の声に応えるように、

背部兵装との接続部より爆ぜる音。

そして、肩部より鉄塊が放たれる。

——ミサイルを撃ち尽くした空の兵装は、機動力を落とす欠点となる。

——故に、機体と接続しているロックボルトを爆砕し、兵装ユニットを排除することで、機動力と継戦能力を維持する。

——だがそれだけでは足りない。ただ排除するだけでは意味がない。

——故に、背部兵装そのものをミサイルとして、敵に撃ち出すことで、邪魔になったユニットの強制排除と敵への攻撃を両立し、実現する。

——それが、機龍のバックユニットの持つ機能……!

…そして、

鉄塊はそれぞれ、2体のギャオスに命中する。

物理的な衝撃がギャオスの全身の骨を粉碎し、内臓を破裂させる。

それを視界の端に納め、仇討ちと言わんばかりに残る4体が飛びかかろうとして——衝突より、1秒と0.2秒。

時間差でバックユニットが起爆する……!

バックユニットに搭載されていた自爆用の爆弾は、その実——

——燃料気化爆弾。

?それは爆発と同時に爆鳴気の爆発は空間爆発であって強大な衝

撃波を発生させ、12気圧に達する圧力と2500から3000℃の高温を発生させる。？

数100mの加害半径を誇り、広範囲に衝撃波を発生させるため、命中した個体の周囲の個体にも多大な影響を与え得る。

——— 事実、機龍に飛び掛かろうとしていた6体の個体は周辺の雑居ビルを巻き込んで、跡形も無く蒸発していた。

…その背後より、

《ギユヴァアアア》

ツ!!》

再び迫り来る、ギャオス達。

” ———— いい加減、そのツラ飽きたぞこの野郎。”

そう舌打ちしながら、突貫するギャオスに狙いを定め——— 直後、その頭が爆ぜた。

…一瞬それがなんであるか、千尋には理解出来なかったが、

——— 爆音に埋もれるように、再び響く砲声。

それで理解する。

16式荒吹一型丙の装備している、155mmライフル砲だ。

西側自走砲の標準規格の155mm砲弾を運用すべく、ドイツが自走砲の砲身パーツを流用しつつ戦術機での運用を前提に開発した装備。

また戦術機での運用が前提だが、砲身自体は自走砲のものを流用している為に、弾薬補給以外に整備の面でも他兵科と互換性のある装備となっている。

自衛隊において運用されているのは、陸自の東部方面（関東）の一部部隊と富士教導団、西部方面（九州）、北部方面隊（北海道）——— と限られて範囲のみだ。

…故に存在を忘れていたが、そういえば今回は装備して戦闘していたのだと、思い出す。

——— 千尋の直援に、まりもと新井が加わり。

まりもは舞鶴一丁目交差点北部を、新井は舞鶴一丁目交差点南部に向けて制圧砲撃を開始する。

それを見て、千尋はまりもに通信を放つ。

「そちらの状況は☒」

『——現在機龍の直援に回っている私の1個分隊と、3個小隊に分かれて布陣している。』

戦況ウインドウには、

:

——昭和通り・舞鶴一丁目交差点（中央）

??第1機龍隊3式機龍

??第1機龍隊臨時司令戦術機分隊

——天神北交差点（右翼）

??陸上自衛隊第115戦術機小隊

——警固公園（左翼）

??ドイツ陸軍第666戦術機中隊第1小隊

——天神橋口交差点（補給中）

??特生自衛隊第103戦術機小隊

:

そう表示されている。

——右翼が押されてる……!!”

思わずそう舌打ちする。

今すぐにも救援に向かいたい——だが、東進してくる

ギャオスの侵攻は、未だ途絶える様子が無い。

『……右翼は福岡湾からの支援砲撃に任せる。現在博多空港仮設補給基地で補給を終えた西部方面戦車隊と第204メーサー中隊、そして一時離脱していた第75中隊が増援として那珂川東岸および中洲地区に布陣する——それまで持ち堪えるぞ……!!』

『何だこれ……戦況ウインドウが……!』

まりもの苦悶混じりの号令。

だがそれに、新井の驚愕の声が重なる。

——それに千尋も押されるように戦況ウインドウを確認して、息を詰まらせる。

自分達の至近——右翼を務める第115中隊と補給中の第103中隊、そして明治通りの直下——に、多数のギャオ

スと思しき反応が群がりつつある。

はつとして全方位を見渡す——だが、前方からは確認出来るものの、反応があった後方にギャオスは視認出来ない。

「——センサーの故障か？」

いや、でもそうでないとしたら——その思考を終える前に。

『総員ここから離れろ！この下には——』

ユリアの、どこか演技じみた焦燥の声。

『——地下鉄のトンネルが……！』

——瞬間。

轟音が鳴り響く。

【天神地下街】直上の街区そのものを突き破りながら溢れ出る、肉色の津波が——。

——12分後。

赤黒い非常灯が灯るメンテナンス・ブース内で、千尋は息を切らしていた。

：叫び過ぎたせいか、喉が痛い。

そこにふと、まりもの溜息混じりの声が届する。

『——状況終了。総員、ご苦労だった。30分後に帰還報告デブリリーフィングを行う。シャワーと着替えを済ませて、ミーティングルームに集合しろ。以上だ。』

——眼前には。

《仮想戦闘演習プログラム・福岡01 終了》

：…そう描かれたウィンドウだけが浮かんでいた。



東京都墨田区：特生自衛隊八広駐屯地

司令部庁舎区画 地下第3階層02訓練室

「戦闘継続時間、2時間53分。結果は鷹月の率いていた第75小隊を除く戦術機部隊壊滅と機龍の中破。原因は支援中隊と機龍のサイズ差による明らかな連携のズレと、福岡市営地下鉄空港線を侵攻して来た個体群の奇襲による中隊の分断。なれど、機龍の奮戦と有明海に展開した米海軍第7艦隊第15駆逐隊および鐘ノ岬沖に展開した第2護衛艦群第2護衛隊からの巡航ミサイルと燃料気化砲弾サーモバリックを用いた面制圧により、福岡市内の個体群殲滅には成功——」
「まりもが書類を読み上げながら呟く。

「——どう考える？ 鷹月一尉。」

「編成されたばかりの機龍隊にとつて、これが初の市街地訓練ならば満足できる結果であると考えられます。」

また戦術的には敗北ですが、福岡市に侵攻した個体群による被害をあれ以上拡大させることなく殲滅した……という戦略的観点から見れば、まずまずかと。」

仁が感情を極力抑えた声音で答える。

「……ですが課題もあります。戦術機中隊にはこれまでロリシカ派兵等で巨大不明生物との戦闘ノウハウこそありますが、都市での戦闘には不慣れであった為に弾薬と推進剤の消耗が激しかったこと——」

——第二に、上空や川の対岸、そして海岸からの侵攻に警戒するあまり、地下鉄からの侵攻を想定出来ていなかったこと。他にも問題あるでしょうが、現状はこれら2点が問題かと。」

やはり客観視は出来ない。

機龍隊と戦術機部隊の運用自体を見直す必要もある――

そう、仁は言外に告げる。

それにまりもは頷きながら、

「運用については……正直微妙だ。私からも言っただけはおくが、決めるのは上だからな……」
――だが先に述べた点は、どちらも訓練次第で克服とまでも行かなくとも緩和できるはずだ。特に後者は私を含めた全員が思い知っただろう。」

――そう言い放つ。

(…確かに――地下鉄なんて、完全に盲点だった。)

それに同意するように、千尋は内心呟く。

今まで戦っていた場所は――お世辞にも発展していると
は言えない、いわゆる片田舎か無人地域。

入り組んでいた場所といえは――タッグトーナメント時の
障害物エリアやIS学園の地下区画のみ。

だが、前者は分隊規模での連携はあれどたった2回。
後者は戦略も戦術も連携もへったくれも無かった上に、

――ギャオスはもつとも未成熟な個体であっても、IS学
園地下で対峙したクラブロスより巨大なのだ。

……それらも相まって、今回戦場として選出された福岡市という――
――近代化した都市で、浸透侵攻経路たり得る地下鉄への警戒が
疎かになってしまったのだ。

実際、いち早く地下鉄の存在に気付いたユリアの警告が無ければ――
――誰も気付けなかった。

……否。

――今回のシミュレーションデータ、部隊長であるまりも
は事前に確認している筈だ。

……していなかったとしても、今回のシミュレーションが市街地とい
う事から、欧州連合の提出した国際規格の市街地戦闘データ――

――ウクライナの首都キエフでの戦闘データである、

——【キエフ・データ】

ウクライナの工業都市ドニプロでの戦闘データである、

——【ドニプロ・データ】

ウクライナ第2の都市ハルキウでの戦闘データである、

——【ハルキウ・データ】

ドニプロと同じく工業都市であるドネツィクでの戦闘データである、

——【ドネツィク・データ】

ウクライナの鉄道都市であるクルィヴィーイ・リーフでの戦闘データである、

——【クルィヴィーイ・データ】

——それらのデータによれば、地下トンネルからの侵攻によつて大規模な損害を被つた事例が存在していた。

福岡の戦闘プログラムデータがそれを元に行っている可能性がある以上、そちらの方を確認している筈だ。

……という事は。

——地下鉄をギャオスが侵攻してくる事を、まリモは知っていた事になる。

いや、まリモだけではない。

ウクライナでギャオスと直接戦っていた事から経験豊富なユリアが、あんなギリギリまで気付かない筈がない。

つまり、ユリアも気付いていて——

……ああ、つまり、

(ワザと気付かなかつたフリをして、俺らがまだ未熟だと理解させると同時に——気を引き締めさせるって魂胆だったワケか。

ンで、ホーゼンフェルト大尉は俺達があんまりにも気付かないモンだから思わず声あげちまつた……と。)

——神宮司三佐らしい。と内心納得しながら、千尋は思う。

「ホーゼンフェルト大尉からは？」

ふと、まリモがユリアに問いかける。

「私からは何も。内容もほとんど鷹月大尉と被りますので。」

だが、ふと思案して。

「ですが、お互いにとって今回は良い機会になったと———そう思います。」

そう、回答する。

…その意味は単純なことだ。

そもそも、なぜ特生「自衛隊」の訓練に「ドイツ連邦軍」が参加しているのか。

…その答えも単純なことだ。

…ドイツで建造中とされる、機龍をベースにしたメカゴジラという兵器。

その運用と支援を実施する為に、自衛隊の演習プログラムが最適だったから、というもの。

ではなぜ自衛隊の演習プログラムを使うのか。

それは、ドイツにはもう後がないからである。

…既に北ヨーロッパ平原における巨大不明生物群の先鋒は、ポーランド領・ビスワ川周辺———ドイツ国境まで300kmの地点———にまで到達している。

そして、ギャオスの侵攻速度は一番足の遅い陸棲種でも最高時速160km。

つまり最高時速を維持したまま侵攻すれば———2時間程度でドイツに攻め入ることが出来るというのだ。

今はどうにかバルト海からの戦艦やミサイル駆逐艦からの火力投射と、オーデル・ナイセ要塞線およびムンスタール陸軍基地、デーイープホルツアー陸軍基地に配備された、大陸間横断超電磁投射砲の超々長距離曲射射撃による漸減で、どうにか侵攻を食い止めているという現状。

…ドイツ・ポーランド間国境を抜かれた際の第2次防衛ラインはあると言えはる。

だが、徴兵が出来ない中で用意された戦力の大半が第1次防衛ライ

ンたるオーデル・ナイセ要塞線およびベルリン近郊に配備されているのだ。

：故に、第2次防衛ラインは名ばかりと言っても過言ではない。国境付近の防衛ラインを突破されればドイツの陥落は確定。

旧西ドイツ領に展開している数少ない予備兵力だけで戦わねばならない未来に直結する時点で、結末は分かりきっている。

加えてドイツ領を突破されれば、フランスやベネルクス三国にもギヤオス達が雪崩れこみ、戦火は一瞬で西欧にも拡大し——
巨大不明生物が、欧州陥落に王手をかけてしまう。

——だがそれは通常兵器のみの話。

現在急ピッチで建造中のメカゴジラなる、機龍を基に建造されている決戦兵器が間に合えば、戦況を覆すことはもはや不可能ではあるが——
現状維持は叶うかも知れない。

：その建造と並行して、自衛隊、延いては機龍隊の演習プログラムで運用ノウハウを学ぶと。

——ぶっつけ本番で当たる可能性がほぼ確定であるからこそ、そうなくても対応可能となるように：と。

だから今回は、第666中隊も訓練に参加したのだ。

「では以上だ——解散ッ!!」

ふと、まりもの号令で思考の海から引き上げられる。

応えるように、

「——敬礼!!」

仁が紡ぐ。

そして全員が敬礼し——解散となる。

「篠ノ之、身体の具合はどうだ？かなりのGがかかっていたはずだが。」

全員が解散して行く中、まりもが千尋に問う。

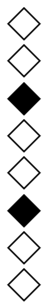
「は、大丈夫です！もともと、自分は身体が頑丈ですので。」

直立不動の姿勢で、千尋は応える。

「ふむ、それなら良いんだが——ああそれと、鷹月一尉の娘さんが貴様を探していたぞ。」

「はっ。」

思わず、千尋の目が点になった。



東京都墨田区：特生自衛隊八広駐屯地

司令部庁舎区画

——同・第2庁舎保安部警務隊事務室

「はあ…そういう連絡は事前にしてくれよ篠ノ之…。」

「すみません…。」

警務隊職員が肩を並べてデスクワークに勤しむ事務室。

その一角で千尋は警務隊の男性自衛官に説教を受けている最中であった。

事の発端は。

「——千尋！IS学園入学するまではここで働いてたんでしょ!?!ちよつと案内してよ!!」

という、訓練後に顔を出しに行った際に放たれた鷹月の一言からだった。

それで、見学用のIDを貰いに来て——やらかしてしまつた。

「将来自衛官を目指してるって子が見学したいってのは、まあ喜ばしい。だがいきなりアポも無しに来て『見学したいらしいのでゲストID下さい』ってのは無茶があるぞ、おまえ…。」

警務隊の自衛官が言う。

しかしそれは当然だと言える。

「俺ら警務隊はもちろん、各部署との協議も経て、どこからどこまでを見せるか——そういうのも話し合わなきゃならないんだぞ。

市ヶ谷じゃないんだし、そんなに自由度は高くないんだ。」

「…はい。」

ここで働いていたが故に、見学にかかる手間というものを知らない

かったとはいえ、やらかした——と千尋は思う。

：普段こういうのは立场上自分より階級が上の箒が担当していた。

だが——箒は現在臨時の健康診断中。

故に千尋が立ち会うこととなったのだ。

：思えば、八広駐屯地は陸海空自衛隊よりも機密性が高い。

だからこそ、見学の承認が降りる可能性は極めて低い。

IS学園入学前はフリーパス状態であったが故に忘れがちだが、よく考えればこの施設とはそういう場所なのだと、再認識させられた。

「まあ、地上区画なら良いか……この案内もいずれせにやらんし……一応滑走路や演習場以外はアクセス可能だし……」

——今回は見逃してやるよ。その代わり、IS学園の生徒であると同時にここの職員であるお前も随伴しろ。

：そう付け加えながら、彼はゲストIDを千尋に手渡した。

千尋は胸をなで下ろすと共に、

「はい、今後は注意します。」

——そう言つて、礼を言う。

「今回だけだからな？ 忘れるなよ。」

……そして今。



東京都墨田区：特生自衛隊八広駐屯地

格納庫区画第5車輜格納庫

「すごい……すごいすごい……！ レオパルド2に、T-72!!」

鷹月が感嘆の声を上げる。

彼女の言う通り、第5車輜格納庫には、

——ドイツ製にして欧州標準戦車とも呼ばれるレオパルド2主力戦車。

——旧ソ連製にして未だ旧共産圏で運用されているT—
72主力戦車。

それらが合計28台ほど鎮座している。

「欧州の戦車なんて滅多に見れないのよ！地理的にも離れてるし、共同訓練しようにも日本じゃ実弾撃てる場所がほとんどないからアメリカでしかやってないしで日本に来る理由ないから！

旧ソ連製なんてもっとレアよ！旧共産圏とは軍事交流あんまりないからまず日本じゃ見れないし!!」

…それを見て、頼んでもいないのに鷹月が興奮気味に解説する。

確かに、日本では諸外国の戦車が陸揚げされる機会などほぼ皆無であるために、こうして海外の戦車を間近に見て興奮するのだろう。

…特に、鷹月のようなミリタリーヲタクは。

「でもなんで外国の戦車が特自の駐屯地にあるの？」

ふと、もつともな疑問を立花が言う。

それに、

「八広駐屯地は特自と国連軍の共用施設で、敷地内に特自管轄区画と在日国連軍基地があるからな。」

「多分在日国連軍基地の戦車なんだろう。」

千尋が答える。

「ふーん…でもここって特自の管轄区画よね？」

「ああ——多分追加戦力として配備されたは良いけど、国連軍基地の敷地内に収まり切らないから、特自の空いてる格納庫を間借りしてる…って感じじゃないかな。」

千尋の言う通り、八広駐屯地の国連軍管轄区画——通称：
在日国連軍墨田基地——は今や受け入れられる部隊のキャ

パシテイを超過しており、特自管轄区画や最寄りの自衛隊基地へ分散配備を要請している…というのが現状であった。

それだからか、特自の格納庫にも国連軍の車輛が配備されている。
「でもメーサー車は？特自の主力車輛なんでしょう？」

食い入るように立花が聴く。

「メーサー車は機密の塊——海自でいうところの潜水艦や

イージス艦みたいなモンだ。だから普段は地下車輛格納庫に配置されていて、地上格納庫に配置されることは有事の際を除いて滅多にない。」

———というかこの駐屯地自体、地下は機密の塊だからな。と付け足すように千尋が言う。

事実、八広駐屯地は墨田大火災の跡地より現れた国家機密級の存在たちを覆い隠す為に築かれた蓋に過ぎない。

地下には、墨田大火災の原因である、束が開いたワームホールの果て。

———人が自らを守る為に、荒神の肉親にあたる遺骸を用いた3式機龍。遺思を持つ者

———人が巨獣に抗う力として実現してみせた存在の末裔たる90式メーサー車の残骸。

———石炭紀から時代を超え、現代に現れた者達の王たる超翔竜メガギラスの肉片。

———既に焼き尽くされたのか、炭化していた完全生命体デストロイアの破片。

———破壊し尽くされ、残骸と化していた詳細不明…一部の残骸からモグラを髣髴とさせる物体。

———マイクロ・ブラックホール現象を引き起こし、それを制御するシステム。ダイヤモンド・タイド

———ブラックホールの果てを彷徨ううちに液状化し、1万℃もの溶岩めいた液状物質となった、ミレニアムかつてのゴジラ自分の肉片。

———その1万℃もの液状物質の中でも形を喪う事なく、篠ノ之千尋今の自分を構築した、ゴジラ細胞。オルガナイザ1G1

……それら異界より流れ着いた、無数の漂流物が地下には保管されている。

つまりは、この駐屯地自体が巨大不明生物に抗い得る存在を生み出す為の兵器廠でもあるのだ。

事実、この駐屯地から発された技術は多い。

———特自の主力車輛こと、18式メーサー殺獣光線車や各

種メーサー兵器の技術。

——統合機兵打鉄甲一式で試験運用されていた試作携行装備群。

——120mm弾の連射・装弾・砲身冷却すら可能なレールガン技術。

——海自で未だ現役の「やまと型」・「きい型」に搭載されている、超耐熱対弾人工ダイヤモンドコーティング複合装甲およびNリアクター機関。

——超高性能爆薬ことNN兵器。

——3式機龍のDNAコンピューター・システム。

——アメリカおよびイギリス、ドイツで建造中と噂のメカゴジラなる巨大兵器の基礎技術。

千尋が知っているだけでもこれらが挙げられる。

知らない場所では、更に良くないものまで作られている可能性は極めて高いのが、これまた不安ではある。

もつとも、これらは既にアメリカや欧州に提供されている技術群だ。

アメリカにはロリシカの支援と日米安全保障条約に基づく技術提供。

欧州：特にドイツには、ウクライナ防衛を確固たるものにし、欧州完全陥落を回避するために。

思惑がどうであれ、少なくとも墨田大火災の翌年にして八広駐屯地が完成した2017年ごろからは既に対獣戦争を見越し、各国との情報共有と兵力増強に携わっていたということになる。

結果として、アメリカでは次期主力空母の主機を原子力機関からNNリアクターに。

ドイツは世界で2番目にメーサー車の開発・実戦投入を行い、崩壊寸前だったウクライナ戦線を2〜3年は延命させた。

——閑話休題。

——ふと神楽が、

「ええ。残念ながらメーサー車とかは機密扱い。兵器を大量生産して

も誰も騒がない国連やアメリカと違って、日本は口煩い人が多いでしょう?」

——付け加えるように、立花に言う。

…こうした兵器群の存在は、公になり過ぎると、『平和を脅かす』という——敵は話の通じない巨大不明生物だし、世界規模で被害は拡大してるし、とつくに平和は脅かされていると思うのだが、そう言ったところで論点をすり替えてくるだけなので、巨大不明生物同様に話が通じない相手——輩が多いのがこの国。

だからこそ、兵器廠としての一面も持つ地下区画は機密扱いなのだ。

その一面を見てると、アメリカが羨ましく見えてくる。

「——ああ、そうそう…」

ふと思いついたように、神楽が千尋に声をかける。

「アメリカは国連軍に提供する戦力として…半年以内に駆逐艦175隻、揚陸母艦51隻、ロケット砲艦61隻——合わせて287隻を建造するそうよ。」

「…に、にひやく…?」

——冗談だろ?と、

神楽の言葉に千尋は啞然としてしまう。

それはあまりに桁違いであるから。

…分かりやすく言うなら、『海上自衛隊2個分の戦力を今から国連用に作る』と言っているのと同じだ。

「そして、近年まで悪化していたアメリカの経済状況も戦争による兵器輸出のおかげでマイナスから回復して連日右肩上がり。」

——流石は武器商人大国よね、と神楽が皮肉めいて笑いながら。

「ま、必要といえれば必要ね——むしろ、それでも足りないくらい。」

これからも人類が世界全域をカバーする気なら、せめて10000隻以上は要るでしょうね。」

——いくら大量生産とはいえ、第2次世界大戦の時と同じ

数程度じゃ足りないわよ。

そう付け足しながら言う神楽の言葉に、千尋は頭を抱える。

「……つまり前にも一回、この規模の大量生産やったのか……。」

「ええ——第2次世界大戦時には隔月刊正規空母ことエセツクス級、月刊軽空母ことインディペンデンス級、週刊護衛空母ことカサブランカ級、日刊駆逐艦ことフレッチャー級、三時刊輸送船ことリバティ：等が大量生産された。」

——まあ、あの国は日本の30倍くらいの生産力があるし、珍しくもなんともないわ。

……さらりと言うと共に、紡ぐように、

——それに第2次世界大戦時のシミュレーションゲームで史実のアメリカを再現したら、ゲームバランス崩壊か処理落ちかの二択と言われている程すごかったそうだから。

……と、恐ろし過ぎる言葉を付け加える。

——そして、そこまでしても勝てないであろう、かつての自分と同格のもの巨大不明生物達に畏怖を覚える。

——だが、

「うおおお——つ！61式戦車改じゃない！」

……なんて、鷹月の興奮気味の声にその畏怖は吹き飛んだ。

——声の発生源では。

陸上兵器ヲタク状態となっている鷹月と。

その鷹月に質問する、海上兵器ヲタクと化した立花が、

「え？61式ってもう60年も前のポンコツじゃあ……。」

「そっちは2000年に退役した61式戦車。」

——61式改は退役を免れた61式にUGV化のテストベッドとして、半無人化改造が施されたタイプなの。

だから英語表記だと《Type-61A2「UGV」って呼ばれてるわ。」

「ゆ、ゆーじー……？UAVの親戚？」

「そ。UGV。無人地上車両……遠隔操作で動くバカデカくてミサイルや砲弾を撃て

るラジコンって言えば分かる？」

「あー……」——「なんとなく。」

「一般的には1991年の雲仙普賢岳噴火時のような人が即死しかねない環境でも機動・対応するべく開発されたの。」

——「……まあ、無人兵器の技術やノウハウが日本は浅かったから、結果はお察しなだけで……。」

「あー……」——「失敗したのね。」

「うん、そもそも火砕流が発生してるとような環境じゃマトモに操作用の電波届くわけないから……ね？」

「……結局人が乗って操作するハメになる仕様、と。」

「うん、だから珍兵器凶鑑にも登録されてるのよね……」

「珍兵器……パンジヤンドラムとか扶桑型戦艦とか潜水艦スルクフと同じ扱いなのね。」

「うん。……でもまあ——」——「実際それも怪しいわよね。」

——「ふと、鷹月の声音が反転する。」

「巨大不明生物だかMUTOだか……とりあえず怪獣がいるって事が分かかってしまったら、61式改の存在だ災害派遣って災派用じゃあなくて——

——「最初から、対巨大不明生物戦を想定されてた車輛なんじゃないかって、そう思うわ。」

——「それに同意するように、立花も頷く。」

「……確かにね。言われてみれば、そう考えた方が合点のいく装備が多いのよね。」

——「海自だと、《いずも型》護衛艦とか。」

——「いずも型護衛艦は、ひゅうが型護衛艦の後継艦として建造されたヘリコプター艦載型護衛艦である（そこ！どう見てもヘリ空母とか言わない！いずもは空母の形をした駆逐艦だ！）。」

……「便宜上建造された、と言われているが、実際には改造と言う方が正しい。」

——「事実いずも型は——」——「建造途中に放棄され、モスボール保存

されていた旧帝国海軍紀伊型戦艦3・4番艦（名称なし）の船体に合わせて艦橋構造物を設計・建造した——「帝国艦と自衛艦の混

血艦なのだ。

紀伊型戦艦——とはいえ、建造途中で空母への改造や船体の小型化が成された為に、『準同型艦の改造空母』と呼ぶ方が正しいかもしれないが——の船体が持つ対20インチ装甲という強靱な防壁。

ひゅうが型のものを基に拡張・大型化した、対潜水艦と航空機運用に特化した設備に加えて、静止衛星とのデータリンクと一括情報処理を可能とする頭脳。

そしてドイツより導入した5インチ超電磁単装砲——噂によれば第3世代IS・シユヴァルツアレーゲンのパンツァーカノニアと同じ型のレールガン——という、個艦防衛用にしては過剰な火力を持つ艦装。

——事実上の戦闘航空母艦、それが「いずも型」護衛艦であつた。

「…当時はだいぶと言われてたのよね。運用方法はミサイル護衛艦や汎用護衛艦に守ってもらいながらSH——^{シー}——^{ホーク}60対潜哨戒ヘリコプターの航空プラットフォームとして機能する——だったの、ぶ厚過ぎる装甲とレールガンが明らかに余分だつて叩かれてたし。」

立花の言う通り——それは本来の運用指針と矛盾する。だがそれは、

「まあ対人類戦以外も想定していれば、装甲やレールガンを運用して
る点も、理解できるわよね。」

——その一言で片付いた。
「…でも、他にも理由あるでしょうね。」

——海自は《やまと型》や《きい型》も運用してるから、既存のヘリ艦載護衛艦を運用する為の予算や戦艦組の維持費に食い潰されて作れなくなる…つて事態をどうにかしたくて、予算を極力使わずに作る為に苦肉の策としてモスボールしていた旧紀伊型の船体パーツを使つたつて話…どっかで聞いたわ。」

ふと、鷹月が言う。

それに同意するように立花はうなだれて、

「わくわくする〜、絶対そつちの面もあつたつて。対巨大不明生物戦も考えなきやだけど、当時海軍力を増してた仮想敵国たる特定アジア諸国にも対抗しなきやいけなくて対人類戦も考えなくちゃだつたらうし——…割と苦労したんでしようね…お上さん。」

そう言う。

すると鷹月までうなだれて口を開く。

「そうよねー…いやまあ、日本は防衛費より福祉に予算振ってるから私ら普通に生活できるけどさ…。」

「ねー…：父親が自衛官の身としちゃ防衛費少な過ぎて悲しくてね…予算少ないのはホント悪だわ。」

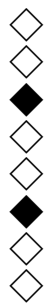
「…：財務省は悪！———コロすべし！慈悲は無い!!」

なにか忍殺の効果音が聴こえてきそうなノリで、2人は息の合ったユニゾンを決めながら言う。

「お前ら仲良いなあ…。」

それを見て、千尋はほのぼのとした顔を浮かべる。

——— 久々に、学生らしい光景を見たような気がしたからだ。



羽田空港・国際線ターミナル

ターミナル内は高さ30メートルに及ぶであろう吹き抜け。

清潔感に満ちた明るい白の床や天井で構成されており、滑走路を見渡せる2階の巨大ガラス窓から入射する陽光によって、解放感溢れる空間となっていた。

——— その隅で、ベンチに腰を下ろしながら会話をする女性が2人とエスコート係らしき屈強な体型の男が1人。

「それ…ホント？」

黒髪をたなびかせる日系アメリカ人の女性が、金髪の女性――

――スコール・ミューゼルに英語で聴く。

「ええ、公開してないけど――ポーランド政府が完全沈黙。中東から新種の巨大不明生物――仮称・イルルヤンカシユが侵攻。こちらはまだ大丈夫でしょうけど、シベリア方面のバルゴンは無理でしょうね。」

……このままだと半年くらい経てば、ロシア連邦どこれか欧州大陸一帯は地図から消えてなくなるわ。」

大国であるロシア連邦が地図から消えてなくなる。

にわかには信じがたい非現実的な言葉だが、今現在の、巨大不明生物が次々と活動を開始し、人間を殺戮あるいは生息圏を拡大させている現状では、それを受け入れざるを得なかった。

「ついでに言うと、中国戦線もマズイわ。巨大不明生物群によって防衛線が崩壊。」

共産党員も政府専用機が事故を起こしてほぼ死亡現在は国粋派と合作派に分裂。内戦で混乱下にあるわ。

まあ今は日本にいる駐日中国大使。彼が指揮権を持っているわ。」
けど、こちらも消滅するのは時間の問題ね。と冷めた客観的で他人事のようにスコールは付け加えて言う。

――さらさら――さらに付け加えるなら、日本では報じられていないだけで今から一週間前にモンゴルも陥落ブラックアウトしているのだ。

……否、モンゴルだけではない。

既に地球各地で巨大不明生物達が蠢き出している。

パプアニューギニアにはカマキラス。

モーリタニアにはメガヌロン。

キューバにはロクムクル。

チャドにも新種の個体。

――それら地域は半ば制圧されてしまっている。

……つまり、それは。

「それにしてもおかしな話ねえ……」

スコールは加虐に満ちた感情に歪み、口角を吊り上げる。

「モンゴル、ウクライナ、カザフスタン、モルドバ、パプアニューギニア、モーリタニア、キューバ、チャド……すでに世界の国が8つ…今朝の時点では21ヶ国も陥落しているのにね。」

でもIS委員会の連中はIS学園でイベントを強行させた。いろんな意味で正気を疑うわ。」

——樽では、それに反対した臨時理事長を左遷して、委員会から理事長代理を送り込んでまで開催したそうだしねえ…。と付け加えながら。

——否。

大規模侵攻により国土の大半を喪った中国やロシア。

ウクライナから侵攻を受けているルーマニアやポーランドなどの東欧。

カザフスタンより侵攻を受けているウズベキスタンやトルクメニスタンなどの中央アジア諸国。

シリアから侵攻されているイランやイラクなどの中東諸国。

それら地域の国々は現在進行系で壊滅している。

既に世界人口の1割以上——10億人以上の人間が犠牲になってすらいる。

…たった一ヶ月で、だ。

たった一ヶ月で10億人が死んだ——まるで出来の悪いSF映画のような話だ。

だが、その出来の悪いSF映画のような事態が現実となっている以上、もはや現実逃避は許されない。

「…IS委員会も、そうでもしなきゃ自分達の権力が無くなってしまいうからでしょうね——まあ、そんな事はどうでもいいわ。…」

“ 奴 ” に関しては？」

日系人の女性が問う。

——その瞳には、真剣に取り組もうとする姿勢が見てとれた。

「IS学園と館山市を蹂躪後、別個体…おそらくベツセルング計画で

発生した巨大不明生物と太平洋に水没。」

「——そう……」

「既に日米連合艦隊と国連軍が搜索してはいる。でもあの辺りの海底は地形が複雑だそうだから、かなり困難ね……。」

「——OK、現状は大体分かった。」

ふとそう言うのと——日系人の女はベンチから立ち上がる。

「とりあえず私はランドー・ヤグチに接触する準備をするわ。それで、マキと——ミト・アサクラについて調べてもらう。」

「ええ——頑張つて。」

「Yeah. ……ところで——」

ふと、思い出したように辺りをキョロキョロと見渡したのち——

——スコールを見つめて。

「ZALAはどこ？」

「——さあ？」

EP-48 追憶ト仮想ノ中デ

2021年7月5日午前10時28分

東箱高速自動車道

首都外郭地下トンネル渋谷JCT―芝JCT区間

東京都と新東京箱根市を結ぶ直通半地下高速道路。

そこをIS学園の生徒達に乗せたバスは走行していた。

無論、行き先は新東京箱根市（旧箱根町）。

臨海学校の教室として扱われる事となる場所だ。

そして、IS学園――仮にも国連傘下の国際的な教育機関

のバスが通行するということで、現在東箱高速自動車道はIS学園貸切となっていた。

：故に、IS学園の生徒を乗せた4台のマイクロバスしか走行していない。

4台のうちの1台が、渋谷JCTと芝JCTの中間に差し掛かった

瞬間。

――衝撃が走る。

バスの前輪直下で爆発――そのまま車体前半分は慣性の法則に従い、運転席がトンネル天井部に直撃する。

後続車両も、突発的な襲撃に対応できず、次々とバスは玉突き事故を引き起こしていく。

――全てのバスが停止した瞬間に。

「…^総以前の^具所有^前成^へ?」――

…それを見届けた瞬間、トンネルの物陰より、武装した兵士達が姿を現した。

――腕には、中国特別武装隊の腕章。

兵士達は警戒しつつ一台のバスに近寄り、破損したドアより中へ飛び乗った。

――だが、そこで彼らは愕然とした。

…何故ならば、

「^誰もいない…^無人、^だと
没^有人…^没人、

――?」

4台のマイクロバス——IS学園の生徒達が乗っている筈だったバスには誰一人として乗っていなかったのだ。

客席には空の座席。

運転席には、予め定められたルートを走行する為の簡易自動操縦システム。

…即ち、始めからもぬけの殻だったのだ。

…瞬間、照明がバスと兵士達に向けて灯される。

そして、

『凍動くな Freeze!!』

——凜とした声が、拡張機越しに兵士達の鼓膜を震わせた。

…そこには複数機の打鉄を率いた、

『Throw武 away器 and drop捨 theて weapon降。』

——日本国内閣府情報庁・暗部代表にして更識家当主、更識盾無が…！

◆◆◆◆◆

同時刻

東京湾羽田沖

「海だ——!!!」

「なんかシチュエーションは違うけど海だ——!!!」

——現在、IS学園の生徒達は海路で箱根方面へ向けて移動中であつた。

当然といえば当然か、一夏の周りにはいろんな女子がいる。

——だが何故か。今まで存在感を醸し出していた専用機乗り達はその輪の中には居なかった。

…そして、一夏のように社交的に振る舞うだけの元気のない2人——千尋と箒は、共に海を眺めている。

「…あんまり言いたくないんだけどさ。」

千尋が口を開く。

…その口調は気怠げだ。

「…なんだ？」

箒が応えるように口を開く。

…彼女も気怠げな口調。

「…もうちよつと他になんかなかったのかね。艦艇。」

「…文句を言わない。」

千尋の愚痴に、箒が聞き分けの悪い生徒を窘める教師のような声
で言葉を返す。

…そう。今現在、IS学園の生徒達を乗せた船は、ただの船ではな
かった。

—— 欧州連合極東派遣軍ドイツ連邦海軍

ドイツチュラント級装甲艦

【アドミラル・グラーフ・シュペー】

…それがIS学園生徒を移送している船であった。

「…新箱根の湖尻基地まで向かうから、ついでに乗せさせて貰ってる
んだ。文句を言うなんて言語道断。現地到着まで1時間と45分、野
ざらしになるだろうが我慢するしかあるまい。」

…箒の言う通り、IS学園の生徒達はドイツ海軍の装甲艦をヒツチ
ハイクして箱根に向かっていている最中なのだ。

出発直前にバスの不備が発覚した為に急遽、荒川運河——

墨田大火災による地盤侵食で沈下した荒川を利用した、八広駐屯地と
東京湾を繋ぐ運河—— に停泊していた、アドミラル・グラ
フシュペーに乗船させてもらうこととなったのだ。

…が、急な乗艦であるが故に、当然部屋は無し、甲板に野ざらしに
されることになってしまふ—— という事実直面していた。
例年を上回る、うだるような暑さと日陰がない中で2時間近く野ざ
らし—— それは当然過酷を極めるだろう。

…そんなわけで、2人は気分がとてつもなく落ち込んでいたのだ。

(海か……………)

暑さを頭から掻き消すように――少し千尋は思考する。

：千尋――ゴジラ――にとって、海とは複雑な印象を齎すものだった。

ありふれた光景。

季節によつては多くの生命を陸にまで齎す場所であり、多くの生命を薙ぎ払う天災を産む領域。

――時代によつて、異郷異種のモノがやってくる境界。

それが千尋ミレニアムゴジラだったものにとつての海への認識。

だからこうして、のんびりと海を眺める事は何処か――奇

妙な感覚だった。

：ふと、視線をずらすと――海ほたるパーキングエリア沖

から、東京湾奥を直指して航行する艦船。さらに沖合には、横浜方面に向かうと思しき艦影が視界に写る。

「――あれは……」

千尋が呟く。

――手前の船団は、

クルド自治区の旗を掲げたタンカー。

オーストラリアの国旗を掲げたクルーズ客船。

ブラジル海軍の輸送揚陸艦アルミランテ・サボイア。

同軍の汎用輸送艦ガラパリ、タンバウ、カンボリウーの3隻。

インド海軍のドック型揚陸艦ジャラシユワ。

――国も地域も人種も組織さえも違う、多国籍混成船団で

あつた。

：共通点があるとすれば、それらはいずれも輸送能力に特化した艦船ばかりであるということ。

――つまり、積荷は。

「……おそらく、ユーラシアやその他大陸からの避難民を乗せた船団：
だろうな。」

箒が紡ぐように口に出す。

：現在、ユーラシア大陸の戦況はもはや好転しようもない程に悪化の一途を辿っていた。

そうした中、国家はもちろん、国民が海外に避難するというのは当然の流れと言える。

おそらく東京湾に集結してきた船団も、そうした理由からだろう。「…受け入れ先、あるのか？」

「関東だけで、アジア諸国人を対象に東京郊外と千葉県、埼玉県、群馬県に点在する外国人街を難民キャンプとすることで受け入れることを承認しているそうだ。…最も、関東だけでは足りないから、今後は過疎地域の東北などにも受け入れ地域は拡大するだろうが」というか、多分そつちが本命だろう。関東圏への受け入れは、あくまで一時凌ぎに過ぎない可能性が高い。

…一応、ブラジルからの避難民は、静岡県や愛知県が受け入れると言っていた。…あそこは元々、ブラジルからの出稼ぎ労働者が多く住んでいる地域でもあるから、ブラジル銀行の支局もあるし、ブラジル政府が経済基盤の移転先としても検討しているらしい。」

千尋の問いに、箒は回答する。

…彼女の視線の先には、横浜方面に向かうと思しき、

ドイツ海軍グラーフツェッペリンⅡ級揚陸母艦。

同軍改ビスマルク級航空戦艦。

同軍旧式駆逐艦。

同国の超大型客船や自動車運搬船。

フランス海軍ヘリ空母ジャンヌダルク。

——から成る船団。

「…つてコトはアレも…」

「——欧州からの避難民を乗せているんだろうな。…横浜市都筑区には、ドイツの避退租借地が、東京都新宿区の神楽坂には極小規模だがフランスの避退租借地が置かれているワケだから。」

——元より、今千尋達が乗っているアドミラル・グラーフ・シユペーも、先日横浜市にドイツ避難民を乗せて来た艦だ。

…欧州では、各国の国民・政府機関・生産拠点・経済基盤・文化財産のアメリカ大陸ならびにアフリカ、アジア諸国への退避を目的とした大陸規模の集団疎開——「ダンケルク作戦」が発動中であ

り、現在日本に集結中の欧州諸国艦船も同作戦に基づき、アジア諸国方面に国家基盤を疎開させていると推測する事は容易な話だった。確実に人類世界は崩壊に転がり落ちていつている———その事実を、嫌でも認識させられる。

「…悠長に臨海学校なんかやってる場合ではないな…。」
箒が言う。

それを、

「まあ、良いんじゃないか？たまには息抜きとか大事だし。」

千尋は、まるで励ますように口にして、

「———今日まで、色々あったんだし。」

———回想した。



———24日前。

6月16日午前12時50分。

八広駐屯地国連軍管轄区（国連軍墨田基地）

第3演習場管制室

———無様、という言葉を表すならば、この状況が当てはまるのだろうか。

管制室のコンソールを操作している真耶は思う。

隣に立つ千冬は頭を抱えており。

その隣に立つ———ロリシカ陸軍教導派遣将校の肩書きを

持つエリザという女性は苦笑いを浮かべるしかなく。

そのまた隣に立つ———特生自衛隊教導派遣将校のまリモ

は、

「———酷いな。」

一言で両断し、

そのまたさらに隣に立つ——ドイツ連邦陸軍臨時教導派遣将校となったユリアは、呆れからか、完全に無我の境地。

同じくドイツ連邦陸軍臨時教導派遣将校のエミーリアは、

「話にならない……これでは弾除けとしてさえ役に立たないわ……。」

——もはや本音を包み隠すことさえ辞めたどころか、味方とすら見ていない始末。

——その片隅で、「もう少し大目に見てやってくれ」と言わんばかりに硬く見つめる、国連軍教導将校ことジョージ・ハミルトンと、陸上自衛隊派遣視察将校こと鷹月仁ら、保護者組。

……どのような反応であれ。

各自の評価がボロクソであることに代わりはない。

“どうしてこうなったんでしょ……”

真耶は現実逃避でもするかのように、黄昏ていた。

——30分前。

八広駐屯地・国連軍管轄区画

在日国連軍墨田基地——第3演習場

見渡す限り、剥き出しの土壤に背の低い雑草が生えている。

他にあるものとすれば、敷地内に点在する杉の木と障害物たり得るコンクリート壁。

——周囲に森林が無く、代わりに観客席があれば、タツグ

トーナメント時の第2アリーナと酷似している環境。

敷地面積はおよそ東京ドーム1個分と同等。

周囲には、防音の緩衝材として活用するつもりなのか、森林地帯が広がっている。

——墨田大火災で焼け落ちた墨田区とは、荒川を挟んだ対岸に位置する葛飾区。

火災後に深刻な土壌汚染が起きた——という名目で、国連軍の管理下に置かれた地。

そこで今、IS学園の生徒たちは実習に励むこととなっていた。

「ではこれより、実習を開始する！」

千冬の号令が響く。

「今回行うのは再編された1組と2組の技量演習。

：つまりいつもと同じだ。」

——千冬の言葉はどこか重い。

それもそのはずだ。

今回授業を受けるのは1組と2組ではない。

再編された1組と2組だ。

1組は旧1組と旧2組。

2組は旧3組と旧4組。

：先のIS学園防衛戦、延いては第二次日本本土防衛戦。

それで、多くの生徒も犠牲となっている。

下級生は不幸中の幸いと言うべきか、1人も犠牲者を出す事は無かった。

だが——その事件で刻まれた心傷トラウマは死に触れた者もそうでない者も皆等しく。

半数以上の生徒が転校する——という事態に陥っていた。

それにより、IS学園1年生は本来いた160名という数から、

新1組は旧1・2組合わせて32名。

新2組は旧3・4組合わせて30名。

——合計62名。

全体の4割程度の人数にまで激減していた。

…だが、去ることを選ぶのは、ある意味当然だったのかも知れない。
忘れられがちだが——ISとはスポーツだ。

スポーツを学びに来ていたにもかかわらず、突如として戦場に巻き込まれてしまえば。

——誰だって、逃げようとする。

“だって、普通は死ぬのつて嫌だもんな。痛いし苦しいし——
怖いし。”

そう——新1組の一人である千尋は思う。

ふと、手を引っ張られる。

…振り返ると。

「千尋、ちよつと。」

——箒が千尋の手を掴み、「すぐ来てくれ」と言外に告げていた。

背後では未だ千冬が説明を続けている。

だが、2人に叱責は飛んで来ない。

つまり、千冬からも「生徒」ではなく「駐屯地職員」として行動することを求められているわけで。

「——訓練用に納品された機体を起こすの、手伝ってくれ。」
「ん。」

——箒の視線の先には。

ISの輸送・格納用コンテナが8つ並べられている。

…そしてそのコンテナの前に、見慣れた機体——タッグ

トーナメント時に世話になった、試製16式統合機兵「打鉄甲一式」——
——が待機状態のまま鎮座していた。

「山本三尉たち整備班の技術を疑っているわけじゃないけどさ。大丈夫なのか？この打鉄甲一式。」

中古化していた予備パーツの塊に、無理矢理正規量産型の新規パーツを繋いだ代物だろ？」

「——贅沢を言うな。タッグトーナメント後の一件で、お前の機体は文字通り木っ端微塵、私の機体はオーバーホール必須だつにもかかわらず状況がそれを許さず連戦したせいで金属疲労が限界を

超えてお釈迦になり廃棄処分決定。

予備パーツを組合わせて、そこにIS打鉄の統合機兵化用のパーツから足りないぶん分けてもらったりで、ようやく動かせる統合機兵を2機確保できて——と、恵まれてる方なんだからな。」

打鉄甲一式を纏いながら、千尋がつい口に出してしまった不満に、同じく打鉄甲一式を纏っている途中の箒が釘を打つ。

——あのIS学園撤退戦の中で、

千尋の打鉄甲一式は、ゴジラの尾の直撃で粉碎され、中枢機能を除いて大破・喪失。

箒の打鉄甲一式は、修理よりも破棄した方が安く済む程のダメージを蓄積してしまった為に破棄。

今ある機体は箒の言った通り、予備パーツと足りないパーツを正規量産型の機体から回してもらおう形で補完し、組み合わせたもの。

ほとんどパーツは同じではあるが、中古パーツと新規パーツのツギハギなのだ。

千尋の言う通り、どこかで不備が起きる可能性もあり得る。

だが——今はこの恵まれた状況と、動けるように仕上げてくれた整備班に感謝する以外に無かった。

そして今、このコンテナに封入されているのは、

——コンテナの蓋が開く。

武士の甲冑を思わせる無骨な全身装甲^{フルスキム}。

そのシルエツトは全身に施されたワイヤーカッターによって鋭角的なものともなっている。

背部には、拡張領域に入り切らない兵装を外部搭載可能とする兵装担架。

腰部には、推進用の主跳躍ユニットが1基、その左右に姿勢制御用の小型跳躍ユニットが2基。計3基の跳躍ユニット。

頭部には、衛星データリンクにも対応するべく搭載された、ユニコーン・マスト。

——中に鎮座しているのは、

試製16式統合機兵打鉄甲一式…その、正規量産型である、

——21式統合機兵「打鉄改一型」。

「昨日の今日で完成して、今朝方ここに納品されたばかりの新品らしい。」

統合機兵を収めている門型拘束具ごと、機体をコンテナから引出しながら、箒は言う。

確かに、パーツは見る限り新品だ。

だが千尋はそれよりも、

「昨日の今日で間に合ったのは嬉しいけど……IS学園より優先して配備すべき場所があるんじゃないか？」

例えば——富士教導団とか、習志野の第1空挺団とか、九州の水陸機動団や西部普通科連隊とか……。」

……そう思う。

たかが訓練学校であるIS学園より、ある程度新型装備が求められる現場、ないし部隊の方が優先されるべきではないかと。

それを見透かしたように箒は、

「ああ、当然だ—————それでもう実施されてる。

昨日から倉持技研つくば製造工場、府中製造工場、碧南製造工場、東大阪製造工場、鹿児島製造工場、宮城峡製造工場……全国7ヶ所の工場でノンストップで生産体制に入っている。

今朝の段階で既に80機弱がロールアウト。

うち50機———1個歩兵小隊分が既に九州方面、16機———

2個歩兵分隊分がそれぞれ富士教導団と第1空挺団に1個歩兵分隊ずつ。

残った8機が国連の訓練用に納品……と、そんな感じだ。」

……千尋と箒が纏っている打鉄甲一式2機以外の打鉄改一型8機は国連軍用。

日本は先の日本本土防衛戦で対応が遅れ、国連軍に多大な被害を齎らしてしまった。

……だからその謝罪も兼ねてなのか、最新鋭機が配備されている。まあつまるところ、配備されたのは在日国連軍であつて———

— I S 学園ではない。

I S 学園は国連軍からさらに統合機兵を拝借する形で、訓練を可能としていた。

…そう、理解する。

「— 新たに改一型が配備されるまでは、打鉄を統合機兵… 改一型にアップグレードした中古機32機を在日国連軍で使ってもらう… そうだ。」

— 新品を横取りしているようで誠に申し訳ないがな…。

と箒は付け加えて言う。

言いながら2人は全ての打鉄改一型を出し終える。

それと同時に、千冬の説明は最終局面に至っていた。

「今回は機体連動型VR訓練だ。」

打鉄、ラファールリヴァイヴ、その他一部を用いて各グループごとに別れ、全てのグループが同じ内容の訓練を行う。

また今回より、本格的な実戦——対人類戦はもちろん、対生物戦を想定した動きを学ぶべく、自衛隊・国連軍・在日米軍からも教官をお招きしている。

私以外にもしっっかり聞き、みっちりシゴいて貰え!!」

千冬の声に、生徒達は気圧されながらも視線で『了解』と応える。

「よし—— ではいつも通り、4名の各グループを作れ！」

その声で、

「さて、さっさとグループ組むかね…」

千尋はそう呟いて。

— 頭に軽くチョップが入る。

「あ痛て。」

「馬鹿。お前は私と同じ班だ。」

少し、照れているのか頬を赤らめながら口にする。

— 久しぶりに照れている顔を見た。

それが可愛くて、

「なんだ、妬いてるのか？」

— 思わず弄ってしまう。

「な×か、勘違いするなよ!??わ、私はその…お、お前一人にしておく
と、周りも大変かなくと思つて引き留めただけで…!

け、決して一緒に居たいとかそういうのではないからな!!」

それに箒は、もはや典型的、あるいは様式美とも取れる――

―由緒正しきツンデレの反応を取る。

だからさらに弄つてみたくなり――その、刹那。

「ふばうツ!」

スパーーーン!!と、懐かしい音と痛みが2人の脳を震わせた。

「――貴様ら、グループを作れとは言つたがイチャつけとは
言つたらんぞ…!!」

わなわなと口角を吊り上げながらも震わせた笑みの千冬が言う。

久しぶり過ぎるその痛みに2人は頭を抱えようとして――

―顔を見合わせる。

" " 織斑先生の出席簿アタックつてこんなに痛くなんか無かつ
たつけ?" "

とでも言いたげに。

…それに千冬が抱いた感情は、更なる怒りでもなんでもなく、懺悔
めいたものだった。

考えてみればこの一撃など、もはや2人にとっては擦り傷なのだろ
う。

――先の戦闘で幾度も死に触れる程の傷を身体に負わせ
たということでもある。

…そして、それに巻き込んだのは――紛れもなく、自分達
で。

だから申し訳なさに満ちた感情が溢れてくる。

だが、感傷に浸る時間はない。

――故に、

「……さっさと配置につけ。」

…そう告げるしか、無かった。

それを察するように2人も、「了解」と応えながら、演習場へ駆けて
行った。

そして2人は、打鉄甲一式のVRモードを起動し——
「…うわ、今回は森林かよ。」

…改めて視界を確認する。

周辺には、同じ1年生の班があり。

——周辺は鬱蒼とした樹海へと変貌していた。

主カメラをVRモードからリアルモードに切り替えると——

——先程の、第3演習場が映る。

つまり、この樹海はVRユニットが地形情報を基に構築した、仮想空間。

——リアルタイム連動型VR演習システム。

近年陸自でも採用されている、訓練プログラムだ。

今回はそれをISの訓練用に落とし込んだだけ。

内容は至極単純。

実際にISを纏い、VRシステムを装着した上で網膜に投影される仮想戦闘プログラムに対し、実際に身体を動かしながら対処・戦闘する。

——というもの。

加えて言うならば、ただ網膜に戦闘プログラムを流すだけでなく、装着者の動きや地形・位置情報に応じて内容がリアルタイムで変化する仕様だ。

実戦装備を使うことなく——最も実戦に近い戦闘訓練を実施出来るという点では、優れた訓練システムだった。

なので今回使う装備は、

銃器に関しては赤外線照射型模擬ライフル。

長刀に関しては硬化プラスチック製演習模擬刀である。

…分かりやすく言うならば、銃弾や斬撃の代わりに——
レビのリモコンのように赤外線を飛ばしている、と言うもの。

また、赤外線照射機構は当然ながら電力を喰うため、シールドエネルギーギアで充電するか、あるいはマガジン^{バッテリー}を装填するか。

そのいずれかで行うこととなる。

…とはいえ、全ての火器が赤外線照射型というわけではない。

グレネードランチャーやロケットランチャーのような爆発物を取り扱う兵装。

重機関銃や20mmを超える大口徑の兵装。

…それらはペイント弾が使用される。

「なんでこんな面倒くさい訓練プログラムなわけ…?」

「はあ…IS学園の訓練プログラムのほうが楽し爽快感あつたよね…。実弾撃ちっ放しだったし。」

何処かで女子たちの声がする。

治外法権区のIS学園ならいざ知らず、

——生憎、日本では実弾訓練など中々出来ないのだ。

空自のPAC-3パトリオットミサイルでさえ、国内では実弾訓練が出来ないが故に、実弾訓練を行う為にアメリカのヤキマ演習場（ワシントン州所在）まで足を運んでいるなどは有名な話——そしてそれは、兵種上、機械化歩兵に分類されるISや統合機兵も例外ではない。

…まあ、これは世間一般的な知識ではないから知らない者も多くて当然だろう。

——それを尻目に、

「——」
千尋と箒は、無言で装備の再確認を開始する。

—————
打鉄甲一式（予備2番機）

—————兵装

《右主腕》
ライトアーム

20mm携帯型回転式多砲身機関砲（模擬弾）
インフラレッド・ダミーパイル

赤外線展開型模擬固定打刀
インフラレッド・ダミーライフル

《左主腕》
レフトアーム

赤外線照射型模擬ライフル
インフラレッド・ダミーライフル

演習模擬固定打刀
ガンボット

《兵装着鞘》
ガンボット

（右1）演習模擬近接長刀

(右2) 重MAT (模擬弾)

(左1) 赤外線照射型模擬ライフル

(左2) 110mm個人携帯対戦車弾 (模擬弾)

《拡張領域》

バッテリーマガジン

バッテリーマガジン

バッテリーマガジン

20mmペイント弾弾倉

20mmペイント弾弾倉

110mm個人携帯対戦車弾予備弾頭

110mm個人携帯対戦車弾予備弾頭

110mm個人携帯対戦車弾予備弾頭

――――

∴そう、網膜に投影される。

それを見ながら千尋は、拡張領域に入り切らず、無造作に保持していた演習模擬近接短刀を2本、赤外線照射型模擬ライフルに着剣させ、銃剣付きライフルへと変貌させる。

ふと、データリンクで接続されている筈の機体情報が網膜に投影される。

――――

打鉄甲一式 (予備1番機)

―――― 兵装

《右主腕》

演習模擬近接長刀

演習模擬近接短刀

《左主腕》

赤外線照射型模擬ライフル

演習模擬近接短刀

《兵装着鞘》

(右1) 57mm対獣狙撃砲(模擬弾)

(右2) 赤外線照射型模擬ライフル

(左1) 演習模擬近接長刀

(左2) 重MAT(模擬弾)

《拡張領域》

クオンタムホルダー
バッテリーマガジン

バッテリーマガジン

バッテリーマガジン

バッテリーマガジン

57mmペイント弾弾倉

57mmペイント弾弾倉

演習模擬近接長刀

演習模擬近接長刀

—————

——— 箒も似たような装備だ。

違いがあるとすれば、箒の方が近接主体の装備であるということ。

そして、唐突に広域データリンクに接続される。

●第1班

??織斑一夏：白式

??谷下カナ：打鉄

??橋隅マキ：ラファールリヴアイヴ

??葛川マオ：ラファールリヴアイヴ

●第2班

??鷹月静音：打鉄

??立花加奈：ラファールリヴアイヴ

??夜竹さゆか：打鉄

??岸原理子：ラファールリヴアイヴ

●第3班

??相川清香：打鉄

?? 谷本癒子：ラファールリヴァイヴ
?? 金田梨沙：ラファールリヴァイヴ
?? 国津玲美：打鉄

● 第4班

?? 榎灘神流：打鉄
?? リー・チ・ホウオン：ラファールリヴァイヴ
?? テイナ・ハミルトン：ラファールリヴァイヴ
?? 梅川美嘉：打鉄

(中略)

● 第8班

?? 篠ノ之箒：打鉄甲一式
?? 篠ノ之千尋：打鉄甲一式
?? セシリア・オルコット：ユリウス
そう視界に投影されて――

「あ？オルコット？」

まさか居るとは思わなかった為に、千尋は面食らったように口を開く。

それを窘めるように背後から、

「――失礼ですわね、千尋さん。」

そこにはお嬢様然と――は、しておらず。

そこにはまるで、男装の麗人か。

あるいは騎士を連想させる――表情を浮かべたセシリアが統合機兵《ユリウス》を纏って立っている。

「せっかくわたくしが組むというのですから、もう少し喜んでもよろしいのでは――というのは冗談にして、よろしくお願い致しますわ。」

――それに、後ほどみっちり聴きたいこともありますので。

そう、言外に告げる。

…セシリアは。

日常を謳歌する為の貴族としての人格から戦闘に特化した兵士と

しての人格に切り替わったように——ガラリと、雰囲気も声
音も変遷していた。

…こうなると逆に頼もしい。

「——ああ、よろしく。」

応えるように、データリンクが接続される。

「私からも、よろしく頼む——簪も居れば、もう少し心強い
のだが…今は仕方ない。」

少し簪は残念そうに。

それにセシリアも同意するように。

「はい——。彼女は国連軍に行ってしまったからね…せ
めてわたくしが本国に帰る時まで——バディを組んでい
たかったのですが…。」

セシリアも落ち込んで言う。

——IS学園の生徒を八広駐屯地に収容した翌日、簪は国
連軍にスカウトされる形で学園を去ったのだ。

なぜスカウトされたのかは知らないし、分からないが
おそらくはその技術力を買われたのだろう。

——閑話休題。

この話題を断ち切るようにセシリアは、

「——とりあえず、機体情報をお渡しいたしますわ。」

そう言うなり、千尋と簪の視界にユリウスの機体情報
装備している兵装の情報が投影される。

ユリウス

——兵装

《右主腕》
ライトアーム

57mm対獣狙撃ライフル（模擬弾）

プログ・インターセプター

《左主腕》
レフトアーム

シエルツェン（訓練用）

プログ・インターセプター

《ガンポッド
兵装着鞘》

- (右1) プログモードビット
- (右2) プログモードビット
- (右3) ミサイルビット (模擬弾)
- (左1) プログモードビット
- (左2) プログモードビット
- (左3) ミサイルビット (模擬弾)

《拡張領域》
クオンタムホルダー

赤外線照射型模擬ライフル
インフラレッド・ダミーライフル
赤外線照射型模擬ライフル

- バッテリーマガジン
- バッテリーマガジン
- 57mmペイント弾弾倉
- 57mmペイント弾弾倉
- ミサイルビット (模擬弾)
- ミサイルビット (模擬弾)

「相変わらず重装備だよなあ……おまえの機体。」
千尋が、バンツァーファウスト個人携帯対戦車弾^{III}の確認を行いながら、ユリウスのデータを見て口にする。

ユリウスのガンポッドは数が多いだけでなく、打鉄甲一式のようにライフルや長刀を収める汎用性を高めているものであるのに対し、B T兵器の運用に特化した配置——ユリウスの基となったブルー・ティアーズを彷彿とさせる運用——となっていた。
「ええ。機動砲撃戦と制圧支援砲撃が運用コンセプトにある機体ですから。」

———「というか、お二人も重装備では？」

「いや、戦術機などに比べれば私達はまだ軽装———」
箒が言いかけて、

』ではこれより訓練内容を説明する。』

千冬の通信がそれを遮る。

『内容は、敵勢力圏からの離脱。演習場最端——VR上では味方陣地となっている地区を目指し、諸君らには障害物を突破してもらおう。』

：——なお、本訓練にはポーランド撤退支援作戦の「カンピノス森林戦」のデータが使用されている。実戦に近い環境に置かれると心掛ける。

——では、訓練開始！』

：そう告げるなり、ビー、という訓練開始のブザーが成る。

——改めて三人は戦域図を開く。

——現在地はカンピノス森林のビエルシエ地区。

——その西にある、ロズトカ塹壕陣地に向かって移動——撤退するという内容。

カンピノス森林は、ポーランドの首都ワルシャワ北西部の近郊に位置する国立公園であり、世界有数の大都市に隣接した原生林でもある。

——それはそれとして。

「：森を突っ切ると直線距離で2キロ、舗装された道なりに進めば3〜4キロ。：どうする？」

——戦域マップに目を落としながら、千尋は口にする。

——地図には、障害物のない舗装された道路と、森林だけが映されていた。

——障害物といえば、道路と並行している森林程度であり、進行を拒むものは全くと言って良いほどない。

——そして多くの班が、障害物のない、舗装された道なりに移動を開始している。

『なーんだ。VR訓練って言うからどんなかと思えばただの移動かー。』

『余裕ー。』

『むしろこれクリアできなかつたら恥ずかしいよねwww』

——なんて無線も聞こえてくるが、今は無視する。

「舗装された道路の移動距離、短距離でも未舗装の森林内の悪路——

——移動に要する時間としてはどちらも同じでしょうから、私は気にしませんがお2人としてはどちらが宜しいとお考えですか？」

同じく、無線を無視したセシリアが千尋と箒に問う。

——近道したところで意味はないと考えるが、という言葉
を宿して。

それに2人は——

「森林の悪路。」

——即答。

「え、わざわざ悪路を……？」

その即答ぶりと、意味が感じられない近道を進むという選択肢に、
思わずセシリアは困惑する。

——だが、野戦の経験がある者が言うなら何があるの
だろうと、セシリアは自身を納得させて。

「——分かりました、ではそちらで行きましょう。」

そう言って、3人は森林へと入り込むと、

「へえ、8班も同じこと考えてたんだ。」

第2班^{先客}が居た。

第8班の面子を見るなり、第2班の班長を務めている鷹月が話しか
けて来る。

「2班も悪路に行く選択肢取ったか……」

箒が意外そうに口にする。

「だってホラ————今回って『実戦に近い』内容って言ってたで
しょう？」

「——ああ。」

「……この御時世に对人类戦を教えるとは思えない。だから、その場合
で実戦となると————」

言いかけた瞬間、遮るように網膜に警告ウインドウが展開される。

「——東方より大隊規模の巨大不明生物群接近、距離120
0」

「——さて、実戦に近い環境と前もって伝えはしたが…何人
聞いて理解していたか…。」

EP-49 現状ト進展ト、

6月16日午前12時28分。

——巨大不明生物離岸から2日後。

沖ノ鳥島南方80km——水深4000メートル

国連軍直轄・特務機関「モナーク」所有、

——SSBN-991「NN潜水艦【ムサシII】

光さえ届かない深海。

そこを進む——黒い、鉄の鯨が一隻。

かつては、冷戦時代に日本を主体とするアジア諸国と西側諸国が核シエルターとして運用するために造られた原子力潜水艦「むさし2号」。

冷戦崩壊後はバブル崩壊も相まって売り出される形で喪われ、気がつけば亡国機業の所有艦。

そして今は——アメリカ情報軍によって亡国機業が壊滅させられた今は。

——国連軍直轄巨大不明生物調査特務機関モナーク機関に接收され、NNリアクター搭載艦として運用されていた。

——同艦内・司令室

狭く、それでいて無数の複雑な機械群がひしめき電子音を奏でる——

——艦橋構造物直下にして艦体中央に位置する司令室。

「間も無くマーケティングポイント99に到着します。」

艦橋クルーが報告する。

それに頷く、艦長と思しき大佐の階級章を身につけた男と。

スーツ姿の、明らかに場違いな男。

彼はどこか焦燥気味に——だが口元は、まるで20年程前に別れた恋人と再会するのを楽しみにしているかのように歪んでいる。

——艦長はそれに敢えて触れない。

科学者が変わり者——彼に言わせれば変態——
ばかりなのはいつの時代でも同じ。
もうそれには慣れたからこそ、今は自分の仕事を黙々とすれば良いだけの話。

自分達の仕事——任務は、日本海洋研究開発機構の潜水調査船支援母艦「よこすか」がレアメタル鉱床を調査中に発見した、巨大不明生物絡みと思しき物体の調査依頼。

通常ならば海上自衛隊へ調査依頼が行くのだが、海自は現在、IS学園と館山市を襲撃した巨大不明生物・ゴジラの搜索中。

その為にモナーク機関が調査依頼を引き受け、マーキングポイント99——物体の所在位置——へとムサシIIを潜らせていたのだ。
——ふと、

「マーキングポイント99に到着——各種センサー起動、ライト点灯します。」
クルーが言う。

そして海底の状況を示す、各種センサーとライトによって照らされた複合映像が20インチほどのモニターに映る。

それにスーツ姿の男は食い入るように目にして——愕然とした。

放つ光の向こうにあるのは——無数に並ぶ、骸のような形の頭を持つ異形の鳥たちの数十、数百もの軀の山。

異形の鳥——ギヤオスに似た頭部を持ちながらも、全く別物の外見の軀。

両腕は肘関節より先が剣のように鋭利な刃となっており。

背中から生えている4本の触手らしき器官は鋸のようなハサミ型の機構を持つ。

——ギヤオスと類似点はあるのだが、明らかにギヤオスと対になる存在。

——その骸は、19年前の南飛鳥村で見た、イリスとギヤオス達の古戦場跡を彷彿とさせる。

だが——ここにあるのは全て、イリスだけなのだ。
それも乱雑に打ち捨てられているのでは無い。
…イリスの軀は整然と並んでいる。

——まるで、弔われた死者のように。
——あるいは寝台に並ぶ赤子のように。
——もしくは、出番を待つ兵器のように。

視界に入るだけで400体は下らない——イリスの群れ。
スーツ姿の男はモニター越しに映る異形の鳥たちの骸を見ながら
険しい顔をする。

「……博士、ここは——」

その隣で艦長の男が驚愕に満ちた声音で声をかける。

それを見てスーツ姿の男——芹沢は、艦長の言葉を繋ぐよ
うに口を開き、言い放った。

「イリスの、墓場…あるいは——ゆりかご揺籠、か…。」

◇◇◆◇◇◇

6月16日午前12時30分。

八広駐屯地国連軍管轄区（国連軍墨田基地）

第3演習場

1班の後方で地鳴りが響き渡り、思わず振り返る。

「え——…？」

彼女らがこの空間で最後に見たのは、無数の刃が並んだ巨大な口で

——谷下カナ、死亡判定。

——橋隅マキ、死亡判定。

——葛川マオ、死亡判定。

「くそッ！上にながって——…!!」

織斑は咄嗟に急上昇し、すんでのところ回避する。

そしてうなじに雪片を叩き込まんと空中で反転し——

瞬、静止する。

…そこに、響く——レーザー照射警報。

「え?」

そして——遠方より織斑を貫く、音の光槍が。

——織斑一夏、死亡判定。

——第1班、全滅。

、
、
、

——事態は瞬く間に悪化した。

林道沿いに移動してきた部隊は後方から濁流の如く押し寄せた
ギヤオス梯団に轢殺され、ほとんど全てが全滅。

森林は原生の大木が障害となり林道よりは比較的浸透率は低く、侵
攻速度も低下している。

…だが、確実に来る。

バキバキと、人間が枝を踏み折るソレとは遥かに次元の違う音を響
かせ、大木を薙ぎ倒しながら——ギヤオス梯団死の波が迫り来る。

「——全機跳躍開始! 匍匐飛行 NOEで森林地帯を抜けるぞツ!!」

——箒の号令——それで各機は跳躍を開始する。

「い、いやッ!」

だが金田は恐怖で跳躍出来ないまま、走り出す。

ここから逃げ出そうと、走り出す。

「ツ! 跳躍しろ金田! そっちは——」

その先には、センサーに強い金属反応を示す物体群が埋まっていて

「ええ! なんなのよ?!?」

苛立ちと恐怖に染まった金田の声と共に。

——カチリと、何かを踏むような音がした。

「——対戦車地雷源が…!!」

瞬間、爆音と共に大地が吹き飛んだ…！

——金田梨沙、死亡判定。

…同時に、

——第5班、全滅。

——第7班、全滅。

——そう、網膜に投影される。

…このままではこの場にいる全員が死ぬ。

——箒はそう理解させられる。

…だから。

——箒は最後尾に引き返し、その場にいた千尋と共に後方に

——箒はライフルを、千尋はガトリングの砲口を向ける…！

「——後退支援射撃ッ！」

「了解ッ!!」

——箒の号令。

——同時にけたたましい火薬の爆裂する砲声が空を震わせる。

…当たっているかの確認はしていない。

…どのみち効果はあくまで牽制に過ぎない。

——それに今優先すべき事は、味方を逃がすことだ。

「オルコット！鷹月！私と千尋で食い止めるからお前達は味方の先導を頼む!!」

『で、ですが——…!』

——貴女がたの身の安全はどうするつもりだ、とセシリアは言おうとして。

「命令は発した！行けッ!!」

——だが遮るように、有無を言わさない鬼気迫る声で箒は怒鳴る。

「——っ…!」

…当然、たった2機で食い止められる訳などない。

…しかも実戦を経験したのは31人中たったの3人。

…そして大陸での実戦を経験したのは3人中2人。

——どう考えても最初から詰んでいる。

——箒は射撃と全周警戒を継続したまま、戦況図ならびに各班の状況図

を開く。

《各班状況図》

- 第1班、全滅
- 第2班、3名生存・1名死亡
- 第3班、全滅
- 第4班、2名生存・2名死亡
- 第5班、全滅
- 第6班、全滅
- 第7班、全滅
- 第8班、3名生存
- 現在31名中、8名生存

…開始10分足らずで、全戦力の75%を喪失。

普通に考えれば降伏か撤退もの——だが、相手は人間ではない。

故に、『逃げ続けながら殺し続ける』しかないのだ。

「千尋、後退しつつ脚を狙え!!」

——上等だ。

これ以上死なせるものか、せめて後ろの6人だけでも——

…ふと、思考を遮るように警告音が鳴り、戦域マップが投影される。

——それを見て、血の気が失せた。

戦域図には、自分たちの光点グリップに覆い被さるようになり、敵を意味する光点で埋め尽くされていたからだ。

…だが、射撃を継続している梯団は未だ600mは離れている。

…振動計も、地中侵攻の気配はない。

——それが何を意味するか、2人は同時に結論を弾き出し、

「——上だッ……!!」

見上げる。

そこには——鋸山のように、無数の刃めいた歯を並べた口が。

——篠ノ之千尋・篠ノ之箒、死亡判定。

…76秒後。

——第2班・第4班・第8班、全滅。

◇◇◆◆◇◇◆◆◇◇

6月16日午前12時50分。

八広駐屯地国連軍管轄区（国連軍墨田基地）

第3演習場管制室

——それが先程あつたコトだ。

管制室のコンソールを操作している真耶は今一度、各々の面々を見る。

隣に立つ千冬は頭を抱えていた。

ロリシカ陸軍教導派遣将校と特生自衛隊教導派遣将校、ドイツ連邦陸軍臨時教導派遣将校の全員から評価はボロボロ。

——その片隅で、素人に実戦の記録をやらせても仕方ないだろう…と言わんばかりに顔を歪める国連軍教導将校と陸上自衛隊派遣視察将校。

…まあどのような反応であれ。

各自の評価がボロクソであることに代わりはない。

「——まあ、これで大陸の情勢が少しは彼女らも理解してくれたでしょう。」

…ふと、ユリアが呟く。

——それは、世論のほとんどが考えている、『素人でも《世界最強の兵器のIS》を使えば部分的にでも戦局を覆せる』という思想を覆すには十分だった。

…なるほど、つまり今回は敢えて負けて当然という環境に放り込んだのか——そう、真耶は理解する。

…確かにそうだ。

今回演習の舞台となったポーランド首都ワルシャワ郊外の森。

そこはもう、現在は存在しないのだ。

…否。

そもそも6月16日現在は——ワルシャワという都市自体が存在しない。

ワルシャワは6月10日の時点で巨大不明生物に包囲され——
——1000万人近い市民と共に玉砕し、陥落と同時に在欧アメリカ軍と欧州連合イギリス・フランス合同軍団による核攻撃で地上から物理的に消滅したのだ。

今回の演習データの元となったカンピノス森林戦は、巨大不明生物による包囲網が完成する直前の6月9日——ワルシャワから最後に脱出できた部隊が行った、撤退作戦であった。

——生存者307人。

——戦死者1016万人。

…それが、ワルシャワ攻防戦で生き残った人数と戦死者数だ。

——こんな状況下で、自分たちはタッグトーナメントを開催していた。

その事実には、真耶の背筋に悪寒が走る。

…そして、

（——今も…大陸ではそんな地獄が、現在進行形であるのでしようか…？）

——そう真耶は、内心呟いた。

◆◆◆◆◆

同時刻

ドイツ・ポーランド国境

——オーデル川・ブライエン泊地

ドイツ領キュストリーナーフォルラント。

ポーランド領コストシンナド・オドロン。

その両国地域に挟まれた国境河川。

そこにはドイツ領を挟むように、大型艦艇8隻が展開可能な泊地が形成されていた。

オーデル川防衛整備計画——ウクライナおよびポーランドの陥落を想定したドイツ連邦軍の防衛配備計画——により形成された人工の湾港には、黒鉄の牙城が浮かんでいた。

……ここに。

戦艦

「グローサー・クリュフルスト」

「グナイゼナウ」

巡洋艦

「リュッツオウ」

「ウンゲドウルト」

装甲フリゲート艦

「ガルスター」

「リーデル」

——から成るドイツ連邦海軍第3機動群第5砲術戦隊と、

フリゲート艦

「ゲネラウ・カジミエシュ・プワスキ」

「ゲネラウ・タデウシュ・コシチュシユコ」

——から成るポーランド海軍オーデル川防衛臨時編成艦隊。

それら2艦隊と、ブライエン泊地より下流へ20キロ下った先——
ドイツ領レチン泊地に展開している、

巡洋艦

「ロサンゼルス」

「デイトン」

ロケット砲艦

「GB—004」

「GB—005」

「GB—007」

「GB—019」

——から成る、在欧州アメリカ海軍のオーデル川支援臨時艦隊。さらにそこから下流に60キロ下ったシユチェン近郊の泊地に、戦艦

「ニューハンプシャー」

ロケット砲艦

「GB—008」

および

戦艦

「ネルソン」

「レナウン」

——から成る、在欧州アメリカ海軍並びにイギリス海軍のシユチェン駐留艦隊。

それら4艦隊が展開していた。

この戦区では各艦隊が連携することで、ポーランド撤退作戦の支援ならびにオーデル川の防衛は実現している。

：その中で、ブライエン泊地は最重要防衛拠点となっていた。

なにしろ、オーデル川沿岸部の多くは丘陵地帯が広がっている中、ブライエン泊地の対岸——コストシンナド・オドロンより東のポールランド領は、オーデル川に注ぐバルタ川沿いに直線距離にして100 kmにも及ぶ平野が続いている。

：そしてギャオス陸棲種は平野部を好んで侵攻する習性がある。

加えて、市街地に対して集中的に侵攻する——仮説ではあるが、渡り鳥のように電磁波に反応する為に、電磁波が過密な都市部を狙うのではないか——という習性も持つ。

このことから、ビスワ川防衛線を突破した個体群は、旧ビドゴシユチ市街を経由してブライエン泊地方面に侵攻して来ている。

：何しろ、ブライエン泊地の後方、60 km西方には。

——ヨーロッパ有数の大都市にして、ドイツの首都である、ベルリンが存在しているのだ。

世界標準時間午前3時10分。

ブライエン泊地

ドイツ連邦海軍第3機動群第5砲術戦隊旗艦
戦艦「グローサー・クリュフルスト」

——同・艦内。

ガラス越しに砲声が木霊する艦橋。

その中はやはり、緊迫した空気が張り詰めていた。

「ゴジユフヴィエルコポルスキ要塞、防御戦闘を開始——ギヤオス
梯団先鋒、当防衛線到達まで50分弱……！」

通信士の報告が響く。

それに艦内の緊迫感は更に際立っていく。

ふと、マグカップに入れたコーヒーをぐいと飲み干しながら、グ
ローサー・クリュフルスト艦長は東の地平線を睨みつけた。

「——砲術長、貴様の砲員達は敵がどれだけ近づけば命中弾を叩き
だせる？」

そしてふと、艦長——海軍大佐の階級章を付けた女——は砲術
長に問いかける。

：衛星データリンクも存在する現在では、戦艦の砲命中精度も極め
て上昇した。

だが、基礎的な知識がなければそれも意味がない。

ドイツ連邦海軍が戦艦の運用を再開した当初悩まされた点は、大口
径艦載砲運用ノウハウの衰滅だった。

大戦の時代には空母と航空機、冷戦の時代にはミサイルとロケット
により戦艦はその存在価値を叩き潰され、一時は兵種そのものの消滅
にさえ至った。

それは長年戦艦ビスマルクIIを運用して来たドイツ連邦海軍も例
外ではなく、戦艦の衰退によって砲術運用ノウハウも衰え、ウクライ
ナでのギヤオス発生直後はまともに運用が出来ず、未だに現役の運用
実績がある海上自衛隊やアメリカ海軍の元で再教育するところから
始まった。

そしてグローサー・クリュフルストの砲術員も同様だったが、就役

が遅れた為に砲術訓練は僅か2ヶ月の即席。

一応、補助要員として陸軍砲兵部隊まで乗せているが…正直なところ、不安要素が大きい。

——だが砲術長は艦長の女に対して、軽く告げた。

「…レーダーを用いるなら35000、光学なら27000、戦術機やヘリ、要塞陣地の弾着観測支援があれば39000は可能です。」

「——よろしい、充分だ。」

——マグカップから最後の一滴を口に放りこみながら、そう返す。

「砲術長。敵先鋒が距離40000に到達次第主砲発射準備。発射のタイミングは貴様に任せる。必要なら操舵手への指示、戦術機隊との交信も許可する。遠慮無く連中を叩き潰せ。」

「了解ッ！」

「通信手、僚艦に伝達。距離40,000で攻撃準備。旗艦砲術長の指示に従え、以上だ。」

——彼女の指示により、艦内の緊張はいつしか高揚した戦意へと変わっていく。

…だが、それでも彼女の顔は曇ったままであった。

（——ついにドイツは…最前線国家となってしまった…！）

憂いと不安が内心で荒れ狂う。

だが、嘆いたところでこの戦争が終わるわけではない。

…というか、それで解決するならとつくにそうしている。

それで解決しないのだからもう——現状を受け入れるしかない。

…最も——

「ただでやられるつもりは毛頭ないがな。」

そう呟くと同時に。

「ギヤオス梯団、距離40000——切ります!!」

「全艦砲撃戦準備！砲術長、主砲装填。弾種、DM93対獣爆裂徹甲弾。」

——リュッツオウ、ウンゲドウルトには203mm対艦徹甲弾。ガルスター、リーデルには対艦ミサイルを撃たせろ。

要塞陣地の砲撃開始と同時に一斉射！」

「了解！」

——東欧の戦況と欧州全体の戦力や兵站を鑑みれば、この戦線はよく保って1ヶ月から3ヶ月。

つまり、陥落は必至だ。

なにしろ——

…ポーランドにおける米露両国の過飽和絨毯核迎撃戦。

…ロシアのムルマンスク方面への大規模疎開と、各戦線からの離脱。

…中欧、西欧、南欧で展開されている5億人の大陸脱出作戦。

…ポーランド陥落によるドイツ領へのギャオスの大規模侵攻。

——そうなる要素が多過ぎる。

だが嘆けど事態は好転しない。

今は、ただ自分達に出来る事に全力を尽くし、一人でも多く生き残れるようこの戦線を支えること。

——それだけに集中する。

「——オーデル・ナイセ要塞線、対地面制圧砲撃を開始！」

それを合図に、彼女は裂帛の号令を打ち鳴らした。

「——Abschießen撃ち方始め!!」

直後——幼き巨艦は異形の群れに、鉄火の咆哮と共に牙を剥いた

…!



茨城県つくば市・在日国連軍つくば基地

国連軍が駐留する基地。

横田基地のバックアップも兼ねているらしく、在日国連軍の中では極めて大きな施設だった。

また、当基地はモナーク機関の実働隊であり、巨大不明生物——

—— G. U. L. F. (Giantic Unknown Li-
femeasures Frame) 戦に特化した、
Gフォース——Anti G. U. L. F. Inte-
reception Force——という部隊が配備さ
れている。

——簪も彼らにマルチロックオンシステムのプログラミ
ングの腕を買われ、国連軍にスカウトされたのだ。

故に現在彼女はIS学園仮設校舎を離れ、当基地に配属されてい
た。

——だがそこには、予想外の人物がいた。

「ど、どうして貴女がここに……」

——つくば基地94番格納庫。

そこで簪は思わず声を発してしまった。

……眼前にいるのは、金髪のブロードヘアにウサギめいた雰囲気の少女
——シャルロット・デュノアだったのだから。

「あ——君は確か、日本代表候補生の……えーと、カンザシさん
？」

「そう、だけど——いや、そうじゃなくて！」

どうしてスパイ容疑で拘束されたシャルロット・デュノアがここに
居るのか——そう問いかける。

「あ——…、話せば長いんだけど……」

——そう言っ、て、苦笑しながらシャルは口を開いた。

「——つまり、日本に亡命したけどまだ仮国籍で永住権取得
に至っていないから、日本国籍を取得する一番の近道である在日国連
軍に勤務することになったら、ラビッドスイッチ高速切り替えの腕前を買われて、【M計
画】に参加することになった……と。」

「——搔い摘んで言うとなさなるかな……」

たはは、と笑いながらシャルは簪の言葉を肯定する。

対する簪は、ある種同情を浮かべる。

それはスパイに仕立て上げられた過去があるから……ではない。

——姉と同じように、歳並みの生き方を許されないだろう立場となった事に対して、である。

だがそんな事は気にしていない。

——そう言わんばかりに、シャルは手早くメンテナンスブースのコンソールを叩いて行く。

：彼女が組み上げているものは、彼女がかつて専用機としていたラファール・リヴァイヴ・カスタムで得意としていた高速切り替えラビットスイッチを用いた兵装変更システムである。

現在シャルが弄っている——簪もこれから弄ることになる——機体は、多種多様かつ重量が極めて大きい装備を大量に搭載している。

：故に、装備を切り替えるタイムラグを少しでも減らす為に、高速切り替えラビットスイッチの技術を応用したプログラムを書き込んでいる。

——マルチロックオンシステムのプログラミングを行なった事のある簪には、それが直ぐに理解できた。

「ふう。」

溜息を吐き、プログラミングを行なっていたウィンドウを閉じる。

：どうやら一通りプログラミングが終わったらしい。

「——とりあえずコレが僕たちが開発する事になる……とは言っても後はプログラミングだけど……まあ、関わることになるって点では間違いないかな。」

：国連軍のM計画開発兵器であり、巨大不明生物と拮抗可能な状況まで人類を持つて行く——矛のひとつ。」

シャルが呟くと同時に、ウィンドウが閉じられたスクリーンには、機体の名称らしき画面が映し出され、

M o b i l e

O p e r a t i o n

G . U . L . F .

E x p e r t

R o b o t

A e r o | t y p e

「 M . O . G . E . R . A . . . ? 」

それを見た簪は、各行文の頭文字を繋げて、ふと呟いた。

EP—50 蠢く陰と今人（いまびと）達

7月5日午前9時50分

——太平洋海底

「あんの！女狐エエエエツ!!」

——束の拠点・ムウⅡカイザーライヒ（クロエ命名）。

旧日本海軍の海底潜水艦基地を改造した拠点に、束の絶叫が木霊する。

——昼寝のハズがいつの間にか短期間コールドスリープに処されていた束は、目覚めると、

『貴女とはもうやっていきません。では失礼します。　クロエ・クロニクル改めクロエ・アドルガツサーより』

——その置き手紙が視界に入った。

∴天災は瞬時に助手が裏切ったのだと悟り、憤慨した。

おまけに隠し玉の開発データも根刮ぎ奪われたのか、管理ファイルは全て破壊されていた。

これには束も激おこポンポン丸である。

「ふ——ツ、ふ——ツ、ふ——……落ち着

け、落ち着くんだ束さん。紅椿のデータはある。

なにより——…」

怒りを鎮めるように切り替えた束は自分に言い聞かせ、自身の義手の内蔵型隠しポケットよりピンクのウサギを彷彿とさせる装飾が施されたUSBを取り出す。

「——今、束さんの世界を土足で踏み倒してる害獣どもを駆除するのに一番有力なデータは、この中にある…。」

そう言つて、束はコンソールにUSBを挿し込む。

画面に表示されたデータ群を見て、束は顔を狂喜に歪め、

「——自立思考金属ナノメタルによる補強と植物の再生力をISCコアで統合制御された、機械生命体型インフィニット・ストラトス……【タイプE】^{アイス}が、束さんにはあるんだから——!」

天災は高笑いを浮かべた。

それは世界を救う英雄ではなく。

世界を滅ぼす悪魔ですらなく。

他者を巻き込む疫病神。

だが産み堕とさんとするソレは紛れも無く、荒ぶる神ゴジラに匹敵する――

破壊ノ王であった。

「あ、でもまずは、箒ちゃんに紅椿をあげなくちゃ☆」



同時刻・東京都墨田区

特生自衛隊八広駐屯地・PX食堂

そこでは、後遺症の残る怪我を負った為に、鞍掛基地新IS学園校舎への編入を先延ばした四十院神楽と鏡ナギの両名が座している。

IS学園防衛戦において神楽は左腕を切断し、ナギはシールドバリア破壊事件で右脚の半月骨を喪い、IS乗りへの道を絶たれた。

現在2人は、そのリハビリとして駐屯地に残留していた。

『昨夜、政府と神奈川県は横浜県都筑区にドイツ人居留区に設定すると発表しました。この居留区は巨大不明生物との戦闘でドイツから脱出したドイツ人に割り当てられた地区であり――』

PXの備え付けテレビが映すニュース番組――国際連合

の世界共通報道番組の日本語翻訳版から流れてくる内容を耳にしていた。

「一種の行政特区だけどね。」

ニュースを見ながら、神楽は呟く。

それにナギが食いつくように、

「そうなの？」

「ええ。一応はドイツの法律も適応される租借地という形で進んでる。ようは大使館や領事館みたいな扱いなね。」

その方が――区の主導権がある程度ドイツであった方が、

区内に居留するドイツ人には政府経由でEUから生活保護が降りるだろうし、永住も可能ではあるしね。」

——日本は国籍取得が難しいからって、よく考えたわね。と言いながら。

「ただ国内に新たに国境を作るとなると、元いた住民を強制的に追い出すなんて事態になりかねない。だから主体は日本だけどある程度はドイツの法律を適応する——という形で総務省・外務省・法務省がドイツ政府と協議してる…らしいわ。」

コーヒーを啜りながら口にする神楽は僅かに間を置いて。

「それに、ダンケルク作戦によって都筑区にはドイツ企業——

——食糧生産プラント技術を持つ農業系と食品加工系、IT系…他にもクルップ重工業やラインメタル社など、自衛隊にも関係のある軍需企業も含めて6社が進出しててる。

——いざとなれば、容易く部品や知識ある人材をこちらに派遣することができる。

だから、決して日本にデメリットばかりじゃないではないわ。」

「——ドイツ海軍が横浜に駐留するみたいだけど…」

「横浜駐留軍ね。アレは都筑区のドイツ人居留区防衛の為の戦力。もちろん場合によっては国連軍として自衛隊にも協力する。」

：聞いた話では、予備役の装甲艦1隻、復役した駆逐艦2隻、揚陸母艦1隻が配備されてるみたい。

ただ、駆逐艦2隻は本格的に再度実戦可能となる為に横須賀の米軍施設で陸揚げ整備。揚陸母艦は引き続きダンケルク作戦でドイツ本土から国民を逃す為に帰国の準備中。装甲艦は芦ノ湖整備基地に移動中。

——だから日本における稼働率はゼロよ。」

「ゼロって…」

神楽の言葉にナギは絶句しそうになり、

「——仕方ないわよ。ドイツって陸軍国だもの。四方を海に囲まれた日本と違って、ドイツは三方を陸、海に面しているのは北だけだから、当然陸軍へ力を注がなくてはならないし、海軍は疎かに

なってしまう。

それにドイツ連邦海軍って今はミサイルフリゲート艦が主力だから、ドイツ海軍で駆逐艦といえば、戦時中のものか、2003年に退役して博物館となっていたリユッチェンス級のどちらか。

——整備するにも、余裕がなかったんでしよう。だからその分を日本で行うと：そういう考えなんでしょうね。

：まあ、こつちだつて5インチレールガンを運用させてもらってるんだし、一度退役した駆逐艦の大規模改装や装甲艦への艤装換装程度で済むなら安いものよ。

——これがグローサー・クリュフルスト級みたいな戦艦の面倒を見る、とかだとお手上げだけだね。」

神楽はそう口にする。

——同時に、退役艦を無理矢理復帰させなくてはならない現実にナギは畏怖を覚えた。

：…いつたい、どれほどまで戦場は逼迫しているのか——



午前10時30分・茨城県つくば市

在日国連軍つくば基地・執務室

「——では、米軍・国連軍上層部は朝鮮半島から在韓米軍を撤退させ、在日米軍に編成した際の余剰戦力を在日国連軍に再編成する：というお考えなのですね？」

U・N・F・ | S p o k e s |——国連軍広報部を意味する英語が刻まれた腕章を付け、ゲストIDをぶら下げた立花が口にする。

手にはマイクが握られており、それは当国連軍基地の司令官に向けてられていた。

「ええ。大韓民国軍は済州島に退避した揚陸艦に臨時軍政府を設立

し、半島各地の部隊もそちらに撤退を開始しました。それに、東アジア戦線は大幅な再編が求められていますから。」

無難に応える。

彼の言うとおり、現状の東アジア地域は大幅な配置再編が求められ、そしてアメリカ主導でそれが実施されていた。

「現に、南シナ海のパラセル諸島基地、スプラトリー諸島基地、ナトウナ諸島、東シナ海の沖縄諸島や対馬諸島、ロリシカの樺太といった大陸近傍の諸島部への基地建造を実施しているほか、国連軍のメンテナンスセンターを日本や台湾、フィリピンに設置するなど、今後は大陸近傍諸島を主軸とした防衛体制を確立するという事が国連軍上層部で決定していますからね……。」

つまりそういう事だ。

東アジア方面での大陸の防衛は不可能——そう悟った国連ならびにアメリカ軍は、ユーラシア大陸アジア地域から近傍島嶼部への撤退を始めており、海を挟んで睨み合いを続けるという方針に傾いた、という事だろう。

（まあ理性的に考えれば、そうなるわよね……。）

インタビュウをしながら、立花は思考する。

——戦線が伸び過ぎて、兵站や補給が足りなくなり、ジリ貧に持っていかれる大陸内陸部を無理して維持するより、火力集中投射率の高くなる大陸沿岸部沖合に艦艇を配置し、対岸の諸島部に機甲戦力や戦術機を配備した方が、極めて効率的に、かつ的確な防衛戦を展開することが可能となる。

……もちろん、政治的な理由もあるだろう。

特に極東アジアの大陸側には東側国家ないしそれに準ずる国家しか存在していない。

アメリカ主導の国連軍としては、東側国家の救援も視野に入れてはいるが、基本的には西側諸国の安全保障を優先する——そういうことなのだろう。

……まあ、素人目に見ても大陸はジリ貧なのは分かる。

けど、これは電波に乗せるインタビュウだ。

多角的かつ、公平性の高い情報が必要になる。

——だから、

「そうですか…では、極東の現状を維持することは可能なのでしょうか？」

問いかける。

…それに司令官は苦い表情を浮かべながら、

「——最善は尽くします。しかし結論から言うと無理でしょう。」

特に指揮系統の混乱が生じている朝鮮半島方面の防衛はほぼ不可能に近い。

——よく持って、3日ででしょうか。」

よく持って、3日。

3日もすれば、日本は最前線になってしまう。

立花は思わず目を見開くと共に、仕方ないのだと諦観する。

——朝鮮半島は。

巨大不明生物によって北朝鮮が陥落し、38度線を打通して韓国に侵攻すると同時に、北朝鮮領内の金剛山ダムを破壊。

それによってダム下流に位置していた韓国の首都ソウルに200億トン——波高120メートルもの濁流と土石流が北漢江

を経由して津波となつて38度線を越境。

ソウル中心部に至つては一時的に完全水没し、政府機能を喪失。

さらにソウルに中央集権化が進んでいたこと、地方との通信設備を喪失した事により指揮能力、通信能力を喪失。

侵攻に気付いたのがレーダーや通信などではなく兵士の目視確認という有様であった。

そして残存する各基地に連絡を入れるも、日本からの侵略と勘違いした市民や北朝鮮工作員らによる大規模な暴動によって碌に行動出来ず、さらに巨大不明生物の侵攻速度も相まって、防衛線を引くより領土の失陥の方が早いという有り様だった。

通信指揮系統の寸断。

インフラ設備群の壊滅。

政府閣僚および軍上層部の戦死。

一部の暴徒化した一般人による混乱。

：巨大不明生物の侵攻以外に、それらの問題に見舞われ、もはや朝鮮半島は戦線の維持すら不可能となっていた。

現在は釜山駐留国連軍の支援で辛うじて持ち堪えていたが、それも司令官の言う通り、あと数日が限界だろう。

——現に、在韓米軍は日本本土に撤退後、在日米軍指揮下で北九州戦線や山口県岩国基地に配備されるなど、日本列島への撤退が実施されている。

：これが極東アジア各地で起きて行けば…なるほど、確かに——
——今年中に世界は破滅するかもしれない。

最後にいくつか質問をしながら、立花はそう思う。

——誰かが言った。ヒトは極限状態に追い詰められて初めて結束できるものだ、と。

(…じゃあまだ、その極限状態でさえないってワケ？もう今月までに30億人——世界人口の35%が死んでんのかな)

——インタビューを終えて廊下に出た立花は頭痛を覚えながら、内心呟く。

「立花さん。」

ふと、廊下から声がした。

見れば自分と同じく、広報官の腕章とゲストIDをぶら下げた——
——元IS学園新聞部部长、黛薫子がいた。

そもそも、広報官紛いのことをしているのも、彼女がIS学園新聞部を通じて国際チャンネルへの情報発信サービスを開始しようなんて言い出したからだ。

：確かに、IS学園は一応は国連の組織だし、日本国内のマスメディアの大半が機能不全となっている今では、その発信は支持出来るものだろう。

——最も、密着すべき相手はもっぱら国連軍なのだが。

「極東方面の情勢、どうだった？」

「——最悪、の一言に尽きますよ…欧州方面はどうです？」

「こつちもね……I S学園に教導に来てて、ドイツに帰ることになった軍人さんに聞いたところ、良くない内容ばっかね…。」

——ドイツが最前線になったとか、バルカン半島がヤバイとか、ロシアがウクライナとの国境を2000発近い水爆で爆破して海峡を構築したとか、アメリカが旧ポーランド領で衛星兵器から質量弾爆撃を敢行したとか…とにかく、悪い話ばかり。」

「…もう良いです。聞いてたら頭おかしくなりそう……楽しい話題、なんかして下さいよ。」

「うーん、悪い話ばっかじゃないのよ？欧州連合軍は10年前から検討されてた、PICフロートを用いた【空中機動艦隊】なんてものの投入まで始めたらしくて——」

立花／あたしは溜息をつく。

この人は一度火が着くと、熱意が覚めるまで一切話題を変えようとならない。

——そういえば、あたしらは広報官という立場上行けてないけど、他の子は臨海学校という名目で、箱根の新校舎に引越して行ってるんだっけ…。

空を見上げながら、あたしはそう思った。



同時刻

神奈川県・新東京箱根市（旧足柄下群箱根町）

芦ノ湖南岸

箱根外輪山船舶昇降機・箱根関所出入り口

——ドイツ連邦海軍装甲艦アドミラルグラーフシユペー

「海——じゃ、なアアアアい!!」

「でも海みた——い!!」

「…そりゃ、湖だからな。」

甲板上でぼんやりと風景を眺める千尋は思わず眩く。

相模湾から小田原市根府川地区を経由して、はるばる装甲艦を乗せた船舶用巨大リフトに揺られながら山肌を登ること、およそ7キロ。

終着点である——標高740メートル、箱根カルデラ内に形成された堰止湖である芦ノ湖南岸に到着した。

大半の生徒は芦ノ湖に気を取られているが、

「なるほど、芦ノ湖で直接荷物を下ろせるようにしたただけでなく、湖そのものをモスボールを兼ねた整備基地にしたのか……」
箒が感心したように言う。

確かに、箱根関所跡港には貨物船の他に、アメリカ海軍の旧式艦艇が何隻か鎮座しており、現在改修工事を受けていた。

：海水であれば船体の腐食が進んでしまうが、淡水ならばある程度は抑制できる。

そして現在、ユーラシア近傍諸国への防衛配備計画として、旧式艦を近代化した上で実戦配備する為の整備基地が現地に多く設置されていた。

日本も例外ではなく、琵琶湖運河や霞ヶ浦湖などの淡水湖をモスボール艦近代化改修拠点として整備していた。

ここ芦ノ湖の整備基地は申し訳程度の広さだが、大阪湾・伊勢湾・若狭湾と3つの海に繋がる琵琶湖運河や太平洋と接続した霞ヶ浦湖と比較すれば、海水を完全に遮断できる分、腐食速度は落ちる上に、東日本における整備基地の中では一番水深が深い為、船艇の整備もしやすい。

——何より有事の際に臨時分散首都として機能する新東京箱根市に近いという事もあり、保険として設置されていた。

「…仕舞いには、街が要塞化されたり、紫色のロボットが配備されたりするかもな。」

——千尋は久しぶりに冗談を言う。

それが少し、箒を和ませたのか、

「——なんだそれは…前者はともかく、後者はありえんだらう。」

小さく失笑しながら箒は言う。

「…んで、着いたらどうするよ。まずは泳ぐか？」
基本的に芦ノ湖は急激に水深が深くなる為に遊泳は禁止されている。

——だが鞍掛基地の峠下には、自治体がリゾート施設として再開発した白浜遊泳森林浴場という施設が存在しており、遊泳はそこでなら可能だった。

無論、ここにいる他の生徒達もそこで泳ぐつもりらしい。

「いや、まずは基地に挨拶だろう。常識的に考えて。」

なにを考えている。

という顔で箒は言うので、

「——真面目かつ」

揶揄うように、千尋は口にした。

——この一瞬が続けば、幸せなのに。

そう、心の片隅で思いながら。

EP—51 夏、涼と熱に浸る二人

7月5日午前10時50分

高度2万フイート

「帰って来たぜえええ！ 日ジャアアアツ本！ 束さんは帰って来たア！」

—— 短距離弾道ロケット・ニンジン号に乗りながら、視界に映った日本列島を見て、束は叫ぶ。

「さあ、あとは箒ちゃんに紅椿を渡すだけ！ んく予定より早いけど、仮拠点とか作っちゃうかあー、2日で♪」

ニンジン号は先端部に採掘機構を有しており、それによって地中潜行が可能となっていた。

さらに簡易拠点として使えるよう、各種機材も完備されていた。故に、束はそう決めた。

…だが、その目論見を焼き払うように。

—— 一条の蒼あおが、疾る。

「ぎゃひんツッなっ、な………!?」

突如、爆発が発生する。

蒼の光が、ニンジン号を真下から貫いたのだ。

それで——

「い、今の—— イギリスのレーザー兵器」

そう、理解する。

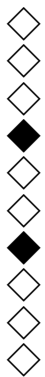
だが直後—— 第二射が叩き込まれ、再び爆発。

瞬間、ニンジン号は紙吹雪のように空中分解した。

…後に残されたのは、海面目掛けて落下する破片と、

「うっぎやあああああああッ!!」

—— 紅椿を収めたコンテナに捕まりながら落ちていく、天災だけだった。



同時刻

日本国領東京都小笠原村・硫黄島

永良部崎沖

アメリカ情報軍航空母艦・エンタープライズ

——同・飛行甲板上

——そこに展開するT S F—22ラプターII戦術機が、2機。

『——命中、天災キャンサーの撃墜を確認。天災本人は海上に落下した模様。』

『——了解。こちらHQ、状況終了。各班は分担して甲板の資材格納作業に当たれ。』

——精密機械で構成された金属コックピットの匣の中に、通信越しの音

声が木霊する。

「ふう、やれやれ

——亡国機業を潰したから大きな人類間の

火種は無くなったかと思っただけど…天災様はまだまだやる気でいらつしやる様ね。」

『…そうね。ねえナターシャ——どうして天災天災本体を撃たなかったの？

イギリス軍から提供されたストライク・バンガードなら、出来たはずよ。」

窘めるように、通信先の女性——ヘックス・オブライン中尉が問う。

それにこの機体の主——ナターシャ・ファイルズ中尉は溜息混じりに返す。

「高度2万フィートからの自由落下よ？下が海でも助からないわ。」

地面への落下より衝撃は少ないとはいえ、高高度からの水面の落下はコンクリートに叩きつけられる事と大差ない。

——それは、人を全身粉碎骨折による死へ誘うには充分だった。

「それにストライク・バンガードなんかで撃つてみなさい。蒸発しちゃうわ。」

そう言つて、ナターシャは視線を現在のラプターIIが保有する装備

に移す。

現在所持している装備は、戦術機や艦載砲用に調整・量産化されたイギリスの新型レーザー装備——ストライク・バンガード。元々、開発中止となつたブルーティアーズに搭載予定だつた、天災のロケットを撃ち落とした兵器だ。

：地球低軌道上さえも射程圏に収める威力を持つレーザー砲なら、確かに天災本体を仕留めるにはオーバークイルだろう。

——また、本装備は銀の福音シルバリオ・ゴスベルなどに装備させれば、低軌道上からの対地支援攻撃が可能となり、戦線の安定化に繋がるとして、現在NATO諸国を中心に配備が進んでいた。

「——分かつてる。でも、あの女は"世界の癌細胞"みたいな生き物よ。……いつか殺さなかつた事を後悔する羽目になるかもしれないわ。』

ヘックスが忌々しげに口にする。

——それが事実となるのは、今より2ヶ月後の話だつた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

同時刻

神奈川県新東京箱根市（旧箱根町）

芦ノ湖南岸・白浜口遊泳場

降り注ぐ夏の日差し。

見渡す限り穏やかな浜辺。

船が作り出す、人工の波。

だがそれらが、擬似的な海を作り出していた。

「すっげ——つーマジで海みたいだア————ッ!」と
叫びたくなる衝動と。

波打ち際目掛けて走り、飛び込みたくなるウズウズを必死で堪える。

既に何人かの女子は芦ノ湖に浸かっている。

「…いや、ガマンだ。ガマン。箒と泳ぐ約束したんだ。一人先走るのは良くない。」

そう自分に言い聞かせ、砂浜に腰を下ろして胡座をかく。

視界には、楽しそうにはしゃぐ女子たち。

水着もどれ着ようか迷ってた、なんて声もチラツと聞こえて来る。

なんだそれ、水着なんか1着ありや良いだろ。

俺なんかロリシカ派兵前に渋谷で買ったやつそのままだぞ。しかも

安いからって買っちゃまった競パン。

…結局今日まで使わなかったけど。

「織斑くーん、一緒に泳ごー。」

視界の端に、女子たちに連れられて水際へと入っていく、ロングスパッツ型水着姿の織斑の姿。

…何故だろう、一般男性が見たら羨ましがる光景のハズなのに、刑務所に連行される囚人に見えなくもない。

てか、逃げられないように数人がかりで両脇ガツチリホールドされてるし。

「……知らんフリしとこ……。」

本能的な危機を感じた千尋はそっと目を逸らす。

——ふと、

「すまん、待たせた。」

「お、箒。」

——背後からの声に振り返る。

「え？」

視界に映ったのは、紅色の生地白いラインの入った、少し、渋めのブラとスカート付きパンツのビキニ——を、身に付けた一人の少女をまつた。

「……あ……。」

——デジャヴ既視感。

それは千尋の今履いている水着同様、ロリシカ派兵前に渋谷で購入したモノだった。

そして千尋の反応はその時の反応をそっくりそのまま再現していた。

…いや、いやいやそれよりも。

あの時は服の上から着た風にしてみるだけだったが——
本当に着ると、こんなにも似合うものなのか。

「ど…どうだ、ろうか…？この水着、買ったのは3ヶ月も前だが、着るのは今日が初めてで……」

恥じらうように、頬を赤くしながら箒は口にする。

「に、似合って——いる、かな？」

不安半分、期待半分という眼差し。

——瞬間、千尋の顔が赤くなる。

そして沈黙。

……白状すると。

この瞬間まで「箒まきと一緒に泳ぐ」というコトがどれだけオオゴトなのか、全く理解していなかった。

箒の裸は見慣れていた筈なのに。

実際にソレを着て、その表情を浮かべる様は——あまりに

初々しく、そして可憐だった。

…そんな不意打ちを食らった脳がマトモに機能するハズなど無く。

「うん、すっげえ可愛い。」

真顔で脊髓反射的に応えてしまう。

「なッ!?おま……ッ!!」

それに箒はさらに顔を赤くして、頭から湯気のような何かが噴き出す。

まるで、頭に活火山でも出来たみたいだ。

——箒らしい紅い水着は、派手過ぎず地味過ぎず。明る過ぎず暗過ぎずのまさに自然体とも言うべき絶妙な色合い。

だがその自然体とは裏腹に、大胆なデザインが箒の平均的な女子より恵まれたボディラインを強調し、ビキニタイプの水着は白い地肌をこれでもかと思せつける。

そして、その露出に反するようなスカート機構が、箒の純潔さを残

している事を表しているようで——見ているコツチにも熱が入ってくる。

「…あ、…あり、がとう。千尋の水着も、似合ってるぞ。」

「…え、あ——よかった、あ、ありがとう。」

恥じらいから復帰した箒の言葉に、煩惱の海から引き上げられる。

…だが、また煩惱に溺れてしまう。

もう容赦なく、言い訳なく、男として——いやもう、雄として目が離せないようなブツが胸にあるのだ。

「め、目のやりどころ——」

滑りそうになる言葉を、噛み潰す勢いで口に閉じ込める。

よーするに、箒の胸に視線を釘付けにされてしまったのだ。

…いやだつてしようがないだろ、だつて箒、いつもはサラシ巻いてるから、断崖絶壁のペツタンコなんだもん。胸。

それが巨豊の双岳になっているのだ。

…てか、若干生地を突き抜かんばかりに乳輪部分の突起までクツキリとシルエツトが見えてるし！

「…？千尋？どうした、トイレに行きたいのか？」

ふと、全く見当違いの質問をしてくる箒。

ああうん、前屈みになって、興奮し荒ぶる俺の俺（意味深）を鎮めようとしているとしてるから、そう質問しちゃうのも仕方ない。

けど違うんだ。箒のその暴力的かつ我儘な身体付きが悪い！

…なんて、理不尽に内心叫んでしまう。

「いや、別に——…あ、そ、そうだ、着替えも終わったし、泳ぐか！」

必死で取り繕った笑顔で、千尋は口にする。

「あ、ああ——だがその前に準備運動だ。」

「えっ？…面倒くさい……。」

「面倒くさくてもやるー！」

「へーい……」

（急に生真面目モードに戻るのやめてくれませんかね…。いやまあ、そのおかげでムスコの昂りも収まったんですが…。）

…なんて内心呟きつつ、まあ準備運動は必要か、と思う。

白浜口遊泳場は、芦ノ湖から遮断された遊泳場だった。

芦ノ湖は平均水深25メートル、岸から2〜3メートル行くといきなり水深10メートル、などといった急に深くなる地形の湖であり、遊泳場開発前は、全域が遊泳禁止区域となっていた。

現在は芦ノ湖湖畔再開発に伴って白浜口沖に土砂が堆積した為に、平均水深1〜3メートルとなったこの辺り一帯だけ、遊泳が許されていた。

…とはいえ、それだけで遊泳できるようにならないのが芦ノ湖クオリティ。

芦ノ湖は湖底から極めて低温の湧き水が溢れ出しており、夏だろが冬だろが水温はたった4℃に保たれている。

つまり遊泳シーズンでも泳げる水温ではないのだ。

真夏に寒中水泳ができる、とプラス方向に解釈できなくもないが、いかんせんそんなモン願い下げである。

再開発時に土砂が堆積した事で、比較的暖かい水温になるようになったが、今でも沖の方へ行くとほのかに肌寒い水温となる。

———こんな経歴のある遊泳場なのだ。

普通の海水浴場でさえ年間10人程度の人間が溺れたりするのだから、ここもソレらと同じように警戒するべきだろう。

———そう思っていた時期が2人にもあった。

「あゝあゝ水温程よく涼しくて気持ちいいわ〜。」

———浮き輪に上半身をもたれかけ、ぐで〜ん、としながら千尋が言う。

土砂の堆積と、照り付ける太陽の熱によって、遊泳場の水温は25℃と、熱帯魚の水槽並みに快適な空間となっていた。

「オジサンかつ。…しかし、マイナスイオンが元から凄いのもあって、気持ちが良いな。」

同じく、千尋と同じ浮き輪に、対面するように片方の腕を掛けながら水面を揺蕩う筈が口にする。

元々、箱根一帯は広大な自然を活かした森林浴が活発な地域で、再

開発が進んだ今でも自然と共生する、森林浴都市として知られていた。

そのせいか、遊泳場の水は塩でベタ付く海水と比べて心地良い。浮き輪に引つ掛かりながら、ちやぶちやぶと水をかき分ける。

涼しい水に浸かり、身体の芯から力が抜けていくような錯覚を覚える。

——ふと、箒を見る。

夏の暑さから来る暑さと、水温によって心地良さそうに火照る箒は少し官能的で、どれだけ真面目な眼差しでも。

箒の身体は容赦無く千尋の邪念を呼び起こす。

固唾を呑んで、千尋は箒を眺めた。

真つ直ぐに見ることしか叶わず、顔が熱くなっていく。

なので出来るだけぼんやりと、顔だけを見る。

「——っ」

白い肌の眩しさに、クラツとする。

しなやかで柔らかかそうな身体が水に抱かれているようにさえ見える。

初めて見た時より慣れたとはいえ、やはり目のやりどころに困る。

…ま、いつまでもドギマギしてたって仕方ない。

「な、なんかさ、緊張しないけどするよな。」

「——どっちなんだ、ソレ。」

「ホント、そうだな。」

思わず、ヘンな事を口にした。

それに箒はくつくつと笑いながら問いかける。

千尋も笑いながら返す。

ヘンに神経を尖らせたたり思考を巡らせたため、若干頭が鈍ったらしい。

——こんな時は、思いつきりはつちやけた方が良いかも知れない。

そう思つて、

「よっし、じゃあ競争すつか！」

そう口にする。

「え、は、ちよっ?!ま、待て!浮き輪はどうするんだ!!」

箒は唐突の出来事に、素っ頓狂な声を上げて問いかける。

「置いといて良いんじゃないかね。これ、湖底にヒモで繋いでるっぽいっし。」

「———そっか、じゃあ…」

言い終わるなり、箒は水を割った。

「行くぞっ!」

「あ、待て!ずるいぞ!」

千尋も慌てて泳ぎ出した。

二つの影が、イルカのように水中を駆ける。

箒はその造波抵抗を生むようなデザインの水着をしていたが、身体付きは箒の方が抵抗を生みにくい分、有利に思えた。

しかし、千尋はすぐさま箒と肩を並べ、さらには追い抜こうとした。

こと泳ぎには自信のある箒は内心動揺しつつも理由を理解する。

それは千尋の方が泳ぎに適した水着であることもそうだが———

———単純な千尋の脚力の強さがモノを言っていた。

(こいつ、いつの間にかこんなに脚力をつけたんだろう。)

箒/私は思う。

———足の長さなら千尋に負けない自信があるのに。

背丈だって、自分の方がほんの少しだけ千尋を上回っているはずなのに。

箒は追い抜かれまいと必死に水を嗅ぎ、腕を振り、水中を疾走する。

———二人は、水流になる。

箒は千尋に負けたくなかった。

姉である以上、義弟に負けることはかすかに残っていたプライドが許さなかった。

同い年とはいえ歳下に劣るところを見せたくなかった。

千尋のその姿に魅かれつつあるのに、その存在が、強さが、憧れであるはずなのに———いや、だからこそ、箒は負けたくないのだ。

難易度の高い技術に憧れ、習得したいと願うのと同様の心理だ。人は皆、手の届かない存在に羨望の眼差しを向ける。

ある者は憧れ、ある者は嫉妬する。

そしてまたある者は、その存在に劣等感を抱き、対抗心を燃やす。

箒は必死で駆けながら、はつとする。

このとどまるところを知らない対抗心こそ、自分が千尋を思う何よりの証だと気づいたのだ。

——自分より小さな身体でありながら、その命の燃やし方が、山の如き巨軀を思わせる在り方。

自衛官としても、女としても、箒は千尋を誰よりも想っている。

しかし、その思いに素直になれない箒は、どうにか自分をごまかしているのだ。

それに気づいた途端、箒はますます自分が恥ずかしくなり、懸命に駆けた。

女としての感情を必死で抑え込み、ただ千尋に勝つことだけに専念した。

しかし、泳げば泳ぐほど、千尋への思いもまたとめどなく溢れ出した。

——まるで今まで人間性を閉じ込めていた檻が洗い流されていくように。

やめてくれ——と箒は内心叫ぶ。

私は兵士だし、私は——アイツの贄だ。

こんな時に男に、しかも弟に惚れている暇なんかないんだ。

第一、兵士や贄としての私に、恋だとか愛なんて必要ないのに——

——
愛？——そんな言葉の意味を、自分はいつの間に覚えたのだろうか。

——
↑——なんだ、箒。貴女やっぱり千尋が好きなんじゃない。》

心の中から、柳星張アイトツの小馬鹿にするような声が聞こえた。

相変わず、過去に贄をもってヒトを護ってきた古いにしえの人間達の最高

傑作はいつだって口数が減らない。

柳星張を創り出した者達の腕前は、箒も素直に尊敬している。

だが、千尋と競争している今、茶々を入れられるのは——
とてつもなく鬱陶しい！

「うっっはいッ！」

思わず水中で叫ぶ。

瞬間——千尋が視界に映る。

千尋に抜かれた。

その事実私の中でふたつの感情が生まれた。

ひとつは、千尋が私を抜くくらい強くなったのだという喜び。

もうひとつは、絶対負けるもんか——！という、負けず嫌

いの私特有の、対抗心。

故に、力一杯腕でストロークを描き、脚で水を蹴る。

掻く、掻く、掻く。

ふと、千尋が女子の一団を避けるように迂回する。

——しめた……！

そう思った私は、女子たちの一団の真下。

ギリギリ底についていない脚と砂地の、30センチ程の隙間に——

飛び込んだ。

「ぐっ……ぶ……ッ！」

飛び込むなりやって来たのは何も知らぬ女子たちに踏みつけられる洗礼だ。

控え目に言っつて、かなり痛い。

……だがそれがどうした。

——そんなもの、無理矢理突破してしまえば良い……！

そう内心呟き、バタフライの容量で私は女子の一団を突破する。

——視界の右端に、こちらへ向かって来る千尋が映る。

千尋は女子の一団を一直線に打通して現れた私に一瞬目を見開く。
だがそれだけ。

私は千尋の視線なんか気にせず泳ぎに執心した。

なので、私も必死に水を蹴る。

負けるもんか——と、私は内心叫ぶ。

お互い意地と意地のぶつかり合い。

決して譲ろうとなどしない。

どこまで泳ぐのか、それ以前にどこがゴールなのか。

——そこで、泳ぐ前に目標を決めていなかった事を思い出した。

だが、慌てる事などない。

そして千尋も同じことを考えていたのだろう。

…そう、ゴールがないのなら。

どちらかが、根を上げて浜に上がるまで競えばそれで良いだけのこと——！

だがふと——眼前に波打ち際の泡が見えた。

それは即ち、湖の終点だった。

(…あ——)

内心、間拔けな声を上げるがもう遅い。

私は、泳ぎに執心するあまり、立ち上がる事を忘れてしまっていた。ブレーキが壊れた暴走機関車のように。

そのまま——波打ち際に、突っ込んだ。

「ぶはあッ！」

砂地で顎を擦りながらも、水から出た為に思わず、息を大きく吸う。

…泳ぐ事に全身のリソースを費やしたせいかな、上手く立ち上がれない。

それは私だけではなく、千尋もだった。

…2人して、波打ち際に打ち上げられた亀か鯨にでもなったようだ。

「ぜえ…ぜえ…ど…っち、が、先に…はあつ、…着いた…？」

千尋が問う。

先に浜に上がった方が負け。

だが、だいたい同着だったかも知れない。

でも、途中から泳ぐ事に執心していて、ゴールしか見ていなかった。…失敗した。

審判役を用意しておくべきだったと、今更になって思う。
でも負けたり引き分けになるなんて癪だった。

———なので、

「はあっ…はあっ…ぜ…絶対、お、お前……だ……っ。」

———負けず嫌いの私は思わずそう言った。

…ふと、

「———2人とも、」

…頭上から声がした。

なので私と千尋／＼2人は同時に顔を上げて、

「どっちが先に着いた!?!」

吠える。

そして、顔が引きつった。

———なぜならば、

「———競争するにしても、周りの迷惑を考えんかあッ!!」

スパーン!スパーン!と鳴り響く軽快な音。

「うごオアッ?!」

鳴り響く2人の悲鳴。

———そう。2人は運悪く、千冬の前に到着してしまったの

だ。

「———それで2人とも頭にタンコブ作ってきたんですね…。」

———数分後。

出席簿アタックの傷が癒えぬ2人は、山田先生と共に浜辺に併設された、飛び込み台も兼ねている栈橋に腰を下し、足を水につけていた。

「ええ…まあ…。」

山田の問いかけに、申し訳なきそうに箒は口にする。

「まあ、仕方ないかもしれませんが。最近はや鬱屈とした状況が続いていましたから、ハメが外れちゃうのも当然かもしれませんね。」

———なんて、山田は苦笑を浮かべる。

「…じゃあ、私も泳ごうかな。篠ノ之さんに篠ノ之くんも泳ぎません？」

「あ、良いっすね！じゃあ、あそこの浮き桟橋まで競争で!!」

山田に誘われ、千尋は水を得た魚のように喜び、

「お前、懲りないなあ…」

箒は呆れながらも付き合う意思を示した。

「よっし、じゃあ最下位はスイカバー全員分奢るってコトで！」

「むっ、ならば負けられんな。」

「良いですよ、若い子に負けてられませんからね！」

——三者三様。しかして目標は同じ。

故に再び、競争が展開された…!

、
、
、
、
、
、

…結論から言うと。

「うづ…若いって…良いですね…グスツ…」

山田先生が泣きを見る結果となった。

◇◇◆◇◆◇◆◇

同時刻。

「ぜえー…ぜえー…ひ、酷い目に遭ったよ全く…」

白波立つ岩場に這い上がる人影がひとつ。

それは、まごう事なき篠ノ之束だった。

「あ、紅椿の展開装甲システムに…いくつか…ぜえ…汎用性…持しといて…はあ…良かった…」

彼女は空中から自由落下する中、紅椿の展開装甲を自動防御システム兼耐ショック防御システムとして使用した。

それにより海面に叩きつけられて死ぬ——という未来を回避したのだ。

「紅椿も…なんとか無事…東さんも、陸に着いた……ふふふ…待ってろよお…これから…東さんの、逆襲が始まるのだ……」

そう言つて、束は岩を這い上がる。

そして、

「は？」

——絶句した。

視界に映るのは——荒く白波を立てる、藍色の海。

今いる場所は陸地ではある。

だが日本列島の浜辺などではなく、

「ど……」

島ですらない。

島と呼ぶにはあまりに小さいそれは——岩礁であつた。

その先には、未だ大海原が続いている。

…視線の先にある水平線を見て、

「何処なんだよんこ」——ッ?!」

——絶叫した。

、
、
、

——所在地。

北緯33.94度・東経138.81度

神奈川県伊豆半島沖、南方80キロ。

太平洋上・銭洲岩礁

——IS学園新校舎まで、あと120キロ。

EP—52 不穏と日常／序

2021年7月7

神奈川県新東京箱根市（旧箱根町）

芦ノ湖南岸・白浜口遊泳場

——そこには、深紅のISを誇らしげに黒い髪の少女にプレゼンテーションするピンク髪のウサギ頭の女……という、シユールな光景があった。

「第四世代型IS紅椿！私が対バケモノ用に心血を注いで作り上げた最高傑作にして、箒ちゃんが乗ること前提の最終決戦兵器！」。

右手に持つてる『雨月』と左手の『空裂』は単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出させ連続して敵を蜂の巣に！射程距離はなんとアサルトライフル並で——

「射程が短過ぎます。対巨大不明生物用なのに有効射程距離500mなんて話になりません。せめて有効射程を西側の艦艇のほとんどに搭載されているCIWSと同じ、2km以上にしてから出直して下さい。」

それに連射性能、速射性能どちらも先述のCIWSや戦闘機のバルカン砲のほうが上です。引き金を引くだけ構いませんから。

だというのに、兵器において極めて重要な整備性とそれに伴うコストパフォーマンスが悪い専用装備では弓矢以下です。まだ打鉄の大型近接長刀に30mmアサルト機関砲ジャマーか57mm速射砲を取り付けた方が遥かにマシです。」

「つ、次に『空裂』ね……こっちは対集団仕様の武器で斬撃に合わせて帯状の攻勢エネルギーを放って攻撃するんだよ！振った範囲に自動で展開するから超便利——」

「刃が長過ぎます。重心が不安定となって振りかぶるまでに時間が掛かりすぎ、有効射程範囲内から逃げられてしまいます。」

そして振った範囲と言うことは標的が前方にいないければ効果は見込めないということですよ？

宇宙空間での使用を想定して設計されているISSの戦闘スタイルは三次元立体機動が基本です。上下に逃げられたら掠りもしない上に、大振りで隙だらけになつては敵の射撃による反撃に対処することが限りなく困難です。

加えて言えば、閉所での戦闘も有り得る対巨大不明生物戦では取り回しすら出来ずお荷物にしかありません。」

「そ、それだけじゃないんだよ！箒ちゃん！なんと！この紅椿は全身の装甲を天才の束さんが作ったオリジナル兵装『展開装甲』にしてあるのです！システム最大稼働時にはスペックデータはさらに激アツ倍プッシュに——」

「消費する電力…エネルギー量まで倍になる、などというオチまでないでしょうね？ただでさえISS唯一…いいえ、欠点のひとつはエネルギー効率の悪さによる継戦能力の低さです。」

1体1で連戦の無い戦闘である事が前提のモンド・グロツソならいざ知らず、通常戦闘、それも、対巨大不明生物戦という不測の事態が恒常的に発生する状況の最中にエネルギー切れなんて起こされたら目も当てられません。動かないISS…いいえ、動かない兵器なんてただの廃材、あるいは棺桶です。」

「ち、ちなみに紅椿の展開装甲は即時万能対応型で、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。つまりパッケージ換装を必要とせずにあらゆる戦況に対処出来るという現在絶賛机上の空論中のもので——」

「机上の空論中と言うことは、運用やこの機体を用いた戦術、味方同士の連携に至るまで何一つ研究されてないのですね？」

1から研究を始めるとしても私の専用機である以上、私は研究機関の実験動物扱い、つまり——私を被験体にしての人体実験ですか、そうですかそうですか……。」

「ほ、箒ちゃん…目、目が怖いんだけど…」

「貴女がどんな風私を見ているか、よく分かりました。」

——それと、高性能な武装は完全に使いこなす為には高い技量と膨大な時間と予算が求められます。」

世界最高性能で最新装備とくれば、それこそ織斑先生でもない限り使いこなせませんが…これは私の専用機なんでしょう？私は1年で適正ランクCで実戦訓練においては——特別好成績と言うわけではありません。

——あらゆる面で信頼性マイナスですよ、この新型機。」

そこには、ぐうの音も出ない程に顔を引きつらせた天災と。

それをただ冷ややかに見る少女——箒の姿だけがあった。

（——なんでこうなったんだっけ…。）

思わず千尋は独言、そして回想した。



——3日前。

2021年7月4日

新東京箱根市桃源台

市営芦ノ湖水上バス桃源台埠頭停泊所

『桃源台埠頭——桃源台埠頭です。新東京箱根市営芦ノ湖水上バスをご利用いただき、誠にありがとうございました——
当バスはこの停泊所までです。』

船内放送を耳にしながら、千尋と箒は外へと歩き出す。

程静かな水のせせらぎ。

視界に映るは緑の山々の狭間に顔を覗かせる、人工物の群れ。

仙石原という箱根の山奥——だった場所。

今は新東京箱根市という都市へと変貌している。

市街地には地上80階建てのツインタワービルを中心に高層ビルやタワーマンションといった現代都市の象徴から、かつての古き良き

営みを残す住宅地や森林、小規模ながら繁華街や電気街もある他、御殿場と小田原、延いては東京を繋ぐ弾丸高速道路が東西に街を貫いている。

それだけの施設があるからか、地元の間人や休暇で羽を伸ばしに来た自衛官や国連軍将兵で賑わっている。

街の起点も、碁盤目に区画整備された仙石原が中心になっており、そこから放射状に道が伸びている。

「しっかし、なーんで今時碁盤目に道路引くんだろーうなあ…京都の平城京じゃあるめえし。」

ふと、街の案内図を見ながら千尋は呟いた。

それにすかさず――

「千尋、京都は平安京だ。」

「あ？そっすだっけ？」

――箒はツツコミを入れる。

「ああ。それに、碁盤目――条里式土地区分制度も、メリットはある。」

「…どんな？」

「まず、三角地など利用しづらい不定形な土地がなくなる。次に住所を東西南北を走る道を基準に付けるので、わかりやすくなる。最後に見通しが良くなるので防犯性が高まる。」

――とまあ、とにかくビルや家を敷き詰めたいという目的で都市を構築するならば、最も適した方式だ。合理的に都市開発を行い、土地の有効活用が行える。

…ただ、もちろんデメリットもある。

まず、土地の起伏を無視しているため、傾斜地では使いづらい区画が発生する。次に斜め移動でも大回りを余儀なくされる。

この事から、大規模渋滞が頻発するという欠点があるし、傾斜地が多い箱根では土地のかさ上げが必須となる街区が出て来る事。

それらを鑑みた結果、仙石原地区以外の街区…例えば、強羅副都心や元箱根、小涌谷、箱根湯本では従来の放射状道路方式を使った方が有効的と判断されたんだろうな――…聞いてるか？」

「——スマン、途中から頭に入ってなかった。」

「…お前な……!」

聞いてきたから話していたというのに、聴いてきた本人がこの様相であることに箒は少しイラッと来る。

だが——それをかき消すように、眩い4本の光が眼前に聳え立つ。

否、それは光ではない。

それは——高さ200メートルもの、太陽光パネルを表面に敷き詰めた巨大なソーラータワーだった。

「でっか…ていうか、眩しッ!」

「ああ、中々眩しいな…肌が焼ける程ではないが…。」

2人の言う通り、ソーラータワーは——まだ試験段階なのか、太陽光パネルの角度調整ミスによる光漏れで、一部は辺りに反射光を撒き散らしていた。

「…まあ、あれ程のソーラータワーを作ることなんて日本では中々無いし、その辺の技術が海外と比べると劣っているのは否めないからな…。」

箒が呟く。

確かに、太陽光発電は日本ではあまり主流ではない。

…というのも、日本は台風が頻繁に飛来する。

太陽光発電パネルは台風の強風に耐えられる程強力なものではなく、台風が飛来する度に破壊されて高価な粗大ゴミと化す事例が多々あった。

加えて台風や地震といった自然災害で壊れ易い上に、平野部の少ない日本では山を切り開いて作るしかない。

しかしそうすると、毎年飛来する台風の雨を吸うはずだった山が太陽光発電所にされたせいで雨水を溜め込めず、土砂崩れを引き起こしてしまうという事例が相次いだ。

…つまるところ、太陽光発電は日本の立地・気象条件と非常に相性が悪く、更に言えば却って環境破壊の原因にもなってしまうという、本末転倒な現状となっていた。

その為、日本の太陽光発電事業は海外と比べると遅れている。
だからこのようなソーラータワーを作る技術力が不足しているの
だろう。

それはともかく。
閑話休題。

「それより…：買物、付き合ってくれて…：ありがとう。」

ふと、照れながら箒が口にする。

それに千尋は悪戯めいた微笑みを浮かべ、

「みーずクセエ事言うなや。せつかく楽しめる時なんだ。しっかり楽
しませえとな！」

——そう告げる。

…それを見て、箒は胸にしこりが溜まる錯覚を覚えた。

自分の義弟の笑顔。

それは、箒が願う幸せのカタチ。

箒が戦う理由。

視界に映る彼は——快活で、けれど触れたら壊れそうな程
の儚さを秘めていた。

…もし、この笑顔が喪われる時が来てしまったら、その時は——

——いや…)

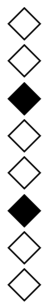
——その時は、私が柳星張イリスに成ってでも、千尋の笑顔を守
れば良い。

…きつとこの先の未来は——そうしなければ千尋も人類
も生き残れないような、そんな気がして。

、
、
、
——(ダカラ私が全部背負生キレバッテ死ネバ良イ)。

、
、
、
——そう、ふと考えて——

「ああ——そうだな…。」
ぎこちなさを拭い去るように笑顔を浮かべ、箒はそう応えた。



——同時刻

新東京箱根市直下・ジオフロント

モナーク機関極東第3支部箱根基地

——同・第2会議室

リノリウム製の茶色い床に白い壁。

内装は円卓型事務用デスクが並ぶだけ。

パイプ椅子に腰掛け、アイリは眼前のノートPCに視線を固定して
いた。

PCの画面には、アイリがいる極東第3支部箱根基地以外に、

——マウントウエザー統合参謀本部

——北米本部シアトルⅡタコマ基地

——北米第1支部フェニックス基地

——北米第2支部アトランタ基地

——中米第1支部プエブラ基地

——南米第1支部リオデジャネイロ基地

——バミューダ/司令母艦「サラトガ」

——欧州第1支部エディンバラ基地

——欧州第2支部ミュンヘン基地【閉鎖】

——欧州第3支部ヴェルヘルムス軍港

——極東第1支部東京基地

——極東第2支部雲南省基地【閉鎖】

——極東第4支部ネリユングリ基地【閉鎖】

——極東第5支部ギジカ基地【閉鎖】

——インド洋第1支部ラツカディブ基地

—— アフリカ支部ゲベルバルカル基地

—— 南太平洋／司令母艦「ナカジマ」

—— 日本海溝／司令潜水艦「ムサシII」

—— 司令潜水艦「スコープオン」

—— オーストラリア／空中司令船「アルゴ」

—— それらのビデオ通話画面が表示されている。

……要するにこれは、テレワークによる定例会議だ。

……【閉鎖】と表示されているものは、文字通り巨大不明生物の侵攻状況により施設が放棄された為に空いた枠の事だ。

『…他には？』

『—— 欧州方面管区は、第69封印保管基地のリヴァイアサンが安定中。第4封印保管基地のヴァルドギドラと第67封印保管基地のメトシエラは若干封印状態が不安定になりつつあります。』

第4封印保管基地は黒い森、シュヴァルトツヴァルト第67封印保管基地はミュンヘン

近郊—— 共にドイツ領内に所在する、冬眠状態の巨大不明生物を封印している施設だ。

第69封印保管基地も同様で、こちらはイギリス領スコットランド・ネス湖に所在する。

『アメリカ大陸も同様で、北米方面管区は第55封印保管基地のスキュラ、第56封印保管基地のテイアマトが封印不安定となっています。不幸中の幸いは、南米方面管区の第58封印保管基地のベヒモスは辛うじて維持出来ている点です。』

第56封印保管基地はアリゾナ州セドナ、第56封印保管基地はジョージア州に所在する—— こちらも、アメリカ合衆国内の巨大不明生物封印施設だ。

同じく第58封印保管基地も、ブラジルに所在する封印保管基地となっている。

—— モナーク機関はこうした巨大不明生物封印設備を多数保有しており、現在稼働中のものだけでも世界に数十ヶ所は存在する。

……日本にも、富士樹海の縦穴洞窟を丸ごと改造した第91封印保管

基地、芦ノ湖湖底部の第99封印保管基地が存在している。

そしてアイリのいる極東第3支部箱根基地は、第91・第99封印保管基地の司令部を兼ねた施設となっていた。

『では極東第3支部、状況を。』

ふと、連絡の順が回って来る。

「はい————極東方面管区は最前線ながら、第91封印保管基地のコード：カインおよびコード：アベル、第99封印保管基地のコード：イリスの3体共、比較的安定しています。

ただ、第91封印保管基地は補修工事が実施される為、一部封印設備が不安定化する恐れがあります。

…私からは以上です。」

『では次に、アフリカ方面管区の状況を———』

その57秒後————モナーク機関アフリカ方面管区ゲベルバルカル基地との通信は途絶した。

EP—53 不穏と日常／破

7月4日、午後13時01分

東京都墨田区

——特生自衛隊八広駐屯地

その第一報を受け、光は箱根から東京にトンボ返りする羽目になった。

陸自から在日国連軍に提供されたUH_イ—1J汎用ヘリコプターに飛び乗り、それで八広駐屯地に着くなり——

「ここが良い、案内御苦労——」。

——そう言っつて、ヘリがアプローチに入るより先にファストロープで合同隊舎屋上に降下。

その後も休む暇なく、合同隊舎内に飛び込んでいく。

…とにかく、事態は急を要する。

ふと、

「ん？…片桐1佐？箱根に行ったはずでは？」

神宮寺3佐に声を掛けられる。

それに、足を進めながら——

「急な用事が入った。」

そう告げる。

神宮寺3佐は訝しむように光を見ると、光は息継ぎをしながら、

「消滅したんだ——モナーク第75封印保管基地と、アフリカ支部が。」

——そう告げた。



特生自衛隊八広駐屯地

2—A作戦会議室

「Tプラス10。グラウンドゼロ爆心地のデータです」

光は急ぎ作戦会議室に駆けつける。

そこは既に関係者が招集されており、緊急会議が開かれていた。会議室のスクリーンに立体的に浮かび上がった映像を見ながら、光は眉を歪めた。

場所はスーダン北部。

ゲベルバルカル山——だった場所。

そこには、モナーク機関が山そのものを改造した巨大不明生物（MUTO）封印施設・第75封印保管基地が所在していた。

……だが今は——ただ、巨大なクレーターがあるだけだった。

「酷いな……」

思わず、溢してしまった。

「大気中の分子崩壊、それと連動した大気の真空化現象が衛星から確認できます。」

ゲベルバルカル山の第75基地および当該基地に封印中のMUTO 75 | モケールムベンベは蒸発。

現時点で基地職員2104人、駐屯していた在アフリカ米軍2個大隊、国連アフリカ方面軍3個連隊、隣接するクライマーバルカル市、マラウイ市、その他難民キャンプの住民——合計11万2704人が爆心地に発生したスフィアに吞まれ消滅。

爆心地から100キロ圏内ではおよそ20万人が大気の真空化に伴う窒息、またはショック死で死亡。

400キロ離れた首都ハルツームでも大気の減圧から生じた低酸素状態による高山病患者が数1000人単位で発生しています。」

「この現象……オキシジェン・デストロイヤーか。」

オキシジェン・デストロイヤー——直訳すると、酸素原子破壊弾頭。

本来なら水中で使用し、水中の酸素原子を破壊。

そして水中の物体を分子レベルで分解するという代物。

単純な威力は——砲丸サイズの弾頭で東京湾を半永久的な無酸素状態にする事が可能という程だ。

核爆弾サイズのモノを作れば、それこそ太平洋を死の海に変える事すらできるだろう。

——無論これらのデータは、墨田大火災の後に流れ込んだデータを基にシミュレーションされたもの。

…が、水中での被害データから、地上で使用した際の被害は想定されていなかった。

特自でも開発が行われており、また地上で使用した際の被害データは未検証である為存在せず。

——故に、オキシジェン・デストロイヤーによる地上での被害データはこれが史上初という事になる。

…だがそれよりも。

「……ウチから情報が漏洩した可能性は？」

「アレは……！」

光が誠の方を向くと、それに反論するかのように葵が咄嗟に声を上げる。

ただ、隣に座る誠の手前、その後の言葉を紡ぐことができなかった。「当方のオキシジェン・デストロイヤーは開発を無期限凍結とした。おそらくコイツは、アメリカが独自開発した代物だろう。」

元々、オキシジェン・デストロイヤーの基となった物質——

——マイクロオキシジェンは、南極のオゾン層復元を目的とした、国際オゾン層復元フオーラムにおいて、日米合同で開発された代物だ。

異界の技術込みとはいえ、そこから日本がオキシジェン・デストロイヤーを開発したのなら、米国も当然行うだろう。

加えて米国は単独で、日本の何倍もの予算と技術者を投じて、日本より先に開発を完了する事が可能。

だから今回のオキシジェン・デストロイヤーは米国独自製——

——そう誠は判断したのだ。

「……これと同時期に入った情報によると……どうやら国連アフリカ方面軍と在アフリカ米軍はマイクロオキシジェンを用いて、チャド湖のメガヌロンたちを一掃した——という記録もある。…おそらくだが……。」

?? 芦ノ湖畔 — ?? 蛭子湖尻 — ?? 坊ヶ沢 — ?? 箱根園 — ?? 元箱根 — ?? 御状石 — ?? 湯の花 — ?? 小涌谷 — ?? 強羅 — ?? 宮城野 — ?? 水土野 — ?? 元仙石原高原 — ?? 乙女 — ?? 公時公園 — ?? 金時口 — ?? 箱根乙女

◆新東京箱根市中央都心線

?? 桃源台中央

— ?? 箱根レイクタウン

— ?? 仙石高原

— ?? 長尾峠東

— ?? 早川

— ?? 新都心

— ?? 元仙石原高原

— ?? 下足柄

— ?? 押出

◆新東京箱根市南北線（一部工事中）

?? 御殿場

— ?? 鮎澤神社

— ?? 東山

— ?? 富士見

— ?? 太尾

— ?? 金時口

- ?? 押出
- ?? 美術館前
- ?? 箱根宿町
- ?? 仙石高原
- ?? 桃源台中央
- ?? 深良水門（工事中）
- ?? 箱根関所（工事中）
- ?? 湯河原
- ?? 熱海
- ◆ 元箱根副都心線
- ?? 桃源台中央
- ?? 箱根関所
- ?? 畑宿（工事中）
- ?? 葛原（工事中）
- ?? 観音沢（工事中）
- ?? 箱根湯本（工事中）
- ◆ 箱根登山鉄道鉄道線
- ?? 桃源台中央東

— ??東京 —
◆東箱新幹線（全線封鎖）
??箱根板橋 —
??風祭 —
??入生田 —
??箱根湯本 —
??塔ノ沢 —
??大平台 —
??宮ノ下 —
??小涌谷 —
??彫刻の森 —
??公園下 —
??公園上 —
??中強羅 —
??上強羅 —
??早雲山 —

— ??品川

— ??新横浜（工事中）

— ??南足柄（工事中）

— ??桃源台中央

——それはもう、こんな多種多様な路線図が掲示板にはギツシリミツチリと記されていた。

…これに環状地下鉄と直通地下鉄とかカートレインなんかもあるんだから、もう何がなんだか。

（なあんでヒトってこんなにも住む環境を複雑にしたがるんだ。）

思わず俺／＼千尋は独りごちる。

…しかしそれにしてもどこに行こうか。

新東京箱根市は未だ建設中の区画や建物が多く、行けるところは限られていた。

そして今は——服と、食材を買いに来ていたのだ。

…食材は最悪コンビニの惣菜で良いとして、服は市内の大きめの商業施設でなければ売ってない。

市内の目玉施設を紹介している電子掲示板と睨めっこしながら思案する。

「ホントどこに行こうか…」

「…む、ここにしないか？」

——ふと、箒の視界にある情報が入る。

??仙石原ミレニアムタワー

デパートやオフィスから構成された複合型高層ビル。ショッピングにオススメ!!

新東京箱根市市役所出張所、地域振興センターもこちらのビルに置かれています。

お気軽に御来場下さい!!

…それは、新東京箱根市の中心部に座し、ランドマークでもある高さ375メートル、75階建てビルのことだった。

地図で見ると、新東京箱根市市役所庁舎ビル（80階建て、高さ400メートル）が西側に建っている。

ミレニアムタワーも市役所庁舎ビルも同じデザインであるせいか、思わずツインタワーと間違えてしまいそうだ。

「へえ。なんか、素朴な見た目のクセに中身は全部載せて感じのビルなんだな。」

ふと、千尋は呟く。

「…新東京箱根市は臨時首都としても機能するよう設計されているらしいからな…。だが箱根は平野部が限りなく少ないし、建築できる場所も限られている…。だから香港のように、狭い土地に高層ビルを敷き詰める方式を採用し、少しでも東京の代替を果たせるように設計したんだろう。」

——なるほどなと呟き、千尋は視線を窓の外へ向ける。

眼前には、蜃気楼を纏った雄大な新東京箱根市市街地が広がっている。

…確かに、市街地は基本的に1000〜2000メートル規模の高層ビルで構成されており、郊外であつても50メートル規模のビル群で構成されている。

単純な高層ビルの密度と平均的な高さだけなら、東京有数の高層ビル地帯である丸ノ内や西新宿、虎ノ門なんか軽く凌駕する勢いだ。

——

「彩りがねえよなあ——これじゃあ、街というより軍事基地だ。」

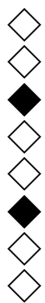
——

確かに、ビルは『非常時に政府機関や企業を受け入れ機能させれば良い』という点だけを汲み取ったせいか、全て同じ白がかった灰色のものばかりで無機質な印象を抱く。

見栄えがどうこう、という点も有るにはあるが、全体的に面白さに欠ける街並みだ。

見掛け倒しの案外つまらない街——それが2人の評価だった。

…だがそれは、今行くべき先に行った瞬間に覆ることとなる。



仙石原ミレニアムタワー内

レゾナンス新東京箱根店1階

——同・食品売り場

館山市に拠点を構えていた大型ショッピングモール・レゾナンスの新東京箱根市店。

内部は商品が整然と並べられた、倉庫にさえ見えるが清潔感と暖かさに満ちた色彩の空間となっており。

そこには生鮮食品から野菜、加工食品、飲料品、米に至るまで——生活を潤す食品の数々で満たされていた。

「ふおおお……！」

その光景に思わず2人は圧倒され、目を輝かせ、感嘆の声を上げる。

…ここ最近は何となく、料理するだけの暇がないために食堂の給食で済ませていたのだ。

…だが、まあ…厨房の人材が前線支援大隊に引き抜かれた為にメニューの味付けが2人の好みではなくなったこと。

そして試験的に導入された味付け無し合成食料のあまりの不味さ。…この世界的な非常事態下で、あまりに贅沢な話ではあるが…考え

ても見て欲しい。

——トウモロコシと小麦のカスの塊で出来たパンらしき物体。

——タンパク質と炭水化物の塊をチーズでソレらしくしたシチューらしきモノ。

——嫌に水臭いし塩気もない謎肉のたたき。

——カステラのようなポテトサラダのようなよく分から

ない緑の物体。

——各種ビタミンやミネラルをめちやくちやに混ぜた上で固めたような酷い味のゼリー。

——便秘防止に栄養をとりあえず詰めるだけ詰めただらうビスケット。

——魚らしき物体の味噌煮込み。

——唯一の良心たるペットボトルに入ったミネラルウォーターと牛乳。

……そんなモノを毎日1回は食わされる状況を。

『こんな不味いモン食わされるくらいなら自炊したい』

……と思いたくもなる。

——何しろ日本人にとってのデイストピアとは強制労働やAIによる管理などではなく、飯の質の低下なのだから。

しかし2人にその時間がなかったので、結局は実現できなかった。

だからいざこうして自分達で買いに来ると、改めて世間にはこんなに美味しそうなモノが満ちているのだと——2人は実感させられる。

「何買う？…つか、何作る？」

宝の山を前にした様に弾みながら、千尋は箒に問いかける。

それで箒は辺りを見回して——視界に食肉が陳列された

ブースが目に入り、その内容を吟味する。

……最も重要視するのは値段。

多くの品を買う場合、やはり高額なモノばかりをカゴに入れるとすぐに予算を超過してしまう。

だからこの場合値段のチェックは最優先だ。

……次に重要視するのは賞味期限。

大抵のものは、ナマモノでない限り火を通せば食える。

しかし、食あたりは避けたい……その観点から、長持ちするモノが望ましい。

だが今日は帰ってすぐ作る予定である事から、多少賞味期限が短くても構わない。

そう考えて——品物をひとつ、手に取った。

「うむ…そうだな——唐揚げなんてどうだろうか。鶏肉もかなり安いし。」

「良いな、ソレ!——あ。なあ、アレどうよ。養殖モンだけど。」

千尋が指差したモノは、魚肉コーナーの中央にあるマグロの刺身だった。

普通のスーパーならかなりの高値かつ賞味期限が短い。

だからこそ買うべきではないが——

「む…刺身の割には安いな。」

——値段が通常の半額なのだ。

それを訝しみ値札を見て、「ああ」と箒は納得する。

「なるほど——真鶴からの直送品か。」

真鶴とは、神奈川県旧足柄下郡真鶴町——現・新東京箱根

市真鶴区の事だ。

漁業と青果物農業が盛んであり、仙石原都心部から車で40分弱、新東京箱根市南北線と路線を一部共有する京足貨物連絡線で30分程度の距離にある。

その事から、同地区からの海鮮物を安く仕入れる事が可能なだろう。

それはもちろん海鮮物に限った話ではなく——

「お、ミカンも安いな。」

近くにあった、真鶴直送品ブースのミカンに目が向いた。

真鶴は湯河原みかんの産地でもあり、ソレらも海鮮物と同様の経路で輸送される為、非常に安い。

——なので、

「いいだろう!両方買うぞ!!」

思い切って、箒は大盤振る舞いに告げた。

「——ただし、まだ買いたいモノがあるから、また後でな。」

「えー…」

「…暑さで腐ってもしらんぞ。」

「はいよー…」

なんてやり取りをしながら、二人はそこを後にする。
次に向かった場所は――

――同・ビル内

レゾナンス新東京箱根店2階

――衣料品売り場

食品売り場を後にした2人が向かった先は、衣料品売り場だった。

：八広駐屯地に移ってからは、私服らしい私服はなく、衣服は基本的にジャージだったため、改めて衣服を買いに来たのだ。

というのも、第2次日本本土防衛戦後のIS学園はシヨッキラスフナムシや蟹クラブロスの巣窟となってしまった為に、米空軍B-1ランサー爆撃機と米海軍アーレイバーク級駆逐艦による燃料気化弾頭を用いた焦土作戦で地上や地下区画は徹底的に焼き尽くされた。

海底に逃げ延びた个体群も同じく米海軍のNN爆雷投下によって殲滅されたが、それで人工島の土台となる基盤も破壊され、IS学園は完全に崩壊した。

それにより、生徒の大半の私物は失われてしまった。

もちろん、千尋と箒の衣服も言わずもがな――2人の不幸中の幸いは、八広駐屯地に2着程度の他所行き用の私服が残されていたことだろう。

だが、この酷暑下ではたった2着では足りないというもの。
なので――今は衣料品売り場にいるのだ。

――同・売り場内

――アパレル店《ウインドスケールWINDSCALE》

「まあ、俺はテキトーにランニングとか半ズボンで良いんだけどな
…。」

会計を済ませて、店内の柱に身を預けながら、千尋は独言る。
千尋が購入したものは、赤のタンクトップパーカーに、ベージュの
ハーフボトム。

現在は箒の服選びを待っているところだ。

：あまりファッションには気を遣わないタチである千尋からすれば、少し退屈な時間。

しかし箒が楽しんでいるので、それはそれで苦などではない。

：それに、

「箒がどんな服着て来るかも楽しみなんだよなあ…、ふふ。」

——基本的に箒はなんでも似合うけど、やっぱり赤が似合うよなー。

なんて、一人で惚気ソロケながら、箒の試着姿が楽しみであつたりもする。

——直後、

「…千尋、こんなの、どう、かな…？」

試着室のカーテンを開ける音と共に、恥ずかしげに問いかける声でした。

振り返ると——白のブラウスを着込み、紺のスカートを履いた、箒が居た。

そう書いただけなら、まだ普通の服だ。

：だが、それだけで終わらなかった。

肩で生地が裂けて白い地肌が覗く、いわゆる「肩開き」のブラウス。

薄い紺の生地の内側に少し厚めの生地に赤椿模様が描かれた袴風風デザインのスカーツ。

そして紅白の衣装を統合するような、肌がほのかに透けて見える程薄い生地のニーソックス。

——ずるい。

何がずるいって、ただでさえ顔が大和撫子やまとなでしこつて感じなのに、そんな服装されるモンだから——可愛過ぎる。

——だから語彙力なんて概念もは蒸発して、ただ率直に感想を述べるしかできなくて。

：それを表すように、

「は？好き。」

——神か仏を拝むかのような穏やかに微笑む顔で、千尋はそう告げる。

「う、ええッ?!いい、いやっ、え×…あ、あり、が、とう……。」

そんな反応されるなんて予想してなかった——そう言わんばかりに箒も赤面する。

千尋の豪速ド直球発言にはいい加減慣れたつもりだったが、「似合ってる」や「可愛い」などをすっ飛ばして「好き」と言われることなど誰が予測出来ようか。

——予測可能・回避不能とはこのような状況を指すのだろう。

…ふと、

「…ん？お前、買ったのはそれだけか？」

箒が千尋の持つ袋の小ささに気付いて問いかける。

「あ？…ああ。他にもまだ2着あるし、それだったら1着買うだけで良いかなーって……箒？」

千尋のその言葉に、何故か箒はプルプルと震えている。

…心なしか、背後に修羅が見える気がしなくもない。

「まさかお前…』3着をローションしていけばそれで良い』と…そう、考えていないか…？」

「え、あ、ああ、まあ、それくらいならイケるかなあって…」

箒の震える声音に思わずたじろぎながら千尋は応える。

…そして——

「——フケツに思われるから今すぐ6着以上選んできなさいッ!!」

久方ぶりの——箒の怒号とゲンコツが炸裂した。



同時刻——現地時間・午前4時02分

イギリス・テムズ川河口

ロンドン⇨ブリタニア空港

——ケント州とサウスエンド⇨オン⇨シー単一自治体に挟まれた、テムズ川河口。

南イングランドを流れる全長346kmの河川を海へと繋ぐ、河川の終点にして海への接続口でもある三角江エスチユアリーの入江は、深夜であるにも関わらず、行き交う無数の船舶によって風光明媚な景色に彩られていた。

その湾内——ジエツビー島沖に浮かぶ浮かぶ人工島「ボリス島」。

——そこに、ロンドン⇨ブリタニア空港は存在していた。

南北約6km、東西約15kmの楕円形の超巨大な人工島。

その上に4000m級の滑走路を6本が整然と並び、エプロンはその中央部に配置され、南北約4km、東西約3kmにも及ぶ広大なものとなっている。

：元々、この空港は国際線の容量が飽和状態に陥ったロンドンの空の玄関口こと、ヒースロー空港の代替および負担軽減を目的として、473億ポンド(およそ7.6兆円)という予算をかけて建造された。

また、近年増加傾向にあったテムズ川の洪水被害を抑えるべく、堤防施設テムズ・バリアも新しく敷設し、ロンドン市内の空港の負担軽減と水害の抑制。

加えてヨーロッパとの物流を活性化させるべく、国内の高速道路のみならず、ユーロトンネルを延伸しイギリスとヨーロッパを結ぶ高速鉄道も連結。

加えて、大型客船等が停泊可能なターミナルを東西に2箇所設け、船の発着場としても機能するという、ほとんど全ての輸送を担う中心施設を建設するという超巨大プロジェクトであった。

計画担当主任は、「我々英国は、今世紀または来世紀までに、全ての

輸送とエネルギーのインフラを構築することによって、19世紀の頃のように先見性と政治的活力を取り戻すことができる」と言っただけだとか。なかなか。

——だがそこは今、欧州大陸からの避難民で溢れかえっていた。

日本から北米経由で帰国したセシリアが耳にしたものは、数多無数の異国の言葉であった。

…ポーランド語。

…フランス語。

…ドイツ語。

…オランダ語。

…ノルウェー語。

…アラビア語。

…ヘブライ語。

…ロシア語。

——ガラス張りに不可思議な造形のオブジェが織りなす近未来的な風景に包まれた空港ロビー。

そこに異国の言葉が響き渡る。

——まるで国境という枠組みそのものが破壊されたかのような錯覚さえ覚えるその風景は、不思議な雰囲気を与えると共に。

…セシリアに明らかな焦燥感を与えた。

これだけの人々が空路、陸路、海路問わず流れ込んでいる——

——しかも明らかに政府主導の疎開政策に見える——という事象が。

——「ユーラシア陥落」という、想定される最悪の結末に現実味を持たせたからだ。

(いずれ私達も——こうなるのでは…)

——避難民の情景より、そのような危機感が芽生える。

既に戦場となっているポーランドはロンドンの大使館に政府機能を移管し、事実上の亡命政府設立へと至っている。

同じく最前線を想定したドイツも政府機能や生産拠点の一部を

米國ミシガン州や英國サセックス州、日本領神奈川県への移転を開始。

フランスに至つては未だ後方であるにも関わらず、全面的に親仏感情の強いカナダ領ケベック州と、旧植民地であるアルジェリアに避退を開始しつつある。

：イギリスも欧州の戦況悪化を受けて、同じイギリス連邦加盟国である南アフリカやカナダ等への政府・生産拠点の移設を検討しているという噂も聞く。

——それらから、自分達も匿う側から追われる者になるのではないか：という懸念が生まれたのだ。

——閑話休題。

：とにかく今は、指定された場所へ向かうとしよう。

そう思うと共にセシリアは脚を進める。

東ロビーから空港外縁に伸びる連絡橋を抜けた先——空

港ロビーに直結された埠頭ターミナル。

その第2棧橋が空港に降り立った後に来るように指定された場所であった。

——そこに、傷んだ様にしかして美麗にも見える髪を短く括り纏めた、BDU姿の女が一人。

「——セシリア・オルコットか？」

BDU姿の女がセシリアを見るなり声を掛ける。

「は——はい。」

思わず、声が竦む。

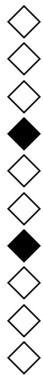
彼女には織斑先生とはまた違った威圧感で満たされている。

そんなセシリアを見るなり、緊張を解いてやろうとしたのか——

——少し微笑みを浮かべ。

「——イギリス陸軍隷下郷土防衛隊第1混成軍団第1装甲歩兵連隊第1大隊第2中隊中隊長クララ・アンドルーズ大尉だ。」

これから貴様の上官になる——と、彼女はセシリアに告げた。



同時刻。

「ぜえー…ぜえー…は、ひ、い…は、あ…」

相変わらず白波立つ岩場に這い上がる人影がひとつ。

それは、まごう事なき篠ノ之東だった。

「あ、紅椿…ぜ…は、あ…抱えて…はあ…泳ぐの…はあ…づがれ、だ…」

彼女は銭洲岩礁から紅椿を収めたコンテナを抱えたまま、太平洋を横断していた。

…だが、泳げども泳げども視界に映るのは——荒く白波を立てる、藍色の海。

「い…」

その先にも、未だ大海原が続いている。

本州は、まだ遙か彼方。

…視線の先にある水平線を見て、

「いつになったら着くんだよ——ツ?!」

——絶叫した。

——所在地。

北緯34.1861度・東経139.0761度

神奈川県伊豆半島沖、南方80キロ。

太平洋上

東京都神津島村・恩馳島

——IS学園新校舎まで、あと100キロ。

EP-54 不穏と日常／間

7月4日午後14時37分

特生自衛隊八広駐屯地

2—A作戦会議室

「……事故?」

光が訝しげに問いかける。

眼前のプロジェクトには、相変わらずクレーターと化したモナー
ク機関アフリカ支部が映し出されていて——その視線を、誠
に移した。

「ああ。アメリカがオキシジエンデストロイヤーに手を出していた事
は事実。ミクロオキシゲンを実戦投入した事も事実。

だが、実戦テストとしてアフリカ支部を攻撃したのではなく、同地
にてミクロオキシゲンの最終濃縮実験を経てオキシジエン・デストロ
イヤーを製造。西サハラで運用する予定だったが、濃縮実験が失敗
し——この惨事に発展したと。」

「……情報元は?」

「モナーク北米本部およびモナークインド支部、そしてD O E、アメ
米国エネルギー省
リカ大統領特使からの情報だ。最後のは矢口官房副長官経由でもあ
るし、信用には十分に事足りる。」

現在は——先の事故でアフリカ上空のオゾン層が不安定
となった為、亀裂が発生しないようにする対策チームを立ち上げた:
と。」

∴そう、誠は答える。

誠は矢口蘭堂内閣官房副長官と個人的趣味で交友がある。

加えて秘密主義体制が色濃く残る特自を内閣に信用させる為に情
報交換をよく行う者同士でもある。

だから、情報に虚偽があるとは思えない——もちろん、誠
も複数のルートを使用してファクトチェックは行った筈だ。

それにこの状況下で他の国に喧嘩を売るような真似を——

「否。国連機関とはいえアメリカ資本のモナーク機関を攻撃し、国内

にまで敵を作るような真似をしても、得るものがない。

それにアメリカは中国やロシアと違い、現在は本土が戦場になつてはいない。

故に他にいくらでも模索する手段がある。

だから自分達の立場を脅かすカード——オキシジエンデストロイヤーによる国連機関への攻撃などという手段を切る必要など無い。

加えて言えば——オキシジエンデストロイヤーが炸裂したのは施設の外ではなく、施設の内側。

——当事国と当該機関からの情報。

——当事国の立ち位置。

——国連軍、モナーク機関、米軍、DOEの各衛星が残したデータ。

それらから——ほぼ「確実に事故」と判断するのは容易だった。

……だがそれよりも、後者の方が光の気を引いた。

オゾン層の亀裂発生に対応する為のチームを立ち上げたという事は、アフリカ大陸上空の大気状態は極めて危機的な状態にあるということ。

——もし、あと1発でもオキシジエンデストロイヤーが使われたら——オゾン層に亀裂が発生し、未曾有の大災害に発展しかねない。

「——もし、オゾン層に亀裂が生じたら？」
だから、問いかけずにはいられなかった。

……無論、専門家でもない誠に関心かけても分かる筈がない。

それでも——口に出さなくては、気が済まなかった。

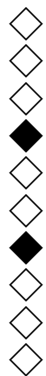
だがその期待に応えるように——誠は口を開いた。

「……俺個人の推論だが——、一番マシな被害でも、アフリカに氷河期が来るくらいの被害にはなるだろう。」

その言葉に誰もが息を飲む。

……素人目に見ても、そうした被害が出かねない。

「…どちらにせよ——今頃モナーク機関も蜂の巣をつついたような騒ぎになってることは、確かだろうよ。」



同時刻。

新東京箱根市・市営モノレール環状線

——同・車内

「いやー、買った買った。今日はご馳走だなあ！」

「ふふ、そうだな——」。

新車特有の匂いがほのかに鼻をツンと突く。

新東京箱根市自体が居住者の移住途上であり、街自体が閑散として
いるせい——主要公共交通機関であるはずのモノレール

の車内は、千尋と箒しかいなかった。

《御状石、御状石でございます。右側のドアが開きます。ご注意ください

い——

響くのは車内アナウンスと。

『——であり、IS学園と館山市を襲った巨大不明生物第1号は未だに見つかっておらず、自衛隊と国連軍は搜索範囲を縮小し、本州の沿岸防衛に再度注力する方針を決定しました。』

次のニュースです。

EU、ヨーロッパ連合は第2次大陸脱出作戦ダンケルクを開始しました。この作戦はアメリカ海軍やイギリス海軍、フランス海軍を中心に展開されており、現地には空母・揚陸艦18隻、輸送艦56隻、その他民間船舶など合わせて104隻もの艦船や1000機近い航空機が投入されておりました。』

車内の備え付けテレビの音声だけ。

壁に埋め込まれたモニターに映っているニュースは、人類と巨大不明生物との戦争一色だった。

アレだけ楽しく過ごした時間のうちにも、戦況は推移していたのだ

と…しかも、より悪化していると——嫌でも理解させられた。

「オルコットの奴、大丈夫かなあ…」
思わず千尋は呟いた。

欧州はバルカン山脈防衛線が崩壊し、エーゲ海・地中海方面が激戦地となっていると聞く。

それに、バルト海方面もドイツ・ポーランド国境付近が激戦地となっている——という噂を耳にした。

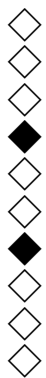
イギリスは今のところ被害が出ているとは聞かないが、安心は出来ない。

だから思わず、呟いたのだ。

『次は、元箱根港——、元箱根港でございませう——』

ふと、そんな事を気にしても仕方がないと言わんばかりに、車内にアナウンスが響く。

『——速報です。先程気象庁は会見を開き、現在北上中の、極めて強い勢力の超大型台風3号は勢力を維持したまま沖縄から本州を縦断すると判断し、政府は今月8日から10日にかけて西日本と西関東を中心とした地域に、警戒レベル5の大雨・土砂災害特別警報を発令すると発表しました。』



同時刻。

イギリス領テムズ川河口

ボリス島・東フェリーターミナル

——軽巡洋艦ベルファスト

ロンドン埠ブリタニア空港の滑走路に挟まれるように併設されたフェリーターミナル。

そこに、タウン級軽巡洋艦10番艦・ベルファストは停泊していた。「ここが私たちの指揮本部だ。——ベルファストは初めてか

？」

艦内の廊下を歩きながら、クララがセシリアに問いかける。

「は、はい——。いつも遠目に見るばかりでしたから……。まさか、まだ動くなんて……。」

セシリアは驚きを隠せないように答える。

それもそのはず。

ベルファストは第2次世界大戦時の艦艇で、戦後に朝鮮戦争などに派遣されたものの、1963年8月24日に退役し、1971年に陳列艦として大英帝国戦争博物館分館となり——テムズ川南端、プールオブロンドンに係留・保存されていたからだ。

だが、巨大不明生物の出現と欧州陥落が現実味を帯びて来たことから、ベルファストは現役に復帰。

最新の衛星データリンクシステムと衛星測位型砲撃用レーダーを搭載し、後部甲板に簡易ヘリポートを設置するなどの改修を受け——

——現在は郷土防衛隊司令部となっていた。

……ふと、外を見ると、

タグボートに係留されながら航行する木造帆船が見えて——

——大航海時代からタイムスリップして来たような、時代錯誤な存在にセシリアは思わずぎよつとした。

「——なん、なん、ですか？アレ……？」

「戦列艦ヴィクトリー号。1778年就役——あんなナリだが、列記とした英国海軍ロイヤルネイビーに属する世界最古の現役艦であり、第一海軍卿旗艦だ。」

それにセシリアは再び目を剥いた。

18世紀に造られた艦艇が未だ現役であること。

そして何より——

「現在は104門あった砲のうち、艦首楼のカロネード砲を除く全てを在庫処分前だった陸軍のL16——81mm迫撃砲およびL6ウォンバット120mm無反動砲に換装——重量過多による浸水に備えて浮力型フロートを装備。動力は流石に帆で風を受け止めて進むんじや遅いから、タグボートを推進器代わりに使用……と、

それなりの大改装はされている。」

——こんな船を引き摺り出さなくてはならないほど戦況は逼迫しているのだという現実が、セシリアの意識を支配する。

（——ヨーロッパがこの状況なら…アジアは…、日本は、どうなっているのでしょうか…？）

ふと、神楽や簪。そして千尋と箒が脳裏に浮かんだ。



——セシリアの心配を他所に。

午後18時31分

新東京箱根市函南地区・鞍掛国連軍基地

——同・生活隊舎207号室

元箱根駅で降りた後、市営バス箱根カルデラ環状線に乗車。

バスに揺られながら160メートル程登り、箱根峠停留所で降りて2〜3分も道なりに歩けば鞍掛基地はすぐだった。

（…この立地、案外悪くないかも知れない。）

ふと、千尋は思う。

…ひとつ懸念があるとすれば——雨天下における落雷が心配ではある。

——それはともかく閑話休題。

千尋と箒の二人は割り当てられた部屋に戻るなり、ビニール袋ごと食材を持って台所に立った。

「さて、と——。」

千尋がストレッチ代わりに首をコキコキと鳴らす。

「ああ——。」

応えるように箒も伸びをして、身体をほぐす。

——そして、

「——やるか……!」

それぞれが食材と道具を手にとった。

——今日の夕食の献立は三つ。

鶏の唐揚げ。

蜜柑カレー。

マグロの刺身。

野菜がないというのは栄養が偏る気もするのだが、2人にとっては全く関係なく、ひとまず美味にありつくことだけを考え調理する。

(今度は鶏ひき肉のそばとか、親子丼とかハンバーグとかも食いてえなあ。他にも焼豚乗つけたラーメンとか、鯨肉のベーコンとか、豚カツとか——そういうのも食いてえなあ。)

(今日は特別に肉系ばかりを許可したが、少しは野菜も食べさせなくてはな——それでなくても千尋は野菜を残しがちなんだから……)

そんなことを2人考えつつ、千尋は唐揚げ粉をまぶした鶏肉を熱した油に放り込み、箸は鍋で炒めた野菜に水とカレーの素を流し込んでいく。

……ところで今更だが、帰りしなに寄ったスーパーは非常に品薄となっており2人は驚いた。

東京や新東京箱根の都心部にはあった一部の野菜や香辛料が消え失せ、地方から取り寄せたのか——野菜でさえ値段は非常に高い。

それだけに、今後のビタミンの確保ルートを考えて、やはり野菜や青物は大切だ。

ただでさえ近年は猛烈な暑さや寒波といった異常気象に見舞われて野菜が高騰化していたのに、ここに来て巨大不明生物との戦争と核の冬——夏野菜はともかく、冬野菜は壊滅的被害を受けることは必至だった。

だから今のうちに——と、買い溜めする人間が多くいたのだろう。

残念ながら、今後それらは合成食料になっていく可能性が非常に高

いのだが。

「箒——刺身のサイズはこんくらい？」

千尋が切った刺身を皿に乗せて、箒に見せながら訊く。

応えるように、香ばしい香りが立つカレー鍋をかき混ぜながら箒は覗き込む。

「ん？ああ、そのくらいで大丈夫だ。：では、カレーもよそつてくれるか？」

「あいよー！」

はたから見ればそれは、思いつきり新婚カップルである。

そんな客観的な視点なんざ知らん！俺らは腹減ってるから飯食いたいんだ!!

と言わんばかりに、2人はさつさとテーブルに献立を乗せた皿を並べて行く。

テーブルの上には、

鶏肉の唐揚げ。

みかんカレー。

マグロの刺身。

玉葱のコンソメスープ。

——今日買った品々を使った料理が並んでいた。

それを前にして——

「二いったただつきまーすッ！／いただきます。」

——胃に恵みを与えてくれる、かつて命があつた者たちを食すことへの感謝の言葉を述べて。

「——よっしや唐揚げエ!!」

「あつ待たんかコラ!!」

——眼前の夕飯に食らい付く。

パリッと軽快な音を立てながら、歯が鶏肉を包む衣を噛み砕く。

そのまま歯は油で熱された鶏肉を貫いて。

ジユウ、と肉汁が口内に溢れ出し、味の暴力が千尋の味蕾を犯して

いく——!

「びゃあ、あ、あーうまひい、い、い、い、い、い!!」

千尋と箒に割り当てられた部屋に、軽快かつ素っ頓狂な声が響く。
およそ二週間——合成食料によつて味覚を忘れていた舌
は、突如襲いかかつて来た美味の暴力によつて、一瞬にして陥落した。
「ふへへ…美味すぎて舌と脳みそ溶けりゆ…。」
なんて、千尋は蕩けた顔を浮かべて悦に浸る。
——それはもう、このまま味蕾が死んでしまいそうな程に
幸せだ。

「しつかり噛んで飲み込めよ？まったく…。」
そんな千尋を見て、箒は呆れながら告げる。

——なんて言いながらその実、箒自身も自らが作った料理
の味に惚けているのだが。

（——いつ以来だろう。こんなにゆったりとして、美味しい食
事は。）

思わず、箒は微笑む。

——けれど。

この平穩は長くは続かない。

——そう思わせる予感が、2人はしていた。

——同時刻

静岡県下田市

北緯34.6533427

東経138.9668389

「づ…づいだあ…。帰つて来たぜ…ジャアアアープ…」

その予感を体現するように、篠ノ之束がついに日本本土に上陸して
いた…！

IS学園まで、92km——篠ノ之束、IS学園到着まで
あと19時間。



『私達は間違ってた。あの連中を殺してでも、【解読不可】デストロイヤーは作らせるべきじゃなかった。』

…これを聴いてる人が居たら【解読不可】後世に伝えて欲しい。どうか絶対に【解読不可】度と、オキシ【解読不可】ロイヤーを使わせないで。

使った結末が、【解読不可】の氷結という、最悪の事態に繋がったの…！だから…お願い。…二度と、作らせないで…。

…寒い…。【解読不可】暖房設備も停止して、【解読不可】が流れ込んで来てる。外は【解読不可】この施設も、よくもって【解読不可】。【解読不可】状況だから、助けは来れない。

…だから、私が見つかる時は、もう【解読不可】だと思う。

…ごめんね…【解読不可】ママ…もう貴方に会えそうに、ない…。だから【解読不可】して、元気でいて…愛してるわ……さよなら【解読不可】』

———(20??年??月??日、アフリカ大陸・コンゴ共和国ブラザヴィル特別市・国連管轄地下シェルター内の女性凍死体から発見したテープより)